

日本教育史資料

壹

緒言

本邦未タ完全ナル教育沿革史アラス學事上文獻ノ徵スヘキモノ甚タ少シ文部省夙ニ此ノ歎アリ教育史編纂ノ必要ナルヲ知ルト雖モ學制頒布以來教育擴張ノ業務尙ホ刱始ニ屬シ施設ノ事項亦繁劇ナルヲ以テ未タ此ニ著手スルノ暇アラサリシカ明治十六年報告局ニ命スルニ本邦教育史編纂ノ事ヲ以テシ先ツ資料ノ蒐集ニ著手セシメ同年二月各府縣ニ達シ府縣廳及ヒ學校等所藏ノ舊記其他前儒ノ私記古老ノ口碑ニ資リテ學制頒布前ニ係ル學事ノ諸項ヲ調査セシメ又諸官衙及ヒ舊藩主等ニ照會シ其貯藏ノ舊記ヲ借覽スルヲ約シ苟モ古來我カ邦ノ教育ニ係ル書ハ細大擇ハス之ヲ蒐集シ以テ此編纂ノ資料ニ供セントセリ抑々廢藩置縣ノ際書類散逸或ハ烏有ニ歸セシモノ殊ニ多ク而シテヨリ又十餘年ヲ經過セリ既往ノ事實ヲ網羅シテ精確ノ調査ヲ爲スコトノ困難ナルハ固ヨリ論ヲ待タサルナリ然ルニ爾來兩三年ニシテ進達スル所ノ調査書二百餘部ニ至レリ調査ノ方法ハ精粗一ナラス間々教養ノ方法學事ノ沿革等其ノ要領ヲ盡サルモノアリト雖モ什ノ八九ハ進達ヲ了シ僅

107012
I27

v.1

LA

1890

A54

1890

v.1

Ex. 5-1-47

日本教育史資料調查報告

次官閣下本員曩ニ立案伺定セル順序分類ニ依リ先ツ諸舊藩ノ學事調查書ノ整理ニ著手シ之ヲ大別シテ學制及學校、參照、學記、覺圖、釋奠藏書、小傳、學議ノ八部ト爲シ五畿七道ノ國別ニ從テ之ヲ編次シ乃チ每部ノ目錄ヲ具シテ閱覽ニ供ス但シ學制及ヒ參照ノ部ハ尙ホ若干ノ分類ヲ要スト雖モ今此ニ及ホサ、ル所以ノモノハ他ナシ往時大小二百八十餘藩ノ諸家晚クモ維新ノ際ニ至リテハ概テ學校ヲ設ケ子弟ノ教養ヲ施セリ然ルニ其學事ノ調查未濟ノモノ今仍ホ四十藩アリ加之既濟ノモノト雖モ之ヲ文部省定ムル所ノ調查要目ニ對照スレハ未タ其要領ヲ悉サ、ルモノ尠カラスシテ到底完全ナル史料ノ體裁ニ編成シ難キ所アレハナリ請フ閣下幸ニ之ヲ諒セヨ爰ニ又資料蒐集著手以來ノ狀況ヲ考フルニ明治十六十七十八ノ三年間ニ於テ資料進達ノ數最モ多ク十九年ニ至リテハ大ニ減シ二十二十一ノ兩年間ハ僅ニ二三ノ進達アリシノミ本年ニ於テハ全ク絶エタリ今調查未濟ニ係ルモノ、藩名校名等ヲ掲クレハ忍ノ進脩館、飯野ノ明親館、櫻井ノ時習館、生實ノ郁文館、下館ノ蒙養館、牛久

ニ其一二ヲ餘スノミ是レ各府縣ノ盡力諸舊藩主其他ノ好意ニ由ルモノニシ
テ亦當該官吏カ往復照會尋問質疑其機ヲ誤マラスシテ蒐集ニ從事セルノ結
果タラスンハアラス但如何セン殘餘ノ一二分今ニ至テ進達ヲ了セス荏苒數
年資料蒐集ノ業功ヲ一簣ニ虧ク豈ニ遺憾ナラスヤ夫レ然リ資料ノ進達ヲ缺
クモノアリ調査ノ精密ヲ缺クモノアリ未タ直ニ之ヲ以テ編史ニ著手スルヲ
得スト雖モ本邦教育史ノ資料トシテハ最良ノ參考書タルヘキモノ亦尠カラ
ス而モ多年蒐集ノ功ハ決シテ空シカラサルヲ信スルナリ爰ニ資料蒐集著手
以來府縣又ハ舊藩主等ヨリ進達セル所ノ書類ヲ整理セシメ先ツ諸藩ノ部ヨ
リ印刷シ茲ニ一部ヲ配贈ス更ニ請フ各府縣及ヒ舊藩主諸家若クハ當時學事
ニ關與セル諸氏本書中舊藩學事ノ狀況ニ關シ遺漏若クハ誤謬アルコトヲ發
見セハ幸ニ増補正誤ノ料ヲ送致セラレ又調査未濟ノ分ハ各府縣及ヒ舊藩主
ニテ此際速ニ進達ヲ了シ本書ヲ完全ノモノト爲シ文部省當初ノ目的ヲ達セ
シメラレンコトヲ是レ切ニ冀望シテ已マサルナリ

明治廿三年

文部省總務局長辻新次

例言

一本書ハ謄寫ニ代ルノ印刷ナルヲ以テ都テ原稿ニ隨ヒ敢テ取捨増損セス然レトモ同一事項ニシテ全ク重複ニ渉ルモノハ其一ヲ存シテ刪除セルモノアリ又舊規布令掟書ノ如キ印刷ノ便宜ニ從ヒ適宜之ヲ排序シテ必シモ原文ノ書式ニ據ラサルモノアリ又魯魚ノ誤ハ力メテ訂正ヲ加ヘタレトモ其字句往々明瞭ヲ闕クモノ、如キハ姑ク原文ニ從フ讀者幸ニ訂正ノ勞ヲ悒ム勿レ

一資料ノ蒐集ハ府縣ノ進達ニ係ル調査書ヲ本文ト爲シ舊藩主家ノ進達ニ係ルモノヲ參照ト爲シ其府縣ノ進達ニ漏レタルモノハ之ヲ本文ニ充テ二者重複セルモノハ其一ヲ省ケリ

一列藩ノ順序ハ五畿七道ノ國別ニ從ヒ一國內ニ在テハ大抵祿高ノ多寡ニ從ヒテ排叙セリ又或ハ本支藩ノ關係ニ依リ往々此例ニ據ラサルモノアリ
一列藩中維新前後ニ於テ轉封セルモノ少カラス其中濱松ノ鶴舞ニ於ケル掛川ノ松尾ニ於ケルカ如キハ新舊兩地ノ分ヲ載スルモノアリ會津ノ斗南ニ

ノ正心館、下妻ノ脩道館、松岡ノ就將館、志筑ノ習文館、膳所ノ遵義堂、一ノ關ノ教養館、椎谷ノ脩身館、鴨方ノ觀生舍、淺尾ノ肄業館、多度津ノ自明館、小松ノ養正館、今治ノ克明館、西條ノ擇善館、吉田ノ時觀堂、新谷ノ求道館、千束ノ明親館、唐津ノ經誼館、吉見、西大平、西端、川越、大綱、小見川、曾我野、結城、宍戶、宮川、吉井、七戶、天童、敦賀、黑川、植松、高瀬諸藩ノ藩立學校等ナリ、此外幕府旗下又ハ藩士等ノ私設ニ係ル學校、鄉學校等ニシテ調査ニ漏レタルモノ蓋シ亦鮮少ナラサルヘシ、然ルニ今日ニ至ルマテ是等調査書ノ進達ヲ得サルハ事實湮滅シテ復タ攷フルニ由シナキモノカ將タ未タ盡サ、ル所アルカ兵庫縣ノ如キハ全縣下ニ屬スル舊藩々ノ學事ヨリ鄉學家塾寺子屋ニ至ルマテ調査殆ト遺漏ナキモノ、如シ思フニ調査ノ方法其宜ヲ得ハ前記諸藩ノ學事ニ係ルモノモ亦必ス其ノ要領ヲ得ルノ道アラシ、茲ニ史料ノ整理ヲ告ケ併セテ其ノ蒐集ノ顛末ヲ具申ス

明治廿二年

日本教育史資料調查委員藤井善言

參照

第壹號

府縣

今般當省ニ於テ教育沿革史編纂候ニ付府縣廳及學校所藏ノ舊記類其他前儒ノ私記古老ノ口碑ニ資リ學制頒布前ニ係ル左記ノ諸項取調本年八月限可差出此旨相達候事

文部卿福岡孝弟代理

明治十六年二月五日

大藏卿松方正義

舊何藩學制沿革取調要目

藩內學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達及ヒ學業上達ノ者ニハ加役米又ハ引米等ノ名義ヲ以テ徵課セシ間接ノ祿稅ヲ免除スルカ如キ獎勵法等其他關藩學事ノ狀況ヲ觀察スルニ足ルノ事項アラハ之ヲ併記スヘシ

於ケルカ如キハ專ラ舊封地ノ分ヲ載スルモノアリ或ハ新封地ニ於テ舊封
地ノ分ヲ併セ載スルモノアリ要スルニ府縣若クハ舊藩主ノ調査如何ニ由
ルノミ

○

舊何藩立學校取調要項(江戸藩邸内ノ學校等ニ係ル諸件ハ本項ニ準シテ取調フヘシ)

學校名稱

設立以來名稱ニ變更アラハ之ヲ記載スヘシ

校舎所在ノ地名

移轉等ノヲアラハ其舊趾ニ係ル事項ヲモ記載スヘシ

沿革要略

學校創立ノ年代及ヒ事蹟學事隆興ノ原因及ヒ事實例ヘハ舊藩主某時代ニ於テ儒學ヲ尊崇セシヲ以テ學事擴張セシノ類學校設立ニ盡力セシ人物ノ氏名行事又ハ該校ニ關係アル著名ナル學士ノ氏名小傳事業學派著書等ヲ詳記スヘシ

教則

教科用書及ヒ授業ノ方法順序時間等ヲ詳記スヘシ

士族卒ノ子弟教育方法

藩立學校へ必ス入學セシメシヤ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學スル
 ヲナ許可セシヤ藩費ヲ以テ他國へ遊學セシメ若クハ私費遊學ヲ許可シ
 タルヲアリシヤ或ハ全ク學事ニ干與セシヲナキノ類ヲ詳記シ且其藩士
 ナシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルノ制アラハ亦併記スヘシ

平民ノ子弟教育方法

家塾寺子屋ニテ修學セシノミナルヤ藩立學校へ入學スルヲナ許可セシ
 ヤ或ハ農民等ハ學事ニ從事スルヲ禁止セシヤノ類ヲ詳記スヘシ

家塾寺子屋設置ノ制度

家塾寺子屋ヲ開設スルモノハ奉行郡宰里正等ノ許可ヲ受ケシヤ或ハ他
 ノ檢束ヲ受クルナク何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得シヤノ類ヲ詳記
 スヘシ

右ノ外闔藩學事上ノ事項ニシテ編史ノ資料及ヒ參考ニ供スヘキモノハ之
 ナ蒐錄スヘシ但舊幕領内ニ係ルモノハ本項ニ依遵シテ調査スヘシ

教員事務員門衛等學校ニ奉務セシ人員(前ニ同シ)ノ概數ヲ記載スヘシ
生徒概數

寄宿通學生徒前ニ同シ)ノ概數及ヒ寄宿生徒ノ定員藩費自費ノ區別ヲ記
載スヘシ

束脩謝儀ノ有無

學校經費

一周年ノ學費ヲ米何千石金何千兩ト定メ或ハ學田何町(前ニ同シ)ヲ付シ
テ學費ニ充テ又ハ學費ヲ藩士ニ賦課スルノ類總テ其金穀ノ概額ヲ掲ケ
且學事ノ張弛ニヨリテ學費ノ増減等アリシモノハ其事實ヲモ記載スヘ
シ

藩主臨校

藩主等臨校シテ講義聽聞生徒ノ試業ヲ爲セシヲアラハ其事實概狀ヲ記
載スヘシ

祭儀

學科學規試驗法及ヒ諸則

和學、漢學、洋學、醫學、漢洋算法、筆道、習禮及ヒ兵學、弓、馬、槍、劍、砲術、柔術、游泳等其學校ニテ教授セシ科目ヲ列記シ又生徒ニハ必ス文武兩道ヲ兼修セシメシヤ文學ト武術ト程度ノ比例ハ如何ナリシヤ(例ヘハ四書ノ大義ニ通スルモノハ武術ノ免許以上ニ當ルノ類)或ハ其一科ヲ專修スルヲ許可セシヤ且生徒學習ノ期限(例ヘハ年齡何歳ニ至リテ入學シ何々ノ課程ヲ了ヘテ退學スルノ類)春秋試驗ノ法生徒賞品授與ノ法其他生徒訓條罰則等學校ノ組織及ヒ狀況ヲ觀察スルニ足ルノ事項ヲ詳記スヘシ但入學許可ヲ得シ者ハ禮服著用師範家ヘ回禮スルノ類ニ係ル儀式制規ヲモ記載スヘシ

職名及ヒ俸祿

學校奉行學監教頭教授等ノ職名定員及ヒ役料扶持米額(維新前ト學制頒布前トノ兩様ノ計查ヲ要ス)且座席身分取扱等ノ件ヲモ記載スヘシ

職員概數

教師ノ數

生徒ノ概數

授業ノ順序

教科用書(寺子屋ハ習字及ヒ讀書用書)

學習年限

束脩謝議

塾主ノ行事及ヒ著書藏書ノ種類部數(寺子屋ハ著書以下ヲ缺ク)

塾主ノ身分

沿革略及ヒ雜事

極メテ盛ナリシ年代(寺子屋ハ之ヲ缺ク)

調査セシ事實計數ニ關スル年代

以上家塾寺子屋ノ諸項ハ當省報告局ヨリ配付スル甲乙號取調表ニ記載スヘシ但舊幕府領地内等ノ家塾寺子屋ハ本項ニ依遵シテ調査スヘシ

聖廟ノ設置アリテ釋奠釋菜ヲ執行セシヲアラハ其禮典ノ概狀ヲ記載スヘシ

學校構造及ヒ建物圖面

地坪建坪ノ概數ヲ記載スヘシ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數

右ノ外學校ニ關スル舊記學校ノ紀事序文ノ類ニシテ編史ノ資料又ハ參考ニ供スヘキモノハ詳悉蒐錄スヘシ但舊幕府領内等ノ學校モ本項ニ依遵シテ調査スヘシ

○

舊何藩領地内家塾(寺子屋)取調要項

名稱

所在地

塾主氏名

學科(寺子屋ハ兼テ教ヘシ科)

目次

卷一 畿内

舊淀藩 京都府取調

一丁

舊郡山藩 大阪府取調

四丁

舊高取藩 全上

一六丁

舊小泉藩 全上

一八丁

舊櫛羅藩 全上

二一丁

舊芝村藩 全上

二二丁

舊柳本藩 全上

二八丁

舊柳生藩 全上

三一丁

舊田原本藩 全上

三二丁

舊丹南藩 全上

三四丁

舊狹山藩 全上

三六丁

舊岸和田藩 全上

三八丁

舊名古屋藩 愛知縣取調

一二九丁

舊犬山藩 全上

一三九丁

舊豐橋藩 全上

一四一丁

舊西尾藩 全上

一四六丁

舊岡崎藩 全上

一五一丁

舊刈谷藩 全上

一五八丁

舊重原藩 全上

一五九丁

舊半原藩 全上

一六三丁

舊舉母藩 全上

一六五丁

舊田原藩 舊藩主取調

一七二丁

舊濱松藩 靜岡縣取調

一七八丁

舊掛川藩 全上

一七八丁

舊靜岡藩 全上

一八二丁

舊沼津藩 全上

二〇四丁

舊伯太藩 大阪府取調

四四丁

舊尼ヶ崎藩 兵庫縣取調

四七丁

舊高槻藩 大阪府取調

五一丁

舊三田藩 兵庫縣取調

五三丁

舊麻田藩 大阪府取調

五七丁

卷二 東海道

舊津藩 三重縣取調

六一丁

舊桑名藩 全上

八八丁

舊龜山藩 全上

九七丁

舊久居藩 全上

一〇一丁

舊長島藩 全上

一〇七丁

舊神戸藩 全上

一〇九丁

舊菰野藩 全上

一一六丁

舊鳥羽藩 全上

一二二丁

舊佐貫藩 全上

二四三丁

舊鶴牧藩 全上

二四五丁

舊一宮藩 舊藩主取調

二四八丁

舊佐倉藩 全上

二五〇丁

舊古河藩 全上

三三三丁

舊關宿藩 千葉縣取調

三三四丁

舊多古藩 全上

三四〇丁

舊高岡藩 全上

三四一丁

舊小久保藩 全上

三四三丁

舊水戸藩 舊藩主取調

三四四丁

舊土浦藩 全上

三五八丁

舊笠間藩 全上

三六一丁

舊麻生藩 全上

三六七丁

卷三 東山道

舊田中藩 静岡縣取調

二〇六丁

舊小田原藩 神奈川縣取調

二一〇丁

舊山中藩 全上

二二四丁

舊岩槻藩 舊藩主取調

二一六丁

舊六浦藩 神奈川縣取調

二一九丁

舊長尾藩 千葉縣取調

二二一丁

舊花房藩 全上

二二三丁

舊加知山藩 全上

二二六丁

舊館山藩 全上

二二七丁

舊鶴舞藩 全上

二二九丁

舊松尾藩 全上

二三一丁

舊菊間藩 全上

二三四丁

舊久留里藩 全上

二三五丁

舊大多喜藩 全上

二四〇丁

舊高富藩 全上

四八八丁

舊名古屋藩 全上

四九〇丁

舊松代藩 長野縣取調

四九一丁

舊松本藩 全上

五〇九丁

舊上田藩 全上

五二七丁

舊高遠藩 全上

五三一丁

舊高島藩 全上

五三四丁

舊飯山藩 全上

五四四丁

舊飯田藩 全上

五四六丁

舊龍岡藩 全上

五五〇丁

舊小諸藩 全上

五五一丁

舊岩村田藩 全上

五六一丁

舊須坂藩 全上

五六二丁

舊前橋藩 群馬縣取調

五六五丁

舊彥根藩 滋賀縣取調

三六九丁

舊朝日山藩 舊藩主取調

四二七丁

舊水口藩 滋賀縣取調

四三二丁

舊大溝藩 全上

四四二丁

舊西大路藩 全上

四四七丁

舊山上藩 全上

四五八丁

舊高須藩 岐阜縣取調

四六二丁

舊大垣藩 全上

四六四丁

舊野村藩 全上

四六八丁

舊郡上藩 全上

四七〇丁

舊加納藩 全上

四七四丁

舊岩村藩 全上

四七八丁

舊今尾藩 全上

四八四丁

舊苗木藩 全上

四八五丁

舊太田原藩 全上

六四八丁

舊足利藩 全上

六五〇丁

舊吹上藩 全上

六五五丁

舊白川藩 舊藩主取調

六五八丁

舊中村藩 全上

六六二丁

舊三春藩 福島縣取調

六六六丁

舊平藩 全上

六六八丁

舊泉藩 全上

六七四丁

舊湯長谷藩 全上

六七七丁

舊會津藩 全上

六八〇丁

舊二本松藩 全上

六八八丁

舊守山藩 全上

六九四丁

舊仙臺藩 宮城縣取調

六九五丁

舊盛岡藩 岩手縣取調

七〇〇丁

舊高崎藩 群馬縣取調

五七九丁

舊館林藩 全上

五八六丁

舊沼田藩 全上

六一五丁

舊安中藩 舊藩主取調

六一九丁

舊伊勢崎藩 群馬縣取調

六二四丁

舊小幡藩 全上

六二六丁

舊七日市藩 舊藩主取調

六二九丁

舊喜連川藩 栃木縣取調

六三一丁

舊宇都宮藩 全上

六三三丁

舊壬生藩 全上

六三五丁

舊烏山藩 全上

六三七丁

舊黑羽藩 全上

六三九丁

舊茂木藩 全上

六四一丁

舊佐野藩 全上

六四三丁

舊矢島藩 全上

八七六丁

終

舊弘前藩 青森縣取調

七〇六丁

舊八戸藩 全上

七二三丁

舊黒石藩 全上

七二五丁

舊館藩 函館縣取調

七二六丁

舊米澤藩 山形縣取調

七二九丁

舊莊内藩 全上

八二六丁

舊新莊藩 全上

八三五丁

舊山形藩 全上

八三八丁

舊上ノ山藩 舊藩主取調

八四〇丁

舊秋田藩 秋田縣取調

八四四丁

舊岩崎藩 舊藩主取調

八六四丁

舊松嶺藩 山形縣取調

八六八丁

舊本莊藩 全上

八六九丁

舊龜田藩 全上

八七一丁

日本教育史資料卷一

諸藩ノ部

畿内

舊淀藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ諭達書往古ノ分モ往々之レアレヒ方今難取調只左ノ藩主申聞書一通ノ存スルアルノミ○凡テ文學ニ限ラス武藝ト雖師範家ハ門弟取扱方勵精ノ者ヘ祿米ヲ加増シ或ハ品物ヲ賜與スルヲアリ又附弟子ト唱ヘテ格別其業ニ熟達スル者ヘハ扶持米ヲ給與スルアリ

藩主藩中之諸士ヘ申聞候覺(安政七年庚申三月三日)

何モ聞及可罷在四ヶ年前改革申出砌下總領分之内重立候者四五輩申合持山之木材ヲ以テ江戸上屋舖ニ學校創建之儀願出候其旨趣ハ人材教育之儀ハ改革之大本ト存候旨彼等ニモ右之場ニ心ヲ附候儀深令感心候早速聞届一昨年及落成候於爰元モ猶又無之候テハ不相成候儀ト存居既ニ寬量院様御代其思召モ被成御座候處追々御役儀御勤被成終ニ御果不被成哉數十年之星霜ヲ經テ我等モ家督之砌泥表之儀相尋候節既ニ學校創建之志有之候得共入部後引續雜事多端ニテ終ニ申出候期モ無之其儘相成居當今之時節上下大困窮之折柄ニ候得共愈以可相及様モ無之候得共相考候程當節ニハ人材教育別而忽ニ難成ト存候改革ヲ申出候後監物鎭之助ヲ初勝手方之者ハ不申及諸向共心ヲ用候効驗ニテ聊取直シノ道ヲ開候姿ニ候得共此上尙モ一同ニ力ヲ盡シ不申候テハ進候事ハ扱置キ跡ニサリ致シ候様相成候テハ殘念千萬ノ儀右勝手向計リ之儀ニ無之總テ國家ノ盛衰ハ人力ノ預ル所ニ候條種々年寄共ヘモ致相談勘考ニ及候折柄城州領分之内戸津村之者共厚志ヲ以獻金致候ニ付テハ其志永々ヘ相殘候様旁以此度學校取立候ニ付大小諸士ノ子弟八歳以上年若ノ者ニモ繁勤ノ者ノ外日々出席可致勤學年輩之者迎モ志有之者ハ勝手次第代々政事ニ與リ候者共其餘之身分柄之者ハ別テノ儀武家ニテ只武藝而已嗜候得ハ宜ト心得候者如何ニテ今川了俊カ息仲秋ニ示シ候箇條ニモ文道ヲ知ラスシテ武道勝利ヲ得ストカ有シ由文武ハ車ノ兩輪ノ如クニテ候扱日々出席ト申出候モ外藝術モ有之儀終日詰切勤學致シ候様ニト申コテハ無之候朝出席成兼候者ハ午後ニ罷出候共師家モ學校向寄ニ有之候ヘハ時刻ヲ費サス夫々ヘ

左氏傳、十八史略、元明史略、國史略、皇朝史略、外史、政記、國史纂論、十三朝記聞、大日本史、六國史、令義解、職原抄、王代一覽、本朝通記、文章軌範、八大家文、史記、漢書、前後、資治通鑑、通鑑綱目、宋元通鑑、大學衍義、大學衍義補、二十一史、綱鑑易知錄、博物新編、窮理圖解、氣海觀瀾、瀛環史略、地球說略、萬國公法等ノ書

修業時間ハ朝五ツ時ヨリ九ツ時マテ午後ハ九ツ半時ヨリ七ツ時ニ至ル

學科學規試驗法及諸則

學校ニテ教授セシ科目 漢學、算術、珠算、習字、兵學、槍術、劍術、柔術、但弓銃ノ二術ハ師範ノ家ニ就テ演習ス、馬術、游泳等ノ場所ハ藩内ニ設置ス

右演武場ハ校側ニ設置ス

生徒文武兩道ヲ兼修スル者アリ或ハ文學武學ノ中一科ヲ專修スル者アリ其程度ノ比例ハ文武ヲ兼修スル者每一人ノ上ニ就キテハ一樣ナラスト雖モ一科專修スル者ニアリテハ四書ノ大義ニ通スル者ト武術ノ中免許ニ達スル者ト相當ル

生徒學修ノ期限ヲ定メス

賞典ハ隔年ニ之ヲ行フ生徒ノ勤怠ト其業ノ優劣ヲ等別シテ品物或ハ金ヲ賜フテ之ヲ獎勵ス
生徒入學ノ時ハ必禮服着用師家ヲ回禮ス

明親館條令

一學問ト申ハ孝悌忠信の筋を辨へ聖賢の嘉言善行を會得してよき人となる事也徒に博學多識に誇るよしき事
一經書を讀む者敬畏の心を專にして聖人の言を己の身にひたと引當て讀むへき事

一歴史を修むるは古來の治亂興廢政法の得失人品の邪正等を能く考へ辨へて日用の益に致すへき事

一士は節義ト申事第一にて候鄙劣の心を去り操を堅く守り申へき事

一晚學にて多く書を讀む事能はされは古人の一言一行たりとも眞實に學ひ可申事

一己博學たりとも人を侮る事なれ己不學たりとも人の學を妬むなれ人の學をよろこひ勸むるこそ本意にて候人を妬は婦女子の心にて丈夫の耻へき事と心得可申事

一學校は禮義相先するの地ト申候へはいかにも行儀作法正敷く相互に謙讓すへき事

一輪講會讀の時虚心にして程朱正學の説を吟味可致候己れ先入を主張して相爭ふへからず候事

右之條々心得違ひ無之様眞實に勤學可致もの也

罷出候都合モ宜カルヘク且讀書モ銘々ノ心次第ニテ多クハ書ヲ讀ニモ不及孝經四書五經小學ノ類熟讀致シ講釋等ヲモ承リ義理ヲサヘ會得イタシ候ヘハ己カ身ノタメ且退々様子ニ寄り役儀ニ選致シ候節前以學ヒ候丈ノ事ハ必至ニ用立候ハ、本意タルヘク當時逼迫ノ時節柄讀書ニ打掛リ候テハ難儀ニテ學兼候ト存候族モ有之候ハ、是モ無餘儀事ニ付左様ノ輩是非トモ出席ニハ不及候乍去心掛次第學校ヘ可致出席ト心掛候得ハ朝モ手回シ致シ一日ノ内半時強而一時ノ暇ヲ得候義ハ難カル間敷ク哉隨意ニ暮シ候得ハ不覺シテ時刻ヲ費シ候モノニテ候兎角學問ト申候得ハ六ヶ敷物ノ様ニ承リ及ヒ候哉ニ候得共左様之物ニテハ無之候様承リ居リ候併シ生質不器用ニテ心懸候テモ讀兼候ハ、講釋而已承リ候計ニテモ宜ク書物乏候者ハ學校ニ貯ヘ候書物ニテ讀可申多勢ノ中心次第諸子百家之書迄モ追々讀ミ精業ニ及ヒ候ハ、一段ノ事ニ候乍去右様ノ族自然慢心致シ人ヲ輕侮ナト致シ候者中ニモ有之扱書ヲ讀候程ニモ似ス行狀ナト不宜候テハ深ク可恥ニテ學問致シ候カラハ篤實謹厚之人ト成リ國家ノ用ニ相立候様心懸候儀肝要之事

三月

學校

校名 明親館

校舍所在地 魚之市

沿革要略 萬延元年マテハ藩學ノ設ケナク文武トモ各教官ノ家ニ就キ講習セシニ萬延元年藩主稻葉正邦文武ヲ獎勵シ學校ヲ創立シ藩中ノ子弟ヲ悉皆學校ニ入ラシメ大ニ伸張ノ基ヲ開ク明治元年正月兵燹ニ罹リ藏書及記錄等併セテ烏有トナル同年五月再築落成ス同三年四月寮舍ヲ興シ級ヲ設ケ入寮セシム世子ヨリ藩ノ子弟ニ至ル迄入寮スルモノ凡ソ一百人数員其他準備略整ヒ生徒ノ進歩頗ル著シ同四年中小學ノ制度略ホ緒ニ就キシモ事全ク整ハスシテ廢藩ニ際シ中止ス同五年四月廢藩トナリ閉校ス同年七月更ニ小學校トナシ今ニ連續ス

教則

萬延元年學校創立ノ始左ノ教科書ヲ用ユ 三字經、孝經、四書、五經、小學、近思錄、世說、蒙求、說苑、新序、孔子家語、貞觀政要、國語、春秋左氏傳、十八史略、元明史畧、國史略、皇朝史略、逸史、外史、政記、文選、七書、古文眞寶(前後)、文章軌範、八大家文、史記、漢書(前後)、資治通鑑、通鑑綱目、綱鑑易知錄、朱子語類等ノ書類
明治元年後從前ノ教科書ヲ増減シテ左ノ書類ヲ用ユ 和漢三字經、孝經、小學、四書、五經、近思錄、蒙求、貞觀政要、春秋

無油斷修行可致事

天保六年學校改造ノ節布令

御家中之面々文武爲修練深御思召を以此度總稽古所御取建被成下依之當月十六日より日割之通罷出無油斷修行可致候尤も年若之輩は別而出精可致依之左に

一文學ハ十歳迄に武藝ハ十三歳迄に致入門無懈怠出精可致事但病身虛弱之面々其次第御用掛り御役筋へ御斷置可申候

一役相勤候面々御用透之節出席可仕候但病身之面々其次第御用掛御役筋へ相斷置可申候

一無役之面々平日出精可致候事

一師家之面々有餘文武修行可致事

一醫師之面々醫業之有餘文學修行可致事

一出席刻限ハ朝五ツ時夕八ツ時よりの事

一迅雷風烈出席御用捨之事

一毎年七月十日切休七月廿一日より始る十二月十日切休正月廿一日より始る但小の月廿九日ハ有之御歸城御發駕春

日祭禮休日惣出仕之節は朝計り休

舊藩主柳澤保申幼年江戶ニ於テ家督ヲ相續シ爾後在府文久三年初メテ本國ニ歸ル此時家老月喬ヨリ左ノ通布

令ス

一御家中之面々文武之道を心得忠孝を相勵風儀正敷衣食住之節儉を相守候様被遊度深御思召を以總稽古所御取建に相成候處出精之候も相聞候得共猶又此度被仰出候間是迄度々被仰出候通忠孝を相勵家中取締酒宴遊興ケ間敷儀決而無之様可相守候尤役筋之者共ハ急度被仰付次第も有之間其旨可被相心得候

一御家老御年寄御用人之せかれ毎日朝夕之内文學武藝之内ハ半日宛詰切可申尤病氣又は無據差支有之候は、御用掛迄相斷可申候但終日出席仕候而も勝手次第

一文武諸流相勵候様御覽御見分(御見分トハ藩主不在疾病等ノ節家老名代スルヲ云フナリ)數度被仰出殊に當御歸國後別而烈敷御覽被遊厚御思召に而被爲入候事故銘々厚相心得向後無懈怠候様高弟之面々精々申合門弟一同に致出精候様被仰出候以上

萬延元年申五月

職名及俸祿 文武局長 學監 督學 教授 助教

維新前家祿各差違アリ學制頒布前藩政改革家祿減少シ各給料ヲ附與ス坐席ハ文武局長ハ上等學監以下各中等ニ位ス
職員概數 文武局長一名 學監二名 督學一名 教授及助教ハ定員ナシ 事務員一名 門衛二名 校僕二名
生徒概數 凡三百人程 內凡貳百五十名通學生、凡五十名寄宿生

束脩謝儀 無之

學校經費 藩費ヲ以テ之ヲ支給ス凡貳千五百圓程其詳細ハ取調難シ

藩主臨校 春秋兩度藩主臨校生徒ノ業ヲ試驗ス或ハ臨時之ヲ施行スルコアリ

祭儀 釋菜ハ春秋二八月上丁ニ必其典ヲ執行ス杏壇ニ聖像及顏曾ノ像ヲ安置シ中央ニ鏡餅ヲ供シ傍樽酒及鮮魚ヲ薦ム其

他時ニ從テ瓜果ノ類ヲ供ス此日校內總テ禮服用諸員各順次ヲ以テ席ニ列ル主務ノ教員先進テ禮拜シ祝文ヲ朗讀シ訖
テ位ニ復ス諸員各順ニ禮拜シ聖酒ヲ戴ク式訖テ後祭典ニ與ル諸員ハ胙ヲ分賜

學校構造及建物圖面 別紙ノ如シ

藏書種類數 經書類八拾三部 歷史類拾四部 雜書類四拾貳部 兵書類五部 本朝軍記類七拾部 詩文類五拾八部

字書八部 歌書類四部 神道書類七部 公事并官職書類五部

出版翻刻セシ書類ハ無之

舊郡山藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達

享保年中稽古所創立爾來每年正月元日藩士一同ヘ左ノ通布令スルヲ例トス但卒以下ヘハ其組々支配頭ヨリ本

文ノ旨ヲ傳達ス

一文武之兩道ハ士たる者の欠クヘからず義に付屹度修業可致事

一御家中之面々爲文武修練深御思召を以て惣稽古所御取建に相成候尤文武修練之義ハ御奉公之基に候ハ、日割之通

同三年再ヒ位置ヲ轉シテ造士館ト改稱ス

校舍所在地 享保年中大和國郡山城南字五左門阪ニ設立ス天保六年城坤宇大職冠ニ移轉ス明治三年城乾宇大職冠元家老柳澤權太夫邸趾ニ移轉ス

沿革要略 享保九年故松平甲斐守吉里甲斐國ヨリ大和國郡山城ニ移ル吉里夙ニ志ヲ文武ニ寄セ總稽古所ヲ創立シ自ラ率先トナリ藩士ヲシテ兩道ヲ研磨セシム延享二年嫡子故甲斐守信鴻世ヲ嗣ギ安永二年嫡子甲斐守保光世ヲ繼ク兩主各吉里ノ遺志ヲ承ケテ不怠文化八年嫡子故甲斐守保泰世ヲ嗣ク保泰性質尤文武ヲ嗜ミ殊ニ儒學ヲ尊崇ス天保六年總稽古所ヲ便宜ノ地位ニ移シ之レヲ新築改良シ且藩制ヲ改革シ冗費ヲ省キ(藩主ハ勿論士卒ニ至ルマテ衣食住等ノ制度ヲ設ケ專ラ奢侈ノ風ヲ戒ム)學費ヲ增加シ(藩費ノ外藩主ノ手元金ヨリモ學資ヲ補助セリ)藩士中碩學ナル藤井友作(小傳別冊ヲ添)ヲ儒官トナシ自ラ舊テ學事ヲ擴張ス天保九年嫡子保興世ヲ嗣ギ專ラ父ノ遺業ヲ守ル故ニ倍奮フ嘉永元年嫡子保申幼ニシテ世ヲ嗣ク執政ノ臣先主ノ成法ヲ遵守シ之レヲ補佐ス故ニ文武衰頹スルヲナシ保申長スルニ及能ク父祖ノ遺訓ヲ服膺シ藩政ヲ聽ク餘暇ハ士卒ヲ獎勵シ文武ヲ研磨セシムルヲ事トス明治二年版籍返上藩知事ヲ奉職シ爾來宇内ノ形勢ヲ量リ總稽古所ヲ敬明館ト改稱シテ文武ノ學科ヲ改良シ藩士ヲシテ大義ヲ知ラシムルヲ勉ム同三年學校ノ位置ヲ轉シ之レヲ改造シ校名ヲ造士館ト改メ學科ヲ増加シ教則ヲ更正シ專ラ之レヲ獎勵セリ明治五年奈良縣ヲ置レ同縣ノ管轄トナリ爾後私立三郭學會トナル

教則

維新前 教科用書 孝經、大學、中庸、論語、孟子、易經、詩經、書經、禮記、春秋

維新後 教科用書 本朝三字經、童蒙入學門、稽古要略、神德略述頌、古學二千年、大學、中庸、論語、孟子、詩經、易經、書

經 以上外塾生○皇朝戰略編、孫子、小學、國史略、十八史略、日本外史、史記、理學初步、地理書、文典 以上小學生○政記、皇朝史畧、英國史、神皇紀略、國史纂論、萬國公法、大日本史、資治通鑑、地理書、窮理書、各國史、萬國史略、法律書 以上中學生

授業ノ方法順序時間

維新前 生徒ヲ分テ五部トナシ每部匣中ニ生徒ノ名刺ヲ入レ置ク生徒ハ毎日登校スル時自己ノ名刺ヲ探リ傍ノ板上ニ建置タル竹串ニ之レヲ刺シ置キ登校先後ノ證トナス教員ハ其先登ノ者ヨリ順次素讀ヲ授ク孝經以下春秋ノ素讀ヲ卒ヘタルモノヲ離經生ト唱ヘ經書其他適宜ノ書籍ヲ讀マシメ其質問ヲナサシメ傍ラ詩文ヲ作ラシム

右之外布令諭達等不詳

獎勵法 士族卒中學業武術上進ノ者ニ加役米ヲ遣シ又ハ拔擢シテ重役ニ用ヒ或ハ目錄金藩主ノ衣服等ヲ賞與ス其子弟ト雖凡特ニ上達ノ者ハ別ニ扶持米ヲ遣シ又ハ教官ニ登用シ或目錄金藩主ノ衣服等ヲ賞與ス尤其進歩ニ因リ賞與ノ等差アリ

文武共師範家ノモノハ五年或ハ七年目ニ勤勞ヲ賞シ祿席ヲ増進シ又特ニ勤勞功績等アル者ハ臨時ニ増進ス維新後ハ士族卒中格別貧困ニシテ書籍ヲ購求シ得サルモノニハ十ヶ月賦ニシテ代價ヲ貸與ス但貸與金額ハ三百圓ノ豫算ナリ

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノモノハ當主子弟ノ別ナク總テ年甫十歳ニシテ藩立學校ニ入學セシメ十三歳ニシテ武術ニ入門セシム但當主嫡子ハ疾病等不得止事由アルニ非サレハ兩道ヲ學ハサルヲ許サス 文武ノ修業ヲ怠タルモノハ各其支配頭ヨリ督責シ若シ事故ナクシテ三ヶ月以上怠ルモノハ呵責(御叱リト唱フ)シ尙怠惰不勉強ノモノハ格席ヲ下シ或ハ家祿ヲ減スル等藩法ヲ以テ所分スル例トス 士分ノ者藩立學校ニ於テ修業ノ餘暇家塾等ニ入り修學スルハ其意向ニ任ス 卒ハ藩立學校ニ入ルヲ許サス各自隨意家塾ニ就テ修學セシム 文學醫術武藝其他國へ遊學ヲ許ス藩費私費ハ其才能又ハ貧富ニ因リテ分チ滿期歸藩スルキハ其熟否ヲ試ミ上進ノモノニハ藩主ノ衣服目錄金等ヲ賞與シ又ハ格席ヲ昇シ家祿ヲ増興シ拔擢シテ重職ニ用ユルヲアリ 藩立學校ニ於テ毎月六回經書ヲ講義セシメ總テ藩士ヲシテ生徒ト共ニ聽聞セシム但掛官重役ノモノ出席ス 城内書院ニ於テ毎月六回儒員ニ經書ヲ講義セシメ藩主臨席士分以上ノモノハ聽聞セシム但上士以上ハ公事疾病ノ外ハ欠席スルヲ許サス

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ家塾家子屋ニ就テ修學スルハ其意向ニ任スト雖凡藩立學校ニハ入學ヲ許サス但武術ニハ從事セシメサルヲ慣例トス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ノ開設ハ藩士平民共自由ニ任セ檢束スルヲナシ然レ凡藩士ニテ寺子屋及算術教授ヲ開設スルキハ届出サセ隔月一回其生徒ノ内藩士ノ子弟ノミヲ藩立學校ニ招集シ試験用紙筆墨等ヲ與ヘ其學業ノ熟否ヲ試ミ優等ノモノニハ藩費ヲ以テ筆紙墨ヲ賞與ス

學校

校名 享保年中(何年不詳)創立總稱古所ト稱ス天保六年位置ヲ轉シ校舍ヲ改造尙總稱古所ト唱フ明治二年敬明館ト改メ

生			生		
算術	四則應用		算術	文典	
洋學	擊劔		洋學	擊劔	
質問	大日本史資治通鑑		質問	神皇紀略國史纂論萬國公法	
算術	代數術初等		算術	比例開方連數雜題	
洋學	法律書		洋學	萬國史略各國史	
武術	擊劔		武術	拳搏	
				拳搏	
				體操	
				體操	

學科學規試驗法及諸則

維新前 漢學 醫學 算法 筆道 習禮 兵學 弓 劔 槍 柔術 馬術 砲術

馬術砲術ハ校內狹隘ナルヲ以テ校外ニ稽古所ヲ設ク醫學算術筆道ハ各師範家ニ就テ修業セシム
經書ノ大義ニ通スルモノハ武術ノ免許ニ當ル

藩士ノ子弟ハ十歳ニシテ文學ニ就キ十三歳ニシテ武術ニ入門セシメ終身ノ修業ニシテ退學ノ期ヲ定メス

毎年春秋文武共城内書院ニ於テ試驗文學ハ藩士及其子弟中幼年ノ者ハ書籍ヲ輪讀セシメ其他ハ輪讀セシム
武術ハ一家毎ニ日ヲ課シ其流派ノ雛形ヲ試ミ續テ試合ヲナサシム藩主在國ノ時ハ必ス臨席ス(御覽試驗ト云フ)不在
ノ時ハ家老代理ス(見分試驗ト云フ)尙試驗毎ニ列席スルハ家老年寄用人番頭槍奉行大目附役等ナリ
春秋試驗ノ外御好ミ試驗ト稱ヘ時々藩主臨場又ハ城内書院ニ於テ某書籍某技術等ヲ試驗スルコアリ

賞品及授與法ハ獎勵法ノ項ニ記載セルヲ以テ玆ニ略ス其授與ノ順序ハ上士ハ書院ニ於テ家老年寄用人大目附役等列
席藩主ヨリ直ニ授與ス中士ハ用部屋(吉凶ノ式ヲ行フ所)ニ於テ年寄大目附役列席家老ヨリ授與ス下士ハ小書院ニ於
テ大目附目附役列席年寄ヨリ授與ス卒ハ家老ノ命ヲ受ケ其組々支配頭ヨリ自宅ニ於テ授與ス
生徒訓條ハ別ニ規定ナント雖モ左ノ條目ヲ總稽古所ニ揭示セリ

條目

一御家中之面々文武爲修練深キ御思召ヲ以テ總稽古所御取建ニ相成候尤文武修練之義ハ御奉公之基ニ候ハ、日割

授業時間ハ毎日五ツ時ヨリ九ツ時マテ八ツ時ヨリ七ツ半マテ但五十ノ日ヲ以テ溫習ヲナサシム

維新後 初メテ入學スル者ヲ外塾生トシ其初級ニ編入ス讀物ハ五十音本朝三字經童蒙入學門稽古要略神德略述頌ヲ

順次教授シ習字ハ平假名片假名ノ以呂波數字方位四季千支ノ類ヲ習ハシム初級ヲ卒ヘテ中級ニ至リ讀物ハ四書古

學二千文習字ハ歷代帝號官省府縣國名等算術ハ九々割聲ヲ授ク上級ノ讀物ハ詩經書經易經習字ハ消息往來世界國

盡算術ハ九々加減ヲ授ク但外塾生ノ學科ヲ卒ヘタルモノヲ小學生トナス

小學生初級ノ讀物ハ皇朝戰略編孫子小學習字ハ私用和文算術ハ數字加減雜題洋學ハ單語暗記習字ハ綴字音調ヲ教

授ス中級ノ讀物ハ國史略日本外史習字ハ公用和文算術ハ乘除雜題定法洋學ハ理學初步小部ノ地理書等ヲ順次ニ教

授ス

中學生初級ノ讀物ハ政記皇朝史略英國史算術ハ數性奇零積分諸等洋學ハ地理書窮理書中級ノ讀物ハ神皇紀略國史

纂論萬國史略各國史上級ノ讀物ハ大日本史資治通鑑算術ハ代數術初等洋學ハ法律書等ヲ順次教授ス但中學生ノ讀

物ハ總テ質問ニ止ム

体操拳搏擊劔ハ小學生共各級通シテ教授ス

授業ノ時間ハ春分ヨリ八字始業四字終業立夏ヨリ六字始業十二字終業秋分ヨリ八字始業四字終業立冬ヨリ九字始

業五字終業但定刻通延ノ者ハ當日業ヲ授ケス

學科表

種別	上級	中級	初級
外塾生	句讀 三經易詩書 習字 細楷六行十二字ヲ以テ限トス 算術 消息往來世界國盡 九々加減	四書古學二千文 歷史帝號二官七省 官名府縣名付國名 九々割聲掛聲	五十音本朝三字經稽古要略 童蒙入學門神德略述頌 いろはカタカナ數字 方位四季千支之類
小學生	句讀 史記 習字 小楷十行廿字ヲ以テ限トス 公用和文揭題	國史略十八史略日本外史 行書公用和文	皇朝戰略編孫子小學 楷書私用和文

天神部類眷屬神罰各可奉夢者也仍而起證文如件

年號千支月日

何某殿

(右條々以下ノ文字ハ總テ楷書ニテ認ムルヲ例トス)

何某花押血判

維新後 和學 漢學 洋學 漢洋算法 筆道 擊劍 拳搏 體操
各科共兼修セシメ一科ノ專修ヲ許サス
八歲ニシテ外塾生トナリ十二歲ニシテ卒業シ十三歲ニテ小學生トナリ十八歲ニテ卒業スルヲ目的トス
試験ハ毎月末及毎年末ニ執行シ優等ノモノハ書籍筆紙墨等ヲ賞與ス又學期ノ終ニ於テ試験ヲナシ及第ノモノニハ左
式ノ證書ヲ授與ス



用紙大奉書十二切

明治三年ニ規定スル造士館定則左之通

一 凡學問者大旨ニ通シ大義を知るを要とす徒に末疎を穿鑿し浮説を拾綴し天地間之一彫蟲となるは豈可耻之甚きならすや故に皇典は勿論博く漢籍洋書にも通シ字内の形勢事情を達觀し皇道を輔翼し國家を保護するを以て目的とし眞智實才を養ふを以肝要とすへき事

一文武教場を別つと雖とも偏文偏武に流れず兩輪兩翼の心得あるへき事

一同級學生組合相定輪讀輪講互に切磋琢磨致させ可申事

一 諸教授は特に學生之授業のみならず其進退周旋を律正し其勤惰を點檢し若し不行義の者有之節は學頭へ申出夫々相當之罪科を可申付事但頑兇暴慢にして教に従はざる者あらは重き罰に處し折檻し悔悟せざるものは學監談合之上速に放逐いたし候て不苦尤其旨學頭へ可届出事

一 諸教官の同心戮力總て偏執之念なく教授致し候は勿論諸學生學術之進方一科に偏勝致さる様心掛可申尤天稟により彼れに勝れ此に劣り候は自然可有之候得共授業を成丈平等に行届候様精々申合誘導可致事

之通(布令ノ項ニ記載セル日割ヲ指シタルモノナルヘシ)無油斷修行可致候且於稽古所ニ相互ニ作法宜可申台事

一藝道出精昇進之面々御賞破成下候事

一同斷無出精之面々於有之者御咎被仰付候事

一於稽古所ニ無益之雜談相慎弓稽古之輩射禮正敷可致修行候尤的稽古之節賭等之義一切停止之事

一諸藝稽古輩自他之批判相慎尤他流與仕合堅無用之事

附衣服之儀鹿服相用可申候且又於稽古塲火之元猥ニ無之樣可入念事

一諸流稽古之輩出座中ハ外稽古所ヘ見廻リ中間敷事

一文武共稽古相仕舞候節師匠并門弟之内一兩輩相殘リ道具等相仕舞火之元入念御徒目付小人目付之内立會相改候上引取可申事

右之條々堅可相守旨被仰出候

天保六乙未八月

生徒罰則ハ別ニ規定ナシ士族卒ノ子弟教育方法ノ項ニ記載セシカ如文武共修業ヲ怠ルモノハ藩法ヲ以テ處分スルヲ例トス

文武共入學ノ許可ヲ得タルモノハ禮服着用師範家ヘ回禮ス武術ハ高弟ノモノ立會誓詞血判セシム其誓詞文左之通但各流ニ於テ前文々條書ハ異ルト雖モ左ノ條以下ハ總テ同文ナリ

起證文之事

一當流伴道雪流御傳忝仕合奉存候

一修行之儀尤晝夜無怠慢可玩味若不幸而於無隙者曳弓可仕候

一稽古之内段々應修練夫々御傳授可被下旨然上者不待稽古之先後以其仁之器量秀逸逐一御傳授有之候得者對師毛頭遺念仕間敷候

一口授并御相傳書等他人者不及申親兄弟ニモ堅見聞爲仕間敷候若御相傳以後其仁之家萬一於有斷絶者悉令火中或早速返却可仕候尤無御免許内自分之弟子取申間敷候

一他流射法善惡堅批判仕間敷候

右之條々雖爲一事於相背者八幡大菩薩梵天諦釋四天王總而日本國中大小之神祇伊豆箱根兩所權現天滿大自在

第六條 定刻遅延之者は業を授けざる事

第七條 定刻に至らずして退校の義は堅く禁止之事但父兄之切紙を持參する者は非此限事

第八條 机書籍墨紙筆硯等は自分入用之事但書籍は殊に寄り貧窮之者は其場限り貸渡しにも相成候事

第九條 學生出入進退は總て學頭始教授方の差圖に隨ひ萬事行義正しく騒か敷無之様可致事

第十條 座席は日々組合之者輪番を以て一字前に出席致し清潔掃除可致事但椽廻り雪隠之掃除は小使之者受持たるへき事

第十一條 罰科默坐返校使役登校差止責過寮入

父兄之切紙なく窃に退校する者 就學中猥に休息所へ立入る者 怠惰亂暴之所業之者 教師之命を奉せざる者 出入進退總而學生に似合ざる所業之者 右數條之外規則に違背する者其輕重により罪科に處すへき事

第十二條 諸學生貴賤を論せず長幼を以て次第を立每事禮義を重んじ可申事但教官生長等の學力之淺深を量りて任選すれば貴長を挾ます専ら遜讓すへき事

第十三條 毎月日課表學監へ差出し點檢之上試業に及び等級相改むへし其節斷なく闕席又は入學後六十日出席無之者ハ除名可致事

寄宿寮規則

一寄宿寮は十六以上之者に非されは入寮を許さず但秀才之者は此限に非ず

一朝五ツ時より夕七ツ時に至るまでを正課之時とす其外を餘課之時とす外出をも聽すへし

一正課之時須く科を分ち刻を期し上席質問すへし敢て次を亂る勿れ

一毎朝早起袴を着し夜五ツ時に至るまで脱すへからず

一拜借書籍看了すれば常に整齊すへし濫りに壤汚すへからず固より暫時も他所に持出すへからず

一入寮三十日或は五十日或は百日或は百五十日又は二年又は三年と其願によかずへし期滿れば退寮すへし併仍在寮せんと欲する者の再ひ期を定め願ふへし但官より入寮を命する者の此例に非ず

一在寮中事故ありて歸宅を願出れの糾の上是を許すへし歸宅二十日を過れば退寮すへし

一終日外出を許さず若故ありて外出を願へは同寮證人として書面寮長に差出すへし

一晚六ツ時に至れば門を出るを許さず其外出せし者の必す夜五ツ時に歸るへし

一 毎月末に試業學業之成否を試み等級を進退し毎年末學業之深淺に隨ひ大に業を課し之を試むる事
一 諸教官私宅にて教授致し候義は不苦候へ共朝第八字より夕第四字迄の内は決して不相成候事

入學式

床に學神之軸を懸る事 前に小机を置く事 神酒洗米を備ふる事 入學生禮服之事 入學生神前に坐し拍手し入學を奉告し拜を致す事 教官一人學監一人 右立會但別に寮長一人入學生を世話致し學監教官調方等へ相應挨拶之事 入學日毎月二日之事 束脩之事但金壹朱 右神前へ相備候事

外塾規則

第一條 童子年齡八歳にして外塾生となす十二歳迄に三級の課業を終るべき事但天性之才能と人力之勉強とにより三級課業を終る者は縱令年限に至らずとも褒賞を賜り小學校へ登すべき事

第二條 入學之節は左之通り願書二枚宛差出し學校へ願出へき事但右願書一枚は學頭へ差出し一枚は外塾之扣たるへき事

此度學校へ入學仕候に付ては校中御規則堅く相守誠實修業可仕は勿論其他不依何事御趣意に觸れ候義決而仕間敷候以上

何々住居

何ノ某忝何男(當主なれば姓名他藩なれば何藩と加ふへし)

年號干支月日

生徒 某 印

何ノ何歳

(紙は清帳紙を用ゆ巾壹寸九分長八寸) 引請

何 某 實 印

第三條 入塾之節は姓名相認候小札一枚相渡候條毎朝出席之節持參教授方扣所へ差出置日課相濟候後受取退出可致事

第四條 春分よりは八字始業四字終業立夏より六字始業十二字終業秋分より八字始業四字終業立冬より九字始業五字終業但辨當持參之事

第五條 學生袴着用之事

文ツ、○擊劔拳搏教授四人 取扱權少屬 全四十八貫五百文ツ、○擊劔中等教授一人 取扱權少屬 全四十一貫文
○二等助教三人 身分取扱ナシ 全五十貫文ツ、○生長十二人 全六貫二百七十五文ツ、○生長見習三人 全無之
○使部三人 全二十貫文ツ、○給使六人 全五貫文ツ、○門衛中間四人 全十五貫文ツ、

職員概數

維新前 教員事務員門衛等凡八十五人但文武共總員ヲ合算ス

維新後 教員事務員門衛等凡五十六人但前同斷

生徒概數

維新前 通學生凡五百人但寄宿生無之

維新後 寄宿生藩費無之自費二十人(但寄宿生定員ナシ)通學生凡八百人夜學生凡十人、但夜學生ハ晝間事故アリテ入

學ニ得サル者

束脩謝儀

維新前 束脩ハ文武共銀札壹文目謝儀ハ祝儀ト唱ヘ每年兩度(年初中元)銀札五分但此束脩謝儀ハ各師範家ニ領收ス

維新後 束脩金壹朱謝儀無之

學校經費

維新前 一周年文武ノ學費ヲ凡米五百石ト豫定ス學田無之又學費ヲ藩士ニ賦課セシコト無之但豫定ノ米額ヨリ年々多

少支出ノ増減アレハ學事ノ張弛ニヨリ殊更ニ増減セシヲ無之

維新後 維新前ト同シ

藩主臨校 藩主ハ定日ナク時々臨校講義ヲ聽聞シ又ハ武術ヲ試ム家老ハ毎月兩三回臨校シ講義ヲ聽聞ス

祭儀 聖廟ノ設置ナシ每年學校内ニ於テ典禮ヲ執行ス其式ハ床頭ニ聖像ヲ懸ケ机案ヲ並列シ酒饌ヲ供シ藩主以下總テ禮

服ニテ着席ス祭主(儒官ノ內祭主トナル)祭文ヲ展讀シ次ニ高弟ノ內書籍ヲ講義ス了テ藩主拜禮次ニ家老以下格席順次
ナ以テ拜禮ス高弟ノモノハ中士下士ト雖上士ノ席ニ於テ拜禮セシム當日ハ藩主係員ハ總テ出席ス總藩士ハ出席隨意
ニ任ス又儒官ノ宅ニ於テモ每年典禮ヲ執行ス其式ハ床頭ニ聖像ヲ懸ケ酒饌ヲ供シ祭主(其儒官祭主トナル)以下禮服ニ
テ着席祭主祭文ヲ展讀シ書籍ヲ講義ス了テ祭主以下高弟ノモノヨリ順次拜禮ス

學校構造及建物圖面別紙ノ通り

職名及俸祿

一入寮之生徒は自ら起止簿を作り毎日の課次を書記し執法掛へ達すへし
 一毎月一ノ日執法掛起止簿を參事へ達す參事夫れを以て監臨課業を試むへし
 一寮長之所に出入簿を設け其出入せる時刻を各姓名の上に記すへし
 一寮中にて酒を飲むへからす但茶煙草は是を許す其餘の飲食は一切禁止すへし

維新前教員

儒官 儒官見習

儒官凡五人

入學人員ノ多寡ニ依リ増減アリ

藩士中碩學ナルモノニ之レヲ命ス祿席ハ定限ナシ各自ノ

原祿持格ニ因テ取扱チナスト雖氏鎗奉行格以上ノモノヲ儒官以下ヲ儒官見習ト唱フ又子弟等ニ命スルキハ二人扶持
 乃至三人扶持ヲ遣シ尙其功勞ニ依リ増加ス之レヲ儒官僭ト稱ス其身分取扱ハ父兄ノ家督席ナリ家督席トハ其父兄勤仕中勤勞等ニ因リ昇席セシモ退席キハ其家ノ原格席ニ引戻スナリ但儒官以下格別小祿下席ノモノニ命スルキハ加祿昇席セシムルヲアリ○世話役凡五人上同
 藩士中當主子弟ノ別ナク適任ノモノニ命シ毎年七月十二月銀六拾目ヲ遣ス身分取扱等ハ別ニ無之當主ノ者格別

ノ功勞アレハ儒官又ハ見習ニ昇進セシムルヲアリ○助役十人 前同斷毎年七月十二月銀三拾目ツ、ヲ遣ス○兵學師
 範二人 藩士中兵學ニ熟達セシモノヲ以テ之レヲ命ス坐席身分取扱ハ別ニ無之各自ノ持格ニ因ル出軍ノ時軍師ニ命

スルヲアリ但格別少祿下席ノモノハ加祿昇席ノ上命スルヲモアリ○弓術師範三人 劍術師範九人 鎗術師範三人

習禮師範一人 馬術師範五人 柔術師範二人 炮術師範七人 以上ノ師範家ハ世襲ニシテ若シ當主幼少ナルキハ其

高弟ノ者へ後見ヲ命ス坐席身分取扱ハ別ニ無之各自ノ持格ニ因ル○醫學教師一人 算術教師三人 習字教師四人

以上ノ教師ハ藩廳ヨリ命セス其本人ヨリ届出サシム因テ其人員モ増減アリ○劍術世話役四人 槍術世話役四人 習

禮世話役二人 一流毎ニ門弟三十人ニ二名ツ、ヲ命ス因テ入門ノ人員ニ因リ増減アリ坐席身分取扱ハ無之

維新前事務員 年寄役ノ内二人、各祿三百石以上 用人ノ内二人、各祿二百石以上 大目附ノ内一人、祿百三十石以

上 目附ノ内二人、各祿九十石以上 徒目附ノ内二人、各祿三十五石以上 以上各其役祿定限アルヲ以テ其定限未

滿ノ者ヨリ任用スルキハ必ス其祿ヲ加増ス○小人目附ノ内一人、定祿ナシ 細工師一人、全上 此細工師トハ武術

ニ用ユル器械ヲ調製スルモノニシテ藩士中何人ニテモ其巧者ナル者ヲ以テ之レヲ命ス○門番中間二人、全上

維新後教員事務員 少參事一人 月俸金八拾兩○學頭一人 取扱權少參事同席 全二百四貫文○學監二人 取扱權大

屬 全百二十貫文ツハ○學監並三人 取扱權大屬 全百二十貫文ツ、○二等教授五人 取扱權少屬 全百二十貫文

ツ、○調方二人 取扱權小屬 全七十四貫六百六十六文ツ、○三等教授六人 取扱權少屬 全七十四貫六百六十六

金ヲ遣ス

士族卒ノ子弟教育方法 士卒ハ勿論平民ノ内ニテモ有志ノ者ハ藩立校ニ入學セシム又餘暇ヲ以テ家塾等ニ入學スルハ自由ニ任ス明治三年以前ハ藩費ヲ以テ文武其他邦ニ遊學セシムルコトナシ爾後ハ文武共藩費ヲ以テ遊學セシムルコトアリ藩主時々學校ニ臨席講義ヲ聽聞シ藩士一同ヘ陪席セシム

平民ノ子弟教育方法 藩立學校ヘ入學ヲ許シ遠地ノモノハ其地方ニ於テ勝手ニ修學セシム家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ハ何人タリトモ自由ニ開設スルヲ許可ス

學校

校名 明治三年創立明倫館ト稱ス爾後名稱變更ナシ明治五年廢校ス

校舍所在地 城北土佐町字三ツ辻ニ設置シ爾後移轉等無之

沿革要略 明治三年ノ創立ニシテ沿革等無之

教則

教科用書 四書、五經、文選、唐詩選、十八史略、元明史略、通鑑綱目、蒙求、小學、左傳、史記

初メテ入學(年八歲ニシテ入學スルヲ例トス)スルモノハ四書五經文選唐詩選等ヲ素讀セシメテ十八史略ヨリ講義ヲ

聽聞研究打論セシム

授業ノ時間ハ毎日五ツ時ヨリ正九ツ時迄トス三八五ノ日九ツ時ヨリ七ツ時迄論語十八史畧等ヲ輪講セシム

學科學規試驗法及諸則

漢學 兵學 弓 馬 劍 槍 柔術 砲術

藩士及子弟等ハ必ス兩道共兼脩セシム 文武ノ程度比例ハ別ニ成規ナシ 試驗法ハ別ニ無之其熟達スルニ從ヒ四書ヲ

讀了スルモノハ五經ヲ讀マシムルノ類 生徒ノ賞與ハ特別勉勵ノ者年末ニ至リ取調目錄金等ヲ與フ 訓條ハ別ニナシ

罰則ハ別ニ不設文武共怠惰ノ者ハ其教師ヨリ懇諭シ尙怠惰ナルモノハ總テ藩ノ法ヲ以テ所分スルヲ例トス 文武共

入學ノ節回禮等ナシ

職名及俸錄 少參事ノ内一人 學校ニ關シテ月俸ナシ 〇督學一人 年給現米十石大屬取扱 〇學監一人 全七石權大屬取扱 〇教授二人 全六石權大屬取扱 〇助教一人 全三石少屬取扱 〇句讀師七人 全二石宛取扱ナシ 〇司事二人 全二石

藏書ノ種類別紙ノ通り

江戸藩邸内學事ニ係ル諸件

校名 文武教場

校舎所在地 江戸神田橋内郡山藩邸内

沿革要畧 元祿年中故松平甲斐守吉保創立荻生總右衛門茂卿谷口新助元淡等ヲ聘シ在邸ノ藩士ヲシテ文學ヲ修メ尙同場

ニ於テ武術ヲ學ハシム其子故甲斐守吉里世ヲ繼ギ同場ヲ幸橋内ノ邸内ニ移轉ス

教則學科學規試驗法及諸則職名及俸祿 總テ藩地ノ例ニ倣フ

職員概數 教員二十九人事務員等ハ不詳但教員ハ文武共總員ヲ合算ス

生徒概數 凡三百五十人但總テ通學、寄宿等ハ無之

束脩謝儀 藩地ノ例ニ因ル

學校經費 一周年凡米百五十石ヲ以テ費用ニ充ツ其他ノ事ハ藩地ト同シ

藩主臨校 在府ノキハ藩地ノ例ノ如シ

祭儀 藩地ノ例ニ因ル

學校構造及建物圖面 不詳

學校ニテ出版翻刻セシ書籍及藏書 不詳

舊高取藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達(明治二年明倫館創立ノ由諭達セシ文ナリ但書類ナク口碑ニ資リ書寫セシ故ニ全文不詳)

學問之道以脩身爲本其身不脩忠孝俱不可爲今予所以設明倫館者欲使闔藩之子弟讀聖賢之書以脩身云云

右之外諭達及獎勵法無之且明治三年以前ハ文學ハ各自勝手ニ家塾ニ就テ學ハシム武術ハ藩主在邑ノキハ毎年壹度ツツ弓術槍劍柔術共足輕ニ至ル迄五十歳以下疾病ニ罹ル者ヲ除外書院庭内ニ於テ藩主臨席試業シ出席ノ者ハ晝飯ヲ給シ試驗了テ藩主ヨリ一同ヘ武藝出精一段之事ニ候尙無油斷脩業可致旨口達ス師範ノ者ハ別段酒肴料トシテ目錄

闔藩此時ヲ以テ尤隆盛ト云フ

士族卒ノ子弟教育方法　士族ハ子弟ニ至ルマテ八歳ニシテ家塾（明治元年迄ハ藩立學校ノ設ケナシ儒臣ニ家塾ヲ設ケシム）ヘ入學セシメ十二歳ニシテ武術ヲ學ハシム尤士族ノ當主嫡男ハ勿論子弟トモ疾病又ハ已ムヲ得サル事故アルニ非サレハ不就學ヲ許サス若シ疾病事故ナシ一ヶ月間懈惰スルモノハ相當處分ス　卒ハ子弟ニ至ルマテ士族ニ同シト雖ハ罰則ノ如キハ少シク寛ニス　藩費又ハ私費ニテ他國ヘ文學醫學及武術トモ遊學ヲ許可ス尤才能ニヨリ當主ハ勿論二三男タリトモ藩費遊學セシメ上達ノ上ハ二三男ハ別ニ一家ヲ興サシメ師範家トナスヲアリ　儒官ヲシテ毎月三回大書院ニ於テ經書ヲ講義セシメ士卒ニ聽聞セシム尤掛リ吏員重役ノ臨席ハ勿論時トシテハ藩主臨席質疑問難ヲナス　平民ノ子弟教育方法　平民ノ子弟ハ家塾又ハ寺子屋ニテ修學スルハ其意向ニ任ス　家塾寺子屋設置ノ制度　家塾寺子屋等ヲ開設スルハ各自ノ自由ニ任セ檢束スルコナシ

學校

校名　天保五年武藝ハ總稽古場ト稱シ設置ス文學ハ別ニ藩立學校ヲ設置セス家塾ヲ以テ代用ス明治元年藩立學校ヲ設置シ修道館ト稱ス

校舍所在地　修道館ハ舊城表門外字使者屋敷、武術總稽古場ハ舊藩内字久保屋敷ニアリ、明治元年學校ヲ藩廳表門外南手字使者屋敷ニ設置ス

沿革要略　天保五年（天保五年前ノ制度ハ舊記傳ハラサルヲ以テ詳ナラス）故片桐石見守貞信文武ノ制ヲ改メ武術ハ總稽古場ヲ設立シ藩士北尾喜二郎ヲシテ之ニ當ラシメ又儒士江南眞一ヲ聘シ家塾ヲ開設セシメ藩士及子弟ヲ獎勵シ兩道ヲ修メシム是ニ於テ闔藩ノ文武頗ル旺盛ニ至レリ同十二年故主膳正貞中故石見守貞照故鑑一郎貞利遺緒ヲ繼キ各文武ニ篤志ナリト雖ハ何レモ早世セリ故主膳正貞篤ニ至リ文武ニ俊秀ナルモノヲ諸方ニ招集シ明治元年學校ヲ創立シ學制ヲ更正セリ同二年版籍奉還藩知事奉職ノ後學校ノ職制ヲ改メ藩士篠田默翁ヲ以テ學校管事トナス其他督學助教句讀師等ヲ置ク同五年三月廢縣ニ付奈良縣ヘ引繼ク

教則

教科用書　千字文、孝經、大學、中庸、論語、孟子、詩經、書經、易經、禮記、春秋、文選
授業ハ出席簿ノ順次ヲ以テ素讀ヲ授ク或ハ質問輪講會讀等ヲナサシメ旁ヲ詩文ヲ作ラシム

宛取扱ナシ○門衛小使共四人

職員概數 教員事務員門衛小使共合シテ凡十八人

生徒概數 寄宿生二拾人(定員ナシ)通學生百三十人但寄宿生ハ總テ藩費

束脩謝儀 別ニ定例無之入學者ノ志ニ依リ物品又ハ其料ヲ聖像ヘ獻ス但物品ハ總テ督學ヨリ職員ニ配分ス武術モ入門ノ

節其志ニヨリ束脩トシテ師範家ヘ納ム

學校經費 一ケ年現米貳百石ヲ以テ文武ノ費用ニ充ツ學田無之又學費ヲ藩士ヘ賦課セシメナシ

藩主臨校 藩主ハ毎月二七四九ノ日臨校シテ講義ヲ聽聞ス但生徒ノ試業等無之

祭儀 聖廟ノ設無之校内ニ聖像ヲ掛ケ毎年正月元日藩士一同隨意ニ拜禮セシメ生徒ハ職員列席ノ上拜禮セシム

圖面 別紙ニアリ

明倫館藏書 經史子集等數部アリ別ニ掲ク

江戸藩邸内ハ文武館設無之在府ノ士卒ハ各所ノ師範家ニ就キ文武共修業セシム

舊小泉藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達(天保年中ヨリ藩主毎年十二月廿三日藩士一統ヲ大書院ヘ召集シ家祿ノ多寡ニ應シ扶助金ヲ給與シ左ノ通諭達ス但卒ヘモ扶助金ヲ給シ用人ヨリ同様ノ旨ヲ傳達ス)

文武之兩道ハ一日モ欠クヘカラサル技ニ付精々修業致スヘキ事

獎勵法 士族卒中學業又ハ武術上進ノ者ハ若干ノ目錄金切米等ヲ遣シ或ハ扶持米ヲ增加ス又子弟ノ内格別上達ノ者ハ

切米或ハ扶持米ヲ與ヘテ別ニ一家ヲ興サシムルヲアリ 武術ハ見分ト唱ヘ毎年十月ヨリ十一月間ニ一流毎ニ早朝ヨ

リ日暮マテ藩立稽古場ニ於テ各自仕合等ヲナサシム弓術砲術ノ如キハ射的場ニ於テ二九四矢ノ試験アルヲ常例トシ

或ヘ別ニ早打芝射堅物透シ等ヲ以テ優劣ヲ判スルヲモアリ大砲ハ町打ト唱ヘテ毎年時月ヲ定メス一回或ハ兩回町打

場(筒井村字白銀又ハ池ノ内村宮池ヨリ小泉村字北山ヘ向ケ發炮ス)ニ於テ演習ス當日掛リ吏員ハ勿論家老モ出席ス

又時トシテハ藩主モ臨席ス是ヲ以テ其年ノ褒貶ヲナス天保年中故片桐石見守貞信特ニ文武ヲ嗜ミ專干渉獎勵ス故ニ

總稽古塲建物地坪 不詳

學校圖面 同上

藏書 經史子集等數部アリ

舊櫛羅藩

學制

學事上ノ諸制度 不詳

士族卒子弟ノ教育方法 士族卒及其子弟藩立學校又ハ私塾等ニ就テ修業スルハ各自ノ意向ニ任ス 他國遊學ハ各自ノ意

ニ任セ三ケ年ヲ限リ許可ス但當主ハ私費ヲ以テシ嗣子ハ二人口(壹ケ年玄米三石五斗)ヲ給與ス 士族卒共子弟十歲以

上ノモノハ文武ヲ兼修セシム 士族卒中格別貧困ノ者ハ書籍或ハ代料ヲ貸與スルヲアリ 私塾ノ手當トシテ壹ケ年

玄米壹石ヲ給與セシヲアリ

平民子弟ノ教育方法 家塾寺子屋ニ就テ修學スルハ適意ニ任ス

家塾寺子屋設立ノ制度 何人ダリトモ自由ニ開設セシメ檢束セス

學校

校名 元治元年設立藩立學校ト稱ス

校舍所在地 櫛羅藩廳內

沿革 無之

教則

教科用書 孝經 四書 五經 左氏傳 十八史畧 國史畧 日本外史 文章軌範 文選

授業ノ方法ハ素讀ヨリ漸次輪講等ヲナサシム

時間ハ毎朝五ツ時ヨリ八ツ時マテ月末ノ二日ハ復讀トス但三ノ日講義並輪講

學科學規試驗法及諸則

漢學 皇學 筆道 劍 槍 馬 砲 柔術 練兵

授業時間ハ毎朝六ツ半時ヨリ初メ四ツ半時ニ至ル又毎月十日二十四日ノ兩日歴史文章ノ質疑ヲナサシム但シ朔日十五日ヲ休業トス

學科學規試驗法及諸則

皇學 漢學 兵學 劍 槍 柔 炮 馬 習字 算術

生徒ハ必ス文武ヲ兼修セシムト雖ヒ或ハ一科專修ヲ許スコアリ 經書ノ大義ニ通スル者ハ武術ノ免許ヲ受ル者ニ當ル文學ハ八歲武術ハ十二歲ニシテ入學セシム但シ終身ノ修學ニシテ退學ノ期ナシ 試驗ハ毎年十月十一月ノ内文武トモ師範家毎ニ日ヲ頒チテ施行シ藩主臨席(上覽ト稱ス在邑ニハ必ス臨席ス出府ノ節ハ重役代理ス之ヲ見分ト云フ)家老中老人番頭物頭大目付等モ必ス列席ス 毎年十一月廿三日一年中ノ勤怠ヲ檢査シ精勤ノ者ニハ目録金及賞品ヲ與テ訓條不詳 罰則ハ別ニ設ケナシ文武共怠惰ナルモノハ大目附ヲシテ之ヲ責メシム 文學ハ入門ノ節父兄或ハ親族同道シ當人ハ禮服着用聖像ヲ拜セシメ武術ハ若服同斷高第立會誓詞血判セシムルヲ例トス

職名及ヒ俸祿

維新前 中老一名○用人二名○大目附二名○長柄奉行一名○臺所目附一名○徒士目附一名○細工師二名○中間一名但シ常祿ノ外ニ役料等ヲ給與セス

維新後 少參事二名○督學一名 權少屬相當年給五石○寮長一名 史生相當年給四石五斗○得業生一名 廳掌相當年給三石○句讀師三名 使部相當年給壹石○幹事一名 同上○幹旋一名 同上○校沓一名 同年給二石

職員概數 維新前 教員凡拾名 事務員五名○維新後 教員六名 事務員四名

生徒概數 維新前 通學生徒凡百名 寄宿生ナシ○維新後 通學生凡百名 寄宿生ナシ

束脩謝儀 維新前 束脩ハ文武トモ銀壹匁謝儀ハ祝儀ト唱ヘテ年々兩度年始中元身分ニ應シ銀壹匁或ハ五分三分ヲ各師範家ニ收ム○維新後 束脩金五錢 謝儀ナシ

學校經費 維新前 一周年文武ノ費用ヲ米百石ト豫定ス學田又ハ學費ヲ藩士ニ賦課スル等ノ類ナシ○維新後 一周年ノ費用ヲ米百五十石ト豫定ス學田又ハ藩士ヘ學費ヲ賦課スルヲナシ

藩主臨校 定日ナク時々臨席シテ講義ヲ聽聞シ及武藝ノ試業ヲナス

祭儀 聖廟ノ設置ナシ每年冬至ニ儒官ノ邸宅ニ於テ釋奠ヲ執行ス祭式ハ床頭ニ聖像ヲ祭り何レモ禮服ニテ酒饌ヲ供シ祭

文ヲ朗讀シ講義等ヲ爲ス

賓主をなし修練の四時に順て怠るへからず

附役人と成ては日用之事繁し故に無役之時或は部屋住之内に學問諸藝を勵みこれに可達也

一光陰を徒に送る事なく文武之藝習恒となり不倦して涵養すへし甚しければ必怠り剩へ廢るに及尤省察を加ふへし

一若壯老の輩并病身の藝術之用捨肝要也但氣隨を爲へからず若年の身體を造ひ筋骨をすこやかにすへし

一武道具等分限に應すへき也餘勢の飾聊も有へからず用方は其強弱を考程能して本意を失ふへからず

一文學に偏よる者は武藝に疎く武藝に偏るものは文道に疎し文武は陰陽にして一也離るへからざるを辨ふへし

一藝能にはこり他の藝術を誹謗する事名利にして甚不實なり人に越る、事を不思己か爲にして益をとり士の交真切成へし

一我氣の欲るにまかせて惡と成事をしらす人を攻て己を忘る深く可愼之朋友共に相助て人道の交りを可爲真切

一道理は善也理屈は不善他人の過惡を語吾に過惡ある事をしらす爲頭者の尙以深く戒て人と交るへし但道理は少も

無私意を云理屈は己を利するの人欲也

一家中並に顔分におゐて人道の害に成者あらは強可禁之

一同氣吾に宜きを以益なく故なしといへとも親み剩へ是を勸舉け吾に不宜者を以て益あり故ある者にても嫌ひ剩へ

是を措如斯は甚不忠也人の爲頭者深く可愼之

一己用ひられざるは其用ひられざる品の我身に有事を辨へす無益を不顧して浪之攻て原道藝とを知らず益ある者の

用ひらるゝは嫉て竊にしては嘲謗るこれ狂慢にして人道にあらず

一人己を誹謗する事を聞て不可怒吾を助る好言也自分かへり見て可愼但人を誹謗するは又人道に非る事を辨へし

一禮實は主人の分限に順ひ嚴なると輕きと有小身ほど輕して大身に嚴也是家來の多少によりて勤仕に難易あり能分

限を思ふへし主從遠さうりて人情通せされは和せず和せされい家齊しからず

一爲義身命を輕せんと思ひ文武の道藝等夫々に勉て己か專要を無爲忘失は其餘は願はすして自分の心氣を安し唯

心實を愼へし

右十五ヶ條を以宜令受用定法とせずして教示と記すは得心して實に可令勉之教也法には罰の有事を思ひ内に不服者も押て勉之教あり因茲恥なし條々と能明辨して愼而可行者也

元祿六年五月廿七日藩主ヨリ士卒一般へ諭達シタル寫左ノ通

士卒及其子弟ハ必ス文武兩道ヲ兼修セシム

試験法ハ春季一回文武共藩主臨場試験ヲ施ス文學ハ素讀講義槍劔ハ五本勝負其他文武共優等ノ者ヘ目錄金等ヲ賞與ス
文武共年末ニ至リ其勤惰ヲ取調皆出席并ニ皆席ニ準スル者ヘハ竹刀料筆墨料等賞與ス

文武共入學ノ節ハ禮服着用各師範家ヲ回禮スルヲ例トス

習字私塾入學生徒ハ八歳ヨリ十三歳ヘテ毎月壹度清書ヲ藩廳ヘ出カシメ年末ニ至リ勉強ノ者ヘ半紙五帖ツ、賞與ス
職名及俸祿 文武掛リ頭取(用人役兼之)一名○漢學教授一名 月給拾圓○全一等助教凡二名 一ケ年手當トシテ玄米三

石○全二等助教凡二名 全玄米二石○擊劔教授一名 全玄米五石○全助教一名 全玄米二石○槍術教授一名 全玄米

四石○全助教一名 全玄米二石○柔術教授一名 全玄米壹石五斗○馬術教授(馬役兼) 手當ヲ給セス年末ニ至リ目錄

金ヲ與フ○門衛等ハ文武場共中間小頭ヨリ兼ス

職員概數 教員事務員門衛小使凡拾四八但文武共総員ヲ合算ス

生徒概數 通學生凡五拾人 寄宿生無之

束脩謝儀 謝儀無之但文武共入學ノ際扇子料ヲ其師範家ヘ納ム

學校經費 文武ノ經費定額無之其都度實費ヲ支拂フ

藩主臨校 每年春季一度試験ノ節臨視ス但藩主不在ノ時ハ老臣代臨ス

祭儀 聖廟ノ設ナシ正月五日學校ノ床頭ニ聖像ヲ掛ケ神饌ヲ備ヘ禮服ニテ藩主始藩士及生徒一般拜禮ス

學校圖面及藏書 不詳

舊芝村藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達

元祿二巳年三月五日藩主ヨリ士卒一般ヘ教示シタル寫左ノ通

一文武の學問を勉孝悌忠信を守軍法弓馬太刀鎗炮柔術等役儀ニ應シ不失當用可守之勿論小利に偏るへからず
一士は可成多藝者也是は用ひ彼の用ひましきと去取のならざる事なれば偏よらずして爲へし尙以用へし稽古ハ暫く

スルノ見込有之モノハ他邦遊學ヲ許シ藩費ヲ以テ壹人ニ付爲費補貳人扶持ヲ給與ス藩醫ノ内他邦修業モ亦同シ私費遊學ハ文武共各自ノ意向ニ任ス但他邦遊學ノ期限ハ總テ三ヶ年トス然レモ其修業ノ都合ニ因リ延期ヲ志願スルモノハ特ニ許可ス又他藩他邦ノ者ト雖モ修學志願ノ者ハ藩士ノ保證ヲ得テ文武共修學ヲ許シ寓所ハ其者ノ適宜ニ任ス士卒一般へ生徒ト共ニ毎月五十ノ日講義ヲ聽聞セシメ二七ノ日輪講三八ノ日會讀ヲナサシム但藩主在國ノトハ臨席スルヲ例トス

平民子弟教育方法 平民ノ子弟ハ其意向ニ任セ家塾寺子屋等へ入學セシム但苗字帶刀允許ノ子弟等志願ニ因リ里正ノ申立ヲ以テ掛リ役員取組ノ上藩立學校及武術稽古所へ入學スルコトヲ許可ス家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等ヲ開設スルハ各自ノ自由ニ任ス但毎年郡務ニ關スル役員領内ヲ巡視シ家塾寺子屋等教授能ク行届其功績アルモノハ藩主ニ申立目錄金等ヲ賞與シテ之ヲ獎勵スルヲ例トス

學校

校名 元祿九年ヨリ明治三年マテ遷喬館ト稱ス明治三年明喬館ト改稱

校舎所在地 元祿九年始メテ大和國式上郡戒重村ニ設立シ正徳三年居所替願濟ノ上同國同郡芝村へ移シ本村宇駒止ニ設立ス但戒重村ノ舊趾ハ移轉ノ後耕地トナル

沿革要畧 故織田丹後守平長清士氣ノ衰頹セシヲ憂歎シ元祿九年遷喬館ヲ設立シ京師ヨリ鴻儒北村可昌ナルモノヲ聘招シ率先藩士ト共ニ文學ヲ修ム武術モ本館構内別ニ一棟ヲ建立シ育英場ト稱シ毎日劍鎗隔日朝六ツ時ヨリ四ツ時迄柔術隔夜夕六ツ時ヨリ四ツ時迄居合等ヲ修セシム弓馬砲術等ハ藩立各稽古場ニ於テ修メシム茲ニ於テ兩道頗ル興起シ士氣大ニ振フ故ニ當時尤文武隆盛ナルコトハ今尙口碑等ニモ傳フ所ナリ長清小傳別冊之通リ其著述織田真記十五卷アリ今尙其家ニ傳フ可昌小傳別冊之通リ其學派ハ朱氏ヲ主トス

敎則 元祿九年創立以來明治三年ニ至ルノ間ハ敎科用書及授業法等確定ナシ然レモ古事記日本書記古史傳四書五經孝經左傳史記漢書文選ノ類ヲ以テ敎科書トナシ素讀ヲ了リテ輪讀會讀等ヲナサシムルヲ畧授業ノ順序トナシ毎日朝五ツ時ヨリ夕七ツ時ニ至ルヲ授業ノ時間トス習字算術ハ讀書ノ傍ラ之レヲ敎授ス明治三年以後ハ左之通但原書ノマヽチ謄寫ス

稽古徵今神聖之大道ヲ發明シ國體ヲ諳知シ群經ヲ以テ人倫ヲ講明シ百史ヲ以テ各國古今ノ世態ヲ洞察シ專活眼ヲ以

一家中之士共風義柔弱にて殊之外内氣に成候夫故武道薄候此儀我等心外無念に存候

一右之趣に付て承候得者内めなるかよく扣へるかよく候出張進むものは我等きらひ候と頭たる者申押へ又は先輩之もの其後に來る者共にうように申聞候この儀承り候此儀以之外我等所存本望にあらす候何とてうやうの事共申習候哉自今以後士共は不及申末々に至迄覺悟相改隨分進みて其格々年倍相應に心得若きものは猶々隨分氣情を出して總体柔に無之武道も頭たるまで成程武士張相勵候て内外共用方無油斷心付候て可相勤候

一常々扣めにどて身構仕引込うたきのものは用に立不申候若此心得にて進み申間敷内氣數奇なる覺悟の者は扶持いたし面白からす候其身も心に不叶家の米を食てもいらざるものに候間可立去候務て此方より憤り構あるへからす候又此方よりも右様のもの可致吟味候

附身構仕吾身をかこひ身をうたぬ調義の勤方者士に不似合事也

一武儀に心懸深く武道盛に藝能迄勵候ものは過り不調法候共なるへき程は免し可申候心懸なく武道おどろへ藝能も不仕上は過り不調法有之候は、たどへ免さる程の事なり共免し申間敷候兼て此段斷置候右様に相心得其時恨不可有候

一奉公人は古參新參之無隔候共壹人之心入次第にて候事ハ古今同意に候普代古參は新參者に不被越新參は普代古參に不劣様に相心得不申候得者兩方ともに用に不立と申ものに候
一出來したて人の役義を口口と申類有之事に候是は無禮もの語ものに候得者此所に心を附嗜みて必取違退扣申間敷候

一教示之壁書を彌能々相守其外定書共綱無違背相勤可申候

一役人共者不及申士共初并小役人次に下々迄直目安忍目安免之候間自今以後者我等家中并に領分廻之仕置總て申付候義之善惡其外家中領分痛になり又は難義仕事家老用人之義者猶以之事役人之善惡亦是末々迄訴訟或は願度存候而も中にて滞り候半と存候義共是等を專にして其外何にても書付可差越候私之意趣を挟みなきとを申尤讒言仕等之義有之におゐては年月を歷候ても委く可致吟味候

右之趣堅可相守若雖爲一事於相背者如此申聞置候上者猶以分明に可申付候間兼て能々可有覺悟もの也

士族卒子弟教育方法

士卒

卒ハ普代卒ト唱ヘ世襲スルモノナ云フ

共當主子弟ノ別ナク總テ藩立學校及武術稽古所へ入學セシム

士卒中學業武術俊秀ノモノ

藩主ヨリ撰拔シ又ハ本人ノ志願ニヨリ各其藝術ヲ藩主

藩主不在ノハ家老

臨席試業ノ上將來ノ熟達

毎夜附屬一人仕丁一人交番宿直スヘシ但毎朝館内掃除寄宿ノ内一人仕丁一人直夜ノ附屬指揮スヘキヲ
毎月業ノ成否ヲ小試シ歲抄ニ至テ大試シ勤惰ヲ検査シテ賞罰ヲ行フヘキヲ

日課

每朝授業質問ノリ 二七ノ日午後 中學生輪講 三ノ日午後 小學生會讀
四九ノ日午後 大學生輪講 五十ノ日午後 講義 八ノ日午後 詩文會
毎月一六ノ日休業

右規則時々ニ省察シ其成功ヲ遂クヘキ事

明治三庚載午正月

學科學規試驗法及諸則

皇學 漢學 算術 筆道 弓 馬 槍 劍 砲 柔術等 弓馬槍術ハ校外ニ稽古場ヲ設ク

生徒(士卒常主子弟等)ハ必ス兩道ヲ兼修セシム文武程度比例等ハ別ニ不設學脩ノ期限ハ年齡八歳ニシテ文學ニ就キ十
歳ニシテ武道ニ入ルヲ例トス尤文武ヲ修ムルハ士ノ常職ナルヲ以テ退學ノ期限ヲ定メス
試驗ハ毎年々末藩主(藩主不在ノキハ家老)臨席家老以下總目付列席ノ上素讀輪講等ヲ試ミ優劣ヲ判シ其優ナルモノ及
ヒ特ニ精勤スルモノニハ賞詞及筆墨書籍目錄金等ヲ藩主ヨリ直ニ授與シ褒賞ヲ受ケ得サルモノニハ將來一際憤勵スヘ
キ旨ヲ藩主ヨリ懇諭ス武術ハ邸内書院ニ於テ執行ス其方法及賞與モ總テ文學ノ試驗ノ如シ
訓條ハ武術文學共諸制度ノ項ニ記載ス又藩主臨場等ノ節其時機ニ據リ訓戒スルヲモアリ
罰則ハ文武共其犯ス事柄ニ就テ教師限り懲戒スルヲアリ或ハ藩ノ法律ヲ以テ閉門差扣等適宜處分スルヲ例トス故ニ別
ニ規則ヲ不設

文學武學共初テ入學スルモノハ禮服着用各師範家及掛役員ノ宅ヲ回禮スルヲ例トス
文武共賞與ヲ受ケタルキハ其當日師家ヲ回禮ス武術ハ免許皆傳等ノ證書ヲ得タルキハ藩主ヨリ褒賞トシテ目錄金ヲ授
與ス此褒賞ヲ受ケタルモノハ當日禮服着用家老以下掛役員及師範家ヲ回禮スルヲ例トス
職名及俸祿

維新前 用人ノ内一名 文武ヲ總督ス家祿ノ外役料十石○總目付ノ内一名 全上家祿ノ外年々手當トシテ十石以内ヲ

從來之弊習ヲ看破シ正大之 朝旨ヲ奉戴シ平生所學他日世用ニ供スル爲ト深認得スルヲ要ス
我國學ヲ皇張スルモノ世々其人ニ不之ト雖モ要之本居平田ノ該博精研ニ及モノ少シ故ニ凡テ係國典者二氏ノ說ヲ以
テ準のトス

孔孟之道本無多岐從來學者互立玷壇所々其所得ヲ主張ス其說各長短アリト雖モ要之程朱ノ純粹着實ニ如クモノナシ
故ニ漢籍ノ經說ニ涉ルモノ程朱ヲ以テ宗トス學者邪徑ニ迷フテ他ノ窠臼ニ陷ルヲ勿ンヲ要ス

從來句讀生四書五經文選等ヲ授レトモ爾後古史正文神代正語祝詞宣命等ヲ交授スヘシ句讀了シテ後三科ヲ分チ各其
優劣ニ隨テ定其科其所課ノ書ニ從事セシム歲晚大試シ以テ黜陟ヲ定ム

小學生事業課目 皇朝史略、國史略、十八史略、蒙求、王代一覽、稽古要畧、古道拾遺、小學、近思錄 右自讀セシメ義理
了解シ難キモノハ教官ニ就テ質ス小學事業畢ツテ中學生ニ進ム

中學生事業 古史傳、日本書記、孝經、論語、孟子、日本外史、唐鑑、宋鑑、易知錄、竹山逸史、土佐日記、文章軌範、源平物
語、入大家文抄、伊勢物語、明六大家文抄 右卒業大學生ニ進ム課文亦此中ニ在リ

大學生 古事記傳、十三經註疏、大日本史、溫史宋元通鑑、類聚國史、二十二史、左國史漢、後漢書、三國志、通鑑綱目、
洋史類 右事業既了シテ後チツノオノ利鈍學ノ成否ニヨツテ官員或ハ教官ニ登庸スヘシ若夫寮中條例規則別詳于校

則不費于此

校則

生徒八歳ヨリ入學スヘシ寄宿ハ十五歳ナラサレハ不許但秀才敏達ノ者ハ此限ニアラサルヲ

生徒入學ハ前日其父兄ヨリ督生ニ届ケ指揮ヲ受ヘシ寄宿モ亦然リ寄宿中故アツテ歸宅セント欲セハ其父兄ヨリ督生
ニ届ケ督生指揮ノ上退去ノヲ

寄宿ハ固勤學ノ爲ナレハ苟モ時日ヲ過スヘカラス夙興夜寢勉強シテ成功ヲ顯ハスヘキヲ但小憩ハ午飯後晚餐後ニ限
ル夜ハ三更ニ至テ寢ニ就ク志アル者ハ此限ニアラス

生徒ノ坐次必ス長幼ノ序ヲ立貴賤ヲ論スヘカラス但役員ハ此限ニアラス
講釋輪講ノ席ニ臨ンテハ必ス禮義ヲ正フシ故ナクシテ坐次ヲ離ルヘカラス但平日友朋互ニ切磋チナシ疑團不明了ノ

簡條ハ教授ニ就テ正スヘシ

生徒平日怠惰放恣師長ノ教ニ違背スル者ハ政廳ニ達シ小大ニ應シテ罰科ニ處スヘシ尙改心セサレハ入館ヲ禁ス

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達

文化十二乙亥年藩政改革ノ節達書

以來嫡子十三歳に相成候は、御日見親より願可申御日見被仰付候ハ、年頭八朔其外御禮事出仕之節可罷出席之儀者親持高之席と相心得可申候尤文武出精様子能生立候儀相聞候者御宛行被成下御役儀可被仰付事

天保十一庚子年五月達書

諸稽古事之儀衆而被仰出モ有之去る文化十三子年格別厚被仰出候御主意も有之候處近頃怠勝ニ相成如何之事ニ候已來月々及見分候間心得違無之様出精可相勵候

右之儀諸士并次男三男末々迄不洩様可被申達候

天保十四年十一月諸藝取扱世話方へ達書

諸出席帳月々差出候者は迄通仕向後毎年十一月より翌十日迄一ケ年之出席精不精相調十一月十日迄ニ懸々より差出格別上達之向又年中懈怠無之者ハ別段ニ被申立猶其品ニ寄御褒美等之儀も可被申立候

獎勵法 獎勵法ハ別ニ無之月々出席度數ヲ計リ辨當米ヲ給與セシマアリ 文武トモ年末中元各師範家ニ於テ其精情ヲ取調ヘ藩主ニ呈シ特別勉勵ノ者ニハ文學ハ書籍目錄金武術ハ其器具目金錄等ヲ賞與ス

士族卒ノ子弟教育方法 維新前ハ藩立學館無之故ニ士族卒トモ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ勝手ニ習學セシメ又私費ヲ以テ他方ニ遊學モ意向ニ任セリ明治元年明倫館設立ノ後ハ總テ之レニ入學セシム 藩費ヲ以テ他國遊學セシメタルヲ不詳醫學修業ノ者ヘ扶持米ヲ給與セシマアリ 維新後嫡子二三男トモ十四五歳ニ及ヘハ文武修行ノ手當トシテ扶持米ヲ給與セシマアリ 毎月一回書院ニ於テ儒臣ニ經書ヲ講セシメ藩主臨席藩士ヲシテ聽聞セシム 平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ家塾寺子屋ニ就テ修學スルハ其意向ニ任スト雖ハ藩立學校ヘ入學ヲ許サス但武衛ニハ從事セシメサルヲ慣例トス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺小屋ノ開設ハ藩士平民共自由ニ任セ檢束スルコナシ

學校

校名 明治元年創立明倫館ト稱ス

給ス○下目付ノ内順番一名 用人ノ指揮ヲ受日々學校稽古所出席事務取扱ナナス家祿ノ外役料三石○文學教官一名 家祿ノ外八石身分總目付ノ下席トス○習字數學兼教官一名 全上○句讀師無定員 生徒中上進ノ者ヲ以テ之ヲ命ス仍テ別ニ俸給無之年末ニ至リ袴料トシテ若干金ヲ給ス○劍術師範一名 家祿ノ外俸給ナシ中元歳末手當トシテ若干金ヲ給與ス身分持格ニ據ルヲ以テ別ニ定メス門弟ヨリ謝儀トシテ中元歳末ニ若干金ヲ收ム○槍術師範一名 劍術師範ニ全シ○砲術師範一名 全上○柔術師範一名 全上○居合師範一名 全上○弓術師範一名 全上○馬術師範一名 全上○習禮師範小笠原流一名 全上○門衛小使兼一名 壹人半扶持

士卒有志ノ者ハ其師家ニ就テ修學セシム又婦女子裁縫茶事活花音曲等自由ニ修學セシム

維新後 教授一名○助教一名 學生一名 附屬五名(但身分取扱ハ上中下ノ三等ニ分ツ上等俸祿拾貳石中等八石下等貳石)○算術手跡教授一名(下等俸祿三石)○仕丁門衛不詳

職員概數 維新前 教員事務員門衛合セテ凡二拾人○維新後 教員事務員門衛等凡十二人

生徒概數 維新前 通學生凡六拾人(但文武共)○維新後 寄宿生拾貳人 通學生五拾六人

束脩謝儀 維新前 文學ハナシ武術ハ中元年末謝儀トシテ適宜其師家ニ收ム○維新後 文武共無之

學校經費

維新前 文武共凡三百石以下 元祿年間尤隆益ナルヒハ三百石餘ヲ文武ノ費用トナセシマアリ

維新後 一ケ年ノ費用凡米六拾八石膏斗八升五合金貳百四拾四圓貳拾九錢五厘

藩主臨校 毎年々々末試験ノ節藩主(藩主不在ノヒハ家老)臨席及家老以下總目付役迄列席素讀輪講等ヲ試ミ優劣ヲ判シ其優ナルモノ并ニ特ニ精勤スル者へ賞詞及筆墨書籍目錄金等ヲ藩主ヨリ直ニ授與ス又褒賞ヲ受ケ得サルモノハ將來一際勉勵スヘキ旨藩主ヨリ懇諭ス武術ハ邸内書院ニ於テ執行ス其方法及賞與等ハ總テ文學ノ試験ノ如シ

祭儀 聖廟ハ別ニ設ケナシ毎年正月十二日校内書院ニ於テ聖像ヲ掲ケ酒饌ヲ供ヘ藩主始メ藩士一同及生徒禮服着用順次拜禮セシムテ學事始ノ講義ヲナスヲ例トス

學校圖面及藏書 別紙ニアリ

舊柳本藩

學制

舊柳生藩

學制

學事上ノ諸制度 維新前ハ藩主江戸在勤ノミニシテ領地ニ歸ルヲナシ故ニ家臣拾分ノ八ハ江戸居住僅ニ拾分ノ二領内數ヶ村ニ散在シ柳生藩廳所在村ニ居住スル者ハ九戸ナリ因テ教育ノコハ適意家塾寺子屋ニ就テ讀書習字算術ヲ修業スルヲ以テ制度布達等無之又維新後モ學校ノ設ケアリタレモ藩主ヨリ別ニ布達等無之 江戸在住ノ士卒モ各好ム所ノ家塾ニ入り讀書習字ヲ學フ

士族卒子弟ノ教育方法 士族卒ノ子弟ハ各自ノ意向ニ任セ家塾寺子屋ニ入り修學スルヲ許スト雖モ藩費ヲ以テ學資ヲ助クル制規ナシ總テ學資ハ自辨タルヘシ藩主ハ學事ニ干與セサルヲ法トス 士族中ノ子弟自費ヲ以テ他國遊學ヲ請願スル者アルハ詮議ノ上許可スルコアリ 卒ハ終身抱ノ者ノミニテ教育上ノ制度ナシ 平民子弟ノ教育方法 平民ノ子弟教育ハ各自ノ意向ニ任シ家塾寺子屋ニ就テ修業セシメ學事ニ從事スルヲ禁止スルノ令アラス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ何人タリモ自由ニ開設スルヲ許シ他ノ檢束ヲ受クルコナシ

學校

校名 明治三年二月創立修文館ト稱ス

校舍所在地 大和國添上郡柳生村ニ設立ス

沿革要略 維新前藩主江戸在勤ニシテ領地ニ歸ルヲナシ爲メニ藩士卒モ多ク江戸ニ在リ領地ニ居住スルモノ僅々十分ノ

二ノミ因テ學校等ノ設ケシ明治三年二月添上郡柳生村ニ修文館ヲ設立シ長谷川雲外ヲ教授ニ任シ其他助教三四名ヲシテ藩士卒ノ子弟ヲ教育セシム明治四年十二月ニ至リ廢校トナル

教則

教科用書 大學、中庸、論語、孟子、易經、書經、詩經、禮記、春秋、史記、左傳、漢書、資治通鑑、通鑑綱目、格物入門、博物新

編、物理階梯、

授業時間 毎日午前八時始メ午後三時ニ終ル毎月一六ノ日休業

校舍所在地 柳本陣屋內現今字舊廓内ト稱ス
沿革要畧 明治元年創立同四年廢藩ノ際廢校
教則

教科書 四書、五經、孝經、文選、家語、左傳、史記、漢書、十八史畧

授業ノ方法順序時間 初メテ入學シタルモノハ四書五經ノ素讀ヨリ始メ略素讀ヲ卒ヘタルモノハ講義ヲ聽聞セシメ漸々進ンテ輪講等ヲ爲サシム 授業ノ時間ハ毎朝五ツ時ヨリ正九ツ時迄毎月六度午後講義休業ハ朔望及ヒ五節句學科學規試驗法及諸則

漢學 弓 馬 槍 劍 砲 棒 繩 柔術 習字 算術 武術ハ校内ニ於テ教授セス別ニ稽古所ヲ設立セリ 習字算術ハ各師範家ノ宅ニ於テ教授ス 士族卒トモ當主嫡子二三男ノ別ナク總テ兩道ヲ兼修セシム 文武ノ程度比例無之生徒學習ノ期限ハ無之但武藝ハ十三歳ヨリ六十歳マテトス 試驗ノ方法ハ別ニ定規ナク時々掛役員出席素讀講義等ヲ試ム 武術モ亦准之 入學式ハ別ニ定規ナシ禮服ヲ着用師範家掛リ役員等ヘ廻禮スルヲ例トス

職名及俸祿

維新前 諸藝取扱一人 給料不詳 ○各藝取立 人員給料不詳 ○全世話方 全上

維新後 學校長一人 祿高十五石 役料八石 ○教授一人 祿高十二石 役料三石 ○助教無定員 祿高十一石 役料二石 ○句讀無定員 役料一石 生徒ノ内上達ノ者ヲ以テ之ニ充ツ ○俗務掛一人 給料不詳 ○小使一人 給料不詳 ○武術小教授無定員 祿高十一石 役料二石 ○全助教無定員 役料一石 生徒ノ内上達ノ者ヲ以テ之ニ充

ツ但シ各職員身分取扱等不詳然レモ教授ハ必ス中士以上ニ當ル

職員概數 維新後 教員事務員等合シテ凡十名

生徒概數 維新後 通學生凡五十名 寄宿生ナシ 藩費生無之身元格別貧困ノ者ハ文武トモ書籍器具ヲ貸與シ或ハ其代

金ヲ貸與スルヲアリ其償還ハ月賦トス

束脩謝儀 文武トモ無之

學校經費 不詳

藩主臨校 藩主時々臨館生徒ノ講讀ヲ聽聞シ褒賞ヲ與ヘタルヲアリ

祭儀 無之

學校構造及建物圖面 地坪凡三十坪餘建坪凡十七坪 建物別紙畧圖ノ通 學校ニテ出版翻刻セシ書籍無之

モノハ之レヲ許ス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ各自ノ自由ニ任セ檢束スルコナシ

學校

校名 明治元年設立明倫館ト稱ス其後釋善館ト改稱ス

校舎所在地 大和國十市郡田原本村字奥垣内

沿革要略 寛政ノ初メ一藩類焼シ記録悉ク烏有トナレリ故ニ舊事詳ナラス爾來文武ノ修業ハ藩士ノ内之ニ長スル者ヲ以

テ教職ニ任シ子弟ヲ教導セシメ或ハ其ノ意向ニヨリ他所ヘ通學スルアリ又ハ他國ニ遊學ヲ志願スル者ハ其意ニ任セリ
天保十二年藩主故平野兵庫助長發更ニ稽古所ヲ藩内奥垣内ノ地ニ建設シ以テ一藩ノ子弟ヲ獎勵ス明治元年ニ至リ兵庫
助ノ嗣子故遠江守長裕明倫館ヲ設立シ尙同所ニ於テ砲術訓練場ヲ設置シ以テ文武ノ修業ヲ勵マヌ此時ヲ以テ隆盛ト云
リ

教則

教科用書 孝經、四書、五經、和漢史略類、蒙求、小學、左傳、通鑑、史記、漢書

授業ノ方法順序ハ初メ句讀ヲ授ケテ講義ヲ授ク或ハ自讀セシメテ質疑ヲナサシム 授業時間ハ日出ヨリ日没マテト
ス但毎月一ノ日ハ休憩

學科學規試驗及諸則

和學 漢學 筆道 馬術 鎗術 劍術 砲術 柔術

生徒ハ必ス文武ヲ兼修セシムルヲ常例トス然レモ志願ニヨリテハ專修ヲ許可スルコトモアリ 文武ノ程度比例ハ別ニ定
メナシ 學習ノ期ハ八歳ニシテ學ヲ就キ十歳ニシテ武藝ヲ學ハシム士卒共總テ二十五歳マテノ者ハ病患又ハ事故ア
ルニ非レハ文武ノ修業ヲ怠ルコトヲ許サス若之レニ背ク者ハ責罰ス退學ノ期限無之 試驗ハ年末ニ執行シ藩主及其掛
リノ役員列席シ句讀講義等ヲ試ミ其優劣ヲ觀察シ優等ナル者及年出精ノ者ハ褒詞賞品ヲ授與シ其怠惰ニシテ拙劣
ナル者ハ戒諭ス武術亦稽古所ニ於テ試驗ス其方法相同シ 文武共初メテ入學メ節ハ禮服着用即日師範家及其掛リ役
員ノ宅ヘ同禮ス

職名及俸祿 維新前後共同シ以下同斷

學科學規試驗法及諸則 漢學ヲ主トシ皇學及洋籍翻譯書ヲ用ユ 文學ト武術ノ程度比例ノ類アラス 生徒賞與罰則等ノ設ケアリシカ現今書類不詳故ニ略ス

職名及俸祿 教授一名 助教無定員、但シ教授ノ身分ハ準少屬ヨリ準大屬迄月俸五圓ヨリ十圓マテ助教ハ準史生ヨリ準權少屬迄月俸貳圓ヨリ六圓マテ 門衛一名專任ノ者ナシ卒ヲシテ交代セシム 小使一名 生徒概數 通學生三拾名

束脩謝儀 無之

學校經費 總テ藩庫ヨリ支辨ス制限ナシ

藩主臨校 臨校アリシヲ無シ

祭儀 無之

學校構造及建物圖 別紙ニアリ

學校ニテ出版翻刻セシ書及藏書 無之

舊田原本藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達 毎年正月十一日文武稽古初ノ節藩主ヨリ左ノ如ク士卒へ諭告此ノ外布令等不詳

文武の道は士たる者の本務たる可き義なれば常々之に従事し勉勵致すへき事

士卒ノ内文學或ハ武術ニ特達ノ者ハ若干ノ加役米ヲ與ヘ又ハ擢舉シテ顯職ニ任ス其子弟ノ内俊秀ナル者ヘハ扶持米ヲ與ヘ又ハ教授助教等ニ選舉シ或ハ目錄金ヲ與フルコアリ

士族卒子弟ノ教育方法 士卒ノ子弟ハ總テ藩立學校及武術稽古所ヘ入學セシム 士卒中文學又ハ武藝ニ逸群ナル者ヲ選

ソテ他國ニ遊學セシメ或ハ他國遊學志願ノ者ハ其才能ノ上達スヘキヤヲ察シテコレヲ許シ藩費ヲ給與スルモアリ私費

ニテ遊學スルハ文武共本人ノ意向ニ任ス但シ遊學ノ期ハ三ヶ年ト定ム然レモ延期ヲ願フ者ハ特ニ許可スルモアリ 士卒一同生徒ト共ニ毎月五十ノ日講義ヲ聽聞セシメ藩主在邑スルキハ臨席スルヲ例トス

平民子弟ノ教育方法 平民ノ子弟ハ其意向ニ任セ家塾寺子屋等ニ就テ修學セシメ或ハ藩立學校ヘ入學センヲ志願スル

學校

校名 丹南學校ト稱ス

校舍所在地 河内國丹南郡丹南村ニ設置ス

沿革要略 明治元年藩主高木正剛家臣ヲ率テ此地ニ移住シ新ニ校舍ヲ營築シテ學事ヲ獎勵ス大參事井上信敬西村定中少參事高橋方中片岡直敬等與カリテ盡力セリ即チ學士森余山ヲ聘シ該校ノ教授ニ任ス爰ニ於テ稍學規備ハレリ同四年日廢藩ニ據リ廢校ス

教則

素讀科 小學、大學、中庸、論語、孟子、易經、書經、詩經、禮記、春秋○解義科蒙求、十八史略、文選、日記故事、皇朝史略、日本外史、日本政記、靖獻遺言、戰國策、左氏傳、史記、綱鑑易知錄、前後漢書、資治通鑑

授業ノ方法順序時間 授業ノ方法ハ各人各別ニ素讀ヲ授ケ或ハ質問ヲ開ク講義ハ一ヶ月六回各生徒チ一所ニ集メ教授講述ス其他輪讀會讀ハ同等學力ノ者ヲ組成シ一月六回ツ、開筵ス 授業ノ順序ハ四書五經ノ素讀ニ始リ蒙求ヨリ順次解義ニ及フ 授業時間ハ一定ノ成規ナシト雖モ每日午前ヲ讀書習字ノ時間トシ午後劔術柔術ヲ授ク

學科學規試驗法及諸則 學科ハ漢學筆道劍術柔術ニシテ入學ノ生徒ハ必ス文武兩道ヲ兼修セシム然レモ志願ニヨリ詮議ノ上一科專修ヲ許可セシモアリ生徒學習ノ期限ハ六歳ヨリ十五歳マテトス十五歳ニ至レハ軍務局ニ入ブシメ馬術兵書ヲ兼修セシ

試驗ハ春秋兩度之レヲ施行シ優等ノ者ヘハ賞品(筆墨紙等)ヲ與フ然レモ一定ノ方法ナシ生徒訓條罰則等ノ諸則アリシカ方今徴ス可キ記錄ナシ入學許可ヲ得シトキ各師範家ヲ回禮スル儀式之レナシト雖モ新年中元五節句ニハ必ス各師範家ヘ禮服着用回禮スルチ例トス

職名及俸祿(維新前ノコトハ書類散失シテ不詳以下同シ)

學制頒布前 少參事 本祿六拾石本務中ヨリ分擔スルチ以テ別ニ職祿ヲ給セヌ○大屬 本祿五十一石職祿全上○權少屬 本祿二十六石職祿全上○學校掛 俸祿十八石 卒ヲ以テ之ニ任スルハ十三石 卒ヲ以テ之ニ任スルハ十三石 卒ヲ以テ之ニ任スルハ十三石 役金ヲ給セス 士ヲ以テ之ニ任スルハ等外 一二等卒ハ五六等以下トス ○炊夫兼小使年給玄米三十石一人扶持

文學教授 俸祿四拾壹石身分權大屬ニ準ス○大助教 俸祿三拾三石身分少屬ニ準ス○中助教 俸祿貳拾六石身分權

用人ノ内一名 役料三石〇大目附ノ内一名 目錄金ヲ給ス〇目附ノ内一名 目錄金ヲ給ス〇徒目附ノ内一名 目錄金

ヲ給ス〇教授一名 役料三石〇助教二名 目錄金ヲ給ス〇習字師一名 役料二石〇鎗劍師一名 役料三石〇炮術師

一名 役料三石〇馬術師一名 役料二石〇柔術師一名 役料二石

職員概數 教員事務員等凡十二人

生徒概數 通學生凡四十名 寄宿生無シ

束脩謝儀 束脩謝儀ハ文武共無之

學校經費 經費年ニヨリ多少アルヲ以テ其程度ヲ定メス又其額モ不詳

藩主臨校 毎月五十ノ日ヲ常例トス又臨時ニ講義聽聞ノタメ臨席スルヲアリ

祭儀 聖廟ハ別ニ設ケス正月十一日聖像ヲ學校ノ床頭ニ掛ケ瓶酒菓物ヲ奠シ一同拜禮ス

學校構造建物圖面 建物圖面別紙之通

學校ニテ出版翻刻セシ書籍及藏書類 無之

舊丹南藩

學制

學事上ノ諸制度 明治元年藩主高木正剛藩士ヲ率ヰテ此地ニ移住シ新ニ學校ヲ營築スルノ際藩中ノ者ハ老若ヲ問ハス一

ケ月六回必ス講義席ニ出テ聽講スヘキ旨諭達アリタリ其書類等散失シテ今之レヲ詳ニスル不能又學業上進ノ者ニハ賞

品ヲ與ヘ職務勉勵ノ職員ヘハ祿米ヲ加増シ或ハ賞金ヲ與ヘシヲアリ且生徒ニシテ筆道ニ長スルモノニハ紙筆墨讀書ニ

長スルモノニハ書籍等ヲ與フル事アリタルモ一定ノ規則之レナシ

士族卒子弟教育方法 士族卒ノ子弟ハ必ス藩立學校ニ入り修業セシムト雖モ志願ニ因リテハ藩費遊學ハ凡一ケ月手當金

八兩ト一人扶持ヲ與フ然レモ其身分ノ高下ニヨリ六兩又ハ七兩ヲ與ヘ或ハ私費ヲ以テ他國ヘ遊學スルヲ許可セリ

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ家塾寺小屋ニ就テ修學スルノ外志願ニヨリ詮議ノ上藩立學校ヘ入學ヲ許可セシ事モ

アリ

家塾寺小屋設置ノ制度 家塾寺小屋ノ設立ハ何人タリモ任意ニ開設シ他ノ檢束ヲ受クルヲナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ各人ノ自由ニ任シ別ニ之レヲ檢束セズ然レモ教育方ニ盡力セス或ハ生徒ニ對シテ不當ノ所爲之レアル節ハ奉行郡宰ヨリ之レヲ禁止スルコトアリ

學校

校名 簡修館ト稱ス

校舍所在地 河内國丹南郡狹山ニ設置ス

沿革要略 藩立學校創立年代事蹟詳ナラスト雖モ嘉永年度ノ末北條氏燕大ニ文武ノ藝微チ慨嘆シ該校ヲ中興シ之レヲ簡修館ト云フ是ニ於テ老臣宮城丹波造下山一角及ヒ儒宮笠原玄策等大ニ力ヲ盡シ其頃玄策ヲシテ藩立校教員ニ任セシメ後玄策疾ニ因テ職ヲ辭ス乃藩士羽白東作ヲシテ該員ニ補ス以來關藩子弟漸ク向學ノ志氣ヲ興發ス慶應二年ニ至リ更ニ大和國高市郡田井庄村ノ人儒官森鐵之助ヲ聘シ教頭ニ任セリ就中明治ノ始ニ方リ藩主北條氏恭頗ル學ヲ好ミ常ニ文學場又ハ兵書講場ニ親臨シ藩士ヲ鼓舞セリ

教則

素讀科 三字經、千字文、大學、中庸、論語、孟子、易經、書經、詩經、春秋、禮記、文選○解義科 十八史略、元明史略、日本

外史、日本政記、蒙求、世說、劉向新序、綱鑑易知錄、史記、左傳、孝經、逸史、通鑑攬要、三國史、文章軌範、七書

授業ノ方法順序及ヒ時間割 授業ノ方法ハ每人各別ニ素讀ヲ授ケ或ハ質問ヲ聽ク始メテ入學シ句讀未ダ了ラサルモノヲ初等生トシ十八史以上ノ書ヲ解シ得ルモノヲ中等生トシ經義ニ通シ言行修ルモノヲ上等生トシ初等生ハ三字經千字文四書五經文選等ノ素讀ヨリ始マリ中等生ハ十八史略以上解義ニ及ヒ順次上進スルモノトス中等生以上ニハ傍ラ單簡ノ會話ヨリ日用書類假名交リノ記事文復文法及漢文ヲ授ケ 授業時間ハ朝五ツ時ニ始マリ正午ニ終フト雖モ時アリテ伸縮スルコトアリ 講義ハ毎月十二回ト定メ九ツ半時ヨリ七ツ時迄トス 會讀ハ毎月二回又ハ三回トス九ツ半時ヨリ七ツ時迄トス 年中休業ハ毎月二七ノ日及ヒ五節句祭日祝日盆休(七月九日ヨリ全月廿二日マテ)正月休(十二月廿一日ヨリ正月廿一日マテ)トス

學科學規試驗法及ヒ諸則 和學漢學兵學ノ三トシ其内何ノ科ヲ問ハス一科專修ヲ許可セリ又武學文學ノ比例ナシ年齡八歲ニ至リ入學十七歲ニ及ヒ退學期ナルモ本人ノ志願ニヨリ在學セシムルコトアリ又平民ニシテ入學許可ヲ得シ者ハ禮服着用父兄引率藩立校ノ教頭ヘ回禮スルヲ例トス 試驗法ハ定期ヲ設ケス讀書ハ毎月一回溫習ヲ試ムノミ又藩主及吏員

少属ニ準ス○少助教 俸祿貳拾石身分史生ニ準ス○助讀生 俸祿拾五石

武學校教授 俸祿等文學教授ニ同シ○大助教 全大助教ニ同シ○中助教 全中助教ニ同シ○少助教 全少助教ニ同シ
職員概數 教員拾四名 事務員四名但シ事務員四人ノ内少属一人權少属一人平常出勤ス

生徒概數 寄宿生凡拾五人 通學生凡五拾人但シ寄宿生ハ藩士ノ子弟ハ藩費ニシテ他ノ寄宿スルモノハ一ケ月白米一斗五升金貳歩ヲ出サシム(他ヨリ寄宿ハ上野國館林藩士一人領地内平民二人)

束脩謝儀 束脩謝儀一切要セス

學校經費 一周年ノ學費凡玄米貳百石トシ藩庫ヨリ支出ス別ニ定額ヲ立テスト雖モ又學費ニ増減アリタルヲナシ

藩主臨校 毎月六回ノ講義又ハ春秋兩度生徒試業ノ際ハ必ス臨校スルノ例アリ

祭儀 禮典ヲナサズ

學校構造及建物圖面 建物坪數百八拾坪二分五厘 敷地坪數五百坪但圖面別紙ニアリ

學校ニテ出版セシ書籍 ナシ

學校藏書 經書三拾壹部歷史三拾四部諸子及雜書四拾七部

舊狹山藩

學制

學事上ノ諸制度 廢藩以降日既ニ久シキヲ以テ方今藩書ノ徵ス可ヘキモノナシ今之レヲ故老ニ質スニ實學ヲ貴ヒ忠孝ノ道ヲ明ニスルヲ主トス可キ旨等口達アリタリ其他文學篤志ノ者ハ書籍購求代金ヲ貸與シ又學業上進ノ生徒或ハ職務勉勵ノ職員ハ毎年末之レヲ取調ヘ金貨圖書等ヲ賞與シ祿米ヲ加増セシコトモアレハ一定ノ制規ナシ今亦之レヲ詳ニスル能ハス

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ハ必ス藩立學校ヘ入學セシメ幼稚ノ兒女ハ隨意ニ各家塾ニ入り筆道算法等ヲ修メシム又藩費(二人扶持ニ月手當金壹兩乃至四兩)及ヒ自費ノ遊學ヲ許可セシヲアリ且藩士ノ有志者ヲシテ職務ノ餘暇藩立學校ニ於テ會讀或ハ輪講セシヲアリ今其方法詳ナラス

平民子弟ノ教育方法 平民ノ子弟ハ家塾寺子屋ニ入り筆道算法等ノ諸科ヲ修業スルハ其意向ニ任ス或ハ志願ニヨリ藩立學校ニ就學スルヲ許可セリ

藩主ノ布令諭達 嘉永五年講習館設立シ爾來明治元年迄ノ諸布達等不詳全二年巳三月全三年午二月以後ノ達書並ニ察令等左ノ通り

今般南紀ヨリ儒者御展被成候ニ付御家中之面々練兵外講習館へ罷出學事勉勵可致様被仰出候依之別紙之通り御規則被爲立候事

巳三月

執政

規則(別紙)

一一六朝、三八夕 講釋〇三八夕 輪講〇一六朝、三八夕 貞觀政要〇一ノ朝 論語

一此度學校規則相改儀依之藩士一際勉勵可致候九子弟者ハ八歳より十八歳迄不殘入學修業可致若游惰之子弟於有之者其父兄之可爲越度候入學之上別紙察令相守可申候事但無格者依願入學差免候

午二月

知事

察令(別紙)

一尊卑長幼有序事

一學校掛ノ面々二七ノ外日々五ツ時ヨリ夕七ツ時マテ出勤ノ事

一寮ヲ分ケ闔藩之子弟讀書ハ悉ク句讀師ニ分配ス其下ニ一人加役ヲ置以テ句讀師輔翼トス尤寮中ニテ手習相兼候事但シ手習教師ハ別ニ之ヲ置ク

一素讀相濟候輩ハ講師助講之ヲ教育ス

一司書役書籍ノ出納ヲ謹ムヘキ事

一御書物拜借致シ度輩ハ一々司書役へ書付差出可申候事但シ拜借ノ上粗忽ニ取扱間敷事

一講習寮助講寮ニテ御定則ノ外輪講會讀等勝手次第ノ事但シ人員多キ時ハ講堂ニ出候義勝手次第ノ事

一各寮中ニテ等級ヲ立褒貶致スヘキ事

一訓點可成丈簡省ニ飯スルヲ要トス

一入寮之子弟七ツ時迄門外游歩ヲ許サス唯飯時而已寮長ニ届ケ家ニ飯ルヲ得ヘシ但シ十八歳以上他ノ職掌アル輩ハ此限ニアラス

右堅ク相守ルヘキ事

臨時ニ出校シ授業ヲ視察シ或ハ生徒ノ學習セシ科ニ就キ之レヲ試ムト雖モ賞與スルノ定メナシ又生徒罰則及訓條等ノ設アリタルモ散失シ今記錄ノ徵ス可キナシ

職名及ヒ俸給

維新前 學校奉行一名(執政之レヲ兼テ別ニ役祿ヲ給セス身分取扱本務ニ同シ)○教頭一名(本祿貳拾三石四斗役料金貳兩身分ハ上等士列ヲ以テ取扱フ)○教授三名(本祿貳拾四石別ニ役料ヲ給セス身分ハ中等士列ヲ以テ取扱フ)○門衛一名(五石七斗)

學制頒布前 學校奉行一名(維新前ニ全シ)○學監一名(本祿十三石役祿貳拾俵身分一等士族ニ列ス)○教頭一名(本祿十三石役祿七俵身分一等士族ニ列ス)○教授四名(本祿四十石身分二等士族ニ列ス別ニ役祿ヲ給セス)○門衛一名(五石七斗)

職員概數 維新前 教員四名 事務員一名 門衛一名○學制頒布前 教員五名 事務員二名 門衛一名

生徒概數 維新前ハ不詳學制頒布前左ノ如シ 通學生凡六拾人 寄宿生無之

束脩謝儀 束脩謝儀一切ナシ

學校經費

維新前 一周年ノ學費米五拾四石金三百貳拾四兩總テ藩ノ會計局ヨリ支出ス學事ノ張弛アリト雖モ増減セシコナシ

學制頒布前 一周年ノ學費米八拾六石一斗金四百貳拾兩總テ藩ノ會計局ヨリ支出ス學事ノ張弛ニヨリ増減セシコナシ

藩主臨校 藩主ハ毎月一回或ハ隔月一回臨校シテ生徒ノ學業ヲ試ム

祭儀 別ニ聖廟ヲ建設セス校内ニ聖像ヲ安シ毎年正月七日之ヲ釋奠シ開校ノ典ヲ舉ケ全校ノ生徒及ヒ吏員^{班政ヨリ}禮服^{監察マテ}

ヲ着シ左右ノ列ニ就ク教頭乃チ經典ヲ講ス了リテ神酒ヲ分ツ

學校構造及ヒ建物圖面 敷地坪數百六拾八坪建物坪數二拾八坪 圖面別紙ニ掲ク

學校ニテ出版翻刻セシ書籍無之又藏書ハ若干部アリシナレモ今散失セシノミナラス目次ノ徵スヘキナシ

舊岸和田藩

學制

學事上ノ諸制度

授業ノ順序ハ素讀科ヲ終リ而シテ講義ヲ修ム 授業時間ハ毎日朝素讀引續キ質義ヲナサシム

〔明治四年改正〕 普通科 初等 綴字(ウエブストルスメルリング) 習字 數學(加減乗除)○第八等 文典素讀(英

クエツケンボス小) 數學(分數比例)○第七等 點付文典會讀(英クエツケンボス大) 地理書素讀(英ゴールドスミツ

ト) 萬國史(バルリーチュリー小) 翻譯(和文ヲ英文ニ翻譯ス) 數學(開平開立)○第六等 點付究理書會讀(英クエ

ツケンボス) 作文 代數○第五等 萬國史輪講(英ワイト) 幾何學

專門科^{第四等第二等} 法科 民法、商法、詞訟法、刑法、治罪法、萬國法、利用厚生學、國勢學、法科理論○理科 究理學、植物

學、動物學、理學、地質學、器械學、生學、三角學、圓錐學、測量、微分、積分○醫科 專管ノ學校ニ就テ學フヘシ○文科 華

文學、論辨學、各國史、人物傳、性理學、羅旬語

〔乙號〕 當校ノ主意タル生徒ノ教育開成ヲ專ラニシテ彼ノ遺漏ヲ補ヒ是ノ偏寄ヲ正スヲ固リ論ヲ待タス然レハ人性ト

シテ怠惰ニ耽ルヲ易ク不缺勉勤スルヲ難シ故ニ有志ノ輩確守勉勵以テ大成ヲ期セン爲メ左ノ條則ヲ掲ク

第一條 入學之生徒日課業規等都テ教場ノ諸規則ヲ守リ教官ノ指揮ニ從フヘキ事

第二條 諸生徒年齡ニ關セス貫徹セント欲有志ノ輩入學差許候事

第三條 諸生徒互ニ怠ラサルヲ要ス故ニ本牘ヲ以テ日々ノ勤惰ヲ取調候事

第四條 語學 聲音ヲ專ラニス 講讀 訓讀解音ヲ主トス

數學ハ一モ缺サルヲ當校ノ目的トス然レハ數學ハ加減乘除分數比例ヲ修シ候者ハ事實ニ因リ欠課差免許候事但數

學一課ヲ修學シ他ノ二課ヲ缺ンコト願フ者ハ入學ヲ許サス是學制ヲ案サンコトヲ恐テナリ

第五條 修業時限ハ午前四ツ時ヨリ九ツ時ニ至ル午後ハ八ツ時ヨリ七ツ時ニ至ル生徒各定刻ニ其教場ヘ就クヘシ若

シ後ル、者ハ當日修學ヲ省クヘキ事

第六條 諸生徒四季ノ孟月ハ試業ヲ爲シ優劣ヲ判シ等級ヲ立ツヘキ事但當日無斷欠席ノ者ハ除名ノ事

第七條 日課書籍ハ私辨ハ勿論トスレハ時宜ニ因リ官籍貸渡スヘキ事

第八條 諸生徒疾病事故アリテ欠課スルハ其趣書付ヲ以テ可指出事若シ無斷欠席一周ヲ過ル者ハ除名ス但官務有

之銘々ハ入學ノ節兼テ書付ヲ以テ可斷置事

第九條 普通科ヲ學フ間ハ專ラ書籍ノ順序ヲ保ツヘシ妄ニ私見ヲ立ツヘカラズ普通科ヲ經タル者ハ定見ヲ立テ所長

ヲ撰ミ專門學科ヲ專攻スヘキ事

午二月

督學

士族卒子弟教育方法 士族卒ノ子弟藩立學校へ入學スルト否ヲサルハ從來各自ノ意向ニ任セタルモ明治三年二月知事ノ達ニヨリ必ス入學スルノ制ヲ立テリ又時アリテ藩費及ヒ私費ヲ以テ他國へ遊學セシヲアリ(明治元年ノ頃藩費ヲ以テ五六名東京ニ留學セシヲアリ)且毎月二ノ日七ノ日ニハ講習館ニ於テ經書ノ講義アリ藩士ハ生徒ト共ニ之ヲ聽聞スルヲ例トス

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ家塾寺子屋ニ就テ修學ス其藩立學校ハ入學ヲ請フモノハ之ヲ許可セリ家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ノ開設ハ士民共自由ニ之ヲ設ケ奉行郡宰里正等ニ於テ檢束セシヲナシ

學校

校名 嘉永五年文學校ヲ創立シテ講習館ト稱ス又慶應三年武術ヲ修スル所ヲ設立シテ修武館ト稱ス明治三年ニ至リ講習館ヲ分チ舊城内勘定所跡ニ分設ス之ヲ文學館ト稱ス

校舍所在地 講習館修武館和泉國南郡岸和田上砂町ニ設置ス文學館全國全郡岸和田城内舊勘定所跡ニ設置ス

沿革要略 嘉永五壬子岡部美濃守長慎^{當時隱居シテ南山ト號ス}教官ニ宅源之丞相馬逸老外ニ句讀師數名アリ漢學素讀科四書五經

等講習科修身歴史等ヲ教授ス生徒定員ナシ元治元年春秋兩度ノ試験ヲ始ム慶應三年ニ至リ大ニ學制ヲ改革シ文武ヲ合

シテ一ト爲シ講習館ノ南方ニ脩武館ヲ増設シ講習館ニ於テハ學事ヲ修シ修武館ニ於テハ武事ヲ練修ス日夜弦誦ノ聲ト

槍劍ノ聲ト相和シ頗ル盛大ノ景況アリ明治三年ニ至リ生徒ノ數増加セシニ因リ更ニ城内舊勘定所ヲ以テ文學部分設之

レテ文學館ト爲シ同年ニ於テ生徒ヲ教育ス是ニ於テ洋學科ヲ置キ專門教員ヲ聘シ別紙乙號ノ則ヲ設ケ施行ス全四年ノ

春ニ至リ東京中學ノ規則ニ倣ヒ大ニ學規ヲ更革スル所アラント欲ス時ニ廢藩ノ令アルニ際シ其施設ヲ遂クル能ハス荏

苒八年四月ニ至リ堺縣立師範學校分校ト爲シ專ラ堺師範校ノ教則ヲ施行ス全九年十月ニ至リ貸費生三十名ヲ置ク自費

生ハ定員ナシ全十一年十二月ニ至リ分校ヲ閉鎖ス全十三年ニ至リ修テ講習館ヲ岸和田郡廳トシ修武館ヲ岸和田公立小

學校トス文學館ハ遂ニ廢セリ

教則

素讀科 大學、中庸、論語、孟子、易經、詩經、書經、禮記、春秋、文選○講習科 大學、中庸、論語、孟子、易經、詩經、書經、禮記、春秋、史記 此他和漢歴史ハ各自ノ望ニヨリ教授ス

一休業一六

右條々可確守事

入退學ニハ同禮ヲナサス賞品ヲ受クレハ督學ヲ始トシ教員及ヒ關係者ノ自宅へ禮服若クハ羽織袴ニテ回禮スルヲ例トス

職員及俸祿 維新前ノ事ハ今之レヲ詳ニフル能ハス學制頒布前左ノ如シ 督學、監事、主簿、史生、教授、助教、小助教、得業生、句讀師等ヲ置ク

俸祿座席表

(東京倍之官祿他官倣之)

種	別	政	廳	軍
六十石	正六位	大參事		
五拾五石	從六位	權大參事		
四拾石	正七位	少參事	民政事務	少參事
三拾石	從七位	大屬	會計掛	步隊長
二拾三石	正八位	權大屬	全上	小隊長
拾五石	從八位	少屬	全上	傳令使
拾石	正九位	權少屬	全上	從事官
七石	從九位	史生	應掌	史生

第十條 諸生徒勝袴等都テ行儀ヲ紊シ出席スルヲ禁スヘキ事

第十一條 怠惰過失有之者退學セシムル事

第十二條 諸生徒疾病事故ニテ除名ノ者ハ願ニ因リ再ヒ入學ヲ許ス怠惰過失ノ者ハ許サス

第十三條 疥癬其他傳染病ニ罹ル者疾愈ルマテ來學ヲ憚ルヘキ事

第十四條 毎日午前素讀午後數學ノ事

第十五條 成課中他出或ハ雜談等ヲ禁ス若シ犯ス者ハ當日修業相省キ候事

學科學規試驗法及諸則 嘉永五年ヨリ明治三年ニ至ル素讀科講習科ト分チ和漢歷史等ヲ授ク全三年已後ニ至リテハ洋學科ヲ加ヘ普通科ニハ習字作文數學英學專門科ニハ法理科文科ヲ置キ兵學ト文學トノ兩道兼修スルト否ヲサルハ其望ニ任ス又文學ト武術トノ程度比例及生徒學習ノ期限ヲナサス春秋兩度文學素讀科ヲ試ムルノ外試驗方法ナシ然レモ優等ノモノヘハ賞品トシテ筆墨或ハ詩箋又上等ノ者ヘハ近思錄十八史略等ノ書籍ヲモ賞セシマアリ

學則

一 凡ソ讀書ノ要人道ノ大義ヲ明ニスルハ勿論四民共今日ノ實功ニ相立チ以テ要トス徒ニ字句ノ間ニ拘泥シ孜孜々々精力ヲ無用ノ地ニ費シ文人腐儒トナルトモ何ノ補アラム故ニ讀書務テ大義ニ通シ然後中學大學ニ入各其才ノ長スル所ニ隨テ其才ヲ成就スル所以ヲ思フヘシ

一 諸教員出仕ノ節每朝長官ヘ可及挨拶事退出亦同様ノ事

一 各寮中恭敬辭讓ヲ主トシ高聲爭論等ヘ堅ク禁止ノ事

一 生徒ハ尊卑ヲ論セス各學業ノ等級ヲ以テ序トス其同等ハ長幼ヲ以テ順列可致事

一 生徒登館セハ先教官ヘ一禮シ各其定寮ニ入り起業ノ期ヲ待ツヘシ退出ノ節登館ノ順序ヲ照シ徐ニ退クヘシ

一 生徒日々第八字ニ入り第四字迄門外遊歩ヲ許サス

一 各寮共主掃ヲ置キ毎日交番ニテ事ヲ取ラシメ寮中清潔ニスヘキ事

一 講釋ノ節合圖ノ鐘ニテ即刻講堂ニ相聚可申事

一 罰ハ靜坐禁足其罪ノ次第ニ因リ決行スヘシ

一 生徒毎月二日試驗ノ事

一 大試驗三月九月

一何れも出精之段満足に存す猶此上出精可致事

藩主在江戸之節重臣代理試験之節口達

一何れも出精之趣早使を以江戸表に可申上候猶此上出精可有之様致し度及御口達候

獎勵法 士族卒ノ中學業上進ノ者へハ十分ナレハ麻上下一具或ハ祿米給金等ヲ増シ格式ヲ昇等ス卒族ノモノハ十分ニ

編入セシヲアリ然レモ一定ノ法ナシ

士族卒ノ子弟教育法 士族卒ノ子弟ハ必ス藩立學校へ入學セシム志願又ハ詮議ノ上藩費或ハ私費ヲ以他國遊學ヲ許可セシヲアリ又毎月三八ノ日ニハ教授者講義ヲナシ士卒ノモノ聽講スルヲ例トス且五十ノ夜ハ質義科ノ生徒ニシテ學力同等ノ者ヲ組成輪講或ハ會讀ヲ開筵ス

平民子弟ノ教育方法 平民ノ子弟ハ家塾寺子屋ニ就テ修業スルノ外藩立校へ入學許可セシヲアリ但シ入學ノ節ハ教員及家老用人へ届出ルヲ例トス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ何人タリトモ自由ニ任シ檢束セシコトナシ

學校

校名 伯太假學校ト稱ス但シ新築ノ設ナシ依テ藩邸書院ヲ以テ假學校トス

校舎所在地 和泉國泉郡伯太藩邸内ニアリ

沿革要略 天保中渡邊半藏守綱十二代目中興元祖藩主渡邊潔綱ノ代大阪住人奥野彌太郎江戸住人司馬騰太郎和泉國泉郡住人南溫齋等ヲ聘シ家臣ト俱ニ修學ス又兵學鎗劔弓砲馬柔術等修學ノタメ家臣ヲ他藩へ遊學セシム嫡子渡邊章綱ノ代嘉永年度ニ至リ益文武ヲ獎勵シ別シテ武學盛ナリ明治元年大坂鐘町住學士熊谷嚴毅ヲ召拘教授ニ任ス此ノ時ニ在テ學規稍備ル

教則

素讀科 孝經、小學、大學、中庸、論語、孟子、易經、詩經、春秋、禮記

質問科 蒙求、元明史略、國史略、皇朝史略、十八史略、日本外史、日本政記、貞觀政要、靖獻遺言、文章軌範、春秋左氏傳、史記、通鑑綱目、資治通鑑

授業ノ方法及時間 生徒ノ授業ハ各人別ニ素讀ヲ授ケ又質問ヲ聞ク 毎日朝五ツ時ヨリ九ツ時マテ武術 毎日八ツ

務		學		校	
兼總括		少參事	兼督學		
		監事	教授		
砲 分隊長		助教	上等醫		
砲下司長 火工長		少助教	主簿		
諸役官		史生	下等醫	得業生	

職員概數(維新前ハ不詳學制頒布前ヲ記ス) 督學一名○監事一名○教員二十名○主簿二名○史生二名○賄方六名○小使

六名

生徒概數(全上) 寄宿生無定員ニシテ凡三拾人藩費 通學生凡三百人

束脩謝義(全上) 束脩謝義一切收メス

學校經費(全上) 一周年ノ校費ハ學事ノ張弛ニヨリ學費ニ増減アリト雖米五百石ト定ム且職員給米ハ藩廳會計局ヨリ

支辨スルヲ以テ此算外トス

藩主臨校 藩主及嗣子諸子時トジテ學校ニ臨ミ講義聽聞ノ事アリシモ生徒試業等ヲナセシヲナシ

祭儀 維新前ニ在テハ聖像ヲ祭リ之ヲ拜禮スルノミナリシカ學制頒布前ニ至リ祭典當日上座ニ聖像ヲ祭リ教師ハ四書近

思錄名臣言行錄等ヲ講義シ執政官ノ内數名諸役員其他學事ノ職員等出席シ一同俱ニ之ヲ聽聞セリ

學校藏書 和漢書凡四百部翻譯書凡五百部洋書凡四拾部

學校ニテ出版翻刻セシ書籍別ニ無之然レモ藩主美濃守長愼ノ著述岡部氏家訓壹本出版シ今ニ保存ス今時代本草啓蒙五拾

本是又同様編輯シ今猶岡部家ニ版本ヲ藏ス

舊伯太藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達 毎年正月開校又ハ試驗ノ節藩主臨校ノ上口達

維新前 家老用人ノ内ニテ支配シ定員ナク又本祿ノ外役俸ナシ○家老 持高百五十石○用人 持高百石

學制頒布前 正權大屬ノ内壹人 本祿十六石役祿十六石七斗五升(但部屋住ニテ奉職スルハ役祿ノミヲ給ス下全シ)

○正權少屬壹人 本祿十六石役祿八石貳斗五升○使部壹人 本祿十石役祿三石五斗○小使壹人 年給三石壹人半扶持

○文學教授方壹人 本祿十六石役祿七石○全助教貳人 本祿十六石役祿五石宛○句讀司四人 本祿十六石、卒十石

役祿二石五斗宛○武學教授方五人 本祿十六石役祿三石宛

職員概數 維新前ノ分ハ今之レヲ詳ニスル能ハス學制頒布前左ノ如シ 教員十二人 事務員三人 小使壹人

生徒概數 維新前 文學生凡百人 武學生凡百九十人 但シ維新前武學修業トシテ他藩ヨリ師範家へ寄留セシモノ四人

アリ又他支配ノ平民ニシテ通學セシモノ凡十五人但寄留生ノ費額ニ一定ナシ然レモ二人扶持ヲ收ム又五節句金百疋宛

師範家へ納メタリ

東脩謝義 東脩謝義無之但シ維新前ハ士分年始中元五節句銀壹兩宛卒族ハ銀三匁或ハ二匁宛師家へ謝儀セシコトアリト

雖モ一定シカダシ

學校經費 一周年ノ學費凡八拾石藩庫ヨリ支出セシコトアリト 雖モ學事ノ張弛ニ因リ別ニ増減セシヲナシ又賞典用トシ

テ米貳拾石ヲ備ヘタリ

藩主臨校 毎月講義定日及ヒ臨時生徒試驗ノ際ニハ臨校スルヲ例トス時トシテ重臣代理セシムルヲアリ又毎月三回藩主

ハ重臣以下士分以上ノ者ヲ集メ教授方ヲシテ經書ヲ講義セシムルヲ例トス

祭儀 執行セス

學校構造及建物圖面 伯太假學校略圖別紙ノ通

學校ニテ出版翻刻セシ書籍ナシ 學校藏書ハ凡和書拾部漢籍四拾部兵書二拾部

舊尼ヶ崎藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達

明治元年九月

家老共へ

時ヨリ日暮マテ文學

學科學規試驗法及諸則

漢學兵學筆道鎗劒砲弓馬柔術ノ學科ニシテ士卒ヲ論セス必ス文武兩道ヲ兼修セシム然レモ詮議ノ上一科專修ヲ許ス
モ之レアリ又生徒學習ノ期限定則ナシト雖モ習字ノ如キハ凡ソ六歲ヨリ十五歲マテトス

試驗法ハ定メナシ一ケ年凡三兩度藩主臨校臨時ニ素讀或ハ講義ヲ試ム時トシテハ重臣ノ者ヲシテ代理ナサシメ試驗優
等者ヘハ書籍代トシテ金百疋或ハ銀壹兩ヲ賞與セシマアリ

生徒入學ノ節ハ必ス禮服着用師家ヘ回禮スルヲ例トス新年中元五節句等モ亦同シ

校規
學問之道非惟治章句講文義要在修身朋友相規亦修成之一助宜忠告切磋
禁議
朝政之得失
禁評時儒是非及劇談猥
語

槍術場揭示(種田流)

定

學校正

一於相弟子中表仕合口突身非を容假にも猥に不仕離合并突身打鎗等之節者而小手掛過無之樣可仕事
一常々禮義を正し武門之本意を失はす君臣之道を辨へ不義之沙汰に不及并に仕合等之節強く勝負を雪全く口論仕間
敷事

一建當流詆他流申間敷事

劒術場揭示

掟

一忠孝の道を明にして専ら修行可致事

一他流の是非を評す間敷事

一高聲雜言堅く禁止の事

右之條々可相守もの也

職名及俸祿

二等士族ヨリ四等士族迄十五人 下士族八人

舊來藩制諸士以上ノ嫡子ハ年齡十七歳諸士以下ノ嫡子十五歳ニ至レハ召出スノ例ナリシガ文武藝勲ノ爲メ縱令適齡
ダリトモ學術上進武道免狀ヲ有セザレハ召出サルヲ制ヲ布ケリ又次男三男タリトモ文武二道ニ達スル者ハ特別召
出ス等ノ制ヲ設ケリ 諸士以上三人口諸士以下二人口

士族卒ノ子弟教育方法 從前藩立學校設立ナキハ各自意向ニ任セ家塾等ニ入學セシム明治三年藩立學校正業館設立後
ハ必ス此ニ入學セシメタリ 維新前後ノ頃ハ學生中卓越ノ者ヲ撰ヒ藩費ヲ以テ和洋學研究ノ爲メ他國ニ執行セシム其
定員二十三名又私費ヲ以テ遊學スルモノ八九名ニ及フ

正業館設立前ハ毎月朔望ヲ期シ講説日トナシ城內大書院ニ於テ儒士ヲ召シ經義ヲ講セシメ藩主之レニ臨ミ諸士以上ヲ
シテ必列席聽講セシメ該館設立後モ尙舊學及ヒ助教何員生ヲシテ經書及ヒ諸史ヲ講セシメ同シク諸士ヲシテ聽講セシ
メ又史ニ學館ニ於テ毎月二七日ヲ以テ物頭以上ノ應講日ト定ム且毎月三八日ヲ以テ詩文會トシ五十ノ日ヲ以テ會
讀トシ家老及ヒ近習ヲ選擧ニ召シ輪講セシメタリ

平民子弟教育方法 平民ノ子弟ハ家塾又ハ寺子屋ニテ修學スルヲ常トス然レモ學館ニ入ルヲ許シタリ
家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ノ設立ハ士民ノ自由ニ任セ毎年未其費授ノ優劣ヲ察シ優ナルモノニハ賞與スルノ例
ナリ然レ學館設立後ハ士族ニ限リ家塾等ヲ開設スルヲ許サズ
右ノ外藩學事上ノ事項ニシテ編史ノ資料及ヒ參考ニ供スヘキモノハ別記實狀并ハ人名ナリ

學校

校名 正業館ト稱シ終始不變

校舎所在地 藩邸内馬場町終始不變無之

沿革要略 明治三年正月藩校ヲ設立シ藩中諸生ヲ學ケ教誨ナシ藩内ノ子弟ヲ督責シテ入學セシメ同年尤隆盛ヲ極メ
タリ是レヨリ前ニ藩主忠懿御學ヲ導導シ中谷美漢ヲ河内ニ聘シテ儒臣トナシ藩内子弟ヲ教育セシメ且ツ自ラ陪廬講及
喫茶問答等ヲ書シテ臣下ニ授賜ス又典屬ノ員大島圭介諸學ニ通スルヲ以テ拔擢シテ藩士トナシ尋テ忠典ノ代ニ至リ數
數在阪ノ儒生藤澤東龍ヲ召シ儒臣ト武ニ學學ノコトヲ計畫シ又應應三年頃浪華ノ醫師緒方孝庵メ三男洋學者奥川一郎
ヲ聘シ藩士トナシ尋テ又具二男佐伯周次郎ヲ聘シテ洋學師トナシ遂ニ正業館ヲ設立スルニ至ル

近來不容易御時勢ノ儀ハ庶人所知ニ付テハ家中ノ面々諸藝出精致シ來候得共猶一際一藩士風相立御藩屏ノ任ニ可立至候様兼テ存意候間專ラ文武ヲ主張シ人才登庸致度就テハ第一文武場至急取立方色々心配致シ候得共何分入費相續無據暫時其場ニ難及殘念ノ事ニ候併シ成就ノ上ハ規則可相立候得共先十歳以上ニモ相成候得ハ是非入學及手跡ヲ始トシテ文武ニ厚志候様養育可致勿論ノ儀幼年ノ折柄不幸ニシテ父ヲ失ヒ候者ハ近親朋友ヨリ精々世話致シ遣シ吳度候尤何藝ニヨラス家中末々ノ者迄熟練特ニ志宜シキ者拔擢致シ候間文武等シク精勵致シ上下學テ同心協力候様志願候間此段申開候

明治二年八月

藩中へ

凡士族嫡子忝共從來御定ノ通十七歳ニ至候得ハ被召出候儀ハ勿論ノ事ニ候得共當人ノ行狀或ハ藝道ニテ遲速被爲付候儀可有之候間兼テ可被相心得候事

從來嫡子ノ面々十七歳ニ至リ被召出來候得共今般御政政ノ折柄以來廿歳ニ相成候ヘハ身分藝道御取調ノ上可被召出事尤拔群文武執心ノ者ハ向後年數ニ不拘御處置可被爲付候間此段兼テ可被相心得候事

明治三年正月

藩中へ

兼テ文武場御取立相成候ハ被爲法朝憲人才御教育ノ基礎被爲起御藩政御更張被遊度被思召候處既ニ今般正業館先御出來ニ付去十六日開業被成候間孰モ厚御趣意ノ程奉體シ一際奮發研究致シ成業功績ヲ遂ケ候様精々心懸有之度被命候事

明治三年正月

家中へ

殿様ニモ段々厚御憐察被成下候通從來ノ難澁ニテ困窮差迫リ候族ハ深ク御察シ被遊尙又無益出費相省キ被命置候通漸々覺悟ヲ以出席可致事且又學校御開ニ付テハ尙又衆議ヲ以テ學則御成立被成度心付ノ義ハ無忌憚可申出事文武場出席ハ十歳未滿ナリトモ望ニ任セ入學可爲致尤十歳ニ相成候ハ、必ス文武入學爲致年齢相應ノ藝術課業研究可致其内十五歳迄ハ讀書手習等專務可爲事

今般文武場御取立相成候ハ人才御養育被成度厚御趣意ニ候得ハ藩内ノ面々於同場勉勵成業可致ハ勿論ニ候乍去執行トシテ他國へ罷出候者有之其厚志ハ上ニモ御満足ニ被思召候ヘ其中ニハ未ダ一向初心ニテ四書五經ノ素讀モ出來兼武術ニ目錄モ未受族モ有之候由左候ハ、却テ御藩屏ニモ相成候間四書五經ノ素讀モ粗々出來武術ノ目錄モ被免候上ハ左ノ定員ノ通被御聞届候間無油斷研究可有之候事

職員概數 教員三十六名 事務員七名 門衛貳名
生徒概數 寄宿生四拾名餘 通學生五百八十名餘 但シ薪炭油費總テ薄費ヲ以テ支給シ其他ハ自費トス
束竹謝儀 無之

學校經費 一周年職員給料米百五拾石金八拾兩同諸費凡貳百四拾兩
諸王貳拾兩 諸主教々學校ヨリテ賜贈シ又臨時文書生徒ノ學術進否ヲ試験シ優等ナル者ニ賞品ヲ授與シ又ハ秩祿ヲ增加スル
等ノ儀アリ

修繕 聖廟ノ設備アリテ毎年經費ヲ施行ス其式今計カサス今哲學ノ釋義書存スルアルノミ
學校構造及座敷圖面 地坪九百五拾壹坪 建物貳百貳拾貳坪半 但シ木造瓦葺別紙圖面ヲ添フ
圖書 種數諸般ハ別記ノ如シ

恒高權簿

學費

學費上ノ諸制度 諸主ノ布令諸經ハ應需日久シキヲ以テ不詳然レモ學費上進ノ者ハ撰拔シテ藩政ニ應ニ或ハ諸般ヲ增加

二三男ノ者ハ國籍ヲ與ヘ學費ハ該州セリアリ但レ二三男ノ條條ハ大略一人扶持ヨリ二人扶持トス

士族等ノ子弟教育方法 士族等ノ子弟ハ必ス藩立學校ヘ入學修業セシム然レモ各自ノ意向ニ任セ他ニ自學スルモ亦別ニ

制禁モス學費上進ノ子弟ヲ撰拔シ諸費ヲ以テ他國ヘ遊學セシムルヲアリ又私費ヲ以テ他邦遊學ヲ欲スルモノハ之ヲ許

可ス其修學年限ハ大略三ヶ年トス然レモ當世學ヲ誦讀スルモノハ之ヲ許可ス但シ諸費ハ三人扶持等ノ書物料銀五枚

或ハ七枚ヲ支給ス

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ家業ヲ子息ニテ修學スルハ其意向ニ任セ之ヲ許ス然レモ藩立學校ヘ入學スルヲ許サ

ズ藩立明治二年ノ布令ニ至リ初メ平民子弟ノ書入學スルヲ許可スル旨發令セリ

學費上子息教育ノ制度 家業守子息ニ附設スルニ藩士平民共自由ニ任セ奉行郡等里正等ノ許可ヲ得ルヲサ

學校

附屬 常設ニシテ



規則

教科用書 四書、五經、文選、策論、十八史略、前漢書、史記、本國、國史、文庫、武庫、西國、八大家、家語、韓非子、荀子、莊子、戰國策、國史略、皇朝史略、日本外史、日本政記

授業ノ方法時間 素讀 毎日明ケ六ツ半時ヨリ助教句讀生徒出席ノ順序ニヨリ每人之ヲ授ケ○素讀 素讀終ツテ修學經義ヲ講ス○輪講 生徒中上級ノモノ某書ヲ輪講ニ當ル之ヲ命ズ○質問 哲學及ヒ助教七級生徒質問ヲ受ケ正午九ツ時ニ至ル○復讀 九ツ半時ヨリ助教句讀生徒出席ノ順序ニヨリ每人復讀○點讀 助教句讀トナリ天

學生ノ輪講ヲ聽ク○詩文會 毎月二七日ヲ以テ詩文會ナリ

授業順序 四書五經文選ヲ素讀セシム其四書五經ヲ終ルモノハ漢書十八史略日本外史ヨリ輪講セシム續大經書ニ入ルニ例トシ別ニ階級ヲ設ケス

學科學期試驗法及諸則

學科 洋學 算術 筆道 兵學 弓 馬 劍 砲術 柔術

生徒ニハ必ス文武兩道兼修セシム文武輕重ノ比例ハ凡三ト七トノ如シ又特ニ一科專修ヲ許可セシ者アリ且生徒學修期限一定ノ法ナシ

別ニ試驗法ヲ設ケスト雖モ春秋二期文武掛リ員學期ニ當リ生徒已ニ學修セシ文武科目ニ付隨其考テ試ニ當主ニ京師ニ在ナル者ニハ賞品ヲ授與シ又ハ秩祿ヲ増加スル等ノ例アリ其他生徒諸條規則等アリ

レハ略ス

入學許可ヲ得シモノハ禮服着用師範家ヘ同禮スルノ例ナリ

姓名及ヒ俸祿

總新使 文武掛 少參事壹名役料拾八石○大屬壹名役料拾三名○權大屬貳名役料壹人ニ付九石五斗○將學 權大屬壹名役料九石五斗○助役 權少屬三名役料壹人ニ付四石五斗全壹名役料三石○句讀生拾壹名壹名ニ付役料三石五斗○

句讀生心得八名壹名ニ付役料每半年手當金各壹兩○筆道教師五名內壹名役料一石七斗每年筆墨料金五兩 壹名役料壹石五斗每年筆墨料金貳兩貳分 貳名役料壹人ニ付六斗筆墨料金貳兩貳分 壹名役料三斗○和漢算學教師三名內壹名役料三石五斗 貳名役料壹人ニ付壹石七斗○洋學教師四名內壹名每月給五拾兩 三名役料壹人ニ付三石五斗○書

記三名壹名ニ付役料貳石五斗○門衛貳名壹名ニ付役料壹石八斗○佐丁三名壹名ニ付手宛米一人口又三兩

生徒概數 學生凡四百人内寄宿生五十人但シ寄宿生ハ自費ヲ以テス然レモ薪炭油ハ藩費ヲ以テ之ヲ支給ス

内塾生(學方左傳論語中庸論語已上ノモノ)一ヶ月廿五日以上欠席ナキモノ金二百疋全十五日以上ハ金百疋ヲ與フ
外塾生(學方孟子十八史略論語已上ノモノ)一ヶ月廿五日以上欠席ナキモノ金百疋全十五日以上ハ金貳朱ヲ與フ

束脩謝儀 一切収メス

學校經費 一周年ノ定額米五百石金三千圓トス總テ藩費ヲ以テ之ニ充ツ學費ヲ藩士ニ課賦スルヲナシ又學事ノ張弛ニヨ

リ學費ノ増減アリト雖モ今不詳

藩主臨校 每年春秋試驗ハ藩主ノ館内書院ニ於テ學生ノ業ヲ試ム其時臨席スルヲ例トス

祭儀 維新前ハ釋奠釋菜ヲ執行セリ以後欠典ノ久シキヲ以テ今之ヲ記載スルヲ得ス

學校構造及建物圖面(別紙ニ添フ) 敷地坪數三百八十坪 建物坪數百十八坪

學校ニテ翻刻セシ書籍 翻刻セシ書籍一切無之

學校藏書 藩主ノ御用ナ之ヲ地方廳ヘ差出シ書目部藏ノ如キハ詳録スル克ハス古老ノ記憶セシモノニシテ漸ク其概略ヲ

記スル而已和書七部漢書廿五部

舊三田藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令彙纂 布令彙纂等ハ現存ノ書類并現士族中ノ記憶ニ存ニルモノ更ニ無之不判然ニ有之僅ニ藩立學校ヘ揭示
ノ定寫有之ニ過キス

校

一 教諭助教齋長其定額ノ期限相守進刻懈怠無之様出席可致事

一 生徒出席ノ期限相守進退動作規矩準繩ニ附クヘキ事

附屬生徒諸師應明受業著席ノ節ニ立會齊集ヘ各一拜ヲ納レ漸次列席致スヘシ肄業終テ後モ同混雜無之様證ニ

退出可致事

一 愈講亭ヲ純信シ伊洛ニ沿ヒ深淵ノ源ニ達スヘキ事

校舍所在地 攝津國島上郡高槻村ニ設置ス

沿革要略 享保年間藩主九代永井直進ノ時ニ當リテ大ニ漢學ヲ好ミ併セテ藩士ヲシテ一層學事ヲ獎勵スル爲メ京師ヨリ儒者伊藤介亭ヲ聘シテ一般ニ漢學ヲ教授セシメ毎月六回館中ニ於テ經書ヲ講義ナサシメ藩士ニ聽講セシム其後寛政年間十代永井直興ノ時ニ當リ京師ノ漢儒三崎士禮ヲ聘シ舊城內三ノ丸ノ別館ヲ以テ假學館トナシ之ヲ菁莪堂ト稱ス專ラ經學ヲ主トス因テ一般ノ學風大ニ振起セリ後天保年度越田鵬齋ノ門人並本晴宇ヲ聘シ更ニ學校ヲ新築シ藩ノ子弟ヲシテ漢學及ヒ筆道諸禮式等ヲ習ハシム明治元年文武両館ヲ設置ス同四年七月廢藩ニ付地方廳ニ差出ス

教則 漢學、經學、歷史、詩文章ノ四課トス

階級 一級素讀 二級素讀質問 三級聽講質問詩 四級聽講質問論講文章 五級聽講質問論講詩文章

素讀科 孝經、小學、大學、中庸、論語、孟子、春秋、易經、書經、詩經、禮記

解義科 左傳、史記、資治通鑑、易知錄、十八史略、政記、日本外史、國史略、蒙求、國語、孔子家語、戰國策、文章軌範、唐宋

八大家文、唐詩選、三體詩 授業時間ハ朝八時ヨリ十二時迄トス

學科學規試驗法及諸則

漢學筆道習禮兵學弓馬槍劍砲柔術ニシテ漢學筆道習禮ハ文館ニ於テ之ヲ教授セリ他ノ武藝ハ各師範家ニ就テ修業ス且文武両道ヲ兼修セシト雖モ程度比例ノ如キモノナシ

學習ノ期限ハ八歳ヨリ十八歳マテトス

試驗ハ春秋二回トス優等ノ學生賞與ハ其得點ニ因テ差アリ賞與品ハ上下一具目錄書籍紙筆墨等ナリ

職名及俸祿

學制頒布前(維新前ハ不詳)文館總督一名 身分一等用人席俸祿玄米四拾石○學監二名 全上三等物頭席全上三拾石○佐監二名 全上四等大目付席全上十二石○書記二名 全上六等給人次席全上八石○教授二名○副教授二名 全上五等全上九石○助教二名 全上五等ヨリ七等ニ至ル全上八石ヨリ四石ニ至ル○授讀三名 全上○副授讀十五名 全上○小使三名 身分俸祿不詳○門衛二名 全上

當時ノ役祿ハ家祿高ト比較シ家祿ノ役祿ニ足ラサル分ハ之ヲ補給シ相當者クハ以上ノ分ハ之ヲ給セス

職員概數 總督一人 學監二人 佐監二人 書記二人 教授二人 副教授二人 助教二人 授讀三人 副授讀十五人 小使三人 門衛二人

右之外資料參考ニ供スヘキモノ無シ

學校

校名 造士館 但シ元祿七年學問所ヲ設置シ國光館ト稱シ其後文政元年ニ至リ屋敷町ノ藩有地ニ遷シ更ニ藩立學校ヲ建
築シ造士館ト改ム

校舎所在地 三田屋敷町百五十一番地宇屋敷町 但シ前記ノ如ク學問所ト稱セシ頃ハ諸郡内儒官邸ノ傍ニ建築シ其後屋
敷町ニ移ス今三田屋敷町ト改稱セリ明治四年廢藩上地土邸トナリ明治七年官ヨリ拂下ケトナリ現今同町士族澤整應吉
ノ持地トナレリ

沿革要略 元祿七年藩主九鬼副隆林大學頭門弟白洲義太夫良幹(江戸八町堀ノ住人)ナル者ヲ召抱ヘ之ヲ一藩ノ儒官トナ
シ學問所ヲ創立ス白洲氏世々儒官タリ其後文政度ニ至リ九鬼隆國益情學ヲ尊崇シ造士館ヲ建築シ藩人近藤願一郎其他
諸邦ノ儒者ヲ招待シ儒道ヲシテ愈盛隆ナラシメンヲ期ス慶應年代九鬼隆義傍ラ洋書ヲ加ヘ大ニ擴張セシメントセシ
モ幾程モ無ク廢藩ニ際シ其ニ廢校トナレリ學派ハ終始朱子ヲ宗トス

教則

初等又小學 素讀、習字、習禮○中等 素讀、習字○中等本科 質義○上等 質義、精書

教科用書○初等 小學内外、四書、近思錄○中等 五經、文選○中等本科 正語考、國史略、靖獻遺言、蒙求、十八史略○

上等 左氏傳、易知錄、通鑑、史記、漢書

授業ノ方法順序 初等ハ入學ノ後先ツ小學内篇ノ素讀ヲ授ケ次ニ大學論語孟子中庸小學外篇近思錄ニ至リ迄ヲ授ケ傍
ヲ習字并々禮ヲ科ス習字ハ片假名ヨリいろハ概シテ入學迄ニ他ニテ楷行草好ム所ニ依リテ詩文等ヲ授ケ一定ノ順序

ナシ習禮ハ小笠原流ノ進退坐作等ヲ授ケ右終テ中等ニスル中等ハ易書經詩經禮記文選ノ素讀ヲ授ケ習字ハ初等ニ全シ

ク順序ナシ中等本科ニ至リ論孟ノ大意ヲ質義セシメ相通スルノ後ハ順序ヲ定メス用書記載ノ書物中名生好ム所ヲ質義

セシム上等ハ用書中好ム所ノ書物ニ就キ多クハ左中次ニ易知錄通鑑生徒探聞順次ニ輪讀セシメ或ハ經史ノ會讀古詩等ヲ咏吟

セシム其他凡爾日各等科ノ生徒共ニ教諭ヲシテ經書ヲ講釋セシム 洋書ハ各等科生徒ノ好ムニ應ジ兼修セシム概シ

テスベキヨリ順序ヲ踏ムニアラスガヲ一冊以內ニテ好ム所ノ科書ニ就カン

授業時間 毎月朔望并五節句ヲ休業トシ其他毎日登校ハ朝五ツ時退校ハ正午時トス初中等ハ五ツ時ヨリ一時間素讀四

附中等以上既ニ解義ニ附キ候輩ハ講解實證等專ラ經典ヲ受用シ終身ノ本業相立且山崎門三先生並私淑ノ徒指導スル圖書筆記等ニ至ル迄應心熟讀玩味致スヘク其他歷代ノ正史編年及諸子百家ニ至ル迄力ヲ極メ涉獵スルハ勿論ニ候得其吏部ハ固ヨリ助業ニ候得其本則分テ飭勵也故違ヒテ生スヘカラス

月日

加役引米等ハ舊藩制ニ無之尤文武兩道ニ於テ格別上達ノ輩一戸主嫡子ハ勿論二三男其他厄介ノ者タリ他其才能ニ應シ之ヲ登用シ夫々職務申付隨テ之カ俸祿若クハ給米ヲ下賜シ其獎勵等ハ別ニ藩廳ニ條目有之シ趣ナルモ書類并記憶ニ存スル者無之不判然有之候

士族卒ノ子弟教育法 士族卒ノ子弟學齡(舊曆十歲)ニ至レハ必ス藩立學校ヘ入學セシメ各自ノ意向ニ任セ或ハ寺子屋等ニテ修學スル事ヲ許サス 儒學ノ嫡子年齡十五六歲ニ至レハ藩費ヲ以テ他邦ニ出テ師塾ニ入りテ修學セシム談修業ハ凡五ヶ年以內タリ又藩士ノ子弟等私費ヲ以テ他國ヘ遊學ヲ願ヒ出ツルモノアル者ハ之ヲ許可ス若シ本人勤務アル者ハ遊學中其給米ヲ止メ扶持米ヲミチ支給スル例一テ年期滿テ歸國スル者ハ其學ノ造詣ニ應シ參政以下ノ役席ニ登庸セラシム 學校中傍聽ノ席ヲ設ケ常ニ有志ノ藩中ヲ參觀セシメ又毎月八ノ日毎ニ開藩政廳ニ召集シ藩主自ラ臨テ儒士ニ經書ヲ講義セシム

平民子弟教育法 平民ノ子弟ハ藩立學校ヘ入ルヲ許サス平民子弟ヲ教育スルハ市學校アリ鄉學校アリ其所在ニ就テ修學セシム市學校ト稱スルハ即舊藩主所在地三田町ニアリ其他村落ニアルモノテ鄉學校ト稱ス計九校皆最寄平民即チ農家ノ子弟ヲ入學セシム其概制ハ下ノ如ク恰モ現時ノ公立ニ髣髴タリ尤モ右鄉市學校設立已前ハ凡テ家塾重モニ寺子屋ノミナリシ

〔鄉市學校概制〕

存廢ハ藩廳專ラ之ニ干渉シ敢テ人民ノ自恣ニ任スルヲナシ

教科用書ハ各地ノ適宜トシ或ハ算術ヲ

兼テ授ケシム 教員ハ藩士ノ中其任ニ堪ユルモノヲ撰ミ之ニ兼務セシム且ツ學校在勤中ト雖其職名ヲ帶ヒテ地方學校ニ勤務スルニ止マルヲ以別段俸祿ヲ與フル等ノヲナシ 經費ハ藩廳人民ヲ勸奨シテ寄附捐金セシメ舊庄屋等テ世話掛トシ舊社寺地又ハ新開地及伊勢講田(參宮ノ爲メ人民ノ醵金購入シタルモノ)等ノ全部又ハ幾部ノ作益米ヲ以テ雜費ニ充テ或ハ各戸ニ醵出セシム 建物ハ舊社寺ノ別當ヲ廢セシニ依リ此家屋ヲ以テ之ニ充テ或ハ適當ノ家ヲ借入ヒシメ或ハ醵金新築セシメシ等一樣ナラス 其他教則學規試驗ノ方法等全タカラス

家塾寺子屋設置ノ制度

往昔ヨリ設立廢止人民ノ自由ニ任セ更ニ干與セシヲナシ然レ共僧徒ヲシテ之ヲ爲スヲ許サス

トナク門衛ハ足輕ノ内ヨリ採用ス但舊藩格式ハ老家、諸士、無息(又徒士ト稱ス)足輕ノ四族トス

職員概數 教諭一人助教一人齋長八人世話掛四人督學一人門衛一人 以上維新前後同數ニテ變更ナシ

生徒概數 寄宿生ナシ一般通學生凡八十名前後内初等四十名中等二十名中等本科十名上等十名 右時ニ増減アルモ僅々

數名ニ過キス維新前後ノ區別アルヲナシ

束脩謝儀 學校ニハ束脩謝儀共ニ無之併シ武藝ハ師範家へ入門ノ禮ヲ執ルヲ以束脩トシテ扇子一箱(代價凡ソ銀五匁ヨ

リ十匁迄)ヲ納ル

學校經費 經費ハ別段學田等ノ制無之凡テ藩廳ヨリ之ヲ支辦シ藩士ニ課スル等ノヲアルナシ前記役料ノ外(役料ハ上ニ

述フル給額ニテ一般藩役ノ分ト混同支給セシヲ以テ詳細ヲ知ルニ由ナキモ粗一歲六十石以内ナリシナルヘシ)營繕需

用諸雜費(凡テ現品支給)合シテ一周年間凡三百圓ヨリ五百圓迄ナルヘシ但重モノ物價ノ高低ニ依リ別段學事ノ弛張ヨ

リ増減ヲ來セシヲ稀ナリ

藩主臨校 藩主在城ノ時ハ必毎年三回校ニ臨ミ藩士及教員并生徒ヲシテ四書五經ヲ前講セシメ中等以下ノ生徒ハ古詩勸

學ノ文類ヲ朗吟セシム其他佛參等ノ路次不時ニ臨校生徒ヲシテ前講若クハ素讀セシムルヲ間々少ナカラス

祭儀 校内聖廟アリ靈孔夫子及朱子畫像ヲ掲ク新正初三日ヲ以テ例年釋奠ス祭主ハ藩主自ラ之ヲ勤メ事故アルキハ教諭

之ヲ司トル

學校構造及ヒ建物圖面 學校地坪凡千五百坪建物凡九十七坪餘内聖廟、藩主臨校ノ間、教諭以下詰所、授業ノ間(六間)生

徒扣所、書籍庫、門長屋、校守部屋、物置 右圖面別ニ附ス

學校ニテ出版翻刻セシ書類無之 藏書ハ若干有之本廳へ引繼相成候趣ニ付御取調相成候ハ、判然候儀モ可有之候得共當

地人士ノ記憶ニ存スルモノ無之書目等更ニ不相分

右之外編史ノ資料又ハ參考ニ供スヘキモノ更ニ無之以上件々ト雖眞ニ彼是記憶セシ人ニ就キ聽聞集錄候儀ニテ書類ノ現

存スルモノナシ

舊麻田藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ヨリ諸布令諭達等ハ方今簿書ノ徵ス可キモノナク又學業非常ニ拔群ノ者ハ俸祿ヲ加フト雖氏一定

ツ時ヨリ一時間習字、本科以上等ハ五ツ時ヨリ九ツ時迄實義或ハ輪講、初等ハ毎月三回午午後ニ於テ一時間習禮洋書ハ右時間ノ内ニテ適宜ニ之ヲ授ケ一定ノ時間ナシ

學科學規試驗及ヒ諸則

學科 漢學 洋學 習字 禮式 此他兵學劍槍弓馬砲術柔術等ハ演武場或ハ各師範家ニ就テ習業セシメ學校ニ於テ教授セシメ無之

生徒ハ凡テ文武兩道ヲ兼修セシムルノ藩規ナルモ午前ハ文學午後ハ核外ニテ演武ト區別セシヲ以文武相關セス各好ム所ニ從ヒテ各技等ヲ異ニシ更ニ一定ノ程度比例アルヲナシ

各自ノ好ム所ニ任セテ專修若クハ兼修セシム然レモ初中等前記ノ科目ハ凡テ兼修セシム

關藩ノ子弟學齡(舊曆十歲)ニ至レハ入學シ廿一歲ヲ退學ノ期トス然レモ概テ十七八歲ニ至レハ勤務若クハ武技專修ノ爲メ退校スルモノ多シ

武藝ハ十二三歲ヨリ始メ四十歲迄ハ生徒ニアラサルモ勤務ノ餘暇ハ必ス出場演武セシム

試驗法及賞與 每年四季三月六月九月十二月考試ト稱シ本科以下素讀并習字上等ハ辨書ヲ試ム

試問 初等 小學四書等ノ内五ヶ所但一ヶ所ハ一葉ヨリ三葉以內(下之ニ倣フ)習字學フ所ニ依リ一葉ヲ書セシム○

中等 五經ノ内六ヶ所習字全前○中等本科 四書五經等ノ内白文七ヶ所○上等 四書ノ内辨書壹章

右考試ニ一ノ澁滞ナキモノヲ上等トシ年末ニ至リ四回上等ニ至リシモノハ等科ニ應シ書籍筆墨紙ノ類ヲ賞與シ最優

等ノ者ハ更ニ藩廳ヘ呼ビ出シ特別賞品ヲ下賜スルヲアリ

文武其調條及獎勵罰則等ノ諸法度ハ學校ニ無之一般藩廳ニ紀律アリシ趣キナルモ書類并記憶ノ現存セルモノ無之生徒入學ノ當日ハ本人麻上下着用父兄付添ヒ教諭以下齋長以上ヘ回禮スルヲ法トス

職名及俸祿 教諭壹名○督學壹名○助教壹名○齋長八名○世話掛四名○門衛壹名

教諭及督學ハ家祿ノ外ニ役料トシテ三石ヨリ五石迄ヲ給ス齋長助教ハ戸主ナレハ銀一枚二三男ナレハ七石ヨリ十石迄ヲ役料トシテ支給世話掛門衛ハ更ニ役料ナシ

教諭、督學、助教、齋長ハ凡テ諸士ノ上席トシ別段役席ノ者ト齒スルヲナシ助教以上身分ハ諸士ノ内ヨリ採用シ無息ヨリ登ルヲ得ス齋長ハ諸士又ハ無息ノ内ヨリ登席スルモノトシ技能ノ如何ニ拘ラス足輕ハ之ニ任用セラル、ヲナシ世話掛ハ無息又ハ諸士ノ嫡子二三男等ニテ多ク生徒ノ上等ナルモノヨリ撰ミ教授ヲ補助セシムルニ止マリ別段席次アル

學科學規試驗法及ヒ諸則

生徒學習期限ハ八歳ヨリ十五歳マテトス

等級ヲ進ム期ハ六ヶ月トス 試業ノ節ハ教官列座シテ其業ノ熟否ヲ試ム若シ不熟ノ者アラハ更ニ溫習ヲナサシム 試驗方法ハ春秋二回トス等差ヲ五等ニ分ツ賞與ニハ藩主ノ紋附上下或ハ目錄金五百疋又ハ書籍紙筆墨等ヲ附與ス一定ノ法ナシ

訓條

一學校ハ文教ヲ敷キ風化ヲ弘ムルノ本ニシテ禮讓ヲ以テ先務トス苟モ視聽言動忽カセニスルヲ勿レ

一定則休校ノ外猥ニ受業ヲ闕ヘカラス若シ事故アツテ已ムヲ得サル時ハ其旨趣長官ヘ達スヘシ

一學校ニ於テ文義論談ノ外世上ノ雜談ヲ堅ク禁ス

一毎月修業ノ熟否ヲ試ミ久シク甲科ニ位スレハ特ニ賞ヲ行フ

一定律ヲ遺却シテ怠惰ニ及フ者アラハ目ニ遮リ次第必ス至當ノ罰ヲ行フ

右五章ハ平常記得シテ須臾モ忘失スヘカラス

職名及俸祿

維新前 學監 俸祿百石用人席○教授 俸祿五十石給人席○世話掛 俸祿拾石大小姓席

學制頒布前 學監 俸祿拾二石月給二十圓座席少參事○大教 俸祿拾二石月給五圓座席不定○中教 俸祿拾二石月給

四圓座席不定○少教 俸祿拾二石月給三圓座席不定

職員概數 維新前 學監一人 教授一人 世話掛二人○學制頒布前 學監一人 大教二人 中教三人 少教五人

生徒概數 學制頒布前^{維新前} 學生凡五拾名 寄宿生拾名 但シ寄宿ハ自費ヲ以テスト雖モ薪炭油ニ限り藩費ヲ以テ支

給ス

東脩謝儀 東脩謝儀トモ一切收メス

學校經費

維新前 一周年學費米百石銀貳百五十匁ト定ム

學制頒布前 一周年學費金九百圓ト定ムト雖モ學事ノ張弛ニヨリ増減アリタリ今書類散失シテ之レヲ詳ニスルアタハス

ノ制限ナシ

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ハ必ス藩立學校へ入學セシムト雖モ志願ニヨリ藩費或ハ私費ヲ以テ他へ遊學スルヲ許セリ

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟家塾寺子屋ニ入り筆道算法等ヲ修業スルハ其意向ニ任ス然レモ藩立學校へ入學ヲ許サス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ各人ノ自由ニ任シ別ニ之ヲ檢束セス

學校

校名 直方堂ト稱ス

校舍所在地 攝津國豐島郡麻田村ニ設置ス

沿革要略 寛政年間十代目ノ藩主青木一貞ノ時ニ當リ大ニ漢學ヲ好ミ藩士ヲシテ學事誘進セシメン爲メ中ノ丸ニ學館ヲ設ケ大和國十津川住士吉川幾右衛門ナル者ヲ聘シ一藩ニ漢學ヲ教授セシメ毎月三八ノ日ニハ輪講シ亦每十九日ニハ戰文會ト唱ヘ生徒一般回讀ヲサシメ專ラ經學ヲ主トス故ニ學風一藩大ニ振起セリ其後天保年間十二代目ノ藩主青木一興ノ世ニ中井竹山ノ門人大阪ノ人山口太郎ヲ聘用シ更ニ漢學書數禮儀等ヲ就學セシム明治二年ヨリ文武局ト合併シテ更ニ設置ス之ヲ文局武局ト云フ

教則

大教 五經質問ニ答ヘ全講義ヲ掌ル○中教 四書十八史略質問ニ答ヘ全講義ヲ掌ル○少教 四書五經句讀ヲ掌ル

第一級生徒 五經質問○第二級生徒 四書質問○第三級生徒 十八史略質問○第四級生徒 五經句讀○第五級生徒 四書句讀

正課ノ外補翼トシテ修ムル所ノ書目左ノ如シ 春秋左氏傳、國語、史記、前後漢書、溫史、朱子綱目、綱鑑易知錄、文選、明鑑易知錄、戰國策、貞觀政要、蒙求、小學、近思錄、八大家讀本、文章軌範、劉向說苑、元明史略、宋元通鑑、朱子文集、朱子語類、二十一史劄記、大日本史、日本政記、本朝文粹、元明史略 右之外漢唐傳註諸子百家書等凡テ經學ノ補翼トナルヘキモノハ正課ノ餘力ヲ以テ修ムル事ヲ要トス

授業ノ方法順序及時間 授業時間ハ辰ノ刻ヨリ始メ午ノ刻ニ終ル○經書聽講毎月三八ノ日○史集聽講全上○輪講全上

日本教育史資料卷二

諸藩ノ部

東海道

舊津藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達

附總教督學ノ通達

文政二年己卯閏四月藩主諭達

知之非難行之爲難トハ人タル者第一ノ心得ナルヘシ我等愚闇ナリト雖モ藩國ノ任ニアタリ自ラ質素ノ行ヲ踐ミ時世ノ弊風ヲタメ士民共太平ノ化ヲ與ニシ上ヘ忠誠ヲツクシ奉リ先祖ヘ追孝チイタサント欲スト雖モ申付候國政モ盡クハ行ハレス家中ノ困窮ハ日々ニ相増シ不宜筋モ時々相聞ヘ是皆我等薄德ノイタス所ニシテ恐懼慨然ノ至リニ候マシテ去年來米價下直ニ候得ハ此上我等勝手方ノ差支ニ相成候トモ家中ノ困窮ヲ先ニシ救候ノ様申付候間右ノ救助ノ徒ラニ相成不申候様孰モ一致ニ儉約イタシ飲食衣服贈答諸事法ノ通堅ク相守リ我太祖君以來天下ノ御爲メ御忠勤ノ御心ニ體シ奉リ文武ノ道厚ク執行イタシ祖先ヲ敬ヒ父母孝養ノ道疎カニ相成不申候様可仕候若シ倫ヲ亂リ法ニ背キ候輩有之候ハ、親疎ノ差別ナク用捨有之間敷候先年ヨリ重役ノ者ニモ守ノ不宜向モ聞有之哉ニ相聞ヘ不愼之者見遇候サヘ不届之上儀表ニ相成候役方ヨリ等閑ニ相心得候事其罪不輕候得共全我等不德故ノ義ト是迄沙汰ニ不及候處士風ハ日々衰ヘ困窮ハ年々増長ニ及ヒ候ヘハ最早難打捨置境ニ及ヒ候此上號令違犯ノ輩ハ其輕重ニヨツテ乍不便嚴重可申付候又我等過モ有之候ハ、無遠慮諛爭可致若シ過失ヲ知リナカラ默シ候ハ、不忠ノ至ト存候近來一體ノ風俗頽弛シ士風不奮輕薄姑息ノナラハシ日々ニ相増シ候事文武ノ道不明教化ノ行レサル故ニテ困窮致シ候モ又心得ノ宜シカテサルニ由リ候得ハ年來文武場取立一統ニ爲致執行度存候得其入用モ不輕候得者勝手方不如意ニテ家中分損モ存分ニハ用捨難出來候事故存候計ニテ空々年月ヲ送り候處改革以來手元金モ過半減少申付候上猶又嚴シク身ヲツメ質素ヲ守リ候ニ付十年來ノ餘金文武場ノ營出來候程ニ相成候ニ付此度文武場取立伊州ニ於テモ文場申付候間老若ト

藩主臨校 毎月三八ノ日ハ大教講義ノ後生徒輪講ニ付藩主臨校スルヲ例トス又春秋試験之節モ同斷
祭儀 別ニ聖廟ノ設ケ無之校内床頭ニ聖像ヲ懸ケ祭典ス生徒ヨリ祭儀料トシテ銀壹匁宛備ヘ且該日督學經書ヲ講義スル
ヲ例トス

學校構造及建物 圖面別紙添 敷地坪數三百六十三坪 建物坪數七十五坪半

學校ニテ翻刻セシ書籍 翻刻セシ書籍ナシ

學校藏書 和書六部漢書十一部此他内外諸氏百家ノ書數部アリタリト雖凡書籍目錄紛擾セシヲ以テ記憶ノ大略ヲ記載ス

ニ候然ルニ御勝手ノ御模様先年來篤キ尊慮ヲ以テ御改革ノ政被爲行御自身ノ御上格別ニ御省略被遊候ニ付御國用萬端右ニ準シ嚴儉布行ハレ諸役所御儉約相立候事故以前ニ比シ候テハ頗御最通リ附御要用ノ御差支ハ無之ニ至候得共元來御取納高昔時トハ御減少許多ノ義故御有餘出來候處ヘハ路遠キ御事ニ候因テ御救ノ尊旨ハ奉拜服候得共常々御勝手ノ様子承リ候テハ此節御貸渡ノ財調達否ノ義不可容易強テ取計ヒ候モ跡ハ御差支難測ニ付先御教諭ノ政令ヲ先ニセラレ御惠助ハ常冬ニ至リ被仰出候様支度方精誠ヲ盡シ可申旨評議ノ趣申上候處何分年來困窮ノ上近年危難ニ逼リ候者多ク相聞候間御救ヲ二段ニ取計候事ハ難被爲忍候然レハトテ御教令ノ義ハ一日モ御遷延難被成候ニ付御救御教ノ二ヶ條一時ニ可被仰出御治定被遊候間其旨申達是非ニ御旨ノ通取計候様可仕段被仰付候斯不被爲得已御英斷ノ趣重々奉恐感御勝手役人共丹精ヲ可盡ハ此時タルヘキ旨申聞之精誠周旋候テ此節被仰出候様相成候事ニ候尤兼テ者右御貸渡ヲ御下行被成下度思召候得共今度ノ義ハ惣テ御勝手方前後ノ都合ニ不拘被仰付候事故御下行ニ相成候テハ御領下窮民御救ノ手宛及御差支候前段ノ通御有餘無之御勝手ニ付今度ノ御入用モ過半御借入ノ財ヲ以テ取計ノ義ニ有之將又御貸渡ノ返納金ヲ以テ年々御領下御救二十ヶ年ト御手宛ニ可被仰付目論ニ候故兼テノ思召ニハ難被爲任候強テ被仰付候ハ、不相調義モ有之間敷候得共御國用其外不時御手當方ノ踏ヘ無之テハ忽御手支ニオヨヒ重キ御仁旨連綿致間敷ニ付凡右等迄モ思惟致シ取計候事故今度ノ御惠ハ當御時節御誠精ノ御經濟ニ候恐察可被致候前々ト違ヒ御勝手御手詰ノ譯ハ御收納高多寡ト違ヒ夥敷先年槍奉行以上ヘ大積ノ書付内見被仰付候通ノ義ニ候吳々此度ノ被仰付ハ御仁惠御風化ノ御旨御厚重ナラサレハ難被爲出來候事ニ候間一統被奉服膺文武習業筋忠孝ノ心掛專ニ相勵質素ノ古風ニ基キテ勝手向取直シ遠カラス御安堵被遊場ニ至候様勉強講習可被致候

文武場御造營ノ御入用ハ御自筆御書付ニ相見候通御家督以來御側向格別御簡略被爲成御小納戸切符ノ内年々ノ積金ヲ以被仰付候御事ニテ尙此上モ御社稷ノ爲ニハ御身ヲ被爲詰御省略可被遊尊意ニ被成御座御教養ノ二ツニ御憂慮被遊候義如斯ニ候間此段難有可被奉體認候

御學校被仰付何レモ文武場ヘ罷出候様相成候ハ、諸稽古場トハ事替差支等可有之哉ト疑惑ノ向モアルヘキ力當分ハ不便利ニ可被存候習慣ニ從ヒ追々便宜ヲ會得致シ往々修行ノ都合此上有間敷候間一統無懈怠出席可被致候但シ不審ノ義トモハ無遠慮可被申出候豫メ老評モ致置候事故尋ノ義共ハ夫々可及答且又小祿ノ面々勝手取續ノ爲家事ノ營モ繁多ナルヘク候得共意得次第ニテ諸藝事ノ差支ニハ相成間敷候譬ヘハ職人商人等日々ノ產業ヲ以テ妻子ヲ養ヒ候者モ其好ム所ハ生涯是ヲ樂シモ或ハ詩歌音曲茶事博集等ニ秀候者モ有之就中誹諧ハ貧キ者ニモ達入有之農工商各職分

モ日々出席イタシ孝弟ノ道ヲ修メ忠臣ヲ主トシテ文武ノ學成就イタシ國家ノ用ニ相立可申候輕薄浮華ノ行ヲナシ利ヲ貪リ名ニ走ルノ類ハ互ニ堅ク相誠可申候江府ニ罷在候者共ハ用多ニ相勤候トモ右ニ準シ官暇ヲ以テ無油斷學ヒ可申候將又漁獵ノ樂士ノ仕間敷事ニハ無之候得其士分ノ業ヲ外ニイタシ耽リ候事ハ可爲無用其内利ヲ爭ヒ卑劣ノ致シ方モ、有之由廉恥ナキノ甚シキニ候間堅ク可相愼候右ノ段何レモ深く我心ヲ得候テ夙夜勉勵シ酒宴遊興ニ流レス忠孝文武ノ道ヲ修メ家門ヲ耀シ候ハ、可爲満足候

文政二年己卯五月朔日執政達

御家中困窮風俗頽廢ニ及ヘキ段御家督以來深ク御苦勞ニ被爲思召退々復古ノ御政有之候得其與耽其微モ無之風俗彌凌夷ニ至リ候段時勢ノ然ラシムル所歟執政ノ任其人ニアラサル故歟抑御身ノ御不德故歟ト御自反被遊候段恐入候御事ニ候右御自反ノ御主意御自身ノ御上ハ申ニ不及重役ヲ始メ奉行御用人共并諸役人ノ上迄ヲ御顧被爲在候御事ニテ候諸士風俗ノ盛衰其本ハ執政其人ニ關係致シ次ニハ奉行御用人ヲ始メ役人共ノ上ニ係リ善惡トモ内ヨリ外ニ及ヒ外様諸士ハ御役人共ヲ準據ト可致付輕重トナク役義相勤候者ハ一身ノ愼ミニ文武ノ嗜等モ拔群ニ無之テハ不相叶義ニ被思召儀テ此度ハ右等ノ處ニ反覆尊慮ヲ被爲用候御事ニ候但シ一體ノ風俗右ノ通ニハ候得其御家中大小臣トモ忠節ノ志ハ何レニ愚モ有之間敷此段ニ於テハ御妾堵被遊候御創業ノ昔ハ素ヨリ人材モ不乏ニ付風儀淳朴ナルハ勿論ナカラ御國初ニ近ク御恩澤ヲ蒙リ候儀淺ク候當今ハ孰モ數代世祿ヲ賜リ二百年來ノ御高恩ヲ致拜戴候者共故御上ヲ奉存候所最モ深キニ付事ニ臨ミ不忠ノ者ハ一人モ有之間敷輕重トモ屹度御用立可申其段ハ少シモ御不安不被爲思召候就中平常ノ愼ミヨク文武心懸厚キ輩モ不少候ハ、御満足被遊候只管御憂慮被爲在候ハ世上一般ノ風俗ニツレ積年ノ困窮ニヨツテ不識不知士ノ規格ヲ失ヒ行狀ノ謹ミ文武ノ勵ヲノツカラ怠惰ニ及ヒ候段御歎息ノ至リニ被思召候因茲遠ク和漢ノ事蹟ヲ御校量被遊候ニ風化ノ行ハレサル本ハ歷年ノ困窮ト御教諭ノ不被爲行届トノ二ツニ歸シ候義御發揮被爲在候ニ付今度兩條ニ於テ御仁慮ノ御政令ヲ下サセラレ候段於拙者共モ深ク奉感所ニ候右二條ノ内御教諭ノ義ハ御上ノ御專任ニテ人ニ君タル御人ハ士民ノ父母ニ被爲在候匹夫匹婦ノ賤ニ至ルマテ父ノ子ヲ教ルニ時勢貧富ノ見合セハ無之候御家中ノ教諭モ右同事ニテ等閑ニ御拾置可被成義ニ無之勝手危急ノ者多ク候トモ御斟酌ニハ不被爲及候事ニ候得共一統難澁ノ義夙夜御用慮被遊殊更小身ニハ窮迫ノ者共不少ニ付御憐察被遊候ニ付御教諭ノ事御心外御猶豫ニ被爲過候此段今以テ御後悔ニ思召候ニ付不被得已兩條ノ御經濟被仰出候乍去右ニ申述候通文武風俗ノ御教ハ親ノ子ヲ教ヘ候ト同シク時勢ノ見合ニモ不及義ニ候得ハ勝手御救ノ條ハ專ヲ出納ニ關リ御勝手方ノ都合第一ノ義

モ差合セ不快等ニテ引籠候義ニ可有之候就中年始ハ年内一度ノ大禮ニテ臣子ノ君父ヲ賀シ奉ルハ重キ義故大抵ノ事ハ勉テ可罷出筈ニ候不參ヲ輕シ心得引籠候中ニハ心得違ノ向モ有之ニヤ我好ム事ニ就テハ不日ニ罷出遠近トナク奔走致候ナトハ遠慮可有之候事ニ候年末ノ作舞ニ依テ年始引籠候ニモ恥ヲ知テ出サルト恥ヲ不知シテ出サルト兩様可有之候是等ニ不限年來ノ弊風ニ馴テ心附ナク禮節ヲ失ヒ候屬其本ハ御教誡ノ道疎ニ被成置候故ト思召候不教シテ罪セラル、ハ人牧ノ御本意ニ非ルニ付改テ御法令ヲ立ラレ候御事ニ候間此以後不守不愼ノ面々ハ輕重ニ應シ不得止嚴重ノ御沙汰ニ可被及候旨ニ御容赦ハ誠爲在間敷候

式日御禮相濟一統退出ノ節各行儀ヲ正シ追々退出可有之事ニ候御禮相濟候ヲ不待只管退去ニ急候テハ自ラ混亂ニ及ヒ禮儀ヲ失ヒ可申候向後銘々禮儀ヲ用ヒ殿中恭敬旨ヲ存シ物靜ニ進退可有之候

御留守中御禮日老共對謁ノ節モ同斷前後騒々敷儀無之様進退可被致候武藝御覽并一覽ノ節子共杯聲高ニテ物騒敷候テハ御上ニ不敬ハ申ニ不及武藝相勤候者共自カラ心氣落付不申所作モ差構ノ物ニ候間師家ノ面々并世話役共重々氣ヲ付物靜ニ相致可被申候門弟ノ行儀其本ハ師家ノ規格ニ關リ候間銘々常ニ心ヲ用ヒ教諭尤ニ候

御代々様御忌日御先祖様并近キ御代々様御月忌ハ一統可相愼義ニテ御家中ノ面々不愼ノ輩モ不相聞候得共近キ頃迄モ間々心得違ノ向有之右ノ御日柄ニ魚肉ヲ食シ或ハ御當日御逮夜音曲遠慮不致宴ヲ霍シ客ヲ招キ甚敷ハ前夜漁事ヲ致候モ有之由沙汰ノ限リニ候酒肴ヲ用ヒ候トモ茶屋向惣テ外邊ニテ用候ハ尙更ノ義ニ候是等御制禁無之テモ可愼事ニ候官ニテ御世話アルヘキ筈ニハ無之候處違外ノ義有之候ハ無是非御沙汰ニモ可被及候段御心外ノ御儀他邦ノ聞ヘモイカ、敷候當時不愼ノ義不相聞候得共彌以意得違無之様心ヲ用ヒ可被申候

漁獵ニ出候節下賤ニ紛ヒ禮ヲ不致帶刀ノ形遠目ニモ屹度相分リ候様有之度候何ニヨラス肩ニ物杯置候事假初ニモ有間敷義ニ候漁ノ獲物取扱候義イカ、ノ說相聞ヘ或ハ賑ヒシ場所ヘ罷越作舞夜行町方徘徊法外ノ義等近來ハ惣テ不相聞候得共是又後來ノ爲申達置候凡謹愼ハ我一人ノ上ニ止ラス風俗ニ係リ候間一分ノ上トノミ被心得間敷候風俗ニ係リ候得ハ國體ニ關リ御國ノ恥辱ト被成置候事ニ候士タル者ハ威儀止敷□□ニ致シ漁獵ノ出立ニモ士ラシク候ハ、町人百姓自然ト恐レ敬ヒ近キ侮ル事無ルヘク候居常言行鄙劣ニ候テハ表向形容尊大ニ構ヘ候トモ輕キモノ無禮ヲ咎ル事可難出來候

此度格別ノ御救助被仰付候得共從來一統困窮ノ上昨實年米價異成下直ニテ尙更難澁ニ逼リ可申候間諸事御用捨筋可成丈是迄ノ通被仰付度思召ニ候乍去是迄不得已御省略ニ過候故武家ノ規格ヲ失ヒ候事トモ有之候依テ朝日爲御禮登

ノ外ニ知行モナク扶持切米モ無之候處遊事ノミニ限ラス文學ヲ好候間有之候士大夫ハ各々世祿ヲ賜リ衣食居ノ上愛ルナキ筈ニ候得共實素ヲ守リ候ハ、假令今日ノ營ニ手ヲ下候トモ此カ爲ニ習業ノ妨ト成候事ハ有之間敷候日々學校へ出候トモ家事ヲ辨候暇ハ如何程モ可有之候委曲御學校御條令ニ相見候故不詳候蓋大小身共文武藝事ニ優遊スル時ハ道義ヲ辨ヘ藝能ニ達シ候ノミニアラス地合藝ニ遊ヒ候ニ付遊佚放蕩ノ事自ラ遠カリ可申候

世事ニ暇ナキ者モ我好ム事ニハ閑暇有之物ニテ諸見物又漁獵或ハ山莊ヲ儲ケ奔走スルノ類不可枚舉素ヨリ文武ノ業モ張詰コハ難成ニ付何ニヨラス相應ノ樂ハ可有之歟一張一弛心ニ由候ハ、漁獵ハ骨節ヲ養フ益有ヘク山莊ノ往來ハ養氣ノ助トモ成ヘク候得共其勤ヘキ本職ヲ疎カニシテ遊事ニノミ日月ヲ送ル者有間敷事ニ候尙又山莊ノ周旋モ有無得失ノ考有之度義ニ候

老弱トモ飲酒ニ耽ル時ハ文武ノ心懸忠義ノ志モ此カ爲メニ蕩カサレ怠廢ニ可及候近頃者如何ノ義モ不相聞候得共後來ノ爲御戒深ク御自筆ノ趣ハ酒饌ノ徒藥石タルヘク候間謹テ體認有之無心得違樣可被相守候御上ニモ御平常御用ヒ被遊候處斯ク御誠被仰出候ハ公正ノ思召ニハ古ヨリ酒ヲ忘憂君ト稱シ醉サレハ其德ハ無之サレハ慶事重禮必備フヘキ物ニ候得共量ニ過ルトキハ必ス常ヲ失ヒ萬々不善ヲ生シ候段各承知ノ通ニ候間最謹慎可有之候但生得好ミ候者ハ量ニ從ヒ用ヒ候モ不苦候飲酒ニ依テ不意ノ餘興ヲ引出候時ハ害多カルヘク候間心ヲ用ヒ候義肝要タルヘシ因テ酒宴カベシキ義暫ク停止ノ義被仰出候御事ニ候自カラ其非ヲ知リ恥ヲ存候時ハ假令酩酊ニ及トイヘトモ害甚カルヘシ謹ヲ忘レテ亂醉シ醉ニ乘シテ人ヲ凌キ法外尾籠到ヲサル所ナク或ハ場所ヲ憚ラス又ハ夜ニ乘シテ不羈ノ行ヒ等勝テ算ヘカタク一旦ハ右ノ屬專ラニ相聞候處近頃ハ酒狂ノ沙汰絶テ不相聞一段ノ事ニ候凡亂醉ノ害ハ其身柄重ク役柄不輕者程罪モ亦重カルヘク候間席柄ノ面々ハ尙更可慎義ニ候後來ノ爲メ重々入念申聽シ置候樣被仰付候

弱年ヨリ役義ヲ勤メ偏ニ役功ヲ以テ致立身文學ノ心掛無之輩ハ日用ノ小事ニ敏ク舊格ニ闇カラサルニ付學才アル人ヲ見下シ或ハ議論ノ節文學ニ關リ候事ハ滑稽ヲ以テ應シ己カ不學ヲ覆ヒ人ヲシテ口ヲ開ク事ヲ得サラシムルノ類ハ德ノ賊トモ可申候サレ共年功ニ依シ人々崇敬イタシ右ニ付尊大驕慢ノ疾ヲ長シ如何トモ致シ難カルヘク候斯ル弊風ヲ移シ易ル事學校ノ政ナラテハ能クシ難キ所ニ候古ヘ聖賢ノ其位ニ在セシヲ承リ候ニ或ハ深淵ニ臨カ如ク薄氷ヲ履カ如ク天ヲ恐レ職ヲ慎ミ孜々憂慮シテ尙日ヲ足ラストセラレ候由重任ニ居ナカラ恬然トシテ遊佚ニ年ヲ空敷致候ハ其心曲不可測候擅ニ安佚酩酊シテ政舉リ國治ルヘク候ハ、六經ハ皆偽リノ書ニシテ古ヘ聖人ハ悉ク犯人タルヘク候諸士一統登城一月凡一度ノ義ニ候處勤モスレハ不參ニ及ヒ候何レモ適々ノ事故可成丈ハ罷出候意得ニ可有之候得ト

官ニ於テハ會テ爰ニ止マリシ義ニ無之不相成迄モ研究破仰付聊ニテモ分米御容捨有之様大小有司關係ノ御役人ノ精誠ヲ盡シ可中事ニ候得共是ハ官邊ノ上ニ有之義ト下トシテハ大小臣共一統御上御勝手御難澁ノ譯ヲ致恐察上下一致ニ嚴敷令儉約如何様ニモ取續出來候様心懸御厄介ニ不相成様覺悟可被致義ニ候

此度御貸渡之財ヲ以テ借財方致差略ノ義其段願出候ハ、御勝手方へ引請直ニ銀主共へ渡取計候様被仰付候段別紙御書付ノ通ニ候然ル處極窮外借多キ而々今度御引請ノ義不相願自分作舞ニ仕置以後儉約筋不守候テ無立行相成御仁惠空敷相成候輩ハ不覺悟ノ落度不□ニ付嚴重ノ御沙汰ニ可被及候間此段屹度相心得重々考量ノ上拜借可仕候

先年被仰出候御救助□□御仕法ノ内御引受并御賄ヲ願ヒ候ハ、最初ニ□□□□上願出可申有同様ノ義ハ御厄介モ不輕ニ付年限中一己ノ處置嚴重ニ無之テハ難相凌始ニハ借財御引請被下候義難有奉存候テ年月ヲ經暮シ方艱苦ニ堪兼候ニ就テハ後々ハ御仕法ヲ致誹謗候心得違出來可申ニ付豫メ覺悟ノ上相願候様重々被人御念候事ニ候處極窮迫ノ面々御賄又ハ御引請モ願孰モ知行高不相應ノ大借等御引請被下夫々差略被仰付候ニ付テハ官ヨリノ御散財莫大

ノ義ニテ無此上御厄介ニ相成重テ御恩澤ヲ蒙候輩ハ大小身トモ人並ニ意得候義ハ有之間敷諸事儉約心ヲ用ヒ一家一身ノ慎格別ニ可有之處失張通例ニ心得克己艱苦ノ處置モ不相見過來候向ハ數年□□□□シテ立行難出來御賄方ヨリ相渡候財ハ御定法ノ限有之ニ付當時ノ艱苦ニ逼リ果候テ最初御仕法ニ因リ危急ヲ凌キ大借財ヲ免カレ候御恩ヲ忘レ役

所ヲ恨ミ候意得違ノ者モ不少歟ニ相聞ヘ以テノ外ノ義ニ候向又右ニ就テハ借借ノ義堅ク御制禁有之候處近來ハ内々他借候輩モ有之趣右ノ通不一通御厄介ニ相成候後諸般不覺悟ニ付御制禁ヲモ犯候段重々不持ノ事ニ候併已往ノ義ハ不及是非候此度ノ御貸渡偏ニ一旦ノ御惠ト相心得候義ニテ篤キ御主意□□御恩澤忽烏有ト成リ且ハ一統ノ風俗ニ關

係ノ事故不得已嚴重ノ御沙汰ニ可被及候間孰モ拜服被奉今日ヨリ無用ノ費ヲ省キ今度ノ御仁惠空敷不相成様用意尤ニ候□□□□御上ノ□□御分限御不相應ノ御簡略被遊萬事御社稷ノ御爲メ士民ノ爲ニ□□克己被遊候段恐威候所ニ候得共右ニ申述候通御取納高御國用ト出納不足ノ所御意外トハ□□被爲在候斯ク御時節民ノ父母タルノ御

任孰モ深ク奉恐察儉約相守御上ト艱苦ヲ共ニ致シ住々勝手取直シ相應ノ御奉公相勤奉報御高恩候様丹精可有之候此度被仰出候御主意ノ趣一朝ニ可申竭義ニ無之候右申述候ハ其大綱ト相心得每件條目ハ銘々發明被致其内難解義ハ先覺ニ相尋會得有之候テ各其本ニ歸リ老弱トモ分ニ隨ヒ丹精被相勵候ハ、子々孫々自カラ文武忠良ノ士ヲ產シ國家

ノ御大用ニ相當リ祖先ノ家名ヲ耀シ忠孝兩ナカラ全カルヘシ尙往々南國人才有用ノ士多ク出テ富國強兵ノ御備周テク將軍家へ被對御忠誠ノ尊意モ被爲在御先祖様ヨリ御連綿ノ御家聲益天下ニ及候様移風易俗ノ義奉仰望候間大小臣

城ノ面々目今麻上下ニ相改且又常上下以上ノ者共勢伊トモ江戸表ノ通肩衣掛可申旨被仰付候右ノ義トモ一通リニ相心得候テハ御時節不相應ノ様ニモ可被存□□ニ候得共御國諸士孰モ夫々格式等相辨幼少ノ子供迄モ士ノ常服ヲモ見馴候様被遊度思召ニ被爲在候常々嚴敷御省略被仰付候モ右等ノ規格ヲ可被立故ノ御義ニ候間此段左様可被相心得候世ノ風俗ニツレテ不愼ナル人多キ中ニ忠臣孝子モ有ヘク篤實貞固ナルモアルヘク才子文人モ有之果毅勇武ノ士モ可有之志氣厚キモアルヘク事ニ臨テ御用立ヘキ人物モ有ヘク各共長スル所ハ万殊ナレトモ不愼ノ行作改リ候ハ、大小輕重トモ一廉ノ御用ニ可相立名譽ノ美モ揚ルヘク候細瑾ノ愼疎カナルニ依リ候或ハ終身ノ瑕瑾ヲ生シ候ハ惜ムヘキ至極ニ候

一統ノ風俗大率不愼ノ人多キ中ニ其身ヲ愼ミ言行ヲ正ク致候者ハ可稱事ニ候文武ノ藝事怠リカチナルニ士ノ本有モ不失諸藝ニ從事スル人ハ珍重ノ義ニ候當今高知以上ノ面々ヲシナヘテ行狀宜敷文武ノ心懸有之職分ヲ忘レス御法度ヲ守リ如何ノ義不相聞候段御感稱被遊候大身ハ衆ノ手本ト相成候得者此以後彌相勵ミ可被申候物頭寄合ハ右ニ次ク席柄ニ候得者職分ノ心懸不怠治亂共臨時拔群ニ御用立候様心ヲ用ヒ研究可有之候

此度ノ御貸渡ハ一時ノ弛ミニ相成候爲メ被仰付候義者無之右ヲ以テ多少借財ノ處ヲ減シ又者融通ノ筋ヲ考ヘ自今儉約嚴重ニ相守往々勝手取續出來候様相成候爲メ御救ト相心得先年被仰出候御條目并今度ノ御制度堅ク相守飲食遊事其外無用ノ費ヲ省キ五ヶ年内効驗相見ヘ候様克己致シ以後御厄介ニ不相成覺悟可爲肝要候官ヨリハ重テ分米被仰付置畢竟年來知行ノ内御借用ノ御事ニ候得者假令如何程重キ御惠被成下候テモ御上御滿意被遊候御義無之ハ勿論ニ候得共下ヘ受候テハ左ニ有之間敷分ノ御恩澤ト可奉拜戴事ニ候歟其譯ハ御勝手御模様御先々代重キ御手傳度ヲ被爲蒙仰依之莫大ノ御借財ニ及ヒ必至御取續難被爲出來相成候ハ素ヨリノ義尙其本ハ中古以來御物成御収納高漸々致減少以前トハ御多寡ノ相違夥敷義故段々嚴敷御儉約御省略等有之御家中ヘハ増分米被仰付諸御借財方御差略被仰付候テモ中々御最通附候場ヘハ遠ク極々御手詰御難澁ニ被爲至候處御家督以來不一通厚ク思召ヲ以テ御改革ノ政御英斷被遊候格外ノ御簡略被仰出嚴儉相行ハレ候ニ付必至御差支ノ場ハ多分御弛ミモ附寄候得共如上文從來出納ノ上御不足多キニ候御家中分米御用捨ノ義思召コ不被爲任此段重々御憂慮被遊孰モ深恐入候御事ニ候乍去如斯御手詰ノ御勝手ト相成候義其由來年久敷事今更被仰付方モ無之御意外ノ儀ト如前文元來御領下戸數ノ減候ヨリ御收納高減少ニ及候義故此以後農ヲ勸メ戸數ヲ増シ御經濟ニ無之テハ昔時ニ復候期ハ有之間敷然ル所是等ハ一朝ノ政ニアラス多年ノ功ヲ積ニアラサレハ難復事ニ候サレハ先年被仰出候四分掛ヲ以テ本知ト心得候様ニトノ義ハ當然ノ理ニ有之候乍去

於御學校ハ勿論往來、途中ニテモ落書仕間敷事

進退ノ時刻ハ勿論地震雷鳴急雨等ノ砌其餘非常ノ儀有之候節モ差圖ニ隨ヒ行儀正敷可有之事

總テ士ノ體ヲ失ヒ風俗不宜儀無之樣堅相守可申候事

右條々御總教被仰渡候間奉得其意相守可被申候外ニ於テモ風俗ヲ乱リ行迹不宜振舞有之宿許ニテモ親々ハ對シ如何敷儀相聞候ハ、御學校入差止可被仰付候以上

庚辰二月

師役共

文政三年庚辰二月四日總教達

御家中讀書ノ子供是迄儒家ヘ致出席候儀相止メ此度改テ御學校ヘ召出入學帳ヘ付可申候尤禮服著以扇子爲贅入學可有之候

手習仕候子供禮式前段ノ通入學可有之候右讀書手習入學者日限并講會式日等ノ儀ハ追テ被仰出候

御家中子供他ヘ手習ニ遣シ候儀右行儀取失ヒ風俗ヲ傷ヒ候子供有之ニ付向後次男以下迄モ九歳ヨリ十五歳迄御學校

手習所ヘ罷出可申候若十歳ニモ及ヒ候テモ病身ニ付入學難仕子供ハ其趣差出ヲ以夫々支配頭ヘ相届可被申候

子供行儀作法諸禮儀方ノ儀モ於御學校相習儀樣被成下候

讀書場ヘ罷出候子供既ニ一ケ年相勤候者ハ次男以下モ御日見奉願御間届可被成下候但講堂ヘ聽聞ノ儀ハ十五歳ヨリ

罷出可申候

手習場ノ儀高知以上者被罷出ニ不及候得共若次男以下罷出度面々ハ入學可有之候

高知以上譜代ノ陪臣讀書場ヘ罷出度者ハ其主人ヨリ御學校ヘ撥申入候上諸式如法參謁入學可仕候

當教場ハ御掟ノ儀者御學校ニ於テ師役共可申渡候

右之趣御家中ヘ通達可有之候也

文政三年庚辰二月九日總教達

覺

武術師家ノ儀是迄和尙ノ稱號ヲ用來候事名義正カラス以後相改先生ヲ以テ稱シ可申儀ニ候尤文武師役ノ外ハ一切可

爲無用候曲藝遊藝等指南仕候者其各々稱呼相犯申間敷事

右之趣御總教被仰間候致通達候諸藝稽古場御門弟中不洩儀御通聞可被成候以上

殘ラス今日ヨリ顔色ヲ革メ今度ノ尊慮被爲貫御仁化御德風ヲ後代迄モ奉仰候様憤發可有之候

文政三年庚辰二月四日總教達

覺

此度御家中ノ爲メ御學校御取立有之候御儀士氣ヲ養立風俗相整文學武術達者ニ仕頼母敷御用立可申爲之御備ニ候間
士ノ家ニ生候者一人モ不洩諸稽古場へ罷出修行無油斷出精可有之候

御家中學問ノ志有之面々者御學校講堂へ出席可有之銘々承度書ノ式日ニ可罷出候但入學ノ儀申入無之行掛推參無用
ナリ別段會讀等相頼度面々ハ申合セ講官詰所ニ於テ可被會集候

部屋住者不及申家督ノ面々勤番有之候者モ年四十以內文武夫々相嗜治亂御用立候心懸御奉公專要ニ候條一統ニ相勤
メ勵マレ銘々得手ニ隨ヒ諸稽古精勤可有之候

大身ノ面々御治世ニ者御政道ニ御用立可申天下ニ事アリ候節ハ士卒ニ將タル任ヲ辱シメ申間敷儀專要ニ候得者別テ
儒學兵學兩道ノ修行等ニ手厚ク相勵可被申候

御家中御制度ノ儀獨禮諸士學問并武藝二流者クハ武藝三流以上達者ニ可仕儀候間爾來家督跡目ノ節未爲指勤モ無之
内ニ不幸早世仕候トモ右ノ通ニ候者ハ平生御奉公ノ心掛厚ク候ヲ以テ家祿無相違可被下候縱トヒ江戶詰勤可仕候テ
モ文武ノ業不心掛ニ候テハ急度御沙汰可有之候且又既ニ成長ニ及候テ無精不嗜ニ候者ハ相續ノ砌可被及嚴重ノ御沙
汰候但シ當年ヨリ十ヶ年ノ間心掛ノ精不精ヲ以テ御評議可有之候十年以後ニ至テ專ニ達者不達者ヲ御沙汰ニ可被及
候條此旨急度覺悟可有之候

御學校内手習子俱ノ外無綯ニテ徘徊無用ニ候惣テ作法猥ケ間敷義有之間敷候御門限暮過候得ハ泊リ勤番ノ外出入一
切禁制ニ候

右ノ趣可令觸知之旨被仰出候間可被奉得其意候以上

文政三年庚辰二月總教達

習書察捉

覺

御學校中ニ於テ第一士行儀ヲタシナミ作法正敷起居挨拶サワカシキ振舞不仕慢ガチニ人ヲ視下シ會釋ナク上坐仕間
敷長幼ノ分際ニ隨ヒ禮讓謙退可仕候

可有之歟、被爲思召候御事ニ候去夏ノ御救筋并此度、御用捨筋モ畢竟臨時救急ノ御經濟ニテ不顧前後被仰出候義ニ有之候量入候テ不顧前後被仰出候義ニ有之量入以爲出等ノ御蹈ヘ被爲在候筋ニハ無之候然ハ此度ハ全ク御開業ノ御手始ノ爲故ノ義ト被奉存專文武御奉公ノ心掛可爲肝要候
右ノ趣御家中一統ヘ申達候様被仰出候事

二月十四日

文政三年庚辰二月總教達

組頭兩人ヘ達書

覺

御學校御造營被成下候御主意ハ御家中ノ士氣ヲ引立風俗ヲ押直シ治亂御奉公ニ御用立可申人材ヲ仕立出シ候爲ノ御設ニ候間諸稽古場風儀手厚ク相成一同ニ押立相勵候様諸事頭取候テ取扱可有之候

師役技術手薄ニ候テハ門下ニ達者出來立難ク流義ノ衰微ニ及ヒ候事ニ候之間師家相續ノ子供別テ篤ク心掛候様相諭シ引立可被申候若稽古場ノ風儀猥ケ間敷義有之候ハ、目付役申談可被相誠候右ノ趣可得其意候以上

組目付ヘ達書

覺

諸師役ノ內心得達ノ義カ或ハ稽古場風說不宜義有之候ハ組頭申談可被加教誠候於不相改ハ其趣可被訴出候
右之趣可被得其意候以上

文政三年庚辰二月總教達

武術諸稽古場掟

定

諸師役隔日ニ半日充御學校ヘ罷出可被相勤候式日ノ立方槍術西流同日同時刻兵法三流柔術三流各同前其餘諸流相互不差支候様可成丈繰合可被申談候寒稽古不時稽古等ノ儀者格別ノ事ニ候鐵炮ハ是迄四月ヨリ七月限ニテ被停止候ノ處向後每月三度ハ格別御容赦有之候間三流共式日相定案内ノ上稽古可有之候但十一月十二月正月右三ヶ月者可爲無用候弓術馬術ハ可爲舊例ノ通候

御學校諸稽古場ニ御在國中ハ不時ニ被爲入地合稽古ノ様子御覽被遊候間以後差定リ候例年ノ御覽ハ無之候併思召チ

二月九日

督學

武術諸師役家世話役衆中

文政三年庚辰二月總教通達

覺

文武諸稽古數ヶ所相勤終日御學校中ニ罷在度面々若辨當持參茶所ニ於テ支度可有之候不意急雨ノ節小身ノ面々御貸雨具臺所方へ可被申入候諸稽古塲茶炭等雜費モ臺所ヨリ被成下候右之趣御家中へ通達可有之候也

文政三年庚辰二月總教通達

覺

此度習書寮へ罷出候子供是迄手習師へ出シ來リ候謝儀ノ例格可有之候間其振合ヲ以テ夫々相應ノ禮式教導ノ勞ニ報ヒ候義尤ニ候讀書相習ヒ候面々は又不淺世話ニ相成候儀可爲同斷候右ノ趣爲心得達置可申事

文政三年庚辰二月督學通達

御學校御取立被仰付候ニ付御家中諸士文武修行ノ爲分米ノ内乍御些少御容赦被成下候尤分米御用捨ノ義從來思召被爲在候得共量入以爲出ハ國用ヲ制スルノ本ニ候處前々ト違ヒ御收納高許多御減少ト成來候事故如何體御儉政被行候テモ此上ノ御容赦ハ難被爲出來四分掛ヲ以テ定祿ト意得可申儀不得已御時節ニ候乍去去年來御憤發ノ御旨ヲ以テ御學校御造營被仰付一統文武塲へ罷出候ニ就テハ諸事は迄ト様子替リ小臣ノ面々家事ノ營等モ存候様ニハ可難相調ニ付永久連綿ノ義等御深慮被爲在格別ノ御經濟ヲ以テ今辰年ヨリ三ヶ年ノ内分米一分通リ御差免被仰付候事ニ候但伊賀附并定府ノ諸士ハ御學校ノ勤學無之候得共去夏御自筆ヲ以テ被仰出候御教諭ノ趣ニ付テ文武藝事相勵可申ハ御家中一般ノ事故伊州并定府ノ面々迄モ一統ニ一分通リ御用捨被仰出候間此段敬承可被致候且又專文武修行ノ爲ニ御用捨ノ義ニハ候得共三分掛リト相成候就テハ諸御用捨筋是迄トハ致相違儀候モ可有之候間猶以孰モ彌儉約相守リ諸事四分掛ノ處置ヲ以相暮此度ノ御用捨筋ハ全ク文武藝事ノ爲メニ用ヒ候様可被相心得候御勝手御最通リニ應シ本知ニモ被復被下度尊慮ハ申迄モ無之候得共追々被奉拜承候通リ御事故是迄ニ引換リタル儀等無之テハ以後年々ノ御用捨ハ可難被仰付候或ハ御領下民戸ヲ増シ御經濟等相行ハレ數十年ノ後ニ至候ハ今時ノ鑑識ヲ以テ不可測ノ御都合モ

可被出候タトヒ門下ニ列リ有之候テモ平生怠カチナル類虛名ノ者可被除之候尤四十歳以上猶厚ク心掛候面々不洩様可被相認候

年數皆勤之儀先達テ被仰出候趣モ有之候ヘ共只帳面皆勤ト申迄ノ勤振ニテ其實格別出精ノ志無之技術モ上達不仕者ハ不及御湯汰候皆勤ヘ不仕候得共出精ノ志不怠格別達者ニ仕候ハ世話役相談ニ及ヒ無異儀候ハ、連名加印仕書付可被出候師家一存ニテ取極候義ハ品ニヨリ情ニ牽カレ私ニ涉リ候事有之候テハ惣門歸致シ間敷間候惣テ傳授事等モ世話役相談ノ上取計ヒ可有之候譜代陪臣ノ内ニモ勝リ候者有之候ハ、是又可被申出候
右ノ條々被得其意世話役中ヘモ被示達心得違無之可被相守候以上

文政三庚辰年二月總敎裁定

覺

定刻限ノ間察門ヨリ外ヘ一步モ不可出候或ハ武藝場ヘ罷越度杯申立候儀不相成惣シテ退出迄ハ罷歸被申間敷事
清書點式三點ヲ高點ト定メ清書字不殘三點ヲ加ヘ候節ヘ褒美ノ品遣之右ノ通三度續候ハ、御總敎ヘ御一覽被下其段親々ヘ役所ヨリ申遣御禮可被申上候事

不行儀ノ子供有之外ノ妨ニ相成候節者添役詰所ヘ引寄精誠示シ相習セ可申其上不相用不心得ニ候者習書師ヘ申入重々教誡ヲ加ヘ猶不相用候者両役申談足輕差添送り遣其親々ヘ及欠引可申候事

不快差支等ニテ不參仕候日者其段親々ヨリ名札相認不快差支等ノ趣相認近所ヨリ參者ヘ相頼斷可被申越候事

入門ノ子供いろはヨリ手本數凡五十本程相濟候迄ハ唐様好ミノ者ハ師役兩人ノ内申談相認可申倭様ノ方モ右同斷其子筆力相定候ニ至テ親ノ好ミ師役請込可申事

習書時刻

春分後者 三月中ノ一

九ツ半時ヨリ八ツ半時迄

夏至後者 五月中

八ツ時ヨリ七ツ時迄

秋分後者 八月中

九ツ時ヨリ八ツ半時迄

休日 朔 望 廿五日

右之通御總敎ヘ相伺定候以上

師役共

文政三年庚辰二月廿日督學通達

御家中風俗ノ本ハ文武諸稽古場ノ習ハシニ因リ候事ニ候得ハ師家ノ風儀正敷無之候テハ士氣厚ク士風整候事出來立難ク隨テ技術モ手薄ク折角御學校御取立被成下候詮モ無之儀ニ候先達テ御總敎被仰渡候武藝場定ノ御條口入念熟讀

以テ不時ニ被仰付候儀可有之候御在府ノ節ハ總教ヘ御代見被仰付不時ニ打臨一覽ニ可及候三馬場モ可爲同前候但何レモ稽古場ヘ可被爲入歟ノ御儀前以テ御沙汰無之御行掛ニ可被爲入候譜代陪臣トモノ稽古モ御覽被成下候兵學稽古場ノ儀者講堂ニ被準御入不被遊候但臨時思召ヲ以テ御監臨ノ義者格別ノ事

諸師役門下取立方ノ厚薄門人出精ノ様子毎々被爲入御見及被遊候者夫々可奉蒙御監識事ニ候間師弟共ニ其心得ヲ以テ別テ無油斷可被相屬候

兵學ノ儀ハ儒學ノ通一流ニ不拘廣ク學候事可然候諸ヲ兼テ究メ得失相考ヘ機變活用ノ勵可爲肝要候一流ノミ相泥候テハ固陋ニ相成兵道ノ害可有之候御當家御軍法ノ御儀ハ御元祖様ノ御制度被爲在候併近代御軍用ノ御手宛筋山鹿流御差加ヘ御用ヒ被爲在候義モ有之候爾來四流共御軍格御武備ノ要樞共存寄ノ儀大小輕重トモ夫々可被申上候尊者ノ上被差加御取用可有之候

名聞勤振ニ涉リ假令ケ間鋪儀者遠慮可有之事ニ候或ヘ門人ノ多少ヲ相爭ヒ却テ教方ハ不行届ニテハ心得違ノ至ニ候何分引立方手厚ク相屬ヤシ銘々門下ニ手タレノ高弟數多出來立候事實ニ流義ノ蕃昌ニ候此義專一ニ可被心掛事ニ候諸師役門弟ヲ仕立候義技藝而已ノ事ニテハ有之間敷專ニ士氣ヲ勵シ士風成立候様心ヲ用ヒ教導可有之儀ニ候タトヒ技術達者ニテモ風俗懦弱氣節不立候者ハ御用立申間敷候右ニ付師道ノ權輕ク威令行ハレス候テハ指南難行届候間以後師弟ノ禮法嚴重ニ相立候テ急度可被相卒候若門下取締リノ差障ニ相成候者於有之ハ可被令退門候

御家中ノ子供手習場讀書場ハ幼年ノ生ヒ立場文武諸稽古場ハ士ノ成長所ニ候終日諸稽古場ニテ育テ候事ニ候得者終日士風ノ儀ハ文武諸師役ノ仕込次第ニテ人物ヲ仕立出シ候事ニ候左候得者稽古場ノ風俗ヘ至テ大切ノ儀ニ候間何分風儀正敷諸事手厚ク有之候様類役仲間相互ニ勵合可被申候

門弟銘々當リ前ノ稽古相濟候ハ、速ニ退出シ次ノ稽古場ヘ罷越可相勤儀ニ候間徒ニ居滯不申候様差圖可有之候尤空談雜說堅ク可被禁止候

馬場ニ於テ群集仕徒ニ際テ費シ申間敷騎終候ハ、早速他ノ稽古場ヘ可罷出事ニ候但達者ノ面々ハ居殘リ候テ初進ノ輩世話可有之候諸稽古場何レモ可爲同斷候

大身家督ノ面々モ御學校ヘ可被罷出義ニ候得ハ以後師家ヘハ被罷越ニ不及候但御學校ニ於テ別段式日賴有之候得ハ可被及相談候

文武御手當御調ノ爲メ并家督跡目御評議ノ節御入用ニ付向後三ケ年毎ニ諸師家門弟甲乙帳面世話役連印ヲ以テ仕立

御家中獨禮以上ノ面々家督中役儀相勤候者并祿ノ高下家督手數相應ニ江戸詰御使等勤有之候者ハ是迄ノ通家督跡目無相違可被仰付候但假令江戸詰御使等ノ勤仕候テモ文武ノ業不心掛ニ候者又ハ行狀不宜候者ハ家督其儘ニハ被下間敷候

學問并武藝二流達者ニ仕候者并學問不得手ニ候テ武藝三流以上達者ニ仕候者ハ家督中爲指勤モ無之内相果候トモ平生文武ノ業相嗜御奉公ノ心掛厚候ヲ以跡目無相違可被下候

家督中爲指勤モ無之其上文武ノ嗜モ格別ノ間ヘ無之者モ嫡子部屋住中學問并武藝ノ心掛拔群ニ候ハ、御憐愍ノ御沙汰ヲ以テ無相違可被下候且又嫡子幼少ニ候者ハ格別ノ儀既ニ成長ニ及ヒ候處無精不嗜ニ候者ハ相續ノ節嚴重ノ御沙汰ニ可被及候

幼少ニテ家督拜領仕不幸ニテ無程致早世候者モ親ノ家督中御奉公ノ淺深文武ノ心掛ニ因テ御評議有之父祖格別ノ者ニ候得者跡目無相違可被下候但醫師其外家業有之者モ右ニ準シ候事

祿高ノ者程從前ニ御加恩ノ儀稀ニ有之候處平等ニ減知被仰付候ハ不相當義ニハ是迄モ大率御差別ハ有之候得其猶又向後祿高ノ次第ニ因リ格別御仁恕ノ御制度モ御治定有之候事ニ候間此旨夫々可被奉敬承候但高祿ノ家ニ各家柄ノ規模不一様候得其孰モ不一通家筋ノ者故不幸ニテ及減知候ハ別テ御殘念ニ被爲思召候乍去終身行狀不宜或ハ重キ御法度ヲ犯シ又ハ文武ノ業不意掛之者ハ假令高祿ノ者ニテモ其輕重ニ從ヒ御心外減知可被仰付候事

右之趣不一通御仁慮ニ依テ永々御治定被仰出候之間尊旨之趣一統被奉服膺於御學校修行無油斷相勵可被申候事
文政三年庚辰二月總教達

武術師役へ達書

覺

孰モ於御學校稽古塲拜領被仰付一際入精可被相勵候

諸師役御學校ニ於テ一同ニ被相勵候義ニ付類役組合ニ被仰付候間諸事仲間ニテ申令候諸願伺事組頭取次總教へ可被申問候御學校へ關係ノ義ハ督學申談ノ上可申出候但馬役ノ義馬ニ係リ候義共ハ是迄ノ通大横目可爲支配候

私宅ノ稽古塲御建被下有之向モ此度其儘被下置候間勝手ニ可仕旨被仰出候但弓鉞砲兵法柔其外寒稽古夜中ニ致來候向ハ是迄ノ通居宅ニテ可仕事尙又其餘諸流トモ不時申合等夜稽古ノ義モ右同斷ノ事

御學校直宿御番兩人充組合輪番可被相勤近火有之節ハ除馬役ノ外一統ニ講堂へ相詰御手當可被相勤候

奏得其音師家ノ風範門弟ノ禮法教育ノ仕方諸師役一統ニ申合繋習改革可有之右ニ付猶銘々存寄ヲ以テ一稽古場切ニ取締リ重々仕法相立候様夫々御考可被成候門下ノ風年來猥ケ間敷ニ馴安シ候ニ付其徒ノ氣合ヲ憚リ仕癖ノ儘不相改御修目ノ趣等間ニ被打過候ハ可爲越度候各何レノ師家モ稽古場ノ法式先師以來數代ノ頃迄ハ師道正敷諸門人忍敬ヒ威徳嚴重ニ有之候ニ付技藝指南而已ナラス行狀必得方迄モ相誠ノ糾シ候事行ハレ師弟之間親切ニ頼母敷今ニ至テ中傳ル美談不少候何分師道ノ權屹度立候テ威徳ヲ以テ門下ヲ相率ヒ候事教道ノ肝要ニ候間此度稽古場ノ作法數代前ノ規格ニ復古致シ候歟又ハ年來ノ積弊一洗ノ爲更ニ改テ新ニ格法ヲ立定候歟惣テ教育ノ仕様門人ノ取扱方童子ノ行儀作法等ニ至迄モ世話役中重々申談シ連名ヲ以テ簡條書付夫々委細被認出候様可申達旨御總教被仰聞候間常晦日迄ニ御學校ニ於テ督學詣所へ御差出可被成候拜領ノ稽古場追付御引渡シ可申ニ付御差急キニ御座候以上

文政三庚辰年二月廿日

津坂常之進

文政三年庚辰二月廿二日藩主ノ布令

自筆ノ寫

家中ノ者其家督跡口申付候節舊例勤ノ有無ヲ以令減知候事不便ノ義ニ付祐信院職厚キ御存念モ有之天明八年ノ□□□此度先代ノ遺志ヲ繼キ一統令用捨候仍テ向後平生文武奉公ノ心掛ヲ以可及家督ノ汰沙候條此旨重々覺悟イクシ學校ニ於テ修行無油斷相勵可申候惣テ制度ノ趣老共委曲可申聞候也

孟春念五日

年寄共

文政三年庚辰二月執政達

書付寫

御家中諸士家督跡目ノ儀前々ヨリ一代ノ内勤無之者ハ減知被仰付候儀如御定法相成有之候處祐信院様御代厚以思召御評議被仰付諸士家督中江戶詰御使等ノ勤無之テモ行狀并文武ノ心掛ニ依テ本知無相違可被下置之旨御治定被爲在候御事ニ候殿様御家督以來此儀彌深々被爲盡尊慮諸士大小トナク不幸ニシテ致早世候者共父祖ノ代役義相勤候歟又ハ文武ノ心撫厚ク候テモ其子孫家督間モナシ病死イタシ候トキハ如舊例減知被仰付候段不便ニ被爲思食候其上近來御省畧ニ就テ江戶詰御使等ノ勤モ自ツカラ間遠ニ候處不幸ニシテ相果候者減知被仰付候ハ尙更ノ儀ニ被思召候因之重々御評議ノ上第一ハ御先代ノ尊旨ヲ被爲繼今般格別ノ御仁惠ヲ以テ向後御家中家督跡目ノ御制度如左御治定被遊候

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ家塾寺子屋等ニ於テ適意修學セシム 安政五年戊午七月藩立郷校修文館ヲ大門町ニ設
クルニ及ヒ市人ノ子弟ヲ其館ニ入ラシメ讀書習字算術ノ三科ヲ教フ但農民等ハ藩制ヲ須ヒス隨意修學スルヲ妨ケス
家塾寺子屋設置ノ制度 別ニ取締ノ制度ナク自由ニ開設スルヲ得セシム

學校

校名 有造館

校舍所在地 伊勢國安濃郡津丸之内

沿革要略 藩主高尊儒學ヲ尊重シ人才ヲ陶鑄スルニ志アリ文化年間始メテ鴻儒猪飼敬所ヲ聘シ待ツニ賓師ノ禮ヲ以テス
文政三年國校ヲ城壕ノ東北ニ經始ス藤堂光寬津阪孝綽ニ命シテ之ヲ董ス翌年十月ヲ以テ斧鋸ノ功ヲ奏ス之ヲ名ケテ有

造館ト云フ蓋詩ノ語ヲ執ルナリ抑モ其布置タルヤ中央ニ聖廟ヲ安シ周圍ニ二十八區ノ教場ヲ列シ圖面ニ示ナリ又校外ニ於
テ七區醫學騎射水練電螺一ノ諸流ヲ置ク是ニ於テ新寬ヲ以テ兼總教トシ孝綽ヲ以テ督學トシ以テ學則ヲ定メ文武教師ヲ置

キ一藩士臣ヲシテ文武ヲ鑽研セシム是ヲ建學ノ初トス文政八年七月石川之駿ヲ以テ督學トス之駿學考據ニ長キ典故ヲ

諸シス其人トナリ謹恪持重進止常所アリ學政ヲ掌ルコト二十年諸寮秩然事皆條アツテ紊レス又高猷ノ命ヲ奉シテ溫史ヲ

刊行ス當時名儒齊藤拙堂土井整牙川喜多梅山淺生敬榮等皆校雙ノ役ニ與ル藩士ノ史學是ヨリ大ニ進ム弘化元年齊藤拙

堂ヲ以テ督學トス拙堂學和漢ヲ網羅シ風ニ詩文ニ長スルヲ以テ名天下ニ高シ時々文筵詩會ヲ開イテ以テ章句ヲ摘マシ

ム藩士ノ詩文是ニ於テ一變ス又演武莊ヲ開キ步騎ヲ練習セシメ傍ヲ武教場ヲ建テ劍客槍士ヲ待ツノ所トナス嘉永安政

ノ際武學諸流ヲ置キ或ハ醫學館ヲ設ケ以テ實益ヲ求ム是ニ於テ武夫輩出ス噫嘻文武人才ノ盛ナル蓋拙堂ノ時ヲ以テ極

トス當時海内稱シテ文武ノ淵藪トス眞ニ溢言ニ非ルナリ是高猷ノ文武ヲ重ンセラル、ニ出ルト雖モ抑モ亦拙堂翼贊

ノ力ニ非スト謂フヘカラス 安政六年川村竹坡拙堂ニ代ル竹坡學術經義ニ明カニ兼テ詩文倭歌ニ巧ミニ學政ヲ執ルコト綴

密人ヲシテ聖賢ノ範圍内ニアラシム未タ幾ナラスシテ齊藤誠軒代ツテ學政ヲ督ス誠軒人トナリ溫良沈默學力深涵最モ

詩ヲ善シス筆ヲ下セハ光彩人ヲ驚ス明治二年土井整牙代ツテ督學トナル整牙才氣俊發學力該博最モ文章ニ長ス世人稱

シテ獨歩トス學事ヲ督スルニ人ヲ檢束セズ而シテ文武益進ム當時藩制ノ釐革ニ遭遇シ局ヲ建ルコト八區學校ヲ以テ其

ノ一ニ充ツ之ヲ名ケテ教育局ト云フ同年又八局ヲ減シテ六局トシ教育局ヲ改メテ立教局ト云フ是ニ於テ弓術軍馬槍術

薙刀倭流砲術ノ如キ者ヲ廢シ更ニ巨砲擊劍拳搏調馬ノ四大教ヲ設ケ或ハ屯所及ヒ讀書寮ヲ設ケ以テ兵士ノ屯聚讀書ス

軍師並諸師役共是迄ト違ヒ御學校へ罷出教授骨折可申付ニ付爲役料別紙御書付ノ通每暮白銀可被下候但分掛ノ御用
 捨並別段被下物等有之而々ハ總テ是迄通被下候事
 右之通被仰付候條可被奉得其意候以上

(別紙) 武術方白銀被下

覺

一白銀七枚充

軍師三人

一白銀五枚充

武藝師役廿一人

右之通年々被下候事

修業獎勵法

藩士ノ内從來家計困窮ノ爲メ心志ヲ勞シ文武ノ本業ヲ專ニシ能ハサルモノ不少ヲ以テ文政二年己卯^{建學}

五月一日如左年賦返納金或ハ一時下行金等ヲ貸給シ弘化四年丁未七月三日再ヒ下行金ヲ給與シ家計ノ困窮ヲ救助シ

文武ノ修業ヲ獎勵ス

〔文政二年己卯五月一日救助〕

知行百石、扶持高二十人扶持、切米百俵、金給三拾三兩ニ付金拾五兩ノ割ヲ以テ祿高

ニ應シ無利足二十ヶ年賦管渡

勝手向差支無之借用ニ不及者ハ祿高同上五兩ノ割ヲ以テ一時下行 右兩條共相斷

候者ハ後日ニ至リ無據入用有之節ハ借用出願ヲ許ス 一代限ノ者ハ祿高同上五兩ノ割ヲ以テ一時下行 部屋住勤ノ

者ハ祿高同上三兩ノ割ヲ以テ一時下行 親知行ノ内ヲ以テ相勤候者ハ貸渡下行トモ無之

〔弘化四年丁未七月一日救助一時下行〕

知行百石ニ付金三兩ノ割 扶持方二十人扶持、切米取百俵ノ者ハ知行百石

ノ割金給取拾兩ハ切米三拾俵ノ割 五人扶持取廿五俵取ハ金八兩 右以下金三分 部屋住勤ノ者、一代限ノ者、太夫

役者ハ下行無之 知行減少高ニテ相勤候者ハ本高ヲ給ス

士族卒ノ子弟教育方法

士族ノ子弟ハ必ス藩立學校へ入學セシメ卒族ハ別ニ檢束ヲ用ヒス士卒トモ餘暇ヲ以テ家塾ニ修

學スルハ各自ノ意向ニ任セリ藩費ヲ以テ他國へ遊學セシムルハ漢學醫學洋學武術等本人ノ志望ニ應シテ許可シ又ハ藩

命ヲ以テ遊學セシメ在學中三人口或ハ二人口ヲ給ス格別遠國ノ遊學者ハ口糧ノ外特ニ年賦返納金若干ヲ貸與ス但遊學

ヲ許可スルハ大約十人ヲ定員トス

每二七四九ノ日藩士十六歲以上ハ有造館ニ於テ講義ヲ聽聞セシムルノ制ナリ而シテ藩士ノ當主ハ四九ノ日登館シ子弟ハ

二七ヲ以登館ス後チ式日ヲ改メテ四九トス爾後當主弟子登館ノ別モ廢セリ

文學六科 國學漢學毎日朝 洋學同 隱學毎日朝 書學毎日朝 數學毎日朝 禮節同 ○武術六科 砲術毎日朝 步兵同
擊劍同 拳搏同 調馬毎日朝 泅水毎日朝 以上明治四年改定ノ學科

學規 藤堂高允親筆ノ尙書周官學古入官以下十言ヲ講堂ニ揭ケ以テ學規ニ代リ記 藩主ノ子弟年十五必登席ス又養正寮ニ於テハ句讀書法ヲ教ヘ禮節算術ノ二科ヲ兼修セシム童子九歲ニ至レハ必ス入學セシメ十五歲ニ至リ退學ス但學齡ヲ終ルモ十八史略ノ素讀ヲ卒ヘサルモノハ仍ホ在學セシム子弟十五歲以下ハ文學ヲ專ラニシ武術ノ初歩ヲ兼修セシメ十六歲以上ハ武術ヲ專ラニシ文學ハ本人ノ志望ニ任セリ

試驗法 毎年十二月末日句讀察ハ教師ノ見込ヲ以テ上達生數名ヲ撰擇シ寮中ニ場ヲ設ケ既修教科書ニ就キ素讀セシメ優劣ヲ判ス習書察ハ毎年十二月上達生數名ヲ撰ミ豫メ手本ヲ授ケ末日ニ至リ宿書ヲ出サシメ優劣ヲ判ス

賞與 成績優等ノ者ヘハ督學ヨリ年末書勳書籍等ヲ以テ賞與ス 平素文武勉勵ノ者及ヒ品行端正ノ者ハ年末ニ金員或ハ扇子等ヲ賞與シ武術一流ノ皆傳ヲ得タル者ヘハ藩主紋樣ノ麻上下一具并白銀等ヲ賞與ス但皆傳麻上下ハ其身一代限り著用ヲ許シ其子孫ハ襲用スルヲ得ス 凡ソ學校ヘ入學又ハ賞與ヲ受ケ藩主ノ監臨ヲ受クル等ノ事アレハ禮服著用總教督學及ヒ師範家ヘ回禮スルヲ例トス
罰則 不良ノ行アル者其重キ者ハ降卒チンテ生徒ノ自宅ヘ護送シ且ツ狀ヲ父兄ニ告ケシメ數日間門外ニ出ツルヲ禁ス其輕キ者ハ下目附ノ譴責ニ止マル

學則

學則序 士大夫之業或武而不文若文而不武是病偏枯者豈不惜哉必道藝並修文武彬彬乃爲全人矣隨陸不武絳灌無文英雄負謗不尤惜乎總教大夫國校學則爲是而作議論誠至教諭太切實士林藥石也夫入學子弟熟讀佩服從事于斯人人文武兼備無復偏枯之病士皆足治亂其用大夫各可入相出將其爲國家造就人材豈不彬彬盡美哉孝練不敏承乏督學因序以誌後進冀其驗刮目以待之文武歲次申申冬至之日東陽津阪孝練撰

學則

有造館講經用漢唐注疏然不必墨守其義夫子祖述堯舜憲章文武未嘗有宗派彼固執其所信而爭宗派者陋矣大抵漢儒注釋簡古然見道淺近而有固陋之失宋儒注釋詳密然親聖高遠而有駁難之弊與其詳而難也寧簡而陋故從漢儒也又恐其有不能令諍官折中諸家以補正之庶幾得聖人之旨矣若信其固陋而斥博聞者不超賊夫人之子將奈聖經何可不思哉我有造館之制

ルノ所トス又別ニ修文館ヲ大門市街ニ移シ益々教導ヲ施ス是ニ於テ舊校一新皆實益ニ就ク是整牙翼贊ノ力多ニ居ル同四年立教局ヲ改メテ校名ニ復シ文武各六科ニ分ツ同十二月廢藩置縣ニ際シ遂ニ校舎ヲ鎖ス

教則

養正寮中句讀寮教科用書 論語、孟子、詩經、書經、易經、禮記、春秋左氏傳、十八史略、史記、前漢書、綱鑑易知錄、資治通鑑

鑑

同習書寮教科用書 いろは、數字、上大人、十千十二支、千字文、唐詩百絕、消息短歌、武具短歌、消息往來、詩歌、狀ノ文

其他教師ノ見込又ハ本人ノ望ニ任ス

授業ノ方法 教師生徒トモ朝五ツ時登校シ教師ハ先ツ諸所ニ集リ生徒ハ學校ヨリ渡サレタル著到札ヲ掲ケ習書寮ノ自

席ニ就キ習字ヲナス五ツ半時ニ至レハ各教師ハ受持ノ席ニ就ク（是ヲ先生立ニト稱ス）次小姓ハ當日出席生ノ登校遲速ニ隨ヒ

受業了ラハ自席ニ復シ習字ヲナス朝五ツ半時ニ至レハ下目附ハ教場ノ中央ニ遞參ノ二大字ヲ書シタル木牌ヲ揭示ス

此時ニ後レテ登校スル生徒ハ下目附ニ於テ罷責ヲ加フ四ツ時ニ至リ又「無言」ノ木牌ヲ掲ケ靜肅業ニ就カシム退散時

限（朝四ツ半時タハツ時）ニ至レハ次小姓ハ著到札ヲ外シ登校順序ヲ以テ生徒ノ氏名ヲ呼ビ著到札ヲ渡シ退散セシム故ニ教場

ノ出入ハ雜沓セス生徒中習字上達ノ者數名ヲ撰ミ小助教トナシ卓氈ヲ授ケ新入生數名ヲ屬シ教授ヲ補助セシム生徒

ノ年齡ハ九歳ヨリ十五歳マテ七年間トシ九歳ヨリ十二歳迄ハ隔日午後ニ禮節ヲ兼修シ十三歳ヨリ十五歳マテハ算術

ヲ兼修ス驟雨ノ節ハ下駄傘ヲ貸與ス又茶所及ヒ水汲ニ赴ク等凡テ自席ヲ離ル、片ノ坐作進退ノ監督ハ下目附之ヲ掌

リ毎年票札ヲ授ク票札ハ常ニ之ヲ備ヘ置キ茶所ハ茶字水汲ハ水字ヲ記シタル七八寸許ノ木札ヲ用フ

授業時間 春分後ハ習書時刻九ツ半時ヨリ八ツ半時マテ 夏至後ハ同八ツ時ヨリ七ツ時マテ 秋分後ハ同九ツ時ヨリ八ツ

半時マテ〇休日 朔、望、廿五日 右時間及ヒ休日ハ文政三年庚辰二月ノ定メ

授業時間 朝五ツ時ヨリ夕八ツ時マテ但暑中ハ朝限リトス〇休日 五、十ノ日 右嘉永安政以後ノ定メ

學科學規試驗法及ヒ諸則

學科 文學〇兵學 山鹿流、長沼流、甲州流、北越流天保十年己亥正月廢之〇弓術 吉田流〇砲術 米村流、不易流、自得流〇馬術

森内流、高畑流、中村流〇軍馬 神妙流〇劍術 新陰流、若山流、一刀流、一全流天保十年己亥正月廢之〇居合 新心流天保元年庚寅八月廢之〇

槍術 無邊流、内海流、鏡智流、高田流〇薙刀 知新流〇柔術 關口流、堀心流、實光流、楠流〇禮節 伊勢流〇天文算

術〇中卷天保元年庚寅六月廢之〇醫學〇騎射天保十年己亥正月廢之〇軍學天保十年己亥正月廢之 以上文政年間創設時代ノ學科

有非常之事則畏縮震懾不知所措豈能當矢石及之危及其國破城陷則束手爲賊所縛駢頭受戮無與兒女子異豈可謂大丈夫乎若夫逃避禍亂入山浮海以至其身其言雖高其行雖潔不能靖亂濟民則無用之人與異端方外之徒奚擇焉是無他皆陷於偏文不知聖人治常變之義也昔周室衰王道微孔子成春秋而亂臣賊子懼戰國之時邪說詖行有作孟子說仁義而楊墨之言熄後世學者以爲聖賢之極處余謂不然聖不得其位賢不得其時不得已而出於此也已何則雖有至德而不有至位則不能行聖人之極處也以至德居至位得行聖人之極處者獨堯舜而已堯舜尊以德化治天下然小之寇賊姦究塞教梗化則五流刑五以黜罰之大之蠻夷猾夏苗民逆命則簡將發軍以致天討文武時措威德是布奠不得其宜堯舜猶不能廢威武況不若堯舜者乎苟卿氏曰仲尼聖人之不得時者也然使其得勢則爲堯舜矣蓋使孔子得位則發一號而亂臣賊子懼何必須春秋使孟子得勢則出一令而楊墨之言熄何必辨論若教而不化令而不草則行天刑以正之孰敢不化是聖人四時之教春生秋殺行其極處者也故軍旅之與備于聖經無遺漏焉後世偏文之徒若聾若聵不能求而得之可勝慨哉國校講筵雖一據聖武亦未廢兵家之言政依舊置軍師教員以使講其書及戰策不學一流之法而聞聖武之要豪傑之士則能解之矣佗則不能也故初學不聞兵家之言則雖淺近之事不能解況於勝敗之數乎且夫兵家之言雖有長短得失能捨其短而取其長何其不可也矧我藩軍師講習有素而積時之勞俱爲有用之器且今奉承國校之制以聞文武之大義則豈復有固執之弊耶然余有一言爲之戒者兵國之大事固執一家而不窺他流則不能盡機變轉化之用故學者不得博探諸說而較其得失此在爲師者能開弟子以涉獵他流也故師當恢其度量不設畛域於心若夫妬心陋見使弟子不得窺他而膠固其門將奈國事何可不思哉軍旅之事仁禮義信爲之本智略次之節制次之大原曠野彼我卜日接戰陣法方圓之利金鼓旌旗之約進退疾徐之法皆以其律先爲不勝而爲勝此所謂節制也出其不意攻其不備而機得謀當則勢節之妙如迅雷疾風之破山拔樹若然者陣法無所施金鼓無所用進退之法舉爲長物敵人雖有策謀而不遵行故善制勝者善行無入之地用力少而見功大矣此所謂智略也霍嫖姚曰顧方略何如耳不至學古兵法故節制不如智略孟子曰國君好仁天下無敵故智畧不如仁禮義信然三者不備則非善之善者也我邦名將長於節制者莫若武田信玄長智略者莫若源廷尉非唯二將然大凡戰國將士生於相斫之中頗能知之非唯得士然盜賊亦有能之者盜有大小小者終身不能免賊名大者至興家開國莊周所謂竊鉤者誅竊國者爲諸侯是也故其憑恃險阻構築結營利則出不利則守以鹵掠行路通於於山戰之術者也潛伏洲嶼乘風波之便變幻出沒以劫奪舟船通於水戰之術者也故節制智略依仁義而施則爲靖亂之主爲利欲而用則爲姦賊之雄故曰軍旅之事仁義爲之本也

余嘗有言曰孫吳以前無孫吳雖無孫吳方略之妙無所缺也何者古昔王侯大夫未有不達文武者故當時卿相入相出將春秋之衰於然考於左氏可知也古風已喪士大夫不以文武爲己任於是兵家者起矣後世縉紳相踵蹈偏文武之弊優遊華侈以撥亂之

有大異於他邦者其講道藝不偏言文而必合言文武蓋世之教場所謂兼文武者大抵以講堂爲文場弓馬槍刀諸藝樹爲武場其所謂武者不過擊刺馳驟之技非我所謂武者我所謂武者與斯文相爲左右者也然則設幣暇堂以講武學何也曰此特軍師講習其家書耳亦非我所謂武者而夫兵家或舉文武以自任或謂其武足以應治亂或謂其武與文左右皆不通者也我所謂武者即神聖之寶器而未嘗與斯文相離也蓋聖遠道衰異端並起舊章壞而神武之用廢矣故佩符持鉞司三軍權者大抵非木強無文不知仁義之徒則姦雄竄逆外飾仁義之賊也故其舉兵也徒在利己縱欲而不在宗社生民之安也甚者焚燹民居虜掠婦女殘暴慘毒無所不至此所謂率土地食人肉者民之災害可勝悲哉於是乎偏文之士深疾惡之引聖人微仁義以攻之或以爲凶器或以爲狙衛抵排摺磨不遺餘力傳曰兵猶火也弗戢將自焚也彼弄凶器行狙衛者不知自焚誠不可不斥之也然疾之已甚則矯枉過激以失其正故黜武之言極而忘亂之弊生焉偏文之說浸潤漸漬決人之腹中天下無知其非矣寬嘗有感於此泝源探本研究經傳竊以立言數十年矣夫歲國校開業之時臨講席以發其緒言云此館非獨爲成就文人學士而設必欲以成就文武有用之士也此即聖人之道非寬之私言而公之所望於群下也夫聖人之道者所以治天下國家也而天下有治亂其治也禮義以教百姓其亂也征伐以討不悖是皆所以從變制之也此在彼則聖人之道在我則皇祖神武之道我邦上世無論王公大臣皇后猶能征海外以討不庭後世學者不能知之以爲神聖之道文德而已何其繆也子貢問政孔子曰足食足兵使民信之矣魯禦齊師冉有用戈以破齊軍季孫謂冉有曰子之於戰學之乎性達之乎對曰學之孔子夫子孔子者大聖人不該文武並用兼通求也適聞其戰法猶亦之詳也孔門言兵明切如是而學者不屑武事流爲偏文之徒何也若夫衛靈公及孔文子共聞軍旅而夫子不應者皆失其問也世儒不察謂孔子不學軍旅以此藉口以鼓其偏文之說噫嘻謬矣夫孔子誠不知軍旅則何煩齊戰之有何請討陳恒之有苟用於世豈其垂拱爲軍周平不思之甚也寬嘗著聖武者證以易詩書春秋論語家語爲徵以辨學者陷於偏文之弊又著軍旅聖摸以明兵法悉備於聖經并貶兵家祖宗孫吳猶可矣學聖人者言兵轍師孫吳何也豈可與語王者神武之用乎蘇老泉有言曰孫武十三篇兵家舉尊以師之以吾評之其言兵之雄乎知言哉孫吳之言取以爲聖武之資可也師之不可也抑當師之者備於經典此我所謂聖武也周易師兵衆之象其爲卦坎下坤上坎險而坤順坎水而坤地々民之象也水兵之象也古者寓兵於農蓋伏至險於大順藏不測於至靜之中者也如孔子軍旅之妙好謀一句足以包括戰法之杞機而其深圖明畫詳于易傳師卦彖傳釋軍旅之紀律習坎彖傳示武備之要領而其至精至變悉在繫辭傳天子不陽說之陰附於此者蓋聖人語常而不語變故託之微言以使人思而得之也是以偏文之徒讀之則徒覺文教之有餘耳夫水不外於地兵不外於民故知兵法不外於聖經是亦非所謂伏至險於大順藏不測於至靜之中者耶誠能解神文聖武之義則必知經籍爲治亂之用矣後世學者偏文之弊終身從事筆硯勇不知刀槍之技憶武技猶不能知而況於軍旅將略之事乎此其名則士而其實與醫卜爲伍者也其在承平則張口鼓舌以驚俗士文陣無敵筆搖五岳一旦

醫學寮學頭一員

武職 兵學師役三員 役料講師ト同シ○弓術師役一員 役料白銀五枚(以下同シ)謝儀若干但謝儀ハ自流門第ノ多寡ニ應ジ差アリ○砲術師役三員○軍馬師役一員○劍術師役三員○居合師役一員○槍術師役四員○薙刀師役一員○柔術師役四員 以上ノ師役ヲ類役組ト云ヒ總數ニ隸ス○中卷世話役一員(以下俸祿不詳)○騎射世話役一員○水練世話役一員○軍螺世話役一員○一全流世話役一員○北越流世話役一員 以上ノ世話役ハ師役ニ非サルヲ以テ類役組ニ入レス○臺所總司勘定吟味役兼之一員○臺所頭二員○下目附二員○句讀習書行儀目附一員○次小姓十員○手代三員○學校定掛リ一員○普請方一員○手本作事方一員○棟梁一員○職卒若干員

右職名ハ文政年間學校創設ノ際之ヲ定ム文政四年十月ニ及ンテ督學參謀一員ヲ置ク若シ督學參謀缺ルアレハ督學加談ヲ置キ以テ之ヲ補フ六年五月ニ及ンテ講師加リ一員ヲ置ク十年六月ニ及ンテ典籍二員ヲ置ク閏六月ニ及ンテ武技場日付二員ヲ置キ以テ諸教場ヲ巡監セシム天保十四年十二月ニ及ンテ時習館ニ會頭一員師役一員副役一員ヲ置ク其他文職ニ在テハ副役助教ヲ置キ武職ニ在テハ副役引受助教及ヒ助教等ヲ置ク然レハ皆定員アルナシ

明治二年五月從來ノ職名ヲ改メ更ニ官等職制ヲ定ムル如左

總數一等官(以下俸祿不詳) 教育管事二等官 督學三等官 督學參謀四等官 育生司事同 文武監察同 文武教師五等官 育生教師同 總司六等官 筆手巡察七等官 庶務方同 屬吏八等官

〔職務章程〕 總教 文武ノ督責勸怠ヲ賞罰局中進退ヲ總掌ス○督學 文武ヲ屬精シ局事ノ庶務ヲ掌ル○督學參謀 伊州學館ノ事務ヲ掌ル○育生司事 醫學生員學務ノ庶事ヲ掌ル 但教育管事ト育生司事トハ缺員教育管事ハ參政兼之育生司事ハ督學及ヒ督學參謀兼之其新ニ増ス職員ハ教育管事二員育生司事一員教師二員筆手一員演武莊掛屬吏一員ニシテ其他ハ皆舊數ノ如シ

明治二年十月教育管事筆手巡察ノ三職ヲ廢シ學校職員ノ名稱ヲ改ムル左ノ如シ

立教局 總督一員、督學二員、督學參謀一員、文武監察三員○有造館 講官三員、副講官一員○整暇堂 講官兵學教師一員、副講官同二員○養正寮 句讀教頭二員、同教師三員、同副教師一員、習書教頭一員、同教師二員、同副教師一員○育生館 教師一員、副教師一員○洋學館 教師一員○數學教場 教師一員○數學教場 教師一員○儀節教場 教師一員○修文館 句讀教師二員、習書教師一員、數學教師一員○大砲教場 教頭一員、教師一員、副教師四員○擊劍教場 教頭一員、教師三員、副教師三員○拳搏教場 教頭一員、教師三員、副教師二員○調馬教場 教頭一員、教師二員、副教師一員 右ノ外總司ヲ出納監司

用舉付之兵家恬然不惜噫已不能守又假之於人不亦蒙昧之甚乎宋季觀曰俾爾由庠序踐古人之迹天下治則譚禮樂以陶吾民一有不幸猶嘗伏大節使爲臣死忠爲子死孝使人有所法此言良然々如偏文之士雖慷慨赴死不能盡其道也當緩急之際厄弱不中用終身之學一無所施假令其言感動天地哭泣鬼神無益於存亡之數也夫人事與天地參而文與武猶如有陰陽陰陽不可偏廢則文武亦不可偏廢也此國核立教之極聖人復起必率由斯道故曰士君子之爲學也在以文武爲己任此非寬之私言在彼則堯舜孔子之道在我則天祖神武之道大神至聖其揆一也竊自顧念承乏總教日夜戰兢惟恐委任不效以辱公之明今茲辛巳之夏國督學懲與而撰國核興造記越仲冬恭奉公命以述此篇區々之心不顧痴突諱々不已此寬所以少報國家而大望於後進也文政四年辛巳十一月執政兼總教臣藤堂光寬謹撰

國核學則跋

吾公創建國核非以粉飾太平將欲使闔藩人士兼脩文武效致治之用總教潔齋大夫奉命撰此書言之詳矣世之文士衣袂博帶筆研之外不解一事輒曰挽兩石弓不如識一丁字讀書作文足矣竊以彼刺擊馳突爲所謂武人者率胸無墨潘蓬頭突鬢疾視扼腕曰天下惟有長槍大劍耳蠢爾書痴緩急何所用殊不知馬上不可治天下而一詩不能却敵之二人者皆非也士大夫事君亂爲干城治爲腹心文武偏廢奈何其可必也如諸葛武侯不獨八陣之雄天下二表亦足千古文如范文正公不獨文章傑出於當時胸中自有數万甲兵譬之四肢六体完備無缺二公其人也若夫隨陸不武絳灌無文比之偏枯至今世悠々之士又何免乎彎疏癱瘓之疾大夫抱扁倉之術憫然軫心徘徊顧望不肯望色而走既向項門下一針又且對症發藥殷勤鄭重醫治備至如此篇則儼然傷寒金匱其惠後進大矣狄梁公有言云吾藥籠中物何可一日無也謙於此篇亦云但其言不厭煩教諭甚勤靡々數千言謙初恨其乏巖々之氣今而思之父兄之於子弟愛之也深慮之也周諄々乎唯恐其不盡也公一國之父總教一國之兄代父訓子以兄告弟義亦當然詩不云乎匪面命之言提其耳闔藩人士苟以公心爲心以總教志爲志則文武之良臣矣若乃固陋襲常獲疾惡醫不止身偏枯之人又何成國家濟々之美可弗弗思哉文政七年甲申七月齋藤謙謹撰

職名及俸祿

總教執政兼之一員

役料五百石○督學兼侍講一員

役料三百石

但家祿ニ補足シテ三百石トス假令ハ家祿二百石ノ者ハ百石ヲ増シ二百五十石ノ者ハ五十石ヲ増スノ類

坐席寄合格○監督

普請奉行兼之一員

役料七十石

右三職ハ文武ヲ總轄ス

文職

講師一員兼侍講
一員兼典簿三員

役料百五十石

但支給方普學ト同シ

白銀七枚、謝儀配當同五枚○句讀師役十二員

役料白銀五枚、謝儀配

當同三枚(以下文學ノ師役皆同シ)○同見習一員○習書師役四員○同副役四員○天文算法師役一員○禮節師役一員○

祭儀 聖廟大成殿ヲ安置シ吉備公菅公ヲ配享シ毎年春秋釋菜ノ禮ヲ修ス
學校構造及ヒ建物圖面 別紙圖面ノ通 但中巻流ハ當今不詳
學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數

出版翻刻セシ書籍

司馬資治通鑑天保七年 津阪孝 聽詔堂案 天保六年 四月出版 同人 孝經發揮文政九年 同人 杜律詳解天保六年 四月出版 同人 道能柴折歌合同前 著 同人
光編天保七年 津阪孝 聽詔堂案 天保六年 四月出版 同人 孝經發揮文政九年 同人 杜律詳解天保六年 四月出版 同人 道能柴折歌合同前 著 同人
航詩話天保七年 津阪孝 聽詔堂案 天保六年 四月出版 同人 孝經發揮文政九年 同人 杜律詳解天保六年 四月出版 同人 道能柴折歌合同前 著 同人
窺天保二年 齋藤正 著 高青邱詩醇 嘉永三年 同人 三體筆陣雋語安政四年 同人 月瀨記勝井野好 五體便覽 嘉永四年 同人 大史公律曆天官三書管
萬言書注山崎義 大日本輿地便覽 天保五年 野田九 編 五月出版 同人 銅鑄日本輿地全圖弘化四年 村田佐 伊勢國細見圖 出版
語集解英國大砲隊指揮官ブリンクレ 譯述 英國銃隊練法 明治四年 四月出版

藏書ノ種類部數

和書 百八十八部○日本地圖類 百一枚○漢書 七十四部○外國地圖類 二十一枚○譯書 五十九部○算術書 七十
一部○法帖 三部

上野學校

校名 崇廣堂 初メハ文場ト云ヒ再ヒ改メテ講堂ト云ヒ三ダヒ改メテ學館ト云ヒ後遂ニ崇廣堂ト改ム
校舍所在地 伊賀國阿拜郡上野丸ノ内

沿革要略 文政四年辛巳二月藩主廣堂高允ノ時ニ當リ靈舍ヲ設ケ伊賀國ノ士ヲシテ文武ヲ鑽研セシメ以テ他日ノ用ニ適
セシメント欲ス抑モ該靈舍タルヤ南ニ正門ヲ開キ中央ニ崇廣堂アリ堂ノ西チ有恒寮ト云フ童兒ヲシテ青汗ヲ緋キ字形
ヲ臨セシムルノ所トナス寮ノ西ニ又諸教場ヲ排置シ武技諸流ヲ研磨セシムルノ所トナス然レハ砲術ノ如キハ別ニ教場
ヲ西ノ丸ニ設ケ以テ其技ヲ習ハシム蓋シ諸教場タルヤ甲寅地震ノ變ニ遭遇シ有恒寮及ヒ諸武場ハ皆毀頽ニ屬ス獨リ崇
廣堂ノミ依然トシテ存ス其後又有恒寮ヲ崇廣堂ノ南ニ建テ思齊舍ヲ有恒寮ノ東隅ニ設ケ又兵學寮ヲ有恒寮ノ舊址ニ造
リ武技諸場ヲ又其西ニ營ミ面目宛然又舊ニ復ス嘉永四年ニ至リ津ニ摹倣シ大砲教場ヲ西ノ丸ニ設ケ又講武莊ヲ城南裏
ノ谷ニ開ク安政元年思齊舍ニ會頭一員ヲ置キ十五歲以上ノ子弟ヲシテ書ヲ讀ミ文ヲ作ラシム明治三年ニ至リ種痘館ヲ
本町ニ建テ以テ痘癘ヲ防ク同年武技ノ二教場(庚午ノ年藩政改革ニ付廢ス)ヲ合シテ思齊舍ヲ移シ改メテ會頭一員教師

ト改ム其餘皆舊ノ如シ

明治四年五月教員ノ名稱ヲ改ムル左ノ如シ但督學及督學參謀庶務方屬吏ハ舊數ノ如シ

一等教師七員 二等教師二十六員 三等教師二十一員 一等副教師十二員 二等副教師五員

職員概數

教員五十八人 事務員二十六人 計八十四人

右文政年間學校創設當時ノ人員ナリ其後天保十四年十二月迄ニ教員

五人事務員四人ヲ増ス明治二年五月教員三人事務員四人ヲ増ス其餘ハ舊數ノ如シ

教員五十二人 事務員二十六人 計七十八人

右明治二年十月改革當時ノ人員ナリ

教員七十一人 事務員舊數ノ如シ 右明治四年五月改革當時ノ人員ナリ

生徒概數 寄宿生 不詳○通學生(養正寮生徒)大約二百名

束脩謝儀 束脩ハ扇子ヲ用フ員數ハ藩士家格ニ應シテ各差アリ

文藝師範家へ 高知以上十本、鎗奉行以上七本、五百石以上五本、五百石以下獨禮並迄三本、小役人切米取二本

右扇子ハ純白ヲ用ヒ入ル、ニ簞笥ヲ以セス唯包ムニ紙ヲ以テス上ニ姓名ヲ記シ以テ師範家へ呈ス武術諸師範家へ呈ス

ルモ亦之ニ同シ

謝儀ハ毎年臘月ヲ待ツテ通貨ヲ納ム其金額ハ藩士ノ家格ニ應シテ各差アリ則左ニ掲ク

文藝師範家へ 高知以上青銅百疋、千石以上南鐘一片、五百石以上青銅五十疋、三百石以上同三十疋、三百石以下、獨禮

切米取陪臣同二十疋但陪臣ハ其主人ヨリ納ム 武術ノ謝儀モ亦右ト同シ

武術師家傳授ノ謝儀 初度 高知以上金二百疋、獨禮以上金百疋、扶持切米陪臣南鐘一片但次男以下ハ定額ノ半減トス

○二度 同斷○皆傳 高知以上白銀二枚、獨禮以上金二百疋、扶持切米陪臣金二百疋

右傳授ノ謝儀ハ諸流トモ一樣トス傳授ノ次第ハ假令幾段ニ分ル、トモ謝儀ハ右ノ三等ニ定ム(文政三年庚辰十月三日)

學校經費 文政六年癸未五月ニ學田千八百石八月ニ廩米七百石ヲ給付ス初メ藩主高免藤堂光寬建學ノ功ヲ褒シ七百石ヲ

加賜ス光寬固辭シテ受ケス是ニ於テ遂ニ之ヲ學校ニ付シ通計二千五百石トス爾來明治四年十二月閉校ニ至ルマテ經費

ニ増減ナシ

藩主臨校 每二七四九ノ日有造館ニ於テ藩士講義ヲ聽聞ス時々藩主臨校聽聞シ或ハ文武諸流ノ教場ニ監臨シ平素ノ試合

ヲ觀ル

三員副教師七員ヲ置キ兵隊ヲシテ日々書ヲ讀マシム登席スル者亡慮三百人其盛ナルヲ時習館ノ下ニ出テス同年五月育生寮ヲ設ケ教師一員副教師一員ヲ置ク其教授スル所專ラ西洋ノ醫術ヲ用ユ此亦育生寮ノ比ニアラス明治四年五月教師ノ等級ヲ立テ學科ヲ改メテ文武各六科トス是皆津ノ成規ニ從カヒ之ヲ施コスノミ同年十二月ニ至リ津ノ有造館ト共ニ閉鎖ス

教則 津有造館ニ同シ

學科 文學○兵學 山鹿流、風山流○弓術 日置流○劍術 新陰流、若山流、戸波流○槍術 無邊流、高田流、內海流○雉刀 知新流○柔術 關口流、楊心流、實光流○馬術 森內流○軍馬 神妙流、一全流○禮節 伊勢流○砲術 不易流、米村流、自得流、○奧村流○西洋砲術 靖海流

右ハ嘉永ヨリ安政年代迄隆盛ノ學科ナリ明治四年五月學科ヲ文武各六科ト改正ス是津學校ト同シキヲ以テ茲ニ畧ス學規試驗及ヒ諸則 津有造館ニ同シ

職名及ヒ俸祿

督學參謀或加談一人 一ケ年俸給白銀十六枚○講師一人 全十二枚○全加リ一人 全八枚○句讀師四人 全上○全添役二人 全三枚○全助教六人 全二枚○習書師二人 全八枚○全添役二人 全三枚○全助教二人 全二枚○算術教師一人 全八枚○禮節教師一人 全二枚○武技師役二人或ハ一人 全三枚○全助教四人或ハ二人 全二枚○臺所頭二人 金二兩○手付役一人 金壹兩○講堂下目付二人 壹兩二分○次小姓三人 金二分
右ハ嘉永以來隆盛ノ時ノ職員ナリ 文政五年壬午七月講師加リ一員十二年己丑三月典籍一員天保二年辛卯六月武場目付一員ヲ新置ス 弘化四年丁未督學加談ヲ置キ嘉永六年癸丑督學參謀ヲ置ク蓋參謀アレハ加談ナシ津ノ例ノ如シ
明治四年辛未五月職員ノ等級ヲ立ツル左ノ如シ

學校職員等級並俸祿

名稱	一等教師俸	祿二等教師俸	祿三等教師俸	祿一等副師俸	祿二等副師俸	祿	
崇廣堂	一兼國學	七	二內一兼國學	六	五	四	三
思齊舍	一崇廣堂教師兼	全	三內一兼國學	全	三	四	全
有恒寮		一	全	三	全	六	全

一月開校及ヒ毎月二七ノ日総聽講ノ節ハ藩士何人タルヲ問ハス生徒ト共ニ之ヲ聽開ス 殿講ト稱ヘ毎月四ノ日城中大書院ニ於テ午前十時四書講義アリ(教授學頭之ヲ勤ム)聽衆ハ一役ニ付一人ハ必ス出頭ス書院番馬廻ノ如キ多人數ナルヲ以テ一組頭手附ニ一人ト定ム

右ハ白河以來行ハレ來リシヲニテ主義ノアル所詳ナラサレハ繁劇ノ役員ニアリテハ總聽講モ能ハス又閑散ノ士モ或ハ右等束縛ノ法ナケレハ自ラ子弟ニ就學セシムルノ念モ薄カルヘシトノ趣意ヨリ出テシモノ乎

平民ノ子弟教育方法 從前ニ在テハ藩立學校ハ專ラ藩士ノ子弟ヲ教育スルノ主義ニテ農工商ノ子弟ハ家塾寺子屋等ニテ學ヒシモノナリ固ヨリ藩主之ヲ禁制セシムル等ノ事ハ絶ヘテナキナリ藩立學校ヘ入學ヲ許否セシヤノハ之ヲ詳ニスルヲ能ハスト雖從來藩士平民トノ間情意隔絶セシ故未タ平民ニシテ入學セシモノハ之レアラサルナリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設シテ生徒ヲ教授スルニ出願届出等ノヲナク何人ニ限ラス隨意ニ開設スルヲ得ルナリ農工商等平民ト雖是亦里正等ノ束縛ヲ受ケシ事ハ聞カサル所ナリ

學校

校名 立教館

校舎所在地 初メ學校ヲ伊勢國桑名郡桑名朝日丸ニ設ク後封ヲ奥州白河ニ移サル、ニ及ヒ乃チ同所會津町二番町ニ設ク後再ヒ封ヲ伊勢桑名ニ復セラル、ニ及ヒ同所伊賀町ニ設ク明治三年庚午五月藩知事松平定敬其規模狹小ナルヲ以テ同所吉之丸ニ移ス

沿革要略 藩祖越中守松平定綱儒道ヲ好ミ儒士三宅正堅ヲ聘シ桑名朝日丸ニ學校ヲ設ケ藩士ヲ勸奨シ儒道弓馬兵學書數等ノ諸學科ヲ學ハシム其後越中守松平定邦ノ時ニ至リ教授職ヲ置キ以テ文學ヲ鼓舞振作セシム然レハ體裁猶未ダ備ラズ寛政三年越中守松平定信舊來ノ學問所ニ就キ學校ヲ經營シ規模ヲ弘大ニシ是ニ於テ始メテ校名ヲ立教館ト稱ス奥州白川會津町ノ學校是ナリ乃チ學校奉行教授學頭及ヒ學校目付等ヲ置キ以テ文教ヲ皇張ニス文政六年越中守松平定永封ヲ伊勢桑名ニ移サル、ニ當リ舊領主松平下總守ノ舊貫ニ仍リ學校ヲ伊賀町ニ設ク明治元年戊辰正月藩主定敬罪ヲ朝廷ニ得タルヲ以テ全二年已巳八月ニ至ルマテ校ヲ鎮ス全三年庚午松平定敬學校ノ規模狹小ニシテ多ク寄宿生徒ヲ容ル、能ハサルヲ以テ更ニ學校ヲ吉之丸ニ改築ス明治四年廢藩置縣ノ令出ツルヲ以テ翌年三月廿九日終ニ學校ヲ閉ツ 學校創設ノ際盡力セシ人ノ行事等今之ヲ詳ニスル能ハス唯著名ナル學士ノ小傳碑文アリ別ニ錄ス

出ノ部 教員給料、職員給料、年末賞與費、器械及器具費、薪炭油雜費、酒饌料 右各費目金額内譯不詳

藩主臨校 藩主隔年一回伊賀上野ニ淹滯十日之ヲ御越國ト稱ス蓋其主旨タル政事ヲ視察シ或ハ日ヲトシ讀書習字其他槍劍柔砲馬術練兵等ノ諸技ヲ督スルニアリ

祭儀 津藩校大成殿(孔子營公吉備公ヲ祭ル)祭典ニ供セシ饌餅ヲ細截シ每歲首講釋始ノ日ニ於テ士族一般禮服ヲ着シ出場セシ者ニ配付スルヲアリ然レハ祭儀ヲ行ナフ等ノ事ナシ

學校構造及ヒ建物圖面 別紙圖面ノ通

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 出版翻刻セシ書籍及ヒ藏書ノ種類部數不詳

舊桑名藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達等ハ戊辰ノ役及ヒ其後數回ノ沿革事故等ニテ記錄散亂跡ヲ留メサルニ付文獻ノ一トシテ徵スヘキモノナシ故ニ之ヲ登錄スルニ由ナシ

學業上進ノ者ハ家祿ヲ加賜スルノ一途アルノミ別ニ祿稅免除云々等ノ事アルナシ

増加ノ振合ハ無足ナレハ石取リノモノハ右石、俵取リノモノハ拾俵一人扶持、小知行及知行取リニハ二十石、百石以上ニシテ使番格以上ニハ三拾石ヲ給與スルモノトス 右石取トハ拾石三人扶持以上三十石何人扶持ヲ云フ俵取リトハ三十俵三人扶持ヨリ八十俵何人扶持ヲ云フ(以上ヲ無足ト稱フ蓋シ官ヨリ具足ヲ貸シ與フ)知行トハ百石以上ヲ云フ(具足ハ必ス自調スヘキ法則ニシテ官ヨリ貸渡ス等ノヲナシ)

獎勵 文武共ニ勉勵ノモノハ月俸三人扶持ヲ給スル他ヨリモ早ク已ニ月俸ヲ有セルモノハ其上三十俵ヲ給スルモ他ニ先タツ

右ハ親掛リノ長子若シニ男三男等ナレハ特撰ヲ以テ之ヲ給ス三十俵三人扶持ヲ給スレハ分家ニ立テ子孫ノ世祿トス、諸吏員ニ登用スルモ平素心掛宜敷文武ニ勵精スルモノヨリ先ツ之ヲ舉用ス此他ハ目錄金ヲ賞與シ以テ之ヲ獎ム

士族卒ノ子弟教育方法 士分以上ノ子弟ハ必ス入學セシムルノ法規ニシテ自然十一歲頃ニ至リ入學セシメサルノ子弟之レアルキハ月番職ヨリ父兄ヘ内諭ニ及フ但舞臺格以下ハ此限ニアラス(舞臺格トハ平士以下ヲ云フ) 特別見込アル者ハ藩主ヨリ遊學ヲ命シ資金總分ヲ給與ス 私費ヲ以テ遊學ヲ願出ツルモノハ其意ニ任セ之ヲ許可ス

則一助ニ候我國ノ人ハ詩文ニ疎クシテハ文字ノ本義モ解シ兼狹陋偏固ノ弊モ有之候雖然文人詩人ノ風流ニ習ヒ武士ノ質實素朴ノ風ヲ失ヒ申間敷候風流中ト雖モ我程ヲ心得武夫タルヲ體シテ義氣ヲ盛ニシ氣丈ニ手堅ク可有之官途ノ事モ知ラサレハ世用ヲ爲シ難キ事ニ候

唐土ノ風ヲ好ミ仕來ニ違ヒ或ハ今ノ制度ヲ謗リ又學力未タ至ラフシテ漫リニ論說ヲ爲レ自己ノ見識ヲ以テ放マ、ニ人ヲ誹議スル等事凡テ理屈高遠ニ至リ政教ニ害アル事アリ可愼

入學ノモノ愛君忠國ノ意ヲ以テ申出候事ハ何ニテモ封書ニテ教授ヘ可差出教授無遲滯直ニ差出シ可申事凡文武ノ業ハ其材ノ長スル處ニ隨フトイヘトモ武藝專ニ致シ候トモ學文シ學文專ニ致シ候トモ武藝ニ達シ候様可心懸候我所長モ心懸薄ケレハ知レ難シ況ヤ學文ハ忠孝文武ノ道ニ候ヘハ可廢筋有之間敷ハ勿論ノ事ナリ於學校貴賤ノ坐席ヲ論セス上ヘモ親シク下ヘモ近クシテ可脩行事

右之條々永ク不可爲違犯モノナリ

文化己巳十月十九日

定信

試驗法 試驗法ハ每年冬季ニ於テ之ヲ行ナフ則チ素讀生ハ假名ニテ之ヲ筆記セシメ採點ノ法ハ音ノ假名誤リタルヲ一失トシ訓ノ假名誤リタルヲ半失ト定ム然レニ誤リ一失ニ滿タサレハ甲科トシ誤リ二失ニ滿タサレハ乙科トス其他ハ

丙科トス甲科ニ及第セルモノニハ美濃紙拾帖乙科ニハ同五帖ヲ賞與ス

講義詩文論策等採點法ハ教授學頭各自ノ意見ヲ附シ投票ヲ以テ之ヲ定ム(譬ヘハ三甲二乙ナレハ甲トシ二甲三乙ナレハ乙トシ三甲三乙ナルハ甲トスルノ類)甲科ニハ金百疋乙科ニハ五十疋ヲ賞與ス

藩主在國ノ年ハ一回或ハ二回藩主燕居ニ於テ生徒ヲ試ムルアリ其事タル平素勉勵ノ生徒ニ限り撰拔スルコアリ或ハ生徒ヲシテ盡ク出席セシムルコアリ直ニ講讀セシムルト雖亦採點ヲ要セス若シ藩主參觀ノ年ニ遭遇セハ月番職代ツテ之ヲ施行ス

賞典 十歲以下ニシテ四書ノ素讀ヲ終ヘシ者ハ孔子行狀圖解壹部ヲ賞與ス 十四歲以下ニシテ五經マテ素讀ヲ終ヘシ

者ハ孝經大義壹部ヲ賞與ス 十歲以下ニシテ四書五經トモ素讀ヲ終ヘシ者ハ蒙求壹部ヲ賞與ス 學問追々會得セシモノハ近思錄壹部ヲ賞與ス

學力長スル者ニハ(武技ノ目錄傳授ヲ得シモノニ準ス)二百疋ヲ賞與ス 學力優ル者ニハ(武技ノ免帳傳授ヲ得シ者ニ準ス)二百疋ヲ賞與ス 以上定例ノ賞格

教則 生徒ヲ三分シ素讀生對讀生會業堂生即チ講義生トス

素讀生 四書五經ノ素讀ヲ口授ス生徒ヲ數分シ句讀師之ヲ持○對讀生 左氏傳史記漢書綱鑑補ヲ授ク句讀師筆頭四人之ヲ受持チ獨看略ホ其意義ヲ了解スルマテ之ヲ養成シ然ル後之ヲ會業堂ニ入ル○講義生 博ク經史諸子及ヒ論策等ヲ讀マシメ之レカ制限ヲ立テス教授學頭之ヲ受持ツ

時間 午前九時ヨリ午后四時ニ至ルノ六時間トスト雖モ素讀生ニ在テハ授讀終レハ歸家スルヲ得對讀生會業堂生ト雖モ其間武技演習ニ赴クアリ故ニ開校時間ト稱ス○講釋 總聽講二七ノ日(但廿七日ハ廿五日ヲ以テ換フ)四書講義教授學頭之ヲ勤ム時間臨席役員聽衆等總テ開講ノ日ト異ナルヲナシ○小學講釋 教授之ヲ講ス(午前九時ヨリ暫時)對讀生以上之ヲ聽ク 右二項小學ハ每六ノ日童蒙訓ハ五日廿七日ノ兩度トス○輪講 三ノ日午後講義生四書ヲ講ス○文會 毎月五日午後講義生出席○詩會 毎月十八日午後講義生出席○休業日 毎月朔望ノ日四ノ日廿八日七月十一日ヨリ十五日迄十二月廿一日ヨリ正月廿二日迄

學科學規試驗法及ヒ諸則

漢學 習字 數學 洋學

從前ニ在テハ教育ノ程度ハ放任主義ニシテ藩士タル者ハ文武ノ内孰レカ其ノ所長ニ從カヒ之ヲ修メシム縱トヒ學問所ニ於テ研業スト雖モ武技演習所ヘ出場ニ付教授教頭ヘ一應申出レハ隨意ニ之ヲ許ス決シテ生徒ヲ羈絆シテ規則ヲ守ラシムルヲ無シ

立教館令條

學校造立ニ付テハ學問武藝其外習書數學容儀舞樂等ニ至ルマテ夫々師範ノ教導ヲ重シ聊カ怠慢アル可ラサル事立教館床ヘ安置スル處中央大神宮御祓左方御遺訓右方四書五經次ニ勸學家訓此主意ヲ以テ先我國ノ事御當家ノ御事御宮ノ御事ヲ奉存聖人ノ道ヲ奉伺候テ萬ツ謹慎ニ可相勉事 聖像安置不致ニ付釋奠等ハ永々有間敷事

學校ハ人倫ヲ明ヲカニシ風俗ヲ正シクシ人材ヲ長育スルノ主意ニ候ヘハ幼年ヨリ素讀等致シ禮義進退ニモ能習ヒ退々會讀看書ニ至リ今日日用躬行ノ處ヨリシテ和漢治亂盛衰ノ際非常難處ノ事迄モ飽マテ通達シ制度文爲沿革其餘軍法等ノ書ニ至ルマテ能々心ヲ潜テ實事ニ我物トスル事簡要ナリ

經義ニ於テハ自己ノ見ヲ爲スヘカラス彌永々程朱ノ說ヲ可守事讀所ノ書ハ聖經ヲ主トシ其餘歷史諸子ノ類廣ク講究シ國家ノ用ニ立可申事簡要ニ候詩文和歌等ニ至ルマテ心掛候事

リ身ノ行ヲ傷ク家財ヲ傷ク貧困ニ至ルモ皆酒ナリ恨ムヘキ事ナリ人ノ父母タル者我子ノ艱難困苦スルヲ見テハ如何計リカ之ヲ憂ヒ思フヘシ君ノ臣ヲ思ヒ玉フモ是同シカランヲ自己ノ不覺悟ニテ貧困ニ至リシヲ歎キ云ヒ立ナハ君ニハイカ計リカ愁ヒ痛ミ玉ハンは是ヲ義トモ忠トモ云フヘケンヤ一家ヲ理ムルハ八條目ノ一ツニテ學問スルモノ幼キ時ヨリ能ク辨フヘキ事ナリ

父子ノ親トハ人幼キ時ハ父ハ子ヲ愛シ子ハ父ヲ慕ヒテ親シムモノナレ成成長シテ氣強クナリ子トシテ父ノ心ニ背キ父モ是ヲ惡ミ父トシテ心サマ惡シケレハ子は子ヲ恨ミ遂ニ父子ノ親シミヲ失フナリ能ク學ヒテ道ヲ知レハ孝ヲ盡シテ其親シミヲ失ハス叔親タルモノ、心ハ其子ノ藝能アリテ身ヲ立テ家ヲ起サンコトヲ願ハサルハナシサレハ聖人モ名ヲ揚ケ父母ヲ顯ハスヲ以テ孝トハ教ヘ玉ヘリ鳥ノ巢ヲ造ルニ一ツノ芥チ口ニ含ミ運ヒテ是ヲ造ルニ及ンテハ人功モ及ヒ難シ人トシテ身ヲ立テ一家ヲ造スコトナラス却テ家ヲ亡スハ鳥ノ巢ヲ造ルニモ及ハスト云フヘシ又雛鳥ノ巢ダナシテ已ト餌ヲ啄ミテ親鳥ノ養ヒニモカ、ラス獨リ立チスルニ人トシテ自ラ身ヲ立ル事ナラスハ雛鳥ニモ及ハサルナリ先第一ニ志ヲ立ルニアリ況テ人ハ動物ニテ暫モダハ居レヌモノニテダ、居レハ惡ルキ心モ起リ病モ出來又ハ酒色ニ耽リナトシテ終ニハ身ヲモ家ヲモ亡スナリ夫故幼時ヨリ手習學問弓馬劍槍駢形ナト何ニテモ武士ノ爲スヘキ業ヲ心掛一日ノ内モ何時迄ハ何々ノ藝チナスヘシト日課ヲ立テ置キ少シノ間モ怠リナク勤メ行フヘシ禹ト云ヘルハ聖人ニテマシマセシモ寸陰ヲ惜ムトノ玉ヘシマシテ並々ノ人ハ分陰ヲ惜ミ夜ハ晏ク寢ネ朝ハ夙ク起キテ勤メ勵ミテ人ノ見聞カヌ事モ見聞キ人ノ知ラサル事ヲモ知ラント思ヒ藝術ハ限ナキ事ニテ許シテ得シトテ夫ニテ善シトセス學問ハ猶更限ナキ事ナレハ万人ニ勝レサレハ用ニ立スト心得テ身ヲ終ル迄勤メ勵ムヘシサレハ人々ハ得手不得手アル者故不得手ナル方ハ如何程骨折習フテモ成就セス得手ナル方ヲ習ヘハ骨折少クシテ成就スルナリ人一度シテ能スレハ己十度シ人十度シテ能スレハ己百度シ人百度シテ能スレハ己千度シテ勤メ勵ミナハ何事カ成ラサラン然ルニ朝寢宵ハリシテ無益ノ雜談ニ日ヲ送リナハ何事カ成ル可キ士民ハ暑寒モ厭ハス田畑ヲ作り休ム暇モナク商人百工モ夜晝歩行キ商ヒ汗ヲ流シテ細工チナス若シ士民田畑ノ稼チナサス商人百工其職々ヲセサレハ飢ニ至リ又ハ其家ヲ續キ安穩ニ暮ラスコトナラス人々モ之ヲ譏リ笑フ況テ武士ハ四民ノ上ニ立ツモノナレハ武藝學問シテ其職ヲ盡サネハ一日モ濟マヌナリ然ルニ君ノ厚恩ニテ安樂ニ暮ラセハトテ勤メスハ爭テカ天罰神罰ヲ免レンヤ

夫婦ノ別トハ男女ノ道ハ亂レ易キモノ故夫婦サヘ其別ヲ正スナレハマシテ他ノ男女ノ間ハ嚴シク差別ナサスナリサレハ聖人モ男女七歳ヨリシテ坐席ヲ別ニシ同シ器ニテ物食フ事ヲセス衣服ヲ別々ニワカツヘキ旨教ヘ玉ヘリ斯クモ

對讀生ニシテ品行方正學力優等ナルモノ小學本註壹部ヲ賞與ス 十四五歳マテニ非常英特ノ者二十八史略壹部ヲ賞與ス 以上ハ特賞ニシテ此ノ賞ヲ得シモノ僅々數名ニ過キス

句讀師十三年モ精勤セシモノハ梅鉢紋付麻上下ヲ賞與ス 教授學頭十三四年以上精勤セシ者ハ俸祿ヲ増與ス 其他ハ非常ノ典ニシテ其人ト其勲勵ニ依ルモノナレハ例ヲ舉テ之ヲ記載スルヲ能ハス

立教館童蒙訓

學問ハ人ノ人タル道ヲ學フコニテ而モ聞見ヲ弘ムルコトニ人タル者學ハスシテハ一日片時モ立チ難キモノナリ其故ハ天地ノ間ニ生スル者人程尊キ者ハナシ直ニ天地ノ道理ヲ形ニ具ヘ五倫五常ノ性ヲ有チタル者ニテ尊キ賤シキ皆コレヲ知レハ誠ノ人トシ知ラサレハ禽獸トス人ノ形ニテ禽獸トナランコト淺マシキコナリ學問シテ古ノ事ヲ知リ今ノ理ヲ極ムレハ日用萬事ニ應シテ困ム事ナク是ハ古人モ斯クナセシ夫ハ聖賢モ斯行ハレシト思ヒ當テ、行ヘハ危フムコトナシ今有ル事ニテ昔ナキ事モ理ヲ明ラメテ取行ヘハ萬事ニ窮スルコトナシ學ハサレハ是ハ如何ナスヘキ夫ハ何トカセシト疑ヒ惑フナリ偶々中ルコトアルモ偶中ナリ其五倫ト云ハ君臣ハ義父子ハ親夫婦ハ別長幼ハ序朋友ハ信ノ道ニテ此道ハ即五常ナリ君臣ノ義トハ君ハ臣ヲ使フニ無禮ナク優カニ祿ヲ與ヘ其才ヲ盡サセ玉フハ君ノ義ナリ臣ハ君ノ祿ヲ食シ身ヲ養ヒ妻子ヲ扶助スレハ其職分ニ打チハマリ忠節ヲ盡シ諫ムヘキヲ諫メ死スヘキニ死スルハ臣ノ義ナリ一飯モ君ノ恩ニ非ルコトナケレハ爭テカ忘レ奉ンヤ蟻ニサヘ君臣ノ義アリ況テ人タル者はチ廢スヘケンヤ然ルニ國恩君恩ヲ知ラヌ人ハ有マシケレト自己ノ元ヨリ有ウチノ様ニ思ヒ高祿尊爵ヲ得テモ恩ニ感スルコトナクサノミ器量モチクシテ只氣丈男立ノ様ニ成行キ眞實ニ有リ難キコトモ有難シト思ハス心ニ思ヒテモ口ニ云フ事ヲ嫌ヒ其役々チ君命シ玉ヘハ迷惑ノ様ニ云ヒ成シ何ナリトモ君命ヲ蒙ルハ外ヨリ羨ムヘキ事ナルニ嘲ケル様ニ云ヒ成チ互ニ善キ事ノ様ニ思ヘルハ習俗ノ惡風ナリ昔ノ器量アル人ハ上ト張り合ヒ犯シ凌キシモ其器量アル故濟ミ行キタレ其器量モナクテ其眞似ヲスルハ虎ヲ畫テ猫ニ似タルノミナラス今君ヨリ召放サレハ忽チニ溝壑ニ轉ヒ死センノミ唯篤實ニアラハ自ラ君恩ニモ感スヘシ少給厄介多ニテ心掛善キ人ハサノミ貧困ニ至ラスモアリ大祿厄介少キ人モ不勝手ナルモアルハ日々ノ費ニモ聊カ構ハス貧困ニ至ルニテ元自己ノ不甲斐性ナリ廉耻ノ心アル人ハ言フニ憚ルヘキコナルチ善キ事ノ様ニ妄ニ人ニ云ヒ陳フルハ己カ耻チ己ト顯ハスナリ酒チ好ミテ飲ムモノ亂ニ及ハサルハ苦シカラヌ事ニテ孔子モ酒ハ量リナケレハ亂ニ及ハストノ玉ヘリ只今ノ人ハ酒チ飲ミ醉狂ナト致シ酒ノ上トテ自ラ許スナレハ本酒ハ醉狂ニ至ル程飲ムヘキ者ニ非スコレ故酒狂トテ世憲ノ許サヌ事ナリ其上酒チ好ンテ厭クコトナキ是ヲ亡ト云フト孟子ニ見ヘタ

フノ類因循ニシテサノミ不敬トモ思ハ子他邦ノ人ニ聞カセナハ嘲リヲ得ルヲ必セリ都テ辭ハ勉メテ冲竊ニスヘキ事ナリ辭氣ヲ出シテ鄙倍ヲ遠サクト聖人モ教ヘ玉ヘリ辭悖リテ而出レハ又悖リテ入ル理リナレハ人ハ兎モアレ己ハ不敬ノ辭ナキ様懶ムヘシ朋友ノ交リハ互ニ眞實ヲ盡スモノナレハ假ニモ偽ナルヲ言ハヌ様ニスヘキナリ一度偽リタルヲ言ヘハ假令其後偽リナキ事ヲ言フトモ人は疑フモノニテ人ノ交リニ大切ナルモノナリ扱人ハ誠ナケレハ叶ハス誠ノ心ヨリ爲スコハ如何様ナルコモ成ラサル事ハ無キモノナリ水ハ至テ柔カナルモノニテ石ノ錐ニハアラテ正泰山ノ雨滴リハ石ヲ穿チ繩ハ木ノ鋸ニハアラテモ井桁ノ木ハ繩ヲ常ニアタル處切レルナリ誠モ亦斯ノ如シイツマテモ替ラス爲ス事ハ其事ノ成ラサルコトナシ學問致スモ君ニ忠ヲ盡スモ親ニ孝ヲ盡スモ皆誠ナリ其餘何事ニテモ誠ノ心ナケレハ成ラサルモノ故信ト誠ノ心ナキハ人ニ非ス學問スルハ此處ヲ眞實ニ知リ行フハカリノ事ナリ人ノ見ス知ラス處ニテモ天知ル神知ル我知ルトテ自ラ知リテハ甚タ恥ヘキ事ナリ中ニ有レハ外ニ見ヘル、モノ故自然ト外ヘ知ル、ナリ深ク慎ミテ篤實ニ學問セハ君ノ尊慮ニモ叶ヘ奉ラン能々心得ヘキナリ

罰訓 平常品行惡シク或ハ粗暴ノ行爲ヲナスモノ小供ハ句讀師講義生ハ教授學頭ニシテ篤ク說論ヲ加ヘ或ハ事柄ニ依リ其父兄ヘ示談等ヲナシ猶甚シキ者ハ月番ヨリ禁錮等申付ケ候事之レアルモ別段罰則ノ設ケナシ

書繕拜借 二七ノ日午前十時ヨリ午後四時マテ書物奉行之ヲ掌トル其借用ハ生徒ニ限ラス荷モ藩士ダレハ皆之ヲ許ス開校式 毎年一月廿三日午前八時登校役員教員ヨリ生徒ニ至ルマテ麻上下着用午前九時開講白鹿洞書院揭示講釋(教授之ヲ勤ム)立教館令條朗讀(學頭之ヲ務ム)此時役員初一統平伏臨席役員月番職一人奉行一人大目付一人横目一人學校奉行學校目付設置ノ時ハ各一人宛聽衆ハ生徒ノ外凡ソ藩士ニ在リ有志者ハ皆之ヲ聽クヲ得

入學式 新ニ入學スル者ハ麻上下着用神拜式終リ教授學頭ノ内ニテ先入主語ヲ讀ミ聽カセ然ル后之ヲ受持句讀師ニ引渡ス束脩トシテ扇子二本ヲ教授ニ呈ス明治三年改革ノ際之ヲ廢ス

職名及ヒ俸祿

學校奉行一員 教授一員 學頭二員 學校目付二員 句讀師七員

右ハ立教館創置ノ時ノ職員ナリ後若干年ヲ經テ學校奉行學校目付ノ兩職ヲ廢ス安政二越中守定猷ノ時ニ至リ學校奉行一員學校目付三員ヲ置キ以テ古ニ復ス文久三年再之ヲ廢シ左ノ職員ヲ置ク

教授一員 學頭五員 書物奉行一員 句讀師十六員

明治三年三月藩知事松平定敬藩政ヲ改革シ學校從前ノ職名ヲ廢シ更ニ左ノ職員ヲ置ク

ナレハ生長ノ後酒宴ナトニテ男女打交リ手ヲ把リ背ヲ撫テナトスル様ニ成行ケハ夫婦男女亂レテ家モ齊ハス身モ修マラサルナリ畜生ハ此ノ差別ヲ知ラス雌雄相亂ル、故畜生トテ賤シムナリ鳥類ノ中ニテモ鴝鳩ト云ヘル鳥ハ雌雄ヲ亂ラス正シクスル故詩經ニモ之ヲホメ詠シテ詩ニ作リ人トシテ此ノ差別ナケレハ鴝鳩ニモ及ハサルナリ箇様ノ差別ヲ能ク知ルヲ智ト謂フナリ男女ノ別ナク家ヲ亡ホシ身ヲ失ヒテ知ラスンハ智惠トハ云フ可ラス

長幼ノ序ハ年長ケタルヲ敬ヒ尊ヒ其次第ヲ正シクシテ禮ヲ盡スヲ云フナリ坐席ニ就クニモ上タル人年長ケタルヲ先トナシ假初ニモ長者ヲ輕シメ侮リ有司ヲ畏レス無禮緩怠ナルハ甚タ惡シキ風儀ナリ禮ハ都テ人間ノ人間タル儀式作法ニテ半日ノ起居舉動ヨリ物言ヒマテノ致シ方ナリ古人モ鼠サヘ皮アリ人トシテ禮ナクハ何ゾ早ク死ナサルト云ヒテ深ク惡ミ玉ヘリ然ルニ長者ヲ輕シメ先ニ立テ口答ヘナトスルハ甚タ惡シキ事ナリ君父ニ事フルニモ君父ニ事フル禮アリ師ニ事フルニモ師ニ事フル禮アリ君父ニ事フル禮ハ元ヨリ心得タル事ニモアルヘケレモ學問スレハ愈々能ク知ルナリ師ト云フハ能ク物ヲ知リ人ノ惑ヲ解ク者ニテ君父ニ事フル道モ師ニ非レハ明ラカナラサル者故取リ分ケ尊フヘキモノナリ其人ノ位ノ高キ卑キニ拘ハラス道アル人ハ臣下ニテモ尊ヒ玉フナリ夫レ故禹王ハ天子ノ尊キモ昌言ヲ云ヒ聞カスル人アレハ自ラ拜禮シテ受ケ玉ヘリ箇様ニ師ヲ尊ハテハ道ヲ尊ハサルナリ道ヲ尊ハサレハ却テ我身ヲ賤ムルナリ相對シテ尊フハ云フモ更ナリ書道尋問ノ禮儀マテモ敬ヲ盡スヘキ事ナリ禮儀ハ幼年ノ時ヨリ致シ習ハサレハ年長ケテハ自ラ成リ難キナリ都テ人ノ大小衣服ナトヲ踰ヘ書物ナトヲ跨ギナトスルハ聊カノ事ノ様ナレモ深ク慎ムヘキ事ナリ言葉ツキモ常々慎ミテ下輩ナル物言ヒセヌ様ニ心掛ヘシ譲リ遜ルハ禮ノ第一ノ事ナレモ門戸ヲ出入スルニモ餘リ辭退シテ後ニハケイヤウノ様ニ成ルハ却テ非禮ナリ其程ヨキヲ禮トスルナリ今童子輩ノ門札ニ泥ヲ塗リ壁ニ樂書ナトスルハ戲レトハ云ヘト巧ミタルコニテ甚タ惡シキ風儀ナリ幼年ノ中ハ戲レ遊ヒテ元氣ナルハ隨分宜シケレモ人ノ物ヲ隱シ人ヲ誑カス等ノ事ハ惡ロキワヤクニテ巧ミタル事故惡人ト成リ行クモノナリ甚タ慎ムヘキニ非スヤ

朋友ノ信トハ朋友相互ニ僞リナク信ヲ盡シ口ニ言フ所ト其爲ス所ト毛頭相違ナキナリ朋友ハ本他人ナレモ大倫ノ一トセシハ人ノ生レ付キ本善ナレモ大抵中人以下ノ性ハ何レニモ成リ行モノ故善友ニ交レハ善トナリ惡人ニ交レハ惡ト成ル麻ノ中ニ生スル蓬杉ノ林ニ交レル松ノ如シ自ラ直ク成ルモノナリ而モ朋友ハ仁ヲ輔クトテ切瑳琢磨シテ相互ニ德ヲ磨キ合セテ其過ヲ正スモノニテ只ウハムキ計リ詭ク挨拶シテ不信不直ノ人ニ交レハ己カ過ヲモ聞カスシテ我カ信ヲモ失フナリ朋友ノ交リ久シケレハ不敬ニ流ル、ナリ私ト云フコチオレト云ヒアガレト云フコチ飲メ食ヘト云

學頭一名句讀師助勤三名又ハ四名^{全所定諸ノ内ヨリ}ヲ置ク生徒ノ數江戸ヨリ猶少シ故ニ是亦舉クヘキノ件ナシ總テ教育上ノ事ハ同所學頭ヨリ桑名教授學頭ヘ照會シ同一ノ教育ヲ施スヲ主旨トセリ

舊龜山藩

學制

學事上ノ諸制度 學事上ニ關シ著シキ制度ヲ設ケ一般ヲ檢束シタルヲナシト雖モ中士以上ノ子弟ニシテ年齡七歲ニ至ル者ハ勉メテ就學セシメ其下士以下及平民ノ如キハ各自ノ意向ニ任セ便宜就學セシム又學業勉勵ノ者ハ毎年一月其前年中勉學セシ實績ヲ考ヘ其月廿一日他ノ武術勉勵ノ者ト與ニ賞與ヲ行ヒ或ハ學業上進ノ者ニシテ特別勉勵寄宿スル者ニハ學資トシテ生徒壹名ニ付壹人口ヲ給與シテ其志業ヲ達セシムル等ノ制アリ此他藩主ヨリ一藩ヲ獎勵スル爲メ學事上ニ關シ屢々布令シタルヲアリト雖モ廢藩置縣ノ際散逸殆ント盡キ現存ノモノハ纔ニ明治二年舊藩知事石川成之ヨリ布令シタル左ノ一令ヲ存スルノミ

布令

經國ノ道學問ノ基礎タル古今ノ通理豈贅言スルヲ待ソヤ今ヤ維新盛運ノ時ニ當リ成之不肖ナカラ藩知事ノ命ヲ辱シ事務改正ノ際人才欠乏人ニシテ四肢ナキカ如シ誰ニ憑テカ之ヲ求メンヤ成之慨歎ノ至ニ堪ヘス仍テ更ニ學校規則ヲ興起シ一藩上下兵士役員及市郡平民ノ子弟ニ至ルマテ老若ヲ問ハス公私職業ノ暇出校シテ義理ヲ研究シ後來ノ職務ニ供シ關クル所ナカラソヲ企望ス

士族卒ノ子弟教育方法 中士以上ノ子弟ニシテ年齡七歲ニ至ル者ハ勉メテ藩立學校ニ入レ相當ノ教育ヲ受ケシムルヲ法トス故ニ若シ事故ナクシテ就學ヲ怠ルモノハ藩廳ヨリ諭達シテ其就學ヲ促スヲアリ其下士ノ子弟ノ如キハ各自ノ意向ニ任セ便宜就學セシムト雖モ維新前ヨリ漸次方向ヲ改メ藩立學校ヘ入學セリ然レモ女子ノ如キハ別ニ女兒ニ適スル教科ノ設備ナキヲ以テ上中下士ヲ論セス一般家塾寺子屋等ニ就キ俗書ノ素讀及習字算術等ヲ修學セリ又藩士ノ子弟ニシテ遊學ヲ乞フ者ハ速ニ之ヲ許可シ其遊學中ハ各自ノ地位ニ應シ三口若クハ二人口ヲ給與シテ其學資ヲ補助セリ且學校創設以來毎月二七日教授ヲシテ經書ヲ講セシメ中士以上ハ必ス昇校シテ生徒ト與ニ之ヲ聽聞セシムルノミナラス其二ノ日ハ藩主及重役ノ者ハ自ラ摸範ヲ示シ必ス臨校シテ聽講セリ

平民ノ子弟教育法 平民子弟ノ教育法ハ各自ノ意向ニ任セ藩校若クハ家塾寺子屋等ニ就キ便宜修學セシムト雖モ藩校ノ

文武學館督學一員 文學館教授一員 文學館助教三員 文學館補教九員

明治三年以前ハ凡テ職員ハ本官ヨリ兼務ナレハ年末ニ至リ手當トシテ教授ハ金一圓學頭ハ三分句讀師ハ二分其他下役共ニ至テハ手當モ別段無之 同年改革ノ際文武學館督學一員右權大參事ヨリ兼勤ナリ別ニ俸給ノコヲ聞カス 文學館教授(年給四十圓)一員 同助教(年給二十六圓)三員後改メテ三十六圓トナス 同補教(年給二十六圓)九員 其坐席身分取扱等ノ如キハ今之ヲ詳ニスル能ハス

職員概數 教員九員 事務員三員 右寛政三年立教館創設當時ノ人員○教員二十二員 事務員一員 右文久三年改革當時ノ人員○教員十三員 事務員一員 右明治三年改革當時ノ人員右ノ外屬吏門衛○安政二年前ハ下役三員門番四員ヲ置ク 學校奉行復古ノ節ハ右ノ外書役二員取次番二員ヲ置ク後下役ハ書物手代ト改稱ス○明治三年改革ノ際ハ庫司二員書物手代三員門番四員ヲ置ク

生徒概數 明治三年前ハ概數素讀生對讀生及ヒ講義生相合シテ二百名ニ過キス同年以後ハ三百名ニ過クルニ至ル 凡テ入塾生ハ寄宿スヘキ規則ナルヲ以テ其數百五六十名ノ多キニ至ル 通學生ハ内部都合アルカ或ハ少年ニシテ英特ノモノニ限リ之ヲ許スヲ以テ僅々十名餘ニ過キス

束脩謝儀 束脩ハ入學ノ際扇子二本ヲ呈ス其謝儀ノ如キハ敢テ一定セス唯有志ノ生徒數人合シ聊カ酬フルアルノミ 學校經費 不詳

藩主臨校 藩主歸國毎ニ學校參拜ノ式アリ左ノ如シ 當日午前九時本供ニシテ臨校ス教授學頭及ヒ句讀師等進善門内(學問所ノ正門)マテ送迎ス生徒ハ對讀生ノミ麻上下著ス教授ニ大學三綱領ノ講釋ヲ命セラル其他ハ定日ナシ獎勵ノ爲メ時々臨校ス

祭儀 聖廟ヲ安置セサルヲ以テ釋奠ノ禮典無之

學校構造及ヒ建物圖面 不詳

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 出版翻刻セシ書籍無之 藏書ハ和書百八十一部漢書百四十部

○江戸藩邸學校(八町壕邸ニ設立)

學頭一名其他句讀師^{定府人ノ殷講桑名ト違ヒ生徒ト}及ヒ學校諸講義生徒會業等桑名ト大同小異僅ニ定府^{戶數大約七十戶}ノ子弟故人數モ少ナク之ヲ以テ記載スヘキコナシ桑名ヨリ斷ヘス教授學頭ノ内ヨリ勤番氣脉ヲ通シ陶養セシ事ナリ

○越後國柏崎學校

張シ兼テ詩文會ヲ開キ獨挺身シテ終日之レカ授業ヲナシ後進ヲ提斯セリ又參政ヲ勸メ算術習字ノ二科ヲ加設シ學科ノ不足ヲ補ハシメ且其授業時間從來毎日二時間ノ規定ナルヲ五時ニ改メ專ラ實用ノ學ヲ修メシムルカ故ニ大ニ學事盛大ノ基礎ヲ開キタリ明治二年石川成之藩知事トナルニ追ンテ又更ニ學政ヲ改良シ文武ヲ一途ニシ文武總判全判事等ノ職ヲ置キ一藩ニ布令シ士民ヲ獎勵シテ文武ヲ兼修セシム全三年十月更ニ改革シテ文武總判等ノ職ヲ廢シ護民教民ノ二局ニ分チ每局大小屬各壹人ヲ置キ學校ヲ其教民局ニ屬シ之ヲ管理セシメタリシカ全四年十一月本縣ノ指揮ニ依リ閉校セリ

學校創立及學事擴張ニ盡カセシ者ノ行事年代尤久シ且私記等ノ存スルモノナキヲ以テ事實詳ナラス又著名ノ學士ハ前田菊叢及山本善太ノ兩名ニシテ朱子學ヲ修メ兼テ詩文ニ長シ名聲籍甚タルモノナリシカ私記等ノ存スルモノナキヲ以テ事跡詳ナラス

教則

規則(文政八年規定)講釋每月十二回 輪講全上 會讀隔日 素讀毎日辰刻ヨリ午刻マテ 右ノ外有志者ハ時限ニ拘ハラス出席スルヲ許シ且冬春ノ交ハ夜學ヲ開設ス其他安政年間教則等ヲ改正シタルヲアリト雖モ記錄散逸今其實ヲ得

教科用書(明治二年規定)國史略、皇朝史畧、大日本史、四書、五經、小學、春秋左氏傳、史記、綱鑑補、前後漢書、三國史、資治通鑑

授業方法及時間割 素讀毎日午前八時ヨリ午前十時マテ 習字毎日午前十時ヨリ午後二時マテ 復讀五十ノ日午後二時ヨリ 右素讀生課程○讀史、毎日午前八時ヨリ午後四時マテ 質問、毎日午前十時ヨリ正午十二時マテ 算術、全上 讀史、毎夜午後六時ヨリ全十二時マテ(但九月ヨリ二月マテ) 右獨看所課程○詩會、毎月二ノ日午後ヨリ 輪講、毎月四ノ日午後ヨリ 會讀、毎月八ノ日午後ヨリ 文會、毎月九ノ日午後ヨリ

授業法 素讀生ハ用書ノ句讀ヲ授クルニ止メ獨看生ハ讀書ハ都テ自讀自講セシメ詩文ハ宿題席上出題ノ二種トシ共ニ生徒ヲシテ自作セシメ會讀ハ唐本ヲ輪讀シテ互ニ其句讀ヲ正サシム

學科學規試驗法及ヒ諸則

學科 高科○皇朝學、西洋學、兵制學、宏詞、明經、策論、治事 右成業ノ科ニ登ル者ヲ大成トス○上等 一等、大日本史 資治通鑑 二等、皇朝史畧前後漢書綱鑑補三國史 三等、國史畧春秋左氏傳十八史畧史記○中等 四等、五經卒業

如キハ學科ノ高尚ナルト藩士ト地位ヲ異ニスルヲ以テ絶テ藩校ニ入學スルモノナシ故ニ平民ノ如キハ便宜家塾寺子屋等ニ就キ俗書ノ素讀及習字算術ヲ修ムルニ過キス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等ノ設置ハ何人タリモ自由ニ之ヲ開設スルヲ得セシメ敢テ藩廳ヨリ之ヲ檢束スルヲナシ

學校

但江戸藩邸諸士族子弟ノ如キハ最寄家塾等ニ就キ修學セシムルカ故ニ藩邸ニ於テ別ニ學校ヲ設ケス且藩内寺子屋ノ如キハ白山ニ開設セシメタルカ故ニ又白山ニ之ヲ廢止ス是ヲ以テ今之ヲ徵スル事實ナシ依リテ之ヲ缺如ス

校名 學校創設以來明倫舎ト稱スト雖モ明治二年學政ヲ擴張シテ明倫館ト改ム

校舍所在地 初メ伊勢國鈴鹿郡龜山南崎ニ設立セシカ教育ノ擴張ニ依リ文政八年龜山舊城內西丸へ移轉セリ

沿革要路 藩主石川憲之深ク儒學ヲ崇ヒ享祿十二年貳十人口ヲ以テ京師ノ碩學前田菊叢ナル者ヲ辟シ之ニ學醫ノ官ヲ授

ケ常ニ左右ニ置キ經義ヲ講セシメ兼テ躬親ラ詩文ヲ學フ其益ヲ得ル勘力ヲサルヲ以テ未タ幾許ナラス新知百五拾石ヲ

與ヘ大ニ之ヲ優待セリ於是藩士一般道ヲ敬シ學ニ向ヒ正學ノ徒續々輩出ス是ヲ龜山藩興學ノ端緒トス降テ石川總師ニ

至リ先考ノ遺志ヲ繼キ亦儒學ヲ崇ヒ頻ニ斯道ヲ講明シ尋テ寛政二年重臣ト謀リ初メテ藩立學校ヲ龜山南崎ニ設置シ藩

士前田冬藏柴田右仲ヲ其教授ニ任シ其他世話役句讀師數名ヲ撰舉シ一藩士族へ講義素讀等ヲ授ケ聊カ教導ノ端緒ヲ開

キ藩主總師モ在城中ハ時々臨校シテ藩士ト與ニ聽講セリ享和三年總師死シ生徒モ亦隨テ怠惰ニ流レ定日六回ノ講義ヲ

開キ素讀ハ却テ私宅ニ於テ授業ヲ受クル有様トナリ大ニ衰頽セリ文政ノ初年ニ在ツテハ聞トシテ人ナク殆ント其命脉

ヲ存スルモノ、如シ文政四年石川總安深ク學校ノ衰頽ヲ極メ名教ノ地ニ落ツルヲ歎シ頻ニ學校ノ再興ヲ謀ルト雖モ事

故アリ果サス同八年漸ク龜山城內西丸ノ地ヲトシ更ニ學校ヲ建築シ拾五人口ヲ以テ鴻儒山本善太ナル者ヲ阿波國德島

ヨリ聘致シ始メテ儒者ノ職ヲ置キ教授ヲ掌ラシメ又聖廟ヲ設ケ釋菜ノ典ヲ舉行スル等大ニ心ヲ學事ニ用キ一藩ヲ獎勵

シタルカ故ニ漸ク其頽勢ヲ挽回シ積年ノ素志ヲ達スルヲ得タリ天保四年總安死シ爾來世ノ變遷ニ隨ヒ時々盛衰アリ

中間學則モ改メ改良ヲ加ヘタルヲアリト雖モ著シキ結果ヲ視ルニ及ハス安政ノ末年藩士小崎利準ナル者江戶ヨリ遊學

シテ歸藩セリ是ノ時ニ當テ藩校ノ學科タルヤ依然舊規ヲ固守シ纔ニ經學ノ一科ヲ置キ史學及詩文等ノ學科ハ自己ノ研

學ニ任セ生徒ノ疑問ニ應スルノミニシテ其他絶テ之ヲ授業スルヲナク殊ニ習字ノ如キハ之ヲ寺子屋ニ放任シ算術ハ學

校構內ニ設置セル九思堂ニ於テ便宜專修セシムル組織ナルヲ以テ各其所好ニ偏倚スルカ故ニ或ハ迂疎用ニ適セサル譏

リアリシカ利準歸藩后其學科ノ不完全ニシテ藩廳養才ノ道ニ於テ欠ク所アルヲ憂ヒ身其職ニ非スト雖モ大ニ史學ヲ主

藩主臨校 學校創置以來藩主ハ時々臨校シテ講義ヲ聽聞シ又春秋兩度試驗ノ節ハ臨校シテ生徒ノ講義等ヲ聽聞ス
祭儀 春秋兩度釋菜ニハ用人役ヲ以テ祭酒トシテ之ヲ行ヒ又當日ハ藩主自ラ臨ンテ聖像ヲ拜セリ其禮典ハ廢校ノ際散逸
シクルヲ以テ典式詳ナラス

學校構造及建物圖面 學校建物圖面別紙ノ通

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 出版翻刻ノ書籍ハ無之 藏書種類部數 和書二十部、日本地圖三部、漢書二十部、外國地圖類四部、洋書九部、翻譯書六十部、算術書三部、法帖一帖

舊久居藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達等舊來夥多有之趣ナレトモ今舊記ノ徵スヘキ者無シ唯假鄉校ノ諭達ノミ存スルアリ

諭達

天地ノ間生アルモノハ必識アレトモ人コレカ靈ナリ夫レ人ノ生タルヤ無識ノ如クナレトモ性ノ靈妙自然ニ固有セリ切磋
ノ功積ンテ光耀始メテ顯然ダリ教ニ因リ毫釐千里ノ差アリテ智愚懸隔セリ故ニ幼穉ヨリシテ智識ヲ擴メ天與ノ分ヲ
盡シ自主自由ノ道ヲ保護スヘシサレハ當今士民工商ノ族類ヲ分ツト雖是族名而已ニテ其實ハ有識無識ヲ分ツニアリ
故ニ村間ニ居テモ農業ノミニアラス市街ニ住シテモ商法ノミニアラス有識ナレハ登用シ無識ナレハ士族ト雖モ農商
ニ均シ況ンヤ當今日チ逐テ開化ニ趣クノ際會ニ當リ其族類ヲ以テ徒ニ貴賤ヲ評スルノ譯ナキナリ然レトモ從來民間ノ
教養ハ開化ノ道殆ント塞ントスルヲナレハ頓ニ智識ヲ擴メ教化ノ道ヲ開ントスレトモ能ハス故ニ先ツ各村便利ノ地ヲ
撰ンテ假鄉校ヲ設ケ幼童ヲシテ其校ニ入ラシメ教導ノ体裁ヲ一洗シ入リ易ク學ヒ易キノ思慮ヲ盡シ開化ノ端ヲ開キ
往々智識ヲ擴メ人間ノ通義ヲ盡サンコトヲ是レ勤ヨヤ

明治四年辛未二月

久居藩廳

文學及武術トモ特ニ上進勉強ノ者ニハ扶持米若干ヲ給シ又一年間欠席ナキモノ及格別出精上進ノモノニハ每年末ノ調
査ニ據リ金銀物品ヲ附與ス

士族卒ノ子弟教育方法 從來藩立學校ノ設ナク藩士ニ教師ヲ命シ其家宅内ニ教場ヲ設ケ子弟ヲ教授スルヲ許可セリ當
時ハ固ヨリ就學ノ制ナクシテ子弟各自ノ意向ニ任セタリシカ慶應三年句讀所チ久居大手町ニ創建シ文學ノ家宅教授ヲ

五等、易經詩經卒業 六等、四書卒業○下等 七等、論語卒業 八等、小學內外卒業 九等、孝經大學中庸卒業 右等級各三等ニ分チ上中下チ九等ニ分チ等級ノ順序ニ依リ各名牌チ壁上ニ掲ク

學規 二七ノ日講釋 二ノ日論語(午前十時ヨリ) 七ノ日靖獻遺言(午後二時ヨリ)
試驗法 毎年春秋ニ於テ生徒ノ學力ヲ試驗シ等級ヲ進退ス其方法ハ素讀生ハ讀方一二ヶ所ヲ試ミ獨看者ハ講義一二ヶ所ヲ講讀セシムルニ止メ其他ノ學科ハ試驗ヲ須ヰス單ニ讀書ノ一科ヲ試驗シ各優劣ニ依リ登第セシムルチ法トス尤モ生徒試驗ノ節ハ藩主及重役ノ者必ス臨校シテ聽聞セリ又應試生ニシテ學力優等ト認ルモノハ試驗了ルノ後三等ニ區別シ其學力ニ應シ學校ヨリ賞與ヲ行ヘリ又生徒ノ入學ハ豫シメ父兄ヨリ師範家ヘ申入レ許可ノ上禮服ヲ着用シテ父兄附添出校スルチ恒例トス

職名及ヒ及俸祿 教授二名 世話役二名 句讀役四名 右寛政年間學校創設當時ノ職員ニシテ俸祿及坐席身分等不詳○教授三名 世話役五名 句讀方拾名 主簿五名 右文政八年學校改革當時ノ職員、俸祿及坐席身分取扱等不詳○教授三名 助教六名 右天保四年ノ職員、俸祿等不詳○文武總判壹名 全副總判壹名 文武判事壹名 教授二名 助教四名 句讀二名 右明治二年十月改革當時ノ職員ニシテ文武總判ハ家老ヨリ副總判ハ年寄役ヨリ兼勤シ其他ノ職員ハ上士中士以上ヲ以テ之ニ充ツ俸祿ハ世襲家祿ノ外別ニ給セス○大屬壹名 少屬壹名 史生壹名 教授壹名 教授補四名 助教二名 句讀十一名 附屬二名 右明治三年十月改革當時ノ職員
學校掛職員役祿 大屬十六石 少屬八石二斗五升 史生五石 學校職員役祿 督學欠 教授八石二斗五升 教授補六石五斗 助教五石 句讀三石 句讀補二石 附屬二石

職員概數 維新前後トモ詳ナラス然レモ定員ヨリ減セシヲナシト云フ
生徒概數 三百人 內寄宿生徒凡二拾人、通學生徒凡二百八十人

束脩謝儀 從來生徒入學ノ際ハ束脩トシテ扇子壹對ヲ師家ヘ納メ其學ニ在ル間ハ毎年七月十二月銀三分ヲ謝儀トシテ生徒各自ヨリ師家ヘ納ムルノ慣例ナリシカ明治元年藩廳ヨリ學校ヘ三百石ヲ付與シ諸費ヲ支辨セシメタルカ故ニ爾來之ヲ廢止セリ

學校經費 從來學校ノ諸費ハ生徒ノ謝儀ト藩士相協同シテ積立テタル金員トヲ以テ支辨セシカ漸次其積金ヲ消費シ且學事擴張ニ隨ヒ多額ノ費用ヲ要スルニ依リ明治元年藩廳ヨリ三百石ヲ學校ヘ付與シテ其諸費ヲ支辨セメタリシカ明治三年十月改革ノ際之ヲ廢シ學校諸般ノ經費ハ藩廳ヨリ月々之ヲ支辨セリ其經費額大凡一ケ年六百圓ナリ

一童子句讀朝五ツ時ヨリ四ツ時マテ事故疾病アレハ其由ヲ名刺ニ書シ他人ニ托シ句讀師へ指出ヘシ

一成童以上自讀朝五ツ時ヨリ九ツ時マテ若シ事故或ハ武場ニ赴ント早ク退散ヲ欲セハ都講へ斷ルヘシ濫ニ去ルヲ許サス若又席ニ登ラサルハ其斷リ童子ニ準スヘシ但シ諸局兵團劇務ノ餘暇ヲ偷ム輩ハ此限ニアラス

一自讀別會朝四ツ時ヨリ九ツ時マテ夕八ツ時ヨリ七ツ半時マテ夜六ツ時ヨリ九ツ時マテ疾病事故ニテ都講へ斷ルヲ正會ニ同シ

一童子句讀論語孟子中庸大學易經詩經書經禮記但國史略十八史略ニテモ句讀ヲ受クルモノハ句讀師ノ掌ル所ナルヘシ

一成童以上自讀和漢歷史日本國史略外史逸史通鑑史記前後漢書三國志等ヲ素讀シ疑字ヲ質問スルハ勿論ナリ務メテ我ヲ以テ書ヲ讀ミ尊旨ヲ体シ文武ノ士道ヲ志サゾヲ要ス又古今ノ盛衰興亡時勢人情ヲ博覽セゾヲ要ス妄ヲ流讀看過スヘカラス但童子ニテモ自讀ノ分ハ成童ニ同格タルヘシ

一講席經書ヲ始メ其餘經濟捷徑ノ書ヲ主トス常席議論質疑等之レアリテ講シ畢ルヲ待ツヘシ
一會讀席豫メ其書ヲ熟讀シ其義ヲ尋思シ疑義アレハ紙簽ヲ貼シ會ニ臨ンテ諸先ニ質問スヘシ先輩委曲ニ告諭シ滿坐諦聽シテ罔フ所ノ淺近ヲ嗤笑スル勿レ恐クハ初學差テ復タ問ハサラン同等儕輩ニ至テハ往復論辨少モ遜讓セス切磋琢磨ヲ要トス但シ雷同勦說我意爭心等深ク謹戒ヲ加フヘシ尙退會後モ覆讀一過スルハ益アルヲ少カラス

一學童ノ學ニ在ル貴賤ヲ以テ座次ヲナサス登席ノ先後ニ隨テ序ヲナシ句讀ヲ受クルモ其順序ニ隨フヘシ妄リニ次ヲ爭フヲ勿レ又往來途上ニテ戲謔喧爭ヲ戒ムヘシ且ツ人才ヲ教育拔擢スルノ地ナレハ成童以上ハ最モ驕慢ヲ戒メ禮讓ヲ守リ躬行實踐ヲ專要トス

一拜借ノ書籍看了レハ登時ニ完收スヘシ又濫ニ壞汚スヘガラサルハ固ヨリナリ

一凡學生宗藩及兩京等へ游學セント願請スレハ學業ノ精粗人才ノ品題ヲ商議ノ上コレヲ許ス徒ニ篤志ノミハ請ト雖モ許サス

右法則ハ尊命ヲ奉シテ商量確定スル所ナリ敢テ私ニ定ルニアラス故ニ若シ舊套花法トシテ輕忽シ守ラサルノ輩ハ鞭朴ノ罰悔正何ソ及ハン各此意ヲ領シ互ニ相警戒シテ勉強勵精アラント深ク冀望スル所ナリ

武場教則等之レナシ授業ノ時間ハ朝五ツ時ヨリ九ツ時マテトス

學科學規試驗法及諸則

廢スルニ及ヒ子弟ヲシテ必ス此ニ入學セシム明治二年更ニ藩學校ヲ興シ文學ヲ擴張セリ
他國ヘ游學セントスルモノニ藩費ヲ與ヘ又ハ其幾部分ヲ貸渡シタルヲアリト雖モ其人ヲ擇ムヲ嚴密ニシテ容易ニ許サ
ス私費游學ハ各自ノ望ニ任ス

藩立學校設置以前ニアツテハ毎月二七日日藩廳内ニ於テ儒官ニ講義ヲ命シ藩主聽聞ノ旁藩士ヲシテ老幼ノ別ナシ務メ
テ傍聽セシム

平民ノ子弟教育方法 文學ハ家塾寺小屋ハ勿論藩内ノ教師ニ就キ之ヲ修ムルモ隨意トシ敢テ之ヲ禁セス然レモ武藝ハ農
工商民中帶刀ヲ許セシモノ無足人ナト、ニアラサレハ之ヲ講スルヲ許サス

家塾寺子屋設置ノ制度 何人タリモ隨意ニ開設スルヲ得セシム

學校 但江戸藩邸内ニ學校ノ設ナク舊來ノ儘各自々
宅ニ於テ教授セシカ故ニ取調フヘキ項目ナシ

校名 初メ句讀所ト稱シ後久居藩校ト改ム

校舍所在地 伊勢國一志郡久居大手町(今西鷹跡町ト改稱ス)

沿革要略 本校ハ明治二年己巳九月舊久居藩知事從五位藤堂高邦ノ創置スル所ニシテ文武教師若干人ヲ置テ以テ藩士及
管下ノ衆庶ヲ教養ス抑モ本藩ハ從來藩費ヲ以テ學校ヲ設ケス故ニ一藩ノ子弟ヲ教養スルカ爲メ藩士中文武ノ學術ニ長
スルモノニ教師ヲ命シ其家宅内ニ教場ヲ設ルヲ許シ教授セシムルノ制ナリシカ是ニ至リテ此ノ設ケアリ明治三年庚
午九月藩制ヲ改革スルニ當リ學制ヲ改定シ督學ヲ置キ學校ノ規模ヲ恢弘ニセントス然ルニ明治四年廢藩置縣ノ令ニ依
リ終ニ學校ヲ廢ス是ニ於テ一藩士族ノ基立金ト同志者ノ義金トヲ以テ久居義塾ヲ設置セシメ士民ヲ教育ス是ヨリ先明
治三年十月管内ニ布達シ鄉校ヲ起シ漸次從前ノ寺子屋ヲ改良セントセシカ廢藩ニ依リ是モ亦俱ニ廢シ更ニ久居義塾ノ
分場ヲ管下九ヶ所ニ設置セシム又明治三年庚午十月種痘館ヲ久居旅籠町ニ設ケ近傍町村ノ子弟ヲ接種シ遠隔ノ村落ニ
ハ種痘醫ヲ派遣シ接種セシム本館ハ即チ藩校ノ所管ニ属ス

教則

學則

一九歲正月ヨリ學ニ入り十五歲十二月ニ至リテ學ヲ出ツヘシ但四書五經國史略十八史略讀終ラサレハ出ツルヲ許サ
ス(成童以上自讀ノモノ退學及武術修業ノ期限ナシ)

過テ改メサル之ヲ過ト謂フトアレハ今後感悟イタシ斷然改心ヲ第一要務トス文武ノ技業ヲ夙夜勵精スヘシ但文道ハ修身ノ本ナレハ必ス怠ルヘカラス武技ハ砲劍柔兼講スルハ勿論ナレモ年齡又性ニ短長アレハ專ラ其所長ノ一藝ヲ習モ碍ナシ唯身ヲ藩校ニ寓ソ心ヲ他事ニ馳セス早ク悔悟ノ効ヲ顯シ以テ舊醜ヲ雪キ其材ヲ成就セシメント是レ藩廳仁恤ノ美旨ナリ生ソレ憾激奮勵セスンハアルヘカラス

出席ノ定 朝六ツ半時ヨリ九ツ時迄夕九ツ時ヨリ七ツ半時迄但會業コレナキ日ハ習書寮ニテ和漢ノ法帖ヲ臨書スヘシ
夜會之レアル毎ニ出席スヘシ早ク退散スルヲ許サス最モ晝夜トモ疾病ニテ欠席スレハ都講師範ヘシ事故ノ欠席ハ許サス但シ無據事件ハ他人ヲ以テ斷リ出レハ評議スヘシ尙又一六ノ夕休會ニ付私宅ニテ和漢ノ書籍日誌等ヲ素讀シテ黃簽ヲ付置キ翌朝質問シ或ハ臨書紙數ヲ定メ翌朝檢査ヲ乞フヘシ

明治二年己巳晚秋

藩校教授

種痘館規則

一 今度種痘館御開キノ御趣意深ク体認シ謹テ堅ク守リ決シテ輕忽ノ所爲無之様互ニ切實ヲ旨トシ勉勵施行スルヲ要トスヘシ

一 館内會日ニハ一統集會スヘシ無據事故疾病ニ依リテ欠席ノ節ハ其事件相認メ館内ヘ速ニ案内致スヘシ

一 自己ノ引痘ハ固ク禁止ス

一 眞假ノ確定肝要ナレハ疎忽是ナキヲ事務トス

一 稟賦ノ強弱疾病ノ有無詳ニ診察シ後播種スヘシ

一 初日刺種シテ不感或ハ疑似決定シ難キハ後日再刺或ハ年月ヲ間シテ刺試スヘシ

一 證券ハ眞ヲ保スルモノ實印ヲ以テ割印シ渡スヘシ尤モ眞ヲ保スル者ノ姓名或ハ見點ノ數并苗母ニ撰ハレシ姓名モ種痘錄ニ記スヘシ

一 出郷ハ順次ヲ定ムヘシ其順次ニ當ルモノ若シ疾病アツテ出張難致或ハ無據事故アルハ其情實ヲ糾問ノ上互ニ扶助スヘシ

一 謝禮銀三分一ヲ諸醫ニ賜フ然レモ其勤怠ニ因テ配分ノ定左ノ如シ 館内引種壹人ニ付銀五分 遠郷引種壹人ニ付銀壹匁 諸醫銘々引種ノ人數ニ應シ右ノ割合ヲ以テ月々配分ス若シ餘銀アルハ一ヶ月分引種ノ惣人數ニ割リ施種者ヘ引種人數ニ應シ分配ス

學科 國學、漢學、習字、醫學、兵學(但兵團ニ於テ西洋兵式ヲ講ス)馬術、槍術、劍術、柔術、砲術西洋大砲術但生徒ニハ必ス文

武兩道ヲ兼修セシムト雖モ武術ハ各科ヲ修メサルモ各自ノ意向ニ任ス又藩校開設以前文學ト武術ト程度ノ比例ハ四書ノ大義ニ通スルモノハ武術ノ免許舊藩武術ノ段階ハ概略初段ニ粗相當スト雖モ藩校ニ於テハ總テ段階ヲ廢ス

學規(文武場トモ同斷)凡風俗ヲ維持シ士氣ヲ振起スルハ文武ヨリ善キハナシ文武ハ即チ聖人ノ道ニシテ孝弟忠信ハ文

ナリ智勇廉耻ハ武ナリ文ハ武ヲ資ケ武ハ文ヲ行フ所以ニシテ表裏ヲ相成シテ武ナキ文ハ眞文ニ非ラス文ナキ武ハ眞

武ニアラス且文武ハ仁義ノ異名ナレハ仁義ヲ能ク明ニスレハ文武ハ自ラ明ナリ抑又文ニ德ト藝ノ別アリ武亦然リ仁

ハ文ノ德ニシテ本ナリ書ヲ讀ミ詩文ヲ作ルハ藝ニシテ末ナリ義ハ武ノ德ニシテ本ナリ劍ヲ擊キ銃槍ヲ習フハ藝ニシテ末

ナリ然レハ文藝アリテ文德ナキハ文道ノ用ヲナサス武藝アリテ武德ナキハ武道ノ用ヲナサス徒ニ風流ヲ文トシ猛厲

ヲ武トスルハ大ニ誤レリ故ニ能ク德藝本末ヲ明辨セスンハアルヘカラス然レモ卑ヨリ高ニ登リ末ヨリ本ニ至ルモノ

ナレハ技藝ヲ學ハサレハ其道德ヲ明ニスルヲ能ハス文藝ハ博ク古今和漢ノ書ヲ讀ミ武技ハ各其師ニ就テ講習スヘシ

此晋ノ臆說ニ非ス先賢ノ論ニ從ヒ敢テ其語ヲ折衷節錄スルノミ今茲己巳ノ秋知事公深ク士氣衰廢シ風俗陵夷シテ遂

ニ知藩ノ任ヲ失ハンコトヲ憂ヒ大ニ學政ヲ興起シ圖藩士族ヲシテ文武仁義ヲ研窮講明シ士ノ士タル所以ノ道ヲ知ラシ

メ有用ノ士ヲ成就センコトヲ欲シ玉フナリ然レハ教師學生厚ク尊旨ヲ体認シ以テ材ヲ達シ德ヲ成シ他日ノ大用ニ供ス

ルヲ志シ夙夜勤苦其業ヲ勉勵スヘシ

明治二年己巳晚秋

藩校教授

習書寮規則

一書ハ小技ナリト雖モ六藝ノ一ナレハ幼童ニシテ學ハサレハ成長ノ後尋常ノ書牘ヲモ贈答スルヲ能ハス況ヤ諸曹ニ

入リ公事ヲ記載スルオヤ故ニ時ニ及ンテ夙夜勵精セスンハアルヘカラス

一心正シキ時ハ筆自ラ直シト古人モ戒シメケレハ第一行儀ヲ正スヘシ然サレハ運筆法ヲ得テ結書スルヲ能ハス尙又

日課ノ紙數ヲ脫漏シ且ツ勿走塗抹スヘカラサルハ勿論ナリ

一書体ニ和漢ノ二様アレモ是非得失アルニ非サレハ各好ム所ニ隨テ其師ノ法帖ヲ臨摹習熟ヲ要トス習熟セサレハ用

ヲ成サス尙又必ス妄ニ自他ノ批評スヘカラス

明治二年己巳晚秋

藩校教授

學囚生規則

藩士中ノ壯年輩ニシテ平素不品行ナルカ或ハ過失アルハ此規則ニヨリ藩校ニ入レ懲戒スルモノトス

生徒概數 通學生百五十人(但維新ノ人員ニシテ藩校創設以前ノ人員ハ不詳)

束脩謝儀 束脩 入學ノ節扇子七本家老 全五本五百石以上 全三本二百石以上 全二本獨禮以上 全一本總禮并陪臣

右句讀所其他諸流門ヘモ同斷相收納ス

謝儀 銀二兩家老 銀一兩右嫡子以下人別 銀一兩中老以上 青銅三拾疋ツ、右嫡子以下人別 同三拾疋五百石以上

同二拾疋ツ、右嫡子以下人別 同二拾疋三百石以上 同拾五疋右嫡子 同拾疋右次男以下人別 同拾五疋二百石

以上 同拾疋ツ、右嫡子以下人別 同拾疋給人以上 同拾疋右部屋住ノ者幾人アルモ催合 同拾疋獨禮總禮陪臣

テ家督部屋住トモ幾人アルモ催合 右兵學并諸武藝ノ謝儀

金百疋家老 銀三兩五百石以上 銀二兩二百石以上 銀一兩右以下給人以上 銀一朱獨禮總禮陪臣 右句讀所并習

書ノ謝儀但何レモ次男以下ハ右ノ半額ヲ納ム

諸藝傳來謝儀○初度 金二百疋家老 金百疋給人以上 金二朱獨禮總禮陪臣 但次男以下ハ半減ノ事○二度 右同斷

○皆傳 白銀二枚家老 金三百疋給人以上 金二百疋獨禮總禮陪臣 右諸流可爲一様縱令幾段ニ相分リ之レアルモ

右三段ヲ以テ相納ム

學校經費 不詳

藩主臨校 講義及會讀ノ日ハ臨時藩知事臨校シテ生徒ト俱ニ聽聞若クハ質問討論等ヲナシ又生徒ノ試業ヲ爲スヲアレ

試驗評點ヲ以テ等級ヲ定ムル等ノヲナシ

祭儀 無之

學校構造及ヒ建物圖面 構造平屋 地坪千三百三十五坪五合四勺 建坪及圖面不詳

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 出版翻刻セシ書籍無之 藏書ノ種類部數不詳

舊長島藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達ノ書類ハ目下存在セサルニヨリ取調カタシト雖モ學業上進ノ者ハハ格式ヲ進メ又ハ俸

祿ヲ増加シ藩主ノ紋服或ハ金圓ヲ賞與スルヲアリ

士族卒ノ子弟教育方法 藩主ノ學校ハ必ス子弟ヲ入學セシメ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學若クハ私費遊學ヲ欲スル

一諸醫出館出郷マテニテ引種セサルモノハ右配分ヲ除ク然シ出郷先ニテ醫生等ニ指揮傳習ノ節其指揮者ハ引種同斷一助教ハ館内遠郷ニテ引種致スル其人數ハ其日同事引種ノ諸醫ニ讓ルヘシ
一市郷ノ醫生望ノ者ハ館内或ハ出張所へ出テ仕役スヘシ尙往々施種ニ達スルモノハ御委任ノ許可ヲ蒙ルヘシ又社人寺僧俗人タリハ濟生ノ一端ナレハ懇願ノモノハ是亦館内出張所コテ仕役スヘシ
右條々廳旨ヲ歷テ規律ヲ定ム不可忽諸者也

明治三庚午年十月

醫學二等助教

生徒學習ノ期限 文學武術トモ前ノ學則第一項ニ掲クル故爰ニ略ス
春秋試驗等ノ法 定期ノ試驗等無之知事若クハ參事ニ於テ臨時試業スルノミ
生徒賞與授與ノ法 賞與例等ナシ特ニ勉勵上進ノモノニハ臨時金銀物品ヲ賞與ス
生徒訓條罰則 不詳

入學許可ヲ得シモノ答禮 入學願上候ヘハ文武類役組頭役ヨリ口上ニテ年寄ヘ相願開濟ニ相成候得ハ當人月番ヘ答禮ノ事 但シ藩校設置ノ節其例ヲ廢ス

職名及ヒ俸祿 儒者二名(一ヶ年役銀白銀壹枚ツ、以下皆同シ) 習書師役一名 劍術師役三名 槍術師役三名 柔術師役四名 砲術師役二名 馬術師役一名 軍馬術師役一名 居合師役一名 禮節師役一名(但明治元年師家ノ建白ニヨリ廢ス) 兵學師役一名 弓術師役一名 伊慶應年間マテ二名 右師家一名ニ付助教一名ツ、其役銀二百五十匹ヨリ百匹マテ職務ノ繁閑ヨリ給與ス 右坐席身分取扱ハ其人ニ依リ一定ナラスト雖モ定規ハ文武類役ト稱シ大小姓役 藩主馬建リ役 次席トス 右藩校創設以前ノ定

文學教授一名、月給金六兩 都講三名、同四兩宛 助教 定員 同五兩 武藝師十四名、同二兩二分宛 句讀師五名、同三兩宛 習書師二名、同三兩宛 句讀師補(以下定員ナシ)同一兩二分 習書師補、同一兩二分 武術師補、同一兩二分 右明治二年藩校創設ノ時ノ人員

督學一名、月給金二拾二兩 文學教師一名、月給不詳 同一等助教二名、月給不詳 同二等助教五名、月給金八兩二分 閑廐長一名、同六兩 文學三等助教五名、同六兩 武藝師五名、同六兩 習書師一名、同六兩 右明治三年改革後ノ人員

職員概數 職員前記ノ如シ 藩校門衛一名

職員○教員八名 嘉永年中ノ職員○教員四名事務員一名 明治二年ノ職員

生徒概數 藩士ノ族籍ニアラサル者ハ入學ヲ許サス故ニ生徒ノ數甚タ許多ナラス往古ハ不詳天保年中ヨリ嘉永年間迄ハ其數六七十人ニ過キス明治ノ初年ニ至リ漸々減シテ四五十人ニ至レリ但通學生ノミニシテ寄宿生ハ無之東脩謝儀及學校經費 不詳

藩主臨校 春秋二期試験ノ際藩主殿中へ生徒ヲ集メ或ハ臨校シテ其業ヲ試ミルヲアリ

祭儀 天明五年七月聖殿ヲ設置セラレシヨリ以來春秋釋奠ノ禮ヲ舉行セラル但當日ハ士族卒ニ至ルマテ其式場ニ列ス

學校構造及ヒ建物圖面 不詳

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 出版翻刻セシ書籍無之 藏書ノ種類部數 和書一部、漢書一部、翻譯書二部

舊神戸藩

學制

學事上ノ諸制度 教育ニ關スル藩主ノ布令諭達等ヨリ勸誘ノ方法ニ至ルマテ舊記ノ考據ニ供スヘキモノナシ故ニ其詳ヲ得ルニ由ナシ唯學問技藝ニ達スルモノハ其祿位ヲ進ムルノ制アリ學術ヲ以テ微賤ヨリ家老職ニ累進セシモノアリ(現ニ松原文大夫ナル者ハ原來中間ナリシカ學問ニ達セルヨリ中小姓席ニ進ミ後家老ノ職ニ累遷セリ)

士族卒ノ子弟教育方法 士卒ノ子弟ハ必ス之ヲ藩立學校ニ入ラシム而シテ學校規定ノ時間外教官及ヒ其他ノ家塾ニ入り修學スルハ各自ノ意向ニ任セリ或ハ間接之ヲ獎勵セシヲアリト云フ且ツ學業上進ノ見込アルモノハ藩費ヲ以テ遊學ヲ命シ或ハ自費遊學ヲ許

セリ而シテ其自費遊學ノ者モ多少藩費ヲ以テ學費ヲ補助セシナリ又生徒ノ外藩士ヲシテ學術ヲ講究セシメタル等アリ後學校取調要項中ニ詳ナリ

平民ノ子弟教育法 平民ノ子弟モ亦之ヲ藩立學校ニ入ルヲ許セシノミナラス勉メテ入學セシムルノ主意ナリ然リト雖當時士民ノ別頗ル嚴ナルヲ以テ自ラ之ヲ憚ルノ弊アリテ入學業ヲ修メシ者磯部元恒(菓子屋ヲ業トセルモノ)田中維徳(商人)ノ外前後數人ニ過キスト云フ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ノ類ハ自由ニ之ヲ設置スルコトヲ聽シ藩政之ニ關涉セス

條目

モノハ願ニヨリ之ヲ許可シ又ハ藩費ヲ以テ修學セシムルヲアリ且毎月三回藩主殿中へ藩士ヲ召集シテ共ニ講義ヲ聽聞セシメ生徒ハ學校ニ於テス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシメ藩主ノ學校へ入學スルヲ許サスト雖モ農民學事ニ從事スルハ各自ノ意向ニ任セテ之ヲ禁セス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設セントスルモノハ何人タリトモ自由ニ開設セシム

學校

校名 文禮館

校舎所在地 初メ學校ヲ伊勢國桑名郡外面村ニ設ク後チ天保十二年十一月長島城内ニ移シ後又明治二年八月長島城郭内三ノ丸ニ移ス

沿革要略 享保七年壬寅七月藩主増山對馬守正任長島城ノ東南外面村ノ別墅内ニ螢舎ヲ創置シ文禮館ト名ク講師都講ヲシテ開校ノ式ヲ執行セシム天明五年乙巳七月増山河内守正賢從來ノ學校破壤頽廢セルヲ以テ之ヲ改築シ更ニ孔子ノ堂ヲ設ケ講師ヲシテ開校ノ式ヲ執行セシム天保十二年辛丑十一月從來ノ學校大破傾頽スルヲ以テ長島城内城代屋敷ノ書院ヲ假學校トナス明治二年己巳八月長島藩知事増山正同城郭三ノ丸練兵場ノ東隅ニ假學校ヲ建築シ大属一員ヲ置キ學事ヲ監督セシム明治五年壬申五月移縣廢廳ノ令出ツルニ及ンテ遂ニ校舎ヲ鎖ス

教則

授業ノ方法及ヒ時間 每朝六ツ半時ヨリ九ツ時マテ經書歴史ノ類素讀質疑○毎月三ノ日九ツ時ヨリ日晡マテ(以下同シ)經書歴史ノ類輪講○全五十ノ日經書歴史ノ類講義○全一六ノ日詩文會○全八ノ日各生溫習○全八ノ日本丸書院ニ於テ藩士一統經書ノ講義ヲ聽聞ス 但式日ノ外湖望廿五日休業

學科學規試驗法及ヒ諸則 試驗法 毎月二七ノ日晝九ツ時ヨリ日晡迄經書歴史ノ類ヲ試問ス

職名及ヒ俸祿 講師一員都講一員 學校創設當時ノ職員○講師一員都講二員句讀二員 天明年中ノ職員○講師一員都講二員句讀不詳 享和年中ノ職員○講師一員都講四員句讀四員 天保年中ノ職員○講師一員都講四員句讀三員 嘉永年中ノ職員○教官一員監督一員準助教三員 明治二年ノ職員 右職員ノ俸祿ハ悉ク不詳

職員概數 教員二名 學校創設當時ノ人員○教員五名 天明年中ノ職員○享和年中ノ教員不詳○教員九名 天保年中ノ

設ク藩士ヲ教養セリ而シテ其學規制度ニ至リテハ異ナルコトナキヲ以テ之ヲ別記セス

校舎所在地 初メハ神戸城ノ南大手内字丸ノ内ニ在リ(目今神戸本多町字丸ノ内ト稱スルノ地ナラン)文化九年同城内二ノ丸門前御用屋敷ナルモノヲ改修シテ之ニ移ス爾來明治四年辛未十一月廢藩ニ至ルマテ凡六十年間轉徙セシコトナシ今ノ本多町ニ存スル神戸小學校ノ地即是ナリ

沿革要略 學校創立ノ年代ヘ之ヲ詳ニセント雖モ享保年間舊神戸藩主本多伊豫守忠統^{騎關ト}時狩蘭臺集ノ著アルヲ以

テ見レ、當時學業ノ盛ニ行ハレシヲ徵スルニ足ル降テ寛政年中本多伊豫守忠育ノ世既ニ學校ト稱スルモノアリ儒者一員學校世話役二員ヲ置キ教授ヲ掌ラシム當時ノ學規等詳ナラス其用非シ所ノ經書ハ古註ナリシト云フ文化九年壬申十二月忠育ノ嗣子伊豫守忠升大ニ學制ヲ改革シ教育ヲ擴張セリ以下掲クル所ノ諸項ハ皆此時ノ創定ニ係ル而シテ明治ノ初年本多河内守忠實再ニ學制ノ釐革ヲ行ヒ諸則ノ改正ヲ加ヘタリ但其改正ニ係ル事項ヲ併記スルトキハ頗ル繁ニ涉ルヲ以テ故フニ別錄トナセリ

文化以前ノ儒者ニ桑林逸アリ文化後ニ長野潛小谷左金吾朝日水之助等アリ並ニ其行事履歷等詳ナラス文化九年學制ノ改正ハ長野潛ノ盡力ニヨルト云フ尋テ儒官ニ任セラレシハ小谷秋水服部範依川村宣等ナリ而シテ本多忠實ノ世學制再度ノ改革ハ宣專ラ之ニ任セリ

江戸藩邸内進德堂ノ儒官タリシモノニ澤三郎松山章三郎穗積舍人アリ亦皆行事履歷ノ收フヘキモノナシ而シテ以上ノ諸儒皆朱子學タリ

教則

教科用書○素讀及順序 大學、中庸、論語、孟子、詩經、書經、禮記、易經、春秋、文選○講義 李滄蒙求、劉向新序、劉向說苑、朱子小學、春秋左氏傳、朱子四書、御註孝經、新註五經○涉獵書 十八史略、元明史略、歷史綱鑑補、通鑑綱目、史記、漢書、後漢書、三國志、唐鑑

教授時間 辰ノ刻ヨリ未ノ刻ニ至ル三時

休業 月、朔望 五節 入寒并ニ土用入ノ日 土用中ノ午後自七月十一日至全月十六日 自十二月十五日至翌年正月

十六日

會業 開講^學止月五日 藩士一同出校一般禮服ヲ著ス○月並講釋^{堂教諭} 每月六次○讀條目^{司憲之} 每月一次 辰ノ刻ヨリ

巳ノ刻ニ至ル藩士一同來聽ス司憲先ツ條目ヲ讀ミ而シテ後掌教講釋ヲナス○論講會讀 每月六次 以下皆未ノ刻ヨ

一學問と申すは孝悌忠信の筋を辨へ知り聖賢の千言萬語皆心に自得して是を日用となせは眞實の人となられ候徒らに書を多く讀みたる而已をよきとは申されぬ事にて候されはとて又書を讀ますしては其筋辨へ得られす候ゆへ朝夕經傳を講究し空談虛論にならざる心得あるべき事

一經書を讀む者のわたり聖人の在して教誨し給ふと心得敬畏の心を専らとし自己の身にひたと引き當て讀みぬれば知らず覺へす善に進みぬへし是讀書の第一たるべき事

一史書を修むるは天下國家の治亂禮樂制度の廢興政事法律の得失君子小人の邪正戰陣攻守の勝敗明主良臣の作爲詳に考へわきまへなは日用の學問之れにまさるはなく人の神智を増益すること之れに過ぎたるはなしよく／＼相心得自己に益ある様に學ぶべき事

一士は節義と申事第一にて候此二字の心は操を守り鄙劣の心を去り自己の善行をかたく立ぬき死すとも改めぬ事にて候よく／＼相心得申へき事

一晦學にて多くの書を讀むことあたはずとも古人の一言一事を師として眞の善き人となりたるためし古今和漢其數少からず候此旨相心得申へき事

一己學問をさたりたりとて人を侮り輕んすへからず己不學ありとて人を妬み妨くへからず其身不學なりとも人の學ぶを喜ひすゝむる輩は誠に目出たき心はせにて學びたる人も同じかるべく候人を妬むは婦女の心にて男子の恥へき是れより甚しきいなし是等の事はわきて相心得申へき事

一學校は禮義相先するの地といへは謙り讓り行儀正しく聊も惰慢放肆のふるまいこれあるへうらす候事

一男色女色金錢利慾の評論かたく相慎み申へき事
一輪講會讀の時虚心平氣にして自己に益あるを専らとすへし己先入の説を主張して聲色を變し相爭ふへからず候事
右九ヶ條能々相心得候様申渡すべく候我等不學不徳に候へはかく申渡し候上は我不徳を正し助くることはありたく候我等へ忠節を存する輩は此旨相心得申へき也

學校

校名 始メハ單ニ學校ト稱シ文化九年名ケテ教倫堂ト稱ス又江戸藩邸内ノ學校ヲ進徳堂ト云フ其設立ノ年代ヲ詳ニヤス
(蓋文化後ニ屬スルナラン)又本多河内守忠貫伊勢國山田奉行タリシ頃(文化三年ヨリ明治二年ニ至ル)該地ニモ學校ヲ

槍劍以下各專門ノ師アリ之ヲ教授セリ而シテ維新後新ニ用ヰタル外國ノ兵式ハ他藩ヨリ其師ヲ聘シ(多クハ舊膳所藩ノ士ヲ聘セリ)或ハ藩士ヲ遊學セシメ其卒業歸國ノ者ヲ採用セリ

學校生徒ハ必ス文武兩道ヲ兼修セシム然レモ既ニ定規ノ試業ヲ卒ヘタルモノハ各自ノ嗜好ニ任レ一科若クハ數科ヲ講究セシム

學規 詳ナラス

學期 士卒ノ男兒六歲皆藩立學校ニ入ラシム(武術ハ十二歲以上ノ生徒ニ修メシメシ慣例ナリト云フ詳ナラス)素讀試ヲ卒ヘテ^{教科用書ノ}講義ニ入り^{講義試經書ヲ用}ニ於テ三回以上引續キ考第甲ノ上ニ登ルカ或ハ特許^{家内衆多ノ事故アルモノハ試験ニ應セサルコト特}ハ^{許セラル}ヲ得ルニアラサレハ毎年試業ニ應セサルヲ得ス既ニ此應試ヲ許サルレハ始メテ學校ヲ退キタルノ姿ナリ然レモ會業日ニハ必ス出校スヘキノ制ナルヲ以テ藩士ハ終身學校ニ出入セリ

試業 試業ヲ會得試素讀試ノ二種ニ別ツ會得試ハ毎年一回素讀試ハ二回之ヲ行フ考第十二等アリ甲乙丙丁^{各上中下ノ三等ニ分ツ}甲

科ニ升ル者ハ賞アリ而シテ其賞ニ次第アリ講義試ニ於テ甲ノ上ニ登ル者ハ木綿一反其中ハ半紙十折其下ハ七折トス

又素讀試ニ於テハ甲ノ上ヲ半紙十折中ヲ七折トス又素讀試ニ於テハ甲ノ上ヲ半紙十折中ヲ七折下ヲ五折トス^{或ハ之ニ筆紙墨ヲ添フコトアリ}武術亦各科毎年試業アリ其方法詳ナラス 試業亦會業ノ操縱ト共ニ多少ノ變更アリ即文政八年會得試ヲ廢シ天保元年ニ至リ間年一次ニ復ス 素讀試ヲ年一次ニ改メ安政五年舊ニ復ス

生徒訓條及ヒ罰則 唯條目ノ存スルノミニテ他ニ考據トナスヘキモノナシ但壯年以上ノ者學業ヲ怠リ或ハ會業ニ故ナク出校セサリシ者ハ之ヲ譴責シ或ハ罰黜セリ

職名及ヒ俸祿 俸祿坐席及ヒ身分取扱ヒ等總テ詳ナラス但掌教ハ別ニ一人口ヲ賜ヒ且ツ年末ニハ各職員ニ白銀若干ツ、次第ヲ以テ賞賜アリシト云フ

維新以前 上司一員 學政ヲ管ス○掌教一員 毎日巳ノ刻ヨリ午ノ刻マテ上直シ講義ヲ授ク○司憲兼助教二員 毎日

辰ノ刻ヨリ未ノ刻マテ一員ツ、上直シ堂宇ノ破壊生徒ノ稽失等ヲ檢シ且ツ會計ヲ領シ點名簿ヲ掌リ兼テ掌教ヲ助ケ且ツ句讀ヲ授ク○助教二員^{内一員書師ヲ兼務ス} 毎日辰ノ刻ヨリ未ノ刻マテ一員ツ、上直シ生徒ニ句讀及ヒ習字ヲ教フ○使童

二員 堂上ノ使令ニ供ス○學校番 門廬ニ寄宿セシメ看守灑掃等ノ事ヲ掌ラシメ兼テ驅使ニ給ス

右ハ文化改正ノ際制定セシモノニシテ明治年間再度ノ改革マテ變更ナシ而シテ維新後^{即學制頒布以前}職員ハ別錄ニ詳ナリ職員概數 維新前後トモ詳ナラス然レモ定員ヨリ減セシコトナシト云フ

リ申ノ刻ニ至ル壯年ノ者ヲシテ必ス之ニ會セシム○詩會 壯年ノ者之ニ會ス○午後講釋御憲講 每月三次 專ラ成童以下ニ聽カシム○老人會 每月二次老人晚學ノ者ヲ會シ經義ヲ講習セシム 右會業沿革

藩用給セサルヲ以テ大ニ節儉ノ令ヲ布キ藩中譜代以上ノ俸ヲ減セシ等ノ事ヨリシテ課業ニ操縱アルコト數次今其最著シキモノヲ左表ニ掲 但教科用書生徒ノ日業教授時間ニハ變更ナシ

變更事由	女政八年正月藩用給セサルニヨリ藩士譜代以上ノ俸ヲ減シ因テ課業ヲ弛フル左ノ如シ	天保元年正月藩士減俸四分ノ一ヲ復ス因テ課業ヲ加フル左ノ如シ	天保十四年又減俸若干ヲ復シ因テ更ニ課業ヲ加フル左ノ如シ
開	講	變	變
月並講釋	每月三次	每月四次	每月五次
讀條目	間	變	歲首開講
輪講會讀	每月三次	每月四次	每月五次
詩會	每月一次	每月二次	變
午後講釋	變	變	變
老人會	每月一次	廢	止

安政五年八月本多忠實藩主タルトキ悉ク譜代以上ノ減俸ヲ復シ因テ課業ヲ文化壬申ノ舊ニ輓回ス但讀條目老人會ハ復セス

學科學規試驗法及ヒ諸則

學科 國學、漢學、筆道、習禮、劔術、槍術、柔術、弓術、馬術

文化ノ項專ラ和漢學及ヒ筆道習禮(小笠原流ヲ用ニ成童以下ニ授ク)ヲ學ハシメ又擊劍道場ヲ校内ニ置キ槍劔柔術弓馬砲術ヲ修メシム(弓馬以下ハ別ニ馬場ノ設ケアリテ校外ニ於テ練習セシム)後忠實ノ世ニ至リ更ニ兵法算法及ヒ兵法操練ノ三科ヲ加ヘ維新後南大手門側東御殿ト稱スルヲ改築シテ演武館トシ(後兵學寮ト改ム)兵學及ヒ操練ノ二科ヲ此館ニ移ス(操練ハ維新後英式ヲ用ニ後佛式ニ改メタリ)

聲爭論酒食等一切禁止

一 凡生徒輩中ニテハ貴賤ヲ問ハス専ラ長幼ノ序ヲ守ルヘシ但正集會ノ時ハ教員ヲ除クノ外貴賤ノ等級ニ據テ次列スヘシ

一 皇國ノ詞藻并ニ詩文等ハ藝ニ遊ヒ學業ヲ助クル者ナリ各餘力ヲ以テ其ノ好ム所ニ從事スヘシ

一 交道ハ忠告善導ヲ旨トスヘシ人ノ勉強ヲ妨ケ妬ミ及ヒ人ヲ惡ニ誘キ人ノ惡ヲ成ス者ハ皆其科ニ處スヘシ

一 日業會業トモ各點名簿ヲ設ケ置キ月尾ニ司書之ヲ廳上ニ指出スヘシ

一月ノ朔望後一六并ニ七月十一日ヨリ十六日マテ十二月廿五日ヨリ翌年正月七日マテヲ休業トス

一 衆流ノ内武備ヨリ重キハナシ武備アルモノ、文事ニアラス文事アルモノ、武技ニアラス

ハ眞ノ武技ニ非ス仍テ武備モ亦相兼テ講習セスハアルヘカラスサレハ眞ノ文事ニアラス文事アルモノ、武技ニアラス

教科用書 正科 令義解、古語拾遺、六國史、大日本史、日本紀略、類聚國史、四書、五經、孝經、朱子小學、七書○兼習 三

代格式、文章軌範、江家次第、舊事記、公事根源、職原抄、文選、十七史、涑水通鑑、通鑑綱目、唐宋八大家文讀本正續、十三經、

瀛寰志略、萬國公法、唐律、明律、宋名臣言行錄正續、紀効新書、西洋事情

右目的ノ大槩ヲ舉クルノミ此外倫理ヲ明ニシ名分ヲ正シクシ國ヲ富シ兵ヲ強クスルニ資スルノ書固ヨリ枚舉ニ暇アラ

サルヘシ各其好ム所ヲ教師ニ請問シテ其指導ニ從ヒ博覽スヘシ

條目 前ニ掲ク、全ク文化九年ノ舊文ヲ用井獨リ結尾ノ右九ヶ條能々相心得ノ數十字ヲ改竄シテ右九ヶ條能々相心得

候様申渡スヘキ者也ノ十七字ニ作ル

會業 歳首開講經學 正月五日○讀條目正月五日 右助數先ツ進ミテ條目ヲ讀ミ而後教師進テ孝經ヲ講ス○教師講釋月四

次 右辰ノ刻ヨリ巳ノ刻ニ至ル○令義解、孝經、四書、朱子小學 助教講釋月二次 右午後時宜ニ從フ此一項ハ小集會ニテ二十歳以下ノ者

之ニ 〇朱子小學 輪講會讀月四次 右未ノ刻ヨリ申ノ刻ニ至ル○文會月一次 時間同上○詩會月三次 時間同上

右輪講以下三會各褒貶簿ヲ設ケ每會其點ヲ加ヘ歳尾之レヲ總勾シテ等級ヲ升降ス○習禮原流月三次

試驗法 講義試年一次 句讀試年一次 右考第甲乙丙丁トシ各上中下ノ三級トス甲ノ三級ハ各賞アリ又丁以下ヲ落第

トシ再ヒ其科ヲ溫習セシメ及第ヲ得ルニアラサレハ其科ヲ轉スルヲ聽サス 算試月六次 書試月六次 右二項各褒

貶簿ヲ設ケ歳尾其數ニ據リ等級ヲ升降スルヲ輪講會讀ノ例ニ同シ

學書案規則 淨書月六次 字帖復讀月六次 大字淨寫年四次 臨書及ヒ句讀受業ノ課了ラハ作詩讀書隨意タルヘシ自

生徒概數 缺ク

束脩謝儀 生徒入學ノ際扇子一對ヲ以テ束脩トス謝儀ハ徴セス

學校經費 定額ナシ藩費ヲ以テ一切之ヲ辦ス又貧士ノ子弟ハ書籍ヲモ貸與セリ

藩主臨校 學校開講月並講^{讀條目ニ}試業ニハ必ス之ニ臨メリ

祭儀 釋奠釋菜ノ禮ハ別ニ之ヲ行ハス唯正月二日ノ學校始ニ酒饌ヲ聖像ニ供シ生徒ヲシテ參拜セシメシノミ

學校構造及ヒ建物圖面 別紙ニ具ス

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數

出版書 猗蘭子三卷 猗蘭臺集十七卷 岫雲詩集一卷

藏書ノ種類部數 和書十二部 漢書八十五部 翻譯書三十一部 萬國地圖二部

別錄 左ニ掲グル所ノ諸項ハ明治三年藩主本多忠貫ノ制定セシ所ナリ事錯雜ニ涉リ或ハ覽觀ニ便ナラサランヲ恐レ故

ラニ別錄トナセリ而シテ此時ノ改革ハ前後(六月及ヒ十一月)都テ兩度ナリシト雖固ヨリ大同小異ニシテ後ノ改革ハ僅

ニ事允當ナラサルモノヲ改メタルニ過キサレハ敢テ區別掲記スルヲ要セス故ニ後ノ(十一月)改正ニ係ルモノヲ記載セ

リ

教倫堂規則

一 教倫堂ハ人材ヲ教育スルノ林藪ナリ凡ソ衆流百家ノ術藝苟モ國家ノ用ニ給スル者皆文字ノ間ニ森列ス而ルニ之レ

ヲ讀ミ其術ニ達スルヲ得セシム之ヲ林藪ト云フ故ニ苟モ一材ノ用ヲ求ムル者皆此林藪ニ入ラサルヲ得ス業ニ

已ニ之レニ入ラハ各見識ヲ以テ其美ニシテ良ナル材ヲ求ムヘシ皇國ノ宏謨トシテ人ニ取テ以テ善ヲ爲スノ義ニ符

合シ彼我ノ藩籬ヲ隔テ給ハス仍テ營相公ノ語ト申シ傳ヘテ和魂漢才ヲ古來ヨリ學問ノ主意トスルナリサレハ近來

退々洋學モ開ケ漢才ノ不足ヲ補フニ足ル者ナリシレハ洋書モ亦讀マスハアルヘカラス故ニ今ヨリ以後和魂漢洋才

ニテ實用實學國家ノ御爲ニナルヲ學問ノ目的トナスヘシ

一日業ハ辰ノ刻ヨリ始メ終日タルヘシ其內疑義質問ハ專ラ辰ノ刻ヨリ午ノ刻マテヲ限ルヘシ

一句讀生ハ辰ノ刻ヨリ午ノ刻マテヲ受業進益ノ時ト定ム午後ハ專ラ溫習ニ從事スヘシ司憲助教句讀師等之レヲ查閱

シ其誤讀ヲ正シ熟讀セシムヘシ

一 妄ニ政法ヲ是非シ好テ人ノ長短ヲ評議シ或ハ人ノ陰私ヲ訐キ及ヒ無用ノ辨不急ノ察并ニ利慾飲食戲劇淫褻ノ談高

一年齡四拾歲以下有役非役ニ不拘文武事務修業候樣更ニ被申付事

但四拾歲以上ノ輩ハ可爲勝手次第有志ノ輩ハ當月晦日迄ニ學校少參事へ可申出事

抑モ學事ノ獎勵ヲ察スルニ士族ノ男子ハ十五歲ヨリ十八歲マテ入塾ノ者ハ扶持一口ヲ給シ十八歲以上ハ應分ノ俸給ヲ與フ若シ嫡子ニシテ入塾セシ者ハ廿歲ニ至ルマテ扶持一口ヲ給ス且當時兵式編製ノ際若シ兵籍ニ入サレハ家祿ノ幾分ヲ以テ賦課セラル、ト雖然レモ未タ三十歲ニ充タスシテ入塾スルアレハ其賦課ヲ免除スト是等ノ如キ學事ノ狀況ヲ觀ルニ足ル

士族卒ノ子弟教育方法

士族卒ノ子弟年齡八歲以上ノ者ハ必ス入學スルヲ以テ定規トス或ハ藩費ヲ以テ他國へ游學ヲ許ス者ハ當時ノ師範家ヨリ學監へ具申シ許可ヲ受ク未タ仕途ニ就カス私費ヲ以テ他ニ游學スル者ハ其旨學監へ奏シ自由ニ游學セシム尤モ私費ノ者ハ日數三旬以內ニ一回歸藩シ其旨學監へ奏ス藩主在國ノ節ハ毎月六回殿中表書院ニ於テ諸役人并藩士及ヒ其子弟年齡十三歲以上ノ男子ヲシテ必ス四書其他和漢歷史ノ講義ヲ爲シメ之ヲ聽聞ス藩主參勤ノ時ハ講堂ニ於テ之ヲ執行ス又間マ日ヲ期シ藩士ヲシテ生徒ト共ニ輪講セシムルコアリ

平民ノ子弟教育方法

平民ノ子弟ト雖藩校へ入學ヲ許可シ又他領へ游學スルノ自由ヲ與フ然レモ武術ニ關スルモノハ嚴ニ之ヲ禁ス

家塾寺子屋設置ノ制度

家塾寺子屋ノ設置ハ士民何人タリモ藩ノ關涉ヲ受ケス開設ノ自由ヲ與フ其教育ノ如キハ概テ師トスルハ神官僧侶其他醫師或ハ他領ノ浪人等ニシテ入學ノ生徒ハ女子男兒ヲ擇ハス八九歲ヨリ十四五歲マテヲ通例トスト雖然レモ父兄ノ貧富ニ隨ヒ間マ二三年ニテ廢學スル者アリ

學校

但江戸藩邸内學校ノ義ハ事跡ノ體スヘキ無キヲ以テ略録セス

校名 初メ麗澤館ト稱シ後チ脩文館ト改ム明治二年ニ至リ又顯道館ト改ム

校舍所在地 初メ伊勢國三重郡菰野藩邸内ニ在リ後同所松下町ニ移ス

沿革要略 抑モ該藩學事漸進ノ情況ヲ追跡スルニ藩主土方雄氏慶長六年入部ノ後城内ニ齊武場ヲ建設セラレシト聞ク然

レモ舊記ノ今ニ存スル無キヲ以テ髣髴トシテ其事ヲ認メ難シ故ニ學校名稱ノ下ニ掲ケス爾後多年所ヲ歷テ土方雄年ノ時ニ至リ大ニ儒學ヲ尊崇シ其臣龍崎泰行小澤信吾等ヲ選拔シ學事ノ端緒ヲ開ク文化十三年ニ至リ藩主義苗始メテ學校ヲ藩邸内ニ構設シ儒官及ヒ助教ヲ置キ藩士ノ子弟ヲ陶鎔セシム天保七年藩主雄興學政ヲ整理シ學則ヲ制定シ督學及ヒ

餘ハ學規ノ諸項ヲ守ルヘシ

職員及ヒ俸祿 教師二員、十二石五斗宛 終日上直シ教授課業ヲ總轄ス○助教一員、六石五斗 準助教三員、五石宛 終日上直シ堂宇ノ破壊生徒ノ稽失等ヲ査閲シ且點名簿及ヒ藏書ヲ掌リ兼テ教師ヲ助ケ又句讀ヲ授ク○句讀師六員、三石七斗五升宛 毎日二員宛輪直シ生徒ニ句讀ヲ授ク自餘生徒ト同シク終日修業スヘシ○書師一員、三石 毎日辰ノ刻ヨリ終日上直シ生徒ノ字帖ヲ書シ且淨書ヲ改正ス○準書師二員、二石七斗五升宛 終日上直シ習字ヲ教ヘ且計事ヲ領ス○算師一員、三石 準算師一員、二石七斗五升 終日上直シ算術ヲ教フ○使童四員、一石二斗宛 毎日二員宛輪直シ堂上ノ使令ニ給ス自餘生徒ト同シク業ヲ受ク○蠻卒一員、俸祿不詳 蠻ノ門廡ニ寄宿シ看守灑掃等ノ事ヲ掌リ兼テ驅使ニ供ス右諸項堅ク相守ルヘシ若循踏シテ弊害アラハ其ノ弊ナカルヘキ規則ヲ熟考シ會議シテ是ヲ改ムヘシ妄ニ一己ノ見ヲ恃ミ之ヲ改易セハ縱ヒ其爲ス所是ナリト雖猶違犯ノ罪アリトス況ンヤ未タ全ク是ナラサルヲヤ

〔附〕右官員六月ノ改革ハ左ノ如シ但俸給ハ前ト異ナルヲナシ 總官一員 司蠻一員 掌教二員 司憲四員 助教四員 句讀師六員 書師二員 準書師二員 使童四員 蠻卒一員

又明治四年辛未七月廢藩置縣ノ際役名ヲ改ムル左ノ如シ 教師ヲ廢シ準教師一員ヲ置ク、出仕一員ヲ置ク、句讀師ヲ改メ句讀得業生ト名ク

舊菰野藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達ハ舊來夥多有之趣ナレモ今舊記ノ徵スヘキ者ハ藩士ニ文武ノ業ヲ勸ムルト學校構造ニ付幼弱ノ輩ニ諭ストノ布達アリ其布達左ノ如シ

今度文明開化ノ御趣意ニ依テ文武學校御造立ニ付テハ若壯ノ輩修學ノ義一入可致勉勵旨過日御達ニ相成候處未其實効モ不相立文武隔心ノ浮説モ有之哉ニ相聞如何ノ事ニ付如此情態ニテハ何ヲ以テ藩力トシ 朝恩ヲ報ンヤ退々大政官ヨリ御督責モ有之趣ニ候得者後悔必然ニ候間更ニ別紙ノ通被申付候各私情ヲ去リ只管一和ヲ旨トシ際立勉強可有之事

明治庚午七月

(別紙) 但別紙中兵隊ニ關スル條項ハ之ヲ除ク

菰野藩廳

顯道館學規

夫學校ノ教タル其重スル所ノ者ハ何ソヤ舜倫是ナリ其貴フ所ノ者ハ何ソヤ日新究理ノ學是ナリ蓋舜倫其宜チ得レハ一家齊ヒ一國治ル苟モ其宜ヲ失ナヘハ必ス之ニ反ス是舜倫ノ重セスンハアル可カラサル所以ナリ日新究理ノ學明カナラサレハ智識ヲ進メ外邦ト屹立スルヲ能ハス是日新究理ノ學ノ貴ハスンハアル可カラサル所以ナリ舜倫ト究理ト相ヒ待ツテ而シテ後内外相制スヘク彼此相資クヘシ方今學制ヲ建ル者豈ニ此ノ順序ヲ謬ツテ可ナル乎廟堂夙ニ大學ヲ設ケ又各府藩縣ヲシテ各學館ヲ建テシメ以テ内外ノ學ヲ講究セシムル所以ノ者ハ殆ント之力爲ナリ今ヤ我藩學政ヲ興起シ人々ヲシテ其旨ヲ奉セシメ他日良器ヲ出シ以テ其用ニ供セシメント欲スルナリ苟モ此館ニ入ル者必ス夙夜孜々トシテ以テ其業ヲ勉勵スヘシ

明治己巳年十一月

野菰藩廳

試驗 文武ノ兩道ハ藩主必ス春秋ニ一度試覽スルヲ以テ例トス然レモ參觀ノ時ニ遭ヘハ一門ノ人ニ非サレハ閣老或ハ年老職代ツテ之ヲ行ナフ其試業ノ方法ハ師員豫メ青衿ノ學力ヲ慮リ試驗科書ヲ進獻ス藩主之ヲ執ツテ親ヲ講讀ヲ試ミ技術ノ巧拙ニ由リ賞品(筆紙墨或孝經壹部)ヲ賜フ各々差アリ武術ノ試驗法モ大約之ニ均シ唯弓術ニ至テハ流派ヲ擇ハス毎年正月二日ヲ以テ小笠原ノ弓禮ニ基キ藩士十三歳以上ノ者ヲシテ潔齋且正服ヲ着ケ射禮ヲ行ナハシム其法最モ嚴肅ニシテ古格ヲ存ス其禮ヲ過ツアレハ君前ニ謁スルヲ許サス其日ハ領内ノ男女ヲシテ縱覽セシムルヲ許セリ文武兩技共入學スル者ハ禮服ヲ著ケ簞笥一個ヲ師ヘ呈ス師ハ其姓名ヲ帳簿ニ注記シ卷鰯ヲ以テ下物トナシ冷醪ヲ三ヒ獻スルヲ以テ例トス歳首及ヒ暑寒ノ節モ亦如此

學則

一學術ハ公明正大ヲ主トシ固陋偏見ヲ以テ門派ヲ標シ私黨ヲ樹ツヘカラス神典國典ニ因リ國體ヲ辨シ廣ク漢洋書籍ヲ講究シ智識ヲ世界ニ求ムルノ 聖旨ニ副ハンヲ要ス勉サル可ンヤ

一師ヲ敬シ群ヲ樂ミ交道各其分ヲ守リ講習法ニ由リ禮ニ循ヒ溫恭遜讓ヲ以テ務トス討論ハ切瑳琢磨ノ爲ニシテ我意爭心等深ク謹戒ヲ加ヘ躬行實踐ヲ要トス

一藩政ノ得失ヲ私ニ誹議シ或ハ財利飲食淫褻等ノ談一切禁止ス

一長幼ノ序正フスヘシ幼者長者ヲ凌クヘカラス長者モ亦幼者ヲ輕侮スヘカラス

一舍中貴賤ヲ論セス等級ヲ以テ坐次ヲ定ムヘシ

教師等ヲ選ヒ大ニ向學ノ志ヲ重進セシム是ニ於テ學風頓ニ隆盛ニ向フ安政二年藩主平井時義宇佐美佑一等ヲ以テ講師トナス此時ヨリ學風朱子ニ改マル嘉永三年藤牧約ニ命シ鹽谷岩陰齋藤拙堂ノ門ニ入り學業ヲ研究セシム文久二年ヨリ文學ヲ督セシム明治二年藩知事雄永父祖ノ宿志ヲ續キ徧テク青衿ヲシテ學業ヲ磨礱セシム明治四年廢藩置縣ノ令出ツルニ及ンテ遂ニ校舍ヲ鎖ス

教則

教科書 四書、五經、朱子小學、孝經、國史略、十八史略、元明史略、史記、歷史綱鑑補、左編、前後漢書、三國史、資治通鑑、子類、文章軌範、世說、文選、蒙求、唐詩選

授業時間ハ毎日(但元三五節旬朔望廿八日等ノ式日ハ休業ス)生徒昇堂ノ順序ニ由リ辰ノ上刻ヨリ巳ノ中刻迄授業ス輪講ハ毎月六回未ノ上刻ヨリ酉ノ中刻ヲ限ル其句讀ハ修學生ノ優等ノ者ヲ選ヒ臨時補助セシメ又一六ノ日ヲ以テ國史漢籍ノ講義ヲ授ク

武術教師生徒ニ授クルニ必ス弓槍及ヒ柔術ハ形ヨリ入ラシメ形稍ク成リテ而シテ後實業ニ就カシメ馬術ハ木馬ヲ以テ乘方ヲ教ヘ砲術ハ火器ヲ擁シ直前ノ法ヲ授ケ而シテ後實業ニ就カシムルヲ要トス

學科學規試驗法及諸則

文學 習字 弓術 馬術 槍術 劍術 砲術 柔術 禮法

生徒ニハ必ス文武兩道ヲ兼修セシムレモ更ニ程度ノ比例ナシ其年齡八歲以上ノ藩士ハ文學ヲ研究セシメ十三歲以上ハ武術ヲ研究セシム其習字ノ如キハ累世藩ノ祐筆ヲシテ粟田流ヲ授ケシメ一藩ノ筆蹟ヲシテ一轍ナラシメンヲ要ス其他禮法ノ如キハ一般子弟ヲシテ小笠原流ヲ學ハシム

修文館學規

抑モ風俗ヲ釐正シ士氣ヲ振起セント欲セハ文武ニ非スシテ何ヲカ待ンヤ所謂文武ナル者ハ何シヤ寛猛是ナリ寛一ニ寛ニ偏スヘカラス猛一ニ猛ニ偏スヘカラス寛猛相濟フテ而シテ後チ事行ハル今茲丙申ノ秋藩主深ク風俗士氣ノ衰替靡靡スルヲ憂ヒ何人ヲ擇ハス特ニ文武ニ練達スル者ヲ登庸ス是ニ於テ闔藩始テ奮勵ノ色ヲ起スニ至ル因テ學政ヲ皇張シ制規ヲ調理シ督學ヲ置キ以テ弊害ヲ防キ更ニ文武ノ教師ヲ選拔シ專ラ純正ノ教育ヲ施シ子弟ノ才德ヲ涵養シ他日赤心蓋忠ノ士ヲ出サシメンヲ期ス苟モ之カ責任アル者豈ニ此意ヲ體認セサルヘケンヤ

天保七年秋七月

菟野藩

ルノ者之ニ充ツ世話役ハ十分上下ヲ擇ハス坐次ハ各身分ノ順ニ隨ヒ之ヲ定ム

維新後ノ師員ハ等級ニ應シテ之ヲ給與ス其金額左ノ如シ 五等給金四兩三分三朱 六等給金三兩貳分貳朱銀三匁三分

七厘 七等給金貳兩壹分貳朱銀三匁 八等給金壹兩三分貳朱銀貳匁貳分貳厘 九等給金壹兩壹分三朱銀壹匁八分七厘

職員概數 維新前文武兩校ニ奉職セシ職員二十一名ニ止ル維新後顯道館ニ奉職セシ職員ハ定員ト異ナルヲ無シ

生徒概數 維新前武學ニ通學スル藩士及ヒ生徒大約百名ヨリ百三十名ニ至ル文學ニ通學生ハ概テ四拾名ヨリ七拾名ニ至

ル顯道館設置ヨリ通學生百二拾名ヨリ百五拾名ニ至ル其他自費ヲ以テ本館ニ寄宿スル者四拾名ヨリ五拾名ニ至ル

束脩謝儀 維新前ハ藩士及ヒ子弟タル者束脩謝儀ヲ收ムルハ中元ト臘月トノ二期ニ在リト雖モ然レモ富者貧者別アレハ

其額一定シ難シ分ツテ之ヲ舉レハ富者ノ家ハ概テ金貳朱ニ止リ貧者ノ家ハ壹朱ヨリ二三匁ニ止ル其他農民ノ子弟農民ニシテ入學スル者ハ必ス富家ノ家タリ

學校經費 文武校舍修繕ノ儀ハ從前ヨリ廢藩マテ總テ藩費ニ懸ル敢テ之ヲ藩士ニ賦課スルヲ無シ今其經費ノ概數ヲ掲ケ

ント欲スレモ更ニ計查スヘキノ記錄ナキヲ以テ之ヲ載スルニ由ナシ豈ニ遺憾ニ堪ユヘケンヤ其ノ徵ス可キ者ハ筆紙墨

及ヒ薪炭ノ細項ニ止ルノミ其筆紙墨ノ費ハ藩ヨリ支給シ其薪炭費ノ如キハ生徒自ラ之ヲ償フ

藩主臨校 藩主在國ノ節ハ臨時文武ノ學校ニ光臨シ親ラ之ヲ試ムルアリ文學ハ素讀講義武術ハ形或ハ鋒鈔ヲ競ハシム時

アツテ藝術ノ優劣ヲ問ハス生徒ニ綵糕ヲ賜ハル

祭儀 舊藩毎年正月文學講堂ノ中央ニ於テ文宣王及ヒ顔子曾子ノ肖像ヲ掲ケ藩士及ヒ生徒ヲシテ皆禮服ヲ著ケ順ヲ逐フ

テ肖像ヲ拜セシム禮畢ツテ後チ師員及ヒ生徒ヲシテ魯論開卷第一篇ヲ讀シテ順讀セシム師員其畢ルヲ待ツテ生徒ヘ神

酒ヲ分チ而シテ後チ退散ス維新後顯道館ニ於テ 零田天皇及ヒ藩祖土方雄氏ヲ祭神ト崇メ毎年八月十五日ヲ以テ祭典

ヲ行ナフ其式ハ當日早旦各教員神殿ヲ掃飾ス午前六時ヲ待テ文武ノ諸官員藩士生徒ニ至ルマテ皆禮拜ヲ行ナフ是ニ於

テ樂聲均シク奏ス各教員祝品ヲ神前ニ供ス奏樂畢ルヤ否ヤ藩知事祝詞(廢藩ノ後首坐教員之ニ代ル)ヲ舉ク次ニ文武官

員及藩士生徒玉串ヲ獻シ拜禮畢ツテ後退去ス

學校構造及ヒ建物圖面 別紙圖面ノ通

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 出版翻刻セシ書籍ハ無之 藏書種類部數左ノ如シ 和書十七部 漢書十一部洋書二十二部 翻譯書百八十一部

一典籍ハ專ニ珍護スヘシ且館書借觀ノ節券書ヲ以テス看了スレハ速ニ完収スヘシ
一學生兩京及府藩縣ヘ遊學セント願請スレハ學業ノ精粗人才ノ品題ヲ商議ノ上之レヲ許ス徒ニ篤志ノミニテ請ト雖
モ許サス

右學規ヲ犯シ教誡ニ背クノ輩ハ嚴ニ責罰ヲ加ヘ寛假スヘカラス學士交誼ヲ厚クスヘシ好テ人ノ惡ヲ許クヘカラス互
ニ相規諫シ若過アラハ改メテ善ニ遷ルヘシ

明治己巳年十一月

菰野藩廳

舍則

一藩主大ニ學政ヲ興起シ士民ヲシテ學ニ就カシムルノ旨ヲ奉體シ入舍ヲ出願スル者ハ特ニ品行ヲ糺シ其篤志ヲ視察
シ而シテ後入舍スルヲ許ス

一十四歲以上廿歲以下ノ者ハ第一款中ノ許可ヲ得第三款ノ試験ヲ受ケ及第ノ上入舍スル者ハ其食費ヲ給與ス
一入舍ヲ出願スル者アレハ左ノ書目ヲ以テ其學業ノ精粗ヲ試ムヘシ

國史上等日本記 日本外史 國史 漢籍上等 春秋左氏傳 大家文史記 下等文章軌範 十八史略 翻譯書上等博物新篇 西洋事情 下等窮理 圖解 算術加減乘 除ノ内

一七年間修業ノ上試験ヲ遂ケ學力ニ應シ相當ノ職務申付ヘシ

一學規ハ勿論舍則等總テ違犯スヘラス

一懶惰ニシテ他人ノ學業ヲ妨害スル者ハ退舍ヲ命シ相當ノ罰ヲ加フルヲアルヘシ

一校門出入及ヒ教場就業ノ時間等ハ總テ舍長ノ命ニ從フヘシ

右ノ條件堅ク可守者也

明治己巳年十一月

菰野藩廳

職名及ヒ俸祿

維新前ノ職名 儒官二名 助教三名 督學一名 教師四名 助教五名 武術教師六名 維新以前師員ノ俸給ノ如キハ
各自ノ家祿アルヲ以テ別ニ給與セス

維新後ノ職名 督學壹名 教授三名 隊長二名 以上藩制五等官相當 權教授七名 小隊長七名 以上六等官相當
習字正二名 數教正二名 擊劍正七名 調馬正壹名 以上七等官相當 句讀二名 用度方壹名 庶務方壹名 以上
八等官相當 典籍方三名 以上九等官相當 但督學ハ給人格以上ノ者之ニ充ツ給人ハ藩ノ上士ニ當ル 教師ハ中小性以上ノ中士ニ當

御多端ニハ候得共教育之道厚ク御世話モ有之候ヨリ右ノ通之義ニ付於親々モ篤ト御諫意ヲ体認シ眞實ニ學候様申付可差出候學方等ニ學校教授之者且掛モ被仰付候間右ノ内ニ申談候様可致候事

掛リ員 習書掛四員 算術掛四員 右ニ付爲相學候童幼ノ者名前書來ル十日四ツ時迄ニ別紙之通相認メ尙志館エ可差出事

右之通相達候事

庚午十月

藩學校

何ノ誰
忒次男
戎ハ何

何之誰

當年何歲

別紙雛形紙

半紙半枚

庚午十月十日

〔備考〕小學校ハ右達書ノ如ク別段其身分ニヨリテ制限ヲ立テタルモノニテハナク農商工以上ノモノ、子弟ハ誰彼ナ問ハス入學ヲ許セタルモノナレハ農以下ノ子弟ハ絶テ入學スルモノナク其入學スルモノハ概シテ士以上ノ子弟ニアリシ其就業時間ハ朝五ツ時ヨリ晝后八ツ時迄トシ其讀書ノ如キハ朝五ツ時ヨリ四ツ時迄ノ間ニ四書五經ノ素讀ヲ尙志館ニ於テ各自ニ之ヲ受ケ午后ニ算術(珠算)ヲ習ヒ晝飯后凡ソ一時間休憩スルノ餘其他ノ間ハ不絶ニ習字ヲ爲シ五十ノ日清書シ一六ノ日休業セリ

修業人規則之事 明治三年庚午三月八日藩中ニ達

文武修行ノ義ニ付別紙規則相立候間可得其意候尤時勢柄ヲ相辨別シ奮勵其學業ヲ練磨致シ往々藩ノ御用ニ可相立義勿論主ト致シ候事ニハ候得共右等不被失様志シ修行候様可致候事

庚午三月

鳥羽藩

文武修行人規則

舊鳥羽藩

學制

舊鳥羽藩學校ハ元鳥羽城郭内ニ之九地續ノ場所ニ在リ其創立ハ文政年中ニ在リテ當時ノ藩主稻垣對馬守長剛ノ創始ニ係リ其學問所ヲ尙志館ト稱ス藩主ノ布令諭達等モ間々コレアリシナレハ如何セン爾來數度ノ變革ニ遭遇シ且ツ廢藩ノ際舊記ノ殘存セシモノハ悉皆度會縣ヘ引繼ギ今復探記スヘキ書類無キヲ以テ詳細ヲ掲クルニ由ナシ然レハ其創立已來明治四年頃迄ハ校中文武ヲ別チ文ハ專ラ漢籍ヲ主トシ武ハ劔槍弓馬砲柔術等ニシテ士庶ヲ問ハス就學スルヲ許可セシモノナレハ庶民ノ如キハ其就テ學フモノ絶テ無クシテ稀ニアルノミ明治四年已前ノ職員名稱ハ文部ニ教授役句讀方ノ稱アリ武部ニ師範役世話役ノ稱アリ而シテ教授役ハ三四名句讀方ハ六七名其師範役ハ各術ニ一名世話役ハ各二三名ナリ明治三年小學校ヲ設ケ兒童八歳ニ至ルモノヲ入學セシメ讀書習字算術ヲ學ハシム明治四年三月藩制改革ノ際武術ノ教場ヲ廢シ更ニ學塾ヲ設ケ長子次三男ヲ問ハス青年ニ至ル者ヲ入塾セシメ之ヲシテ讀書ヲ學ハシム而シテ是等ハ皆明治五年廢藩ニ依リ閉鎖ス其尙志館ニ於テノ教則ハ時々變更アリ且ツ探記スヘキ書類モ殘存セス又當時藩校ニ從事セシ者ニ就キ之ヲ尋ヌルモ時々變更ノ分一々之ヲ記憶ニ存スヘクモアラサレハ明瞭致シ難シ然レハ其要領ハ左ノ如シト云フ

四書五經ノ素讀ヨリ漸ク進ミテ蒙求十八史略貞觀政要前後漢晉唐宋書綱鑑易知錄春秋左氏傳資治通鑑八大家文其他雜書ノ輪講質問四書五經ノ講義ニ至ル又作文詩作等ハ月々一回若クハ二回課題ヲ與ヘテ之ヲ作ラシム又月々五十ノ日ニハ教授役若クハ句讀方ノ内ニテ講義ヲ爲シ學生ヲシテ聽問セシム當日ハ大抵藩主モ臨校ニナリ又劔槍弓馬役々ノ者モ聽問ニ出ツルノ慣例ナルカ故ニ講義始ムルノ前螺貝ヲ吹キ鳴シテ之ヲ各所ニ報告ス又藩制改革以後ハ月々一回宛御書院(二ノ九ノ内)ニ於テモ講義アリ諸隊^{護衛砲兵步兵等ヲ云フ}ヲシテ聽聞セシム

稽古ノ始終 始業ハ正月九日ヲ以テ例トス當日ハ役々ノ者禮服著用ニテ出校講堂ニ於テ孔子ノ像^{但シヲ軸物}ヲ拜シ學生一統ニ祝酒ヲ賜ヒ了リテ教授役ノ者講義ヲ爲シ聽聞セシムルヲ例式トス藩主若シ在城ナレハ必ス臨校アルヲ常トス終業ハ每年十二月廿五日トス

明治三年以後書類ノ殘存セシモノニ付學事ニ係ル達シ書ノ類ヲ左ニ探記ス

小學校建設ノ事 明治三年庚午十月五日達

此度學校内小學校取建近々御開相成童幼ノ者ニ習書并算術等爲相學侯依テハ右之者共差出爲相學侯様可致候時勢柄

醫業ハ人命ニ拘候事ニ付藩主ノ規則ニ難相立年ノ長少ニ拘ラス業ノ進歩ニ依テ被召出候事

醫家ノ義ハ等外ニテモ旅費御定之半高被下候事但差向先漢洋ノ學ヲ主トシテ罷出候共前條同様之事

〔備考〕明治三年該規則發布前藩士ノ内自己ノ熱心ニテ許可ノ上文學修行ノ爲メ出府セシ者モ有之右等ハ概シテ扶持給其儘ニ据置キタル迄ニ止マリ別段家族ノ向エ扶持給之恩典ハ無之其文學修行ニ熱心ノ者輕輩乏資ノ者ニシテ門閥有資ノ者ハ稀ナリシ該規則發布後修業ノ爲メ他出セシ者文學ニ七八名銃砲ニ五六名鼓笛等ニ二三名計ナリ

學校

學塾ノ事 三計塾ト稱ス

今般朝旨ニ基キ藩制改革之處長子次三男ノ常祿扶持ハ難賜御主意ニ付不得止相廢侯得共一時生活之道ヲ失ヒ父兄ヲ始當人ニ至リ深シ當惑可致ニ付厚シ及推察候間新ニ學塾取建扶持給相廢シ候ヲ非役ニ相成長子次三男文武研究且生活之助旁出格ノ評議ヲ以テ扶持方ニ換ヘ食料焚出之及處置開場次第入塾之積相達候處最早年暮彼是開場可及延引依之出格ノ評議ヲ以テ稽古爲扶持開場迄先ツ一口宛扶持方可賜事但開場規則相立候迄一定被置方可申渡筋モ可有之事

庚午十二月

鳥羽藩廳

今般學塾取建入塾可致儀及布告置候處右學塾出來ニ付近々ノ内開場可相成間別紙規則書爲一覽相廻候入學之者ハ早々尙志館ニ名前書ヲ以テ可申出事

辛未三月

藩學校

學塾規則

第一則 夫レ學ハ不勤ハ不相成義ニ付篤ト時勢柄ヲモ相辨精々勉強候様可致事

第二則 於塾中禮儀ヲ不亂一和ヲ基トシ書籍上之討論ハ格別其餘口論ケ間敷儀堅ク相愼ミ可申事

第三則 火之元ノ義大切ニ相心得決テ疎畧有之間敷且塾中ノ義堅ク禁酒之事 學業ハ於尙志館午前第八時相始メ午

後第四時休業之事但夜學之義ハ午後第六時ヨリ同八時迄其餘ハ銘々ニ於テ塾中勉強勝手次第之事

第四則 入塾之者武術之儀モ勿論心掛候様可致事

第五則 塾頭之儀ハ一等助教ニテ相心得候間塾中之義都テ承合候様可致事

第六則 講釋輪講其餘詩文等尙志館ニテ定置候通相心得研究可致事

米二拾五俵 上等一年修行料〇米二拾俵 中等一年修行料〇米拾五俵 下等一年修行料 右御扶持給見込不足有之候ハ、御足ニテ右之俵數ニ相成候事

嫡子次三男ニテ修行罷出候者妻子エノ御手當不被下之候事

當主ニテ修行罷出候者持高ニテ引去不申向其妻子エノ手當人別扶持被下尤モ七歲未滿ノ者ハ半扶持被下之候事

小給家内多之向人別扶持ニテハ增高ニ相成候分ハ持高之内其當人ノ一口ヲ引去其一口エ其等ノ修行料ヲ數エ足シ被下候事

旅籠晝食代之義往復共路ノ遠近ニ應シ一泊以上ヨリ被下候事但旅籠晝食其時ノ定ニ準候尤荷物ノ義ハ葛籠壹個被下候事

凡遊學生ハ其命ヲ受ケ候時ヨリ上等ハ二年中等ハ三年下等ハ四年ヲ限リ一ト先歸國之事

文學并砲銃共上等ハ三名ヲ限リ中等ハ八名ヲ限リ下等ハ十名ヲ限リ候事

上中等ノ者ハ文武兩局互ニ衆議ヲ盡シ其上藩政廳之御評決有之上之御裁斷ニテ被仰付候事
修行相濟歸國ノ者ヘハ都テ思召ヲ以テ書物料被下候事

被仰付候修行人規則

當主ニテ修行罷出候モノ其妻子ヘノ御手當人別扶持被下之尤モ一人ニ付半人扶持之割合ヲ以テ宅雜用是又被下之但七歲未滿之者ヘノ半人扶持計被下之候事

嫡子次三男ノ向ハ妻子ヘノ御手當人別扶持被下尤七歲未滿ノ者ハ半人扶持被下之候事

小給家内多ノ向人別扶持ニテハ增高ニ相成候分ハ持高其儘ニ被差置當人ヘハ其等ノ修行料被下之候事
醫業修行人之義モ都テ前個條同様取計之事

等外規則(下等ニ至ラサル者ハ等外ト相立候事)

當主ニテ下等ニ不至者修行願出候ハ、持高ニテ罷出都テ被下物無之事但退テ修行出來下等ニ至リ候ハ、勿論御定ノ等ヘ繰入候事

嫡子次三男之者エ召出以前右同斷ニテ罷出候ハ、嫡子ハ一人半口次三男ハ一人口ツ、被下候事但修行中被召出候年頃ニ至リ候ハ、御定ノ通可被召出尤モ次三男ハ其質ニヨリ其節之御所置モ可有之事

醫者之義嫡子次三男下等ニ不至者業體修行罷出候節ハ外修行人ト違ヒ嫡子ハ二人口次三男ハ一人半口モ被下候事但

モノ甚タ稀ナリ

文武技術試閱之事 明治三年庚午三月廿五日

文武御見分ノ義左ノ日割之通御仰定相成候間可得其意候 四月二日於御庭馬場馬術 同日於道場劍術 同三日於松

木谷訓練場護衛砲兵步兵三隊訓練 同四日於道場槍柔和三術 同日於學校皇學洋學 同五日六日七日於御書院漢

學

右之通相達候事

庚午三月

藩學校

〔備考〕學藝技術試閱ノ義ハ毎年執行スルノ定期ニ無之藩主ノ都合ニヨリテ舉行セサル年モ間々有之蓋シ定期ニ施行セス臨時施行ノ慣例ナリ其施行ノ節ハ藩主其他重役ノ方列座其席前ニ於テ文學ハ一人毎ニ讀或ハ講シ武術ハ一人若クハ一組ノ仕合等ヲ試閱スル類ナリ而シテ其成績ノ善者ニハ賞品或ハ褒狀ヲ附與ス

雜件

兵ハ護民ノ至意ニテ被立置候事ニ付篤ト朝旨ヲ奉戴認諸民衛護ノ至意不被失義勿論ニテ聊カクリ民之害ニ相成候義ハ不致様藩學校ハ敎武ノ至意ニテ士卒ノミ敎ルタメノミニアラス農工商ト雖モ有志ノ者ハ入校ヲ許候就中士卒ノ義ハ三民ノ上タルモノナレハ文武ノ研究勿論ニ候治世ニ浴シ怠惰安逸ニ馴レ士ニモ卒ニモ文盲ノ輩不少却テ士民ニシテ學力才智有テ撰舉ヲ蒙リ候モ不少向後一際勉強可有之事

藩學校官員ノ義ハ追テ一定ノ御沙汰有之迄左之通相改候事

文部 皇漢洋 敎授 同上 助教 一等二等三等

武部 武藝師 同上 助教 一等二等三等

明治二年十二月改革ニ當リ文武學校費左ノ如ク被定 米二百俵 文武學校ノ費

藩治職分課 人材ヲ育成シ諸職ニ充タシムルニ協フモノヲ造成スルコトヲ掌ル學藝試閱人物薦舉等皆此司ノ掌トル所ナリ

學校副敎督 役高四拾貳俵、月給四兩壹分(壹割半引渡三兩貳分七匁)○文學敎授 役高貳拾六俵、月給貳兩三分(同貳

兩壹分六匁)○皇學敎授並 月給壹兩壹分(同壹兩壹分貳匁)○文學助教 月給壹兩壹分(同壹兩四匁)○文學助教試補

月給三分(同貳分九匁)○武術敎授 月給貳兩(同壹兩二分拾三匁)○武術敎授並 月給壹兩貳分(同三分十三匁)○武

第七則 入塾中無據事件之外歸宅難差許事但本文無據事件有之候得者其段塾頭へ申達可任差圖候事

第八則 若シ自分病氣又ハ續之者重病且忌服差合等ニテ歸宅願之者ハ其頃塾頭エ申達可受差圖事但一兩日之不快ハ學塾ニテ致加養愈々快復ニ至リ兼候ハ、醫師検査ヲ受病証書取差出退塾可致事

第九則 學校エ教授之者晝夜勤番相立候事但教師ヨリ皇漢洋三等助教迄打込泊番ハ三人ト相定内一人一等二等助教之内一人ツ、學塾へ相泊候事

第十則 休業日之事 毎月一六日、七節、天長節、九月廿二日、盆中、年末ヨリ新正發會迄 右休業日ノ内毎月一六之分用向有之候ハ、其段書付ヲ以テ塾頭エ申達三度ハ一泊モ可致事但盆中年末ヨリ新正發會迄ノ休業中は又勝手次第歸家差許候尤モ前文一泊差許候外ハ午後第八時歸塾可致事

右之外日々市中用辨之爲メ五六人モ申合午後第四時ヨリ同六時迄罷出候儀勝手次第差許候間刻限不後様歸塾可致事

休業ニ付歸宅或ハ於他出先不筋不法等之所業有之間敷若右様之儀於有之ハ應其罪科可致所當於犯國法ハ於典刑可論事

右之條々篤ト相心得違犯之無極精々勉強可有之事

〔追加〕
入塾之者妻子有之向ハ宅用事モ可有之ニ付勝手次第通ヒ稽古差許候事但通ヒ候者午前第八時出校午後第四時歸宅差許候且夜學出校等は又可爲勝手候事

右之通通ヒ稽古相願度者ハ扶持方一人口ハ給候得共御賄ハ不被下候ニ付辨當持參可有之勝手ニテ右不相願者ハ兼テ布告之通御賄ニテ給候事

非役ニテ常祿有之向入塾致候者前條之通扶持方一人口ハ自分ヨリ差出其餘ハ前同様給候事但右ノ外都テ規則之通可相心得候事

罰則

本文十則休業日其外歸塾刻限相定置候義ヲ違犯遲延致候者ハ十日之間尙志館之外禁足申付候事

學業怠惰或ハ教官ニ對シ無禮又ハ塾中規則ヲ背ク者有之訓誡ニ及ヘ凡不相改者ハ前條々之通廿日之間禁足申付候事

〔備考〕學塾ハ明治四年開塾同五年廢藩ニ付閉鎖ス其入塾生ハ三十名前後ニシテ專ラ漢籍ヲ修メ皇洋ノ學ヲ修ムル

舊名古屋藩

學制

學事上ノ諸制度 藩祖封セラレシ以來ノ事蹟詳ナラス然レトモ明倫堂督學細野忠陳記錄セシ明倫堂雜記ナルモノニ天保年中ノ諭達ノ類アリ右雜記ナルモノハ別ニ上呈スルヲ以テ茲ニ略ス
左ニ掲クルトコロハ慶應ノ頃明倫堂ニ寄宿生ヲ設ケシ事蹟ナレハ今茲ニ採録ス

佐藤彌平次様

石河竹次郎 山村多門

(料紙半切佐藤彌平次ハ明倫堂總裁ナルヘシ)

別紙學生丹羽信四郎初堂中へ寄宿願ノ儀比日御年寄衆へ及進達置候所付札ノ通被仰聞候付則申上候右之通進之候以上

十一月十七日

(料紙半切上リ書)

頭書

佐藤彌平次

明倫堂掛リ

御用人

學生丹羽信四郎初堂中寄宿願ノ儀驚津九藏申達候趣等一覽勘辨仕候所右ハ何レモ格別文學執心ニテ平生堂中於テ際立勉勵罷在候得共願面ニモ相見候通出堂道路往來ニ時移リ且歸宅之上彼是俗事ニ取紛專意精學モ不行届候付堂中在舍相願候段事實感心之次第ニ有之何レモ後來屹ト學業可成立人質ニ付願之通相濟候方可有御座哉就夫前古學生堂中寄宿之節諸費仕拂方ノ儀等爲及吟味候所留記疎濶ニテ爾々不相分候得共自分勝手在舍ノ輩飯米代等ハ銘々ヨリ上納相立居候趣ニ相觀候付今般モ右様ニ準シ信四郎初在舍へ付候毎夕飯米ヲ初諸費下ケ札ノ通自分賄ヲ以テ爲仕拂候方可有御座哉尤在舍へ付詰番等爲居泊候ハ、御入用筋ヘモ相拘リ候事ニ付學官附詰番引取候上ハ銘々手ヲ下シ諸事取計候趣ニ申出差當リ御入用ニモ不相拘候ニ付旁猶更御評議御座候様仕度依右貳通相添申合之趣申上候事但本文信四郎初謹慎ノ性質ニハ候得共何分壯年之輩父兄等ノ教示ヲ離レ堂中寄宿致候付テ夜中外出等ノ儀嚴敷取締置候半テハ

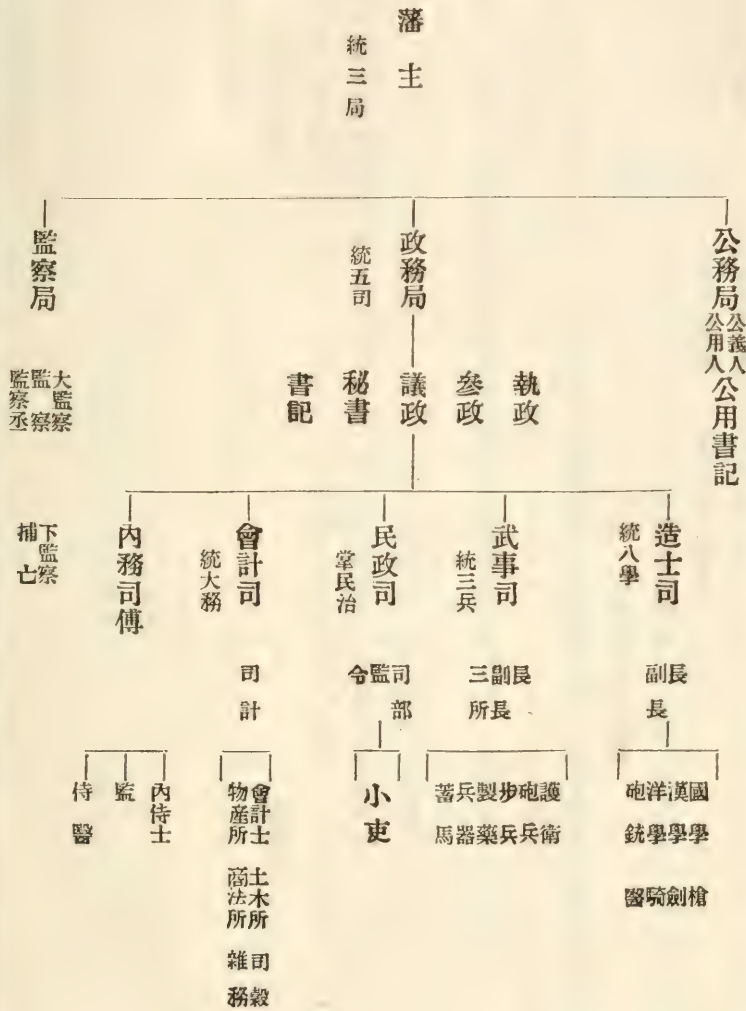
術助教 月給壹兩(同三分六匁)○武術教授試補 月給貳分貳朱(同貳分貳匁)

職員概數 定員ト異ナルヲ無シ

生徒概數及束脩謝儀 不詳

藩主臨校及祭儀 無之

藩治職統轄圖



一在舍生病氣の節は監生へ所勞の旨早速申達へし平癒出勤の節を監生へ達へし都て病生有之候は隣舍申合看病念頃心盡すへき事

一堂中武藝師範の輩出席の日並は未刻頃より武藝稽古場へ罷出へし尤不敬不禮の跡無之様に相愼み神妙に稽古いたすへき事

一武藝爲稽古外出候儀一ヶ月六度迄は不苦候尤外出候節歸境共監生へ可相達候事但罷出候稽古場日並并時刻共兼て可被相達置事

一一ヶ月放散三度ツ、卯刻より戌刻迄の歸宅許之尤放散の日見物都而遊興ケ間敷場所へ堅く相越中間敷候野外へ保養に罷出候共不行作の儀無之様相愼へき事

一暫時の他出に候共用事の譯委く監生へ申達し指揮に隨ふへし尤歸り境も届へき事

一夜中御門の出入無用に候其内無據子細於有之者監生へ申達指揮に隨ふへし夜中御門出入の節は於主事印紙を請取右印紙を御門番に相渡通行致すへし縱令印紙持參致し候共亥刻過は御用出入禁之但放散日は入の儀計無印紙戌刻迄許之

一一ヶ月放散三度の外定省半日宛三度迄は不苦尤罷出候節歸路共監生へ可被申達候但父母病氣に付看病の儀は可爲願其外親族病氣に付罷越度節は斷可有之事

一歸宅の上病氣又は無據用向出來歸舍無之夜泊致し候は、右の境必翌日中に父兄等より主事并監生へ可相届事
一火の元第一に相愼み寒天の節に而も案架巨燧等は可爲無用夜分寐につき候節は舍長見廻り耽と入念可有之都而火事盜賊の用心油斷あるへからざる事但火の元見廻りとして戌刻過壹度ツ、監生并に主財舍中へ相越筈候間兼而心得可被罷在候

右の條々謹て可相守若業を懈り行を敗り掟に違ひ候は、督學より輕重の譴責可有之事

○ 慶應二年寅十二月

田中國之輔様

中村修之進様

鷺津九藏

明倫堂教授

別紙之通總裁職申聞候間爲御承知申入候尤泊被相勤候境は主事へ御問合可被成候以上

難成次第ニ相見へ候付暮六時ヨリハ印鑑ヲ以テ御門出爲致通行子刻過ハ通行差留夜中出入ノ境ヒ毎朝御門番ヨリ主事へ爲申達萬一如何之儀モ候ハ、堂中在舍放逐可仕其候内銘々宅へ相越無據用事差起歸堂難出來節ハ其都度々々父兄ヨリ必翌日中ニ主事へ爲相届候方ニ規則相立兼テ申渡置候様可仕候此段申上添候事

十一月

明倫堂總裁職 明倫堂文學掛御用人

書面信四郎初之輩堂中寄宿方等ノ儀但書之趣トモ調ノ通相成可然候間御兩所様へ申上候上宜被取計候

十一月

壹ケ月分夕飯米薪代等壹人分雜費左之通

米四升五合(夕飯米壹度壹合五勺、一ケ月日數三十日之積)薪貳東五厘代壹匁三分程(飯焚遣湯沸シ薪トモ御買上直段割ヲ以テ追テ取立上納爲仕候積)香ノ物代壹匁三分貳厘程(御買上直段割ヲ以同斷)茶拾匁代壹分程(同斷)米四升五合銀貳匁七分貳厘程(銀相場金壹兩ニ付六拾匁ナリ貳匁七分貳厘ハ則方今金四錢五厘八毛ナリ)右ノ外起炭燈油付木燈心等ハ自分買上ノ筈

本文信四郎初堂中寄宿ニ付テハ諸事取締トシテ舍長差置候半テハ難成儀ニ有之候付追テ人別之儀吟味取調可申上候此段申上添候事

在舍學生規則草稿

一毎朝卯刻に起揃ひ鹽ひ漱き櫛り衣襟を正し椰子響き候はく學舍より夫々座列を正し揖讓して飯堂に出揃ひ着座御飯を頂戴有之尤飯堂禮讓之外言語無之堅く笑語不致様相心得食終て可致歸舍事但三時とも一同に食すへし列後申間敷候病生は可爲各列事

一學生の修行は第一上の法禁を守り貴を敬ひ賢を尊ひ先輩に隨ひ後輩を愛し忠告善導を專にし人の美と成し人の惡を成さく様に篤行を第一にし都て無益の雜話に時刻を移さず惰慢の行跡無之言行の二つを相慎へき事

一學舍の内へ堂中の者の外一切入るへからず病氣又は臨時無據譯有之出入爲致度者有之候はく監生へ申達指揮を請へし

一夜學は二更に限るへき事但二更后も復習いたし度輩は監生へ可申達事

一堂中に於て飲酒禁之但病生は品により格別の事

一堂中にて碁局を弄し聊も歌謠する事堅く禁之

置翌朝主事役所へ可差出筭候依テ御門番へ申渡書壹通相渡之候亥刻過ハ印紙持參致シ候共通行不相成候間此段申談候

一信四郎初在舍相濟候付別而火ノ元用心肝要之事候間泊番於テ主財戌刻過壹度ツ、在舍内ヲモ精々入念見廻リ如何ノ心附候儀ハ當人々々へモ可被申聞候

右之通相心得諸事宜ク可取計候

十二月

壹ヶ月壹人之飯米等左之通

米四升五合夕飯米但一日壹合五勺宛 薪貳束五厘 香ノ物々飯菜 茶拾匁 右之通自分賄ノ筭候間薪代初ノ儀節々御買上直段ノ割ヲ以テ盆暮兩度ニ取立上納爲取計候筭

鷺津九藏へ

別紙丹羽信四郎初堂中寄宿之儀願之通相濟候付而ハ寄宿へ付候諸入用ヲ初締向等之儀主事共致談判宜可被計候

十一月

御側物頭格明倫堂教授 鷺津九藏

學生丹羽信四郎初之者堂中へ寄宿修行仕度旨別紙之通相願候右ノ者共於堂中際立勉勵罷在後來急度學業成立可致モノニ御座候且往古學生寄宿仕候先例モ有之哉之趣ニ候得者願ノ通相濟候様致度奉存候依テ右壹通相添申達候以上

十月

願書

私共儀當時學生被仰付罷在日々出堂勤學仕度御高恩之程深奉感戴候然處不肖之私共先年御書ヲ以仰出候御撰格モ難相叶常々恐懼仕父兄於テモ何卒私共專意精學爲仕度志願ニ御座候處何分日々出堂道路往來ニモ時移リ且歸宅仕候得者彼是俗事ニ取紛折角堂中沈潛之心ヲ致放散終ニ貫通之場合ニ至リ兼誠ニ以殘念之儀ニ奉存候就夫往古學生之儀堂中致寄宿專修行仕候趣粗承知仕候間今般右ノ例ヲ以テ私共寄宿勉勵仕度左候ハ、御蔭ヲ以猶亦奮發精學可仕候間格別之御評議ヲ以テ右願ノ趣御聞濟被成下候様仕度奉願候以上

十月

學生丹羽信四郎、丹羽清五郎、中山篤十郎

犬飼司馬太郎、鶺飼建次、

十二月七日

田中國之輔、中村修之進へ

丹羽信四郎始寄宿被仰付候就而ハ爲取締當分ノ内兩人申合泊可被相勤候但泊相勤中ハ監生一統之當番相勤ニ不及

○

明倫堂御番へ

學生丹羽信四郎丹羽清五郎中山篤次郎御徒格以下學生犬飼司馬太郎鵜飼建次儀今般願の上堂中へ寄宿相濟候付ては夜中御門出入の儀酉刻過は印紙を以通行の筈候間酉刻過出入の節ハ當人々々より印紙差出等に付受取の右印紙面に出入の時刻相記翌朝拙者共役所へ可差出候依て印紙雛形壹通相渡候
一亥刻過は印紙持参いたし候とも出入は不相成筈候
一毎月朔日十一日廿一日は戌刻迄無印紙御門入の儀相濟筈候
右之通相心得不締之儀無之様嚴重可取計候

十二月

印紙

雛形

何月何日

印章

何ノ誰

明倫堂書記、同主財

學生丹羽信四郎丹羽清五郎中山篤次郎御徒格以下學生犬飼司馬太郎鵜飼建次儀今般願ノ上堂中へ寄宿相濟候付テハ諸事銘々手ヲ下シ取計筈候

一在舍ニ付候諸費ノ儀朝晝ノ御飯ハ是迄ノ通り被下夕飯ノ儀ハ自分賄ノ筈ニ付下ケ札ノ通取立

一焚出被下候其餘起炭燈油等ハ自分買上ノ筈候

一信四郎初夜中御門出入ノ節印紙主事役所於テ相渡筈候間此段書記ニ而相心得當人々々ヨリ印紙受取度旨申出候ハ、印紙紙面月日姓名相認當人へ相渡候得ハ當人ヨリ右印紙門番ニ相渡置通行可致筈ニ付於御門番出入ノ時刻相記

に慶安三年五月源敬公かくれさせ給し後其僧も退身し學問所も廢たりしを延享五年二月浪人布施佐右衛門維安といふ儒者の願ひにより巾下御門外龍の口西にて三百歩の地并料足を給りはつかある學問所を營み門弟等を教授なさしめ給へり其后維安故あり御國を退去せしかとも猶學問所ののまゝ立置給ひしを寛延二年十一月十四日源戴公明倫堂と名つけ御眞筆に扁額を書てかけさせ給へり其比より御儒者須賀吉平治安長同順次郎安貞二代明倫堂をあつくり御書物奉行松平太郎右衛門秀雲深田左市正純など補助して定日を究め堂中にて講學ををし來れり源明公の御代天明二年より長島町片端の東角もと御國奉行役所焼失の跡にあらたに學館御經營ありて同三年四月成就す細井甚三郎徳民に學館總裁を命せられ主事教授典籍書記主財謁者給事等の諸官を置給ひ明倫堂と稱すへき旨命し給へり御先代より巾下明倫堂にかけ置せ給へる扁額の源戴公の御眞蹟ある故に殊に尊敬し給ひさきに御側に收め置給ひしを此度學館中へ預け給ひ野村佐太夫昌武に命して其額をうつさしめ平日には其うつせる額をかけ置正月間講のときのみ御眞筆のをうくへき旨命し給へりさて巾下の明倫堂は舊名に復し學問所と呼來りしを後に高須君にまゐらせられしかは彼地にて日新堂といふつるはこの學館也とて其后今の學館の東長者町の方に聖堂を御創建ありて源敬公御眞蹟の先聖殿の扁額を掲げさせ給ひ源明公御眞筆をもて書寫し給へる論語卷軸を唐櫃に納めて神主と崇め安置し給へり又源敬公より御傳來の聖像二軀(銅、木)御側にありしを文政六年八月堂中へ遷し給ひ同七年二月聖堂の側東北の方に祠を造りて木像はかりを安置し銅像は御文庫に收め置給へり聖堂御造作半途にして天明六年二月十三日まつ假釋菜を行ひ給ひ御名代として竹腰山城守勝起衣冠束帶にて參堂せらる同年八月十六日同祭には御名代山澄淡海守豊充大紋烏帽子にて勤められしより同七年造營成就のち年々二仲の祭奠に御名代かゝらす大紋を着し束帶を裝せざる例とありぬ凡此代文學を好ませ給ひ諸道を興隆し六藝に堪能あるものを擧げ堂中にて諸生に講習せしめ給へり天保四年正月鈴木常助朗を教授とし和學を講すへき旨を命せられ堂中にてはしめて日本書記をよみ古今和歌集等を講説せり左ニ掲クルトコロハ名陽見聞圖會第四編ヨリ拔萃セシモノナリ(此書ハ尾張藩臣小田切傳之丞ノ見聞セシコトヲ記錄セシモノナリ同人此書ヲ編集セシハ天保七年頃ナリ)天明年中明倫堂督學細井甚三郎ノ事蹟ヲ見ルニ足ルヲ以テ茲ニ錄ス

此頃新田向の庄屋ヨリ佐屋御陣屋へ願出タル願書アリ左ノ如シ
乍恐奉願上候御事

御百姓共一同古來稀成昇平之御代に生れ比屋安穩に妻子を育ひ鼓腹之樂みを極候段今更難有忤奉申上候も愚成候事

御年寄

今般學生ノ内明倫堂ニ寄宿之儀相濟候就夫夜中締筋之儀段々申合候處役筋ニ而締之者泊リ無之候半而ハ難行届次第ニ有之候付而ハ御馬廻組ニテ當時監生之勤向相勤罷在候田中國之輔中村修之進儀監生一統之當番差免泊リ御番爲相勤右寄宿之者締爲相心得候様可致候依テ爲御承知申達候事但詰番御中間之儀モ泊リ無之候半而ハ難成候所右ハ中御玄關ニ泊リ之御中間モ有之候間當分右御中間ヨリ兼爲相勤候様可致候

十一月

明倫堂總裁職

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ子弟藩立學校へ入學スヘキ例規トハ雖モ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニ於テ修學スルコトヲ許サレシ慣例ナリ藩立學校ハ士族ト卒族ト其席ヲ異ニシ勤學スルモノナリ 藩費或ハ私費ヲ以テ他邦へ遊學スルコト古昔ノ事蹟詳ナラスト雖天明年度以降ニ至テハ猥ニ他邦へ遊學スルコトヲ許サス然レモ馬術修業ヲ請願シ東武へ出府シ留學スルコトヲ許可アリ元治慶應ノ頃ニ至テ藩費或ハ私費ヲ以テ他邦へ遊學ヲ許サレタリ藩費支給ノ方法ニ於テハ詳ナラサルヲ以テ茲ニ記載セス藩立學校へ毎月六回藩士登校シテ生徒ト共ニ講議ヲ聽聞スルノ定規アリ之ヲ明倫堂表講釋ト稱ス其略記ノ如キハ明倫堂ノ部ニ記載スルヲ以テ茲ニ略ス

平民ノ子弟教育法 家塾寺子屋ニ於テ修學セシモノコシテ藩立學校ニ入ルコトヲ許サス農民ニ於テモ亦然リ農民ニ學事ヲ禁止スルノ制度ナシ天明ノ頃ニ於テハ藩立學校督學郡村ヲ巡回シ講義ヲナシ農民ニ聽聞ナサシムルコトアリ家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ他ノ檢束ヲ受クルノ制ナク何人タリトモ開設スルコトヲ得タリ

學校

校名 明倫堂 藩祖德川義直學校ヲ創設ス之ヲ學問所ト云以來繼述館ト稱ス寛延二年十一月十四日明倫堂ト改ム校舎所在地 名古屋區長島町 藩祖設立ノ際ハ名古屋區南大津町ニアリ延享年間同品廻ノ口町ニ移シ(延享ノ頃巾下龍ノ口ニ移ト云ヘリ或ハ巾下新馬場ニ移ストモアリ右兩所トモ接近ノ地名ナレハ方今名古屋西部郭外大幸橋ノ東詰ナラシカ然ラハ現時廻ノ口町ノ内ナリ)天明二年同區長島町一丁目ニ移ス

沿革要略 左ニ掲クルトコロハ尾張志、尾張志ハ舊藩臣深田正韶ノ撰ム所ニシテ天保年間ノ人ナリ)ノ全文ヲ拔萃ス

明倫堂 長島町片端の東角にあり御府内學校のはしめは源敬公の儒者深田正室を京よりめして月俸十人分を給はり大津丁の下の西側の地(鈴木氏の屋敷なり)を學問所とささしめ給へり正室うせて後靈峯といへる僧にあつけ給ひし

老子、列子、莊子 右五書頗有可徵於古訓者不可不讀也○戰國策、史記、漢書、後漢書、三國史、晉書、以下歷史 右順次通覽而可以擇人物臧否可以辨時世廢興○戰國以後諸子百家之書 右諸子百家通讀而可以取博物多識可以別道義得失○本朝六國史以下記錄之書 右亦通覽而可知其大概也○此餘宇內所有之書無不可讀者也 以上助業一表講釋ハ毎月四ノ日六ノ日ヲ定日トス(毎月六回ナリ)本日ハ必國老及用人番頭監察其他文官武官交代シテ聽講ス

堂中職員生徒中學生勤學トモ聽講ス講議ハ督學之ヲ務ム若シ督學缺席スルキハ教授之ヲ代勤ス

因ニ云天明年中細井甚三郎^{號平} 督學タリシ頃平民ニモ表講釋ハ聽講ヲ許サレタルニヨリ平民出堂スト云ヘリ然

ルニ平洲ノ講釋不學ノ土民ニ至ルマテ耳朶ニ徹シ安キニヨリ滿堂立錫ノ餘地ナキニ至リ動モスレハ雜沓ニ至ルヲ以國老出堂開講ノ時ニ至レハ明倫堂表門ヲ鎖スノ例規ナリ

右掲クルトコロハ古老ノ口碑ニヨリ記錄ス

一授業ノ方法ハ素讀係リヲ學生中ヨリ數十名撰拔シ毎朝講堂ニ於テ勤學一般ヘ素讀ヲ授シ

一會讀ハ每會午後一回典籍會頭ニテ學生ヲ分擔シ學生ノ問義ニ應答シ或ハ經史ヲ講明ス但シ五名ノ典籍ニシテ毎月十五回トス

一內講釋ハ教授毎日之ヲ施行ス學生勤學ノ別ナク堂中ノ生徒一般聽聞ス

一授業ノ順序ハ素讀ノミヲ學フヲ初歩トシテ之ヲ勤學生ト稱ス素讀十三經ヲ終ルノ頃其學力ノ厚薄ニ據リ學生ヲ藩ヨリ命ス學生ハ學力品行兩ナカラ其宜ヲ以テ申付クルモノナリ依テ毎年ノ終ニ學生一統ヲ放免シ學力品行ヲ調査シ毎年ノ初ニ更ニ學生ヲ申付クルモノトス依テ學力及品行不長ナルモノハ一旦學生タルモ翌年學生タルヲ得サルモノアリ學生ハ朝午二回ノ支度ヲ給ス學生ニ昇等セシ上問義ヲ學フ

一授業時間ハ毎朝六ツ半時登校午後八ツ時マテトス

學科學規試驗法及諸則 和學、漢學、算法、筆道、習禮、弓術、馬術、(慶應ノ頃ヨリ堂中ノ生徒ニ授ク以下同シ)劍術、鎗術、練兵(之ヲ岳櫻隊ト稱ス)

文武兩道ハ士卒素ヨリ修業スルハ論ヲ俟タスト雖慶應ノ頃ヨリ馬術以下四藝ヲ殊更ニ堂中ニモ備ヘ生徒修學ノ便ニ設ケタルモノナリ和學以下六藝ハ從前ヨリ具備シタルモノナリ

一前記ノ如クナルカ故ニ生徒ハ文武兩道ヲ兼修セシメシモノナリ

一文學ト武術トノ程度ノ比例ハ詳ナラス慶應以前ニ於テハ文學ハ堂中ニ於テ專ラ習學スルモ武術ハ各自ノ望ニ任セ藩

に御座候然所世之諺に樂み居て樂を不知習に御座候て良も仕候へは斯迄難有御國恩をも忘却仕隨て奢侈僭上の氣前より耕耘の要務に張込薄く唯目前の名利に走り古人の教訓向等は片端をも不相究凡道と申せは佛道より外は無之様に相心得別而愚昧成者は御用の御間を闕候而も渡世の勤を大事に念懸畢竟夢幻泡影に等きとて萬事成合に心得候者も有之甚敷に至候而は佛菩薩の爲とさへ申さは家財を盡候而も不厭程の息込に至候得共御年貢筋諸上納物に於ては却て等閑に相心得殊更神君の御惠御仁政の難有御事共をも假令に存流候様にも相成誠に勿躰なき次第に御座候處御上様には種々御憐愍を被爲盡愚民共の邪路に不陷様難有思召を以常々御支配御役人様方御廻村被爲在御嚴重に御禁戒被成下於村役人も申合段々相示し候儀には候得共何分從來の弊風故容易に可際立躰に相見不申歎息仕候計に御座候就夫先年細井甚三郎様御勤御廻村御講釋被成下候儀に御座候處何となく當時ハ御中絶に相成候段乍憚遺憾至極奉存候念此節右等之御再興被成下御支配御役人様御禁戒の上にも猶明倫堂御教授様方時々御廻村或は五村或は十村の男女共寺社等の手廣々塲所へ御呼集被成下貧富の無差別唯長幼の次席を以て神妙に座候様被仰付第一神君の高き御事より御國恩の廣大にて御仁政の難有御事共を初行狀に於ては銘々質素を守孝悌を勵み農事を勤餘業に不流様俗談平話を以耳近く御教諭被成下年月不怠拜聞仕候様にも相成候は、御蔭を以自然と舊弊一變仕一同淳厚の風俗に移さるうら御政事筋御苦勞薄にも相成可申哉と恐をも不顧此段奉願上候以上

天保六末年閏四月

平島新田庄屋服部市兵衛外十人

御代官宛

藩立學校明倫堂督學或ハ總裁等ノ學派沿革アリト雖モ古昔ノコハ詳ニスル能ハス天明ノ頃督學タリシ細井甚三郎號平洲ナル者ハ朱註ヲ主トス文化年中督學家田多門號大峯督學トナリ朱註ヲ廢シ古學ヲ主トシ自註ノ十三經ヲ用井降テ明治二年頃細野忠陳督學ノ頃ハ專ラ四書五經及小學家禮近思錄等ニヨリ朱註ヲ學ハシメ續テ佐藤楚材督學ノ頃ハ經書ハ朱註ニ據ルト雖モ博ク歴史詩文ヲ學ハシム

教則 藩立學校創設以後沿革詳ナラス督學ノ交代ニヨリ稍變換アリト雖モ概テ經書ヲ主トシ亞テ歴史等ヲ學ハシム文化ノ頃冢田多門督學トナリ以來左ノ通改正ス

冢田多門督學ノ時ヨリ揭示

讀書次序 孝經家註、六記同學記坊記中庸表記緇衣大學、論語同、家語同、孔叢子同、毛詩同、尙書同、周易、禮記、春秋經傳、國語、孟子、荀子 右十三書必日課熟讀而可研覈也○周禮、儀禮、公羊傳、穀梁傳 右四書可參驗經義也 以上本業○管子、晏子、

職員及ヒ俸祿 總裁一名 俸祿千石以上但座席御用列以上或ハ用人等ヨリ兼務ス○督學一名 俸祿自貳百石至三百石但座席物頭以上ニシテ特別ナルモノハ太刀馬代席ヲ賜フモノハ俸祿四百石ヲ賜フ○教授五名 壹員俸祿自百石至貳百石○典籍五名 同自五拾俵至五拾九俵○監生五名 同四拾俵○上座生拾名 同年金五兩○素讀係凡貳拾五名 壹員袴地壹反但袴地價金百疋ヲ下賜アルコニ追テ改正アリ

事務職員及ヒ俸祿 主事貳名或ハ三名 壹員俸祿百五拾石○書記凡五名 同拾貳石三人扶持○主財凡八名 同八石貳人扶持○給事凡六名 同自金三兩貳人扶持至五石貳人扶持○事務所付中間凡六名 同凡貳兩三分一人扶持○食堂付中間凡拾名 同上○門衛中間ハ事務所付屬ヨリ兼帶ス但退テ門衛ハ先手同心ヨリ出頭スルコニ改ム
生徒概數 四百名ヨリ五百名ニ至ル 寄宿通學ノ概況ハ藩內學事上ノ諸制度ノ件ニ粗記載アルヲ以テ茲ニ贅セス慶應ノ頃ニ至リ寄宿生ヲ許可アリシモ其以前ニ至テハ通學生ノミナリ天明年中以前ニ於テハ寄宿生ヲ許可アリシモノナリ其定員詳ナラス

束脩謝儀 無之

明倫堂經費概略 玄米百六拾四石 薪金三拾兩 炭金三拾六兩 味噌金五兩貳分 汁實金三兩貳分 用紙料金三拾兩 右ハ詩文章習字席書ニ用ユ 金貳拾兩 右ハ春秋兩度釋菜費 金拾兩 右ハ學生壹人ニ付壹ケ月六度菜代 金八拾兩 同上諸雜費 合計金貳百拾五兩程米百六拾四石 右ハ天保年中ノ經費ノ豫算ニシテ以來沿革アリト雖モ詳ナラス且錯雜ニ涉ルヲ以テ之ヲ略ス

藩主臨校 隔年藩主東武へ參府シ歸國ノキハ臨校講義聽聞アリ(臨校ノキハ職員生徒へ賞ヲナス等ノコナシ)在國中ハ毎月三回督學登城シ經史等ノ講義ヲナス藩主初國老以下聽聞ス

祭儀 明倫堂中ニ聖廟ニ設アリ春秋兩度二八月上丁ノ日ヲトシテ釋菜ノ式ヲ舉行ス
學校出版書目及建物略圖 本校教則中十三經家田多門家註出版 戰國策略註同上但明倫堂出版藏版ニアラス
藏書 皇學書經史數部アリト雖モ方今之ヲ調査スル能ハス過半ハ本縣師範學校中學校等へ廢藩ノ際引渡ニナリタリ
江戸藩邸內ニ學問所アリ之ヲ弘道館ト稱ス諸規則明倫堂ニ準スト雖モ學派ハ舊幕府學館聖堂ニ準シ朱子學ニヨリ四書ハ道春點ヲ用ユ以下略之

舊犬山藩

士中其師範許可ヲ得タルモノニ就テ修業セシモノコシテ文武トモ其長シタルモノニヨリ採用セラル、等ノ別アリト雖文武對照シテ比例ヲ以テ程度ヲ定ムル等判然シカタシ慶應以來武術ノ授業ヲ堂中ニ初メシヨリ文學ノ教授役ト同シク武術ニモ教授役ヲ堂中ニ具フ武術ノ教授役ナルモノハ従前ヨリ武藝師範役及其高弟ノ内ヨリ選拔シ其職ニ命シタルモノナリ

一堂中ニ於テ一科專習ヲ許可スルノ例規アルニアラサレトモ關藩士族ノ情態ニ於テハ各自ノ志向ニヨリ自然一科專習スルノ姿トナルモノアリ如斯ハ全ク默許ニ付スルモノナリ

一生徒學習期限ハ七八歲(現時ノ六年以上ノモノナリ)ノ頃ヨリ入學ヲ許シ大人ニ至ルト雖モ退學ノ期限ヲ定メス本人ノ都合ニヨリ事故アルモノハ退學ヲ許ス

一試驗法ハ復讀(毎月凡一回即今學習スルトコロノ書籍ノ讀方ヲ適宜試ムルモノ、總復讀(問義ニ至ルノ際迄學習セシ書籍悉皆試ム)ノ二種及席書等ノヲアリテ其學力ヲ試ミ優劣ニヨリ毎年末賞品ヲ與フ

一罰則ハ規則ニ反シ或ハ品行不正ナルモノハ縲繼ニ入レ之ヲ戒ム其甚シキハ退學ヲ申付クルヲアリ

一入學許可ヲ得タル者ハ禮服着用肄學ノ自宅ヘ回禮ス

一學生ノ命ヲ受タル片ハ禮服着用家老用人督學等ノ宅ヲ回禮ス

左ニ掲クルトコロハ文化ノ頃ヨリ堂中講堂ニ揭示ス

撰學科目

孝友慈愛、直言正義 右二科一等 寬裕莊栗、剛毅信敬 右二科一等 方正公察、果斷明決 右二科一等 深計遠慮、

數量潔精 右二科一等 辭辨捷給、臨機應對 右二科一等 愿懇廉清、篤實簡要 右二科一等 能文善書、事理疏達

右二科一等

右は經傳の文義を大概に了解し聖賢の制訓を詮要に會得いたし候程の修行出來候上にて右件の科目の中或は壹人に二科三科を具したる輩も有へけれども其長したる處を撰み取て其人品格祿相應の御役義をも可被仰付御趣意にて候得いれのく其心得にて切磋せらるへき也亦まの堂中にて始終教授役をも相勤督學にも昇進いたし度志願の輩は其學問之趣格別心得あるへき也

文化八年九月

督學

ナラス

藩主臨校 藩主時々臨校シテ生徒ノ試業ヲナシ又藩士ノ講義ヲ聽聞スルコアリ
祭儀 聖廟ヲ設ケ聖像并ニ四配ノ神位ヲ祭り春秋釋菜ヲ執行ス但釋菜ノ日出席ノ者ハ禮服ヲ着ス
學校建物 建坪百九十坪貳合三勺
學校ニテ出版翻刻セシ書籍 無之

舊豊橋藩

學制

學事上ノ諸制度

定

- 一 先年被仰出候通文武之藝術彌無懈怠可致修行事
- 一 今度諸稽古道場被仰付候間朝六ツ時より暮六ツ時迄面々相集望次第稽古可仕事
- 一 文武の稽古の外一切寄合申間敷候事
- 一 火元入念仕廻候節面々火元心附可申事
- 一 喧嘩口論相愼み相互批判等并に禮儀正敷聊モ無禮無之様可相愼事
- 一 諸稽古打込無隔意師匠々々罷出可致指南事
- 一 世上雜談無用の事
- 一 酒可爲無用事附詩會等有之時用候共不可過三爵事
- 一 師匠共無依估ひゝき藝の善惡沙汰可有事
- 一 相集不宜遊堅仕間敷事
- 一 建具等并に竹木等に至る迄紛失無様可心付事
- 一 右條々堅可相守者也

寶曆二年申七月

時習館規條

學制

學事上諸制度 藩主時々布令諭達等ヲ發シ學事ヲ獎勵セシヲアリ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ヘ入學セシメ又各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學シ或ハ藩費私費ヲ以テ他國ヘ遊學スルヲ許可セリ又學校ニテ藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシム

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋等ニテ修學セシノミナレハ後藩立學校ヘ入學スルヲ許可ス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設セントスル者他ノ檢束ヲ受クルナク何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得タリ

學校

校名 敬道館(尾張名古屋同藩邸内ノ學校要道館ト稱ス學科敬道館ニ同シ)

校舍所在地 尾張國丹羽郡元犬山一字西古券三番地

沿革要略 學校創立ハ天保十一年五月ニシテ其以前ニ在テハ子弟ノ教育ハ隨意家塾等ニテ修學ス即舊藩主成瀬正住時代

於テ更ニ藩校ヲ創設シ學事ヲ擴張ス

教則 修業時間毎日四時間ト定ム(朝五ツ時ヨリ晝后八ツ時マテ但時ニ依リ伸縮セシヲアリ)

教科用書 孝經、四書、五經、文選(素讀) 國史略、十八史略、元明史畧、日本外史、四書集註、文章軌範、日本政記、日本書

記、春秋左氏傳、國語、詩經、易經、史記、漢書、資治通鑑、延喜式、令義解、洋書翻譯書類

右ノ次序ニ從ヒ學習ス

學科及ヒ試驗諸規則 皇學、漢學、算法、筆道、習禮(伊勢流) 素讀講義共毎月一回試驗ヲナシ優等ノ生徒ニハ賞品トシテ

筆墨ヲ授與セリ 兵學、弓馬、槍劍、砲術、游泳等ハ他ノ演武場ニ就キテ之ヲ修メ學校ニテ兼修セス

職名 總教 幹事 教授 助教 監生 授讀 筆生 給事

職員槩數 凡二十名

生徒員數 總テ通學生ニシテ年々増減アリ一定シカクシ

束脩謝儀 無之

學校經費 一周年ノ學費ハ別ニ豫算ヲ立テス現費藩主ヨリ支拂ヒ藩士ニ賦課スル等ノヲナシ其費額年々増減アリテ一定

一館中に於て若し失禮の儀有之候は、早速掛りの者申なため口論大聲等爲致間敷事

一幼年の輩素讀退屈出追々懈怠致し却て教方等惡様に云ひおし或は己精學に隨ひ自己の見を立師の恩を忘れ彼是批判致間敷事

一御役人以上の内若き者は猶更無懈怠出席仕諸事心付可申候左候得は館中彌嚴重に相成以下の者勸みにも相成候事に候

幼年の輩に就仰出

一幼年の者館中の罷出第一行儀正敷仕り師の教を相守り毎朝罷出素讀出精仕所習の書不忘樣復讀専らに可致候館中の儀は文武講習仕候重き御場所之儀に候得は聊心得違等不仕幼年より惡き友に交らず善事に進み稽古事等出精可仕候左候得は親其安心致し何寄の孝心に相成且は學問出精致し候得は成長に従ひ義理に明らうに相成何様の勤も相成取計向自然に宜敷君にも御安堵被爲遊候間猶又前文ケ條之趣追々相辨へ吳々心得違致す間敷候右之趣可相守候

文化三丙寅年正月

此度學寮御取立之儀は武士たる者武術相嗜候儀は勿論之事に候乍去文學出來致し治亂何様の御役被仰付候共自然取計方行届當人に於ても當惑不致候様にどの難有御趣意に候間御家中若年之者共致入寮出精可致候文學は固より道理に明らかに古今に通し治亂之勤方悉く此中に有之候事にて決して文弱之士風に可被遊どの御趣意には無之候間右之處能々相辨へ御趣意に不履様出精可致候親に於ても心得違無之子供へ篤と教訓致し出精可爲致候依之以來は百石以上當年十五歳以下之者若し學問未熟當時專務之武術二三藝書物傳授不相濟候へは纔令年頃に相成候共容易に勤仕被仰付間敷且病身にて修行出來兼候者は其趣相届可申候右様之者は家督之節無據御預り米可被仰付候間無滯斷一同勉強可致候尤廿才以下にて親相果修行之間合無之文武精熟に至り兼候者廿歳迄は御用拾被成候成立之處御見届可有之候但病身にて兩道修行出來兼候其文武之内一藝拔群相勝れ候者は其節御評議之上御預り米等之御沙汰は有之間敷候百石以下之者も右に準し夫々御沙汰可有之候間無滯斷一同可致出精候

新學寮御普請中時習館を以學寮代に被仰付候事

但館中定日之講釋當分大書院に御移し毎朝素讀之儀は手習所と相移し候様被仰出候事

素讀朝五ツ時より 手習朝四ツ時より 朔日五十日休日

時習館之儀今度猶又厚恩召を以て退く結構被爲仰出候依之館中へ出席之面々少長となく何れも一同出精可致候抑聖賢之學核與候事治國之基人才を育ふ地にて文武の道皆是より出候事にて士大夫たる者の子は別して末々御政事に與り申事に候得へ猶更幼年より館中へ罷出學問の儀は別て專出精可致事は其道忠孝を本とし君臣父子兄弟長幼等の儀を明らかにし國民を集め命令を施し入るを計り出すを爲し國の水乾の手當人を愛し民を恵むの法悉く此館にて講習致し其外燕享養老鄉射等都て禮法に拘り申候儀相學申候内より自然に發明致し惡を去り善に相染父母も安堵し君にも御感不淺儀にて忠孝の二ツ聲の響きに應し水の形を鑑みる如く其微明白に候當時幼輩の者は先館中にて素讀専らに致し意味は成長に隨ひ講釋追々聞染候得は自然に相分り申物に候其餘は面々志次第博學に可至候諸事追々被爲改候思召にて今般掛り之者被仰付素讀世話人早朝より相詰候相互に自分修行は不及申館中へ出候て行儀正敷致し教候者依估ひゝきなく精々世話可致候講釋出席名前書是迄之通素讀罷出候者其名高日々書留是又毎月朔日可差出候格別出精にて昇達之者は迄之通毎暮に出し可申候出席の者ゝ左のケ條之趣掛りの者月並一同爲讀聞幼年の者ゝは末に出候趣是亦月並爲讀聞可申候

一素讀致候者毎朝六ツ半時より罷出到着順を以て名札掛け混雜不致教候者へ一禮致し靜に讀み可申候讀畢り又一禮して退くへし且着座致し候節無貴賤と出候順に教しへ可申候惣て進退靜に致し所習の書を誦讀し忘却せざる事專用に候

一素讀本成たけ無點宜敷候自分にて假名等附申問敷候

一素讀篇數の儀は教候者許し無之内の幾篇も讀むへし多く習ふ事を求めず只く所習を不忘様可心掛候

一素讀の書は孝經論語詩經書經禮記易經春秋に限り孟子學庸の類も讀候ても宜敷候大概右書數相讀み候得は其餘は自分にて讀申候間常に復讀無懈怠可致候

但し十五六歳以上にて素讀相初候者は右の内何にても二三部も誦讀致程心掛候得は右力にて外の書讀め申候年齢を不恥相初可申候且年重さの者共一同罷出講釋可承候其益多かるべく候

一講釋の者孝經論語詩經書經禮記易經右六部に相限り可申候其餘は時の差畧可有之候

一會讀の書周禮儀禮左傳國語其外史記漢書等追々昇達之者へ會讀可爲致候

一講釋會讀素讀の節は勿論惣て館中に於て無益の雜談無用之事

一志厚面々定日の外も會讀輪講詩文會等申合せ教授と相談可致候

設ク)トナリ復變シテ小學八町校トナル即當時渥美郡第一學區八町學校是レナリ

學科(學規試驗法及諸則未詳)

和學 漢學 算術 筆道 鎗術 弓術 劍術 馬術 柔術 游泳

生徒ニハ必文武兩道ヲ兼修セシム其時間ニ至リテハ午前中ハ文學ヲ研究シ午後武術ヲ練習ス其文學ト武術ノ程度比例ハ別ニ成規ナシ生徒ノ性質ニヨリ教官ノ見込ヲ以テ各其向學ヲ指示シ一科ヲ專修セシム其修學ノ期限ハ年齡十歲ニ至レハ館内素讀所ニ入學セシメ四書五經ノ素讀ヲ畢ヘテ後漢學寮ニ入寮セシメ以テ文武兩道ノ學ヲ研究セシムル前既ニ記スル如シ其退學ニ至リテハ又別ニ成規ナシト雖モ學寮ヲ六ケノ合ニ分チ生徒學力ノ進否ヲ考察シ順次上位ノ舍ニ進ム其第一ノ舍ニ至レハ教官其優等ノ者ヲ選拔シ各學科研究ノ爲遊學セシム前年ノ事ハ漠トシテ記スルニ由ナク雷明治三年ヨリ濫費ヲ以テ遊學セシメシ人員左ノ如シ

洋學 東京ニ拾四人 醫學 東京ニ四人 和學 西京ニ一人 兵學 大坂ニ貳人 計廿壹人

春秋兩度試驗ノ法ハ前既ニ略述セシ如ク(成規ナシ)其賞與ヲ受ケシ者及入學許可ヲ得ル者ハ禮服着用ノ上老職及其掛リ役員教官ノ宅ニ回禮ス

遊泳 夏期ニ至リ城下豐川ニ於テ習練セシム其便利ナル能ク筆紙ニ盡クス所ニ非ス

職名及俸祿 學校總裁一人 役料(未詳)〇管事一人 全上〇教授三人 役料廿七俵〇教授試補六人 全廿壹俵〇助教五

人 全八俵〇句讀師(未定) 全五俵

身分取扱 學校總裁 壹等〇管事 教授 四等〇試補 助教 句讀師 未詳

職員概數 文武合併ノ人員 教員四十五人 事務員未詳

生徒概數 漢學寮寄宿生凡五十人 文武合併ノ生徒凡三百人但シ學寮寄宿生ハ濫費ナリ

束脩謝儀 無シ

學校ノ經費 未詳

藩主臨校 春秋試驗ノ際ハ藩主必臨校アリテ生徒ノ學術ヲ試問シ詩文章ノ題ヲ與ヘテ之レカ答案ヲ爲サシム

祭儀 別ニ聖廟ノ設ケナシト雖モ春秋兩度城内時習館ニ於テ釋奠祭ヲ執行シ時習館經書ノ講義ヲナシ藩士一般ヲシテ聽

問セシム最禮服着用ナリ

役割 献官一人、司樽一人、祝文一人、規條一人、疑問一人〇献品 土器、菓子、經節、牛房、人參、長芋、

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟年齡凡十歳ニ至レハ藩立學校即時習館ヘ入學セシメ讀書習字算術ヲ學ハシメ十二歳ニ至リテ劍鎗柔及弓馬ノ諸術ヲ兼學ス讀書四書五經ノ素讀終レハ歷史ノ對讀ヲ爲サシメ且教授役ニ於テ毎月十回經書歷史ノ講義ヲナシ生徒一般ニ聽聞セシムルハ勿論ナリ寶曆二年時習館創立以來教授ノ方法其細目ニ至リテハ異同アリト雖モ古老ノ口碑ニ依ルニ大略前記ノ如シ明治元戊辰年藩主大河内信古ノ時ニ至リ學制ヲ改革シ時習館内ニ別ニ漢學寮ヲ設置シ大ニ學風ヲ改良ス(從前經義ハ考證學王張ノ處右學ハ操行持節ノ理ニ暗ラク人才教養ハ勿論士大夫ニ益ナキヲ以テ爾來ハ心埋學ヲ主張シ人倫ヲ明ラカニスルノ道ヲ教授シ且歷史ハ專一兩通鑑綱鑑易知錄通鑑攬要等其外治亂ノ據ル所ヲ詳ラカニシ世事ニ益アルノ書ヲ誦讀セシメ人才發達ノ道ヲ開ラカント西村次右衛門關口良等盡力ス云々)即館内ニ於テ四書五經ノ素讀終リ獨學ノ力アラリト教授役ニ於テ認定スルキハ必學寮エ入寮セシメ歷史ノ對讀輪講等ヲ爲サシム其試驗ノ如キハ春秋兩度ニシテ藩主自ラ臨席シ老臣亦陪ス而其學力優等ノ者ニハ其賞トシテ物品ヲ附與ス別ニ賞與ノ規則ナシ

平民ノ子弟教育法 家塾寺子屋等ニテ修學セシメ藩立學校ヘ入學ヲ禁スルノ制ナシト雖モ自然ノ習慣ニヨルモノカ藩立學校ヘ入ルヲ希望セス

家塾寺子屋設置ノ制度 何人タリトモ其學力ニ應シテ開設ス敢テ他人ノ檢束ヲ受ケス

學校

校名 時習館

校舍所在地 三河國渥美郡豐橋八町

沿革要略 時習館創立ノ年代ハ寶曆二壬申年ニシテ即明治十六年ヲ距ルコト百三十一年藩主松平伊豆守信復ノ時代ナリ

(信復ハ明和五年戊子年九月吉田城ニ卒ス享年五十諡先院殿天叟文孝大居士ト號ス)信復頗ル聰明古今ノ歷史ニ通シ賢ヲ愛シオヲ舉ク而銳意夙トニ興學ノ志アリ依テ時習館ヲ創立シ老臣北原忠光ニ命シテ時習館ト扁額ニ書セシメ(忠光ハ忠兵衛ト稱シ家代々老職タリ忠光書ヲ以テ名アリ故ニ此命アルナリ其扁額今尙存)儒臣西岡善助ヲ以テ教授トシ一藩ノ子弟ヲシテ學科ヲ研究セシム尋テ時習館教授トナル者中山彌助山本忠佐西岡介藏小野湖山關根錄三郎兒島閑窓等ナリ明治維新廢藩置縣ニ際シ舊額田縣大參事木村成章氏ノ勸奨ニ依リ兒島閑窓銳意盡力シテ義塾トナシ生徒四十餘人ヲ教育シ成章義塾ト號シ漢洋及普通學科ヲ研究ス其後學制御頒布ニ際シ豐橋鄉學校(此ノ際豐橋市街中ニ五鄉學校ヲ

(別紙第二號)

書物調料拜借ノ儀學業ノ甲乙ニヨリ金高差別ヲ付無利足十ヶ年賦ニテ拜借可被仰付候尤モ五ヶ年百度以上ツ、稽古罷出候ハ、殘上納金五ヶ年分御用捨被下候且無故稽古致懈怠候者有之候ハ、度數取調上納金年限半減ニ切詰相成候

慶應元丑年閏五月十五日

學問所奉行

書籍拜借金

一金一兩二分迄(初等迄ノ者)書籍調料 一金二兩二分二朱迄(初等以上ノ者)右今斷 一金三兩三分迄(中等以上ノ者)右今斷 但書物料ノ儀拜借イタシ候者初等ノ場ニ至リ初等ノ場ヨリ中等ノ場ニ至リ候ハ、前上納不相濟居候テモ右ノ分丈ハ拜借可被仰付候

慶應元丑年六月十五日

學問所奉行

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ヲシテ藩立學校ニテ修學シ或ハ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學シ且藩費若シクハ私費ヲ以テ他國へ遊學セシメタルコアリ又藩士ヲシテ生徒ト共ニ毎月二回即チ十日廿五日四書東坡策文章軌範八大家讀本春秋左氏傳等ノ講義ヲ聽聞セシム

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學スルモ或ハ藩立學校ニテ修學スルモ農民ノ學事ニ從事スルト否トハ各自ノ隨意トシ更ニ禁止ノ制法ナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルモ他ノ檢束ヲ受クルナク何人タリトモ自由ニ開設スルコト得セシム

學校

校名 脩道館

校舍所在地 初メ西尾舊天神町ニ設立シ後更ニ校舍ヲ鶴ヶ崎町ニ建築シ移轉ス

沿革要略 舊藩主松平和泉守乘全ノ時代ニ於テ特別ニ儒學ヲ尊崇セシヲ以テ嘉永七寅年正月初テ藩立學校即チ脩道館ヲ創立シ藩士秋山角兵衛ノ二男祐助ナル者ヲ舉ケテ本校ノ師トシ監察吏ヲ屢巡視セシメ生徒ノ進否授業ノ如何ヲ監督シ后元治元子年藩主松平和泉守乘秩ノ代ニ至リ文武ヲ更張シ一層學事ノ隆盛ヲ謀リ從來ノ規則ヲ改正シ奉行掛等ノ役員ヲ配置シ專ラ其事ヲ管理セシム且脩道館ノ傍ニ於テ聖堂南北寮ニ模擬シテ東西七間南北三間ノ學寮ヲ設置シ藩士ハ勿論外藩他領ヲ問ハス有志ノ徒ヲ入學セシメ寄宿或ハ通學ヲ許可シテ文運振起ノ一助トナス

舊西尾藩

學制

學事上ノ諸制度 抑モ本藩ノ學制ハ明和年間ニ起因シ藩主世布令諭達シテ學事ヲ獎勵勸誘ス然リ而シテ學業初等ニ達スル者ハ(學科中ニ詳ナリ)石餅石餅トハ即チ白紋ナリ卷上下一具ヲ賞與シ其中等ハ麻上下一具ヲ賞シ上等ハ藩主ノ服セシ麻上下一具ヲ賞スルヲ以テ例トセリ其后文學ヲ更張シテ中等又ハ上等ニ進ムモノハ加フルニ小葵紋付野羽織地一反ヲ以テセリ紙別一號而シテ勵精衆ニ超絶スル者不時ニ賞スルニ金穀ヲ以テシ或ハ要路ニ登用シ或ハ無祿ノ者ニ祿ヲ給シ或ハ文學中等以上ノ者ニシテ過誤失錯等ノ事アルモ其處置ニ於テハ尋常ノ者ヨリ一等ヲ輕減スルノ内規アリ其他用書ヲ購求セント欲スルトキハ學業ノ甲乙ニヨリ或ハ金一兩二分書簿簿得ノ資ト以下之ニ倣フ或ハ金二兩二分二朱或ハ金三兩三分等金額ノ差等ヲ付無利足十ヶ年賦ヲ以テ貸與ス然レモ五ヶ年間勵精ニシテ懈怠ナキ者ハ殘五ヶ年分ノ納金ヲ與フルカ如キ獎勵ノ方法別紙二號ヲ設ケタリ但脩道館設立以前ニ渉ルモノハ單ニ學問所ト稱ヘ別ニ校名ヲ付スルナク校舍所在ノ地モ亦屢變換シ教則等各教官ノ意見アリテ一定ノ規ナシ故ニ判然セサルヲ以テ之ヲ掲ケス

(別紙第一號)

今般文武御更張ニ付格別ノ以思召不表向學問兵學并ニ槍劍砲三術以來免許受用ノ面々ハ小葵御紋付御野羽織地可被下置候右一藝免許ニテハ一ツ御紋付二藝以上ハ三ツ御紋付可被下置候右免許兼テ受用致居此節出精ニ無之面々自分入用ニテ御紋付御野羽織地染方御納戸ヲ以テ相願ヒ着用ノ儀ハ勝手次第可致候三藝免許受用ノ節ハ三ツ御紋付夏御野羽織地可被下置候其餘四藝五藝ニ至リ候ハ、夫々拜領物可被仰付候御中小姓格御徒士並ノ者ハ右振合ヲ以テ野羽織地小頭格以下ハハ丸羽織地右身分ニテ前文同趣出精ニ無之者自分入用ニテ野羽織地并ニ丸羽織地染方御納戸ヲ以テ相願着用ノ儀ハ是又勝手次第可致候尤モ相願候段學問ノ方ハ學問所掛リ武術ノ方ハ講武掛ヘ以書付可申出候但文學ノ義ハ是迄免許等ノ傳授無之候得共以來兵學等同様ノ御取扱ヒ相成免許等ノ場ニ至リ候者ハ本文ノ通被下置候且御中小姓格以下ノ面々自分入用ニテ野羽織地等染方相願候節ハ頭支配ヲ以テ可相願候右之趣門弟共ニ可被申通置候以上

慶應元丑年五月

學問所奉行

年中授業日數 二百七十日 正月五日稽古始十二月廿日終

休業日 毎月一六ノ日 三月三日 五月五日 七月七日十五日 八月一日 九月九日 氏神祭日 十二月廿一日ヨリ

正月四日マテ

時間 毎日午前第八時始業午後第一時終業

學科學規試驗法及諸則 學科ハ漢學ニシテ元來脩道館ハ文學ノミノ演習場ナリ而シテ兵學弓馬槍劔砲柔等武術ノ演習場ハ別ニ設置ス然レモ藩中成ヘク文武兩道ヲ兼習セシムル様厚ク注意ヲ加ヘ或ハ一科ヲ專修スルヲ許ス

文學ト武學ト程度ノ比例例ヘハ四書五經十八史略ノ素讀ヲ終ルモノヲ初等トシ之ヲ武術ノ目錄ニ比シ蒙求唐詩選國史略國語左傳ヲ素讀シ史記文章軌範ノ獨看ヲ始メ漸ク文義ヲ解セントスルニ至ルモノヲ中等トシ之レヲ武術ノ免許ニ比シ尙外ニ日本外史及八大家ノ讀本ヲ會讀シ或ハ獨看シ略四書ノ大義ニ通スルモノヲ上等トシ之ヲ武術ノ印可或ハ皆傳ニ比セルノ規アリ 生徒年齡入退學ノ期限ナシ

試驗ハ每歲一度冬至ノ前後トシ其年學習セシ所ノ書籍ニ就キ學業同等ノ者ヲ一組トシ徹夜輪讀セシメ各自ニ失忘ノ點ヲ付シ誤讀之レ無キモノニハ其賞トシテ盛饌ヲ賜ヒ誤讀ノ點五點ニ達スルマテノモノニハ粗饌ヲ賜フ而シテ古來春秋兩度即チ三月九月城中大書院ニ於テ代官以上ノ諸役員列席生徒ノ講義素讀ヲ聽聞セシ例規アリ

生徒訓條罰則等ハ別ニ設ケサルモ過失等アレハ或ハ訓戒シ或ハ說諭ヲ加フ

學業勉勵等ニテ褒賞セラル、者ハ官吏及ヒ師家ヘ回禮スルノ慣習アリ

職名及俸祿 初メ學校奉行學監教頭等ノ職名ナク執政官及ヒ大監察ニテ監督シ儒者一名助教四名或ハ五名副助教三名或ハ四名世話役一名等ニシテ定員ナシ后文武ヲ更張シ學監等ヲ設置スル左ノ如シ

身分取扱	年寄次席	用人次席	大目付次席	馬廻り席	無席	全	上	全
職名及ヒ俸祿等	常祿ノ外加役米等ナシ	全	上	全	上	常祿ノ外年々銀一枚ヨリ三枚マテ	全	金二百匹ヨリ一兩マテ
脩道館	文武諸藝掛二員	學問所奉行一員	學問所掛リ一員	儒者一員	助教六員	副助教六員	世話役一員	

朝政維新ニ際シ更ニ職名等ヲ變換スル左ノ如シ

教則

教科用書、四書、五經、十八史略、史記、春秋左氏傳、國語、蒙求、前後漢書、唐詩選、文章軌範、唐宋八大家讀本、國史略、日

本外史、政記

脩道館學課

今茲嘉永癸丑、我公新興學館、欲令闔藩子弟、肄業於其中、夫鄉學之設、三代尙矣、夏之校、殷之序、周之庠、其名雖異、其實則同、所以敦教化、明人倫也、今也本藩設斯館、以從來學之便、其書則四書六經、其教則孝弟忠信、諷誦於斯、涵泳於斯、使不見異物而遷焉、方今我國封建爲制、士大夫世襲其寵祿、故在黼黻、而殷有富貴之權、其法雖出厚有功之後、至其流弊、則終身不學、莫以供國用、傳曰飽食煖衣、逸居無教、還禽獸、若夫禽獸則庶人猶且恥邇焉、況於士大夫乎、我公曾焦思於茲、仍有此舉、豈不盛乎、余以菲才備任於教官、冀與子弟相奮勵、上以對國家育才之盛意、下以奉父祖垂緒之嘉績、於是乎、乃定學課、欲使之驅而之善云

第一課句讀 句讀之要、所以詳明音訓、分別四聲也、故讀書必以之爲本、則其調也可立而待矣、故授童蒙、或三章或四章、量其力所任、爲之限、必使之至逐句逐讀、一往不躡而止、既退又令自反覆諷誦習熟其所受者

第二課復誦 傳曰月無忘其所能、童蒙之性多戲謔、意不專於學、常習其所受、猶且漏失矣、況一日溫之、而數日寒之乎、故設復誦會、以驗句讀之熟否

第三課輪講 聖賢之微言、概而在經傳、今古諸儒、所難其解也、雖有力者、不能獨識以定其說、故設輪講會、舉一二章、一人講之、衆人論之、究其精微、探其秘奧、必折衷義理、而後始休矣、一以免固陋淺見之弊、一以奉博學寡要之戒、庶幾乎大有益乎

第四課講說 講說有三義、一曰精、以辨字句、二曰深、以極事物、三曰廣、以審治忽、精所以教訓詁之法也、深所以博知識之道也、廣所以知政務之要也、三者學問之大體、而諸生之要務也、故師必講說、使子弟徧聽之

第五課詩會 傳曰不學詩、勿言、夫詩心聲也、心之所積、必發之聲、心粗厲者、聲從而急速、心恬靜者、聲從而緩舒、急速則過之、緩舒則不及、善學詩者、斷其過、而補其不及、庶幾可以與言詩、故有詩賦會之設、以述其心情、有宿構、有席上、宿構致其練、席上致其捷、古今長短、其體從學力所任、以賦焉

第六課文會 經國不朽之典、莫若文也、君子之業、著諸天下、傳諸後世者、非文何以備哉、語曰文學子游子夏、蓋雖聖人之徒、亦學焉、況後人乎、故設作文課、以供著述之資、書論語策、其餘大小之作、必揭題以綴之、宿構、席上、其式如詩會

以テ支辨ス

束脩謝儀 入校ノ節及ヒ一ケ年兩度即チ七月十二月各自謝儀ヲ以テ師ニ呈セリ但謝儀ニ定限アルヲナシ

學校經費 修道館及ヒ學寮共一週年ノ學費設立ノ初メ豫算金百圓後文武更張シ豫算金五百圓トス維新後ノ經費豫算額金千圓トス

藩主臨校 藩主在城ノ日ハ必ス毎月定日講義ノ日(即チ十日二十五日)ヲ以テス但不時ニ臨校シテ生徒修業ノ如何ヲ視察セリ

祭儀 聖廟ノ設置ナシ然レトモ其釋奠釋菜ヲ執行セシ禮典アリ祭廟ノ禮每歲二月トシ修道館中ニ聖像ヲ掛ケ天造物及人

造物天造物ハ銅比目魚等ノ鮮肉及ヒ蜜柑ヲ備ヘ祭廟ノ略式ヲ執行ス
造物ノ類ニシテ人造物ハ赤飯或ハ餅トス

學校構造及建物圖面 別紙畧圖ノ通

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 學校ニテ出版翻刻セシ書籍ナシ藏書ノ種類部數左ノ通(別ニ掲ク)

舊岡崎藩

學制

學事上ノ諸制度 特ニ學業上進ノ者ニハ知行ヲ加増シ或ハ加扶持或ハ二三男ノ者ハ新ニ召出シ扶持米ヲ與ヘテ世家トセシムル等ノ事アリ又學業勉勵ノ者ニハ歲末年始ノ中ニ於テ藩主ノ衣服或ハ白銀或ハ料理或ハ銀匁鳥目等ヲ以テ身分ノ尊卑ニ依リテ之レヲ賞スルノ慣例アリ

士族卒ノ子弟教育方法 就學ハ各自ノ意向ニ任スト雖モ一藩ノ子弟幼稚ノ時ハ必ス藩儒ニ就クハ由來ノ習慣ニシテ皆克ク入學セリ 藩費ヲ以テ他國ヘ遊學セシメルノ成規ハアラサレトモ本人特志ニシテ資力ニ乏シキ者等ハ學費ヲ支給スルヲアリ又私費遊學ノ如キハ各自ノ意ニ任セテ之レヲ許可セリ 毎月二回藩主臨席藩儒ヲシテ講義セシム此時家老用人大目付等ノ役員出席藩士一同ヲシテ聽聞各出頭ノ名刺ヲ徴シ右筆ヲシテ之レヲ登記セシム若シ缺席スルハ當朝其旨大目付ニ届出ルヲ定期トス但此時ハ生徒ノ聽聞ヲ許サス 藩士學舍ニ在リテ研究スルハ生徒ト異ナルヲナシ生徒上進ノモノヲシテ臨時輪講又ハ講義セシメ藩主之レヲ聽聞スルヲアリ

平民ノ子弟教育方法 藩學校ヘ入學スルヲ許サス農民學事ニ從事スルヲ禁止セシヲナシ 維新后岡崎市街ニ藩費ヲ以テ學校ヲ開設シ市學校ト稱シ岡崎市街平民ノ子弟年齡ヲ問ハス有志ノ者ハ入學セシメ專ラ學事ノ普及ヲ謀レリ

職等職祿

第一等	第二等	第三等	第四等	第五等	第六等	第七等	第八等	第九等	第初等
八十俵	七十五俵	六十俵	五十五俵	五十俵	四十俵	三十俵	二十八俵	二十五俵	二十俵

文學局

少參事
一員

教授
二員
無
副教授兼
一員
等
一員
全談補
五員

筆生 二員
副助教試補使
部
一員
ヨリ兼務

學制頒布前尙又改正スル左ノ如シ

明治三
年庚午
十月十一

位階相當略表	從七位	正八位	從八位	正九位	從九位	大初位	少初位
文學校教頭	大助教	中助教	少助教	大得業生	中得業生	少得業生	

明治四
年辛未
七月

給俸規則	金七十五兩	金五十五兩	金四十五兩	金三十兩	金二十七兩	金十七兩	金十四兩
文學校教官	頭	大助教	中助教	少助教	大得業生	中得業生	少得業生

職員概數

維新前教員 儒者一員 助教六員內二員兼 副助教六員 合計十三員○事務員 文武諸藝掛二員 學問所奉行一員 學

問所掛一員 世話役一員 守門兼小使一員 合計六員

維新ノ際教員 督學一員 教授二員 副教授兼寮長一員 助教五員內一員兼 副助教二員 全試補五員 合計十六員○

事務員 少參事一員 權少參事一員 筆生二員 使部一員 守門兼小使一員 合計六員

維新後學制頒布以前教員 教頭一員 大助教一員 中助教二員 少助教一員 舍長二員 大得業生三員 中得業生三

員 小得業生三員 合計十六員○事務員 少參事一員 正權少參事二員 筆生二員 使部一員 守門兼小使一員

合計七員

生徒概數 但維新前後ニ於テ生徒ノ數ハ敢テ異ナルヲナシ

寄宿生徒凡十五六名 通學生徒凡百八十名内外但寄宿生定員無之脩道館所藏ノ書籍器械ハ貸與シ其他食料等ハ自費ヲ

允文館漢學條規

一篤信聖教 凡聖教明君臣父子之倫講經世安民之道國家一日不可闕衆人一日不可廢今學生倦々直以躬行實踐爲要必勿忘所謂讀一字斯行一字語

一學尙該備旁及辭章 讀書者非以專究經義爲足也蓋熟於荀揚諸子及後世賢人君子所著之書則可以博發明聖經之旨閱史傳則大而治亂興亡之理政術軍謀之用細而行事之邪正智識之淺深得悉鏡之長於文章則能明論議而便著作工於詩賦則明諷諭筆義性情可以消鄙吝粗俗之志此數者皆不可闕矣業尙在學則不可一而廢也

一文武不當偏執 布政教以致太平者文也帥兵衆以清大亂者武也州縣之務愛人安民者文也擊賊捕盜者武也而治一家修一身亦自有文與武之意存于其中矣所謂有文事者必有武備要之文而遺武不得以爲文武而遺文不得以爲武不流於文弱不偏於猛烈然後可謂士矣

一勇以道義爲主 夫子稱子路之好勇子與共養浩然之氣後世呂威公亦以勇爲萬惡之原而謂善者大抵生於剛強勇之不可已也而聖人則天行之剛健以成巍々之功忠臣鑄鐵石之腸以立赫々之名如夫殘忍酷暴者觸刑辟害人民雖似勇者與尙所云者相去天淵凡爲士者不可不識也

一不違道之徒當斥逐 唐書戴陽城爲國子司業諸生有三年不歸省親者斥之學校者教之所由出生徒不惟罪不歸省親者而已凡背道害理固在所可斥逐今約亂人倫敗名節其所爲有妨聖教者速削除其名待他日之悔悟方許其後入館

一朋友之義不得論貴賤 友也者友其德也不可以有挾也大賢訓誡如此凡學館中雖古之鄉黨是類似而專序其長幼尙未爲可況論其貴賤乎西土王公大人之禮賢之事不可枚舉而我邦水日義公不敢召師而就學朱舜水者亦忘貴尊德之意也今學生休此意則庶幾朋友之道得矣然或有藉者少者恃其周學而妄侮蔑貴者是又所可戒也

一平居守戒 聖賢之大道載在六經四子今不待論之矣而平居所當戒者凡十又六曰戒語放以就謙讓戒奢侈以就節儉戒忿狃以和其氣戒褻忽以宏其器戒貪欲以尚廉潔戒欺詐以尚誠信戒機變以尚質直戒忌克以尚和同戒怠惰以貴精強之有功戒放蕩以貴恬靜之多得戒鄙吝以重義輕財戒暴悍以推賢愛衆戒溺于流俗以要高己之謙見戒惑于人言以要觀古人之訓誠戒爲善飾非妬賢嫉才之意以養公平正大之心術戒曲學枉道畏讒愛毀之心以振強毅之氣學生能守此則進道之基於是立矣

一慎言語容色 讀書立行者先慎言語容色然後可入道官政之是非人物之臧否敗倫失禮之事侮慢嘲笑之惡聲色飲食財利競新樣評服飾裝富厭貧趨時附勢之談勿少上口吻驕倨嚴嚴粗暴輕浮躁競之色一當絕去之

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ都テ自由ニ任セテ敢テ關涉セス

學校

校名 允文館

校舍所在地 三河國額田郡岡崎康生町町名ハ新設岡崎舊廟内

沿革要略 昔時漢學ハ藩儒筆道ハ其師範ノ邸内ニ於テ之レヲ教授シ別ニ學校ノ名稱ヲ設ケス邸宅營繕ハ都テ藩費タリ明治二年九月舊知事本多忠直文武教授ノ改革ヲ施行シ允文允武ノ兩館ヲ置キ文事漢學筆道ハ允文館武事練兵槍劍弓馬長刀ハ允武館ニ屬シ專ラ兩道併立擴張ヲ謀レリ

教則

孝經、四書、五經、文選 以上素讀○蒙求、十八史略、荀子、孟子、論語、春秋左氏傳、史記、前漢書、後漢書 以上解讀

此外ノ書籍ニ至テハ豫メ順序ヲ設ケス其生徒ノ學力ニ依リテ研學ス故ニ一定セス

教授ノ日割 毎月二三五七九 教師講義(但質問)○毎月二四八夜(酉刻ヨリ) 輪講詩文會○毎日(晨旦ヨリ又午後ヨリ) 讀書習字○毎月三七八夜(酉刻ヨリ) 數學○毎月一六 休暇

學科學規試驗法及諸則

今般人才御生育ノ爲メ學校御取開ニ付御藩中ノ面々御規則ノ御趣意堅ク相守益奮勵可致旨父兄長上ノ者ヨリモ精々教諭ヲ加ヘ聊怠慢無之樣可被申付候

己巳九月

允文館概則

當今際 皇綱再張庶政一新之盛時恭奉 朝旨勅建學館以養髦士學分三種一曰皇學二曰漢學三曰洋學皇學專考 皇國古語以明 神聖建國之微意而詳歷 朝施治之遺制漢學右經左史博通精究以明倫理勵名節若經世濟民乃是爲學者分內之事尤當講明練習焉洋學明係察氏六科至其教法固有國家勵禁在焉但節取其技能自推步測驗以至造器製藥等立之師以授學徒顧三種之學雖似意旨迥異冰炭初不相容而捨其所短取其長彼此各就本色問難質正互相切劘蓋未必無裨益也不然執意徇私分爭排擊以致紛擾與國家建學育才之盛意遂相背違其可不大畏哉三種學徒宜研精覃志各攻本分術業以期深造精詣不必以黨同伐異爲念也爰立學規以揭示學徒々々其夙夜警戒一意遵奉慎勿遺失

一童子八歳より入學寄宿生は十五歳以上之事 但有志并に天質宜き輩は此限にあらず

一館中禁酒之事

一犯禁之者は五日或は十日或は十五日禁學門戸を出るを不許事

右之條々堅ク相守へくもの也

允武館揭示

夫兵者不用則已用則國家安危之所關係宜訓練有素也今創立武學之館使以教習乎其中部勒驅使置常用諸鍊習熟願方今雖器械隨法舉倣泰西而孫吳遺編愈成諸子之書亦在所不廢其可不潛心講求哉刀槍拳法類又係 神州長技尤宜奮勵益精其術也不肖叨膺藩屏之寄思欲率先入館盡力教養訓練爲館中諸生各設科目嚴立課程逐日教習期以精熟繕以備國家緩急之用其宜體吾此意日益勵精無懈

條規

一各科ノ教師ハ常々將領之如ク心得謹テ其指教ヲ奉シ聊齟齬有間敷事

一凡入此館輩相互ニ禮讓ヲ厚シ決シテ粗暴ノ振舞不可致事

一毎日不違定刻諸官并生徒入場ノ事

一生徒出入共學監へ可相達事

一場中禁酒ノ事

一童子十二歳ヨリ許入學事

一術業勤惰ニヨリ臨時ニ賞罰相行其趣場中ニ標出致ス事

一犯禁ノ輩五日或ハ十日十五日禁學不許外出之事

右之條件堅ク相守可申者也

允文館概則ニ學分三種一曰皇學二曰漢學三曰洋學トアリ而凡皇學洋學ノ二科ハ姑ク關科當時專修スルモノハ漢學筆道數學ノ二科ナリ文學ト武術ト程度ノ比例ハ從來武術ノ方重シ例ハ槍劍砲ノ中一技ヲ免許スレハ二三男ハ新ニ召出シ扶持米ヲ與ヘ或ハ加増加米等ノ學アレハ一定ノ成法ノ如クニ成レリ文學ニ至リテハ四書ノ大義ニ通スルモ容易ニ此舉ニ與ルヲ得ス特ニ學業上進シテ亞儒ノ位ヲ占ムルニアラサレハ新ニ召出シ或ハ加増加米等行ハレス而凡歲末年始ニ於テ勉勵ノ者ヲ賞スルノ賜品ハアレ是亦武術ノ方厚シ故ニ圖藩武術ヲ尙ミ文學之レニ次クノ風アリ

一讀書先要考究文義 田舍間小儒間有稱讀書已見大義文義不必求深解者而古今大儒皆務考文義故伊川程子嘗云未有不曉文義而見意者也延平李氏又云須令一件融釋了更理會一件蓋文義不明則意隨以暗而其所解多謬誤尙何能知言外之意見意中之味哉如是則經而不得審理義史而不得明事故以故二子有所告戒也彼小儒以己學淺識卑恐生徒深推究文義以就正唱謳罔誰惑之言使人長不見讀書之功可惡之甚也今入斯館者不爲彼徒所惑而直守大儒之學則可也而若諸葛武侯之讀書知大意則與小儒之忘語其意相去甚遠而別有所見是他日之談今不必論

儀注

- 一每歲仲春及仲秋擇吉日以行釋奠之儀
 - 一諸生始入學先拜謁先師然後具名帖謁掌教督學
 - 一凡會事客則以貴賤爲序生徒則以齒德爲序
 - 一正月開館先期十日書某日開館字以榜于門
 - 一每會先期五日書所講之書名榜于門使遠近之士知之
 - 一生徒之晝夜居本館讀書者出入必報掌教督學
- 明治己巳季秋望前二日

掟

- 一規則之件々堅く相守り違背致間敷事
- 一每朝辰上刻館中諸官并に學生昇堂之事
- 一凡入此館者嚴肅を專らにし妄言を禁する事
- 一講義中妄りに不可起并揮扇喫烟濫語を禁する事
- 一學校書齋妄りに館外に出ずを禁する事
- 一輪講之輩解し違ひ多きときは功課簿へ黑點を識し難問に相答たる者は白點を識し其精粗分明ならしむべき事
- 一素讀生前日所受忘失すること五字以上なる時は亦授くるを不許事
- 一學術勤惰により臨時賞罰可行且其趣館中へ標出可致事
- 一寄宿生は出入學監へ可達事
- 一諸生毎日學校へ入る時は帳場へ可達事

表中空欄内ハ文學校ニ必用ニアラサレハ略シテ記セス

兵 藩	校 武	校 交	
隊 長		掌 教	
小隊長 雜事長 牛隊長 分隊長	鍊兵示教 砲術示教 刀術示教 全並	示教 全並 學監	
二人 二人 二人 二人	二人 一人 一人 二人	二人 一人 一人 二人	
分隊副長 二人		數學示教 作字示教 受讀	
		一人 二人 六人	
調役 神官 伍長 銃卒 喇叭手	馬術示教 砲術示教 砲手 捕亡技藝示教	書記 管計	
十二人 十六人 百廿人	三人 二人 二人 二人 二人 二人	三人 二人	

職員概數 掌教一人 示教二人 示教並一人 學監二人 數學示教一人 作字示教二人 授讀六人 助教三人 書記三人
 人 管計二人 小使二人 合計二十五人

生徒概數 二百五十名

東脩謝儀 舊來盆暮二季一季ニ金二朱以下鳥目四百文以上允文館設立后ハ無謝儀無月謝
 學校經費

文武學校諸入費 米四百三十石九斗四升九合八勺六才

但此石高ノ豫算ヲ以テ年々文武學校ノ諸費ニ充テ藩廳會計課於テ之レヲ支出ス此費額ハ文武學校融通ノ法ニシテ需用ノ緩急相計リ處辨ス其仕拂ノ如キハ決算ニアラサレハ豫メ文武ノ諸費ヲ分割シ難シ

允文館允武館諸費決算書ノ如キハ廢藩以來年已ニ久シク書類散逸シテ明瞭之レフ記スル能ハ

文武修行料 米三百八十石九斗五升二合六勺

文學或ハ武術ニ特志ナルモ他國遊學ノ資力ニ乏シキモノニ之ヲ支給ス

藩主臨校 藩主臨席生徒ノ素讀幼年 講義ヲ試業スルハ定期ナシ若シ之レヲ行フトキハ豫メ時日ヲ達シ藩儒生徒中優等ノ

生徒學習ノ年齡學期ハ一定ノ規則ハアラサレトモ概テ年齡七八才ニシテ入學シ十六七才ニシテ退學スルモノトス尤モ
特ニ勉勵者ハ此限ニアラス

春秋試驗ノ法ハ無之

儒學筆道其生徒毎月ノ出席ハ連名簿ヲ製シ之レヲ大目付ニ出シ大目付家老ニ呈シ家老之レヲ藩主ノ閱覽ニ供ス允文館

設置后ハ出席名簿ハ學監ヨリ文學總括少參事ニ出シ少參事大參事ヲ經テ知事ノ覽觀ニ供ス

師弟ノ間ハ尤モ信密ニシテ年始暑寒五節句吉凶等ハ禮服着用師範家ヘ回禮ノヲアリ其他輕微ノ贈物等チナシ一度師ト

仰ク以上ハ半途廢學スルモ終身忘却セス他人ト對話スルモ某先生ヲ稱シ年始暑寒吉凶等ノ諸禮ニハ必ス師家ヲ問フテ

常ニ其恩義ヲ忘レサルノ風アリ

職名及俸 堂敷 金六兩〇示教 金三兩二分〇示教並 金二兩二分〇學監 金二兩二分〇數學示教 金二兩〇作字示

教 金二兩〇授讀 金壹兩〇助教〇書記 金三分〇管計 金三分

但爰ニ掲クル月給ハ全ク家祿外ノモノナリ

維新以前ハ儒者及筆道指南役其藩主之レヲ命ス家祿ノ外別ニ給米ヲ與ヘス而モ毎歲末各種ノ賜品アリ

座席身分取扱ヒハ見易キカ爲メ舊岡崎藩役員表ヲ左ニ記ス

岡崎藩廳

位階 正六位從六位正七位從七位正八位從八位正九位從九位

官給 八十四石 四十三石三十八石 三十二石九石六斗八 石四石八斗四 石三石二斗

勸農知事 大參事 權大參事 少參事 大用人 屬權大用人 少用人 市郡庶務 雜事 長少參事 生

刑法 事 大參事 權大參事 少參事 大用人 屬權大用人 少用人 市郡庶務 雜事 長少參事 生

租稅 事 大參事 權大參事 少參事 大用人 屬權大用人 少用人 市郡庶務 雜事 長少參事 生

驛遞 事 大參事 權大參事 少參事 大用人 屬權大用人 少用人 市郡庶務 雜事 長少參事 生

營繕 事 大參事 權大參事 少參事 大用人 屬權大用人 少用人 市郡庶務 雜事 長少參事 生

社寺 事 大參事 權大參事 少參事 大用人 屬權大用人 少用人 市郡庶務 雜事 長少參事 生

生座 事 大參事 權大參事 少參事 大用人 屬權大用人 少用人 市郡庶務 雜事 長少參事 生

監察 大屬 監察二人 少屬 調役一人

會計 大屬 監察二人 少屬 調役一人

松本謙三郎教授ノ道ニ勉精ス時アリ他儒者ヲ雇ヒ經書ヲ講義セシメ藩主ヲ始メ一藩ノ子弟マテ聽聞ス江戸邸内ニテモ之ニ准シ明治元年藩主一層奮發シ藩士ノ讀書有ル者ヲ撰拔シ文禮館ヲ再興セシム此ニ於テ學事擴張セリ

教則 皇學漢學兵學數學學習字等ノ諸科ナリト雖モ其用書及ヒ授業ノ方法ハ今詳記シカタシ

學科學規試驗及諸則 古來ハ和學漢學習禮兵學武術ハ弓馬槍柔居合武ノ内棒劍術砲術等ナリ一藩子弟ニ文武兩道ヲ兼修

セシム文學ト武術トノ比例ハ別ニ論セス武術ハ各術トモ目錄免許皆傳等賞狀アリ免許皆傳ハ藩主ヨリ金員ヲ與フ每歲

正月文武トモ稽古始メト稱シ各師範家ニ門生禮服ニテ集合稽古始メノ式アリト雖モ今詳記シ難シ維新后諸則ヲ改正シ

文武トモ師範家ト稱スルモノヲ廢シ兵事ハ英式ヲ用ヒ後佛式ニ改正ス

職名及俸祿 文禮館長正副大少參事ニテ常務ス 教頭 教授 助教 句讀師 算術師 習字師 主簿

其俸祿ハ世祿ノ外官祿ヲ給與ス

職員概數 教員凡十二名主簿其他雜事ヲ主トルモノ二名是レ維新後文禮館ノ制度ナリ身分扱方ハ士ノ格式ニ拘ハラス職

名ニヨリテ順席ヲ定ム

生徒概數 寄宿生徒三十名ヲ定員トス書籍ハ貸與ス紙筆墨ハ自費ナリ通學生徒凡二百餘名ナリ

束脩謝儀 一切ナシ

學校經費 米二十石 金九百圓

藩主臨校 藩廳退散后毎日臨校シ寄宿生徒ノ席ニツキ經書ヲ論講シ歴史ヲ同讀シ教頭ノ所說ヲ問フ

祭儀 聖像アリト雖モ未タ聖廟ノ設ナシ每歲釋菜ヲ執行ス其禮典今記シ難シ

學校構造及ヒ建物圖面 別紙ノ通

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 文禮館ニ於テ奎堂遺稿ト題スル詩集二卷出版ス藏書種類部數等今

考案シカタシ

右維新前後トモ今日ニ到リ記錄ナキヲ以テ詳細ノ事ヲ記スル能ハス

舊重原藩

學制(舊福島藩)

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達等アリト雖モ轉封ノ際書類散逸シテ今徵ス可キナシ

モノ七八名若クハ十名ヲ精撰シテ出席セシメ都テ藩儒之レヲ指揮シテ順次ニ讀講ス
祭儀 毎歲春秋仲月仲丁ノ日孔子ノ正像ヲ釋菜ス

學校構造及建物圖面 地所坪數五百二坪七合六勺 建物ハ毀テ后目今ノ連尺學校ヲ新築ス又舊圖面在存セス故ニ詳ナラ
ス建物坪數凡二百坪

舊刈谷藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主心ヲ學事ニ盡シ藩士ニ對シ布令諭達シテ學事ヲ獎勵セシト雖モ廢藩後書類散逸シテ今徴ス可キナ
シ
士族卒ノ子弟教育方法 藩士中文學アル者ヲ撰ンテ一藩子弟ノ師範家ト定メ學則學科ハ渾テ之ニ委任シ藩主每歲一度自
カラ試驗シ其優等ナルモノニハ歲末褒賞ヲ與ヘ生徒ヲ獎勵セシム維新后藩費ヲ以テ教師ヲ雇ヒ文禮館ノ教科ヲ擔任セ
シム毎月湖望教頭敷場ニテ經書兵書等ヲ講義シ藩主始メ出席シテ其講義ヲ聽聞ス一藩士卒族ノ子弟皆ナ文禮館ニ入學
セシム寄宿生ハ定員アリ通學生ハ各自ノ意向ニ任ス且右生徒餘暇ヲ以テ家塾等ニツキ修學スルヲ敢テ禁止セス文禮館
教員ノ足ラサルヲ以テ明治元年藩費ニテ濃州大垣學校ヘ遊學ヲ命シタルモノ數名アリ又私費ヲ以テ遊學セシ者數名ア
ルナリ

平民ノ子弟教育ノ方法 明治二年刈谷市中元修光寺ヘ鄉學校ヲ設置シ平民子弟隨意ニ入學スルヲ許シ其教科ハ讀書習
字數學ヲ授シ其他領内各村ニハ寺子屋流ノモノナリ
家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ設置スルハ藩ノ許可ヲ得スシテ何人タリモ自由ニ開設スト雖維新后鄉學校ヲ設置
スルニ當リ一時寺子屋ノ教育ヲ禁止ス

學校

校名 文禮館

校舍取立地 舊刈谷城外郭城門ノ左側ニ設ク
沿革要略 古來文禮館ト稱スル藩學校ノ設ケアリシニ何故ナルヤ廢絶ス爾來師範トナル者ノ自宅ニテ教授ス藩士ニテハ

職名及ヒ俸祿 學監監察ニテ二員 師範校長ニテ他ニ稱テ部一員 事務員兼助教二員 助教屬員二員 助教生無定員 門衛一員

俸祿ハ定祿ノ外別ニ之ヲ給與セス

職員ノ概數 教員凡八名事務員二名門衛一名

生徒ノ概數 通學生八九十名 寄宿生或有或無但寄宿生アルルハ自費

束脩謝儀 束脩簿儀ナ行フ 謝儀毎歲七月十二月闔校生徒ヨリ聊カ之ヲ行フ

學校經費 一年間校用ノ諸費ハ藩費タリト雖凡其概額詳ナラス

藩主臨校 藩主臨校ナシト雖モ在國ノ際ハ時々殿内ニ於キテ都講ヲシテ講義セシメ或ハ生徒ノ學業ヲ試ム

祭儀 二八月上丁ノ日都講宿齋禮服校生モ亦禮服午前八時會祀ス聖像一幅ヲ掛ケ酒饌ヲ供ヘ都講以下順次ヲ以テ禮拜ス

終リテ復坐ス生徒ニ酒膳ヲ頒ツ畢リテ生徒進ミテ講坐下ニ就キ都講經文ヲ講ス畢リテ聖像ヲ拜シテ退校ス

學校構造及建物圖面 記錄ナキヲ以テ今詳記シ難シ

學校ニテ出版鵜刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 學校ニテ出版鵜刻セシ書籍無シ藏書種類部數今考案シ難シ

以上福島藩校ノ學事ニ係ル明治二年重原ニ徙ルノ后學制變革左ノ如シ

學制(舊重原藩)

學事上ノ諸制度 藩知事心ヲ學事ニ盡シ藩士ヲ獎勵セシト雖凡記錄散逸シテ今調査シ難シ

士族卒ノ子弟教育方法 圖藩ノ子弟ヲシテ藩立學校ニ入學セシム又各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學スルヲナモ許可ス

或ハ藩費ヲ以テ東京ヘ遊學セシムルモノ數名私費ヲ以テ遊學スル者數名アリ且有志ノ者ハ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞スル

ヲナサシム

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟入學ヲ願フモノアレハ隨意ニ之レヲ許ス其ノ他領内ニハ家塾習字師アリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋開設スルモノ各自ノ自由ニ任セ曾テ干涉スルヲナシ

學校

校名 養正館

校舍所在地 三河國碧海郡下重原村

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ニ必シモ入學セシメス各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學スルコト敢ヘテ禁止セス 藩費ヲ以テ他國ヘ遊學セシムルヲ藩法ニ之レ無シ私費遊學ハ極メテ特志ノ者ヲ許可セリ安政中一士遊學ノ望厚キヲ以テ藩主之ヲ許シ特旨之レニ俸米及ヒ年給ヲ與フルコト勤仕ノ日ニ同シ特典ニシテ例格ニ非ス藩主在國ノ年毎ニ生徒ヲ試驗シ優等ノ者ニハ賞ヲ與フ 生徒一歲中ノ出校ヲ調査シ勉勵ノ者ニハ褒賞ヲ與フ 藩士中有志ノ者ハ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞ス但農商ト雖モ縱聽ヲ禁セス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ノミニテ修學スト雖モ藩立學校ニ入學ヲ願フ者アレハ之ヲ許可ス 家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スル者每人自由ニシテ官ノ許可ヲ請フコトナシ

學校

校名 講學所

校舎所在地 岩代國信夫郡福島城郭内

沿革要略 延寶ノ頃第二世内膳正板倉重矩儒學ヲ尊崇シ永田蟠龍ト云フ儒士ヲ祿シ之ヲシテ都講タラシム然レトモ傳記等今微スヘキモノナシ文政年間第十二世甲斐守勝俊ニ及ヒテ再儒學ヲ振興シ儒士高橋秀雄ヲ祿シ之ヲシテ都講トナス秀雄ノ男古三郎繼キテ都講タリ江戸邸内ニモ亦校ヲ創設シ有元久右衛門ヲ祿シ以テ都講トス久右衛門ニ繼ク者柳沼維德

教則

教科用書 孝經、小學、近思錄、四書、五經、文選、左氏傳、史記、資治通鑑、王代一覽、國史畧、日本書記、八代和歌集、貝原篤信五訓、大日本史

授業方法 學則文アリ今減シテ傳ハラス

等級七等ニ分チ七等ヨリ四等ニ至ルマテハ素讀生三等以上ハ質問輪講生トス

時間 八時ヨリ十二時ニ至ル但輪講ハ便宜其ノ日ヲ定メ午後一時ヨリ四時ニ至ル

學科學規試驗法及ヒ諸則 學科ハ和學漢學試驗ハ春秋釋奠ノ四五日前ニ於キテ施行シ及落ヲ判シ之ヲ講堂ニ列掲シ而シ

テ釋奠ヲ修ス五十餘年間毎歲怠ラス以テ重原ニ徙ルノ際ニ至ル

武術 兵學、弓、馬、槍、劍、砲術、柔術 ハ每歲五月九月本城内ニ於キテ藩主自ラ檢査シ優等ノ者ニハ褒賞ヲ與フ其他ノ免許皆傳等ノ節ハ特ニ金員ヲ與フ但文武共入學ノ時禮服ニテ師家ヘ回禮シ其ノ他正月發會ノ時禮服ニシ其ノ式アリト雖モ今詳記シ難シ

左氏傳

杜注林註可參見近世有以左氏爲小說祖者其說雖過當亦有所見然至文章則其妙絕古今自爲一家欲知首紫者就左繙見之輪講討論宜精細

紀記歌集、祝詞考、大日本史、溫公通鑑

以上二書卷帙浩穰非旬月卒業則宜結社對讀而後經傳史子文賦百家目觸耳聞者隨見隨解不須人指揮而自立意見入文章入經濟入洋學從其性所長要不泥虛言學問事業不相岐耳

以上三等課程卒業者期以二年而業不熟者固雖在教授罪亦生徒怠惰有致之不可不相與留意焉

時間 八時ヨリ十二時ニ至ル但輪講ハ便宜其ノ日ヲ定メ二七四九或ハ五十三八又ハ隔日ノ類ヲ云フ午後一時ヨリ四時ニ至ル

學科學規試驗及諸則 學科ハ和學漢學試驗ハ每月小試驗ヲ行ヒ春秋大試驗ヲ行フ其規則及ヒ生徒訓條罰則寄宿法褒賞法

藏書法等アリト雖モ今考ヘテレス 武術唯馬術ノミ猶存シ調馬司之ヲ掌ルハ改革シテ一ニ兵事トシ其式佛制ヲ用ウ但發會ノ式文武共之アリト雖モ詳カナラス入學ノ時禮服ニテ師家ヘ回禮ノ式ハ全ク廢セリ

職名及ヒ俸祿 監督權大參事之ヲ兼ヌ一員 一等教授二員 二等教授三員 三等教授三員 判事一員 教授試補四員

世祿ノ外官祿アリト雖モ其ノ概額知ル可ラス

身分取扱ハ監督二等官等知事ヲ一等トシ以下八等ニ分ツモノ也一等教授以下教授試補マテ二等ヨリ五等ニ至ル

職員概數 教員十二名 事務員一名 給仕一名

生徒概數 通學生百三十餘員 寄宿生二十員餘但定員ナシ經費ハ自辦タリト雖モ半ハ藩ニテ之ヲ助ク

束脩謝儀 並ニ廢シテ息ム

學校經費 校用ノ諸費ハ盡ク藩費タリト雖モ其概額詳ナラス

藩主臨校 講義日ニハ藩知事臨校シ生徒ト共ニ經書歷史ヲ輪講ス又大試驗小試驗ニハ藩知事必臨場ス

祭儀 聖廟ナシト雖モ每歲開校ノ日聖像一幅ヲ掛ケ釋奠ス教授以下順次禮拜シ畢リテ教授經文ヲ講スル福島ノ例ノ如シ

學校構造及建物圖面 轉封後日淺クシテ學校ヲ建築スルニ至ラス暫用達共有館ヲ借ル故ニ構造建物圖面之ヲ略ス

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 學校ニテ出版翻刻セシ書籍ナシ藏書種類部數今考案シ難シ

舊半原藩

沿革要略 明治二年重原ニ徙ルノ後舊藩知事板倉勝達學事ヲ擴張セント欲シ舊水戸藩士石川部平ヲ祿シ一等教授トス其ノ他藩士中文學アルモノ數名ヲ撰舉シ以テ學制ヲ改革ス

教則

經傳 經是一生事業模範最不可不研究義理精微然而如注脚則曰訓詁曰理學甲是乙非其書充棟糟粕居半雖有折中者亦是子莫中我誰適從見世變從人情以今考之宜做陶潛讀書法不然則終身兀々唇朽齒落無復立功之暇竟以一腐儒終爲可惜耳學者不可不爲豫之地

歷史 凡讀史之法如身在其世處其事而策之畫之顧得失如何耳不啻專涉獵石勒嘗聽讀漢書至酈食其勸立六國後驚曰此法當失何以遂得天下及聞張良諫乃曰賴有此耳夫有爲者彼胡人且然矧生神州曉禮義辨道理者乎讀史之業至此則所謂推倒一世智勇開拓万古心胸者何難之有

子類 王道廢而雜說出蓋賢人君子恤時憂世欲濟一時之弊也亦是一家言業終三等課者不可不讀然其爲書也有純有駁不可一例爲法論富強之要管孟爲上乘如莊列亦以異端排之不讀則狹陋之見與耳食何異楚辭韓非亦有用之書騷以養忠厚之心韓以益人之意智如孫吳則武弁最可用心者不可不熟讀是其大畧也凡據經傳立宗旨入諸子廣識見則庶幾溫古知新和書 和書可讀者極多其用概不過解古言耳如六國史既已用漢語綴之讀漢籍者又能通之所不通者歌詞名物也斯學別有專門二者不可得兼舍歌詞而取文章可也今暫存古今集紀記歌集祝詞考爲教科至于論君臣大義則業既讀春秋未必待平田子而後知

講習生下等課程 句讀生卒課程目次業者得進本位

大統歌、國史略

凡書生明漢籍味國乘者古今通弊故今揭以漢語綴國乘最体裁正當便者使初學知所據而如國乘源語萬葉等別有課程不在三等課內以下做之

講習生中等課程 每日課程以所受輪講會讀溫復數遍卒業一字不失者得進本位

十八史略、元明史略、論語、文章軌範正篇、古今集、保建大記、日本外史、日本政記

以上三書不待教授口授會讀輪講難問所疑討論質之教授目慣心熟而後止

講習生上等課程 課進上等有試以白本讀之不蹉跌則進本位而上等與中等異課勉勵會讀不待教授獨閱有所疑則批之積而成冊臨時問之無復程限

學科ハ漢學ノ一科トス 生徒タル者ハ文武兩道ヲ兼修スルヲ常トス生徒學習ノ期限ハ確タル規定コレ無ク然レトモ幼童ノ學習スル大畧六七歳ニシテ入り十四五歳マテ學フ者ヲ常トス 春秋試驗法ハ毎年二月及八月ノ間ニ於テ兩度行フモノトス生徒賞品授與ノ法ハ每歲試驗ノ節ニ於テ其優劣ヲ判定シ優ナル者ニハ書籍ノ類ヲ授與ス 生徒訓條罰則ハ常ニ校中ニ揭示シテアリシナレト今之ヲ失フ

職名及俸祿(是取調シ書中ノ事項ハ悉皆維新ヨリ學制御頒布マテノ事ニ係ル)

職名ハ學校奉行學監教頭大助教助教句讀是ナリ但學校奉行ハ少參事ノ内ニテ之レヲ兼務シ學監ハ監察ニテ之レヲ兼テ教頭一人大助教一人助教八人句讀二人ナリ

俸祿ハ各員ヘ多少ノ給與アリシモノナレト今之ヲ取調カタシ

職員概數 教員十一人事務員二人門衛一人ナリ

生徒概數 生徒ノ數ハ大略五十人但寄宿生コレナシ

束脩謝儀 束脩ハ生徒一人ニ付舊貨幣ノ一銖トシ謝儀ハ春秋二季ニ於テ舊貨二朱ツ、トス

學校經費 學校經費ハ今考ヘ難シ

藩主臨校 藩主ノ臨校ハ毎年二月三月ノ内ニ於テス此時教官ノ講義ヲ聽聞セラレ生徒中優等ノ者試驗シ褒賞ヲ與フルアリ

學校構造及建物圖面 學校ハ假所ナレハ構造并建物圖面ハ記載スルニ足ルモノナシ且今日ニ至リテハ其詳ナルヲ得難シ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 藏書ノ種類ハ經史子集等ノ一班ノミニシテ其部數左ノ如シ

經類十三部 史類八部 子類一部 集類四部 字書一部

舊舉母藩

學制

學事上ノ諸制度 天明年間學校設立以來ノ諸達等廢藩ノ時簿冊散逸且學規ヲ校內ニ揭示セシモ蠻宇ノ改造等ニ際シ散乱シテ今存スルナシ維新以後藩廳布達ノ散存スルモノヲ左ニ掲ク

規則

一職司不時ニ學校ニ蒞テ文武ヲ巡察ス

學制

學事上ノ諸制度 此項今取調難シ

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ハ藩立學校ヘ入學セシムルヲ常トスレトモ又各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學スルヲ許可セシマアリ 藩費ヲ以テ東京ヘ遊學セシメシハ僅々兩三名ノミ 藩士ト雖モ學校生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルノ制アリ

平民ノ子弟教育方法 農民等ノ子弟ト雖モ修學志願ノ者ヲハ藩立學校ヘ入學スルヲ許可スルモノトス 右ノ外闔藩學事上ノ事項ニシテ著ハレタルモノハ他ニコレナシ

學校 但江戸藩邸内ノ學校ニ係ル諸件ハ何分今取調ニ由ナク故ニ之ヲ闕如ス

校名 學聚館ト名ク

校舎所在地 假校舎所在ノ地ハ本村舊半原村ノ内大屋敷ニアリ

沿革要畧 沿革要畧ノ儀ハ今其根據ト爲スヘキ書類備ハラサルヲ以テ之ヲ叙スルヲ能ハス

教則 教科用書ノ目ハ孝經、大學、中庸、論語、孟子、易、詩經、書經、春秋、禮記、小學、左氏傳、文選、十八史略、史記、唐詩選ノ類

授業ノ方法順序及時間 凡テ教授ヲ爲スニハ唯讀書ノ一科ノミニシテ算法筆道ノ如キニ至リテハ本校ニ於テ之ヲ授ケス 讀書科ハ初メ句讀ヲ授ケ而シテ是業卒リシ后ニ各生員ヲシテ輪講ヲ爲サシムルヲ法トス 句讀ヲ授クルニ始メテ入門セシ生徒ノ學フ初メニ用ウル書物ハ先ツ孝經ヲ授ケ次ニ學庸論孟ト順次ヲ經テ更ニ五經ヲ授ケ五經ノ句讀卒リテ朱子ノ小學句讀ヲ讀マシメ是ヨリシテ文選ヲ讀マシムルモノニシテ此書ノ句讀ニ通シテ之ヲ句讀ノ業ノ卒リシ者トス 講義ヲ授クルニハ句讀ノ業ノ卒リシ者ヲ以テ之ニ充ツ其教授法ハ同一ノ用書ヲ同一ノ時間ニ於テ各生員ヲシテ輪講ヲ爲サシメ毎組會頭一員ヲ置キ之ヲ監督ス其用書ハ小學句讀ト十八史略トヲ並用シ次ニ論孟ト史記評林次ニ春秋左氏傳ノ類ニ進メ兼テ松苗編次ノ國史略及ヒ日本外史等ヲ授ク 時間ノ割ハ午前ニ於テ讀方ヲ授ケ午後ニ至リテ溫習ヲ爲サシメ會讀ヲ爲サシム但會讀ノ課ニハ會頭一員必ス之ニ臨ム

學科學規試驗法及諸則

右條目入學校者堅可相守者也

明治二年三月

一男子八歳ヨリ學問筆道ニ入門可致事但若病氣又ハ子細有之候ハ、其旨幹事へ可申達候事

一文武時間割更ニ可相達事

一學問筆道出席之者欠席之節斷可申達候事

一五十歳以上文武共可爲勝手次第事

一文武共輕卒タリ共執心之者ハ出席可致事

一正權少參事爲監察不時見廻候事

明治二年十月

學母藩

明治三年十月三日達

一學校學問筆道其外諸藝術皆出席以下百五十日以上出席之輩御稱美向舊來之通

明治三年十一月十三日達

一學校以來皇道寮ト相唱候事但同所脇御門ニ皇道寮ト札揭示講釋日割等モ可相示候事

一同所以來新ニ皇道寮ト相唱國學數學稽古所ニ相定候事但當分刑法所是迄之通

一公廨所之有司以來皇道寮ニテ人才教育ノ上御撰擧ニ相成候間此旨篤ト可相心得候事但大少教授之内ヨリ御拔擢ハ猶更之事

一學問高弟ノモノハ幹事ヨリ生徒頭取等申付助教爲致候節ハ一應少參事へ可相伺候事但月給人才ニ從テ之ヲ定メ常寮入費料ヨリ可差出候事

明治四年九月晦日達

一學制御變更東南兩校共閉校中ニ付追テ學制被仰出候マテ當分假規則別紙之通相達候事

右之通相達候事

辛未九月晦日

學母縣廳

(別紙)

第一條 鄉校入學致度輩ハ父兄又ハ當人ヨリ其戸長或ハ里正之印紙ヲ以テ鄉校取締へ可願出候事但是迄縣校へ入學

一 監察右ニ準ス

一 掌教議事ヲ建白シ諸有司闔藩有司之輩獻議

一 十ノ日間對

一 三ノ日講筵貞觀政要

一 七ノ日九時ヨリ掌教學校ニ於テ講釋生徒聽聞

一 四八ノ日四時ヨリ九時迄會讀

一 生徒五時ヨリ素讀舊ノ如シ九時ヨリ八時迄小生復讀教授助教四五輩相告語督責ス

一 復讀督課教授助教一人生徒若干人ヲ教育ス一句ヲ期トナシ一句訖レハ他ノ教授助教ニ讓リ循環始メニ復ル其高座

助教督課シ誤謬ヲ糾ス

一 孝悌ノ道ヲ盡シ長幼ノ序ヲ順ニスル生徒ノ曹宜ク服行スヘシ

一 司簿及助教各次ニ人名ヲ記シ字畫必楷正ヲ要ス

一 公事病痼或ハ故アル者掌教ヨリ生徒ニ至ル迄司簿ニ告ケ司簿ヨリ監察又ハ掌教ニ告ケ

一 男子八歲學校ニ入ル若病或ハ故アレハ官ヘ聞シ埃官許

一 掌教已下各句讀ヲ授ケ質問ハ唯掌教ノミ

一 生徒小心翼々トシテ業ヲ受ケ益ヲ請フヘシ

一 讀書咿唔明朗ナルヘシ澁言復語ヲ禁ス

一 生徒十三歲以上俊秀穎脫ノ者勵ミノ爲一口食ヲ賜フ

一 德義英邁ノ者掌教官ヘ聞シ拔擢シテ俸祿ヲ賜フ

一 學校ニ出入スル小學生門關ニ至リ印鑑ヲ受ケ司簿ニ授ク歸ルヲ允サレ印鑑ヲ司簿ヨリ受取門關ニ置テ歸ルベシ

一 偶日四時ヨリ九時迄寬政錄編輯寬政錄トハ寬政年間編輯セシ學母藩士ノ家譜ナリ之ヲ續成スルヲ云教授助教草稿ヲ起シ掌教ノ潤色ヲ經テ毎月成功ヲ官ニ

聞ス

一 十五歲以下勤務閑暇ノ輩必學校ニ入ルヘシ

一 懶惰及ヒ規則ニ倍ク者必籍ニ配シテ官ニ聞ス

一 學業稍進ムモノ必簿ニ記シ官ニ聞ス

學校

校名

天明七年十月舊舉母藩主内藤學文

右近將監

時代郭内ノ大厦

舉母村字樹木臺ニ在ル水害立退所ニシテ士民稱ヲ

以藩校ニ充テ崇化館

ト改稱ス或ハ單ニ學館ト唱フ明治二年十月皇道寮ト改メ明治四年九月學制改正ノ爲メ閉寮同十月更ニ寺刹ヲ假用シテ

郷校ヲ設ク尋テ廢縣ニ際シテ廢校ニ屬セルヲ同五年五月村民協議シテ郷校再興ヲ謀リ額田縣ノ許可ヲ得舊崇化館ヲ以

テ郷校ト改ム即チ今ノ第一學區舉母學校ト稱スルモ是ナリ

校舍所在地

三河國西加茂郡舉母村字樹木臺舊藩主内藤氏城郭内ニ在リ

明治四年十月創設

同國同郡同村字長生淨土宗淨久

寺ヲ假用ス

沿革要略

舊舉母藩立學校崇化館ハ天明七年十月ノ創立ニシテ事館記ニ詳ナリ

學事隆興ノ原因ハ天明年間舊舉母藩主内藤學文深ク儒學ヲ崇信シ伊藤東涯及善韶ヲ師トシ屢善韶ヲ京師ヨリ聘シテ專

ラ經義ヲ學ヒ藩士ヲ獎勵シテ子弟ノ就學ニ便セント善韶ト謀リ始テ蠻字ヲ興シ盛ニ力ヲ教育ニ盡ス藩士普ク學ニ向テ

一時藩風大ニ振フ攝津守政峻山城守政成丹波守政優共ニ文學ヲ好ム政優最モ儒術ヲ崇ヒ本多茂一郎秦壽太郎等ヲ聘シ

テ經史ヲ講シ學事ノ旺盛ヲ謀リ儒臣ニ竹村悔藏川西格輔アリテ一時文運ノ隆盛ヲ致セリ事函洲遺稿等ニ散見セリ政優

卒シテ後文運大ニ衰ヘ唯儒臣ノ生徒ニ句讀ヲ授クルノミ明治二年三月學制ヲ改正シテ普ク四民ノ就學ヲ促ス同四年教

則ヲ改正シテ學事ノ旺盛ヲ謀ルモ尋テ廢縣ニ際シテ其結果ヲ視ルニ至ラス

學校設立ニ盡力セシ人物アルヲ視ス藩主内藤右近將監及重臣高木十左衛門景福川西彌一兵衛庸行等專ラ學事ニ注意シ

テ伊藤善韶ヲ招キ堀内立藏守本ヲ採用シ崇化館創設ノ事ニ從テモ事蹟ノ著シキモノナシ内藤政共伊藤善韶書スル處ノ

館記一軸ヲ藏ス別ニ掲テ其一斑ヲ示ス

教則

崇化館設立以來專ラ古義學ヲ唱ヘ伊藤善韶及ヒ門人堀内立藏守本澁谷桂助義行等迭ヒニ教員ニ列シ一定ノ教則ナキモ

孝經四書五經ヨリ左國史漢ノ類ヲ授ク筆道ハ本目流尾州ノ人本目庄右衛門ヨリ起ル算法ハ中西流ト定ム天保年間川西潛儒官ニ列シテヨ

リ朱子學ヲ唱ヘ學風一變シ小學近思錄四書五經ノ類ヲ授ケ書類ハ專ラ藩士中ノ稍該技ニ達スルモノヲ撰テ教授ニ充私

塾ヲ設ケテ之ヲ授ケ藩主教育ノ事ニ干渉ナキモ毎年勉強ノモノアレハ藩主ヨリ賞與スルヲ例トス明治二年十月始テ教

則ヲ定メ讀書皇學習字專ラ持明院漢學習字流ラ學フ算術ヲ併セ授ク同四年十月教則ヲ改正シ專ラ皇學ヲ授ケ併テ漢籍ヲ教ユルモ歴史ヲ主

致來候輩ハ印紙ニ不及名前書丈可差出候事

第二條 入學之日正服羽織袴或ハ白第八字出校取締ヨリ校中規則申渡印鑑授ケ可申候事

第三條 入門式ハ扇子壹箱代銀貳匁相納或ハ富有之輩學資金相納候テモ不苦候事

入校之輩ハ校費トシテ毎月青銅貳拾匁ツ、相納可申候事

第四條 有志之輩家之貧富ニ應シ學資金相納候ハ、永久積立利金ヲ以テ月々之紙筆ニ充候事但資金上納之輩ハ姓名

校中ニ揭示候事

右之通

學業上達ノ者祿税免除等ノ事 祿税免除等ノ制ナシト雖モ學業上達ノ者ヲ撰ミ官費ヲ給シ修業ヲ命シ或ハ卒伍ヨリ不

次ニ拔擢シテ高祿ヲ與ヘ草莽ヨリ採用シテ儒官ニ列スル等ノ特例アリキ

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ子弟年齡滿七至レハ必ス入學シテ讀書算術習字ヲ學ハシム其後算術習字ノ二科ハ

各自ノ望ニ從ヒ師家ニ就テ學フトス天保年間ヨリ午前漢籍ヲ學ヒ午後師家ニ就テ溫習シ習字ハ藩士ノ書ヲ能スル者

ニ依頼シ之ヲ習フモ算術ヲ習フモノ最モ稀ナルノミナラズ士族ハ小吏ノ所業ト蔑視シテ更ニ學フヲ愧ツルノ弊アリ漢

學ノ一科ハ藩主ヨリ干涉スレモ其他書算ノ如キハ自由ニ任放シテ各自ノ好ニ從フ尤入校ヲ許スハ徒士席以上ノ男子ニ

限テ輕卒平民ハ入校ヲ禁セリ

藩費ヲ以テ他國ヘ遊學ノ事 藩士ノ特別勉學ノ者アル時ハ學資ヲ給シ他國ヘ遊學ヲ命スルモノアリ凡師家ノ束脩謝儀

旅費等ヲ給シ或ハ修業料一口食又ハ二口食ヲ給スル等古來定格ナシ平素勤學ヲテ將來儒官ニ列スヘキ目的アルモノヲ

疎テ修業ヲ命ス其給額ノ如キハ各自異同アリ

平民ノ子弟教育法 平民ノ稍資力アルモノハ寺僧或ハ村中能書ノ人ニ依頼シテ專ラ習字ヲ學ハシム就學年齡ニ定例ナキ

モ八歲以上ヨリ十二三歲ニシテ止ム入學ノ日ハ二月初午ノ日ヲ慣例トス生徒ノ望ニ任セ習字ノ餘暇ニ童子教實語教

ノ類ヲ併セ教ユルモノアリ有志ノ徒ニシテ最モ特拔ノ生徒ハ四書古文眞寶唐詩選ノ類ヲ授ク明治二年三月始テ士民普

ク入校ヲ許スモ古來沿襲ノ久シキ平民ノ子弟ハ大ニ就學ヲ厭ヒテ入校ノ徒ナシ是ニ於テ一時閉校シテ村中便地ニ郷校

ヲ設ケ始テ平民就學ノ緒ヲ啓ケリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ト定ムルモノナシ各村僧侶神官或ハ村中ノ稍書ヲ能クスルモノ父兄ノ需ニ應シテ習

字及ヒ往來短歌ノ類ヲ授クルノミ渾テ生徒ヲ教育スルハ唯師家ト父兄ノ相對ニシテ里正等更ニ干涉スルコトナシ

テハ必出席スルヲ例トス 明治二年三月輕卒モ普ク入學ヲ許シ男子八歳ニ至レハ必ス學ニ就カシム若シ病氣或ハ事故アルモノハ藩廳ノ允可ヲ俟ツトス

試驗法 定期試驗ノ法ナシ毎月六ノ日文武懸^{日代役ヨリ}出校シテ勤怠ヲ檢査ス 天明寛政ノ間一年二回藩主或ハ重臣代テ臨校シ生徒ノ學業ヲ試ム特別優等ノ者へ書籍等ヲ賞與ス 試驗法ハ各自ニ一名ツ、試験ノ席コ進ミ半葉或ハ一葉ヲ素讀或ハ講義ヲ爲ストスレバ豫メ其讀ムヘキ處ヲ定メ復習シテ誤謬ナキヲ要セリ明治四年藩主内藤文成ノ臨校試業セシアルモ試験ノ法ハ渾テ舊慣ニ仍レリ

生徒賞品授與ノ法 一ヶ年勉強ノ生徒ハ翌年正月廿一日賞與ヲ行フヲ例トス 賞格左表ノ如シ其他特別勤學ノ士ハ書籍或ハ藩主徽章ノ衣服等ヲ賞與スルヲアリ

賞 格 表			十五 歲 以下		十 五 歲 以上	
二百日以上出席	半紙一束	天保十二年以後渾テ半額ト定ム	金百疋	嘉永年間ヨリ儉約ニ付廢止ス		
三百日以上出席	同 二束		金貳百疋			
皆出席	同 三束		金三百疋			

生徒訓條 天明七年十月達明治二年三月同十月口達同三年十月達同四年九月條規ヲ定ム天明年間ノ達散逸シテ之ヲ詳ニセス其他ハ別冊ニ記ス

入學儀式 士族ノ子弟年齡八歳ニ至レハ父兄豫メ師家ニ就テ入校ヲ約ス正月八日ニ至レハ父兄其子弟ヲ携ヘ^{入校ノ本人ハ禮服ノヲ}師家ニ詣リ束脩ヲ行ヒ師弟ノ禮ヲ執ル然ル後父兄同行シテ師範家ヲ回禮スルトス其日教員ヨリ何某入校ノ旨ヲ文武掛ニ通報セリ

職名及俸給 文武懸無定員^{日代役ヨリ兼ヌ}儒者^{藩例ニ役人席チ内禮席ト唱フ即チ内禮席壹員、同見習}學^{席格ノ定ナシ儒者欠員ノ時之ヲ設クレバ或ハ特別勤}ヲ給^{助教無定員}席格ノ定ナシ^{年未童子間}一部ノ代金ニ米ヲ給セリ

明治二年三月職司^{政ヨリ兼ヌ}掌教三員^{一員ハ用人ヨリ兼テ授業ニ關スルナシ月俸金五圓}同年十月藩制ノ改正ニ際シ監察一員^{少參事ヨリ兼ヌ}幹事一員^{大屬ヨリ兼ヌ}大教授無定員^{月俸金五圓}少教授無定員^{月俸金三圓}寮掌二員ヲ置ク

トシ經書ハ孝經論語ヲ用フルノミ教則悉ク散逸シテ今之ヲ詳悉スル能ハス

授業方法 生徒各自ニ書冊ヲ携ヘ本日ノ到着ニ從ヒ教師順次ニ甲生ヨリ其前ニ進メ前日授クル處ヲ復習セシメ更ニ業ヲ授ク復習數回其熟知スルヲ竣テ又乙生ニ授ク教師一員ニシテ凡生徒十名以上ヲ負擔ス算術ノ授業モ粗之ニ準ス

習字ハ一齊ニ習熟ヲ要シ教師各自ニ運筆ノ法ヲ授ク凡一月三回淨書シテ其優劣ヲ判シ品評ヲ付ス臨本ハ草体伊呂波名字村名簡短ノ書牘短歌往來ノ類唯教師ノ意見ニ任ス 生徒ニ學業優劣ノ等級ナシ校中ノ座次ハ専ラ父兄ノ資格ニ

應シ各自席ヲ別チ班位ヲ定ム明治二年三月父祖蔭襲ノ弊ヲ廢シ年齡ヲ以テ座次ヲ定メ授業法ヲ改正シ素讀ノ授業ハ舊ノ如シ午十二時ヨリ二時迄ヲ復習時間ト定メ教授助教ノ内四五輩相告語シテ督責スルヲ授業ハ教師一人ニテ

生徒若干員ヲ負擔シ之ヲ教授ス一句毎ニ循環交互シテ生徒ヲ換ヘ相督課シテ授業ノ誤謬ヲ糾ス渾テ質問ハ掌教ニ限リ助教ハ句讀ヲ授クルノミ 筆道算法モ凡生徒ノ優劣ヲ判チテ一齊ニ教授スルヲ要ス淨書ハ三八ノ日ト定ム

時間 學校設立以來毎日午前八時ヨリ十時迄素讀午前十時ヨリ十二時迄十五歲以上生徒講義 毎日午前十時ヨリ十二時迄午後二時ヨリ四時迄筆道算術ヲ學フ文政年間ヨリ筆算ハ家塾ニ就テ學フトス 毎年正月八日開校十二月廿日

閉校 休日毎月四九ノ日家塾ハ朔日十五日廿八日五節旬七月十三日ヨリ十五日ニ至ル氏神祭日
明治二年教則改正後課業時間左表ノ如シ但休業ハ毎月五十ノ日ト定ム

午前八時ヨリ十時迄			午前十時ヨリ十二時迄			午後二時ヨリ四時迄		
日	毎		筆道	漢學復讀		筆道	算術	
	漢學	皇學		筆道	漢學		筆道	算術
筆術	四八ノ日會讀	三七ノ日講義	皇學同上	算術				

學科 漢學算法筆道ノ三科アリシヲ文政年間ヨリ筆算ハ各自ノ好ニ任セ家塾ニ就テ學フトス算術ハ士族以上學フモノ稀ナリ明治二年三月漢學筆道ノ二科トシ同年十月皇學算術ヲ加テ四科ト爲ス

學習期限 士族ノ子弟年齡八歲ニ至レハ正月八日ニ入學スルヲ例トス 十五六歲ニ至テ四書五經ノ素讀ヲ了レハ多クハ退學ス篤志ノ士ハ二三十歲ニ至ルモ孜々トシテ奮勵スルモノアリ藩制ニ渾テ藩主ノ見分試驗等ニハ年齡五十歲マ

行の心得にても却て不孝に陥る事可有之譬へは孔子の弟子冉有季氏に仕へて忠臣なりしか爲之聚斂して附益之と論語に見へたり是忠臣たらん事を欲して却て不忠に成行たるなり冉有の學者すら如此の心得違あり況して不學者をや又書物を讀されども正直にさへあればよろしきと心得たる者あれども不學にして正直の道理の知れる者に非ずたとへは微生高或人の爲に醢を隣に乞か如し又不學にては人情の修理を知る事難したとへは冉子子華の母の爲めに粟を請か如し又文盲にて信義といふ徳業を知る事成らずたとへは父羊を盗む子之を證すか如し以上數件皆道理の暗きより起りたるものあり凡士たる者不學文盲にては士とは謂へからずたとへは武藝上達したればとて忠孝の志不立時は却て武勇己に害をなす事あり孔子曰好勇不學は其弊や乱なりと教給ふ故武士たるものは道理を明め志を立てる事を先務とあすしされは素讀のみ卒業したればとて宜しと心得へからず各無油斷出精し略經義道理を相辨候迄上達可有之事

一 廿五歳迄に諸武藝の中一藝は目錄を許さる様に上達可有之事

一 君上を尊敬し忠節の心を相守可申事

一 御用向又私用たりども他行せし時は君父を恥しめさる様能く會得致すへき事

一 父母に事へて孝道を盡すへき事

一 貴人老人に事へて失禮あさよふ謙遜して教を受へき事

一 人の善事を慕ひ必ず己にも行ふへき事

一 過を人より聞たるときは直に改へき事但人の過を見て伏藏する事あく深切に告げ知せ相互に助け合ふへき事

一 禮義を相守り容儀を正して貴人の前は勿論朋友の前にては不作法に高笑或ハ扇遣等を謹むへき事

一 人の短を言ふ事なく己か長に誇るへからず

一 諸藝上達の人は假令己より輕輩たりとも賤むへからず

一 朋友の交合に信義を相守り互に譎り欺く事かりそめにも有へからそ一家中皆兄弟の如きものあれば上下無隔意相

親睦過惡あらはねころに告諫め善行を勧め申へき事

一 他家は勿論我家にても酒食を縦に成すへからず大食大酒は病根と成る者あり若病氣等相起れば君父へ忠孝を盡難

し且酒は狂藥にて其爲に家を亡し恥辱を受たるもの古今歴然たりよろしく省察すへき事

一 童子輩行儀不正にして人柄悪しくかさつにて武家の風儀を失ひたる者多し能々行儀を相守り其師匠々々の教誨を

職員 儒者一員見習一員

儒者欠員ノ時之ヲ設ク或ハ儒者見習併セ置クコアリ

助教共ニ定員ナシ同四年十月郷校ヲ設ケ皇漢學教師各一員習字教師二員算術教師一員ヲ置ク同五年五月有志者協議シテ郷校ヲ再興シ漢學教師五員習字教師三員算術教師四員ヲ備フ

生徒概數

藩士ノ子弟多キハ五六十名少キモ三十名ニ下ラス明治二年三月輕卒ニ至ル迄入學ヲ許ス同年十月平民及女子

ノ入學ヲ許スモ未タ入學スルモノナケレハ一時閉校シテ更ニ郷校トシ頻リニ平民ノ就學ヲ促ス同五年五月生徒ノ數ヲ檢スルニ十五歳以上三十五名十五歳以下三十九名アリ皆男子ノミニシテ未タ女子就學ノ機會ヲ得ス

束脩謝儀

束脩ハ扇子箱神酒或ハ神酒ノミ各自ノ意ニ任ス明治二年三月扇子箱代金未タ定ム家塾ニ入ルモノハ家ノ貧富ニ應シ七月十二月ニ謝儀ヲ贈ルモ定則ナシ明治四年十月一人ニ付月謝金貳錢ト定メ毎月之ヲ收ム

學校經費

學校經費ノ定額ナシ筆紙墨薪炭等毎月欠乏ヲ竣テ藩費ヲ以テ之ヲ支給ス書籍ハ藩主ノ寄附ニシテ借覽ヲ許ス

明治二年十月必需ノ書類數部ヲ藩廳ヨリ附與ス廢藩ノ際額田縣ヘ納ム

藩主臨校

天明寛政ノ間藩主内藤學文同政峻等年々臨檢スレモ以後中絶セリ明治四年三月廿五日藩主内藤文成臨檢シテ

生徒ノ受業ヲ視ル

祭儀

聖廟ノ設置ナシ天明年間創建チ企テ表門ヲ建テ遂ニ中止ス校中祭壇ヲ設テ毎年八月中丁ノ日藩主親シク祭典ヲ行

ヒ藩士ノ參拜ヲ許ス祭儀ハ別ニ釋菜取扱帳ヲ添フ明治二年三月釋典ヲ廢止ス

學校構造及建物圖面 別ニ略圖ヲ添フ

學校ニテ出版翻刻ノ書藏書ノ種類 舊學母藩學校ニテ出版翻刻ノ書ナシ藏書ノ種類左ノ如シ

皇籍三百三十卷 漢籍八百九十四卷 洋籍五卷 翻譯書百九十卷 總計千四百十九卷

舊田原藩

學制

學事上ノ諸制度

文化七年庚午九月藩主三宅康和代諭達書

一御學校入門之輩十八才迄ニ四書五經素讀修業之事

但素讀終り候ても經義不分明にては志不立志立されは士道難辨士道辨されは忠義の心得にても却て不忠に相成孝

無之世に名人豪傑と申者多くは貧苦艱難の中に成り候者に候間銘々篤と相辨へ若輩の者は猶更に親々より能々申諭し出精可爲致候師範世話役の場合にてモ右之御趣意厚く相心得壯年之者へは能々申諭し又幼弱之者へは深切に取立候様可致候第一人氣引立不申候ては志を起し出精候事無之候間頭支配師範世話役方にて人心引起候事第一に心懸け可申候文武出精候に付ては簡易に家事取凌之義第一に候間儉約筋之儀毎以被仰出候通相心得音信贈答土産別吉凶大禮之節并仲間振舞等御規矩に不違堅く相守家内子供之着服髪之飭等近頃心得違之者も有之候に付以來急度心付御法度に不觸様可致就ては儉約筋は可相成丈々席々申合規定相立候様可致候事

士族卒ノ子弟教育方法 創業ノ際諸制規簡畧ニシテ多ク各自ノ意向ニ任スト雖モ子弟八九歳ニ至レハ必ス入學シ讀書ヲ受ケ漸々成長シ專修ノ事業ハ其時間業ニ就キ他ノ時間ハ先輩ノ家ニ就キ其業ヲ修ムル等諸事任意ナルモ後世ニ至リ制度畧整ヒ配付ノ時間ヲ以テ戸主ハ勿論子弟タリトモ諸藝ヲ同一ニ攻究セシメ其他優者ヲ選拔シ藩費ヲ以テ江戸及ヒ名古屋等へ遊學セシメ私費ヲ以テ請フ者ハ何人タリトモ之ヲ許可ス等尤モ特別ノコニテ制規アルニ非ス平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシムル等各自由ニ自由ニシテ別ニ制規アラヌ家塾寺子屋設置ノ制度 別ニ制規ナク何人タリトモ自由ニ開設スルコトヲ得ル

學校

校名 成章館ト稱シ設立以來變更無シ

額 面 之 寫

成 章 館

全 裏 之 寫

此御領之字者
康和公御十二歲御直筆
持參也
講師
萱生 玄淳
佐藤 空透
松岡 直門
上條 覺右衛門
土井 喜左衛門
大島 又藏
槍術
柔術
居合
張出
兵杖
于時文化八年未年七月廿日
工匠當所新町
又五郎
當御館掛リ
萱生源左衛門

忘れぬ様に致へき事

一御學校出席の途中に限らず親兄等の爲に使するとも往來道筋神妙たるへし市上の童子とは一際目立様立派たるへき事但遊戯すればとて市童農兒の所爲あるへからず

一女子共并町在の兒輩と同伴同遊堅無用たるへき事

一少年中は遊藝に心を費し本業を怠るへからず但遊藝はたとへは圍碁双六亂舞茶の湯生花香道詩歌連俳等あり尤本業出精卒業したる上は遊藝たりとも嗜置へき事

一部屋住并童子の中諸藝相勵み御奉公の基を仕立つる事肝要あり然れば應對進退の禮節をも心得へき事あれば其御奉公の基を教らるゝ人は即其業々の師範あれば其恩儀は君父と同様あり左すれり元日五節句に其師範々々へ賀謝すへき事又朔望には其起居安否を伺候すへし左様の中に自ら成人の道を會得すへきもの乎

以上十八條

右之條々急度相守可申若懈怠之者はある時は其場合より深切に相諭し教導補可有之夫にて猶不致者は同列の者より一々文學指南方前へ相達へし指南方にて帳面各一冊宛製し置き其達之趣善惡に限らず相録し月の終には其師範へ帳面を差出すへし師範之を受取御用番へ差出すへし御用番の差圖を以て褒貶あるとき文武獎勵鼓舞の一助たらん乎

安政三年丙辰六月藩主三宅康保代諭達書

質素儉約之儀は毎々被仰出候得者何も承知之事に候得共去秋以來公儀にて外寇之爲武備專一之御趣意にて諸家之雜費可成丈相省候様品々被仰出候得者御家にては萬事御省略御取行に可相成御家中之面々も一際儉約相立御引米多難澁之御時節おから如何様にも相凌ぎ且諸向御人少にて繁多之中にては各志を立て文武之藝事相勵み御小家御人少は被成方も無之只銘々文武に達し候得者何方へ出候ても御家之御名譽に相成人才出來候得者則御興起之基にも可相成殊に致仕官候身分文武之藝道心掛無之候ては其甲斐なく自己の恥のみならず御家之御恥辱に相成又御奉公も勤り候とは難申平常御當番相勤候而已にて御奉公相濟候と申筋無之事は一統承知之事に候得共兎角文武之稽古等閑に相成候故自然志氣不相振心得方も懦弱に相成益稽古事懈怠致し候様成行候當秋御歸城之上諸藝上達之様子被遊御覽候て平生心掛之厚薄御糺も可被仰付候間銘々無油斷出精可致候素より御時節柄にて一統難澁之事に候得共厚く心掛候得り修行之暇可有之筈に候藝事出精致候迎左迄家事之支に相成候筋に無之況て家事之營致候は元身之修行御奉公勤續之爲俸祿頂き候身分上之事を先に致し實意に存候得は假令如何様之難澁繁多之中たりとも稽古の不出來と申事は

○五十畫前、高麗流馬術、全畫後、文學（但シ槍術馬術ハ士人以上ノ業ニシテ兵杖ハ卒ニ限ル）日割外餘課ニ文武別會アリ

右ハ創設以來ノ掟ニシテ後世ニ至リ取捨變更アリト雖モ大略如是ニシテ漸次武藝ヲ廢シ文學ヲ加フル等ノ事アリ學習期限ニ至リテハ逸トシテ程度ナク凡子弟八九歳ニシテ文學ニ入り成長ニ從ヒ一藝毎ニ師範ノ許可ヲ得禮服着用父兄同行ニシテ初メテ其門ニ入り其業ヲ修ムルモノトシ又一定退學ノ期ナク老年ニ及ヒ自ラ出校セス而レハ自ラ年齒ヲ以テ各藝ヲ修メサレハ自ラ耻ツルノ習慣ニ於テ各必ス各業ヲ修メシモノナリ

試驗法ハ春秋兩度文武大試驗ヲ行ヒ藩主自ラ席ニ臨ミ老臣諸有司陪從シ各業師範之ヲ執行セシメ優等ヲ擧ケ之ヲ賞與ス平時唯文學ニ限リ月末毎ニ試問ヲ爲シ優者ヲ褒シ劣者ヲ貶シ校內ニ揭示スル等ノコアリ

職名及ヒ俸祿 學校總裁師範世話役等ナリ諸職員皆本職ヨリ兼務ナルヲ以テ役料扶持米別ニ無シ唯年末目錄ヲ以テ勤怠ニ應シテ褒與スルノミ維新ノ際ニ至リ職名ヲ改メ監事教頭助教等アリ皆專務トシ坐次ヲ定メ俸給ヲ與フニ至ルモ各其業ニヨリ差等アリ一々記ス可ラス

職員概數 學校總裁一員各業師範一員宛各業世話役四五員宛門衛二員

生徒概數 皆通學生ニシテ凡ソ二百人時々増減アリ

束脩謝儀 無之

學校經費 總テ藩費ニシテ凡ソ五百圓左右

藩主臨校 藩主年々春秋兩度ノ試業ニ臨ミ其他臨時出校シテ平日ノ事業ヲ見分スルコアリ

祭儀 校內ヘ聖廟ノ設置アリ二月八月上丁ノ日ヲ以テ先聖先師ヲ祭リ藩主ヲ始メ藩士一同禮服着用拜禮ヲ爲ス諸生揮毫

ヲ掲ケ詩文ヲ奉シ畢テ能狂言ヲ奏スル等各歡ヲ盡ス

學校構造及ヒ圖面 地坪凡七百坪建坪凡ソ八十坪圖面無之

藏書ノ種類 和漢蘭數種ニシテ總計部數凡ソ千餘部ニ下ラサレモ退々減却シ方今僅ニ百餘部存在ス

右其概略ヲ掲クト雖モ廢藩ノ際舊記類悉皆紛亂シ後ヲ其片紙ヲモ餘サス故ニ村老ノ口碑ニ傳フルモノ二三ヲ資リ殊

ニ藩內布令諭達諸則等ニ至ツテハ僅ニ其一斑ヲ舉ルノミ今更搜索仕リ難ク編史ノ資料御參考ニ供ス可キモノ無之候得共聊蒐錄スル如此

校舍所在地 外廓内追手

沿革要略 文化七年庚午九月藩主三宅康和時代創立爾來別ニ盛衰アラサルモ後世ニ至ルニ從ヒ漸次隆興シ慶應二年ニ至リ大ニ隆盛ニ趣キ舊校ノ狹隘ナルヲ感シ増補改築ノ舉ニ及フ文武ノ隆興此時ヲ最トス其時ニ當リ村上定平ナル者アリ下士ヨリ興リ文武ヲ嗜ミ初メテ西洋砲術ノ興義ヲ究メ大ニ武ヲ演ス營生玄願ナル者アリ天資多才文ヲ好ミ武ヲ嗜ミ又俗務ニ通ス渡邊諧性温順ニシテ子弟教育ニ熱心ナルアリ上田疇敏ニシテ學ヲ好ムアリ其他有志輩出ス下ツテ維新ノ前各村ニ村學校ヲ置キ村童ノ教育法ヲ設ケ置縣ニ至リ諸事全廢ニ屬ス其際ニ當リ前ノ諸士等學事ノ一日モ闕ク可ラサルヲ説キ相謀リ義校ヲ立ツ尋テ學制ノ頒布ニ至リ幸ニシテ田原學校ノ如キ繼續スルニ至ル

教則 用書ハ孝經四書五經蒙求古文唐詩選歷史類ニシテ授業ノ順序モ大畧如此ニシテ幼稚ノモノハ專ラ素讀ヲ授ケ成人ニ及ヒ輪讀ヨリ輪講ニ及ホシ毎朝未明ニ始メ五ツ時ニ終リ其他文武ノ餘日ヲ以テ攻究スル等時代ニヨリテ變更アリ

學科學規試驗法及ヒ諸則

定

- 一 諸藝術稽古正月十七日より相始十二月廿日を限り閉會可致事
- 一 毎朝素讀ハ朔日十五日可致休會事
- 一 二月八月釋菜の砌は前日より合て兩日可致休會事
- 一 上巳端午七夕八朔重陽可致休會事
- 一 三社の祭日前より合て兩日可致休會事
- 一 御發駕御着城の節は前日より合て兩日可致休會事
- 一 各藝一藝而已可致休會は其師範の者の差圖によるへき事
- 一 穩便普請鳴物停止之節は可致休會事
- 一 右之條々相守るへき事

文化七年

執事

日割

毎朝 素讀〇一六晝前、法藏院流槍術、全晝後、小笠原流躰形、全夜、直義流居合〇二七晝前、萩野流砲術、全晝後、無比流兵杖〇三八晝前、無念流劔術、全晝後、直心流劔術〇四九晝前、高麗流木馬、全晝後、日置術弓術、全夜、直義流柔術

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令入學式等規則平日校中へ揭示スルモノハ上總國松尾へ移封後明治五年八月廢校ノ際書籍預役ヨリ木更津縣廳有司へ引渡し徴スヘキ書類ナク詳ニ記スルヲ得ス

學業上進ノ者其力ニヨリ一等ノ者へ銀一枚與ルノミ更ニ加役米等ナシ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立校ハ士族ノ子弟八歳ニ至レハ必入學セシム若シ故有テ就學シ難キ者ハ其仔細書面ヲ以テ學監へ達ス卒ノ子弟ハ入學ヲ許サス藩士中意向ニ任セ家塾ヲ開ク者へ入學ス此維新前ノ法松尾へ移轉後卒平民ノ子弟迄モ入學ヲ許ス藩費ニテ遊學スル者ハ四書一部ヲ解シ得ル者ニ非レハ許サス私費ハ之ヲ許ス藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞スルノ制ナリ

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ脩學セシムルノミ藩立校へ入學ヲ請フ者ハ學監教授ト共ニ國史略或ハ十八史畧ヲ試驗シ大意講解シ得ル者ハ入學ヲ許ス農民等ノ學事ニ從事スルヲ禁止スル制ナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ奉行郡宰里正等ノ許可ヲ受ケス他ノ檢束ナク何人タリモ自由ニ開設ス

學校

校名 文武場中ノ門額惣稱ヲ教養館ト稱シ學校ノ稱ヲ德造書院ト稱ス江戸藩上邸ノ校ヲ拭目館下邸駒籠ノ校ヲ曙戒堂ト稱ス松尾へ移轉スルモ亦舊掛川ノ名稱ニ從フ

校舍所在地 掛川城内北門ノ側ニ在リ

沿革要略 舊藩主太田道隆ノ時代享和二年肥後國益城郡ノ儒者松崎慊堂ヲ聘シ教授トセシヨリ學事擴張ス學派ハ初メ朱學年五十ノ頃發明スル所有テ漢唐注疏ヲ參へ折衷學ト爲ス慊堂著書數多有レモ江戸上邸ノ教授海野豫介慊堂ノ門弟ナルヲ以テ慊堂歿後著書類預トナル故ヲ以テ掛川在任ノ者詳悉知ヲ得ス僅ニ三謝詩白鹿洞揭示口解文集詩集接鮮紀事接解瘠語游豆小誌游東陬錄ノ二三部ヲ知ルノミ

教則

一 正月八日ヲ講釋初メト定メ白鹿洞書院揭示ヲ講ス藩主大悟ノ時代熨斗目着用自講ス其後代ヨリ教授ニ代講セシム敎授モ亦熨斗目ニテ勤ム重役ヲ初メ聽聞ノ者皆禮服平日ハ敎授ノミ肩衣ヲ服ス十二月十八日ヲ終リトス

一 講釋用書ハ四書小學近思錄ト定ム折衷學ニ變セシヨリ小學近思錄ヲ廢シ書經ヲ以テ之ニ代フ時間ハ月ニ六度二八ノ

舊濱松藩

學制(缺ク)

學校

校名 克明館

校舍所在地 東高町引馬坂上

沿革要略 弘化三丙午年館林ヨリ封ヲ轉シテ濱松ニ移リ先封水野大監物造營スル所ノ校舍ノ舊貫ニ仍リ之ヲ用ユ但講堂

ハ舊ヲ毀チ更ニ結構セリ

教則 講義毎月六回 輪講毎月十二回 詩文毎月六回 筆話寄宿生毎日

學科 漢學(朱子學)兵學(折衷)

武術 砲術 初メ豐田盛重後西洋流ニ歸ス○槍術 種田○劍術 直眞影○柔術 淺山方集居合 但馬術稽古場ハ校內

ニ之レ無シ

漢學試驗法 第一級 讀得唐本者○第二級 畧經義ヲ解シ得ル者○第三級 會讀ヲ能クスル者○第四級 文義ヲ質問

スル者○第五級 句讀卒業ノ者

職名 文武掛城代 教授三人但内一人ハ江戸藩邸學校預リ 助教六人但内二人ハ江戸 句讀師七人内三人ハ江戸 小使

二人

生徒概數 寄宿生定員二十人 通學生定員無シ

束脩謝儀 束脩藩士ハ扇子市在ハ肴料 謝儀藩士ハ寄宿生二季金壹分通學生歲晚壹朱市在寄宿生金貳分宛

學校經費 每歲金拾貳圓但武術ハ各經費 此限ニ非ラス 每歲營繕費(普請方預リ)

藩主臨校 定期無シ在城ノ年大抵五六回

祭儀 釋奠 春秋兩回 文宣王一座 初獻家老、亞獻用人、終獻教授

文庫藏書 大概一萬三千但三千ハ江戸藩邸校舍ニアリ

舊掛川藩

一兵學弓馬砲術各師有テ修行セシム

一生徒ハ必文武兼修スルヲ法トス

一文學武術トノ比例ハ論孟ノ内一部ヲ解シ及第スル者ハ目錄ニ當シ四書一部ヲ解シ及第スル者免許ニ當ス又四書五經左傳迄ヲ及第シ進シテ都下ノ大家ニ遊學シ右科ヲ研究シ歸國スル者ニ非レハ助教役ト爲ルヲ得ス何トナレハ代講ヲ勤メ教授ヲ兼務スレハナリ維新前ノ助教役其任至テ重シ先教授小崎門藏展四十五年間教授ヲ勤ム當時小崎門藏怡成舊教授助教役タリ安政二年先教授歿シ小崎門藏怡成教授ヲ兼務ス松尾ヘ移轉後助教役ハ四書一部及第シタル者トナリテ甚輕シ此亦時勢ノ沿革ナリ

一生徒學修ノ期限ハ八歳ニテ入學シ廿歳ニ至リ蔭子ノ祿宛行ハレ俗役等勤ムルニ至リ晝ハ其役ニヨリ出校シ難キモ夜ハ閑ナル故ニ假令目錄免許ノ等級ヲ得ル者ト雖モ必ス觀善舎ヘ出校シ猶研究ス別ニ退學ノ期ナシ

一春秋試驗法ハ維新前既ニ改定ス八歳ヨリ十四歳ノ者ハ素讀ヲ試ム藩主ヲ始メ重役平服ニテ臨席シ教授及生徒ハ禮服四書五經ノ内或ハ一冊或ハ一部或ハ全部年ノ長幼勤惰ニヨリ不同ハ有レモ何レモ一冊一部トス見臺ニ向ヒシ時藩主撰題シテ章ヲ令ス藩主出府中ハ重役之ヲ擇ム教授朱筆名簿ヲ持チ批点ヲ記シ無失ナリ一等トシ三失ヲ二等トス四失以上落第トス一等ヘ上中津級三帖二等ヘ一帖賞與ス春秋兩度其釋奠釋菜ノ前ニ試ミ置キ祭儀ノ節校中殘ラス列坐ノ前ニ於テ一名ツ、呼ヒ出シ之ヲ與フ此ハ落第ノ者ヲ勵マサン爲ナリ

一觀善舎ノ生徒講義ヲ試ムル其法素讀ノ式ト同シ但少シク異ナルハ賞ノミ論語一部孟子一部ノ内無失一等ノ者ヘ金二分三失二等ヘ金壹分學庸一冊ノ内無失一等ヘ金壹分二等ヘ金貳朱與フ四書一部無失一等ヘ金三分二等ヘ金貳分與フルヲ法トス

一罰則ハ必正舍中甲乙丙丁戊ト五席ニ分ツ初メハ素讀ノ覺ヘ方手跡ノ善惡ヲ以テ先ツ席順ヲ定ム毎月晦日進歩ニ應シ上下ス命ニ從ハサル者ハ罪ノ輕重ニヨリ捧滿竝立セシムルヲ一時間或ハ半時間トス猶改メサレハ甲席ノ者ハ乙席ニ下ケ乙席ハ丙席丙席ハ戊席迄下ケ改更セサレハ係リ學監ヘ届ケ退校セシム後一兩月經テ改心シ父兄ヨリ再ヒ入學ヲ乞フ者ハ赦シ先ツ下ノ戊席ニ置キ其模様ニヨリ次第ニ上セ舊席ヘ復ス

一始テ入學ヲ乞フ者ハ自身願フヲ禁ス必ス前日ニ紹介ヲ以テ願ヒ出テ二八ノ日朝講義將ニ終ラントスル頃紹介差シ添禮服出校シ師弟ノ禮義ヲ結フ必ス講義ノ朝ト定ムルハ教授肩衣ヲ着用スル故ナリ入門後必ス師範家ヘ回禮ス松尾ヘ移轉後平服トナル

日朝五ツ時ヨリ四ツ時迄トス

一月ニ三度午後八ツ時ヨリ七ツ時迄和書ヲ講ス此皆教授ノ勤ムル所若シ事故アルキハ助教代講ス松尾へ轉封後藩士ノ宅遠隔聽聞人少ヲ以テ此講義二科ヲ廢ス

一月ニ六度四九ノ日午後八ツ時ヨリ七ツ時迄十五歳以上觀善舍ノ生徒左傳或ハ歴史類抽籤ヲ以テ輪講ス教授助教臨席シ其討論可否ヲ決ス松尾へ移轉後二七ノ日ヲ加へ月ニ二度トス

一月ニ十二度二七五ノ夜六ツ時ヨリ四ツ時迄教授助教出校シ觀善舍初心ノ者へ輪講下タ教ヘテ口授ス

一月ニ六度三八ノ夜^{時間前}ニ^{全シ}觀善舍生徒獨見可也講義スル輩ノミ集リ四書五經等輪講セシム其可否ヲ決スル前ニ同シ

一素讀ハ正月九日初メ十二月廿日ヲ終リトス毎朝五ツ時ヨリ九ツ時迄八歳ヨリ十四歳迄ノ者ヲ句讀師役教へ覺へ終テ直ニ教授助教ノ前ニテ清讀ス若シ誤讀アレハ句讀師ヲ呼ビ正誤ス故ニ百名ハ百名皆教員ノ手ヲ歷サル者ナシ講釋ノ朝ハ講義終テ始ム貧生ハ書籍ヲ貸ス

一文會月ニ一度十五日晝ヨリ夕迄トス

一休業ハ月六度一六ノ日文武共休業暑中休ミハナシ

學科學規試驗法及ヒ諸則

一和漢ノ學ヲ兼脩スル前條規則ノ如シ

一洋學ハ松尾へ移轉後校中席ヲ分チ慶應義塾ヨリ教員ヲ雇ヒ入レテ藩主ヲ始メ之ヲ學フ藩主出府後廢ス

一洋算法モ校中席ヲ分チ毎日午後ヨリ夕景迄トス

一筆道ハ亦校中ニ間チ隔テ心正舍ト稱ス書籍預リ役二名舍長役ヲ兼務シ世話役十名觀善舍生中ヨリ命シ隔日ニ舍長一名世話役五名當直シ八歳ヨリ十四歳迄ノ者ニ運筆ヲ教ユ時間ハ毎日朝五ツ時ヨリ七ツ時迄トス午餐後教養館門内チ世話役一名附キ添游步セシム臨本ハ各自隨意ニ引手本トス清書日ハ五十ノ日困窮ノ者ハ器械ヲ貸與ス

一習禮ハ小笠原流仕付方教師二七五ノ日月十二度出校シ晝ヨリ夕迄茶煙草盆ノ出シ方進退坐作元服婚禮折形結形等ヲ教フ

一槍術ハ校後ニ場ヲ設ケ毎日朝晝隔度ニ教フ維新前既ニ廢ス劍モ亦松尾へ移轉後僅一兩年ニシテ廢ス

一柔術ハ毎夜槍劍ノ場ニ於テ練習ス

一游泳ハ八歳以上ノ生徒一六ノ休日ニ教フ松尾移轉後水泳ニ適スル川流ナキヲ以テ廢ス

學事上ノ諸制度

明治元年八月十五日德川家達本地到着其九月八日左ノ布令アリ

今般四ツ足御門内御定番屋敷ニ於テ御國學漢學洋學共御開相成候ニ付有志之者ハ身分ノ貴賤ニ限ラヌ出席修業イタシ候様可被致候就テハ出席手續之儀ハ別紙之通可相心得候右之趣御家來中ハ勿論社寺并又者末々ニ至ル迄不洩様可被相觸候

(別紙)

一始テ學問所エ出席之者ハ朝五時ヨリ四時迄之間銘々名札エ肩書宿所相認四ツ足御門ヨリ入學問所御玄關エ向持參案内可申入候

一講釋會讀日割等之儀ハ御玄關エ張出有之候間始テ出席之節銘々之志ニ寄且ハ學問之深淺ニ寄教官ヨリ差圖可致候

九月

十月十二日學校移轉ニ付左ノ布令アリ

元御定番屋敷ヲ學問所ト相達置候處御都合モ有之候ニ付横内御門内元勤番組頭屋敷ヲ以來學問所ト相定來十五日假御開相成候間子弟厄介并又者市在末々ニ至ル迄漢學修様相願候者ハ同所御玄關エ罷出組頭并調役等エ可被承合候尤國學洋學之儀モ前同所追而御開相成候事

十月

十一月五日洋學開校ニ付左ノ布令アリ

今般府中學問所ニ於テ英吉利佛朗西和蘭獨逸四ヶ國之學問來十五日ヨリ御開相成候ニ付御領地内武家社家出家百姓町人并其子弟厄介召仕等ニ至ル迄志アル輩ハ學問所ヘ罷越稽古可致事但書物無之者ハ於御場所可承合事

一御國學漢學洋學上達之者ハ假令卑賤之者タリ共御取立可相成筈ニ付其心得ニテ出精可致事

一入學之儀ハ三ヶ月ニ可爲一度事

一稽古之時刻ハ九ツ半時ヨリ七ツ半時迄ニ可限右時刻ニ後レ出席之者ハ稽古不相成事
右之趣向々エ不洩様可被相觸候

十一月

明治三年七月靜岡沼津田中小島掛川濱松新居橫須賀相良中泉ヘ小學校ヲ建設ニ付左ノ布令アリ

職名及俸祿 學校奉行ハ重役一名順番ニ兼務ス學監及教授等皆家祿有テ專務スルカ故別ニ役料等ナシ松尾移轉後ハ學監月給拾圓一等教授拾圓二等教授八圓助教五圓心正舍長五圓句讀師三圓世話役三圓買物方三圓下働キ貳圓且坐席ハ圖面ノ如シ

職員概數 學監二名、一等教授一名、松尾へ移轉後三名、心正舍長兼務二名、句讀師十名、世話役十名、門衛一名、小使一名、松尾へ移轉後助教二名ヲ置ク門衛小使ヲ廢メ更ニ買物方二名、下働キ二名ヲ置ク此ハ寄宿生徒ヲ許スカ故ナリ因テ教授一名順番ニ宿直ス

生徒概數 維新前心正舍通學生凡百貳十名餘觀善舍通學生凡三十名餘維新後學前頗布前ハ卒平民ノ子弟迄入學ヲ許セシヨリ心正舍通學生百六十名餘觀善舍通學生五十名餘內藩費ヲ以テ寄宿ヲ許ス者三十名ト限ル

束脩謝儀 束脩ハ入學ノ節扇子箱一ツ謝義ハナシ

學校經費 一周年ノ學費ハ學事ノ張弛ニヨリ少シクノ増減ハ有ト雖凡一切藩費ニテ書籍購求賞與薪炭等ニ至ル迄其係ヨリ支給スル故ニ審ニ知ヲ得スト雖凡教養館費用一周年金千三百圓ト豫定シ書籍ヲ初メ生徒演技ノ韜竹及檜木ヲ破損ノ度毎之ヲ給ス藩士ニ賦課スル制ナシ

藩主臨校 二八ノ講釋ハ必藩主臨校聽聞ス午後ノ臨校ヘモ折々臨席シ其勤惰ヲ檢ス

祭儀 凡一尺二寸許唐金聖像一軀ノ厨子校中奥ノ間ニ安置シ平生簾ヲ垂ル二八月中丁ニ奠菜ヲ行フ儀式全ク備ハラズ唯僅ニ簾ヲ存スルノミ其大概ハ助教簾ヲ捲キ扉ヲ開ク教授香ヲ焚キ酒ヲ酌ム終テ饅頭或ハ柿ヲ備フ而後教授ヨリ次第僅ニ神酒ヲ始メ供物ヲ拜戴ス神酒ハ觀善舍中輪講スル者以上トス以下供物ノミ學監ヲ始メ出席人皆禮服祭リ終テ學監ヨリ重役へ達ス此ノ日詩文國歌等互ニ各社ヲ結ヒ適意ニ夜分迄游フヲ許ス八月廢校ノ節厨子ヲ始メ祭器等殘ラス縣廳有司へ引渡ス

學校構造及ヒ建物圖面 (缺ク)

出板翻刻セシ書籍ハ開成石本十二經孟子大戴記此ハ舊佐倉藩ト割合ニテ上梓ス其外海錄碎事影宋本爾雅五倫口解等アリ其餘知ラズ藏書種類亦書籍預ヨリ廢校ノ節有司へ引渡ス

舊靜岡藩

學制

第十二條 總て童生怠惰不行儀等の儀は其責父兄に係り候儀に付願短冊差出候者精々折檻等相加候儀勿論之事
第十三條 小學校内にて貸渡之書籍器械等取扱不宜より破損に及候節は其破損之大小に準し小學校頭取より償申付候間右之段其父兄より兼て厚く可申聞置事

第十四條 總て小學生之内にて歳之長幼入學之早晚等に隨ひ小學生世話掛并順番行事等申付候は小學校頭取之權に有之其撰に當り其順に廻候者異儀なく師命を奉し可申事

學課之事

第十五條 小學之課程は左之通

讀書、手習、算術、地理、体操、劍術、水練、講釋聽聞

右日課定書之通修業可致事

初級 讀書 三字經、大統歌、逸史題辭、孝經、四書○手習 いろは、片假名、數字、名頭、國盡、往來物○算術 數字、

加減乘除

一級 讀書 五經○文章 私用、公用、○算術 度量、權衡、諸等加減乘除分數全部○皇國地理○劍術

二級 讀書 十八史略、國史略、元明史略○文章 設題私用文○算術 比例式全部

三級 讀書 三史略大意講解、英佛語學初步○文章 設題公用文○算術 開平、開立、雜題、復習、算盤用法

第十六條 讀書手習算術の四級有之勉強致し上級に登候様可心掛地理は第一級より相始洋語ハ第三級相濟候後より相始可申事

第十七條 第三級之小學生進方宜しく課業表中に載候課程よりも分外に抄取候者の其望に任せ論孟之輪講左傳蒙求等之會讀英佛語學は會話之類さて算術の級數對數表之用法等教授致し可遣事

第十八條 体操の休日を除く之外日々一小時演習致し身体之強壯を養ひ可申講釋聽聞は日曜日朝毎に出席致し德義之方向を辨候様可致此兩科は必らず校内にて修業可致水練は毎夏土用中稽古可致右は別に規則書有之候事

第十九條 讀書手習算術之三課は若其父兄自宅にて授業致し度旨相願候歟又は漢人之法帖名家之墨帖等爲學度相願候時は相許可申に付右之仔細願短冊中へ書込可申事

第二十條 自宅にて稽古致候迎後年に至文武學校入相願試業請候節右に托し小學課表中之定課を否み候儀不相成候事尤小學試業之節は字様の雅俗を不論只字畫之正否と公私用文試題之内にて文意貫通とを主にいたし候事

此度静岡沼津其外各所ニ小學校御取設相成候ニ付御藩中士族子弟厄介等ニ至ル迄入學致シ孰モ別紙掟書之通堅相守出精候様厚世話可被致候尤小學校頭取以下教授方人撰其外學事都而學校掛向山黃村河田熙西周取扱タルヘク候御入用筋之儀ハ其場所頭々ヨリ右三人ニ申談取調申立候様可被致候事但家來農商ニ至ル迄有志之者ハ入學御差免可相成事

(別紙)小學校掟書

小學生之事

第一條 小學校之儀は最寄住居士族之向并最寄在方町方有志之者共通稽古之爲御設有之候事

第二條 童子七八歳にて素讀手習致候様相成候者は其父若父無之者は兄又は後見人又は母親にてモ小學校頭取へ別紙案文之通願短冊三枚ツ、差出し入門相願童生に相成候事但右願短冊之内二枚ハ小學校頭取より正月七月二季に取括静岡沼津兩學校頭取に差出し一枚ハ其小學校扣たるへき事

第三條 十八歳以下之者は小學生と相唱十九歳以上之者は小學員外生と相唱可申事

第四條 小學校稽古人修業料并謝禮之儀其父兄後見人又ハ母親より左之通可相納事 入門之節束脩金百正 毎月修

業料金壹朱ツ、 盆暮教師一統へ謝禮金百正ツ、

第五條 貧窮に付弟子厄介のため修業料其外難相納もの士族は頭支配農商は支配地方役ハ可願出候左候ハ其頭支配より小學校頭取に書付を以て相斷役所金之内より其者ハ修業料納方相辦候事

第六條 各所小學校修業人之儀自然居住替致候節は是迄罷出居候小學校頭取より之送狀持參候へは移住先之小學校へ入門之節別段入門料差出に不及候事

第七條 小學修業は年期無之事尤學校資業生入相願候ものは十八歳限之事

第八條 机書籍筆紙墨硯等は自分入用之事但十八史畧以上之書籍は殊に寄候ハ場所限貸渡にも相成且又紙筆等は拂渡にも相成候分有之候間拂下ケ相願候とも勝手次第之事

第九條 貧窮之筋申立別段願書差出候者は右入用品等惣て貸渡に相成候儀も有之其節は右小學生掃除番并に居殘之役等相心得可申事

第十條 總て修業人進退は小學校頭取初教授方之差圖に隨ひ行儀正敷騒ケ敷儀無之様可致事

第十一條 若怠惰亂暴之所業又は師命を奉せざる事有之節は捧滿默坐逗校禁足或は罰格之賤役等不可逃事

第三十三條 兩學校頭取より教授方之内相撰不時見廻之者差出候事も有之候間兼て其段心得可罷在事

第三十四條 盆暮謝禮并入門之節束脩之外謝儀は一切請取申間敷事

第三十五條 小學校授業之暇宅稽古致候儀不苦候得共五人迄に限候事

第三十六條 稽古人百人以下之小學校にては頭取又は教授方之内壹人校内に住居いたし萬事心附可申尤第九條之有

無に拘はらず小學生員外生とも輪番に掃除等爲心得別段湯吞所之者無之事

第三十七條 稽古人百人以上之小學校へは最寄勤番組之内より湯吞所之者壹人申付校内に住居之上掃除使等爲心得

候事尤右之者手當之儀ハ修業料之内より相辨候事

第三十八條 稽古人貳百人以上に相成候は、校内俗務方壹人申付候事

第三十九條 修業料遣拂之儀は日々入用之薪炭を初小學生其外へ臨時之褒賞并校内にて教授方入用之筆墨其外小修

覆に相用猶餘金有之候は、積金に致し置稽古道具等相調候様可致事但校内俗事向之儀は教授方之内月々順番を以

相心得臨時遣拂之品ハ頭取へ申立定式之品は右月番にて取計置候事

第四十條 凡校内之經濟は頭取に委任有之候儀に付月番教授方之取計方綿密に注意致し不都合之虞無之様心掛出納

諸勘定月々明細に取調半々毎に取括毎年正月七月兩度に兩學校頭取へ可差出事

第四十一條 毎年正月七月兩度別紙案書第二之通小學生之行狀學業之進方等委しく相認差出候様可致事

右之條々此度再議之上相定候條當午年正月より施行すへきもの也

入學之節案文

明治三十年正月改正

年 月 日

入學奉願候書付

父兄名

當人

姓名
年 齡

休業之事

第二十一條 定式之休業は左之通

日曜日 五節句 七月十三日より十六日まで 十二月廿一日より正月七日まで 四月十七日 八朔 主上御誕生
 日九月廿二日 鎮守祭禮 二月初午 夏土用中

第二十二條 右之外小學校頭取之見計にて時宜に寄稽古早仕舞又は休業等いたし候事も有之候事

教授方之事

第二十三條 各所小學校之儀ハ靜岡沼津兩學校頭取之管轄にて學業之定課教授法之撰任も右頭取之取捨に有之候得共其外総て校内之諸事ハ小學校頭取之任に有之候事

第二十四條 兩學校頭取より小學校教授方之内にて器幹有之候者を一人相撰小學校頭取を申付総て校内之諸事を令管轄候事

第二十五條 小學校頭取病氣又は差合等にて引籠候節は筆頭之教授方右頭取之代相心得候事尤引籠五十日以上に相成候は、筆頭之教授方より其段兩學校へ可届出候事

第二十六條 右頭取は素讀手習算術体操之學術には拘はらず年齢器幹之二つにて致撰任候事若相當之人無之時は兩學校教授方之内より勤候ことも可有之候事

第二十七條 月々之試業三級之進退等小學生之褒貶賞罰は悉く小學校頭取之差圖に有之候事但笞杖は堅禁制之事

第二十八條 小學校諸學術之教授方は総て小學校頭取之差圖を受銘々受持之學課を教授可致事

第二十九條 諸學術之教授方はいづれも特に小學生之授業而已ならず其進退周旋をも律正し躁雜混亂之事無之樣差圖致し且一々怠惰を點檢し若不行儀之者於有之ハ頭取に申立夫々相當之罰可申付事但頑兇躁嘩妄語忤申候樣之小學生は其願名目人之申談重き罰格にて致折檻候上尙又自悔之意無之候は、放逐いたし候て不苦候事尤致放逐候節は其段兩學校頭取之可相届事

第三十條 諸學科之教授方同心協力總て偏執之念なく教授致候は勿論小學生之進方可成丈一科に偏勝不致候樣心掛可申尤天稟に寄彼に勝れ是に劣り候は自然可有之候得共授業は成丈平等に行届候樣精々可申合事

第三十一條 小學校頭取并教授方病氣之儀は兵學校教授方掟書に見合可申事尤百日以上に相成候得は役儀可差許事

第三十二條 右教授方病氣届は小學校頭取に可差出小學校頭取之病氣届は筆頭之教授方に可差出事

木札

何年何月何日入門

○ 小學生何之誰

第幾級

○ 地名 小學校

燒印

士族卒ノ子弟教育方法 藩立ノ學校へ入學セシムルト雖各自父兄ノ意ニ任セ家塾等ニテ修行スル事ハ禁セシ事ナシ 藩費ヲ以テ米利堅へ留學セシムル者四人自費ヲ以テ留學スル者六人藩費ヲ以テ東京へ留學セシムル者二十三人 平民ノ子弟教育方法 農商工ノ別ナク總テ藩立學校へ入學スルヲ許シ家塾寺子屋等ニテ修業スルハ各自ノ隨意ニシテ 農民等學事ニ從事スルヲ禁セシ事ナシ 家塾寺子屋設置ノ制度 奉行里正等ノ許可及他ノ檢束ヲ不受何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得

學校

校名 單ニ學問所ト稱シ幼年學校ヲ小學校ト唱へ後來人クラクト云ヘル化學教師ヲ雇招シ諸科ヲ教授ス是ヲ傳習所ト稱ス又別ニ有志ノ徒集合專ラ漢學ヲ修業セシ事アリ是ヲ集學所ト云

校舎所在地 本校 靜岡城内 集學所 靜岡城外 小學校 靜岡城内 沼津 富士郡厚原村 同郡万能村 駿東郡

東澤田村 田中 掛川 橫須賀 新居 相良 小嶋 久能 清水

沿革要略 明治元戊辰年林又三郎學問所頭被申付學校設立ノ儀委任尋テ教授方及組頭以下調役等被申付學事建白中右又

生徒概數 靜岡本校 漢學千二百人 皇學五十五人 洋學二百五十人（內英百人、佛五十人、蘭二十人、獨八十人） 數

學六十人○同所小學校 漢學五百十人 洋學二百十人（內英六十人、佛五十人） 數學百五十人 寄宿生百人（藩費）

○各所小學校生徒概數分ラス

東脩謝儀 小學校東脩謝儀ハ掟書第四第五第六條之通 靜岡本校東脩謝儀分ラス

學校經費

一金貳千兩程 是ハ國學漢學算術洋學四學之費用凡積是迄遣拂中ニテ定額無之ニ付本文金高凡之目當高ニ有之候

一金三千兩程 是ハ集學所費用前同斷凡之目當高ニ有之候

一金壹萬四千五百九拾貳兩程 是ハ學校集學所役々教授方等俸給一ケ年積

一米八拾四石程 金四百三拾九兩貳分程 是ハ沼津小島田中久能清水万野等小學校費用凡一ケ年積尤沼津小學校所丈

之日用諸費ハ稽古人ヨリ差出候修業料ヲ以テ仕拂相立來申候

一金貳千九百拾六兩程 是ハ沼津田中小島万野等小學校教授方等俸給凡一ケ年積

一金九十兩 是ハ元知事家祿ヲ以公廨費用不足ヲ補候金高之内學生修業入用として學校へ差出置寄宿諸入用東京其

外留學生手當且賞與筋等臨時費用ニ遣拂候分

一金壹萬兩 是ハ米國人教師御雇傳習費用凡之目當高一ケ年積

一銀三千六百弗 是ハ米國人教師御雇給料一ケ月三百弗

合米八拾四石程 金四万九百四拾七兩貳分程

右之外臨時之費用并營繕之費用は別段渡來申候

藩主臨校 藩主臨校シテ講義聽聞生徒ノ試験等爲セシ制度ナシ

祭儀 聖廟ノ設置ナシ

學校構造及建物圖面 別紙之通

兵學校

校名 兵學校

校舍所在地 沼津舊城

三郎儀駿州小嶋奉行エ轉役後任向山黃村津田眞一郎學問所頭被申付同二己巳年一月十三日學問所開設漢洋學算術等ノ諸科ヲ分日々教授シ教授方中村敬太郎望月万一郎等學問所頭ト共ニ教育上ニ盡力遂ニ生徒多數ニ至ル後皇朝學科ヲ置教授三田箕麓等從事ス同年八月廿三日向山黃村川田熙少參事拜命學校掛被申付同三庚午年九月十五日小學校ヲ本校構内ニ假設シ其後小學校建築落成ニ付同年十一月八日開校讀書習字算術等ノ諸科ヲ設ケ日々教授尋テ各地諸所エ小學校ヲ開設シ夫々科目ヲ分教授ス其後各所小學校ヲ勤番組ノ頭ユ引渡靜岡及清水湊ノミ是迄ノ通本校ニテ總理ス同年本校構内ニ生徒寄宿所ヲ建設本校教授方ノ内ニテ頭取二名ヲ置同年十二月一日ヨリ開舍當藩ハ勿論他藩生徒タリトモ入舍ヲ許シ本校エ通學セシム靜岡小學校ヲ廢シ同所ニテ化學教師米人クラークヲ雇招シ理化語學等ノ科目ヲ設ケテ教授シ日ヲ定テ理化學ノ實驗ヲ施行シ是ヲ傳習所ト稱ス同五壬申年一月新縣ヲ設置同年八月三日文部省第十三號御布達從來府縣ニ於テ取設ケ候學校一旦令廢止旨云々ニ付本校ノ儀文部省ニ相伺候處當分ノ内文部省所轄ト相心得何分ノ儀相達候迄ハ從前ノ通授業可致旨御指令有之從前ノ通授業致居同年八月學校被廢止候旨御達ニ相成役員一同被免同月學校附屬品トモ總テ縣廳ユ引渡傳習所ノ儀ハ其儘人見勝太郎エ引渡

教則 靜岡本校課程 國學 漢學 洋學(英、佛、獨、蘭) 洋算○小學校課程 小學校掟書第十五條ノ通

學科學規試驗法及ヒ諸則 都テ小學校掟書之通

職名及ヒ俸祿 學校掛 一等教授 二等教授 三等教授 四等教授 五等教授 學校世話心得 學校組頭 學校調役 調役並 調役心得・調役下役

役料扶持米座席身分取扱等分ラヌ

職員概數 靜岡 學校掛四人 一等教授六人 二等教授五人 三等教授十七人 四等教授二十三人 五等教授二十人

學校世話心得三十六人 學校組頭二人 學校調役四人 調役並三人 調役心得一人 調役下役五人 下番六人 小學

所頭取一人 小學所教授方十七人 教授方心得六人 教授方並三十一人 教授方並心得四人○集學所 頭取一人

教授方一人 教授方心得一人 世話掛七人 世話心得二人 俗事掛一人○沼津兵學校 頭取一人 一等教授五人

二等教授二人 三等教授十四人 員外教授方一人 三等教授方並三人○同所小學所 頭取一人 頭取並一人 教授

方三十五人○濱松小學所 頭取一人 頭取並一人 教授方十四人○掛川小學所 頭取一人 教授方十一人○橫須

賀小學所 頭取一人 教授方七人○新居小學所 頭取一人 教授方八人○田中小學所 頭取一人 教授方十三

人○相良小學所 頭取一人 教授方四人○小島小學所 頭取一人 教授方七人

第六條 入學差許候手續其者親掛ニ候ハ、親名目又當主ニテ十五歲以上ニ候得ハ自身名目又當主ニテ十五歲以下

ニ候得ハ親類後見人ノ名目ニテ願書相認且第五條之願人ニ候得ハ其頭支配之添書相添學校頭取ヘ差出先第四條第一第二第四之吟味有之右無滯相濟候上ニテ小學吟味ニ就可申事

第七條 小學之吟味ハ試業條令中ニ有之候規則ニ準シ甲乙相立其順次ニテ五月中布告有之候員數ニ充候テ撰擧ニ相成其餘ハ其後年猶一試ヲ許候事

第八條 入學ノ節ハ步兵將校ノ科歟砲兵將校ノ科歟築造將校之科歟三科之内何レニテモ其志願ニ任セ一二三之標目ヲ願書餘白ニ認可申事右志願之科布告内ノ員數ニテ滿員ニ相成候節ハ二三ノ者願ノ科内ニ轉入候モ相成且又實業生年限中無據事故有之候得ハ難易ノ二科振替ヲモ御免相成候事

第九條 總テ生徒ハ入學當日ヨリ其學科ニ從ヒ三科隊中ヘ組込相成其取締以下諸役ノ下知ニ從ヒ學術演習等ノ差引ハ勿論平素身持起居出入トモ其差圖ニ任セ候事

第十條 生徒ノ儀ハ實業生本業生ノ二等ニ分ケ候事

第十一條 實業生修業年限ハ四ケ年ニ有之候事

第十二條 右修業四ケ年相立候得ハ第二試ヲ受合格ノ者ハ免許狀相渡本業生ニ轉候事

第十三條 右修業三ケ年相立候得ハ第三試ヲ受合格ノ者ハ得業生ト相成候事

第十四條 得業生ト相成候得ハ其節學校頭取ヨリ免許狀相渡シ其支配ニ屬候テ陸軍士官欠員有之候得者年月ノ順次ニ應シ撰入相成候事

第十五條 實業生年限中申分相立候事故有之初度志願ノ科ヨリ他科ニ移度相願候者ハ學校頭取其掛取締等ノ熟議之上陸軍總括ヘ申立差支モ無之候得者差許候事

第十六條 御領内人口ニテ第四條合格ノモノ第五條ノ手續相濟候得ハ縱令當學校ニテ修業不致候トモ第一試合格ノ後實業生ト相成第二試合格ノ後本業生ト相成第三試合格之後得業生ト相成候儀志願之者ニ有之其試業受度願書差出五日中布告面ノ員數猶明キ員有之候得ハ陸軍總括并學校頭取熟議之上試業差許合格之節ハ登級相許候事但右試業ハ第三試ニテモ第一試ヨリ順次ニ相試且別段規則書之通常例ヨリモ精密ヲ加ヘ候事

第十七條 第四條ノ第四目ニ頗申分有之候者モ若夫才能ノ所長有之他日其人相應之官員ニ可補志願之者ハ其志願之趣巨細申立陸軍總括學校頭取熟議之上生徒ニ登リ候儀御免相成候事

沿革要畧 明治元年德川氏駿遠參ノ地ニ封セラル、ヤ即陸軍將校ヲ養成スルノ目的ヲ以テ全年十二月本校ヲ開創ス時ニ權大參事服部綾雄陸軍總括ヲ以テ學校ヲ管理シ而テ少參事阿部潜藤澤次謙江原素六權少參事矢田堀鴻ノ四名共ニ陸軍用重立取扱ヲ以テ創立ニ盡力ス就中阿部潜拮据周旋ノ功殊ニ多シトス其ノ教授ニ任スル者ハ西周頭取タリ赤松則良伴鐵太郎冢本明毅大築尙志田邊太一ノ五名一等教授タリ其ノ餘二等三等ノ教授タル者槩チ博學多識ノ秀士タルヲ以テ學規教則ヨリ教授ノ方法順序ニ至ルマテ整備セサルハナシ生徒ノ進歩モ亦從テ著シシ就中洋算ニ至リテハ當時未甚開ケサリシニ獨本校ハ赤松冢本二教授ノ薰陶ニヨリ生徒尤數學ニ長シ沿津ノ生徒トイヘハ舉世問ハスシテ數學ニ巧ナル者トナスニ至レリ冢本氏筆算訓蒙ノ著アリ大ニ世ニ行ハル故ニ其ノ名聲天下ヲ蓋ヒ福井德島兩藩ハ藩費ヲ以テ數十名ヲ選拔シテ來學セシメ德島ノ如キハ更ニ本校ノ人ヲ聘用シ本校ノ教則ニ模倣シテ學校ヲ藩ニ開ケリ爾餘名古屋鹿兒島等本校ノ人ヲ聘用スル者甚多シ既ニシテ西赤松田邊ノ三名各官ノ徵命ニ應シ冢本明毅頭取ニ任シ大築尙志頭取並タリ明治四年十一月ニ至リ陸軍省ノ直轄ニ歸ジタリ

教則 生徒授業時間ハ凡五時間トス即書史講論外國語學教學各一時間銃砲打方操練合二時間トス外ニ圖書調馬等アリ夏季ハ水泳及ヒ艦手ノ授業アリ
 爾餘ノ教科用書及ヒ授業ノ方法等都テ掟書中學課其部ニ詳ナリ

學科學規試驗及諸則 悉皆掟書中ニ詳ナリ

第一條 毎年十月朔日生徒入門被差許候間志願之者ハ毎年七月晦日限り學校頭取ヘ可申入事

第二條 右ニ付十月ヲ以テ修業年限ノ始メト致シ候事

第三條 右入門ノ儀ニ就テハ陸軍將校之欠員并得業生仕進ノ多寡ニ準シ陸軍總括ヨリ每年五月中布告有之候間志願

之面々可申出候事

第四條 入學御免ニ相成候生徒ハ左之通

第一 其父ヨリ德川家御家臣ノ列ニ相違無之候事

第二 年齡十四歲ヨリ十八歲ニ限り候事

第三 小學修業上達ノ上第一試滯ナク相濟候事

第四 陸軍醫師頭取ヨリ身体全健之請狀ヲ取り候事但請狀中自然痘又ハ種痘ニテ疱瘡相濟ミ候段書加可有之事

第五條 陸軍支配ニ無之他局ニ属候者陸軍方出身之者願有之向ハ兼テ其支配頭ヘ申立頭支配ヨリ陸軍總括ヘ打合有之其後頭支配之添書ヲ以テ學校頭取ヘ可願出事

並之内或ハ他局ヨリ撰舉ノ上被命候事

第廿七條 一等教授方之儀ハ將校三科目之内壹科ニ精ク且可相成丈ケ數科ニ兼渡リ候者被命候事

第廿八條 教授改方者頭取之補佐ト相成其書記ヲ司リ二等三等教授方ノ内一人選舉被命候事

第廿九條 第二等第三等并ニ小學之教授方撰舉之儀ハ兵學校頭取一等教授方立會試業致候テ被命候事

第三十條 第二等三等教授方之器ハ資業生授業之一科ニ精通シ候者被命候尤其科業之難易兼學ノ者有無ニ應シ第二

第三ノ等級相定候事

第卅一條 諸教授方何レモ學術ノ次第ニ長スルニ隨ヒ且生徒引立方深切ニ有之候得ハ小學教授方ヨリ資業生教授方

ニ被舉資業生教授方ノ内ニテモ三等ヨリ二等ニ舉ラレ候儀勿論ノ事尤其節ハ第廿九條ノ通其者業前試業有之且其人物ニ就テハ其試官熟議之上ニ有之候事

第卅二條 諸教授方撰舉ノ節ハ前以テ當人ノ志願相紮承知ノ上被命候事且被命候得ハ三日ノ内當人ヨリ誓書可差出候事

誓書按文

私儀此度役名被命難有仕合奉存候就テハ御國法ハ勿論兵學校御規則逸々遵奉仕誓テ違犯仕間敷忠勤ヲ拔候存念ニ

御坐候依テハ

當御役ニ永年在職仕度力
當御役ヨリ歷級仕進仕度力
又他ノ願有之節ハ本書ヘ
別紙ノ志願ニ致シ別紙ヘ
願之辨認可申事

志願ニ御座候間御聞置可被下候以上

年月日

何之誰印

頭取宛

第卅三條 員外諸司者學校頭取一等教授方陸軍總括并軍議掛熟議之上申上被命候事

第卅四條 二等三等ノ教授方自身修業致度志願有之候者ハ授業ノ餘暇第一等教授方或ハ陸軍將校ニ就キ修業致候儀

被相許候事右修業之次第者學校頭取ヨリ差圖致候事尤私之願ハ例外之事

第卅五條 退テ陸軍本制相立候迄一等教授方歩砲築之科ヲ管候者ハ各其生徒ノ取締コテ學校隊ノ差圖役頭取ト心得

二等及三等教授方肝煎心得候者一等及二等差圖役ト相成生徒ハ兵士ト心得學業ハ勿論起居出入ニ至ル迄其管轄ニ屬候事

第十八條 元來本業生ト相成ヘク情願ニハ無之他ノ志願ニテ資業生ト相成修業致度存候者ハ志願之趣委細申立第一試ヲ經候テ兵學校員外生之名義ニテ資業生ト相成候儀御免相成候事

第十九條 兵學校員外生ハ小學試業之外第四條合格之吟味ニ及ハス月々修業料トシテ銀十五匁差出シ可申事但學校内總テ褒美有之節ハ其列ニアラサル事

第廿條 員外生ニテモ資業ノ條業宜敷第二試合格ニテ本業生ニ轉シ度情願有之第三條合格ニテ第四條手續相濟候者ハ登級修業相許得業生仕進ノ明キ有之節本員ニ充候儀相許候事

第廿一條 第四條合格ノ者ニテモ其身國刑ヲ犯シ候者ハ御免無之候事

第廿二條 其父戰死報國之功有之者ハ第四條合格ノ當否ニ拘ラス陸軍總括學校頭取熟議之上入學相許候事

教授方之事

第廿三條 兵學校頭取之撰任ハ陸軍總括并諸局ノ軍議掛衆議之上其任ニ堪ヘキ仁ヲ撰舉イタシ申上ノ上被命候事

第廿四條 學校頭取之器ハ兵事ハ勿論就中兵律ニ精通シ和漢西洋古今ノ兵制ニ曉通シ且人望有之頭以上ノ格ニ無之候テハ其任ニ當ルヘカラサル事

第廿五條 學校頭取之職掌左ノ通り

第一 沼津表之兵學校ヲ預リ候事

第二 御領内兵學校附屬之小學校ヲ管轄イタシ候事

第三 兵學校小學校ニテ教授可致學術課目之立定改革ヲ司候事

第四 第一等以下諸教授方并諸小學ノ教授方之撰任黜陟ヲ司ル事

第五 其他學校附員外諸司化學方畫圖方書籍方筆記方調馬方ヲモ管轄イタシ候事

第六 諸生徒童生資業生本業生并員外生トモ其身分支配之外仕進黜陟司ル事

第七 總テ學校掛之吏役小遣迄其補撰出入并ニ出入商人之出入共是ヲ司候事

第八 兵學校ニ係ル諸教授方自司ノ給料支度其外諸雜費ノ出納ハ陸軍總括相談ノ上取扱候事

第九 兵學校ニ屬セル文庫并器械馬匹トモ其所轄之事

第十 地方測量局モ其所轄有之候事

第廿六條 一等教授方撰舉之儀學校頭取主トシテ陸軍總括并其掛軍議掛リ相謀リ熟議之上二等教授方或ハ頭又ハ頭

兵學校頭取相定可申事

第五十三條 本業生學期三ヶ年ノ内後壹ヶ年ハ野外ニテ實地研究之事

第五十四條 總テ病氣等ニテ受業後レ候者ハ全快ノ上休日或ハ平日課業之餘暇自分願ニテ教授方ニ就キ相後レ候丈

ケ價候様可致事

甲號

乙號

書	史	講	論	博物新編地理全誌皇本朝外史略綱鑑易知錄
英佛語ノ内一科	會	話	文	典
算點	開	平	開	立
何幾	平	面	式	八線正斜三角立
實地測量	口ニテ遠近ヲ測リ圖ニ寫スヲ又水平術ノ大略	フランセツトセキスタントアースツル等ノ理并ニ用法又此測量器ナクシテ	プロゼクシオンノ學	本源ノミ
器	械	學	圖	書
乘	馬	銃	砲	打
操	練	方	銃ノ組立的打等打交セ	生兵小隊并ニ大砲ハセキチ一運轉位マテ

戰	法	陣用	兵中	諸諸	規規	則則	兵	法	兵	器
---	---	----	----	----	----	----	---	---	---	---

第卅六條 學校頭取及第一等教授方ハ日々出勤之事但一等教授方授業引請候者ハ其時限出勤之事

第卅七條 第二等以下之教授方ハ授業ノ時刻限出勤之事

第卅八條 教授方病氣七日迄ハ賴合相成候事

第卅九條 八日以上ハ病氣届并醫師ノ證書ニテ學校頭取エ可届出事右ノ節ハ頭取ヨリ代人相立ルカ又ハ其預リ生徒

休業ニ致候カ時宜ニ隨ヒ致差圖候事但代人ノ有無ニ不拘俸金ノ半ヲ差出可申事

右ニ付藥料ハ陸軍附屬病院御入用ノ内ヨリ相立候事

第四十條 右ノ節宅稽古ニテモ出來候者ハ頭取之取計ニテ俸金減少ヲ被免候事

第四十一條 代人相立候共百ケ日迄全快不相成候節ハ退役相願可申事

第四十二條 右百ケ日ニテ退役相願候其醫師之請狀ニテ猶五十日以内可全快ノ期相見候得ハ右願書預リ置候事

第四十三條 十二ヶ月間三十日ニ及候病氣四度相煩候者并六ヶ月間七日宛ノ病氣七度致候者ハ多病ノ名目ヲ以退役

相願可申事

第四十四條 教授方ノ内病氣等ニ托シ勤向怠惰且不行跡有之候者惣教授方衆議ノ上頭取ヨリ申上其罪狀ヲ鳴ラシ御

所置可有之事

第四十五條 土用休業中ハ御領内ニ候得ハ頭取へ届捨候テ旅行不苦候事

學課之事

第四十六條 資養生ノ學課ハ別紙甲號表之通

外國語學 (英佛ノ内壹科) 究理 天文 地理 歴史(大略) 數學 書史講論 圖畫 調馬 試銃砲 操練

第四十七條 本業生ノ學課ハ兼テ自己ノ望ニ任セ願立ノ通り左ノ三科ノ内壹科ヲ専門ニ修業可致事

步兵將校之科 砲兵將校之科 築造將校之科

第四十八條 步兵將校ノ課目ハ別紙乙號表ノ通り

第四十九條 砲兵將校ノ科ハ別紙丙號表ノ通

第五十條 築造將校課目ハ別紙丁號表之通

第五十一條 右何レモ目課相立修業可致事但右日課ハ四季晝夜之長短ニ因リ別ニ時々ノ定則ヲ以テ相示シ候事

第五十二條 三兵合兵并陣中諸作業實地研究ノ爲毎年春秋於野外大調練ノ催有之候事但右日限地方度數其外共總テ

築	造	學	野堡地雷火橋	梁	永久城塙	水雷機略
水	理	學	道	路	水橋	造
戰	法	兵家諸規則	兵	法	兵	略
砲	術					
器	械	學				
化	學					
軍	律					

試業之事

第五十五條 每年八月中諸學期年ノ試業并年々試業有之候事

第五十六條 入學被許候者ハ其以前當兵學校ニ於テ小學ノ試業有之候右吟味ノケ條左ノ通り

〔甲〕素讀 句讀音訓之間違ナク氣息ヲ調ヘ無遲滯朗誦イタシ候ヲ上級ト致候事

〔乙〕手跡 右ハ吟味方ヨリ望候公私文章速ニ出來文意貫徹イタシ候ヲ上級ト致候事手跡ノ美惡ハ文意ノ貫徹ヨリ

乙次ニ列シ候得共甲乙ノ優劣ヲ撰候時ハ文意貫徹手跡見事ノ方上級ニ列シ候事

〔丙〕算術 吟味方ヨリ差出シ候雜題問違ナク且速ニ算當致シ候事

〔丁〕地理 小學ニテ學候内吟味方ヨリ尋問致シ候ケ條無遲滯返答致候ヲ上級ト致候事

第五十七條 右ノ内甲乙丙丁共相揃無滯試業相濟候チ甲科ト致シ候事

第五十八條 甲科ノ内優劣ハ十八史略國史略之内吟味方ヨリ別段相望候處講釋イタシ其手際ヲ以テ席順相定メ候事

第五十九條 若又講釋ニテモ同等ニ候ハ、算術ノ内別題差出シ候間其答ノ當否ニ因テ席順相定メ候事

第六十條 總テ試業ニ就度モノハ毎年七月晦日限リ兵學校頭取ヘ可申入事

第六十一條 小學試業之節出席致候吟味方一坐ハ一等教授方壹人教授改方壹人二等三等教授方二人若クハ三人ツ、

并ニ陸軍總括ヨリ差出シ候吟味改役壹人列席之事但時宜ニ寄兵學校頭取自身出席之事モ有之候事

丙號

附	操	軍	砲	築
諸種小銃ノ組立彈丸藥包ノ製造並其利害得失モ篤ト心得可罷在事	練	律	術	造
	生兵ヨリ大隊マテノ業前			野
				堡
			諸種大砲及彈丸	其攻守大梁
			其用法得失射擲ノ名目彈道ノ大概	畧
				城塲并其攻守大畧

丁號

數	砲	戰	築	器	化	軍	操
學	術	法	造	械	學	律	練
高等幾點何畧	火工	兵家諸規則	野堡并其攻守	大略			
微分積分	各種大砲彈丸ノ製作并用法	兵	橋				
靜學流體靜學	小銃并運輸諸具ノ製作理解	法	梁				
		兵	城塲并其攻守				
		略					

數
學
高等幾點何畧
分
靜學流體靜學

第七十九條 父兄看病等ニテ課程ナ欠キ候時ハ大病ノ例ニ準候事但看病願候者親類願書并醫師之證書差出可申事
第八十條 忌服遠慮ハ日勤場之例ニ隨ヒ可申事

生徒罰則之事

第八十一條 盜竊諸犯總テ國法ノ越度ハ國之典刑ニ於テ可論事附リ壹度國刑ヲ犯シ候者ハ生徒除名ニ相成候事

第八十二條 身持不宜モノハ假令試業ニ於テ冠タリトモ教授方衆議ノ上乙次ニ列シ候事

第八十三條 遊蕩放埒總テ不行跡ノモノハ將校ノ器ニ堪ヘサルヲ以テ諸學教授方衆議ノ上兵學校放逐之事

第八十四條 得業生除目之節有司停年ノ順序ニ依ラス濫撰ニ渡ルノ形跡有之時ハ遺撰之得業生兵局裁判所ヘ是ヲ訴

ルノ權ヲ有スル事

右八拾四ヶ條當兵學校御開後ヨリ十二ヶ月毎ニ再議之上斟酌改正可有之候事

辰十二月奉命

右ニ錄スル掟書中後稍變更アリ即第四條第二目ニ於テ東京ヨリ移住セシ舊陸軍士官ニ限リ三十歳以下ノ者ナレハ實業生タルヲ許シ第四十六條ニ於テ書史講論ニ左氏傳ヲ加ヘ又實業生中士官タルヲ願ハスシテ小學教員タルヲ欲スル者ハ特ニ之ヲ許シ其授業ハ操練及ヒ圖畫ヲ除キテ書史講論ヲ二時間トナシ更ニ蒙求ヲ加ヘ第五十六條甲ノ素讀ニ於テ更ニ十八史畧國史略ノ講義ヲ加ヘ而テ丁ノ地理ヲ廢セリ

職名及俸祿 前ニ錄スル所ノ陸軍惣括以下五名ノ大小參事ハ都テ陸軍ニ關スル事務ヲ取扱フ者ニシテ單ニ兵學校ニノミ關スルニ非ス其單ニ兵學校ニノミ關スル諸職名ハ頭取、一等教授方、全並、二等教授方、三等教授方、全並、員外教授方、教授方手傳トス俸金ハ皆歲給ニシテ最多ハ五百圓最少ハ七拾五圓ナリ

此外繪圖方調馬方火工方及ヒ囃叭方教授アリ俸金ハ最多百圓最少六拾圓ナリ

又水泳艦手ノ教師ハ其ノ期ニ限リ雇フモノトス

以上明治三年ノ現況ヲ錄セシニテ爾後稍増減アリト雖モ要スルニ大異ナシ

職員概略 頭取壹名 一等教授方五名 一等教授方並壹名 二等教授方二名 三等教授方拾四名 全並三名 員外教授方壹名 教授方手傳四名 繪圖方二名 調馬方四名 火工方囃叭方教授各壹名 水泳艦手教師定員ナシ 書記方一名

俗務方頭取 俗務方四名

以上明治三年ノ現況

第六十二條 小學試業之節ハ教授改方試業生ノ出來不出來其明細ニ記置列席之面々猶又各自存寄書相添兵學校頭取之熟議甲乙相定候上ニテ陸軍總括へ差出シ其年々定員ニ準甲科ヨリ順次ニ撰舉相成追テ十月朔日入學被命候事

第六十三條 第二試立會之吟味方一坐ハ一等教授方一人教授改方壹人各科ノ教授方壹人ツ、陸軍總括ヨリ差出候吟味改役壹人列坐之事

第六十四條 第三試立會之吟味方一坐ハ兵學校頭取一等教授方壹人教授改方壹人各科ノ教授方壹人ツ、陸軍總括ヨリ差出シ候吟味改役壹人列坐之事

第六十五條 第二試第三試吟味ノ法ハ第四十六條ヨリ第五十條迄ノ表中ニ相定候課程各科之教授方逐一相試可申事

第六十六條 資業生ノ學期ハ四ケ年ヲ限リ閏月ヲ除キ四十八ケ月相立候時ハ第二試ヲ請可申事

第六十七條 資業生期年之前自身第二試ニ就度情願有之モノハ期年ニ拘ハラス候事但毎年例月之外試業不被許候事

第六十八條 資業生期年ニ至リ第二試ニ就キ試業合格ノモノハ本業生ニ登リ候事

第六十九條 本業生ノ學期ハ三ケ年閏月ヲ除キ三十六ケ月過候時ハ第三試ニ就キ可申候事

第七十條 右期年之前第三試ニ就度情願有之候者ハ年月ノ淺深ニ不拘試業被相許候事但第六十七條同斷

第七十一條 第一試之節落第致候者ハ十二月後壹度再試ヲ被相許候事

第七十二條 第二試之節初度落第致候へハ十二月後再試被相許若其節又落第致候得ハ猶十二ケ月後又三試マテ相許候事

第七十三條 第三試ハ第一試ノ如ク十二ケ月後再試迄被相許候事

第七十四條 第二第三試共同時ニ試業合格ノ者ハ試業ノ甲乙ヲ以テ席順相定候事

第七十五條 本業生二年目之試業相濟出格有之候者モ學校隊差圖役下役被命候事

休業之事

第七十六條 毎日曜日ハ諸學休日之事 其他 五節句 八朔 四月十七日 主上御誕生日九月廿二日 當君御誕生日 十二月廿一日ヨリ正月七日迄 夏土用中 七月十三日ヨリ十六日迄 八月試業中

生徒病氣并忌服之事

第七十七條 凡病氣ニテ休業致候者四日以上ハ醫師ノ添狀ヲ以テ當人ヨリ相届引込可申事

第七十八條 三十日以上之病氣ニ罹リ候者ハ全快之後醫家之吟味ヲ受ケ身体全健之證ヲ取リ可申事

セシモノ及ヒ駿遠ノ各地ヨリ募集セシ生徒皆先此ノ校ニ入學スルニヨリ生徒大ニ増加シテ四百餘名ニ到レリ兵學校ノ陸軍省ニ歸スルニ及ヒ三小學共ニ靜岡學校ノ管轄ニ屬セリ

教則 學科學規ノ條中ニ併記ス

學科學規試驗法及ヒ諸則 階級ヲ三段ニ分チ其ノ熟スルヲ待テ試驗シテ級ヲ進ム但進級ハ其ノ熟スルヲ待ツヲ以テ一定ノ學期ナシトイヘ凡全カノモノナ一類トナシテ授業スルヲスヘテ兵學校教授法ニ同シ

試驗ハ春秋ノ定期及ヒ月次ノ二箇ニ分ツ但三級ノモノ試驗ヲ受ケ資業生ニ登第スルヲハ兵學校提要ニ詳ナリ學科及ヒ教科用書ハ左表ノ通り

		一級		二級		三級	
素	讀	大三統字	經四孝書經	五	經	元十八史畧	國史畧
算	術	加減小數	乘除諸等	諸比	例數	單語	會語
英	語						
修	身	日曜日毎ニ教師口授ス					
習	字						
作	文	公私用文ヲ授ク					
体	操						
擊	劍						
水	泳	夏季ノミ					

授業時間ハ八時ヨリ三時迄トス其ノ内素讀二時間算術一時間餘ハ習字作文ノ時間ニ充テ而テ体操擊劍ハ三時ヨリ四時マテ隔日ニ授クルモノトス

生徒概數 初メ東京ヨリ移住セシ時三十歳以下ノ陸軍士官三百餘名ヲ盡ク解職シテ生徒トナシ之ニ四書五經十八史畧元

明史略國史略ノ素讀洋算開平開立マテ及ヒ作文ノ三科ヲ授ケ明治二年ノ冬ニ至ルマテニ其ノ業ノ成熟スル者ヲ試驗セ

シテ前後四回^{内三回ハ臨時試驗}合格ノ者ヲ得ルヲ九十六人盡ク資業生トナシ各月給四圓ヲ與フ而シテ附屬小學ノ生徒及ヒ他途ヨ

リ登第セシモノヲ合セ亦十五名アリ既ニシテ其ノ登第スルモノ多ク沼津近方ニ局スルヲ以テ新ニ寄宿舍ヲ舊城内ニ建

築シ教員ヲ駿遠二州ニ派出セシメ各地ニ就テ數月間ノ修業ヲ以テ登第スヘキ學力ヲ有スル志願者ヲ試驗シテ寄宿舍ニ

入レ其食料ハ校費ヲ以テ支辨シ而シテ又之ヲ附屬沼津小學校ニ學ハシメ其學力資業生ニ適スルニ及ヒ試驗シテ合格ノ

者ヲ取ル既ニ資業生トナルニ至レハ月給ヲ與フルヲ以テ別ニ食料ヲ給セス此ノ如クスルヲ前後兩回而テ附屬小學在來

ノ生徒ヲ試驗スルヲ三次^{内一次ハ臨時試驗}解職士官ノ生徒ヲ通シテ百六十餘名ニ至レリ是ヨリ先舊來ノ俗務官十名ヲ解職シテ俗

事生徒ト爲シ又是ヲ附屬小學ニ學ハシメ其ノ試驗ノ法一々資業生ニ全シク登第ノ後學ヲ所亦全シ只操練ニ從事セサル

ノミ而テ登第ヲ得ル者二人本藩及ヒ諸藩ヨリ來學セシ員外生モ又十餘人ニ及ヘリ(諸藩ヨリ來學セシモノ多カレバ大

抵小學ニ止リ資業生タルモノ少シ)但資業生學期四年ヲ終ルニ及ハスシテ陸軍省ニ歸セシヲ以テ本業生ニ登リシ者ナ

シム 東脩謝儀 資業生ニハスヘテ月給四圓ヲ給シ別ニ東脩謝儀ヲ収メス但員外生ニハ月給ヲ與ヘス別ニ月謝銀拾五匁ヲ納メ

シム 學校經費 陸軍惣費額ノ中ヨリ支辨セリ

藩主臨校 地藩主ノ居城ニ遠ク且ツ其ノ幼年ナルヲ以テ僅ニ一回ノ臨校アリシノミ

祭儀 聖廟ノ設置ナシ

學校構造 舊沼津城ヲ以テ陸軍ノ所轄トナシ其ノ大半ヲ使用セリ

書籍 和漢洋ノ書大抵全備シ無慮二萬卷ニ及ヒ生徒盡ク校書ヲ借用セリ其目次部數ハ今詳ニスルヲ能ハス

別ニ附屬小學三校アリ 沼津小學校 澤田小學校 萬野小學校

校舍所在地及沿革要畧 三小學共ニ兵學校資業生ノ預備ニ供シ併テ廣ク少年ノ就學ヲ目的トセシ者ニテ初メ明治元年十

一月沼津城内ノ舊長屋ヲ以テ假校トナシ開業セシカ生徒逐日増加スルニ隨ヒ傍ノ家屋二箇ヲ併セテ之ニ増シタレバ尙

足ラス明治三年遂ニ同所添地町ニ於テ校舍ヲ建築シ又澤田村^{沼津ヲ距二十町}萬野原^{富士郡ニアリ}ノ二所ニモ全シク學校ヲ建築セリ其

地僻陋ニアルヲ以テ沼津ノ如ク盛大ナルヲ得ス沼津小學ハ藩士ノ子弟ハ勿論平民モ頗ル入學シ加フルニ諸藩ヨリ來學

由

士族卒ノ子弟教育方法 藩費ヲ以他國へ遊學ノ制無シト雖モ私費遊學中學業特達ノ者ニハ其品行ヲ審査シ藩費ヲ給セシ

徒往々之アリ其他詳ナラス

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ト雖モ藩立校へ入學ヲ許ス

家塾寺子屋設置ノ制度 藩内習字ノ外私塾ヲ禁ス其他詳ナラス

學校

校名 矜式館ト號シ文久年中明親館ト改稱シ始テ文武校ニ兼用ス

校舎所在地 城内二ノ丸ニ設置安政震後城外添地町ニ移轉

沿革要畧 文化年中永野忠成ノ時ニ創立古學者某氏教授ヲ擔任セシ由其後文政天保ノ際京師皆川洪園門人醫員島津逸齋

教授ヲ兼任セリ尋テ駒留陋齋今井虎分之二代リ其後文久ノ初永野忠誠ニ至リ校稱ヲ更メ文武校トナシ大ニ藩風ヲ振起

ス維新後上總菊間ニ轉校

江戶上邸別ニ學校ノ設ナシ天保弘化ノ頃程田文平ト云者儒官ニ具シ侍講ヲ勤メ其後丹羽孝三東條一堂カ輩ヲ聘シテ之

ニ代ヘ士卒ノ子弟之ニ通學セリ文久年中ニ至リ濱町上邸ニ於テ明親館分校ヲ假設シ漢洋二派ノ學ヲ立テ教育セリ

教則 學派朱子ヲ宗トスルヲ以テ四書五經共ニ朱註ニ據リ又鄭注ヲ雜用セリ此他左國史漢等ノ書ヲ講讀ニ課ス授業ハ朝

五時ニ始メ夕七時ニ終ル授讀ハ午前ニ終リ講釋輪講會讀等ハ午後ヨリ始ム外ニ毎月六回作文ノ科ヲ授ク

學科學規試驗法及ヒ諸則

漢學 兵學 山鹿流 禮式 小笠原流

高島流 游泳 三道具 流名ヲ失ス

文武共七歲ヲ以テ入學ノ期トナシ且ツ十分ハ必ス文武ヲ練磨スルヲ定メトス試驗ハ春秋二回ニ施行シ生徒ノ講讀作文

等ヲ檢査シ藩主ヨリ賞與ヲ下與シ特秀ノ徒ニハ特賞ヲ付與ス

職名及ヒ俸祿

學校奉行(文武ヲ兼ヌ)學監(同上)屬吏(同上)學監已上ハ中士以上ヨリ出勤各肩衣着用 祭酒(欠員) 侍讀 教授 助

教 記室(助教ヲ兼) 授業生

素讀ノ熟セシ者ニハ併セテ十八史略國史略ノ講義ヲ授ケ英語ハ三級以上本科ノ熟スル者ニ限リテ教ヘ而テ年長ニシテ習字ノ熟スル者ニハ爾餘ノ科ノミヲ授業ス但澤田万野兩校ハ英語及ヒ体操以下ノ三科ヲ欠ク沼津小學校モ体操以下ノ三科ニ至リテハ有志ノ者ニ限テ教フル者トス

休業日ハ兵學校ニ全シ

職名及ヒ俸祿

沼津小學校 頭取、教授方、教授方並、全手傳 俸金ハ最多二百卅圓最少二十圓ナリ○澤田小學校 教授方、全並 俸金ハ六十圓ト四拾圓トナリ○萬野小學校 頭取並、教授方、全並 俸金ハ最多八拾圓最少四拾圓トス
已上明治三年ノ現況ヲ錄セシニテ爾後稍増減アリト雖モ要スルニ大異ナシ

職員概略 沼津小學校 頭取壹名 教授方拾五名 教授方並五名 教授方手傳三名○澤田小學校 教授方壹名 全並壹名○萬野小學校 頭取並壹名 教授方三名 全並壹名

生徒概數 十農工商ヲ問ハス都テ六歳以上ノ男子ハ入校スルヲ得而シテ年長ノ者ハ幾歳ニテモ拘ハラサルヲ以テ三四十歳ニテ就學セシモノ又モ甚カラス其數凡五百名寄宿生ノ事ハ已ニ兵學校ノ部ニ詳ナリ但沼津小學校教授方二名監督ノ爲寮中ニ宿直ス

束脩月謝 入門金拾五匁月謝金三匁七分五厘但貧窮ノ者ハ組世話役或ハ名主等ヨリ申出レハ之ヲ免ス
學校經費 三小學トモニ陸軍惣費額中ヨリ支辨ス

藩主臨校 一回沼津小學ニ臨マレシノミ

祭儀 聖廟設置ナシ

學校構造 初メ沼津小學校ハ舊藩士ノ家居ヲ用ヒ明治三年ニ至リ添地町ニ百餘坪總二階ノ校堂ヲ新築シ其ノ外擊劔場及ヒ物置等アリテ頗宏壯ナリ澤田万野兩校モ亦同年ノ建築ナレモ平屋ニシテ建坪モ又沼津校ニ及ハス
書籍 日用授業書ノ外ハ十數部ニ過キス

舊沼津藩

學制

學事上ノ諸制度 舊錄無キカ故ニ調ルニ由ナシ只學業上達ノ徒ハ其器ニ適スル役目ヲ授ケ或ハ加増賞賜等時々之アリシ

學校

校名 日知館

校舎所在地 駿州益津郡田中城中ニ在リ後房州ニ移轉シ北條ニ設ク(北條ハ安房郡ニ隸ス)

沿革要略 天保八年日知館ヲ創立ス本多豐前守正寛ノ代ニ係ル時ニ石井耕儒官タリ熊澤維興師範並グリ設立ニ盡力セシ

ハ藩大夫遠藤喜平都築彌助奥田庭筠トス弘化年間本多紀伊守正訥ノ代ニ至リ最モ學ヲ好ム時ニ石井述儒官タリ増田貞奥田遵師範並タリ江戸學校ニ於テハ芳野育儒官タリ

教則 記スヘキ資料無之

學科學規試驗法及ヒ諸則

和漢學醫學^{洋學}算法筆道習禮弓馬槍劍砲術柔術對術^{俗ニ居合ト云}棒術皆學館ニ列ス^{游泳欠}

學問助教ハ四書五經左國史漢ノ大義ニ通スル者ヲ以テ武藝ノ免許ニ準ス^{詩文ハ關セス}

學習ノ期限登校ノ年齡共ニ無之

文武生徒春秋二季ヲ以テ試驗シ藝業殊勝ナル者ハ料理代トシテ五十疋以下貳匁五分迄ヲ賜フ

毎年正月七日五ツ半時藩廷ニ於テ孝經孝治章ヲ講ス家老用人番頭以下諸官皆麻上下着用聽聞ス午後九ツ半時學校ニ至

リ同經ノ士章ヲ講ス惣教師々範並助教以下文武ノ別ナク麻上下着用聽聞了リ聖像前ニ於テ神酒ヲ受ケ大抵此日ヲ以テ

文武共入門式ヲ行フ^{臨時入門ヲ許スモ禮服必ス着用}

日知館規則

惣教壹人 學中諸務無論文武莫不皆與聞焉日三次赴堂監視生員勤怠以供歲終黜陟之考宗室諸大夫苟有位望者掌之爲之惣教職

教授壹人 講解經義培判疑義聚訟紛々不決者改竄諸生著作凡教育人物在隨器而成材苟事與人乖則扞格不易入大抵資

稟來敏者宜文身軀強健者宜武見其性之所近而勵其所好令人逍遙和易達人材以供國用爲之督學職若夫矜式一藩建風聲

以贊揚邦政竣後進秀者

訓導師五人 分日更番從後進之力講授經義以從古之學不躐等之義曾讀則爲之主從容判決疑滯使人炳然勤者益勸獎之

怠者嚴加督責期於不忘矣要在夾輔教授而鼓舞學化

記室以上中士ノ取扱ニシテ肩衣着用ヲ許シ侍讀以上ハ上士ノ扱タリ役料扶持米等詳ニスルヲ得ス

職員概數 學校奉行(文武ヲ兼)一員○學監(同上)三員○屬吏(同上)五員○祭酒欠員○侍讀一員○敎授一員○助教二員○

記室(助教ヲ兼)二員○授業生定員ナシ

生徒概數 寄宿通學ノ生徒概數詳ニスルヲ得スト雖モ寄宿生一時四十餘名ニ及ヒシヲアリ其學資ノ如キ悉皆藩費

束脩謝儀 束脩謝儀ノ制度ナシ

學校經費 評ナラス藩士ニ賦課セシ等ノヲナシ

藩主臨校 藩主在城ノ際ハ必ス臨校シテ講義ヲ聽生徒ノ試驗モ監臨スルヲアリテ褒賞ヲ與フ在府ニハ家老職之ニ代レリ

武技亦之ニ倣フ

祭儀 釋奠ノ本式ヲ執行セシヲ無シ只春首開校及春秋兩回ノ祭典ニハ校ノ上壇ニ聖像ヲ居ヘ冷酒并ニ時節ノ菜菓鳥魚ノ

類ヲ供シ敎官生徒及ヒ俗事官共ニ之ヲ拜禮シ了テ敎官俱酒ヲ自ラ一盞ヲ拜飲シ以テ各輩ヲシテ之ニ倣シム且ツ校堂ニ

於テ孝經ヲ講スルヲ以テ例トセリ演武場ノ開業ハ摩利支天或ハ日本武尊ノ畫像ヲ掲ケ其式ヲ行フ一ニ文場ノ如ク敎

官孫子始計篇ヲ講スルヲ以テ例トス

學校構造及ヒ建物圖面 此項詳記スルヲ得ス

舊田中藩

學制

學事上ノ諸制度 學問ハ助教武藝ハ免許印可ヲ得ル者貳人口ヲ賜フ後藩ノ儉約ニヨリ是ヲ廢シ春冬稽古料トシテ貳百正

ヲ賜フ新ニ助教免許ヲ命セラルトキハ麻上下料トシテ六百正ヲ賜フ助教免許以上ヲ師範並ト稱シ賞爵一級ヲ加フ

士族卒ノ子弟敎育方法 士族准士族小役人ト唱ル者ノ子弟ハ藩校ヘ必入學セシム卒ノ如キハ學問弓馬槍ノ入學ヲ許サス劍術棒術

柔術砲術ノミ入學ヲ許ス學問弓術ノ如キハ師範家ニ就テ學フヲ許ス弓術ヲ學フハ先手組ニ弓隊ヲ備レハナリ

私費游學ハ文武士族卒ノ別ナク許可ス他年大成ノ見込アル者ハ官費ヲ給ス是ヲ特例トス

講義聽問ハ月六際四ノ日經書九ノ日兵書上ハ藩主諸大夫ヨリ下ハ諸士准士族ニ至ル迄トス卒ハ出席ヲ許サス

平民ノ子弟敎育方法 平民ノ子弟敎育方法ナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 檢束ヲ受ケス自由開設ス

告同盟若有病疾事故不能赴期者於本名下書其故訓導豫設二簿逐次署諸生名一呈惣教一呈大夫及期惣教諸大夫皆造焉
始試蒙雅句讀次試句讀師諸生員講說試業之式休矣

一文武如車之兩輪不可偏廢館之前後及左方設講武場數所弓馬槍劍諸伎之士皆來演武亦各有其師但藝同而派異者分時
辰相互修其派之業不許相妨有廢缺

一凡生員入館門也須履烏正著必先告學鑒而後就業必揖左右人須歛襟正坐進退安祥矣劇浪笑傲致擾晤或酣酒狂歌談及
淫褻或謗誹時政臧否人物或尊蔑視卑々傲尊長侮幼々陵長或刻柱畫壁凡席縱橫退息便舍私謀飲膳凡此數者皆有犯者
立加究治

一凡典籍有一人置管鑰掌出納乞覽者請諸其人假之其卒業也照數還上不許折角唾搗毀損敗爛携去出門

一凡人士新入學先謁教授先生署姓名年庚於弟子簿雖僧坐農貴苟有志者來請則亦許留學肄業且在館中不敢立士庶之分
也但試業之式不及此

一館門以卯開以申閉管鑰則待肄業者悉出而上焉

一一日之中每旬放一日休暇日月朔日望日念八暇前一日爲覆讀日期一諸生之業不立課程學問長進亦不易知也今定設六
科句讀卒業者爲一科通孝經論語爲一科周易孟子爲一科周官儀禮々記爲一科春秋三傳爲一科每卒一科必稟惣教々々
簿記之他日上班補助教句讀師等闕

職名及ヒ俸祿 總教 教授 訓導師 蒙養師 句讀師 學鑒 習書師 幼儀師 役料扶持米等詳ナラス

職員概數 總教壹人 教授壹人 訓導師五人 蒙養師壹人 句讀師五人 學鑒壹人 習書師三人 幼儀師壹人 武教師

壹人ツ、坊主(有髮)二人 門衛壹人ツ、小使壹人

生徒概數 通學生文武合シテ二百餘名 寄宿生無之

束脩謝儀 適宜定格ナシ

學校經費 藩費ト雖總教師之ヲ會計官ニ達シ之ヲ辨ス今其數ヲ審ニセス

藩主臨校 藩主紀伊守時代屢臨校アリ諸公子ノ如キハ每日有之

祭儀 學校ノ奥隅ニ假廟ヲ設ケ文宣王ノ聖像ヲ安置シ春秋上丁ノ日ヲ以テ釋奠釋菜ノ禮典ヲ行フ其禮大概丁祭儀注ノ式

ニ從フト雖ハ捧拜等ノ唐禮ヲ用井ス簠簋饔豆ノ如キハ其名アリト雖白木ノ三寶ヲ以テ之ニ代ヘ禮拜ハ藩主諸大夫以下
準士族ニ至ル迄神酒ヲ受テ挨次退出ス

蒙養師壹人 率孝經論語書經卒業者略施講解喻大義使其知文理字義油然而發好學之心矣其書孝經爲始次論語次尙書雜以蒙求史略亦可也如學庸意味深淵非蒙稚所易悟宜待其涵養貯蓄所長進而後講授

句讀師六人 每日二人更番凡授蒙生句讀宜考利鈍察記性其七八歲童兒宜授五字七字若夫強記超他及年齒稍長者乃自五葉至十葉務使淹通熟誦至不可遺忘也爲之要其授業也必先按昨授處不差一字而后始施今之授但十歲以上不在此限爲之句讀職

學鑒壹人 置校勘簿令日就館者入焉也必告々焉也必記其姓名時辰出焉也亦爾於歲終質勤怠議黜陟取證於茲簿若一月之中空缺三日者寄書催督其差入館時辰者必質其故不少假也別有學鑒長時來鑒視諸藝業

習書師三人 凡作字之用簡牘往來姓名記注一日不可無之也幼而不習則有終身不能執筆者事之缺無過此矣今誨蒙稚一從館閣通行草體及年稍長人々異趣則顏歐蘇米亦各從其所好爲可不必以此律彼也每月三次立集會日臨寫一幅呈之其師乞批點爲進取之地爲之習書師職

句讀式 凡蒙生受句讀者以入館早晚爲之先後其受業也整飾威儀拜揖其師其退也亦然須謹慎聽受進退安祥勿有唔咿含糊舉止草率若或戲謔笑傲以貽於旁聽者句讀師從容敦喻若或數犯不敢聽者密加譴責

覆讀式 每月三次立覆讀會句讀師六員鑒之考蒙稚年齒記性或一卷或二卷覆讀其所受書語音琅然一字不蹟一字不失則惣教敦加稱讚若或誤記妄認或一紙中遺失數字者待暗熟淹通而后授其次

會讀式 訓導壹人坐上頭探闔定所講次序既而當次者講所可講者有壹人發難起問問對往復其義不決則質訓導々々判畢而後及其次若訓導判衆未允受質督學其討論問別人不得橫發問致喧咭矣

講說式 右之說經有執經執讀侍講之方今所立式不必依此每月六次刻時辰督學或訓導掌之國子大夫諸執事皆造焉講主容貌端嚴音吐清亮開諭明暢令聽者油然有喜躍之心矣善誘之方爲之要聽衆宜靖恭肅清審聽信受勿有回瞻廣咳起居雜沓坐次一從朝班

文會式 限日設會訓導師輪次掌之題則記序論贊書各量生員力授體若蒙稚未能辨文體者先教譯文々々之法擇取本朝古籍易翻者五十或百各以草字書之與生員譯之作文之捷徑爲之妙會日席上命題亦惟量生員力亦多主譯文文既成則淨書一紙呈訓導乞改竄訓導朗讀一遍衆皆恭默而聽於是會罷

詩會式 每月二次立會其式一與作文同亦各量生員力以授體始則五絕次七絕次五律次七律次古體要在令蒙稚馴文字試業式 本藩例一月試一藝曰學問曰射曰御曰作字曰使鎗曰擊劍曰拳法其他火炮使棒以時舉之其式先期二日以回章遍

テ混御歎ケ敷被思召候能クハ取續キ致稽古候儀ト一段ニ思召御咄手相直リ思召通り御世話可被爲届御時節御待被遊候テハ其期モ遠ク年頃ノ者ハ猶更時ヲ失ヒ可申且ツ人材ヲ長スル根基ニ付難被捨置ケ成ニモ諸稽古所ハ所々相建御手宛モ候ハ、一同難澁中ナカラ少シハ便宜ニモ可相成ヤトノ思召ニテ御手元金ノ内乍少分右御用金御下ケ被差出候間是ヲ以テ此御時節故先ツ如何様トモ致シ思召之端相立一同稽古致シ安キ様申談可取計旨被仰出候同所役ニモ被仰付候ニ付一同勝手次第罷出御定目等相守稽古可致候尙又追々被仰出候儀モ可有之候

安政二年^{月不詳}兵學^{越後}

テ加ヘ練兵ヲ講セシム

舊記傳ハラス唯口碑ニ實ル以下全シ

慶應三年七月兵法ヲ改テ西洋ニ倣ヒ文武兩道倍擴張セシム明治二年七月大改革ヲ行ヒ諸職教員ヲ廢シ文武總裁及督學ヲ置キ諸職名ヲ改メ更ニ適任ノ者ヲ揀擢シ且英學科ヲ加ヘ初

テ卒族ニ入校ヲ許シ漢及英學科寄宿生ヲ置キ專藩士ヲ策勵ス全三年十一月藩政ヲ改革シ一層文武ヲ更張ス仍テ文武督學ヘ左ノ達令アリ

今般藩政改正委細申問候通ニ有之文武之兩道ハ當今ノ專務ニテ一際盛大ニ振起致候様有之度尤學校御規則ノ儀ハ追テ從 朝廷可被仰出哉ニ付其期ニ至リ尙申問候儀可有之候處圖藩扶助不行盾尙又減米モ申付候程ノ儀ニテ銘々家計ニ屈托致候場合ヨリ自然懶惰ノ風習ニ流候様ノ儀有之候テハ以ノ外ニ付夫々文武館ニ出頭ノ規則相立今般申問候通ニ付其旨相心得彌以文武更張致候様可致勘辨候

全四年八月藩ヲ廢シテ小田原縣ト改メラル學校如故全年十二月廢縣乃新嘗足柄縣ニ屬ス全五年四月廢校

教則

素讀川書 四書、五經、文選〇講讀用書 小學、孝經、近思錄、四書、左國史漢、五經、八大家文 外英學科用書不審

素讀授業ハ自辰牌至午牌^{但暑中ハ卯牌ヨリ至巳牌以下全シ} 講讀授業ハ自辰牌至未牌 素讀科溫習ハ每月一回トス 四書講義及輪講ハ每月六回トス 詩文會ハ每月三回トス 習字科授業ハ自辰牌至午牌 全上小席書ハ每月一回大席書ハ每年三回トス 武

藝授業ハ各科毎月六回午后ヨリ至薄暮又隨時三十日及五十日日間等ノ別稽古ヲ施ス 騎射及甲冑馬術科ハ毎月一回トス 弓鐵科競爭會ハ毎月一回トス

學科學規試驗法及諸則 漢學、英學、醫學(漢) 算術 筆道 習禮 弓 馬 劍 槍 砲術 兵學 柔術 棒

入校生徒ニハ文武兩道ヲ研究セシム然レモ望ニ依リ文學或ハ武術ノ一科ヲ專修セシム

學習年限ハ確定ノ期ナク一藩ノ子弟凡九歲以上ニ至レハ入學ヲ許シ卒業后ト雖頑白ニ至ル迄其好ム處ノ藝文ニ游ハシ

メ亦家塾等ニ就學スルヲ許ス

學校構造及建物圖面（缺ク）

舊小田原藩

學制

學事上ノ諸制度 詳ナラス但藩立學校沿革要畧ニ粗概況ヲ觀ルヘキモノアリ

士族卒ノ子弟教育方法 文政五年藩學校ヲ創設シ藩士ナシテ文武兩道ヲ兼修セシム卒族ニハ別ニ手當金ヲ與テ專テ武術ヲ研究セシム明治二年七月ニ至リ始メテ卒族ニ入學ヲ許ス藩士ヲ策勵シテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシム又和漢學洋醫術等ノ生徒ヲ撰擇シ藩費ヲ以テ他國ニ遊學セシム自費遊學ヲ願フモノアレハ亦之ヲ許セリ全五年四月ニ至リ舊學校ヲ廢シ共同學校及ヒ日新館ヲ開設シテ修學セシム

平民ノ子弟教育方法 藩立學校ニ於テハ平民子弟ノ入學ヲ許サ、リシト雖亦農民ニ學事ニ從事スルヲ禁止シタルヲアルチ聞カス家塾寺子屋ニ於テ隨意ニ修學セリ明治五年四月小田原驛ニ共同學校及ヒ日新館開設以來該所人民子弟ヲシテ士族ト共ニ學ニ就カシム

家塾寺子屋設置ノ制度 之ヲ開設スルニ奉行郡宰里正等ノ免許ヲ受ル如キ檢束テク何人ニテモ自由ニ開設スルヲ得タリ

學校

校名 諸稽古所 一名集成館 文武館（明治二年六月改稱）

校舎所在地 舊小田原城内二ノ丸内 相模國足柄下郡小田原驛幸町一丁目

沿革要略 文政五年正月設立 舊小田原藩主大久保加賀守忠真京坂ノ祇役ヲ畢リ暫ク封地小田原城ニ滞在シ親シク藩地ノ情況ヲ視察ス蓋文武ハ治國ノ綱領ニシテ猶兩輪ノ如シト雖昌平ノ久キ兩道ノ將ニ地ニ墜ントスルヲ憂ヒ身自ラ節儉ヲ行ヒ用度ヲ減シ手元金千兩ヲ付シテ教育ノ資本トシ學校掛職員ニ資金繁殖方法ヲ施サシメ利子ト藩費トヲ合セ以テ開校維持ノ術ヲ行ヒ藩士ヲシテ文武兩道ヲ兼修セシム

藩士一役一人ヘ創學ノ達

諸稽古所御取建ニ付テハ兼々御内含ノ儀被爲在候得共御時節不宜既ニ先達テ嚴敷御取締モ被仰出稽古御手宛モ被相止候程ノ儀殊ニ當時無御據格外ノ減米テモ被仰出候次第何分諸般御手不被爲届併右様ニテハ一同稽古モ難出來形ニ

一習字師範ノ者被仰付候間致入門度面々ハ勝手次第第可差出右門弟ニ無之面々ニモ清書席書ノ定日ニ罷出候義ハ是又勝手次第ニ候事

此外掟等アリ不審以下口碑ニ資ル

習字淨書ハ毎月三回トシ生徒ニ筆紙ヲ與ヘ年二回墨一挺ツ、付與ス

書籍及武藝必需ノ器械ハ生徒ノ請願ニ依テ貸與ス練兵生徒ニハ彈藥ヲ與ヘ或ハ銃炮ヲ貸付ス

職名及俸祿

諸稽古所 家老一人 諸務ヲ總裁ス但政堂ヨリ兼任○年寄一人 職總裁ニ亞ク但以上○用人一人 裁定ニ參與ス但

全上○諸稽古所奉行三人 年給銀五枚、番頭席ノ者ヲ以テ任之職務ハ諸稽古ノ實況ヲ察シ其得失及生徒ノ勉否ヲ監督ス○全目附三人 年給銀七枚、小與頭ノ者^{即半長}ヲ以テ任之職務ハ諸稽古ノ實況ヲ監察シ又庶務會計等ヲ監理ス○世話役九人 年給銀五枚、文武出精ノ者ヲ以テ任之職務ハ諸稽古ノ庶務ヲ掌リ又諸教場ニ臨ミ生徒ノ勉否ヲ視察シ以テ獎勵ノ事ヲ司ル○荒物懸一人 年給米五俵、番外又ハ卒族ノ者ヲ以テ任之職務ハ出納營繕武器什具等ノ買入等ヲ管ル

學頭三人 年給銀五枚、講讀ノ教授ヲナス○助教六人 年給銀三枚、素讀ノ教授ヲナス○醫術教師二人 年給銀二枚○筆道教師二人 年給銀三枚○習禮教師一人 年給銀二枚、(以下全シ)○弓道教師二人○馬術教師三人○劍術教師五人○槍術教師二人○砲術教師七人○柔術教師二人○兵學教師三人○棒教師一人

文武館 總裁一人、大參事ノ内兼任○副總裁一人、權大參事ノ内兼任○文藝學一人 年給金三十八兩○武督學一人 年給金三十八兩○文武取締五人 年給金三十兩、半隊長兼任○會計主事一人、政堂會計主事ノ内專勤○知管廿一人内士族十二人 年給十五兩、下士族三人全十兩、卒族六人全八兩○查監一人、政堂查監ノ内專勤○雜務掛二人 年給金十兩○御國學教師一人 全十二兩○一等文教師一人 全卅六兩○二等文教師三人 全卅二兩○一等文助教(國學)一人 全九兩○一等文助教三八 全廿五兩○二等文助教(漢學)三人 全廿二兩○二等文助教(英學)一人 全十五兩○三等文助教四人 全十九兩○習字教師二人 全二十兩○算術教師二人 全二十兩○算術助教一人 全十四兩○醫學教師一人 全四兩○砲術銃陣教師三人 全十八兩○砲術銃陣教師試補二人 全十八兩○銃陣教示十二人 全十五兩○砲術教示十二人 全十二兩○武教示十人 全十四兩○喇叭教師一人 全十六兩○馬術教師四人 全十兩○柔術教師二人 全十兩○劍術教師五人 全十九兩○劍術試補五人 全十八兩○棒教師一人 全八兩

素讀科溫習ハ毎年四時ニ試ム 素讀科講讀科復習試験ハ隔年毎ニ試ム 各科藝術ハ毎年四時ニ試ム

素讀試験優等ノ者ハ筆紙若干ヲ賞與シ全科ヲ終ル者ハ復修試験ヲ行ヒ及第スル者ハ政堂ニ於テ下緒一組ヲ賞與ス受賞者禮服ヲ着シ掛重役及師家ヘ同禮ス 講義試験優等ノ者ハ賞與素讀試業ト同シ其全科試験及第ノ者ハ特別ノ賞與アリ但賞品不詳整服同禮上ニ同シ 武術免許ノ者ハ金三百疋允可皆傳ノ者ハ金五百疋皆政堂ニ於テ之ヲ賞與ス但禮服同禮上ニ同シ 一周年中出席度數文武合テ一千度以上ノ者ハ賞品ヲ與フ 月次弓鐵競爭會及習字科大席書別稽古等優等ノ者及拔群出精ノ者ニ賞品ヲ與フ各差アリ

每歲正月廿日ヲ以テ諸稽古初ト定メ出席ノ大人ハ酒肴ヲ未冠者ニハ餅菓子ヲ下與スルヲ以テ例トナス肄業ノ次第

學問ノ道ハ元來廣大故初學ノ者多岐ノ惑ヲ起シ躡等ノ弊モ往々有之ニ付肄業ノ次第左之通可相守事

一經科 凡入學ノ者ハ先小學書ヲ熟讀シ學問ノ基本ヲ可立事 小學畢テ四書ニ及其次第ハ學論孟庸トスヘシ近思錄ハ四書ノ階梯ト雖初學ノ者却テ難辨場合モ往々有之間力付後研究スヘキ事 四經ハ易書詩春秋ノ順有之トモ易ハ精微故詩書春秋畢リテ後此書ニ廻リ次ニ可及三禮事 附瀛洛關閩ノ書ヲ首メ經義ノ羽翼タルヘキ類ハ力量次第者究可致事

一史料 編年正史ヲ熟讀シ歷代ノ制度沿革ヲ究メ治亂興亡ヲ辨ヘ有用ノ處ヲ第一トスヘシ且本朝ノ六史律令格式等ヲ始メ古今ノ事跡探索心掛可申事

一文科 古文ヲ熟讀シ唐宋八大家ニ法ヲ取り自家運用ノ文辭ヲ相嗜可申事但詩賦ニ至リテハ漢魏以來世運ニ隨ヒ吟詠ノ休異同有之ト雖必唐ニ法ヲ取り可申事

右之通相心得ヘシ併講會ノ書ハ指導者ノ差圖ニ隨ヒ可申游息ノ暇ヲ以諸子百家稗官小說タリトモ異聞ヲ博ル類ハ涉獵シテ妄リニ博雜ニ不相成様可有之事

創立ノ節達面

一諸稽古所掛リ御役人ノ儀ハ御趣意被成御坐席ノ不拘高下被仰付候事

一諸稽古所入學ハ御番帳外以上ノ事

一具足早着稽古ノ爲メ御小性具足被差出候間勝手次第可致稽古事

一書籍致拜借度面々ハ稽古所世話役ヘ可申達候事

許可セリ且藩主ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞シ輪講等ヲナセリ

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學スルモ又藩立學校へ入學スルモ各自ノ意向ニ任ス

鄉學校開設以來該村人民子弟ハ勸誘シテ成ルヘク入學セシメ寺子屋ニ於テ修業スルハ許サス尤モ他ノ家塾ニ修業スルハ各自ノ意ニ任ス且藩立學校長時々巡視シテ學事ヲ獎勵セリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ他ノ檢束ヲ受クルナク何人タリモ自由ニ開設スルヲ得但同藩士ニシテ家塾ヲ開クハ許サス

學校

校名

興讓館 文武館ト總稱シ之ヲ別テ文館武館トシ文館ハ即興讓館ナリ

校舎所在地

相模國愛甲郡下荻野村字山中即チ舊荻野山中藩陣屋敷地内ナリ

沿革要略

舊山中藩主大久保氏舊幕府時代ハ相模國愛甲郡荻野村字山中ニ陣屋ヲ置カレ僅ニ五六戸ノ藩士在留シ同國民

事ノ事務ヲ取扱レシマテノ所明治元年十一月大久保敦義任藩知事藩主始メ士族ニ至ルマテ悉皆山中在任トナリ藩主儒學ヲ尊崇シ以テ學校ヲ設立セリ盡力セシ者ハ藩士岡本隆德松下藏人石橋拾造等ナリ然ルニ明治四年十月廢藩置縣ノ令ニ依リ大久保氏ハ東京在住士族ハ各地へ離散シ學校維持ノ方法之ナク閉校ノ儘存在セシニヨリ明治六年小學御發令ヲ遵奉シ再ニ該校ヲ開キ舊名稱ヲ以テ興讓館トス後又改稱シ今ノ山中學校是ナリ

教則 三字經小學四書五經靖獻遺言文章軌範國史略日本外史日本政記十八史略等ナリ 授業ハ毎日午前九時ヨリ十二時

マテ素讀午後二時ヨリ四時マテ論講一六ノ日講義

學科學規試驗法及ヒ諸則 漢學和算馬槍劔砲術柔術等ヲ教授セシム生徒ニハ必ス文武兩道ヲ兼修セシモノニテ文學ヲ三

等ニ分テ武術モ亦三等ニ分ツ文學ノ一等ハ武術ノ免許二等ハ目錄三等ハ切紙ナリ文武トモ六ヶ月毎ニ試驗ヲ行フ此試驗ニ落第スル者ハ三日間押込申付ラル進級スル者ハ多少ノ賞與金ヲ下賜ス此時ニハ午前十時禮服着用藩廳ニ於テ大參事之ヲ執行ス罰則ヲ受クル者ハ午後五時監察役所ヨリ其宣告書ヲ下附ス且文武トモ無斷欠席スル者ハ一日間押込申付ラル然レモ病氣其他事故届出ル者ハ此限リニアラス

職名及ヒ俸祿

文武館執事 全副執事 助教 主簿

漢學寄宿所 舍長二人 年給金廿八兩〇生員取締三人 全十一兩

職員概數 創立後 教師三十九人 事務員二十人〇變革後 教師八十四人 事務員卅三人

生徒概數 通學生徒人員不詳 寄宿生徒百十人內漢學八十人英學三十人(藩費)

束脩謝儀 無之

學校經費 創立后一周年學費凡金五百兩學校資本金利子ハ藩費ヨリ支出ス以下全シ

慶應二年以來年費額凡金二千五百兩

文武館年費額凡金三千兩

藩主臨校 藩主在城ノ時ハ毎月二三回文武各教場ヲ巡見シ又教師講義ノ時ハ臨席聽聞シ生徒復習試驗ノ時ハ臨時ニ監臨ス

祭儀 校中ノ上院ニ聖像ヲ奉シ正月元日ヨリ三日間午前ヲ以テ釋奠ノ式ヲ行ヒ藩士ヲシテ拜禮セシム祭事ハ文學教師助

教タルモノ之ヲ管リ諸稽古所奉行及全目付臨席シ重役ノ者及學校懸リ役員ノ參拜スルモノハ酒及胙ヲ頒ツ拜禮スル者ハ皆整服タリ

釋奠ノ備ヘ物 香爐一個 神酒一對 簞簋一個 鮮饌一尾

學校構造及建物圖面 別紙之通

藏書種類部數 經書百二十三部 子類百四十部 歷史百九十八部 集類二十九部

舊山中藩

學制

學事上ノ諸制度 維新ニ至リ藩主學事獎勵ノ爲メ時々布告諭達アリシ趣ナレモ今詳ナラス

藩立學校ニ於テハ學業進步ノ爲メ生徒ノ等級ヲ三等ニ分ツ〇第一等特生 素讀ヲ終リ四書ノ大意ヲ通解シ及日本外史日本政記國史略十八史畧文章軌範靖獻遺言等ヲ講讀シ得ルモノ〇第二等秀生 素讀ヲ終リ日本外史日本政記國史略等ヲ講讀シ得ルモノ〇第三等萌生 素讀ヲ終リ小學及國史略等ノ輪講ニ掛ルモノ

右三種ノ等級ニ入ルモノハ賞與祿トシテ特生ニ三石秀生ニ二石萌生ニ一石ヲ下賜シ助教或ハ補助トス士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ヘ必ス入學セシムト雖各自ノ意向ニヨリ家塾等ニテ修學及私費ヲ以テ他ニ遊學スルハ

家塾寺子家設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ其校主カ自費ニテナスヲナレハ藩主ト雖凡之ヲ檢束シテ左右スルヲナシ故ニ僧侶藩士又ハ平民ニテ之ヲナスモノ多シ

學校

校名 藩立學校ハ遷喬館ト號ス然凡弓馬槍劍柔砲術等ノ學舍ハ單ニ稽古場ト稱シ別ニ名稱ヲ附セス

校舎所在地 遷喬館及弓馬槍劍柔ノ稽古場ハ外郭内字裏小路ニアリ砲術稽古場ハ全所字天神小路ニアリ兵學ハ別ニ校舎ナシ教師ノ家ニ就テ習フ者アルノミ習禮ハ遷喬館ニ於テス

沿革要略 文政年間藩主忠正藩士兒玉南珂ニ命シ校舎ヲ創立セシム忠正一ニ南珂ヲ爲ス所ニ任セ毫モ干渉セス適宜處理スルヲ聽ス爾來學事駸々トシテ進ミ一藩子曰ヲ誦セサルノ輩ナキニ至ル明治維新ニ至リ江戸詰ノ藩士ヲシテ悉ク國ニ歸ラシム故ニ城内藩士ヲ措クノ家ナシ因テ之ヲ廢シ其舍ヲ以テ藩士某ノ家宅トナス舊藩士矢島保之高田善教藤咲茂和等之ヲ慨キ城下久保宿町ナル舊本陣ヲ借リテ校舎トシ漢籍ヲ教ヘ加ルニ家塾ニテ習字ヲ教ヘシ深井吉孝全算術ヲ教ヘシ新井永賴等ヲモ此舍ニ合併セシメ士民ノ別ナク入校ヲ許ス因テ士民ノ子弟之ニ入校スルモノ二百名許リノ多キニ至リシカ埼玉縣令野村盛秀公立學校ノ他ハ別ニ學校ヲ設クルヲ禁シ屬官笹田默助ニ命シ就イテ之ヲ廢セシム實ニ明治五年ナリ從來此校ノ生徒ハ十五年以上ノ者多キヲ以テ深ク舊來ノ風習ニ感染シ公立學校ニ入ルヲ欲セス當時轉シテ公立學校ニ入リシ者ハ僅ニ三十名ニ過キサリシト云フ

教則 舊時辰器四點鐘ヨリ始メ九點ニ至ルマテ經史百家ノ諸書ヲ教授ス其方出頭ニ從ヒ順ヲ追テ之ヲ教授ス
學科學規試驗法及諸則

文學及武術ヲ兼修セシムルモ脅迫シテ之ヲセシムルヲナシ文學ト武術トノ程度ノ比例ハ凡ソ四書等ヲ講讀セシ者カ武術ノ目錄位ニテ無點ノ書ヲ講讀スル者カ武術ノ免許以上ニ當ルヘシ一科ヲ專修スルモ妨ケナシ且ツ學習期限ハナシ試驗ノ方ハ毎一年一度文武共重職ノ者見聞スルノミ又素讀調ト云ヒ毎月一回之ヲ施行ス其役員ハ豫テ藩主ヨリ之ヲ命ス素讀調ハ會頭一員目付一員執筆二員列席シ先ツ生徒ヲ一員ツ、召出シ目付抽籤シテ其讀書ノ箇所ヲ定メ高聲ニ何々ノ章ヨリ何々ノ章迄ヲ讀ムヘシト云フ於茲乎其生徒ハ正面ニ向ヒ之ヲ朗讀ス誤リナキヲ以テ上ノ上トシ若シ誤アレハ役員各之ヲ帳簿ニ記シ全ク讀了スルヲ待テ會頭ヨリ再讀ヲ命シ自誤ヲ正スモノヲ中ノ上トシ三讀シテ尙ホ誤ルモノハ會頭之ヲ説明ス之ヲ下ノ上トス澁訥シテ讀ム能ハサルモノヲ以テ下ノ下トス而シテ其間少シノ差等ナキ能ハス故ニ之

執事少參事
兼務官給廿五石〇副執事大屬
兼務官給十六石〇助教權少屬
相當官給七石〇主簿等外

官給五石

職員概數

執事一人〇副執事校長
トシ一人〇助教二人〇主簿四人〇會計掛權少屬
一人 等外二人

生徒概數

寄宿生三十人 通學生百七十人

通塾ト稱スル者五十八人
通學生ナル者百廿八ナリ

皆藩費ナリ唯食料ハ自費トス

束脩謝儀

束脩金廿五錢 謝儀ナシ

學校經費

舊記等ナキヲ以テ調査スルノ道ナシ

藩主臨校

藩主臨校シテ講義ヲ聽聞ス生徒試驗ノキハ藩主及ヒ大參事少參事其他役員列席ス

祭儀

毎年二月廿七日八月廿七日兩度孔子ヲ祭ル藩主以下一同禮服着用

學校構造及ヒ建物圖面

地坪概數五百坪建坪百四十一坪構造別紙繪圖面ノ如シ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數

學校ニテ出版翻刻セシ書籍ナシ藏書ハ廢藩移轉ノ際如何ナリシヤ

詳ナラス

舊岩槻藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ヨリ布令諭達ノ如キモノヲ出セシメナシ學事出精ノ者ニハ藩主ヨリ毎年一回褒賞ヲ行フ而シテ其褒賞ハ身分ニヨリテ之ヲ區別シ戸主又ハ勤務アル部屋住ニハ金錢ヲ賜ヒ勤務ナキ部屋住ニハ物品ヲ與フルナ例トス

士族ノ子弟教育方法 讀書ハ藩立學校ニ入學スルヲ要ス習字ハ寺子屋ニ行クモノトス年々三四名藩立學校ノ生徒中藩費ヲ以テ江戸ニ遊學セシメラル者アレバ其金格僅少ナレハ到底各自ノ私金ヲ補ハサル能ハフ藩費ヲ以テ遊學セシ者ハ大概篤志ノ輩ニテ其成業モ隨テ速ナリ私費遊學ハ勿論之ヲ許セリ現ニ維新以前マテ江戸ニ出テ、林家其他ノ門ニ遊フモノ絶エス又他藩ノ鴻儒ヲ聘シ藩主自ラ率先シテ其講義ヲ聞キ闔藩有志ノ士ヲシテ生徒ト共ニ之ヲ傍聽セシムルノ制アリ

平民子弟教育法 家塾寺子屋ニテ修學スル皆各自ノ隨意ニ任セ決シテ窮屈ナル制度等ヲ設ケス農民等カ學事ニ從事スルヲ禁スルカ如キ制度アルヲナシ卒ノ子弟モ此中コアリ又農民ニテ藩士ノ家塾ニ至リ勉學スル者常ニ絶エス然レ此頃ノ人民ハ幕府三百年來ノ慣習ニテ同等自由ノ權利アルヲ解セス士族ハ平民ヲ見ルヲ禽獸モ雷ナラサル弊習ナレハ同シク生徒ニテアリナカラ士族ノ子弟ハ平民ノ子弟ヲ呼棄ニスルヲ以テ常トス平民ノ子弟モ亦之ヲ甘シテ怒レル色ナシ

舊六浦藩

學制

學事上ノ諸制度、士族卒ノ子弟教育方法、平民ノ子弟教育方法、家塾寺子屋設置ノ制度

右ノ諸項目詳ナラス

學校

校名 明允館 同分校

校舍所在地 武藏國久良岐郡社家分村現今三 同分校全村

沿革要畧 從來定府ノ藩制ニ付藩立學校ナキ處維新前一同藩地へ轉居セシニ付學校ヲ設立セリ時ニ慶應四年三月ナリ維新後廢藩置縣ノ時ニ至リテモ猶繼續セシカ六浦縣ヲ廢セラレシモ學校モ亦廢止ニ屬セリ藩士ニ著名ノ人物或ハ事業著書等ナシ

教則

學級 一等學 四書及五經中一二部講義畢リ史漢通鑑并ニ本朝史類ハ大略通スル者○二等學 四書講義畢リ綱鑑易知錄及國史略日本外史等へ通スル者○三等學 經史類素讀畢ル者○初學 入學以上素讀中ノ者

學課 毎月三八ノ日講釋(經書國史) 二十五ノ日輪講(四書) 四七九ノ夜輪講(五經) 毎日午後素讀 六日詩會 十六日文會 一ノ日休業

學科學規試驗法及諸則 漢學ノ一途ニシテ算術筆道ハ分校アリテ之ヲ教ヘタリ弓馬槍劍砲術柔術游泳等ハ藩内嚴兵館ト稱スル武術場アリテ之ヲ教ヘ學校ニテハ關係セズ子弟必ス文武兩道ヲ學フノ定規タレモ敏鈍ニヨリテハ止ラ得ス一科ヲ專修セシムルアリ文學ト武術トノ程度ノ比例ハ孝經小學四書ヲ講シ得ルモノハ武術ノ免許ヲ格テ同シタレモ同席スルニ至リテハ武術ハ文學ノ次席タリ學習ノ期限ハ入校ハ七歳ニ始レモ退校ノ期ナク自己ノ望ト學業進歩ニヨリテハ二十歳以上三十歳ニ至ルモ之ヲ論セス試験ノ法ハ藩主之ニ臨ミ家老目付出席シテ頭取之ヲ試ム素讀講義ヲ聽キ詩文ノ題ヲ與テ作ラシム等ナリ賞譽法ハ三等ニ分チ書籍料金一兩ヲ上トシ金三分ヲ次トシ金二分ヲ下トス賞アルモノハ禮服シテ家老目付儒役ノモノへ廻禮ス罰則ハ寄宿ノ者門限ヲ失シ或ハ無斷シテ外ニ止宿シ通學ハ病氣等ニ非スシテ途中ヨリ

ヲ酌量シテ上ノ上中下及中ノ上中下下ノ上中下ヲ定メ九等ニ分ツ又九等盤ナルモノヲ設ク其制段々ノ線條アリ第一段
チ金色トシ之ヲ上ノ上トス第二段チ銀色トシ之ヲ上ノ中トス第三段ヲ黃色トシ之ヲ上ノ下トス第四段ヲ青色トシ之ヲ
中ノ上トス第五段チ赤色トシ之ヲ中ノ中トス第六段チ綠色トシ之ヲ中ノ下トス第七段チ淡紅色トシ之ヲ下ノ上トス第
八段ヲ白色トシ之ヲ下ノ中トス第九段ヲ黑色トシ之ヲ下ノ下トス生徒試験ノ結果ニ從ヒ其姓名ヲ記セル小札子ヲ該當
ノ段ニ掛ケ以テ衆生及藩主ニ示ス且姓名ヲ九等盤ニ掛クルニ當リ名札ノ下ニ布ク紙五枚アリ金銀黃青赤ノ五色トス金
チ最大トナシ以下漸次小ヲ加ヘ名札最小シ三回次キテ上級ノ結果ヲ得レハ先ツ赤紙ヲ名札ノ下ニ布ク尙ホ三回次キ
テ上級ノ結果ヲ得レハ青紙ヲ重ヌ追次加ヘチ金紙ニ至ル其間下級ノ結果ヲ得ルヲアレハ其時限り悉皆ノ布物ヲ剝奪ス
下級三回次クモノハ長ク剝奪ス
生徒中教誨ニ從ハス屢々訓誡スト雖モ馬耳東風ナル者ハ教師ヨリ父兄ニ申渡シテ退學セシムル位ニテ別ニ罰則等ノ設
ケナシ

職名及俸祿 頭取教員家祿三十俵三人扶持身分次給人席 世話役助教六石二人扶持身分中小性席

職員概數 教員一人 助教一人 小使一人武術稽古場ヲモ兼ヌ

生徒概數 漢學通學生凡四十人 武術通學生凡百人

束脩 多少隨意ニ納ル、モノトス

謝儀 當然ナキコトナリ居レモ盈暮ニ各生徒中ニテ些細ノ金凡ソ二百文カ二百五十文位ツ、チ云フ 轉集シ其勞ニ酬ユルモノトス

學校經費 經費ハ勘定所コテ賄フチ以テ何程ト云フヲ知ル能ハス當時學校ヘハ炭若干武術稽古場ヘハ薪若干ヲ請取ノ
風習ナリ學田ナトハナシ學費チ藩士ニ賦課スル如キヲナシ又學費チ増減セシヲナシ

藩主臨校 古來ハ藩主カ臨校セシヲナク毎年一回生徒ヲ殿中ニ招キテ藩主自ラ其講讀ヲ聽聞シ武術モ亦同シク之ヲ見ル
忠實ニ至リ部屋住ニテ在色セシ頃時チ定メス屢々臨校シ講讀ヲ聽聞スルヲアリ

祭儀 孔子ヲ祭リシヲナシ然モ兒玉琮チハ朔望廿八日祠堂ヘ酒菓ヲ供シテ之ヲ祭ル又庭前ニ菅原道真公ノ廟ヲ設ケ毎年
六月廿五日之ヲ祭ル

學校構造及建坪 茅屋平家凡四十坪許

學校ニテ出板翻刻 德教篇一冊 漂客紀事一冊

學校構造及建物圖面 學校新築ニ暇ナク藩地陣屋ニ接シタル一寺アリタルニ付之ヲ假用セリ其校舍ノ用ニ供セシハ四十坪ノ場ナリ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 學校ニテ出版翻刻セシ書籍等ナシ藏書ノ如キハ通常書籍ニシテ數十部ニ過キス

右ノ外學校ニ關スル舊記其他編史ノ資料ニ供スヘキモノ無之

舊長尾藩 轉封前ハ田中藩ト稱ス

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達ハ頗ル詳細ナルモノアリシモ其書類存セサレハ今之ヲ記スルニ由ナシ獎勵法ハ下條ニ記ス

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ子弟ハ藩立學校ヘ必ス入學セシメ若シ入學セサルモノハ其緣故ヲ記シ之ヲ學監ヘ差出サシム

卒ノ子弟ハ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學スルコトモ亦タ許可セリ

他國ヘ遊學ヲ請願スル者ハ之ヲ許可ス然レハ遊學中其業上達ノ者又ハ儒官ノ長子武技教官ノ長子ノ外ハ藩ヨリ費用ヲ給セズ

藩主正訥ノ代ニ至リ特ニ人物ヲ撰拔シ藩費ヲ以テ遊學セシメシコトアリ

毎月四ノ日儒官上校シ十三經通鑑ノ類ヲ講義シ藩士ヲシテ之ヲ聽聞セシム又九ノ日兵學教師上校シ七書武備志ノ類ヲ講義ス右ハ朝辰ノ中刻ヨリ巳ノ上刻マテニシテ家老ヨリ以下諸役人一同聽聞ス

平民子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學スルハ各自ノ意向ニ任セリ又藩立學校ヘモ入校ヲ許可セリ寄宿舍ノ設ケアリシモ多クハ石井氏ノ家塾ニ入り校ニ入ルモノ少シ

藩立學校分校二校ヲ假設シ各村ヘ肝煎ナルモノ四五名ヲ置專ラ平民子弟ヲ勸奨シテ入校セシメタリ

轉封後即チ明治二年頃ハ安房郡北條朝夷郡朝夷村ニ置ク

家塾寺子屋設置ノ制度 藩ノ許可ヲ得スシテ自由ニ開設スルコトヲ得

歸リ無故シテ數日不參スル等其事ニヨリ或ハ二日三日ヨリ十日迄ノ禁足等ヲ命ス入學ヲ許可セシニ付テハ廻禮ナシ學則

一學問ハ天下ノ大業ニテ修身治國ノ基本タルヘキ事ナレハ必實地有用ヲ心掛ケ章句文字ノ間ニ無益ノ力ヲ不可費宜ク聖賢ノ言行ニ注目スヘシ

一經ヲ講スルハ窮理正心修己治人ノ要ヲ得ヨ史ヲ閱スルハ古今ノ成敗作事ノ得失人物ノ正邪ヲ鑒スルヲ期セヨ詩文ニ至テハ學者修業ノ餘事偏ニ汲々スル勿レ然レモ懷ニ觸テ詠シ事ニ臨テ論スルノ以テ已ムヘカヲサル豈偏廢スヘケンヤ

一本朝ノ人國史ヲ讀スンハ有ヘカラス古來ノ成史其要ヲ見ルヘシ所謂國體ノ尊嚴ナル倫理ノ明著ナル百代列聖ノ鴻謨四海一姓歷々未タ嘗テ一人敢テ天位ヲ覬覦スル者アラス以テ今日ニ至ル所以ノモノ學者深ク察セスンハアルヘカラス

一進學ノ益ハ輪講ニアリ初學ノ中ハ廻讀ヲ勉シムヘシ

一應對辭讓ハ小學ノ專務タリ實中宜シク禮讓ヲ謹ム可シ

一齒ヲ班スルハ鄉黨ノ禮學校ハ宜シク德業ノ殿最ヲ以テ序ヲ定ムヘシ今疊中學級ヲ立ツ習業中一ニ此級ニヨルヘシ必少長ノ序ニ不可拘

職名及俸給 學校頭取始メ物頭ヨリ兼後少參事ヨリ兼俸給ナシ二季ニ金十兩宛ヲ給ス明治四年十月ノ調査ニ據レハ督學一人少參事兼助教持高ノ外三人

句讀師持高ノ外二人句讀師助持高ノ外一人館掌持高ノ外一人

右ハ維新前ヨリ廢藩ノ日ニ至ルマテ大同小異ニシテ大畧如此

職員概數 學校頭取一人助教一人句讀師三人同助二人館掌三人內二人ハ分校ニアリ算術筆道ヲ授ク計十人

生徒概數(分校トモ) 六十五人內寄宿生十人通學生五十五人寄宿生ハ飲食費ヲ自辦スルノミニシテ諸費凡テ藩費タリ

束脩謝儀 無之

學校經費(分校トモ) 米二拾九石七斗 一ケ年職員扶持渡 金六十兩 一ケ年賞與及雜費

右ハ年々少ノ増減アレモ大略此ノ如シ全ク藩費也

藩主臨校 毎月定日ノ講釋ニハ必ス出席シ且生徒ノ試業ニモ之ニ臨ム

祭儀 聖廟等コレナク春秋上丁日聖像ヲ掲ケ酒饌ヲ供ス藩主參拜家老目付等出席生徒一同禮服參拜ス

學校總裁ノ家老月番ノ者兼務セリ 教師及ヒ學監ハ藩ヨリ任選シ學監ノ上ニ大視察アリ是ハ大目附役ヨリ兼務セリ
助教ハ教師ヨリ薦舉ス毎年ノ暮ニ至リ勤惰ニ隨テ藩ヨリ金幣ノ報賞アリ 養蒙師ハ儒官ノ薦舉ナリ是ハ一人ノ主掌ニ
テ他ノ雜務ナシ日々上校セリ 句讀師モ儒官ヨリ命シテ其姓名ヲ執政ヘ差出シ是モ歲尾ニハ亦養蒙師同様ノ酬賞アリ
報酬ノ額ハ養蒙
師ヨリ僅少ナリ

江戸郎モ總テ同様ノ規則ナリシカ主掌ノ人員ハ不足セリ

職員概數 學校總裁一人 大視察一人 學監二人 督學一人 教官三人 助教十人 得業生三十六人 校掌二人 書籍
司二人 門衛一人 總計五十九人 教員ハ前條ノ如クニシテ増減アリ
生徒ノ概數 寮生五十人 生徒二百八人

束脩謝儀 定規之レナシ

學校經費 一周年ノ學費ハ大概定額アリト雖モ學事ノ弛張ニヨリ時々増減アリ

藩主臨校 藩主時々臨校アリ毎月四ノ日經義九ノ日兵書ノ講義ヲ聽聞スルコトアリ又自ラ生徒ノ試業ヲナスコトアリ
祭儀 毎年正月五日開校ノ節藩中一同禮服ニテ出校シ聖像ヲ懸ケ畧祭ス

釋奠ハ二月八月ノ兩度ニ畧祭ス

學校構造及建物圖面 構造ハ平屋ニテ草葺 地坪ハ凡六百餘坪ナリ

市ハ駿州田中ニアリシ學校ニシテ轉封後ハ假設ナルヲ以テ畧ス

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書ノ種類部數 出版翻刻セシモノ之レナシ 藏書ノ種類部數等ハ分明ナラス 書籍
ハ藩主ノ所藏ヲ用ヒ或ハ各自ノ所藏ヲ用フ藩主ノ所藏ハ概畧八九百部已上ナリ

舊花房藩

學制

學事上ノ諸制度

文化十二年藩廳ヨリ一家中ヘ布令

近來御家中ノ面々武藝諸流共出精致候者少ク等閑ニ成行候儀平生心懸不宜之事ニ候是マテ度々被仰出候儀モ有之儀
殊ニ横須賀表ハ御奉公モ間遠ニ候得ハ猶更向後無油斷罷出幼年ノ者ヲ引立俱ニ出精可致且又教授ノ者被仰付有之候

學校

校名 日知館 江戸藩邸ニアル學校名稱亦同シ

校舎所在地 駿州田中城大手門内ニアリ

轉封後本校ヲ安房國朝夷郡白濱村へ建築シ分校ヲ安房郡北條村及ヒ朝夷郡北朝夷村ニ假設ス

沿革要畧 學校創立ハ舊藩主正寛時代ニテ大畧今年ヨリ四十七八年前ニアリ 學校設立ニ盡力セシハ儒官石井繩齋門人

家老職遠藤俊雄及ヒ熊澤惟興等ノ數人ナリ 江戸藩邸ニテハ桐澤逸藏芳野金陵等ノ數人ナリ

教則 學規不詳

學科學規試驗法及諸則 日知館ハ後ニ畧圖スル通ニテ該長屋ニ於テ弓馬鎗劍砲術體術居合長刀等ノ武藝ヲ講習シ中ノ一

字ニハ文學兵學醫學素讀習字算學習禮ノ教場並ニ教師學監等ノ詰所アリ又乘馬場射的場ハ別ニ設アリ 武藝ニハ免許

目録初段ト三等ニ定リ 勿論武術ニ係テ段數多キモアレヒ 文學ハ唐本無點ノ書ヲ讀ム者ヲ免許ニ準シ一二經ノ大義ニ涉ル者ヲ

目録ニ準シ四書五經ノ素讀ニ差支ナキ者ヲ初段ニ準シ年々十二月其調査ヲナシ教官ヨリ執政へ申出學監モ亦其調書ヲ

差出シ執政ニ於テ其中立ヲ併考シ學業優等ノ者へハ藩主ノ紋服ニ酒肴料ヲ添ヘテ之ヲ賞シ學業ノ優劣ニ依リ酒肴料等

其實ニ差アリ 入校ノ年齡ハ一定ノ成規ナシ然レモ大概八九歳ヨリ入り文武ヲ學フ 寄宿ノモトニテハ 退學ノ年期モ亦同シ 試

驗ハ毎歲一次之レアリ學問ハ講義一二葉ヲ試ミ童子ハ素讀ヲ試ミ弓術鳥銃ハ的ノ中不中ヲ試ミ乘馬モ亦其術ノ優劣ヲ

試ム其他武技ハ仕合ヲナサシメ其優劣ヲ判ス當日藩主以下家老用人目附役等皆班座ス藩主自ラ試驗チナスコトアリ而

シテ其技ノ優劣ニ依リ物品貨幣ヲ賞與スル各差アリ 門人ハ年始五節句朔望ニハ師家へ見舞ヲナス慣例アリ(但朔望

ハ省略シテ至ラサルモノ多シ)

職分及俸祿

督學 教官 學監 後置大屬一人様大 屬一人少屬二人 助教 得業生 校掌 書籍司

右廢藩置縣ノモ左ノ如ク改稱ス

大助教 儒官 中助教少助教 助教 大中小得業生 句讀師ナリ

習字ハ 教師助教○習禮 同斷○兵學 同斷○算學 同斷○武藝ハ 教授ト助教ノミナリ

總テ教官ハ定祿之レナシ多クハ役向チ兼務シ坐席ニモ俸祿ニモ多少ノ差之レアリ

學科學規試驗法及ヒ諸則

學科ハ國學 漢學 洋學 算術洋學算術ハ明治三年ヨリ加フ 小笠原流等ノ仕附形等ナリ

生徒ニハ主トシテ諸般ノ武藝ヲ學ハシメ傍ラ文學ニ從事セシムルノ例規ナリ

生徒就學ノ年限ハ年齡十一二歳ヨリ同二十五歳ヲ限レリ

文學ト武術トノ比例ハ確タル儀ハ之レナキモ自講ヲ爲シ得ルモノハ武術ノ免許以上ト見做ノ慣例ナリ

春秋二期ニ試驗ヲ行フ藩主親臨スルコアリ之ヲ御覽ト稱ス又通常ハ重職之ニ臨ム之ヲ見分ト稱ス月々一度用人ノ前ニ於テ之ヲ行フ之ヲ吟味ト稱ス例規トス

生徒入學ノ節ハ禮服着用ニテ師範家ヘ回禮ス

職名

維新前ノ職名ハ左ノ如シ 學問所世話方 教授方 是ハ給人格ヨリ中小姓及小役人ノ者ヲ以テ之ニ充ツ其祿高給人ハ

十人扶持中小姓ハ三拾俵三人扶持小役人ハ貳拾俵乃至拾五俵二人扶持位ナリ但シ別ニ加役料ハ給セサリシ

明治三年ニ至リ左ノ職ヲ置ク 督學 教授 助教 准助教 是ヲ當時ノ官等ニ比スルニ督學ハ大屬教授ハ少屬助教ハ

權少屬准助教ハ史生ニ相當ス

職員概數 學問所世話方及教授三人以上十人以下 督學一人 教授二人 算術一人 助教四人 准助教三人

生徒ノ概數 通學生ハ五十人以上百人以下 寄宿生ハ五六人位但寄宿生ハ總テ官費ナレ私費モ亦許セリ

束脩謝儀 束脩ハ要セサレテ教官ヘ回禮ノ節門閭家ニテ銀一匁中等ニテ五分下等ニテ三分ヲ納ル

學校經費 最初ハ定額ナカリシカ明治二年ニ至リ三百石ヲ以テ校中諸般ノ費用ニ充ルニ至レリ

藩主臨校 前顯試驗法ノ部ニアル如ク春秋試驗ノ際臨校ノ上生徒ノ試業ヲ爲セシメ時々之レアリ

祭儀 正月二日ヲ讀初メトシ十二月十七日ヲ讀納メト稱ス而シテ一年ノ學業始終ノ際學校ヘ孔子ノ畫像ヲ掲ケ教官生徒

禮服ニテ出校シ神饌ヲ供ヘ拜禮ノ典ヲ行ヒ終テ神饌ヲ生徒ニ分與ス

學校構造 橫須賀城内坂下ノ谷ニアリシ校舍ハ木造平屋ニシテ地坪建坪等ハ今詳カナラス 廣塲村字松崎ニアリシ校舍

ハ木造平屋ニシテ地坪六百四拾八坪建坪八拾坪二分五厘ナリ 右兩様共建物圖面ハ今詳カナラス

雜事

一文化十五年藩主ノ前ニ於テ佐藤英介ヲシテ講釋ヲナサシメ教官ヲ見習トシテ聽聞セシメタルコアリ

得其子供素讀之儀モ彌爲精出人柄克生立候様被成度トノ御事ニ候

右之通文化十二年亥年被仰出其後度々被仰出面々心得可罷在候事ニ候之處今度從公儀被仰出候御趣意ノ趣ニ就テハ向後共若シ心得薄ク諸流共定日無斷モ不參都テ不嗜之面々有之候ハ、武藝懸ヨリ名前申立次第不得止取調候節モ有之候得ハ被得其意實事出精可致候

六月

覺

御家中惣領ハ勿論二男ニ至ル迄年頃ニ及諸武藝學問所へ入門不致儀有之候ハ、何等故障之譚掛御目附ヨリ親々へ可被承糾候事

六月

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校へハ士族ノ子弟ノミ入學セシメ卒ノ子弟ハ之ヲ許サス後明治二年ニ至リ其禁ヲ解キ卒ノ子弟モ入學スルヲ得セシム

士族ノ子弟ハ必ス藩立學校へ入學セシムルノ制ナリト雖モ又家塾等ニ於テ修業スルモ禁スルヲナシ時々官費生徒ヲ東京へ遊學セシムルヲアリ維新後ハ殊ニ多シ

平民子弟教育方法 平民子弟ニシテ藩立學校へ入學スルヲ禁シ只家塾寺子屋ニテ修學セシム家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ設置スルニ藩政ノ檢束ヲ受ルヲナク何人タリモ自由ニ開設スルヲ得タリ

學校

校名 學校ハ最初只學校或ハ學問所ト唱ヘシカ明治三年ニ至リ始メテ脩道館ノ稱號ヲ付セリ

校舍所在地 最初ハ遠江國城東郡横須賀城内坂下ノ谷ニアリ後安房國へ轉封假學校ヲ同國長狹郡和泉村長泉寺へ設ケ又同郡横渚村觀音寺ニ移シ明治三年ニ至リ廣場村字松崎ニ新築ス

沿革要畧 學校ノ創立ハ文化八末年六七月ノ際ニシテ當時主席重職渡邊大助ノ主唱ニ依ル同十三年頃迄ハ古學即チ徂徠派ノ學ヲ主張セシカ同十四五年ノ頃佐藤一齋ノ從弟佐藤英介ナル者ヲ聘シ教官トナシ專ラ教授ニ從事セシメシヨリ遂ニ學派ヲ一變シ朱子學ヲ主張スルニ至レリ故ニ四書五經ノ素讀モ盡ク一齋點ヲ用ユルニ至レリ

教則 一定ノ學問ハ之レナシ只初學課業次第ヲ折衷セシモノナリ

學科學規試驗法及諸則 學科ハ專ラ漢籍ヲ教フ年齡八歲以上入學十五歲以前句讀ヲ終者ヘハ賞ヲ與フルヲ以例ス 春秋會

試ハ讀試講試辨書等アリ校職教官皆臨席賞品ハ金員筆紙ノ類及第ノ者ハ教師ヘ禮ニ行入學ノ節ハ禮服ヲ用フ

職名及俸給 大屬一名 官祿一ケ年現米十九石八斗〇權大屬一名 同現米十五石六斗〇文學教師準權大屬一名 同現米十石

〇助教二名 同一名ニ付現米二石〇句讀司五名 同一名ニ付現米壹石貳斗兩職共 〇學校小使一人 一ケ年現米壹石八斗

金拾貳圓

職員概數 大屬一名 權大屬一名 文學教師一名 助教二名 句讀司五名 小使一名 合計十一名

生徒ノ概數 通學生徒百名 寄宿生ナシ

束修謝儀 無之

學校經費 一周年ノ學費米貳拾貳石金百圓ト定メ悉皆藩廳ノ歲入ヨリ支出ス

藩主臨校 毎月六次藩主臨校シ講義ヲ聽聞シ兩期生徒試業ノ節ハ臨校シ教師ヲシテ試驗ヲ行ハシム

祭儀 聖廟聖像等未備祭典無之

學校構造及建物 地坪百十二坪 建坪四十坪木造茅葺

學校ニテ出版翻刻ノ書籍及藏書ノ類無之

舊館山藩

學制

學事上ノ諸制度 督學校長ハ大參事佐野義郎ナルモノ兼務シ全權ヲ委任ス舊藩知事屢臨校シテ生徒ヲ獎勵ス

士族卒ノ子弟教育法 士族ノ子弟ハ必ス入學セシム藩費ヲ以テ他國ヘ遊學セシメシヲアリ私費遊學モ許可セリ講日一ケ

二ニハ舊知事以下士族卒平民ニ至ルマテ聽聞スル制ナリ

平民子弟教育法 家塾寺子屋及藩立學校ヘ入學スル等各自ノ望ニ任カス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ有志者ノ自由ニ任ス

學校

校名 敬義館又立教局ト稱ス

一天保三辰年生徒ヲシテ藩主ノ前ニ於テ素讀輪講ヲナサシメ素讀ヲナス者ニハ半紙十帖墨一挺ツ、又講義ヲナス者ハ筆墨料トシテ南鐙三片ツ、教官佐藤英介ヘハ吸物料トシテ金貳百疋外教官四名ヘ同金貳百疋ヲ與ヘタリ

一明治四年學制景況觀覽ノタメ安房上總下總ノ三國諸藩ヘ教官ヲ巡回セシメリ

一明治十二年領地上總國夷隅郡久保村妙昌寺日是ノ願ニ依リ同所ヘ分校ヲ設ケ教官一名ヲ派遣シ同地人民ノ教授ニ從事セシム但教官五名ニテ順次三月毎ノ交代ナリキ

舊加知山藩

學制

學事上ノ諸制度 學事ニ就テ別ニ布令諭達等ノ事ナシ藩中士族卒及子弟ニ至ル迄學校ヘ每朝辰牌昇校午牌迄受業セシム尤闊藩在職ノ子弟ハ餘力ヲ以テ業ヲ受ケ毎年七月十二月藩主及重職ノ者臨席學業試驗ヲ行ヒ及第ノ者ヘハ校費ヲ以テ勸賞品ヲ與フ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ヘ必ス入學セシム然シテ他ノ家塾等ニテ修學スルモ禁セス且藩費私費ヲ以テ他國ヘ遊學ヲ許シタルヲナシ

平民子弟教育方法 多クハ家塾寺子屋等ニテ修學シ又ハ藩立學校ヘ入學ヲ許シテ教育ヲナシシム毫モ學事ニ從事スルヲ禁スルヲナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 別ニ制度ナク里正等ノ許可ヲ受ルヲナシ依テ何人タリモ自由ニ開設スルヲ得

學校

校名 加知山漢學校稱育英館

校舍所在地 加知山邸内ニ在後舊藩廳ヲ以テ假學校トス

沿革要略 明治二年己巳十月創立舊藩主酒井忠美ノ代ニ於テ儒學校ヲ設立シ藩士野呂俊臣ヲ以テ教頭トナシ專ラ學事ヲ擴張シ該校ノ事務ヲ整理セシメ生徒進歩ス

教則 受業ハ每朝辰牌ニ始リ午牌ニ終ル毎月朔望放課四書五經句讀句讀司掌之裝求十八史畧等講授ハ助教掌之經義子類ノ質問講義詩文添削涉獵輪講等ハ教師自ラ督之

藩主臨校 講日及試験當日ハ知事必ス臨校ス

祭儀 定マレル祭儀ナシ毎年一月十五日開校ノ際講堂へ聖像ヲ掲ケ知事以下各生徒拜禮卒リ督學白鹿洞書院揭示ヲ講シ生徒一同へ赤飯ヲ給フ

學校構造及建物圖面 別紙ノ通

出版書 白鹿洞書院揭示

藏書 經書歷史等普通差支ナシト雖モ其書目部數詳ナラス

舊鶴舞藩

學制

學事上ノ諸制度（江戸藩邸モ全シ）

藩主ノ布令諭達等有之凡亡滅シテ目下不詳 學業上進ノ者ハ褒賞等ヲ與フ 學校へハ舊藩主毎年一度ツ、出席シテ勸
惰ヲ改ム且毎年兩度老職ナシテ勤惰ヲ改ム 學校へ幹事壹名ヲ置諸般ノ事ヲ注意セシム 校中ニ諸帳簿ヲ制シ置毎日
出校ノ生徒ヨリ名札ヲ差出サセ帳簿へ記入ス是ヲ取扱者ハ幹事ナリ毎年末月ニ至リ目附役ノ者立會相改老職へ差出ス
ヲ例トス 一等教授壹名ヲ置其他一等助教二等助教三等助教ト三種ニ分チ各三名宛ニ置給料ヲ與フ

士族ノ子弟教育法（全上）

生徒年齡ハ凡八歲以上ヨリ入校セシム 全上年齡ヲ問ハス各自ノ意向ヲ以テ學問熟練ノ者へ私費ヲ以テ通學スルハ隨
意トス但シ卒業スレハ學力ニ依テ加増或ハ昇席ス 私費ヲ以テ他所へ遊學スルトキハ藩主ノ許可ヲ請ル事 藩主ノ都
合ヲ以テ主自ラ學校へ出席シテ教員ノ講義ヲ聽聞ス毎月一度ツ、老職ナシテ教員ノ講義ヲ聽聞ス但シ春秋ニ生徒ノ學
カヲ老職ヲシテ試験セシム

平民子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシノミ藩立學校へ入學スルヲ禁止スルノ制ナキモ自ラ入校許可ヲ需ル者ナシ

平民子弟等學事ニ志ス者該意向ニ任セテ之レヲ自由ニ付ス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スル者ハ藩吏ノ許可ヲ得サルモ自ラ自由ヲ以テ開設スルヲ得ル孰レモ開設
スルハ居宅ヲシテ教場トス

校舍所在地 安房國安房郡舊館山藩内

沿革要畧 明治二年設置舊知事父稻葉正巳學事ノ忽ニスヘカラサルヲ覺テ校舍ヲ新築シ舊幕府儒官佐野義郎ヲ聘シテ校長トナシ其他教官數名撰任シ學事擴張ヲ計リ家ニ不學ノ徒ナカラシムルノ目的ナリシガ明治三年館山藩廢セラレ目的半ニ至ラスシテ止ム

教則 不詳

午前八時ヨリ正午十二時ニ至ル午后ヨリ輪講々義詩文會等學習セシメ概不間日ナシ休暇毎月一日十五日廿八日
學科學規試驗法及ヒ諸則 四書五經ノ素讀ヨリ漸次歴史ニ及ホシ輪講講義等ニ至ル期級ノ區別時間用書ノ程度ナシ毎年十一月試驗施行講義能
シ得ルモノニシテ本人ノ望ミニ任ス諸則不詳

立教局壁書

一 凡局内ニ出入スル者禮法ヲ謹守シ一語一動ノ末ニ至ル迄貞靜ヲ要ス決シテ粗暴ナル勿レ

一 潛心默識シ以テ其業ヲ碎キ喧嘩浮薄ナル勿レ

一 教訓ノ道教學相長スルノ理ニ原キ懇懃諄復ヲ要ス鹵莽煩ヲ厭フ勿レ

一 修道ノ要互ニ切磋琢磨シテ以テ仁ヲ輔ク可シ長ヲ競ヒ短ヲ爭フ勿レ

一 修道ノ本其形ヲ善スルニアラス其心ヲ善スルニアリ務メテ誠信ヲ存シ決シテ虛邪ナル勿レ

一 妄リニ政事ヲ議シ妄リニ人物ヲ評シ政道ノ妨ケヲ爲シ風化ノ害ヲ爲ス勿レ

一 事可否アリ理得失アリ其可ト得トハ直チニ取テ則トシ其否ト失トハ公然說諭シ面從腹非ヲナス勿レ

一 一切瑣ノ方事理明晰ヲ要ス徒ラニ議論ヲ起シ贅辨ヲ費ス勿レ

右ノ件々聖道ニ志ス者兼テ理會シ得ルト雖モ遺忘ノ爲メ掲置スル者也

職名及俸祿 督學五人口 教授三人口 助教二人口 助讀一人口 主簿二人口 副主簿一人口アリ座席ハ督學ハ參事ニ

準ス其他定マレル等級ナシ

職員概數 督學一人 副學一人 教授二人 助教二人 助讀二人 史生一人 筆生一人 副主簿一人 小使一人

生徒ノ概數 通學生徒定限ナシ寄宿生凡二十名ヲ限リ内十名貧窮ノ者ニ限リ一人口ヲ給ス

束脩謝儀 之ナシ

學校經費 凡現米八十石支消方不詳

藩主臨校 年一度臨校ス

祭儀 聖廟ノ祭儀春秋 江戸藩邸學校全上

學校建坪 學校壹棟但克明館 建坪五百五拾貳坪 附屬地千四百五坪

江戸藩邸學校假設適宜建物ヲ用ユ

學校ニテ出版翻刻セシヲナシ

舊松尾藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主代々ノ布令諭達等ハ元來學校ニ備ヘ有リ然ルニ明治初年轉封尋テ廢藩等ノ際紛失ス

學業拔群上進ノ者ハ文武共不時昇級給祿增加嗣子ハ丁年前給米ヲ與ヘ次三男等ハ別家ヲ命シ俸祿ヲ給スル等ノ獎勵法アリ維新ノ際賞祿或ハ年給月給ヲ増加スルノ法ヲ設ク

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ子弟ハ年齡八歳ニ及フルハ必ズ藩學校ヘ入學セシムルヲ制度トス卒ノ子弟ノ如キハ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學セシムルヲ許ス然レモ學業上進ノ上ハ士卒ヲ問ハス藩費又ハ私費ヲ以テ他國ヘ遊學スルヲ許可ス最卒業ノ後ハ藩學校エ從事セシメ或ハ其才ニ從リ吏員ニ登用ス且藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞シ又ハ輪講セシム平民モ請願ニ依リ之ヲ許可スルヲアリ而シテ其書類席序ハ

國典經史

聽聞席 甲、藩主以下藩士生徒ニ至ル 乙、平民

輪講席 藩主以下藩士生徒平民ニ至ルマテ一席講義討論ス

平民ノ子弟教育方法 其性質品行ヲ調査シ藩學校ヘ入學ヲ許可シ或ハ便宜ノ地ニ鄉學校ヲ設置シ之ニ通學セシム而シテ其教授ナル者ニハ間接ノ祿ヲ與ヘ藩學校ノ教授一名督學ヲ兼テ時々巡廻ス其他家塾寺子屋等ヘ通學スルモ更ニ干涉セ

家塾寺子屋設置ノ制度 奉行郡宰里正ノ于涉ナク何人タリト雖モ自由ニ開設セシム

學校

學校

校名 克明館ト稱ス但設置以來名稱ニ變換ナシ（江戸藩邸學校全上）

校舍所在地 上總國市原郡鶴舞村字地子來（是ハ舊藩主邸廓内）○江戸校舍 藩主邸内

沿革要畧 學校創立ハ明治年度、井上河内守正春創立明治四年ヲ以テ盛大ノ時トス

教則 漢學用書ハ經史文詩ヲ以テス要スル處ハ朱子小學四書五經ヲ專務トス 授業ハ毎日明六ツ半ヨリ夕七ツ時トス

明ケ六ツ半時ヨリ四ツ時迄ヲ素讀ノ間トシ四ツ時ヨリ九ツ時迄ヲ質問トシ九ツ時ヨリ七ツ時迄ヲ輪講作文ノ時間トス
又連月一六ノ日ニ當ルヲ以テ復習日トス 休日五節句及ヒ鎮守祭典日聖廟祭日

江戸藩邸學校教則 全上

學科學規試驗法及諸則

漢學一科ヲ教授ス 生徒ハ文筆道及ヒ武弓馬槍砲柔術道ヲ兼修ス但各術學習ハ本校ニ就クヲナシ 文武程度比例四書五經

ノ大義ニ通スルヲ以テ武術ノ免許以上ニ較ス 數箇ノ學科ヲ專修スルモ藩主ニ於テ之レヲ支ルヲナシ只管各自ノ意向

ニ任ス 生徒學修ノ年齡入學ノ期限ハ凡ハ八歲以上トス 八歲ヨリ十四歲ニ至チ小子ノ學トシ十五歲以上ヲ大人ノ學ト

ス 入學許可ヲ得シモ師範家回禮スル等ノ儀ナシ

江戸藩邸學校 全上

藩立學校年中開閉校ハ正月十七日開校シ閉校ハ十二月二十五日閉校且正月開校ノ日ハ何レモ禮服着用教頭及教員席順

ニ側面ニ列席ス生徒一同ハ教員ヘ向ヒ例年開校ノ祝詞ヲ述フ但シ校内ヘ孔子ノ聖廟ヲ立春秋ニ祭シ樂ヲ奏シ來拜ノ者

ヘ藩主ヨリ酒饌ヲ給フ

職名及俸給 學問所幹事壹名 役料月給金八圓○教員壹名 役料月給金四圓五拾錢○助教九名内一等助教三名但壹名ニ

付役料月給金三圓五拾錢、二等助教三名全上金三圓、三等助教三名全上金貳圓 江戸藩邸學校全上

生徒ノ概數 通學生徒貳百五十名或ハ貳百名或ハ三百名寄留生凡五十名

束脩謝儀 教員ヘ無謝儀江戸藩邸亦全シ

學校經費 壹ケ年ノ經費ハ凡テ藩主ノ會計局ヨリ仕拂讀本各種、眞木、水油、筆、紙、墨、糊其他諸器械器具類等現品ヲ以テ

受取ル故ニ目下價格ノ決算上不詳 江戸藩邸學校全上

學科學規試驗法及諸則

和學漢學洋學醫學算法筆道習禮兵學弓馬槍劍砲術柔術游泳等該館ヨリ管理教授ス生徒ノ教育ハ必ス文武ヲ兼修セシムルヲ普通トス中年ニ至リ其請ニヨリ一科ヲ専門トナスヲ許ス然レモ必ス一方ニ偏主セシムルヲ許サス文ニ專ラナル者モ傍ラ武ヲ講シ武ニ專ラナルモ文ヲ學ハシム而ノ文學ト武術ト程度ノ比例ハ四書ノ大義ニ通スル者ヲ武術ノ目錄ニ適ストシ五經ノ大義マテニ通スルヲ免許ニ適スト定ム其習學ノ期限ハ八歳ヨリ十九歳マテヲ通常トシ後年ニ成業ノ目的アルモノハ制限ナク修業セシム而ノ平常校中ノ座次ハ 第七級、教授 第六級、助教 第五級、二部以上講義生 第四級、一部ノ書講義生 第三級、五部以上受讀生 第二級、二部以上受讀生 第一級、一部ノ書受讀生 無級、入門生

洋學 第一、理學初歩文典素讀 第二、地理書究理書素讀側ニ文典會讀 第三、萬國史合衆國史

算學 第一級、加減乘除異乘全除 第二級、開平開立天元術 第三級、鈎股適等術全天元并算顆術 第四級、量地術 第五級、點算

春秋試驗ハ素讀講義ノ二種ニシテ當日藩主在城ニハ自ラ臨ミ在府ニハ重役ヲシテ代理セシム諸有司教授助教等列席生徒一名ツ、逐次喚出シ讀マシメ或ハ講セシム而ノ其課目ハ藩主又ハ重役之ヲ撰定シ喚出ノ前ニアラサレハ下附スルヲナシ其受試驗生ハ第一級ヨリ第五級マテトシ學庸ノ如キ短篇ノ書ハ一部ノ數ニ充テス

生徒賞品授與法ハ春秋試驗ノ際復讀講義ノ級共一ノ誤ナキ者及ヒ一二ヲ誤ルモノハ賞ス然レモ差アリ其他毎年末勉強ノ生徒ヲ賞スルナリ

生徒毎朝各自席ニ就キシ後テ生徒心得ヲ讀マシム罰則ハ其條中ニアルヲ以テ別ニ設ケス

始メテ入學許可セラレシ生徒ハ父兄又ハ後見人差添ヒ入學式ヲナシ歸路教授以下職員ノ家ヲ回禮ス賞與ヲ受シ片モ同

一ト雖モ禮服ヲ用ヒス

職名及ヒ俸祿 總司^{年寄}一名 分司^{用人}二名 監察^{大目付}三名 小監察^{徒目付}三名 教授一名 助教三名 句讀師十名 世話人二十名

右ニ記スル所ハ維新前ニシテ俸祿ヲ定メス學制頒布前ハ左ニ改稱ス

學校掛參事^{大參事}一名 參知^{權大參事}二名 監察^{大屬}二名 小監察^{權少屬}二名 小吏二名 教授七名^{年給四百八十圓以下七十二圓以上} 助教四

名^{年給九十六圓以下六十圓以上} 助教補五名^{年給ヲ定メス} 助教小補十名^{年給ヲ定メス} 筆道師六名^{年給十五圓}

身分取扱維新前教授ヲ特別ニ用人ニ准セシヨアリ學制頒布前ハ教授ヲ大屬相當トス

校名 教養館ト稱シ講堂ヲ德造書院ト云ヒ内又博喻筵、存心筵、觀善舍、心正舍ト云ヒ又江戸藩邸ニアルモノヲ拭目館、曙戒堂ト云フ

學校所在地 遠江國佐野郡掛川城内字北門ニ設置ス明治初年太田資美上總國ニ改封セラレ同國武射郡松尾字末廣ノ地ニ移ス明治六年八月十日火災ニ罹リ當今敷地ヲ開墾シ耕地桐桑園トナシ士族國井政典之ヲ所有ス

沿革要略 創立年月不詳舊藩主代々儒教ヲ尊崇シ就中太田備中守資愛其子攝津守資順ノ代最モ隆盛ナリ其故ハ資愛夙ニ教育ノ振起普及ハ其原良師ヲ得ルニ在リト着意シ乃チ松崎慊堂ヲ聘シ以テ藩學校ノ教授トス是ニ於テ乎一藩ノ學事日ニ月ニ面目ヲ一新セリト云フ居ル年アリ慊堂致仕ス依テ小崎門藏ヲ以テ領地掛川ノ教授ニ充テ海野豫介ヲ以テ江戸藩邸ノ教授ニ充ツ皆慊堂ノ門下ニシテ其撰舉スル所ナリ其他柴田平藏和田平太夫等頗ル學事ニ盡力セリ以後備中守資功ノ代再ヒ教育ノ擴張ヲ圖リシカ不幸ニシテ其志業ヲ遂ケス半途ニシテ即世シ尋テ從五位資美明治初年ニ上總國ニ改封セラレ校舍ヲ同國武射郡松尾字末廣ニ移シ小崎門藏矢部温叟平川一彦郷學校
醫學兼ヲ以テ教授トシ校中ニ寄宿舍ヲ設ケ又洋學校醫學科ヲ建設シ洋學ノ教授ハ慶應義塾ヨリ聘シ醫學ノ教授ハ藩醫ヨリ撰用シ以テ明治五年八月學校廢止ニ至ルナリ

教則

- 第一條 學ハ五倫五教ニ基キ學問思辨篤行ヨリ修身處事接物ノ要ヲ講明センヲ主トス
- 第二條 廣ク漢注唐疏及ヒ清儒ノ經解ヲ採リ以テ折衷ス
- 第三條 國典并四庫ノ書類ヲ博ク讀マシム
- 第四條 經ヲ講シ史ヲ讀ムノ暇詩ヲ賦シ文ヲ作り以テ志ヲ述ヘ材ヲ達セシム
- 第五條 授業式目左ノ如シ

講義 六回一字至三字 國典并經史ノ内隨時 教授輪番藩主諸有司以下出席○輪講 九回一字至四字 書右ニ同シ 教授輪番會頭藩主諸有司以下出席○素讀 每朝八字至十二字 四書五經左國史漢文選唐宋八大家文等○復讀 六回八字至十二字 ○春秋試驗 素讀講義 教授檢查ハ藩主諸有司出席○筆道 每日八字至四字 ○詩文會 三回一字至四字 ○洋學素讀 每朝午前 理學初步、ヒテヲ文典、ミツチエル地理書、カツケンボス究理書、ハルレー萬國史、カツケンボス合衆國史等○同會讀 六回午後 文典○同月終試業○算學 每日午後 加減乘除異乘同除開平開立天元術鈎股適等術同天元并算類術量地術點算附九章ノ内方田ヨリ方程マテ演段諸約術等○休業 六回

校名 明親館ト稱ス

校舍所在地 上總國市原郡菊間村大厩村入會地

沿革要略 舊藩ハ明治元年駿河國駿東郡沿津ヨリ轉封同三年校舍ヲ新築シ學事ヲ獎勵スト雖モ同四年廢藩置縣トナリ舊水更津縣ヘ一切引送相成候

教則 教科書ハ經典歷史ノ類時間ハ六時間トス

學科學規等ノ諸則 舊藩ノ制ニ士族卒共必ス文武兩道ヲ修學セシム其學科ハ和漢洋學及兵學弓馬槍劍柔術游泳等ニ有之就中柔術科ニ戸塚彦橘ナルモノアリ頗ル著名ニ有之候ニ付其履歷ノ概略別紙ニ記載仕候其後慶應年度ニ至テ武術ハ砲術ノ一ニ歸セシメ繼テ同四年ニ至ル賞罰ノ事ハ適宜ニ行フト雖モ別ニ一定ノ規則ハ無之且禮服着用師家回禮等ノ事ハ無之

職名及俸祿

維新前 祭酒 侍讀 諸藝術師範 教授 助教 記室 學校奉行 學校目付

但何レモ士分以上ノ拔

維新後 大助教 官祿五十石○中助教 全四十石○少助教 全三十石○寮長 全四十石○大得業生 全十八石○中得

業生 全十二石○少得業生 全七石 但何レモ判任

生徒ノ概數校中經費ノ事ハ書類散佚シテ徵スル能ハス

藩主臨校 維新前ハ藩主年々一回藩士等文武ノ技藝ヲ試ラル維新後ハ定規ナク時々臨場シテ講義ヲ聽聞シ或ハ自ラ兵士

ヲ指麾スルヲアリ

束脩謝儀 生徒ヨリ學校ヘ謝儀ヲ出シタルコト一切無之

祭儀 釋奠釋菜等ノ規式ハ具備ニ至ラス

明親館 建坪九拾八坪 構内凡壹万三千坪

學校ニ關スル舊記紀事序文ノ類更ニ無之

舊藩中家塾等ノ件 舊士輩家塾ニ於テ規則ヲ設置シ隆ニ生徒ヲ教育セシ程ノ事蹟無之候

舊久留里藩

學制

職員概數 教員三十四名 事務員九名 門衛二名 右ハ維新前ニシテ學制頒布前ハ左ノ如シ

教員三十二名 事務員六名 門衛二名

生徒概數 通學生徒四百名 右ハ維新前ニシテ學制頒布前ハ左ノ如シ

通學生徒四百二十名 寄宿生徒六十名 學業ノ等級ニ依リ藩費自費ノ區別アリ

束脩謝儀 生徒初メテ入學ノ際聖廟ヘ扇子箱ヲ備フルヲ禮トス他ニ束脩ノ制規ナシ

學校經費 舊來一週年度ノ經費ヲ豫定セス資順ノ代米一千石ヲ經費トシ學業優等ナル藩士卒ノ次三男等ニ此費中ヨリ給

米ヲ與ヘ修業セシムルヲニ創定セシト云フ維新ノ際現米七百石ヲ以テ學費ニ充ツ

藩主臨校 毎月六回ノ講義春秋釋業生徒試驗ノ際及ヒ生徒輪講日等

祭儀 講堂ノ與ニ聖廟ヲ設置シ春秋釋業ヲ施行ス此日前七時職員生徒禮服ニテ出校シ儀場ヲ備具シ八時藩主禮服ニテ臨

場聖廟ヲ拜シ尋テ職員生徒等級ニ徒ヒ逐次拜禮終テ藩主ヨリ職員ヘ酒饌ヲ與フルヲアリ

學校構造及建物圖面 地坪 掛川學校一千五百十坪二分五厘 松尾學校一千二百七十一坪 建物 掛川學校四百七十二

坪 松尾學校四百六十四坪二分五厘

學校ニテ出版ノ書目 石經十二經ノ内禮記四卷 周易一卷 周禮二卷 海錄碎事五卷 游東畝錄二卷 游豆小志一卷

影宋爾雅一卷 陶淵明集二卷 三謝詩一卷

舊菊間藩

學制

學事上ノ制度 學藝上達ノ者ハ抽テ、上等スルヲ儘アリト雖モ祿稅ヲ免除スルヲ等ハ無之且闔藩學事ノ情況ヲ觀察スル

ニ足ル程ノ事項之レナシ

士族卒ノ子弟教育法 士族等ノ子弟ハ必ス入學セシムルハ勿論且藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞スルヲトス

平民ノ子弟教育法 家塾寺子屋等ニ入學スルハ自由ニ任セ別ニ制止セシム無之

家塾等設置ノ制 何人タリモ自由ニ開設スルヲ得セシム

學校

而ノ長岡十郎兵衛高明

官臣召抱順帖元祿十四年儒臣召抱大屬從祿詳カナラス

ナ以テ城詰師範トナシ家中ノ士ヲシテ學ハシム是ヨリ先キ儒臣姓名分明

ナラス大和守直純寛保二年壬戌七月廿八日上總久留里古城ヲ賜リ再ヒ之ヲ城ヲ延享三年乙丑八月十五日城郭成テ初テ

封ニ就ク以來豐前守直亨

諱元文四年己未正月七日江戶詰儒員太宰純撰之

和泉守直英大和守直溫

諱寛政元年己酉八月廿九日江戶詰儒員吉允撰之寛政九年丁巳五月朔日柳井平

次郎義篤ヲ以テ家中學問指南トナス翌十年戊午正月十一日義篤藩主ノ師トナリ居テ江戶藩邸ニ徙ス其前後師範姓名詳

カナラス豐前守直方享和二年壬戌六月十九日義篤更ニ又久留里ニ移ル此年家塾ヲ擲手ニ新築シ三近塾ト稱ス

考證前藩主ニ乞テ圖書數十箒ヲ置キ家中ノ士就テ學フ其盛ナル宛カモ鄴下ノ如シ伊勢守直候文化八年辛未三月義篤房總紀行詩ヲ著ス一巻

同十年癸酉十月藩主在城中義篤三ノ丸屋形ニ於テ論語ヲ講釋ス文政五年壬午正月學士日比野允清大道寺俊

藏等三近塾春日詩一折ヲ彫刻ス文政十年丁亥冬義篤江戶藩邸ニ移ル於是乎城中學業稍衰フ同十一年戊子十月六日吉田

頑藏泰江戶藩邸ヨリ久留里ニ徙リ家中ノ師範トナリ三近塾ニ於テ月次講釋ス學業又盛ナリ泰夢遊錄一巻笠森紀行一巻等

ヲ誌ルス同七年丙申二月廿九日泰又江戶藩邸ニ移ル其後師範ナシト雖モ皆鄒魯ノ風ヲ慕ヒ先進者後進者ヲ教ヘテ學業

ヲ廢セス同十二年辛丑十一月四日森清太夫光福江戶藩邸ヨリ久留里ニ徙ル屢三近塾ニ於テ講釋ス當時

翌十三年壬寅九月ナリ塾概シテ破壤シタルヲ以テ光福再修ノコトヲ盡力シ終ニ藩費ヲ以テ再築スルコトナレリ此時更ニ地ヲ同所演武所

今茲十一月竣功ス校名舊ニヨリ三近塾ト稱ス是レ藩費ヲ以テ置舍ヲ設置スルノ初メナリ主水直古等臨校シテ生徒ヲ甄

勵ス是ヨリ學業又進ム嘉永年間生田勝彬江戶藩邸ヨリ久留里ニ移リ長沼流ノ兵學ヲ三近塾ニ講ス闔藩兵士皆學フ其後

宇佐美正符寺田寛懷等本塾ノ世話役トナリ塾生ヲシテ經學ヲ屬リキ然レモ當時夷船渡來ノ際武術最モ盛ニシテ文藝

次第ニ衰エ塾モ又半ハ破壤ニ屬ス慶應三年丁卯某月筑後守直義之ニ修理ヲ加エ原尙古進藤源仙等ヲ學問世話役トナシ

闔藩ノ子弟ヲ獎勵セシム然ルニ明治元戊辰ノ役ニ當リ儒冠得テ溺ス可キカ如ク復斷然トシテ止ミヌ同二年己巳三月退

手執政ノ第宅ヲ廢シ三近塾ヲ爰ニ移シ伊藤誠齋ヲ以テ教師トナシ神山英五郎鈴木明助ヲ助教トナシ柏谷辰三郎榎本政

盧須藤高長村松翁士岐政理田村岩吉森勝藏ヲ句讀師トナシ出口明允鈴木省吾出口力衛三隅新太郎小川常次郎國友清之

助ヲ副句讀師トナス時ニ校名ヲ三近堂ト改メ學業復盛ナリ

江戶藩邸沿革略 江戶藩邸ニ於テハ家中師範ノ塾ニシテ別ニ藩主學校ヲ置カヌ然リト雖モ藩邸屋形ノ書院ニ於テ師範ノ

モノ聯月講釋藩主臨席家臣拜聴ナ許サレタリ殊ニ江戶詰儒員ト城詰師範ト姓氏ヲ異ニスルモアレハ其梗概ヲ誌ルサン

藩祖直邦元祿年中大宰彌右衛門純ヲ抱テ江戶詰儒員トナシ家中士就テ學ヒ學業大ニ進ム同十二年己卯五月廿六日將軍

綱吉屋形ニ光臨論語雍也篇

智者樂水仁者樂山ノ章

ヲ講シ給フ家臣數田五郎左衛門小笠圖書星野萬右衛門神山安左衛門伊藤甚右衛門

舊久留里藩學校

二二七

學事上ノ諸制度 藩祖直邦以來累代ノ藩主或ハ儒臣ヲ召抱エ藩中碩學ノ者ヲ選擇シテ師範トナシ家中ノ士ヲシテ其家塾

ニ修學セシム最モ塾頭ノ乞ニ應シ藩主文庫ヲ屏キ書籙ヲ貸與スルヲ許可セリ故ニ家塾ト雖モ恰モ藩立學舎ノ如シ天
保年間ニ至リ藩費ヲ以テ初テ塾堂ヲ久留里ニ設置シ明治年間益學事ヲ擴張セシム兵備變革ノ制度學校教師以下句讀師

軍資金上納ヲ免除セラレタリ

士族卒ノ子弟教育方法 初メ家中師範ノ家塾ニ修學セシメ藩立學校創立シテヨリ闔藩士卒ノ子弟必ス本校ニ入學セシメ

タリ又藩士ト雖モ生徒ト共ニ素讀輪講或ハ講釋聽聞等ヲ許ルセリ又藩士私費ヲ以テ江戸昌平學校若クハ他藩儒官等ニ
就テ修行セント欲スル者ハ皆其乞ニ任カセリ修行願ノ趣意タルヤ家祿返還シ或ハ尤モ明リニ之ヲ許スニ非ス其乞フ者ノ實否ヲ三年或ハ五ヶ年暇ヲ乞フヲ例トス

正シテ后チ之レヲ許ス藩主懇篤ノ令ヲ下シテ之ヲ獎勵セリ數年ノ遊學ト雖モ家祿固ノ如ク賜ハレリ故ニ私費ト雖モ亦
藩費ニ異ナラス學業卒テ飯藩ノ際級ヲ進メ祿ヲ増シ相應ノ職分ヲ命セラレタリ明治年間ニ至リ初テ官費生貳名ヲ出セ

リ

平民子弟教育方法 藩立學校へ入學志願スル者ハ司螢ニ計リ之ヲ許可セリ教師ノ家ニ就キテ夜課等ノ業ヲ受ル者ハ此限

ニアラス

家塾寺子屋設置ノ制度 通常ノ家塾寺子屋等ハ自由ニ開設ヲ許ルセリ尤モ巨大ノ學寮ヲ新築スル等ノ大事項ニ係ルモノ

ハ司郡方ノ許アルニアラサレハ之ヲ開設スルヲ得ス

學校

校名 三近塾ト稱ス儒員柳井平次郎ノ撰ムトコロ蓋シ中庸ノ語好學近乎智力行近乎仁知耻近乎勇ニ取ルナリ明治二年己巳三月都講伊藤誠齋

總テ舊習ヲ一洗スルノ時勢ヲ斟酌シ校名ヲ改稱センヲ謀レリ時ニ寺田寬懷初メ三近塾世話役後チ權大參事進出三近ノ語設リニ改ムヘ

カラス幕治體制ニハ震政所ト呼ビ或ハ學寮ト稱シテ校名ヲ載セス然レモ木更津縣ヨリ名稱御尋ノ際三近塾ト屆タリ年月失

校舎所在地 藩立學校天保十三年壬寅十一月久留里城搦手ニ創立シ明治二年己巳三月本校破壞スルニ及ンテ追手ニ移轉

シ學事擴張塾生増加同四年辛未五月本校狹隘ニ依リ學官議決ノ上三ノ丸ニ移轉ス

沿革要略 藩祖直邦將軍綱吉ニ仕エ寵遇日ニ渥ク登庸累進元祿十六年癸未正月九日加祿五千石故食ム所ト共ニ壹万五千

石常陸下館ニ封セラル寬永四年丁亥正月九日加祿五千石同六年己丑正月十日綱吉薨ス家宣ニ仕ヘ享保十七年壬子三月

朔日加祿五千石封ヲ上野沼田ニ徙ス秋復加祿五千石舊領併セテ三萬石連判ノ列謂之トナル又家繼吉宗等ノ恩澤ニ浴ス

ニ兩度ト定ム尤モ臨時試驗ヲナスヲアリ以後代々ノ藩主每歲此ノ如シ明治二年ヨリ文學ハ三近堂ニ武術ハ演武場ニ於テ春秋兩度試驗スルヲトナレリ此日藩主及官吏臨席試驗終テ赤飯及筆紙等ノ物ヲ賜リ優等ノ者ヘハ別ニ賞與スルコト舊ノ如シ

職名及俸祿 司覺 局務ヲ總判ス 執政ニ於テ勤之高貳百石ヨリ五百石改正後大參事正上士高五拾俵官給三十人口正六位但シ本藩官位相當表ニ依ル以下之レニ倣フ○副司覺 局務ヲ總判スル前ノ如シ 參政ニ於テ勤之高百石ヨリ百七拾石迄改正後權大參事正上士高五拾俵官給二十五人口從六位○國學漢學洋學兵學教師 物頭及給人ニ於テ之レヲ勤ム高十人口ヨリ百七十七石迄改正後從上士高四十五俵官給五人口正八位權大屬ニ準ス○同助教 故ヲ溫新ヲ知り塾生ヲ教督ス 騎士七石三人口改正後中士四拾俵官給三人口從八位少屬ニ準ス○算教師 上ニ全シ時トシ正中士ニテ勤ムルヲアリ本藩職制ニハ校堂ニ於テ教授スルヲトス然レモ其實武術教師ト同ク家塾ニテ教授セリ至誠贊化流川田保則舊幕勘定奉行古川山城守門弟中西流高橋勝之等ハ本藩有名ノ算家ナリ○句讀師 扈從六石二人口改正後正中士高三拾五俵官給二人口權少屬ニ準ス時トシテ從上士ニテ勤ムルヲアリ○副句讀師 目見席五石二人口又無官子弟目見席改正後正下士三拾俵從九位史生ニ準ス官給ナシ尤モ連年二季賞典若干ヲ賜ル○算助教 全上○門衛 卒拾三俵但シ兵卒ニ準ス○使部 卒九俵但シ定番ニ準ス

職員概數 司覺壹人 副司覺壹人 教師壹人 助教貳人或壹人 句讀師七人 算教師壹人 算助教二人 門衛一人 使部壹人

生徒概數 通學生徒三百餘人但シ寄宿生徒定員ナシ師範家ノ學僕モ亦同シ

束脩謝儀 師範家ヘハ藩主ヨリ每歲賞與ヲ賜ハリ明治年間ヨリ官給ヲ賜ハル故ニ別段束脩謝儀ノ例ナシ

學校經費 一周年學校費現米百俵ト定ム

藩主臨校 慶應三年丁卯某月ヨリ明治元年戊辰十一月迄伊勢守直和屢臨校講釋聽聞全年二年已巳十月ヨリ筑後守直義聯月

臨校講釋聽聞ス又時トシテ生徒ノ試業ヲナスヲアリ其他開覺試驗釋奠等ニハ必ス臨校アリタリ

祭儀 明治三年庚午秋八月十三日初テ釋奠ヲ舉行ス聖像ノ一大畫軸ヲ三近舍ニ懸ケ本日午前八時ヨリ藩知事及大少參事等官吏禮服ニテ臨

校聖像拜禮終テ教師大學ヲ講義ス後一同エ神酒赤飯ヲ賜ハル正午十二時藩知事以下官吏退散ス助教及句讀師等祭祀時

間前ニ出覺シ祭場ヲ整理スルハ勿論渾テ本日ノ雜務ヲ主管セリ又此ノ日藩士及生徒ヲシテ聖像參拜ヲナサシム以後每

歲之ヲ例トス

菊地與五左衛門白井佐五右衛門田原郷右衛門等臺顔ニ拜謁シ後テ講義拜聽ヲ許サル同十四年辛巳四月廿二日將軍綱吉屋形ニ光臨論語季氏篇ヲ講義シ家臣拜聽ヲ許サル同十五年壬午三月廿二日將軍綱吉屋形ニ光臨論語八佾篇ヲ講シ家臣拜聽ス次ニ直邦孟子離婁篇ヲ講義ス此時ニ當テヤ家臣尤モ勤學又物徂徠部山藩儒員屢屋形ニ來テ家臣大宰ト共ニ講義ヲナス享保十三年戊申二月純和讀要領三卷ヲ著ス

大和守直純享保二十一年丙辰純聖學問答二卷ヲ著ス其他經濟錄ヲ初メ數十卷ヲ著ス其後年曆詳カナラス純願ニ依テ暇ヲ賜ハル於是乎文學寢蓑豊前守直享安永六年丁酉十二月廿八日里吉幸藏允ヲ抱エテ江戸詰師範トナス學業又盛シナリ寛政五年癸丑四月塚本武養越後流軍學ヲ屋形ニテ講ス同九年丁巳某月里吉允沒ス同十年戊午正月十一日柳井平次郎義篤藩主ノ師トナリ久留里ヨリ江戸藩邸ニ移リ前軌ヲ躰ミテ月次講釋ス

教則

教授之時間

素讀 毎日朝五ツ時ヨリ四ツ半時マテトス○講義 三八五十ノ日九ツ半時ヨリ始メ八ツ半時限リトス○質問 四ノ日四ツ半時始メ八ツ半時限リトス○輪講 九ノ日九ツ半時ヨリ始メ七ツ時限リトス

○詩文會 二日ノ日九ツ半時ヨリ始メ但シ毎日朝五ツ時マテ槍術劍術午後ヨリハ弓術馬術或ハ砲術柔術棒術或ハ算術筆

道諸禮等ノ修行アレハ疊舍教授ノ時間大卒前ノ如ク定ムルモノトス○休日 大祭祝日及氏神祭日○開塾 正月十七日

但シ開塾ニハ藩主及官吏禮服ニテ臨校聖像ニ拜シ教師經書ヲ講ス後チ神酒及赤飯等ヲ賜ル釋奠ノ禮ノ如シ又卅日藩主

ヨリ別段酒肴ヲ學官ヘ賜リシヲアリ○閉塾 十二月廿日但シ此日公廨ヨリ蜜柑數箇生徒ニ賜リ翌廿一日教師以下句讀

師一同出校シテ教科書ノ部數ヲ改メ庫中ニ納ム

學科學規試驗法及諸則

國學漢學兵學洋學ヲ教授ス且生徒ニハ必ス文武兩道ヲ兼修セシメリ最モ學舍ニ於テ兼修シタルニアラス弓馬槍劍砲術柔術等皆生徒ノ意向ニ任カセ其家々ノ師範ニ就テ學ハセシモノナリ故ニ本校ノ生徒ハ概チ通學生ナリ尤多病ニシテ槍劍等ノ術學ヒ難キモノハ或ハ文學ノ一科ヲ專修シ或ハ算筆ノ二科ニ止ル等ノヲ許可ス生徒年齡ハ五六歳ヨリ十五六歳迄トス且入學ノ時ヘ必ス禮服着用ナルモノトス武術入門ト雖モ亦全シ

試驗ハ藩祖直邦下館ノ城主ト成テヨリ以來三ノ丸ニ於テ生徒ハ勿論藩士ニ至ル迄文武二道ヲ試驗ス是チ内覽ト稱ス右終テ酒吸物等ヲ賜リ優等ノ者エハ別ニ賞與ヲ賜ル藩主參府中ハ執政代テ試驗ス之レヲ見分ト云フ又十五歳以下ノ者ニ限り筆道ヲ試ム之チ席書ト稱ス又聯月清書シテ藩主ニ出ス者ヘハ賞トシテ筆紙墨等ノ物ヲ賜ハル文武二道ノ試驗ハ年

校舍所在地 從前ハ大多喜城裏字三ノ丸ニ在リシヲ維新後舊大手内武藤早之丞邸地七百坪餘ヲ以テ新築シ之ニ移轉ス
沿革要畧 元祿十六年二月大河内正久當地ニ封セラレ爾來寶曆年間正舛正路ノ父子相續キ藩士ニ文武ノ獎勵誘導アリタ
リ近世ニ至リテ故大河内正和儒學ヲ尊崇シテ嘉永ノ末歸國ノ際ニ安積祐助ヲ同行シ藩士ヘ文武ノ役員ヲ設ケ德意誘導
セラレシモ當時藩士武事ニ執掌シ文事ハ微々トシテ不振リシモ明治三年大河内正實ニ至リ文武ノ兩道殊ニ獎勵シテ實
舍ヲ新築シ漢儒ヲ聘シ藩士ノ子弟ヲ驅リ寄宿セシメ其待遇特ニ優渥ナルヲ以テ人々文學ノ欠ク可ラサルヲ知リ孜々勉
焉一時隆盛ナリシモ廢藩後ハ解體シ糊口ノ計ヲナスモノ多々ニシテ有志者アリト雖モ之ヲ維持スルノ方法ヲ得ザリシ
ニ豈料ラン明治六年三月四日火災ニ罹リ校舎并藏書類悉ク烏有ニ歸セリ

教則

教科用書 四書、五經、左傳、國語、史記、漢書、資治通鑑、通鑑覽要、易知錄、通鑑綱目、貞觀政要、唐宋八大家、文章軌範、

日本外史、二十一史、十三經

日課 素讀 朝五ツ時ヨリ四ツ時マテ藩内通學生 八ツ半時ヨリ七ツ半時マテ寄宿生外宿生

一六ノ日 休(歸省隨意) 二七ノ日 論孟ノ内輪講九ツ半時ヨリ 助教、句讀司 三八ノ日 日本外史元明史略輪講九ツ半時ヨリ

ハツ半時マテ 學生會 四九ノ日 詩文會九ツ半時ヨリ 五十ノ日 教頭講義

學科學期試驗法及諸則

漢學 洋學 算法珠算 筆道 皇學連月一回神官ヲシテ講習セシム 練兵 游泳

規則

一 入此堂者常ニ明善ノ二字體認スヘキ事

一 教督獎勵之法都テ懇篤深切ヲ要ス、嫚罵叱咤堅ク禁止ノ事句讀音訓疑シキハ教授助教ヘ質問シ謬忘チ不傳樣可致事

一 己ノ能ニ誇リ直情暴行長上ヲ凌侮スル等ノ行ヒ堅ク禁止ノ事

一 同學生放縱傲惰ニシテ明善ノ名義ヲ汚ス者アラハ相互ニ譴責爲シ朋友ノ道ヲ盡スヘキ事小過ト雖モ心付ルヲハ面

折忠告スヘク和睦ヲ以テ本トナシ謗言誹議堅ク禁止ノ事

一 公用私用トモ出入ノ斷輕忽ナルヘカラス教授以下學生ニ至ル迄必ス當番ニ相斷可申候事

一 教授助教助教並ノ内壹人句讀司ノ内一人當番相定必在番致スヘキ事

一 夜中御門出堅ク禁止ノ事若不得止故アラハ其子細ヲ當番所ヘ屹度可申出候事

學校構造及ヒ建物坪數 構内坪數千七百九拾五坪五合内建家坪數六十一坪

舊大多喜藩

學制

學事上ノ諸制度 從來ハ城裏ニ望庵ト稱シ藩立學校ヲ設置シ藩士ノ子弟ヘ素讀或ハ有志ノ輩ニテ輪講ヲナスニ止リシカ
近世故大河内正和ニ至リ稍文學ヲ獎勵ス爾後明治二年三月藩主大河内正質大ニ藩政ヲ釐革シ當時江戶在住ノ藩士ヲ當
地ヘ移住セシメ隨テ學制ヲ更正シ是迄ノ素讀世話役ヲシテ助教並句讀司ト改稱セシメリ同年十二月少參事ヲシテ學校
ノ事務ヲ擔任セシメ一層文學研究スヘキ旨ヲ藩士ヘ獎勵サレタリ同三年四月校舍新築ノ舉アリ其開校式ニ臨ミテ左ノ
令アリ

豫テ相達置候通方今文武ノ兩道ハ一日モ欠ク可ラサル儀ニ付今般藩政ヲ更革シ特ニ文武ノ官吏事務申付ルニ由リ士
卒ノ男子七歲以上ノ者校舍ヘ寄宿或ハ通學等父兄ニ於テ篤ト相心得就學セシムヘシ且勤仕ノ向モ通學ハ勿論成ルヘ
ク寄宿致シ勉勵致スヘシ

明治四年一月藩主隣藩鶴舞久留里一宮藩主ト親談ニヨリ本月ヨリ役員ニ於テ先方ヘ篤ト申合セ互ニ輪講詩文會等連月
往復致スヘシトノ内達アリ同年三月領内東部南部ニ明善堂支塾ヲ設ケ南部ハ杉戸村關準一郎東部ハ深谷村東丹左衛門
ヲ教授トシ何レモ年俸玄米十俵ツ、ヲ給ス然シテ連月一回本校ヨリ助教派出シ生徒ノ進否ヲ監査セシメ且誘導勸獎ノ
爲メ學術拔群ナルモノハ賞與品授與致スヘキ旨ノ達アリ

士族卒ノ子弟教育方法 士卒ノ子弟ハ勿論戸主タリト勤務ノ餘暇ヲ以テ必ス勉勵セシメ寄宿生ノ内卓越ナル者八名藩主
特選シ藩費ヲ以テ洋學專門トシテ慶應義塾ヘ五名醫學專門トシテ佐藤舜海塾ヘ三名就學修業セシム又會日ハ大少參事
ヲ始メ卒ニ至ル迄有志ノ輩ハ生徒ト共ニ輪講或ハ講義ヲ聽聞スルヲ例トス

平民子弟教育方法 領地内外ヲ問ハス就學ヲ請フ者ハ何人ニ限ラス許可シ外塾生ト稱シ藩ノ塾生ト異ナルナシ
家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ハ自由ニ開設スルヲ得

學校

校名 明善堂 故大河内正和二本松藩士安積祐助ニ依託シ明善
堂ノ稱ヲ付セシヨリ改稱セス(記文別冊ニアリ)

職員エ酒饌料ヲ賜フ

職名及俸祿 參事二名 一名年俸金七拾圓〇教頭一名 月俸十人口〇助教五名 一名年俸金三拾五圓〇書師二名 年俸

二拾五圓〇句讀司十名 一名年俸金三拾圓〇學生八名 一名年俸拾二圓〇校掌二名 一名年俸金拾圓〇學丁二名

職員概數 參事以下學丁ニ至ルマテ三十二名

生徒概數 藩士寄宿生徒凡百五十名 通學生凡七十名 外寄宿生徒凡三十名 合計二百五十名但藩士寄宿生徒ハ校費ヲ

以テ半額ヲ償フ

東脩謝儀 一切之レ無シ

學校經費 一周年學費百石ト定メ外ニ畑五反步餘ヲ付ス但參事以下年俸ハ藩費ヲ以テ之ヲ給ス

藩主臨校 藩主必ス臨校シテ生徒ト同シク輪講スルヲ例トス春秋試驗ニハ其得點ヲ判決ス

舊佐貫藩

江戸邸内學校學制

校名 撰秀館ト云

校舍所在地 舊佐貫藩江戸邸内外櫻田中ニ建築ス

寛政八辰年藩主於テ文武習學館ヲ設ケ藩士岩堀重太夫ナルモノ師範役ヲ勤ム其後文政年度石津桐陰齋ナルモノ師範役ヲ

勤メ學事隆盛ニ至ル天保初年ヨリ嘉永年度迄學事大ニ衰フ安政二卯年藩制一變シ文武盛典ニ至レリ

士族卒ノ子弟ハ必ス藩立學校ニ入學セシム尤各自ノ意向ニ任セ自費ヲ以テ他藩或ハ私塾又ハ他國ニ遊學スルヲ許可セリ

安政年度以降藩主ヨリ特ニ人撰シ官費ヲ以テ文武其他藩他國ヘ修業ヲ命セシコトアリ

學科ハ漢學筆道武術ハ兵學劍術柔術ヲ教授ス生徒ハ必ス文武兩道ヲ兼修セシム且文武比例ハ四書五經其他歴史ノ讀書ニ

差間ナクシテ四書ノ大義ヲ講スルモノ武術ハ免許ヲ得シ者ト比較ス

士族卒ノ子弟年齡八歲ニシテ入學シ四書五經ノ讀書成業者及ヒ武術ハ中傳ヲ得シ者ハ退學セシムト雖モ敢テ退學ヲ命ス

ルコトナシ

文武試驗法ハ毎年夏冬藩主及諸役人列坐文學ハ讀書並講義詩作々文ノ類武術ハ試合等ヲ以テ甲乙ヲ判決ス右試驗終テ毎

年七月十二月年齡十七歲以上ノ者ハ金子入目錄金五十錢二種ノ内ヲ給フ且文學ハ四書五經歴史ノ讀書差間ナク四書ノ大

一私用ニテ他出六ツ時ヲ限リ歸塾スヘキ事若六ツ時迄ニ難辨用事ハ其子細ヲ斷リ置可申候事

一教授以下學生ニ至ルマテ疾病ノ節三日以内ハ病院ニテ養生三日以外ハ歸宿之事但病体ニヨリ此例ニアラス

一句讀司以下學生ニ至ル迄日課ノ書目教授助教ノ令ニ從フヘキ事

一書師ハ朝五ツ時ヨリ當番所へ出席可致候事

一數學世話方ハ夕七ツ時素讀濟ヨリ當番所エ出席當番ノ令ニ依テ始業之事

一教授以下學生ニ至ル迄公事疾病ノ外會日欠席致スヘカラス不得止事アラハ朝四ツ時迄ニ其旨當番所エ必相斷可申

公事トテモ同様相斷可申事

一句讀司以下學生ニ至ルマテ素讀疾病公事ノ外欠席致スヘカラス若不得止事アラハ其旨當番所エ屹度相斷可申事

一洋學規則亦是ニ倣フ

一句讀師以上寄宿之事但寄宿致サ、ル者ハ年給四分ノ三被下候事

一發會正月十日 納會十二月十七日 素讀毎日朝五ツ時夕七ツ時 檢讀十日 日課朝五ツ時ヨリ夜四ツ時マテ 但午後西洋時計一字間休夕素讀

濟六ツ時マテ休業暑月ハ夜學五ツ時マテ

一洋學規則亦是ニ倣フ

一休業 一六 神武天皇遙拜ノ日三月十三日 今上帝御誕生日九月十二日 孔夫子御誕生日十一月十五日 初午 八月十五日 六月七

日 十月十三日ヨリ十六日迄 五節句

一討業 四時 但講義、文、辨書、素讀、詩、數學、作文

罰條

一教授以下助教句讀司學生ニ至ル迄素行ヲ亂リ規則違戾ノ者ハ相互ニ再三說諭爲シ善道ニ歸セシムヘシ若不用モノ

ハ參事ニ啓シ其命ニ任スヘキ事

一洋學之儀之ニ準ス

春秋試験ノ際教員生徒ヲ試験シ得點ノ多少ヲ以テ甲乙丙ノ三等ニ區分シ得點ヲ藩主へ上申シ藩主點檢ノ上賞品ヲ賜ヒ

賞詞ス

甲科 書籍 乙科 紙筆 丙科 紙

職員ハ藩主大少參事教頭列席ニテ講義作文辨書詩作無點ノ素讀數學ノ七科ヲ試験シ得點ニヨリ座席ヲ更換シ然シテ後

安政年度以降藩主ヨリ特ニ人撰シテ文武其他藩或ハ他國へ藩費ヲ以テ修業ヲ命セシコトアリ

文學ハ漢學筆道武術ハ兵學砲術劍術柔術ヲ教授ス生徒ハ必ス文武兩道ヲ兼修セシム且文武比例ハ四書五經其他歴史ノ讀書ニ差支ナクシテ四書ノ大義ヲ講スルモノ武術ハ免許ヲ得シモノト比準ス

士族卒ノ子弟年齡八歳ニシテ入學シ四書五經ノ讀書ヲナシ得ル者又武術ハ中傳ヲ得シ者ヲ以テ退學セシムル成規ナリシモ敢テ退學ヲ命スル等ノコトナシ

私塾寺子屋ヲ開設スルハ各自隨意ニ任セ奉行郡宰里正等ノ許可ヲ受ル事ナシ

平民ノ子弟ハ各自ノ望ニ任セ私塾寺子屋ニテ習學セシム又藩立學校エモ入學ヲ許セリ

文武試驗法以下ノ諸項ハ前ニ舉グル所ノ江戸邸ノモノト異ナルナキヲ以テ略之

舊藩牧藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達等有レ亡滅シテ目下不詳 學業上進ノ者ハ席進スルノヲ專ラナリ隨テ加増祿ヲ與フ

學業上達ノ有無ニ拘テス毎年十二月中師範或ハ教頭助教及ヒ生徒ニ至ル其校上出席ノ度數勤惰ヲ改メ之レニ賞譽トシテ金銀或ハ書籍半紙等ヲ與フ 全上ノ勤惰勉強ヲ觀察スル者ハ監察掛ナリ 校中ノ諸帳簿ヲ監察役所ニ取立調濟ノ上其出席度數勤惰等生徒迄悉皆姓名書ヲ以テ老職へ進達ス老職ハ之レヲ檢査シテ其相違ナキヲ証明シ藩主ニ進メテ賞譽ノ格ヲ定ム 師範教頭ノ者ハハ教授勉勵ノ賞トシテ藩主ヨリ肩衣紋服麻上下等ヲ與フルコトアリ

江戸藩邸學校制度全上

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟年齡八歳又ハ十歳ヲ過ルモ入學セサルキハ監察掛ヨリ該親族ノ者へ示諭シテ入學セシム又年齡ヲ問ハス各自ノ意向ヲ以テ家塾等ニ修學スルキハ私費ヲ以テ何々家入塾或ハ何藩士何ノ某方へ通學致サセル等ノ屆書親族ヨリ監察掛エ差出スヲ法トス 藩費私費ヲ問ハス他國へ遊學セシムルヲ許可シタル例ナシ 連月藩主ノ表書院ニ於テ藩主出坐及一役一兩名並生徒一同儒官ノ講義ヲ聽聞ス

平民子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシノミ藩立學校エ入學スル事禁止スルノ制ナキモ自ラ入校許可ヲ需ル者ナシ 平民子弟等學事ニ志ス者該意向ニ任セテ之レヲ其自由ニ付ス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スル者ハ藩吏ノ許可ヲ得サルモ自ラ自由ヲ以テ開設スルヲ得ル孰レモ開設

義ヲ講スルモノ武衛ノ免許ヲ得シモノハ藩主定紋附ノ麻上下ヲ給テ之ヲ獎勵ス

生徒ハ入學ノ節及毎年正月開校ノ日禮服着用師範家ヘ回禮ス

文武學館掛ハ大目附役兼勤ス文學師範役ハ家祿ノ外役金年五圓全助教ハ家祿ノ外毎年七月十二月金五百疋入金壹圓二ノ目十五錢
錄ヲ給フ坐席身分ハ各同シカラス

學校職員ハ師範役壹名全助教五名小使二名ヲ以テ定員トセリ

生徒ハ通學生ニシテ凡六七十名寄宿生ハ十四五名ニ下ラス書籍ハ自費ヲ以テ購求セシム

文武館費用筆墨紙薪炭茶其他器械類新調損繕等ハ藩費ヲ以テ之ヲ充テリ

入學束脩及毎年七月十二月金拾貳錢五厘目錄各生徒自費ヲ以テ師範家ニ謝儀ス

藩主臨校ハ夏冬ヲ以テ定期トス諸役人ハ時々臨校セリ

聖廟及祭儀ナシ毎年正月發會ノ節孔子ノ畫像ヲ拜スルノミナリ

校則

一 毎朝六ツ半時開校之事

一 五ツ時始業九ツ時退散スヘキ事

一 師範役助教五ツ時着席各句讀ヲ授受シ九ツ時放學ス且職務有之者ハ時間定限無之事

一 毎月四九ノ日九ツ半時迄詩文會各一韻一章ヲ出スヘキ事

一 毎月二七ノ日大目附役臨校五經素讀或ハ會讀等ヲナサシム

一 教授中談笑偶語嚴禁タルヘキ事但應對進退其機ヲ變セス動搖疾走スヘカラサル事

佐貫學校學制

校名 誠道館ト云

校舎所在地 佐貫藩内字清水ニ建築アリ

寛政八辰年學校ヲ建築シ藩士白井三四落合宇右衛門ノ二名師範役ヲ勤メ文武隆盛ナリ文化文政天保嘉永年度迄學事衰頽

ス安政二卯年藩政一變シ文武復盛興ニ至レリ

士族卒ノ子弟必ス藩學校ヘ入學セシム尤自己ノ意向ニ任セ他藩或ハ私塾又ハ江戸等ヘ遊學ヲ許セリ然レモ藩費ヲ給セス

一數箇ノ學科ヲ專修スルモ藩主ニ於テ之レヲ支ルヲナシ只管各自ノ意向ニ任ス

一生徒學修ノ年齡^{入學ノ期}限ハ八歲ニ至リ學ニ就キ二十五歲ヲ卒業ノ期トス又四十歲ニ至リテ學習スルモアリ

一八歲ヨリ十四歲ニ至リ小子ノ學トシ十五歲以上ヲ大人ノ學トス

一試験ハ春秋ノ二季^{月日}不定藩主ノ表書院^{校中ノ格}ニ於テ藩主ノ目前ニ生徒一名宛出頭シ教頭助教ノ指揮ヲ以テ之ヲ爲ス此時重

役始執レモ一役一人側面ニ列席ス試験ノ及落ハ教官記帳シ且平素ノ勤惰品行等ヲ照ラシテ該格ヲ附シ藩主ヨリ其賞

譽ヲ與フ訓條罰則等他ナシ生徒中ノ惰ハ或ハ平素不品行ヲ醸ス等ノ者アレハ其親戚へ取締方注目ノ義ヲ示ス

一生徒賞品ハ十五歲以下エハ書籍或ハ筆紙墨各其試験格ヲ以テス十五歲以上エハ書籍又ハ金銀等ヲ與フ

一入學許可ヲ得シモ師範家回禮スル等ノ儀式制規ナシ

一藩立學校年中開校閉校ハ正月十七日ヲ以テ開校シ何レモ禮服着用教頭席上ニ着ク補助員モ隨テ側面ニ列席ス生徒一同ハ各儀ヲ正シテ教頭ニ向ヒ例年開校ノ祝詞ヲ述フ終テ生徒一同へ藩主ヨリ蒸菓子一包宛ヲ與フ教頭以下補助員へ

江戸藩邸學校全上

職名及俸祿

學問所奉行^{一等席}但二名ヲ限リトス 兼勤役料無之○教官一名^{三等席} 拾五人扶持^{但一ヶ月}^{維新前ノ制ナリ}○教授方不定員^五

等席以上 兼勤役持高ノ外毎月一人扶持此現米壹斗五升○世話役、助教、補助、不定員 但世話役以下ハ生徒ノ内ヨリコ

レヲ勤ム仍テ慰勞金ヲ與フ 職員概數 奉行壹人或ハ二人 儒官壹人或ハ二人 教授方六人或ハ八人 世話役兼助教四人 補助五人^{是ハ生徒學業上達ノ者多寡ニ准シ又ハ役}

生徒ノ概數 通學生徒^{維新前後}七八十名或ハ百貳十四五名ナリ 寄宿生無之

束修謝儀 年末ニ至リ扇子料^{ナハス}シテ生徒一名ヨリ銀貳匁ヲ以テ教官ニ贈ル

學校經費 壹ケ年ノ經費ハ凡テ藩主ノ會計ヨリ仕拂^{眞木、水油、筆、紙、墨、綴糸、其他諸器械、器具類等}茶其他諸器械、器具類等 現品ヲ以テ受取ル故ニ目下價格算決上不詳 學

費ヲ藩士へ賦課スルヲナシ

藩主臨校 春秋兩度試験ノ際臨校ス

祭儀 聖廟ノ設置無之

スルハ居住ナシテ教場トス

學校

校名 藩主ノ學校ヲ修來館ト稱シ士卒ノ學校ヲ修成館ト曰フ但設立以來名稱ニ變更スルナシ江戸藩邸學校全上校舎所在地 上總國市原郡姉崎村字砂子(是ハ舊鶴牧藩外郭ノ内藩士邸内ニ接續ノ地)

江戸校舎 藩主邸内 吳服橋内 濱町土井堀

沿革要略 學校創立ハ天保年度(但假設)

北條ノ領主^{北條トハ安房國安房郡}后鶴牧藩ト改稱ス^{鶴牧領主トナルハ文政十年八月上總國市原郡姉崎村津兩村地ノ内ナ併テ城郭ヲ爲セシ時ヲ以テ鶴牧ト改ム}五代水野壹岐守忠韶時代^{享保武}

道儒學ヲ好テ之レヲ尊崇セシヲ以テヨリ家中一般ニ覺事ノ擔張シ以降近クハ肥前守忠順代天保年度本校ヲ假設ス^{忠韶}校舎及校名不詳 壹岐守忠韶ハ徳川幕府ニ屬シ若年寄勤務ノ頃同旗下林大學頭ナシテ家士ノ學修ニ導クヲ頼令ス^{舊記}其后天保

ノ度ハ江戸藩邸學問所ニ於テ幕府學問所^{昌平學問所}儒官佐藤捨藏同所長百々尙一郎等ヲ賓師トス^{是ヨリ以前儒官久保田兵馬ナルモノアレトモ未タ盛ニ至ラス}則

當代肥前守忠順ハ學校設立ニ盡力セシヨリ漢學一藩ニ通徹ス因テ日ニ増シ月ニ盛ニ至レリ慶應年度ヲ以テ盛大ノ時トス

教則

一漢學用書ハ經史文詩ヲ以テス要スル處ハ朱子小學四書五經ヲ專務トス

一授業ハ毎日明ケ六ツ半時ヨリ夕七ツ時迄トス

一明六ツ半時ヨリ朝四ツ時迄ヲ素讀ノ間トシ四ツ時ヨリ晝九ツ時迄ヲ質問トシ九ツ時ヨリ夕七ツ時ニ至テ輪講作文時間トス又連月一六ノ日ニ當ルヲ以テ復習日トス

一休日五節句及年始年末ノ閑校ヨリ開校迄ノ日數且歳守祭典日

江戸藩邸學校教則全上

學科學規試驗法及諸則

一漢學一科ヲ教授ス

一生徒ハ文^{算法筆道}及ヒ武^{弓馬槍劍砲柔棒縛泳等ノ類}兼修ス但各術學習ハ本校ニ就カフナシ

一文武程度比例四書五經ノ大義ニ通スルヲ以テ武術ノ免許以上ニ較ス

科ス

學科學規試驗法及ヒ諸則

和學洋學醫學等藩内ニ教師ナシ有志者ハ認許ヲ經テ他藩ノ名家ニ從ヒ營業ス兵學及ヒ弓馬槍劍砲術柔術具鼓水泳術等
 免許以上ノ得業士輩出シテ以テ皆此輩ニ就テ教授ヲ受ケタリ而シテ武術ニ係ル試業ハ特ニ定期ナシ藩主臨時之ヲ檢閱フ
 凡ソ藩士ノ子弟ハ必ス文武兩道ヲ兼修セシム就中槍劍弓銃ノ四科ハ專ラ一科ヲ練習スルヲ許可シ仕途ニ就クノ際必
 該技術ノ内一科ヲ專修スヘキ一心決定書ナル者ヲ提供セシムルヲ處規トナセリ文學ノ試驗ハ毎月一次之ヲ執行シ藩主
 又ハ老職之ニ臨席スニ是ヲ九等盤學問吟味ト稱フ其法豎横共各二尺五寸許ナル視様ノ物ヲ製シ金銀紅紫黃青綠白黒九等
 色ノ横桁ニ分畫シ學業優等ノ者ヲ金等トシ銀以下黒ニ至ル迄ヲ差等シ試驗ノ書目及其姓名ヲ該等ニ掲ケテ之ヲ表章シ
 監察^{大目}付ヨリ執政ヲ經テ藩主ノ覽ニ付ス此差等ヲ定ムルハ教頭學監書記ノ三役ニ於テ香帳簿ヲ以テ甲乙丙等ノ符號ヲ
 付シ置キ後之ヲ鑑合シテ其何等ニ該スヘキカヲ査定ス金等相當ノ者ニハ即日賞品ヲ付與ス而シテ三等ニ至ル者並ニ
 病氣缺席三回ナル者ハ教頭及ヒ學監ヨリ規誡ヲ加ヘ尙父兄ヲシテ將來ヲ誡メシム然レモ悔悛ノ効ナキ者ハ監察之ヲ
 公責ス是舊藩主久徵以來藩士試驗ノ梗概ナリ

職名及ヒ俸祿 明治以前ハ特ニ儒員ナル者アラサ皆馬廻給人席等ノ身分ヲ以テ儒者役タルヲ兼務スルノミ故ニ儒員タル
 ノ故ヲ以テ別ニ俸給ヲ付スルコトナカリキ維新以降一旦藩制成ルニ至リ儒員ヲ聘スルニ及ヒテ月給十圓乃至十五圓ヲ贈
 リテ之ヲ容待セリ

職員概數 生徒概數 兩項其ニ詳ナラス

家術謝儀 文武其同藩ノ教員ニ對シ父兄等ヨリ謝物ヲ贈付スルコトナシ他藩ノ師ニ對シテハ總テ謝費ヲ以テ之ニ謝セリ

學校經費 一週年間文武ノ經費ハ舊領地タリシ上野國新田郡其他二郡^{郡名不詳}ヨリ收入セル全額三千百^{ナリ}卓高^{ナリ}ヲ以テ之ニ充ツ該

費日ハ銃隊操練ノ諸費技術免許ヲ受ケタル者ノ特別扶持料其他武術ニ關スル器械及ヒ演武場修繕費并ニ諸雜費他藩ノ
 教師ニ對スル二季ノ謝儀トス 舊藩下邊山助太郎及ヒ舊中津藩島津良助ノ長子學藩君規藩小藩手左衛門、槍術甚高收藩西尾源左衛門、劍術甚高藩小
 川某ノ家術甚相繼山藩島島良右衛門ノ水泳甚優下錦織帶刀ノ巧術甚佳藩大櫻俊彦ノ洋醫術甚佳牧種中ノ蘭學等ナリ

年末ニ至リ文武ノ諸科教員ヘハ慰勞金及ヒ學生ノ手當金賞與金ニシテ皆三千石ノ文武費ヲ以テ之ヲ支辨ス藩立學校即

崇文館開設ニ當リ現石二百石ヲ以テ經費ニ充テ軍費ハ別ニ藩高ヲ以テ支出スルコトナレリ

藩主臨校 事已ニ上項ニ載ス

祭儀 別ニ此事ナシ

學校構造及建物圖面 構地區域不詳 假學校長屋造 建坪三拾五坪但間口十間奥行三間三尺

江戸藩邸學校假設 適宜建物ヲ用ユ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍日次及藏書類 史記評林五拾冊出版 藏書ノ種類部數不詳

舊一宮藩

學制

學事上ノ諸制度 藩士ニ對セル布令諭達等今日ニ於テ徵スヘキモノナシ

士族卒ノ子弟教育方法 加納家ハ幕府ノ時代江戸詰定府タリシヲ以テ藩士ノ江戸ニ住セシ者十ニシテ九ニ居レリ然ルニ

安政年間ニ至リ舊領地上總國一宮ニ移住スル者漸ク多キヲ加ヘタルヲ以テ時ノ藩主遠江守久徵領民片岡安藏ヲ登庸シ

テ儒者役トシ初メテ學問所ヲ開キ藩内ノ士民ヲシテ隨意就學スルヲ得セシメタリ明治年間舊藩知事久宜ノ代ニ於テ

一ノ校字ヲ設ケ名ヲ崇文館ト命ケ片岡安藏大澤默本多清樋口眞彦伊藤某等ヲ以テ逐次教頭ニ聘シ大澤默以下皆他藩ノ士民ニ

特ニ招聘セシ者 尙和學數學ノ二科ヲ加ヘ藩内士民ノ中學業優等ナル者ヲ以テ助教トス其他職員ハ學務主任少參事都講學監督計

員等ナリ爾來學事將ニ興ラントスルノ際廢藩立縣ノ令アリ該館付屬ノ書器牒簿ノ類一切木更津縣ヘ送付シ且當時在職

ノ者或ハ歸國シ或ハ死亡シ或ハ他縣ニ寄留スル等ニテ目今其狀況ヲ詳ニスルヲ得ス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋等ニテ各自隨意ニ修學スルヲ得又崇文館ヘモ入學スルヲ許セリ

家塾寺子屋設置ノ制度 學力アル者ハ自由ニ開學セリ蓋シ藩廳付近ノ學館未ダ充全ニ至ラス從テ塾主ノ學力如何該教科

ノ如何生徒ノ員數進歩ノ狀況如何等之ヲ監査ヲモ爲スニ至ラサリキ

學校

校名 從前單ニ學問所ト稱ヘタリシカ明治二年初メテ崇文館ノ名ヲ付セリ

校舍所在地 學問所ハ當初長屋ヲ以テ之ニ充テ江戸又ハ一宮ニ於テ便宜開設セシヲ以テ一定ノ場所ナシ明治ノ初上總國

長柄郡一宮本鄉村即舊陣屋外郭ノ廢寺ヲ以テ崇文館ヲ假設セリ

沿革要略 記スヘキモノナシ

教則 課業書ハ四書五經春秋左氏傳八大家文等ヲ主トシ其他ハ各自ノ所好ニ從テ講習セシム日々辰時ニ起業シ午時ニ放

一同大ニ驚キ留置キ稽古ヲ頼ミ文明公御覽ニナル辨吉増長シテ何卒御師範千葉周作へ御入門被下度左候者御門人方ハ及ハスナカテ私御引立御世話可仕旨申出是ニ於テ師範大ニ怒リ中ニ就テ石川左内ハ辨吉自分ノ弟子ニ仕ヨシナリト老中へモ言上シ葛藤ヲ生ス然ルニ辨吉逗留中ニ其相弟子海保藤藏（親弟）谷健藏二人來リ試合ス辨吉虎太郎ヲ合セテ四人ニテ試合ス四人共向フノ者同士ニテ稽古試合シタレハ佐倉諸生ハ一同心醉シ中ニ淺山ノ門人ハ左内ノ言アレハ駒澤ナド心配ス明年春二月千葉榮次郎辨吉虎太郎外一人來リ試合ス榮次郎ハ天下ニ絶倫ナレハ驚シテ公ノ御覽ニナリ江戸ニテモ御覽ニナリ程ナク又桃井春藏門人ヲ率（率）來リ千葉桃井ト名ヲ爭フ名人ナレハ千葉桃井二人ニ留マルトテ兩家御頼ニナリ中和流今川流ハ千葉一傳流立身流滯心流ハ桃井へ御頼ニナリタレトモ稽古ハ一樣同シクシテ派ヲ分ケス千葉引立ニ來ルモ桃井來ルモ同一ニ稽古ス

杢ハ御頼ミト申スハ無レトモ水戸ノ吉村藏吉へ佐分利瀧藏阿部邦太郎其弟子ニナリ水戸ニ修行ス眞下彦之丞長州へ修行ニ往ク他流試合御免ノ令ハ植松求馬總教ノ時ナリ是ハ嘉永辛亥ノ春比ガ文武宿ヲ油屋へ談ス他流試合御免仰出サレノ文面詳カナラス

西洋學ハ初メ和蘭陀醫術ノ修行ナリ天保九年鍋本仙安ニ和蘭陀醫術修行仰付ラレ箕作氏ニ入門又長崎へ修行仰付ラル西淳甫ニモ仰付ラレシカ天保十四年初メテ江原御菜園ニテ無宿民之助死罪ナル其死體ヲ解剖ス廣瀬元恭御頼ニナル時ニ仙安淳甫出席外御醫師モ出ル

天保十四年佐藤泰然御召抱ニナリ其門人三宅良齋モ御雇ニナル醫學所ニテ醫書圖書ノ講義會讀處方會等始マル其生徒近國ハ勿論江戸遠方ヨリモ來ル山口舜海ハ幼年ノ比ヨリ兩國藥研堀ニテ泰然ノ門人ト爲リ漢學ハ寺門靜軒ノ門人ヨリ舜海ノ事長ケレハ略ス文明公ノ寵ヲ蒙リ御家中ノ人ニ妬マレ

西洋學ハ本村軍太郎江戸ニテ學佐倉ハ手塚律藏來リ西淳甫ノ方へ來ル郁太郎ニ面會シテ様子ヲ見ルヤウニ植松求馬談ス内實ハ文明公モ此節西洋學者ハ中々容易ニ得カタシト思召サレ様子好ケレハ御抱ニナサルヘキ御含ナリ此事由比モ其事ニ與カリシヤニ覺ユ年月ハ嘉永三四年ノ比カ不詳郁太郎宅ニテ佐藤泰然ヲ招キ律藏ニ面會シ淳甫モ來ル律藏沈黙シテ其比ノ洋學者ノ多辨ナルニ似ス好き人物ニ似タリ泰然ニ承ハリシニ書ハタシカニ讀ル者ナリト云フ故其通リ求馬へ中達ス夫ヨリ御雇ニナル江戸ニテ御召仕ヒニナリ本郷ニト居シ後長州藩士トカ、リ合有リテ佐倉へ移リ是ヨリ先キ門人ニハ大築保太郎修行仰付ラル是ヨリ門人モ日々多クナル律藏軍太郎兩人ハ公儀ニ御雇ニナル保太郎ハ召出サル右御承知之通之事ニテ書留無之

學校構造及ヒ建物圖面 崇文館ノ敷地八百七十三坪建家二棟此建坪七十二坪ナリ廢藩ノ末公立學校トナリ爾后構成ヲ變
換シ幾多ノ修繕ヲ經タルヲ以テ當時ノ圖面ヲ付スルニ由ナシ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 出版セシ書籍ナシ但舊藩主久徵世子タリシ片文政天保ノ
交ニ際ル儒教ヲ尊崇
シ處士和氣行藏ヲ聘シ以テ其講說ヲ聽クヲ喜フ乃本人カ著述シタル聖學ヲ翻刻シテ闔藩ノ士ニ頒チタリ其板木已ニ散
失シテ現今其在ル處ヲ知ラスト雖モ舊藩士一二ノ家尙頒布ノ書ヲ藏スル者アリ

舊藩知事久宜カ崇文館ニ寄附シタル書籍左ノ如シ

國典ノ種類三十八部

共計五百
四十三册

漢籍壹百廿六部

唐本和共計壹
千八百廿四册

翻譯書五十八部

共計壹百
六十九册

總計貳百廿部冊數二千五百三

十六冊外ニ管公木像一軀文宣王全斷、全畫像壹軸文宣王并十哲畫像壹軸圖畫二冊ナリシ
此書籍ハ廢藩ノ末悉皆本更津縣ヘ引送リタルト云フ

舊佐倉藩

舊藩學政ノ儀ニ付舊大參事平野知秋ヨリ家令依田柴浦ヘ回答書

文武學校設立之件書留モ有ハ差上可申云々詳悉奉敬承候然ルニ人ニ示スヘキ程之手留等ハ無之佐治自慊カ御手ヘカ差
上候申命錄等ヨリ書拔クルモノ演武場御設ノ處迄明了相見ヘ申候其後師範家銘々ニ御渡シニ相成候道場御廢止槍劍ノ
道場各一ヶ所ニ改造シタルハ今ノ省メリヤス造リ
ノ處又備續場ナリ年月ハタシカ嘉永五年カ六年ノ比ナリト覺申候此ハ槍劍他流御開キニ爲
リ諸藩士大勢入來リ千葉桃井兩家御賴ニナレハナリ柔術ハ竹中御賴ニナル此モ同シ道場ナリ但荒木流ノミ外ナリ頑固
令チ奉セサレハナリ武術流ノ砲術并弓術ハ御廢シ西洋砲術ハ別ニ有リ是武藝之一變ナリ他流試合ノ始メハ嘉永三年庚
戌庭山藤平トイフ者酒々井町ニ來リシ時内ニ駒澤藤右衛門福田常治試合シタルニ二人及ハサル所ヨリ其師逸見忠藏石
川左内エ咄シ他流試合ヲ開クヲ勸メタルニ御家ノ堅キ御禁制ナリトテ許サレヌ夫ヨリ同年月岡一郎來リ淺山流道場ニ
テ他流試合ノ名ヲ止メテ何トカ名ツケテ他流試合ス一郎ハ達者ニテ本郷ニ門戸ヲ張り居タル者ニテ佐倉一傳流之者モ
及ハスシカシ外ノ道場ノ諸生ヨリ面小手シナヘ打ハ平素習故手際ヨロシ其比水戸ノ儒生庄司建齋佐倉ニ來リ居リ月岡
ノ事ヲ承リシカ歸府後其弟辨吉ト申者知秋ニ建齋ヨリ添書ヲ持參シテ手合ヲ申込ニナル是ニ於テ中和流ニテ試合シ
タルニ此者千葉ノ高弟ニテ海保帆平庄司辨吉トテ外道場ニテモ名チ一時轟カシタル者ナリトモ知ラス月岡一郎ナト位
ノ者ト存ノ外是迄ノ修業者ト同日ノ論ニ非サル飛離レ業ニテ外一人兒島虎太郎ト云十六許ノ若衆來リ是モ達者ナレハ

天保四巳年文武藝術之制

文武藝術之儀御代々様被仰付置候簡條左之通

御家三箇條之内孝養を專にはけまし常々文道武藝を可心掛儀は侍たる上之第一也畢竟人々心たてを嗜を以て肝要とすへし

安中下知狀之内

武藝之儀事新敷候といへとも人々可有覺悟若輩いたつらに日を送り候事不届被思召候事

文化八末年十二月被仰出

文學手跡武藝稽古之儀前々被仰出候事に候得共親々厚相心得無油斷致修行候様可被申聞候若輩之族御役儀相勤候面々たりとも御用透之節致修行候儀心掛次第之事に候

享保三年二月御書付

年若成面々武藝におこたり小唄三味線淨瑠璃等不可然候勿論酒色に溺猥成行跡等於有之は急度可被仰付候

右之通前々被仰出有之上文武藝術之儀の厚く心掛親兄も無油斷世話可致答之處近年若輩之者文武藝術に怠り酒食にふけり候族多く有之段被聞召不届思召候儀之向後文武藝術未熟之者家督跡式は御代々様御定之通可被下置候得共知行之内歩合を以増引可被仰付候事但幼少引有之内は増引無之候事

文武藝術之内○文學 小學四書講義成就○禮節 嘉禮免許○算法 演段術迄成就○兵學 免許○武藝 一術免許 右之内一術成就いたし候の増引御展可被下候事尤文學の人道之本務にして人々心掛無之て不相叶儀別て大身之面々修行疎に仕間敷候事

諸士以上之男子次三男に至迄八才に相成候は最寄讀書稽古所の差出讀書手跡禮節等修行可爲致候拾五歳に相成候の學校の差出可申候拾五歳以下にても望之者は學校の差出候儀勝手次第但八歳に相成候に付最寄稽古所の差出候支配頭大目付の可相達候病身又は無據差支等有之難差出候の是以同様可相達候

武藝稽古之儀の拾五歳以上何方成共面々望之方差出修行可爲致候事但右同斷幼年より差出候儀は面々勝手次第文學又は醫學武藝にても他方罷出修行致度志之者は家業に無之共願之上可被仰付候事

〔追加〕醫師 本道外科鍼治共 小學、論語孟子之内一部、傷寒論 右之書講義相濟候上各其家之業可也にも會得いたし病用も相勤候は増引御展可被下候事但盲人の制限に無之鍼治奥儀會得いたし候の増引御展可被下候事（天保六未

古人云フ韓子倒マニ學ヒ了ルト文ヲ學フニ由テ道ニ入ルヲ云フニ御本藩ノ學校ハ文明公ノ時ヨリ盛大ニナレモ初メ眞ニ學校ノ興リシハ唯心公ノ御時寛政四年京都所司代仰蒙ラセラレタル時ニ御造營ニナル佐倉宮小路麻賀多神社ノ南ニ建テタリ此學校ハ故ラニ建築セシメハ非ス松本其園トカ云フ好事ノ醫者ノ家ヲ其園ハ御暇ヲ乞フテ去ル御用非ニナリタルナリ此人愛スル所ノ虎ノ掛書有リ此掛書ヲ掛ルカ爲メニ作りタル床ヲ聖像ヲ祠ル廟ニ用非ズルナリ天保七年マテ學校ニテアリシナリ御家ハ學校ヨリハ聖廟ノ方古クヨリ有リタリ釋奠釋菜之禮久シク行ハル是諸藩ニ稀ナル所ナリト相傳フ慈德公ノ時孔廟ヲ澁谷ノ別業ニ建ツト其何ノ時ニ興リ何ノ年ニ廢スルヲ詳カニセス青雲公ノ時實曆三年聖廟ヲ西丸下ノ御上邸ニ建御役中ナリ扁シテ先聖殿ト曰フ親ヲ釋奠ノ禮ヲ行ヒタマフ澁井孝德今井兼規ニ仰セテ其儀ヲ撰定セシム其儀大抵昌平學ノ禮ニ據ル其後唯心公御邸ヲ虎ノ御門ニ遷シタマイシ時未タ孔廟ヲ造ルニ違アラス因テ姑ラク御書院ヲ掃ヒ略其禮ヲ備ヘタマフ安永三年公聖廟ヲ澁谷ノ御邸ニ御造營有リ入德門ノ御額ハ即公ノ御書ナリ此御下書キハ知秋ノ家ニ藏ス此後ヲ督スレハナリ其後寛政四年藩學成ル温故堂ノ御額自性公ノ御書ナリ學規ヲ假名交リニ書キタルハ向之益ノ書白鹿洞書院掲示ノ板行ハ向之祥ノ書ナリ見ルヘシ學校ノ設ケハ孔廟ヨリ後レタルヲ常樂堂大學寮釋奠圖都堂院講論ノ圖ノ屏風ヲ御献上ニナル今ニ昌平黌ニ在リ林大内記君寛政ノ末釋奠ノ禮ヲ御改メ延喜式ニ倣フ之ヲ今儀ト曰フ御一新前ニテ行フ所ノモノナリ學政ハ天保度ノ御制ニ聖廟ノ事ヲ添テ御差出シナラハ世珍ラシキモノナラン昌平校ニテ大寶ノ朝廷ノ禮ニ御改有シハ恐多キ事ナカテ倍シタマイシ事ト存シ奉ル常憲公ノ思召ニハ叶ハセタマフマシ昌平ノ聖廟ハ明ノ制ニテシカモ縣學ノ制ニテ大學ノ制ニハ非サルナリ全ク公ノ朝廷ヲ御尊敬有ル微意ノ在ル所ナリ然ルヲムサト延喜式ニ倣ヒシハ善ヲ盡リトハ申シ難シ常憲公ハ御献上ノ御屏風ノ書ヨリ今儀ノ裝束ノ色目ヲ取り用サシト櫻井久之助申間シコト有リ此屏風セハ世ニ珍ラシキナリ御邸ニハ今尙御寫アルヘシ

聖像ハ佐倉ノハ銅像ニテ雙門ノ前竝ニ枚外出セリ是聖像ヲ作ル畫家ノ法トイフ吳道子ノ像如此但澁谷ノ像ハ文之助宅ニテ拜セシ時心附不申御覺ニハ如何御坐候ヤ外ニ朱文公ノ像有シカ今何レニ有リヤ詳カナラス

藩學ト廟ト離レヌ又釋奠御直祭トハ合シテ離レサルハ世ニ珍ラシキ御代ニ聖敬御崇敬ノ至美ト奉存シ林家モ此祭儀ハ世ニ珍ラシキ事ナレハ失ナハス様ニ渡邊彌一兵衛ハ嘶サレシナリ

右御尋問ノ書類ハ無之入ラス事ヲ前後雜亂無序次申上御一笑ヲ御發シカクマテ老耄ナリヤト思召ノ程モ恐入候勿々布字頓首再拜

明治十四年五月四日

事 文は載道之具詩歌は溫柔敦厚之教皆窮理之一端入德之一助急務にあらすといへども暇日を以可學之事
行儀之部 入學之輩朝夕父母之安否を訪ひ出入可告之事但父母無之者の祠堂に事る事存生之時之如くすへし 平日溫良
恭敬質直寡言にして苟且にも輕薄卑賤之振舞有之間敷事但善き人と交り卑賤下愚之者と不可近付事 幼年之學生御屋
敷内遊戯之節さうとも非法のふるまひ有之間敷候學に入候者はたとひ幼年たりとも一際行儀正敷いたし御觸事は勿論
總て師役申間候儀少しも違犯有之間敷事但御屋敷内外途中に於て御役人は勿論長者に行違候節急度辭宜いたし且下輩
に對し候とも無禮有之間敷事

出席之部 學問所は御殿と相心得可申事但無用之者猥不可入事 溫故堂御筆之額を賜り平日上之間を被置候間上被成
御座候同様に相心得可申事 素讀生毎朝五半時より出席兼て被定置候圖面之通到着順に列席いたし罷在順々可
被受敷候事但出入之節履物等に至迄混雜無之且師役之用を足或は小用等之外猥に立居致間敷事 亂髮違俗之風俗は無
用之事但幼年之諸生は此制を以て正し難しといへども其父兄たるもの常々心掛成丈可致世話事 素讀生前日學ひ候處
復し能々覺候上にて先を學ひ授業之者相許候上にて相仕廻可申候若前日之處忘却多候は、先を傳申間敷事 毎月十日
例刻素讀復習受業は相休候事但兼て素讀相濟候書物兩三冊ッ、持參候様師役より前廉申間當日は右之内にて臨時に章
割いたし復習爲致候事 講義輪講并素讀受業之節諸事相愼義理討論之外無益之雜談有之間敷事但師役之外茶多葉粉相
用申間敷事 同師之節定之刻限より遲參致間敷會講不相濟内猥に退去致間敷事但勤用は勿論父兄之處用稽古事其外無
據要用は師役の相斷候上遲參退去とも不苦候事 詩文會之節席上題宿題とも從教授差出候事 席上題は其席にて可致
卒業候事 有志之面々晝夜とも勝手次第罷出可致修業事 御書籍拜見之面々師役之相斷可申事 御書物持歸拜見仕候
面々拜借帳の自筆にて姓名書名月日等相認可致印形候事 看書之席正敷御書物亂雜に取散申間敷候事 見臺出入茶多
葉粉之給仕は學生不務事但式立候節の禮節作法を相用平生も行儀宜可心掛事 勿論たりといへども火之元可致大切事
於學問所別て長幼之禮を失はす長者は少者を愛し少者の長者を敬ひ可申少者たりとも業之勝候者は可愛敬事に候乍
併少者業に長し候とも長者の對し不遜之振舞一切有之間敷候事 學問所において行跡正しからず修業を怠詩文を以風
流雅致として輕薄浮華の所業を以風儀を亂し猥に御政事を議し人之短を揚師役之教戒を違犯致間敷候事
右三部之條々急度相守篤實可致修行旨被仰出候各可被得其意候以上

成德書院取建に付席觸及學問所奉行へ被仰出候書付

是迄之學校手狹に付御再造之儀謙良院様思召被成御座候得共御時節柄不被爲屈然る處藝術之儀に付去已年被仰出の趣

年三月十九日)

貳百目玉異風筒角前取扱候者武藝一術免許に准し御取扱可被下候事(天保九戌年六月廿七日)

右之通文武藝術之制於佐倉被仰出候條於江戸表も同様相守可申候事但右ヶ條の内江戸表にては左之通

諸士以上之嫡子八歳に相成候は、御上屋敷におゐて學問所へ差出可申候於御中屋敷の藤倉元龍の世話被仰付候間同人方へ可差遣候於御下屋敷は菱川泉藏方に差遣可申候十五歳に相成候者は其春稽古初より御上屋敷學問所へ差出其段大目付に可相達候致勤候ものにて可申掛儀勿論に候得共勤不仕ものは一統學問所へ可差出候事但病氣又は無據差有之難差出候は、其譯頭支配大目付迄可相達候事次男以下も同様之事

讀書の儀小役人以下の者たりとも心掛の儀勿論の事に候間本文同様可相心得候事
禮節の儀是迄の通望のものに御上屋敷稽古所へ差出可申候事

手跡の儀是迄の通諸御屋敷にて致世話候者へ相頼差遣出精可爲致候事但町方等へ差遣手習爲致候儀御搦無之候得共町家之風儀押移如何に候間先の御屋敷内にて稽古可致候尤師匠之儀他方にては勝手次第之事

算術之儀面々心掛次第之事にて別て御勝手御役人之子供末々迄勿論之事

武藝之儀拾五歳以上より御上屋敷にゐて望之方へ差出修行可爲致候勿論弓術之儀は湯川勝野右衛門方へ差遣可申候事但幼年より差出候儀は面々勝手次第之事

成徳書院心得書

學問本旨之部 夫學問之趣意の第一倫理を辨へ躬行を勵み信義を專に禮讓を謹み君子と可成所爲候條白鹿洞書院揭示之日を目當として謹厚に可勵之こゝに志しあき人縱令經義に委しく百家の書に涉り詩文に巧みなり其皆道にあらずして學問之本旨を失ふ各心得違不可有之事但子弟たる者家に在て父兄に事へ親族朋友に睦敷成長に従ひ其學ひ得し所を以て御奉公に誠を盡し一かどに御用立候儀學問之事務候條各厚可心掛之候讀書に相耽り候儀有之間敷候事 公儀之御法度御家之御制度人々尤不心得候ては不相叶事に付其大凡を前卷に記し差出置候條折々可致拜見候事 學問は衆藝之本に候條致出精候儀は勿論たりといへども文弱にかれ質武之風を失ひ申間敷事○學生受業之次第如左 孝經小學四書五經儀禮周禮三傳爾雅、補儀禮周禮公羊傳賈逵傳鄭雅等之書讀差支候に五經左氏傳卒業之上國語史記兩漢書受業之事但兼て御定之四書小學は勿論經史子類に至迄各致研究志行兩全之學德可致成就候事 五經以上素讀相濟候は、可許講義事但晚學之輩は亦此制あらざる事 御定之素讀雖未相濟平日行狀正敷學才有之或は出精之輩は從時宜可許講義且定之素讀相濟といへとも前文に背き忘却等多者は猥に不許講義

附屬之場所も同様師範員長之者可被申達候

成徳書院表門大扉へ置上御通行并御名代其外非常之節計開門平日は潜より通行可致候裏門は平日禮節所并坂田段治御長屋の通路計にいたし通拔爲致間敷非常之節は通路勿論之事

天保七丙申年十月七日

近年素讀生多讀候を手柄之様に心得復習之功無之故歟已前隔日之節よりも本數は數多讀候ても講義にても可致程之力有之者少く趣に相聞得必竟業を授候者も受候者も其日之責を塞ぎ候のみにて實意の骨折無之故に可有之候依之此度成徳書院の引移後の別帳の通素讀日以前之通隔日に被相改教授已下授業之者出席も多被相定候間文化度被仰出候温故堂御規則之趣堅相守教授目曲尺を以其者之力に應し等級を附紙數少くとも熟讀いたし漸々に進候様丁寧に教示可爲肝要候間師役之者厚く申合受業之者にも兼て可被申達候

素讀生并醫學書學禮節之諸生其幼年不行跡之者有之候は、温故堂兩塾は授讀員長其外は員長之者遂穿鑿學問所目付の申達奉行肝煎并其向教授師範評議之上嫡子次三男は奉行宅の招呼肝煎目付立會幼年相應之輕き仕置可被申付尤幼年にても當主は一應月番の申達候上可被取計候此段師役之者には兼て相達可被置候

天保七丙申年十月七日

大目付觸 天保七申十一月十九日寄々觸

來ル廿三日八ツ時より於成徳書院白鹿洞書院揭示開講引續毎月三之日大學講釋吉見治右衛門相勤候間給人之役人以上御用透之者申合一役より壹人宛罷出聽聞可被致候尤望之者は何人にても勝手次第其外御家中之面々末々迄望之者は罷出聽聞可有之候但廿三日開講に付聽聞之者麻上下着用

六藝師範醫學教授并堂中一統へ被仰出書付

六藝師範員長醫學教授

今度諸武藝成徳書院之附屬被仰付候御趣意別紙之通師範員長の被仰出候六藝醫學は兼て附屬に被仰付候事故外附屬之目當にも相成候間尙又右御書付之趣厚相心得門弟共可致教導之旨被仰出候

畢て此度校正御帳類被差出候間拜見可有之候堂中附屬共夫々勤向被仰付并御免等之儀且又授讀名目被相改候廉等は其向々の可被申通候

付教以下正授讀迄

は深き御内慮も被成御坐候間此度成徳書院御取建被成候御家中之子弟年若き内文武藝術可相勵等分て學問は人道之本務候得は兼て被仰出候通諸士以上之子弟十五歳に相成候は、温故堂に差出爲致修行其身才徳成就は勿論精々御用立候様致出精父兄たるもの唯學問所を差出候得は宜とのみ心得右之趣意平生念頃に申合て勵候様可被致尤向後十五歳にて温故堂に入學之もの可也にも讀書講究出來不申内私に退學不相成等被相極候毎一年一度つゝ學生行狀才能を撰み學問所奉行より書上往々右之内より御見出夫々之御役儀等可被仰付御内慮に候間無懈怠致修行候様厚可被致教諭候文化之度被仰出候通諸役人初年輩之者は御用透に罷出文學可被致修行候且六藝等も書院中に附屬夫々師範員長被仰付候起居之作法書算等は別て日用之急務候間是又若年之者は心掛可致修行尤小役人以下之者も文學志有之者は勝手次第可罷出候

畢て此度吉見治右衛門に學問所奉行被仰付候其外夫々師役并掛り之者被仰付候間右之面々申聞候儀堅相守候様子弟に可申聞候委細は於成徳書院吉見治右衛門可相達候

天保七丙申年十月七日

寛政年中學校御取建之御御定目に學校は御對面所同様と被仰出去年中於江戸表も學校は御殿同様可心得旨被仰出候に付此度御取建之成徳書院中は惣て御殿御番所向同様に可被相心得候然上は温故堂に入學之者向後私に退學等不相成三十日以上欠席之者は不參之趣意學問所口付之相届及五十日候は、引立役支配頭大目付にも可被相届候百日以上之不參容易には承届不申若不得止事趣意候は、伺之上取計候様被仰出候兩塾同席醫學所は都て温故堂准其外附屬六藝所は右之御定に、無之候得共大凡右に准師範員長取計百日以上欠席は學問所奉行目付に可被相届候且又此度御立被成候教授教都講塾長授讀員長六藝師範員長は何も書院師役に候間右之面々申聞候儀は受業之輩堅相守謹厚に修行可有之候若違犯之者有之は學問所目付より大目付之相達候等に候授讀之面々も無據差合にて當直不參之節は次順相頼私に欠席不相成候是又三十日以上之不參は受業之者同様に向々可被相届候此段可申達旨御年寄中被申聞候

天保七丙申年十月七日

此度御取建之成徳書院出來に付聖像遷座御支度其外共取調之上破損奉行より場所受取可被申候

近頃學生風儀不宜中には不行跡之者も有之哉に相聞得成徳書院に引移候上は諸事嚴重に行儀等之儀も可相糺儀に付諸役人座席より學生座席等其外諸事行儀宜敷様規則委敷取調此度被仰出候師役之者得と遂内評候上引移候様可被取計候

右之通三役引立役寄合日被相定候間罷出兼て被仰出候座席に可被相詰候役々席々持場所之諸生修業之勤惰相改候儀可有之候間書院内外附屬迄之前月諸名簿學問所目付に預り有之候間掛合披見可有之候事

天保十三壬寅年二月

學問所奉行

成徳書院諸届向省略

成徳書院附屬之諸役公私差合諸届夫々掌る處有之候間届向之儀一体心得書に被仰出候通可致筈之處諸向繁多にて手數相嵩候に付此度省略左之通

三役

右奉行目付に可被相達候

堂中師役以上

右奉行に可被達候 但付致都講素讀出席等に拘る義に候は、司直正授讀に案内是迄之通正授讀者司直に案内司直より奉行に可被達候

内外附屬員長以上

右奉行に可被達候 但員長等にて堂中之役相勤候は、其向にも可被達候

堂并附屬執事

右月番之肝煎に可被達候 但佐授讀生長等相勤候は、司直正授讀にも案内司直より達に不及尤堂執事目付へ可被相達候

小鑑、主簿

右目付に可被達候 但同斷

堂佐授讀

右司直正授讀に案内司直より奉行に可被達候 但執事主簿勤番附屬之執事相勤候者正授讀より奉行に達に不及

勤番

右奉行目付に可被相達候 但堂中役持は前文役に達之通可被心得候

堂生長

今度諸武藝成德書院之附屬被仰付別紙之通師範員長に被仰出候然上は温故堂之儀は諸附屬之目當に相成候事故彌以書生共謹厚に致修行堂中計之儀には無之平日之行狀等も一際讀書之功相見候様心掛學問之本旨不取失様相互に致吟味候儀肝要に付面々預り之場所は尙更厚致世話御趣意引立候様面々先立相勵可申旨被仰出候

執事以下素讀生迄

今度諸武藝成德書院之附屬被仰付候に付別紙之通師範員長に被仰出候然上は温故堂之儀は諸附屬之目當にも相成候事故彌以謹厚に致修行堂中計之儀には無之平日之行狀等も一際讀書之功相見候様に心掛學問之本旨不取失様師役以上之教戒は勿論掛之者申談候儀厚相用諸事正授讀之指揮に應し相互に學業相勵行狀等致吟味彌以御趣意引立候様可心掛之旨被仰出候

畢て同斷

温故堂執事

今度諸武藝成德書院之附屬に被仰付演武場等も被成御取建候然上は諸向御入用も追々相嵩み可申事に付温故堂は諸附屬之根元にも相成候間彌以入念有餘不足増減等之儀肝煎に申立諸事儉約を用ひ永續之御趣意肝要に候間厚申合可取計之旨被仰出候
右之通向々可被申達候両庠兩塾等も右に准し向々にて申達候様可被取計候

十二月

成德書院出勤日左之通

朔日 四日 八日 十一日 十四日 十七日 廿日 廿四日 廿八日 但四時より九時迄

右是迄之通相詰三役御用向致對談可申事

毎月三役并文武引立役寄合日左之通

五日晝後 三役之内壹人、御番頭以下組外以上、引立役不殘 但四日御備場試差合五日に相成候節五月五日端午

に付八日晝後寄合之事

六日晝後 三役之内壹人、御番頭組外引立役、給人引立役 但五日御備場試差合に相成候節は七日晝前寄合之事

八日四時より 三役之内壹人、御旗奉行以下支配下、引立役無足以下引立役 但御物頭組下引立新番徒頭町奉行

御作事奉行引立役不及罷出候

上廿四歳迄學生、但諸會五拾席以上者醫學學生除く○中等 筆墨壹對 十四歳以下學生、但諸會五拾席以上之者醫學學生除く○筆墨料金壹朱 十五歳以上廿四歳迄學生、但修業簿百席以上之者醫學學生除く○筆墨對 十四歳以下學生、但修業簿百席以上之者醫學學生除く○上等 半紙壹束、墨壹挺五位 十四歳以下書學所書學生、但貳百五拾席以上皆席者筆墨對増○中等 半紙壹束 同書學生、但百五拾席以上右二等之外幼少之書學生は世話致方宜鋪者は半紙五帖増被下候事○上等 扇子三本 十四歳以下禮學生、但六拾席以上皆席者小相紙半束○中等 扇子貳本 同禮學生、但四拾席以上

温故堂書學所兩塾音物之定 天保十五甲辰年三月

一 温故堂升堂入門歳暮教授は 但歳暮は總躰音物之内三分壹教授代りは配分之事

一 書學所升堂入門之節師範并員長は 但員長何人有之候ても壹人分遣可申事○歳暮は手本貰候員長は計 但三分壹師範外員長は配分之事○外より手本貰候者升堂入門之節師範并員長は前に同し 但歳暮は師範員長總躰は壹人分遣可申

尤日々詰切之師範有之時者師範は別に相贈可申事

一 塾は入門歳暮塾長は

一 書學は入門之節員長は 但何人有之候ても壹人分遣可申事○歳暮は手本貰候員長は計 但三分壹外員長は配分之事○

中元右に同し○外より手本貰候者入門之節員長は前に同し 但歳暮も員長總躰は壹人分遣可申事

一 禮節入門之節員長は 但何人有之候ても壹人分遣可申事○歳暮同斷 但總躰音物之内三分壹師範は配分之事

演武場條目

條々

一 今度演武場御取建德書院之附屬に被仰付候上は修業之輩身を修るを以本とし忠孝は不及申禮遜を崇ひ信義を重し厚く其業を學ぶの志肝要なり抑武藝の心身を調練する業にて上達に隨ひ心正しく身も修るの道に候條師弟共文武一源の旨趣を會得すへき事附儉素を勤め奢侈を禁し風儀を厚ふすへき事

一 自己の流儀中立他流之批判いたし候儀は兼々御制禁に有之此度諸道場一ヶ所相集候故彌以互に相愼可申事附他流之仕合并黨類を結ひ候儀堅御制禁之事

一 御城内同様之御場所に付諸事嚴重にいたし銘々に御預け之持場取締方入念可申事附火之元大切勿論之儀殊に諸道場建並ひ住居も差離候に付別て無油斷入念可申事

右條々堅可被相守者也

右司直正授讀の案内司直より奉行の可被達候 但生長にて附屬之員長執事相勤候ハ、司直より達に不及候

右月番之肝煎の可達候

肝煎下役

右稻村尙藏の可達候尙藏より奉行の可被達候

定番并兼帶定番

右之外同勤等之案内は是迄之通之事

諸師範

右奉行目付の可被相達

右之通此度被相定候間左様御心得可被成候以上

天保十二辛丑年閏四月

學問所奉行

成徳書院常秩常賞之制

常秩 米拾俵(當時金貳兩貳分宛) 奉行、溫故堂教授○米七俵宛(同金壹兩三分宛) 肝煎、目付、兩庠總管、付教、兩庠教

授、諸師範、醫學所教授○米五俵宛(同金壹兩壹分宛) 都講、兩塾長○米三俵宛(同金三分宛) 正授讀、諸員長○米貳俵

宛(同金貳分宛) 諸執事、主簿○米貳俵宛(同金貳分宛) 佐授讀○米貳俵宛(同金貳分宛) 學問所勤番○米壹俵宛(同

金壹分宛)

但五十兩以下半減

牛長○米壹俵宛(同金壹分宛) 學問所勤番下吏、學問所定番肝煎下吏

兼勤常賞 金貳百正宛 奉行、教授○金百五拾正宛 肝煎より醫學教授迄○金百正宛 都講、兩塾長○金三朱宛 正授

讀、諸員長○金貳朱宛 執事より佐授讀迄○銀五匁宛 勤番下吏より肝煎下吏迄○鳥目貳百文宛 下番

右常秩常賞共當主嫡子次三男にて無差別專勤之者は常秩無之家業人者常秩常賞共半減手傳介等は常秩無之臨時別賞但

專勤にて格別繁多之者へは臨時別賞有之 常秩半途之分は一季四分一之割合を以被下候事

諸生三學常賞之制

上等 半紙貳束 拾四歳以下學生、但百五拾席以上皆席は筆壹對増○中等 半紙壹束 拾四歳以下學生、但百席以上○別

賞上等 御本代三匁位 十四歳以下學生○同中等 御本代壹匁五分位 十四歳以下學生、但右二等之御賞諸會格別出精

學問長進且行狀宜鋪幼年之學生世話行届候者不拘席數○上等 筆墨料金貳朱 十五歳以上廿四歳迄學生、但諸會百席以

上之者醫學生除く○上等 筆貳對 十四歳以下學生、但諸會百席以上之者醫學生除く○中等 筆墨料金壹朱 十五歳以

天保十一庚子年十二月

大目付

演武場表御門

覺

三道具壹組 棒貳本 捕縄貳條 柶壹組 水箒貳本 圓座貳本 水籠拾 水溜桶壹 組手桶六 階子壹挺 臺挑燈貳張

覺

演武場之儀ハ御城内同様之御場所に付諸事嚴重に相心得可申事

御門平日ハ_ハ置諸藝試業に付御名代有之節其外御乗初等之節開可申事

非常之節ハ御門を開夜分に候ハ、臺挑燈差出可申事但出火と見請候ハ、定番持場々々にて早拍子木を打可申事
僧侶并巫覡之類相通申間敷事

百姓町人并諸商人休之者猥に相通申間敷事

乞食物もらひ之類一切入申間敷事

他所者演武場中致拜見度旨申聞候共目付より斷無之候ハ、相通申間敷事

町在之婦女ハ不及申御家中之婦女たり共相通申間敷事但非常之節ハ御家中之婦女罷通候儀不苦候事

御家中之者通路便利を以演武場中致往來候儀不苦といへども猥成儀も候ハ、相制可申事

御普請有之諸材木等持運潛より出入成兼候ハ、御門開可相通諸職人其外人足共致出入候ハ、萬端心を付節々見廻り可申事

於御門番所火の元別て入念可申事

裏御門并東西御門御締向之儀惣て表御門に准可申事但明六打候ハ、御門を開幕六時限_ハ可申事

右之趣堅可相守者也

天保十一庚子年十二月

大目付

覺

非常之節定番早速御門ハ相詰居出入等相改候儀ハ勿論御額等別て心を付可申事

出水之節駈着村々左之通 寺崎村 城村 右村々人足共演武場ハ駈着候筈に付兼て相心得參着次第夫々相働候様可

天保十二辛丑年正月

由比安兵衛、香家我部隼人、池浦甚五左衛門
竹内彌次右衛門、渡邊彌一兵衛、植松求馬

各中

右御條目諸道場を可差出之旨被仰出候條各可被得其意候以上

吉見治右衛門

成徳書院并演武場御門條目

成徳書院表御門

覺

三道具壹組 棒貳本 捕繩貳條 柝壹組 水箒貳本 圓坐貳本 水籠拾 臺挑燈貳張

覺

成徳書院の儀は御殿御番所向同様たる間諸事嚴重に相心得可申事

御門平日はべ置御名代有之節は開可申事

明六時潜りを開夜四時可申事

非常の節は御門開夜分に候は、臺挑燈差出可申事但出火と見請候は、早拍子木を打可申事

僧侶并巫覡の類相通申間敷事

百姓町人并諸商人体の者猥に相通申間敷事

町在の婦女は不及申御家中の婦女たりとも相通申間敷事但非常の節御家中の婦女罷通候儀不苦候事

乞食物もらひの類一切入申間敷事

御普請有之諸材木等持運ひ潜より出入成兼候は、御門を開可相通諸職人其外人足共致出入候は、萬端心を付火の元

別て入念可申事

裏御門開閉出入等の儀は惣て表御門に准候事但明六打候は、御門を開暮六打候は、御門をべ潜り戸は引寄置可申夜

中潜り戸の締りは御圍内住居の者可申合候事

御圍内住居の者方への出入等は制外の事

右之趣堅可相守者也

を受候は學者たる者之可恥事に付仲々間同士相互に忠告善導之道を盡し再三之上にも不用もの有之候は、明白に師役は可被申達候

勤番之面々

書院勤番之面々毎夜出番之刻限遅刻之者も有之哉に相聞候近來夜學之者も大勢有之に付勤番之者は暮六時より出番いたし夜學之諸生不作法等無之様精々可被心付候自然不行儀等之事有之候ては書院之風儀にも拘り不輕事候得共血氣盛之面々候故心得違等ある間敷にも無之其節の能々申諭再三教戒之上にも不用者有之候は、不捨置學問所目付へ可被申達候

師役之面々

今度不存寄蒙御賞詞候段恐入難有儀御坐候必竟の師役之面々平常骨折被相勤候故之儀猶此上共教導被行届候事肝要存候堂中行狀等之儀諸生中へも申達候に付師役已上之面々自身先立勉強いたし諸生を教導可被致候右に付教授已下師役素讀諸會之出席定刻限より少々つゝ、早めに被致出勤候様可被心掛候師役定刻より遅く罷出候得は諸生怠惰之基にあり候間年中繁勞之事には候得共身を以教候心得肝要に可有之候内附屬師範員長も同様之心得たるへく候

三役

是迄諸事取締被行届不存寄蒙御賞詞候段御同意恐入難有儀御座候猶此上之取締方大切候間三役一致少も無油斷學政引立候様に可被申合候兎角人之思ひくを兼存念をも扣勝にいたし候ての相談も一致不致もの故外人之毀譽等を顧候私念を除き諸事踏込手堅く世話有之様に致度職掌記心得書等大概規矩は舉り居候ても世話不行届候得は徒法になり行れざる事も間々有之候此後右等之儀無之様精々奉行中計には無之外兩役も一致いたし堂中は勿論諸附屬迄も一際被引立候儀肝要に存候就中御目付は修業之勤惰行狀之善惡等改候御定之處不作法かさつかまじき儀見聞迺し候ては自然取締方等閑に成行候基に付精々可被致吟味

武藝諸道場

兼々文武御世話厚被仰出毎々諸名簿御覽修業之様子も略御承知は被遊候得共去夏御歸城已後追々御見聞之所思召之外一統上達之事とも御満足之旨御沙汰有之於拙者共恐入難有儀御坐候右様蒙御賞詞候上の猶又今一際精出し候様可被心掛候武藝道場之儀も行儀第一之事に候所中には道場之取締寛かあるも有之又は藝術は長し候ても不行儀等之事相聞へ候も有之候一體武行御世話厚く有之候も第一の其身之備御家之御備且一術に長し候得の其身も修り自然風俗

申付候事

堂形付切抜門并馬見所脇之本戸門平日は、切置御名代往來之道筋に候は、斷次第開可申且又非常之節は早速開可申事

家老「城代 年寄 番頭 大寄合 右之分可致下坐候事但御門限後は不及下坐
於裏御門并東西南御門も右之趣同様相心得可申候事

天保十一庚子年十二月

大目付

文武藝術掛より被差出候書付 弘化二乙巳年正月

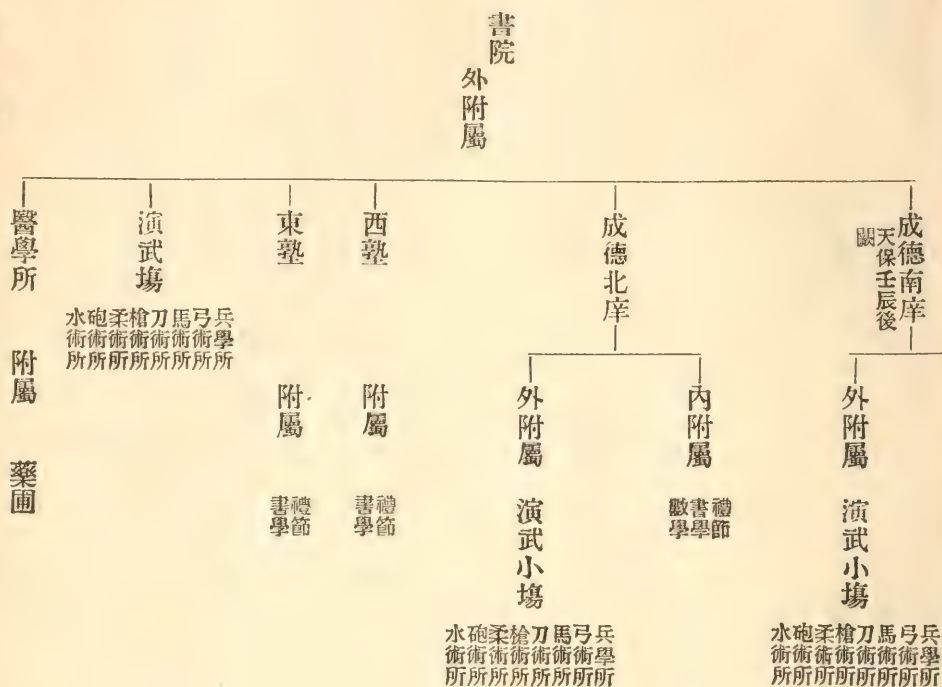
温故堂及内附屬に

兼々文武御世話厚被仰出毎以諸名簿御覽修業之様子も粗御承知は被遊候得共去夏御歸城已後退々御見聞之處思召之外一統上達之事共御満足之旨御沙汰有之於拙者共恐入難有儀御座候右様蒙御賞詞候上猶又今一際精出し候様可被心掛候夫に付温故堂之儀は禮義第一之御場所内外附屬之標準にも相成無學之者より見聞及び候ても堂に學び候者は行儀も格別に宜孝弟忠信之心掛も厚く別段之事と申様に無之ては幼年より骨折學ひ候甲斐も無之候中には文才の長し候ても不行儀之輩坏も有之由是等は却て不學之人々之物笑となり學者たる者之可恥事に候學業さへ長し候得は不作法かさつは被捨置候様に存候は心得違に候一體厚く學問之御世話有之候も御家中一同博學御仕立可被成どの御存意には無之候人々人道之大義を辨へ孝弟忠信之行ひを勵し風俗薄からざる様に被成度候御存意に候間堂中は別て行儀をよろしく可被致是迄も兩塾にて學ひ候節は至極人柄も宜學文も出精之面々年頃になり升堂いたし候得は學業も怠り其上行儀等も取亂候様子に相聞右様の事にては甚御存意にも相背候次第候前文の通蒙御賞詞候ても此上堂中之諸生万一行儀等之事にても入御耳候ては御存意之根元を失ひ恐入候儀に付修業出精の勿論何事によらず不作法かましき儀無之様精々可被心掛候若違犯之者有之は不得已急度可被及御沙汰御内附屬之方は都て右に准し諸事謹厚可被心掛候

御書籍拜見罷出候面々

先頃中は中絶御書籍拜見之面々も怠勝に相見候處近頃は暑寒晝夜ども遠方より無懈怠出精いたし候段乍恐上にも御満悦可被思召候右之通精被出候も必竟は其身の徳を磨き候爲にて修業簿に姓名と記し候程の人は堂中にても指折候人才に候得は別て行狀大切に候間諸事謹厚にいたし不作法かさつ等之事の恥懼候様面々覺悟可有之候他人より禁防

職名位次
管轄八縱二讀
位班八横二讀



も質朴に被成度之御趣意に候處不行儀かさつ等之者有之候ては甚御趣意にも相背候次第前文之通蒙御賞詞候ても此上萬一不慎怠惰等之事入御耳候ては師範は不及申其藝道之瑕瑾にも相成恐入候儀に付修業出精は勿論何事によらず不作法かましき儀無之様可被心掛候若心得違之者も有之候は、師範員長執事達藝者より精々致教諭再三之上にも不取用ものは學問所目付に可被申達候

學問所掛并引立役の面々

兼々文武御世話厚く被仰出毎以諸名簿御覽修業之様子も畧御承知は被遊候得共去夏御歸城已後退々御見聞之所思召之外一統上達之事とも御満足之旨御沙汰有之於拙者共恐入難有儀御座候畢竟掛り引立役之面々骨折被相勤候故之儀猶此上共無油斷被引立候儀肝要存候文武之諸生いつれも出精には候得其中には藝術には長し候ても不行儀等之族も有之又は格別故障も無之怠勝之族も有之或は御定年齢已上にても塾堂并諸道場を無故入門不致者等有之候右等之類は掛り引立役平日諸名簿にて取調直に其者又は父兄の異見を加へ精出し候様に引立候儀持前に候處只諸道場を廻りさへいたし候得は宜とのみ心得候哉一向右等之取調不行届者も有之様に相聞得候惣て面々持前組合之中に右様之者有之候は、教授師範其外師範之者世話を不掛様に引立役より教戒いたし心得違之者無之様精々可被致吟味候尤師役被心掛候若面々持前席限之内に心得違之者等有之候得は引立役之不念に相成再三教諭之上不用者有之候は、頭支配又は學問所掛り大目付迄可被申達候

成徳書院職掌記

書院銘目

成徳書院

先聖殿

溫故堂

書院

内附屬 六藝所

禮節所
音樂所
書學所
數學所

兼射御二禮

杏壇
入德門
文庫

内附屬

禮節
書學
數學

— 演武場	執事
— 演武小場	執事
— 醫學所	執事
成德書院	小監
監 察	主簿
成德書院	
稱學問所目付	

成德書院 總裁一員 溫故堂教授兼之若教授無足支配以下の席柄ならは役人以上より兼勤へし

先聖殿講堂及ひ附屬庠塾六藝所演武場醫學所之學政を統へ掌る出勤

諸士之指引諸生之進退賞罰等其他祭祀以下大小の事一切奉行の指揮たるへし 惣して御書籍は堂庠の教授付教都講

塾の長及醫學所の教授都講預りたりといへども取扱方は奉行肝煎の兩役承るへし○管務一員 先聖殿講堂及附屬庠

塾六藝所演武場醫學所入費之事を統へ掌る日用之諸品修理洒掃の事に至るまで一切の雜事肝煎承るへし○監察一員

大目付より兼務 講堂及附屬庠塾六藝所演武場醫學所之諸生修業の勤惰行狀の善惡を改を掌る出席名簿の改等目付承へし

殿堂以下の鑰夫々預りありといへとも目付の差配たるへし 右三役の内病氣其外故障有之は相互に兼勤へし但三役

とも増員時の宜に隨ふ 以上三役は御年寄支配の者勤之就中奉行は役人以上若くは大寄合以上にても其任に應る者

へ可被仰付事○執事二員 諸入費日用の諸品より修理洒掃の事に至るまで肝煎へ申達可取計之庠塾以下の執事掌る所

皆准之○小監 無定員 監察之属僚毎日朝より夕迄壹人宛當番相立溫故堂に相詰書院内外相廻り非常其外取締之儀必

付へし○主簿二員 諸名簿席數改等の事を掌る 勤番七八人、下吏二人、定番二人、下番二人 勤番は付教以下授讀

之内其外演武場師範員長之内無足新番等にて勤之夜中貳人つゝ溫故堂之泊相勤へし尤朝は素讀日計授業の者一人出

席まで居残り幼學生不作法さき様に世話いたすへし 文庫の鑰書は定番の者預り夜中は泊番の諸士預り置へし表門

鑰は定番の預なり 堂其外稽古所とも戸へり洒掃火の元改定番の者勤へし門庭内外之掃除下番の者に命し或は其向

む斷常に見苦さき様に致へし(兩座勤番以下司る所皆成德書院に准)○雜務二人 界位の者任之 肝煎之令に従て書院中雜事

を管す

右役名之外文武藝術掛御家老御年寄之内一人 或は文武總教と唱へ成德書院内外附屬は勿論御家中未々迄文武藝術

人才教育之事は一切總教之者主宰すへし

成德書院

溫故堂教授 付教

都講

勤番

授讀 學生 生長 素讀生

〔下吏〕 定番 下番

南庠 總管 教授

都講

勤番

授讀 學生 生長 素讀生

定番 下番

北庠 總管 教授

都講

勤番

授讀 學生 生長 素讀生

定番

西塾

長

授讀 正八位班都講准

生長 素讀生

東塾

長

授讀 正八位班長准

生長 素讀生

成德書院
總裁
稱學問所奉行

六藝所

師範

庠八位班
演武ノ次
禮兼射御樂書數

員長

同上 目錄以上 同上

六藝生

六藝生

演武場

師範

兵弓馬刀槍柔砲水

員長

目錄以上

武藝生

武藝生

同上 定番

演武小場

師範

兵弓馬刀槍柔砲水

員長

目錄以上

武藝生

武藝生

醫學所 總管 教授

都講

勤番

醫學所預兼
授讀 學生 生長 素讀生

〔下吏〕 定番 下番

成德書院

兩庠

執事

雜務

兩塾

執事

六藝所

執事

成德書院
管
稱學問所肝煎

頼置くへし若場所廣く入用の事あらは相互に斷の上差支なき様に假借すへし

醫學所 總管一員成徳書院肝煎より兼へし ○教授一員或は其職に應も 醫書は教授都講の預たるへし ○都講一員或は員を増時 教授都講の内一人藥圃の事を兼掌るへし ○正授讀一二員 ○佐授讀無定員 掌る所温故堂に准正授讀の内一人執事を兼醫學生は家業終身の勤

内一人藥圃の事を兼掌るへし ○生長無定員 ○醫學所ト等の事總て禮樂書數所に同し

右六名之外 勤番一二人内一人醫學所預兼 下吏二三人 定番一人加番無定員 下番一人 右司る所成徳書院に准定番以上皆藥

種取扱をも勤へし

右役々司る所の大概なり其他は類を推て諸事差支なき様可相勤候若役々の内闕員あらは早速學問所奉行より申達闕を補へし尤成徳書院中の齡徳を尊を元とし其徳其業の長したるを選舉し席祿の高下等は深く論る所にあらず

素讀日

温故堂 偶日自辰至午 素讀復習毎月一度定日欠席之日は別日復習

出席定員 教授一人 付教一人或は欠時の宜に隨ふ 都講一人 正授讀一人 佐授讀五人 生長二人 外一月三度つゝ學問所

目付出席

兩庠 偶日自辰至午 素讀復習同前

出席定員 教授都講の内一人 正授讀、佐授讀 兩庠とも御人少の御場所柄故正授讀并佐授讀定員立候様にも成間

敷候間面々差支なき様に申合二三人つゝ出席すへし 生長一人

兩塾 奇日自辰至午五箇句休朔望休ふし 素讀復習同前

出席定員 塾長一人 塾正授讀一人 佐授讀三人 佐授讀の温故堂より兼除切に勤め温故堂正授讀の指揮たるへし

生長一人 外一月一度温故堂教授見廻り一度學問所目付出席

書學 成徳書院書學所 十五歳以上十九歳に限 奇日自辰至未五箇句朔望休業 ○兩塾書學 毎日自辰至未五箇句二日十六日廿五日休業 十四歳に限

る若最寄便宜等を以十五歳以上の者兩塾へ出候儀相望候とも容易には成りたく候併趣意立候事に候は、學問所奉行承届偶日自辰至未是亦十九歳に限る 右何れも出席員長一人 成徳書院并兩塾書學生毎年二月八月十一月一度成徳

書院書學所に於て席書いたし江戸學問所三役迄差出御覽に入候事 ○兩庠 兩塾に准尤北庠は遠國の事故年々一兩度

も幸便を以江戸表の席書指上候事

醫學所奇日漢偶日頗 刻限便利に従 素讀復習同前

温故堂 教授 授業訓導の重任先聖殿の祭儀を兼司る文庫の御書籍は教授付教都講の預り先聖殿内殿の鑰は教授の預

りたるへし○付教一員或は二三員之節も有へし學業長候者多候得は此職被仰付

職教授に亞く、卑位にても任に應者被仰付其人無之節闕之此職以上は

儒員にて教授之弟子に非す○都講二員或三四員にても學業長候者多時は此職被仰付

初學生講義會讀等の事を掌詩文會にも罷出世話可有之職付教

に亞く○正授讀五員 素讀を授け諸授讀者の直日及受業者の行儀を糾を司る 以上は堂中の師役なり受業之者崇敬

を加へし但増員時の宜に隨ふ○佐授讀無定員 素讀と授く○生長無定員

素讀生中年齡長し志行正しく學才あるか三

様の内を撰み凡五人に一長を立相互に幼學生の行狀を吟味すへし

御家中の子弟八歳以上尚塾へ差出讀書手跡禮節等爲學十五歳以上温故堂へ差出講學爲致候御定に候得共心得違にて

不差出或い出候ても私に退業いたし候族も有之に付向後十五歳にて温故堂へ入學之者は大凡廿四歳を限とし私に退

業不相成候間御定の講義卒業の者は右年齢に不滿共退業勝手次第右齡に滿候とも學業未熟之者は容易に退業御免し無之候文武藝術引立世話役一月一度温故堂及内外附屬を相廻り出席

簿相改各支配下心得違無之様父兄に申論へし両庠准之

右六名之外聖堂掛三四人、下役二三人 非常の節聖像木主遷坐の世話平日殿門庭内洒掃の事を司る 祭器は聖堂掛

の預り先聖殿外べりの鑰は都て書院取締の者預り内殿の鑰は温故堂教授の預なれとも非常の爲合鑰一ツ教授封印に

て同様預置へし

附屬(成徳南庠當時 成徳北庠)

總管一員給人の役人以上にて兼勤すへし

勤方は學問所奉行肝煎兩役之勤に准し庠内外附屬迄總管すへし

庠は別に目付を置す大目付引立役にて兼心得へし北庠は外役人已上之内にても時宜に隨ふ○教授、都講 各教授都

講の内一員を置へし○正授讀執事 各一員○佐授讀無定員○生長無定員 何れも司る所温故堂に准す

外 禮節、書學、數學 師範員長を置く 兩庠とも素より御人少の御場所柄之事故或は師範を置或は員長を置も皆時

の宜に隨ふ 司る所成徳書院に准

西塾、東塾 長各一員温故堂都講兼之

掌る所温故堂都講と同一といへども一塾の長たる上は子弟の訓導と專とすへし○正授

讀執事 各一員 司る所温故堂に准○佐授讀 温故堂より兼○生長無定員 司る所温故堂に准

外 禮節員長一人つゝ、書學員長一人つゝ、或は二三人にても時の宜に隨ふ 司る所成徳書院に准

禮節所射御二禮を兼 音樂所、書學所、數學所 師範各一人、員長定數 一家を立る者は師範なり其職に應ものなければ關

一家をなすにあらずとも子弟に業を授け或師に代て業を授るもの皆員長と唱へし 員長の内一人つゝ執事を兼 禮

樂所兼射御二禮 禮樂師範の預 書數所は各師範員長の預り稽古休日は錠を置鑰は定番の者に預け取締の事は勤番之士へ

一人 同斷○(同)破損奉行配下役持一人 同斷○(同)山奉行配下役持一人 同斷○御徒目付より御使徒迄之内三人
内大目付配下御徒頭配下
御勝手配下等一人つゝ 御徒目付以下御使徒已上子弟迄之世話引受

右世話役の役々席々にて持場被相定置候間當年若之面々は勿論子弟迄文武藝術之儀常に厚致世話心得違無之様致
教示品により其父兄も遂示談兼て被仰出候御趣意行届候様取計之御役儀相勤候者にても若年之者は御用透無油斷
致修業候様心添いたし且又御趣意不辨之義の學問所三役の問合取計へし御家中子弟入學の御定職掌記温故堂の條下
に出合せ見へし

文武達藝者 文武とも兼て御定之藝術に達し候面々は其師に差續き後生を導へき事勿論に付諸事文武藝術引立世話役
同様に諸生引立之義別て無油斷世話肝要たるへし

成徳南庠當時

文武藝術引立世話役 文武達藝者

成徳北庠

文武藝術引立世話役 郡奉行大目付之内一人 給人以上子弟世話引受

吟味役代官之内一人、御徒目付一人 無足新番已下子弟世話引受

右兩庠とも諸事佐倉に准へし

右追加役々大凡之儀に付細事は類と推して差支無之様相互に申合せ候儀專要也尤右役之關員等於有之は學問所三役逐
示談奉行より申達闕を補へし

天保己亥冬十二月

職名分屬 管轄の圖職掌記にも有之候得共圖計にては屬僚の分附等分り難くに付猶又分屬左の如く極之

成徳書院總裁屬僚 温故堂教授 南庠總管 北庠總管 醫學所總管 温故堂付教 六藝所師範 演武場師範 温故

堂都講 西塾長 東塾長 温故堂正授讀 六藝所員長 演武場員長 成徳書院勤番

成徳書院管務屬僚 成徳書院執事 六藝所執事 演武場執事

成徳書院監察屬僚 成徳書院小監 成徳書院主簿 管務監察の兩屬僚は兩役の指揮勿論たりといへとも進退等の事

は總裁の指揮たるへし

南庠總管屬僚 兩庠教授 南庠六藝師範 南庠演武小場師範 南庠都講 南庠正授讀 南庠六藝員長 南庠演武小

教授都講の内一人、正授讀佐授讀の内一人 面々病用も有之定員立候様にも成間敷候得共右二人つゝは欠席なき様に申合へし

天保丙申冬十月

〔追加〕成徳書院外附屬

演武場 兵學所^{甲州流、北條流、宇}弓術所^{日置流}馬術所^{大坪流、八條流}刀術所^{無停帶心流、中和流、淺山}槍術所^{誠心流、鏡智流、佐}柔術所^{心明殺活流、砲}

術所^{武衛流、佐見流、長沼流}高島流、水術所^{向井流}

師範一人つゝ執事一人つゝ但師範人在番日勤其外長病等にて門弟取介不行届候は、臨時高弟之内に員長一人可被仰付候平日は員長を置す

成徳南岸外附屬^{當時}

演武小場 兵學所^{流名演武}弓術所馬術所刀術所槍術所柔術所砲術所水術所

師範員長之内一人つゝ但執事を兼師範員長之撰に應る者なければ或は欠くも時の宜に隨ふ

成徳北岸外附屬

演武小場 兵學所^{同上}弓術所馬術所刀術所槍術所柔術所砲術所水術所

師範員長の内一人つゝ但執事を兼素より御人少の御場所にて師範員長の撰に應るもの少き事故或は欠或は置皆時の宜に隨ふ

右何も授業日は是迄其家に仕來之通といへども猶差支無之様申合へし

文武藝術引立世話役

御番頭一人 總給人子弟迄世話引受○御番頭大寄合之内一人 大寄合以上子弟世話引受○御物頭二三人 組下世話

引受○御用人一人 支配下子弟迄世話引受○奉行より小寄合迄之内三四人 奉行以下小寄合以上子弟世話引受○町

奉行一人、大目付一人、新番御徒頭一人、郡奉行一人、勘定頭一人、破損奉行一人、山奉行一人 支配下子弟迄世話引受

○無足支配より組外迄之内三四人^{内御用人配下一人} 無足支配以下組外以上子弟世話引受○五組給人一組二人つゝ 一組限り

子弟迄世話引受○給人末席より馬乗次席迄之内二三人^{内御番頭配下一人 御用人配下一人} 末席已下馬乗迄同席子弟迄世話引受○中小姓

四五人 中小姓子弟迄世話引受○中小姓格三四人 中小姓格子弟迄世話引受○(無足)御勝手配下役持一二人 無足

役持子弟迄世話引受○(同)大目付配下役持一二人 同斷○(同)郡奉行配下役持一二人 同斷○(同)御徒頭配下役持

學問所奉行支配 成德書院勤番 醫學所勤番 成德書院勤番下吏 成德書院定番 演武場定番
 兩庠惣管支配 兩庠勤番 兩庠定番

天保十二年辛丑年

成德書院職掌記 江戸郎分

書院銘目

成德書院
 先聖殿 杏壇
 溫故堂 入德門
 文庫

書院
 內附属
 六藝所
禮節所 音樂所 弓術所 馬術所 書學所 數學所

醫學局
 附属 藥圃

書院
 外附属
 成德東庠 附属 禮節書學數學
 成德西庠 附属 禮節書學數學
 演武場
兵學所 刀術所 槍術所 柔術所 砲術所 水術所

職名位次

管轄ハ縦ニ讀
 位次ハ横ニ讀

場員長 南庠執事 南庠演武小場執事 南庠勤番

北庠總管屬僚 北庠教授 北庠六藝師範 北庠演武小場師範 北庠都講 北庠正授讀 北庠六藝員長 北庠演武小

場員長 北庠執事 北庠演武小場執事 北庠勤番

醫學所總管屬僚 醫學所教授 醫學所都講 醫學所正授讀 醫學所執事 醫學所勤番

西塾長屬僚 西塾正授讀 西塾禮書員長 西塾執事

東塾長屬僚 東塾正授讀 東塾禮書員長 東塾執事

成德書院勤番屬僚 成德書院勤番下吏 成德書院定番 演武場定番

成德書院執事屬僚(成德書院雜務) 南庠勤番屬僚 南庠定番○北庠勤番屬僚 北庠定番○醫學所勤番屬僚 醫學所勤番

番下吏 醫學所定番○成德書院定番屬僚 成德書院下番○醫學所定番屬僚 醫學所下番

六藝所師範屬生一所一師の屬勿論あり師範ふきは員長の屬たるへし 目錄六藝生 六藝生

演武場師範屬生一所一師の屬勿論あり師範ふきは員長の屬たるへし 目錄武藝生 武藝生

溫故堂正授讀屬生 溫故堂佐授讀 溫故堂學生 溫故堂生員 溫故堂素讀生

醫學所正授讀屬生 醫學所佐授讀 醫學所學生 醫學所生員 醫學所素讀生

南庠六藝師範屬生一所一師の屬勿論あり師範ふきは員長の屬たるへし 目錄南庠六藝生 南庠六藝生

北庠六藝師範屬生一所一師の屬勿論あり師範ふきは員長の屬たるへし 目錄北庠六藝生 北庠六藝生

南庠演武小場師範屬生一所一師の屬勿論あり師範ふきは員長の屬たるへし 目錄南庠武藝生 南庠武藝生

北庠演武小場師範屬生一所一師の屬勿論あり師範ふきは員長の屬たるへし 目錄北庠武藝生 北庠武藝生

南庠正授讀屬生 南庠佐授讀 南庠學生 南庠生員 南庠素讀生

北塾正授讀屬生 北塾佐授讀 北塾學生 北塾生員

西塾正授讀屬生 西塾佐授讀 西塾生員 西塾素讀生

東塾正授讀屬生 東塾佐授讀 東塾生員 東塾素讀生

西塾禮書員長屬生(禮書名別屬也) 西塾禮書生

東塾禮書員長屬生(禮書名別屬也) 東塾禮書生

以上

士の指引諸生之進退賞罰等其他祭祀以下大小之事一切奉行之指揮たるへし惣して御書籍の堂庖局の教授都講預りたりといへども受扱方は奉行肝煎の兩役承るへし○管務一員 先聖殿講堂及附屬庖六藝所演武場醫學局入費の事を統へ掌る日用の諸品修理灑掃の事に至る迄一切の雜事肝煎承るへし○監察一員大目付役より兼勤 講堂及附屬庖六藝所演武場醫學局の諸生修業の勤惰行狀の善惡を改るを掌る出席名簿の改等目付承るへし堂以下の鍵夫々に預りありといへども目付差配たるへし 右三役の内病氣其外故障有之の相迭に兼勤すへし 以上三役御年寄支配之者勤之就中奉行は役人以上上若くは大寄合以上にて其任に應る者ね可被仰付事○執事二員溫故堂正佐授讀を兼或は外に置時の宜に従ふ 諸入費日用の諸品より修理灑掃の事に至るまで肝煎へ申達可取計之庖以下之執事掌る所皆准之○小監無定員或は員を欠時 毎日朝より夕迄之内壹人つゝ當番相立溫故堂に相詰書院初諸道場向相廻り非常其外取締之義心付品に寄目付ね申達へし○主簿二員溫故堂正佐授讀を兼或は別に置時の宜に従ふ 諸名簿席、數改等の事を掌る其外勤向目付に准諸事目付ね申達可取計之○雜務二員車位、者任之 肝煎之令に従て書院中雜事を管す

右役名之外文武藝術掛御家老御年寄之内一人 或は文武總教と唱へ成德書院内外附屬は勿論御家中末々迄文武藝術人才教育之事は一切總教之者主宰すへし○學問所掛 御番頭一人(當時欠) 御用人一人 大目付一人 御用人大目付は三御屋敷共各一人宛八町堀澁谷御屋敷掛は文武藝術引立世話をも兼○御勝手元ベ一人(御上屋敷計)

御家中の子弟八歳以上面々居屋敷之學問所へ差出讀書手跡禮節等爲學十五歳以上溫故堂へ差出講學爲致候御定に候得其心得違にて不差出或は出候ても私に退業いたし候族も有之に付向後十五歳にて溫故堂へ入學の者は大凡廿四歳を限とし私に退業不相成候間御定之訓義卒業之者は右年齡に不滿候とも退業勝手次第 右掛りの者一月一度面々居屋敷學問所は勿論持場之面々罷出候内外附屬へ相廻り出席簿相改各支配下當主年若之面々は勿論子弟迄文武藝術之儀常々厚致世話心得違無之様父兄に申論大目付は御年寄支配之分も申論へし 御勝手元ベは書院内外附屬とも諸入費の事を兼承るへし尤修理其外日用の儀にても廉立候儀は學問所肝煎可及示談候間不足を足し有餘を減し學問所永續の義を元として可致世話候

溫故堂 教授一員 授業訓導の重任先聖殿の祭儀を兼司る文庫之御書籍教授付教都講之預りたるへし○付教一員 職

教授に亞く、卑位にても其業長したるものは此任に當候間其人おければ闕○都講三員 初學生講義會讀等之事を掌る○正授讀五員或員を欠時 素讀を授る諸授讀者之直日及受業者之行儀を糾を司る 以上は堂中の師役なり受業之者

崇敬を加へし○佐授讀無定員 素讀を授く○生長無定員 素讀生中年齡長し志行正しく學才あるか三様の内を撰み

成徳書院
總裁
稱學問所奉行

成徳書院
管務
稱學問所肝煎

成徳書院
監察
稱學問所目付

成徳書院
總裁一員

温故堂教授兼之若教授無足支配以下之席柄ふらは役人以上より勤へし

先聖殿講堂及び附屬庠六藝所演武場醫學局の學政を統へ掌る出勤諸

温故堂教授

付教

都講

授讀學生 生長 素讀生
正八位次 都講准

勤番

〔下吏〕
〔定番〕
下番

東庠

教授

都講

授讀學生 生長 素讀生
正八位次 都講准

勤番

定番

西庠

教授

都講

授讀學生 生長 素讀生
正八位次 都講准

勤番

定番

六藝所

師範
庠八位次 演武ノ次 禮樂射御書數

員長

六藝生
目録以上 同上

六藝生
同上

演武場

師範
兵刀槍柔砲水

員長

武藝生
目録以上

武藝生

醫學局

教授

都講

授讀學生 生長 素讀生
正八位次 都講准

成徳書院

執事

雜務

兩庠

執事

六藝所

執事

演武場

執事

醫學局

執事

成徳書院

小監

成徳書院

主簿

右役々司る所の大概なり其他は類を推て諸事差支なき様可相勤若役々之内闕員あらは早速學問所奉行より申達欠を補へし尤成德書院中は齒德を尊を元とし其德其業之長したるを撰舉し席録の高下等は深く論る所にあらす

素讀日

溫故堂 毎日自辰至午 素讀復習毎月一度 定日欠席之者は別日復習

出席定員 教授一人 都講一人 正授讀一人 佐授讀一人 員外學生の内より佐授讀手傳出席四書小學等の素讀を傳ふ生長もまた倣之○生長二人 外毎月不絶學問所三役出席

兩庠 毎日自辰至午 素讀復習同前

出席定員 教授都講之内一人○正授讀○佐授讀 兩庠とも御人少之御場所柄故正授讀并佐授讀定員立候様とも成間敷候間面々差支なき様申合二三人つゝ出席すへし○生長 外毎月一度溫故堂教授見廻り一度學問所三役申合出席醫學局 奇日刻限便利に隨 素讀復習同所於二階講義 教授都講之内一人○正授讀佐授讀之内一人 面々病用も有之定員立候様にも成ましく候得共右二人つゝは欠席なき様申合へし

書學 成德書院書學所 毎日自辰至未 五節旬朔望廿五日休業 居屋敷八才より罷出十四才に至る迄は勿論之事十五才以上より十九才に至る迄は修業すへしされとも勤向武術稽古等も有之候間席敷い用捨たるへし

兩庠書學 毎日自辰至未 五節旬朔望廿五日休業 都て書院に准

禮節所 於二階講習 音樂所 於二階合奏 弓術所(纏藥) 於矢場習業 馬術所(木馬) 於馬場習業

數算所 於二階習業

右何れも便利に従ひ差支無之様定日相立可致稽古候事

外に學問所三役申合一月一度六藝所醫學局演武場に出席但兩庠之禮書數所は其庠の教授一月一度つゝ出席

文學六藝醫學并兩庠附屬之禮節書學數學演武場に至るまで年々一度つゝ春秋之内試業之事但何れも於成德書院試業書學に限り年々春秋兩度三御屋敷夫々之書學所において席書いたし御覽に入候事

文武藝術引立世話役 御役方向二三人、御廣間向三四人、御勝手向二人、奥向一人、御次向三四人、御供方向二人、新番御

徒士向二人 御徒士佐分利槍術稽古は御趣意有之義に付組頭の者時々出席引立世話いたすへし 御側小僧向一人 御側小僧佐分利流槍術稽古は御趣意有之義に付支配引立世話役之者時々出席引立世話いたすへし

右世話役の役々向々にて持場被相定置候間年若之面々文武藝術之儀常々厚致世話心得違無之様致教示品により其父

凡五人之内一長を立相互に幼學生の行狀を吟味すへし

右六名之外聖堂世話一人^{大目付兼之}

春秋祭祀之節出役及聖堂内外修理等之儀掛りより申立候へ、承置簾立候儀は學問

所肝煎及示談可申尤非常之節聖像木主遷座祭器之世話可致事○聖堂掛四五人○下吏四五人 非常之節聖像木主遷座の世話平日殿門庭内灑掃の事を司る 祭器は聖堂掛りの預り先聖殿外べりの鍵は都て大目付預り内殿の鍵は西庠教授の預りあれども非常の爲合鍵一ツ教授封印にて同様預り置へし○勤番定數なし、下吏定數なし、定番二人、下番二人 勤番は別に人を置す付教以下授讀之内其外學問所專勤或は同所寄宿之者の内にて席の高卑に拘らず夜中一人つゝ溫故堂を泊相勤へし尤授業相始さる以前幼學生不作法なき様に世話いゝすへし文庫の鑰畫は定番之者預り夜中は泊番の諸士預り置へし表門鑰は定番の預りなり 書院開閉戸べり灑掃火之元改定番之者勤へし尤書院門庭内外の掃除下番之者に命し或は其向ふ斷常に見苦敷なき様に致へし書院の定番にて手狹之事故演武場をも兼心得可申且又南庠は勤番を置す定番を置或は兼る時の宜に従ふ

外附屬 成徳東庠、成徳西庠、教授 各教授都講之内一員を置へし○都講○正授讀、執事を兼各一員○佐授讀、無定員○生長無定員 何れも司所溫故堂に准

兩庠附屬 禮節、書學、數學 員長一人つゝ、各所の執事を兼勤へし司る所成徳書院に准

内附屬 〔六藝所〕禮節所、音樂所、弓術所、馬術所、書學所、數學所 禮節書數は日用之急務音樂の性情を養ひ人材を育するの事就中弓術馬術は武家の要務刀砲等皆其内に籠り候得共於内所へ只纏襲木馬素撓等之儀式を習せ其操練は各其場所にて可致修行事

外附屬 〔演武場〕兵學所

^{甲州流}

〔當時欠〕刀術所

^{中和流、無停帶心流}

槍術所

^{誠心流、佐分利流}

柔術所

^{神明殺}

砲術所

^{武衛流}

水術

^{立身流、淺山一傳流}

鏡智流

所〔當時欠〕師範各一人宛 員長定數なし 六藝及武術各業一家を立つる者は師範なり其職に應ものなければ欠業一家をなすにあらずとも子弟之業を授け或師に代て業を授る者皆員長と唱へし但師範員長之中にて各所之執事を兼る者各一人宛兩庠附屬之禮書數は免許之者にて員長と唱ふ皆執事を兼

醫學局 教授一員或其職に應ものなければ欠 醫書の教授都講の預りたるへし○都講一員或は員を増時の宜に従ふ

教授都講の内一人藥圃の事を兼掌るへし○正授讀一二員○佐授讀無定員 掌る所溫故堂に准正授讀の内一人局の執事を兼○生長無定員 六藝所及醫學局の各師範員長の預りなれども場所狹く相互に假借之儀に付稽古休日取締之事は勤番并寄宿之士に賴置へし若場所廣く入用の事あら相互に斷之上差支なき様に假借すへし

條白鹿洞書院揭示之目を目當として謹厚に可勤之こゝに志しき人假令經義に委しく百家之書に涉り詩文に巧みなりとも皆道にあらすして學問之本旨を失ふ各心得違不可有之事但子弟たる者家に在て父兄に事へ親族朋友に睦敷成長に従ひ其學ひ得し處を以て御奉公に誠を盡し一かどに御用立候儀學問之專務に候條厚可心懸之候讀書而已に相耽り候儀有之間敷候事學問本旨 公儀之御法度御家之御制度者人々尤不心得候ては不相叶事に付其大凡を別卷に記し差出置候條折々可致拜見候事 學問者衆藝之本に候條致出精候儀は勿論たりといへども文弱に流れ質武之風を失ひ申間敷事

一素讀之者前日學候所を復し能々覺候上にて先を學ひ授業之者相許候上にて相仕廻可申候若前日相傳候處忘却多候は、先を傳申間敷候事

補 (同上) 學生受業之次第如左 孝經、小學、四書、五經、儀禮、周禮、三傳、爾雅補、儀禮周禮公羊傳穀梁傳爾雅等之書籍差支候へは五經左氏傳卒業之上國語史記兩漢書受業之事但兼て御定之四書小學者勿論經史子類に至迄各致研究知行兩全之學德可致成就事學問本旨 毎月十日例刻素讀復習受業者相休候事但兼て素讀相濟候書物兩三冊つゝ持參候様師役より前廉申間當日は右之内にて臨時に章割致し復習爲致候事

一講釋御試之儀一ケ年一度つゝ可被仰付候間小學四書五經相濟候は、力量に應し何書にても勝手次第前廉に書出置可申候素讀之者は又同斷候間銘々書出置候書物常に精熟專可被心懸候事但詩文或は歴史等書出候儀勝手次第之事乍併經書之御試不書出詩文歴史等計書出候儀無用之事

補 天保八丁酉年二月三日被仰出 毎年試業 二月、於溫故堂素讀四度(但兩塾共) 三月、講釋三度 五月、講釋壹度 八月、講釋貳度

一素讀出精之上にて輪講に罷出度候面々の教授并學頭許容之上可罷出候事

補 (江戸成德書院心得書) 五經以上素讀相濟候は、可許講義事但晚學之輩者亦此制にあらざる事

御定之素讀雖未相濟平生行狀正敷學才有之或は出精之輩は從時宜可許講義且御定之素讀相濟候といへども前文に背き忘却等多者の猥に不許講義事學問本旨之部

補 正授讀より都講之名前書出都講より教授可申達事

一詩文會共席上之題は教授并學頭之内相談にて可被差出候學生之心次第出題無用候尤席題は詩文又は復文等にてても其席にて卒業致候様可被心掛候體裁は銘々心次第に候且又宿題之儀も折々教授學頭より可被致出題候事但詩文

兄なり遂示談兼て被仰出候御趣意行届候様取計之御役儀相勤者にても若年之者は御用透無油斷致修業候様心添いたし且又御趣意不辨之儀ハ學問所三役并掛り之者ハ問合取計へし

文武達藝者 文武ども兼て御定之藝術に達し候面々は其師に差續き後生を導へき事勿論に付諸事文武藝術引立世話役同様にて諸生引立之儀別て無油斷世話肝要たるへし

右役々大凡之儀に付細事は類を推して差支無之様相互に申合候儀專要あり尤右役々闕員等於有之は學問所掛り遂示談學問所奉行迄申達奉行より申達欠を補へし

天保癸卯春正月再校

増補溫故堂規則

入學規

一御家中之諸士并御通掛以下之者迄入學仕候節は其旨教授并學頭ハ申達候上學校ハ可被罷出事

補 教授ハ申込前日教授宅ハ罷越初見夫より師役以上ハ致廻勤候事

一御領分町在之者入學仕候節も右同斷之事但學校之致寄宿度存寄之者は其趣學頭ハ相願許容之上可致寄宿候事

補 御家中之面々致寄宿候ハ其趣向々支配ハ相願候事 御領分町在之者致寄宿度候ハ奉行ハ相願候事

一他所者入學仕候節は御領分之者請人に相立其者より學頭迄相願可申事但學校ハ致寄宿度存寄之者其趣學頭ハ相願候ハ老中ハ申達候上可致寄宿候事

補 奉行ハ相願候事

一寄宿之者歸省歸學之節は其時々學頭ハ御届可申事但無據事にて一旦致中絶候者又候罷出候者其段學頭に申達候上可罷出候事

補 奉行目付ハ御届可申候事

一入學之節者麻上下可爲着用候事但入學之節學頭之者學校規則爲讀聞候事

補 升堂之節麻上下着辰之刻罷出正授讀溫故堂御規則爲讀聞畢て教授句讀授之候事

修業規

一小學近思錄四書五經者人道之本務に候間第一に學ハ可申候本業を相捨候て無緊要書物取扱申間敷候事

補 (江戸成徳書院心得書) 凡學問之趣意者第一躬行を勵み信義を專に倫理を辨へ禮讓を謹み君子と可成所爲候

を失はす長者の少者を愛し少者は長者を敬ひ可申少者たりとも業之勝候者は可愛敬事に候乍併少者業に長し候とも長者の對し不遜之振舞一切有之間敷候事 學問所におゐて行儀正しからず修業に怠詩文を以風流雅致として輕薄浮華之所業を以風儀を亂猥に御政事を議し人之短を揚師役之教戒を違犯いたす間敷候事 入學之輩朝夕父母之安否を訪ひ出入必可告之事但父母無之者も祠堂に事る事存生之時之如くすへし行儀之部 平日溫良恭敬質直寡言にして苟且にも輕薄卑賤之振舞有之間敷事但善き友に交り卑賤下愚の者を不可近付事 幼年之學生遊戲之節たりとも非法之振舞有之間敷候學に入候者はたとひ幼年たりとも一際行儀正敷いたし御觸事は勿論都て師役申開候儀少も違犯有之間敷事但途中におゐて御役人の勿論長者に行逢候節急度時宜いたし且下輩の對し候とも無禮有之間敷事 行儀可被正候事但出入之節履物等に至迄混雜無之且師役之用を足し或は小用等之外猥に立居いたす間敷事出席之部 亂髮違俗之風俗は無用之事但幼年之諸生は此制を以正し難しといへとも其父兄たる者常に心掛成丈可致世

一講釋輪講會讀之席にて茶烟草は勿論雜談私語一切禁止之事

補(同上) 講義輪講并素讀受業之節諸事相愼義理討論之外無益之雜談有之間敷事但師役之外茶烟草相用申間敷事出席之部 同斷之節定之刻限より遲參致間敷會講不相濟内猥に退去致間敷事但勤用は勿論父兄之處用稽古事其外無據要用の師役の相斷候上遲參退去共不苦候事

一學校寄宿致し罷在候者平日袴可致着用候尤御家中諸士の對し失禮有之間敷事但衣服食物等奢ケ間敷儀堅禁止候尤僂服は不苦候事に候得共是又身分相應に致し無禮に無之様可致事

補 御家中之者寄宿候共同斷心得可申事

前條規則之類可被相守候

右之段可申達旨御年寄中被仰聞候以上

文化二年乙丑正月

學校掛り 木川織右衛門、窪田伴右衛門

文化度學校御規則本文之通被仰出候處成德書院御取建にて改候廉も有之に付本文之下に補文を加且去未年於江戸成德書院御取建之砌被仰出候三部之心得書を以類を以補ひ入温故堂御規則被相定候間各堅可被相守尤書院内外附屬之場所も右に准候旨老中の申開候間可被得其意候委細は成德書院心得書を以被仰出候間得と拜見可有之候以上

天保十己亥年正月

奉行

共に其日面々卒業之遲速に随ひ書留置毎年十二月に至草稿之儘にて可被差出候事

補 教授付教都講之内より致出題候事

補 (江戸成徳書院心得書) 文は載道之具詩歌の溫柔敦厚之教皆窮理之一端入徳の一助急務にあらすといへとも

暇日を以て可學之事 學問本旨之部

一會日之外朝より晚方迄之内罷出御書物拜見之儀勝手次第之事

補 (同上)

有志之面々晝夜共勝手次第罷出可致修業事

出席之部

御書籍拜見之面々師役之相斷可申事 御書物持

歸拜見仕候面々拜借帳の自筆にて姓名書名月日等相認可致印形候事 看書之席正鋪御書物亂雜に取扱申間敷候事

勿論なりといへとも火之元可致大切事

授業規

一毎年正月十一日開業白鹿洞書院揭示講釋致候事但麻上下着朝五時より相揃候事

一素讀雙日朝五時より九時迄之内罷出可申事

一素讀并諸會正月十二日より相始十二月十六日より相体候事

一助教之面々可相成丈は早朝より可被罷出候事但勤向は勿論武術之稽古其外無據事にて遅刻に罷出又は早く引取候義は平日面々差支無之様可申合候事

補 佐授讀之者朝辰之刻より罷出無據義にて早く引取候節正授讀之申達候事但出席例刻より延刻之節も同様之事

當直佐授讀私用賴合にて別人出席之節も其趣當直正授讀之申達候事

一素讀章句之多少は受業之者分量に應し教授之心次第之事

一助教之面々素讀其外諸會共随分諸生を引立候様可被致世話候事

補 付教都講正授讀佐授讀之面々素讀直日諸會之外も平日自分修業無懈怠致出精學生引立可申事

行儀規

一素讀之輩幼弱の猶更常々行儀を正し先輩を敬し後輩を導き無用之雜談等堅禁止之事

補 素讀生毎朝五時出席候は、兼て御定置候圖面之通着到順に列居いたし順々可被受教候事 自性院様御筆之御

額平日上之間に被掲置候間可奉崇敬事

補 (江戸成徳書院心得書)

學問所者御殿と心得可申事但無用之者猥に不可入事 出席之部

於學問所別て長幼之禮

一開業修業之定

正月十一日開業但御在邑年の九日 同月十二日素讀初 同日表會開業 同月十三日會初 十二月十二日諸會修業

同月十四日素讀修業

素讀

偶日自辰至午

休業 十二月十六日より正月十日迄 毎月十日復習但十日差合に候は、十二月 春秋釋奠但習禮前日より當日迄

七月十二日より十六日迄并虫干中但兩塾の讀書計有之 鎮守祭禮^{九月十日} 溫故堂試業 御歡御機嫌伺一日之節 右之

外鳴物停止總出仕等之節休業先格に隨ひ可申事 臨時休 右之節は何に付休業と申儀溫故堂并堂中張札にて可致承

知事

一素讀生溫故堂に罷出候は、刀は廊下刀掛に掛持席に書冊を置教授前に出脇差取之辭宜いたし夫より闕際の下り授業之者の辭宜致し名簿に名前記可申事

一素讀日出席候は、別て行儀を正し無用之雜談等致さず兼て圖面を以定置候通着到順に闕際に相詰順々に教を受可申事但前之側退散候は、順に線上可成丈ヶ後を明ヶ置可申事

一受業之順に相成候は、次順之者の禮讓致候上業を受可申事

一月末に至り素讀生三十日以上闕席正授讀相糺欠席之者有之候は、組合生長の談趣意爲書出可申佐授讀以下直數も相糺候事但組合生長も右之趣意心得心付遣し目付に書出させ可申候

一三十日以上闕席之者は不參之趣意其身より學問所目付に相届及五十日候は、引立世話役の可相届事但兼て被仰出候儀何も存知之事に候得共尙又御書付熟覽いたし違失有之間敷事

一四書素讀相濟候者の四書會讀に五經素讀相濟候は、五經會讀は勿論輪講之も出候様常々心掛可申事

一堂中受業之者行儀重に正授讀相糺可申事

一佐授讀座配は教授之方を上座といたし位班順に着座候事

復習

一素讀復習毎月十日刻限素讀日之通尤十日休業に相成候節は十二日復習之事但無據差合有之候は、十六日罷出復習尤素讀もいたし候事

入學

一十五歳以上入門之者は父兄より教授を申込前日教授宅に罷越夫より師役以上にも罷越退學之節も同斷之事但兩塾より升堂之者も同様十五歳以下之者は父兄等召連教授宅に罷越夫より召連廻勤尤兩様とも入門手續等廻勤之節正授讀之内に問合可申事

一入門之節麻上下着温故堂に罷出師役以上は勿論佐授讀生長素讀生にも頼口上申述べより正授讀御規則心得書等之類目付立會主簿出席にて爲讀聞之尤幼學之者に緊要之所爲讀聞置追々入用之處爲讀聞可申候畢て教授句讀授之差合之節は付敷都講之内可授之事但十五歳以下之者に召連候父兄も一同之相頼心得書等も得と承厚可致世話事

一入門有之候得は正授讀より當直生長に誰入門之旨申談候に付御規則心得書等之趣意得と爲相心得可申事

一右之節正授讀にて組合相立誰組合に入候旨申談候間組合正授讀同生長宅に罷越可申事但小役人以下組合無之に付此制に無之候得共生長一同にて平日差引いたし候事

一晚學にて素讀に不致諸會等計罷出候者入門之節は教授に相頼許容之上師役以上廻勤之事但初て會え罷出候節麻上下着尤表會之内に可申正月開業に罷出候得不及其儀尤名簿名前之上に入門と認候事

一旦入門江戸住宅等にて致中絶又候出候者教授に申込温故堂之は平服にて罷出名前之上に再學と認候事但廻勤は前條之通之事

一江戸柏倉等にて入學致候共佐倉に罷越入門致候者は麻上下着罷出名前上之入門と認可申事

一十五歳にて兩塾より升候者は麻上下着名前上之升堂と認可申事

一御領分町在之者書院中に寄宿いたし度存寄之者は其趣奉行に相願許容之上可致寄宿事但寄宿之者三役并教授宅廻勤いたし候事

一他所者入學致候節は御領内之者請人に相立其者より奉行に相願可申事但書院中に寄宿いたし度存寄之者は其趣奉行に相願奉行より御年寄大目付并學問所目付にも相達候上可爲致寄宿三役并教授宅廻勤前條之通可相心得尤他所者入門も達向右同斷事

一寄宿之者歸省等之節に往返共奉行目付に相届可申事但日歸之節に不及達候事

一温故堂入門進物は御定並之音物贈り可申事但他所者入門問合有之候は、右之趣を以可及挨拶事

一輪講許容有之初て罷出候者は教授宅に罷出可申尤付教都講にも其旨申達候事

一諸會聽聞罷出候は正授讀申達當人より教授付教都講に申達罷出可申事

一生長相勤候者の講義は勿論素讀會に成共罷出可申事

一佐授讀之者は月に諸會五六席位は急度罷出可申事

一毎月詩會兩日文會兩日に被相定候間佐授讀以上之面々一ヶ月一度つゝ急度出席いたし詩文とも席上之作一章宿題一章つゝ可差出候尤初心之者は詩の五七絶文の席上は復文宿題は記事之類にても不苦候右者付教都講引受致世話取集每會草稿綴置十二月にいたり御定之通入御覽候事但佐授讀以下望之者出席勝手次第幼學之者も可成丈致世話詩作一二章宛も爲差出候様可致事

一諸會に計罷出候面々三十日闕席之節は其趣意學問所目付に相達五十日に及候は、掛り頭支配大目付に達候儀素讀生同様之事

一表輪講之外諸會に初て罷出候者は其會司り候者許容之上可致出席事

一師役以上之者も無會日相立無懈意罷出可致研究尤會日之外迎も常々罷出自身先立書生引立可申事

看書

一修業之面々晝夜罷出御書籍拜見勝手次第之事但拜見之席正敷御書籍亂雜に取扱申間敷晝夜とも一時も致書見候は、修業簿に名前記可申素讀中其外諸會等有之節に發聲無用之事

一初て御書籍拜見罷出候者の教授に相願付教都講之内に申達置勝手次第拜見不苦其後都度々々不及斷候事

一附屬之師範員長等御書籍拜見致度望之者は付教都講之内に申達候上温故堂に罷出拜見不苦候相濟候は、元之如く相仕舞可申事

一御家中之面々御書籍拜見致度望之者其段教授に相願候上付教都講之内にも教授より談有之當人よりも兩役之内に申達温故堂に罷出拜見不苦候相濟候は、元之如く相仕舞可申事但度々罷出致拜見候は、其段にも教授に申達置拜見可致候堂中におゐて拜見不苦候得共修業之面々妨に不相成様兼て相心得可申事

一夜學に罷出候面々は向後夜學に罷出候段書付を以學問所目付に相達置都度々々届に不及候事

一職掌記御規則并心得書之類目付之預りに候得共堂中附屬は勿論御家中之面々罷出拜見いたし度段相望候は、堂中に居合候者にて爲致拜見不苦候事

一兩度とも難罷出者は其旨組合生長の申達置晦日迄之内に罷出復習尤兩度闕席に相成候の、其趣意組合之正授讀之自身に可申達事

一出席 教授一人、付教一人、都講一人、正授讀一人、執事一人、主簿一人

一當直生長平日之通り可致出席事

一復習之書目折々相改掛札え認置候間兼て熟讀いたし置候事

一輪講の罷出候者は復習心次第之事

諸會

一休業 十二月十五日より正月十二日迄 五節句 春秋釋奠但習禮前日より當日迄 土用入寒入晝前休業 七月十

二日より十六日迄 虫干中 鎮守祭禮^{九月十四日}_{十五日}

十二月十三日御煤納 温故堂并兩塾書學所數學所長沼流醫學所

試業 右之外鳴物停止惣出仕等之節休業先格に隨ひ可申事

一表輪講之節師役以上可成丈可致出席事

一師役以上の書生怠惰之者見受候は、得と相糺出席いたし候様取計可申事

一會日御用其外無據差合之節は其旨相斷候事

一受業之者多候の、教授は上之間に着座之事

一八ッ時教授出席之節受業之者申合兩人程上り口之障子際に出迎退席之節は受業之者一同障子際迄送り夫より受業

之者退散之事

一教授出席中無據用向出來罷歸候は、師役之内の申達師役より教授の申達候上にて退引之事

一輪講相濟師説を承り候節は失禮無之様相愼可申事

一會中無用之雜談并猥に立居等致間敷候事但無據用向にて立候節は不目立様進退可致事

一素讀生講義も可相成候は、正授讀相撰都講の申達都講より教授の申達教授より講義相許候旨申談候事但私に出候

儀は不相成且許し無之共望之者は一應正授讀の申達正授讀より都講の申達夫より教授の申達許容之上罷出可申候

尤一旦許容之上は何れの會の罷出候とも教授の相願付教都講の當人より申達罷出候事

一江戸温故堂并北庠にて諸會等の出候者佐倉温故堂の罷出初て諸會の出候節は正授讀より都講の申達夫より教授の

申達候計にて宜候事

一定番之者を關其外供待之者騒々敷節は師役等之制を不待早々相制可申事

一毎月八之日八時より教授講釋有之公私差合之節代講付教都講相勸候事

一溫故堂并兩塾醫學所師役以上佐授讀より素讀生に至迄爲聽聞罷出候事但小役人以下町在之者爲聽聞罷出候儀勝手次第之事

一當日教授を關より出席其節を關し出迎先立ども二之日講釋之通心得可申事

一佐授讀者位班順に着座之事但江戸柏倉にて佐授讀被仰付其後溫故堂佐授讀被仰付候とも以前被仰付候年月を以順相定着座之事

一生長も位班順に着座素讀生等行儀相糺失禮雜談等無之様面々組合は勿論一統相互に可致世話事

一素讀生は圖面之通座配相用可申事但兩塾素讀生混雜無之様圖面之通座配尤其塾生長堂之生長同様心得候事

一座配其外万端之差引は都て三役は勿論主簿心得可申事但佐授讀以下之書生不行儀等有之候は、司直正授讀心を付可致世話候事

一見臺之差引は執事勤之差合候節に主簿勤候事

一大寄合以上之面々爲聽聞罷出候は、上之間着座之事但堂中之講義に付送迎無之御年寄罷出候は、執事主簿之内一人送迎二之日講釋の節之通

一書生之面々近來御拂御本被成下候間所持有之分之御書籍は拜借不相成候事

一毎月六之日八時より付教講義有之公私差合候節代講は都講相勸候事但教授講釋に續候事故堂中之書生座配等相互に心を付一際行儀可相糺事

一司直正授讀之組合生長爲送迎罷出見臺差引生長取扱之事

一大寄合以上之面々爲聽聞罷出候は、八之日講釋之通相心得可申事

撰舉附詭責

一御定之通試業相濟候上兼て被仰出候通每暮學生之行狀才能を撰奉行より書上可申事但堂中之書生は正授讀以上内外附屬諸藝門弟は師範員長にて才能之様子藝術上達は勿論平日行ひ正しき者有之候は、相撰毎年十一月限奉行迄差出可申候奉行得と遂吟味才能行狀勝候者致拔萃御年寄に可差出尤諸向よりの書上も一通り入披見候上奉行留置年々可致吟味事

一御書物拜借仕候面々は教授并付教都講之内に相願拜借帳に自筆にて姓名書名月日等相認致印形候上拜借可致候事
 但御書物拜借御小納戸より被差出候方は前々之通拜借不相成候尤可成丈は温故堂に罷出可致拜見候事
 一御書籍之目錄委細御書籍員簿に有之候事

請釋

一毎月二之日ハツ時より教授講釋有之教授差合之節代講付教都講之内相勤候事

一兼て被仰出候通御役人以上御用透之節申合一役一人つゝ罷出候儀は勿論文武藝術引立世話役并御家中御役人以下
 之面々一役一人つゝは無欠罷出組附并無足御番士末々迄成丈無懈怠出席可致聽聞事但右之外望之者の何人にて
 勝手次第之事

一右之節御小納戸元方以上并温故堂師役以上附屬師範員長肩衣着用之事但大寄合以上之嫡子右同斷尤持席御小納戸
 之方以上之外は上下之肩を相用可申事

一六藝所演武場師範員長之面々爲聽聞罷出門弟引立可爲聽聞事但六藝生武藝生共温故堂書生之分ハ八之日講釋に罷
 出可申事

一毎年正月十二日開業八時より白鹿洞書院揭示講義有之聽衆不殘麻上下着用之事

一堂中師役以上執事主簿申合一人つゝ罷出可申事

一當日教授玄關より出席其節付教都講より一人正授讀并佐授讀生長一人つゝ玄關に出席居佐授讀先立可致教授代は
 常出入口通り候間生長送迎之事但司直正授讀組合にて申合一人つゝ出席之事

一大寄合以上罷出候節執事主簿之内玄關出迎致候事但御年寄以上罷出候節は肝煎目付之内送迎いたし講釋中は送迎
 無之共不苦候事

一大寄合以上には名簿主簿持出自筆にて記候事但主簿差合之節に執事取計候事

一御旗奉行以下は銘々名簿に名前記可申事

一兼て被仰出候通學問所の御殿同様之儀に付聽衆座配等之儀學問所目付差引いたし候事但温故堂主簿同様差引いた
 し候事

一見臺之差引は執事勤之差合之節は主簿勤候事

一小監之面々書院中取締等之儀兼て被仰付有之候に付講釋之節可成丈爲聽聞罷出諸生失禮等無之様可致世話事

之其趣書入可申事但奉行より今日誰何に被仰付候間以來申合可相勤旨筆頭之者に申談候事

一於學問所常秩被下候者は嫡子次三男にても其身不念之儀は勿論父兄にて差扣相達候節并其身親類之内にて御咎等有之節は誰何之續に付奉恐入差扣罷在候段同勤を以其向に可相達事但常秩無之者は達に不及候事

一湖望三役并堂中師役以上内外附屬員長以上其外御小納戸元方以上之面々御用にて學問所之罷出候は、肩衣着用可致事但素讀諸會其外とも修業罷出候者は肩衣着用不及候事

一成徳書院位班は目付預り主簿も兼司候事但温故堂に入學之者有之候節當直正授讀より端書にいたし即日奉行目付に差出位班に加へ退學之節名改等も司直正授讀より同様申達位班を改可申事

一入學之節父兄之姓名并年齡も書加へ可申事

一職掌記追加等被仰出候節ハ早速目付并主簿之内にて書加へ趣意見計堂中附屬師範員長等ハ申通候事但依時宜温故堂に罷出拜見可致旨申遣候事も有之候事

一大目付より御觸書差越候は、御觸留に記温故堂に差出置諸生にも拜見爲致候事

一遊學者等書院中拜見仕度旨願出候は、奉行に申達許容之上拜見可爲仕候尤知音等も無之不時に罷越候者聖廟拜禮計は不苦書院中拜見は可有遠慮事但奉行より肝煎に申遣し肝煎より執事に談掃除等心付案内之上願出候者付添詰合之勤番差引拜見可爲仕事

一學問所中三月朔日より十月晦日迄烟草盆計十一月朔日より二月晦日迄火鉢差出候事

一御煤納毎年十二月十三日六時より節分夕八ツ時より學問所を三役壹役一人つゝ并聖堂掛二人執事一人定番一人罷出聖堂掛之内にて一人御年男相勤聖堂并御用座敷上之間温故堂上之間御式勤之其外は定番勤之候事但節分は主簿壹人出席御煤納節分共何れも麻上下着用の事

一堂中師役以上并執事主簿病氣忌血忌引込其外公私他出等之節屆省略之通可相達候出勤歸着之節も同斷尤執事は肝煎にも可相達事但佐授讀以下引込出勤等の儀は司直正授讀より奉行に可相達事

一每暮堂中之書生名前増減正授讀相調目付に差出可申事

三役

一出勤日御定之通晝前用談所相詰諸向御用向可承事

一三役申合一ヶ月一度つゝ内外附屬之場所見廻り可申事

一文武藝術引立世話役は各持場所之者文武藝術之勤惰才能行狀は勿論平日家事之様子等迄常々心付毎年十月限り取調頭支配引立世話役の差出夫々より奉行の差出可申事

一温故堂にて御定講義相濟候者教授より奉行目付并月番の大目付の相達其者より頭支配の相達候事但奉行より御年寄の相達候事

一温故堂素讀生讀書行儀等勝候者は師役以上常々心を付奉行の差出候儀に付目立候不行儀之者の幾度も教戒いたし不相用候は、奉行目付の申達御書付通仕置可致事

一佐授讀生長右之趣意厚く相含組合中不行儀之者は異見申聞不相用候は、正授讀の可申達事

一書生之内書院中之愼は宜候とも他に参り不行狀等有之場所と事により言行を異にし或の藝能は長し候ても行跡不宜類は聖教之本旨に背き實學に無之候間師役以上之面々厚く教戒を加へ朋友之内よりも内外一度誠實に學候様切磋いたし數度之上取用も無之候は、奉行目付迄申達猶又奉行よりも厚く教諭いたし品により御年寄の可申達事

聖廟

一毎年正月元日御備物 神酒 白米 鏡餅 鱈子 青菜 ころ柿 右祭器に盛り備候事尤温故堂執事の取計聖堂掛りの相渡可申事

一元朝御側御用人御名代有之開扉温故堂教授先立小監勤之尤御服穢等にて御名代延候節は御服明き御名代有之候事但開扉立會目付罷出差合候節は奉行肝煎之内罷出聖堂掛も一人罷出麻上下着用之事

一毎年正月元日二三日其外七草を除節句は上り口まわり戸開帳を掛置開扉に不及定番聖堂掛下吏之内一人つゝ見張に出居可申事但堂中師役以上勿論佐授讀生長差合無之面々正月朔日二三日之内爲拜禮罷出可申候其餘は面々心次第之事

一平日先聖殿拜禮願出候者有之候は、奉行より聖堂掛の申談聖堂掛一人罷出温故堂執事の申合拜禮爲致候事但他所人拜禮願候節は掃除等別て入念可申事

一聖堂の御備物等は都て温故堂執事取扱之備候御支度聖堂掛取扱可申事

雜事

一書院中外附屬とも諸勤被仰付候節堂中にて申渡候分は奉行より御年寄大目付の相達列座無之分或の會所にて被仰付奉行の申談候は、奉行より目付之申遣頭支配宅にて申渡候分は其向より奉行之案内目付の達有之目付にて位班

遣正授讀より急介申談不及返番事

一差掛り病氣にて見合居五半時頃迄延刻にも相成候は、當直正授讀の案内申遣正授讀より急介申談尤引込候程之儀にも無之候は、可致返番可成丈賴合可申事

一事勤之者の温故堂并兩塾とも不及返番尤後日差合之趣意司直の可申達候尤一ヶ月二度は不苦併當直二度續欠席不相成候事

一當直之節於栗山村野合御備立稽古試有之節出役之者は司直之案内申遣野合之罷出稽古被仰付候者は其者より其向の案内申遣授讀に出席之事但稽古被仰付候面々當直賴合候て野合の出候儀は申合次第不及返番候事（古例右御備出役之者計野合の罷出残り人数は學問所の出席申候事）

一當直無據私用にて難罷出節次順相賴關を補ひ候は、右賴候者之當直の直に返番若其節無據趣意にて難罷出候は、前日右之趣司直並賴候者の相斷其次之當直の可致返番候此上賴合にても返番延引不相成候事但不致返番内に又候當直無據趣意にて難罷出候とも引續二度賴合無用之事

一塾の出勤之者は塾中にて賴合右同斷之事

一勤向は勿論武術之稽古等無據事にて早く退引之節は正授讀の申達正授讀より教授の申達總佐授讀にも相賴候上退引之事但出席例刻より延引之節も同様可相達事

一當直賴合にて別人出席之節は何之誰賴合に付罷出候旨正授讀の可申達候返番も同様之事

一佐授讀之内書院附屬員長被仰付稽古日温故堂當直に相當り候は、前日司直の案内可申遣事

一佐授讀被仰付候は、師役以上致廻勤同勤中にも可罷越事

一當直三十日出席無之者右之趣意目付え可申達事但三十日以上出席無之とも其月當直之節二の丸當番其外御用にて司直より急介申談候節は不及達候事

一塾の出勤之者十五日前病氣其外私用にて差合之節一ヶ月之勤には相立不申翌月の繰入候事但御用にて半途に差合之節は十五日不相勤候とも十日餘も相勤候は、勤に相立候事

一佐授讀急介申談遣候節返書差越可申事但留守之節の歸宅之上早々答可申越事

一急介申談候節司直名前にて可申遣當直にて急介申談候節役名にて申遣候事

一執事主簿は兩塾授讀に不罷出候事但兩役共授讀兼候御定候得共追々御用多に付當時授讀御免之者も有之候事

一 肝煎は諸入用之品々萬事費無之様心付御書籍は勿論御道具類に至迄手置宜様に向々々も心附取締方第一に致し諸生學業之差支無之様取計可申事

一 目付一ヶ月三日つゝ温故堂に出席兩塾一ヶ月一度つゝ出席御用逵には時々温故堂に罷出書生之勤惰行狀等心を付候事

執事

一 書院中常々心附破損は勿論掃除等に至迄見苦敷無之様夫々可致世話事

一 諸入用之品々萬事心付御道具類に至迄手置宜様心掛差支無之様取計可申事

一 金錢受拂月々致勘定押切等御定之通にいたし受取渡辻證券等念入可取計事

一 三役詰合申合一人つゝ詰所を罷出諸向之用向可承事

小監

一 毎日朝より夕迄壹人つゝ當番相立温故堂に相詰可申候尤終日持切には不及師役等出席無之節重に相詰夜中は勤番を引渡可申事

一 非常之節目付代り平日書院并演武場取締之儀相心得同勤申合相廻可申事

主簿

一 毎月月末に至温故堂名簿席數等相改取調之上目付を差出候事

一 位班等常々吟味いたし其外諸御觸事等書留可申事

一 素讀諸會とも休業之節張出致し候事但定例休業は張出に不及候事

正授讀 佐授讀

一 御歡御機嫌同等兩日有之節前日常直に相成候は、御用引致し常人より其向之相達翌日御帳前に罷出廻勤之事

一 病氣忌血忌引込其外公私他出御暇之節屆省畧帳之通尤司直正授讀に案内可申遣出勤歸着之節も同様之事但病氣快

方血忌忌明等は明日出勤之旨前日目付并司直に致案内若前日案内いたし兼候は當朝五時前案内

一 正授讀之面々二の丸當番或は會所詰等當直に相當り候は、二の丸會所出勤共晝九時迄御用引當直相勤候事

一 佐授讀之面々二の丸當番之節當直に候は、前日司直に案内申遣司直にて介申談候事

一 前日より相知候私用差合之節は賴合直日相補可致返番事但當朝差掛り御用其外病氣引立之節當直正授讀に案内申

一當番之節違變之儀見請候は、奉行并目付に相達可申事

一書院内外破損等見請候は、肝煎又は執事之申達候事

一御用他出私用御暇病氣引込出勤等頭支配大目付に届候程之事は其趣同勤之内に案内致し勤向により奉行肝煎目付之内に可申達候尤一日之他行頭支配に計届候程之儀は其儀に不及候事

一當番之節は晝之内たりとも他出無用若無據儀候は、賴合番繰替候儀は不苦事

一非常之節表裏門爲開防之道具類用意聖像木主御立退支度御筆御額御書籍日記御祭器諸道具類取片付御文庫目塗等之事常々心掛可申事

雜務

一書院中諸入費等雜事に至る迄都て肝煎之得差圖金錢受拂勘定等入念取扱可申常秩常賞別賞等被下候節受取物其外御用多之節日々罷出平日は出勤之日を不定時々罷出用向可承之其餘目付之用向をも兼心得諸事差支無之様相勘可申事

定番

一常番之節朝五時罷出翌朝迄持切之事

一朝六時表門潜り明け夜四時閉可申事

一毎朝溫故堂初諸詰所掃除いたし御文庫之内も雜巾かけ可申事

一朔望五節句先聖殿入徳門内掃除いたし可申事但五節句聖堂見張相勤可申事

一素讀日机煙草盆等差出候事

一三役文武引立世話役出席見廻り等二の日講釋其外諸會之節同前之事

一火之元等別て心を付堂中取締之儀大凡勤番に准し候事

一表門鑰は晝夜とも預り置御文庫鑰は晝之内預り居夜中は勤番之者に相渡御文庫目塗土等不乾様折々見廻り心付可申事

一師役之用向は勿論堂中雜事等相務薪炭出し入等世話いたし可申事

一會所子供二人つゝ相詰三役初師役以上執事主簿之面々用向相辨外と向へも手紙使等に差出其外都て定番之勤に習御間欠に不相成様可致候尤御用多之節は四人共可差出候事

生長

一當直之者兩人とも辰之刻より出席已之刻相成候は、申合一人退引之事但教授送迎として一人罷出候事

一當直にても手透次第素讀いたし候事

一當直之節二の丸當番其外御用差合之節は前日司直正授讀の案内可申遣事但差掛御用其外病氣差合之節は當直正授讀の案内可申遣尤御用其外表向候事は介差出候得共私用之節は可致返番事

一當直は勿論素讀に罷出候節も堂中幼學生之行狀を心付組合は不及申一統不行儀等無之様可致世話事但素讀生に若到順に並居可成丈闊際迄詰居候様可致世話事

一三役并文武引立世話役出席見廻として罷出候は、生長素讀生慇懃に辞宜いたし當直生長名簿出之歸之節生長相送り可申事

一引込出勤公私他出之違方或は組合素讀生欠席簿當直之節御備場試簿生長にて附屬員長相勤候者稽古日當直に相當り候節等之簡條其外巨細之心得大凡佐授讀に准候間見合心得違無之様可致事

兩塾長、正授讀

一塾長差掛病氣其外無據私用差合之節は一ヶ月二度見合不苦候事但見合之趣其塾正授讀に可申遣候尤二日迄は見合不苦其餘不相成候事

一兩塾正授讀右同斷差合之節一ヶ月二度は見合不苦候尤司直の案内申遣司直より急介申談不及返番候事但二日迄は見合不苦其餘は不相成候事

勤番

一當番之節は夕七半時罷出明六時過引取可申事但素讀日に御定之通授業之者一人出席迄居殘書生不行儀等相制可申事

一夜中取締之儀諸事勤番之者相心得御定之通御文庫鑰預り置夜學之者不行儀等見受候は、相制品に寄其向に相達可申事但定番所其外堂中にても猥に成儀も候い、勤番之者は勿論寄宿之者同様相制可申事

一大風雨等之節は書院内外見廻り諸事心を附可申事但平日も夜中一兩度つ、堂中并堂之附屬とも見廻り可申事

一御徒目付見廻り有之節堂中并堂之附屬とも勤番之者案内いたし候事

一 内外附屬之諸道場門弟之内講義濟免許或は目錄等遣候節は其教授師範員長の内より奉行目付并月番之大目付之相達頭支配之は達に不及門弟よりは頭支配之相達可申事

一 内外附屬之諸生才能之様子より平日之行狀等其向員長以上にて常々心を付奉行之書出候儀に付目立候不行儀之者或は藝能は長し候ても行狀不宜類は藝道之本旨に背き實學に無之候間師範員長厚く教戒を加へ朋友之内よりも内外一致誠實に學候様切礙致し數度之上取用も無之候は、奉行目付迄申達猶又奉行よりも厚く教諭いたし品により御年寄の可申達事但幼學之者は奉行目付之申達御書付通之仕置可致儀温故堂に准候事

雜事

一 師範員長毎年正月元日二日三日之内聖廟拜禮之儀温故堂に准し差合無之面々可罷出其餘は面々心次第之事

一 内外附屬とも執事相勤候者差合有之節は其向師範員長より當分何誰執事爲心得度旨奉行の申達奉行より申談候事

一 内外附屬諸道場執事は温故堂に准し其向道場常々心付破損の勿論掃除等迄見苦無之様夫々致世話并稽古道具等に至迄手置宜様心掛修行之面々差支無之様取計金錢受拂月々致勘定押切等御定之通致し受取渡辻證書等念入可取計事但諸道場執事之外門弟之内一人つゝ金錢受拂世話年番相立執事可申台事

一 内外附屬とも御用向相達候節差急き候儀は格別可成丈出勤日晝前之内學問所用談所之罷出三役之内詰合中可相達事

一 内外附屬員長以上并諸執事病氣忌血忌引込其外公私他出之節届省畧之通可相達候出勤歸着之節も同斷之事

一 毎月三日迄前月之諸學生出席名簿内外附屬とも師範員長相改目付の差出可申事但目付差合等有之節は主簿之差出可申事

一 每暮内外附屬諸道場温故堂に准し各門弟中名前増減相調目付の差出可申事

一 内外附屬諸道場の三役并文武引立世話役御徒目付等出席見廻有之節夫々名簿の其向にて姓名相記可申事

一 内外附屬當秩祓下候面々嫡子次三男にて其身之不念は勿論近親御咎等にて差扣或は愼罷在候節達等之儀は都て温故堂に准し候事

一 内外附屬の場所の三役見廻り文武引立世話役は不絶見廻り引立方之儀専世話可致候間諸生に至迄兼て相心得居温故堂に准し懇懇に取扱可申事

此度温故堂増補御規則成徳書院心得書御取調之上可差出候間堂中之面々は勿論内外附屬師範員長同諸生學問所勤番聖堂掛り同下役定番之者に至迄致拜見厚可被心掛候尙洩候儀は追々増補有之筈に候間時々罷出拜見可被致候右之趣不洩様可申達旨御年寄中被申開候以上

天保十己亥年正月

奉行

右之通當春中被仰出候處此度武藝も書院附屬に被仰付候に付再校有之内外とも附屬之儀は大凡附録に取調被差出候間拜見可有之候堂中は附屬の標準にも相成候故別て厚可相守面々心得違無之様可被致候右之趣可申達旨御年寄中被申開候以上

天保十己亥年十二月

奉行

成徳書院心得書附録

入學

一内外附屬之諸道場入門之式は家々之流例に任せ温故堂入學之制を見合取計可申事

一諸道場へ入門有之候は、其師範員長之内より目付可相達候尤退業等之節も同様之事但入門之節年齢書加可申事

一入門進物は温故堂に准し可申且他所者入門問合有之節も御制之趣を以可及挨拶候事

一他所者入門之節は御家中内にて證人相立其者より奉行之相願奉行より大目付可相達候事

修業

一六藝ハ勿論武藝も皆學問中之事にてれのつから其術分れ候故其藝之執行は其師致教導候得共元來一源に有之に付書院之附屬に被仰付候御趣意相辨其師範員長之面々精々申合各門弟中他藝他術之評判不致不行儀無之様常々心附

學問中之一技與申事厚相心得門弟取立可申事

一内外附屬諸道場毎年正月十一日温故堂開業相濟諸稽古初可致事

一醫書講窮勿論に候得共唯文學上之穿鑿而已に相成今日實用之吟味におゐて自然と鹿略に相成可申哉に付治療之儀は別て深切を盡し唯醫書講義出來候得ハ宜敷と而已心得修業致候儀肝要之事

撰舉附誌貴

一内外附屬諸師範員長温故堂に准し其向門弟中才能之様子藝術上達は勿論平日行ひ正しき者有之候は、相撰隔年十月晦日限り奉行迄書出可申事

之候は、其譯に寄早々員長に可被申達候事

一 試業之節は不及申席書有之候節兩塾生も出席多人數入込候儀に付別て行儀を專一とし騒しからざる様相暗可被申一段和熟いたし就中伍長之面々萬端心を付世話可被致候事

一 三役并引立之大寄合以上見廻り候節は員長之内壹人送り候得共其外之引立役見廻之節伍長之内壹人懇勸に送り可申事

一 修業生座上は勿論或は椽先の立庭中の下り見物之間敷儀又は寄集り立騒等無用に候若又無據用向出來外向に罷出候節員長に斷許容を受可被出候事附無益之難談内外之評判惡口等爭論高聲等御場所柄別て可被相愼候事

一 兼て被仰出候通御規則を守り質朴之風儀篤實專一に可被心懸尤字體の心持正しく形の直なるを本と致候と申候へは萬事右之心持にて修業可被致候且亦長者は幼者を導き幼者は長者を敬し互に相勵實儀を以修業可被致候事

右之趣堅相守可被申候以上

天保十三壬寅年七月

奉行

成徳書院書學所定

隻日自辰至未但正五時より四時迄、同四時より九時迄、同九時より八時迄

一 書學所之罷出候は、師範員長之辞宜其外之一禮名簿之名前記し頭書に何時出と記し歸候節何時歸と記し時宜合前之通

一 拾五歳より拾七歳暮迄隔日勤向諸稽古等之都合いたし九一時は一心に精出し師役之者用事請答之外無言にて習可申兩便之外椽側たり共一切出申間敷欠席有之候は、其次半日員長前にて二時補習爲致一ヶ月之内補習不足候は、

翌月欠日丈補習之事

一 清書は一ヶ月に上清書共三度 御試并席書月は二度若又清書壹度欠候節は翌月二時員長前にて補習清書壹度補都合四度可致事但上より被仰出休業多き節は員長より日割を以清書申談候事尤修業心懸勝手を以清書いたし候は、

出席日毎に清書いたし候共不苦定式之清書は本文之通差出可申事

一 拾八才より拾九才暮迄壹ヶ月八度に相定上十五日四度出席右之内欠候は、下の五日の内にて一時増補習候共別日に罷出候共當人都合次第之事清書は壹ヶ月二度壹度欠候は、翌月一時増補習之上清書都合三度可致事但右同斷

一 以後員長申合壹人は五時前に出席其外は五時より八時迄三時之間三人詰切三ヶ所に分れ居世話いたし此度之定に

一 朔望内外附屬員長以上御用にて學問所へ罷出候は、肩衣着用可致候事
 一 書院中は齒徳を尊を元といたし候様兼て被仰出有之に付師範員長之面々向後は席之高卑に拘らず師範員長等被仰付候順に位班を定可申尤其人席柄にも寄位班相改候儀も可有之事但小役人以下にても位班順は本文通被定候併堂中着座席は可有差別事

六 藝醫學は兼て成德書院附屬に被仰付候所今度武藝も同様被仰付候に付成德書院職掌記温故堂御規則并成德書院心得書同附錄等猶又御取調之上被差出候間師範員長諸門弟迄得と致拜見御趣意厚可被相守候尙洩候儀は追々増補有之筈に候間時々罷出拜見可被致且創草之儀に付各心付等有之面々は無遠慮學問所三役に可被申達門弟中心得違獵に難説等無之様師範員長之面々厚可被心得候右之趣可申達旨御年寄中被申聞候以上

天保十己亥年十二月

奉行

成德書院書學所心得

定

一 例年正月十二日開業麻上下着用之事

一同十二月十四日終業之事

一 毎日辰刻より未の刻迄修業之事附遇參其外見合等員長迄急度可被及斷候事

一 毎月三八日清書之事附上ケ清書毎月廿日限り之事

一 例年二月八月十二月席書之事

一 試業之節麻上下着用之事

一定例休業左之通 春秋釋奠習禮より當日迄 温故堂試業之節 二月初午 五節句 七月十二日より十六日迄 暑

寒入 九月十四日鎮守祭禮 十二月十五日より正月十一日迄 附臨時休業は都度々々下ケ紙にて可及斷候事

一 書學生被致出席候は、員長の辭宜いたし名簿に名前記し夫々面々机等持出修業之事尤日々初中後亂雜に修業有之間敷候仕廻候節も机其外取片付退散之事附出入共員長に相斷可被申候一刻も不相習獵に退席無用之事故無據差合は其趣意員長迄可被相斷候事

一 修業之仁伍長を先とし一組宛其順を以相並居行儀正しく修業可被致候事附伍長は一組之長に候故自分は不及申一組之行儀其外修業萬端世話勿論に候他組たりとも互に申合心得候様可被致若又伍長之申聞を不用我意を立候仁有

共戯れ惡遊ひ高笑高唱告口差出ケ間敷儀相慎可申事

一病氣又は無據用向にて三日相休候は、宅より急度其段員長の相斷可被申候一日或は二日之休にても最寄相弟子を以員長の可被申越候用向有之遅刻之節も其趣員長の可被申述候無據儀にて早仕舞にいたし度候節は宅より趣意書付持參之事

一毎年五月中一度温故堂におひて試業之事尤平生之衣服にて不苦花麗之服堅無用之事

一毎年二月八月十一月中壹度つゝ成徳書院書學所におゐて席書いたし候事附試業席書共多人數之事故行儀正敷騒しからざる様相嗜可申事

一清書三八之日御定之事但右日限延し候儀無用面々出精にて繁々清書いたし候共勝手次第に候得共熟習も不致認候は無用之事

一毎月一度つゝ清書老中に入御披見候事但三八之日見合相認毎月十五日限り員長之差出可申席書入御覽候節は平日之清書は不差出候事

一手本并清書之加毫を篤と見競誠實に可習事 文字草紙數多く習ふとも亂筆早書いたし候ては無詮事に候附他人之手本の墨のはねさる様氣を付可被申候

一塾并居宅の出入禮義を正し猥に不成様可被心掛候事附兩親の前は出辭宜いたし手本其外入用之品取落不申候様心掛可被致出宅候歸宅之節も同様相心得唯今歸候段申述へく出入兩親居合不申候は、兄弟等其席に居り合候人々は右之趣厚く可被申述候修業を申立幼年之者相應日用之勤疎にいたし中間敷候塾出入之節并員長の向ひ宅にて出入も同様進退靜に心掛可被申相弟子中之内生長は別段挨拶に及び可被申事

一師役并生長は不及申高弟等申合候儀相背中間敷事附年長候者へ以相對親兄より頼有之共手あらき儀いたすましく難捨置事有之候は、理解申聞其上にも不相用候は、員長の申達差圖にまかせ可被申事

一塾中は不及申途中におひても爭論ケ間敷儀かたいたす間敷若心得違にて物爭いたし掛り候共不取合員長之其趣可被申達候附友達を待合大勢にて往來無用に候尤幼年之者雨天等之節は年長之者世話いたし歸可被申候年長候者行儀不宜候得は幼年之者見習不行儀に相成候間萬事相慎幼者をいたはり机等出し兼候者とは世話いたし可被遣候一諸向より見廻り有之節失禮なき様急度相慎可被申事

一書學課業簿は自筆にて名前認可申事幼少にて認兼候は、年長候もの認遣可申前後をあらうひ中間敷候事

觸れ若未熟之習方難談不行跡の輩有之候は、罷責に三時つゝ員長前にて爲習可申候尤重き儀は目付え可申達候御糺之上急度可被及御沙汰候但員長差合せ御人少之節も貳人は欠不申候様可致事

一 伍長之面々も三四ヶ所に分れ居習怠惰之者等氣を付可申候

一 師範月に五六度出席之事

一 書學所休日兩戸へ切内より締り付書院通ひ口にも外より錠おろし鑰は定番にて預り置可申候書學日五時前出席之員長錠を明掃除等平常之通爲致早々相初可申八時打候は、書生にて硯机等乱雜に不相成様取仕舞書生退散後員長締り付退引之事但締り付置候事故別て火之元念入可申事

一堂中御試等にて書學所休業書生之溜り相用候節も揃刻限前より相濟迄員長申合一人詰切諸生之内猥無之様相制不取用者有之候いゝ目付は達可申べり等付候儀前書之通別條無之趣目付は達退引候事

右之通是迄三十日之處十五日に相成書生は勿論員長も間日有之候間世話行届候様諸事嚴重に取計員長一致いたし精々骨折可申候員長當番日等外員長にて補差支無之様可致事

一 三役も繁々出席勤惰等改可申事

兩塾諸生心得書

一 於兩塾讀書禮節書學修業可致旨被仰出候儀重き御趣意有之事に付厚く被相心得成德書院之被仰出候儀并師傳を守り聊無怠慢可被盡丹精事附成德書院も同様之御場所塾長は勿論授業之者可被致尊敬候事

一 御定之通八才より十四才迄塾中におひて修業十五才にて升堂之事

一 入門之節袴着用之事但前日學問所三役は勿論塾長并員長宅の親兄等被召連候事

一 毎年正月十四日開業平日之通五時揃袴着用之事

一 十二月十五日終業之事附袴着用いたし可申御定年齢にて翌春升堂の面々の員長へ向ひ厚く禮を述相弟子中にも是迄厚意受候段相互に挨拶に及び可被申候事

一 休業左之通 毎月二日十六日廿五日 春秋釋奠習禮より當日迄 温故堂讀書并禮節所試業之節 二月初午 五節

句 土用中 七月十二日より十六日迄 御書籍蟲干中讀書計 暑寒入 九月十四日十五日鎮守祭禮 右之外臨時

休業の員長より相觸可申候

一 御定之通毎朝五時より八時迄修業之事附出席遅刻不相成様可被心掛候員長見計畫前壹度つゝ休息之事尤休中たり

奉行 寄場之諸士に差圖は勿論萬端心付け消防之手當無油斷可申談事但表役月番之節計は寄場に罷出候事模様次第醫學所にも見廻可申事○肝煎 書院中は勿論内外附屬之場所をも心付諸方駈付廻り誰によらず駈付之面々引廻し消防并取片付之差圖專一に取計可申事 火用道具等之修補平日心付可申事但右同斷○目付 駈付面々之達承届消防之節差圖は勿論諸士働之様子相糺可申事但右同斷○教授付教 御預之書籍取片付之儀手落無之様申合置近火之節堂中之差圖專一に取計教授は先聖殿取片付聖像木主遷座之儀取計可申事○六藝師範員長 組支配有之面々并表勤有之夫々致出役候面々にて御預之持場は一旦罷出見廻り書院最寄失火之節預り之品々取片付可申兩塾禮書員長持場之塾に相詰模様次第早々書院に駈付可申事○演武場師範員長 御預之道場防方之儀隨分心付火急之節手拔無之様可致表勤有之致出役候面々にて書院最寄失火之節は早々駈付消防之手當可致候事○醫學所教授以下書生 難手放病用有之候は、不及罷出候得共御預之書籍も有之事故兼て申合置差支無之面々は早々醫學所之駈付可申候○都講 塾長を兼候事に付預之塾に相詰消防之手當并塾に相詰候面々差配可致時宜により塾に詰候面々引連駈付可申尤溫微堂書籍も御預之事故書院近火に候は、塾に不及相詰早々書院に駈付可申事○正授讀 書生防方手分等之儀三役之承合差引可致候佐授讀以下不參有之候は、相糺可申事○成德書院執事并勤番 先聖殿并堂中御用座敷其外内附屬之場所見廻り火用道具手當專致世話諸道具取片付等取計可申事○演武場執事 師範員長は多分表勤持場出役有之事に付執事は持場有之者にて御定之寄場は一旦驅付銘々持場之道場心付可申遠火にて向々道場氣遣ひも無之候は、奉行に達之上表勤之方相越可申候且又向々道場之火用道具手當宜様平日心付火急之節差支無之様可致事但表持場難明面々は兼て年番に申合年番之者道場を驅付候事 演武場表門に立身流心明殺活流無停滯心流誠心道場執事年番之内にて壹兩人同東門に中和流寶藏院流日置流道場執事年番之内にて壹兩人同西門に鏡智流佐分利流大坪流道場執事年番有之に付執事年番共早々驅付其外最寄門弟之内にて表勤無之面々四五人兼て申合置早々驅付諸道具取片付可申事 甲州流道場は御預拜借之書籍等も有之候に付執事年番共驅付可申事○小監 同勤申合書院内外并演武場相廻り萬端心付消防之手當心掛可申事 目付代り之面々書院裏門に壹人演武場裏門に壹人申合相詰出入之者心付演武場東西兩門其外御圍内折々見廻萬端心付可申本役差合之節は書院表門并演武場表門に相詰可申心得方等都て本役同様之事目付不詰合 諸向驅付候達有之候は、承届名前手札取集置目付に可申達候町在人足共火懸防候程之儀も有之候は、働之様子見届其外諸生働之優劣等糺置可申事 火用道具之差引可致世話事○主簿 目付差合之節目付代書院表門并

一手本之認様又は流儀之善惡を論し申間敷事

一都て筆墨紙放埒に遣ひ樂書等無用之事附手本は勿論師匠之加筆有之候清書など縦不用之品たり其鹿末に不致反古に至る迄決て費成儀いたす間敷候事

一猥りに立居いたすへからず塾入口より外へ無據儀にて出候は、其段員長に相斷可被申候座席込合候間机其外に障り不申候様心付可被申候履物等に至る迄混雜無之様可被致事

一座席之儀一ヶ月毎に繰替世話人中に居り見渡持場之者世話可致事

一講義會讀等兼て座席定置候間一組つゝ順々に退散之事

一退座之節世話人日々帳面を以呼上候は、員長に辞宜其外相弟子にも挨拶靜に退散道寄等一切無用之事

一火之元常々大切にいたし可被申事

前條之趣堅可被相守候若心得違之者有之候は、殘置爲習申候品に寄奉行中の申達相當之御咎可被仰付候間無油斷可被心掛候以上

天保十二辛丑年三月

非常心得書

西塾
東塾
書學員長

成徳書院

天水桶三、内先聖殿一温故堂玄關脇一小文庫前一〇提桶二組(數十二)内温故堂玄關脇天水桶上一組小文庫前天

水桶上一組〇水斗三十、内表門番所給温故堂仲ノ口給〇藁帚二本、藁圓座二本 表門番所〇竹梯一挺 先聖殿脇〇竹梯五

挺、内温故堂二挺書學所一挺御用座敷入口脇一挺禮節所一挺〇龍吐水一挺、玄蕃桶小二 奏樂所〇水銃一挺、鳶嘴五本、鉄棒

一本、徽索三條 定番所〇長櫃一棹 先聖殿

右之通差出被置候間定番之者四季共風立之節は玄蕃に水爲汲龍吐水等折々試置其外道具平日心付失火之節差支無之様可取計候事

一失火之節駈付向々遅參無之様心懸時宜次第聖像遷座守護之者被仰付置候得共支度等勤番之者は勿論駈付候面々之内誰に不寄手當可致尤先聖殿内殿之鑰は教授并坂田段治方に預被置候間手拔無之様可被致且表門入徳門先聖殿御額取外し其外取片付等可心懸候事

一演武場御取立彌手廣之御場所に相成候に付尙又防方等常々心掛萬一火急之儀有之候とも手拔無之様可申合候依之此度駈付寄場別紙圖面之通相定銘々心得方大凡左之通

一諸道場の被差出候水桶一ヶ月一度は掃除方にて水爲入候得共其向々道場にても折々水汲足し置萬一之節用立候様可取計候事

玄蕃桶大小六 團扇五本 藁帚拾本 藁圓座拾本 鳶嘴拾本 龍吐水壹挺 汲桶壹組 汲索壹條 微索拾條 右之品々平日は小監之者預り物置に入置失火之節ハ早速差出時宜次第何之方にも差遣相用可申四季共風立候節は小監より目付に申立中間等差出玄蕃桶の水爲張龍吐水等折々試可申取仕舞候節水突揚試置可申候事

一小監之面々申合演武場中不絶見廻り可申候若近火にも候ハ預り之火用道具早々危き方へ差向相防候様手當可致事

一演武場中井戸之儀非常御手當專一之事に付汲桶汲索等損候節其向道場より申達候儀は勿論に候得共小監之面々も日々見廻り之節心付損有之候ハ早々可申達候事

兩塾 水斗三ッ宛○藁帚壹本宛○藁圓座壹本宛○梯壹挺宛○水桶壹ッ宛 但十月朔日より三月晦日迄作事方より差出壹ヶ月壹度つゝ掃除方にて水爲入可申候事

右之品々兩塾共執事預平日書學員長に相渡置宜様致世話冬春之間風立之節は水桶の水汲足し萬一之節御差支無之様可致事

右之通此度被仰出候非常之事故面々平常厚心掛油斷無之様可被致候此段可申達旨御年寄中被申聞候以上

辛丑十二月

奉行

成徳書院御用座敷用方心得書

一此度御建繼之場所惣體を御用座敷と唱内座割左之通

上之間(十疊) 釋奠之節御座敷 御家老御年寄御名代之節但休息辨當之節は南内縁に退座 他方儒者相招候節但一通り之書生杯は前圖(略ス)座配差畧時之宜に隨ふ 右之外は平日不相用御書籍蟲干之節は相用不苦

二之間(十疊) 御座所之節御次 諸御用申渡席

三之間(三疊) 御用申渡多人數之節次席に用 試業之節大目付休息

寄附(五疊半) 平日御用申渡次席に用

上之間南内縁屏風仕切 掛り御年寄詰所 試業之節御家老御年寄休息

同所東内縁衝立仕切上 引立役御番頭溜り但刀は持込

演武場表門等々相詰候に付右之節申合右跡相詰可申事尤取計方目付代同様之事但驅付人別取調目付迄差出可申事○佐授讀 早々書院の驅付正授讀之得差配時宜次第書院其外御道具取片付手落無之様可心懸尤其月直順之者は持場之塾之驅付塾長之得差配可申事但火事具勝手次第之事○聖堂掛同下役 先聖殿防方取片付等專一に心懸聖像木主遷座にも相成候へ可致守護事○書生六藝生 早々書院の驅付手札目付の差出可申候尤目付詰合無之節は小監主簿に差出可申候正授讀得差配時宜次第書籍其外諸道具等取片付取落無之様可心掛事但十五才以上之書生早々驅付可申自然無據他行或は差合等之節は其趣意相達置可申面々居宅最寄近火之節は罷出不及候尤火事具勝手次第之事○武藝生 早々演武場の驅付師範員長得差配諸道場取片付取落無之様心懸防方等も相勵可申事但手札差出候儀同前但書右同斷○定番 書院定番は表門番所爲見張壹人つゝ相詰臺提燈高張等之世話火用道具類差出可申尤下番にも申付爲相勵手廻し宜様可心懸たとへ遠火たりとも火用道具類取揃差出置可申事 書院裏門にも申合壹人つゝ罷出臺挑灯之致世話出入之者等心付可申事 御文庫口塗土乾き亦是氷り不申様冬分は別て心懸可致世話事 演武場定番は面々持前之諸門の壹人つゝ相詰出入之者心付其餘は諸道場火用道具等之手當心附可申候表門は臺提灯之可致世話事 寄場の驅附之面々向々の致手分差向候事に候得共若三役遅參にも候は誰によらず夫々持場の驅附相防候様可致候若火急之節は直に持場の驅附消火之後其譯可申達候兩塾最寄失火之節も右同斷之事 驅付之面々向後は手札を以可達候目付不詰合候は或は目付代并主簿之内之可申達候事 萬一御城内御場所柄最寄失火有之節は書院并内外の附屬の驅付之面々時宜に寄奉行え達之上御差支無之様取計御城内の驅付可申事但目付代并小監は始終居殘書院内外相守可申事 書院并内外附屬持前之場所々々々驅付之文武諸生嫡子次三男共決て火事裝束に不及候表勤無之嫡子次三男火事具急度致用意候様には不行届儀に候間聊遠慮有之間敷候畢竟御手當之爲に候間裝束之有無に不拘早速驅付摸様次第相働候儀專一に有之候事 失火之節書院并演武場之左之通町在より人足共驅付候筈に付參着次第夫々相働候様可申付事

書院表門前 新町、彌勒町、寺崎村、六崎村○演武場表門前 本町、田町、羽鳥村、土浮村、本佐倉村

演武場 梯一挺○水桶一、但十月朔日より三月晦日迄御作事より差出一ヶ月一度つゝ掃除方にて爲水入可申事○水斗三○藁筥一本○藁圓座一本○水銃一挺、提桶肩桶等は道場有合と可用○徽索一條

右之通道場毎に相渡被置候間平日手置宜様に取扱冬春之間風立候節は水桶水汲足し其外用意之道具取揃火急之節手廻致し成徳書院小監之面々居殘專被致世話候事に付手都合等宜様兼て打合置可申事

に應し差支無之様可相勤場廣之儀晝夜共御用座敷向に至る迄戸へり洒掃火之元改等入念庭等掃除下番之者の命し見苦敷無之様常々心付可申事但夜中定番之者下番召連れ書院内外拍子木打相廻り可申違變之儀見請候は、早速勤番之者の申達勤番者より奉行目付へ早速可申達候事

一是迄温故堂にて俗事も取扱來候處向後不殘御用座敷向にて取扱候様に相改候間温故堂は書生修業專に相用左之朱引圖面(略す)之場所に出可致修業然る上は附屬之場所假借相用候儀は堂中修業生多差支之上罷越看書等不苦候得共可成丈堂中にて修業可致候事但三役詰所等罷越候面々堂中致通路候ては書生修業之妨にも相成候間書院中之面々は内縁縁類を通路外附屬之面々其外表向より罷越候は、御用座敷上り口より出入廊下通り上之間後ろ縁類通路之事

此度御用座敷出來に付同所用方并平日心得方等前書之通被定候間可被得其意候此段可申達旨渡邊彌一兵衛殿被申聞候以上

天保十一庚子年九月

奉行

温故堂試業之制

小試之制

素讀授業之次第 孝經、小學之内 大學 論語 孟子 中庸 易經 書經 詩經 禮記 春秋左氏傳 國語 史記
前後漢書 周禮 儀禮 公羊傳 穀梁傳 爾雅

素讀生左氏傳以上は必右之順に句讀を受可申候國語以下は面々力に應し會讀等にいたし候も勝手次第第一順は素讀いたし候様に心掛若餘力無之者は緊要之書擇讀候も心次第

大凡右之通に定置毎年十一月中卒業之書日正授讀取調教授可書出事

素讀試式 凡八才より廿四才迄但晚學之者は年齡之限無之に付何才にても志次第可罷出候

一大學一部論語半部以上卒業之者 大學半部 試一章 試幾人にも同章以下皆同之 右部數卒業無之者は兼て章割定置可試之

一大學論語全部卒業之者 大學半部 論語 自學而至里仁 一冊 試二章

一大學論語全部孟子半部以上卒業之者 論語 自衛靈公至堯曰 一冊 試三章

一四書全部卒業之者 論語 自衛靈公至堯曰 一冊 孟子前半部 試三章

一四書全部易經一部卒業之者 孟子後半部 中庸一部 試三章 以上五等

同斷衝立仕切下 役人以上引立役溜り但刀は惣溜り刀掛ゑ懸 東内縁師範人等相談寄合併御書籍拜見等時宜に應し
用之不苦

惣溜(十五疊) 役人以下引立役溜り寄合 員長執事等溜り寄合 長沼流兵學所 御家中より不時御書籍拜見相願罷

出候者溜 常秩渡 表向より俗事にて罷出候者溜

右諸役者出席座割大概之處なり其他は出席之多少時宜に應し座席讓合諸事差支無之様可致事

一釋奠并試業之節爲御名代御家老御年寄之内相越候節玄關より執事先立釋奠は御帳役
試業は大目付引之廊下通上之間ゑ着座諸役人

挨拶有之初之節釋奠は御帳役
試業は大目付案内にて御額之間着座相濟元之席ゑ着座無滞相濟候段諸役人申述候事但試業之節休息

辨當等は南内縁ゑ退座之事

一掛り御年寄出席 毎月四日十四日廿四日但自四時至九時

右三役并其外堂中師役以上執事主簿壹人つゝ出席之事但月番にても一旦罷出候上にて會所は御用次第に取計可申事

堂中は授業詰合之者心得可申且又文武藝術引立世話役出席は用事有之者の格別定式に出席には不及事

一長沼流兵學稽古之儀は御趣意有之書院中にて可致稽古旨兼て被仰出候に付稽古當日の惣溜り道場に相用御用座敷

上より出入可致候堂中書生之内にて稽古に通候類は廊下通路不苦當口は道場に相用候に付表向より猥に出入

可致遠慮候事但試業之節は内附屬に准候間温故堂を用可申事

長沼流兵學稽古日 毎月四日八日十二日十七日廿二日廿八日但自五時至九時

右之通之處惣溜り當分三役詰所に相用候間已來數學所長沼流兵學兼相用候事

一諸師範藝術之相談等有之寄合出席候は、三之間并東内縁等相用可申事

一諸執事相談調物等有之出席候は、東内縁三の間寄附等相用不苦事

一堂中之書生用なくして猥りに罷越申間敷堂中修業等多有之差支之節は其向相斷候上罷越看書別會等相用不苦候夜

中罷越候儀は一切無用乍然堂中ゑ詰合居晝夜共に非常之事と見請候は、早速罷越相糺時宜に寄向寄ゑ可相達事

一節分煤納之御式上之間は御年男勤之温故堂上之間同様たるへし其餘之御式下男勤之可申事

一學問所勤番は平日も夜中一兩度つゝ堂中并諸附屬共見廻り其外御徒目付見廻り有之節勤番之者致案内候儀勿論た

りといへとも御用座敷向同様心得場廣之儀精々入念見廻り可申事

一學問所定番四人泊番は兩人つゝ晝は交代一人つゝ可相勤尤晝は申合四番に相勤候共勝手次第用向多之節出勤時宜

章に限

外 小學、近思錄道體四銘は省くも不苦、文公家禮 此三部試業書出は勝手次第候得共右課程之内に必可致講究事

以上四書一科毎年一冊つゝ書出大凡十年講究學問之大本を立可申事但辛丑初場之者は大學より書出是迄に大學試
濟候者の次の書より書出可申事

外 左氏傳、國語、史記、前後漢書、通鑑綱目、諸子類讀 史子之類は餘力を以連々に講究いたし歴史之内冊數多少
は何程も其人之力次第毎年書出試受可申事

試 問目之對一條

詩文も出來候者成丈書出可申事

試 書上に向出題

右講義試業は兼て被仰出有之通面々之力量に應し書上候は勿論候得共天保四年四書講義之御定も有之故大凡十ヶ年
之課程を立連々講究いたし廿四五歳之年齡には四書一科相濟候様に心掛其内學業相募候者は方に應し一場に二等三
等乃至四書全部書出候共冊數増候は不苦に付右之書目順々に不洩様書出可申若又學力不足者は初場に篇數を減追々
篇數を増十ヶ年に滿備候類又は論語を先にし大學を後にいたし候類も望に可仕候間都度々々教授に相願可申尤一部
之内にて篇目を不順に書出候儀は決して不相成候事但試業濟候書目は年々十一月中正授讀取調教授に可差出事

右講義科第の豫め定置かたき事に付試業相濟候上師役以上得と遂吟味甲乙丙之三科并再試之者等可相定事
四書講義濟候者 易經(本義并啓蒙) 書經(蔡傳) 詩經(朱傳) 禮記(鄭注) 春秋(故傳)

試 試式都て四書に同じ書出冊數に向ひ試多少可相定凡一經一條よりは減中間敷事

外 周禮(鄭注) 儀禮(同式正續經傳通解にても) 春秋(三傳) 歷史 書出勝手次第

以上五經一科は四書講義相濟候者の部數其人之方相應に年々書出試受可申事 五經之内三經以上書出候者は兩日に候得とも三日に試

右四書五經二科試相濟候上は年々の試業罷出不及候事

内試式

正授讀 書目試式ども前條講義二科の法に同じ但書目は毎年三月中に書出五六七三ヶ月之内に可試之

右正授讀の面々試業は堂中之内試に付惣教并三役之内一兩人教授付教都講出席其餘は出席無之事

大試之制 小試之制の初學之輩課程を立漸々に功を積候爲に有之必竟庸才之者の爲に立被置候處にて才力秀候者も必右

無失 甲科 十四才以下四五失
十五才以上二三失 乙科(白文は甲科に准) 十四才以下六七失
十五才以上四五失 丙科(白文は乙科に准) 十四才以下廿失以上
十五才以上十五失以上

再試之

一四書全部易經書經詩經全部卒業之者 易經一部 試正文にて紙數三枚はと 試幾人にてても同
前以下皆同之

一四書全部五經大略卒業之者 書經一部 試右に同し

一四書全部五經卒業之者 詩經一部 試正文にて紙數四枚はと

一四書五經全部左氏傳半部以上卒業之者 禮記一部 試右に同し

一四書五經全部左氏傳全部卒業之者 左氏傳半部以上 試一卷 以上五等

無失 甲科 十四才以下六七失
十五才以上四五失 乙科(白文は甲科に准) 十四才以下八九失
十五才以上六七失 丙科(白文は乙科に准) 十四才以下三十失以上
十五才以上廿五失以上 再

試之

右十等之課程は素續卒業之次第を以て被定置候間右之定より減書上候儀は不相成候讀書長進之輩は一場に二等三等乃至四書全部五經全部書上候共冊數増候者不苦に付右之書目順々に不洩様何部も書出十五才迄には課程成就いたし候様に心掛其上にて國語史記漢書等之内力量に應し書上可申事但試業濟候書目は年々十一月正授讀取調教授可差出事

右科第之者凡被定置候得共冊數書出之多少年齢にて甲科中にも尙又優秀も可有之事に付試業相濟師役以上得と遂吟味科第可相定事

講堂試式 凡十五才より三十九才迄但晩學之者は年齢之限無之に付何方にても志次第可罷出候

學生以下 素讀生にて講義に罷出候者は素讀講義とも可試之學生にても醫師其外學業相勤候者試式佐授讀以上に准小學 立教篇より 篇數多少面
々々力次第 幼學之者は解し易く候に付稽古之篇採最初に書出候も時宜に隨 試一章每人別章 正試業受候程之力無之初學之者は兼て章制定置可試之

佐授讀以上 括弧内ノ千支ハ江戸邸ニ於ル分

大學一部 辛丑(癸卯)○論語 自學而
至里仁 一冊 壬寅(甲辰)○論語 自公治長
至鄉黨 一冊 癸卯(乙巳)○論語 自先進
至憲問 一冊 甲辰(丙

午)○論語 自衛靈公
至堯曰 一冊 乙巳(丁未)○孟子 梁惠
王 一冊 丙午(戊申)○孟子 公孫丑
滕文公 一冊 丁未(己酉)○孟子 離婁
萬章 一冊 戊申

(庚戌)○孟子 告子
盡心 一冊 己酉(辛亥)○中庸一部 庚戌(壬子)

試 講義一章、每人別章 辨書一章、幾人も同章 力量に應し冊數多く書出候者は冊數に向ひ辨書章數増講義は一

一大試 經科 初等 小試四書講義に同○同 二等 小試五經講義に同○史文二科 初等 經科初等に准實員不足
時宜ニ隨
同二等 經科二等に准同上○三科之内三等以上兼候者 撰舉○三科六等全備之者 別段撰舉

天保十一庚子年十二月

成德書院試業心得書

一御試業割合左之通○二月 温故堂素讀貳度 兩塾 素讀貳度○三月 兩塾禮節壹度 禮節所壹度 温故堂講釋三

度○五月 温故堂講釋壹度 兩塾書學壹度○六月 長沼流壹度○七月 數學所壹度○八月 温故堂講釋貳度

醫學素讀講釋壹度○九月 音樂所

右之通定月立置故障有之節は繰合可申候其都度々々日限奉行より相伺候事但試業之日限伺相濟候は、奉行より肝煎目付月番致案内目付月番より其向教授師範員長に可申通尤諸試業日限温故堂にて有之分は可成丈素讀日障りに不相成樣いたし可申事執事は肝煎より定番は執事より可申談事

一御在邑年文武共御試之殘有之候は、其年試業月割に御試殘を加へ翌年御在邑迄之一ケ年分定月取調都度々々日限伺取極之上前條同様之事

一書院中試業當日表門始終開置可申事

一當日御名代御家老御年寄之内大目付同道肩衣着用にて相越候事

一當日三役并堂中師役以上肩衣着用執事主簿相詰候事但師役以上にて御小納戸元方以下之者は麻上下肩着用執事主簿にて位班師役以上に被仰付候は、同肩着用候事

一當朝素讀講釋之書生相揃候は、支度宜旨御名代宅に差向同道大目付に執事より書付にて申遣候事

一書院を御名代相越候節三役敷授門内北の方へ出迎玄關より執事先立目付引之御名代并大目付圖面之通着座三役挨拶相濟師役以上同斷之事

一教授以下正授讀迄之名簿并扣本硯箱壹面つゝ差出置夫より何も圖面之通一統着座相揃候は、執事先立目付引之御額之間に着座

一名簿并出席名前書等主簿より大目付に差出大目付より御名代に差出

一章割拜見二三人つゝ口付前に罷出章割書付受取候事

一見臺并板扣本等執事差出候事

之年次を待て講究いたし候譯には無之候得とも往々心得違にも可相成候に付六ヶ年に一度つゝ學業長進之者相擇大試可被仰付候大試は御定經科之外に史文之二科をも加被置候間温故堂諸生は不及申教授付教之外は師役以上にて望之者い面々其長所を以前年十二月迄に書目書上翌年五六月頃試受可申尤諸生も四書は年々之小試に講究いたし候事故大試には五經科史文科計書上候義も勝手次第之事但大試は文武附屬之師弟は勿論御家中之面々輕き者に至迄又は御領内町人百姓にても右三科之内試業望之者は何科にても勝手次第可被仰付候間是又前年十二月中迄に學問所奉行に相願可申事

癸卯 江戸郎は丙午

初場○巳酉 江戸郎は壬子

第二場○以後卯酉 江戸郎は午子の年次准之

大試式

一經科 初等 四書集註 外近思錄 道體西銘は省候も不苦 文公家禮 書出は心次第

試 辨書、一部一條つゝ、四書之外も書出有之候得は兩日に試

一經科 第二等 易經(本義) 書經(蔡傳) 詩經(朱傳) 禮記(鄭注) 春秋(故傳)

外 周禮(鄭注) 儀禮同或正續儀禮經傳通解にても 書出は心次第

試 辨書、一經一條つゝ、問目之對 春秋傳 一條 三經以上書出候得は兩日に試五經之外も書出有之候得は三日に試

一史科 初等 左氏傳、國語、史記 書は省候も不苦 前後漢書 志は省候も不苦

試 一部之内にて和解一條 問目之對一條つゝ、三部以上書出候得は兩日に試

一史科 第二等 通鑑綱目 續集共 或は洩水通鑑并三國史以下之正史等書出候儀も望次第

試 和解、三條 問目之對、三條 綱目之外書出有之候得は兩日に試

一文科 初等 文章軌範、古文折義、韓文公集 詩の類は除、八大家文抄

試 復文、古文一條近文一條 和解論文、一條 記事或題跋之類、一篇

一文科 第二等 作文

試 論 或序記 一篇 策、一篇

兩試賞格

一小試 四書素讀五等甲科 書冊○五經素讀五等甲科 綿布○四書講義甲乙丙三科に不洩者 銀米○五經講義相濟候者 撰舉 内試准之

一禮節音樂は其道場にて有之候に付諸事温故堂之例を見合取計可申事

一書生麻上下着用之事但醫學生は十德着用之事

一兩塾試業は素讀同様之事但書生は袴着用尤拾五才以上にてても同様之事

一同試業之節其塾除切之佐授讀兩三人申合罷出致世話可申事

演武場試業心得書

一演武場武藝毎年春より秋迄之内平稽古壹度つゝ試業有之爲御名代御家老御年寄之内大目付同道其道場相越候儀成徳書院同斷尤定月無之候間年々順繰替候様學問所目付取調都度々々日限奉行より相伺候事

一試業被仰出候は、向々案内等書院之例を見合取計演武場定番は目付より申談候事

一諸道場少々異同有之一様にも難定置候に付大凡左之通

一當朝演武場表門始終開置可申事

一御名代通行之節計扉脇に定番壹人扣居可申事

一御名代往來道筋左之通 堂形下切抜門并馬見所脇木戸門定番開之置通行相濟候は、引寄試業濟寄候頃其道場より定番に申遣候間又々開置可申候鏡智流佐分利流荒木流は右門開に不及日置流大坪流に切抜門計開可申事尤此所に定番罷出るに不及候事

一當朝諸生相捌候は、支度急度宜旨御名代宅に差向同道大目付に執事より書付にて案内申遣候事但使之者は兼て書院より下番壹人差出候事

一當日三役壹人つゝ并師範員長肩衣着用執事相詰候事但師範員長にても御小納戸元方以下之者の麻上下肩着用之事

一御名代相越候節三役并其向師範道場外圖面之場所に出迎道場入口迄執事出迎致先立御名代并大目付圖面之通着座引續三役挨拶相濟圖面之座席に着座夫より師範員長挨拶相濟達藝者執事一同挨拶罷出可申事但御名代相越候節送迎員長并家業人嫡子も師範同様罷出可申家業に無之嫡子は罷出不及候事

一御名代相越之節道場に寄通筋にも相成候は、諸生は居成に辞宜いたし可申わさゝ罷出辞宜には不及候事

一名薄并出席名前書執事より大目付に差出夫より御名代に差出尤兼て三役の一覽之事但右之外試業名簿三役え壹帳執事差出候事

一書院中試業に付御名代相越候間惣て執事先立之廉御目見以下之者にては差支候に付以來執事主簿打込爲相勤申度候

一見臺並に板扣本等執事取扱候廉も右同斷爲相勤申度候右伺之通被仰出候(辰五月十日)但後項之見臺板等差引之儀も同斷

一試業相始候旨主簿より教授に申述教授より奉行に申達奉行より申達但相濟候節も同斷之事

一中頃にても休息等之節は執事引之

一御名代刀取並茶多葉粉等等之通御年寄部屋子供相勤可申事

一試業相濟候は、教授に居形書生一統罷出御禮申述候事

(試業相濟候は、其段教授に執事主簿之内より申達見臺板等差引書生一統御禮罷出候事十月八日)

一見臺板等差引執事取扱之事

一素讀試業之節は組合生長不殘罷出差引致世話佐授讀は組合より一人つゝ出席銘々世話勿論之事

一毎年溫故堂並兩塾素讀試業之儀前年十一月中銘々力量に應し書目爲書出正授讀取調教授に差出置其上にて試業爲受候事

一毎年講釋試業之儀二月中銘々力量に應し書目爲書出都講取調教授之差出置其上にて試業爲受候事但幼年之者并未熟の者は兼て章割定置前日爲心得置候事

一素讀講釋共試業之節病氣其外差合之面々何ヶ差合にても堂中にて六藝醫學試業之節爲受之候事

一試業受候面々は麻上下着用之事但幼學之者にても同様之事

一當日試業受候面々之名前并出席之者之名前生長佐授讀之名前簿に相認候事但別紙に當日出席之三役并教授以下主簿迄名前相認差出可申事

一御名代先拂之下目付は試業中門内は不及申門出入等迄心を付從者等かさつゝ間敷儀無之様相制可申事

一定番不殘相詰書院表門開扉御名代通行之節兩人兩脇に罷出平伏之事但早朝より罷出掃除等之儀勿論之事

一案内申遣候は、子供之内一人爲見步使差出可申事但見步使御名代被參候を見受候は、早々用談所に可申達事

一御年寄部屋子供一人差出可申事但前日執事より子供之内に案内申遣候事

一六藝醫學兵學之試業於溫故堂有之節は諸事取計方右に准候事

相勤候事

一試業之節諸士出席之面々員長以上は肩衣着用席小役人以下之師範員長の麻上下着用可致事但武藝生は袴着用尤柔術之類業いたし候内之服を制外之事

一御名代先拂之下目付は試業中道場入口に扣居道場の出入萬端心を付從者かさつゝ間敷儀無之様相制可申事

一試業之節學問所下番壹人其道場の差出候事

一御持同心弓鉞之試業諸士一同に付右之節の其支配肩衣着用出座支配差合之節の御角場月番罷出可申事但送迎等之儀都て三役同様可致事

一御先手同心弓鉞演武場向々道場におひて試業有之御名代其外出席等外道場同様尤執事も罷出諸士試業之節之通取計可申候右之節弓鉞共師範指南出席并支配肩衣着用出座御禮支配指南申述候事但右同斷

一右試業相濟師範爲御禮奉行宅の口上書持參罷越可申奉行より御名代宅の持參之事但試業夜に入相濟候は、翌朝持參之事

文武藝術御試心得書

一書院并内外附屬御試月割書付御帳役の書出置被仰出次第奉行の申越向々案内等試業之節之通可取計事

一當日書院表門始終開置可申事

一當朝書生相揃御支度宜候は、當番御帳役の目付より手紙にて申遣御帳役より申上候事

一御通行之節計定番兩人差出兩扉押へ居可申候事

一表門外の三役御出迎目付玄關迄御先立之事

一教授は門内に出玄關迄御先立其次の目付御先立之事

一玄關敷出の御先番御帳役御近習御側小僧罷出御帳役御駕番相勤目付御先立御用座敷上の間の御着座御茶御多葉粉盆御近習差上候事但御休息中又は素讀講義中折々差上候は、御便利次第御側小僧にても差上候事

一圖面之通一統着座御帳役御先立御額之間の御着座其節一統平伏仕候事

一名簿并出席名前書主簿より奉行の差出奉行より差上候事

一御見臺正授讀差上御扣本は正授讀より兼て御日記方の差出置御日記方より差上候事

何術試業名簿

何流道場

何術試業出席名前書 何之誰

何術試業出席名前

奉行 何之誰

肝煎 何之誰

目付 何之誰

師範 何之誰

員長 何之誰

執事 何之誰

右之通に御座候以上

月日 師範名

一茶多葉粉盆御年寄部屋子供にて差出候事

一試業相始候旨執事より師範へ申達師範より奉行へ申述奉行より申達候事但相濟候節も同斷之事

一當日道場執事萬端取扱候事に候得とも公私差合之節は年番之世話人執事に代り可相勤事

一右試業相濟候段師範申達候上奉行より師範へ談武藝生不殘師範召連出御禮申上候事其節奉行より御名代へ取合之

事但師範員長達藝者執事其餘武藝生順々に罷出可申事

一右御禮相濟其日出席之諸役人初師範員長等御名代へ向一同に試業無滯相濟候段申述候事

一御年寄附子供一人罷出御名代之刀取其餘茶烟草盆之通等都て可相勤三役之用事其前に學問所子供一人罷出萬事可

覽之事

一御試相始候節相濟候節共師範より奉行を以申上候事

一諸生溜りは近所道場互に假借いたし面々遣ひ候前次第に道場は兩三人つゝ詰候事

一御試被成下候御禮師範より奉行を以申上御意御座候は、奉行御取合申上候事

一書院下番一人差出可申事

一馬術御試之節計向岩沼脇坂に下目付一人差出置同所往來之者不申候様相制可申事但前日目付より大目付月番に可申遣事

堂并附屬不時御覽心得書

一二之日講義不時に御聽被仰出候は、御帳役より奉行を案内御出之節表門開定番差出候事

一表門外へ詰合之三役御迎送教授は門内北の方へ御迎送御先立之事

一御先番御駕籠番御先立等御試通之事但御家老御年寄出席候は、御通筋御目通りへ罷出居候事

一圖面之通一統着座御帳役御先立御額之間へ御着座其節一統平伏之事

一御扣本御見臺に載正授讀差上候事

一相始候旨奉行申上相濟候節同斷之事

一御供待之面々御徒士以上御用御差支無之者講義聽聞之事

一講義相濟候は、御帳役御先立御用座敷へ御着座御供揃等御帳役取計之事

一御歸殿後奉行教授之内問之間へ罷出御取次を以御禮申上候事

一八の日講義輪講等御聽之節大凡右之振合を以取計候事

一不時に諸道場之稽古爲御覽被爲入候節御帳役より學問所奉行を案内其道場師範にも同斷之事但御出掛り急に被爲

入候節は師範之方先に案内之事

一師範御迎送御試之節通尤平服之事

一三役は一兩人出席御迎送御試之節同様之事但御出掛り急に稽古御覽之節は御間に合兼候事可有之候間諸事御側御用人取計之事

一見臺執事差出候事

一教授付教都講正授讀扣本硯箱等最初被差出候事

一章割拜見五人つゝ揃罷出書付目付相渡候事

一御試相始候旨主簿より教授に申達教授より奉行を以申上相濟候節同斷之事

一右相濟候は、教授出口之方正面下座に上り御禮申上御意有之候は、奉行御取合之事但此特諸生之御禮無之硯箱并扣本等も其儘差置候事

一右相濟候は、御帳役御先立御用座敷に御着座御茶差上御供揃等御帳役取計之事

一御歸之節御出通三役初居並御先立等同斷之事

一御歸殿後奉行壹人教授并諸生召連間之間に罷出間之間御取次を以御禮申上候事但奉行より別段御歸殿後之御機嫌間之間御取次を以伺候事

一内附屬御試大凡右に准候事但禮節音樂御試之節に三役之内壹役壹人つゝ罷出可申候事但目付は御先立差支之儀有之候に付兩人罷出候事

一演武場御試被仰出候は、書院は例を見合取計可申其上にて肝煎より書院執事の申遣目付より演武場定番に申談候事

一當朝諸生相揃候旨目付より當番御帳役の手紙にて申遣御帳役より申上候事但當朝御案内申遣候使之者は兼て書院下番壹人差出候事

一御案内申遣候は、爲見歩使諸生之内兩三人差出可申事

一表門外右に三役御出迎同所より目付道場迄御先立師範は其道場境目迄御出迎御先立之事但家業師範嫡子同斷罷出尤御先立は不致候事

一道場入口狭く候に付木戸外にて御下乗之事

一御帳役御近習御側小僧道場内に御出迎御帳役御先立見所に御着座役々一同平伏圖面之通着座仕候事

一御茶御多葉粉盆御近習差上候事

一名簿并出席名前書執事より奉行に差出奉行より差上候事外に壹帳三役に差出候事但名簿并名前書は兼て三役に一

何流何術名前書

師範名前

何流何術名前

右之通御座候以上

月日

師範名前

一相初候旨師範より三役之内に申述る三役之内より同道大目付に申述る但相濟候節も右に准す
一師範初諸生迄老中前に出師範より老中に直に見分之御禮申述但勝間田七郎星川房右衛門は三役に向ひ申述三役之内取合

右之外都て是迄之仕來之通

無停滯心流仕合構

一仕合構相立候程之諸生出來候は、兼て師範より奉行に申達尙來る何日より五日之間晴雨共誰々仕合構相立候旨可申達其旨奉行より總教月番之老中に申達
御在邑之節は奉行より御帳役を以申上る

一道場執事より見所等肝煎に申達候は、其旨破損奉行に案内申遣

一御覽日限御帳役を以奉行迄被仰出奉行より三役の案内肝煎より破損奉行目付より師範其外例之通案内
一御覽之節は下目付道場木戸門に詰切見物一切通し不申候事

御先拂之下目付は往來より透見等不致様制候事但總教出席之節も同斷
一仕合構中町在之者爲見分相越候儀不相成候從者等うさつ無之様制候事

右兼て目付より大目付に申談可置事

一總教之出席老中は被申合御覽之前後被相越候間其旨前に奉行に談有之目付より師範に申遣置

一御帳役御近習御側小僧道場内の御出迎御帳役御先立見所の御着座但御床几にて御覽尤御便利次第御毛氈の御着座成共

一道場御入之節諸生は溜りにて一統平伏尤始終手を突罷在候事

一見所の御着座之上御側向并出席之者一統圖面之通着座平伏之事

一平生之名簿御用人學問所奉行之内を以差上稽古始候段相濟候段且又被成下御覽候御禮等奉行不詰合候は、御用人を以申上候事

一諸生溜り其道場内に罷在居餘り候は、近所道場互に假借いたし候事

一惣御供は近所道場に御供待之事

一御覽御禮間之間御取次え申上候義御試之節同様之事

一馬術御覽又は御稽古之節向岩沼脇坂の下目付壹人差出置同所往來之者不申候様制可申事

一右同斷之節演武場口々定番罷出居稽古の罷出候者は格別雜人等往來不致候様制可申且演武場近邊屋敷御目障に相

成候儀無之様下目付を以門觸いたし候事

武藝見分心得書

寒稽古見分

一諸道場寒稽古日并始終り取調候書付目付より老中月番の九月末に差出置

一大目付より奉行迄見分日限以手紙申來る奉行より三役の連名にて案内手紙出す

一當日三役之内壹人平服にて其道場の出席

一見分之老中平服にて大目付同道相越但双方共案内等無之

一師範家業之悴道場木戸門内へ出迎内執事案内但退散之節右同斷

一三役は見所之末之方に扣居老中座に付候と挨拶之上出坐之席に列居

一師範執事達藝者爲挨拶出る

一諸生は道場に溜り居通行之節平伏

一左之書付執事より同道大目付に出す但三役の鼠半切にても不苦候間同様名前書可差出尤上包無之

才能撰舉之制

隔年諸生之行狀才能等相撰向々より書上候儀兼て成徳書院心得書并附録を以被仰出有之候に付尙又明細之儀掛り御年寄中へ伺候處左之通

右は書院内外附屬迄之諸生相撰封中にて奉行可差出事

肝煎、目付

温故堂 教授、付教、都講、正授讀

右は堂中持場所之書生相撰封中にて奉行可差出事

兩塾 長、正授讀

右は持場所之塾生相撰可申塾禮書員長より之書上其塾長にて取集封中にて奉行可差出事

六藝所 演武場 師範、員長

右は其向道場門弟を相撰奉行可申員長といへども撰舉之書上に付自分存意之趣師範に拘らす銘々に相撰差出可申兩塾禮書員長書上は其塾之長に差向塾長より奉行可差出可申事

醫學所 總管、教授、都講、正授讀

右は醫學生相撰惣管にて取集奉行可差出可申事

右何れも十一月晦日限奉行可差出可申事

文武藝術引立世話役 御番頭、御物頭、御用人

町奉行、大目付、郡奉行、新番徒頭、勘定頭、破損奉行、山奉行

右は組配下より封中にて書上爲差出披見之上尙又遂吟味手分存念は別封にいたし相添奉行可差出可申事

文武藝術引立世話役、大寄合子弟世話引受、小寄合子弟世話引受、組外以上子弟世話引受

右は持場所之者相撰封中之儘奉行可差出可申事

文武藝術引立世話役 組配下

右は持場所之才能行狀等平日家事之様子迄相撰封中にいたし頭支配引立役可差出可申事

一御覽之節は御供侍所道場にて御試之節之通相對いたし置候事

一五日之間三役代々壹役一人つゝ肩衣着用出席尤日々學問所の相揃道場執事より案内次第道場の相越尤御覽之節は御供揃刻限前道場の相揃

一當日師範肩衣着用之事

一三役演武場表門外の出迎目付御先立道場師範并悴御出迎但御歸之節も右同斷

一御覽之節は見物不相成總教老中被參候節は見物勝手次第

一學問所子供壹人同下番壹人道場の相詰る但總教被參候節計下番は老中三役を爲案内五日之間日々出す

一總教出席之節は目付爲同道宅の下目付召連相越往返共下目付先立

一御覽之節は三役御跡に付道場の参り別出所之口より上り刀取奉行は御覽上り檀より上る肝煎目付は常之見所之上る

一御覽之節座配圖面之通

一名簿相初候前例之手續を以差出候事

一始終共奉行より御直に申上る

一御覽之節は分附帳は相濟候と奉行より御帳役を以る但見分之節は奉行より老中に出す

一師範御禮奉行御取合

一奉行同道師範初相手之面々間の間御殿に罷出御取次を以御禮申上る但行者之面々傳授相濟候上にて奉行師範同道にて間之間に罷出御禮申上る

一五日之間分附帳美濃紙に認取揃師範より目付に差出候間三役一見之上御帳役を以入御覽尤御在邑に無之節は老中に入披見下り次第學問所目付預り置

三役諸藝見分

一肩様數射刀槍遣ひ砲術數打之類來る何日有之趣師範々々より奉行目付之内に申出候は、當日三役平服にて始中終と申様に申合壹人つゝ出席尤膝代りに不及

一分附勝負附當日間に合兼候は、翌日師範より目付に差出御老中に入披見御在邑中は御帳役を以入御覽下り候は、學問所目付預り置

之事故勉て不成は無餘儀事に候得共不勉して不成に安るはみつから棄るのみならず兼て被仰出候御趣意に相背御奉公等閑之筋にて思召にも不相叶候學問は御政教之第一にて深く御内慮を被爲勞厚御世話も有之處此上彌不精勤之者有之候は、不得止事嚴重之御沙汰も可有之に付相成丈けは師役之者厚致教諭御趣意心得違之者無之様欠席之補講讀之定左之通

一私用稽古等之申立にて表會三度打續欠席不相成候事但無據趣意相立候得は時宜に寄不苦候病氣其外無據差合にて三度以上欠席相成候は、組合正授讀迄其趣意相達可申事

一公私用向病氣差合等にて表會欠席候は、會刻前相斷可申等に候得共差支之筋有之斷及延引候は、其日之内出席之正授讀を相斷可申事但受業者可成丈會刻前に相揃教授は勿論師役出席を待請可申事

一表會は正授讀壹人つゝ出席斷有無相改若無斷欠席之者有之候は、出席之正授讀より翌日翌々日之内素讀日罷出補講可致旨申談出席候は、教授付教都講之内にて承り可申事(詩文會之儀も兼て御定有之事故右に准可申事)

一一ヶ月五六度之席數に欠候もの有之候は、月末に至り正授讀にて相改組合正授讀より被仰出の席數に滿候迄翌月素讀日々に罷出可致補講旨申談出席候は、教授付教都講之内にて承り可申事

一學生は大凡佐授讀に准一ヶ月三四度は輪講或は別會に成とも急度罷出可申候尤一ヶ月三四度之席數に欠候者有之候は、月末に至り正授讀にて取調補講之儀佐授讀同様之事但會日無據差合有之候節は其會頭を相斷可申候表會に

罷出候者は出席之正授讀を相斷可申候依之欠席簿佐授讀同様取立可申候尤日勤御用多之者は差別可有之事一牛長も大凡學生に准一ヶ月三四度は素讀講別會素讀會成とも急度罷出可申候尤生長は素讀生中之役特に候故組合

引立之趣意相合自分先立素讀致出精は勿論表會にも罷出可申候其餘別會の出候儀は心次第諸會一ヶ月三四度之席數に欠候は、正授讀にて取調佐授讀學生に准し補講補讀之事但會日差合有之候節は其會頭を相斷可申候表會へ罷

出候者は出席正授讀を相斷可申候依て欠席簿學生同様取立可申事右は此度出席之會別帳取調置候間輪講或は別會之内へ御定之席數不欠様可被致出席候尤諸會出精之者は右會に罷出

候儀勝手次第之事

一壹々年總席數改之上前年闕席之補講讀之定左之通

一前年之内三十日以上無故素讀欠席之者有之候は、吟味之上復讀被仰付候事

正月開業後より定迄之内復讀日數三十日但自辰至午 右書冊之多少に拘らす二時を限とす但奇日は授業は復讀人數

右何れも十月晦日限り其向々差出可申事但組配下之者は十月十五日迄に頭支配可差出事

兩庠之諸生は其庠教授都講正授讀六藝演武小場師範員長引立役等之心得都て前書に准總管に封中にて書上爲差出總管披見之上尙又遂吟味手分存念之趣は別封にいたし相添奉行に差越可申事

右は人才撰舉之書上に付面々管人毎に自分存念之趣相撰封中にいたし差出可申其上を奉行篤と遂吟味才能行狀勝れしもの致拔萃掛り御年寄に差出尤諸向より之書上も不殘入披見候事

右之通御心得隔年御定之月日迄に拙者共迄御差出可被成候以上

天保十一庚子十一月

吉見治右衛門、金井七右衛門

補闕講讀之制

一諸生輪講に罷出候程之者は一ヶ月諸會少くも五六席以上急度罷出可申若席數不足之節は引立役同道右席數補講之事

一素讀生是迄は十日に一度月に三度つゝ罷出候得は補讀不及候處向後十日に一度之制に不拘一月少くも五六席以上

急度罷出可申若不足之節は引立役同道右席數補讀之事

右之通被仰出有之候に付異同も御坐候間此々條を以御評儀之上書加申度奉存候

望月清右衛門

一御試試業割合左之通○二月 溫故堂素讀二度 兩塾素讀二度○三月 兩塾禮節一度 禮節所一度 溫故堂講釋三

度○五月 溫故堂講釋一度 書學所一度 兩塾書學一度○六月 長沼流一度○七月 數學一度○八月 溫故堂講

釋二度 醫學、蘭學素讀講釋一度○九月 音樂所壹度

右之通定月立置故障有之節は線合可申候其都度々々日限奉行より相伺候事但試業之日限伺相濟候は、奉行より肝煎目付月番致案内目付月番より其向教授師範員長に佐授讀以上諸會月々五六席位は急度致出席候様兼て被仰出且又表會欠席簿有之無斷欠席不相成被定置候處御定之席數出席不致ものも有之或は幾度も無斷不罷出者も有之畢竟御主意不相辨故に候抑文武藝術は其身才德成就之修行ある事は勿論就中學問は衆藝の元にて第一人倫之道を磨き日用常行之儀にて人たるもの終身之業に有之殊に御在所は江戸表と違年若之面々差したる御奉公向も無之候故文武藝術之修行は則今日之御奉公にて別て書院中は御殿向御番所向同様に被相定候上は溫故堂御修行罷出候儀は御番所向に出勤いたし候と同様たるべきとの御主意に有之候處只一己之修行どのみ存候は心得違之事に候才不才は人々生質も有

十二員、三校各四員 生長若干人

第一條 五校共ニ素讀每朝辰牌ニ起リ午牌ニ終ル毎月三次放學^{定期}○第二條 長以下毎日出席業ヲ授クヘシ○第三

條 授業ノ法句讀明了音訓批繆ナク受業生チシテ熟讀自得シ咿唔含糊ナラシメサルヲ要ス最モ其越科躁進スルヲ

要セス○第四條 長以下ハ生徒ヲ適宜ニ分配シテ常ニ業ヲ授クヘシ又生徒ノ中業ノ進ミタル者^{即生}一兩人宛ナ長

以下ニ分屬シ之レヲ大學論語幼生ノ授業ヲ助ケシムヘシ○第五條 長以下事故アリテ數日間闕席スル一員ナレ

ハ長以下其生徒ヲ分配シテ之レヲ授業ス二員以上ナレハ館生徒ヲ遣リテ之レヲ補助セシムヘシ 臨時闕席ハ二人

以上ニ過クルト雖ハ一員闕席ノ例ニ依ル 遣ル所ノ生徒五日以上ニ連ル者歲終ニ至リ功ヲ商リテ勞ヲ賞ス

小學生七年ノ數ヲ大略六課三等ニ分ツ

六課 八歲入學ノ正月ヨリ同十二月迄大學卒業 爲初課○九歲正月ヨリ十歲六月迄論語卒業 爲第二課○十歲七月

ヨリ十一歲十二月迄孟子中庸卒業 爲第三課○十三歲正月ヨリ同十二月迄易書卒業 爲第四課○十三歲正月ヨリ同

十二月迄詩禮卒業 爲第五課○十四歲正月ヨリ同十二月迄春秋左氏傳卒業 爲終課

三等 課與歲相當ル者(八歲ニテ大學卒業スル者ノ若キ) 爲中等○課歲ヨリ上ル者(八歲ニテ論孟以上ヲ讀ム者ノ

若キ) 爲上等○課歲ヨリ下ル者(九歲ニテ大學ヲ卒ヘス十四歲ニテ詩禮等ノ課ニ在ル者ノ若キ) 爲下等

試^{有月試} 月試^{稱內} 每月一次^{定期} 長以下ニテ試之○春秋試^{單稱} 每歲二次^{期在釋奠前後} 知事公或ハ正權大參事臨學試之即日行賞

試法 在初課者ハ卒業以下ノ章句ヲ全ク背誦セシムルアリ或ハ其内一二處ヲ溫習セシムルアリ 在第二課以上者卒

業以下ノ書二三處四五處六七處課業ノ次第ニヨリ背誦セシムルアリ溫習セシムルアリ其試ムル處ノ篇章預シメ之レ

カ處所ヲ定メス臨試卷ヲ披テ之レニ處所ヲ指命ス 試法如此ト雖ハ八歲ヨリ十歲迄ハ月試ノミニシテ試業ハ無之席

數ニ應シ行賞

試科分三等 咿唔明亮音訓無批繆者爲上等○咿唔雖不太明了音訓無批繆者爲中等^{以上二科} 準等行賞○咿唔含糊音訓多批繆者爲

下等賞不及

一授讀以下其常ニ授業スル所ノ生徒春秋二試共ニ上等科ニ入ル者多キ時ハ賞モ亦其授讀以下ニ及フ下等科ニ入ル者

多キ時ハ其授讀以下ヲ罷ム

一書學生七歲ヨリ十歲迄ハ從前之通一ヶ月三度ツ、清書ヲ爲サシメ試業ナク席數ニ應シ行賞

一十一歲ヨリ十四歲迄ヲ三等ニ分ツ十一歲十二歲一等、十三歲一等、十四歲一等、右之内ニテ毎等上中下之分ヲ定

之多少に應じ出席付教都講正授讀申合壹人つゝ可致出席事

一復讀之節同席之引立世話役之内申合壹人つゝ同道其日卒業迄相詰可申事但初學之者は生長之内申合壹人つゝ同道之事

一復讀中頭支配并掛引立世話役之内申合壹人つゝ毎日出席學問所目付毎日見廻り可申事

一三十日之内病氣其外引込等の節は出勤次第日數相勤可申事

一復讀中二ノ丸當番に候は、書前御用引被成下候間其段頭支配に相達可申事

一右復讀相濟又候其年も無故三十日以上之欠席有之候は、翌年春秋兩度三十日つゝ復讀被仰付都合三ヶ年五度之復讀に及候ト彌學業難致成就器に候ハ、其節退學可被仰付事但貳拾四歳以下之者は右度數に拘らず年齡滿候迄年々兩度つゝ復讀被仰付候事

一前年之内三十日以上無故諸會欠席之者有之候は、吟咏之上補講被仰付候事

正月開業後より二月迄之内補講日數十五日但雙日自辰午迄之内

右小學四書之内前日章割を受置致補講教授付教都講之内可承事

一補講之節同席之引立世話役之内同道復讀同様之事

一補講中頭支配并引立世話役學問所目付出席見廻等復讀同様之事

一補講中病氣其外引込當番等の儀復讀同様之事

一右補講相濟又候其年も無故三十日以上之欠席有之候は、翌年春秋兩度十五日つゝ補講被仰付都合三ヶ年五度補講之上退學被仰付候儀復讀同様之事但二十四歳以下之者は右度數に拘らず年齡滿候迄年々兩度つゝ補講被仰付候事右之通學業半途にて退學之上は兼て被仰出候儀も有之に付趣意により夫々御沙汰等も可有之猶退々被仰出候事

天保十一庚子年六月

五校素讀書學生教育之規

一藩學ハ人材ヲ成育スルノ地ナリ教官ノ外舍長學生長授讀授讀佐等ノ名目アレハ畢竟皆修業中分課ノ名迄ニシテ他曹ノ某官某職ノ到底之レヲ以テ正務ト爲ス者トヤ、殊ナリ故ニ某課ヲ以テ已レノ修業ト心得ヘシ

一五校生徒ノ教育最モ先ツ心ヲ盡スヘシ其責長授讀以下ニアリ今其員額ヲ定メテ之レニ課ヲ授ク

長五人 東西校、三校各一員 授讀七人 東西校各二員、三校各一員（校不必置） 授讀佐三十二人 西八員、東

四年一小考稱小考期在第五年仲春釋奠前後拔其課全終者藩學權少參事考之

考法三等 歷代ノ大眼目四五條ヲ問ヒ並ニ華本數葉ヲ讀マシム

對得二以上讀史無謬誤者爲上等對得三以上讀史無太謬誤者爲中等以上準等行賞 對得一若不得一讀史多謬誤者爲下等褫其職下課

右一小考ト爲ス此法本ト一藩子弟ノ才不才ヲ問ハス弱冠ノ比ロ迄ニ和漢古今ノ大略漢文字ヲ讀方運用ヲ一ト通リ知ラシムル迄ノ法ニ之レヲ以テ儒者學者ト稱スルニ非ス是レ才智ヲ啓發ノ學ニ進マシムルノ發軔ナリ此考ヲ經テ以テ往館ヲ去テ他曹ニ之ク者アリ留テ三科ノ業ニ就ク者アリ特ニ修業ヲ命スル者アリ其業ニ就ク者ハ經科ヲ以テ三科ノ本トナス其所謂經ハ道德ノ大義ヲ了得スルニ在リテ理窟勃率僻說陋解明清諸儒ノ紛紜愁訴ヲ覆案スル如キヲ欲セス

中考三科次 三年一考

史科 左史兩漢書尚部通鑑○詩文科 讀唐宋明清諸家詩文學之○經科 學庸論孟○傍ヲ西洋譯書博物新篇地球說略植物學萬國公法等採ヲ讀ムヘシ經科ハ本ダリト雖ハ容易讀得ヘキニ非ス識ヲ立テ見ヲ廣ムル史ニ如クハナシ詩文ハ概ノ末枝ト稱スレヒ其說經確史詩文ノ力コ資ルニ非レハ卒ニ拗執迂僻ノ弊ヲ免レ難シ故今立科史居首詩文次之經又次之

實業ノ法生徒各置一小冊子名曰課業日簿凡ソ館登降ノ時刻寄宿寮ヨリ一日卒ル所ノ業某月日某牌登降若出入講了某經某篇內幾若未成等ヲ備悉明詳簿上ニ記載シ漢文之毎間五日教授以下教官ニ就テ考ヲ受ケ因テ疑義ヲ質シ辨書詩文ノ剛正ヲ乞フヘシ月終更ニ課ヲ比考ノ之レヲ評品ス 經若干章史七八冊文二三篇詩三四篇以上ヲ準トナス 品目有五 高足、日進、勤學、遊惰同寮同課者痛責之擯斥放曠一月者此目專爲寄宿生徒設 品目ヲ木牌上ニ書シ繫ルニ姓名ヲ以テノ楣上ニ掲クルヲ一月若クハ半月

三年一中考稱中考期在第四年仲春釋奠前後拔其課完終者知事公若正權大參事臨學考之

考法 經科 講說一座、辨書一道、並附所見餘論○史科 策問一道、議論據經斷定附已所見○詩文科 文一篇五百字以上者詩

一篇五七言古風二十句以上者若佳體 考後賞罰ヲ行フ小考ニ同シ

右一中考ト爲ス亦之レヲ以テ業ノ成ル者トナスニアラス且ラク其力ヲ三科ニ涵養セシメ一ハ以テ偏枯ノ患ヲ防キ一ハ以テ其才ノ赴ク所ヲ驗シテ略其形質ヲ爲サシムルノミ此ヲ經テ以往小考ノ如シ其留テ業ヲ修ル者兼科者アリ專科

一十一歲十二歲ハ和牘并三字經千字文之類ヲ學ハシム

一十三歲十四歲ハ和牘并詩古文ノ類ヲ學ハシム右定置ク等級之内三季一度ツ、教師員長ニテ試之

試方 等級ニ寄リ字數ヲ定メ讀方ヲ傳ヘ諳誦セシムル事凡十餘日ニシテ試ミ藩學ニ可差出事
一書學生試業年ニ一度試方前ニ同シ

於藩學知事公正權大參事ノ中臨席即日行賞

明治三年庚午十月

温故堂生徒教育之規 十五歲ヨリ二十四歲マテ周十年ヲ大略三考ニ別テ業ヲ責ルノ法

一小考 自十五歲正月至十八歲十二月周四年 就中定三等課

一中考 自十九歲正月至二十二歲十二月周三年 就中立三課

一大考 自二十三歲正月至二十四歲十二月周三年 仍中考加律爲四科

小考三課次第

初等課 自十五歲正月至十八歲十二月周一年 熟讀史漢 右毎日學生長一員登館午前二字間生徒ヲ會メ之ニ授業ス午後及ヒ夜同課生相會

メ温習肄業ス 授業ノ法塾校生徒授業ノ法ノ如クニ一日大凡幾葉ト定メ文字ノ順逆及ヒ殊異譬ハ有在亦又謂人人謂等ノ若キ略之レ

ヲノ領會セシムヘシ

中等課 讀三史略日本外史政記之類 右毎夜學生長一員登館二字間生徒ヲ會メ之レニ授業ス午後同課生相會ノ温習

肄業ス 授業ノ法其讀ム所ノ書ヲ執テ大意ヲ講說シ務テ煩蕪ヲ去リ要領ヲ得セシムルヲ要ス講後或ハ時ニ之レヲ復

講セシメ生徒ヲ警策スル處アラシムヘシ 毎月三次第三ノ日午後都講一員登館之レカ爲メニ小學ヲ講ス

終等課 自十七歲正月至十八歲十二月周二年 讀大日本史易知錄等之類 右毎日都講一員登館午後二字間生徒ヲ會メ之レニ授業ス 授業ノ法

問ニ答ルアリ問ヲ發スルアリ疑義ヲ釋キ繆誤ヲ辨シ歷代ノ大沿革一世ノ興亡粗記得ノ漢文字ノ讀方運用大誤無

ラシムルニ至ルヲ要ス 毎月三次五ノ日午後第二字ヨリ教授副教ノ中一員登館之レカ爲メニ論孟等ヲ講ス

每歲一次考課稱内期在仲秋釋奠前後藩學權少參事考之

在初等課者會讀○在中等課者講說○在終等課者把所卒業之書問難或令讀華本數葉 此外傍ラニ保元平治物語、盛衰

記太平記等ヲ讀ムヘシ

一下宿月限五日 五日ヲ過クル者一ト先歸寮シ又乞フ病氣保養ハ五十日ヲ限ル五十日滿テ不快者其趣意ヲ舍長ヘ申達シ再ヒ乞フ百日ニ滿テ快ラサル者ハ一旦退寮スヘシ

生徒議スル所ノ内會左ノ如シ 詩文^{朔日} 文章軌範^{五日十日廿日廿五日} 但夜第六字ニ始マリ九字ニ終ル九字ヨリ十一字ニ至ルマテ經史討論ノ事

一席上詩文ハ其翌日ヨリ第三日目ノ朝マテニ舍長ヘ差出シ申ヘキ事但宿題詩文ハ其當夜マテニ差シ出シ申ヘキ事

一席上宿題詩文トモ一旦舍長ノ評ヲ經テ尙又推敲月終教授ヘ差出シ申ヘキ事
直日生ハ入口脇ノ寮ヘ毎日輪直當日ノ取次諸役事等取扱申ヘキ事

一月課ハ別ニ定マリナシ大抵文一二篇詩三四首經辨書書上ノ上ヘ三葉以上史七八卷以上ト相心得ヘキ事

書生寮規約

一每晨卯ノ刻ヨリ登館毎夜亥ノ刻罷業降館

一長幼ノ序亂ル可カラサルハ勿論ニ候ヘ凡學業相慕リ候者ハ幼者ト雖凡敬ヒ申ヘク乍併幼者己ノ業ニ誇リ敬チ長者ニ失フ可カラサル事

一直日生ハ生徒相ヒ議シテ輪直スヘシ

一講堂及ヒ各寮務メテ整飾ナラシメ常ニ潔淨ヲ加ヘ凡席縱橫書冊亂錯烟器茶甌敢テ紛糝ヲ致スヲ許サス又々異色間雜人等輒ク入ルヲ許サス又々酗酒狂歌減否人物及ヒ淫褻戲慢ノ談ヲ爲スヲ許サス

一學業ノ暇打チ寄り茶ヲ吃シ談論イダシ候事倦屈ヲ慰ムルノ一助而已ナラス學問上ノ話等都テ多聞ノ益ニモ相成リ朋友講習ノ義ニモ相叶ヒ候ヘ凡勉強者ノ妨ケニ相成リ候ハ以ノ外ノ事ニ付晝夜一字間ヲ限リ候事但午後自第一字至第二字夜自第七字至第八字

局中規約

一教授副教及都講間五日毎ニ登館課業日簿ヲ收テ課ヲ攷スヘシ

一都講ハ科ヲ別テ業ヲ授クヘシ

一舍長ハ寄宿寮一切ノ事學生長ハ諸生寮一切ノ事ヲ管ス時々列舍或ハ寮中ヲ循視シ業ヲ警ムヘシ

一授讀以下ハ學生長之レヲ指揮スヘシ 五校生徒授業ノ事ハ校長之レヲ指揮ス

者アリ各其赴ク所ニ從テ其才ヲ成サシメ三年ヲ經テ又一考ス之レヲ大考ト謂フ

大考四科

史科○詩文科○經科○律科未備○傍ラ格物入門令義解職原鈔等杯ヲ讀ムヘシ
實課考法並ニ中考ノ如クニシ之レヲ斟酌スルノミ

明治三年庚午閏十月

寄宿寮諸生寮并教官規約

寄宿寮規約

一寄宿寮ハ藩學ノ學舍ナリ看テ從前ノ私塾ノ如キ勿レ

一舍長二人舍中一切ノ事ヲ管ス直日生一人之レヲ助ケ諸生寮亦然ルヘシ 直日生ハ生徒相議ノ毎日輪直ス

一中考以上ヲ經ル者ニ非レハ敢テ寄宿スルヲ許サス 現今在寮者及ヒ他邦遠方ノ者此ノ限ニアラス

一在寮年期ハ三年ヲ一限トナシ限滿テ又々乞フ 現今在寮者來未年正月ヲ以テ限ノ始トス

一寄宿願ハ舍長ヘ申込舍長ヨリ教授ヘ申出スヘキ事

一寄宿寮諸生寮ノ別無カルヘカラス故ニ寄宿生ハ朝夕家ニ就テ寢食スルヲ許サス

一兩寮生徒ノ別アリト雖モ業ヲ賣ルニ至テハ異ナルヲ無シ今兩寮ヲ併合シ同一課中ニ就テ之レヲ責ム 寄宿生ハ課

ノ高下ヲ問ハス皆日簿ヲ置キ每朝孜ヲ舍長ニ受ク

一一月ニ六次輪講詩文討論ノ會ヲ受クヘシ 下ニ詳ナリ

一課罷ミ游息心ニ從フヘシト雖モ舍中ニ在ツテ擊劒角力等ノ事ヲ禁ス 此時間舍庭ニ下リテ身體ヲ運動スルハ深ク

之ヲ咎メス

一毎夜子刻ヲ限リ罷業安ニ就キ點燈旦ニ達スルヲ許サス

一他行ノ限 遠方ハ願ノ上タルヘシ 一日(月二次) 半日(月九次) 晚餐後散步ハ此ノ限ニアラスト雖モ點燈前歸

寮スヘシ

一嚴禁夜行犯者置直日一月 事故アル者委細ヲ舍長ニ申達シ戌刻ヲ限リ歸寮スヘシ遲刻スル時ハ出先ヨリ手紙ヲ以テ委

細ノ趣意ヲ舍長ニ申送ルヘシ

一嚴禁飲食肆店 一犯ハ逼塞三十日逼塞中相應ノ課ヲ與ヘ後試之 再犯ハ擯斥其有職者併褫職

辨ノ課ハ暫ク除キ諸家通例ノ教則等ニ倣テ左ノ等級課業ヲ決定スル者ナリ

初級 連綴ノ書ウエブス
トル著述 會話ノ書ハントナルベ
ル著述 理學初歩 右素讀濟ミ且數學ハ加減乘除卒業ノ事但數學ヲ課中ニ加

ルハ泰西一般ノ風習ニテ諸學ヲ實用ニ屬セシムルノ主意ナレハ洋學ヲ修ムル者ハ必ス其教官ニ就テ學フヘキ事

二級 文典モルレー、ビデナ、ク
ワツケンボス著述 地理書コルネ
ル著述 右素讀濟ミ且數學ハ分數比例ヲ卒業ノ事但此級ニ於テ漸ク讀書ノ大意ヲ

得ヘシ爰ニ於テ始メテ辭書ニ因リ獨見ノ修業致スヘキ事

三級 文典 萬國歷史ベートルバ
一著述 萬物究理書クラツケン
ボス著述 右素讀ハ勿論會讀濟ミ且數學開平開立ヲ卒業ノ事但此級ニ

在テハ重ニ獨見致シ會讀ノ節ハ意味一通リ貫通ノ上出席致スヘキ事

四級 亞米利加國史タワツケン
ボス著述 英國史グロドリ
ツチ著述 法國史 右獨見講義致スヘシ且數學ハ幾何學卒業ノ事

右ノ如ク初級ヨリ四級ヲ經ルハ凡ソ三ヶ年ヲ費スヘシ然ル時ハ粗普通ノ課業ニ通シ其後チ各方向ヲ定メ專門ノ學ニ

志シ府下學校ニ入ルヘキ事

日課

連綴ノ書 會話ノ書素讀（授讀佐） 文典 地理書 每朝第九字ヨリ十二字ニ至ル○地理書 萬國史素讀（副教） 究

理書 每朝第九字ヨリ十二字ニ至ル○文典會讀（授讀佐） 二七之日午後第一字ヨリ三字ニ至ル○萬國史會讀（副教）

三八之日午後第一字ヨリ三字ニ至ル○萬物究理書會讀（副教） 四九之日右同斷○各國歷史會讀（副教） 五十之日右同

斷

右ノ外生徒日夜勉強シ疑ヒノ廉アル時ハ之ヲ先輩ニ質スヘシ但シ博文堂ハ教官ノ員數モ不足ニ付三級以上ノ生徒ハ

初級二級ノ者ノ質問ニ答ヘ或ハ素讀ヲ傳ルノ儀更ニ謙退辭讓スルニ及ハス互ニ切磋督責スヘシ其上餘力アル者ハ雜

書ヲ獨見シ時々翻譯ヲ試ミ博文堂教官ニ就テ原書ノ本義ヲ失ハサルヤ否ヲ問ヒ溫故堂教官ニ就テ文體ノ巧拙ヲ質ス

ヘキ事

一試業春秋
兩度 右試業ノ節初級二級ノ者ハ各持前ノ書教官ノ命スル所ヲ素讀スヘシ三級四級ノ者ハ之ヲ講義致スヘシ

教官其優劣ヲ察シ等級ヲ進退スヘキ事但シ等級ノ進退ハ必ス兩度ノ試業已ニ拘ラス平日教官ノ見識ヲ以テ進退ス

ルモアルヘシ

一入門入舍入寮ノ式舍中寮内ノ規則書籍出納油炭請取方等ノ儀ハ總テ溫故堂紀律ニ從フヘキ事

一休日一六
之日 右休課ノ日ト雖モ堂ニ出テ讀書スルヲ苦シカラサル事

一 授讀ハ塾校長ノ副ナリ最モ宜ク心ヲ同ノ違忤アルヘカラス

一 授讀佐ハ小致中課以上ノ者ヨリ選擇スヘシ臨時塾校ヘ遣ル生徒モ亦然ルヘシ

一 兩寮生徒ヲ鞭策スルハ勿論登降游息起居動止極メテ閑雅齊頓ヲ要ス其責メ舍長學生長ニアリ

一 授讀以下病氣引籠ハ學生長ヘ案内スヘシ

一 生徒中剛愎不遜ナル者頑強不奉命モノ有爲所使比黨ヲ爲ス者等ハ舍長學生長ヨリ直ニ參事或ハ大屬ニ彈劾スルヲ

許スヘシ

入學并寄宿入寮ノ節教授エノ届向後左ノ通り楷書ニテ認之貳枚ツ、差出シ可申事

半紙堅四寸幅壹寸

兩塾三校并
東京邸學生

年號干支月日入學

住處

父兄名當主ハ之ヲ省ク

姓俗稱實名

年 齡

他藩人

某 藩

年、入學或ハ入寮

引請人姓名

姓、年、

東京邸學生ハ邸學生ト書ス

年、入學或ハ入寮

住他所百姓町人ハ住所ノ上
ヘ某藩或某縣管内ト書ス

父

姓、年、

寄宿入寮

年、入寮

某 課

姓、年、

塾校生徒ニ
無之者并百
姓町人

他所百姓町人ハ現在誰塾或寄寓ト書ス

博文堂教律

一去未年温故堂博文堂合併セシヨリ學風爰ニ一變シ士子専ラ和漢及ヒ洋學算術等ニ心志ヲ注キ更ニ頑僻固陋ノ論ナク只管ヲ勤學勉勵シ弘ク天真著實ノ理ヲ極メ一科専門ノ業ヲ學ヒ將ニ國家ノ用ニ利センヲ要スルノ外他念ナシ豈亦至公ナラスヤ然リト雖凡天下未タ一定ノ學制成ラス當縣學モ總テ温故堂從前ノ規律ニ從フヘキノ命アレバ獨リ洋學ノ授業ニ至リテハ自ラ異同アリ因テ今假ニ小學ノ順序ヲ設ケ暫ク之ヲ守ルヘキ事

一方今日新開化ノ際府下諸學校ノ如キハ公私共外國教師ヲ雇ヒ専ラ語學通辨ヲ習ヒ文章手續ヲ作ルヲ勤ム是實ニ活用ノ修業ナルヘシ縣學ハ未タ此期ヲ得ス當ニ讀書講習ヲ專ラシ文義ノ了解スルヲ以テ主トナス故ニ此作文通

弘化二乙巳年三月

潮田儀太夫、澁井平左衛門

舊古河藩

舊古河藩學制沿革藩立學校其他取調之儀御照會ニ付左之通

一生徒學業上進之者ハ教授人申立ニ依リ金貳百疋以上賞與致シ家業ニ致候者ノ長男他ハ入塾致シ年頃相成候得ハ修行扶持貳人口ヨリ五人口迄適宜ニ給與致シ候

一生徒各自ノ意向ニ任セ修學爲致候講義聽聞ノ義ハ藩士卒共老若ヲ不論出席ノ儀毎ニ論達致シ候

一農商ノ者藩立學校ハ入學爲致候事無之又學事ニ從事ヲ禁止スル廢モ無之

一家塾寺子屋開設自由ニ任セ候

一藩立學校盈科堂ト唱設立以來名稱變更無之

一校舍享保八年七月肥前國松浦郡唐津城主三郎城内二ノ丸ニ始テ建設寶曆十二年九月下總國古河城所替已來古河城内櫻

町ハ取立年月不相分其後大手門前片町ハ引移廢藩新縣ハ引渡迄存在候

一右學校創立ノ義ハ八代前從五位土井利實代ニテ佐藤五郎左衛門直方門人稻葉十左衛門（訛傳）儒學ニテ召抱同治左衛門（訛傳）云

次ニ其後千葉茂左衛門（訛傳）原三右衛門（訛傳）等召抱何モ貳百石其後ハ藩士之内ニテ教授世話等ノ名目ニテ廢藩迄接續致シ

候但槍劔其他武藝ノ義ハ別ニ教場不設教授致シ候者邸宅ニテ從來稽古爲致候處安政年中諸流打混稽古致候様改革致シ

盈科堂續地所ハ教武場ト唱稽古所取立一藩稽古爲致候

一入學年齡定規無之春秋ニハ文武共見分致シ候在江戸ノ節ハ執政職ノ者ニテ見分致シ甲乙ニ隨生徒ハ筆墨紙ノ類賞與致

シ候入學ノ節師範家ハ同禮スル事無之各自ノ見込ニテ教員宅ハ相越修學スルモ適意候

一學校事務ハ舊藩目付役之者ニテ取扱候定規ニテ別ニ係員無之候處御一新後藩制改革ニテ主務之者壹人有之事務取扱

候

一教員定員無之五六名充ニ候

一生徒寄宿無之通學ニ候生徒員數ハ不相分候

一束脩謝義無之教員之者持録ニテ退切教授致候事右俸給別ニ給與不致候

一一周年學費不相分藩士ハ賦課スル事無之

申七月

博文堂副教

成德書院へ寄附判物

下總國印旛郡佐倉領分之内高千七百石事爲成德書院領寄附之訖全可有收納者也仍如件

弘化二乙巳年二月三日

佐倉侍從紀正篤

江戸書院右同斷にて高千石也略之

覺

一今度就成德書院領高千七百石被寄附之爲右收納之料金四千二百五十拾兩及下總國印旛郡下志津村畔田村之内新林三箇所被下之候事但新林町步別紙圖而載之事

一金子は御勝手之預置年一割之息金四百二十五兩宛書院内外之入費ニ可充事

一新林は後年上木御拂に取計右代金積置往々江戸佐倉聖廟講堂及諸道場修補之料は勿論其他之入費にも可充事
右學問所奉行肝煎輩之學問所目付立合永々書院廢絶無之様依仰條々如件

弘化二乙巳年三月三日

倉次甚太夫、由比安兵衛、香宗我部隼人、池浦

甚五左衛門、渡邊彌一兵衛、植松求馬

岩瀧傳兵衛殿、吉見治右衛門殿、向藤左衛門殿、大野舍人殿

平野郁太郎殿、平林庄右衛門殿、村山金太夫殿

覺（江戸邸ニ係ル分）

一今度成德書院領高千石被寄附之爲右收納之料金二千五百兩及末右同斷略

弘化二乙巳年三月三日

澁井平右衛門、潮田儀太夫

佐々木議部右衛門殿、福與倉右衛門殿、長尾平次兵衛殿、森村三平殿

一成德書院に被下金此度増之分去辰年來申年迄五ヶ年之内每暮金二百兩宛被下之御勝手之預元利積置終年に到金千二百五十兩高相渡可申候事

弘化二乙巳年三月

植松求馬、渡邊彌一兵衛、池浦甚五左衛門

香宗我部隼人、由比安兵衛、倉次甚太夫

一成德書院末同斷金千貳百二拾壹兩銀壹兩貳分高相渡可申候事

經科 詩書易春秋三禮等ハ不及申其餘濂洛四先生ノ書ヲ首トシ理學諸家ノ文集語錄等凡經義ヲ助ル書ハ其力ヲノ及フ所ヲ量リ序ヲ以テ可令研究候

史料 正史通鑑ノ外歷代制度沿革ヲ初メ總テ經濟有用ノコ力量次第博考可致候本朝ノ史傳律令格式等ハ勿論ノ事候

文科 議論叙事兩途共古文ヲ熟讀シ唐宋八大家ニ法ヲ取自家ノ才思相用實用ノ文章第一心掛可申其餘諸賦ノ類モ餘力有之候ハ、可爲心掛次第事

右三科ノ外遊息ノ暇諸子百家博大涉獵候ハ心掛次第タルヘシ候但稗官小說敗俗非聖ノ書ニ耽リ並新奇異說主張致候事固シ禁制候

講會規

一講會ノ日ハ定ノ時刻以前一同學館ヘ相揃可申候着坐ノ次第ハ世話役共ノ差圖ニ可隨候

一講會ノ席終不申間事ニ托シ座ヲ立并欠伸惰慢ノ體致間敷事

一會讀輪讀等ノ節先儒ノ說ニ基キ存念十分可有辨論尤新奇無稽ノ說主張致間敷事

一會集講論ノ義ハ互ニ益ヲ得候事第一ノ事ニ候得ハ我意ヲ挾勝事ヲ好候ハ堅致間敷候

一講書ノ事本書ノ義理ヲ説明シ候事ニ候得ハ經文ヲ精微ニ究置各其得所ヲ講候事ニ候辨舌ノ巧ヲ爭鄙語俚言ヲ交候事ハ致間敷候

一詩文會ノ砌字句聲律等難分事ハ心得有之者ヘ叩問可致候但無用ノ談ニ及他ノ構思ヲ妨候事ハ致間敷候

一講談會日他出不相成候無據子細有之ハ其旨世話役共ヘ相達可申候

文政七年甲申十一月

學規

一尊攘之大義ハ公儀屢特命モ有之且尊攘之神業ハ神典ニ顯着シ其精義入神ノ要至聖夫子是ヲ春秋ニ著ハシテ深切著明ナリ神典聖經相須テ大義之深奧可得而窺矣是ヲ政教百務大本トス

一夫子稻述之奧旨ハ七十子迭ニ傳述シ漢儒是ヲ傳フ是以テ講究ノ業一ニ漢唐注疏ヲ主トス宋以下ハ不取

一精義入神之事係傳ニ見タリ但道義ヲ修テ神ニ入ル事ヲ聞ク人道ヲ棄テ入神ヲ求ル是ヲ異端邪逕トス不可混糅

一學修之業ハ最初ニ最深キヲ要トス史傳雜說ヲ泛覽シ辨博ニ矜誇シ篤實ノ風ヲ不可失

一聖廟設置無之

一學校建坪不相分候

一學校ニテ出版セシ書籍無之

一明治二年月日不相分舟橋振太郎ト申者相雇^{月給四圓}英學教授爲致候處出席員モ少ク廢藩前解約イタシ候

一江戸上中下屋敷ニテ教授人宅ニテ藩中子弟ヘ敎示致候迄ニテ學校無之

右御省ニ於テ敎育ノ沿革史御編纂ニ付右資料御取調有之拙家藏書中舊藩立學校及舊領内一般學事ニ係ル舊記類御借覽有之度御掛合ニ付精々取調候得共記錄散失一切無之巨細ノ義不相分記憶之廉々及御答候享保度寛政度文政度先代盈科堂ヘ掲ケ置候額面寫相添御斷迄及御答候也

明治十六年八月廿四日

從五位土井利與

舊關宿藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達及ヒ學業上達ノ者ニ加役米授與セシメ屢ナリ書類存セサレハ詳記シカクシ

規制

一入學之者吟味ノ上領分内ノ者ハ百姓町人タリハ祭酒ヘ贊テ執リ弟子ノ禮ヲ修メ入學可相許事

一入學當日學中法制讀聞カセ只今迄修行ノ所相尋置可申候

一學館ハ本敎ノ地ニ候得ハ生徒ノ言行家中風俗ノ儀表タルヘキ事勿論候篤實退讓申迄モ無之禮儀ヲ專ニ相嗜假初ニモ遊惰驕傲妄誕虛華ノ習相愼可申候

一公義御制法當家祖先之法度大切ニ相守可申候

一公義御改革ハ不及申諸家ノ改革タリトモ妄ニ評論不可致事

一學問講究ノ外無益ノ雜談致間敷就中淫放猥褻ノ話並基將棋ハ尤制禁之事

一交友ノ際信義ヲ第一トシ長幼先後ノ序ヲ不失侮慢嘲戲無之樣可致候平日學問ノ事ニテ辨論反復ニ及候トモ無禮雜言堅致間敷事

一藝業ノ儀ハ才性ノ得手モ可有之候得ハ一途ニ限候事ハ無之候得共何科タリトモ必四書小學ヲ基本トシ精究可致候

學校

校名 教倫館

校舍所在地 舊關宿藩内字櫻町

沿革要略 文政年間久世廣運代創立天保度久世廣周繼業學範存之尤學校設立ニ盡力セシ人物ノ氏名行事又ハ該校ニ關係アル著名ナル學士氏名小傳等存セサレハ之ヲ記シ難シ

學範

此度學館取建候所以ハ自今以後我等モ各モ互ニ善ニ進ミ惡ヲ改メ各ハ誠忠節義相勵ミ我等モ恭敬誠實ヲ相嗜ミ君臣共ニ芳名盛蹟ヲ後代ニ傳フルハ平生學術ノ工夫ニアリ抑經學ハ國家ヲ經理シテ庶民ヲ愛育スルヲ本源トス當今ノ經學ハ章句ヲ徵引シ影ヲ捕ヘ風ヲ捉フル如キノ空談ニシテ或ハ風月ヲ諷詠シ詞章ニ沉淪シ富國強兵ノ事ハ廟堂上經濟ノ學ナリトテ經濟ト經學ト兩道ト心得喻ハ當今兵ヲ談スル軍學者流メ城取又ハ人衆推シ等ノ末藝ニミヲ講究シテ錢穀財用富國儲蓄ノ本源ニハ一向ニ外物ナリトテ講究セス何トテ民ノ心ヲ得ス錢穀ニ乏シクシテ兵ヲ行ル事半刻ナリ成リ可申ヤ古今聖賢ノ千言萬語皆此義ニ極ル事ニ候是ヲ要スルニ經濟兵學皆經學ニシテ兵食ヲ足シ人民ヲ愛育スルコソ經學ノ本據ナリ一章一句ノ末技ニテハ無之天子諸侯ヨリ卿大夫ニ至ルマテノ學ハ是ヲ治國平天下ニ施シテ一民モ時雍ノ化ニ沐浴セスト云コトナク皆不知不識ノ天ヲ戴テ太平無事ニ生育ササシムルノミ後世ノ學ハコレト異ニシテ格物知致ハ書ヲ講究シテ古今治亂君臣得失ヲ知ルコソ格物ニシテ至知ヲ致スモ是ヨリ立候然ルヲ一草一木ノ理ヲ知覺シテ鳶飛魚躍ト申セハ人心ノ活用ナルコト、心得候是等ハ聖賢ノ學ニ非ス唐宋以來禪理ニ迷溺スル者ノ譯モナク聖經ヲ割裂シテ自己ノ邪道ニ引入タル手段ニ候縱令此理有リテ學者ニ有リテハ然ル事モ可有之何ソ王公大人輔世長民ノ學ニ有リテハ一毫モ益ナク況ヤ萬々此教無キヤ畢竟ハ六祖惠能法師カ心ハ本來無一物何レノ所ニカ塵埃ヲ惹ント申ス邪旨學者ノ心腑ニ染ミ坐禪ノ名ヲ改メテ居敬靜坐ナト聖學ニ附シテ邪學ヲ粧飾スルノ類ナリ佛者ハ父子君臣ノ大倫ニ離レ窮山ノ中ニ枯坐シテ自己ノ本心ヲ觀シ即心即佛ニ申候聖教ハ五倫ノ外教ハ無之論語二十篇教ヲ說ヒテ心ノ善不善ハ論セス孟子放心ノ說ハ仁義ノ良心ヲ放ツコト無レトノ事ニ候故ニ曰ク人ノ禽獸ヲ違ルヲ遠カラスト是人モ禽獸モ四肢ノ運動心ノ喜怒哀樂嗜欲ハ一ナリ只禽獸ハ頑然無智ナルモノ故教ヲ受ル事ヲ知ラス人ハ性ノ善ナレハ教ヲ受ルノ良心アリ因テ萬物ノ靈凡ハ天地中和ノ氣ヲ得テ生ル、凡申候人心ハ聰明ナレト恃ムニ足ラス教

一講談會議ハ古義之深奥ヲ發揮スルヲ主トス蓄念十分ニ列陳シ迭ニ平心ニテ反覆討論ス可シ一槩之說ヲ立新見ヲ張リ子弟恭順ノ禮ヲ不可失

一詩文ハ昌黎韓氏一家ニ限リ修習之尤古詩長篇ヲ專シテ險韻險語ヲ作ルヲ旨トス平弱之習一ニ禁絶之蓋韓ヨリ以上ハ極メテ遠ク韓ヨリ以下ハ異端雜糅ス是以唯韓ヲ主トス奇冊新編ニ見聞ヲ奪ハレ兩端ヲ不可持

一平生之交誼ハ明白實意ヲ心掛ク何事忠節之道ヲ明辨シ一粒一飯ト雖君恩ノ深量成ル事ヲ可講究一無益之雜說ハ勿論苟モ商賈利得之談尤停止之

右之條々率先準的之盛意ヲ不失儻堅ク相心得俗儒學俗詩俗文俗書俗談凡世俗ニ靡カレ物事ニ牽レ自己之操守ヲ可失之件々一切嚴禁之

學則

一學問之大旨ハ彙恥ヲ明ニシ士之心術ヲ磨キ忠孝ヲ主トシテ臣子之常分ヲ盡スニアリ

一修業之次第ハ史ヨリ經ニ入ルヘシ經ハ本文ノ如シ史ハ釋ノ如シ史之治亂興廢成敗得失ヲ以テ聖賢ノ書語ニ照セハ事實判然銘々會得ニ於テ一ト際深切タルヘシ

一經義ハ漢注唐疏ヲ本トスヘシ但疑義於有之ハ宋以下諸說引用不苦候事

一此他入館之作法常式講習之心得等學頭揭示之趣違背致問敷候

明治三年庚午五月

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ヘ必ス入學セシム又各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學スルコトモ許セリ學校ヘ入學セ

サルハ許可セス藩費ヲ以テ他國ヘ遊學セシメ若クハ私費ノ遊學ヲ許可セリ士族卒共三十歲以上ハ學事ニ干與セス尤志次第也藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルヲ毎月兩度宛有之外ニ制ナシ

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシム尤藩立學校ヘ入學スルヲモ許可セリ農民等學事ニ從事スルヲ禁止セシメナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルモノ奉行郡宰里正ノ許可ヲ受ルナク又他ノ檢束ヲ受ケシヲナシ何人タリモ自由ニ開設シ來リシ故別段制度無之

右之外國藩學事上ノ事項ニシテ編史ノ資料及ヒ參考ニ供スヘキモノ無之

篤實ノ風ヲ不可失

一詩文ハ韓柳二家ニ本ツキ其他諸家ヲ折衷スヘシ徒ニ浮華軟弱ニ流ル、ノ弊習尤停止之

一平生ノ交誼ハ責善改過ヲ專ラトシ何事モ明白實意ヲ心掛ヘキ事

右之條件凡入此寮者先以テ精察體悉セン事ヲ要ス

素讀籍等級 初級 孝經、四書 中級 五經、左氏春秋、國語 上級 日本政記、史記、前後漢書

講義籍等級 初級 國史略、十八史略、孟子 中級 日本外史、左氏春秋、論語 上級 大日本史、毛詩、尙書

右階級ノ順序ヲ以テ講習勉勵先務タルヘシ尤餘力ヲ以テ級外子史籍類自己講習ハ禁ナシ

素讀生徒 朝五ツ時入館晝九ツ時ヲ限リ退館之事 初級素讀相濟候者ハ毎月二ノ日輪讀會出席可致且通塾差免候

事

通塾 朝五ツ時入館夕七ツ時ヲ限リ退館之事但刻限ノ外致勉學度族ハ晝夜共勝手次第 毎月六ノ日休暇 入館并退

館之節教官ヘ相斷可申事 公務並無據私用ニテ不參之節ハ當人出頭ノ上其旨趣教官ヘ相斷可申事但火急ノ公用ニテ

出頭ノ暇無之節ハ餘人ヲ以相斷不苦候

寄宿生徒 毎月六ノ日休暇下宿差免候事 毎日夕七ツ時ヨリ暮六ツ時迄外出差免候事但出入共教官ヘ相斷可申事

右之條件堅可相守者也

辛未五月

學科學規試驗法及ヒ諸則 漢學一科ヲ專修セリ其他兵學弓馬槍劍砲術游泳等ハ別ニ教場アリ算法筆道習禮等ハ各自意向

ニ任セリ何レモ學校ニ管セス且生徒學習ノ期限ハ八歲以上三十歲以下何々ノ課程ヲ了テ退學スルノ期ナシ每暮教員驗

査ノ上出精上達ノ者ヘ賞賜有差且ツ年々春秋ノ内藩主又ハ重役共遂聽聞出精上達ノ者ヘ賞賜セシヲアリ又十歲以下四

書十五歲以下五經素讀濟ノ者ハ取締見廻リ等立會ノ上教員一同驗査ヲ遂ケ書物料若干賞賜セリ但シ入學許可ヲ得シ者

ハ師範家ヘ回禮セシ仕來リナリ尤服ハ制ナシ

職名及ヒ俸祿

維新前 學校取締一名執政參政ノ内ヨリ兼 見廻リ一名監察ヨリ兼 儒者一名物頭格三十八人扶持 頭取二名或ハ三名 世話役四名或ハ五名 句讀

世話二名或ハ三名 助教無定員但儒官ノ外ハ諸役ヨリ出勤或ハ兼務ニ付役料扶持等ノ額且坐席身分取扱等ノ件一定

不仕尤每暮賞賜金有差

コソ肝要ナリト仰セラル、ナリ今心ト教トノ別ヲ云ハンニ書ヲ習ハントスルハ己カ此心ナリ弓馬鎗劍ヲ習ハントスルモ亦此心ナリ然レモ徒ニ自己ノ心ノ善ノミヲ觀シテ教ヲ勤メサレハ何トテ善書ノ人武藝ノ達人ト成リ可申ヤ是聖賢ノ心ヲ云ハスシテ教ヲ第一義トシ國家治教ニ施ントスルニハ心善不善ハ問フ所ニ非ス教ヲ先トスルハ自然心モ正シク成モノニ候故ニ仲虺ハ禮ヲ以テ心ヲ制スト孔子ハ博ク文ヲ學テ心ヲ約束スルニ禮ヲ以テスト顏回ハ我夫子ノ教ハ人ヲ誘ニ文ヲ以テシテ心ヲ約スルニ禮ヲ以テスト文學ト禮トハ教ニ候教立時ハ心自然ニ正シキヲ明白ナル事火ノ如クニ候三代ハ後世ノ如ク教ヲ棄テ靜坐シテ心ヲ觀スルノ教ハ無之此ノ義ハ聖人ノ第一義ニ候心ヲ求ルノ說ハ邪經ニシテ治國平天下ニ益ナキ事ト心得候時ハ聖人ノ道ハ破竹ノ如ク流通自在ナル者ニ候

文政六年癸未十一月十五日

右者廣運君被仰出候新談中ノ一條ナリ學館御取立ノ御趣意並平日御研精ノ御學術畢ク此中ニ備ハリ有之候因テ謹テ一通ヲ寫シ館中ニ所藏爲致候自今以後苟モ預教授ノ職候輩此御書ヲ以テ模範ト可成者也

天保十三年壬寅十一月十四日

廣周謹識

教則

定書ノ概略

- 一素讀生徒 每日朝五ツ時ヨリ但三八ノ日休
- 一素講釋 四書ノ内 毎月朔望晝八ツ時ヨリ但藩士出席
- 一内講釋 書籍前ニ全シ 同二三ノ日朝五ツ時ヨリ但四書素讀濟出席
- 一會讀 經史取交 同二七ノ日暮六ツ時ヨリ但教員其他懇望ノ輩出席
- 一輪講 書籍前ニ全シ 同四九ノ日暮六ツ時ヨリ但右全斷
- 一復讀 四書五經ノ内 同六ノ日暮六ツ時ヨリ但素讀生徒ノ内七八名宛更番
- 一詩文會 但教員其他懇望ノ輩出席

維新後改察記

- 一學修之業ハ尊 王之大義ヲ闡發シ天稟之才ヲ磨礱スルニアリ宜ク講堂揭示ノ學則ヲ大基本トシ史ヲ以テ經ニ羽翼セシメ百事實用ニ講究スルヲ要ス
- 一講筵會議ハ道義ノ深奥ヲ發揮スル所以ナリ互ニ蓄念ヲ列陳シ平心ヲ以テ反覆討論スヘシ一己ノ私見ヲ誇張シ恭順

學校

校名 學問所ト稱ス

校舍所在地 元江戸小石川藩邸内

沿革要畧 天保元年創立シ松平勝行時代ニ於テ儒學ヲ尊崇シ以テ學事ヲ擴張セシム

教則 四書五經及史記左傳文選ノ類ヲ授ケ教師一名ニテ四五名ノ生徒ニ素讀ヲ授ク朝五ツ時ヨリ始業正午九ツ時ニ終業ス毎日俗吏一名出席教授及生徒ノ出席ヲ記ス

學科學規試驗法諸規則 漢學算法筆道及兵學弓馬槍柔術砲術游泳等又生徒ニハ必ス文武兩道ヲ兼修セシム文學ト武術トヲ比スルニ四書ノ大義ニ通スルモノハ武術ノ免許以上ノ者ニ比ス又文學武術ノ一科ヲ專修スルヲ許可ス又春秋兩度ノ試驗ニハ其習學セシ所ヲ溫習セシム賞品ハ甲乙丙ノ三等ニ區別シ其賞品ヲ授與スルコト各等差アリ

職名及俸祿 學監教授世話役等ノ職名ヲ付シ各持高ニテ勤務セリ

職員概數 教員四人事務員一人門衛ナシ

生徒ノ概數 通學生徒平均三十名寄宿生徒無之且通學生徒ハ藩費ヲ以テ之ヲ支辨ス

束脩謝儀 無之

學校經費 一周年ノ學費ヲ米二十石ト定メ學費ニ充ルモノトス

藩主臨校 藩主臨校シテ講義ヲ聽問スルヲアリ

祭儀 別段施行セス

學校構造及建物圖面 地坪卅二坪 建坪二十坪

學校ニテ出版翻刻セシ書籍及藏書 無之

舊高岡藩

學制

學事上ノ諸則制度 藩主ノ布令等之レアリト雖モ學業上進ノ者ニ加役米又ハ引米等ノ名義ヲ以テ徵課セシ間接ノ祿稅ヲ免除スル如キ獎勵法等ノ事之レナク闊藩學事ノ狀況ヲ觀察スルニ足ル程ノ事項モ之レナキニ付併記セス

學制頒布前 少參事學校掛リ一名 年給拾五石二斗 大屬全一名 年給拾二石 教頭一名 月給金四圓 教授四名 月給金三圓宛 助教二名 月給金二圓宛

職員概數

維新前 教員十四五名 事務教員ノ内一名宛更番 定番門衛兼二名 小使一名

學制頒布前 教員七名 事務前ニ全シ 小使一名

生徒概數

維新前 百名内外 通學計リ

學制頒布前 五六十名 內寄宿生徒十四五名但自費ノ事

束脩謝儀

兩様共微品用之但維新後廢止

學校經費

高五拾石寄附學費ニ充テ不足ノ分ハ藩費ヲ以給セリ學校ニテハ會計ニ管セス

藩主臨校

毎月朔望講義ノ際不時臨校維新後ハ日々臨校生徒ト共ニ修學セリ

祭儀

聖廟ノ設置ナク講堂ニ於テ年々一度宛春秋ノ内丁日ヲ以テ釋奠執行ス尤維新前ヨリ此禮中絶法式等盡ク之ヲ失セリ

學校構造及建物圖面

地坪三百四十五坪 建坪七十一坪半

學校ニテ出版翻刻セシ書籍無之又藏書ノ種類部數ノ儀ハ去ル明治五年中印旛縣へ悉皆引渡シ扣無之ニ付取調方差支申候

舊多古藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令等之レアリト雖モ學業上進ノ者ニ加役米又ハ引米等ノ名義ヲ以テ徵課セシ間接ノ祿稅ヲ免

除スル如キ獎勵法等ノ事之レナシ且闔藩學事ノ狀況ヲ觀察スルニ足ル程ノ事項モ之レナキニ付併記セス

士族卒ノ子弟教育方法 大凡七八歳ヨリ各自ノ意向ニ任セ寺子屋等ニ於テ習字ノ修業ヲナサシメ十四五歳ニ至レハ必ス

藩立學校へ入學セシム又私費ヲ以テ游學セシメリ

平民子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシメ又志願ノモノハ藩立學校へ入學スルヲ許可セリ

家塾寺子屋設置ノ制度 何人タリモ自由ニ開設スルヲ得

舊小久保藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ諭達

學館之儀ハ 天朝御趣意ヲ奉シ專ラ人材教育ノ基礎トス依之衆人此意ヲ體シ少シク餘力アラハ此館ニ入テ業ヲ受ケ情ル事有ル勿レ

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ハ必藩立學校ヘ入學セシメ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニ修學スルヲ許サス

素讀卒業ノ者ハ藩費及自費ヲ以テ他國ヘ遊學スルヲ許ス

月六回藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシム

平民子弟教育方法 平民子弟ヲシテ藩立學校ヘ入學スルヲ許ス

家塾寺子屋設置 制度 藩ノ檢束ヲ受クルナク何人タリモ自由ニ開設スルヲ得ル

學校

校名 盈進館

校舍所在地 上總國天羽郡小久保村舊藩地邸内

沿革要略 明治二年創立舊藩主田沼意尊素ヨリ儒學ヲ尊崇ス因テ學事稍擴張ス

教則 受業朝六半時ヨリ八ツ時迄但四ツ時迄素讀其餘質問會讀之事 學生貴賤ヲ不論出席順次ニ可受業事 毎月一度試

業月々品題相改候事 學業怠慢ナル時嚴ニ教諭ヲ加ヘ猶不改時ハ父兄ヘ告廳ニ達シ罪科ノ品有之候事 素讀卒業ノ輩

ハ會日定之通出席勉勵可有之候事 知事大參事不時出席之事 講義ノ節ハ知事初メ諸職員出席聽聞之事

教科用書 四書、五經、小學、蒙求、十八史略、元明史畧、國史畧、左傳、國語、史記、日本外史、皇朝史畧、前後漢書、綱鑑易

知錄、歷史綱鑑補、日本書記、日本政記、溫史、綱目、二十一史、大日本史、

學科學規試驗法及ヒ諸則

漢學 生徒勤學ノ餘暇必ス武術ヲ兼修セシム 學生七歲ヨリ入學之事 春秋二季大試驗ヲ行ヒ優等ノ者ニハ賞品ヲ與

士族卒ノ子弟教育法 大凡七八歳ヨリ各自ノ意向ニ任セ寺子屋等ニ於テ習字修業ヲ許可シ十四五歳ニ至レハ必ス藩立學校ヘ入學セシメ又私費ヲ以テ遊學スルヲ許シ又藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルノ制アリ

平民子弟教育法 家塾寺子屋ニテ修業セシメ志願ニ依リ藩立學校ヘ入校スルヲ許可ス

家塾寺子屋設置ノ制度 何人ナルモ自由ニ開設ス

學校

校名 學習館ト稱ス

校舎所在地 元江戸小川町雉子橋通邸内

沿革要畧 文久二年ノ創立ニシテ井上正和時代ニ於テ儒學ヲ尊崇シ以テ學事ヲ擴張セシム

教則 四書五經及ヒ史記左傳文選ノ類ヲ授ケ教師一名ニテ四五十名ノ生徒ニ素讀ヲ授ケ朝五ツ時ヨリ始業正午九ツ時ニ終業ス毎日俗吏一名出席教授及生徒ノ出席ヲ記ス

學科學規試驗法及諸規則 和漢學算法筆道及兵學弓馬鎗柔術砲術游泳等又生徒ヘハ必ス文武兩道兼修セシム文學ト武術

トチ比スルニ四書ノ大義ニ通スルモノハ免許以上ノモノニ比ス又文學武術ノ一科ヲ專修スルヲ許可ス又春秋兩度ノ試験ニハ其習學セシ所ヲ溫習セシム賞品ハ甲乙丙ノ三等ニ區別シ各差等ヲ分テ其賞品ヲ授與スルモノトス

職名及俸祿 教授世話役等ノ職名ヲ附シ各持高ニテ勤務セリ

職員概數 教員ハ三名ニシテ補助員三名ナリ而シテ事務員一名門衛一名ナリ

生徒ノ概數 通學生徒平均百十名寄宿生徒無之且ツ通學生徒ハ藩費ヲ以テ之ヲ支辨ス

束脩謝儀 無之

學校經費 一週年ノ學費ヲ米四十石ト定メ學費ニ充ルモノトス

藩主臨校 藩主臨校シテ講義ヲ聽聞スルヲアリ

祭儀 聖像ノ設アリ藩主々祭トナリ一藩士禮服ヲ着シ元始開業ノ日ヲ以テ釋奠ヲ執行ス

學校構造及建物圖面 地坪百六十八坪 建物五十六坪

學校ニテ出版翻刻セシ書類及藏書 無之

仁慈門ト曰フ外又神門一基ヲ建ツ又北ニ距ル十七間許第二神門ヲ設ケ又北二十四間許第一神門ヲ設ケ第二神門ノ北神樂殿ヲ置天保九年烈公奏請ヲ經テ創建ス其建社ノ意記文ニ具ス安政四年五月使チ鹿島ニ遣シ分祀式ヲ行ヒ九日遷座ノ儀ヲ修ム公親鍛スル所ノ寶刀ヲ納メ以テ神體ニ擬ス每歲正月元日及祈年新嘗之ヲ祭ル其薦奠ハ布帛、刀、鉞及ヒ酒、鰯、堅魚腊、海藻、堅鹽等ヲ用井載スルニ橐盤ヲ用ウ國主東帶親祭ス若シ故アレハ諸大夫ヲシテ之ヲ攝セシム總教祝辭ヲ讀ム小姓若クハ小十人已上文武教職ヲ以テ執事トス靜吉田二社司チシテ神樂ノ事ヲ掌ラシム

聖廟 鹿嶋神社ノ東北第一神門ノ外ニ在孔子一座ヲ祀ル木主チ安置ス烈公親題シテ孔子神位ト曰フ廟西面廣二丈七尺深一丈六尺五寸高二丈六尺五寸大成殿制ヲ模ス四面墻ヲ設ケ正面戟門ヲ建ツ建廟ノ意亦記文ニ具ス春秋仲月上丁釋奠ヲ行フ祭器簠、豆、饗、饗、銅等ハ唯之ヲ陳設ス其薦奠ハ白帛及ヒ堅鹽、乾魚、乾菜、栗黃、時果、白餅、鰯、鰯、稷飯、稻飯、鮮魚、鳥、清酒、玄酒等ヲ用井之ヲ土器及ヒ瓶子ニ裝シ橐盤ニ載セ侑ムルニ音樂ヲ以テ國主親祭執事等皆神社ニ準ス小十人訓導已上ヲ以テ讀祝者トス凡朝廷國學ノ制孔子顔子二座ヲ祀リ孔子ハ文宣王ノ號ヲ用ウ本館實私學ニ係ル故ニ必スシモ朝制ニ因ラス

館廳堂舍ノ制 館方四町西ハ城壘ニ倚リ南北並ニ墻ヲ築キ涅ヲ穿チ中間各一門ヲ設ケ東ハ府城ニ對ス墻涅ヲ設ケス中央一門ヲ設ケ城門ト相對ス是チ正門トス其北少ク東又一門ヲ設ケ南向ス是チ常用門トス正門ヨリ入玄關アリ正面直額ヲ掲ケ題シテ弘道館ト曰フ烈公親篆玄關ヨリ上リ左ヲ正廳トス南向東西八間半南北四間ヨリ九間ニ至ル分テ三室トス其南庭武藝對試場ヲ設ケ東西十間南北六間廳ノ北相距ル十七間許國老執政已下諸有司ノ直所ヲ設ケ長廊アリ廣二間正廳ト相通ス廊ノ西一堂ヲ設ケ至善堂ト曰フ東西八間南北五間半ヨリ八間ニ至ル凡四室是ヲ國主謙息ノ所トス其前室ヲ諸公子會讀ノ場トス堂ノ東北文武教職ノ直所ヲ設ケ其東ニ監察局目附方ヲ局ノ西北厨屋ヲ設ケ其西北外舍アリ東ヨリ西ニ行ク長二十間廣三間分テ教場五室トス玄關ノ右一室ヲ大番直所トス其西番頭物頭等ノ直所ヲ置諸堂舍直所皆正廳ト相連屬正門ノ南看街亭ヲ置南北十三間東西三間其南又常用門アリ其南外舍アリ北ヨリ南ニ行ク長三十間廣三間是チ諸小吏ノ廨舍トス是其概略ナリ其詳ナルハ別ニ圖アリ江戶邸内亦弘道館ヲ置制作亦備ハル唯本館ニ比スレハ頗ル省畧アリ

文武教場ノ制 教場ハ分テ文武二館トス武館又分テ兵學軍用劔術槍術居合薙刀柄大刀柔術馬術射術砲術等ノ諸場ヲ置其他歐學醫學天文數學音樂諸禮及軍事等ノ諸局操練場等亦皆之ヲ館中ニ設ケ唯水術火術ハ之ヲ館外ニ置

文館 正廳ノ北ニ在居學講習句讀寄宿ノ四寮ヲ置編修局系纂局講習別局之ニ屬ス教職管庫ノ直所及給使館丁房厨所等皆其内ニ在居學寮凡三舍南北相比シ距ル各三間皆東ヨリ起リ西ニ行キ每舍中間各長廊ヲ設ケ左右學室ヲ列置ス南舍

フ

職名及俸祿 教官一名教授三名○教官 年祿拾六石 教授 年祿拾三石、拾石、六石

職員概數 教員四名 事務員一名 校僕二名

生徒ノ概數 八拾名但シ通學生

束脩謝儀 無之

學校經費 米四拾五石金千圓

藩主臨校 藩主不時臨校講義聽聞ス

祭儀 無之

學校構造及建物圖面 地坪三百七拾坪半 建坪五拾八坪七分五厘

學校ニテ出版翻刻セシ書籍及ヒ藏書ノ種類部數 藏書ハ別ニ掲ク

舊水戸藩

弘道館

本館ハ水戸城西第三郭内ニ在天保九年戊戌國主烈公之ヲ勸ス十二年辛丑八月朔假ニ館ヲ開キ諸士ヲシテ文武ヲ講セシム安政四年丁巳五月九日更ニ衆士ヲ會シ開館式ヲ行ヒ鹿島神社遷座ノ儀ヲ修メ孔子神位ヲ廟中ニ安置シ老臣五位一人ヲシテ社廟祭事ヲ攝行セシメ徧ク祭飯ヲ衆士ニ賜ヒ其布衣物頭敎職手副已上ハ并テ神酒ヲ賜フ訖テ國內衆庶ヲシテ館中ニ縱覽セシムル三日其明日ヨリ文武ニ從事セシムル常ノ如シ初メ延寶中先國主義公國學ヲ設クルノ志アリ時未タ可ナラサルヲ以テ果サス明ノ遺老朱之瑜ヲ師トシ學制ヲ考究シ士子ヲシテ釋奠ノ禮ヲ習ハシメ又梓人ニ命シ之瑜ノ口授ニ因リ闕里ノ制ヲ摸シ約シテ之ヲ刻セシメ以テ府庫ニ藏シ後ノ制作ニ志アル者ヲシテ法ヲ取ラシム此ニ至リ烈公廣ク儒臣ト議シ更ニ制度ノ得失ヲ考ヘ古今ノ宜ヲ酌ミ始テ此設アリ以テ祖宗ノ志ヲ成シ親ラ記文ヲ撰シ以テ建學ノ大意ヲ述フ今併セテ其制度法則ノ概略ヲ記シ以テ雜志トス

神社聖廟ノ制

鹿島神社 館ノ中央ニ在鹿島大神ヲ分祀ス正殿北面礎高一尺五寸総高二丈四尺五寸深九尺廣一丈前殿深廣上ニ準ス高一丈八尺五寸拜殿高二丈五寸深一丈廣三丈一尺外緣濶八尺三殿並皆橡葺四方繚ラスニ瑞籬ヲ以テシ正面一門ヲ設ク

在館ノ北園即藥園ナリ養牛場ハ其北ニ在常ニ乳牛五六頭ヲ飼養ス傍ラ守舎ヲ置

馬埒 鹿島神社ノ西ニ在南北長百二十八間餘闊六間中央西側亭ヲ設ケ觀騎ノ所トス

射場 館ノ西南隅ニ在南北二十四間西東三間分テ三場トス射圃長十五間

砲場 射場ト其處ヲ同フス冬春ハ射ヲ演シ夏秋ハ砲ヲ演ス諸流各一場ヲ共ニシ遞日演習ス其北又砲場ヲ設ケ神發流砲

術ヲ置方四間圃長十五間其北製作所ヲ設ク南北十間東西五間其北馬埒ヲ設ク南北長百十四間廣五尺餘馬道四尺左側

棚三所ヲ設ケ騎砲騎射ノ用ニ供ス又長梁ヲ埒ノ正北ニ築キ人像狙撃ニ充厩一字砲場ノ東ニ在東西十七間南北七間馬

三十四匹ヲ飼養スヘシ厩吏廐舍馬卒房等其側ニ在

軍事局 鹿島神社ノ東ニ在南北五間東西二間武庫二字

操練場 馬埒ト騎砲馬埒トノ間ニ在大約方二町許其南ニ遠射場ヲ設ケ又北ニ大梁ヲ築キ野戰銃ヲ演スルノ所トス

水術 教場ヲ那珂川上ニ設ク上町下町各一所並ニ館外十餘町ニ在夏時之ヲ置

火術 常ニ家塾ヲ用井臨時之ヲ野外ニ演ス多クハ城南仙波原及城西保利原等ニ於テス

文武職役ノ制 諸雜務附

學校總司一員 國老若クハ番頭ヲ以テ之ヲ兼ヌ參政モ亦或ハ之ヲ攝ス然レモ常置ノ職ニ非ス○學校奉行一員 側用人

ヲ以テ之ヲ兼ヌ役料二百石學校ノ政ヲ總管ス才文武ヲ兼スル者ヲ以テ之ニ任ス若シ其人ナケレハ必スシモ之ヲ置ス○

總教教授頭取ト稱ス二員 小姓頭ヲ以テ之ヲ兼ヌ役料各二百石學中一切ノ事務ヲ總理シ經業ヲ教授シ生徒ヲ督課簡試スルヲ

掌リ兼テ侍講伴讀及國史ヲ監修スルヲ知ス小姓頭實禮儀ノ職幕府ニ執謁シ頗ル要職トス凡大臣嫡子等近侍ニ列ス

ル者皆指揮ヲ受故ニ門閥ニ非サレハ之ニ任スルヲ得ス義公ノ時國史總裁多ク之ニ任ス後蓋シ絕ユ此ニ至リ古ニ復シ儒

生ヲ擧ケ以テ本職ニ任ス即教學深意ノ在トコロ也○准總裁教授頭取代ト稱ス一員 小姓頭取ヲ以テ之ヲ兼ヌ役料百石藩邸ノ學務

ヲ總理シ侍講及國史ヲ總裁スル事ヲ知ス○教授一員 小姓頭取ヲ以テ兼任ス役料百石總裁ニ副ス生徒ヲ勸督シ居學生

員ノ輪講及試詩文ヲ檢シ恒ニ生徒ノ勤惰ヲ視察シ總裁ト協議シ之ヲ進退スルヲ掌ル○助教三員一員ハ之ヲ藩邸ニ置 小納戸役

次番組等ヲ以テ之ヲ兼ヌ役料五石經書ヲ講授シ諸公子ニ侍讀シ教授ト共ニ居學生員ノ輪講及試詩文ヲ檢シ訓導ヲ助ケ

講習生員ノ輪講ヲ監シ訓導ト交番質問所ニ直シ生徒ノ疑問ニ應答スルヲ掌ル○訓導十餘員三員ハ之ヲ藩邸ニ置一員ハ歌道局ノ事ヲ掌ル 平士

已上ヲ以テ之ヲ兼ヌ役料三石講習生徒ヲ誘掖シ其輪講會讀ヲ監シ分番宿直寄宿生ヲ勸督スルヲ掌ル餘ハ助教ニ同シ

長十七間廣三間左ニ七室右ニ八室ヲ設ケ中含長廣上ニ同シ左右各八室北舍長三十一間廣上ニ同シ左右各十四室三舍東西並ニ長廊ヲ架シ南北相通ス凡學室各廣二間深一間生徒每二人一室ヲ充每舍各舍長直所二所ヲ置中央質問所ヲ設ク講習寮ハ南舍ノ西ニ接ス東西八間南北五間其西ヲ厨所トス寄宿寮ハ講習寮ノ北ニ在中舍ノ西ニ接ス長十四間廣一間外縁ヲ設ク分テ八室トス北舍ノ東ヲ講習別局トス南北三間東西二間其南ヲ給仕等ノ房トス句讀寮ハ其東ニ在別局ト相對ス東西五間南北三間但句讀後廢スルヲ以テ講習生會讀輪講ヲ本局ニ置南舍ノ東玄關ヲ設ク其東側ヲ監察局トス局ノ東ヲ編修系纂等ノ局トス東西九間南北三間其東室ヲ國主ノ便坐トス方三間但編修系纂ハ猶之ヲ彰考館ニ設ク中城ニ未タ局ヲ移サス唯總教此ニ直シ居學生輪講及平時考試等皆本局ヲ用ウ局ノ西長廊ヲ設ケ其東端北側ヲ管庫直所トス其北ヲ教授已下諸教職ノ直所トス北ハ句讀寮ト相接ス其東北相距ル數十間倉庫二字ヲ設ケ書籍及諸器ヲ藏ス武館 正廳ノ南ニ在モノ凡三舍南北相距ル各八間許皆東ヨリ起リ西ニ行ク北舍長三十間廣四間分テ三場トス是ヲ劍術ノ場トス一流各一場中含長上ニ同シ廣五間分テ三場トス是ヲ槍術ノ場トス每場各一流南舍長二十間廣上ニ同シ分テ三場トス是ヲ居合薙刀柄太刀柔術等ノ場トス每場各三四流遞日業ヲ肄ハシム凡武場皆國主及執政等ノ座ヲ設置シ以テ臨視ノ所トス

歌學局 二十間外舍ノ第一室ニ置ク初メ和學士ニ命シ此ニ直シ明倫和歌集ヲ撰錄セシム後ニ本局トス

兵學局 軍用局 共ニ歌學局ノ西室ニ置遞日業ヲ講セシム

音樂局 軍用局ノ西室ニ置毎月八次業ヲ習ハシム

諸禮局 音樂局ノ西室ニ置

天文數學所 武場南舍ノ東ニ在南北六間東西三間地圖局之ニ屬ス

醫學館 南門ノ内鹿島神社ノ南ニ在居學講習ノ二寮ヲ置本草蘭學調藥製藥諸局及療病所養牛場藥園等之ニ屬ス教職手副等直所製藥吏直所宿直所休憩所及給使館丁等ノ房皆其内ニ在南向玄關ヲ設ク居學寮二舍東西相對ス東舍ハ玄關ノ北ニ接ス南北長十間半廣一間外縁アリ分テ七室トス西舍相距ル四間長九間廣上ニ同シ外縁アリ分テ六室トス每舍各舍長ノ直所ヲ置二舍ノ間ヲ製藥吏直所及給仕等ノ房トス講習寮ハ東舍ノ北ニ接ス東西五間南北三間半其東講堂ヲ設ク贊天堂ト曰フ深二間廣三間半寮ノ南側ヲ教授手副等ノ直所トス本草局ハ寮ノ西北ニ在東西四間半南北二間蘭學局ハ其南ニ接ス南北四間東西二間其南側ヲ宿直所トス製藥局ハ贊天堂ノ東ニ接ス其東相距ル二間許製紫雪局ヲ置調藥局ハ製藥局ノ南ニ在其南倉庫ヲ置書籍藥品器械等ヲ藏ス玄關ノ西側ヲ監察局トス療病所ハ其西ニ在休憩所ハ其北ニ

凡武藝ハ兵學ニ流山本勘介流ト曰ヒ佐久間流ト曰フ軍用ニ流松田古流ト曰ヒ松田新流ト曰フ射術四流日置流ト曰ヒ雪荷派ト曰ヒ印西派ト曰ヒ大和流ト曰フ馬術四流大坪流ト曰ヒ大坪本流ト曰ヒ惡馬新當流ト曰ヒ素鞍流ト曰フ槍術四流佐分利流ト曰ヒ寶藏院流ト曰ヒ鎌寶藏院流ト曰ヒ種田流ト曰フ劍術四流水府流ト曰ヒ烈公命北辰一刀流ト曰ヒ神道無念流ト曰ヒ東軍流ト曰フ柄太刀一流長劍流ト曰フ薙刀二流常山流ト曰ヒ烈公新創穴澤流ト曰フ居合四流田宮流ト曰ヒ新田宮流ト曰ヒ一宮流ト曰ヒ無形流ト曰フ砲術六流神發流ト曰フ騎砲騎射ヲ兼ス烈公創高山流ト曰ヒ竹谷流ト曰ヒ石川流ト曰ヒ關流ト曰ヒ萩野流ト曰フ火術二流本郷流ト曰ヒ唯心流ト曰フ柔術四流三和流ト曰ヒ淺山流ト曰ヒ淺山一傳流ト曰ヒ淺山一傳古流ト曰ヒト傳流杖小太刀ト曰フ水術一流水府流ト曰フ是ヨリ先ニ武藝猶十數流アリ此ニ至リ其名異ニシテ實相類スル者ハ皆之ヲ併合シ流名ヲ定ムル此ノ如シ凡武藝教師ハ別ニ役料ヲ給セス唯常務ヲ免ス其勤勉怠リナク善ク生徒ヲ誘掖スル者ハ特ニ職ヲ進メ俸ヲ増シ之ヲ獎勵ス

家塾教師 本館句讀師ヲ廢シテ後素讀生ヲシテ皆私塾ニ入ラシメ其塾師ハ教職ニ準ス後又私塾ヲ停メ文武教師ヲシテ皆家塾ヲ置カシメ文學ハ或ハ其人ヲ撰ミ以テ塾師トシ諸費皆之ヲ給與シ專ラ幼童ヲ教育セシメ其教職ハ月六次家ニ在之ヲ督勵ス○塾長 家塾生教育ニ從事ス人員手副ニ準ス文武各門人ニシテ性質篤厚善ク其業ヲ勤ムル者ヲ撰補ス○掌客吏二員 諸藩游歴生旅舍并延接等ノヲ掌ル 文武教職手副已上軍政ヲ除クノ外皆本務ヲ免シ專ラ教育ニ從事セシム 文武教職教育ノ事ニ於テ苟モ意見アル者ハ皆自ラ之ヲ政府ニ申陳スルヲ得セシム 武藝教師將ニ職ヲ門人ニ讓ラントスル者ハ先其事由及其應ニ讓ルヘキ者ノ姓名ヲ錄シ政府ニ申請シ其處分ヲ受ケシム若シ死没等ハ政府衆議ヲ採リ手副ヨリ撰拔之ヲ補ス○調練總司一員 國老ヲ以テ之ヲ兼ス軍事局務ヲ總攝シ諸隊操練ノ事ヲ掌ル○軍師一員 總司ニ副ス○軍師副定員ナシ○屬吏 凡諸士卒ハ編テ七隊トシ每一隊次ヲ以テ之ヲ操練場ニ教習ス其大番戰士銃隊銃卒ハ毎月一二次狙擊齊發等ノ術ヲ演習ス總司已下之ヲ監試ス其大閱ハ乃チ野外ニ於テス 學則 教學大意ハ烈公親ヲ記文ヲ撰シ之ヲ述フ又總教ニ命シ教則條目ヲ論定セシメ自ラ之ヲ裁シ著シテ以テ學則トス左ノ如シ

一凡出入學館者當熟讀親製記文審知深意所在神道聖學之一其致忠孝之不二其本文武之不可岐學問事業之不可殊其效皆宜奉承記文之意匪勉服膺

ヲ停メ訓導已上ノ掌トル所トナシ神聖一致ノ旨ヲ講セシム○準訓導定員ナシ臨時之ヲ置○舍長九員三員ハ之ヲ藩邸ニ置平士已上子弟學業優

長操行端正ナル者ヲ撰補ス職務アル者亦兼任ヲ得慰勞銀五枚寮中一切ノ雜務ヲ掌リ輪講會讀ノ席ヲ監シ分番宿直寄宿

生ヲ勸督ス○國史總裁一員 教授ニ準ス國史ヲ裁定スルヲ掌ル○編修四員 助教訓導ニ準ス總裁ニ副ス○考索生定

員ナシ 總裁ノ旨ヲ受史料ヲ搜索スルヲ掌ル○寫字生定員ナシ 生徒書學ニ長スル者ヲ撰補ス史稿及史料ヲ抄寫ス

ルヲ掌ル○系纂局長一員○寫字生 水府系纂ヲ補修スルヲ掌ル 國史及系纂局ハ之ヲ彰考館ニ置ト雖其職皆文

館ニ屬ス○句讀師 四書五經等素讀ヲ授クルヲ掌ル居學生員モ亦分番之ヲ授ク後廢ス唯藩邸三員ヲ置○講習別局長

三員 別局生徒ヲ監ス唯教職ニ列セス或ハ舍長ヲ以テ之ヲ兼テシム○管庫八員二員ハ之ヲ藩邸ニ置 本館及彰考館文庫ヲ掌リ書

籍ヲ出納シ及供祭諸品ヲ辨備シ給使館丁ヲ進退スルヲ管知ス其二員ハ總教及國史總裁雜事ノ文案ヲ兼掌ス凡給使ハ

總教ノ使令ニ供ス館丁武館モ亦皆之ヲ置○歌學教師一員 訓導ヲ以テ之ヲ兼ヌ別ニ之ヲ置ス○歌學手副○天文教師○

數學教師一員 算學ヲ教フルヲ掌ル天文ノ事ヲ兼ヌ○數學手副○地圖局長 地球圖及諸圖ヲ製スルヲ掌ル○音樂

管頭四員 音樂ヲ教フルヲ掌ル○音樂役十五員 管頭已下並ニ小十人組已上ヲ以テ之ヲ兼ヌ笙、笛、簫、箏、大鼓、羯

鼓、箏、琵琶等ヲ學習シ孔廟及祖廟ノ祭祀ニ供ス生徒亦之ヲ學フヲ得但課業ノ限ニ非ス○諸禮教師 諸禮ハ未タ之ヲ

實行セス故ニ教師ヲ置ス○醫學教授三員 侍醫ヲ以テ之ヲ兼ヌ役料銀七枚醫學一切ノ事務ヲ總理シ内外醫術ヲ教授シ

及和藥、診候、種痘等ノ事ヲ知ス凡士民治ヲ乞フ者ハ先居學生員ヲシテ之ヲ診察セシメ其當否ヲ審定シ診察誤ラサル者

ヲシテ治ヲ施サシム若シ貧民藥價ヲ納ル能ハサル者ハ皆之ヲ施ス凡醫員ハ時ヲ以テ村邑ヲ巡行シ接痘ヲ施行セシメ又

更番館中ニ宿直シ若シ館ニ在病傷スル者ハ當直先之ヲ護療シ諸藥皆之ヲ給ス○助教四員又手副ト曰フ 教授ニ副ス中外醫師學

術アル者ヲ撰補ス役料銀三枚○舍長 撰補文館舍長ニ準ス○監製藥醫二員○製藥吏四員○頒製藥吏一員 凡製藥ハ

丸散湯圓品類頗ル多ク神仙丸紫雪紫金錠千金錠鶴血丸牛酪ノ如キ最モ良藥トス其牛酪ハ事ヲ西郊箕川村ニ置乳牛ヲ館

内ニ繫飼シ酥酪ヲ製セシム敎職年老ノ者ハ特ニ生乳ヲ給與ス義公ノ時小宅生順修史ニ勞スルヲ以テ特ニ牛乳ヲ賜フ事舊記ニ見ユ是亦舊例ナリ若シ村邑醫藥ニ乏キノ處

ハ諸藩ヲ里正ニ頒付シ其需用ニ供セシメ藥價三分ノ一ヲ以テ里正ノ勞費ニ充○本草局長一員○本草學ヲ敎授シ兼テ山

海庶品ヲ編修スルヲ掌ル○書工 山海庶品圖寫ノヲ掌ル庶品一千卷學成利明治戊辰ノ災ニ皆亡フ○蘭學敎師 凡蘭學ハ其人ヲ撰ミ之ヲ

傳習セシム生徒恣ニ之ヲ學フヲ得ス○武藝敎師每流各一員 平士已上各其技ニ長シ性行端正ナル者ヲ以テ之ヲ兼ヌ○

武藝手副 撰補舍長ニ準ス敎師ニ副ス每流各二員已上其生徒多キ者ハ六七員ヲ置慰勞銀二枚凡敎師手副藩邸亦此ニ準

卒フル能ハサル者ハ講習別局ニ入テ許ス其武館ハ試験ヲ要セス年十五已上皆入學セシム

一生徒課業ノ日數布衣并三百石已上當主嫡子ハ月十五日其次男已下弟等及物頭并百五十石已上當主嫡子ハ十二日其次男已下弟等及平士當主嫡子ハ十日其次男已下弟等ハ八日トス年三十已上及職事アル者ハ皆半ヲ減ス年四十ニ滿ル者ハ全ク其課ヲ免ス

一兩小姓寄合組并布衣三百石已上嫡子年二十四已下十八已上ハ每歲正月十七日ヨリ三月晦ニ至リ十月朔ヨリ十二月二十四日ニ至ル各半月十人ヲ限リ交替學中ニ寄宿セシム平士以上子弟好學ノ者ハ請願ヲ經テ寄宿ヲ許ス疾病若シハ父母等ノ病侍養ヲ須ツニ非レハ歸宅ヲ許サス

一生徒修業ハ朝文夕武ノ法トス辰時ヨリ午時ニ至ルヲ朝トシ午時ヨリ申時ニ至ルヲ夕トス午前午後各一日ノ課トス時刻ニ後レテ入モノハ皆半課トス但炎暑ノ日ハ午時或ハ巳時ヲ限リ文武同刻トス

一生徒始テ文館ニ入モノハ皆會讀生トス經史ノ講讀ヲ課試シ文義已ニ通スル者ハ進メテ輪講生トシ首ニ論語次ニ孟子次ニ春秋左氏傳ヲ課試シ其優等ニシテ性行謹厚ナル者ハ居學生ニ進メセシム

一武館生徒藝業優長ナル者ハ免許狀ヲ授ケ以テ其等ヲ升セ其業益進シ性質篤實ナル者ハ蘊奧ヲ授ケ指南免許ニ進メ已ニ妙處ニ詣ル者ハ印可ヲ授ク

一幼童始テ學ニ就ク者ハ塾師各其姓名年齡ヲ錄シ之ヲ總教ニ達セシム

一生徒年四十ニ滿ル者其課ヲ免スト雖凡文學ハ必ス之ヲ講究セシメ又時々槍劍等ヲ試ミ以テ實用ニ供セシム

一諸士已下ノ者及諸卒等ハ武館ニ入ヲ許ス文館ハ好學ノ者請願ヲ經テ後ニ入學ヲ許ス但並ニ日數ヲ課セス

授業課試ノ法

毎月定規○二日 居學生輪講

詩書禮三經ヲ課試ス生徒章ヲ繼講說ス

凡居學生員分テ兩班トシ毎二七ノ日各一班ヲ

試ム○三日 總教講經正廳ニ設ク

凡經ハ四書孝經順次之ヲ講ス終テ復始ル 此日聽衆布衣物頭并布衣嫡子次男物頭嫡子

及平士已上諸有司トス 公子會讀伴讀總教

布衣嫡子十歲已上皆預ル

凡會讀ハ伴讀先經ヲ講シ孝經論語訖テ公子已下經史

ヲ誦讀ス其入學已上ノ者ハ文義ヲ解說セシム

講習生會讀

凡會讀ハ訓導先經書ヲ講授シ四書訖テ生徒ヲシテ經

史ヲ講讀セシム○四日 講習生論孟輪講 凡論孟各一課トナシ每課又分テ數班トシ各章ヲ繼之ヲ講セシム○五日

家塾生考試執生已下諸有司正廳ノ座ニ就キ生徒ヲ召シ之ヲ試ム 凡家塾ハ月各一二塾ヲ試ミ輪流之ヲ徧クス但武藝

塾生ハ之ヲ試ミス 講習生會讀○六日 總教講經聽衆居學生○七日 居學生輪講○八日 總教講經聽衆平士當士○

一神道聖學之義記文論之備矣寶祚之無窮君臣父子之大倫與天地不易此乃天地之大道大化詔所稱惟神者天祖所以立極而唐虞三代之治教天孫所資以贊皇猷亦莫非所以明人倫其致則一矣學者宜敬神崇儒以推廣斯意遵奉忠孝之大訓勿偏執私見妄生異議

一古有六國史之撰而古事記最爲舊書記等次之其所載天祖傳神器詔敕詳明爲萬世寶訓國史之外載籍尙有存者亦可以資稽古律令則經世大典格式亦可備考據東照宮及威義二公言行法令則當今規則而義公修史大義以明其他古今群書亦旁羅以廣知識皆溫故知新之事學者勿忽之

一習文武之藝者當以文武之道爲本不可徒爲技藝之士天朝素尙武而近古所稱武士之道者重節義明廉耻文道者叙彝倫修德業莫不皆出於忠孝仁義即文武同歸者學者不可不知也

一君子務實行修己治人仁也能行仁爲德行而如言語政事文學隨其才所長以施之行事莫非實學是學問即事業未嘗殊其途故孔門四教文行忠信皆其所日用實踐者學者勿徒務高遠深奧而後實行

一論道宜本於聖經而如後儒說則以備參考不宜先末而後本義公嘗言古來名賢鴻儒各有所見廣蒐博採用之不偏則善若執偏見拘泥一隅則儒中之異端學者宜休斯意也

一講經者或博通諸經或專治一經各從所好而孝經論語則尤宜精思斷味曲暢旁通務施之實事讀史者宜如躬處其時親遇其事不可視以爲陳迹其他詩歌文辭天文地理醫卜譜牒等各因其所長以適時用可也博聞多識亦學者之一事而如涉雜書習雜藝亦不必禁但從流忘源甘爲曲藝之徒亦可耻也 聖人觀於天文所以則天地之大德窮陰陽之變以應天下之務曆象授時於人事爲尤急若外人事而徒說空理則天文亦屬無用

一論兵所以用之實戰運用存其人肄武技則以供戰陣之用是爲武士之藝勿逐時好較勝劣於分寸徒爲演場之技 戰爭之世將士賢否不一至於姦雄則暴戾殘忍不情亦甚而後世武人或眩其智勇妄稱揚之大有害於風教講武者宜審仁暴之辨尙義勇以自砥礪

一文武諸生謹奉弟子職以禮讓相交以忠孝相勸情陰勉力以成有用之材中行之士誠可貴狂狷亦聖賢所與斐然成章進取之益亦多勿闕然媚世誤爲鄉原之人勿諧諠放肆甘爲無賴之徒勿惰慢怠惰以貽老來枯落之歎

就學升級ノ法

一諸士已上子弟年十歳ニ及ヘハ必ラス家塾ニ入句讀及書札ヲ習ハシム年十五ニ及フ比ニ素讀ヲ了フル者ハ論語孝經等ノ講義ヲ試ミ文義畧ト通スル者ハ講習寮ニ入シム若シ素讀了ハラサレハ尙家塾ニ於テ學習セシメ年二十ニ至リ業ヲ

成シ諸士卒ヲシテ常ニ之ヲ本館ニ演習セシメ以テ野外大砲運搬等ノ費ヲ省キ教師ヲ以テ軍務ヲ兼掌セシム毎月三日十三日ハ執政參政調練司學校總司以下諸吏二十三日ハ國老調練司番頭以下悉ク館ニ會シ銃陣ヲ演ス此後砲術唯神發一流トナル

一馬術ハ公厩棚町ニ在ヲ以テ諸士每朝此ニ就キ馭ヲ學フ但正月十月二十八日公私馬ヲ閱シ及大試ハ皆館中ニ於テス諸士私馬ヲ調スルモ亦此ニ於テス時或ハ私馬アル者ヲシテ馬上打毬戲ヲナサシム

一生徒ハ皆文武ヲ兼習セシム其布衣三百石已上并嫡子ハ月七日已上必ス文學ニ從事セシム

一生徒年十五已上素讀未タ卒ヘサル者ハ必ス月十五日已上ヲ課シ句讀ヲ家塾ニ習ハシメ塾師毎月其課數ヲ錄シ之ヲ監察局ニ出ス其布衣三百石以上子弟ハ毎月二十日ヲ以テ之ヲ正廳ニ試ミ若シ文義粗通スル者ハ便チ入學ヲ許ス

一居學生歲中誦讀寫抄及涉獵スル所ノ書ハ歲末其書名ヲ錄シ之ヲ總教ニ出サシム

一水術ハ那珂川ニ於テ之ヲ習ハシメ夏時一次執政已下就テ之ヲ試ム又教師生徒ヲ帥并那珂港ニ到リ海上游泳ヲ試ム

一醫學課試會讀輪講等大抵文館生徒ニ準ス毎月六次教授醫經ヲ講授ス

一每歲三月九月二次國中衆醫ヲ館ニ會シ郡宰市尹等臨席之ヲ考試ス凡國中分テ四郡トナシ三月ハ東南二郡九月ハ西北二郡ノ醫生ヲ會試ス其優等ノ者ハ藥撞銀ヒ等臨時之ヲ賞賜ス

一每月三八ノ日國老番頭等館ニ會シ文武生徒ヲ私試ス其五十ノ日ハ執政等館ニ會ス亦此ノ如シ凡私試ハ監察先文若クハ武其當ニ試ムヘキ者一課ヲ點定シ舍長手副等ニ令シ生員ヲ撰ミ名簿ヲ作り之ヲ出サシメ教職即チ生徒ヲ帥并試ニ應ス若シ總司奉行等アレハ三八ノ日文武各場ニ就キ之ヲ試ミ其文ハ或ハ覆文譯文等ヲ試ミ武ハ槍劔等同藝異派ノ者ヲ會シ對試セシム

一文武大試ハ每秋季之ヲ行フ國主親試ス若シ故アレハ執政ヲシテ之ニ代ラシム其次序ハ首ニ居學生次ニ講習生次ニ歌學生次ニ醫學生次ニ家塾生習字次ニ兵學軍用次ニ數學次ニ音樂皆之ヲ正廳ニ試ム次ニ槍術次ニ劍術次ニ居合柄太刀柔術等之ヲ對試場ニ試ム次ニ射術次ニ馬術次ニ砲術各其教場ニ於テ之ヲ試ム但家塾生素讀并武藝塾生講習別局生ハ之ヲ試ミス

一大試ヲ行フハ前十餘日監察先舍長手副ニ令シ生徒應ニ試ムヘキ者ヲ簡定シ各名簿ヲ造リ之ヲ出サシム監察又其勤惰及品行ヲ勘考シ之ヲ取捨シ名簿ヲ下付ス舍長手副更ニ名簿ヲ造リ之ヲ出ス監察乃チ生徒試日ヲ區別シ之ヲ政府ニ申シ後ニ考試ヲ行フ其懶惰業ヲ勤メス及操行放肆ナル者ハ試ニ預ルヲ得ス

九日 講習生左氏傳輪講○十日 講習生會讀 試詩歌 凡詩八月一二題ヲ課ス前九日出題居學講習二生皆試ニ應ス

體製篇數各其意ニ任ス但和歌ヲ試ムルハ歌學局ニ於テス○十一日 教授講經聽衆六日ニ同シ○十二日 居學生輪講

○十三日 總教講經聽衆布衣三男物頭次男已下平士子弟 公子會讀伴讀○十四日 講習生論孟輪講○十六日 助教講

經聽衆講習生○十七日 居學生輪講○十八日 總教講經聽衆平士已上諸有司 講習生會讀○十九日 講習生左氏傳

輪講○二十日 講習生會讀○廿一日 助教講經聽衆三日ニ同シ 講習生會讀○廿二日 居學生輪講○廿三日 總教

講經聽衆八日ニ同シ 公子會讀伴讀助教者 但此日公子已下皆習字ヲ試ム○廿四日 講習生論孟輪講○廿五日 講習生

會讀 試文 凡文ハ策問經義雜文月各一題ヲ試ム前九日出題居學生試ニ應ス但講習生亦試ニ應スルヲ得假字文モ亦

可トス○廿六日 訓導講經聽衆廿三日ニ同シ○廿七日 居學生輪講○廿八日 總教講經聽衆十三日ニ同シ○廿九日

講習生左氏傳輪講○三十日 訓導講經聽衆十一日ニ同シ

一寄宿生文館ニ於テハ其課試皆居學講習二生ニ準ス若シ索讀未タ卒ヘサル者ハ訓導之ニ句讀ヲ授ク教授助教ハ臨時巡

視シ或ハ夜會ヲ催シ之ヲ課試ス

一句讀生ハ每早晨ニ入辰刻ヲ限ル但本館ハ後廢ス藩邸ハ舊ニ仍ル

一講習別局生ハ軍書雜誌論說等總テ假字ノ書ヲ通讀セシム教職臨時巡視シ其讀トコロノ書ヲ試讀ス

一槍劒生徒ハ鉄面臂罩等ヲ用井實藝ヲ講セシム臨時之ヲ操練場ニ會シ對試セシメ以テ接戰進退ノ術ヲ演ス

一弓砲ハ之ヲ同場ニ置四月二日ヨリ八月晦ニ至ル砲術ヲ演シ九月二日ヨリ明年三月晦ニ至ル射術ヲ演セシメ自餘ハ各

之ヲ家塾ニ習ハシム 砲場ハ家塾ノ外國老番頭以上皆之ヲ私第

一射術ハ毎月五次二日ハ八日十四日廿四日廿六日 操練場ニ就キ大候遠射ヲ試マシム

一神發流砲術ハ常ニ館中ニ設ク其技洋式ヲ用井騎砲騎射ヲ兼習セシメ或ハ人像ヲ期上ニ立テ狙撃ヲ習ハシム

一神發流駟術ハ尋常駟法ヲ廢シ專ラ跳驅ヲ習ヒ騎砲ヲ演スルハ常ニ鎖甲臂罩等ヲ著ケシム

一諸砲術ハ時ヲ以テ巨礮ヲ野外ニ演セシメ運搬等諸費皆之ヲ給ス

一火術ハ烽火火箭ノ術ヲ講習セシメ臨時又之ヲ野外ニ演セシム

嘉永五年ニ至リ烈公更ニ大砲場ヲ城東細谷村ニ築ク長三百間廣三十間大梁直立十五間幅四十間傍ニ一町及ヒ十五

間ノ小砲圖ヲ設ケ廳舍教場倉庫製作所教師砲卒等ノ居舍皆備ル名ツケテ神勢館ト曰フ安政元年三月二十七日開館

式ヲ行フ是ニ於テ諸家傳フル所ノ砲術火術ノ奧秘ヲ採リ悉ク之ヲ神發流ニ併セ兼テ洋法ヲ參酌シ銃陣ノ法ヲ編

一 社廟ノ祭事ニ預リ及拜謁スル者ハ皆前一日齋ス
一新ニ文武教職ニ任スル者ハ皆社廟ニ拜謁セシム

一 生徒始テ學ニ入者ハ塾師其姓名屬籍年齡ヲ錄シ前數日之ヲ總教ニ申シ報ヲ得執政已下館ニ會スル日三八若クハ五十八ノ日ヲ以テ
本人ヲシテ禮服館ニ登ラシム文ハ舍長武ハ手割平服本人ヲ帥井正廳ニ候ス執政已下列座ス監察乃チ本人ヲ召シ座ニ就

カシム總司或ハ奉行入學勉勵スヘキノ旨ヲ諭ス總教進テ學規條目ヲ申諭ス大意云フ學問ノ道宜シク記文ノ意ヲ体認スヘシ師長ニ
敬事シ長幼ノ序ヲ失フヘカラス舉止ヲ慎ミ書籍等ヲ汚
穢スヘ其布衣并三百石已上ノ者ハ國主諭文ヲ拜讀セシム
臣子弟ハ行ノ國家ノ柱石タル者ナレハ最モ文武ヲ讀セサル可ラス上能ク之ヲ勤ム
レハ下必ス之ニ倣フハ自然ノ理ナリ爾等ヲシテ學中ニ寄宿セシム
ムル者實ニ之カ爲ナリ爾等其朝夕勵精取テ意ルヲ有ナカレト訖テ舍長手副本人ヲ帥井社廟ニ拜謁シ後各其業ニ就カシム

一 生徒居學生ニ進ミ或ハ免許狀ヲ付授スヘキ者ハ前日教職其姓名ヲ錄シ之ヲ政府ニ申シ允ヲ得前一日舍長手副之ヲ本
人ニ通知シ禮服正廳ニ候セシム總司或ハ總教等列座ス監察本人ヲ召シ座ニ進ム居學生ハ總教之ヲ命シ免許ハ其教師
之ヲ命シ訖テ社廟ニ謁スル上ノ如シ

一 每歲開館賜雁ノ儀アリ凡雁ハ國主放鷹親ヲ獲ル所ノ者ヲ賜フノ例トス故ニ舉ノ雁ト稱ス此日時刻國老執政已下教職手副已上皆禮服館ニ登ル小姓頭取一人

禮服公命ヲ受城中ヨリ館ニ使ス總教之ヲ玄關ニ迎フ國老已下皆正廳ニ候ス公使座ニ就キ命ヲ傳ヘ諸職ヲ慰勞シ雁ヲ
賜フ國老已下進テ賜ヲ拜ス公使退シ總教之ヲ送ル初ノ如シ國老已下各正廳ノ座ニ就シ庖人雁ヲ砧案上ニ載セ之ヲ廳

ノ中央ニ置庖丁頭一人禮服案ニ就キ料理式ヲ行フ訖テ總教廳ノ上座ニ就キ弘道館記ヲ講シ次ニ日本書紀孝經各一二
章ヲ講ス次ニ諸教師亦各其技ヲ奏スル式ノ如シ訖テ皆廳座ニ就キ雁羹及酒ヲ賜フ此日文館教職ハ夙ニ本館ニ登リ文

昌星像ヲ上座ニ裝置シ各盥嗽之ヲ拜シ以テ恒例トス是舊影若館開場ノ式
今是ヲ本館ニ行フ

一 每秋賜鯉魚ノ儀アリ凡秋候始テ鯉魚ヲ捕ル先之ヲ天朝及幕府ニ獻シ次ニ祖廟ニ薦メ訖テ鮮鯉各一隻ヲ總教已下手副
已上ニ頒賜ス此日總教已下皆禮服館ニ登ル公使命ヲ傳フ並ニ賜雁ノ儀ノ如シ但鯉魚ハ各之ヲ其家ニ頒賜ス國老等預
ラス特ニ教職ヲ優ニスル也

一 每歲大試已ニ終レハ國老執政已下考試ニ預ル者及生徒試ニ應スル者皆酒肴ヲ賜フ此日生徒已上皆禮服館ニ登ル其宴
ヲ賜フ公使命ヲ傳フルノ儀ナシ若シ總司奉行等アレハ座ヲ起テ教職ヲ慰レ盃ヲ侑ム家塾生習字試ニ應スル者ハ皆當
日果子ヲ賜フ故ニ宴ニ與カラス

一 凡大試一場終ル毎ニ國主更ニ正廳ニ臨ミ生徒ヲ召シ之ヲ慰勞ス若シ執政等之ニ代ハルモ亦其儀ヲ行ヒ考試ノ狀當ニ
君廳ニ達スヘキノ意ヲ述フ

一 毎月三八五十ノ日國老執政等館ニ登レハ總教已下諸教師舍長已上皆直所ニ就キ之ニ謁ス其文館ハ毎早總教座ニ就ケ

一生徒館ニ入者ハ日々名刺ヲ監察局ニ出シ文ハ舍長武ハ手副又各之ヲ考課簿ニ點注ス每歲首舍長手副其簿ヲ調査シ其日數ヲ錄シテ二本トナシ一本ハ館底ニ留メ一本ハ監察局ニ出ス監察又之ヲ其帳簿ニ參照考勘シ以テ政府ニ進メ賞罰ノ考案ニ供ス

賞罰ノ法

一文武教職常ニ生徒ノ勤惰優劣及操行ノ正否ヲ考察シ其當ニ褒賞スヘキ者ハ每歲初文ハ舍長武ハ手副教職ノ旨ヲ受テ文案ヲ具シ總教ヲ經テ之ヲ政府ニ申請ス監察又歲中考課ノ多少平日ノ舉動ヲ檢勘シ政府ニ稟議ス政府乃チ其當ニ賞スヘキ者ヲ定メ之ヲ城中ニ召シ其職ヲ進メ俸ヲ加ヘ及紗綾^{布衣}白銀^{平士}已上ヲ賞賜スル者ハ執政之ヲ命シ其他物^{上下地袴}刀^類等ヲ賜フ者ハ參政之ヲ命ス

一舊例諸士嫡子年四十ニ滿ル者ハ必ス一職ニ補ス此ニ至リ藝業優長操履篤實ナル者ハ四十ニ滿タサルモ亦之ヲ任用スルノ例トス其襲職升級等皆之ニ準ス若シ才藝超群ノ者ハ次男已下ト雖凡庸祿ヲ給ス其懶惰業ヲ廢シ言行放恣ナル者ハ嫡子ト雖亦永ク叙用セス

一文ハ居學生武ハ免許已上子弟數年勵精怠ラサル者ハ特ニ白銀二枚已上ヲ給シ修業ノ費ニ充

一文武生徒優等ノ者ハ臨時或ハ書籍及槍刃等ヲ賜ヒ之ヲ獎勵ス

一物頭已下平士已上嫡子文若クハ武ニ長スル者ハ百人ヲ限リ牀几廻組ニ撰補スルノ例トス後又遊擊隊ヲ置キ其次男已下文武ニ勵精シ特ニ砲術ニ長スル者ヲ舉ケ之ニ補充ス

一弓砲免許已上其業ヲ勤ムル者ハ特ニ射獵銃獵ヲ許シ之ヲ獎勵ス射ハ四時毎月一次^{二十}銃ハ四月ヨリ八月ニ至ル月六次^三ハトス

一騎砲ハ特ニ之ヲ勵マス三聯銃ヲ用非大試ノ日三發皆中及二發中ル者ハ即時白銀ヲ賞賜ス

一怠慢放逸文武ニ從事セス及常ニ日課ヲ欠ク者ハ監察之ヲ檢勘シ政府ニ申シ其罰ヲ擬ス奪職降等^{職ニ在限滿チ應ニ升級スヘキ者更ニ其等ヲ降スナ云}

增課^{日課十五日ノ者増シテ三十日トスルノ類}等各差アリ

一生徒師長ニ順ナラス及過失アル者ハ舍長手副先之ヲ教諭シ若シ悛メサレハ教職之ヲ譴責シ尙悔悟セサル者ハ政府ニ申シ謹慎ヲ命シ其居學生ハ或ハ降シテ講習生徒トナシ免許已上ハ或ハ其狀ヲ追奪シ以テ之ヲ懲艾ス

學中諸儀

一社廟祭日及毎月朔望ハ平士已上并生徒皆禮服拜謁セシム

一士大夫服紀ニ疑ヒアル者及喪祭儒禮ヲ用ヰントスル者ハ皆之ヲ總教ニ質シ然後ニ之ヲ行ハシム後ニ總教葬祭ノ儀ヲ議定シ公裁ヲ經テ錄シテ冊子トナシ國中ニ頒布ス

一珍書秘籍等抄寫スヘキ者ハ居學生ヲシテ之ヲ寫サシメ備書料ヲ給與ス

一寄宿生食料皆之ヲ給與ス厨吏之ヲ監ス厨後浴室ヲ置生徒ヲシテ日々入浴セシム

一灌水場一所ヲ武館ノ側ニ置生徒ノ洗浴ニ供ス

一各場用ヰル所ノ薪炭皆之ヲ給ス其文館教職ハ特ニ茶ヲ給ス

一生徒ハ皆常用門ヨリ出入セシム南北二門ハ教職吏員ヲ除クノ外出入ヲ得ス諸門皆門者ヲ置之ヲ監セシム

一工作場ヲ正廳ノ側ニ置臨時修繕ノヲ掌ラシム

一文武生徒他藩ニ游學セント請フ者其人物ヲ勘檢シ之ヲ許ス或ハ人才ヲ撰ミ特ニ游學ヲ命シ其費用ヲ資給ス

一管庫及監察工作等ノ吏員ヲ廨舍^{三十間}ニ住セシメ臨時事務ニ供給ス

一生徒疾病事故アリ日課ヲ欠ク者ハ其由ヲ監察局ニ申陳セシム若シ館ニ入故アリテ業ヲ執ル能ハサル者亦之ニ準ス

一他藩士來テ業ヲ受ケント請フ者其本籍分明ナレハ教師之ヲ政府ニ申シ允テ得家塾ニ於テ之ニ教フ若シ游歴ノ者ハ先之ニ旅舍ヲ授ケ日ヲ期シ之ヲ看街亭ニ延キ教職之ニ應接シ文ハ正廳ニ召シ經史ヲ講セシメ生徒傍聽ヲ許シ武ハ生徒

ト對試セシム有司亦臨觀ス

附郷校ノ制

延方郷校 行方郡延方村ニ在文化三年郡宰小宮山昌秀建議之ヲ設ク國主哀公親ラ至聖文宣王ノ五字ヲ神牌ニ題シ之ヲ賜ヒ祠堂ヲ建之ヲ祀ラシム初メ延寶中義公命シテ講堂ヲ久慈郡馬場村ニ設ケ章考館儒士ヲシテ毎月三次分番經書ヲ此ニ講シ庶民ヲシテ之ヲ聽カシム民始テ學ニ向フヲ知ル其後肅公又城西八幡巷朱舜水祠堂ニ就キ講坐ヲ設ケ士民ノ聽講ヲ許ス然レモ未タ郷校ノ設ケアラス此ニ至テ昌秀始テ此舉アリ因テ其管色富民ニ諭シ書ヲ購シ之ヲ納レシメ郷士若シクハ村醫等文學アル者ヲシテ館事ヲ掌ラシメ衆庶好學ノ者就テ講習スルヲ許ス又農隙ヲ以テ衆ヲ會シ經ヲ講シ庶民ヲシテ傍聽セシム天保中ニ至リ益々其制ヲ弘メ郡邑便宜ノ地ヲ擇ミ學ヲ建ツ後又武場ヲ其内ニ設ケ郷士及防海卒ヲシテ劍砲等ノ技ヲ演セシメ郡宰時ヲ以テ館ニ臨ミ衆ヲ會シ之ヲ試ム弘道館教職亦請ニ應シ席ニ列ス諸校皆之ニ同シ

小川郷校 茨城郡小川村ニ在亦小宮山昌秀設クルトコロ初メ稽醫館ト曰ヒ專ラ醫學ヲ講セシム天保中今名ニ改ム

ハ教授已下舍長已上之ニ謁シ居學講習講習別局諸生次ヲ以テ執謁シ訖テ各其業ニ就ク
 一總教已下諸教師ハ皆教職ト稱ス舍長手副亦之ニ準ス生徒之ヲ稱シテ先生ト曰フ教職ノ生徒ニ於ケル直ニ之ヲ名イフ
 某丈等ノ稱呼ヲ用サルヲ得ス

一文館教職并管庫等毎歲正月歲旦詩歌ヲ國主ニ獻シ以テ賀ヲ表ス生徒亦之ヲ獻スルヲ得

一番頭物頭諸隊長ハ學政ニ預ラサレバ時ヲ以テ館ニ登リ隊士ノ能否ヲ檢考ス若シ其日課アル者學ニ在ノ日ハ皆生徒ニ
 比セシム

給假ノ制

一毎月朔望三五七九月節日四仲廟祭國主忌日二月十五日祈年祭十一月中卯新嘗祭春秋釋奠正月廿八日閱馬三月土神

祭八日九日三月廿一日大蒐前二日四月十七日東照宮祭前二日九月十五日吉田祭若シ延テ十六日ニ至ルモ亦假ヲ給ス十二月廿六日ヨリ正月十五

日ニ至ル皆假ヲ給ス

一寄宿生ハ給假前一日申時ヨリ歸宅ヲ許ス若シ當主ハ寄宿中二三次歸宅家事ヲ經理スルヲ許ス但其日申時ヲ以テ退キ

翌日辰時ニ入ラシム

一喪ニ遇フ者ハ常式ニ準シ假ヲ給ス

一考妣祭日亦上ニ準ス

雜制

一監察吏員并下吏ハ常ニ交番局中及文館醫學館等ニ分直シ生徒ノ出入ヲ監シ非違ヲ檢察シ其講經考試等ノ場ハ小監察

常ニ之ニ臨監シ生徒退館ノ際各場ヲ巡視火ヲ戒メ夜中ハ時ヲ以テ寄宿寮ヲ巡警シ凡學中臨時事故アレハ皆之ヲ處分
 ス

一文館書庫藏スル所本朝書籍及漢土四部書等有用ノ者ハ各數部ヲ備置シ生徒ノ學習ニ供ス若シ家ニ借覽スル者ハ每一
 人冊數日限等各定規アリ其彰考館藏書ハ居學生已上亦借覽ヲ許ス

一醫學館倉庫ハ本朝及漢洋ノ方書外科器械電器等ヲ備置シ生徒ノ學習ニ充

一武藝須ユル所ノ器械麻布等各之ヲ給與ス各場皆定數アリ

一館記學則及群書治要收ムル所ノ孝經管子載スル所ノ弟子職篇ノ如キ皆之ヲ館ニ刻シ生徒ニ頒給ス

一國主時或ハ詩歌ヲ作り之ヲ館ニ下シ教職及生徒ヲ屬和セシメ以テ例トス其詩歌ハ勒シテ冊子トナシ永ク館ニ藏ス

カ師ト定ム此ノ時ニ當リ所謂山崎門ノ學派ナリ後チ天保ノ度養父寅直ノ初ニ及ンテ大ニ程朱學ヲ振張スルニ志アリ乃藤森恭助號臥庵ヲ聘シ一藩ノ師トス恭助程朱學ヲ奉シ經濟實用ノ學ヲ唱ヘ傍ラ詩文章ヲ學ハシム同十年丁亥ニ及ンテ城外々西町ニ新タニ校ヲ營ミ之ヲ遷ス恭助ノ藩ニ在ル前後廿年其去ルニ及ンテ高門弟子代々ノ教授ノ職ニ登ル文久三年癸亥秋常名村新屋敷ヘ本館ノ分校ヲ設立ス采藻館是ナリ教授教員ヲ置キ子弟ヲ教育ス教法教則本館ニ同シ明治三年藩制改革ニ際シ本館書生寮狹隘ナルヲ以テ別ニ寮ヲ城内ニ置キ書生數十名ヲ教育ス

生徒階級

素讀生 用書ハ四書小學五經ヲ順次ニ卒ヘシム月尾ニ至リ必其ノ業ヲ試ム五經ヲ卒ル后遜業生ニ入ル未タ卒ラサルモ

十七歲ニ至レハ同シク此ノ科ニ登ス

試驗

卒業賞品左ノ如シ 毎月試業上等ノ者 半紙二帖〇六ケ月上等相續ノ者 蒙求壹部初度

劉向新序壹部再度

方正學

文粹壹部三度

國語壹部四度

〇十歲前四書讀卒ル者 小學壹部〇十五歲前五經讀卒ル者

十八史略壹部

但シ十一歲ニテ五經讀卒ル者ハ唐

荆川文粹壹部ヲ加賞ス

遜業生 入科後壹年ヲ隔テ辨志生ニ登ル年長有力ノモノニシテ新タニ入學スル者ハ先ツ此ノ科ニ入レ後チ其力ヲ量リ

テ相當ノ科ニ就カシム

辨志生 入科後一年ヲ隔テ敬業生ニ登ス但シ讀長トナルモノハ年數未滿ナレバ此ノ科ニ入ル

敬業生 入科後一年ヲ隔テ博習生ニ登ス但シ句讀師トナルモノハ前ニ同シ

博習生 入科後一年ヲ隔テ小成ニ登ス但シ助講トナルモノハ前ニ同シ

小成 年次ヲ以テ登スモ此ニ止ル但シ都講トナルモノハ前ニ同シ

選士 考試登第ノ者ハ是迄ノ階級ニ拘ハラズ此ヘ登ス

學科學規試驗法及諸則

文ハ和學漢學醫學ノ三途ニ從事ス但和學醫學ハ別ニ試驗ヲ要セス

毎月二七ノ日 教官并ニ敬業生以上 輪講經書

會讀子史 〇三ノ日

讀長并ニ辨志生迄 輪講經書

會讀子史 〇八日 文

會 〇十八日 辨書 〇廿八日 詩會

武術ハ校中ニ演スルモノ弓槍劍柔術居合ニ止リ其他炮術馬術兵學ハ各所ニ場ヲ設ク算法筆道習禮洋學游泳等ハ別ニ科

敬業館 那珂郡湊村ニ在天保中建以下並ニ同シ

益習館 久慈郡太田村ニ在

暇修館 多賀郡大久保村ニ在

時雍館 那珂郡野口村ニ在

大子郷校 久慈郡大子村ニ在

舊土浦藩

學制

學事上ノ諸制度 文武引立ノ儀ニ付屢藩内ニ諭達シ凡ソ男子ハ必ス學ニ就カシメ文ハ八歳ニシテ學ニ入レ武ハ十七歳ニシテ藝ニ就カシム 精學ノ者アレハ之レカ獎勵ノ目ヲ設ケ嫡子ハ特別仕途ニ就カシメ次三男ハ修業扶持ヲ給シ二口或ハ三口ノ等ヲ立ツ其ノ他二季給與金夫々等差アリ就中特達ノ者ニハ戸主ハ之レカ資格ヲ進メ庶子ハ新タニ家ヲ起シ若干ノ祿ヲ給ス

士族卒ノ子弟教育方法 家塾入學ハ各自ニ任スレモ必藩校入學ノ餘カトス 遊學ハ人員ヲ定メ志願ニ任セテ之ヲ許ス但資力ナキ者ヘハ三人口或ハ五人口ヲ給ス其他資金一定セス 月々四九ノ日儒官經義ヲ講ス此日重臣監察各壹名出席其他諸役員兵士ニ至ル迄更互繰合出頭之レヲ聽聞ス

平民ノ子弟教育方法 志願ノモノハ藩校ニ入ルヲ許ルス其他寺子屋等別ニ制限ナシ尤モ別禁ヲ立テス家塾寺子屋設置ノ制度 前同様制限ヲ立テス各自ノ開設ニ任ス

凡ソ諸藩其他ヨリ文武修業ノ爲メ城下ニ過ルアレハ豫メ旅店ヲ定置キ文ハ之レヲ校内ニ延キ其講義言論ヲ聽キ武ハ之ヲ武場ニ延キ之レカ試合ヲ爲サシム其ノ宿料諸費ハ惣シテ藩費ヲ以テ之ヲ給與ス

學校

校名 土浦本校 郁文館 常名村新屋敷支校 采藻館

校舎所在地 郁文館 常陸國新治郡土浦 寛政十一己未秋内西町ニ建ツ天保十丁亥冬外西町ニ移ス

采藻館 同國同郡常名村新屋敷 文久三癸亥秋新設

沿革要略 寛政十一年己未八月第七代英直ノ時城内ヘ文武館ヲ搬置ス郁文館是ナリ譜代中學識アルモノヲ撰ミ以テ之レ

束脩謝儀 曾テ此制ヲ置カス
學校經費 書類散逸取調兼スルヲ

學校構造及建物圖面 別紙組圖一葉相添

學校ニテ出版書 出版翻刻セシ書籍之レナシ藏書ノ種類部數目錄ハ廢置ノ后散逸見當ラサルヲ

藩主臨校 藩主在城中屢臨校ス

祭儀 每歲春秋二仲ニ丁日ヲ以テ釋奠ヲ舉ク

舊笠間藩

學制

學事上ノ諸制度 凡ソ藩士ノ嫡子十八歳ニシテ蔭仕ニ就キ^{口米ヲ給ス}學業勉勵ノ者ニハ儒學退切修業ヲ命シ他ノ職務ニ關セ

シメス三五年ヲ經テ或ハ學職ノ闕ニ補シ若クハ其實トシテ祿金等ヲ增加ス又特優者アレハ就仕ノ年齡ヲ早カラシムル

ノ特典アリ二三男ニシテ學業上進ノ者ニハ別ニ祿若干ヲ給シ下士ノ列ニ加フ安政六年文武館ヲ合併セシ以來十八歳ニ

及ヘハ一般ニ文武ノ學業ヲ試考シ之ヲ二途ニ分タス優者ニハ口米ヲ給シ始テ蔭仕ニ就クヲ得或ハ文武退切修業ヲ命ス

劣者ハ更ニ研究ノ科ニ入ラシメ兩三年後之ヲ再試ス凡ソ藩主就學ヲ諭達スルヲ寬政度以降幾回ナルヲ知ラスト雖今ソ

ノ文書等烏有ニ歸スルヲ以テ調査ソノ詳ヲ得ル能ハス

士族卒ノ子弟教育方法 文化以往ニ於テハ私塾入門等各自ノ意向ニ放任セシト雖時習館創立^{文化十四年}以後ハ士族ノ子弟概

テ八歳ニ至レハ入學セシムルヲ法トス筆道算術ハ藩立校管理セサルヲ以テ猶舊ニ仍ル但下卒ハ其ノ情願ニ任シ縱令藩

立校ニ入ラサルモ之ヲ罰スルノ法ヲ設ケス^{下卒云々ノ制安政度以來廢止一般ニ八歳ヲ以テ入學セシム}

生徒ノ游學ハ落費私費共ニ從來之ヲ許可セリ落費ヲ給スルノ法著シキ定則ナシト雖或ハ其費途ノ全部ヲ與ヘ或ハ幾分

ヲ給スル等アリテ一定セス

講義ハ每月三回四回之ヲ開キ藩士少壯ノ者ヲシテ生徒ト共ニ參聽セシメ職務ヲ帶フル者ノ爲メニハ別ニ落聽ニ於テ講

義ヲ聽カシムルノ制アリ

附他藩ノ士游歷シ來ル片ハ之ヲ學館ニ延キ一二書ノ講義ヲ望ミ生徒ヲシテ聽聞セシメ或ハ輪講討論セシメ數日間旅

舍ヲ給シ優遇ス^{武藝者モ之ニ準ス}

ヲ立テス各自ノ之ヲ修ムルニ任ス

凡ソ一科ノ武術免許ヲ得ルモノハ四書ノ大義ニ通スルモノニ準シ兩道トモ其都度褒賞ヲ與フ三科ノ免許ヲ得ルモノ經書ノ大義ニ通スルモノニ準シ嫡子ハ特ニ仕途ニ就カシメ其家格ニ應シ相當ノ米金ヲ給ス庶子ハ別ニ二人口ヲ給ス文武ハ必ス兩道ヲ兼修セシム若シ一道ヲ專修セント願フモノハ詮議ノ上之ヲ許ス

試驗法文武共春秋兩度ニ行フ賞品文ハ書籍ヲ與ヘ武ハ銀兩ヲ與フ尤甲乙ニ依テ其差アリ平生褒賞仕途アルモノハ其資格ヲ昇シ仕途ナキモノハ其給ヲ増ス或ハ一時銀兩ヲ付ス其罰ハ仕途アルモノハ資格ヲ貶シナキモノハ之ヲ呵責ス

〔考試例〕 四書小學 辨書一條〇五經 同斷〇史記左傳 譯文一條〇通鑑綱目 對文一條〇詩 一首 五言排律 〇策論 一篇 右六條ノ内五條以上高點ノモノヲ甲科トシ四條ヲ乙科トシ三條ヲ丙科トス二條ニ及ハサルハ落第トス之ヲ大試

ト名ツク

經 二條 史 二條 右四條ヲ摘出シテ之ヲ試ミ以テ甲乙丙ヲ分ツト小試ト名ツク

〔賞例〕 大試 甲科、麻上下壹具 乙科、金貳百疋 丙科、金百疋〇小試 甲科、四書小學外ニ史壹部兼ヌルモノ金百疋 乙科、褒詞 丙

科、褒詞

職名及俸祿 提學 學校惣引受ケ人ヲ勵シ學ヲ興スヲ掌ル教官並學生褒貶進退其外學校諸事ノ大綱ヲ裁斷ス寄合日毎月

壹度ツ、出席〇館頭 學校取締ヲ第一ニ注意シ教官不締ニ無之様不時ニ見廻寄合日立合會日等餘暇繰合セ出席教官ヲ進退シ司監督學ノ會議ニ列ス〇司監 諸教官ヲ督勵寄合日ニ列席シ館頭督學ト協議シ諸事提學ヘ申達シ且不時ニ見廻リ講義ノ節出席〇世話役 毎朝壹人宛出席生徒ノ行儀ニ注意シ其外教官ノ日課簿取調督學ヘ申達〇下目付 校費金錢

請取方并修繕取調ヲナス〇書記 當番加番相立壹人ツ、相詰帳簿ヲ記載シ其外諸用度取調ヲナス〇使令童子〇廝役

〔附錄〕維新以後更ニ少參事一名專ラ文武ヲ管セシメ權大屬二名之ニ附屬ス從前ノ提學館頭司監文武掛ノ四職ヲ廢ス

職員概數

教官 人員不定 諸生教導方都講ヘ指授シ一切ノ勤怠高下ヲ辨シ館頭司監ト相議シ進退黜陟提學ヘ申達スル

一〇都講 兩入隔日 毎朝出席復講輪講下讀質問ノ世話諸生取立方督學ノ差圖ヲ受ク書籍預リ助講ト申合曝書ノ節 例年七月一日ヨリ十日マテ

調査ヲナス一〇助講 兩入隔日 毎朝出席素讀ノ生熟ヲ察視シ輪講ノ節出席書籍ノ預リ前ニ準ス〇句讀師 六人ニテ 毎朝出席

諸生素讀引受ケヲナス一〇助讀 時ニヨリ之ヲ置ク 〇讀長 人數不定大概十人以上八人宛 句讀師素讀ヲ授クル後溫讀爲致熟スル者ハ助講ヘ差出シ

生徒概數 定員ナシ但寄宿費ハ油薪炭ヲ給ス餘ハ自費ノ一

ト相對ス今ノ西演武塲諸規則モ亦更正スル所アリ此ニ贅セス
茨城郡役所是也

明治六年學制頒布以來本校ヲ以テ小學ニ充ツ同十四年四月本校火ヲ失シ棟宇及ヒ書籍器具悉ク灰燼ニ付セリ諸舊記モ
同時烏有ニ歸セシヲ以テ沿革ノ源委之ヲ詳録スル能ハサルモノアリ

教則

舊時習館課第^{文化度制}定ノ教則

初課口誦^{此課ヨリ對誦迄ノ三科ヲ句誦生トス}

時習館功令學則 合刻四書^{孝經學記大學中庸}

論語正文^{片山錄山點本}

孟子正文

後課口誦 尙書正文

毛詩正文

禮記正文

對誦^{自己獨誦ニテ訓詁ノ正否ヲ部誦ニ請フノ科}

周易正文

周禮正文

儀禮鄭注

孔子家語

對讀入第^{此課ヨリ以上ヲ誦義生トス}

蒙求 新序 說苑

世說

十八史畧等ノ講義ヲ授ケ或ハ疑義ヲ質問セシム

高第 此ノ課ヨリ以上經史諸子各ソノ好ム所ニ從ヒ豫メ書目ノ順序ヲ定メス

小成 一經ヲ熟得シ三史ニ旁通スル者ヲ以テ此科ニ充ツ

成業 學術品行共ニ優ニシテ助教授業ニ堪フル者此科ニ充ツ

授業ノ時間ハ朝五ツ時ニ起リ日午ニ至テ止ム年初歲末凡十五日間ヲ休課ノ時トナシ祝日祭日朔望等ハ業ノ半ヲ授クル

ヲ例トス夜間講義ヲ開キ生徒ノ等級ニ應シ之ヲ聽カシム大抵毎月六回ソノ他輪講詩文會等概テ夜ヲ用ヰシム

新時習館課第^{安政度以後ヲ指ス}

舊教則ヲ添刪シ大ニ面目ヲ改ム科第ノ目舊ニ依ルト雖句讀ノ教科書山子點ヲ廢シテ後藤點ヲ用ヰ儀禮家語等ヲ除キ講

義ノ用書モ加刪斟酌シ經子ノ外日本史六國史古事記傳溫史等ヲ混用セリ然レモ舊記烏有ニ屬セシヲ以テ以上ノ沿革一

一詳記スル能ハス

藩學寮教則ノ畧^{明治三年制定學制頒布前}

初科^{此五科悉ク講義生ニ係ル}

國史略

十八史略

元明史略

大學

中庸

論語

日本外史

神皇正統記

瀛環志略

此ノ他餘科

ノ書數部アリ

後科 春秋 詩經 書經 易經 史記 資治通鑑 古事記傳 令義解 萬葉集 前ニ同シ

丙科 凡ソ此科ヨリ以上各ソノ好ム所ニ從ヒ專門學ヲナサシメ大學貢士ノ撰員ニ充ツルヲ法トス

乙科 諸學漸ク熟シ畧ニ時務ニ通スル者此科ニ充ツ

甲科 才學兼達シ言行相符シ有用ノ文字ヲ著作スル者此ノ科ヲ取ル

平民ノ子弟教育方法 農商共ニ各自ノ意向ニ任セ家塾寺子屋ニテ修學セシニ止マリ藩立校へ入學スルヲ許サス然レモ農
民ノ學事ニ從フヲ禁セシヲナシ大抵農商ノ子弟ハ藩士又ハ村市中若シハ寺院等筆道算術ヲ教ユル者ニ就キ之ヲ學フニ
過キスシテ何某ノ筆子ト稱シ讀書ノ科目モ亦四書ノ類ニ外ナラス但醫生徒ハ平民及ヒ他ノ管内ノ者ト雖藩醫ノ私塾ニ
在ル者ハ皆藩立博采館醫學所醫學講義ヲ聽クヲ得セシメ又學校講義或ハ質問ヲ受クル等亦ソノ請アレハ之ヲ許可ス
家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ奉行郡宰等ノ許可ヲ待タス何人ニテモ隨意ニ設クルヲ得ヘシ然レモ當
時家塾ノ體チナス者ハ特リ醫師ノ家ニ過キス要スルニ規模狹隘ソノ塾則等記スルニ足ルモノナシ

學校

校名 文化度設立以來時習館ト稱ス安政度講武館ヲ合併セシ後ソノ稱猶舊ニ仍ル

校舍所在地 空閑字櫻町ニアリ後ニ藩治中央ノ地ヲ擇ヒ字大和田ニ移ス

沿革要略 天和貞享ノ際藩主牧野成貞備中儒學ヲ尊崇シ始テ中野搗謙ヲ聘シ藩廳ニ於テ月次講筵ヲ開カシム中野氏ヲ聘

シ講筵ヲ開クハ藩ノ學事蹟ノ濫觴ニ屬セリ時ニ藩主親ヲ講席ニ臨ミ諸役員及ヒ諸士ヲシテ輪次之ヲ聽カシムルヲ法
トス爾來多年ノ間往々因革アリト雖連綿絶ヘス以テ維新ノ際ニ至ル藩地江戶 邸皆同シ

寛政ノ初年牧野貞喜越中勵精シテ諸制度ヲ改革シ學事ヲ振張シ藩士秋元忠藏ニ命シ欽古塾ヲ創立セシメ子弟教導ノ任

ヲ帶ハシム文化十四年ニ至リ肇メテ學館ヲ營シ時習館ト稱ス額字樂翁松平定 信侯ノ筆ニ係ル學規ヲ制定シ懇諭嚮フ所ヲ知ラシメ學事頗

ル緒ニ就ク文政六年牧野貞幹越中既ニ封ヲ襲キ銳意シテ貞喜ノ遺志ヲ續キ老職川崎權左衛門ト議シ更ニ時習館ヲ改造

シソノ規模ヲ擴張シ書籍等ヲ購シ教授秋元忠藏ヲシテ時習館功令學則ヲ編セシメ自ラ序文全文後ニ附スヲ製シ之ヲ上木シ別

ニ醫學所ヲ建テ博采館ト稱シ長谷川宗僊ヲシテ之主掌セシメ藥園ヲ設ケ自ラ本草學ヲ講シ特ニ寫生畫ヲ好ミ草木禽

魚等ソノ手寫卷ヲナスモノ無慮數十部明治八九年ノ比文部省ノ命 應シ之ヲ茨城縣廳ニ納ム率先シテ獎勵力ヲ盡ス學事因テ大ニ興ル尋テ森田哲之進ヲ

以テ教授トナス安政六年牧野貞明越中守後ニ應シ之ヲ改ム藩治ノ中央廣爽ノ地ヲトシ新ニ學校ヲ營築シ時勢ヲ觀察シ學則ヲ改定シ水

戸藩ノ制ヲ斟酌シ且自ラ館記ノ文全文後ニ附スヲ作リ藩士ヲシテ方向ヲ知ラシム之ヲ營スルニ當リ藩士上下貴賤ノ別ナク協

戮シテ皆番鍾ヲ把リ勞役ニ從事セリ講武館ヲ合併シ旁ニ火技操練場ヲ設ケ醫學館モ亦校内ノ一室ヲ以テ之ニ充ツ是ニ

至テ結構ノ宏ナル規模ノ擴マレル大ニ面目ヲ一新セリ此舉ヤ執政牧野齋宮中老仁加保多宮與テ力アリ

明治三年更ニ學制ヲ一變シ學校ヲ大別シテ藩學寮小學校ノ二部トシ本校ヲ藩學寮トシ別ニ屋舎ヲ購ヒ小學校トナス本校

職名及ヒ俸祿 職員概數

監督番頭役ニテ二人 館正物頭役ニテ三人全上 教授 一名 助教 一名 同補二名或三名 都講十名乃至十二名 典禮 二名 師範 劍槍弓馬居合長刀柔

術砲術棒取手繩ノ諸流 各一二名補助一二名 事務員六名 副員六名 雜役門衛ヲ兼スル者四名

監督館正其實番頭物頭本職ノ分課ノ如シ 皆本職ノ役料アリ教授職役料ノ定制ナシ但必ス旗奉行格役高百五十石以上ニ上ラシメ其役料ヲ附スルヲ

例トス助教等仕進ノ格式ヲ與フルノ年期ヲ早シス又教授以下館員皆二季ノ慰勞金若干ヲ與フルヲ例トス是等ノ數額等

差今其ノ詳ヲ記スルヲ能ハス以上維新前ノ制ニ係ル

藩學大屬一人○同少屬二人○書記二人○事務員五人○教授二人內副一人 年給廿五石、二十石○助教三人 十五石○典句五

人 八石○算術教師二人內副一人 十石、八石○劍術教師二人 八石 以上學制頒布前即チ廢藩以前ノ制概畧

生徒概數 維新前 通學生凡二百五十人餘○學制頒布前 通學生凡三百人餘 寄宿生凡三十八人餘

館ノ規則通學ヲ以テ常トス然レハ從來ノ寄宿ヲ乞フ者ニハ居學寮ヲ貸與シ燈油炭火等校費ヲ以テス 夜學生舊時ヨリ夜四ツ時ヲ限

大抵常ニ十數人通學シテ交互相講習ス是等皆炭油ヲ給ス

束脩謝儀 子弟就學ノ時扇子一筐ヲ以テ束脩トナス文武皆同シ舊時ヨリ維新前ニ至ル生徒ヨリ別ニ謝儀ヲナサス但毎年二季入門者各

自ヨリ錢一百文若クハ四十八文ヲ出シ各課之ヲ集合シテ教官ニ納レ中元歲暮ヲ祝賀スルニ過キス

學校經費 維新前ノ事明瞭ナラス但用人一名一歲ノ校費ヲ檢査シ其ノ定額ヲ置キシモノ、如シ要スルニ館員皆世祿ニシ

テ役料慰勞金ヨリ書籍器具ノ購入營繕等皆藩廳會計ニテ之ヲ支辨シ毎月費ス所筆紙炭油等ニ過キサレハ往時ニ於テ蓋

其ノ額僅々タリシナルヘシ學制頒布前經費ノ概數左ノ如シ

米 百八十石 金 千二百圓

藩學大少屬事務員等ノ月給及ヒ營繕費等ハ此額外ニシテ藩廳會計課ヨリ別途支辨ス

藩主臨校 春秋兩度ノ大試業必ス臨校スルヲ例トシ優等者ニハ自ラ褒詞ヲナシ賞品ヲ與フ年首開ノ時亦臨ム

祭儀 安政度肇メテ小祠ヲ建テ藩祖并ヒニ孔子ヲ祀ル二月上丁ノ日藩主若クハ重職臨ンテ祭儀ヲ修ム藩士加藤熙櫻老等古

樂ヲ嗜ムヲ以テ同志者相率リテ樂ヲ奏シ綿々絶ヘス然レハ禮典全備セス記載スヘキモノナシ

學校構造及ヒ建物圖面 外圍三面ハ土手ヲ繞ラシ梅樹ヲ植エ小渠ヲ通シ背面ハ小丘ニ倚ル敷地一町八段餘校舍ノ正中ヲ

講義寮併ヒニ役員ノ詰所トナシ其ノ左ヲ醫學宿學素讀生ノ諸寮トシ右邊ハ一般武技演習及ヒ練兵ノ所トス皆木造茅葺

授業時間ハ朝八時ヨリ午時迄ヲ質問講義等正課ノ時トナシ二時ヨリ四時迄ヲ餘課トシ或ハ會讀輪講等ノ時間トス
小學校教科書ハ大略舊來素讀生ニ課スルモノヲ斟酌加損シ算術筆道ノ二科ヲ加ヘ時間ヲ増加セシニ過キス
學科學規試驗法及ヒ諸則

學科 漢學 醫學 習禮漢方 小笠原流 兵學長沼流 謙信流 國學後二加ヘタルモノ 弓術日置流 雪荷派 馬術大坪本流 劍術一刀流 示現流 槍術極原流 鑓流其他 砲術狹野嫡流其他

柔術澁川流 居合 伯耆流 集流其他 長刀 棒、繩、取手、變流我德流

平士馬廻中 小姓格 以上ニハ文武両道ヲ兼修セシムルヲ法トシ文ハ八歳ヨリ就學セシメ武ハ十五歳ヨリ學フヲ法トスト雖本人ノ志望ニ依リ十二三齡ニテ亦武技ヲ修ムルヲ許ス

文武両道ヲ兼修セシムルヲ法トスト雖其ノ比例ニ至テハ概スルニ一藩ノ好尙武術ニ傾キ擊劍ヲ學フ者最多キニ居リ文學槍術ハ其次ニシテ弓馬術次ニ居合柔術長刀等ヲ學フ者次第遞減シテ望弓馬槍ハ徒士以下志望ノ者ノミニ之ヲ許ス兵學ヲ講スル者尤少シ算術ノ如キハ學科中ニ加ヘス維新後小學校ニ置ク單ニ之ヲ能クスル者ノ家ニ就キ人々之ヲ學フニ過キス棒術繩取手ノ技ハ徒士以下輕卒ヲシテ一般ニ之ヲ修メシム特ニ砲術ハ貴賤ヲ問ハス皆之ヲ爲サシム

〔試驗法諸則〕 文學試驗ハ二月八月ノ二回ヲ以テ大試ノ期トシ藩主臨席シ重職以下列坐シ諸生諸士ノ講說ヲ聽ク其ノ法經史ノ一部中ニ就キ試ニ應スル者或ハ章句ヲ豫定スル者アリ全部ト稱スル者ハ其ノ年齡ニ應シ金圓若クハ半紙若干ヲ賞ス素讀生ノ試驗モ大概之ニ準ス 素讀生ノ小試ヲ月考ト稱シ毎月一回其科第既修ノ書二三所ヲ試誦セシム一字失忘若クハ誤讀セサル者ニハ筆管二枝ヲ賞與ス 講義生ノ小試ヲ復說ト稱シ科第ノ書一卷初學ハ十丁乃至二十丁以內ニ就キ數所ヲ摘講セシム或ハ復文ヲナサシメ又ハ詩文題ヲ課試ス

月考復說等小試ノ優劣ヲ三等ニ區分シ之ヲ試簿ニ記注シ積三個月上等ニ居ル者アレハ半紙ヲ賞與ス但年齡ニ應シ其數差等アリ 年齡未タ十五歳ニ至ラスシテ高等ノ科ニ上ル者ハ書籍國語ノ類一部并ヒニ金圓或ハ半紙ヲ賞與シ之ヲ特表ス 生徒一年間上校一日モ懈怠ナキ者ハ學業ノ優劣ヲ問ハス年末賞金ヲ與フ 生徒五日間欠席スル者アレハ館員之ヲ召喚シテ其理由ヲ糾シ肄業中亡狀ナル者ハ放課後一二時間拘置スルヲアリ此他ニ罰則ヲ設ケス

入學者ハ必ス禮服ヲ着ケ先ツ教授ノ宅ニ赴キ束脩ヲ納レ然シテ學校ニ至リ學規等ノ口諭及ヒ讀本一二章ノ口授ヲ受ケ了テ學職各家ヲ回禮ス

武術大小ノ試驗モ亦概略文學ノ法ノ如シ優異者ニハ面小手料或ハ單ニ金圓ヲ賞與ス

過キスシテ別ニ方法ヲ設ケス分領内平民子弟ノ教育家塾寺子屋設置ノ制度ハ本項ニ記スルモノト同シ故ニ贅セス

舊麻生藩

學制

學事上ノ制度 布令諭達等往々有之シモ原文散失ス纔ニ輒近ノ錄スルモノ別冊舊麻生藩學校精義館記事中心ニ載之但上進ヲ褒シ獎勵法等ハ學士一時ノ賞譽ニ止ル

士族卒子弟教育方法 壯者ハ必藩立學校ヘ入學セシメ且藩士ヲシテ生徒ト同ク講義ヲ聽聞セシム私費遊學ヲ禁セサルヲ令セリ

平民子弟教育方法 家塾寺子屋ニ修學スルト否トニ干涉セサルヲ以テ其方法ヲ設ケス無論禁止ヲ加ヘス藩立學校ヘ入學スルモ妨ケス但許可令ヲ布カス

家塾寺子屋設置之制度 前條ニ同キヲ以テ其制ヲ建テス開否ヲ檢束セス里正等ノ制ヲ受ルモ聞サル所

學校

校名 精義館ト號ス江戶邸ハ校名ヲ付セス

校舍所在地 麻生陣屋外廓ノ内ニ設ク移轉セシモ同廓内ニ於テス

沿革要略 中世隱岐守直時

直時實交二年襲封延寶五年ニ卒ス

殊ニ儒術ヲ重シ初メ江邸ニ於テ津久井俊庸

俗稱伊兵衛ナル者ヲ儒者役トシ經筵ニ

當ヲシメ兼テ兵學ヲ講セシム直時嗣子直詮代ニ至ル直詮俊庸ヲ藩地ニ遣リ郡宰ヨリ參政ヲ歷命シ兼テ家ニ教授セシム

ルヲ元錄ノ初年ニ及フ俊庸流瓢ト號ス著書涉園集アリ後年ニ災ニ罹テ稿ヲ失ス俊庸子俊正又伊兵衛稱ス箕裘ヲ繼ケトモ學職ヲ命セス藩地

ノ私家ヲ教授スルニ任スルヲ越中守直隆直隆ノ係ニシテ駿河守直祐ノ子ナリ代實曆ノ初年ニ及フ俊正寒松ト號シ老職ニ擢ンツ著書ニ望浦集

アリ稿ヲ失スル前ニ主殿頭直計直祐ノ係ニシテ駿河守直規ノ子ナリ代享和二年ヨリ尤學業ヲ擴張シ大ニ儒風ヲ獎ム江邸ニ於テ藩士吉田義輔ナル者

ヲ以テ儒者トシ其私校ニ添付スルニ官舍ヲ以テシ經筵ニ當ラシム義輔蘇寮ト號ス義輔致仕ス其孫蓋ナル者ヲ以テ經筵

トス以下駿河守直彪代弘化以後ニ係ル故有テ罷ム尋テ儒士小島某ナル者ヲ聘シテ江邸ノ學筵ニ當ラシム給スルニ定祿若干ヲ以テ俸無シ時

ニ初テ別ニ學所ヲ設ケ某沒シテ假ニ侍讀津久井伊格ナル者俊庸七世孫ナリヲシテ子弟ヲ教授セシム尋テ藩士市場謙後ニ霞ト更ムナル

者ヲ藩地ヨリ召テ江邸ノ學所ニ教頭タラシム年俸六石ヲ加フ堤久作ナルモノヲ以テ助教トス俸五石六斗是ヨリ先藩地

時習館功令學則序

古之爲教也上自天子之國下至閭巷必皆有學人自童龀游息乎其中不爲耳目所誘其所目睹莫非進德之事動作周旋之儀揖讓語默之節自得其宜也一身已修延及家國鄉射養老之禮祭祀征伐之事無不自學出也嗚呼盛哉本邦往昔亦有學校之教政綱漸弛姦雄並起割據分裂以攻伐爲賢讀書講道纔存于縉流之徒學校之教泯滅無聞足利氏之學獨存其名耳方今四海寧一四民安業諸侯之國各設學校曩者吾藩之學儒者各有塾然未設國學之名也先考勵志于治術頗有改革之事焉文化之末肇設學館名曰時習舉藩翁然嚮學及余之襲封子弟益進至館中不能容也今茲更移之廣爽之地定館職增生員委秋元良以學政之事即作功令學則以授子弟其所以教喻也雖以古注爲標的又不廢諸子百家博學無方要期之修身治國之功矣實嚮學之正路子弟之指南車哉嘗聞之南山之竹不揉自直然而不假括羽鏹厲之功則不能成其用也人非無材質之美然而不假講學修爲之功則不免爲鄉愿也雖小技術也必求其師勞心盡力而後得其道矣至修身治國而不知求其師學其道唯意之從則以修身治國爲不如小技術也夫孝弟也者仁之本也仁者必有勇孝子之門出忠臣馬必馴良然後有千里之功矣人必忠信然後爲萬夫之望矣苟無忠信之實而知勇超過于人者譬之豺狼不可近焉今也子弟謹從功令學則畫一遵奉真積力久則習與性成入則孝友慈愛出則忠信孫弟英才接踵而出官得其人下能從令則吾無爲而國家歸于治矣吾將望於將來也子弟冀其勉哉亦因以自警焉子曰君子學道則愛人小人學道則易使也豈其不然乎

文政癸未之冬

牧野貞幹 撰

○ 江戸藩邸學校ノ概要

江戸藩邸文學ノ起由モ亦前項中野搦謙ヲ聘スルノ時ニ肇メレリ其ノ文武ノ教場ヲ創設セシハ寛政度ニ屬スルモノ、如シ日比谷^上濱町^中二邸共ニ忠誠館ヲ置キ講學ノ所トス要スルニ舊記散逸據テ詳記ス可ラス藩主牧野貞喜^{寛政ヨリ文政ニ至ル}シ日比谷^上濱町^中二邸共ニ忠誠館ヲ置キ講學ノ所トス要スルニ舊記散逸據テ詳記ス可ラス藩主牧野貞喜^{寛政ヨリ文政ニ至ル}ヲ更制スルニ及ヒ邸中諸士ノ教養ヲ圖リ儒臣守岡善太夫ヲシテ學則諸規ヲ定メシメ尋テ牧野貞幹^{文化ヨリ文政ニ至ル}遺志ヲ繼ギ之ヲ振興シ營葛陵棚谷東市高嶋南臺ノ諸士ヲシテ相踵テ教職ノ任ニ當テシメ併セテ萩原嵩嶽^{萩原氏ハ江戸町儒者大蔵嵩岳縁野等相踵テ邸禮學館ノ講義ヲ主}トリ近代ヲ聘シ學事頗フル擴張ス嘉永安政ノ交江尻庄三郎其職ヲ續ク文久二年江戸邸住居ヲ止ムルノ令出テ、ヨリ學舍ニ至ルモ亦隨テ墜廢ス概スルニ學科試驗法諸規則畧藩治ノ制ト大同小異アルニ過キス

陸奥^{今ノ磐城}ノ神谷常陸ノ眞壁兩地ハ空閒藩ノ分領^{當時飛地ト稱ス}ニ屬ス陣屋ヲ置キ吏員ヲ派シ領内ノ庶務ヲ管理セリ此等ノ子弟

日本教育史資料卷三

諸藩ノ部

東山道

舊彦根藩

緒言

本年二月文部省府縣ニ令シ調製要目ヲ付シ八月ヲ期シテ教育沿革史ノ資料ヲ徵ス仍ホ舊藩主井伊氏ニ囑シテ亦之ヲ徵ス之ニ加フルニ滋賀縣亦井伊氏ニ託ス井伊氏予ニ囑シテ調査編纂セシム而ルニ舊藩ノ簿書習キニ廢藩ノ際悉皆散逸シテ一モ存スル者アルヲ無ク舊藩士ノ私記ヲ藏スル者モ亦多クハ廢紙ト爲ス今ヤ原書ノ據ル可キ無ク宛カモ雲ヲ捫ニ異ナラス乃チ井伊氏ノ舊記ヲ借り普ク舊藩士ニ就キテ殘餘ノ私記ヲ求ム多クハ四方ニ散居シ郷里ニ留住スル者殆ント稀ナリ故チ以テ書ヲ送り人ヲ馳セ數月ヲ經テ稍少シク得ル所アルモ完全ナラス而シテ期既ニ迫ル是ニ於テ七月始メテ稿ヲ起シ彼レニ據リ此レニ採リ古老ノ口碑ヲ筆シ家祖ノ手記ヲ錄シ舊館吏ニ質シ自カラ經歷スル所ヲ書シ苟クモ學事ニ關スル者ノ耳目ニ觸ルハ則チ片言隻句モ遺スヲ無ク力メテ網羅收拾ス猶ホ搜索セハ盡シ得ル所アラン然リト雖モ獨リ時日ノ餘裕無キヲ奈ンセン拮据勉纒力ニ稿ヲ脱シ本編七卷附スルニ圖一面ヲ以テシ名ツケテ舊彦根藩學制志ト曰フ予ヤ謫劣寡聞遺漏ノ多キハ論ヲ竣タス加フルニ文辭ヲ務メス自他混淆ノ語アルモ校訂ノ餘日無シ唯聊サカ萬一ヲ錄シテ畫ヲ塞クノミ識者之ヲ正サハ幸ヒ甚タシ抑弘化三年予年甫メテ十三始メテ弘道館ニ入學シ二十五ニシテ索讀方ト爲リ二十九ニシテ他職ニ轉ス其間或ハ城門ニ勤役シ或ハ供目付ニ從事シ或ハ江戸ニ相模ニ京師ニ役スル者數回加フルニ多病ニシテ學館ニ出入スルノ日ハ僅少ト雖モ凡ソ十七年間蓋シ七八年ニハ下ラサル可シ三十ニシテ目付ニ轉シテ亦學館ニ出入シ尋テ職ヲ辭シテ閑散ニ就キ後假リニ物主兼書物奉行ノ補ト爲リ復タ學館ニ出入スル者半年所予ノ職ニ在ルヤ間アルハ輒チ舊記ヲ探リテ之ヲ見ル其素讀物主及ヒ目付ノ舊記ヲ見シニ皆學館創設以來ノ事實頗ル具サナリ回顧スルニ二十餘年前ノ事ニシテ一モ胸裡ニ認ムル者無シ然リト雖モ即チ今調査ニ當リテ少シク裨補無シトセス憾ムラクハ簿書ノ存セスシテ詳記スルヲ能ハサルヲチ

ハ鬼澤胤長綱市ト通稱スナル者子弟ヲ家ニ教授スルニ任ス別ニ給ナシ直計代ニ當ル尋テ藩臣伴俊昭ナル者私校ヲ開テ教授ス直彪命シ

テ武館劍槍柔ニ教影講義セシメ藩士ニ聽聞セシム別ニ俸無シ俊昭俗名鐵造蘇寮ノ高門弟子書詩及國歌ヲ善ス所著若干種アリ今皆稿ヲ存セス大監察ニ擢ス没シ藩士高木大之進ナル者ヲ以テ特リ講義ヲ武館ニ行ハシム高木參政格ニ拔擢シ命シテ貢士トセシモノ江邸著者千種アリ今皆稿ヲ存セス大監察ニ擢ス閉ルニ及ンテ市場謙ヲ藩地ニ下シテ教授タラシメ下野

守直敬代ニ及テ更ニ精義館ヲ建設シ學事稍々整頓スルニ至ル事精義館紀事中ニ略記スルモノ別錄トス

教則 四書五經和漢歷史韓柳文及諸子ヲ間ヘ讀書講習作文漢譯作詩等ヲ以テス時間ハ子弟ノ出入ニ任セ且夜學ヲ開ク暑

熱ニ當テ休ス

學科學規試驗法及諸則 藩内別ニ精義館ヲ設ケサル以前ハ授業ハ私校ニ於テ講義ヲ武術教場ニ於テ演シ藩士ナシヲ聽聞

セシム一藩都テ文武兩藝ヲ學ハシム一科ヲ專修スルモ妨ケス但常務ノ暇ヲ以テセシム精義館ノ設ケ有之ヨリ學官ヲ設

ケテ生徒常日ノ試驗ハ督學之ヲ試ミ時ニ臨ミテ正廳書院ト稱スルモノニ親試ス賞格アリ校學則アリ並ニ精義館紀事中ニ列記スル

ヲ以テ此ニ揭ケス但學習期限ナシ且武術ノ程度ニ比スルノ例無ク筆算等ヲ授ケス本館ハ漢學一途トス

職名及俸祿 總長重役ヨリ攝ス一人督學一人教頭一人助教一人定員一人ト雖モ時ニ出入セリ少助教三人同史生一人或ハ得業生ト號シ給仕一人教頭定

祿ヲ以テシテ俸給ナシ精義館ヲ設ケ役員ヲ定メシヨリ督學助教以下月給ヲ付ス江邸ニ於テ立シモノハ史生ヲ兼ルモノ督學四圓助教三圓少

助教二圓史生一圓教頭座次ハ從來之定班ヲ以テシテ特殊無之上下並ニ同シ所謂詰扶持ナルモノ

職員概數 總長督學教頭各壹人助教少助教併テ四人時ニ出入アリ史生或ハ得業生ナル者一人給仕壹人大凡十人

生徒概數 寄宿生數人時ニ増減アリテ不一定通學スルモ自費トス大凡生徒六十名上下

束脩謝儀 束脩各人ノ意ニ任ス學館ノ設置有之ヨリハ謝儀ナシ

學校經費 精義校開設ヨリ器械炭茶等見品ヲ以テ給ス外ニ一週年百廿圓ヲ付シ但毎月十圓ヲハ賞典ノ用トシ其贏レルヲ以テ月ニ

或ハ時ニカ以和漢書籍購入ノ料トス其細ナルハ紀事中ニ散見ス但學費賦課等ノ事ナシ

藩主臨校 精義館之設アリシヨリハ臨校シテ教頭生徒等ノ講義講習ヲ聽ク茶菓ヲ與フ或ハ開筵歲初發會等ニ臨視スル酒

殺ヲ賜フノヲアリ時ニ校員等殺ヲ獻シ臨場ヲ欽スル詩文等ヲ進ルモノ有リ其略亦紀事中ニ散見ス

祭儀 假リニ文宣王畫像ノ幅ヲ席上ニ掛ケ祭奠ノ式ヲナサシメシノミ

學校構造及建物圖面 地坪大凡三百坪前後建坪五十餘歩ノ圖面今散失ス藏書八十部紀事中ニアリ公私學舍ノ學記序文ノ

類往昔之分皆散失シテ稿ヲ存セス纔ニ詩文ノ一二近時ノ紀事中ニ散見ス但醜文惡詩特リ觀ルニ足ラサルノミナラス編

史參考等ニ供スルニ足ラスト雖用偶紀事中ニ存在スルヲ以テ削ルニ及ハスシテ寫載スルノミ

ル者ナリ其給ハ二十四苞三口俸此兩步行ハ從前卒ナルヲ安永二年藩主直幸ノ時昇セテ步行ト爲ス者ナリ
番上トハ足輕以下薄給ノ者勤功或ハ老年ニ至レハ別ニ俸ヲ給シ邸ヲ與ヘテ城内諸門ニ勤番セシム是ヲ番上足輕ト曰フ足

輕ノ給ハ廩米二十二苞三口俸其番上リハ十二苞二口俸ナリ而シテ番上リノ子ヲシテ直チニ父ノ後ヲラシム是ヲ跡目引
替ト曰フ番上リハ其身及ヒ妻ト二人ハ子ノ侍養ヲ受ケスシテ身ヲ終ヘシム即チ薄給者ヲ優恤スルノ特典ナリ人員定數

アリ闕員アルニ非サレハ命セス闕員無キニ推シテ命スル者是ヲ積入番上ト曰フ亦特典ナリ

指口米トハ藩ノ制田祿百石ヲ四斗俵百苞即チ現米四十石トシ之ニ指米二石ト口米一石二斗六升トヲ加ヘテ四十三石二斗

六升ヲ田祿百石トス此指米口米ヲ合稱シテ指口米ト曰フナリ

切米トハ切符ヲ以テ廩米ヲ給スルノ畧稱ナリ

冠年トハ生年ノ上ニ幾年ヲ冠スルヲ謂フ藩制士列以上ノ戸主十五歲未滿ニシテ夭折スルキハ一タヒ其家ヲシテ斷絶セシ

メ時日ヲ經テ親族ニ月俸ヲ給シテ其家ヲ繼ガシメ年ヲ經テ原祿ノ幾分ヲ削減シテ之ヲ給ス其無罪ニシテ斷絶スル者ノ

多キヲ憫レミ七年以下ノ冠年ヲ許ルシテ以テ優恤スルナリ其原由タル戸令ニ凡ソ男ハ年十五女ハ年十三以上ニシテ婚

嫁ヲ聽ルストアリテ其上條ノ義解ニ下條ニ云ク男ハ年十五ニシテ婚ヲ聽ルスト既ニ夫婦ヲ定ム理當ニ子アルヘシトア

ルニ依リ已ムヲ得スシテ此制ヲ設ケシナリ是故ニ七年ノ冠年アル者ハ生年八歲ニシテ十五歲ナリ六年ノ冠年アル者ハ

生年九歲ニシテ十五歲ナリ自餘ハ之ニ准シテ知ル可シ

歸參トハ士ノ罪アリテ藩ヲ逐フ者其罪ヲ赦シテ復歸セシムル者ヲ云フ

帳除トハ凡ソ藩法男子タル者戸主子弟ヲ問ハス載セテ藩籍ニ在リ子弟ノ疾病若シハ事故アル者ハ請ヒテ籍ヲ除ス又罪

アル者ハ藩命シテ籍ヲ除ス並ニ是ヲ稱シテ帳除ト曰フ

學制

學事上ノ諸制度 慶長五年冬井伊直政近江國犬上郡佐和山城ヲ領シ專ラ治民ニ銳意シ兼テ文武ヲ獎勵ス未タ幾ハクナラ
スシテ卒ス繼テ直孝其彥根城ニ居リ亦治民ニ意ヲ注メ諸制度頗ル整頓ス直孝以爲ラク彥根ノ地タル京師ニ接近シ船路
殊ニ便ナリ若シ文學ヲ以テ主トスルキハ或ハ恐ル士氣文弱ニ陥リ武道ノ本意ヲ忘失セン如カス武ヲ主トシテ士氣ヲ養
成センニハト是ニ於テ武道ヲ以テ專門トシ文學ヲ以テ羽翼トス直孝其嗣子直澄ヲ遺誡スル十三箇條ノ第十條ニ曰ク文
道之事ハ勿論不知シテ不叶事ニ候能々可有御心得事ト其文學ヲモ獎勵セシヲ以テ見ル可シ直澄能ク其遺誡ヲ守ル其嗣

明治十六年八月

彦根 中村不能齋識

凡例

凡ソ布令諭達及ヒ請願建言等ノ原文アル者ハ冗長煩蕪ヲ厭ハス務メテ原文ヲ録ス叨リニ改刪修飾シテ事實ノ乖違ヲ生セ
ンコヲ恐レテナリ

凡ソ原文ヲ録スルニ藩ノ慣稱ニシテ他府縣人ノ見テ解ス可カラサル者アリ今之ヲ解釋スル左ノ條件ノ如シ
笹ノマ 笹之間トハ田祿千石以上若シクハ其以下ト雖モ名家ニシテ城内館舍ノ笹之間ニ祇候シ藩主ノ談話ニ對スル者ニシテ其待
遇最モ厚シ

武役トハ士大將旗奉行槍奉行物頭母衣役ノ五職ヲ總稱ス士大將ハ八家ト稱シテ老職ヲ世々ニスル八名家中ノ其器ニ當ル
者ヲ撰ヒテ之ニ充ツ旗奉行ハ笹之間以上ノ者ヲ以テ之ニ充ツ槍奉行物頭母衣役ハ笹之間及ヒ三百石以上ノ者ヲ以テ之
ニ充ツ母衣役トハ軍ニ在リテ幌ヲ負ヒ徽號ト爲シテ以テ行人ヲ役スル者ナリ但シ學館ノ座席ニ關シテ指稱スル武役ハ
專ラ笹之間ニアラサル槍奉行物頭母衣役ノ三職ヲ云フ此三職ハ班笹之間ニ亞ク者ナリ

筋奉行ハ郡奉行ナリ藩ノ制近江ノ領地七郡ヲ南中北ノ三部ニ區分シ是ヲ南筋中筋北筋ト稱ス筋奉行ハ此畧稱ナリ
召出トハ藩士ノ子弟父兄在勤中ニ別ニ俸ヲ給シテ勤仕セシムル者ヲ曰フ皆定制アリ凡ソ笹之間以上用人以下ノ子弟ハ小
性ト爲シ三百石以上ノ嗣子ハ小性或ハ中小性ト爲シ二男以下ハ中小性ト爲シ三百石未滿ノ子弟ハ皆騎馬徒士ト爲ス但
シ三百石未滿ト雖モ父母衣役ト爲ルルハ則チ小性或ハ中小性ト爲ス小性ハ廩米百石八口俸ヲ給シテ其待遇三百石以上
ニ同シ中小性ハ七十石六口俸其半高ハ四十石六口俸ヲ給シテ田祿士ノ上ニ立ツヲ得ス騎馬徒士ハ四十石四口俸其半高
ハ二十六石四口俸ヲ給シテ中小性ノ上ニ立ツヲ得ス

騎馬徒士トハ藩制萬石以下五十石以上ヲ知行取ト稱シテ田祿ヲ與ヘテ各々乘馬ヲ畜養セシム是チ騎士ト曰フ三百石未滿
五十石以上ノ士ノ嗣子ニシテ年輩ニ至レハ父在勤中別ニ俸ヲ給シテ勤仕セシム或ハ二三男ニシテ勤仕スル者功勞ニ依
リテ一家ヲ興ス者モ在リ並ニ是ヲ騎馬徒士ト曰フ即チ騎士ニシテ徒士ニ役スルノ謂ヒナリ始ラク徒士ノ名ヲ負フト雖
ニモ士列ナリ

三步行トハ士ト卒トノ間ニ居ル者ニシテ謂ハユル徒歩ナリ步行讀ミテ徒ニ同シ是ニ三種アリ一ハ單ニ步行ト稱シテ從來
ノ徒歩ナリ故ニ第一等ニ居ル其給ハ廩米二十六石三口俸ニハ伊賀步行ト稱シテ其祖先伊賀國ヨリ出テ、勤仕シ世間
牒ヲ役スル者ナリ其給ハ四十石三口俸三八七十八人步行ト稱シテ人員七十八人アリ世々旗奉行ノ屬下ニシテ旗卒領ヲ役ス

好ミテ歌ヲ詠シ旁ヲ衆小技ニ通ス公臺ノ幼ナル之ヲ携ヘテ京師ニ往キ之ヲ若林強齋及ヒ僧亮深ニ属シテ曰ク兒子如シ教フ可キ乎我レ死スルノ後幸ヒ之ヲシテ吾カ志ヲ繼カシメヨト平居公臺ヲ誡メテ曰ク學虛文ニ驚リテ實用ヲ遺ルハ勿カレト公臺能ク父訓ヲ守リ日夜勉學終ニ一家ヲ爲シ專ラ古文辭ヲ修ム本藩古文辭ノ學蓋シ公臺ヨリ盛ナリ藩士ニ擢セラレテ後幾バクモ無ク死ス著ハス所復讐論翼園集前後及ヒ餘編等アリ又寶曆六年伏見ノ學士龍公美ヲ徵シテ藩士ト爲シ俸ヲ給シテ儒員ト爲ス公美字ハ子明草廬ト號ス文學ヲ能クシ兼テ書畫ニ巧ミナリ職ニ在ルヲ十九年安永三年既ニ老ス特ニ命シテ俸ヲ給シテ老ヲ伏見ニ養ハシム此二人ノ者ハ學校建設以前ニ在ル者ナリ以後ノ者ハ學校諸條ニ云ハントシテ爰ニ畧ス

士族卒子弟教育方法

士族ハ戸主子弟ヲ問ハス必ラス藩立學校ニ入學シテ文武ヲ練習セシム卒ハ各自ノ意向ニ任セ家塾

ニシテ修學セシノ藩立學校ニ入學スルヲ許ルサス但シ維新後ハ士卒平民ノ別無ク入學スルヲ許ル

士族卒學術優等ノ者アルハ藩費ヲ給シテ他國ニ遊學セシメ私費ヲ以テ遊學セシヲ請フ者アレハ其者ノ學業品行ニ依リテ之ヲ許可ス寛政二年十一月直中ノ時藩士中村源三郎ノ男千次郎弱冠ニシテ學術優等ヲ以テ特ニ命シテ藩費ヲ給シテ京師ニ遊學セシム八年五月大菅權之丞ノ請ヒテ許ルシテ他國ニ遊學セシム天保中直亮^{アキ}ノ時藩老宇津木對馬ノ弟矩之丞私費ヲ以テ大坂ニ遊學シ其師大鹽平八郎不軌ヲ謀ルニ會シ矩之丞之ヲ諫ム遂ニ害セザル安政三年五月直弼^イ時伴只七ノ請ヒテ許ルシテ其嗣子文次郎^キ江戶ニ遊學セシメ白銀ヲ給シテ學資ニ充ツ文久元年八月直憲ノ時特ニ松浦友三郎及ヒ西村又治^ミ江戶ニ遊學セシム拔キ藩費ヲ給シテ江戶ニ遊學セシム友三郎ハ今ノ滋賀縣八等屬松浦泉ナリ得三郎ハ内務大書記官兼參事院議官補從五位西村拾三ナリ十二月長野主膳ノ養嗣子健之丞^ミ藩費ヲ給シテ江戶ニ遊學セシム慶應三年青木平輔田部洗藏島崎三^ミ拔キ藩費ヲ給シテ皇典ヲ京師ニ講究セシム平輔ハ今ノ青木千枝ナリ洗藏ハ大坂府西成郡長田部密ナリ三郎ハ既ニ死ス以上ハ唯傳聞ヲ錄スルノミ簿書ニ據ルニアラス故ニ遺漏ノ多キハ論ヲ待タス維新ノ後藩費私費ヲ以テ遊學スル者其藩費生ハ東京ニ三十五名大坂ニ九名橫濱ニ靜岡ニ鹿島ニ各四名長崎ニ外國ニ各二名其私費生ハ東京ニ四十六名橫濱ニ五名靜岡ニ三名大坂ニ名古屋ニ各二名京師ニ神戸ニ豐岡ニ諸國ニ各一名但シ明治五年八月文部省第十五號布告ニ依リ官費ヲ停ム

學校ニ於テ士族以上ハ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞スルヲ各自ノ意向ニ任ス卒以下ハ之ヲ許ルサス但シ維新ノ後ハ卒以下平民子弟教育方法 平民ノ子弟ハ家塾寺子屋ニ於テ修學セシノミ藩立學校ニ入學スルヲ許ルサス農民タリテ學事ニ從事

民ト雖^レ之ヲ許ル

直興ノ時ニ至リ世ハ益々泰平ニ歸シ文武對講ニ非サレハ治道ヲ布キ難キヲ以テ儒員佐藤直方ヲ聘シテ之ヲ抗禮シ自カラ文ヲ學ヒ諸士ヲシテ就テ學習セシム是ヨリノ後專ラ兩道ヲ練習セシム然レモ仍ホ私塾ニシテ學校ノ設立アラス藩主時々召シテ諸士ノ文武藝ヲ閱覽シ足輕ノ弓銃ヲモ之ヲ見ル又或ハ諸士ノ私塾ニ臨ミテ武藝ヲ見ル享保二十年五月十一日直定令スル所ノ十四箇條ノ第四條ニ代々家格之通リ家中諸士萬端古風ヲ相守リ猶以テ平日武藝無懈怠可相嗜事第八條ニ家中大身小身之者共文武之道ハ不及申會テ怠リ申間敷儀ト存候別シテ年若ナル者共平日遊藝遊藝計ニ日暮シ候様ナル事ハ有之間敷儀ニ候文學武術之嗜可爲要用候ト寛政十一年直中ノ時ニ至リテ遂ニ藩費ヲ以テ學校ヲ創設シ爾來諸士ヲシテ就テ文武ヲ修練セシム抑直政以來文武ヲ獎勵スルノ布令諭達ハ頻々アルヲ傳聞スト雖モ簿書ノ存セスシテ登記スルヲ得ス但シ學校建設以來ノ布令諭達ハ學校諸條ニ云ハントシテ茲ニ畧ス

文武藝ニ達シ優等ノ者ニハ士族ハ知行取ニハ或ハ其祿ヲ増シ扶持切米取ニハ或ハ其俸ヲ増シ或ハ知行ヲ與ヘ子弟ニハ或ハ終身俸ヲ給シ或ハ一家ヲ興シ或ハ知行ヲ與ヘ歩行ハ或ハ擢シテ終身士ト爲シ或ハ子孫ヲシテ繼カシメ足輕以下及ヒ陪隸ト雖モ拔群ノ者ハ亦同シ天明四年閏正月直幸ノ時藩老庵原朝郁ノ從士野村公臺ト云フ者文學優等ヲ以テ擢シテ士ト爲ス其書二通其一ニ曰ク其方家來野村新左衛門儀近年文事用向チモ申付元來學業之志厚シ實ニ拔群之文名感心之事ニ候右之者ハ其方譜代之舊臣所望モ如何ニ候ヘモ今度直參ニ被指出候様及内談候處不被得止事由請被申聞令祝著候尤新左衛門苗蹟ハ何レニモ於其方家相續被申付置候趣是又尤ニ候左候ヘハ當新左衛門一代直參ニ取立知行取格ニ申付爲合力藏米五十俵爲取之候條此度各連名之書面ヲ以テ申付候新左衛門ヘ爲取方モ可有之儀ニ候ヘモ時節柄之事不任存念候右等之趣可被得其意者也閏正月五日直幸庵原助右衛門殿其二ニ曰ク一五十俵藏米庵原助右衛門家來野村新左衛門右之者年來學業之志厚ク實ニ拔群之文名感心之事ニ候殊ニ近年文事用向ヲモ申付候儀依之我等所望之趣意助右衛門方ヘ及内談候處不被得止事由請被申聞尤新左衛門苗蹟ハ何レニモ於助右衛門家相續被申付置候趣ニ付左候ヘハ時節柄旁之譯ヲモ相兼此者一代件之通リ合力米無指引爲取之直參ニ取立知行取格ニ申付候件之趣可被申渡候閏正月五日裡印木俣土佐殿庵原助右衛門殿西鄉軍之助殿長野百次郎殿脇伊織殿木俣半彌殿三浦内膳殿公臺字ハ子賤東臯ト號ス通稱新左衛門父ヲ正明ト曰フ通稱進左衛門後ニ淡齋ト改ム世々庵原氏ノ室老タリ正明天資方正辭令ニ嫻フト稱ス自カラ奉スル儉素節アリ事ニ處スル謹密法アリ小物細故ト雖モ之ヲ處スル必ラス詳審大節ニ臨ムニ及ヒテハ奮然抗志人ニ挫カレヌ是時ニ方リテ主家難アリ正明匡救至ラサル所無シ終ニ難ヲ靖ンスルヲ得タリ正明嘗テ聖人ノ書ヲ讀ミ心ヲ性理家ノ說ニ潛メ夙夜研究沒スルニ至ルマテ衰ヘス尤モ心ヲ喪祭ニ盡ス又嘗テ神道ヲ學ヒ講習スルヲ年アリ竟ニ其蘊ヲ究ム少時

拘り候事ニ候間日々直ナル道理ヲ申聞セ行儀ヲ正敷爲致候様厚心得教訓可致候勿論寛政年中申渡置候示シ方ヲ相
用ヒ弘化年中觸達置候趣意堅相守リ指南可致事

五年正月十一日又

四手町年寄へ

町家之子供爲手跡習指越候儀ニ付弘化四年未正月申渡置候處舊冬指南之者ヨリ申出候筋有之ニ付尙又別紙之通り申
達置候因テ親兄之者共ニハ厚相心得子弟之者共ヘ行儀ヲ爲嗜師匠之教導ヲ能々相守リ候様毎々相示シ善キ人ニ相成
候様育立可申候勿論町々役人共ニモ兼テ申渡置候通り世話可致事

(四手トハ彦根市街ヲ四部ニ區分シ各町年寄ヲ置シ之ヲ總稱スルナリ)

是時改正手跡指南仲間様明治五年十月人名

中藪上片原町湯次壽貞八 連著町西村靜吾 上魚屋町若林又藏 佐和町西村泰庵 彦根町小倉與衛 東新町中西常

三郎 安養寺町西村留三郎 上河原町力石彌左衛門 善利中町富岡平三

學校

學校名稱 初メ學校ト稱セントシ之ヲ公布ス故アリテ學校ノ稱ヲ止メ寛政十一年七月廿九日創立ノ時直中命シテ稽古館
ト稱シ天保元年六月十三日直亮命シテ弘道館ト改稱シ明治二年十月廿八日直憲命シテ文武館ト改メ三年四月廿日學館
ト改メ閏十月廿二日終ニ學校ト改ム(初メ漢學校後ニ中學校)

校舍所在地 近江國犬上郡彦根城西内曲輪或ハ郭内ト稱スル地即チ今ノ金龜町三十六番地金龜教校是ナリ

沿革 藩主井伊直中^ヲヨリ文武ヲ好ム寛政元年父直幸^{ヒタ}卒シテ家ヲ繼ギ志專ラ宗廟學校ニ在リ然ルニ從來藩用闕乏シテ藩
士ノ祿ヲ半納セシムルノ時ニ際シ奈^レモ爲シ難シ是ニ於テ身自カラ率先シテ大節儉ノ令ヲ布キ諸士ノ祿ヲ復舊シ專ラ
富國強兵ヲ期ス而シテ未タ學校設立ノ議ヲ決セヌ六年冬中村千次郎病ヒ危篤ニ臨ミ宗廟學校ヲ設立セン^{コト}ヲ遺書シテ
死ス書容ル是ニ於テ直中ノ宿志益決シテ頻リニ學校創立ノ事ヲ命シ藩吏ヲシテ之ヲ討議セシム田中世誠曰ク當ニ建
設シテ以テ文武ヲ獎勵シカメテ英士ヲ養成スヘシ小塙重一曰ク建設スヘカラス從來文武舍無シト雖^レ上達ノ者多シ間
ニハ一丁字一劔法ヲ知ラサル者無キニ非スト雖^レ亦拔群秀出ノ者アリ之ヲ建設スル^ハ則チ皆文武通常ノ法ハ知ルト
雖^レ凡^ソ謂ハユル石臼藝ニシテ傑出ノ者無ク之ニ加フルニ吏ニ阿チリ師ヲ凌キ輕薄諂諛ノ弊チ生シ士風此ヨリ陵遲セン^{コト}

スルハ各自ノ意向ニ任セテ聊サカ檢束セス維新ノ後ハ平民タリテ藩立學校ニ入學スルヲ許ルス

家塾寺子屋設置制度 家塾寺子屋ヲ開設スル者他ノ檢束ヲ受クル無ク何人タリテ自由ニ開設スルヲ得但シ寛政八年二月直中ノ時手跡指南職仲間株ヲ彦根市街ニ十二名ニ定ム然リト雖モ株外家塾寺子屋ヲ設クルモ亦妨ケ爲シトス其人名左ノ如シ

中敷上片原町九郎左衛門 下魚屋町助左衛門 上魚屋町喜右衛門 本町佐平次 佐和町甚三郎 柳町喜兵衛 彦根町與兵衛 東新町瀬兵衛 安養寺町仁右衛門 袋町彌左衛門 後三條町三平 岡町左近右衛門

是歲十月晦日町奉行ノ諭達

一子供手跡ハ不及申孝道行儀作法等之敎訓致候儀ハ勿論之事ニ候ヘモ彌以尋閑無之樣可致事

一於途中口論之事

一樂書之事

一婚禮養子等之節并ニ平日礫打候事

一正月十四日十五日婦人之往來ヲ妨ケ候事

一寺院法會說法之節不作法之事

右之趣平日手習子供ヘ急度相示シ若不相用者相聞エ候ハ、於親手前急度相示シ候樣可致事

弘化四年正月廿三日直亮ノ時又

一手跡指南之者共之内敎導方宜敷者又ハ不行屈之向モ相聞エ候幼年之者ハ敎次第行狀正敷成人之上ニ一統之風俗ニ拘リ候儀手跡之儀ハ勿論萬端惡習ニ流レ不申樣行儀能質朴廉直之風儀ニ生立候樣御國恩ヲ不致忘却親兄ヘ孝養方ヲ旨トシテ指南之者共以後敎導方一樣ニ相成候樣篤ト申合自分々々之子弟敎導致候心得ニテ實意親愛ヲ以テ飽迄世話行届候樣聊非道之筋無之樣厚ク相心得可申候

一親兄之者ヨリ子弟之者共ヘ指南之者敎導之筋聊不相背師恩ヲ重シ假初ニモ輕蔑不致幼年ヨリ人柄正敷相成候樣朝暮ニ相示シ可申事

安政四年十二月廿一日直弼ノ時又

一手跡指南之者共寛政年中申達置候趣意不取失樣致度存念ニテ願出候段奇特之事ニ候右ハ都テ申出候通り幼年之者共ヘ手跡指南致候限リ之譯ニハ無之專ラ敎導モ致候ヘハ多人數之者共習ヨリ馴レ追々生長致候ヘハ市中之風俗ニ

ヲ置キ五年二月長濱縣ヲ改メテ犬上縣ト爲スモ舊ニ仍リテ保續シ九月犬上縣ヲ廢シテ滋賀縣ニ併スニ及ヒテ終ニ廢ス
寛政十一年己未創建以來明治五年壬申ニ至リテ七十四年ナリ仍ホ諸則條ヲ參觀ス可シ

〔附記〕明治三年閏十月熊本藩士檜隈閑水私事ニ依テ吾藩ニ來リ請ヒテ學館ヲ一見ス時ニ學館紀綱兼主帳渥美源六郎之ニ接シ問ヒテ曰ク聞ク本館一ニ貴藩ノ時習館ヲ摸擬スト其形狀何如對ヘテ曰ク僕モ亦之ヲ聞ク然リ今之ヲ見ルニ吾藩ノ時習館ニ違フヲ無シ

教則

教習時間ハ諸則中ニ載スル布告ノ如ク初メハ辰ノ半刻午前九時迄ニ寮ニ昇リテ文事ヲ學ヒ巳ノ半刻午後一時ニ寮ヲ降リテ

武榭ニ入り未ノ半刻午後三時ニ退散ス然ルヲ後ニ退散時ヲ正月二月三月及ヒ八月九月十月十一月ヲ未ノ刻午後二時トシ但シ秋暑

酷ナルモハ八月ヲ午ノ半刻午後一時トシ是ハ臨時ノ處分ナリ四月五月及ヒ十二月ヲ午ノ半刻トシ六月七月ヲ午ノ刻正午トス

但シ此兩月ハ巳ノ四半刻午前十分以前ナ文學トシ以後ナ武事トス而シテ其前後修業スルハ舊ニ仍リテ其意ニ任ス

習字生ハ一之寮ニ分置ス其法箠之間席以上ノ子弟及ヒ物頭母衣役ノ嗣子ハ必ラスニ之寮ニ昇ラシメ其他ハ藩士

ヲ分半シ各居町ニ依リテ兩寮ニ分置ス此兩寮ハ初等生ノ居寮ニシテ各一日ハ讀書一日ハ習字ト隔日ニ教授ス而シテ

兩寮共ニ六之席ヨリ一之席ニ至ル六等トス

讀書生ハ亦初等ハ一之寮ニ分置シ其法ハ習字生ニ同シ而シテ創立ノ後ハ孝經席大學席中庸席論語席孟子席ノ五

等トス後ニ素讀方ノ持席トシ各其人ヲシテ分教セシム此兩寮生徒ハ尤モ初等ナルヲ以テ孝經大學中庸論語孟子ノ句

讀ヲ教授ス

三之寮生ハ春秋左氏傳國語史記漢書ヲ教科書トス而シテ其席ハ五之席ニ起リテ一之席ニ至ル五等トス三之席以下ノ生

徒ハ自カラ字書ニ就テ句讀ヲ學ハシメ寮師就テ之ヲ聽クニ之席以上ハ文義ヲ解セシメ寮師ニ就テ疑難ヲ正サシム此寮

ニ於テハ記錄生ヲモ教授セシム記錄生ハ生質魯鈍ニシテ書籍ヲ解スルヲ能ハサル者ヲシテ假字文ノ軍記雜錄ヲ讀マシ

ムルノ略稱ナリ

朱熹學ト爲シ、以來ハ春秋書經禮記易經詩經ノ五書ヲ加ヘテ之ヲ素讀セシム

四之寮生ハ博ク群書ヲ學習セシム此寮小別シテ入德舍敬業舍博習舍進學舍日新舍ノ五等ト爲ス入德舍ヲ初等トシ其レ

ヨリ上達ニ隨ヒ進舍セシム

會讀生ハ四之寮及ヒ三之寮ニ之席以上ノ生徒ヲシテ必ラス入會セシム其會場ハ四之寮ニ階ニシテ每會凡ソ月ニ三回三

之寮生ハ一會以上入德舍生ハ二會以上敬業舍生ハ三會以上博習舍生ハ四會以上進學舍生以上ハ各自ノ意ニ任セテ數會

鏡ニ懸ケテ見ルカ如シ必ラス建設スヘカラス世誠曰ク然ラス禍ヲ未然ニ防クハ法ニ在リ宜シキヲ得ルハ弊害生セス
 譬ヘハ從來文武ノ達人十中コ一ヲ得ルトセンニ九ハ皆無用物ナリ自今皆通常ノ藝ニ至ルキハ則チ十ヲ以テ一ニ抗スル
 トセンモ無用物ヲ變シテ有用物ト爲シ其國家ニ益スル鮮少ナラス當ニ建設スヘシ重一日ク否々物皆始メ有リテ終リ無
 キハ古今君子ノ憂フル所ナリ法ハ死物ナリ活物ノ人アリテ之ヲ使用ス良法アリト雖モ其人ヲ得サルキハ弊害立トコロ
 ニ至ル子カ言フ所ハ屈曲庭松ノ如シ愛スヘシト雖モ一時俗目ヲ悅ハシムルニ過キス山林素松ハ見ルヘキ無シト雖モ以
 テ棟梁ト爲スヘシ十ヲ以テ一ニ抗スルノ十ハ皆凡庸者ニシテ各人各心必ラス一致セス十中コ一ヲ得ルノ一ハ拔群者ナ
 リ其一指揮シテ他ノ九ヲ使役スルキハ則チ無用物ヲ變シテ有用物トシ能ク一人ノ指揮ヲ守リテ其力純一シ各人各心ノ
 十二倍センコ一幾許ソヤ屈曲庭松ノ如キ色裝者ナ多ク養成シテ士風ヲ乱サンヨリハ寧ロ棟梁タル可キ剛毅朴訥者ヲ得ル
 ニ如カスト慷慨剴切頗ル極言ス討論數回ニシテ遂ニ設立ノ議ニ決ス三上甲齋之ヲ聞キ歎シテ曰ク吾藩ノ文武地ニ墮ツ
 ト(甲齋名ハ鄉喜初稱甲左衛門甲齋ハ致仕號ナリ武術ノ達人ニシテ殊ニ槍術ノ蘊奧ヲ極ム寶曆十二年八月父ニ繼田祿
 百石ヲ領シ數職ヲ經テ百二十石ニ至リ寛政八年八月致仕スル者ナリ)直中僧海量ニ命ジテ密ニ裁藩ノ明倫館熊本藩ノ
 時習館其他有名ノ諸藩校ノ景狀圖樣制度ヲ探聞摸寫セシム諸藩覽ノ圖ヲ見狀ヲ考フルニ時習館ヲ可トスニ於テ時習
 館ヲ摸擬シ八年七月廿九日家老以下諸吏ヲ撰ヒテ用掛リヲ命シ九年遂ニ土木ノ工ヲ起シ十年春ニ至リテ落成ニ垂ト
 ス故アリテ果サス(相傳フ城西西中島ノ北端廣小路ト唱フル地ニ學校用材ヲ積聚シ標チ立テ、曰ク學校御用材ト其標
 一夜亡失シテ所在ヲ知ラス時日ヲ經テ幕府吾藩吏ヲ召シ問ヒテ曰ク彥根ニ於テハ學校ヲ建設スルヤト對ヘテ曰ク否然
 ラス幕吏彼ノ標チ出シテ之ヲ賣ム藩吏答フルヲ能ハス急ニ驛ヲ飛シテ之ヲ報スト是レ古老ノ口碑ニシテ眞僞ハ尤モ保
 シ難シト雖モ十年春略々落成スルヲ遷延十一年冬ニ至リテ開講スル者其辨解ニ汲々タル者ノ如ク又稽古館ナト俗稱ヲ
 命シ及ヒ下文ニ錄スル布令中ニ從來之文武諸藝ヲ一所ヘ相集メ稽古被仰付候事ニテ學校ナト申筋ニハ無之云々又學館
 私議ニ稽古館ノ始マラス以前ヨリ學校ト申ス事ハ公儀ニ御指障リノ事アルト承ハル云々又學校創立盡力受賞者中ニ城
 使兼江戸邸留守居役アルナト及ヒ直中故サラニ姑ラク省リミサル者ノ如キ等ヲ以テ想像推考スルキハ蓋シ或ハ然ラン
 然レモ學校庠序ヲ建設スル何ノ僭越カ之レ有ラン然ルヲ之ヲ抑壓檢束スル者何ノ意ソヤ舊幕府ノ制度然ルヤ否ヤ之ヲ
 知ラス抑々簿書散逸シテ其詳ラカナルヲ知ラス縱ヒ在ルモ此事頗ル嫌忌ニ渉ル筆シテ傳フヘキニ非ス姑ラク傳聞ヲ錄
 シテ疑ヒヲ存ス必ラス訛傳謬聞多カラン)十一年八月三日令ヲ發シ十一月十八日ニ至リテ開講式ヲ行ヒ爾來連綿直亮
 直弼直憲等之ヲ保續守成シ年ヲ逐ヒテ隆盛シ明治四年七月廢藩置縣ノ令アルモ舊ニ仍リ十一月彥根縣ヲ廢シテ長濱縣

堂ニ至ル頭取二人臨席シ稽古奉行五書十一冊ヲ每冊一二章ヲ展披シテ素讀セシメ可ナルトキハ及第シテ三之寮ニ進寮セシム 安政中朱熹學ニ爲セシ以來ハ五經ヲ以テ教科書トシ五之席生ハ春秋四之席生ハ書經三之席生ハ禮記二之席生ハ易經一之席生ハ詩經トス但シ皆素讀ニシテ春秋ヲ卒業スレハ寮師之ヲ試験シテ四之席ニ進メ書經ヲ卒業スレハ又試験シテ三之席ニ進メ他皆之ニ准シテ一之席ニ至ル即チ寮師ノ專斷ニシテ進席ノ後奉行ニ告ク而シテ仍ホ二之席以上ハ左國史漢中ヲ講義セシメ四之寮ニ進ムル試験法ハ舊ニ仍ル 四之寮生ハ初等ヲ入徳舍生トス寮師其學業ノ上達ヲ認メテ試験ヲ請フノ法上件ノ如シ書ハ自カラ携帶セズ稽古奉行左國史漢中ノ一冊ヲ出シテ一二章ヲ講義セシメ可ナルトキハ及第シテ敬業舍生トス 敬業舍生ノ學業上達ヲ認メテ寮師試験ヲ請フトキハ史漢中ノ論文或ハ上疏或ハ詞賦等ノ稍解シ難キ一二章ヲ講義セシメ可ナルトキハ及第シテ博習舍生トス 博習舍生ノ上達ヲ認メテ寮師試験ヲ請フトキハ頭取二人稽古奉行一人臨席シ學問方一人二十二史中ノ唐本一冊ヲ出シテ一二章ヲ講義セシメテ詰問シ其答ノ可ナルトキハ及第シテ進學舍生トス 進學舍生ハ學業ト品行トヲ以テ寮師審議シ之ヲ稽古奉行ニ告ク奉行之ヲ頭取ニ稟シテ日新舍生トス則チ試験無シ 以上ハ恒例ノ試験ナリ 此他ニ博習舍生以上ノ生徒ハ臨時ニ試験ス是ヲ不時試験ト稱ス其法寮師之ヲ稽古奉行ニ請フ奉行ハ頭取ニ告ケテ之ヲ命ス頭取二人稽古奉行一人臨席シ學問方一人經史子集其他雜書或ハ有點或ハ無點ノ書ヲ出シテ講義セシメ詰問シテ其答ヲ要ス其最モ可ナルトキハ進舍セシムルトモ有リ又最モ不可ナルトキハ退舍セシムルトモ有リ又或ハ家老ノ臨席スルトモ有リ或ハ藩主ノ臨席スルトモ有リテ其可ナル者ニハ物ヲ與ヘテ之ヲ賞ス 文學ト武藝トノ比例ハ文學進學舍ヲ以テ武藝ノ免許ニ比ス 文武兼修ニシテ一科ヲ專修スルヲ許ルサス但シ儒者ノ家ニシテハ文學ノミ專修ヲ許ルシ右筆ノ家ニシテハ習字ノミ專修ヲ許ルシ武藝師範ノ家ニシテハ其家藝ノミ專修ヲ許ルサス皆其嗣ニ限リテ二三男以下ハ許ルサス 武藝ハ各其流派ニ依リテ免許ニ二三等或ハ四五等モアリテ各其名目ヲ異ニス生徒ノ藝術上達ニ從ヒ師家ノ專斷ヲ以テ免許シ而シテ後ニ之ヲ稽古奉行ニ告ク

生徒學習ノ期限ハ十五歲以上三十歲以下トス此年齡ハ皆冠年ヲ以テス冠年十五歲ニ至レハ定規ノ如ク入校屆書ヲ出シ冠年十五歲生年幾歲ト兩年齡ヲ併記シ生年十四歲以下ハ隨意入校ナリ即チ屆書ニ「不丈夫ニ付勝手出講」ノ文ヲ加フ（學校諸則條中ノ布告ニ十五歲ニ滿候テモ不丈夫等ニテ如御定文武稽古難被致筋モ有之候ハ、其譯御目付方へ被相屆置勝手ニ出講可被致候トアル是ナリ）生年十五歲ノ春ニ至リ更ニ定年屆書ヲ出ス（職員條物主兼書物奉行ノ項中ニ生年十三四歲ニモ相成候節親々ヨリ今日以後ハ日々爲相詰可申ト被相屆可然哉之事トアルハ開館ノ際ノ事ニシテ後ニハ生

ニ入社セシム其書ハ會頭ノ意ニ任セ經史子集或ハ雜書ヲ輪講セシム時間ハ巳ノ刻午前十一時ヨリ巳ノ半刻午前十二時至ル其法會頭机ニ憑リテ座シ生徒ヲ抽籤シテ指名シ之ヲ講義セシム講生ハ師ニ就テ疑難ヲ質シ會場ノ生徒ハ互ニ討議シ師ノ決ヲ取ル

和學兵學禮節算學天學ハ皆各其寮アリ各時間ハ辰ノ半刻午前九時ヨリ午ノ刻正午至ル但シ禮節ハ其禮ニ依リテ講堂ニ於テ教授ス各定日アリ

醫學ハ業トスル者ノミ日ヲ定メテ講習ス。

武藝ハ劍術ヲ奇日トシ槍術居合ヲ偶日トシ弓術ハ師家ヲ奇偶ニ分半シ銃術ハ初メハ奇日トシ後ニ改メテ偶日トス柔術一騎前單馬ハ月ニ三回或ハ六回日ヲ定メテ練習セシム馬術ハ學館馬場及ヒ藩內數所ニ馬場ヲ設ケテ毎日朝夕之ヲ習熟セシム游泳水馬ハ各自ノ意ニ任セテ湖水ニ講習セシム馬術修業ニ依テノ入館遞參ヲ許ルスハ諸則條ノ如シ諸藝日割但シ諸則條ニ書スルハ當時ノ布達ナリ此ニ錄スルハ文久年中ノ實跡ナリ

毎日 素讀、手跡 二七 經書講釋、和學 三々 上泉流軍學、天學 初四日 掟朗讀 四九 越後流兵學 五日十日

十四日廿日廿五日廿七日 算學 六日九日十六日十九日廿六日廿九日 小笠原禮節 四九年半刻午後一時以後 醫學

偶日 弓術四家、槍術、居合 奇日 弓術四家、劍術、一騎前 三々 軍馬、柔術一家 一五九 柔術一家 二五九

劍術一家 三七五九 劍術居合一家 二々 劍術裡講一家 初メ奇日後偶日 炮術 但シ炮術ハ文久三年創設以來

奇日ナリシヲ明治元年十一月二日ヨリ改メテ偶日トス 毎日 馬術 此條ノ事次條及ヒ諸則條ヲ參觀スヘシ

學科學規試驗法 一二之寮習字生ハ始メテ入校スルヤ先ツ六之席ニ居ラシメ幼年未學生ニハ假字文ヨリ教授シ既學生ニ

ハ適合ノ書ヲ教授ニ五六講ヲ經テ清書セシメ其能否ヲ分別シ可ナル者ハ五之席或ハ四之席ニ進席シ爾來其業ノ進歩ト行狀ニ依リテ漸次ニ進席シテ一之席ニ進マシム而シテ進席毎ニ稽古奉行ニ告ケ二之席以下ハ手跡方ノ專斷ニシテ進席

ノ後ニ告ケ一之席ニ進マシメントスルモ其生徒ヲシテ清書セシメ手跡方之ヲ稽古奉行ニ出シ其認可ヲ經テ進席ヲ故

ニ一之席生ハ習字ヲ止メテ專ラ讀書ヲ學ハント欲スル者ハ意ニ任ス二三之席生ニシテ習字ヲ止メント欲スル者ハ清書

セシメテ稽古奉行ニ出シ其認可ヲ經テ之ヲ許ルス又入學以前家ニ在リテ習字ニ達シ入館スルヤ習字寮ニ就カス專ラ讀

書ヲ學ハント欲スル者ハ清書ヲ手跡方ニ出シテ之ヲ請フ手跡方奉行ニ出シ可ナル者ハ之ヲ許ルス 凡ソ試驗ヲ爲スニ

定期無シ生徒ノ上進ニ從ヒ臨時ニ之ヲ行フ 讀書生ハ孝經大學中庸論語孟子ノ五部十一冊ノ句讀ヲ卒業シ復讀畢リテ

一二之寮其居寮ノ素讀方之ヲ稽古奉行ニ告ケテ試驗ヲ請フ奉行ハ頭取ノ認可ヲ經テ之ヲ命ス乃チ素讀方本人ヲ從ヘ講

右之趣權内藤介才介へモ申談シ候上奉申上候

二月

中村加介

押前之事(別紙)

一 槍ノ持樣ハ右ノ肩へ持セテ左ノ手ヲ上ニシテ持ヘシ
一 塲揃折敷ニ拍子木三ツ立ニ二ツ夫ヨリ石突ヲ前へ出シテ右ノ肩へ槍ヲ持セテ拍子木一ツニ一歩ツ、備ヲ替ヘス押行クヘシ

一 拍子木三ツ打ツキハ座備ニスヘシ

一 凡ソ三十間許ニ到ルキ拍子木三ツ打タハ最初ノ如ク座備ニ折敷クヘシ拍子木立二ツ夫ヨリ槍ヲ杖ニツキ矢留ニテ押スヘシ

一 隊長一ツ打チ曳々ト聲ヲ懸クルキ諸勢一同ニ應ト懸ケ備ヲ替ヘス押スヘシ聲無ク三ツ打タハ折敷クヘシ一ツ打タハ槍袞ヲ作ルヘシ立ニ二ツ夫ヨリ槍構ニテ押スヘシ

但シ槍袞トハ戰塲ニテ小膝ヲ折り槍ヲ構ヘタルヲ云ヒ又長柄ノ卒ヲ皆折敷セ槍ヲ構ヘサセタルヲモ云フ

一 聲ハ時々隊長ノ心次第ニ懸ケ行クヘシ

一 拍子木早ク打ツキハ其調子ト等シク勝負ニ懸ルト心得ヘシ

一 聲足歩トモ隊長ヨリ跡ノ諸勢懸ケ歩ムヘシ勿論拍子木ノ數ヲ能ク聞キ定メテ歩ムヘシ

一 役割 隊長、物主、目配、兵器、使番 稽古ノミスル者ヲ習練士ト唱フ

又

一 野仕合之儀晴天二日ニ被仰付候樣奉願候

一 小屋懸ケ別紙繪圖面之通り被仰付候樣奉願候

一 裝束之儀ハ紺股引淺黃股引單物半天勝手ニ被仰付候樣奉願候

一 御屋敷之儀ニ御坐候ヘハ又者日雇體之者入候儀不相成候ヘハ茶沸シ人夫被仰付候樣奉願候

一 別紙取持世話等ニ罷越候者其當日ニ至リ勝手ニ稽古仕候事は迄仕來リニ御坐候ヘハ是以テ前々之通りニ仕度奉存候尤取持之者ハ平服ニテ罷出申候ヘハ稽古仕候節袴股引勝手ニ仕度奉願候

右奥山藤介眞壁權内山田才介へ申談候上奉願候

年十五歲以上ヲ本定年トス又冠年三十歲ノ冬ニ至リテ明年二十一歲ノ屆書ヲ出シテ復タ隨意入校ト爲ル若シ此定年中ニ武藝ノ免許ヲ得サル者ハ冠年三十歲以上ニ至ルモ隨意ヲ許ルサス免許ヲ得ルヲ待チテ之ヲ許ス文學進學舎以上ニ進ム者ハ武藝ノ免許ヲ得ルニ同シ但シ定年中職ニ就ク者或ハ文武不精ノ罰ヲ受ケサル者或ハ一年以上ノ羈旅ヲ三回役スル者ハ此限ニアラス

學館中授業ノ文武諸藝ノ科目ハ教則及ヒ諸則條ニ具ス

弓術ハ時ヲ以テ原野ニ遠射シ其術ヲ演習ス是ヲ遠射ト曰フ

炮術モ亦大炮ヲ原野闊地ニ遠射シ之ヲ演習ス是ヲ町放ト曰フ

槍術モ亦時ヲ以テ原野ニ彼我ノ兩陣ヲ張り對抗シテ勝負ヲ決ス是ヲ槍術廣場稽古ト曰ヒ或ハ野仕合ト曰フ其法文化文政ノ際物主兼書物奉行添役中村加介ノ藩主直亮ニ呈スル書ニ委シ今其原文ヲ左ニ錄ス

覺

一此間御直ニ被仰付候野仕合之儀眞壁權内奥山藤介山田才介へ申達シ夫々弟子共へ相觸申候間二三日中ニ總人數高可奉申上候

一槍術廣場稽古之儀前々へ番仕合計ニテ雙方ヨリ十人程ツ、罷出十間程之間ヲ明ケ折敷セ置拍子木之合圖ニテ雙方一時ニ勝負仕候又右之人數程ツ、罷出折敷セ置一人ツ、勝負仕候事モ御坐候三浦熊介山田原八郎山田甚仙相考遠近之間積リ廣場之槍合稽古之爲メハ押前附候テ稽古仕候ハ、可然段申談シ先々岡本半介父子ニ承リ押前附之稽古モ仕其以來ハ番仕合押前附兩樣稽古仕候尤折々橫槍ヲ入レ一人ニ二人懸リ之稽古モ仕候

一野仕合稽古之節行儀何角相示シ候爲メ高弟之者或ハ其時之世話番等夫々役割仕師範ヨリ且野仕合之掟モ仕置申候一休息所小屋之内ニ身拵場所ヲ取候テ繰出シ申候故兩方ニ小屋圍仕置候テ總人數相極候へハ三浦山田兩家之弟子打交リ候テ達者之者ヨリ幼年之者迄藝術對シ候者雙方へ相分ケ置申候

一右小屋印ニ赤白之水綿ニテ三尺許之小旗之樣ニ拵ヘ竹之先へ結付立置申候
一身拵ニ懸リ候前右之小屋印ヲ合圖ニ振リ申候繰出シ之合圖ハ貝ヲ吹申候

一野仕合之儀是迄右之通りニ仕來リ候へハ此度松原御下屋敷ニテ御覽被下置候節モ是迄仕來リ之通りニ可仕哉又右之内ニ指扣可申儀モ御坐候ハ、差略可仕儀ト奉存候自然前々之通りニテ御覽モ可被下置候ハ、總人數極リ候上押前等隨分相揃候樣稽古爲仕度奉存候

以上ハ維新前ノ制ナリ以後ノ事ハ編者之ヲ知ラス姑ラク闕如シ識者ノ補續ヲ待ツ
洋學ハ明治四年四月米人「グロドメン、ウヰルレム」ヲ雇ヒテ教師トシ上片原町鈴木貫一ノ邸ヲ以テ假リニ洋學校トシ
尋テ内曲輪(今ノ金龜町)岡本省己ノ舊邸ニ移リ五年四月「グロドメン、ウヰルレム」ノ雇ヒヲ解キ爾來學校中ニ其寮ヲ
設ケ本縣士ノ其學ヲ知レル者ヲ以テ教員ト爲ス(此條モ亦教則及ヒ諸則條ヲ參觀スヘシ)
學校諸則 藩主直中夙ニ學校創設ニ志アリ終ニ寛政十一年七月廿九日書ヲ家老ニ付シ八月朔日發途江戸ニ參勤シ三日遂
ニ命ヲ發セシム其書ニ曰ク

御先代ヨリ我等代ニ至ル迄家中風俗之儀彼是申出シ候ヘテ是迄之仕向ニテハ弊風改リ候事無之ニ付家中一統文武藝
能可致鍛練所造立申付則稽古館ト名付候間如定稽古館ヘ罷出可致習練候巨細之儀ハ定書ニ申出シ候間面々堅相守子
弟之者共迄油斷不仕候様可致教導候
件之趣家中一統呼出シ各列座可被申渡候也

七月廿九日

直中

本俣土佐殿庵原助右衛門殿長野十郎左衛門殿脇内記殿
西郷藤左衛門殿庵原主税助殿長野傳藏殿

八月四日布告(上件書面ヲ載ス)

右相廻シ尙又拜見有之様可相達旨御用番土佐殿御申渡ニ付相達候

一稽古館御開講之日限ハ追而可被仰出候事

一此度御家中諸藝稽古所御造立被仰付候右ハ從來之文武諸藝ヲ一所ヘ相集メ稽古被仰付候事ニテ學校ナト申筋ニハ
無之間一統可被存其旨候

件之趣可相達旨御申渡ニ付相達候

九月廿一日布告

御目付中

御目付ヘ

一今度稽古館ニテ諸藝稽古被仰付候ニ付御家中御知行取衆之分家督并ニ部屋住無息之面々十五歳ヨリ三十歳迄日々
無懈怠可被罷出候但右年輩ニテ在役并ニ當分御用掛リ且家藝有之面々ハ出講可爲勝手候

一御扶持方取衆ヲ始メ御騎馬徒士衆三御歩行ハ勝手次第可被罷出候

一陪臣千石一騎之騎馬役之分勝手ニ指出シ可被申名前書付主人々々ヨリ御目付方ヘ可被指出候

二月十二日

中村加介

此法ニシテ或ハ奇兵ヲ以テ不意ヲ撃チ勝負ヲ決スルモアリ或ハ騎シテ對抗シ勝負ヲ決スルモアリ其地ハ多クハ犬上郡大藪村領八坂野(初メ頭無ト稱ス安政二年五月今ノ稱ニ改ム)ナリ或ハ同郡宇尾村領宇尾河原ニテモ亦之ヲ爲ス館外西南接續ノ地ニ馬場アリ是ヲ稽古館馬場(後ニハ弘道館馬場)ト稱ス田祿ヲ有スル士ハ各自家別ニ乘馬ヲ畜養ス即チ戸主若シクハ子弟其馬ニ騎リテ此ニ來リ馬術ヲ習練ス此他各所ニ馬場アリ何レノ馬場ヲ問ハス隨意ニ習練セシム游泳水馬ハ各自ノ意向ニ任セテ湖水ニ演習セシム

生徒ノ精粗ハ毎年六月十一月ニ各寮素讀方手跡方及ヒ諸師範用掛リヨリ調査シ其法或ハ上ノ上、上ノ中、上ノ下、中ノ上、中ノ中、中ノ下、下ノ上、下ノ中、下ノ下ノ九等トシ或ハ上中下ノ三等トシ而シテ之ヲ稽古奉行ニ出ス奉行之ヲ展檢精撰シテ一纏メト爲シ以テ頭取ニ出ス頭取之ヲ檢覈シテ目付及ヒ物主ニ付シテ討議セシメテ賞罰ヲ附シ以テ家老ニ出ス家老審議シテ藩主ニ聞ス藩主詰問シテ可否ヲ認可シ以テ家老ヲ經テ頭取ニ付シテ處分セシム秋ハ頭取ノ意ヲ以テ褒貶シ春ハ聞シテ賞罰ス正月十七日ヲ以テ恒例トス事故アル片ハ此例ニアラス其賞品ハ金百匹絹木綿一端廣瀨紙十帖幼年者ニハ筆十對墨十挺等ヲ以テシ其以下ハ褒スルノミ皆褒狀ヲ以テス優等者ニハ或ハ藩主徽章ノ衣服上下衣或ハ八丈編袴地等ヲ以テスルモ有リ又不精者ハ呵責差扣等重キハ閉門ヲ命スルモ有リ又別ニ不精不行狀ヲ罰シテ日詰ヲ命スルモ有リ日詰ハ日出ヨリ日没ニ至ルマテ入館シテ文武ヲ勵精セシム罪ノ輕重ニ依リテ日數ニ多少アリ

吏員ノ勤惰ハ物主之ヲ檢覈シテ頭取ニ出ス頭取之ヲ目付ニ付シテ討議セシム其法上件ニ同シ其賞品ハ藩主徽章ノ衣服上下衣或ハ八丈編或ハ綿三把或ハ二把或ハ金五百匹三百匹二百匹等ヲ以テス其以下ハ褒スルノミ

毎歲正月十六日開講式ヲ行フ是日諸吏員諸師範諸生徒鬘斗目麻上下ヲ服シ入校シテ頭取以下列ヲ正シテ文武ノ二神ヲ拜シ生徒ハ素讀方手跡方之ヲ指揮シテ拜セシム畢リテ文武藝ノ式ヲ行フ十七日モ亦皆鬘斗目麻上下ヲ服シテ入校シ講堂ニ於テ儒者ヲシテ經書ヲ講釋セシム家老一人臨席シ頭取以下諸館吏諸生徒座次ヲ正シテ席ニ着キ之ヲ聽聞シ講釋畢リテ講師退座シ家老モ亦退座シ右筆出テ、掟ヲ朗讀シテ生徒ニ聽聞セシム十八日ヨリ平服日々入校シテ文武ヲ講習セシム

毎月初四ノ日講堂ニ於テ右筆ヲシテ掟ヲ朗讀シテ生徒ニ聽聞セシメテ以テ遵守セシム其臨席者ハ頭取以下ニシテ家老ハ臨席セス但シ是日ハ生徒山野遊歩ノ闕講ヲ許ルサス聽聞終リテ後退校スルハ此限ニアラス諸吏員ノ職ニ就キ及ヒ諸生徒ノ始メテ入校スル者ハ必ラス麻上下ヲ服セシム但シ生徒ト雖モ師家同禮ノ典無シ

件之趣可被相達候

右之趣相觸可申旨主稅助殿御申渡ニ付相達候

九月廿一日

御目付中

十一月朔日普請奉行作事奉行稽古館ニ出テ其物主方諸用方ニ館中一切ヲ交付ス是ヨリ物主方諸用方晝夜稽古館ニ在勤シ館内ノ事務ハ總テ館中ニ於テ之ヲ行フ

十一月三日布告

御目付へ

一出講之面々毎日朝五ツ半時迄ニ稽古館へ罷出可被申候

一五ツ半時ヨリ四ツ半時迄文事九ツ時ヨリ八ツ半時迄武藝相學可被申候尤右時刻之前後モ稽古勝手次第之事ニ候但暑氣之時分武藝朝講ニ被致候ハ不苦候間其節一應稽古奉行衆へ相届可被申候

一文宮一二之寮へハ手習素讀被致候面々可被罷出候夫々席之儀ハ素讀方手跡方之衆指圖可有之間指圖之通り席ニ著可被申候尤三之寮モ様子次第手習素讀之席ニ可相成候何レ素讀方手跡方へ申渡置候間指圖可被相守候

一獨學之面々ハ三之寮へ會讀寫物等被致候衆ハ四之寮へ可被罷出候

一講堂并ニ寮ニテ之席順ハ笹之間以上次ニ御槍奉行物頭母衣役次ニ平士之面々ト可被相心得候但三御步行ハ何レニテモ末席ニ罷在候

一經書講釋十五歳ヨリ二十歳迄聽聞被致其前後ハ望次第ニ可被致候猶稽古奉行衆被及指圖候儀モ可有之候

一十四歳以下之人出講之節ハ手習素讀或ハ武藝禮節等何ニテモ勝手ニ學ヒ可被申候

一講釋之節行儀正敷聽聞可被致候猶素讀方手跡方之衆申教之通り相守可被申候

一講堂諸生出入被致候節進退ヲ素讀方手跡方之面々引受指揮被致候間人々混雜不致候様被相心得行儀正敷出入可被致候

一素讀手習被相學候面々日々寮へ被罷出候ハ、素讀方手跡方之衆へ被致一禮其上ニテ面々席ニ著可被申候尤句讀被相授候節并ニ手習被致候節等猶更行儀能相學可被申候退散之節モ一禮可被致候

一武藝并ニ兵學禮節等ヲ始メ被相學候衆小屋々々寮々へ被罷出候ハ、前件同様被相心得夫々被罷出候節并ニ退散之節師範之衆中へ一禮被致隨分行儀正敷稽古師範之教導相用ヒ可被申候

一弓槍劔居合共隔日ニ講日相立候間其旨可被相心得候尤毎日小屋々々朝ヨリ明々有之間隔日之外ニモ被罷出度面々

一十五歳ニ滿候テモ不丈夫等ニテ日々如御定文武稽古難被致筋モ有之候ハ、其譯御目付方へ被相届置勝手ニ可被致出講候

一三十歳餘十五歳未滿之面々モ出講被致度候ハ、當人又ハ親兄ヨリ稽古館頭取衆へ被相願勝手ニ可被罷出候尤未タ御帳ニ附不被居衆并ニ子細有テ隠者之身分ニ被相成居候面々連モ出講被致度候ハ、其段頭取衆へ可被相願候但子弟之藝術見被申度面々モ候ハ、稽古館頭取衆へ被相願勝手ニ被罷出候儀不苦候

一十五歳ヨリ三十歳迄稽古館へ出講之面々名前書付當人又ハ親兄ヨリ五六日中ニ御目付方へ可被指出候尤病氣指合等ニテ難罷出分ハ其譯御開講以前ニ御目付方へ可被相届候但三十歳餘十五歳未滿之面々被相願勝手ニ罷出度面々モ本文同様被相心得書付可被指出候

一稽古館ニテノ素讀孝經四書ニ候間被得其意素讀之面々書物可被致持參候萬一所持無之分ハ其趣物主方へ向寄ニ可被申達候

一十五歳ヨリ二十歳迄之面々罷出可被致素讀二十歳餘ニテモ望之面々ハ勝手次第ニ候間被得其意夫々名前書付素讀方へ向寄ニ五六日中ニ可被指出候尤當時被學居候書目并ニ前件五部之書素讀相濟候面々ハ其趣モ素讀方へ夫々書付可被指出候但無息之面々ハ親兄ヨリ書付可被指出候

一十五歳ヨリ二十歳迄之面々罷出可被致手習二十歳餘ニテモ望之面々ハ勝手次第ニ候間被得其意夫々名前書付手跡方へ向寄ニ五六日中ニ可被指出候尤是迄相應用事相達候程ニハ手跡被相學最早當時手習不被致面々ハ勝手次第其趣モ書付可被指出候且又手習被致候面々机硯箱等名札ヲ付被致持參双紙手本等モ可被致持參候自然幼年之衆手本拜借被致度面々ハ其段モ手跡方へ可被申達候但無息之面々ハ親兄ヨリ書付可被指出候

一十五歳未滿之面々被相願出講被致度候ハ、素讀手跡共前件同様被相心得夫々素讀方手跡方へ書付可被指出候一稽古館へ被罷出候面々袴着用可有之尤籠服被相用麻袴ニテモ着用可有之食事ハ骨柳飯燒飯之類總而奢リ个間敷儀無之樣可被相心得候

一子供衆稽古館出引之節二十歳以上之面々町々組合途中同道世話有之樣追而可申渡間其旨可被相心得候

一御家中衆并ニ子弟之面々十五歳ニ及ヒ弓術槍術劍術居合之入門無之面々ハ夫々入門可被致候

一毎月休日之儀追テ可申渡其餘ニ無據要用ニ付テ之斷モ御免可有之勿論馬術炮術ニ付テ之遲參闕講ハ口上ニテ物主方へ被相届其餘病氣指合等之闕講ハ届書ヒテ紙ニ相認メ是又物主方へ可被指出候

又

一 來ル十一日御開講之習禮有之間朝五ツ半時揃御家中御知行取衆并ニ御扶持方取衆御扶持切米取衆家督無息共十五歳ヨリ三十歳迄之面々稽古館へ可被罷出事但右年輩ニテモ病氣指合併ニ兼而御目付方へ斷屈等有之面々ハ被罷出候ニ不及候其餘之斷ハ稽古館ニテ當朝ニ御目付方へ相斷可被申候

一 上下著用ニ不相及候事

一 御武役之分ハ四之寮へ可被罷出候事

一 平士之面々ハ一二三之寮へ溜リ居可被申候尤御騎馬徒士衆ハ一之寮南之方へ溜リ居可被申候事但三御步行ハ罷出候ニ不及候事

右之趣可相達旨主税助殿御申渡ニ付相達候

十一月

十三日布告

御目付中

御目付へ

一 來ル十八日稽古館御開講ニ候間御家中御知行取衆并ニ御扶持方取衆御扶持切米取衆御騎馬徒士衆迄家督無息共十五歳ヨリ三十歳迄之面々熨斗目麻上下著用朝五ツ半時迄ニ稽古館へ罷出可被申候尤無息之面々ハ服紗小袖著用勝手ニ可被致候

一 笹之間以上之衆家督無息之無差別四之寮ニ溜リ居可被申候其次ニ御武役之總領之面々溜リ居可被申候平士之面々ハ一二三之寮尤御騎馬徒士衆ハ一之寮南之方ニ溜リ居可被申候

一 御開講之日神酒頂戴被仰付御掟拜聽被仰付候間被存其旨服穢有之面々神酒頂戴ハ指扣可被申候尤服穢有之面々ハ當朝ニ其旨御目付方へ相届可被申候

一 短日ニモ有之ニ付經書講釋武藝小屋始メ等ハ十九日被仰付候間被存其旨前日之面々染小袖麻上下著用朝五ツ半時迄ニ稽古館へ罷出前日之通り寮々ニ溜リ居可被申候十五歳ヨリ三十歳迄之面々染小袖麻上下著用廿日朝五ツ半時迄ニ罷出素讀手跡之衆ハ一二之寮獨學之面々ハ三四之寮へ可被罷出尤素讀方手跡方指圖之通り席ニ著素讀手習始メ書見等勝手ニ被致相濟候ハ、退散可被致候但前日ニ武藝稽古始殘リ候分ハ夫々武藝小屋へ罷越稽古始可被致候

一 三十歳餘十五歳未滿ニテ被相願置平日勝手ニ被罷出候面々神拜被仰付候間熨斗目染小袖之内勝手次第麻上下著用

ハ勝手ニ出講可被致候

一木工馬小屋ニ武具馬具一式備ヘ有之候間武具ニ手馴候様稽古可被致候馬術之師弟ハ勿論之事其餘迎モ勝手ニ罷出稽古可被致候

一馬術稽古ハ諸事は迄之通りニ有之候ヘバ木工馬講モ是迄之通り師範之宅ニテモ勝手ニ稽古可被致候

一會讀被致候節ハ申合何之書會讀致度旨一應稽古奉行衆ヘ相伺可被申候

一御書物拜借被致候節ハ稽古館頭取衆ヘ書付ニテ相願可被申候其上御書物奉行ヨリ相渡可申候尤御書物次本取替之節ハ小札ヲ以テ直ニ御書物奉行ヘ掛合請取可被申候但拜借之御書物館外ヘ持出候儀堅不相成候

一毎月朔日八日十五日廿一日廿八日

一五節句並ニ正月ハ元日ヨリ十五日迄七月ハ十三日ヨリ十六日迄十二月廿一日ヨリ晦日迄此外ニ天神千代宮多賀祭禮

右之通り休日ニ候尤出講被致度面々ハ勝手次第ニ候但休日并ニ馬術炮術稽古之外ニ山野歩行之爲メ一箇月之内三箇日許ハ閑講不苦候間不被罷出而々ハ其譯物主方ヘ斷届指出シ可被申候且又煩指合并ニ近國遊覽他所湯治步行其外無據家事之辨有之節ハ是又物主方ヘ斷届書指出シ可被申候

一向後文武之藝入門被致始メテ出講之節并ニ正月御講始メ之砌ハ麻上下著用可被致候平日ハ袴計著致シ可被申候一二十歳以上之衆町内之子供稽古館ヘ引出ニハ被申合一兩人ッ、順番ニ同道被致途中不法之儀并ニ過チ等無之様何

角心ヲ添ヘ世話可被致候尤子供衆歸宅之上世話番ニ當リ候面々ハ再出講勝手ニ可被致候町内又ハ品ニ依リ向寄之他町ト組合候テモ兼テ能々被申合猥ナル儀無之様可被相心得候猶人別之儀ハ御目付衆ヨリ可被相達候

一風雨雪等甚敷節ハ子供衆出講斷ニ不及候右三事大變共申程之砌ハ大人タリテ斷ニ不及相止ミ候上出講可有之御定之時刻過候テ止ミ不申時ハ勿論斷ニ不相及候但總テ異變無據急用等出來候節ハ子供衆ニ不限閑講斷ニ不相及追テ出講之節其譯可被相斷候事

一東西中島其餘近火風筋ニ依リ稽古館御役人中相詰可被申候件之趣可被相達候

右相觸可申旨主稅助殿御申渡ニ付相達候尤御開講御日限モ近々之内ニハ可被仰出候間其旨モ御心得可被成候

十一月三日

御目付中

一右相濟弓槍劍居合師範之面々弓ハ卷藁前槍劍居合ハ表一通リ御代見仕候事但師範之御代見濟次第門弟中追々於小屋々々稽古始致候事自然多人數ニテ其日残り候分ハ翌日麻上下著前日之通り稽古始仕候事

一御代見相濟師範并ニ儒官へ謁候事

一十九日著用染小袖麻上下

十八日稽古館開講式ヲ行フ總テ布令式目ノ如シ右筆頭ヲシテ掟ヲ朗讀セシメテ以テ事務員教員生徒ニ聽聞セシム掟ニ曰フ

掟

一文を學ぶの肝要は孝悌忠信の道を基として治國安民の旨に通達し國用に可立様可相勵事

一武を講ずるの肝要は弓馬劔槍の藝を學び禮儀廉恥を基として武道専ら可致研究事

一生質不器用にして文事武藝を習熟する事能はず候ども五倫の道に叶ひ行狀正敷候へは恥辱とすへからざる事

右條々面々大切に可意得候今度開館の主意は直政公直孝公の遺風を守り武道盛んに弓馬劔槍に鍛練し孝悌忠信を基として禮儀廉恥を養ひ士風正敷ならしむへきために候條一統此旨致會得無油斷可相勵候たどひ武藝に長し候ども血氣放蕩にして禮儀を辨へざる歟又は文事を好み候とも武道の心懸薄く文弱に陥り世を毀り人を輕蔑する輩は國家の害風俗の弊と成候間聊無容赦可行其罪條人々心得違なく可致勉強者也

寛政十一年己未七月

直中

即チ講堂中央南面ニ掲載シ爾來每歲正月十六日毎月初四日ニ右筆ヲシテ朗讀セシメテ以テ生徒ニ聽聞遵守セシム但シ家老ノ臨席ハ開講ノミニシテ爾後ハ頭取以下館吏ノミニニ臨席ス

又講堂綠側東方南面ニ條目ヲ掲ケテ曰フ

條目

一家中一統家督并ニ部屋住無息之者共三十歲以下十五歲以上日々無懈怠罷出可致文武稽古事但右年輩ニテモ在役當分用掛リ且家藝有之分并ニ扶持切米取出講勝手タルヘシ十五歲ニ滿候者不丈夫ニテ如定難罷出者目付役へ可届置事

一千石以上役騎馬之分勝手ニ指出可申事

一席順ハ笹之間以上家々席之通り總領二男末子弟準之武役役列之通り并ニ總領之分親々席ニ準ス平士知行取知行跡

廿日朝五ツ半時迄ニ稽古館へ罷出溜リ所ヨリ御玄關邊ニ溜リ居可被申候御目付衆指圖之上神拜相濟候ハ、兼而相觸候通リ素讀手習之面々ハ一二之寮獨學之面々ハ三四之寮へ罷越素讀手習始書見等勝手ニ被致且又於小屋々々武藝稽古始モ勝手ニ可被致候

一武藝小屋道具御開講迄ニ指越可被申候先達而モ達置候手習道具來ル十四日ヨリ十六日迄ニ勝手次第一二之寮へ差越置可被申候

一廿一日ハ休日ニ有之間被存其旨廿二日ヨリ御定之通リ罷出稽古可被致候

一素讀方手跡方諸師範衆其外共前段之次第夫々被得其意不滯様ニ可被相心得候

一三御歩行之分ハ十八日十九日両日共師範御用掛リ罷出諸生ハ不及罷出候

件之趣可被相達候

右之趣相觸可申旨主稅助殿御申渡ニ付相達候

十一月十三日

御目付中

開講式目

御開講式目之覺

一十一月十八日稽古館御開講式

一文武二神 右神前へ鏡餅神酒鬘斗相供候事但神酒爲頂戴別臺ニ土器戴置候事

一御名代之御拜庵原主稅助相勤候事

一御家老ヨリ館中諸御役人諸師範迄次第正敷拜禮神酒頂戴相濟夫ヨリ三十歳以下十五歳以上之諸生笹之間以上次ニ御武役次ニ平士ト格式ニ隨ヒ次第不致混雜様幾切ニモ罷出拜禮神酒頂戴仕候事

一館中御役人諸師範并ニ諸生迄幾切ニモ居並ヒ御家老着座頭取中侍座御目付着座御掟御右筆頭讀之一統拜聽之事

一御家老并ニ館中諸御役人諸師範其外稽古館御造立ニ掛リ候向御役人中へ御酒御吸物被下置候事

一十八日著用鬘斗目麻上下尤無忌之面々ハ染小袖著用候ヒ勝手次第之事

一短日之時節ニ付經書講釋武藝小屋始ハ翌日ニ相成候事

一十九日御用番之外御家老稽古館へ罷越爲御名代龍衛門太菅權之丞之講釋承之講釋ハ孝經一章ツ、尤館中御役人并ニ諸生出席聽聞仕候事但諸生多人數ニ付講釋二座ニ申渡初衛門後權之丞相勤候事

調日(弓術)加藤彦兵衛、後関新兵衛、大久保信藏、増島團右衛門、山根善五右衛門○調日(槍術)内田臺右衛門、久保田全左衛門、三浦軍介、森川翁助、山田源八郎○調日(居合)河西庄右衛門、田部孫八、横田治平、○半日(弓術)加藤彦太夫、高橋新五左衛門、佐藤作藏、角屋半之介○半日(劍術)荒川孫三郎、渥美平八郎、安中半右衛門、江坂新左衛門、久保田三郎左衛門、上坂丈内、川手七左衛門、永居新五左衛門○三ノ日(軍馬)栗林彌一左衛門○半日(同小屋ニテ一騎前稽古)一二七於講堂講釋之節十五歳ヨリ二十歳迄之面々聴聞ニ被罷出候様諸生へ被相達候様被仰出候但右年齢之外二十一歳以上之面々勝手ニ候間被罷出度面々ハ其旨素讀方手跡方之内へ可被申聞候事

十一月廿日

〔附記〕

一富永卯兵衛槍術講日調日ニ相定メ候趣届出ル

一宮川辰藏劍術二五九ニ定メ候趣届出ル

一園川丑太郎劍術居合三七五九ニ定メ二々ニ裏講之趣届出ル

一四九ノ日午ノ半刻ヨリ醫學寮へ御醫師衆何レモ罷出醫籍會讀有之趣達シ有之

一天神千代宮祭禮前日當日二日ツ、多賀祭禮地渡リ有之節ハ地渡リ日御發駕前日當日御著城當日翌日休講ニ被仰出候

十二月廿日達

一來正月十六日稽古館御講初ニ候間是迄稽古被罷出候三十歳以下十五歳以上之衆并御知行取衆ヨリ御騎馬徒士衆迄家督無息共此年十五歳ニ相成被申候衆熨斗目麻上下着用朝五ツ半時揃稽古館へ罷出可被申候尤無息之面々ハ染小袖着用勝手次第ニ候

一笹之間以上之衆ハ四之寮北之方ニ溜居被申其次ニ御武役總領之面々溜居可被申候平士之面々ハ一二三之寮御騎馬徒士衆ハ一之寮南之方ニ溜居可被申候

一於講堂神拜被仰付候間被存其旨服穢有之面々ハ神拜指扣可被申候尤煩指合服穢有之面々ハ當朝ニ其旨御目付方へ相届可被申候

一諸師範衆ニモ神拜被仰付候間相濟候ハ、於小屋々々弟子中射初遣初等爲致可被申候

扶持方取歸參次第不同右之總領并ニ武役之二男末子弟次第不同中小性騎馬徒次第不同并ニ總領末子弟同斷但平日ハ講堂寮ニテ教方學方便理ニ依リ可應時宜事

一經書講釋ハ孝經四書ニ候事

一面々好ム所之藝術可致習練候尤文事ヲ好マス候ハ講釋聽聞記錄讀等文之一事相學可申又武藝好マス候ハ文事而已ニ不耽武藝何ニテモ可致勵精事

一藝役之者共ハ家藝第一ニ可相勵候假令他之藝ニ達シ候ハ家藝ニ怠リ其術拙キ者ハ可及不埒之沙汰事

一總而文武師範之者共弟子取立厚ク可致教導候尤弟子之者共師命ヲ守リ行儀正敷相學可申事

一稽古之内ハ勿論休息之時タリハ猥リニ不致徘徊總而可爲靜肅事

一文庫之書物館外へ持出候儀堅致間敷事

一入學之者并ニ役人共鹿服鹿食ヲ用ヒ少シモ奢个間敷儀無之樣可相心得事

一館中ハ脇指計ニテ可致徘徊事

一喧嘩口論致間敷候自然於館中及及傷候時ハ仕懸ケ候者越度ニ可申付事

一總而館中役人共火之元念入諸生之者共モ大切ニ可心得候泊リ仕候役筋之者時々見廻リ別而火之元萬事大切ニ可相心得事

寛政十一年己未七月

此他ニ條目今一通溜所ニ掲載アリ其寫散逸シテ即今得ルヲ能ハス願フニ上文ニ記スル所ノ十一月三日布告ト同義異文ナリシカハ編者ノ諳記ニシテ然リヤ否ヤハ保シ難シ

二十日布達

諸藝稽古日

毎日 素讀、手跡〇二七 經書講釋、和學〇三々 上泉流兵學、天學〇四九 越後流兵學〇五日十日十四日廿日廿五日廿七日 算學〇六日九日十六日十九日廿六日廿九日 小笠原禮節〇隔日 弓術〇調日 槍術、居合〇半日 劔術、於軍馬小屋一騎前稽古但三々榊山流右如件五ツ半時ヨリ四ツ半時迄ハ文事九ツ時ヨリ八ツ半時迄ハ武藝尤休日御定時刻之前後共稽古勝手次第之事但三御步行小屋ハ勝手ニ講日相定候事

覺

一館中御役人并ニ御醫師中ニハ別段之儀ニ候間可被存其旨候

○ 毎月二七御講釋式書一通遣之候各被得其意直ニ留置可被申候尤三四之寮之諸生出引并ニ講堂ニテ之指引行儀等之儀迄モ各引請相勤可被申候以上

二月廿三日

庵原主稅助

物主役衆

御講釋式書

一毎月二七御講釋日

一御家老中兩三人宛御出席尤不殘御出席候可然御頭取衆稽古奉行衆御出席之事但評定役評定御目付ニモ可被罷出候事

一學問方支度宜敷有之候ハ御講釋何時ニテモ可相勤旨御用部屋ヘ罷出御頭取衆ヘ可被申上候事

一御頭取衆ヨリ稽古奉行衆御目付中ヘ學問方御講釋支度宜敷趣御達之事

一御目付中ヨリ物主方素讀方手跡方ヘ諸生講堂ヘ被繰出候様可被相達夫々聽衆講堂ヘ揃候事
諸生ヘ素讀方手跡方御玄關溜所ヘ被罷出候面々ヘ御目付中被相達夫々聽衆講堂ヘ揃候事

一聽衆繰出シノ節ヨリ稽古奉行衆物主役衆御目付中一兩人程ツ、講堂ニ著座有之不行儀無之様可被相示候事

一諸生相揃候ハ、其段御頭取衆并ニ學問方ヘ御目付中被申聞候事
一講師被罷出指續キ御家老中御頭取衆御出席之上講釋相始メ候事

一凡一二之寮之諸生講堂之内四之寮之面々西之御縁頗三之寮之面々東之御縁頗此餘之聽衆南之御縁頗之事但少々宛之儀ハ可應時宜候事

一聽衆之内自然不行儀目障之儀モ候ハ、御頭取衆ヨリ稽古奉行衆ヘ御達シ奉行衆ヨリ一二之寮之諸生ニ候ハ、素讀方手跡方其日預リ罷出居候面々ヘ御達シ三四之寮之面々ニ候ハ、物主役衆ヘ御達シ其餘之面々ニ候ハ、御目付中ヘ御達シ有之候テ夫々示敷可被致候事但奉行衆ハ勿論物主役素讀方手跡方御目付中ニモ聽衆不行儀之體被見受候ハ、御頭取衆御達シ無之モ示敷可被致候事

一御講釋相終テ御家老中御頭取衆ヨリ段々ト御退座之事

一翌十七日經書講釋初有之間前日之面々朝五ツ半時揃鬘斗目麻上下著用尤無息之面々ハ染小袖勝手次第著用有之稽古館へ罷出寮々ニ溜居可被申候

一講釋聽聞相濟候ハ、素讀方手跡方指圖之通リ素讀初手跡初可被致候

一三十歲餘十五歲未滿勝手次第ニ被罷出候面々ハ九ツ時揃罷出御立關ヨリ溜所ニ罷居御目付衆指圖之上神拜被致夫ヨリ武藝小屋射初遣初師範衆指圖次第可被致候

一同十八日ヨリ講日相立候間文武稽古御定之通可被致候

一來年十五歲ニ相成稽古館へ被罷出候衆ハ其以前向寄之素讀方手跡方ハ當人又ハ親兄ヨリ名前書指出シ可被申候但シ十五歲未滿ニテモ被罷出候衆ハ同様可被相心得候

十二月廿日

十二年二月廿二日布告

御目付へ

御家中衆稽古館出引ヲ始メ届事等物主方へ被相届候様先達テ達置候ヘ向後ハ不寄何事朝五ツ半時ヨリ八ツ半時迄ハ稽古館出席之御目付衆へ可被相届候右刻限之前後ハ御在城ハ御殿御留守ハ京橋口御目付方へ届書可被指出候尤無據子細等有之關講有之節ハ右無據譯合届書ニ相認メ可被指出候

一三十歲餘十五歲未滿之面々頭取衆へ被相願勝手ニ被罷出候様昨年相達置候ヘ向後ハ不及被相願勝手次第罷出可被申候尤始テ被罷出候節一應御目付方へ相届置可被申候但子弟之藝術見被申度面々モ本文同様可被相心得候

一出講之面々朝五ツ半時迄ニ稽古館へ被罷出候様先達テ相達置候通リ可被相心得候

二月

是日寮々ニ於テ席達

諸生晝以後モ文宮ニ被罷在候面々有之候ヘ向後ハ三十歲以下之衆御定之通リ四ツ半時ニテ文事被相終會讀等有之面々ハ晝迄ハ勝手次第ニ候間九ツ時ニハ武藝小屋へ相移リ藝術稽古可被致候少々之痛所ヲ被申立候テハ心得違ニ候間其旨可被相心得候尤武藝小屋へ被相越候後再寮々へ被罷出候儀無之様可被致候但シ執心之面々朝ヨリ武藝被相學度候ハ、稽古奉行衆并ニ御目付中へ相斷置可被罷越候且又文事有志之面々八ツ半時後再文宮へ被罷出度候ハ、稽古奉行衆へ承合御目付中へ斷置可被罷出候事

有之様申達候間各被存其旨右講日之外ハ閉置御馬役衆斷有之候ハ、何時モ開ケ可被申候尤諸用方ニハ木工馬ヲ始メ渡リ道具不滯様可被致候

諸生一統へ

右於館中毎月五十木工馬講相立御馬役衆罷出指南世話等有之間一統被存其旨勝手ニ罷越隨分行儀能稽古可被致候未タ何レヘモ入門無之面々ハ被致入門稽古可被致候

右之通各被存其旨夫々ハ相達可被申候尤諸生衆ヘハ於館中席達被致可然存候笹之間衆ヘハ例之通自分方ヨリ相達可申間可被存其旨候以上

庵原主税助

御目付衆

十月九日達

一稽古館諸生衆養子被仰付或ハ苗字替并ニ改名他所行病死等之節親兄ヨリ物主方ヘモ可被相届候

一右之趣相達候ニ付夫々届書出候ハ、其趣ヲ物主方ヨリ奉行衆素讀方手跡方三之寮世話方ヘ相達可被申候

廿五日布告

御目付へ

總テ御扶持方取衆并ニ御扶持切米取衆稽古館ヘ被罷出候ハ勝手ニ被罷出候様先達テ相觸置候處元來勝手之事ニ候ヘハ出講不被致候テモ相濟候儀ト心得違被致候衆モ有之趣相聞エ候右勝手ト申儀ハ日々急度出講被致候ニハ不相及候ヘ用事之間ニハ隨分心懸可被罷出儀ニ候右之趣以來心得違無之様若年之面々ヘモ親兄ヨリ急度可被申含置候件之趣可被相達候

享和元年達

一諸生衆是迄煩指合之節御目付方ヘビラ紙ニテ斷届被指出候ヘ用以來ハ親兄ヨリ印付書付ニテ可被指出候

一山野步行ハ印付ニ不及是迄之通リ

一笹之間衆ハ印付ニ不及親兄ヨリ書付可被指出候

一御家老衆頭取衆子弟ハ是迄之通リ

一館中ニテ俄ニ病氣等ニテ斷之節ハ是迄之通リ

一親兄在府他所行等之節ハ是迄之通リ當人ヨリ印付書付可被指出候

以上（此書尊敬ニ過キタリ願フニ目付）
（ニテ草案シ其儘達セシナラン）

四月五日達

一頭取衆稽古奉行衆諸事届方常例之通り之事

一右兩御役之外館中御役人京都步行湯治參宮御暇等被相願被罷越候面々家督無息_ニ頭取衆へ之届ハ出立以前於館中口上ニテ相届可被申候尤被罷歸候節モ右同斷且又御用番并御目付方へノ届書ハ常例之通尤諸師範衆并御用掛リ之面々モ右同斷之事

一右同斷御役人煩指合等家督無息共頭取衆へ之届ハ於館中名代ヲ以テ口上ニテ相届被申出勤之節ハ當人可被相届候諸師範衆并御用掛リ之面々モ右同斷之事尤御用番并御目付方へ之届方家督取ハ常例之通無息之面々ハ名代ヲ以テ口上ニテ可被相届候且又忌産穢等御免之儀御用番へ同役被相願御用番ヨリ御免申渡候事
件之趣各被得其意頭取衆奉行衆之外天々へ相達可被申候以上

庵原主稅助

御目付衆

閏四月達

諸生一統へ

稽古館御造立之御主意ハ御掟ニ被仰出候通り御家中風俗正敷相成候様可被遊思召ニ候へハ一統行儀正敷文武藝能出精可有之處時々不行儀之族モ見聞致候別而言葉遣ヒ之儀ハ先年ヨリ毎度被仰出モ有之處今以甚野鄙之言葉被相用御主意ニ不相叶儀ト存候間面々相嗜可被申候尤御役方諸師範衆へモ右體之族於有之ハ無遠慮被相示猶示方不被用面々モ候ハ、兼テモ被仰出有之儀ニテ不指扣被申出候様尙又相達置候間其旨相心得可被申候

五月達

御庭頭取衆

右稽古館木工馬講之儀各被相同候通り彌毎月五十ニ相定可被申候尤右講日四ツ半時ヨリ罷出出講之面々隨分行儀能稽古有之様世話指南可被致候外御馬役衆へモ同様相達シ可被申候尤暑氣之時分朝講可被致候ハ、明ケ六ツ時ヨリ五ツ半時迄勝手ニ相立可被申候

御物主役衆御用役衆

右是迄木工馬小屋へ若年幼年之衆被罷越木工馬稽古有之趣ニ候へ_ニ師範モ無之事故稽古之爲ニモ不相成却テ不行儀モ可有之哉ニ相聞エ候ニ付毎月五十於館中木工馬講相立御馬役衆申合セ四ツ半時ヨリ出席被致行儀能稽古指南世話

此間ノ告布諭達ハ簿書存セスシテ登記スルヲ得ス但シ全文ナラスト雖モ一二ノ諸書ニ散見スル者ヲ左ニ記ス

一 責馬遲參ハ四ツ時迄之事但シ十月ヨリ二月マテハ九ツ時迄

一 掟拜聽日ニハ責馬遲參不相成事

一 文化五年六月四日師範之總領ハ家藝之外文武共勝手之事

一 文政十一年家督取私用愼中ハ出講不相成事但シ師範ハ家督取ニテモ出講之事

一 親兄私用愼中無息之子弟ハ出講尤十五歲以下三十歲以上之者モ同斷

一 親兄乍勤指扣中右同斷

一 天保元年六月十三日稽古館ヲ弘道館ト改稱之事

一 同五年二月四日責馬遲參笹之間衆ハ不相成事

一 年月不分退散時刻ヲ正月二月三月及ヒ八月九月十月十一月ハ八ツ時但シ八月ハ秋暑酷ナレハ九ツ半時トハ是ハ臨時ノ處分ナリ四月五月及ヒ十二月ハ九ツ半時六月七月ハ九ツ時但シ四ツ時二分五厘以前ヲ文事トシ其以後ヲ武藝トス

嘉永三年十二月二日直弼令スル十箇條ノ第四條第五條第六條第七條ニ曰ク

一家中之者共家格之通リ諸事專ラ古風ヲ守リ文武忠孝之道忽諸ニ不存禮儀廉恥ヲ旨トシテ士之本意ヲ不失儀可爲專

一 候若シ拔群之英士タルニ於テハ重ク召仕不依家柄武役ヲモ可申付條急度可致勵精候

一 弘道館之儀ハ觀德院様(直中諡號)御開館之御趣意ヲ守リ專ラ國用ニ可立樣勉強可致事勿論ニ候館中之諸役人并ニ

師範之者共懇篤深切之情ヲ盡シ諸生弟子共ニ我子ノ如ク教導取立候儀家中之爲メ第一我等ヘノ一廉可爲奉公候ヘハ厚ク可致懸念候

一 總シテ家中之者共平日身ヲ丈夫ニ持固メ何時モ馬先之用ニ相立候覺悟可爲專一候畢竟身ハ常之習ハシニ候ヘハ別

シテ若キ者共ハ急度相心得可申候子弟之者共ヌルケタル生立ハ親兄之不覺悟忽諸ナル故ト存候依テ行跡正敷文武

ニ達シ候者ハ格別之沙汰ニ可及事ニ候

一 總シテ家藝之者共幼少之時ヨリ無油斷藝術稽古鍛練致サセ可申候家藝ニモ疎ク懈怠ニ流レ用ニモ難立ヲ其儘指置候ハ親共不心得之至リ能々教導可致候嫡子タリモ生質其器ニ不當候ハ、次男又他ヨリ致養子候モ家藝手厚ク致相傳候様可相心得候前件之如キハ養子タリモ跡式無相違可申付事ニ候尤家藝ニ達シ執心厚キニ於テハ別段之可及沙

又

一親兄在府他所行等之節ハ當人ヨリ印付書付ヲ以テ斷相届候様相達置候ヘニ以來ハ右様之節ハ親類ヨリ印付届書可被指出候

二年五月廿七日十五歲以上三十歲以下ノ生徒ヲ稽古館講堂ニ召喚シテ之ヲ誠飭ス其書ニ曰ク

家中之者共何ト無ク前々トハ風俗相衰不宜候間色々世話申出シ候ヘニ行届兼候ニ付先年稽古館造立申付委曲其頃存寄モ申出シ置候處此度著城之上様子相尋候ヘハ昨年來又々一統不精ニ相成候趣殊ニハ彼是不行儀之儀共モ有之旨相聞エ以外心得違ニテ不届之事ニ存候右體世話ハ不申出候共面々行儀モ相嗜諸藝モ可相勵事其職分ニ候處却テ相怠リ候族ハ如何之心得ニ候哉畢竟職ニ怠リ候ヘハ百姓町人ハ家族之養育モ難致相成モノニ候ヘニ士官タル者ハ其憂ハ無之ニ付自然ト職ニ怠リ候様相成儀歟ト被存甚可恥事ト存候素ヨリ家中士風之惡敷ハ我等之恥辱ニ候ヘハ何卒弊風相改度存候故其次第モ申出シ候處一統心得違致候儀實ニ以テ心外之事ニ候彌年若ナル者共ハ不及申幼年者等モ親兄之者致世話出精致サセ可申候萬一以後不埒ニ相聞エ候ヘハ夫々役人共ヘモ申付置候事故人別ニ撰ミ其沙汰可申出候必心得違仕間敷候

件之趣各之内兩三人稽古館ヘ被罷越頭取之者侍座致サセ定年之者共呼出シ急度可被申渡候猶一統心得違爲不致目付共ヨリ總家中ヘ爲相達勿論稽古奉行物主共ヘモ無油斷世話致候様可被申渡置候也

五月廿七日

本俣土佐殿、長野十郎左衛門殿、脇内記殿

西郷藤左衛門殿、中野助大夫殿、長野傳藏殿

六月稽古館頭取達

武藝師範衆

一各小屋々々近來行儀不宜別而間講并ニ時刻前後稽古猥ニ相成候趣ニ有之ニ付此度小屋々々鎖前付候様申渡候右ニ付間講并ニ時刻前後稽古被致度面々有之候ハ、各罷出世話可被致候自然煩指合等ニテ不被罷出節ハ高弟并ニ年頃之衆名代ニ可被指出候尤名前書一兩日中ニ可被指出候且又所作講始メ間講等ノ儀ニ付稽古奉行衆ヘ達置候儀モ有之間被申出候ハ、可被及指圖候其旨相心得可被申候

一門弟中稽古之内向後猥ニ小屋外ヘ被出候儀制シ可被申候尤他小屋ヘ被移候衆ハ出入之節々各ヘ被相斷候様取計可被申候此段申達候

弘道館段々御引立之儀被仰出候處間ニハ心得違不靜肅之者モ有之趣相聞エ候間以後左様之輩無之様可被相示尤稽古奉行物主役ヘモ萬事無遠慮實意ヲ以テ世話致候様相達候且又學風之儀ハ以來公邊御同様ニ相成朱熹學被仰付候間講釋會讀等都テ朱註相用致教導候様儒者素讀方ヘモ相達候間各ニモ厚ク相心得可被申候様被仰出候

稽古奉行物主儒者素讀方等ニ達スル書ハ逸ス

抑從來古學ヲ尙ヒ專ラ漢唐諸儒ノ註解或ハ徂徠派ノ註ヲ用ヒタリシカ是ニ至リテ宋學ヲ專ラトシ四書五經等總テ集註ヲ用ヒ其他ニ小學近思錄若シハ七書等ヲ加フ其論達亦逸ス

萬延元年四月廿五日直憲ノ時布告

御帳除之面々は迄文武稽古之儀ハ御頭取衆ヘ願濟之上罷出候儀ニ有之處以來ハ不及相願勝手ニ出講人々相嗜候藝術研究可被致様可相達旨御頭取松平倉之介殿御申聞ニ付相達候

四月廿五日

御目付中

五月廿四日達

一文武研究之儀ニ付是迄毎々被仰出有之殊ニ此度御家督ニ付公邊ヨリ御手當之儀ニ付分テ被仰出モ有之依テハ弘道館諸生衆ハ勿論勤向有之衆ニテモ御用透相考精々出講專ラ武術可被相屬候假令以前藝術達者ニ候中絶有之候テハ自然之節働方不自由ニ可有之儀ニ付年頃相應之稽古可被致候尤文事之儀モ精々御國用ニ相立候様研究可被致候
一馬術之儀ハ面々要馬飼立置每度乘責致シ自然之節丈夫ニ御用立候様兼テ心懸置可被申候
一炮術之儀モ兼テ達モ有之儀ニ付三本柳并ニ安清御矢場之内東西向寄之方ニテ講日相立候間勝手ニ稽古可被致候尤師範并ニ小屋世話之衆ニモ被罷出候ニ付被相學不作法無之様稽古可被致候尤大筒稽古モ心懸可被申候
一藝術達者ニ候モ身體不丈夫ニテハ自然之節凌兼候儀ニ候ヘハ遠馬遠足又ハ山行等毎々被罷越候テ手足身體相固メ如何様之御用向ニテモ相勤マリ候様心懸可被申候自分共モ(家老自カラ云フ)御用透之節ハ罷越候心得ニ付其節同道可致儀モ可有之間御用不指問節ハ罷越可被申候素ヨリ筋骨試ミ之儀ニ付人々腰糧用意都テ手輕第一ニテ可被罷越候

一節儉之儀ハ申迄モ無之萬事實朴ニ致專ラ武備手厚ニ可被心懸候事

文久二年七月十二日布告

此度弘道館御改革ニ付諸御役方御役儀御免當分館中締切ニ被仰渡候ニ付追テ御開講迄宅ニテ稽古被致師範之衆ニハ

汰候

四年十一月十日直弼手書ヲ家老庵原助右衛門西鄉軍之助ニ與ヘテ弘道館ヲ改更セシム其書ニ曰ク

弘道館御造營之御趣意ハ御掟面ニ被仰出置候通リ家中之者共文武藝道ヲ習熟シ人倫之道ヲ辨ヘ專ラ士道ヲ爲可致研究ニテ一藩之風俗ニ拘リ候大切之場所柄ニ有之處退々禮儀廉恥之心薄ク柔弱ニ流レ近來以之外ナル風俗ニ相成候趣ニ相聞エ此儘指置候テハ御造營之御趣意モ難相立甚以心外之至リニ候依之今度弊風改革寛政之度ニ復古致シ尙舊冬申出シ置候武門之本意ヲ以テ彌文武盛ニ習熟シ往々國用ニ可相立英士ヲ仕立御兩代(直政直孝ヲ指ス)之御遺風專ラ可致興隆様以存寄各ヘ弘道館用向重立被相勤候様申付候間政事向同様之心得ヲ以テ可申間筋ハ聊心底ヲ不殘諸事遂吟味入念大切ニ相勤可被申候事

庵原助右衛門殿、西鄉軍之助殿

是ニ於テ館吏ヲ出入シ職等ヲ進メ弊ヲ去リ良ニ就キ務メテ生徒ヲ獎勵シ大ニ其法ヲ改良シ勵ム可キヲ勵マシ弛ム可キヲ弛メ弛張其宜シキヲ得テ各自力メテ勵精ス其布令諭達ハ簿書存セスシテ登記スルヲ得ス但シ此前後共布令諭達ヲ記載スル者完者タル簿書ニ據ルニ非ス私記ニ散見スル者一二ヲ拾録スルノミ故ニ遺漏ノ多キハ論ヲ待タス

五年四月布告

天神千代宮祭禮是迄前日當日弘道館休講之處以來ハ前日當日翌日共三日ツ、休講ニ候間可被得其意候

六年十二月九日布告

御家中一統ヘ

砲術之儀ハ異船防禦之要用ニ付大砲等段々御鑄立被仰付候次第別シテ今般内海御警衛被蒙仰候ニ付テハ彌御手厚ニ被遊度思召候既ニ先頃於公邊モ砲術之儀ニ付テハ被仰出モ有之次第ニ付以後子弟ニ至ル迄有志之者共ハ專ラ鍛練可被致尤格別出精被致候向ハ別段之可被及御沙汰候間御趣意不一通厚ク相心得可被申候事

砲術師範ヘ

砲術之儀ニ付此度別紙之通り被仰出モ有之間師範家之儀ニモ候ヘハ自分ハ勿論弟子共格別御用立候様不一通厚ク世話被致精粗取調可被申出候事

十二月

安政四年八月十七日命シテ弘道館ヲ誠勵シ學風ヲ改革セシム

弘道館頭取ヘ

廿九日布告

弘道館休講以來一六之日ニ有之間其旨可被相心得候

二年正月五日布告

弘道館兼テ一六ハ休講ニ有之候ヘ凡來ル十六日ニハ例年之通り御開講有之間其旨相心得可被申候

三月十九日達

御家中一同ヘ

一弘道館毎日開講之事但シ年始ハ正月十五日迄年尾ハ十二月廿一日ヨリ并ニ五節句九月廿二日多賀社天滿社千代社祭禮毎月朔望等休日之事

一十五歳ヨリ三十歳迄常出講ニ被仰付置候處此度勝手ニ被仰出候事但シ即今之形勢文武藝稽古御弛メ被遊候御趣意ニ無之御改革御一新之節ニ當リ思召有之被仰出候儀ニ有之間其處深ク奉恐察彌文武勉勵可被致候萬一心得違之候有之候テハ不宜候間其旨相心得可被申事

一毎月二七之日御講釋之事但シ御家中一同御用無之衆ハ聽聞ニ可被罷出候尤御講釋聽聞ニ不限有志之衆ニハ精々出講可被致事

一寄宿御免ニ候間願度衆ニハ相願可被申候塾生所御渡シ可相成候事但シ組下支配下ヘモ相達シ可被申候事

一武藝之儀ハ諸藝勝手ニ稽古可被致事但シ劍炮專一ニ相學ヒ餘ハ勝手ニ稽古之事

一館中御役方休日之外ハ日勤之事但シ諸師範ニモ日勤五ツ半時ヨリ八ツ時迄出講之事尤外御役兼勤之衆ハ不指間様精々可被罷出候

一御定刻ハ五ツ半時ヨリ八ツ時迄之事但シ九ツ時迄文事ト相定メ候事

右之通被仰出候間相心得可被申事

十月廿八日弘道館ヲ改メテ文武館ト稱ス其布告逸ス

三年四月廿日達

今般文武稽古所御引分相成候間此後文武館之儀ハ學館ト改稱相成武藝小屋ハ追々練兵所ヘ御引移可相成候事

六月廿二日達

此度御都合ニ依リ劍術師範之向モ被免候ニ付テハ其門弟之者共又他ニ師ヲ相求メ可申依テ今後一刀流ヲ盛大ニ被遊度御趣意ニ付壯年之者ハ精々其御趣意ヲ遵奉可致事

精々世話被致候様可相達旨御用番助右衛門殿御申渡ニ付相達候

御目付中

八月廿八日布告

弘道館御改革ニ付締切ニ相成有之處尙又御考之筋有之是迄之通り來月二日ヨリ御開館相成候間被得其意總テ締切以前之通り被相心得候様御用番五右衛門殿御申渡ニ付相達候

御目付中

三年秋弘道館中ニ砲術射の場ヲ設置シ師範生徒ニ諭達シ禁令規則ヲ掲載ス其書皆逸シテ即今登記スルヲ得ス

明治元年二月廿一日達

弘道館神拜帳是迄名前順ヲ以テ書記シ右ヲ以テ繰出シ候ヘト以來ハ神拜名前帳等書記シ不申間左之順々ニ神拜次第不同ニ可被致候

神拜順(御役方之向)頭取、稽古奉行、物主役、諸用役、四寮御役方、諸師範、諸御用掛(諸生之向)笹之間衆、御武役總領、其餘諸生 右相濟三御步行

廿八日弘道館改革ノ布告逸ス

三月八日達

此度人材教育之折柄ニ付御扶持人ハ勿論郷町ニ至ル迄四九之日弘道館會議席ヘ致出講度向ハ相願候、可被仰付候事

一致出講度向ハ其頭々へ願出候ハ、願書ニ與書致シ物主方へ可被指出候事

十一月廿八日一藩ニ令シテ曰ク

此度藩治職制之儀從朝廷被仰出候御旨趣ヲ遵奉シ是迄申出シ置候職名制令一切相廢シ萬事改正申出シ候間藩内和睦ヲ專一ニ致シ面々修身齊家ヲ始メトシ文武勵精治道相立祥久二公(直政直孝ヲ指ス)御創業之御振合ニ立戻リ簡易質朴之風ヲ相守リ職事ニ精力ヲ盡シ候様厚可心懸旨藩中一同へ可被申渡候

十一月廿八日

直憲

木俣幹殿、新野古拙殿、三浦與右衛門殿、貫名徹殿、小野田小一郎殿
戸塚左大夫殿、河手主水殿、脇石夫殿

一此度當御屋敷御長屋ニ於テ講釋會讀等定日ヲ立中川祿郎青木八十之進へ教授被仰付候間勤番定府共若年之者ハ勿論御役人タリテ御用透相考出席致相學可被申候尤定府子弟幼年之者ハ每朝罷出素讀相授カリ可被申候

一武藝小屋モ近々御出來ニ付勤番定府共師範々々之講日ヲ定メ武道盛ニ稽古可被致候尤學問所武藝小屋共萬事殿中同様相心得禮讓正敷靜肅ニ相學可被申候(客春外櫻田上邸罹災ノ後直弼赤坂喰違ノ中邸ニ在リ人員多ク屋舍少ク武棚ニ充ツ可キ舍無シ故ニ近々出來ノ語アルナリ)

正月

二月七日武棚條目

定

一此度武藝小屋御再興之御趣意ハ御家中一統武藝專ラ爲可致研究被仰出候條其旨被相心得無油斷勉強可被致候事

一小屋世話之衆ヲ始メ年頃之面々申合セ若年之者ヲ精々引立夫々流儀正敷指南可被致候事

一出講之面々禮讓ヲ基トシテ靜肅ニ稽古可被致候事

一小屋世話之衆諸生精粗ヲ取調へ毎年尾ニ書付可被差出候事

一日々小屋仕舞之節火之元大切諸道具取片付等鹿抹無之樣可被致候事

右之條々被仰出候條堅可被相守者也

嘉永辛亥年二月

西郷伊豫、小野田小一郎

三月相摸國三浦郡上宮田村大芝原營ニ於テ諭達

一是迄武藝出講之面々精粗取調へ無之處向後精粗取調へ被仰出候間正月ヨリ六月マテ七月ヨリ十一月マテ兩度ニ取調可被指出候文事之向モ同様可被相心得候此度深キ以御趣意被仰出候儀ニ付一統靜肅ニ勵精被致候樣敦諭可被致候尤弘道館出講御定年之向ハ千駄崎御臺場詰之外指間ニ付出講斷之分書付取置月末ニ御目付方へ可被指出候猶又會讀被仰付候間弘道館へ出講御定年之向ニテ四之寮へ被移居候衆ニハ出席可被致候尤御役方ヲ始メ勝手ニ出席被仰出候間其旨相心得可被申候猶又未タ四之寮へ不被移居衆ニテモ出席勝手ニ有之間其旨モ可被相心得候書物ハ拜借被仰付候間會頭御用掛リへ掛合拜借可被致候都テ會讀ニ拘リ候儀ハ會頭御用掛リへ掛合可被申候

一會讀武藝等日割之通リ出講可被致尤居合モ稽古道具出來次第右日割モ可被仰出候弘道館出講御定年之衆ニハ千駄崎御臺場詰番之外出講日指間有之候節ハ夫々諸師範會頭等へ斷書可被指出候尤前件之通リ深キ御趣意ヲ以テ文武

政事廳

七月十三日布告

今般學館改正近々開講可相成ニ付規則書別帳(逸ス)遣之候可存其旨候事

政事廳

爾來文事ノミヲ記シテ武藝ニ關スルヲ錄セス軍務ニ属スルヲ以テナリ

閏十月廿二日祿制官祿二十二箇條ノ第十三條第十四條第十五條ニ曰ク

一士族子弟今後十三歳以上學校ヘ日々可致出講事但シ十歳以上日々出講候儀不苦候事

一同上二十二石以下子弟之向日講致候者爲學資八斗ツ、其親兄ヘ可宛行事但シ二十五歳ヲ相限リ候事

一同上當人兵隊入申付置候者又ハ其親兄官祿七石以上被宛行候者ハ學資別段ニ不宛行候事

是日學館ヲ改メテ學校ト稱シ十一月九日ヲ以テ之ヲ布告ス曰ク

學館以來學校ト改稱相成候事

十二月八日布告

學校規則書先達ヲ相達置候處猶又今般別帳之通改正相成候事(別帳規則書逸ス)

藩廳

四年正月廿四日布告

一學校御定年二十二石取以上之士族戸主并ニ子弟共十三歳ヨリ二十五歳迄定出講ニ候事但シ十五歳以上ハ兼テ御定之通リ兵學校ヘ隔日出講之事

一常備兵隊入并ニ官員之外入校入塾洋學專門并ニ病氣ニ付勝手願等之類以來學校掛リヘ可願出事

二月九日布告

一今後諸學科諸生他所修行之者出發年ヨリ滿三箇年ニ相成候ハ、一度歸藩學業成否鑑定之上ニ無之テハ再行年延等不被命候事

一今後生徒自費ヲ以テ他所學願出候共學校掛リ鑑定前途進業之目的無之テハ免許不相成候事

江戸藩邸及各地學制 江戸藩邸ニ從前講武場ハ在リト雖モ學文所ハ無シ嘉永四年正月九日直弼更ニ命シテ文武ヲ獎勵セシム但シ是ヨリ以前ノ布令諭達ハ存セス

中野助大夫、宇津木兵庫

各儀今日稽古館頭取被仰付候へ、凡當御役兼帶ニ被仰付候儀ニ有之間其旨相心得可被罷在候此段被仰出候(當御役アルハ中老ナリ)

七月廿九日

稽古奉行(無定員)笹之間席以上ノ者ヲ以テ之ニ充ツ物頭母衣役ノ者ヲ以テ之ニ充ツルキハ加役トス○館内文武諸藝ヲ督シ諸生ノ精粗ヲ監ス

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

岡本半之丞、中野平吉

右之者共稽古館稽古奉行ニ申付候文教之儀掌之學問方申談無滯樣可相勤候武事之儀ハ半之丞引受若輩之者共ヲ始メ所謂一騎前之嗜平生武夫之心懸ニ至ル迄可致教導候總テ文武共不精之者共モ候ハ、申談爲勵之出精可相勤候尤發端之事ニ有之間伺筋ハ用掛リ家老衆へ相伺存付之儀ハ勿論申出可致精勤候件之趣直ニ可申付候へ、凡致出府候條各可被申渡候

宛同前

物主兼書物奉行 六名或ハ七八名ノ事モアリ 物頭母衣役ノ者ヲ以テ之ニ充ツ諸士ヲ以テ之ニ充ツルキハ添役トス○館内諸般ノ事ヲ掌リ諸吏員諸生徒ノ勤惰精粗ヲ監シ兼テ書籍ノ出入ヲ掌ル

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

溝江彦之右衛門、淺居喜三郎、増田雅四郎、

田中五介、添役越石何右衛門、(同)辻平内、

(同)舟橋彌三八

右之者共此度稽古館物主并書物奉行兼帶ニ役替役儀申付候發端之事ニ有之間念入大切ニ可相勤候尤勤方之儀用掛リ家老衆へ相伺扨無之樣可致精勤候彦之右衛門喜三郎儀ハ非常之節組下召連罷出相守可申候件之趣直ニ可申付候へ、凡致出府候條各可被申渡候

宛同前

田中五介

御引立有之儀ニ付一層入精靜肅ニ相學可被申候自然碌々稽古モ不致却テ文武相勵候者ヲ妨ケ候族モ有之候ハ、嚴敷可被及御沙汰候間心得違無之樣可被致候

一御扶持方御切米方之衆弘道館出講勝手ニ有之處當所ニテハ定出ニ有之間其旨相心得文武勵精可被致候

一銃炮之儀ハ御備場要器ニ付右稽古之儀毎度被仰出候ニ被面々師ヲ撰ミ入門可被致候且町放稽古ニ被罷越候節ハ大筒方被罷越候時分ヨリ罷越何角手傳被致手馴候樣可被致候

一講釋モ毎月日ヲ定メ被仰付候間若年之衆ニハ勿論御役方ニモ精々出席可被致聽聞候

五年四月十四日彥根ニ於テ達シ

文武御引立之御時節ニ付以來御中老江戸詰中於當方弘道館頭取之勤向通り相心得勤番并ニ定府共文武致出精候樣厚可被致世話講釋ニモ出席武藝小屋ヘモ節々見廻リ可被申樣被仰出候

以上ハ一二ノ私記ニ散見スル者ヲ錄スルノミ遺漏ノ多キハ論ヲ待タヌ又京師營及ヒ其他各地ニ警備セシムル壯士輩輒チ皆文武ヲ講習セシム其布令論達ハ逸ス

職名俸祿 職員ヲ命スル維新前ニ在リテハ皆本祿アル藩士ヲ以テ之ニ充テ其レカ爲メニ別ニ俸ヲ給セス故ニ俸祿ヲ書セス維新後ハ職俸アリト雖戸籍書存セスシテ悉皆記載スルヲ得ス其知ラル、者ノミヲ錄ス

頭取(無定員)中老ヨリ兼務シ及ヒ家老ノ嗣子ヲ以テ之ニ充ツ蓋シ後來家老ト爲リ藩政ヲ執ルチ馴習セシムルナリ○館内ノ庶務ヲ總裁ス依テ館内ニ於テハ其遇家老ニ同シ

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

中野助太夫、宇津木兵庫、庵原齋宮、

脇鐵五郎、三浦於兔吉

右之者共存寄モ候間此度稽古館頭取ニ申付候面々所好之藝能致鍛練家中出講之者共ヲ爲相勵不精ナル者モ候ハ、可致論解教導候第一厚加勘辨文武藝能之精粗ヲ目付ト致論定其名前ヲ用掛リ家老衆ヘ可書出候其外文武藝能ニ付同事有之時ハ目付共申談可致決斷尤可伺筋ハ用掛リヘ相伺發端之儀ニ有之間無油斷可致出精候
件之趣直ニ可申付候ヘテ致出府候條各可被申渡候

木俣土佐殿、庵原助右衛門殿、長野十郎左衛門殿、脇内記殿、

西郷藤左衛門殿、庵原主稅助殿、長野傳藏殿

一素讀講釋共ニ孝經四書之事

一被心付候儀ハ何ニ不寄可被伺事

十一月朔日ヨリ稽古館物主方へ引移り晝二人夜一人ツ、出勤事務ヲ扱フ

十日達

(物主并御書物奉行)溝江彦之古衛門

淺居喜三郎、増田雅四郎、田中五介

越石何右衛門、辻平内、舟橋彌三八

右各申合三人ツ、隔日ニ罷出兼テ被仰付之通り相勤可被申候尤夜ハ一人ツ、泊番可被致候且又下役之者大切ニ相勤候様可被申付候但五介ハ日勤ニ付番方御免ニ候事

一御用掛リ同席并ニ頭取衆出席之節詰所へ罷出館中無別條旨可被申聞候自然相變節モ候ハ、是又可被申聞候

一諸師範文學諸有司館中出入ナモ被聞届且又諸生煩指合等闕席中届ナモ受取帳面ニ記シ置日々闕席之名前御目付衆

へ知ラセ可被申候

一非番或ハ御用透之節文武諸藝被相學候事勝手次第可被致候

一折々館中見廻リ火之本等萬事大切ニ可被相心得候

一總テ届之類其節々無抜目御目付衆へ相達可被申候

一御書物拜借被致度面々ハ頭取衆へ願書被指出頭取衆被承届候上右願書各へ被相渡候ハ、貸淺可被申候尤一部之内

次本取替之節ハ拜借人ヨリ各へ小札ヲ爲出相渡シ可被申候

一總テ御書物出入虫干手入等大切ニ可被致候尤御書物堅ク館外へ指出シ被申聞敷候

一講堂ヨリ御玄關迄掃除可被申付候但頭取衆奉行衆詰所ハ坊主ニ可被申付候

一小使并ニ用事有之致出入候町人共へ鑑札渡シ置御門出入致サセ可被申候

一表御門南柵御門之鍵ハ御門番衆へ被相渡其餘公門ヲ始メ切戸柵門之鍵等ハ各役所ニ指置可被申候

一小使之者共萬端被相示御用指問不申様并ニ不作法之儀無之火本大切ニ可相勤旨毎々可被申付候

一館中諸役人毎月休日ニ出勤勝手次第ニ候其旨可被相心得候

廿八日達

右之者年來文武藝能厚心懸候趣相聞一段之事ニ候日々稽古館へ罷出文事兵學共一統習練之筋無遠慮可致世話候文教之事ハ儒者兩人申談諸會頭等モ相勤武教之儀ハ半之丞へモ相尋若輩之者共一騎前之儀ニ至ル迄熟得候様可致精勤儀要務ニ可相心得候依之此度母衣役ニ申付候
件之趣直ニ可申付候へ共致出府候條各可被申渡候

七月廿九日

宛同前

黒印

田中五介

其元儀此度於稽古館御家中年若ナル面々文武藝能引立之筋要務ニ被仰付候ニ付泊番等之儀ハ御免被仰出候間其旨可被相心得候

七月廿九日

達

一各隔日ニ被罷出夜ハ泊モ可被相勤候事但五介ハ日勤ニ付番方除之

一彦之右衛門喜三郎ハ非常之節固メ被相兼候事

一御用掛リ同席并ニ頭取衆出席之節詰所へ被罷出館中無別條否可被申聞事

一諸生之外諸師範文學諸有司館中出入ヲモ被聞届番人之代リ合被聞届諸生煩指合等之闕席之届ヲ受取帳面ニ可被記日々闕席之名前御目付衆へ爲知可被置候

一御書物之出入ハ勿論諸生退散之後諸舍中火之元等見廻リ萬事大切ニ可被相心得事但御用透又ハ非番之節三十歳以下之面々ハ諸生ト共ニ好ム所之藝ヲ勝手ニ可被相學事

一御家之記録共ヲ第一トシテ記録ヲ集メ置任望貸渡可被申事但書目相談可被申聞事

一諸生之歳冠年ヲ用ヒ候故生年十歳之者冠年十五歳ニ滿候テモ日々文武之藝如定相學候儀ハ難成事モ可有之間生年十三四歳ニモ相成親々ニテ如定相詰可申ト被存候迄ハ稽古勝手之儀物主迄其實ヲ以テ斷ヲ立置十三四歳ニモ相成候節今日以後ハ日々爲相詰可申ト又物主へ被相届可然哉之事但物主ヨリ右之譯ヲ度毎ニ御目付衆へ爲知置可被申事

一御講物相尋御買上之品相談可被相伺事

等有之面々ハ晝迄ハ勝手次第第九ツ時ニハ武藝小屋へ被相移藝術稽古有之様申達候間晝九ツ時打候ハ、各文宮不殘被相見廻萬一居残り候面々モ候ハ、出拂被申候様可被相達候尤館中御役人并ニ御醫師ハ別段ニ候間其旨可被相心得候

學問方(無定員)儒者ヲ以テ之ニ充ツ儒者ハ其家業ニシテ子孫ヲシテ因襲セシム然レモ子孫其器ニ當ラサレハ命セス或ハ步行足輕若シクハ農商ニ學業拔群ノ者アルモ登庸シテ士ト爲シ祿ヲ與ヘテ儒員ト爲ス○文學上ノ事ニハ一切關シ兼テ講義會頭ヲ掌ル

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

龍衛門、大當權之丞

右之者共此度稽古館申出シ候ニ付文教之儀掌之講釋會頭等相勤文才有之者共ハ才德致成就候様爲致勉強人々行跡正敷孝悌忠信之道爲相勵候様可相勤候猶存寄候儀ハ不指扣用掛リ家老衆へ可申出候件之趣直ニ可申付候ヘモ致出府候條各可被申渡候

宛同前

素讀方(二十名或ハ十八名)諸士ノ文學アル者ヲ以テ之ニ充ツ步行ヲ以テ之ニ充ツルモハ加役トス○四寮ニ分在シテ各教授ス 四之寮用掛リ(八名或ハ六名)本寮生徒ハ文學優等ノ者ナリ故ニ本寮用掛リハ素讀方中最モ達學ノ者ヲ撰ヒテ之ニ充テ兼テ會頭ヲモ掌ラシム 三之寮用掛リ(六名)本寮生徒ハ文學四之寮ニ亞ク者ナリ故ニ本寮用掛リハ素讀方中稍優レル者ヲ以テ之ニ充テ兼テ記錄生ヲモ教授セシム 一二之寮素讀方(六名)此兩寮生徒ハ初等生ニシテ素讀方ハ之ニ句讀ヲ授ク但シ此兩寮ハ素讀ト手跡トノ相合寮ニシテ互ニ隔日ナリ

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

西鄉隆五郎、熊井戸歡藏、富上喜太夫、島野源左衛門、青木七藏、中村政八郎、

廣瀬助之進、永田太兵衛、西村十介、荒木儀太夫、安藤長三郎、佐藤次郎三郎、

保崎德之進、所藤馬、八木新太郎、田中藤十郎、中川六治、町田鍵藏、龍亥太郎

右之者共稽古館素讀方ニ役替役儀申付候若輩之者ヲ始メ素讀教之稽古奉行學問方之者共ヘ申談大切ニ可相勤候尤委細之儀ハ用掛リ家老衆へ相伺可致精勤候

件之趣直ニ可申付候ヘモ致出府候條各可被申渡候

別紙之通御用人中へ相達候間各ニモ被相心得不滞様取計可被申候尤御附中ヨリ案内有之候ハ、表御門上番衆ウハバンへモ相達可被申候以上

物主役衆、諸用役衆

庵原主税助

〔別紙〕

一御舍弟様方被成御出候當朝ニ御附中ヨリ今日御舍弟様方稽古館へ被成御出候旨稽古館物主役へ一應案内可被申越候事

一御舍弟様方稽古館表御門ヨリ御玄關溜所講堂御縁通り被成御出候事

一稽古館ニテ御休息所ハ殿様御座之間之御次之間ニ御屏風仕切ニテ被成御座候事但御雪隠モ有之候事

一稽古館へ被成御出候ハ、講釋御聽聞ト歟武藝御見物ト歟其節々御様子次第稽古館頭取衆并ニ稽古奉行衆へ一應御附中可被申述候事

一稽古館ニテハ御刀掛ヲ始メ御茶道具總テ何角モ御手物ハ無之間御用不指問候様黒御門前御屋敷ヨリ爲御持被成候様御附中被相心得取計可被申候事

右之外指掛リ候儀共モ候ハ、物主役諸用役へ御附中被掛合取計可被申候事

十二年二月廿二日達

物主役衆

一稽古館諸生出引ヲ始メ届事は迄ハ各御役前へ被相届候へ_レ向後ハ御目付方へ被相届候様一統へ觸示候間可被存其旨候尤御役人師範御用掛等之出引ハ是迄之通各御役所ニテ承届可被申候

一寮々小屋々々之外ニテ諸生衆不作法之儀并ニ子供衆不行儀之筋モ無之哉各無油斷被相見廻自然不宜儀モ有之候ハ、無遠慮直ニ相示シ可被申候萬一不心得之族モ候ハ、其旨頭取衆へ相届可被申候縱_レ館中へ日々罷出候_レ寮小屋之外ニテ徘徊勝ニ相成候歟又ハ不行儀之筋出來候テハ甚以不宜儀ニ候間其處厚被相考諸生之爲方且於館中不行儀之筋ハ無之様精々懸念示シ可被申候但頭取衆稽古奉行衆ニモ自然不行儀之筋被見受候ハ、各へ被達候儀モ可有之間兼テ其旨相心得居可被申候

一諸生之内是迄ハ晝後モ文宮ニテ修行有之候へ_レ向後ハ三十歳以下之衆御定之通四ツ半時ニテ文事被相終勿論會讀

・軍學(無定員)上泉流一名ハ家業ナリ是ヲ井伊氏ノ軍法トス越後流ハ諸士若シクハ步行ノ其學ニ達スル者ヲ以テ用掛リトス○生徒ヲ會シ兵書ヲ講シテ之ヲ教授ス

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

岡本半介

右ハ今度家中一統爲文武習練稽古館造立申付候依之當家之軍學兵書講釋等定日之通罷出可相勤候
件之趣直ニ可申付候ヘ_レ致出府候條各可被申渡候

宛同前

岡本半介

右御書面之通被仰付候自然持病氣指合等之節ハ忤子半之丞可被相勤候事

小泉彌一右衛門、横田與左衛門

右各越後流軍學被相嗜候趣達御聽候依之稽古館へ被罷出右流儀被相學候面々候ハ、講釋等相勤可被致世話候此段被仰出候

和學_{後ニ國學ト改稱}(無定員)諸士若シクハ步行ノ其學ニ達スル者ヲ以テ用掛リトス○古事記六正史以下皇國ノ故事來歴ヲ教授シ兼テ詠歌ヲモ教授ス

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

小原八郎左衛門、村田大介

右其方共和學相嗜候趣達御聽候特之事ニ思召候此後彌致出精且和學被相學候面々候ハ、稽古館へ罷出可致世話候此段申渡候様被仰出候

嘉永四年直弼ノ時和學方ヲ改メテ國學方ト稱ス

禮節(無定員)小笠原流ナリ諸士若シクハ步行ノ其業ニ達スル者ヲ以テ用掛リトス○座作進退洒掃應對獻酬配酌受授送迎等總テ武家ノ禮式ヲ教授ス

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

舟越安左衛門、木村勝左衛門

右各禮節被相嗜候趣達御聽候依之稽古館へ罷出御家中若年之面々始禮節之儀可被致世話候此段被仰出候

宛同前

澤村角右衛門組 伴只七

右之者稽古館素讀方加役ニ申付候(以下同文)

件之趣各可被申渡候

宛同前、澤村角右衛門殿、正木舍人殿

手跡方(六名)諸士ノ能書ノ者ヲ以テ之ニ充ツ步行ヲ以テ之ニ充ツルキハ加役トス〇一二之寮生徒ニ習字ヲ教授ス但シ此兩寮ハ素讀ト手跡ト相合寮ニシテ互ニ隔日ナリ

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

西郷恭藏、加田孫兵衛、山下彦十郎
百々孫左衛門、松居多郎右衛門
武笠七郎右衛門

右之者共稽古館手跡方ニ申付候若輩之者ヲ始メ手跡教之伺筋ハ用掛リ家老衆ヘ相伺大切ニ可相勤候
件之趣直ニ可申付候ヘ_凡致出府候條各可被申渡候

宛同前但シ澤村正木ハ無シ

諸用方(四名或ハ五名)諸士ヲ以テ之ニ充ツ〇館内諸器械及ヒ金銀出納ヲ掌ル

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

小森理左衛門、高橋與兵衛
小板橋茂左衛門、坪岡七面次

右之者共稽古館諸用役ニ申付候館中要具ヲ始メ小細之儀ニ至ル迄諸事不指問候様引請可相勤候務方ヲ始メ伺筋之儀ハ用掛リ家老衆ヘ相伺可申候尤繁雜ナル事共殊ニ初發之儀ニ有之間厚心配念入可相勤候
件之趣直ニ可申付候ヘ_凡致出府候條各可被申渡候

宛同前

會頭用掛リ(無定員)學問方四之寮用掛リヲ以テ之ニ充ツ或ハ諸士子弟若シクハ_{ウチ}步行ノ文學アル者ヲ以テ之ニ充ツ〇生徒ヲ會シ輪次講義セシメテ之ヲ聽キ其質疑ヲ決ス

宛同前

槍術薙刀術天流富永卯兵衛

劍術念流宮川辰藏

劍術鍔圍團居合伯善一一流居合伯善園川丑太郎

同文言

件之趣各可被申渡候

宛同前、澤村角右衛門殿、正本舍人殿、用人中

後風傳流槍術師範三浦軍介罪アリ家名ヲ斷絶シ其高弟奥山藤介ヲ以テ之ニ代ヘ念流正法兵法未來記入内劍術師範川手七左衛門モ亦罪アリテ斷絶シ其高弟三浦鶴殿ヲ以テ之ニ代フ又念流兵法未來記劍術師範江坂新左衛門ノ高弟松宮左近ニ新心流居合師範河西庄右衛門ノ高弟大形藤太ニ天流槍術薙刀術師範富永卯兵衛ノ高弟天野利右衛門ニ各師ノ請ヒヲ許ルシテ門弟ヲ分タシム

文政中直亮アキノ時宇津木駒吉日置流道雪派ノ弓術超群優等ヲ以テ特ニ一家ヲ興シ嘉永中直弼ノ時田祿ヲ與ヘテ師範ト爲ス

安政中直弼ノ時武田流弓術師範加藤彦兵衛ノ門弟一色三郎兵衛心鏡流槍術師範山根善五右衛門ノ門弟高橋建五郎正法念流未來記兵法劍術師範荒川右平次ノ門弟宮崎丈輔新心流居合師範河西庄右衛門ノ門弟宇津木舍人ヲ拔キ特ニ命シテ祿ヲ與ヘテ一家ヲ興シ江戸邸ニ住セシメテ師範ト爲ス又一刀流劍術ノ達人小島寅太郎ヲ新タニ聘シテ藩士ト爲シ俸ヲ給シ江戸邸ニ居テ師範タラシム文久中直憲ノ時更ニ彦根ニ住セシメ祿ヲ與ヘテ專ラ教授セシム一騎前(無定員)諸士ノ其業ニ達スル者ヲ以テ用掛リトス○撰甲以下苟クモ一騎士ノ要ヲ教授ス軍馬(無定員)馬役中其業ニ達スル者ヲ以テ用掛リトス○軍馬ノ要ヲ教授ス

馬術 亦家業ナリ

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

御廐頭取、御馬役

今度文武稽古館御造立被仰付候ヘ尺責馬稽古塲之儀ハ先ツ只今之通被指置候間可被存其旨候尤稽古館馬術小屋ニ木工馬并ニ軍馬稽古道具等モ被備置候間勝手ニ被罷出弟子有之面々ハ行儀能稽古可被致世話候此段被仰出候馬術師範家氏名左ニ錄ス但シ家ハ皆當時ニ變ルヲ無キモ其名ヲ詳ラカニシ難シ故ニ維新前元治慶應間ノ氏名ヲ書ス

乘方惡馬新當流

神尾圭守、神尾惣左衛門、佐藤新五右衛門、伊藤權兵衛、伊東勘兵衛、土田甚兵衛、羽田逸平、藥袋藤太、栗

天文學(無定員)諸士若シクハ步行ノ其業ニ達スル者ヲ以テ用掛リトス○渾天儀ヲ備ヘ日月星辰ノ運行等ヲ教授ス
寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

大西順次郎

右其方天文學被相嗜候趣達御聽候此後彌被致出精稽古館へ罷出天學被相學候面々候ハ、可被致世話候此段被仰出候
算術(無定員)諸士若シクハ步行ノ其業ニ達スル者ヲ以テ用掛リトス○算盤或ハ算木ヲ以テ之ヲ教授ス

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

河西庄右衛門、平山藤九郎

右各算術被相嗜候趣達御聽候依之稽古館へ被罷出算術被相學候面々候ハ、可被致世話候尤庄右衛門儀ハ居合師範之事ニ候間右透々ニ罷出算術世話ヲモ可被致候此段被仰出候

醫學會頭 藩醫中其學業ニ達スル者ヲ以テ用掛リトス○醫師若年輩ヲ會シ醫書ヲ輪講セシメテ之ヲ聽キ討議質問セシ

メテ疑義ヲ決ス

武藝師範 弓馬劔槍薙刀居合柔炮師範ハ皆家業ニシテ子孫ヲシテ因襲セシム各流儀アリ同流ニモ亦各派アリ○師家各其門弟ニ其家藝ヲ教授ス

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ但シ肩書スル者ハ原書ニアルニ非ス今新ニ加ヘテ見易カラシム

弓術武田流(藩主師範)

加藤彦兵衛

弓術武田流

加藤彦太夫

同日置流

後閑新兵衛、高橋新五左衛門、増島團右衛門

同片岡流

角屋半之介

同日置流

佐藤作藏

槍術心鏡流

(藩主師範)

山根善五右衛門

槍術風傳流

内田臺右衛門、久保田全左衛門、三

浦軍介

同寶藏院流

森川翁助

同風傳流

山田源八郎

劔術正法念流末

(藩主師範)

荒川孫三郎

劔術正法念流末

渥美平八郎

同念流安中半右衛門

同江武知明流

江坂新左衛門、久保田三郎左衛門

同念流兵法

上坂丈内

同念流兵法

上坂丈内

同念流正法兵法

川手

七左衛門

同江武知明流

永居新五左衛門

居合新心流

(藩主師範)

河西庄右衛門

劔術居合柔術新心流

薙刀術仙移流

横田治

平 居合柔術新心流

田部孫八

右之者共從來武藝師範致來候處家中年若ナル者共藝能爲可相勵今度稽古館令造立候間何レモ如定稽古館へ罷出弟子共取立人々行儀正敷藝術致鍛練候様厚可致世話候
件之趣直ニ可申付候へ用致出府候條各可被申渡候

右如組合晝夜二人ツ、番可相勤候煩指合有之時分ハ助合可申候

定

一稽古館御門明ケ六ツ時ニ開キ暮六ツ時ニ閉サセ可被申候尤御門内外日々掃除可被申付候但表御門南柵御門之鍵御
番所へ被入置非常之節ハ様子次第早速両御門共開カセ可被申候

一殿様稽古館へ御出入之節ハ各公門之前へ罷出御目見可被致候中番之者ハ棒ヲ持一人ハ御作事方之前一人ハ表御門
之前へ出平伏致サセ可被申候右之節ハ表御門閉サセ置可被申候但若殿様御出入之節ハ本文同斷其餘御子弟様方ニ

ハ表御門ヨリ御出入之事ニ有之間其節ハ各ニモ可被致下座候

一朝夕館中相見廻リ火之本心ヲ附可被申候且又不依何事相替儀モ候ハ、物主方御目付方へ相理リ可被申候

一中番之者左之御役前之衆へ下座致候様可被申付候

一頭取衆、稽古奉行衆、評定御目付衆、物主役衆、御目付衆、御内目付衆

但御中老衆小溜衆評定役衆御用人衆被罷出候節ハ右ニ准シ可申候

一御門内外ニテ御家中召仕高聲高笑總テ不法之筋無之様制止可被申候

一三御歩行之外ハ御扶持人タリモ御門通シ被中間敷候

一小使并ニ用事有之致出入候町人共物主方ヨリ鑑札相渡有之間相改サセ通シ可被申候

右之條々堅可被相守者也

七月

老中

達之覺

稽古館御門上番衆

右中番之者共儀ハ御番上リニテ老人共ニ付下座繁ク候テハ難儀之事ニモ有之間格段以容赦毎年正月御講初之節ハ兼

テ申出シ候御役人中へ致下座平日ハ頭取衆岡本留彌稽古奉行衆計へ致下座其餘ハ下座ニ不相及被致容赦置候様夫々

へ申渡候間各被存其旨中番之者へモ可被申付候尤御中老衆評定役衆御用人衆御役前ニテ被罷出候節ハ平日ニモ致下

座總テ大身衆タリモ自分之稽古ニ被罷越候面々ハ御講初之節迎モ不及下座容赦之儀夫々へ申達候間是又各被存其旨

可被申渡候事

物主方下役(三名或ハ四名)足輕ヲ以テ之ニ充ツ○役頭ノ命ヲ受ケテ其事ニ從フ

林新左衛門、臼居左門

醫方太子 佐藤宗兵衛、古澤六右衛門、横尾七太夫、吉田清太夫、岡島久米八郎、江坂久藏、同桑島 桃居嘉三、松宮小八郎

(江戸郎佳) 乘方八丈 白石安太郎

(直亮直弼) 時家惡馬新當流 乘方 渡邊市兵衛、曾根佐十郎、勝野珥藏

砲術 亦家業ナリ

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

鐵砲師範

今度文武稽古館御造立被仰付候ヘテ砲術場所之儀ハ先ツ是迄之通リニ被指置候間被存其旨彌以出精弟子中行儀能鍛練有之候様可被致世話候此段被仰出候

文久三年秋直憲ノ時ニ至リテ弘道館中ニ砲術射的場ヲ設ケテ習練セシム其師範家ハ

米村流(藩主師範) 稻垣彌十郎 一貫流貫名筑後 一夢流宇津木兵庫、上坂又三郎 藤岡流村山丹宮 柴田流小野久

眞吉 大成自得流舟越三十郎 太田流金田軍治郎、松本兵右衛門 太玄流堤光治郎

但シ貫名筑後宇津木兵庫二家ハ弘道館ニ關セス弘化中直亮太玄流師範堤勘左衛門一夢流師範柳澤右源太ニ命シテ伊豆韭山ニ遣シ江川太郎左衛門ニ就テ西洋流ヲ學ハシム業成ルニ及ヒテ勘左衛門死ス嘉永中直弼右源太ニ命シテ江戸郎ニ住シテ教授セシム又西洋流砲術ノ達人成瀬平三ヲ新タニ聘シ祿ヲ與ヘテ藩士ト爲シ之ヲ教授セシム

明治元年二月十五日達

(砲術師範) 稻垣竹太郎、金田軍治郎

村山丹宮、上坂又三郎、小野久眞吉

松本兵右衛門、舟越三十郎、堤光治郎

右流廢止ト申譯ニハ無之候ヘテ此節柄ニ付西洋流砲術相學可被申尤晒山練兵所サラシヤマヘ罷越放前之教授可被致候

門衛(八名) 騎士ヲ以テ之ニ充ツ○晝夜二名勤務シテ出入ヲ警シム定刻中ハ諸生定年者ノ事故ヲ告ケサルハ出ルヲ諫ル

サス其告クル者ノ氏名事故ヲ筆記シ日々目付ニ報ス

寛政十一年八月四日創設ノ時左ノ如シ

稽古館表門 竹岡善介、上坂太兵衛、淺田瀨兵衛、三浦源六、津田叶、平岡十郎兵衛、和田庄左衛門、松居善四郎

兼テ吏員ノ勤惰生徒ノ精粗ヲ監ス

内目付 臨時ニ入館シテ館内ヲ巡視シ勤惰精粗行狀等ヲ密告ス

右筆 毎年正月十六日及ヒ毎月初四日入館シ頭取ノ命ヲ受ケテ掟ヲ朗讀ス

以上ハ藩政職ニシテ本職ヲ以テ從事スル者ナリ寛政十一年創立以來少シク差異無キ能ハスト雖氏概シテ此制ナリ但
シ此間簿書散逸シテ其詳ヲカナルハ知リ難シ

嘉永四年十一月十日直弼命シテ弘道館頭取以下諸職員ノ等級ヲ進ム物主兼書物奉行ハ従前小役ナリシヲ昇セテ准大役
トシ素讀方手跡方諸師範ハ半役ナリシヲ昇セテ本役トシ此他皆一級ヲ進ム抑藩ノ法無職非役ノ士ハ田祿中ヨリ百石ニ
五苞即チ現米二石ヲ収ム是ヲ普請役夫米ト曰フ又旅詰米ト稱シテ三苞即チ一石二斗ヲ収ム職ニ就ク者ハ本役半役ヲ問
ハス旅詰米ハ収ムルニ及ハス役夫米ハ本役ハ収ムルニ及ハス半役ハ半額ヲ収ム是ニ至リテ弘道館職ニ從事スル者ハ悉
皆収ムルヲ無シ又田祿士ノ大役ニ從事シ及ヒ月俸給米士ノ本役ニ從事スル者ハ役料増祿ヲ給スルノ年限速カナリ
文久二年七月十二日直憲ノ時將ニ弘道館ヲ改革セントシ諸職員悉皆之ヲ罷免シ閉館セシム廿一日家老新野左馬助岡本
半介ヲ以テ弘道館總裁ト爲シ廿八日中居彌五八日下部三郎右衛門ヲ弘道館奉行ト爲ス末タ事ヲ行ハス八月廿八日弘道
館總裁及ヒ奉行ヲ解キ悉皆舊職員ヲ復シ閏八月二日ヨリ舊ニ仍リテ開業セシム但シ此改革タル時ニ直憲年猶ホ幼ナリ
執權木俣清左衛門家老庵原助右衛門藩政ヲ擅ニス蓋シ其意ニ出ツ而ルニ清左衛門助右衛門罪アリ之ヲ黜罰シテ舊ニ復
スルナリ而シテ更ニ命シテ弊ヲ去リテ良ニ就カシム

以上ハ維新前ノ制ナリ以下維新後ノ制ヲ云フ

明治元年二月廿八日素讀方ノ名稱ヲ改メテ文學教授ト爲ス十一月廿八日諸職員ヲ解キ更ニ家老小野田小一郎ヲ以テ總
教局一等執事ト爲ス以下事務員等簿書存セスシテ詳ヲカニシ難シ

二年八月十三日更ニ小野田小一郎ヲ文館督學長ニ脇石夫宇津木翼ヲ文館學監ト爲ス以下亦詳ヲカナラス
十月廿八日弘道館ノ號及ヒ諸職員ヲ廢シテ更ニ文武館トス

督學長一名五等相當職俸五十石 學監三名六等相當職俸三十三石 教頭一名七等相當職俸二十六石 主帳兼紀綱六
名八等上相當職俸十五石 文武副教頭一名八等上相當職俸十五石 文武教授二名八等下相當職俸十二石 文武副教
授十一名九等上相當職俸十石(内一名皇學掛、一名天學掛) 文武助教七名九等下相當職俸八石(内一名書學兼書記
掛) 文武副助教十二名十等相當職俸七石(内一名皇學兼書學書記掛) 書學兼書記掛一名十等相當職俸七石 史生

寛政十一年八月創設ノ時人名左ノ如シ

淺居喜三郎組

山村數平

溝江彦之右衛門組

柳瀬吉左衛門、越川常次

カナラス

諸用方下役(三名但シ毎年十一月以後ハ一名ヲ増ス)足輕ヲ以テ之ニ充ツ○役頭ノ命ヲ受ケテ事ニ從フ○創設人名詳ラ

門衛中番(八名後ニハ十名トス)番上リ足輕ヲ以テ之ニ充ツ○上番士ノ指揮ヲ受ケテ事ニ從フ

大島居彦三郎組

山塚源六、小林惣右衛門

勝五兵衛組

大島左次兵衛、溝江儀左衛門

磯島屋三郎組

中村友右衛門、堀江六郎兵衛

向坂市右衛門組

高野作兵衛、寺村理右衛門

坊主(無定員)廣間坊主中ヨリ兼務ス○頭取稽古奉行ノ使役ニ供ス

寛政十一年八月創設ノ時人名左ノ如シ

小野靜悅、柴田久味、金森友折、津川長哲、川瀬傳彌、濱田祐佐、堀柳徳、古川林啓、長濱春慶、大島了悦、山本喜禿
小使(二十名)普請方役夫中間ヲ以テ之ニ充ツ其年俸人別米八苞即チ藩ヨリ給ナル所ニシテ館之ニ關セス○物主方諸用
方ノ命ヲ聞キ兼テ諸吏ノ用ヲ達シ館内ノ掃除ヲ爲ス晝ハ十名夜ハ若干名

門下番(二名)農ヲ以テ之ニ充ツ其年俸人別米六苞ニ一口俸亦藩ヨリ給スル所ナリ○番士ノ命ヲ聞キ門ノ開閉内外ノ掃

除ヲ爲ス晝夜一名ツ、

矢取(二名)農商ノ兒童ヲ以テ之ニ充ツ日給各銀五分但シ夕七ツ時ヲ過クルキハ二分五厘ヲ増ス此給ハ諸用方ヨリ給ス
ル所ナリ○射場梁傍ニ在リテ中鵠ヲ報シ射手ノ命ニ依リテ箭ヲ取リテ之ヲ還付ス

角觸(一名)亦農商ノ兒童ヲ以テ之ニ充ツ其日給等凡テ矢取ニ同シ但シ文久三年以來ナリ○銃金梁傍ニ在リテ中鵠ヲ報ス
以上ハ學校事務ノ者ナリ但シ坊主ハ事務者ニアラス

家老 毎月六回ノ講釋ニハ必ラス入館シテ之ヲ聽聞シ其他臨時ニ入館シテ文武藝ヲ巡視シ之ヲ獎勵ス
側役、評定役、評定目付 各臨時ニ入館シテ文武藝ヲ巡視シ之ヲ獎勵ス

目付 日々二人若シクハ三人若シクハ一人入館シテ萬般ノ事ヲ執リ命令布達ヲ發シ生徒ノ出入ヲ督シ文武藝ヲ巡視シ

三之寮用掛

一二之寮素讀方

手跡方

國學方

算學方

天文方

職員概數

事務員 頭取

無定員但シ五六名或ハ七八名或ハ十餘名ノコモアリ 稽古奉行 無定員但シ二名或ハ三四名ノコモアリ

リ 物主兼書物奉行 六名或ハ七八名ノコモアリ 目付 藩政職ヨリ本職ヲ以テ日々二名若シクハ一名三名之ニ從事

ス 諸用方 四名或ハ五名ノコモアリ 物主方下役 三名或ハ四名 諸用方下役 三名但シ毎歲十一月以後ハ一名ヲ

増ス 坊主 無定員但シ廣間坊主ヨリ兼務七八名或ハ十餘名ノコモアリ 小使 二十名 矢取 三名 角觸 一名○教

員 學問方 無定員但シ二名或ハ三四名ノコモアリ 素讀方 二十名或ハ十八名 手跡方 六名 軍學 無定員但シ

二三名 國學方 無定員但シ二三名 天文方 無定員但シ一二名 算術方 無定員但シ二三名 禮節方 無定員但シ

二三名 一騎前 無定員但シ二三名 軍馬 無定員但シ一二名 弓術師範 八名 江戶邸ニ一名 槍術師範 八名 江戶

邸ニ一名 劍術師範 十二名 館外ニ一名 江戶邸ニ一名 居合師範 五名 江戶邸ニ一名 柔術師範 二名 薙刀術師範

二名 砲術師範 十名 館外ニ若干名 江戶邸ニ一名 馬術師範 二十一名 江戶邸ニ一名○門衛 上番 八名 中番

八名 後ニ十名 下番 二名 以上維新前

事務員 督學 一名 學監 三名 主帳兼紀綱 六名 下吏 人員不詳 使丁 人員不詳○教員 教頭 一名 副教

頭 一名 教授 二名 副教授 十一名 助教 七名 副助教 十二名○門衛 人員不詳 以上維新後但シ前後凡概

數ヲ云フノミ猶ホ職員條ヲ參觀スヘシ

生徒概數 簿書存セスシテ登記スルヲ得ス聞ク所ヲ以テスルハ弘化三年以前ハ凡ソ五六百名ニハ下ラサリシヲ四年二

月相摸海岸警備ノ命アリ壯士ヲシテ屯在セシメシ以來ハ四百名ニ上下ス而シテ皆通學生ナリ文化文政中ニハ請願ニ依

リテ寄宿ヲ許可セシ者若干名アリ或ハ文武不精或ハ不品行ヲ以テ罰シテ寄宿セシムル者モ亦若干名アリ其罪狀ニ依リ

三名十等相當職俸七石

三年閏十月廿二日改正職員但シ人員詳ラカナラス

督學 權大參事官祿八十六石三斗 少參事官祿六十三石七斗五升 學監 權少參事官祿五十石二斗五升 教頭 權大屬官祿十五石 教授 少屬官祿十一石二斗五升 副教授 權少屬官祿七石二斗三升 助教 史生官祿五石二斗五升

四年二月廿四日改正職員

少參事一名官祿八十五石 權大屬一名官祿二十石 少屬二名官祿十五石 史生廳掌二名官祿七石 教員(人員詳ラカナラス) 教頭官祿二十石 教授官祿十五石 副教授官祿十石 助教官祿七石

六月廿八日改正職員

少參事一名官祿六十五石 權大屬一名官祿二十五石 少屬二名官祿十六石五斗 史生二名官祿十石 教頭五名官祿二十五石

教科 法科、文科、理科、醫科

教授六名官祿十六石五斗 副教授六名官祿十三石 助教六名官祿十石 副助教六名官祿七石五斗

十一月十五日改正職員但シ職俸詳ラカナラス
少參事一名權大屬一名少屬二名史生二名教頭皇學漢學二名教頭准席詩文一名教授五名(內一名塾頭)副教授四名助教兼習字十名(內一名皇學、五名漢學、二名習字、一名洋學、一名算學)副助教四名(內三名漢學、一名算學)

維新前後諸職員ヲ對照スル大概左ノ如シ但シ鱗形ヲ付スルハ早ク廢スルノ標ナリ

維新前

維新後

維新前

維新後

頭取

督學

禮節方

洋學

稽古奉行

學監

一騎前

醫科

物主兼書物奉行

主帳兼紀綱

醫學

同

諸用方

同

學問方

文學教頭

軍學

軍務局

四之寮用掛

文學教授

軍馬

同

以テ金一兩ニ換フ即チ金七十兩前後ナリ但シ文久中藩祿三分ノ一ヲ削減セラレ藩士ノ祿三分ノ二ヲ以テ本祿トシ加フルニ藩用闕乏ヲ以テ半額ヲ貸納セシム故ニ割合銀モ亦三分ノ一ヲ徴収ス

十二年二月廿三日達

物主役衆、諸用役衆

右ハ稽古館諸御入用如何有之哉各ニモ承知被罷在候通御元米御不足之御勝手向ニ候ヘハ館中御入用込モ可成程ハ省畧儉素ニ致度事ニ候炭薪等ヲ始メ諸事心ヲ被付御費用無之様取締可被申候尤諸師範衆素讀方手跡方等ヘモ無覆藏時々被申談御爲方宜敷様心配可被致候則師範衆素讀方手跡方ヘモ此段申渡置候間其旨可被相心得候事

但物主方ハ御入用方之儀ハ引請不申_レ館中之儀ハ萬端關リ候間心付候儀ハ諸用方ヘ申談御費用無之様相考可被申候

武藝師範衆

右ハ昨年御開講後各小屋々々不相替弟子衆モ被罷出一段之事ニ候此度諸生之面々ヘ相達候筋モ有之候ヘハ彌小屋々々出講之人數モ可有之間兼テ達置候通リ隨分行儀正敷出精有之様厚世話可被致候猶又御勝手向之儀ハ一統承知之通御元米御不足之事ニ有之間諸事稽古之爲トハ年中道具類順竹日炭等類ニ至ル迄可相成程被取締費用無之御爲ニ相成候様心配可被致候尤右等之儀ニ付テハ物主役衆諸用役衆ヨリ被申談候筋モ可有之間無覆藏被相談候様ニト存候此段申渡候事

(素讀方手跡方ニ達セシ書ハ逸ス但シ推テ知ルヘシ)

藩内東西ニ倉庫ヲ設ケ領内奥島山及ヒ西近江等ヨリ薪炭ヲ購入シ薄利ヲ以テ諸士ニ賣與シ其益スル所ノ薪炭悉皆學館用ニ供シテ以テ經費ノ補助トス而シテ其足ラサル所ハ東西倉ヨリ購入ス

館内鑿劍ニ用フル所ノ順ハ一刀流トハ異ニシテ皆周廻四寸許長サ四尺許ノ青竹ヲ末二尺許ヲ六拆或ハ八拆或ハ細拆シテ囊皮ニ裹ミテ之ヲ用フ故ニ日々費ス所ノ順凡ソ三百個ニ上下ス全竹一個ヲ以テ二順ヲ得ヘシ此全竹一日ニ凡ソ百五十個トシテ一年ノ奇日凡ソ百五十講即チ二萬二千五百個ニ至ル此竹ハ領内竹林ヲ有スル村落ヨリ貢納セシムル者ヲ以テ之ニ充ツ故ニ其價額甚タ廉ナリ

槍術修業ニ用フル手管ハ尺繩ヲ以テ之ヲ造ル其額頗ル多シ他局ヨリ收入スル所ナリ

劍槍柔居合等ノ修業場ハ敷々ニ庭ヲ以テス其庭ノ損消スル者頗ル夥多ナリ此他館内庭ヲ用フル所甚多シ皆領内ヨリ貢納スル者ヲ以テ之ニ充ツ自餘館内用フル所ノ諸品此類多シ

維新後ハ卒平民ノ入校ヲ許ルセシカハ生徒増加スヘシト雖モ然レモ亦官省府藩縣ニ奉職シ或ハ他管地ニ遊學セシ者アリテ其數概テ維新前ニ大差アルコト無シ通學生ハ藩費ヲ以テシ寄宿生ハ各自一日精米五合ヲ收メシム其概數ハ五六十名ニ上下スト云フ

東脩謝儀 維新前ニ在リテハ東脩謝儀一切無シ蓋シ文武ヲ修スルハ士ノ職分ニシテ之ヲ教授スルモ亦其義務ノ如キヲ以テナラン但シ武術ノ入門及ヒ其免許ヲ得シ時或ハ僅少ノ酒肴ヲ師家ニ贈ル者アリト雖モ公然行フニアラス又悉ク然ルニアラス維新後明治二年五月東京學士安井衡ノ門人島村行藏ヲ聘シテ學務ヲ委任スルニ至リテ藩論シテ政廳官吏以下學校事務員文武ノ教員等ハ金千匹以下百匹以上ヲ諸生徒ハ金一鉢以上ヲ扇子料トシテ贈ラシム

學校經費 簿書存セスシテ學費ノ概數ヲ登記シ難シ又學事ノ張弛ニ依リ學費ノ増減アルハ無論ト雖モ亦知ルヲ得ス
寛政十一年十一月廿七日學費ヲ藩士ニ賦課スル布告左ノ如シ

御目付ヘ

今度稽古館武藝小屋諸入用トシテ御家中一統割合銀別紙之通り上納被仰付候間被存其旨半ハ七月十日迄ニ半ハ十二月廿日迄ニ諸用方ヘ相納可被申候御扶持方御切米取之面々ハ其家ヨリ一個年之内一人モ出講無之節ハ不及被指出候且又右割合銀今年ハ不及被相納明年ヨリ右之通可被致上納候
件之趣可被相達候

割合銀之覺(別紙)

一百匁ツ、一万石 一六十匁ツ、六千石 一四十匁ツ、四千石 一三十五匁ツ、三千五百石ヨリ三千石迄 一三十匁ツ、二千五百石ヨリ二千石迄 一二十五匁ツ、千九百石ヨリ千二百石迄 一二十匁ツ、千石 一十五匁ツ、九百石ヨリ七百石迄 一十二匁ツ、六百五十石ヨリ五百石迄 一九匁ツ、四百五十石ヨリ三百石迄 一七匁ツ、二百五十石ヨリ百七十石迄 一六匁ツ、百五十石ヨリ五十石迄 一二匁ツ、御扶持方并御切米取衆
但三御步行ハ右割合銀ニ不關候且又御家中衆之内三御步行之門弟有之時ハ右御歩行之小屋ヘ掛リ銀被指出候儀掛
合次第ニ可被致候

右之趣相觸可申旨主税助殿御申渡ニ付相達候

十一月廿七日

御目付中

寛政十二年以來維新ノ時ニ至ルマテ年々之ヲ賦課ス凡ソ一年ノ總額銀四貫三百匁ニ上下スト云フ寛政年間銀六十匁ヲ

直彌ノ時ニ至リテ槍術野試合費ヲ給ス其安政六年ノ費額概算

銀一貫六百二十四匁五分 槍術野試合費

直憲ノ時文久三年ヨリ館内ニ炮術射の場ヲ設ケテ之ヲ習練セシム其慶應元年ノ費額概算

銀二貫百七十匁 炮術費 銀百七十五匁 角觸雇料

爾來年ヲ逐ヒテ物價騰貴シ費額頗ル増加シ年一年ヨリ甚タ然レモ簿書存セスシテ詳ラカナラス

江戸邸ニ於テモ武術修業費ヲ賦ス即チ在江戸ノ藩士祿ノ多寡ニ應シテ差アリ亦僅少ナリ

以上ハ維新前ナリ維新後モ亦其費額詳ラカナラス

明治四年七月文武分割文學ノミ講習セシ以來ハ一年ノ費額ヲ金六千圓トシ毎月五百圓ヲ付ス此六千圓ヲ以テ學校營繕

費書籍購入費生徒褒賞費寄宿生費等總テ學校ニ關係ハ費額ハ悉皆此ヲ以テ使辨ス但シ事務員教員使丁等總テノ給俸ハ

皆藩ヨリ給シテ學校之ニ關セス

藩主臨校 寛政十一年十一月十八日開館ノ時藩主直中江戸ニ在リ故ニ家老ヲシテ代リテ臨館開講式ヲ行ハシム是日直中

江戸ニ在リテ之ヲ祝ス明年五月十九日直中藩ニ歸ル故ラニ臨館セス九月七日ニ至リテ始メテ稽古館ニ臨ミ落成臨館式

ヲ行ヒ諸職員ヲ召シテ勵精ヲ褒スル左ノ如シ

頭取 中野助大夫、宇津木兵庫、

庵原齋宮、脇鐵五郎、三浦於兔吉

何レモ役前致出精一段ニ候彌以掟條目之主意押立無油斷可致精勤候

畢テ齋宮鐵五郎於兔吉ニ昨年來精勤ヲ褒シテ各丹後編二端ヲ與フ

稽古奉行 岡本半之丞、中野平吉

何レモ役前致出精一段ニ候彌以諸生行儀正敷文武共致出精候様可致世話候

物主兼書物奉行、同添役、諸用役

何レモ役前致出精一段ニ候彌以可致精勤候五介儀ハ色々世話申付置太儀ニ候

軍學師範 岡本半介

段々致出精一段ニ候彌以無油斷相勵候様可致世話候

武藝師範軍馬師範、馬術師範、

安政五年弘道館諸用方一手ニ於テ出納スル所ノ經費概算書ヲ得タリ左ニ錄ス

納之部

銀九貫二百匁 米四百俵代 但シ一俵ニ付銀二十三匁立(學館創立以來年々附スル所) 銀四貫百匁藩士割合銀

銀百六十匁 銀二貫匁預ケ之利子 銀一貫二百二十四匁 古物入札拂代

合計銀十四貫六百八十四匁

外ニ六百六十俵 炭 千八百四十束 薪

此二件ハ東西倉拂薪炭ノ益分普請方ヨリ受取

出之部

銀二貫九百匁 定式拂 銀十貫匁 武藝要具費 銀十貫零五百匁 順竹四百二十束 但シ每束五十本 銀二

貫百五十匁 薪炭不足分 銀七百匁 矢取三人雇料

合計銀二十六貫二百五十匁 右定式之分

外ニ銀一貫七百八十三匁六分 炭七百俵代 銀二百三十六匁六分六厘 薪二千零三十束代

合計銀二貫零二十匁零二分六厘 右不足分

二口合計銀二十八貫二百七十匁零二分六厘 此金四百零三兩永八百六十文零八分六厘 但シ金一兩銀七十匁立

(比例)當時現米一石凡ソ金一兩一分トシテ此米三百二十三石零八升九合ナリ是ヲ即今明治十六年八月ノ價額一石八

圓ヲ以テ算スルハ金二千五百八十四圓七十一錢二厘ニ當ル

差引銀十三貫五百八十六匁二分六厘不足 此分別途申立受取

外ニ

銀二百二十八匁 小使賞與 此分ハ兩便拂代ヲ以テ仕拂但シ兩便代ハ他ニ流用セス

以上ハ諸用方一手ノ概算ニシテ此他營繕費ハ悉皆普請方作事方ノ負擔ニシテ諸用方一切關セス

書物方ニテ書籍ヲ購入スル者年々頗ル多シ皆臨時ニ申請スル所ナリ

諸職員諸師範諸生徒ニ年々賞與スル所ノ金銀物品ハ藩ヨリ給スル所ナリ

諸職員諸師範門衛等ハ皆有祿者ニシテ其秩祿給俸ハ皆藩ヨリ給スル所依テ一錢一粒學館ヨリ出ス所無シ

小使門下番給俸モ亦藩ヨリ給スル所學館之ニ關セス但シ小使ノ褒賞銀ト矢取角觸ノ雇料ノミ館ヨリ給スル所ナリ

閻藩之ヲ治世槍鋒ノ加増ト稱シテ榮トス甚五右衛門原祿三百石是ニ至リテ三百三十石ヲ領ス

〔附記〕山田甚五右衛門名ハ喬利致仕シテ甚仙ト稱ス文才無シト雖ハ頗ル武藝ヲ能クシ槍術ハ素ヨリ其奥ヲ極メ老ニ至ルモ之ヲ廢セス居合ハ印可弓劍砲モ亦皆其業ニ達ス初メ甚五右衛門弱冠ヲ踰ユルモ槍術ノミヲ學ヒテ劍法ヲ知ラハ二十五歳ノ時父某甚五右衛門ニ謂ヒテ曰ク汝槍術ノミヲ學ヒテ劍法ヲ知ラス爾後佩刀ヲ廢シテ槍ヲ携帶スヘシト甚五右衛門大ニ窮シ劍術師範渥美平八郎ノ家ニ抵リ面シテ問ヒテ曰ク今ヨリ學フモ達スルヲ得ルカ平八郎曰ク然リ勉強意ヲスハ奥ヲ極ムヘシ達不達ハ子力意ニ在リト乃チ約シテ門弟ト爲リ日夜勉勵終ニ其業ニ達シテ大許ニ至ルト云フ一日直中手書ヲ甚五右衛門ニ與ヘテ曰ク先日認メ申候書付モ少シハ用立候趣ニテ大慶存候業ニ於テハ心之儘ナレハ是迄心懸申候トハ道筋モ違ヒ心持惡敷節ハ難仕ト存候此處稽古ニテ又是モ心之儘ニ相成可申候其時ハ鬼ニ鍊棒ト存候遠藤之風車裡無シノ槍是ハ面白キ事ト存候深キ處ハ存不申候ヘハ認メ申候内ニ風ニ任せ左右ヘ廻ル譬ヘ走ル者ヲ後ロヨリ突クカ如シ是レ刀ノ裡ト云フヘキニヤト云々是モ其道具ノ一ツニテ可有候兎角是モ業ニ掛リ申候不心懸シテモ此場ヘハ至リ可申候是皆風車ノ先ノ花カ目ニ付申候事故右様之考モ出可申候風車之真木ハ心付不申候哉真木ノ有ラハコソ車モ廻リ申候真木ノ無キ時ハ如何ナル大風ニテモ廻リ不申候真木ハ人ノ心也兼テ申候通り少シモ曇リ有リテハ雲間アリテモ月影ハ指シ可申ト心懸申候ハ惡敷ト存候敵之方惡敷故我方之槍自ツカラ直ニ出ツルト心得ヘシ是カ敵ニ取リテハ裡ニ當ルヘシ只々心之事ト存候也長壽院様(直興論號)ノ御歌ニあども無き雲にあらるふ心ころ中々月のさはりとそなる右即答故甚亂筆ニ候ヘハ認メ申候三月七日花押山田殿又一日槍術勉勵ヲ襄シテ橘章上下衣ヲ賜フ其書ニ曰ク年來武藝無怠慢出精別テ槍術之儀ハ格別致熟練山田源八郎弟子共引立之爲方ニモ相成候趣達御聽旁以一段之事ニ思召候依之爲御褒美右之御品被下之候云々其致仕ノ日綿三把ヲ賜ヒテ之ヲ賞ス其書ニ曰ク御自分儀壯年之頃ヨリ槍術格別被致出精山田源八郎チモ格別引立被致世話候由ニテ源八郎儀右術殊更達者ニ被致候様相成其外同人門弟之面々ヲモ師範同様世話有之被及老年候迄無怠慢被相勵候儀神妙之事ニ思召候今度願之通り隱居被仰付候ニ付爲御褒美右之御品被下之候云々

直中或ハ稽古館ニ臨ミテ文武藝ヲ見畢リテ休業セシメ諸職員諸師範諸生徒ヲ率テ松原濱ノ別莊ニ到リ漁具ヲ貸與シ縱シテ各自庭池ニ漁セシメ或ハ漁夫ニ命シテ網ヲ曳カシメ獲ル所ノ湖魚ヲ調理シ酒飯ヲ與ヘテ放遊セシメ秋時ハ則チ禁山ニ率テ松茸ヲ取ラシメ亦酒飯ヲ與ヘテ放遊セシム致仕後ハ殊ニ頻々之ヲ爲シ時ニ隨ヒテ弛張シ文武ヲ獎勵ス天保元年六月十三日直亮臨館稽古館ノ號ヲ改メテ弘道館ト爲ス

軍學方、禮節方、學問方、素讀方、
手跡方、天學方、算術方

何レモ出精相勤一段ニ候彌諸生共無油斷文武共行儀正敷相勵候様可致世話候（和學方ハ七十人步行ナルヲ以テ召サス）

是日ハ文武藝ヲ見スシテ歸ル享和元年三月十日再タヒ臨ミテ文武藝ヲ見ル爾來續々臨館シテ周覽シ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞シ或ハ生徒ヲ試業シ優等者ニ物ヲ賜フ

〔附記〕五月藩ニ歸リテ九月始メテ臨館スル者緩ナリ想フニ創立ニ當リテ事故アリ事ハ沿革條ニ詳ラカナリ故チ以テ直中故ヲニ遷延シ是ニ至リテ始メテ臨館シ再回ノ臨館ハ明年三月ニ在リ爾來屢臨ミテ文武ヲ獎勵スト雖ヒ創立主ニシテハ猶ホ足ラサル者ノコトシ蓋シ陽ニ省ミサルカ如クシ嫌疑ヲ避クルナラン致仕ノ後ニ至リテハ頻リニ臨館シ殆ト餘暇無キカ如シ乃チ以テ直中ノ底意ヲ窺ヒ知ルニ足ル

四月十日第四回稽古館ニ臨ミテ槍術ヲ見ル畢リテ山田甚五右衛門ヲ召シ年來槍術執心鍛練ヲ賞シテ田祿三十石ヲ加賜ス抑藩ノ法田祿ヲ與フルニ五十石以上ハ藩主ト雖ヒ獨斷ヲ得ス家老ニ謀リテ目付ニ議セシメ而シテ後ニ非サレハ與フルヲ得ス三十石以下ハ藩主ノ意ニ任セテ決行ヲ得是日直中甚五右衛門ノ槍術ヲ見テ其熟練超群ヲ大ニ感嘆シ俄カニ之ヲ與フル田祿ヲ與フルノ制其者ヲ召シ藩主口自カラ之ヲ命シ再タヒ捺印書ヲ家老ニ付シ以テ命ヲ傳ヘシム甚五右衛門稟性聾ナリ其誤聞センヲ慮カリ直中紙ヲ懷ニ取り自カラ筆シテ之ヲ命ス其書ニ曰ク槍術達者感心之事ニ候爲褒美三十石加増遣シ候

四月十日

直中

山田甚五右衛門へ

又

一三十石加増

山田甚五右衛門

右年來槍術執心ニテ格別達者ニ致シ感心之事ニ付爲褒美件之通加増爲取之候
右之趣直ニ申付候ヘテ猶又各可被申渡候

四月十日

黒印

木俣土佐殿、長野十郎左衛門殿、脇内記殿、西郷藤左衛門殿、中野助大夫殿、長野傳藏殿

餘部、合計二千二百七十餘部

但シ編者親シク其書目ヲ見シニアラス他人ノ調査セシヲ錄スルナリ違算無キヲ保シ難シ蓋シ聞ク此部數ハ譬ヘハ四書五經十七史ナトアルハ各一部トシ別ニ大學論語若シクハ書經詩經若シクハ史記漢書ナトアルハ亦各一部トシテ算セシト然ラハ上文記スル所ノ部數トハ差異無キ能ハス共ニ概數ナリ

出版翻刻 凝烟舍詠草、二冊 天保二年刻落士村田泰足ノ歌集ナリ 逸周書、詩經本義 此二部ハ天保中ノ活版ナリ藩士平尾義ノ校訂スル所ナリ冊數ハ各一冊カ二冊カナリ 日講四書解義、二十六冊 明治三年十月翻刻清國主愛親覺羅玄燁其臣ニ命シテ校撰セシムル者藩ノ學士田中芹坡專精寺篤讓ノ校點ナリ 左傳輯釋、二十一冊 明治四年正月刻東京學士安井衡ノ撰ム者藩ノ學士澁谷啓三成瀬厚庵ノ校訂ナリ

舊朝日山藩

學制

學事上ノ諸制度

越前守忠邦ノ代文化十一年七月中老役ノ者ヨリ目付役ヘ相逢書

御家中之輩文武被勵候事者度々被仰出も有之近來格別之思召にて夫々御世話も有之候得共兎角不出精故上達之族少く御歎敷被思召候一休人臣之嗜者文武兼備いたし上を守護補佐いたし候儀肝要之事に候然るに何も遊惰而已に成行諸稽古共名目計にて或ハ御覽之節急なる稽古杯被致候事全く人民之休を失ひ候者本は無智無能より起候事不束至極之事に候依て此度改て被仰出候趣者何も諸藝共嗜候儀勿論に候得共別して文學之儀者其身之言行に拘り候儀に候間兎角實學を專相嗜言行一致に心掛日夜修行怠惰有之間敷候武藝之儀者數多之儀に候得共一同可遂儀專一に候然しなから人々得手不得手之有之者と申には無之候得共數多之儀一身にて學候得者煩雜而已にて不被遂輩も多有之様被思召候左様成輩者何にても一藝之至極を究め其餘力を以て他之事も相嗜候て自然盡く兼備に至候様心掛可被申候右者其身之榮辱者申に不及之を推候得者上へも拘り容易不成事に候以後決て心得違ひ無之出精被致候者はに過候御奉公有之間敷候

新に被召出或は夫々役付候得者諸藝共に出席不被致とも濟候様に成往以之外之事に候役用繁多有之節者譯も立候得共左も無之節は随分稽古可相成儀御勝手役之内にても人に寄り被心掛候も相見候得者稽古不相成と申譯者決て難立

直亮直弼直憲モ亦直中ノ爲ル所ニ倣ヒ屢々臨館シテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞シ文武藝ヲ巡視シ優等者ヲ拔キテ試業シ或ハ職員師範生徒ノ屬精者ヲ召シ手ツカヲ衣服上下衣肩衣八丈編岸編袴地等其職其藝ニ應シテ之ヲ與ヘ或ハ濱邸禁山ニ率テ酒飯ヲ與ヘ以テ放遊セシメテ之ヲ獎勵ス

祭儀 寛政十一年創立ノ時直中自カラ八幡宮ノ神號及ヒ周人孔丘ノ謚號ヲ書シテ文武ノ神トシ講堂中央南面ニ安ス其祭典ノ如キハ簡易ヲ主トシ神酒鏡餅熨斗ヲ供シテ事務員教員生徒ノ拜スルノミ開館ノ時ノ事ハ諸則條中式書ノ如シ爾後ハ每歲正月十六日一回ノミ

學校構造及建物圖面 地坪二千三百六十三坪餘建坪七百七十七坪餘但シ明治五年舊犬上縣ヨリ滋賀縣ニ交付スル時ノ坪數ナリ別紙ハ維新前ノ圖ナリ故ニ此坪數ニハ合ハス

四之寮 一棟ハ二階造リニシテ其天學寮ハ三層樓ナリ

圖面ハ別紙ニ在リ但シ創設以來漸次ニ増建スル者アリテ少シク差異無キ能ハスト雖モ大異アルヲ無シ別紙圖面ハ文久年中ノ景狀ナリ

藏書種類部數及出版翻刻書目 簿書散逸シテ詳ラカナルヲ知ラス弘化元年書スル所ノ弘道館藏書目錄ニ據ルニ

皇典ニシテハ神書、正史、雜史、記錄、有職、氏族、字書、往來、法帖、物語、草子、日記、文章、紀行、撰集、私撰、家集、歌合、百首、千首、類題、雜歌、撰歌、歌學、詩文、兵書、戰畧、醫書、教訓、管絃、地理、名勝、圖書、隨筆、雜書 外國籍ニシテハ經書、

歷史、子書、集書、字書、語書、法帖、詩文、隨筆、天文、地理、道書、雜書、醫書、翻譯

本寫

禮儀類典、十三經註疏、二十二史、稗海、漢魏

以上内外國籍ヲ合セテ凡ソ一千五百部二萬餘卷ニ至ル中ニ就テ大日本史、淵鑑類函、群芳譜、萬姓統譜、知不足齋叢書等ハ藩主內藏書、漢魏六朝百三名家集、經解、欽定四經、四庫全書、佩文韻府、淵鑑類函、群芳譜、萬姓統譜、知不足齋叢書等ハ藩主內庫ノ書ヲ假リニ付スル者ナリ仍ホ此他ニモ內庫ヨリ假リニ付スル者アリ爾來漸次ニ購入シ維新後ニ至リテハ其數殆ト二萬部三十餘萬卷ニ至ルト云フ皇典中ニハ未刊書ニシテ稀有ノ者モアリ又六正史以下古書中ニハ古寫本數通ニ校合訂正セシ者アリ或ハ聞ク明治五年廢校ノ際散亂遺失セシ者アリテ滋賀縣ニ交付スル所其數ヲ缺ク者多シト其眞僞如何ヲ知ラス聊サカ聞ク所ヲ錄スルノミ

明治五年滋賀縣ニ交付スル所ノ書目

國史類百七十部、歌書類百五十六部、記錄類九十三部、雜書類四百九十四部、經書類五百九十四部、歷史類二百十一部、子書類三十五部、雜書類百五十六部、詩文類百七十部、字書類九十五部、翻譯書七十三部、醫書算術地圖法帖等二十

文學獎勵ノ方法 文學獎勵ノ儀ハ年中出席ノ數ヲ點檢シ甲乙丙甲ハ料理トシ金二百疋乙ハ吸物酒トシテ金百疋丙ハ

賞詞ノ三等ニ別チ相當ノ賞ヲ翌年正月政事始メノ際之ヲ行フ又席ニ上於テ辨書無滯出來候程ノ學力ニ進歩候者ヘハ

出席賞甲乙料ノ外ニ目錄^{吸物酒トシ}又無點ノ書籍讀得候程ノ學力ニ至リ候者ヘハ目錄^{料理トシテ}以テ之ヲ獎勵ス武術

ノ如キモ是又年中出席ノ數ノ多少ニ依リ獎勵法前ノ如シ又目錄傳授ヲ得候者ヘハ前ノ如ク別ニ目錄^{吸物酒トシ}免許傳

授ヲ得候者ヘハ目錄^{料理トシテ}遺ハシ之ヲ賞スルヲ法トス

士族卒ノ子弟教育方法 藩士族卒ノ子弟タルモノハ先ツ藩立學校ニ入リ讀書ノ業ヲ修シム又各自ノ意向ニ任セ家塾等ニ

於テ修業スルモ妨ケナシトス^{但藩立學校ニテ勉強ノ餘暇家塾等ニ就キテ修業セシ}

他國ニ遊學セシモ出願スル者アレハ則許可ノ上給扶持等ハ其儘宛行ヒ職務ヲ免シ修業セシムルヲ法トス^{但修業ノ年期}

武術ヲ修業スルモノモ同シ又藩ニ於テ人撰シ文武トモニ他國ニ行キ修業

セシモ命スルモノハ此限ノミナラス別ニ若干ノ費ヲ給スルヲモアリ

藩士卒ト生徒トノ區域ハ置ス素ヨリ藩士卒ノ子弟タルモノハ即チ生徒タレハ縱令勤務アル者ト雖モ同窓ノ學友ナレハ

講義ヲ聽聞シ又ハ會讀輪講等ニ至ルマテ同席修業スル妨ケナシトス^{但一藩士族タルモノハ子弟歳ニ至レハ召シ出シト稱シテ勤}

主ニ使フ^{令ノ如シ}故ニ生徒ノ區域ハナク本文ノ如シ

平民ノ子弟教育方法 別ニ教育ノ方法ハ設施セス多クハ家塾寺子屋等ニテ修學習字等ノ業ヲ學フヲ常トス然リト雖モ有

志ノ輩ハ藩立學校ニ入學スルヲ禁セシヲナシ且ツ農民ノ學事ニ從事スルヲ禁止セシヲナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等ヲ開設スルヲ奉行等ノ許可ヲ經シテ自由ニ任セシナリ

學校

學校名稱 經誼館^{藩地ニ設立セ}育英館^{江戸邸内ニ設立}

校舍所在地 藩地ニ設立セシ經誼館ノ如キハ亭和元年ヨリ文化十四年マテハ肥前唐津城内ニアリ文化十四年ヨリ弘化二

年マテハ遠江國濱松城内ニアリ弘化二年ヨリ以往ハ出羽國山形城内ニアリ 育英館ハ設立以後江戸上屋敷ニアリ

沿革要畧 亭和元年正月九代目左近將監忠鼎肥前國唐津領地ノ際儒學ヲ尊崇シ治城ニ學ヲ建テ文廟講堂等ヲ結構シ命シ

テ經誼館ト云フ臣水野元彭ヲ以テ學制都司ト爲シ學事ヲ綜理セシメ臣司馬弼ヲ以テ教授トナシ臣司馬成章吉松新ヲ以

テ助教トシ其他授讀六人副授讀十三人ヲ置キ藩士卒壯少ノ者ヲシテ悉ク學ニ就シム是ヨリ一藩靡然トシテ文教ニ向フ

夫ヨリ後文化十四丁丑年越前守忠邦ノ代ニ當リ封ヲ遠江國濱松ニ移セシヨリ猶益一藩ノ士族卒ヲシテ文武ノ道ヲ修メ

事に候間無油斷心掛可被申候如此相違候上は痛所は格別無左して不出精之族は御糺之上可被及御汰沙筋も有之候間兼々其心得有之父兄よりも能々可申合候年老に依り運動之藝術の御用捨之品も有之事に候

右之通被仰出候上は何れも出精被致候事と被思召候是迄被召出等は多く親兄弟之格祿に拘り且昇進並御加増等も多くの年數杯にも依り夫々被仰付有之候得共以來者能不能に因て思召も有之事に候間各此旨被相心得忤共並兄弟有之輩者勿論其外とても油斷有之間敷候

文化十四年五月中老役のものより目付役の者へ相違候書付

文武稽古之事度々被仰出候處兎角疎に相心得懈怠多く相見申候年若之輩者不及申五十歳迄之輩文武稽古罷出可被申候尤四十歳五十歳以上高弟之輩は不斷稽古場へ出席いたし若年之輩を世話致し取立候様心掛稽古場作法正敷可被致候

天保二年二月中忠邦より目付役の者へ直諭せし書付

夫人臣之於君也猶四支之戴元首耳目之爲心使也相須而後成體相待而後成用故臣之事君猶子之事父父子雖至親猶未若君臣之同體也と唐太宗金言の如くに候老共は四支にて予を羽翼し家事之善惡曲直を宰判し各其所を得せしめ無口過無怨惡に至る目付は耳目にて家事之善惡曲直并命令之行否を監察し四支に達し四支不及處政道之缺漏を補助し民無飢色野無餓莩ために候得は老共目付上下にて國政綱紀も相立候事故不容易儀に候處目付共儀右之体裁不相心得哉家政上一旦申付候風俗并禁止等之儀を其當坐は見聞之趣申出候得とも年月經候得は等閑にいたし再及沙汰候迄捨置候儀多く如何之事に候其證如左

一文武之儀若輩之者稽古は勿論壯年にも役人等申付候者稽古不致出席は不心掛之儀にて銘々嗜之爲故何にても得手之儀の折々相試可申旨申付候處此地にて公用人あとも繁多中爲嗜稽古場へ出候次第候得とも濱松にて更に有司之分出席等不相見候是も申付に相違之事故見聞之趣可申出處無其儀段如何之心得に候哉

一文武稽古場への申合一人つゝ繁々出席稽古人世話等いたし又自身にも相試候て諸有司も見習ひ文武研究候て士氣行立候様可致候是は前件遊伎等とは事替り文武藝術之上にて交候て一箇の確心不放候得者他輩之者共とは自然違候老年之者は出席世話計にても可致候

一官隙之節猥に雜伎に不濟不絶書見いたし殊更史類は政事之心得に成候品に付數回可翫味候從來無學之者は假名書之物にても讀過候得者一言半句たりとも政道奉職之裨益可相成儀は致採用候様可心掛候

得而遺失之

一珍護典籍 古人有故紙有五經詞義及聖賢姓名不敢他用者而況經傳典籍宜何如珍重今約勿狼藉几席勿分散卷冊勿出

夫ヨリ後弘化二丙午年先代和泉守忠精襲封ノ際ニ當リ封ヲ羽前國山形ニ移サレシヨリ城内ニ假リニ文武研究ノ場ヲ設ケ藩士族卒教導ノ方法都テ舊慣ノ如シ

先々代越前守忠邦ノ代舊習ヲ一洗シ在江戶藩士族卒并子弟タル者ノ教育ノ道ヲ擴張センカ爲メ天保年間上屋敷ニ於テ新ニ館ヲ開キ命シテ育英館ト云フ學督學監ヲ置キ學事ヲ掌ラシメ又儒員ヲシテ代當直セシメ教授ノ任ニ當ラシメ又授讀數名ヲ命シテ其勞ヲ助ケシム又嫡子ヲシテ每朝必ス斯ノ館ニ就キ藩士卒ノ子弟ト共ニ專ラ讀書ノ業ヲ修メシム且ツ他藩ヨリシテ斯ノ館ニ入り學ヲ修メント乞フモノアレハ輒チ來學スルヲ許セシナリ

中屋敷下屋敷等ノ如キハ儒員タルモノヲ居住セシメ其居宅ニ塾舍ヲ附屬シ其邸内ニ住居スル藩士卒ノ子弟ヲシテ專ラ讀書ノ業ヲ修メシム又他方ヨリ來學セント乞フ者アレハ入學スルヲ得セシメシナリ

鹽谷世弘ハ藩ノ儒員タリ今幸ヒニ嗣子誠誠ハ世弘ノ弟ニテ量平ト稱ス陳述セシ行述記ノ在ル有リ別ニ掲ク

教則 每朝必ス素讀習字等ノ業ヲ修メシム又學業ノ進歩セシモノニハ講義ヲ授ク會讀輪講等ノ如キハ各自學力ノ優劣ニ

隨ヒ差等ヲ分チ豫メ日ヲ期シ一六二七ナトト云フノ類ナリ教授助教等ヲシテ會頭タラシム又教科用書ノ如キハ經書歷史諸子等各自ノ

意向ニ任セシナリ

學科學規試驗法及諸則

漢籍經書歷史諸子ノ類尤學ヲ所ハス自ノ意向ニ任セテ限ナシ算術關流學ヲ所限ナシ筆道

弓術日置馬術大坪

槍本間流、戶田劍小野派、一刀流、眞影流、神道無念流

砲術武衛流

捕

手無双流兵學長沼

等ノ内劍槍ノ如キハ日々何時ヨリ何時マテト時間ヲ定メテ教授シ其他ノ諸藝ノ如キハ日ヲ期シテ

七ノ類之ヲ教授シ又兵學等ノ如キハ天保年間他ヨリ長沼澹齋ヲ招キ更ニ兵制ヲ改革シ專ラ士族卒ヲシテ練兵ニ從事セ

シメシナリ

藩士卒タルモノ必ス文武ノ兩道ヲ兼修セシメシナリ然リト雖モ文學ト武術ト程度ノ比例ハ置カサレモ四書ノ内何レノ

一書ニテモ講義ヲ爲シ能ハサルカ又ハ武術ノ内何レノ一藝ニテモ目錄ヲ得サル者ハ歲十七歲ニ至ルト雖モ召出ニ就カ

シメサルナリ

但召出シノハ士族卒教育法

育方ノ第二項ノ但シ書ニ委シ

藩士卒ノモノ入學退學ノ期限ハ置カサレモ然レモ子弟タルモノ歲七八歲ニ臻レハ文學習字等ノ業ニ就クヲ常トシ武術

シヲ屢獎勵ス夫ヨリ天保年間ニ至テ更ニ城内ノ地ヲ撰シ文武研究ノ場トナシ文ヲ講シ武ヲ研クノ館ヲ新築シ又他ヨリ學士ヲ聘シ益藩士卒并子弟タルモノ、教育ノ道ヲ擴張ス臣儒員鹽谷世弘ニ命シテ揭示ノ文ヲ作ラシム其文左ノ如シ

一 學生宜先領讀書旨趣如何 讀書者所以學人之爲人也豈徒識字解文而已哉而俗士有恒言曰我非儒無須甚讀書此視讀書爲口耳之用茫乎不解其旨趣者也凡入斯館者當艾此見以爲學問受用之地而書之不可不多讀人之不可一日而不學更在所弗論

一文武一致不得視爲兩岐 古之教者必由六藝入而禮有軍國之儀樂有文武之舞射御有治亂之習至於書數平世師旅用具不可闕者六藝孰不合文武而一之教之爲一也明矣今人或有文士耻學武武人耻學文者非媚嫉即鄙陋然世益降而技益派人精力有限不可悉修但當餘力兼習靡失古之教意則他日濟々之美庶幾可得而致矣

一 臨課試尤要省欺誣之念 自欺欺人乃萬事之病根不可不痛芟深代者學者終身工夫專在此今臨講章對門之時竊備他人代撰或多方探索課題預作以備試是勿論欺上乃自欺之尤甚者各人當誓天地神明以自省察

一 讀書之益專在會讀輪講 易得者易失物理悉然至學問何獨不然若講說入乎耳而通乎心困學之勞省而聞之益速似宜爲捷徑然少獨看之功者目不與字慣心不與書熟其入乎耳者將不久而忘之假令不忘性靈之爲開者無幾若會讀輪講則對書思理據經論道心目耳俱到其開益神智非淺鮮也用力深者收功遠勿論館中會日宜各結社以講習

一 會讀輪講須極力問難論究 執經會講有疑必問有問必究弗究弗措也大抵學者之憂在於愧己之不知抱疑而不問蓋解乎心者也故講學之益專在論究論究則無一知半解之弊或能獲未發之旨或能見言外之意凡口欲言而不能言者必至於能言而後止當仁不讓於師師弟問難討論至聲色俱厲亦所不責但務去好勝之心悟非即服方是君子之爭

一 修儀節慎言談 學校者禮義所由出而用心細行方是丈夫學生當整肅身體端莊坐立勿高談讀問勿浮言戲笑勿亂履屐勿越梧几勿躡書帙勿欠勿伸勿傲勿肆財利之事猥褻之談誹謗之言謹勿登之唇齒

一 長幼卑尊須相敬愛 朝不和則事不成今日同窓之朋即異日同朝之友同窓不親則朝何以和宜謙以存讓以下人長者尊者勿侮少者卑者勿凌長者尊者則同窓麗澤之誼行而同朝和睦之基立矣

一 朋友交誼 朋友一倫比之父子君臣夫婦兄弟其序似輕而聖人列爲五豈非以倫理所由明實資其輔仁爲任最大交豈忽忽敬而耐久狎則易破宜淡如水勿甘如醴有過則規有失則戒告者不有己見出以懲誠善其辭說溫以導之受者虛己以納勇於改而不吝於徒樂取乎人以爲善將拜喜之不暇如此方足稱同志之朋

一 受業須戒臘等貪多 授書之法自有次第不容越等授讀者將前日所受溫復數遍一字不失然後新受不得貪多妄請并舊所

ハ一師範ノ私家ニ於テ教授スルニ止ルヲ以テ諭示獎勵等ハ敢テ怠タルニ非ラサルモ其制度ニ至リテハ得テ見ルヘキモノナシ嘉永年間始メテ文武ノ改革ニ着手シ爾來前日ノ面目ヲ一變スルコト多シト雖モ書類多クハ散逸シ得テ攻フ可ラス偶々官私ニ存スルモノヲ蒐メ或ハ古老ノ口碑ニ取リ其顛末ヲ考査セルヲ以テ遺漏誤聞ノ多キハ亦論ヲ俟サルナリ

凡例

凡ソ布令諭達等ノ原文アルモノハ冗長煩雜ヲ厭ハス務メテ原文ヲ錄ス明リニ改削修飾シテ事實ノ乖違ヲ生センコトヲ恐レテナリ

凡ソ原文ヲ錄スルニ藩ノ慣稱ニテ藩外人ノ見テ解セサルモノアリ今之レヲ解釋スル左之如シ
給^{キウニ}人トハ物頭以下ヲ云ヒ非職ノモノヲ平給人ト云フ知行取リ以上格式ノ總稱ナリ
徒士トハ讀テ(カチ)ト云ヒ徒士目付ハ徒士ノ一級上席ニシテ士ノ席ニ昇サス

學制

學事上ノ諸制度 嘉永年間當主加藤越中守明軌重臣ニ告テ曰ク數百年來天下平安ニ歸シ士ハ治世ヲ常トシ矛ヲ戢メ弓ヲ振ニシ又文ハ僧侶ノ業ト思ヒ只タ遊手坐食スルノミ爲ニ本藩ノ士氣柔弱ニ陷ル是レ我祖先ニ對シ大ニ耻ツル所ニシテ士ノ本意ニアラス如カス自今文武ヲ獎勵シテ武備ニ銳意ニ文藝ニ熟達セシメントス茲ヲ以テ重臣等主義ヲ藩中ニ知ラシム其布達等左ノ如シ

〔附言〕文武獎勵ノ達ハ就中藩主代替リノ際直達書中文武勉勵忠勤ヲ可盡等ノ條項アリ其他安永年間勝手向キ格別不如意ニテ大改革之節モ文武之道怠慢スヘカラサル様ノ達モアリシ趣又文化年間藩主早世シ嫡嗣幼稚ノ際先主ノ弟或ハ重臣等ヨリ文武藝道無懈怠緩急ノ用途ニ適シ候様可心掛云々ノ達シモアリシ由近世嘉永六年癸丑亞米利加軍艦渡來以後數回布達スレトモ書類等存セサルヲ以テ年月日亦不詳今其原文ノアルモノ及ヒ口碑傳聞ヲ左ニ錄ス

嘉永六年癸丑九月二十二日藩主ノ旨ヲ受ケ重臣ヨリ達

此度從公儀被仰出モ有之諸家様一際御節儉被爲在武備實用無油斷可被成旨其御趣意ヲ以テ御當家ニ於テモ對東武難被拾置御備向御調被成追々武品御入手御取調被成度何時御沙汰之程モ難計依之何レモ御先祖ヨリ歷代ノ御恩澤ヲ蒙リ非常ノ義ハ覺悟ノ譯ニ候得共御治國打續キ自然武具入手等閑ニ可相成哉ト深ク御心痛格別ノ思召ヲ以テ御手當被下度候得共近來各承知之通り御勝手御不如意既ニ去ル未歲御改革相成候處御類燒一條存外ノ御入費御歎息至極ノ折

ノ如キ凡十歳以上ニシテ習フトナリ且ツ武術ハ歳十七歳ヨリ三十五歳ニ至ルマテハ必ス目錄免許ヲ得シ年月ヲ附シ書付ニテ年ノ正中ヲ限り學監ニ出スヲ法トス

試験ノ如キハ必ス春秋ノ定期ハ置サレテ獎勵ノ爲メ兩期之内一度必ス藩士卒ノ學業ト武術トノ優劣ヲ親ラ臨テ之ヲ試ミ優等ノ者ヘハ書籍物品或ハ目錄（吸物酒又料理ニ等アリ）等ヲ與ヘテ之ヲ賞ス尤兩地トモ（藩江戸ヲ云フ）不在ノ際ハ老役ノ者ヲ以テ代理セシ（一モアリ）

職名及ヒ俸祿

學制都司學督學監（學制都司學督ハ用人以上ノ者ヲ以テ之ヲ命シ學監ハ日付役ノ者ヲ以テ之ニ任ス（目付役トハ即チ監察ナリ）皆兼務ニシテ別ニ役料等ハ附與セス年々褒賞ヲ以テ其ノ勞ヲ慰ス又教授助教等ハ儒員ヲ以テ命ス故ニ特ニ役米役扶持等ハ附與セス各自固有スル所ノ知行扶持米等ヲ以テ授讀副授讀モ亦然リ尤職務勉勵ノ甲乙ニ依リ加増或ハ身分昇進賞與等ヲ以テ之ヲ獎勵セシナリ又座席身分取扱ヒハ都テ各自ノ本席ヲ以テ之ヲ處ス

職員概數

學制都司學督ハ一人ニ限り學監ハ兩三名ナリ併シ時ニ當リテ多少アリシナリ

生徒概數

當時生徒ノ出席帳存スルナシ依テ記載スル能ハサルナリ

束脩謝儀

藩立學校ニ向テハ文學武術トモニ束脩謝儀ハナシ然レモ但各自カ師ト依頼スル者ニノミ其志ヲ表ス謝儀モ亦然リ

學校經費

學費ノ如キハ年々金何程トシ或ハ學田亦藩士等ニ賦課セシヲナシ年分ノ消費ハ都テ之ヲ藩ニ資ツテ給セシナリ又賞與等ノ費ハ手元金ノ内ヨリ之ヲセシ（一モアリ）

藩主臨校

學科學規云々ノ目第四項ニ記載セシ如シ

祭儀

享和年間學館興セシ以後ハ歲時ニ文廟ニ釋奠シ又在邑ノ時ハ自ラ文廟ニ拜奠シ學士ヲシテ經ヲ說カシメ之ヲ聽聞

セシナリ

學校構造及ヒ建物圖面

是レハ舊記等ノ今存スルナシ故ニ記スルヲ能ハサルナリ

舊水口藩

緒言

水口藩ハ僅カニ甲賀郡ノ一小部分及ヒ蒲生郡阪田郡中ニ數村ヲ領セシニ過キサレハ從來藩立學校ノ設ケナシ文武ノ事

一武術ノ義ハ何レモ出精之趣相聞ヘ奇特ノ事ニ思ヒ候向後去華法實用之修行專要厚ク相心掛ケ可被申且不作法之所業堅ク相愼ミ可被申事

全年十二月朔日藩士一同ヲ書院ニ召集シ左ノ如ク直達ス

我等事此度吹上御庭拜見御眼見有之國々ニテモ政事向文武之世話厚心掛候様トノ上意有之候依之領民撫育ハ勿論文武共猶一際致研究仁義忠孝之道相辨ヘ緩急ノ用途相立候様厚ク可心得猶年寄トモ用人番頭ヘ申聞候義モ有之事ニ候

(別番)

年寄共、用人、番頭ヘ

其方共平日實貞相勤令満足候然ルニ近年天下ノ形勢一變致シ公邊ニテモ破格ノ大變革被仰出候是畢竟日本ノ全カヲ養ヒ御國威御擴張被遊度思召ト被存候依之政事向一廉刻苦致シ領民撫育ハ不申及文武精勵綱紀ヲ張り士氣ヲ振ヒ緩急ノ節屹度御用相立候様可心掛肝要ニ候自然不行届ノ義於有之ハ其方トモ可爲粗漏候猶諸役人末々マテ可申論者也

明治元年戊辰三月十四日藩主ノ旨ヲ受ケ重臣ヨリ達

方今文武研窮可致儀ハ兼テ被仰出モ有之候得共何レモ繁劇ニテ素志ヲ不遂者モ可有之候間以來他邦ヘ遊學致シ度モハ御許容ニ相成候乍去御勝手向御切迫ノ折柄故別段定俸ノ外御手當等ハ不被下候得共各格別奮發致シ自財ヲ以テ修行願出候者有之候ハ、左ノ通り人員御定相成候間一同可被相心得候

士分三人 徒目付以下三人一ケ年期限ノ事

外ニ御人撰ヲ以テ遊學被仰付候義ハ別段ノ事

明治元年戊辰十一月十八日文學局ヨリ達

文學ノ義ハ士ノ常道ニシテ平生研窮可致儀ニ候得共當今之御時世文學ノ義ハ彌以テ大義名分ヲ明ニシ人材ヲ仕立候地位ニ付闔藩勉勵修業可被致事

一文學局御執立ニ相成候ニ付テハ以來入門束脩歲末ノ謝禮等師家ヘ贈リ候分一切不及其儀候入門ノ節者前以テ文學局監察ヘ申込當日禮服着用ニテ朝五ツ時ヨリ四ツ時マテノ内ニ局中ヘ罷出可申候

文學局ハ明治元年戊辰十一月改正各局ヲ設ケシトキ翼輪堂中ノ事務取扱所假リニ名ツケシ名ノミニテ別ニ局ヲ設立スルニハ非ラス

學力優等武藝精勵ノ者ヘハ賞金品等ヲ授與シ又ハ特ニ加祿セシム但シ賞賜金及ヒ品物酒饌料衣服料書籍等ヲ下與スルハ從前ノ例

柄御配慮ナ以テ御役人共へ度々御相談有之候得共其御場合ニ難運乍去忽可爲難澁ト御察シ當時乍聊銘々武器手當金拜借被仰付候間右御時節ヲ汲取り御高恩ヲ不忘彌以テ文武兩道研究致タシ御家風ヲ相守リ誠意誠忠禮義ヲ旨トシ武具手當相應行キ届キ候様御供ハ不申及火急御人數立等ノ節士道ノ本意ヲ失ナハス御名ヲ不汚様相心得用意覺悟可爲專一事ニ候

文久二年壬戌五月二十三日前全斷

文武藝道之義ハ先年來數度被仰出モ有之猶又當御時節之義ハ一統承知之通何時出張被仰付候モ難計武道ノ本意者平常肝要ニ候依テ銘々身柄相應配下差圖モ可致藝術一際相磨可被申別テ十五歳ヨリ四十歳マテハ聊カ無油斷急度出精可有之事ニ候然ル處中ニハ身柄ノ内ニモ武道之本意ヲ失ヒ若輩ノモノ未タ門入等モ不致族モ有之旨相ヒ聞へ不心得ノ至ニ候此度被仰出之御趣意相守リ出精目立候向ハ厚キ思召モ可有之自然等閑ニ相ヒ心得候者於有之ハ取調ノ上急度御沙汰可有之事ニ候

講釋聽聞ノ義ハ近頃自然ト出席少ナニ相成右ハ銘々心得方第一ノ本意ニ候間急度聽聞可被致候御役方ハ日勤御用多ニハ候ヘトモ繰合セ精々出席可被致候最モ及老輩候共罷出可申且表方ノ向當番之外差繰リ無怠聽聞可致候猶ホ着到ニテ追々御取調之事

〔附言〕講釋ノ義ハ從來毎月二七ノ日ヲ以テ表書院ニ於テ儒者經ヲ講スルヲ例トス藩主之ヲ聽クトキハ重役以下目附ケマテ皆列席ス藩士モ陪席ヲ許ス(安永ノ頃藩主加藤明堯重臣ト相議シ儒官中村彦六芥川新平藏ニ命セシ由其以前不詳)藩主欠席ノトキハ目附ケヨリ之ヲ儒官ニ達ス之ヲ表講釋トス藩主別ニ居間ニ於テ聽講スルハ此例ニ非ス爾後繼續シテ當時ニ至リ儒官中村栗園中村鼎五ヲシテ經書兵書定日二十講セシム(表講釋一個年欠席ナキモノハ賞金ヲ下與スル例アリ創始年度不詳)

文久二年壬戌閏八月二十四日舊幕府政事向テ變革シ諸侯參勤交替ノ制ヲ改メ同年九月二十九日藩主加藤明軌歸邑ノ暇ヲ得テ十月二十日歸着シ十一月朔日重臣ヲシテ左ノ旨ヲ達セシム

一近來世上一般ノ儀ニ候得共當御家中ノ形勢一變致シ分限不相應衣食住ノ驕奢ニ長シ士風及衰弱候趣キ深ク御痛心被遊候今般御變革被仰出候間上下舉テ心力ヲ盡シ非常ノ節屹度御用途相成候様厚ク心掛ケ候様トノ御趣意ニ候間平常質素節儉相守リ忠勤可被相勵事

一文藝ノ義ハ人道之基本ニ候間無懈怠出精可被致候猶追々御取調可有之事

安政元年六月震災ニ依テ破壊セシ藩内各所ニ散在ノ諸藝稽古場弓槍劍薙刀ヲ合シ藩主ノ別殿荒廢セシヲ修理シ同二年六月新ニ文武教場トナシ名ケテ翼輪堂ト云フ(該別殿ハ元城内ニアリシヲ移シ接客ノ館ト爲セシ處嘉永初年ノ頃ヨリ一部分ヲ區域シ兵學馬術本馬等ヲ講習スル所トス)蓋シ該校建設ノ義ハ嚮ニ儒官中村栗園首トシテ之ヲ建言シ藩主加藤明軌之ヲ容レ重臣諸役ト相議スルニ異論ヲ發スルモノナク皆贊成終ニ建設ト可決ス然レトモ前年非常ノ震災ニ依テ幾多ノ藩債ヲ増加シ體裁意ノ如クナラス藩主堂號ヲ扁額ニ書シテ之ヲ講堂ノ楣上ニ掲ク一日藩主臨館シテ諸藝師範及ヒ藩士ヲ召集シ文武ノ道一層勉勵スヘキノ旨趣ヲ親シク諭示ス爾後安政六年二月儒官中村栗園練心膽ノ文ヲ額書シテ其側ニ掲ク其文ニ云フ

練心膽

士不可以不練心膽練心則智慮出焉練膽則勇決生焉可以充廟堂之用可以應軍國之務心膽豈可不練哉然此二者深藏於身腹中非如丹砂絲布之以人手練也然則練之如何曰練丹砂以鼎火練絲布以水灰而練心膽以文武之道文學熟而武藝精是乃心膽之所練也何以言之有二人於此同學文武之道其一人則篤志刻意磨以歲月智識朗發而弓馬劍槍亦皆究其壺奧筋骨硬堅能堪寒暑投之於機務繁劇之地而不迷寢之於干戈倥偬之間而不懼此豈非學精熟心膽練焉者乎其一人則雖學之而心常在於鴻鵠矣智識闇昧骨力柔輿使之治事錯亂無條使之當敵顧望不前此豈非學與藝未精熟故心膽不練焉者乎均是人也而其智愚勇怯相判如此者無他在其練心膽與否而已甚矣心膽之不可不練而文武之道不可不精熟也吾嘗見獵師與蜚丁殪鳥獸捕鱗介一則走乎千尺之山一則投乎萬尋之淵皆視巖巖洪波如坦途平地而毫不畏避者何也以平素習練其術有所自恃故爾賤業猶然況於文武之道乎戚俞二將開口則必言練良有以也或曰士人讀書擊劍如緩急必可用而臨事沮喪魂飛魄散偷生苟活不以爲耻者有之矣匹夫目不知丁字手未嘗握劍而能知大義赴國家之難復君父之仇感天地泣鬼神者有之矣由此觀之人之智愚勇怯一定於賦性之始而非學與藝之所能移則所謂練者果何說也余曰匹夫初未知文武之道而能曉義赴難視死如歸者未必無其人然千百中乃一人而已矣至如士人讀書擊劍臨事而沮喪者此則學文武之道而未精熟也是謂之徒習徒習豈可練心膽生智勇以負荷國家之大任乎今子不問其精熟與否以文武之道爲無益而概去之可謂自暴矣孟子不言乎五穀者種之美者苟爲不熟則不若稊稗余於文武之道亦云子以爲何如或唯々而退

古人以文武不可偏廢也譬之鳥双翼與車兩輪其意深焉故取以名堂而其要在練心膽讀者思之

中村和撰

長沼流ノ練膽篇ノ意ヲ演シテ文武ノ本意ヲ說諭スルノ爲ニ作ルトコロコシテ暫ク學校ノ記ニ代ユ

創始
不詳
又加祿セシムルハ安政年間藩主ノ特ニ定ムル所ナリ則チ加祿ヲ受ケシ者

知行高十石宛

井崎七右衛門、金子勝、芥川新六

毎年歲末文武教師執立ヨリ年中出精ノモノヲ取調褒賞ヲ申立レハ酒饌料或ハ紋服等其者勉勵相應ニ賞與アリ右ハ藩主
家例ニテ新規ニ之レヲ始メシニ非ラス

士族卒ノ子弟教育方法

翼輪堂設立以來士卒トモ專テ入學ヲ獎勵スト雖凡家塾ニ就テ修學スルモノヲ檢束スルコトナシ

又明治元年戊辰三月十四日達(前ニ詳ナリ)以後藩費ヲ以テ遊學ヲ命シタルモノ東京南校ニ一名同育英義塾ニ一名尤モ
此以前ト雖凡他國遊學ヲ許可セサルニ非ラス然レトモ別段遊學并ニ自費ニテ修行ニ出シモノナシ修業ノモノハ皆藩儒
中村栗園ニ從學シ醫師外敢テ他國ニ出ルモノナシ但近畿諸藩ヘ劍術試合ヒノ爲メ一時出ツルモノ又ハ江戶勤番ヲ願ヒ文

道劍術槍術等修業スルモノハ毎々有之又特ニ人撰入學等申付ル節ハ若干ノ金員ヲ下付スヘキ旨ヲ内達セシコトアリ且
時トシテ藩士及ヒ生徒ヲ書院ニ召集藩主重臣列席講義素讀ヲ聽聞シ優等ノモノニハ他ノ書籍幾章ヲ特ニ講義セシム又

幼稚生徒ノ習字清書ヲ月々出サシメ優劣ヲ點檢シ年末ニ至リ賞品ヲ授與スルコト差アリ

藩主生徒ノ業ヲ試驗セシモ弘化ノ頃ヨリ始マリ毎歲二次大抵講義ヲ上中下三等ニ分チテ之ヲ講セシム又兒童ノ清書

ヲ出サシムル從前ヨリ例アリ創始不詳其賞與ハ半紙ヲ二等ニ分チ之レヲ與フヲ例トス

平民ノ子弟教育方法

家塾寺子屋等ニテ讀書習字算術等ヲ修學セシメ志願ノ者ハ藩士ニ非ラスト雖凡藩士中親族ノ家宅

ニ寄宿シ或ハ中村家塾ニ滯留ノモノト雖トモ藩士ト均シク翼輪堂ニ出ツルコトヲ許ス但書院ノ講席ニ列スルコトヲ許

サス聲劍修業モ亦全シ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルニ許可ヲ要セス何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得セシム

學校

校名 初メ翼輪堂ト稱ス後ニ尙志館ト改ム文學局ハ學事ニ係ル義ヲ執行スルノ部分ニシテ則館中ノ事務所ヲ云フ

校舎所在地 近江國甲賀郡水口舊藩邸内

沿革要項

藩ノ教授ハ從來儒臣ノ家ニ於テ授クルマテニテ則チ私塾ト均シキモノナリ

藩ノ文學ハ藩主

始祖三代ヨリ加藤内藏介明友學ヲ好ミ林鷲峯ニ從學シ朱舜水陳元寶石川丈山等ト交リヲ結ヒシヨリ始リ而

シテ中世能登守明堯ノ時紀德民ヲ招キ講ヲ聽クト雖凡是亦一藩ニ關係セシニ非ラス故ニ略ス

一十三歳ヨリ講武所ニ入り擊劔ヲ學フヘキ事但天性羸弱ニシテ其事ニ堪ヘサル者其旨可斷出事
 一三ノ日輪講 八ノ日會讀(各有志者別段ニ講讀シ候ハ、此例ニ非ラス) 四九ノ日童生溫讀 十日二十五日詩文會

試 体操修業

休暇

天長節九月十二日 生産社祭日四月上卯 稻荷社祭日二月初午 五節句 一六ノ日 七月六日ヨリ八月朔日マテ 十二月廿日ヨリ正月十六日マテ放學

生徒罰則

- 一盜竊諸犯國法ニ關係スルモノハ刑官指揮ニ隨フヘキ事
- 一放蕩無賴ニシテ教ニ師ハサルモノハ或ヒハ罰役或ヒハ逗塾可申付事
- 一童生怠惰ニシテ途中遊戯時刻遲滞ノ者ハ禁足可申付事
- 一兇頑ニシテ自己ノ業ヲ怠タルノミニアラス他ノ業ヲ妨碍スルモノハ罰役可申付事
- 一書籍器械等汚壞破損致スモノ檢査ノ上相當ノ罰役可申付事
- 一生徒五日外ニ及ヒ各場ヘ不勤ノ者檢査斜問可致事
- 罰役ハ堂内ノ掃除等ヲセシムルナリ

童 生 科			
素 習	算 擊	體	讀 字
初 級			
中 級			
上 級			
壯 生 科			
經 地	書 算	擊 體	史 理
初 級			
中 級			
上 級			
上 級			

明治四年十一月講武局ヲ合シテ總テ尙志館ト云フ

本藩ノ文武創設ニ就テハ藩主明軌ノ銳意ヨリ興起スト雖其前後ノ尽力及ヒ諸制度ニ至リテハ儒臣中村栗園ノ刻苦精神ヨリ起ルモノ殊ニ多ク且養嗣子鼎五又父ノ志ヲ繼キ共ニ愈藩主ヲ補佐シ怠ラス爲ニ此功績モ亦少カラス將

タ栗園ハ長沼流ノ兵學ニ達シ所謂文武兼備ノ師範ナリ

教則以下諸規則ハ翼輪堂建設ノ時更ニ定シ者也但休暇日數ハ維新前後増減セシ事アリ

教科用書 四書、五經、小學、近思錄、孝經、古文前後集、國史略、十八史略、蒙求、世說新語補、日本外史、日本政記、貞觀政要、史記、前後漢書、歷史綱鑑補、春秋左氏傳、國語、文選、大學衍義全補、資治通鑑、大日本史

右等ノ書籍ヲ以テ適宜教授ス每朝卯半刻ヨリ已巳半刻ニ至素讀（四書五經小學孝經等）ヲ授ク漸昇等ノ者ハ輪講會讀或ハ疑義ヲ質問スル等定日アリ規則節目ニ記載ス（教科書必ス一定セス大略ヲ舉ク而已）

學科學規試驗法及ヒ諸則

和學漢學算法筆道及ヒ兵學弓槍劍薙刀砲術柔術等

生徒ニハ文武兩道ヲ兼修セシム年齡七八歲ニ至レハ入學ス退學ノ期限ナシ試驗法等規則節目ノ通り拔群勉勵ノモノハ賞品ヲ授興ス入學ハ前日生徒ノ父兄ヨリ申出當日禮服ヲ着シテ出校ス

文武トモ其教師執立ヨリ時々試驗スルコトアリ比較ハナシ

學校規則節目

夫學校ハ 皇道ヲ明ニシ倫常ヲ正フシ文德ヲ修メ武威ヲ張リ人材ヲ鑄鑄スルノ地ナレハ生徒タルモノ身ヲ謹ミ行ヲ勵ミ上ハ 朝廷萬姓子育ノ御恩澤ヲ報効シ下ハ各其職業ヲ治メ養生喪死無遺憾ノ地ニ至ルヘキコト肝要也

一生徒ヲ部分シテ二ト爲ス一ハ童生科ト稱シ一ハ壯生科ト稱ス子弟ノ徒七八歲ヨリ童生科ニ入り成立ノ上更ニ壯生科ニ轉ス但年齡ニ不拘其技藝ノ熟不熟ヲ以テ級ヲ爲ス童生科壯生科トモ亦級ヲ設ク

一毎月一次會試々業ノ節ハ讀書擊劍書算等兼能スル者ハ甲科ノ高第トス衆業ヲ能クシ一業ヲ能セサレハ乙科トス其他順序ヲ逐ヒ丙丁戊己ノ科ヲ設ケ各賞典ヲ加フ可シ

一壯生科三級課程成業ノ上ハ皇國學漢學洋學書算醫等各其人ノ好ミニ隨ヒ専門ノ學ニ從事スヘキ事但其節志願ノ趣申出ヘシ

一每月下旬ニ會試ノ事

リ先輩ヲ凌キ後進ヲ侮トリ候義無之様禮義廉耻ヲ宗トシ士道ヲ不失立身行道顯父母ノ心懸ケ專一ノ事ニ候

講武場揭示

夫武ノ德タルヤ能ク武威ヲ以テ姦惡ヲ懲シ暴亂ヲ止ルニアリ故ニ生徒タル者禮讓ヲ宗トシ敎官ニ膺ル人ヲ父兄ト仰
キ相互ニ痛處等妄擊スヘカラス他人打候處ハ輕シト雖トモ重ク受ケ我劔ハ重シト雖トモ輕シト卑下シ心中ニハ勇猛
ニシテ人ヲ吞ムノ氣ヲ保ツヘシ必竟心膽ヲ鍛練シ筋骨ヲ堅クスル義ニ候待ハ文道ヲ兼學シ名分大義ヲ辨知シ風雨ニ
堪ヘ寒暑ヲ忍フ事ヲ第一トス苟モ鹿暴ノ舉動有之節ハ武道ノ意ニ非ラス先哲ノ訓誠能々可慎守事

一竹刀革甲ハ六具戎器同様ナレハ平生大切ニ取扱ヒ假ニモ踏越等不可致休息ノ節モ他人試合ノ刺撃進退ニ心ヲ付ケ
人ノ長ヲ取リ身ノ短ヲ補ヒ他日身ニ施シ用ユヘキ様ノ心懸ケ第一也

一他藩修業人罷越候節ハ別シテ尊讓ヲ主トシ各其順序ヲ以テ敎授助敎ノ差圖次第速カニ上ルヘシ自己ノ好惡ニ任セ
私ニ遲速疾徐等不可致事

職名及俸祿 學校係リ用人勘定頭目附等ヨリ各二名又ハ三名ツ、兼務シ定員ナシ又役料ヲ給セス年末慰勞トシテ金若干

ヲ下付ス其人員ノ最モ多キハ元治元年ノ頃ロニシテ最モ少ナキハ安政年間ナリ

文道敎授一名^{給人格}全助^{中小性以下}數名^{六人又定員ナシ}其最多數文久三年五月頃諸藝師範八名^{用人以下徒}何レモ役俸無之每年末
金若干^{以上}下與ス^{給人格}（維新前）以上ノ職員藩ノ制度ニ係リ其祿高等ハ頗ル繁雜ナルヲ以テ此ニ畧シテ雜記ニ掲ク

明治二年二月二十五日達

朝廷ヨリ兼テ被仰出ノ御趣意モ有之候ニ付藩制改革舊來ノ職制ヲ廢シ更ニ政務民治會計文學軍事刑法內事ノ七局ヲ
設ケ政務局ニ執政參政ヲ置キ其餘ノ六局ニ總官幹事ヲ置キ分課ニ理事執事等ヲ置テ事務ヲ掌ラシム軍事局ノ如キハ
別ニ總帥副總帥ノ二員ヲ置キ兵事ヲ謀リ軍器ヲ閱シ及ヒ歩隊撤兵敎練等ノ事ヲ管括セシム且藩士舊來ノ格式ヲ廢シ
更ニ是ヲ九等ニ定メ等級ニ從テ祿制ヲ相定ム

一軍事學校ノ義ハ退テ朝廷ヨリ一定ノ御規則可被仰出候得共當分ノ内等級准擬左ノ通り相定メ候事

軍事局 兵制ヲ整ヘ武備ヲ實ニシ陣營輜重等ノ事務ヲ總判ス尤モ武ノ止戈タル所以ヲ知リ文道ニ注意スルヲ要ス

文學局 文德ヲ修メ武技ヲ磨シ人才ヲ鑄造シ皇道ヲ補翼スル事ヲ講究ス

文學局幹事^{三等官從前}一名、役俸一ケ年米三石六斗〇文學局理事^{四等官從前監}二名、役俸一ケ年米二石七斗宛〇講武

但童生科ハ八歳ヨリ十四歳マテノ科程壯生科ハ十五歳ヨリノ科程トス然レトモ稟性ノ強弱習業ノ進否等ニヨリ伸縮スルコトアリ

講堂揭示

一上此堂文武之道修業ノ輩ハ心膽ヲ練ルヲ第一トス假令萬卷之書籍ヲ讀ミ破リ刀槍ノ奧義ヲ極ムルトモ心膽不練時ハ皆徒習ニシテ緩急ノ用ニ立ヘカラス平生能々心懸ケ修業可致專一事

一血誠ヲ以テ君父ニ事リ忠孝節義須臾モ不可忘事

一先生長者可尊敬事

一可正禮義事

一討論ノ外猥リニ巷談俚說等不可致事

一書籍並武器等不可僉畧是修心練膽第一務也

一朋友切磋進益第一之事

一門戸啓閉不可等閑事

一兒童ノ輩於途中遊戲刻限不可遲滯事

一帶溫復習不可怠事

一欠伸可爲不敬事

一右之條々堅可相守者也

教授所揭示

教授助教授讀ノ撰ニ膺ル者ハ諄々訓導シテ不倦ヲ要トス總テ局長ハ生徒ノ矜式スル所ナレハ一言一動モ妄ニスヘカラス溫厚恭肅ヲ宗トシ生徒ヲシテ師ヲ愛シ長ヲ親シミ業ヲ受クルヲ樂ミ候様可致漫ニ威權ヲ張り叱責不可加事

一教授助教授讀ヲ始メ各其等級順序紊ルヘカラス相互ニ切磋琢磨少シモ偏執ノ念無之様可致事

一授業中ハ勿論平素モ戲言妄談等不可致書籍雜亂不相成様取扱ヒ可申事

授業所揭示

凡ソ人タル者五常ノ道ヲ明ラカニシ名分大義ヲ辨知シ修身齊家ヨリ治國平天下ノ大器ニモ膺ルヘキ者ナレハ能々体認シ造次ニモ顛沛ニモ不可遺忘教授助教授讀ノ人々ハ父兄ト仰キ毫末モ其指揮ニ違背スヘカラス各其等級順序相守

獎勵法ニ關シ別ニ方法アルコトナシ

士族卒ノ子弟教育 士族ノ長男ハ八歳ニシテ必ス入學セシム二三男等ニ至リテハ自己ノ意向ニ任セ私塾ニ入ルモ妨ケナ

シ但卒ノ子弟ハ入學ヲ禁スルコアラサレトモ之ヲ制外ニ置テ問ハス

此條モ亦前項ノ如ク創立ノ規則ニシテ今其書類ノ存スルモノナシ

藩費ヲ要セス自費ニシテ他ニ遊學スルハ固ヨリ禁スル所ニアラス

平民ノ子弟教育方法 藩學校ニ入學スルハ別ニ禁止セスト雖モ入學セシモノナク家塾寺子屋等ニテ修學スルモノハミ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等ヲ開設スルハ別ニ市令郡宰等ノ許可ヲ經ス私ニ開設スルヲ得セシム

學校

校名 修身堂 設立以來名稱ヲ變更セシコトナシ

營舍所在地 近江國高島郡大溝町外郷内此地明治六年勝野村ト改稱ス

沿革要略 大溝藩主分部左京亮光信ハ元和五年八月二十七日伊勢國安藝郡上野城ヨリ封ヲ此地ニ移シ而シテ光信七世ノ

孫分部若狹守光庸幼ヨリ學ヲ好ミ毎ニ磯野義隆ヲシテ侍講セシム後チ父ノ遺封ヲ繼ギ爾來學館創立ノ念切ナリト雖モ

累代ノ負債巨多ニシテ國用不給終ニ志ヲ果サスシテ天明五年三月十日致仕ス光庸ハ陽明學ヲ尊信スト雖モ藩士ハ專ラ

伊藤仁齋ノ學派ニ因ラシム是ヨリ世々古學ヲ尊信スルニ至レリ

分部光實ハ從五位下若狹守光庸ノ男天明五年三月十日封ヲ襲キ從五位下ニ叙シ左京亮ニ任ス光庸ノ志ヲ繼ギ學館創立

ノコトヲ決シ藩吏ヲシテ經費支辨ノ方法ヲ討議セシム其說區々山澤ヲ開キ五穀ヲ栽培シテ實ニ充ント云ヒ或ハ年ヲ期

シ厚稅ヲ賦課セント說キ紛々定マラス時ニ亦財主等藩ニ迫リ用金辨償ヲ乞フ切ナリ其甚タ敷ニ至テハ京町奉行ニ訴フ

ルモノアルニ至レリ是ニ於テ光實身自ラ俸ヲ薄フシ厚稅ヲ賦課セス又深ク聚斂ノ臣ヲ惡ミ盡微問答ヲ著シ之ヲ衆ニ示

サント欲シテ藩吏ヲ殿中ニ召ス時ニ藩吏等減祿ヲ恐レテ竊ニ衆ト議シ言ヲ作り辭セント決シ至レハ則チ光實盡微問答

ヲ出シ反覆其主意ノ存スル所ヲ說ク衆皆顔色ヲ和ラケ謹テ命ニ服シ終ニ闔藩其主義ヲ奉シ田祿給扶持ノ幾分ヲ減額還

納ス財主等モ亦其懇諭ニ感泣シ猥リニ切迫セシヲ悔ヒ咸ク其命ヲ奉セリ同年六月朔日學館ヲ設立ス名ケテ修身堂ト號

ス盡微問答ハ大要稅斂ヲ薄クシ儉素ヲ勤メ富國利民ヲ說ク而シテ榮蔬ヲ咬ムコト玆ニ五年國用稍給シ三年ノ蓄藏アル

ニ至レリ藩士田祿舊ニ復ス光實幼ヨリ文武ヲ好ミ中村德勝ヲ師トシテ文ヲ學フ家ヲ繼クノ後藩士ヲ獎勵シ手島堵菴ヲ

所理事前ニ

一名、役俸一ケ年米二石七斗〇十三等准擬文學教授 一名、官祿二十二石〇十五等准擬文學助教 一名、官祿十六石〇十四等准擬劍術教授 一名、官祿十八石〇十六等准擬助教 一名、官祿十四石〇等外學校授讀 五名、官祿三石宛〇等外書數學教授 二名、官祿三石宛(學制頒布前)

職員概數 維新前ノ概數平均十五名 學制頒布前總數十五名

外小使二名藩ノ營繕局附屬一季抱ノ人夫中(中間ト稱スル者)ヨリ半年或ハ數月ニ交替シテ使役等ニ供スルモノトス生徒概數 通學生徒 維新前百五十名、學制頒布前三百二十名、但自費 寄留生徒無之

東脩謝儀 維新前唯些少ノ金品(品不定)等ヲ以テス皆生徒父兄ノ意ニ任セテ敢テ一定ヲ要スルナシ維新後更ニ無之

學校經費 維新前定限ナシ校舍ノ營繕書籍器具等ノ購求其外諸經費皆藩費ニシテ支消ス因テ確然セサレトモ凡ソ最多額

一ケ年五十五兩最寡額一ケ年三十二兩増減年度不詳 學制頒布前マテ一週歲文事ニ七十兩算手跡ニ三十兩トス

藩主臨校 在邑ノ際時々臨校シテ講義素讀ヲ聽聞シ又ハ武術試業ヲ臨視シ特ニ指名シテ試合ヒセシメ畢テ賞品ヲ下與ス

ルコトアリ又年序正月四日講武場ニ於テ擊劔始メ一同禮服ヲ着シ木刀ヲ以テ試合ヒノ式アリ該日藩主臨場シテ其式ヲ執行

ス弘化三年頃ヨリノ例ナリ其他臨校一定ノ期日無之

祭儀 每年十一月冬至ノ日釋奠ノ略式ヲ行フ學校掛リ官員教授助教等前日講堂ヲ掃除シ祭儀ノ準備ヲ爲ス一同齋戒服襪改當日辰

ノ刻一同禮服着用出校講堂ノ床上ニ新薦ヲ敷キ聖像及ヒ顔子関子ノ像ヲ祭り左ノ酒饌ヲ獻備ス

酒土器添

洗米 鮮鯛 餅 菓子

藩主始メ掛官員及ヒ藩士生徒禮服脱劔順次拜禮畢テ酒饌等夫々配分ノ事

學校構造及建物圖面 地坪四百六十八坪 建坪百二十三坪七分五厘

藏書ノ種類部數ハ別ニ掲ク

舊大溝藩

學制

學事上ノ諸制度 凡ツ士族タルモノ、子弟年八歲ニ至レハ必ス入學セシム而シテ終身學籍ヲ免ル、ヲ得ス文武ノ兩道ハ士族終身當務ノ所業タルヲ以テナリ是ハ天明五年藩主分部左京亮光實創立ノ際定ムル所ノ規則ニシテ當時ノ書類存スルモノナシ

フ宜シク先生ノ年譜ヲ編セヨト安政五年春正月譜成ル名ケテ藤樹先生年譜ト云フ其三月剛光貞ノ東下ト共ニ東歸ス教則

讀書科用書 四書五經左氏傳史記前後漢書小學近思錄貞觀政要大學衍義通鑑綱目等後十八史畧元明史畧國史略日本政

記外史ヲ増加ス其他人々ノ意向ニ任ス

十三歲未滿ノ生徒始業前手島堵菴ノ著述前訓ヲ誦讀セシム

算術科 筆道科 規定ノ學科ナシ各師範家ノ意見ニ任ス

習禮科 小笠原流五十條或ハ配膳式等

授業時間 每朝五ツ時ヨリ始業晝後八ツ時閉場(但晝後八ツ時ヨリ十三歲以上ノ生徒ハ武藝場へ出席セシムルヲ以テナリ)

授業ノ方法順序 每朝始業前十三歲以下ノ生徒ハ前訓ヲ誦讀シ畢テ諸生各自書ヲ讀ミ或ハ字ヲ習ヒ又算ヲ學フコト時間ノ定則ナク前後ノ制ナシ正午時ヲ以テ限リトス何歲ニテハ何ノ書何ノ算ト云フコトナシ然レトモ先四書ヲ讀ミ次五經左傳史記等大抵ノ順序トス是ヨリ後ハ其志向ニ任セ晝後ハ唐詩選及聯珠詩格等ヲ諷誦セシム習禮ハ毎月四ト九トノ晝後ヨリ之ヲ習ハシム

學科學規 漢學數術習字習禮等ニシテ國書兵書ハ十六年以上ノ生徒ニ限リ各自ノ隨意トス(武藝ハ別ニ講習所アリ本館ニ關セス因テ其詳細ハ雜記中ニ記入アリ又文學ト武術ト程度ノ比例ナシ)且入學年齡ハ八歲ヲ以テ定期トス上ハ藩主ノ兒孫ヨリ下諸士ノ子弟ニ及フ毎月抄ニ諸生ノ出欠表ヲ製シ教授長官(右奉行ノ稱ナリ)之ヲ藩主ニ達ス試驗法 試驗ハ藩主在城ノ節ハ臨館シテ臨時ニ之ヲ行フコトアリ定期又一定セル試驗ノ方法ナシ

賞與 年齡十七歲以下ノ生徒へ毎年一月九日ニ前年中出席日數ノ多寡ヲ檢シ差等ヲ付シテ半紙數十帖ヲ附與ス職名及俸祿

維新前 右奉行一名(但何年ノ頃ヨリ歟右奉行ヲ督學トモ稱シ維新後ハ右奉行ヲ欠キ督學代ヲ置ク)○學頭凡四五名但定員ナシ生徒ノ多寡ニ從フ○習字師二名○算學師二名○習禮師一名

右奉行以下諸師範ノ者ハ馬廻乃チ知行五十石以上ノモノヲ撰ミテ充之

學制頒布前 督學代一名 役苞六石○學校教授二名 全六石○全助教二名 全四石八斗○筆道教授二名 全三石二斗○筆術教授三名 全二石○劍術教授一名 全四石○全助教二名 全二石四斗

聘シ共ニ學館ニ出テ聽講ス初メ堵菴ヲ聘シテ儒員ト爲ント欲シ使者ヲ遣ル(其聘ニ應シ仕ヘテ儒員トナリシ哉否詳カナラス今口碑ニ傳フル處ニ據レハ時々京師ヨリ來リ生徒ニ教授スト云フ)手翰ニ云ク

甚寒之節ニ候ヘトモ彌御平安可被成起居珍重之至ニ存候小生義無恙候間乍慮外御安情可被下候然ハ近頃申兼候ヘトモ先生愚家へ出仕被致候ハ、大慶至極存候兼テ御存知之通り領下困究何卒少シナリトモユルミノ付候様致遣シ度日夜心ヲ勞シ候ヘトモ元來才拙知淺候故斯成行申候役人共出精預苦勞候得共是亦徒ニ成候事而已ニテ扱々歎歎存候先生モ御病身ニ御坐候事ハ兼テ承知致罷在候事候ヘトモ出仕ノ義申入候ハ御苦勞千萬此所ハ何共申兼候義ナレ共諸人助ノ爲メト被存御出仕偏希候禽ハ木ヲエランテスミ臣ハ主ヲエランテ仕トヤラ申候得者先生ノ德ヲ以テ不肖ノ小生ニ被仕候事ハサソ不快ニ可被存ト耻恐入候然レトモ古之柳下惠ニ御效何卒御出仕希候事御坐候因之別所全亭長野與所兵衛進申候別袖已後モ不絶心懸學候得共兎角一日温之十日寒之ノ憂難免陽氣復シ不申候心持ニテ悔申候何卒此憂ヲ免ル、様且領下之者之助ニ成候事共御憐察被下吳々御出仕ノ程希候猶ホ委細之義ハ全亭與所兵衛ヨリ可申述候間左様御心得可被下候不備頓首

十二月十五日

分部左京亮 光實花印

手島嘉左衛門殿

其二隨時御自玉可被成專要候吳々モ前段之趣御開濟希候心裏不尽文段不備御推察ノ程願候再白

光實藩用闕乏必至困難ノ時ニ當リ首トシテ學館ヲ開キ儒員ヲ聘シ臣庶ヲシテ學ニ就カシム文化五年四月十四日病ニ罹リ死ス年五十四 分部若狹守光邦ハ從五位下左京亮光實ノ男ナリ文化五年六月十五日遺領ヲ承キ從五位下ニ叙シ若狹守ニ任ス同七年九月二十二日病ニ罹リ死ス年二十五 分部左京亮光寧ハ從五位下若狹守光邦ノ男ナリ文政七年十二月十六日從五位下ニ叙シ左京亮ニ任ス學館舊ニ因テ繼續シ天保二年三月七日老ヒテ致仕ス 分部若狹守光貞ハ檜嶺ト號ス上州安中ノ領主板倉伊豫守ノ二男ナリ光寧嗣ナシ因テ養テ嗣子トナス天保二年三月七日領ヲ承キ從五位下ニ叙シ左京亮ニ任ス元治元年五月入朝從五位上ニ叙ス明治二年六月二十日大溝藩知事ニ任ス全三年四月二十六日病ニ罹リ死ス光貞幼ヨリ文武ヲ好ミ殊ニ馬術ニ達シ文ヲ善クス安政四年四月川田剛來リ寓ス于光時貞遇スルニ賓師ノ禮ヲ以テシ顧問ニ供シ又囑スルニ藩士教道ノコトヲ以テス奴僕ノ費ヲ辨シ口俸ヲ以テ謝儀トス亦之ニ屬シテ曰ク藤樹先生歿シテヨリ既ニ二百有餘年近江聖人ノ名人口ニ膾炙ス其遺宅我封内ニ在リ之ヲ藤樹書院ト號ス而シテ春秋祭祀今ニ至リ不衰然リ而シテ他邦人來リテ其事跡ヲ叩クモノアルモ茫乎トシテ之ニ答フル能ハス間或ハ之ニ答フルモ亦往々其實ヲ失フ請

修身堂規則

官員

督學一名教授一名助教二名句讀師二名

課業

講義 每月六次用二七之日教授掌之

輪講 每月六次用四九之日以教授爲會長

復講 每月三次用旬尾之日以助教爲會長與會者自歲十三迄十五以爲限其有志自請而與焉者不在此限

誦讀 凡入學子弟每日午前讀四書五經小學近思錄左國史漢諸書午後誦三體詩聯珠詩格等集

文會 每月一次

詩會 每月一次

考試

每歲孟春開講之日該官司考子弟功課之殿最以賜物有差但復講者臨時試之不豫定日期

本藩有學館之設七十年於此矣而百度草創未暇一定今者剛應聘來掌學職因奉命建立規制如右若夫訓導陶冶之方則前賢

遺誠備矣悉矣剛不復贅

安政五年歲次戊午春正月下浣

川田剛謹誌

武藝場ハ修身堂敷地外ニ設置ス練兵堂ト號シ學館創立以前ニシテ其年月不詳又維新前師範ノ者ナシ藩士江戸勤番中ニ他藩ノ教授者ニ就キ指南ヲ受ケ歸國シテ之ヲ傳授スルノミ本館形狀ハ別ニ圖面ヲ付ス

舊西大路藩

學制

學事上ノ諸制度 西大路藩ハ葦爾タル小藩ニシテ疆域褊小隨テ藩内教育ノ方法ニ完全ナラス安永四五年ノ頃ヨリ切ニ文武ヲ獎勵スト雖モ未タ學校ノ設ナシ藩士中技藝ニ熟達ノモノヲ擢テ指南ヲ命シ徒弟ヲ教養セシム而シテ寛政八年六月初メテ學館ヲ創立シ諸制度ヲ設クト雖モ是亦當時ノ布令諭達等悉ク廢紙トナリ僅ニ舊家ノ私記ヲ探リ古老ノ口碑ニ質シ其顛末ヲ考査スト雖モ前後接續セスシテ判明ナラス又掲クル所モ原書ノ存スルニアラサレハ遺漏誤寫モ改ムルニ便

維新ノ際格式ヲ改メ中小姓及其以下ト雖トモ登庸ス新舊高祿ノ比較左ノ如シ

一馬廻即チ知行五十石以上 總テ官祿十四石トス

一中小姓現米八石二人口俸或ハ三人口俸モアリ 總テ官祿十二石

一徒士現米六石三人口俸或ハ二人口俸モアリ 總テ官祿拾石八斗

職員概數 前項ニ記載スルノ外事務員又門衛使丁等ヲ設ケス平生ハ十三歳以上十六歳以下ノ生徒一名ヲ番頭トシ十三歳以下ノ生徒二名ヲ附屬シ都合三名ヲ以テ日々交番シ門扉ノ開鎖校内ノ掃除及教官諸員ノ給仕等ヲナサシム事アレハ藩ノ使丁ヲ使用スルモノナリ

生徒概數 少年生徒ハ凡五六十名内外ニシテ十七年以上ノ學生ハ前ニ記スル如ク士族ハ悉ク學籍中ノ者ナレトモ各任務アレハ常ニ多クハ出校セス維新前後共大抵平時二十名ニ過サルヘシ通學生ノミニシテ寄留生ナシ

束脩謝儀 諸教師ハ皆藩ヨリ命スルモノナレハ生徒ヨリ束脩謝儀ヲ行フコトナシ

學校經費 經費ハ總テ藩ヨリ之ヲ支辨ス現費ニシテ定額アルコトナシ藩ノ度支課コレヲ辨ス經費ト云フハ諸教師用フル所ノ筆紙墨及ヒ薪炭修繕費賞典ノ半紙等ナリ此經費ノ概額今知リカタシ皆當時ノ現費ナレハ年々不同アルコト勿論ナリ

藩主臨校 藩主ノ臨校ハモトヨリ政務ノ餘暇隨意ニ臨スルモノニシテ定期アルコト無シ

祭儀 毎年一月九日文宣王及從祀諸賢ノ影像ヲ書院ノ壁上ニ掲ケ釋奠ノ畧儀ヲ執行ス當日藩主モ亦來リ拜ス次ニ教師生徒之ヲ拜シ畢テ論語學而ノ一篇ヲ誦スコレヲ讀初ト稱ス又講義初チナスコトモアリ右奉行之ヲ勤ム

少年ノ生徒ニ半紙ヲ頒與スルモ是日ニアリ

學校構造及建物圖面 敷地三百七十三步 建坪六十三步 圖面別紙ニ存ス

本堂ニ於テ出版翻刻セシ書籍ナシ

藏書ハ明治八年文部省ヘ進達スルモノ、外同省ノ裁可チ經テ總テ賣却ス依テ不詳

雜記 維新前職名中右奉行ト稱セシハ武藝奉行ヲ左奉行ト稱セシニ對セシナリ右文左武ノ義ニ本ツケリト云フ

江戸邸内ニ於テ設置ノ學校ナシ

安政四年光貞ノ命ニヨリ川田剛修身堂規則ヲ制定ス然レトモ未タ全ク之ヲ行ハス因テ教則ノ項ニ省キテ此ニ載ス其文左ノ如シ

杉越前守殿實名治憲ト松平越中守殿實名定信先達林道春林家ノ祖新井筑後守實名君美室新助實名直清龍澤治郎八備前ノ臣山崎嘉右衛門號閑齋伊藤原佐號仁齋同原藏號東涯アラマシ右等ノ人々コソ唐山ノ眞儒ニモ耻ツヘカラス何事ヲモ兼申サル、人品ニ

テ皆文武ニ達シ候人ニテ候士タル者其身ノ職分ニ心付不申儀ハ有間敷事ニ候幼少若年ヨリ篤ク職分文武ノ道ヲ吞込セ候ハ勿論タトヘ年老ヒ候身ニテモ心付候日ヨリ忽チ興起致シ職分ヲ相勵ミ候事專一ノ事ニ候

第二則 (以下四則迄ハ年月詳ナラス)

此間モ申候通り文武之道第一心懸可申事ニ候東照宮ノ上意ニモ有之如ク木モ實生ヨリ別ニ直ナル木ヲ結付ケ手ヲ入レ生育スレハ直成木ニナリ遂ニ良材ノ用ニ立捨置トキハ蟠リタル不宜材トナリ候ヘハ幼少ヨリ教訓ノ方至テ便利ニテ父母タル者專ラ心得可有之儀ニ候然ハ學文モ幼少ノ内ノ事ニテ年長ケテハ出來カタク成ト申ニテハ無之候古人モ幼少ヨリ學ヒ候ハ日ノ出ノ如クトタトヘ燈火ノ光リタリトモ暗夜ヲタトルヨリハ宜シカラント申置候事有之候唯今モ不物覺ニテハ出來不申杯ト申候モノハ如何成ル心得違ヒニ候哉三四十歳ニ至リ入學致候テ名譽ヲ後世ニ貽シ候人モ古ヨリ多ク有之候既ニ兼テ惡意ニ致シ候大竹榮藏杯ハ日勤ニテ朝ヨリ暮ニ至ラテハ歸宅ナラス身分ナカラ二十五歳ヨリ始テ學文ニ志シ夜學計リニテ今ハ儒者ト申候テ國持衆始メ大名或ハ御旗下以下弟子モ多ク有之榮藏ハ遲鈍成ル生質ニ候得其精力ヲ勵マシ候計リニテケ程ニ成リ候銘々ハ博學強記ノ儒者ト申サレス候テモ孝悌忠信ノ道理ヲ篤ト吞込ミ候得ハ宜敷博學詩文ハ入不申候三十四ニ至リ候テモ四書五經ノ大意ニ通シ候程ノ事ハ出精次第ニテ必定出來候事ニ候如何ナル遲鈍ノ者タリトモ志サヘ立テ學ヒ候ヘハ出來申候左様ニナクハ聖賢數萬卷ノ書ヲ作ラレハ不申候物覺ノヨキ器量有者計リ學文出來候ト申儀ニハ無之候愚蒙ノ者ニテモ骨折次第等級ハ有ナカラ相應ニハ合點致シ候様相成候處即聖人ノ教コテ候唯今京ヨリ江戸ヘ可參ト存候テモ足ノ達者ナルハ骨折ラス十日計ニ可參候不達者ナル者ハ十二三日モカ、ルヘク候得共何レ行付申候學問モ共通ニテ才不才ニテ遲速アレトモ出精次第ニテ何レハ成就ノ事ニ候扱テ又農工商ノ類ニテモ代々其職分ヲ繼キ其職ノ出來不申者モ無之候ヘハ心ニサヘ誠ニ求メ候ハ、士之職分文武モ出來可申候出來申サ、ルハ心ヲ誠ニ用ヒ不申故ニ候士タル者三民ヨリ劣リ候ハ殘念成ル事ニ候ハスヤ孔夫子モ郷人ノヨキモノニハヨミセラレ不善者ニハ憎マレンニ如カスト仰セラレ候ヘハ學問武藝ニ志候者何程謗ニ達嫉ヲ受ルモ貪着ナク一杯ニ致シ候事勇士ト可申候世ノ中口癖ニ今迄何藝セスシテモ濟候或ハ誰某サヘ不致候間我等ハ尙更ノ事又困窮ニテ中々出來不申又多病ニテ出來不申杯ト申ハ誠ニ我耻ヲ知ラスト可申候仁ニ當テハ師ニ讓ラスト聖言モ有之ヨキコトハ師匠ニモセヨ己ハ弟子ノ身分ニテモ師匠ヘ相談謙退ニモ及ス忽ニ行候ヘトノ事ニテ候併師

寛政七年六月十五日諭告

第一則

人ハ萬物ノ靈ト申候テ天之心ヲ其儘受テ性トナリ候事故本然之善自ラ備リ惡ハ少シモ無之候得共最早生レ出テ人ノ形ト顯レ候テハ善惡之分ナ有之候併執行次第ニテ天心ノ明カナル處ヘ立歸リ候事古今タメシ多キ事ニテ候今世上ニテ利口發明ト申人ハ多クハ己カ私智ニ任セ本然ノ善知ヲ明ラムル者ハ少ナク或ハ又本然ノ善ヲ明ラムル事ハ並々ノモノニ所詮出來不申ト申候ハ誠ニ孟子ノ自暴自棄ト仰ラレ候所ニテ聖人賢人ハ勿論良將決士ト被申候人如是賤シキ心ハ一毫モ無之事ニ候扱テ修行ト申候ハ幼少ヨリ四書五經隨分熟讀講究致候外無之候是モ小兒一遍索讀致候事トノミ心得候テハ間違ニ候素讀ハ文字ヲ覺候而已ニテ其上講究致シ我心ニ會得致シ候迄ニ骨折申事ニテ候心ニ會得致シ候得ハ今日ニ行ヒ可申トノ心掛ケ無之テハ不叶事ニ候抑モ仁義禮智孝弟忠信ハ上天子ヨリ賤敷匹夫匹婦ニ至ルマテ一日モ缺キ候事ハ成不申候事ニ候今ノ世トモ匹夫匹婦ノ賤敷者其理ハ不辨候得共天性ノ善自然ト發露致シ自身知ラスノ中ニ道ニ少シハ叶ヒ候事ニテ全ク缺キ候得者忽曲事ニ至リ或ハ刑戮ニモ及ヒ候事ニ候併シ天ヨリ仁義禮智ノ性愛居リ候得共如何ナルカ仁如何成ル義ト申本式之處吞込ミ不申候テハ所謂不仁之仁非義ノ義ト申モノニテ仁義ト存候テモ仁義ニハアタラヌ事出來申候學文ハ夫ヲ辨ヘ知ル爲ニ候凡農工商之者家職ニ怠リ候テ困窮之身トナリ候ヘハ人々モ皆是ヲハ何ノ用ニモ立ヌ愚カ成ル者ト笑ヒ申候又ハ日夜ノ隔テナクカセキ候者ハ人々尤モナル事ト賞美致シ候扱テ其三民ノ上ニ立候者士ニテ其職分ハ何ソト申候得者弓馬槍劒ノ術ニ日夜身ヲ習シ其上學問シテ義理ヲ辨ヘ可申事農ノ耕作工ノ經營商ノ交易ト同シ事ニテ候農工商ハ士ヨリ賤敷者ノ事故假令其職分ニ怠リ候テモマタシモノコトニ候得共士タルモノハ三民ノ上ニ立ナカラ職分ニ怠リ候テハ申迄モ無之不相濟事ニ候將又義理ヲ辨ヘ候學問ト申候ハ古聖人伏羲神農黃帝堯舜禹湯文武周公孔子之道ニテ則天ノ道ニテ候扱テ其天ノ道ハ則人之道ニテ候此故ニ天ノ四德ハ元亨利貞地ノ四德ハ水火木金人ノ四德ハ仁義禮智ニテ是ヲ學ヒ候テ心中ニ吞込ミ行跡之上ヘ顯ハレ候處孝悌忠信ト成申候夫ヲ行ヒ得候人ハ曾子孟子ヲ始トシ諸葛孔明司馬溫公程子朱子等ニテ皆唐山ニテ眞儒ト被申候人ニテ文武ニ達シ候事ニ候今ノ世ニテ儒者ト申候得ハ唐山ニテ申候詞章ノ學詩ヲ作り文ヲ作ル訓詁ノ學講釋ヲ能ク致シ人ニ教フル計リ巧者ノ人記誦ノ學事ヲ能ク知リタル計リノ人ニテ眞儒ニテハ無之候世ノ人は是ヲ辨ヘ申サハル故儒者ハ世ニ益ナキモノト存候コソ大成心得違ヒニテ候近來ニテモ水戸中納言殿光圀公義公ト諡ス世ニ申ス黃門様松平肥後守殿會津ノ祖實名正申サレシ人細川越中守殿實名重賢ト申サレシ人上

能々心得違ヒノ無キ様ニ有之度事ニ候

第三則

先達テヨリ退々申出候通り兎角自暴自棄ト申歟第一惡敷事ニ候譬へハ大名衆ニテモ在所モ狹ク收納高モ少ク家中ノ風儀モ不宜故所詮善政ハ不相成何某之家風該敷杯ト申人ハ則自暴自棄ニシテ暗君愚將ト可申候生質不才ニテ一向善惡モ分リ不申候テ空敷日月ヲ送り候ヨリハ劣リ候事ト存候近來大名衆之中ニモ武ヲ好ミ文ヲ嗜ミ弓馬モ宜敷詩文モ相應ニ手廻リ候トテ人々譽候衆ニ家中ノ風俗モ輕薄虛華放蕩怠惰公ヲ捨テ私ヲ勤メ義ヲ脇ニシ利ニ趨リ役人ハ主人ヲ欺ムキ奸計ヲ行ヒ己ニ從ヒ諂フモノヲ取用ヒ左アラヌ者ヲ退ケ私恩ヲウリ主人ノ仁惠下ニ通セス下之情ハ上ヘ滯リ候ト申様成ル風俗ニハ心ヲ附不申只文武ニ心懸ケヨキト申ハ文武モ藝業トナリ眞ノ所ニテハ無之候是ニテハ常躰之自暴自棄ヨリ一段劣リ可申候君ノ職分ハ何ント申候へハ家中領内ノ士民ヲ安堵ニ暮サセ候處第一ノ職分ト存候武道文道ヲ心懸ケサレハ三民ノ上ニ居候武士ノ上ニ居候君ニ候ヘトモ罪免シカタキ事ニ候文武ノ道ヲ少シモ不辨士民ノ忠孝廉耻ノ風ヲ起サス剩ヘ士民ノ苦ミトモ貪着ナク打過キ候君コソ君タルモノ、大罪ト可申候天ヘ對シ公邊ヘ對シ先祖ヘ對シ申譯モ無之事ニ存候ケ様ナル君ハ天職ヲシラヌ人ニ候ヘハ位ハ有トモ家業ヲ勵ミ候農工商ヨリモ其志賤シノ義ニテ一家ノ主人タル者モ我父母ハ分別ナキユヘ善事ハナラス我兄弟ノ志ハ直リ申サヌ又我妻ノ嫉妬ハ止ル事ナラス我子ハ不肖故何事モ仕込候事ナラス或ハ朋友ニモ某ハ所詮申聞ケテモ相用ヒ不申杯ト一口ニ申置候ハ同シク自暴自棄ニテ己ニ立歸リ誠ヲ盡シ候ハ、徹底セヌ義ハナキ者ト申事ヲ存知不申故ニテ候古ヘ大舜ノ父母ハ至極ノ惡人ニテ兄弟モ同シク不明ニ候ヘトモ終ニ善人ト化シ候コソ大舜ノ徹底致シ候併シ大舜ハ生知ノ聖人我等ハ中々眞似モ出來不申ト思フモ可有候ヘトモ大舜ノ父母ト弟トハ今ノ世ニモ又稀成ル程ノ大惡ナレハ大舜ノ德ニテ無之候テハ全ク徹底モ出來申間敷ヘトモ只今ノ父母兄弟夫婦ニハマタ此程ノ惡モ無之候ヘハ假令生知ノ聖人ナラストモ我誠ヲ積ミ候ヘハ化シ不申事ハ無之候其誠ヲ積ミ候工夫ハ學問ノ外無之候

有德院様ニハ皆々ノ承リ及通り御高德御明才ノ上様ニテ即チ六諭衍義ト申書ヲ室新助ヘ和解仰付ラレ出來ノ上上木ニ相成世ニ流布致我等モ熟讀候テ難有書ニテ候如何ニモ明白著明ニ日用着實ニ人ヲ善道ヘ御導キ被成候思召ト相聞ヘ候只今ニテモ六諭衍義小學等常ニ讀候ハ、身持ノ心得第一ノ事ト存候其外間暇ニハ經書ハ勿論ノ事歴史或ハ本朝ノ國史等治亂成敗ノ跡委敷記シ勸善懲惡トテ宜シキヲ勵ミ不宜ヲハ戒メ候爲ノ書ニ候ヘハ常ニ讀ミ可申事ニ候併シ胸中ニ經書ノ義理ナケレハ善惡黑白ノ分別致シ候事出來不申候故却テ善ヲ惡ト思ヒ惡ヲ善ニ致シ候事有之コト故大

弟ノ事ノミニモ無之君臣父子夫婦長幼トモ皆如斯心得可申事ニ候多病ハ不養生ヨリ募リ極貧ハ家ノ取治メ宜シカラ
 サルヨリ起リ候乍去生質病身ノ者ハ餘儀無キ事ニ候ヘ共朝ニ道ヲ聞夕ニ死ストモ可也ト壽夭疑ハス身ヲ修以テ待ト
 モ有之候ヘハ可成程ハ勵ミ可申事ニ候貧モ先代ヨリ打續候ハ無據事ニ候得共古人螢ヲ集雪ニ映シ書ヲ讀地ニ畫テ手
 跡モ能書ニ成候類シルシノ多ク有之事古人今人遙ニ違候事ト存候者モ可有之候得共夫ハ心得違ニテ候御當代以後ニ
 テモ先度モ申聞候通ニテ數多ノ人ニテ候日月星辰ヨリ草木鳥獸ニ至ル迄古モ今モ替リハ無之候人モ其通りニテ古今
 ノ差別ハ無之候古之趣ヲ心得違ヒ自ラ利口發明ノ様ニ存候人モ有之候誠ニ論スルマテモナキ事ニ候文武ニ達シ候人
 ヨリ見候ヘハ一笑ニ堪ヘサル義ニ可有之候左様ナル拙キ人ヲ見習ヒ候モノハ如何成ル事ニ候哉且又トカクニ年ノ一
 ツモ長シ席ノ上ナルモノハ下ニ立候モノヲ隨分ト世話致シ武術學文ニ志サセ候様ニ心懸ケ候ハ、始終ハ用ニ立候人
 トナリ候モノ多ク出來可申候左候ヘハ眞忠ニ可有之候ケ程ノ事ハ我等身ノ上ニモ有之事ニ候又勸メ不申以前ハ文武
 ニモ心掛ケ候得共年輩席上口辨之人謗リ何歟用ニモ不立義出精致様ニ云ヒナシ勤向相尋不候テモ不申聞何角ニ付當
 リ不宜候故初心ノ面々勤メモ吞込ミ不申不安心之事トモ有之甚タ迷惑ニ存候トキハ當座ノ付合心中快カラヌモ年輩
 席上口辨ノ機嫌ヲ取リ候内所謂習性ト成ト申通リイツカ文武ノ志ハ消行申候此處ヘ心ヲ付世ノ習俗ニ少シモ不動事
 第一ノ心掛ケニ致シ不申候テハ文武ノ成就不相成候乍去朋友ノモノニ相談モ不相成何事モ一存ニテ取計ヒ候ト申
 テハ我意ニ成リ不宜候ケ様成ル處斟酌有之義ト存候朋友ノ會モ宜敷事ニハ候也惡敷事ニハ不參様致シ自ラ誠サヘ積
 リ候得ハ小人モ謗リ不申矢張り入魂ニ相成リ勤向相談等モ行届キ互ニ出會候テモ文武ノ障リニ不相成候右之趣キ故
 席上年ノ一ツモ長シ候者經書ニモ心ヲ止メ弓馬槍劍ニ身ヲ勵マシ其交リニ入ラスハ振合ヒ惡敷様ノ風俗ニ成リ候得
 ハ若輩後生ノ者酒色之話懶惰之話モ申出シカタク文武ノ道孝悌ノ理ヲ唱合ヒ相互ニ過失ヲ匡ス様ニ成行キ候得ハ逸
 樂ニ耽ル輩ハ振合ヒ惡敷取付合ヒ計リニモ宜敷眞似ヲ致シ候内イツノ間歟習ト成リ申候初ハ無據乍大儀致シ候テモ
 涵泳日久敷候得ハ自然耻ヲシル様ニ成リ賢人決士トモ成行候第一主人ノ内ニモ用立候人ニ相成候ハ武門ニ生レ候職
 分ニ候或ハ年長席上ノ者心得違ヒニテ後生若輩ノ者ヘ妄ニ勞ヲ施シ年少ノ者煩勞之儀ハ致候内年輩ノ者ハ勞セヌモ
 ノト心得候テハ間違ヒニテ候席上年輩ノ者ヨリ隨分ト勞ヲ厭ヒ不申候テ見セ候ヘハ年少ノ者勵ミモ相成候年少ノ者
 ヘ勞ヲ施シ候テハ年少ノモノモ又其後己ヨリ後生ヘ又々右之通りニ可致候左候テハ行末怠惰ノ基ト相成候惣シテ若
 キ者身持不宜文武ニ心懸ケ疎キ者出來候ハ席頭年長ノ罪トミナシ可存候忽チ咎メハ受不申候テモ冥々ノ天罰恐ル
 ヘキ事ニ候譬ヘハ盜ハ人ノ良財ヲ奪取ル計リニテ候處此人ハ人ノ良心ヲ奪取リ候是盜賊ヨリ罪大ナル事ニ候右之趣

一体ノ如クニ成リ不申候ハテハ叶ヒ不申事ニ候將タ又士タル者其君ノ命令ヲ通シ善惡邪正ヲ糾シ候職故殊更大切ナル事ニ候扱テ其一体ト申候ハ君ト民ト尊卑ノ違ヒ候得共父母ノ子ヲ思フ如ク子ノ父母ヲ慕フカ如ク上下互ニ親切ナル事ナラチハ正學ノ本意ニハ無之ト譬ヘハ其身富饒ニ暮シ候テモ其父母ハ飢餓ニ及ヒ候又ハ父母安樂ニ暮シ候テモ子ハ窮乏ニ候ハ、不孝不慈ノ至誰ニモ辨ヘ知ル所ニテ候富饒貧乏トモニ休戚ヲ同シク致シ候ハ、親子和合ニテ家事行届キ候事ト人モ賞美致シ可申候士分ノ身ハ尙ホ更此心得有ヘク候事申迄モ無之候万一非常ノ節ハ君臣一心ニコレナク候テハ敗亂ニ及ヒ候万人ノ心萬人ノ心ニテハ何事モ破レ候萬人ニテモ壹人ノ心ニ候得ハ百戰百勝ノ功ヲ遂ケ可申候我等不肖ナカラ右申置候通り君ハ民ノ父母ト申候ヘハ家中領内ノ者ト富饒貧乏ヲ俱々ニ致シ候心得ニテ候ヘハ如何様ニ我等平日艱難愁苦候テモ粗食ヲ喰ヒ弊衣ヲ着シ候事隨分不苦候間家中領内ノ士民安穩ニ暮シ孝悌忠信ノ風俗ニ成行候ハ、此上ノ樂シミハ無之候美食ヲ喰ヒ美服ヲ着シ珍寶ヲ貯ヘ候ヨリハ限リモナキ大慶ニ存候家中領内ノ者數多キ事ニ候得ハ容易ニ一樣ニハ成カタク可有之候乍去士タルモノハ一統ニ文武忠誠ヲ篤ト吞込ミ不申候テハ公邊ヘ對シ我等相濟ミ不申候小家ノ様ナカラ藩鎮ノ列ニモ加リ候事故非常ノ節ハ如何様ノ御奉公ナリトモ身力ノ續キ候内ハ相勤メ可申筋ニ候武門ノ家ニ生レ候テハ一命ヲ擲テ御常家御累代ノ御厚恩ヲ報シ候心得ハ兼テ太平無事ノ時タリトモ此覺悟無之候テハ叶ハサルコトニ候尤モ戰場ニテノ討死ノミト心得候ハ心得違ヒニテ候假令御治世ニテモ上ノ御爲ニ身ヲ捨テ候事可有之候併シ戰場ニテモ御治世ニテモ常ニ格別ニ誠ヲ以テ心身ヲ盡シ候上ナラテハ身ヲ捨テ候事成間敷候古人ノ語ニモ倉廩充テ禮節ヲ知り衣服足りテ榮辱ヲ知ルトカヤ申候事有之候身分貧窮ニテハ何トナク文武ニ勵ミ候事障リ候事モ可有之候得共只々文武兩道ノ心懸ケ深シ孝悌ノ風俗行渡リ候様ニ相成候ヲ第一ノ奉公ト存可申候

第四則

我等身ノ上ノ義ハ一人ノ私而已ナラス家中ノ者トモ有之民百姓モ有之事故善惡ニ隨ヒ人ノ休戚ニモ相成候義誠ニ大切ナル事ニ候依之一体ノ處ハ上ヲ損シ下ヲ益ス事聖人ノ道故家中并ニ百姓共ノ永世ノ利ニ可相成事ニ候ハ、何事タリトモ遠慮ナク存念一杯可申出候又第一我等身ノ上ノ事ヲモ可申候主人宜カラス候テ下ノ宜敷事ハ古ヨリナキ事ニ候先我等平常忠孝ノ道ニ缺ク事ニ哉文武ノ道ヲ厭ヒ學ヒ申サス候哉家中領内ヘ不道ノ筋有之候哉無益ノ物好或ハ奢侈ノ振舞有之候哉酒色ニ溺レ亂舞遊藝ヲ玩ヒ候哉ト申様成義ニモ限ルヘカラス惣シテ凶德ニ涉リ候コトハ十分ニ直言而爭致候様ニ兼テ心懸ケ可申候聖賢トテモ過チハ有之候得ハ況ンヤ我等如キ不德不才ノ身慎ミ候ヘトモ心元ナ

本ノ所大切成ル事ニ候又書物取扱ヒモ未タ不熟成ル内ハ歴史讀兼可申候間或ハ本朝軍記類ニテ我義氣引立テ候事尤
 モ宜敷御治世後ノ雜記ニテモ是皆唐山野史ノ類ニ候ハハ是ニテモ心懸ケ次第ニテ懲勸ナキニハ非ラス假令史記漢書
 ヲ讀ミ候テモ雜劇見物ノ様ニ譯モ無之面白ト計リ存候テハ何ノ役ニモ立不申候今雜記ノ内ニテモ譬ヘテ取り申サハ
 大石内藏之助ハ天晴成士ニテ後世ヘ名ヲ遺シ伊達安藝ハ忠臣ニテ身ヲ失フヲ不顧ト存夫ヲ羨敷義ニ存候程ニ分リ候
 ヘハ武門第一ノ事ニテ候或ハ又大野九郎兵衛原田甲斐ハ後世ヘ汚名ヲ傳ヘ武門ノ耻辱ト存込ミ我戒メト致シ候カ史
 ノ見様ニ候其外ハ是ニテ推シテ知ルヘシマタ歴史ノ讀兼候者唐山ノ事ヲ存度候ハ通俗本ニテモ宜敷候心得サヘヨッ
 ヲミ候ヘハ治亂興敗之跡ハ荒方合点可致候右程ノ心得サヘ出來候ハ先ニモ申候通り君ノ臣ヲ打捨テ置父母之子ノ行
 ヒニ貪着ナキ夫ノ婦ニ戒シメス兄弟ニ構ハス朋友互ニ薄情ニ成候ヲ脇ヨリ見物致居リ候事ハ成リ申間敷候我等不德
 不才ニ候ヘトモ家中ノ義捨テ置候心ハ無之文武ニ手ノ行届キ候文ケ心懸ケ候心底ニ候孰モノ心得諭示致シ候ニ付我
 等ノ情實ヲモ打明シ左ニ記シ候我等幼年ヨリ學問ノ義ハ嶺雲院様ニモ每度御世話被遊候ヘトモ至テ嫌ヒニテ思召シ
 ニハ叶ヒ不申唯廢日ノミ多ク有之遊戯ニ空敷日ヲ送り候事今日ニ至リ何共嶺雲院様御神靈ヘ對シ恐入存事ニ候乍去
 悔候計リニテハ無詮義夫學文ハ過チ改メ候事第一ノ事故何卒幼少ノ節ノ通りヲ向來償ヒ家士邑民ヲ安樂ニ暮サセ上
 公儀ヘ對シ忠誠ヲ盡シ候ハ、嶺雲院様御存在ノ節ノ思召シ相叶ヒ候ヨリ外ハ無之事ニ存込武道文道ニ心ヲ盡シ候事
 ニ候十四五才ノ頃ヨリ役人共ノ勸メニテ少シツ、志モ定リ師ノ大恩ニテ書モ讀覺ヘ候様相成君恩師恩父恩ハ生涯忘
 却ハ致シ申間敷候其後御目見致シ勤向モ有之候得共廢學ハ致シ不申併シ少々志立而已ニテ聖人ノ正學如何ト申事ハ
 吞込ミ不申打過候内毛利伊勢守殿松平縫殿殿ニ朋友ノ交リヲ結ヒ夫ヨリ一段出精ノ心モ起リ其後本口昌俊致知力
 行之學ヲ勸メ漸シ聖人ノ道ノ端緒ヲ得林大學頭殿未タ養家ヘ被參不被申内本口昌俊ヨリ、勸メ師友之交リヲ契シ
 彼是ノ切磋ニヨリ正學ノ味ヒ深キ事ヲ知リ申候兎角師ト友トハ大切ノ事ニ候扱テ其聖學ト申實用ニ相成ヘキ處ヲ學
 ビ候事ニテ心ヲ治メ身ヲ修ルヨリ始メ國天下ヲ治ルニ至リ候聖賢正統ノ大道ニナリ其心ヲ治ルト則チ誠意ノ義ニ工
 夫積リ候ヘハ我天ヨリ生付キタル本然ノ德自ラ明ニ成リ萬事ヘ通シ候様相成候我心中正敷相成リ候ヘハ義ト利トチ
 辨ヘ公ト私トヲ明メ面談謙懇ノ姦邪モ察シ候様ニ成リ申候左様ナラサレハ端正廉直忠實ノ人ハ用ヒ候事成不申候是
 君道ノ肝要ト存候且又臣ノ身分ニテモ支配有之輩同様ニ右ノ心得ヲ以テ下ノ忠邪ヲ辨ヘ可申事ニ候古ノ聖賢主君ノ
 盛德ヲ申候時ハ民ノ父母ト申候民有テノ君ニテ候ヘハ民程大切ノ者ハ無之儀萬ノ金銀珍寶タリトモ士民ヨリ大切ナ
 ル寶ヘ有之間敷候併シ又君ナキ時ハ士民安穩ナル事ヲ得ス士民無之節ハ君モ國モ治ルヘキ事成不申候得ハ上下交泰

此際藩士森島柳伯外二名學館開設ノ事ヲ建議ス容レテ左按ヲ藩中ニ布令ス建議按載セテ沿革中ニアリ

明治四年八月廿六日

森島柳伯外二名

學校ノ儀ニ付建言ノ旨趣尤モノ次第有志ノ輩申合自修可爲勝手事

士族卒ノ子弟教育方法 必ス入校ヲ獎勵スト雖モ又他ニ修學スルヲ禁セス且寛政年間藩費ヲ給シテ遊學セシメシモノ東京へ一名安政年間自費遊學ヲ許可セシモノ西京へ一名明治二年七月藩費ヲ給シテ遊學セシメシモノ丹州園部へ二名京都及東京へ各一名且藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルノ制アラス

平民子弟教育法 藩立學校へ入ルヲ許サス但禁令ノ有無ヲ知ラス家塾寺子屋等ニ修學スルハ各自ノ意向ニ任セテ禁止シタルコトナシ家塾寺子屋設置ノ制度 私宅ニ於テ讀書手跡或ハ算術等教授スルハ士族卒平民共更ニ檢束ノ方法無シ

學校

校名 日新館 但設立以來名稱ニ變更ナシ

校舎所在地 宇中町ニ設立有之候處維新後文武擴張校舎狹隘ナルニ因リ明治三年ニ至リ宇殿町ニ設置シタル藩政所ヲ増築シ同年五月轉校シタリ但藩政所ハ殿中表書院へ移轉ス

沿革

藩主從五位下市橋伊豆守長璉ハ儒學ヲ尊崇シ明和年間ヨリ藩士中文武ニ達スルモノヲ擢ンテ指南役ヲ命ジ藩内士卒ヲ獎勵シテ各其業ニ從事セシム然レ共學館創立ニ至ラス天明五年ヲ以致仕ス

市橋長昭ハ長璉ノ嗣子ニシテ天明五年十二月七日家督寛政二年十一月廿七日從五位下ニ叙シ下總守ニ任ス文化十一年九月廿七日死ス年四十二長昭幼ヨリ文武ヲ嗜ミ其文學ハ專ラ林大學頭ニ就學シ道既ニ通ス自ラ學館創立ノ事ヲ計畫シ寛政八年八月竣功名ケテ日新館ト號ス從來文武師範ノ者及ヒ平士中ヨリ擢ンテ更ニ教頭助教ノ官ヲ設ケ藩士ヲシテ悉シ學ニ就カシム

市橋長發ハ長昭ノ嗣子ニシテ文化十一年十二月父ノ遺領ヲ承キ文政三年十二月十六日從五位下ニ叙シ伊豆守ニ任ス同四年九月廿四日夭死ス年十七長發幼ニシテ父ヲ失ヒ爲ニ藩政專ラ家老ニ依囑ス

フク候臣下ノ身トシテ我君ハ善ニ遷リ過チテ改ルコトハ所詮出來不申トノ心底萬一コレアリ候テハ君臣ノ大義ニ背ムキ候モノニ可有之候吳々家ノ爲メ家中領内ノ爲メト存踏込ミ候テ可申出候古人ノ詩ニモ聖朝無闕事自識諫書稀ナルコトヲト有之候間聖賢之君ノ時節ユヘ何事モ缺タルコトモナキ故自然ト申上ノ書モ少ク成行キ候トハ芽出度事ノ様聞ヘ候ヘトモ左様ニテハコレナク候諫ヲモ用ヒラレサル故誰モ諫人無之成書上モ少ナキ事ヲ反シテ作リタル詩意ニテ候賢君ニテ人言ヲ容レ候ハ、自然ト書上モ多ク相成候事ニ可有之候扱テ又第一臣タル職分ニ候ヘトモ上ヘ對シテハ物モ申ニクキ者故若ナキ事ヲ申サハ怒リモ有ヘシ抔ト存居リ候ハ、忽チニ目立タルコトノ外ハ先差シ控ヘ默然トシテ罷在候様ニテハ過チモ長シ君ノ爲メニ成リ申間敷候間何事ニヨラス眞偽ハ篤ト存シ不申候テモ噂サハカリニテモ宜カラサル義ハ早々申出ヘク候間違ヒ候事ハ有内ト存候一心ノ趣キハ側向ノ者ハ勿論外様ノモノタリトモ一統左様相心得可申若シ又諫メ申ヘクト存候モノヲ差シ留候者又ハ役義ノ儀ハ可申候得トモ其他ノ儀ハ不入事ト究置候モノ抔ハ尤モ心得違ヒノ儀ト存候深切ニ存候心ヨリ諫メ可申ト存シコミ候處ヲ差シトメ候ハ臣道ナカ、セ候コト戰場ニ於テ一番槍ヲ差シ留候ト同科ト存候又當リ前計リニ心付キ候テ役前ノ外ハ不申ト申スモ一通リハ聞ヘ候様ニ候ヘトモ子ノ父ヲ思ヒ臣ノ君ヲ思フ處ハ誠心ヨリ不得止事發シ候事故眞實ニ存込ミ候ハ、左様ノ界域ハ有間敷事ニ候尤モ諫メテモ我等諫メニ從ヒ不申故諫メ不申儀モ只今マテ可有之哉ニ存候自ラ省ミ候ヘハ報愧ニ不堪仕合故向來ハ我等心持モ切替ヘ可申候間孰レモ左様存シ申ヘク我事ハシレヌモノニ候ヘハトカク人言ヲ聞候事第一重キ事ニ候惣シテ上ヘ諂ヒ何事モ申分無之故不申上抔ト申輩ハ我等ヲ見捨テ候モ同様ノ事ニ被存候也以上

此以後ノ布令告諭書等悉ク廢紙ニ屬セリ

明治四年四月十四日達

文武修業ノ義ハ人才教育之道故兼々嚴重相達シ置候ニ付テハ勉強ノ向モ有之一段ノ事ニ候ヘトモ尙方今御趣意モ候間官員ノ族モ御用間ニハ可成丈出席可有之別テ非役ノ面々修學入精ノ義ハ申進マテモ無之候ヘトモ自然心得違ヒニテ偷安消日候者有間敷モ難計左候テハ大ニ朝憲ニ悖リ素餐ノ姿ニ落入可申間各身分ヲ省奮勵可致候今日非役ニテ文武ノ業モ不學傍觀仕候テハ對朝廷甚タ不相濟次第ト能々御時勢推考仕皇國ノ御用ニ可相立様可心懸若シ怠惰ノ輩於有之者吟味ノ上其筋ヘ相同ヒ急度其處置可有之必ス汕斷有之間敷依テ此旨相達候也

明治四年七月十五日達

文武修業ノ儀追テ及沙汰候マテ當分休業可致事

其他生徒罰則ナシ又入學許可ヲ得ルモノハ禮服着用師範家へ回禮スル等ノ方法ナシ

學校揭示

- 一人タル者親義別序信五倫ノ道ヲ明晰シテ善ヲ勸ムルヨリ大ナルハ無シ其道ヲ知ラント欲セハ學校ニ入り年ト俱ニ習熟シテ善美ヲ盡スノ地位ニ至ランコトヲ要スヘシ習字算術又不可怠
- 一生徒ヲ部分シテ三トス大會生小會生句讀生ナリ年序ニ拘ハラス學業ノ甲乙ヲ以テ定之
- 一春秋ニ大試験シ月毎ニ探課シテ檢査シ月旦評ヲ以テ序次ヲ進退シ勉勵ヲ勸ム
- 一大會生日々教官ニ依テ傳習シ又質問ス
- 一二ノ日國籍及漢籍ヲ拔出シ大會生ニ之ヲ輪講セシメ小會生ニ之ヲ復讀セシメ教官之ヲ檢査シテ黜陟ヲ行フ
- 一三ノ日小會生句讀生ニ復文ヲ學ハシム
- 一八ノ日大會生ニ譯文ヲ學ハシム
- 一道ヲ論シ義ヲ講ス宜シク竭力琢磨スヘシ他ノ駁スルアラハ虚心之ヲ受クヘシ偏見執拗或ハ瑣末ヲ穿鑿シ訓詁ノ異同ニ拘泥シテ徒ニ光陰ヲ消却スルヲ許サス
- 一習字ハ楷行草其好ミニ隨フヲ許ス
- 一四時毎ニ一度席上ニ揮毫セシメ良否ヲ論シテ黜陟ヲ行フ
- 一算術又各月兩度教官之ヲ檢査シ等級黜陟ヲ行フ
- 一羈談爭論堅ク禁之書籍雜亂最モ之ヲ戒ム
- 一疾病事故アリテ日課欠席スルモノハ必ス之ヲ教官ニ達スヘシ
- 一放蕩無賴ニシテ教ニ從ハス或ハ兇頑ニシテ自己ノ業ヲ怠リ他ノ業ヲモ妨碍スルモノハ必ス黜陟ヲ行フ
- 一太政官日誌其他御布令書類熟讀體認スヘシ
- 右ハ明治二年ノ制定ニシテ其以前ニ係ル文按ハ前ニ陳シタル如ク求メ得難シ然レトモ大体ノ趣意或ハ格別ノ差異ナカルヘシ

職名及俸祿

維新前 學頭 助教(但徒士以上ノモノヨリ拔擢シテ之ヲ命ス) 門衛(卒族)

總テ役料ヲ支給セス年末若干ノ慰勞金ヲ下付ス且徒士ト雖トモ學頭及助教ニ就職スルトキハ士ト席ヲ同フス然レト

市橋長富ハ長發ノ弟ニシテ後其養嗣子トナリ文政五年二月廿二日遺領ヲ承キ同年十二月從五位下ニ叙シ主殿守ニ任ス弘化元年十月致仕ス安政六年十一月二十日死ス年六十三長富ハ特ニ武術ヲ嗜ミ文學ヲ好マス爲ニ武術ハ劔槍弓馬ニ達スト雖氏藩内文學ニ就テ獎勵セシコトナシ

市橋長義ハ長富ノ養嗣子ニシテ幼名長和ト稱シ後長義ト改ム弘化元年十月家督同三年九月從五位下ニ叙シ下總守ニ任ス明治二年藩知事ニ任シ同三年正五位ニ叙ス明治四年七月廢藩後東上長義文武ヲ好ミ諸士ヲ獎勵シ學制悉ク舊ニ復ス文學武術ノ教官ヲ増員シ又文久三年春劉翥及ヒ其男愛ヲ聘シ十口俸ヲ給ス遇スルニ賓師ノ禮テ以テシ藩内子弟教導ノコトヲ依囑ス

森島柳伯、田中信隣、田村正寬、幼ヨリ學ヲ好ミ學館ニ入學スルコト數年後藩ニ乞ヒ丹州園部ニ或ハ京都ニ留學シ明治三年歸藩學館教授ニ擢セラル同四年廢藩置縣ノ際藩廳休校ヲ示達ス(示達載セテ制度中ニアリ)茲ニ於テ三名連署シテ開校ノコトヲ建議ス其文ニ曰ク臣等謹テ思フニ當今非役士族社會ノ尸位素餐スルハ朝廷ニ奉對シ不相濟義ニ付校舎器械書籍等悉ク現在ノ儘拜借致シ同族ト共ニ學事ヲ研究シ有事ニ當リテ士族ノ本分ヲ誤ラサル樣致シ度若シ幸ニ此儀採納セラルレハ非役藩士一般必ス出校シテ研究可致旨達セラレ度云々右建議ヲ納レ竟ニ學館舊ニ復ス教則 四書五經諸子歴史毎日早朝ヨリ教授ス朔日十五日二十五日ヲ休日トス但文武トモ生徒出席ノ定時ナシ因テ午後ノ閉業一定ナラス又本館創立ノ際下總守長昭規定スル所ノ教則アリ後世廢紙ニ屬スト云フ

學科學規試驗法及諸則

漢學 詩文 習字 珠算

禮節小笠原流

弓竹林流

馬太坪本流

槍風傳流、無邊無極流

劔柳生甲乙神影流、新影流

炮術先大誠神流、高島流

兵學甲州流

生徒ニハ文武必ス兼修セシム然レモ文學ト武術ト程度ノ比例ナシ維新後ハ文ノ小助教ト武ノ目錄ト對照ス且兒童七八歲ニ至レハ入學スト雖トモ學習年限ノ期ナシ因テ十四五歲ニ至リ退學スルモノアリ或ハ二十五六歲マテ就學スルモノモアリ又試驗ハ維新前ニアリテハ年末ニ至リ執行ス其方法ハ生徒一ケ年學習シタル所ヲ教頭指名シテ各自復習セシメ而シテ優劣ヲ比判シ賞與ヲ與フ差アリ且學制頒布前ハ生徒ヲ分テ三トシ大會生小會生句讀生トス試驗法ヲ改メテ春秋兩度ト定ム其方法ハ學校揭示文中ニ詳カナリ尤モ創立以來文化年間マテハ士族卒ノ嫡子十五歲以上ニシテ就學スルモノハ一口俸米ヲ給シ其以下及ヒ次三男ハ年末ニ至リ現米四斗ツ、ヲ支給シテ獎勵セリ爾後之ヲ廢シ各科ニ獎勵ノ方法ヲ設ケ前ノ如ク優劣ヲ判シ其最モ優等ノモノハ金三兩劣等ノモノハ一歩位ヲ以テ明治四年廢校ノ際マテ支給セリ

全三年正月十四日民政へ

方今御時勢門閥ヲ廢シ知識學才アル者ヲ採用可致候ニ付管下各村ニテモ慣習ヲ廢シ舉テ相當ノ事務申付候義モ可有之候ニ付其節心得違ヒ無之様豫テ諭達可致置候云々

全三年二月十七日大監察^{舊大目付}ヨリ庶士へ

文武館御開設ノ際無役ノ者ト達相成候ハ役人外ノ者ハ老若ノ別ナク出席修業可致義ニ付此段相心得精々勉勵可致云云

全時全職ヨリ御譜代卒族へ

以來文武館ニ出席精々勉強可致候云々

全年七月十九日知事ヨリ

老年ニテ學術出精ノ者へハ年末金百疋下賜スヘキ旨達アリ

此他本項ニ就テハ總テ不詳又加役米引米及獎勵法等一切ナシ

士族卒ノ子弟教上法 明治二年文武館設立後ハ士以上ノ子弟八歳ニ至レハ必ス本館ニ入學セシム此他家塾等ニ入リ修業セント欲スルモノハ其父兄ヨリ事由ヲ詳記シタル願書ヲ出サシメ之レヲ許否ス^{布令及七年月等不詳}其他學制創立以來藩費ヲ以テ遊學スルモノ東京ニ一名舊膳所藩ニ四名私費ヲ以テ遊學スルモノ西京ニ三名大津ニ二名且講義ハ毎月一六ヲ生徒ノ輪講日トシ三八ヲ教師ノ講義定日トシ三八ニハ非職ノ士族及ヒ士以上ノ子弟ハ必ス出館シテ聽講スルヲ例トス又藩主ノ嗣子ハ常ニ生徒ト共ニ文武ノ業ヲ受ク

平民子弟教育法 平民子弟ハ皆寺子屋ニテ修業シ其高尚ノモノニ至リテハ家塾等ニ就テ修學セシモノアリ藩主學館へ入學スルコトヲ許サス他ニ藩ヨリ干涉及ヒ獎勵致セシコトナシ

家塾寺子屋設置制度 家塾寺子屋開設セント欲スルモノハ士族ヲ除クノ外何人タリトモ自由ニ任セ更ニ檢束ノ法ナシ只士族ハ藩ノ許可ヲ經サレハ之ヲ開設スルヲ得サルノ慣例ニテ其何ノ故ナルヲ知ラス又從來ノ制度アルカ不詳

學校

學校名稱 文武館 設立明治二年一月名稱變換ナシ
校舍所在地 近江國神崎郡山上村陣屋內

モ身分取扱上ニ就テ一般ノ規定ナシ各家族ニ從ハシム

學制頒布前 執事一名少參事 役料二十一石二斗五升〇副執事一名大屬 役料十六石七斗五升〇大教授一名權大屬 役料八石

二斗五升〇小教授一名全 役料五石〇大助教五名少屬 役料三石七斗五升〇小助教一名權少屬 役料三石二斗五升〇筆授一名全 役料二石五斗〇門衛一名無等 役料一石三斗一升二合五夕

職員概數 學頭七名 助教七名 門衛一名(卒ヲ以テ之ニ充ツ校内教場ノ開閉掃除等ヲ掌ラシム)

以上ハ文久年間ヨリ學制頒布ノ前ニ至ル

生徒 自費通學ノミニシテ席次ハ士族以上ハ差別ナシ卒ハ士族ノ末席トス且生徒人員維新前後共百名内外ニ出入ス

束脩謝儀 總テ無之

學校經費 別途ニ計セス藩ノ勘定方ヨリ時々支給セルヲ以テ詳ナラス且藩士ニ賦課スル等ノコトナシ

藩主臨校 藩主臨校定日ナシ臨時諸吏ヲ率テ臨校生徒ヲ試驗シ或ハ講義ヲ聽キ又毎月十三日ニ居室ヘ生徒ヲ召喚シ講義

索讀等ヲ爲サシム

祭儀 仲春上丁釋奠ス當日學頭助教并ニ生徒一同出頭而シテ學頭孝經及論語序文ヲ誦讀ス生徒拈香拜禮ス

學校構造

轉校前敷地百四十八坪一分 同建坪數六十四坪九分

轉校後敷地數四百六十四坪七分六厘 同建坪數百十六坪二分五厘

舊山上藩

學制

學事上ノ諸制度 山上藩ハ最小藩ニシテ世々定府タリ爲メニ領地山上村ニ陣屋ヲ設ケ藩族ノ該地ニ住居スルモノ士卒ヲ合セテ十戸ニ滿タス因テ學校等ノ設立ナシ維新ノ際藩主歸邑後明治二年一月初メテ文武館ヲ創設スト雖トモ其布令等モ散逸シテ不詳僅カニ古老ノ口碑ニ取り大意ヲ錄スル左ノ如シ

明治二年ニシテ月日不詳

今般文武館設置候ニ付士以上ノモノ無役ノ者ハ勿論子弟ト雖トモ年齡八歲以上ハ必ス入館ノ上文武勉勵可致云々但輕輩タリトモ有志ノ者ハ入館差許候ニ付勤務ノ餘暇彌可致出精候事

一日々辰ノ刻ヨリ出席夫々一禮シ行義正敷致スヘキ事

一喧嘩口論致ス間敷斷リナク猥リニ立出スヘカラサル事

一五十清書ノ事

一隔月教示方檢査ノ上褒賞被下候事

以上

此外教則ニ就テノ書類散逸シ今口碑ニ得ル所ヲ左ニ録ス

等級及教科用書

下等 漢三字經 朱子小學 四書 五經 右素讀

中等 日本外史 日本政記 蒙求 十八史畧 文選 左傳 右獨讀字意質問

上等 隨意ノ經史ニ就キ質問シテ定日ニ輪講ス

學科學規試驗法及ヒ諸則

和漢學算術筆道兵法馬術槍術劍術砲術等ニシテ生徒十二歳ニ至レハ文武兼修セシム十二歳ニ至ラサルモノハ文學ヲ專修セシメ又本人ノ志願ニ依リ十二歳以上ト雖モ一科專修スルヲ得但算術ハ有志ノ者ニ限り之ヲ教授シ一般ニ及ホサス

又文學ト武術ト程度ノ比例ナシ

學期ハ八歳ヨリ學館ニ入り習字讀法ヲ修メ十二歳ニシテ文武兼修シ退學ノ期定ナシ試驗ハ年末一度ニシテ及第落第等ノ法アルニ非ラス教授及ヒ係リ官吏立會ノ上優劣ヲ批判シ優等ノモノト日々出精ノモノニハ賞品ヲ與フル差アリ等別ハ教則中ニ記載ノ如ク三等トシテ其書讀ミ了ルヲ以テ進級ノ期トス且初メテ入學ノ者ハ禮服ヲ着シ館内ニ於テ神酒ヲ戴キ規則ヲ讀ミ聞カセ而シテ師範家ニ回禮スルヲ例トス

職名及俸祿

家老學館總裁一名○大目付學監一名○文學師範一名五人扶持役○全小師範三名現米十七石宛 役料三人扶持宛○習字師範一名全上○數學師

範一名全上○術師劍範四名以下祿高差等アリ 役料ハ皆三人扶持○鎗術師範一名○馬術師範一名○全小師範一名

以上ハ創立ノ際ニシテ教授身分取扱ノ義ハ最モ重ク大目付ニ次席ス且明治二年八月家老以下職名ヲ廢シ更ニ大參事ヨリ總裁ヲ兼テ大屬ヨリ學監ヲ兼ヌ又師範ノ名ヲ廢シテ教授小教授ト改稱シ更ニ醫師ニ教授三名ヲ置キ且役料ヲ廢シ大屬以下年末ニ至リ慰勞金ヲ給與スル差アリ

沿革要項

舊地上村ニ於テハ從來陣屋ヲ設置シ之レニ常住スルモノ、子弟ハ皆家塾寺子屋等ニ修學シ又隣藩ニ出テ、修業スルモノアリ然ルニ維新ノ際藩主國ニ就キ是ニ於テ始メテ學館ヲ設ケ令ヲ布キ士卒子弟ヲ學ニ就カシム當主稻垣太清儒學ヲ尊崇シ經書ニ通シ朱子學ノ蘊奧ヲ極ムト云フ而シテ學館創立ニ際シ美濃國ヨリ渡邊春政ナル者ヲ聘シ遇スルニ賓師ノ禮ヲ以テシ文事ハ皆之ニ依囑ス且本館創立ニ就テ盡力者ノ著シキモノナシ舊藩ノ大參事高木直溫權大參事中村直廉大目付近藤易知細井庸行等藩主ヲ輔佐シテ專ラ盡力ス渡邊春政ハ幼ヨリ江間集ニ業ヲ受ケ經書史傳ニ通シ講義ヲ善クス當時朱子學派ニテ其名最モ高シト云フ然レトモ明治四年七月廢藩置縣御發令ニ際シ辭シテ本藩ヲ去リ僅カニ在藩二年餘リナルヲ以テ小傳等ノ記スヘキモノナシ

又武事ニハ劍術教授四人鎗術教授一人馬術教授一人ヲ置キ皆世々藩ノ師範家ニシテ其行事等ハ不詳且明治三年_{月日}武事ヲ陣屋外ニ移ス後亦之ヲ練兵場ト改稱シ爾來劍武等ヲ廢シテ洋式練兵ノミニ改ム明治四年廢藩置縣御制令後廢場トス本藩明治三年ヲ以テ文武最トモ盛ナリトス

教則

文學所定則

- 一 八歳ヨリ學校ヘ出テ小學讀スヘキ事
 - 一 日々辰ノ刻ヨリ巳ノ刻マテ素讀ノ事
 - 一 四書五經一讀スルモノ可爲下等事
 - 一 歷史ニ通スルモノ可爲中等事
 - 一 諸子百家ノ書ニ通スル者可爲上等事
 - 一 月ニ六日_{一六}ノ日四書五經ニ通スル者輪講ノ事
 - 一 教示方毎月學ノ次第ヲ檢査シ等級ヲ改ル事
 - 一 歳ノ初論學ノ高下可加小教助事
 - 一 月ニ六日_{三八}ノ日教示方講釋ノ事
- 以上

筆學所定則

學制

學事上ノ諸制度 性質優良學業拔群ノ輩ハ不次昇進或ハ特別登庸ノ獎勵法アリト雖今其書類散佚シテ詳ナラス
士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ヘ必ス入學セシメ餘暇猶家塾ニ於テ修學スルハ各自ノ意向ニ任ス而シテ往々學業篤志
ノ者ヲ選擇シ藩費ヲ以テ他國ヘ遊學セシメタリキ且藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルヲ每月三次トス
平民ノ子弟教育方法 維新後初テ藩立學校ヘ入學スルヲ許可セリト雖多ク慣例ニ依リ家塾寺子屋ニテ修學スルヲ常トス
家塾寺子屋設置ノ制度 何人ヲ問ハス各自ノ自由ニ任セ之ヲ開設スルヲ得セシメタリキ

學校

校名 享保年度創建シ日新堂ト稱ス

校舎所在地 曾テ本村字山ノ手町ナル地ニアリシカ校舎狹小ニシテ生徒ヲ教育スルニ不便ナルヲ以テ文久年間宇南主水
町ナル官邸ヲ増築シテ玆ニ移轉セリ

沿革要略 天保年間舊藩主松平義建ノ世ヲ襲キ儒術ヲ尊崇セシヲ以テ其封國ニ就キ屢學校ニ臨ミ右文左武ノ四字ヲ講堂

ニ掲ケ子弟ヲ獎勵セリ因テ爾後學事頗ル振起シタリキ

教則 教科用書ハ孝經大學中庸論語孟子詩經書經及國史畧日本外史皇朝史略日本政記左氏傳史記前後漢書等授業ノ方法
ハ大率ネ四書五經ノ素讀ヲ了リ經書ハ講義或ハ輪讀歷史ハ質問或ハ輪讀セシメタリ

學科學規試驗法及ヒ諸則 皇漢學及算術筆道ノ三科トス尤モ弓馬槍劍等ハ別ニ教場アリ凡ソ子弟輩ハ素ヨリ文武兩道ヲ
兼修セシムト雖文學武術ト比較ノ程度ヲ設ケス且學期ハ上中下ノ三等ニ分チ之ヲ三年ニシテ卒ヘシメ試驗ノ際昇等ノ
者ニハ書籍ヲ以テ賞與シ加之毎月學力ノ進否ニ隨ヒ素讀或ハ講義ヲ試ミ句讀ヲ誤ラヌ義理明解セル者ハ紙筆ヲ以テ賞
與セリ入學ノ節ハ禮服着用スルヲ例トス

職名及ヒ俸祿 維新前ニ於テハ總教壹人他ノ役員ヨリ之ヲ兼務セシメ必ス教授壹人役料米拾貳石ナリシカ維新後職名改正文武總督

壹人役料米三拾石文武監壹人役料米拾貳石教授壹人役料米拾貳石置キ明治四年名古屋藩ヘ合併更ニ助教二名月給金ヲ以テ一切

教育ノ事ヲ管セシメタリ但文武總督及ヒ文武監ノ如キハ多クハ亦兼務ナルヲ以テ役料必シモ本文ノ限ニ非ス

職員概數 維新前書生正座五名或ハ六七名門番貳人維新後教授壹人監事壹人助教三人訓導八人門衛貳人名古屋藩合併後

大參事兼總裁 八十石○大屬兼學監 十五石○教授 六石○小教授 二石○醫師頭取 五石○教授 二石

職員概數 職名ノ項ニ出テタル外書記二名使丁二名アルノミ

生徒ノ概數 通學生凡ソ四十有餘名ニシテ寄宿生ナシ

束脩謝儀 一切無之

學館費 一周年凡ソ五十六兩ニシテ明治四年ノ實費五十二兩設立以來廢館マテ多少増減アルモ概略六十兩以內ナリ且初年ハ文武諸器械等購入スルコトアリテ同年ノ費額等ハ今不詳

藩主臨館 藩主臨館シテ定日ニハ教授及ヒ生徒ノ講義ヲ聽聞シ又時トシテ自カラ經史ヲ講義スルコトアリ然レトモ其定

日ナシ且ツ生徒ノ學業ヲ試ムルコト等一切ナシ

祭儀 聖廟ノ設置ナシ然レモ春秋兩度^{二八}上酉ノ日ヲ以テ聖像ヘ神酒神餅ヲ供シ藩主教授及ヒ生徒等之ヲ拜ス禮典不詳

學校構造及建物圖面 地坪八十四坪 建坪四十八坪五合 構造和風瓦葺

學校ニテ出版翻刻セシ書籍無之藏書種類不詳右ノ外蒐錄スヘキ事無之

右諸項ハ舊藩吏或ハ實際見聞セシ人ノ口碑ヨリ得タルモノニシテ記錄等ヨリ調査セシモノ僅々五六項ニ過キサレニ付誤謬ナシト云フ可カラス

雜記

江戸藩第二於テ文武講究所ニツニ分チ文事ヲ學フ所ヲ學問場ト云ヒ武ヲ講スル所ヲ武藝場ト云フ學問場ニ在リテハ文久年間ヨリ夏目嘉右衛門^{朱子}學派ヲ以テ儒官トシ常ニ三四ノ助教ヲ置キ士族子弟ヲ教導セリ學制等ニ至リテハ一般ノ法則ナク且ツ輕輩ノ子弟ニ至リテハ他藩儒士ニ就キ或ハ家塾寺子屋等其脩學ハ各自ノ意向ニ任ス武藝場ニ於テハ輕輩ハ乘馬ヲ除クノ外士族ト共ニ修業スルヲ許ルセリト云フ然レトモ其經費額并ニ開設年限及ヒ布令諭達等ノ書類散逸シテ一ツモ存スルモノナク只該藩ノ古老ニ就テ傳聞ノ儘錄スルヲ以テ誤謬モ亦多カルヘシ

一七十石^{但役料不詳}夏目嘉右衛門

一助教ハ多ク生徒中ノ俊逸ナルモノヲ以テ充之役料等不詳

一本館ノ藏書ハ該縣廢止ノ際本縣ヘ引繼明治八年御省ノ御指揮ニ因リ上送セシモノアリ又殘ハ裁許ヲ經テ舊藩藏書籍ト併セテ賣却セリ今其書目錄詳カナラサルヲ以テ本文中書籍種類不詳ト書ス

舊高須藩

校舍所在地 大垣外側町ニ在リ即今建坪ヲ減シテ
與文第一校トス後分校シ舊藩主本邸ヲ南校トス本馬場町即今ニ武學校ヲ置ク

沿革要略 天保八年舊藩主戸田氏庸ノ時代ニ於テ儒學ヲ尊崇シ致道館ヲ設立ス闔藩子弟ヲシテ皆ナ學ニ入ラシム家宰戸田醉翁主唱シ岡田主齡藩士菱田清次平民等與ツテカメクリ其後漸次盛昌文久万延ノ頃一層規模ヲ大ニシ講堂學寮ヲ増築シ新ニ聖廟ヲ建設シ他國子弟モ入學ヲ許ス藩執政小原二兵衛參政高岡三郎兵衛等之ヲ規畫シ井上莊次郎井田徹助同五藏野村龍之助佐藤覺太夫岩瀬中藏等與ツテ力アリ迄テ維新ノ際文武ノ諸學ヲ備ヘ制度一新セリ後又洋學教師ヲ聘シ南北ニ分校シ洋學ヲ兼教ユ

教則

教科用書 經書ハ四書五經十三經等ノ類、歴史ハ左國史漢資治通鑑通鑑綱目綱鑑易知錄杜氏通典廿一史ノ類、文章ハ文章軌範八大家文讀本韓柳文文體明辨ノ類、和歴史ハ大日本史日本外史古事記舊事記類聚國史日本記ノ類、授業ノ順序 四書五經ノ句讀ヲ初メ古文文選等ヲ習熟スレハ小學近思錄等ヲ講シ次テ四書ヲ講習セシム傍ラ歴史ノ輪講等ヲ爲ス又二八等ノ日ヲ以テ詩文ノ課題ヲ定メ作案セシム授業ノ時間ハ舊午前五ツ時ヨリ正午迄トス或ハ冬時ハ夜學ノ課ヲ立ツルアリ

學科學規試驗法及ヒ諸則

和學但此科ハ維新ノ後設置ス 漢學 洋學英佛獨 醫學漢洋 算珠、筆 筆道 以上ハ文學校ニテ教授ス兵學 弓此科ハ近時其用衰ヘタルヲ以テ其家ニ就テ學フ 馬 槍 劍 砲術 柔術 游泳 以上武學校ニ屬シテ教授ス

生徒ハ必文武兩道ヲ兼修スルノモノト雖四書五經ノ句讀ヲ了セサルモノ武學校ニ入ルヲ許サス然レモ年邁ノ徒ハ或ハ一科ヲ專修スルヲ許可スルアリ 生徒學習ノ期限ハ年齡八歳ニシテ文學校ニ入り十五年ヲ退學ノ期トス夫ヨリ武學ニ從事スルモノトス 學科課程ヲ幾級ニ分チ毎月廿五日小試驗ヲ施シ無失ノ者ニ些少ノ賞品ヲ給ス又歲終ニ大試驗ヲ施シ及第ノ者ハ進級セシメ紙筆或ハ金幣ヲ賞與シ藩主不時臨席ス 訓條罰則等準備セリト雖モ廢校ノ后書類散佚シ今其詳目ヲ知ル能ハス 生徒入學許可ノ節ハ禮服用先ツ聖廟ヲ拜シ次テ教官ニ謁スルヲ例トス

但文學ト武術ト程度ノ比例定則無之

文學校規則

一經義ハ固ヨリ研究スヘキ所ト雖畢生未疎チ穿鑿シ徒ニ彫蟲トナルハ無益ノヲナレハ博ク漢蘭歴史ヲ通覽シ字内ノ

助教二人訓導二人諸生引立五人門衛壹人トス但名古屋藩合併後助教始教員ハ舊高須藩士ヲ以テ之ニ充ツ

生徒概數 私費寄宿生七八名通學生三百名内外維新前後大畧増減ナシ

束脩謝儀 總テ之ヲ要セス

學校經費 享保年間創立ノ際舊藩主手元金三百兩ヲ附與シ以テ學資トナシ該利子ヲ以テ學費ニ充テリ爾後變更ナシ

藩主臨校 春秋兩度ノ釋菜及ヒ不時臨校シテ一般生徒ト共ニ講義ヲ聽取セルアリ

祭儀 聖像ノ畫幅ヲ掲ケ春秋兩度釋菜ノ典ヲ舉ク其際樂ヲ奏シ神饌ヲ供スルノ儀アリ

學校ノ構造及ヒ建物圖面 地坪三百五拾坪建坪六拾五坪 別紙圖面ヲ添ユ

舊大垣藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達等詳ナラスト雖士族ノ者二六ノ日ニハ大人四九ノ日ニハ幼童必學問所ニ出頭シ其大人

ニハ論孟幼者ニハ小學内外篇ノ聽講ヲ爲サシム 學業上進ノ者ハ藩士ノ子弟ハ召出シ扶持ヲ與ヘ或ハ家督人ハ家祿加増ノ典アリ且農商ト雖學力德行アルハ特別士列ニ加ヘ或ハ扶持ヲ相當ノ身分取扱ヒ等アリ

士族卒ノ子弟教育方法 維新前ノ比ヨリハ必藩校ヘ入學セシメシナリ其以前ハ學問所ト唱ヘ漢籍素讀講義而已教授スル

者ニ係レハ各自ノ意向ニヨリ習字算ヲ始メ其他ノ伎藝皆家塾ニ就テ學フノ風習ナリ 藩費ヲ以テ他國ヘ遊學セシメ及

ヒ私費遊學ハ許可ヲ得ル例ナリ維新前頗ル多シ 維新ノ比藩治改革ノ際學制亦改リ文武從事ノ者ハ云フニ及ハス月々

日並ヲ定メ學校ニ出テ聽講スルノ規法タリ

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學スルノミ但維新ノ比ヨリ篤志ノ者ハ藩校ヘ入學ヲ許可セリ 農民ト雖學ニ從

事スルハ美事トシテ其篤行者ハ優待ノ特典等アリ

家塾寺子屋設置ノ制度 何人タリモ自由ニ開設スルヲ得奉行里正等ノ許可及ヒ檢束等ヲ受クル事ナシ

學校

校名 初メ致道館後ニ敬教堂ト改メ明治維新ノ後藩主住居表書院及大玄關中玄關等ヲ以テ假學校トシ皇漢學及習字ヲ教ヘ是ヲ南校ト稱ス敬教堂ニテ洋學ヲ教ヘ是ヲ北校ト改稱ス

武學校規則

一學術ヲ研究シ隊伍ヲ精練シ一和ノ強兵ヲ旨トシテ專ラ國家保全ヲ心掛クヘキ事

一文學校ニテ四年以上ノ勤學ヲ經サルモノハ此學校ニ入ルヲ許サル事

一生徒ノ入學ハ年齡十二歳ヲ以テ始トスル事但學術ニヨリ十六歳ヲ初年トス

一入學ノ式ハ毎月十五日ノ事但學監出席シテ師弟ノ契約ヲナサシムル事

一生徒ノ教授ハ第八字ニ始リ第十二字ニ終リ又第二字ニ始メ第五字ニ終ル間時ハ局外ニ出テ隨意ニ遊歩シ身體ノ健康ヲ保育スヘキ事

一藩主ノ鑒閱諸教官ノ出席生徒ノ賞罰等凡テ文學校ノ規則ニ準ス

試業出席ノ職員 執政 參政 惣督 督學 學監

一毎月一度諸隊放射ヲナシ三ヶ月毎ニ射表錄ヲ武學校ヨリ軍務官ニ達シ中數第一等ノ隊ヘ物ヲ賜フ事但各隊放射ノ

日學監出席中數ヲ檢査ノ事

一學校中教場ヲ分ツテ八局トス

兵學局 洋學局 化學局 測量局 砲術局 馬術局 擊劍局 拳搏局

一學科ヲ分ツテ十五科トス

地理 究理 含密 器械 書圖 測量 兵法 築城 砲術 操法 火科 馬術 擊劍 拳搏 跳躍

職名及俸祿

總督一員 督學一員 全參謀一員 學監三員 講官無定員 準講官全 句讀師全 副句讀師全 書記二員 使部三四員

但維新前ノ職名ナリ其總督ハ藩ノ年寄用人等ニテ兼務ス督學ハ教頭ナリ講官助教ハ講義ニ從事シ句讀師ハ素讀ヲ司

ル役料ハ各自家祿アルヲ以テ別ニ附サス但他藩及領民等ヨリ雇入ル、時ハ扶持米ヲ給ス身分取扱ハ講官以下ヲ儒者

ト稱シ代官役舊郡宰ノ下同 治民ノ吏ナリノ次席トス平民等ヨリ雇入ル時ハ苗字帶刀ヲ許シ士分ノ格ニ扱フ維新ノ后ハ督學教授三等ニ

助教心得ト改稱ス督學ハ參事兼之、一等教授ハ權大屬二等ハ少屬三等ハ權少屬ノ次トシ助教ハ史生ノ次ト爲ス月俸

ハ最高等ヲ百圓以下五十圓三十圓二十圓十圓ニ區別ス最下ヲ四圓トス

職員概數 教員凡六拾名事務員凡六名使掌六名門衛三名但維新前ハ凡此半數トス

生徒概數 寄宿生凡百名通學生凡四百名但維新前ハ寄宿生廿名ニ不過 寄宿生費悉皆藩費但一員ニ付一口米ヲ私出スルモノトス尤他藩入

形勢事情ヲ洞觀シ 皇道ヲ輔翼スルヲ以テ可爲肝要事

一文章ハ道ヲ得ルノ筈蹄ナリ自ラ書フ能ハサレハ書籍ノ文義ヲ取違ウルヲアリ故ニ必ス其意ヲ達スル程ニ修行スヘシ詩ハ事物ニ感シ風月ヲ吟咏シ固陋執滯ヲ開達スルノ益アレハ餘力ニ作り習フヘシ

一文武教場ヲ分ツト雖文不廢武武不離文兩輪協力ノ心得アルヘキ事

一書生バ八歳ヨリ入學ノ事

一寄宿生ハ十五歳ヨリ入寮ノ事但秀才ノ者不在此限事

一諸生貴賤ヲ論セス長幼ヲ以テ次第スヘシ但社長局長等ハ學力ノ深淺ヲ量ツテ任選スレハ貴長ヲ狹マス專ラ遜讓スヘキ事

一諸生怠惰放肆ノ者ハ師長再三教諭ヲ加ヘ尙不改者ハ督學ヘ達シ罰科ニ處スヘキ事

一毎月初五日復讀念五日復讀致サセ學業ノ成否ヲ試ミ三冬ニ至リ學力ノ深淺ニ隨ヒ大ニ課業試之事

一毎月初九日詩會十九日文會之事但詩文未出來者古人ノ詩文ヲ背記誦讀致サスヘキ事

一輪讀輪講ハ同等書生組合相定可致切磋事但講官社長ノ内出席ノ事

一諸生毎朝辰牌入寮之事

一正月十七日八道集發講ノ事但八道集ハ藩祖ノ所著ナルヲ以テナリ

一毎月講釋左ノ定日諸隊長部下ヲ引卒シ正辰牌昇堂

二日、奇擊隊 四日、正衛隊 八日、奇擊隊 十日、正衛隊 十二日、奇擊隊 十八日、正衛隊 十九日、諸隊長 三日、隊外之生兵 六之日、執政參政諸文官長等昇堂治國要務ノ書籍ヲ會讀ス

一毎歲晚諸生學業ノ成否勤惰ヲ取調賞罰ノ事

一諸教官日々出勤ノ事

一惣督督學不時出席ノ事

一藩主不時鑒閱ノ事

一大成殿釋奠二月八月上丁ニ可執行事

一諸寮區別左ノ通り

講習寮 句讀寮 習書寮 數學寮 醫學寮 責過寮 (但各寮規則別ニアリ畧ス)

ト變スルニ至ル砲術モ亦其初ハ荻野流ヲ學ヒ後チ竟ニ西洋術ニ變ス

學校

校名 江戸藩邸内ニ於テ濟美館ト稱シ明治元年藩主大垣ニ移リ典學寮ト改稱シ後明治三年野村ニ學校ヲ創立シ亦典學寮ト稱ス

校舍所在地 美濃國大野郡野村

沿革要略 文久三年十一月江戸櫻田邸内ニ學校ヲ創設シ濟美館ト名ク明治元年美濃國大垣ニ移シ又明治三年之ヲ同國大

野郡野村ニ移ス其時學校設立ニ盡力セシ人名又學士ハ左ノ如シ

家老栢植唯之進 藩主ノ本藩ヨリ入ル傳トナリ來リテ闔藩ヲシテ學事擴張セシムルノ首唱タリ○家老島村衛士 栢

植唯之進ト同心協力シテ學事ヲ擴張セシム○側役小山小隼太 夙ニ西洋砲術ノ利アルヲ知リ衆ニ先チ之ヲ學ヒ及ヒ

學校創立ノ事務ニ盡カス○劔術教授島村勇雄 舊幕府麾下久保田助太郎ニ就キ劔術ヲ學フヲ數年後藩士ヲシテ其術

ヲ學ハシム學派ハ田宮流○劔術教授淺羽守雄 島村勇雄ニ從ヒ劔術ヲ學フヲ多年又馬術砲術ニ達シ皆其師ノ免許狀

ヲ得タリ○漢學教授鈴木重遠 舊山形藩儒官鹽谷甲藏塾ニ五年修學ス學派ハ折衷學維新ノ後亞米利加輿地誌畧日本

史畧ヲ著ス

教則

教科用書及授業時間

午前八時ヨリ	九時ヨリ	十時ヨリ	十一時ヨリ	午後一時ヨリ	二時ヨリ	三時ヨリ
漢學素讀	講義	洋學	講義	習字	數學	兵學
四書、五經	日本外史、國史畧、十八史畧、元明史畧	連綴、單語、文典、地理書、窮理書	四書、史記、左傳	私用文、公用文、千字文	加減乗除ヨリ開平開立マテ	野習操練撒兵雨天ハ場内ニ於テ技術演習劔術

學生ハ私費トス

束脩謝義 無之

學校經費 一周年金二千兩(但南北校分校ノ後ニ定ム其以前定額ナシ)

藩主臨校 不時臨校生徒ノ試業ヲ爲シ或ハ時日ヲ期シテ臨校生徒ト共ニ聽講ノ事アリ時トシテ詩文ノ會廷ヲ開キ詞藻ヲ戰ハシメ其優劣ヲ判シ慰勞ノ宴ヲ開ク等ノ事儘アリ

祭儀 聖廟ニ於テ春秋ノ中月上丁ノ日釋奠ヲ行フ其式粗昌平蠻ノ儀ニ準フト云督學祭主トナリ藩主束帶シテ拜禮アリ次ニ教官生徒拜禮ス其供徹ニハ伶人樂ヲ奏ス徹禮ノ後士庶普ク拜禮ヲ縱ル

學校構造 和風平屋瓦葺 建坪二百三十六坪半

右北校ト稱ヘ從前ノ敬教堂ヨリ相續シ即今公立小學興文第一校ト爲セルモノ略圖別紙ノ通り

南校ハ維新ノ後舊藩主本邸宅ヲ使用セシカ廢校ノ後戸田家ヨリ賣却他ヘ持チ去レリ其敷地ハ現今監獄署ト爲レリ

武學校ハ本馬場町即今船町操練所内ニ設置アリシカ廢校ノ後取毀チ敷地ハ人民居住地トナル

學校ニテ出版書籍等 救荒事宜齋藤正謙著

一冊 但藏書部數詳ナラス

舊野村藩

學制

學事上ノ諸制度 文久三癸亥年十一月藩主戸田氏良創メテ學校濟美館ヲ江戸外櫻田邸内ニ設ケ藩士ヲシテ文武ノ道藝ヲ研習セシムルノ布令アリ其後學業精勤ノ者ハ年々賞金ヲ與ヘ又二三年ヲ經テ俸祿ヲ増シ以テ之ヲ獎勵勉學セシム其布令制規ノ書類等ハ廢藩後散佚シテ詳ナラス

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校設立以前ハ藩士多クハ各自ノ意向ニ任セ和學漢學醫學洋學算法習字習禮及ヒ兵術弓馬槍劍砲術柔術游泳等藩中其術ニ長スル者ニ就キ又ハ他ノ藩ノ師ニ從ヒ修學ス獨劍術砲術ハ藩費ヲ以テ之ヲ支辨ス其他漢學生壹人藩費ヲ以テ他藩ノ人ニ就キ之ヲ學ハシム維新以來東京ニ遊學スル者七人アリ皆藩費ニテ學ハシム

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシノミ藩學ヘ入學ノ儀ハ別ニ禁セシナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スル者ハ其筋ヘ屈置クノミ何人タリモ之ヲ開設スルヲ得

右ノ外藩士ノ兵學ニ於ル初ハ多クハ山鹿流ヲ學ヒ一變シテ北條流ト爲リ又變シテ阿蘭陀陣法ト爲シ英吉利ト爲リ佛蘭西

學制

學事上ノ諸制度 天明度學校創設ノキ學問ノ必要ナル由縁ヲ明示シ自今藩士卒ヲノ子弟タルモノ必學問ニ就キ勵精スヘキ旨ヲ布令シ其講義ノ日ニハ藩士六十歳以下十三歳以上ノモノ出席聽聞スルモノトセリ慶應年間ニ至リ校舍改造ノキ藩用窘窮ニ際シ館舍ヲ改築スルノ意ヲ体シ一層文武ニ勉勵スヘキ旨ヲ諭達シ又明治初年ニ於テ天下ノ形勢上ヨリ説起シテ學事ヲ獎勵スルノ諭達アリ尙其間數回ノ示達等アリタリトイフモ舊記ノ其明文ヲ徵スヘキモノ一モ存スルナキヲ以今之ヲ掲クルヲ得ス又學業上進及出精ノ者ニハ毎年其等差ニヨリ夫々褒賞ノ典ヲ行フヲ例トセシモ別ニ學業上進ノ生徒タルモノニ祿米ヲ與フルノ法ハアラサリキ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ハ必ス入學維新後ハ卒ニセシムルノ法ニシテ餘暇家塾等ニ就キ脩學スルヲ妨ケス藩費ヲ以他國ニ遊學セシメシハ明治戊辰年京師ニ三名ヲ遣ハセシノミ私費遊學ノ如キモ維新前ニ於テ數名ノ志願ヲ許可セシヲアリ又藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルハ學校創設以來ノ制ニシテ維新後ハ卒ニモ之ヲ及ホシ兵隊ニハ別ニ日時ヲ定メテ聽聞セシムルノ法ナリキ

平民ノ子弟教育方法 従前ハ家塾寺子屋等ニテ修學セシノミナリシカ明治二年ノ頃ニ至リ藩立學校ヘ入學ヲ許可セリ家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ノ開設ハ別ニ郡宰里正等ノ許可ヲ要セス自由ニ開設ス

學校

校名 元ト講堂ト稱シ潜龍館ト號セシカ後チ校舍改築ノトキ文武館ト改稱シ維新後明治二年ノ頃更ニ又名稱ヲ集成館ト改メク

校舍所在地 元ト本郡八幡柳町ニアリシカ改造シテ同殿町ニ移セリ共ニ今ノ八幡町ニ屬ス

沿革要略 學校創立ハ天明度ニアリトイフモ其干支ヲ詳ニセス舊藩主青山幸完、幸禮、幸哉、及ヒ幸宜ノト殊ニ儒學ヲ尊崇勸奨シ前キニ京師ノ儒者江村北海ヲ招聘シテ客師トシテ儒道ノ講明ヲ求メ又杉岡道敬亦京師ノ儒者ヲ聘シテ指南トシ以テ藩士ヲ獎勵スルノ學アリ後幸哉當國武儀郡上有知村ノ人村瀬藤城ヲ延キテ時々經史ノ講釋ヲ依托セシヲアリ降リテ幸宜ノキニ至リ維新ニ際シ文武ノ獎勵ヲ加フル前日ノ比ニアラス乃チ當國中島郡ノ八入山謙受ヲ招聘シテ一藩ノ指南トシ尙京師ノ儒生山田翠雨ヲ聘シテ客師トセリ後チ藩政改革ニヨリ更ニ學事ニ從事スル吏員教師等ヲ改定シ文學ノ道旺

學科學規試驗及ヒ諸則

學科ハ前項記載ノ如シ其他弓馬槍劍等ハ小藩ニシテ記載スヘキモノ無シ文學ト武術ト程度ノ比例モ相設ケス此外試驗等詳ナラス

學則

一コノ學ノ要タルヤ三綱五常ヲ專攻シ文武ノ道藝ヲ講究シ政刑教化ノ基ヲ開キ智識ヲ廣メ德義ヲ成シ以テ宇宙古今ニ洞達シ以テ格物窮理ニ精研シ而シテ異日國家ノ實用ニ供フル所ナレハ舊來ノ偏見ヲ除キ陋習ヲ破リ至大至明ノ志ヲ立テ夙夜ニ黽勉踐履スルヲ以テ急務トス

一同學同社ハ宜シク平心虛懷切磋琢磨シテ信義ヲ貴ヒ浮薄ヲ責メ水ノ如キノ淡キヲ守リ體ノ如キノ甘キヲ退ケ四倫ノ道ヲ輔ケ行フヲ要トスヘシ

一文武ハ一ニシテ二ナラサルハ勿論ノコナレバ文道ニ達セスジテ武道遂ニ成ラサルコナレハ内外本末ヲ能ク體認シテ其詳ヲ得サル可ラス其詳ナル則和漢西洋諸書ノ載スル所即文武ノ道ノアル所學者着眼ノ第一トス

一言行一致ハ勿論恭遜溫順以テ進退周旋禮ニアタランコトヲ緊要トス虛喝疎暴才ニ誇リ人ヲ侮ル學者ノ大ニ戒ムル所業生日夜之ヲ遵ニ服セヨ

職名及ヒ俸祿 (但維新後ノ計畫ニシテ維新前ハ記載スヘキモノ無之以下倣之)

少參事兼武學總督一人○權少參事兼文學總督一人○金六拾壹兩貳分 習書教授一人○金三拾兩 擊劍教授一人○金三拾九兩 國學教授一人○金三拾九兩 宣教附屬一人○金貳拾九兩壹分ツ、句讀師一人○金貳拾九兩壹分 同一人○金貳拾九兩壹分 同一人○金貳拾六兩 醫師一人○金貳拾兩壹分 數學助教一人○金貳拾九兩壹分 洋學得業生一人○金三拾六兩三分 數學助教一人○金拾壹兩壹分 句讀師一人○金五拾貳兩 縣外修業一人生徒概數 八十人皆通學

藩主臨校 藩主臨時ニ臨校シテ講義ヲ聽聞ス

學校建物圖面 別紙ニ載ス

藏書ノ種類 別ニ掲ク

舊郡上藩

一支那西洋ノ學ハ共ニ皇道ノ羽翼タル事

一虛文空論ヲ禁シ著實ニ脩行可致事

一皇學支那學共ニ互ニ是非ヲ爭ヒ固我之偏執不可有之事

一八歳ヨリ入學相定候事

職名及俸給 維新藩政改革前ニアリテハ指南定員ナシ執引同助教同上職アリテ指南執引ノモノニハ年ニ正米壹俵ツ、役料トシ

テ之ヲ給セリ其後ハ藩廳ニ少參事中一名專ラ文武ノ事ヲ負擔スルアリ名アリ學校ニ督學一名官祿二石大助教二名官祿十石少

助教一名官祿六石宛大寮長一名官祿十三石二斗少寮長一名官祿十石四斗置ケリ外ニ助手タルモノ十餘名アリ又座席身分取扱ヘ其職アルカ爲メニ異ナル所ト

テハアラサリキ維新前ト學制頒布前トノ計査區別詳ナラス

職員概數 職員ハ維新藩政改革前指南概テ二名執引概テ二名助教十名許小使一名其後督學一名大助教二名少助教二名大

寮長一名少寮長一名門衛小使兼スルモノ二名トス尙客師一名助手タルモノ十餘名アリ

生徒概數 維新前通學生徒大約百五十名維新後寄宿生約三十名通學生百八十名其寄宿生徒ハ定員ナク藩費ハ塾舎修繕ノ

外薪炭油ヲ給スルノミ

束脩謝儀 束脩謝儀共無之

學校經費 學費ハ定額アリシチ聞カス又一周年ノ實費幾許ナリシヤ今調査スルニ由ナシ蓋維新後ニアリテハ概略年金千

百五十餘兩ヲ要セシナルヘク其前ニアリテハ其五分ノ一ニ過キサルヘキカ又學費ヲ藩士ニ賦課スルカ如キハ非サリキ

藩主臨校 維新後ニアリテハ講義ノ節ハ藩主必臨校シテ之ヲ聽聞シ及ヒ生徒輪講ノホモ大抵臨校セリ

祭儀 聖廟ノ設ケナシト雖冬至ノ日ニハ聖像ヲ祭祀スルニ適宜肉及菜ヲ以テセリ

學校構造及建物圖面 舊校ハ地坪凡四十坪建坪凡三十坪改築ノ校ハ地坪凡二百五十五坪建坪凡百五十坪

學校藏書ノ種類部數 學校藏書ノ種類部數ハ甚タ分明ナラサレモ今之ヲ追思シ記載スル概テ左ノ如シ(學校ニテ出版反刻セシ書籍無之)

經書之部凡十二部許 史誌之部凡九部許 字書之部凡五部許 襍書之部凡五十七部許

醫學校(但維新ノ際設置セシモノニシテ左記ノ外詳ナラス)

校舎所在地 郡上郡八幡町設置

一米三十六斗金百貳拾五兩 醫學校諸費

盛ナル本藩前代ニ未タ有ラサル所ノ點ニ達セリ

敎則 敎科用書ハ維新前ハ孝經小學四書五經文選ヲ授ケ優等ノモノニ課スルハ左傳十八史略近思錄蒙求ノ類ニシテ其後ハ日本外史ヲ加ヘ尙國史略皇朝史略日本政記通議實治通鑑通鑑要貞觀政要文章軌範八大家讀本古文元明史畧靖獻遺言劉向說苑韓非子史記等ノ類ヲ用テ授業ハ孝經小學ヨリ四書五經等素讀ヲ科シ其間四書史類ノ講義ヲ聽聞セシムルヲ法トシ其素讀ヲ了リシモノ各別ニ講習セシムルニハ十八史畧蒙求ノ類ヨリ始メ漸ク其易キヨリ入ラシムルノ順序ニシテ講解ヲ授クルハ勿論其書ニヨリテハ質問セシムルニ止マルヲアリ又輪講ノ法ニヨリ其業ヲ研究セシムルモノトセリ時間ハ素讀ハ毎日辰刻ヨリ始ムルモノトシ朔日十五日ヲ放學トス講義ハ一六ノ日申刻ヨリ開キ各別講義質問ハ素讀ト時間ヲ同フス輪講ハ時々其日時大抵月六回ヲ定メ之ヲ行ハシメリ

學科 學科ハ元ト漢學ノミナリシカ文武館タリシ以來筆道及ヒ兵學槍劍等ノ諸武藝ヲ加ヘ元ト他場ニ於テス後チ又算法習禮ヲ授クルコト爲シ明治二年ノ頃ヨリ武藝ハ擊劍ノ外是場ニ於テスルヲ廢セリ又生徒ニハ必文武兩道ヲ兼備セシムルヲ要セス文武程度ノ比例ハ詳ナラサレモ師範タルモノ、待遇方等既ニ平衡ヲ得隨フテ生徒學業上ニ於ケルモ大抵程度相均シキカ如シ生徒學習ノ期限ハ年齡八歲ヨリ入學スルモノトシ維新前ニアリテハ前條ニ記スル孝經以下文選マテノ素讀ヲ卒業スルキハ藩ヨリ除籍ノ命アリテ其後ハ別會ニ入ラシメ輪講等ヲ爲サシムルヲ法トシ維新後ハ學科九級ノ月旦評ヲ製シ之ヲ卒ヘシムルヲ目途トス又臨時大試驗ヲ施行シ藩主或ハ重役ノ聽聞アリ生徒賞與ノ法ハ每年勤怠ヲ案シ學業上進ヲ量リ賞品授付若シハ褒詞ヲ加フルモノトセリ生徒訓條ハ忠信孝悌ハ勿論灑掃應對ヨリ一切生徒タルヘキモノ心得ヘキ普通ノ件劇席斷出方ニ至ルマテ明文ノ規則アリシモノ今コレヲ徵スルノ文書存セルヲ見フ入學ノモノ及ヒ每年學校開閉ノ日新年等ニハ羽織袴或ハ禮服着用師家ヘ回禮スルヲ慣例トセリ

學則

從一級至九級固雖不許躡等視其成立進學階進一級蓋擬月旦評也故每月以念八日改其品題

一級生就三級或二級之上生受敎 二級生就三級以上之者受敎 授講之制三人講三書於三日但從巳牌至午牌 素讀從

辰牌至巳牌 輪講限七之日但從辰牌至巳牌 放學一六

右以明治三年庚午正月爲起頭

校則

一國體ヲ辨シ名分ヲ正スヘキ事

シテ武術ヲ獎勵セシムルノ一端トス

士族卒ノ子弟教育方法 舊來藩立學校アリト雖必入學セシムルノ制ナク各自ノ意向ニ任セ或ハ家塾ニテ修行スルモアリ藩費ヲ以テ他國へ遊學セシムルモアリ又私費ニテ遊學ヲ請フモノハ或ハ學力ニ依テ許可スルコトアリ而シテ明治ノ初年ニ至リ大ニ學制ヲ改革シ藩内ノ子女必藩立學校へ入學セシメ且藩主ハ時日ヲ定メ學生ヲシテ必ス講義セシメ老少ヲ論セス渾テ藩内ノ者ヲシテ聽聞スルコトヲ許ス

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ士族卒ト異ニシテ學制ヲ達スルナク家塾寺子屋ニテ專ラ修學ヲ終ヘリ然レモ決シテ藩立學校へ入學ヲ禁スル等ノ制ナク假令農工商ノ子弟タリモ各自ノ意向ニ任セ學事ニ從事シ或ハ藩學校へ入ルモ其人々ノ隨意ニ任セリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルモ奉行郡奉行等ノ許可ヲ得他ノ檢束ヲ受ルナク何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得ルナリ但明治初年藩制ヲ改革シ士族卒子弟ハ家塾寺子屋等へ入學スルヲ禁シ藩學校へ入學セシメタリ右ノ外圖藩學事上ノ事項ニシテ編史ノ資料及參考ニ供スヘキモノ之ナシ

學校

校名 設立ノ始メ學問所ト稱ヘ文政年度憲章館トシ文久年度ニ至リ文武ヲ合併シ文武館ト稱ス

校舍所在地 厚見郡舊加納城内丸ノ内字中門

沿革要畧 學校創立ノ年度分明ナラス中興七代目藩主從五位永井尙佐儒學ヲ尊崇シ藩内ニ於テ學事擴張ヲ量リ校名ヲ憲章館ト改稱シ藩士ヲ獎勵セシメ時々講義ヲ聽聞ス武術ニ於ルモ又然リ春秋兩度文武ノ優劣ヲ視ル藩主不在ノ節ハ重役

ヲシテ代視セシメ將來ノ上達ヲ期セシメタリ其後制度大ニ亂ル依テ九代目藩主從五位永井尙服文久年中大ニ藩制ヲ變革シ盛ニ土木ヲ起シ文武兩道ヲ合併シ射的塲練兵塲等ヲ開キ一層文武ヲ擴張センコトヲ盡力セリ故ニ藩士等奮勵勉強シテ文武ニ從事シ大ニ面目ヲ改メ疇昔ノ觀ヲ異ニセリ而シテ此改制ニ盡力セシ人名及ヒ該校ニ關係セシ學士等ノ小傳等記載スヘキ著シキ者ナシ廢藩置縣ノ後本館ヲ廢シ明治五年學制頒布ニ際シ本館ヲ以テ小學校ヲ開設シテ憲章館トス敎則 和學古事記國史畧六國史大日本史古今和歌集令義解ノ類漢學孝經四書五經春秋左氏傳文章軌範綱鑑易知錄ノ類ヲ敎授ス授業時間毎朝五ツ時ヨリ七ツ時迄武術課業モ又此時間中ニ於テ修ムルモノトス

學科學規試驗法及諸則

一金百四拾貳兩永六百貳拾五文 貢進生諸費
 一金七拾兩 洋學醫學修行生徒手宛金

江戸邸内學校

校名 講堂ト稱セリニ校舎アリ共ニ爾カ稱ス

校舎所在地 舊江戸青山足輕町及小石川水道橋外ノ二ヶ所上下ニ分在セリ

沿革要略 學校創立ハ天明度ニアリテ舊藩領地ニ學ヲ興セシルト其創始ヲ同クシ維新ノキニ至リ藩士皆藩地ヘ飯住スルニ由リ該邸内ノ學校自ラ廢止ニ屬セリ

教則 學科學規試驗法及諸則 右兩項藩地維新前ノ記事ニ同シ

職名及俸祿

右亦藩地ニ同シ但指南年米三俵ヲ給セリ

職員概數 指南一名助教四名許小使ハ邸内他ノ役所等ニ從事ノモノヨリ之ヲ兼ス

生徒概數 通學生徒約八十名内上邸ノ分五十名許下邸ノ分三十名許

束脩謝儀 學校經費 藩主臨校 祭儀 右四項藩地ノ條ニ記スルカ如シ但經費ハ年金百兩許ヲ要セシナラン

學校構造 下邸ノ校舎ハ藩士岡本勇助指南ノ自宅ニ於テシ上邸ハ邸内ノ側ナル長家ニ於テス其校舎ニ假用スル坪數下邸ノ

分大凡九坪上邸ノ分大凡十五坪ナリシトイフ建物圖面今致フヘカラス

學校藏書 右種類部數藩地ノ條ニ合記ス故ニ畧之

舊加納藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ヨリ布令諭達等時々アリト雖如何セシ當時ノ書類等多ク散亂失亡シテ今ニシテ記スルニ微スヘキ

モノ少シ因リテ儘古老ノ口碑ヲ聞キ該藩學制ノ沿革ヲ記ス

凡學術技藝上達ノ者ニハ加役米又引米等ノ名義ヲ以テ祿稅ヲ免除シ士族或ハ卒ノ子弟タリト雖十五歲未滿ニシテ四書五經ノ素讀ヲ畢リシモノハハ賞品ヲ授與シ又文學武術何藝ニ於テモ一技免許濟ノ者ハ役格或ハ増給等時々必適當ノ賞ヲ與フ又該藩子弟ノ武術ニ達シ免許ヲ得ルモノハハ假令卒族タリトモ一家ヲ取立適當ノ給扶持ヲ與フ是他日士族ナ

一筆學生讀書了ラハ習書寮ニ入ルヘシ但習書中封口ヲ要ス潑墨運筆ヲ濫ニシテ臨本衣裾ニ淋漓シ凡席窓壁ヲ汚スヘカラス只筆法ヲ點檢シテ押書アルヘカラサル事

一入學之式禮忽ニスヘカラサル事但入學八歳ヲ出ヘカラス其兒ノ稟性ニヨリテハ六七歳ヨリ入ヘシ以後入學ノ兒輩ハ修學四年或ハ五六年ヲ經サレハ武館ニ入ルヲ許サス

一學生怠惰放肆ノ者アラハ教官ヨリ再三教誨ヲ加ヘ尙改悟無之者ハ局長ヨリ誨諭スヘシ猶不改者ハ嚴譴アルヘキ事

一諸生毎朝辰牌上館之事

一教授助教日々出勤輪番宿直之事

一試補日々出勤ノ事

一春秋釋奠可執行事

教官

憲章館課業

每朝 授讀〇二七 朝復讀午後數學又童子輩大學講說并返講〇三八 書經、小學、午後講說〇四九 日本外史午後輪

講〇五日十三日廿七日 國史略朝講釋〇五日 午後筆學試業〇十ノ日 午後質問〇十五日 午後和歌詩文會〇廿五

日 終日試業〇一六 放程但堂上堂下掃除之事

右之通御坐候也

元加納縣

職名及ヒ俸祿 學校奉行一名學監一名教授五名ヲ以テ職員トナシ且役料扶持米ヲ要セス持高ヲ以勤務シ座席身分取扱ハ

持格ヲ以テ坐席ヲ定ム之ヲ維新前ノ職制トス其後職名人員改革ナシト雖モ奉行學監年俸十九石五斗ヲ給シ教授方ハ十

九石五斗ヨリ五石貳斗五升ヲ與フ外ニ雜使二名舊時ヨリ使用ス是學制頒布前ニ關スル職制ナリ

職員概數 學校奉行一名學監一名教授方四名算術教授方一名

維新前後ノ區別詳ナラス

生徒概數 藩費寄宿生十六名通學生百九十名

維新前後ノ區別詳ナラス

束脩謝儀ヲ要セス

學校經費 一周年ノ學費米九石金五百八十八圓ヲ以テ之レニ充ツ此他記スヘキモノナシ

藩主臨校 藩主臨校シテ講義聽聞アリ且毎月生徒ノ修業ヲ試驗スルコトアリト雖今記載スヘキモノナシ

和學漢學算法筆道及兵學弓馬槍劍砲術柔術等ヲ教授ス生徒ニハ必ス文武兩道ヲ兼修セシメ文武程度ノ比例ハ確タル法則ナク凡文學ニ通スルモノハ藩ノ教授或ハ助教ニ採用シ或ハ適宜ニ賞與ス賞與ハ格式増給等アリト雖モ多クハ格式一等ヲ進ムルヲ通常トナセリ

文武ノ内一科ヲ專修スルモ文武兩道ヲ兼修スルモ敢テ確タル制規ナシト雖モ兩道ヲ兼修スルヲ以テ通常トシ單ニ一科ヲ專修スルヲ其次トス免許證等ヲ授與スルノ式ナシ

生徒學規及就學年齡ニ定則ナシト雖モ男子ハ七八歳ニ至レハ入學セシメ十三四歳ニ及ハ、武道ヲ兼學セシメ廿五歳ヲ以テ文武ヲ修學シ終ルヲ程度トスルノ習慣ナリ是レ他ニ必起因スル所アルニ依ル然レモ當時ノ書類紛亂失亡シテ今記スルニ因ルヘキモノナシ

春秋ノ試験ニ至リテモ試験規則ナク唯教授者ノ意ニ任スノミ

藩内子弟ノ年齡已ニ就學スル時ニ及ンテ就學セサル者ハ官吏之ヲ譴責シテ以テ必其道ニ入ルヲ促スコトアリ

校則

一 凡學生高明正大之道ニ志ヲ立テ國學漢學誦讀講書綴文詠歌作詩習禮練武之事ハ日間之專業ニ候得共忠孝ヲ以テ基本トナサレハ假令藝能ハ長シタリトモ小人也此意ヲ能體認シ博シ字内ノ史ニ跋涉シ御維新之御政體ヲ遵奉シ古今ノ情態ヲ通鑑シ達材成德シテ國家ノ用ニ可充ヲ要トスル事

一 灑掃應對進退ノ節ヨリ長ヲ敬シ幼ヲ愛シ省察克治修身齊家治國ノ樞要ヲ精察スルハ剛毅ニシテ勉勵スルニアラサレハ成業スヘカサル事

一 御政體ノ失得ヲ私ニ譏議シ或ハ人ノ罪ヲ責テ却テ彼ニ效ヒ或ハ諫ニサカヒ誨ニ戻リ或ハ過ヲ其人ニ告スシテ竊ニ誹リ或ハ偏執ノ心ヲ抱キ人ノ長短ヲ論スル等ノ事決テイタスヘカサル事但討論切磋及ヒ互ニ忠告規諫ノ義ハ友愛ノ至情盡スヘキ事

一 教官ノ令ハ勿論教官ノ教誨ニ戻ルヘカサル事

一 萬事質素淳朴ノ風儀ヲ慕ヒ心志ヲ誠ニシ言語ヲ謹ミ動止ヲ正クシ驕奢カマシキ情地ヲ離レ酒食玩好等ノ醜談イダスヘカサル事

一 館中ハ貴賤ヲ論セス積學アルヲ以テ順序スヘシ禮讓ヲ旨トシテ貴長ヲ挾ムヘカサル事

一 國書經典ハ勿論總テ書籍ハ大切ニイタシ亂帙點汚スヘカサル事

カス乘紀居城ノ後學舎ヲ興立シ後藤松幹門人佐藤勘平ヲ以テ儒員トシ藩士ニ教授セシム其著書四書參考小學參考若干卷アリ次テ服部南郎門人福島子幹等儒員トナル其著書絕句解喪服儀禮井田考等アリ其后天保年度ニ至リ藩主松平乘喬儒教ヲ尊崇スルヲ以テ幕府儒員佐藤一齋門人若山勿堂田邊恕亭ノ兩名ヲ聘シ勿堂ヲシテ江戸詰儒員トシ恕亭ヲ以テ知新館儒員トシ學事ヲ擴張スルヲ以テ藩士及他邦ノ士陸續入學ヲ請願シ頗ル旺盛ヲ極メ續テ元治元年ニ至リ芳野金陵門人原田文嶺ヲ聘シ儒員トナシ知新館内ニ寄宿寮ヲ置藩士及他邦ノ士ヲシテ入寮勉學セシム是即チ闔藩學事沿革ノ要畧ナリ

教則

教科用書ハ孝經小學四書五經左氏傳史記國語文章軌範八家文七書等ト定メ其他ハ各自所好ノ書ヲ授クル者トス授業法ハ孝經ヨリ五經ニ至ル迄素讀ヲ授ケ熟スルヲ待テ教授員講義ヲナシ次テ生徒ニ輪講セシムルモノトシ其他ハ學力ノ優劣ニヨリ和漢歷史及ヒ諸子百家ノ書ヲ輪讀質問講義セシムルヲトス

授業時間ハ午前八時ヨリ十時迄素讀ヲ授ケ隔日二時ヨリ四時迄輪講或ハ會讀ヲナサシメ三八ノ日ヲ以テ教頭講義ヲナシ五ノ日ヲ以テ作文ヲナサシムル者トス且學力優等ノ生徒ニハ臨時執政ヨリ政體ニ關スル問題ヲ下シ對策セシメ藩主ヘ奉ル等ノ制アリ

學科學規試驗法及諸則

和學○漢學 朱子學○算法 關流○筆道 一定ノ法ナシ○習禮 小笠原流○兵學 山鹿流○弓術 大和流○馬術 大坪流○鎗術 無邊流○劍術 一刀流○砲術 久我流○柔術 制剛流 入學ノ生徒ニハ必ス文武両道ヲ兼修セシムルヲ制規トス

文武比例程度ハ四書大義ニ通スル者ヲ以テ武術普通免許ノ者ト同等ノ取扱トス

一科專修ハ四書五經素讀濟ノ上本人ノ望ニヨリ許可スル者トスレモ時宜ニヨリ藩主ヨリ專修ヲ命スルコトアリ學習期限ハ年齡八年ニテ入學シ二十年ニテ退學スルヲ許スモノトスト雖公務ノ緩急ニヨリ臨時退校ヲ命シ又ハ本人ノ志望ニヨリ四書五經素讀濟ノ者ニハ退校ヲ許可スルコトアリ

試驗法ハ春秋兩度ヲ定規トシ藩主并ニ執政列坐ノ上教頭ニ於テ生徒學力ノ優劣ニヨリ差等ヲナシ講義訓解素讀作文等ヲナサシムル者トス賞與法ハ品行完全又ハ一ケ年無欠席ノ者ヘハ年末ニ至リ書籍或ハ物品ヲ授與シ又試業ノ際非常優等ノ者ヘハ藩主自ラ金若干或ハ書籍反物地等ヲ授ケ且校内ニ揭示シ衆庶ヲ獎勵スル等ノ舉アリ

祭儀 釋奠釋菜等ノ禮典ナシ然レモ新年ニハ開墾ノ際日本武尊菅原道真ノ像并孔子ノ畫像ヲ掲テ神酒ヲ備ヘ祭儀ヲ施行スルヲ定式トス

學校構造及建物圖面 地坪貳千八百壹坪餘文館建坪七十六坪餘(圖面ハ別紙ノ通り) 武館建坪七十坪餘學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書ノ種類部數ハ記載スルモノナシ

舊岩村藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ヨリ布令制規ハ士卒共年齡八年ニシテ必ス入學シ二十年ニシテ退學ヲ許シ入學中ハ文武兩道ヲ兼修セシムル者トシ事故アルニ非レハ半途退校ヲ許サ、ル事トス猶種々ノ布令制度有之ト雖モ廢藩後誌冊散佚シ詳ナラス 藩士中學業上達ノ者ヘハ臨時賞與ハ勿論引米等ノ祿稅ヲ免除シ猶獎勵ノ爲增加米ノ制ヲ興シ且生徒ニ於テハ年齡十年以下ニテ四書五經普通素讀ヲ終ル者ヘハ書籍或ハ物品等ヲ賜與スル等ノ制アリ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ヘハ必ス入學スヘキ制規ニシテ餘暇ニハ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學ヲナス者トス 他邦ヘ遊學セシムル者ハ優等生ノ中ニ於テ撰舉シ執政或ハ教頭ノ上申ニヨリ藩主ヨリ藩費ヲ以テ遊學ヲ命スル者トシ私費ヲ以テ出願スル者ハ情實詳紀ノ上許可スル者トス 藩士ハ士卒ノ別ナク生徒ト共ニ講義ヲ聽聞シ并ニ輪講ノ席ヘ陪スルヲ得且三八ノ日數頭講義ノ節ハ諸有司以下末卒ニ至ル迄該日當番者ノ外盡シ聽聞スルノ制規トス

平民子弟教育方法 平民ハ藩立學校ヘ入學ヲ許サ、ルノ制規ナルヲ以テ有志者ハ家塾寺子屋ニテ修學スルヲトス后天保年度藩主鄉學ノ制度ヲ頒布シ事稍條緒ニ附クト雖モ終ニ其結果ヲ奏セス半途ニシテ止ム

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾開設ノ際ハ諸規則等願書ニ添ヘ其筋ノ許可ヲ受后教授スルモノトス然レモ藩立學校教頭并ニ教授員ノ外ハ許可セサル制規ナリ其他寺子屋ノ如キハ自由ニ開設スルヲ得

學校

校名 文武所ト唱ヘ後知新館ト改稱ス

學校所在地 舊校舍ハ岩村地内字新市場ニ設置シ后安政六年回祿ニ罹ルヲ以テ字殿町ニ移ス

沿革要畧 元祿十五年九月舊知事松平乘命二世ノ祖兵庫頭乘紀信州小諸城ヨリ岩村城ニ移ル其前未タ學校ノ設ケ有ヲ聞

儀ヲ愼ミ貶習ノ業專ラ勉勵シ狂暴不軌ノ舉動ハ勿論妄リニ人ノ長短ヲ議シ或ハ空談戲笑等一切嚴禁ノ事

一 小生徒四書五經素讀一通卒業候ニ教官ヨリ指令無之内ハ復讀專業タルヘシ

一 諸生徒日課ノ書籍ハ私辨勿論ナレモ若シ辨シ難キ儔ハ其情實ヲ檢シ時宜ニヨリ官籍ヲ貸渡スヘキ事

一 小生徒四書五經素讀習熟ノ儔ハ教官ノ指揮次第小學或ハ史類等受業且質問ハ初學進步ノ要務ナレハ無二研究スヘキ事

一 小生徒四書五經一通素讀卒業ノ者有之候節學監ヨリ總括ヘ可届出一應檢査ノ上所置可有之事

一 年齒ヲ不論文意稍了解ノ儔ハ輪講席ヘ出頭可致事

一 春秋私試アリ冬夏公試有之候事

一 官籍ヲ拜覽ノ儔謹テ愛護ヲ要スヘシ若シ簡編ヲ失ヒ候者ハ勿論典籍ヲ損汚シ或ハ套帙ヲ縋摺スル者各有罰但拜覽期限等ノ規則ハ學監ニテ豫メ定メ置可申候事

一 諸生徒業卒テ退校ノ節タリモ禮讓ヲ主トシ定ノ班次ニ從フヘキ事

一 生徒疾病或ハ事故アリ三日以上缺席ノ節ハ學監ヘ斷書可差出候事

一 入校ノ義ハ八歳以上願次第出頭可差許事

一 號房入舍ノ義ハ十五歳以上タルヘシ

一 貴賤長幼ヲ不初テ入校ノ節ハ學校掛ノ面々ヘ廻勤可有之候事

一 官籍今後學監ノ預リタルヘキ事但典籍購求ノ節ハ總括ヘ申達シ會計掛ヘ可申立候事 典籍請拂ノ節籍簿ニ記載シ總括見届ノ上會計掛ノ押印可申受事 曬書ノ節句讀師手傳可申候事 同斷ノ節卷帙ヲ改メ且損毀ヲ補綴スヘシ

一 生徒一廉ノ賞典ハ藩廳於テ可申達輕典ノ分ハ總括出校可申達候事

一 學校掛ノ卒并小生徒ヘノ達ハ輕重共學監ニテ取計可申事但達書ハ廳ヨリ可相渡候事

一 學校掛ノ面々講義輪講等課日ニハ成丈出席且房中并鄉學校時々見廻リ可申候事

一 生徒ノ階級ヲ三等ニ分チ春秋試業ノ節熟不熟ヲ檢義ノ上進退スヘキ事

一 學監ノ者生徒ノ研不研ハ勿論其他掛ノ面々ニ至ルマテ勤惰ノ顛末等無忌憚總括ヘ可申出候事

一 生徒ノ諸願伺屈等緩急ニ從ヒ學監ヨリ總括ヘ可差出候事

一 雜事掛ノ者共毎旦掃除等入念兼テ定ノ如ク相心得且校中牆屋等ノ修覆ハ勿論諸具損失ノ節早々學監ヘ申出手支

入學ノ際生徒師範家ヘ回禮スルハ勿論試験等ニテ賞品ヲ受ル期ニ於テモ回禮スヘキモノトス
生徒訓條并ニ罰則等盡ク制規アリト雖誌記散失シテ據所ナキヲ以テ畧ス

學校規約

一 教官并句讀師日々第七字昇校ノ事但學監ノ者教官等昇校前出頭校中見廻不體裁無之樣可致指揮事

一 學監ノ職掌ハ生徒取締要務ナレハ讀書習字各場ヘ一員宛相詰メ生徒不行作無之樣精々申諭シ諸生業終テ退校後ハ房中ヘ交番宿衛モ致シ火之元ハ勿論百事不締ノ儀無之樣注意スヘキ事

一 教監句讀師ノ職掌ヘ授業專務勿論ナレモ元來生徒ノ業ハ行實ヲ主トスル旨趣ナレハ精々説諭ヲ遂ケ不作法無之樣措置可有之事

一 教官等日々其前授ヲ按シ昨日授タル所一字蹟カス爾后順序ニ授クヘシ若シ遺失數字ニ及候者ハ尙通熟セシメ其記スルヲ待チ其次ヲ授クヘシ徒ニ多キヲ貪リ忽略スル勿レ

一 凡ソ入學ノ諸生徒百事教官ノ指令ニ隨ハ勿論昇降ノ節屹度禮節可有之事

一 生徒受業ノ順次ハ著到ニ隨フ可シ

一 學校ノ教ハ長者居上幼者居下古ノ制ナレハ舍中ノ班次常主并嫡ヲ除ノ外都テ長幼ノ順タルヘキ事但卒ハ一切長幼ノ順タルヘシ

一 學トハ何ソ人タルモノ學フ所以ニシテ聖人ヲ以テ標準ト爲スヲナレハ其業最鴻大ナレモ其教ノ要旨ハ布テ方冊ニ存セリ苟シ人ニノ四子六經ニ通セサレハ終身道ニ至ルヲ得ス故ニ凡生徒タル者經業專務タルヘシ經業ハ一家ノ說ヲ固守セス衆說ヲ折衷スル勿論ヲナレモ初學ノ徒己ノ權度未タ定ラス明ニ凡百ノ雜說ヲ涉獵スモ是非ヲ誤リ得失ヲ辨セス支離散漫根著スル處ナク廢弛ノ輕重ヲ分ツ能ハサルニ均ク其弊害モ亦少カラス姑ク朱子ノ定說ヲ守リ其意ヲ得ルヲ要トナスヘシ

一 君父ノ臣子ニ命シ學文ヲ爲サジムルハ德ヲ成シオラ達シ他日國家ノ用ニ備ル素願ナレハ臣子タル者君父ノ心ヲ體シ尋常忠孝ノ大節ヲ旨トナシ脩身齊家治國ノ心掛肝要タルヘキ事

一 凡生徒タル者業ノ進不進ハ才ノ高下ニ寄リ遲速有之ト云ヘモ到底學ノ勤惰ニ因ルヲナレハ夙夜孳々強メ不止克有終ノ意ヲ要シ苟モ荒怠スル勿レ

一 學術ハ固ト實行ヲ期スルヲナレハ浮華ニ流レ高遠ニ馳候樣ノ義ハ決ソ有之間敷各自己ノ分ヲ守リ禮讓ヲ本トシ威

一等級ノ進退ハ凡半年ヲ以塾長ノ試業ヲ經テ順序ヲ相改メ可申事
右規則ノ旨趣深ク體認シ不行狀無之様相心得勉強可致事

程課

毎日第七字ヨリ素讀 第十字ヨリ質問 二七ノ日第二字ヨリ輪講 但長幼貴賤ニ不拘有志ノ僞出席可致事 三八第
二字ヨリ復讀 五日廿日第二字ヨリ講義 但藩廳月次講出頭之外一統出席可致事 十日十六日廿六日第二字ヨリ講
義 但士族卒共在職非役ニ不拘有志ノ面々出席小生徒ト云ヘ凡質問以上ノ輩ハ出頭可有之事 號房入舎ノ輩ト云ヘ
凡其學力ニ應シ前條課日ニハ必出席可有之事

年中休課

朔望廿五日 七節 二仲丁祭之節 七月^{十二日ヨリ}_{十六日マテ} 八月武並祭禮之節二日 九月廿二日 正月十七日開校 十二月

廿日閉校

職名及俸祿

學校奉行一人俸祿八十俵(諸有司格)○教頭一人俸祿七十俵(諸有司格)○學監三人俸祿六十俵(有司次席)○教員十五人
俸祿三十拾俵ヨリ五拾俵迄^(馬面格ノ内)○仲番三人俸祿二十俵(下目付格)○小使三人俸給不詳

但本文ハ維新前後ニ係ル調査ニシテ維新前ト學制頒布前トノ計査詳ナラス以下之ニ倣フ

職員概數 合計二十六人

生徒概數 寄宿生通學生合シテ四百名餘コシテ寄宿定員ハ一百名ヲ限トシ食費ヲ除クノ外總テ藩費ヲ以テ辦スルモノト
ス

東脩謝儀 藩立學校ニハ其制規アルヲナシ

學校經費 一周年間凡千圓ヲ以テ定度トシ總テ藩費ニ屬シ藩士等エ賦課スル制規ナシ但掛員ノ俸祿ヲ除ク

藩主臨校 藩主不時臨校シ講義或ハ輪講ヲ聽聞シ又ハ藩主自ラ生徒ヲ試業シ臨時賞與ヲ行ヒ學事ヲ振興シ怠慢ヲ戒ムル
者トス

祭儀 聖廟ヲ設置シ春秋兩度釋奠ノ式ヲ舉行スルノ制規アレ凡誌冊散逸シテ今其典禮ヲ考ル能ハス

學校構造及建物圖面 和風平家建前二百五十九坪九分 地所七百四拾七坪

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書ノ種類部數 學校ニ於テ出版翻刻セシ書籍有ヲナシ藏書ノ如キニ至テハ經書及和

無之樣所置可有之事

一都テ昇校ノ曹疥癩其ノ他傳染病ニ罹ル者疾瘡マテ上校ヲ可憚事

一火ノ元用心可爲肝要事

右揭示ノ條則ヲ確守シ勉勵以テ大成ヲ期スルヲ要スヘシ若シ約ニ違ヒ法ヲ犯ス儔ハ各有嚴責

學寮規則

一文學ニ通セサレハ其理ヲ看ルニ暗ク武道ニ達セサレハ其術ヲ施スニ由ナク文武ノ士道ニ於ケル一日モ偏廢ス可カラサルハ贅言ヲ待ス今ヤ此道日ニ新ニ月ニ開ケ人才又天下ニ勃興ス此壯者ノ碌々トシテ小成ニ安スル秋ニ非ラス則此寮ノ設アル所以也但先覺者撰テ未タ精ナラスト雖匠師トスル處古今ノ書籍ニ因リ蒙テ發キ惑ヲ解キ相俱ニ憤勵シテ此道ノ至ル所ヲ精究シ以テ國家ノ緩急ニ備ント欲ス豈勉サル可ン乎

一文武ヲ講習スルハ特ニ此寮ノ要務ナレハ更ニ會日ヲ設ケ經史兵書ヲ講義シ怠ルヲナカルヘシ餘暇アリト雖匠浮言諠談禁止ノ事

一廉耻ヲ尊ヒ禮節ヲ重ンスルハ士ノ恒ナレハ朝暮經史ヲ講究シ義理ヲ明辨シ恭敬揖讓ヲ旨トシ粗暴ノ弊ナカラシムル事

一少年輩ハ小學校ニ入り盛業ヲ遂クルノ大旨ニ付一通リ素讀出來スル者ニ非サレハ入寮ヲ許サス然レ匠晚學ノ徒ハ即チ大學校ノ學科ニ循テ之ヲ實驗シ早ク要旨ヲ得ルヲ急務ナレハ直ニ入寮ヲ許スヘキ事

一質問講義ハ學生ノ專業ナレハ此レヲ捨テ彼ノ理ヲ得ルヲ能ハサルハ固ヨリナレハ毎ニ休業ノ外日課ノ通リ怠惰ナク勉強可致事但朝五時ヨリ晝九ツ時迄ヲ正課トス猥ニ座席ヲ離ルヘカラス其他ヲ餘暇トス輪講輪讀勝手タルヘキ事

一入寮ノ生徒休日ノ外公事ニ非ラサレハ外出ヲ免サス止ムヲ得サル事故有之ハ塾長ヘ斷可申事但學監詰所於テ何時罷越何時罷歸ト手記可申事

一休日タリト雖匠夜五時限リ歸塾可致若無據事故有之遲速難計節ハ兼テ塾長學監ヘ斷置可申事

一入寮之生徒寮則ヲ嚴重ニ相守リ總テ塾長ノ令ニ隨ヒ可申事

一寮中私ニ飲食ヲ貪リ候儀堅ク禁止ノ事但宅ヨリ飲食ヲ取寄セ社中ヘ分與等禁止之

一寮中ノ規則ヲ犯シ不行狀ノ輩ハ嚴罰ヲ加ヘ尙改メサレハ速ニ逐寮可致事

兵學 馬劍 砲 游泳 以上武學局ニテ教授ス

生徒ハ必文武兩道ヲ兼備スル者トス但生徒學習ノ期限ハ年齡七歲ニシテ文學局ニ入り十歲ニシテ武術ヲ兼學セシメ十五歲ニ到ルヲ退學ノ期トナスト雖凡有志者ハ此限ニ非ス試驗ハ學科課程ヲ八級ニ分チ月末毎ニ試驗ヲ施シ無失并優等ノ者ハ筆紙墨等ノ賞ヲ與ヘ昇級セシム其他罰則等數個條アリト雖凡今其詳細ヲ知ル事能ハス

職名及俸祿 督學 教授 助教 句讀授 校長 書記 使部 月俸ハ拾圓以下三圓以上但家祿外ナリ

職員概數 教員文武トモ凡十八名 事務員凡四名

生徒概數 寄宿生凡五名 通學生凡百五十名

束脩謝儀 無之

學校經費 之ヲ詳細スルヲ能ハス

藩主臨校 不時臨校文武生徒ノ試業ヲ爲シ其優等ノ者ハ賞賜等アリ

祭儀 無之

學校構造 和風平屋瓦葺三棟 建坪六拾壹坪即別紙ノ通(廢校ノ後ヲ取毀チ即今ナシ)

學校ニテ出版書籍等詳ナラス

舊苗木藩

學制

學事上ノ諸制度 往昔ヨリ苗木藩ハ藩立ノ學校ナク明治元年ニ至リ初テ藩立學校ヲ創設ス故ニ從來藩主ヨリ文學等ニ關スル布令及ヒ獎勵ノ法アルヲナシ文學篤志ノ者ハ特リ師ヲ求テ學フノ慣習ナリ

士族卒ノ子弟教育方法 明治元年藩立學校設立前江戸邸ニ於テ弘化ノ頃ヨリ漢學者天野立藏^{江戸藩士}金子總之助^{藩士}等ヲ招シ

毎月數度經書ノ講義ヲナサシメ藩主始メ士族之ヲ聽聞ス然レ共藩費ヲ以テ他ニ修學ナサシムルノ設ケナク藩士及ヒ其子弟篤志者藩主ヘ願濟ノ上自費ニテ他所修業ト唱ヘ通學スル者アリ但シ醫師修業ノ者ハ藩費ヲ給シ他ニ入塾シ卒業ノ

上ハ之ヲ藩醫トス明治元年ニ到リ初メテ制度ヲ更メ藩士卒及其子弟必ス藩立學校ニ入學セシメ又藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシム且ツ藩士ノ内篤志優等ノ者撰拔シテ藩費ヲ以東京及ヒ他ニ游學セシム又自費ニテ他ニ游學ヲ願フ者ハ半年若シクハ一ケ年ヲ過キ學事成功ニ隨ヒ之ヲ藩費トナス醫學武學修業モ亦之ニ同シ

漢歴史諸子傳類并ニ字書等頗ル全備セシト雖モ今其目次等散佚シ盡ク舉クル能ハス

舊今尾藩

學制

學事上ノ諸制度 舊藩主ノ命ニ依リテ士族ノ者大人ハ月ニ兩度幼童ハ毎月二七ノ日必出頭シ其大人ニハ書經小人ニハ論

語孝經等ヲ聽聞セシム

士族卒ノ子弟教育方法 舊藩師範家ト唱ヘシモノ自宅ニ就テ學ハシム維新ノ後ハ藩立學校ニテ教養ス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋等ニテ修學ス藩立學校ヘ入學スルヲ許サス

家塾寺子屋設置ノ制度 人民適宜設置スルヲ得藩ヨリ干涉セス

學校

校名 初文武館ト稱シ後格致堂ト改ム

校舎所在地 今尾下本町西願寺佛宇ノ一棟ヲ以テ假學舎トシ文武館ト稱ス後舊藩主本邸ノ内二棟ヲ學校トシ格致堂ト

改稱ス

沿革要畧 古昔ノ事ハ詳明ナラス文化文政ノ頃藩士近藤彦三郎ナル者自宅ヲ以テ愛敬堂ト唱ヘ士族ノ子弟ニ漢學ヲ教授ス次テ弘化ノ頃ヨリ岸上保自宅ヲ以テ弘文館ト唱ヘ全シク教授ス是等ヲ藩ノ師範家ト云フ其後維新ノ際ニ及ヒ藩立學校ヲ設ケ文武ノ各科ヲ備ヘ普ク士族ノ子弟ヲ教養ス廢藩ノ時閉止ス

教則

教科用書 經書ハ孝經、四書、五書、歴史ハ十八史略、元明史略、左氏傳、史記、綱鑑易知錄、文章ハ古文真寶、八大家文讀

本、和歴史ハ王代一覽、國史略、日本政記、日本外史、類聚國史

授業ノ順序 本朝三字經、孝經、四書、五經ノ句讀ヲ授ケ之ヲ習熟スレハ次テ小學、四書等ヲ講讀セシム旁ラ歴史文章等

ヲ輪講セシム授業ノ時間ハ午前舊五時ヨリ午後舊八時迄トス或ハ冬時ハ夜學科ヲ設ケ輪講作文等ヲ爲ス

學科學規試驗法及諸則

和學 漢學 洋學英 算珠法 習字 以上ハ文學局ニテ教授ス

有志ニヨツテ入門スル學科左ノ如シ

兵學 甲州流、越後流○柔術 揚心流、起倒流○弓術 日置流、雪荷流○習禮 小笠原流○筆道 俗用○砲術 自得流、萩野流、津田流

右何レモ試驗罰則等ノ設ケナク藩主在城ノキハ城内ニテ之ヲ習練シ在府ノキハ各師範家ノ稽古場ニテ習練ス學期等ハ更ニアルヲナシ

入學及ヒ年序稽古初メニハ何レモ禮服着用出頭ス明治元年后文學ハ日新館ヲ用ヒ武學ハ演武場ト唱ヘ兩校軒ヲ接シテ設立シ新ニ左ノ學科ヲ置ク

和學多ク平田家ノ漢書ヲ用フ○漢學有志ノミ○算學 珠算○筆道 俗用○槍術 寶藏院流○劍術 直心影流、長岡流○馬術 高麗流、大坪流○練兵 洋式

右各科專務ノ教師ヲ置キ士卒及其子弟他ノ有志者入學セシメ適宜ノ試驗ヲ用ヒ優等ノ者ハ夫々賞品ヲ與フ學校ノ組織ハ學校主事之ヲ總括シ校監之ヲ督勵ス其他助教授讀生等主事ノ指示ニ隨ヒ生徒ノ取締ヲナス

職名及ヒ俸祿 維新前ハ藩吏ノ稍熟達スル者ヲ撰テ師範トナサシムル故ニ專任者ヲ置カス明治元年后左ノ職名ヲ置ク
學校主事兼文學教授 現米五十石○校監 全二拾五石○武學師範 全拾五石○文學助教 全拾五石○武學助教 全拾五石○

授讀 全拾貳石
右明治三年后ハ主事ヲ以テ判任トナシ校監ヲ準判任トシ以下士族ノ列トナス

職員概數

學校主事兼文學教授 壹名 校監壹名 武學師範二名 文武學助教二名 授讀二名 學校會計四名 玄關番六名 學校屬吏四名 下使三名(但維新後ノ計畫)

生徒概數 寄留生ナシ 通學生凡百五拾人
束脩謝儀 コレナシ

學校經費 盡ク本藩會計ヨリ支出シ學校會計之ヲ主任ス一ケ年金五百圓内外トス
藩主ノ臨校 維新前ハ四九ノ日ヲ以テ藩主武學臨校日トナシ稽古場ニ臨ム藩士ノ内不出ノ者ハ十五歳ヨリ三十九歳マテ其事故ヲ近習

目付ヘ届出ツ其他劍鎗ノ大仕合ト稱スルキハ藩主之ニ臨ム維新后ハ藩廳ヘ文學教授ヲ呼ヒ講義ヲナサシムルヲアリ藩主ハ藩吏共ニ之ヲ聽聞ス或ハ文學試驗ノ節日新館ニ臨ミ士卒及ヒ生徒ノ事業ヲ見ル武學モ亦之ニ同シ

平民ノ子弟教育方法 從來士卒スラ教育制度ヲ設ルコナキ故ニ平民ニ至テハ尙更學事ニ關スル制ナシ然レ共之ヲ禁スル
 一モナク只ニ里正或ハ徴シク富メル者ノ子弟ハ篤志ニテ僧侶醫師等ニ就キ讀書ヲナス者アリ明治元年后有志ノ者ノ子
 弟モ藩立學校ニ入學スルヲ許ス且ツ藩内各村ニテ村費ノ小費ヲ設ルヲ願フモハ藩校ノ授讀生ヲシテ派出在勤セシム
 家塾寺子屋ノ設置制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ何人タリ共自由ニ開設スルヲ得

學校

校名 日新館

校舍所在地 美濃國惠那郡苗木字那木

沿革要略 明治元戊辰年藩主及ヒ士卒其他有志者學校ヲ設立スルコトヲ志望シ各奮フテ勞力ニ役シ或ハ資金ヲ投シテ創
 立スルコトヲ得タリ藩主ハ遠山美濃守友祿時代ニシテ此事業ヲ總括スル者ハ藩士曾我祐申ナリ明治三庚午年閏十月此校ヲ
 以テ藩廳ト合併シ尋テ廢藩ノ令出ツルニ及ンテ全ク廢校トナリシカ明治五年后苗木小學校トナス
 教則 教科用書初メハ四書五經ヨリ和漢ノ歴史ヲ授讀セシカ中途ニシテ止メ和學ヲ專ラトシ平田本居ノ著書ヲ授讀シ
 且ツ講義セシム時間ハ毎日朝舊五ツ時ヨリ夕七ツ時ト定ム

學科學期試驗法及諸則

明治元年學校創立前ハ文學武學共ニ其職々專務スル者ナク故ニ藩士ノ内篤志ニテ一業ニ稍熟達スル者ヲ撰テ之ヲ藩主
 始メノ師範トス別ニ俸祿ヲ與ヘス藩吏ノ職ヲ以テ之ヲ兼テシム且ツ藩士及其嫡子ニシテ元服スル者ヲ以テ藩主槍劔ノ
 相手ト唱ヘ藩命スルコトス藩士ノ子弟八歳ヨリ上清書ト唱ヘ適宜ノ詩文俗文書五字或ハ十字文字ヲ記シ一ケ年四回宛之ヲ藩主ニ捧
 クルヲ定例トス偶藩主ノ手元ヨリ筆墨等ヲ與ヘテ之ヲ賞ス壯年藩吏ノ職ニ就クニ及ンテ之ヲ止ム
 毎年一回ツ、槍劔ノ大仕合ヲ試ミ十五歳ヨリ三十九歳マテ之ヲ源平仕合ト唱フ優等ノ者ヘハ稽古槍及ヒ韜等ヲ與ヘテ之ヲ賞ス
 藩士卒必ス入門スヘキ武學科左ノ如シ

槍術 寶藏院流(但卒ハ入門ヲ許サス)○劍術 直心影流、長岡流、雲弘流○馬術 高麗流、大坪流(但徒士以下入門ヲ
 許サス)

外ニ卒ハ左ノ二科ヲ學ハシム

棒術 制剛流○捕繩 南蠻流

校舍所在地 舊江戸西丸下藩邸内ニ設立シ嘉永ノ末年同地麻布市兵衛町藩邸内ニ移シ後復タ美濃國山縣郡高富村ニ移轉シ廢藩ノ際廢毀セリ

沿革要畧 舊藩士族古來藩中儒者ノ家ニ就キテ修學スルヲ通常トスト雖モ或ハ各自ノ意向ニ任セ他ノ家塾ニ入リテ學フモ妨ケナカリシニ弘化年間藩主本庄安藝守道貫時代其世子近江守道美ト共ニ藩士ヲ獎勵シテ悉ク就學セシメタリ此際藩立學校ヲ創立セリ然レモ固ヨリ葦爾タル一小藩ニシテ人員僅少ナルニ因リ藩政事務ノ餘暇ヲ以テ修學スルニ過キス其子弟タル幼稚者ト雖モ武技ヲ兼修スルカ故ニ專ラ文學ニノミ從事スル能ハス從テ該校關係アル著名ノ者アラス教則 教科書ハ經書歷史詩文書等單ニ漢籍ヲ用フ其授業ノ方法ハ每朝卯ノ刻ニ始メ正午時ニ終ル時間生徒出席ノ順序ニ從ヒ兩三名ツ、教師或ハ助教ノ机前ニ進ミテ素讀或ハ講義質問等ヲ爲ス其他諸記誦復文等ヲ初歩トシ輪講記事作文等日ヲ期シテ之ヲ學ハシメ以テ其甲乙丙等ノ褒貶ヲ朱記シ他日試驗ノ材料ニ供スルモノトセリ又政務ノ餘暇ヲ以テ學フモノ、如キハ午後或ハ夜間教師ノ家ニ就キテ修學スルモ妨ケナキモノトセリ

學科學規試驗法及諸則

學科ハ四書五經及歷史詩文書ヲ專トシ和學洋學ハ各自ノ意向ニ任シ他ニ通學スルモノ兩三名アリシ試驗法ハ每歲春秋ノ二季ニ於テ大試驗ヲ舉行セリ其試業方ハ藩主臨席シ重役及ヒ教員等廣間ニ出テ之ヲ行ヘリ闔藩父兄ヲシテ參觀席ニ就カシメ而シテ學生ヲ試驗スルヲ例トス此試業畢リテ甲乙等ノ優劣ヲ定メ其等差ニ從ヒ金員或ハ物品ヲ賞與セリ其最優等ナルモノハ加俸或ハ坐位ヲ進ムル等臨時特殊ノ賞典ヲ舉行セリ

試驗ハ生徒從前學フ所ノ科書ニ依リ之ヲ講義セシム其甲乙等ノ優劣ヲ定ムルハ教師及ヒ重役ノ驗點多寡ヲ以テ調査議定シ之ヲ藩主ニ開申スルノ例タリ

筆道習禮ハ他ノ師ヲ聘シ又ハ寺子屋ニ就キテ學ヘリ其他兵學弓馬槍劍柔砲等ノ諸技藝ハ藩中ノ師範家其他ノ師ヲ聘シ定日ヲ置キ交互演武場ニ於テ習練セシム

文學ト武術ト程度ノ比例ハ詳ナラス然レモ天保弘化ノ交ハ最文學隆盛タリシニ嘉永五六年以來專ラ武技ヲ講究習練スルノ機運ニ際シ文學漸ク衰退セリ

職名及ヒ俸給 學校ヲ管理スルモノヲ教諭館奉行ト稱セリ其俸給ハ他ノ本職アルモノヨリ兼務タルニヨリ別ニ給與セス年々若干ノ手當金ヲ附與ス教師ハ儒者ト稱シ八人口分ノ祿米ヲ給與ス維新ノ際祿高ヲ改正シ現米拾六石八斗ヲ給與セリ儒者ノ班座ハ給人席ト稱シ中等以上士分ノ格タリト雖モ平常取扱ハ平士ト異リ待遇殊ニ厚カリシ

祭儀 日新館構内ニ左ノ學神ヲ祀リ年々祭事ヲ行フ菅原大神 八意思兼大神 忌部大神 荷田氏 加茂氏 本居氏 平田氏

學校構造及ヒ建物 構内地坪凡五百坪 日新館凡八拾坪(二階造) 演武所凡五拾八坪(全) 門壹ヶ所(全) 長屋壹棟(全)

舊高富藩

學制

學事上ノ諸制度 舊藩中學事ニ關スル布令諭達等往々アリシカトモ維新ノ初メ閩藩領地へ移轉ノ際洋中颶風ノ災ニ罹リ諸記録多ク海底ニ沈没セリ故ヲ以テ今之ヲ詳記スルニ由ナシ依テ舊藩士中藏スル所ノ私記ヲ輯成シ或ハ古老ノ記憶ヲ聽取シ以テ聊カ學事ノ概況ヲ開陳スルヲ以テ此項ニ記載スヘキモノ無シ

士族卒ノ子弟教育法 古來士族子弟ノ教育ハ藩士中學識アルモノ又ハ他ノ學士ヲ聘シテ教師トシ專ラ支那學ヲ以テ教育セリ藩立學校創設以來ハ殊ニ督促シテ必ス入學セシムルノ制タリ亦他ノ士族農商家ノ子弟ト雖モ入學ヲ請フモノアレハ之ヲ許可セリ

藩費ヲ以テ他國へ遊學セシムルノ制ナシト雖モ元治慶應年間藩費ヲ以テ他ノ在府家塾ニ入りテ洋書ヲ學ハシメタルモノアリ其他自費ヲ以テ他藩他塾へ入學センコトヲ願フモノハ之ヲ允可セリ 毎月一回ツ、藩主面前ニ於テ教師ヲシテ經典ヲ講義セシメ一般士族ニ之ヲ聽聞セシムルヲ例トス

平民ノ子弟教育方法 舊藩ハ在府ノ一小藩ニシテ江戸藩邸内ニ藩學校ヲ設立シ領地遠隔ナルカ故ニ平民ハ藩立學校ニ入ル能ハス其所在地ニ於テ家塾寺子屋ノ教育ニ一任シ藩學校へ入學許可ノ制ナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ何人クリトモ自由ナリトス依テ郡宰里正等之ニ干涉シ許可スル等ノコトナシ

此他閩藩學事上ニ於テ編史ノ資料及ヒ參考ニ供スヘキノ事蹟無之候

學校

校名 教倫學校ト稱ス

舊松代藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主眞田右京大夫幸弘代ニ係ル左ノ如シ

寶曆八年戊寅十月十八日於松代執政ヨリ監察ヘ達書

御家中之面々儒學講談菊池專藏方ヘ罷越勝手次第承候様被仰出候
右之趣御家中ヘ可被申通候

但講談日毎月九日十九日二十九日豊九ツ時ヨリ
ハツ時マテ

全十一年三月廿四日同斷

中庸講釋毎月三次八ノ日豊九ツ
時ヨリ

右日割之通評定所御長屋ニ於テ菊池專藏講釋候様被仰付候間御家中之面々嫡子二三男ニ至ル迄罷出講談可承候様
被仰出候

寛政元年七月三日江戸藩邸ニ於テ執政ヨリ監察ヘ

藩徒士目付一郎兵衛倅 久保庄右衛門

右之者明四日四時ヨリ相始御上屋敷ニ於テ孝經講談被仰付候間御役人御用透罷出承候様無急度可被申通候
全四日右同人四時罷出孝經講談藩主夫人息女方陰聞有之執政其他役員罷出承リ候

全二年二月廿一日江戸ニテ

藩騎士 古澤達之進

御儒者被仰付之席右筆上

右同人月次講釋毎月二次書籍論語

全三年五月十四日於松代藩主諭達

去秋歸城後一統藝術一覽候所何モ出精心掛ノ詮モ相見一段之事ニ候家ノ飾且面々之嗜ニモ相成他之聞モ厚ク猶此上
無油斷心掛可致出精候諸藝之内學問之方ハ未心掛少疎之様間候是又他勢之爲月次講釋モ申付置候右之餘ニモ自分々

職員概數

教師一名助教若干名人員奉行二名用人格物頭等不定奉行二名用人格物頭等

生徒概數

每歲增減アリト雖モ平均凡五六百名ニ過キス但寄宿生藩費生無之

束脩謝儀

束脩ハ定額ナシ其身分ニ應シ各自ノ志ニ任セ教師へ贈ルモノトシ謝儀ハ中等以上ノモノハ盆暮七月十二月二季ニ

隨意贈ルモノトシ其以下薄祿者ノ分ハ藩費ヲ以テ若干ノ金ヲ教師へ附與セリ

學校經費

學校ノ經費ハ總テ藩ヨリ支辨シ藩士或ハ生徒等へ賦課セシメナシ但一ケ年ノ經費凡米七石金貳拾壹兩永六拾

七文貳分

藩主臨校

時トシテ藩主臨校アリ又世子代リテ臨校シ自ラ生徒ト共ニ講義等セシメアリ

祭儀

聖廟ノ設置釋奠等執行セス

學校構造及建物圖面

學校ノ地坪建坪等詳知シ難シ凡長サ五間梁三間許ノ建物タリシ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍ナシ其藏書ノ種類部數等不詳

舊名古屋藩

學制（但美濃國厚見郡岐阜町ニ關係ノ分）

學事上ノ制度 岐阜ハ元名古屋藩ノ所轄ナリシカ定リタル學制ナク慶應ノ末該藩ヨリ此地ニ學舍ヲ設ケ所轄廳之レヲ管

理ス校名ヲ教倫館ト稱ス尤學事上ノ狀況觀察スルニ足ル事項ナシ

士族卒ノ子弟教育方法

教倫館ノ教育方法別ニ定リタル規則ナクシテ和漢學科ヲ生徒ノ求メニ應シテ教授ス其生徒漸ク

百五十名ニ及フ其生徒タル岐阜地ニ住スル士族卒年齡十年程ニ至レハ入校シ上流ニアル平民ノ子弟偶々入學スルモノ

アリ且該地ニ設ケアル家塾ニ修學スルモアリ其開閉各自ノ意ニ任セ別ニ舊藩ヨリ許可シタルモノニ非ス

平民ノ子弟教育方法

家塾并寺子屋修學一定ノ制規ナクシテ父兄ノ意ニ隨ヒ六七歳ニ至レハ寺子屋ヘ入り又上等ニアル

平民子弟年齡十年程ニ至レハ家塾ヘ通學シ且慶應末ハ藩立教倫館ヘ通學スルモアリ

家塾寺子屋設置ノ制度

家塾寺子屋ヲ開設スル奉行里正等ノ許可ヲ受ケシモノニ非ス又檢束ナクシテ塾主等ノ自由ニ開

閉スルヲ得シモノナリ其寺子屋ハ寛政年度ヨリ始リ安政年度盛ンニシテ明治ノ初年學制頒布ノ際廢止シテ小學校ヲ創

設スルニ至ル

有之段相聞候間厚心懸出精候様段々御沙汰モ有之處多勢之内ニハ心懸候面々モ相見致懈怠候族モ有之段相聞候老人等ハ勞筋力候業ハ成兼候儀モ有之候得共儒書講談之節ハ縱老人タリ共出席難相成儀ハ有之間敷事候殊更壯年之面々ハ前々學問師範有之致修行候テモ右師範古人相成當時師範無之候得ハ自然ト可及廢學候左候得ハ段々被仰出モ有之處疎相心得候ニ當リ厚以思召被仰出候御趣意致齟齬事ニ候向後心得違無之專相心懸文武共出精候様御沙汰候別紙之通厚思召之御沙汰候處以後御用屋敷月次講釋懈怠多ノ面々ハ定テ覺悟有之不罷出事ト相見候事ニ付以來關席勝ノ者ハ御尋ノ筋モ可有之候間兼テ其旨相心得候様

右兩通之趣向々々可有演說候

藩主眞田信濃守幸貫ニ關スル左ノ如シ
文政八年十月三日文武掛執政ヨリ監察ヘ

一御家中子弟十歳迄ニ四書素讀候者ヘハ孝經壹部被下置候事

一十五歳迄ニ五經相濟候者ヘハ近思錄ノ類一部被下置候事

一二十歳迄ニ四書講釋出來候者ヘハ銀三枚被下置候事

右以上學問修行ニ寄リ御紋服等被下置候事

右致齟齬不出精未熟之者ハ夫々御咎可被仰付候且又親ヘモ教諭之次第ニ寄リ御沙汰可有之候家督勤仕之者文武不心懸ノ者ハ御沙汰之上家督金等重御引上可被仰付候

右之趣御家中ヘ不及演說其御役方ニテ心得時々取調一々年宛暮ニ至リ書上可被致候

天保九年五月十八日江戸ニテ執政ヨリ監察ヘ

林家學頭佐藤捨藏エ月次講釋御賴被仰出候向々々可有演說候

全年三月十一日十二日松代ニテ佐久間啓之助建議採用有之文政某年初テ四書五經素讀濟之者ヘ孝經近思錄等賞與セシヨリ以來去年迄ノ分及四書講義濟ノ者城中大書院二ノ間ニ於テ掛執政出座參政大監察列席監察立合ニテ右同人各生ノ四書五經素讀及四書講義試業執行ニ及ヒ甲乙點數調査了テ執政合格ノ者各々用部屋政事所ヘ召出シ口達シテ曰ク

讀書格段出精之趣可達御聽候 素讀之者

學問格段出精之趣同斷 講義之者

右口達ニ及サル者下第トシ再試業ヲ行フト爲リ 素讀合格三十四人不合格二人講義合格三人

々之心掛肝要候此度參府留守ニモ相成候得者猶々無油斷不致心弛候様一統相心得相互勵合出精候様可致候

全四年二月六日松代ニ於テ文武掛執政ヨリ監察ニ達ス

文武之儀ハ兼テ段々被仰付候事ニ付無油斷可致出精等之處御用屋敷月ニ稽古於御城藤井藤四郎講談之節モ去年杯皆不參之面々モ有之由老人病者ハ業前ハ相成兼候事モ有之候得共儒學講談之節出席難相成事ハ有之間敷候精々以思召被仰出候事疎ニ相心得心得違之事ニ候向後厚心掛出精候様御沙汰候右之趣可致演說候

全六年八月廿六日松代ニ於テ執政ヨリ監察ニ達ス

文武之義ハ兼テ段々被仰出モ有之ニ付武術稽古且於御城藤井藤四郎月並講釋之節モ無怠慢可致出精處不精之面々モ有之候段相聞候間厚心掛出精候様去秋中段々御沙汰モ有之候處多勢之内ニハ心懸候面々モ相見致懈怠候族モ有之候段相聞候老人等ハ勞筋力候業ハ成兼候義モ可有之候得共儒學講談之節ハ繼老人タリトモ出席難成義ハ有之間敷事ニ候殊更壯年ノ面々ハ前々學問師範有之致修業候テモ右師範故人相成當時師範無之候得ハ自然ト可至廢學候左候得ハ段々被仰出モ有之處疎ニ相心得候ニ當リ厚思召ヲ以被仰出候御趣意ト致齟齬候事候向後心得違無之專相心懸出精候様御沙汰候

右之趣家督并御役人嫡子二男三男等ハ可被致演說候右之通厚思召之御沙汰候處以後御城月並講釋懈怠多々ノ面々ニハ定テ覺悟有之不罷出事ト相見候事付以來闕席勝ノモノハ御尋ノ筋モ可有之候間兼テ其旨相心得候様是又可被致演說候

藩主眞田彈正大弼幸專代ニ係スル左ノ如シ

文化三年正月十九日松代ニ於テ執政ヨリ監察ニ達ス

儒者林丈左衛門今般於御屋敷暫之内經書講釋被仰付御家中ハ爲御聞被成候間御用透并非番之節ハ罷出可承旨被仰付候此段御役人御番士并嫡子迄可有演說候尤來ル二十五日四時ヨリ罷出候初テ致講釋候儀ニ付服紗小袖麻上下着用罷出承候様來月ヨリハ四々ノ日四時ヨリ罷出候間其旨相心得麻上下ニテ不及罷出候之様是又可有演說候

全四年十一月松代ニテ執政達

經書講釋岡野彌右衛門ハ被仰付候向々ハ可有演說候

全六年四月二日松代ニテ監察ハ

文武之儀兼テ段々被仰出モ有之付武術稽古且於御用屋敷林丈左衛門月並講釋之節モ無怠慢可致出精處不精之面々モ

嘉永五年八月十二日

文武之儀ニ付テハ御代々様厚ク御世話有之候處分テ感應院様深ク被爲懸御心御勝手向御逼迫ノ御中ナカラ御先代様ノ被爲繼御遺志學校御經營之儀被仰出置候處右御出來ノ上ハ於同所文武修行被仰付候御舍ニ候兼テ銘々御趣意ノ程厚ク從此節格別ニ心懸出精可爲致旨被仰出候可被得其旨候

河原舍人、小山田壹岐、鎌原伊野右衛門、眞田志摩

學校懸 御目付中

退啓常例觸來候向并支配ノ御目見以上へ可被相觸候

一同文末出精可致旨被仰出候其段御鎮礮方平士家督無役給人格無役へ可被相觸候

八月十二日

連名

同斷

全年十一月江戸ニテ

無役 佐久間脩理

學校督學申付之

安政二年正月江戸ニテ執政ヨリ監察へ

佐藤拾藏様月次經書講釋御差支ノ義有之以來御斷被仰進候段家中へ可有演說候

安政二卯四月二十九日文武學校假開業ノ景況左ノ如シ

藩主館校セス^{張アリ}家老中老大目付當直ヲ除クノ外目付不殘及ヒ學校掛各役員其他各役員諸士徒士以上嫡子次三男等

昇校役員以下孰レモ名刺監察方へ差出師匠行司醫學頭取等各所ニ相詰他諸稽古所内へ相詰學校掛執政ヨリ各師醫行

司醫學頭取等へ口達書取ヲ授ク左ノ如シ

學校假御開ニ付猶此上門弟共へ厚教授致シ候様

同文

同門厚世話致シ候様

同文

同學厚世話致シ候様

右畢テ學校掛執政開業式ヲ行フヘキ旨監察ヲ以テ文學會頭各師匠行司醫學頭取ニ達ス

文武所ニ於テ 大學三綱領開講 宮下主鈴

東序ニ於テ 興傳流軍學 興津藤左衛門○甲州流 綿貫新兵衛○山鹿流 (類) 彌津權太夫○甲州流 寺内松叟○興傳

右此試業松代藩學校迄ノ定例タリシナリ

弘化三丙午年二月十四日江戸ニテ執政ヨリ監察へ達

明十五日月並講釋開講ニ付給人以上熨斗目麻上下着用御目見席服紗小袖麻上下着用可被罷出候當年以來共開講之節ハ朱子白鹿洞揭示御講釋被成候間右之心得ニテ罷出候様
右之趣向々へ可有演說候

嘉永五年正月二十二日江戸文武舍假開ノ景况左ノ如シ

學問所ニ於テ 大學開講三綱領 舊幕府儒官佐藤捨藏○興傳流軍學 興津民之進○長沼流近松傳 松本源太郎○長

沼流 飯島楠左衛門門弟飯島楠藏○醫學傷寒論 篠原良意

稽古所ニ於テ [射藝]吉田流大内藏派 出浦右近門弟某、青木數馬門弟某、島原藩望月忠平門弟○日置流雪荷派、

藤田典膳門弟某○日置流 小幡又八郎門弟某○日置流印西派 遠藤五郎右衛門門弟某○日置流雪荷派 岩下革

門弟某 [劍術]神道流 落合瀨左衛門○眞鏡流 中山有之助門弟某○東軍流 石倉源五左衛門門弟某○心影流

北澤叔藏門弟某○一刀流 塚田孔平門弟某 [槍術]ト傳流 前島助之進門弟某○覺天流 窪田愼六○佐分利

流 春原織衛門門弟某、竹内増司門弟某、渡邊清右衛門門弟某○種田流 中津藩 村上太忠治門弟、與村貞作 [柔

術]關口新心流 鹿野平太門弟某、上村伊右衛門門弟某 [柔道]起倒流 舊幕府麾下士鈴木柔左衛門門弟某 [腰

廻]ト傳流 矢澤齋宮門弟某 [捕手]全上 [和力]無敵流 西澤甚右衛門門弟某 [長卷]田宮流 柘植嘉兵衛

門弟某 [砲術]御家流 佐久間庸左衛門門弟某○鐵齊流 馬場茂八郎○中島流 恩田賴母家來中村與惣左衛門

門弟某○高島流 金兒忠兵衛 [馬術]大坪流 中村亢尾

文武舍掛池田要人監察馬場彌三郎一塲茂右衛門出席右文武開業相濟候後文武舍ニ於テ出席一統謁見ヲ賜ヒ藩主曰

ク孰レモ目出度イ此上出精致セ

右師匠并行司等へ祝酒其他一統へ赤飯ヲ賜フ

全月二十五日文武舍掛ヨリ監察へ達

文武舍假御開相濟候付御家中へ拜借被成下候追テ規則被仰出候先夫迄ハ内拜借ト相心得候様日割ノ儀御目付へ承合候様 右之趣可有演說候

藩主眞田信濃守幸教代ニ係ル左ノ如シ

ノ字ヲ省ク)

安政四年十二月廿二日掛執政ヨリ掛監察へ

學校御引當高三千石半知事々御立相場ヲ以御入料相立殘金之義ハ八分利付ニテ御繰廻之義取計可被申候

一江戸御入料御極御治定難致付右ハ相外シ殘金御繰廻ニ取調退テ御極ニ相成候節何年成御勘定帳へ相立右金高へ利分相加御納戸返濟相立御勘定帳出來之儀取計可被申候

一御家流砲術御入料引分之儀ハ去ル卯年相達候處右者學校御入料外ト可被相心得候
右之通掛御勝手元へ申渡候其段可被相心得候

文久三年正月二十一日學校懸執政ヨリ全掛監察へ

一今般劍槍砲術格別修業被仰付候御趣意之程厚相心得無油斷可致出精但劍槍之内一藝專門ニ可致修業心得ノ者ハ其段申立兩藝ノ者ヨリ一際出精可致修業長卷長刀執心ノ者ハ可爲覺悟次第候砲術之義ハ銘々專修業可致候右執心之藝術手札ニ相認來ル廿五日迄ニ懸御目付へ可差出候

一三藝專ラ修業被仰付候付學校日割

一四七九(但廿九日休)劍術 二五八十(但晦日休)槍術 一三六九(但廿一日休)砲術

右之通相心得十五歳ヨリ三十五歳迄之面々急度罷出可致修業且右以上ニテモ可成丈可罷出候尤モ出席引取共御目付并教授方頭取教授方同助ノ内エ斷可申事(頭取ハ師匠ノ面々ナリ教授方全助ハ行司或ハ出精ノ面々之ニ充ツ)

但三十五歳前後日勤之向ニテモ可成丈御用繰合可致出精候

一十五歳ヨリ三十五歳迄之御番士并一統嫡子次三男等者當番或ハ病氣差合之節掛御目付并教授方頭取教授方同助之内エ可相斷候

一御徒士并同席次三男等同斷之事

一稽古道具ノ事流義之古習ニ不泥新式ニ相改相互ニ怪我無之様可心懸事

一近來幼年ノ者馬術始武藝入門修業爲仕候處以來十四歳迄ハ讀書手習等專ラ爲學候様可致砲術之儀ハ十五歳以上ニテ入門可致修業候

一御徒士席御目見席ノ者ハ長卷ヲ槍同様ニ相心得可致修業候

一稽古相初候義ハ猶又可相達候

流 (片岡此面行) 片岡弘人○長沼流 松木束○興傳流 興津民之進○椿園流 (在府) 飯島楠左衛門 (名代) 飯島楠藏

西序 小笠原騏方 齋藤友衛○醫學內經素問 立田樂水○西洋醫學ブリコフ著述和蘭メッペン譯 北山安世

弓術所^{矢渡二本、的尺二寸} 吉田流大藏派射藝 (類) 眞田勘解由 (名代) 成瀬縫殿右衛門○全 青木五郎兵衛○日置流雪荷派

藤田外記○日置流 (在府) 小幡權之助 (名代) 小幡助市○日置流印西派 (類) 遠藤五郎右衛門 (名代) 遠藤小右衛門

○同中俣左吉○日置流雪荷派 岩下左源太

劔術所 神道流 落合瀬左衛門○全 (龍津綾之介行司) 禰津繁人○眞鏡流 (類) 中山兵助 (名代) 白井平左衛門○東軍流

矢野茂○塚原卜傳流 (佐久間節理、常田鑒太夫行司) 八田競○神道流 (類) 恩田新六 (名代) 禰津丈之助

槍術所 新當流 (類) 友野正右衛門○塚原卜傳流 (片岡此面行司) 三村源五左衛門○覺天流 (禰津左盛行司) (差令) 禰津繁人

(代) 禰津直人○佐分利流 春原織右衛門○全 竹内増司○全 (類) 渡邊十太夫 (名代) 渡邊左太郎○種田流 堀田

伴右衛門 (名代) 堀田伴右衛門○全 (在府) 奥邨良作○春日流長刀 加藤直衛○田宮流長卷 柘植嘉兵衛○西洋砲

術 金兒忠兵衛○全 中俣一平

柔術所 關口新心流 石倉兵藏○全 (在府) 鹿野茂手木 (名代) 湯本十學○全 (關口又十郎行司) 小野喜平太○全 樋口

一角○起倒流柔道 奥山忠左衛門○無敵流和力 西澤甚右衛門○塚原卜傳流腰廻 (類) 原平馬 (名代) 菅鉞太郎○

全捕手 (類) 原兵馬 (名代) 白川久之進○校正无樂流居合 (鈴木爲吉行司) 齋田千三郎

右各所へ監察帳附出席、右開業致シ候者并掛リ役員用部屋ニテ恐悅申陳、學校廣間ニテ一統へ赤飯會頭師匠行司掛リ

役員へハ殿中ニ於テ祝酒ヲ下賜ス

學校外稽古馬術水練砲術師匠行司ハ開業無之ニ付口達書取渡後詰所ニ扣居前同斷右之外學校關係之役員ヨリ學校門

番全番人仲間等迄不殘祝酒ヲ下賜セリ

全月廿四日掛リ執政宅へ一役一席一人ッ、呼出シ相達スル左ノ如シ

學校御經營於同所文武修業之義去ル子年被仰出候處其以來公邊御用并御吉凶事等ニテ打續莫大之御用途有之御勝手向取分御逼迫萬事被爲行届兼候御中ニハ候得共文武之儀ハ格別之以思召厚御世話被爲在去夏中學校假御開一統修業被仰出候處多勢之内ニハ心懸不宜向モ有之趣相聞全御趣意之程等閑ニ相心得候故ノ義ト不埒之事思召候乍去此度ハ不被及御沙汰候間向後格別ニ心掛出精可致旨被仰出候自然心得違ノ族於有之ハ夫々御咎可被仰付且又家督相續之節被仰付方モ有之候其段相心得子弟へモ厚ク可有教示候(但無役席差立家督無役番士へハ本文之通役員へハ末文子弟

一御番頭ハ其御番組稽古之刻限中日々出席厚世話可致事

一御番方當番御用拔ニ付病氣差合之節ハ御番頭ニ相届御目付エモ可申斷候

一御目付右稽古ノ節壹人宛出席記録取計可申事

一出席致シ候節着到并引取モ御目付エ相斷可申事

一稽古ノ次第ハ敎示申渡候金兒忠兵衛中俣一平蟻川賢之助エ承合可申事

右之通可被相心得候

明治元年十月武田斐三郎ヲ聘シ兵制士官學校ヲ設立シ其敎頭タラシム且學生若干人ヲ撰命ス

全三年七月松代藩學校開業ニ付學政局達書

心得書

准十等以上之當主并子弟八歳ヨリ文學入館可相願事

附其生質ニ寄此限アラス尤八歳以上入學難致向ハ其段學監エ可及斷事

一同斷武藝ノ義モ八歳ヨリ追々入館可相願事

一同斷三十歳迄ハ吏員ヲ除シノ外一統入學文武ノ道可致修業事

附吏員ニテモ可成丈縁合セ可致修業事

一生徒入學ノ刻限文學ハ辰ノ刻武藝ハ午ノ刻ヨリト可相心得事

一馬術水練規則ノ義ハ追テ可相達事

一御目見以下有志之者入館相願度向ハ其筋エ申出支配頭ヨリ學監エ可申斷事

一讀書考課ノ義ハ追テ相達候迄是迄ノ通相心得候事

一疾病事故ニ託シ不參ノ者御取調之上御處置可有之事

庚午七月

學政局

右御藩中エ可致演說事

稽古日 正月十一日開察 十二月廿日閉察 二ノ日劔術 三ノ日演兵 四ノ日劔術 五ノ日演兵 七ノ日劔術 八

ノ日演兵 九ノ日劔術 十ノ日演兵

休日 一六ノ日 七節 御祭禮四日 祭禮兩日 七月十三日ヨリ十六日迄

右之外委細學校御目付エ可承候
右之趣御目見以上エ可有演說候

一學校御造立以來文武修業之儀迄々被仰出候處當今不容易御時節に相成從公邊被仰出候趣モ有之御武備一際御行届無之候テハ難相濟候處諸藝一同修業候テハ銘々精力モ不足御世話モ不被爲行届際立上達之驗モ有之間敷思召候依之差向劍槍砲術取分厚御引立劍槍者諸流合併試合修業砲術者西洋大砲小砲散兵法修業被仰付候孰モ御時節柄御趣意ノ程相辨無二念致出精御武備相調候様相屬外藝術之儀ハ右餘力ヲ以是又可致修業旨被仰出候

右之趣子弟エモ申示厚可有教諭候且前文之趣常例觸來候向エ申通御目見以上支配エモ可被申渡候

一文武修業ノ儀是迄段々被仰出品モ有之處御家中多勢之内ニハ心得違不精之族モ有之如何敷事に候此後右様ノ者有之ニオイテハ急度御咎被仰付且嫡子ハ家督之節被仰付方可有之次三男等ハ養子願難相成其上父兄エモ御沙汰可有之候間嚴重相心得子弟エモ厚教示可有之候且以下右同文

一今般御家中一統劍槍砲術格別修業被仰付候付同役ノ内壯年ノ者修業無差支様成丈繰合可被申談候且常例 以下右同文
文久三年正月學校掛リ執政達

學校御用取扱

此度學校劍槍砲之三術特ニ修業被仰付候御家中一統格段出精修業相募候様被思召候方今不容易御時節柄御趣意ノ程厚相心得御家中熟和修業相勵候様厚心ヲ用ヒ取扱可申候猶學校掛リ御目付ヘモ可被申談候

藩主眞田信濃守幸民代ニ關スル左ノ如シ

慶應二年四月江戸ニテ

大右衛門嫡子牧野良平

西洋學爲修業開成所敎示職川本幸民エ入塾内願之通承濟

全三年三月十三日江戸ニテ執政達

此度若山壯吉様エ月並經書講釋御頼毎月十三日廿三日被成御出候付五時當御殿へ罷出聽聞候様向々へ可有演說候

全四年三月掛執政ヨリ達スル規則

一西洋砲術御用稽古申渡候ニ付テハ於學校朝五時ヨリ九時迄晝八時ヨリ夕刻迄二タ切ニ割稽古可致事但御番組之内二組ツ、晝前晝後ト隔ニ繰替刻限無遲滯罷出可申事

來月朔日學政局御開相成候付右同日ヨリ士分稽古之方法國千八百六十九年式御用ヒ相成候付其ノ段相心得教授可致事

全上

全三年 兵學寮定則

- 一 休日の外は學員辰牌に登寮して所課の事業を研究し其出入の早晚を以て勤怠を論決すへし
- 一 會讀の優劣術藝之巧拙を以て班位の順序を定め門地之尊卑官職の等級並に年齢之長幼に準すへからす
- 一 學員一月中の勤怠と學術の優劣を檢査して毎月旦其等級を改め之を壁上に掲示すへし
- 一 入寮之學員は専ら軍政の規則に基き只管長官之指揮を遵奉して他を顧ることおし各其務むる所を務め其掌る所を掌り力行勉勵諸事肅整なるを主要とし時事を非議し或は他寮を凌侮し總て粗傲の舉動を行ふへからす
- 一 兵家之學術廣大にして勤學の法も亦一定すへからすと雖も之を要するに一科に精通して後ち他の一科に轉進するを以て主とす故に課する所の學科も級を逐て習學し踰等躁進の弊に陷るまどなりれ
- 一 將士の學は學ど術どを兼脩し讀兵演兵偏廢すへからす若し其理を講し其實術に達せされは論する所總て紙上の空談に歸し其術を脩めて摸索豈用兵の真機に通曉することを得んや學者此理を體認して偏倚すへからす
- 一 學者の立志其本を知るを以て急とす夫れ心を學ど術とに委ねて日夜刻苦するゆへんのは能く各國の事情に通し能く彼我の國脈を詳にし吾本然の正氣を振起して皇國の威武を抗張するに在り故に士たる者益忠信正義の志を勵まし治に在ては工夫を格致上に着け務て時運と開運の開作を扶け一旦事あるに及ては家國之爲に武臣之職掌を盡さんことを欲す學者夫れこれを勤めよ

全年 演武寮假規則

- 一 午牌入寮シテ各其業ヲ肄ヒ申牌ニ至テ退クヘシ
- 一 履履ヲ亂着シ書壁破柱容儀ヲ失シ或ハ漫リニ寮内ヲ出ルヲ許サス
- 一 寮中尤謙遜恭敬ヲ主ト爲スヘシ凌侮戲謔及驕傲ノ行ヒヲ禁ス
- 一 時政ヲ非議シ官吏ヲ侮謾シ人物ヲ臧否シ或ハ造言以テ衆心ヲ惑スヲ禁ス
- 一 生徒講習ノ際宜ク虛飾ヲ去リ實踐ノ工夫ヲ爲スヘシ又能ク活潑ノ心ヲ操リ節義剛直ノ風ヲ振起シ粗暴血氣ノ勇ニ陷ル勿レ

全年七月廿七日松代藩政事所達書

一先般御藩治御改革有之候ニ付テハ學政ノ義モ速ニ御更張可相成等之處何分萬緒御多事之際一時ニ御間モ合兼候付暫之間從前ノ通相心得可致修業旨相達候處文武御振興之義ハ第一之御急務ニ付其儘ニ難差置方今御藩用必至御窮乏ヲ窮メ候折柄諸事御十分ニハ被爲屆兼候得共格別之御繰合ヲ以來月朔日學校御開キ相成候條御趣意ノ程深厚奉體認其後子弟エモ能々爲申聞彌以奮發可致修業候猶委細ノ義ハ學監エ可承合事

庚午七月

政事所

一來月朔日學校御開ニ付同日辰半刻染帷子麻上下着用同所エ相詰可申事

一着到之義ハ學監エ名札ヲ以相斷可申事

右之趣相心得子弟エモ可申通事

庚午七月

政事所

全日松代藩學政主事達

文學二等教授、全一等助教、全二等助教

其人々學術之深淺ニ依リ等級相立教授助教等其等ヲ追テ着實ニ可致教育事

一教授助教申合一兩人ツ、致早出生徒粗暴之所業無之様御締筋厚可相心得事

一生徒出席直ニ等級ニ從ヒ名札相掲ケ教授助教等ニ謁見シ各其座ニ就キ候ハ、出席順次ニ可致修業事

一授業終リ候節學監エ相斷出席ノ分記載候様可致事

一會讀輪講之節モ右ニ准シ候事

又

其人々藝術ノ深淺ニ依リ等級相立教授助教其等ヲ追テ着實ニ可致教育事

一教授助教申合一兩人ツ、致早出生徒粗暴之所業無之様御締筋厚可相心得事

一教授助教早出之者ニテ名札掛預リ居生徒出席謁見候ハ、直ニ名札相掲ケ且學監ヨリ出席帳受取出席ノ分相載セ可

申引取ノ節ハ右帳面學監エ可相返事

一稽古所出入口締相付候間早出之者學校番ヘ申渡爲相開退局之節ハ其段學監エ可相斷事

兵學二等教授、全試補、全一等助教、全二等助教

學問出精一段之事思召候依之銀三枚被下置之
氏名
(但徒士席ハ思召ノ二字ヲ省ク)

試業達書式

一儒書素讀講義可承候間五半時御城江罷出候樣別紙名面之者江可被相觸候以上

月
日

御
目
付
中

或八掛又八學校懸

御
目
付
中

別紙

何月何日

講義

氏 氏
名 名

(右講義ノ斷リナキハ素讀ナリ下同シ)

右松代藩學校及縣學校共ニ事故有リ實施セス依テ及落達式之レ無シ

士族卒ノ子弟教育方法　士族ハ必文武學校へ入學セシメタリ　卒ハ必入學ヲ要セス各自ノ意向ニ從ヒ家塾等ニテ修學セシム然リト雖凡篤志ニテ入學ヲ請願スル輩ハ許可セシナリ　藩費ヲ以テ他國へ遊學セシメ若クハ私費遊學ヲ許可シタルヲ從前ヨリ之アリ　藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルノ制アリ

平民ノ子弟教育方法　家塾寺子屋等ニテ修學セシノミ藩立文武學校へ入學セシムルノ制ナシ農民學事ニ從事スルヲ禁止セシモ亦嘗テ之レ無シ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設セント欲スル者ハ他ノ檢束ヲ受クルナク何人タリトモ其人ヲ自由ニ開設ス

讀書出精一段ノ事思召候依之書名一部被下置之氏名
 (但同斷)

明治三年松代藩學校試業達書式

一儒書講義素讀可承候間日割之通五ッ時學校の
出頭可致事

干支月日

學政局

右之通相心得別紙名面之者以可達事

何月何日

講義

何月何日

講義

氏 氏 氏 氏 氏 氏

名 名 名 名 名 名

計五條

全年八月七日

一般學校御開相成候付テハ三十歳迄ノ向ハ已ニ御布告之趣モ有之候處右年齡以上ニテモ非役ノ向ハ勿論吏員モ可成丈罷出可致修業事

庚午八月

學政局

右之通御舊中エ可致演說事

文政十二年以來松代ニ於テ四書五經素讀及四書講義濟人員見記簿者如左

文政十二年四書四人五經一人 十三年五經五人 天保二年四書四人五經三人 三年五經四人 四年四書二人五經六人 五年四書一人五經三人 六年四書二人五經四人 七年四書一人五經四人 八年四書六人五經四人 九年四書三人五經三人四書講義五人 十年四書七人五經七人 十一年四書四人五經六人 十二年四書六人五經八人 十三年四書三人五經六人 十四年四書四人五經四人四書講義一人 十五年四書二人五經七人 弘化二年四書二人五經八人四書講義一人 三年四書五人五經三人四書講義一人 四年四書四人五經五人四書講義二人 五年四書十人五經三人四書講義二人

嘉永二年以降四書五經講義素讀濟人員載簿記者如左

嘉永二年四書講義二人四書五經素讀二十九人 三年四書講義二人四書五經素讀二十人 四年四書五經素讀二十二
五年四書五經素讀十二人 六年四書五經素讀七人 七年四書講義三人四書五經素讀二十九人 安政二年四書講義
二人四書五經素讀二十五人 三年四書講義二人四書五經素讀二十七人 四年四書五經素讀三十七人 五年四書講義
四人四書五經素讀三十二人 六年四書講義二人四書五經素讀三十三人 七年四書講義三人四書五經素讀三十九人
萬延二年四書講義五人四書五經素讀五十人 文久二年四書講義二人四書五經素讀五十三人 三年四書講義三人四書
五經素讀三十九人 元治元年四書講義二人四書五經素讀五十五人 慶應元年四書講義三人四書五經素讀四十五人
二年四書講義四人四書五經素讀五十八人 三年四書講義一人四書五經素讀二十九人 明治元年不分明 二年四書講
義四人四書五經素讀三十四人 三年四書講義一人四書五經素讀四十六人
右松代ニ係ル江戸之分不可考

講義賞書式 但舊書

素讀賞書式

素讀科 初等孝經○中等四書○高等五經本科内三體詩文章軌範兼讀

質問科 初等皇朝史略、十八史略○中等小學○高等日本政記、綱鑑易知錄

講義科 初等四書○中等四經○高等三禮

右素讀科ハ文學二等助教全助之ヲ授ク質問科ハ文學一等助教之ヲ授ク講義科ハ文學二等教授之ヲ授ク

三科教授ノ時間午前八時ヨリ十二時ニ至ル

會讀輪講定則

經書 月三次輪講○漢史 月三次會讀○國史 月三次會讀○歌會 月一次○文會 月一次○詩會 月一次

右時間ハ午後二時ヨリ五時一テ若シ議論決定セサルニ秉燭ニ至ラスシテ止ム

學科學規試驗法及ヒ諸則

舊松代藩文武學校ノ時左ノ如シ

和學暫欠之私塾ニ於テ學ハシム 漢學 學洋兵制士官學校ニ於テセリ 洋算全上 醫學 習禮 兵學 弓術 馬術松代町ノ内家殿町内ニ於テセリ 劍術 槍術 砲術

角打丁テセリ 柔術 游泳千曲川通宜ノ場ニ於テセリ 和算暫欠之私塾ニ於テ學ハシム 筆道全上

生徒ニハ必文武尚道ヲ兼修セシメタリ四書ノ大義ニ通スルモノハ武術ノ免許以上ニ當セリ

學科中其一科ヲ專修スルヲ許可セス但文久三年時勢ノ緩急ニ從テ一藝專門許可セシヲアリ

學習ノ期限年齡八歳ニ至リテ入學シ三十歳以上退學妨ナシ但文久三年正月武藝ハ十五歳ヨリ三十五歳迄專ラ修業スヘキヲ命セリ

〔春秋試驗法〕 天保九年三月文政某年ヨリ四書五經素讀濟四書講義濟ノ分試業セシ以來毎歲十二月城中或ハ學校ニテ

各科試業及ヒ甲々乙々ノ四等ニ區別シ乙以上ノ者ハ藩主ノ聽ニ達スヘキヲ以テ及第トシ最下ノ乙ハ其聽ニ達スヘカラ

サルヲ以テ落第トシ再ヒ試業ヲ爲シタリ斯試業ノ際文武掛執政臨席掛監察立會句讀師或ハ文學會頭其業ヲ檢査シ以テ

甲乙ヲ指定セリ

江戸藩邸ニ於テハ嘉永二酉年ヨリ前條ノ如ク爲セリ

〔生徒賞品授與之法〕 文政年間ヨリ十歳マテニ四書素讀十五歳マテニ五經素讀濟ノ者ヘ孝經近思錄或ハ小學蒙求ヲ授

與シ二十歳マテニ四書講義濟ノ者ヘ銀三枚授與シ二十歳以上五經講義濟ノ者ニ章服ヲ授與ス此典明治年間マテ變セズ

安政四年四月廿九日文武學校假開業以來文學武術其勤怠精否ニ關シ明年春厚薄多少ノ品物ヲ賞與セリ

ルヲ得セシメタリ但藩士ハ掛執政農商ハ郡宰市尹等ニ開申シ其指令ヲ受クルト否ラサルトニテ公私ノ別アリ

學校

校名 文武學校ト稱セシノミ但一時博文館ト稱スルノ議アリ決セスシテ止ム 文武舍(江戸藩邸内) 兵制士官學校 文武學

校據内別區畫

實曆七年以上文學簿記燒失考ル所ナシ全八年ヨリ文化三年マテ文學軍學及武術ヲ講セシ所ヲ稽古所ト云ヒ文化八年更ニ學問所ト改稱ス江戸藩邸内ニ在リシ者モ亦然リ

校舍所在地 文武學校ハ松代町ノ内字清須町 文武舍ハ江戸外櫻田新橋内藩邸内 兵制士官學校ハ文武學校構内ニテ其

區畫ヲ異ニス

從前ニ遡ルキハ左ノ如シ

實曆八年ヨリ文化三年マテ稽古所ハ松代町之内字殿町 文化三年燒失更ニ設爲セシ稽古所改稱學問所ハ清須町 江戸

藩邸内稽古所ハ天保十一年以前ハ溜池全十二年ヨリ十五年マテ大名小路弘化元年ヨリ外櫻田新シ橋

沿革要略 舊藩文武學校創立ハ嘉永五年ヨリ安政元年ニ至テ全ク落成セリ舊藩主從四位侍從眞田信濃守幸貫時代特ニ儒

學ヲ尊崇シ文政年間襲封ノ初ヨリ學校ヲ創建シ文武ヲ擴張スルニ意アリト雖凡事故アリ達スル能ハス然ルニ時勢變換

感激不措至是始テ其素志ヲ果スニ至レリ

文武學校創業普請總奉行 家老職鎌原伊野右衛門、小山田壹岐○文武學校掛リ 中老職赤澤助之進○文武學校創業取

調掛リ 寺社奉行兼郡奉行菅沼九兵衛○文武學校掛リ 郡奉行兼勝手元役山寺源太夫、長谷川深美○文武學校普請用掛

リ 作事奉行兼足輕奉行矢野茂、白井平左衛門○文武學校用掛リ 吟味役佐藤安喜○文武學校普請用掛リ 道橋奉行宮

島守人○文武學校掛リ 目付禰津刑右衛門、齋藤友衛、右筆中條大吉、小山織江、徒士目付西澤甚右衛門、北澤大藏○該

校ニ關係スル學士 宮下主鈴

江戸藩邸文武舍創立ハ嘉永四年ニ係レリ

文武建設總奉行 家老職助池田要人○全普請用掛リ 作事奉行足輕奉行兼帶白井平左衛門○該舍ニ關係スル學士 次

小姓小林重介

教則

晤スルヲ勿レ

一輪講會讀ノ席ニ臨ム者更ニ正襟端坐シ虛懷聽受スヘシ如シ其意旨ヲ討論セント欲セハ須ラク徐々開陳スヘシ又新奇ノ說ヲ張り臆度ノ見ヲ執リ迷ニ勝ヲ求ルヲ許サス

一履屐ヲ乱着シ書壁破柱容儀ヲ失シ或ハ漫然寮局ヲ離ル、ヲ許サス

一寮中尤モ謙遜恭敬ヲ主トナスヘシ凌侮戲謔及ヒ驕傲ノ行ヒヲ禁ス

一時政ヲ非議シ官吏ヲ侮謾シ人物ヲ臧否シ或ハ造言ヲ以テ衆心ヲ惑スヲ禁ス

一諸生宜ク長者ノ訓導ニ從フヘシ固陋寡聞一己ノ見ヲ膠守シ恣ニ先輩ノ指授ヲ負クヲ勿レ

計七條

生徒罰則 此則未設然リト雖疾病事故ニ託シ不參之者又ハ非義不法ノ所爲アル者ハ詮議ノ上相當ノ處置アリシナリ
入學許可ヲ得シ者 舊藩學校入學定日ナシ禮服着用父兄同道入學相濟後掛執政參政等ヘ回禮スルノミ松代藩學校入學
モ亦定日ナシ禮服着用父兄同道入學相濟后學政主事全副主事ニ回禮セシノミ 松代縣學校入學毎月五日禮服着用父兄
同道入學相濟掛少參事ヘ回禮セシナリ

職名及俸祿

維新前舊松代藩ニ於ルヤ左ノ如シ

文武掛執政一員 全掛監察二員 儒者一員 句讀師以下定員ナシ 全助 學校掛 句讀師見習

役料扶持米ノ定額ナシ然リト雖特賜ノ分ハ之アリ

座席身分取扱 儒者ハ諸士以上ノ勤役寛政年間右筆上席文政年間取次役次席トス 句讀師ハ諸士以上ナレハ番士上席以下ナレハ徒士上席用人格ノ者ナリ

レハ其持席ノ取扱 句讀師助ハ諸士以上ノ者勤役句讀師見習ハ徒士席ノ者勤役學校掛ハ用人格以上ノ者勤役セリ

右寶曆年間ヨリ嘉永五年文武學校勸業マテニ係ル

維新前江戸藩邸ニ於ケル左ノ如シ

文武掛執政一員 全掛監察一員 儒者一員 句讀師一員 學問所世話役一員 學問所頭取一員

役料扶持米 松代ニ於ル如シ

座席身分取扱 全斷但學問所世話役ハ諸士以上ノ勤役學問所頭取モ亦全斷ニテ取次席次席

右寶曆年間ヨリ嘉永四年文武舍創建マテニ係ル

〔生徒訓條〕

一 稽古定日刻限之通罷出無油斷可有修業事

一 於稽古所相互禮儀ヲ正シ總テ猥ナル儀不可有之事

一 火ノ用心別テ入念可申事

附召連候家來共火之元大切相心得且總テ高聲口論不作法ナル儀無之樣急度可申付事

右之趣堅可相守もの也

卯四月

稽古日割

正月廿一日ヨリ
十二月廿日マテ 何某

一ノ日

晝前或ハ何時ヨリ
何時マテ晝後全斷 何某

二ノ日全上

三ノ日全上

四ノ日全上

五ノ日

六ノ日

晝前或
ハ何時

ヨリ何時マテ
晝後全斷 何某

七ノ日全上

八ノ日全上

九ノ日全上

十ノ日

稽古初正月十八日

休日

五節句

八朔

七月十三日ヨリ十六日マテ

御兩宮御祭禮兩日、但白鳥
武靖

天王祭禮兩日但八坂

右定及稽古日割各稽古場ニ揭示

〔生徒罰則〕 預定セス不法者アレハ則後日詮議ノ上處置ニ及ヘリ

明治二年六月松代藩學制

皇學漢學 三年文學ト改稱ス

劍術

砲術 三年兵學ト改稱ス

馬術

水練

生徒文武兩道兼修 必兼修ヲ要セリ

文學ト武術ト程度ノ比例 四書ノ大義ニ通スル者ハ武技ノ免許以上ニ當セリ

其一科專修 未許可セス

學習期限 八歳ヨリ入學三十歳以上退學 八歳以上入學シ難キ者ハ其事故ヲ學監ニ斷レリ

春秋試驗法 毎月一次考課 四時同斷 歳終大試験ニ及ヒ黜陟ヲ行フノ議アリ未定

賞品授與之法 未定

明治三年松代藩學校文學寮

假規則

一 辰牌入寮シテ各其業ヲ肄ヒ申牌ニ至テ退クヘシ

一 諸生嚴ニ課程ヲ守ルヘシ寸光分陰モ亦閑過スヘカラス且整頓肅然純一ニ注意靜讀スルヲ要ス劇談浩笑旁人ノ耳ヲ

劍術二等教授四人 馬術全斷三人 水練全斷一人 劍術一等助教二人 二等助教五人

明治元年十月舊松代藩兵制士官學校

職名及俸祿 兵制士官學校教頭一員 兵制士官學校助教未定

職員概數 兵制士官學校教頭一員 全助教二員 全一員明治二年一月増員 全並二員全年全月新置

明治三年二月改正松代藩學校 職名及俸祿 兵學二等教授一人但大參事ヲ一等 全試補四人全上 全一

等助教七人(七等)現米十石 全二等助教三人(八等)現米八石 演兵世話方十五人月金壹圓二十五錢

職員概數 兵學二等教授一人 全試補四人 全一等助教七人 全二等助教三人 演兵世話方十五人

生徒概數 維新前 寄宿生徒無シ 通學生徒百人許 寄宿生徒定員無シ由テ藩費自費ノ區別固ヨリアラス○學制頒布前

寄宿生徒漢學生無シ洋學生二十餘人 通學生徒漢學生五百餘人洋學生八九十人 寄宿生徒定員未定

東脩謝儀 維新前學制頒布前共ニ無シ

學校經費 安政四年十二月一週年ノ總學費ヲ高三千石ノ半知トシ以テ支給スルヲト定メタリ但文學費ハ大凡其十分ノ二

程ニ當ルヘシ然レモ簿記散失今共費額ノ事實ヲ考フル能ハス 學費ヲ藩士ニ賦課シタルヲ嘗テ無シ

藩主臨校 藩主臨校シテ文學軍學講談聽聞ノコアリ未ダ嘗テ生徒ノ試業ヲ爲セシコ有ラス武技ハ屢共仕合其業前ヲ試ミ

シコアリ

先藩主眞田信濃守幸貫代ニ在テハ文武共城中ニ於テ聽閱ノ序其試業ニ及ヒシコ屢有リシナリ

祭儀 聖廟之設置アラス是ヲ以テ釋奠舍菜ノ禮典ナシ

學校構造及ヒ建物圖面 地坪千六百四拾九坪 建坪四百六拾坪餘

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書之種類部數

明治三年庚午五月出版銃兵疊法二冊 全小隊疊法二冊

藏書 經類百四十餘部 史類七十餘部 子類二十餘部 集類七十餘部 詩類七十餘部 此他雜部數百種○洋籍 兵法書

類二十七部 砲軍書類二十部 騎軍書類六部 步軍書類七十部 歷史類三部 字書類六部 雜書類十貳部 右法籍ニ

係ル他英蘭共ニ數十部ツ、此外譯書類百餘部

舊松本藩

嘉永年間松代文武學校及江戸藩邸文武舍設立以後維新迄如左

〔松代藩〕文武學校掛執政二員或ハ一員 全掛參政一員 全掛監察二員 學校督學一員 全文學會頭三員 句讀方頭取一員 儒者一員

役料扶持米前全斷下同シ

座席身分取扱 督學ハ表用人上席 文學會頭ハ取次役次席 句讀方頭取ハ給人以上ノ勤役

〔江戸藩邸〕文武舍掛執政一員 全掛監察一員 文武舍助教一員 句讀方頭取文武舍助教改稱一員 學問世話方頭取一員 全世話方二員 讀書世話一員

坐席身分取扱 學問世話方頭取全世話方ハ諸士以上勤之

學制頒布前如左

明治二年松代藩職制 學政局兼設皇漢洋三學 主事一人(二等權大參事全等但大參事ヲ一等ト爲スノ順次) 副主事二人(四等權少參事全等

學監三人(六等)議事全等 督學三人(四等權少參事全等 一等教授三人(五等)理事全等 二等教授十四人(六等)議事

全等 一等助教十七人(七等)讀者行人全等 二等助教二十人(八等)書記全等

明治二年松代藩學政局 職名及俸祿 學政主事一人(等級准前)現米六十石 學政副主事二人現米廿五石 學監三人現

米十三石 皇學漢學二等教授二人全上 劍術二等教授四人全上 砲術二等教授二人全上 馬術二等教授三人全上

水練二等教授一人全上 砲術二等教授試補一人全上 皇學漢學助教二人現米十石

職員概數 皇學漢學二等教授二人 全助教二人 劍術二等教授四人 砲術二等教授二人 全試補一人 馬術二等

教授三人 水練二等教授一人 學政局庶務掌二人(八等)書記同等 二等學監主簿二人(十等)記錄同等

明治三年二月改正 職名及俸祿 主事一人(二等)現米六十石 副主事一人(四等)全廿五石 學監三人(六等)全十

三石 文學二等教授三人全上 全一等助教四人(七等)全十石 全二等助教八人(八等)全八石 劍術二等教授四人

(六等)全十三石 馬術二等教授三人全上 水練二等教授一人全上 劍術一等助教一人(七等)現米十石 全二等助

教五人(八等)全八石 文學二等助教助廿四人月金壹圓二十五錢

職員概數 文學二等教授三人 一等助教四人 全助一人 二等助教八人 全助廿四人 庶務掌二人 學政局寫字

生一人(十等) 全試補二人 筆生二人(十一等) 門衛三人 守器四人(十二等) 全試補一人 監手四人(十二等)

使部四人

又其嫡子ハ早ク仕籍ニ上セ二三男ハ別ニ新知扶持米等ヲ給與シテ新ニ藩籍ニ列スル如キ事アリ是レ其格別特異ナル者ニ在テ然ルナリ通常ノ獎勵法ハ書籍物品及金幣ヲ以賞與セシモノトス

士族卒ノ子弟教育方法 封建ノ往時藩内教育ノ方法確乎タル制規ナケレバ今其見聞スル所ヲ記セシニ或ハ藩學ニ入學シ或ハ家塾ニテ修學スルコトヲ許シ各自ノ意向ニ任セテ問ハサル者ノ如シ而生徒受業ノ心得ハ學塾ノ別アルコトナシ然レバ卒族ノ子弟ニ至リテハ專ラ武道ヲ脩ムルモ文學ハ殆ント之ヲ禁シタル者ノ如ク敢テ藩學ニ入ル者ナク唯僅ニ家塾ニテ修學セシ者アリシノミ 藩費ヲ以テ他國へ遊學スルコトヲ許セシハ至テ稀ナリト雖モ私費遊學ノ者ハ士族卒ニ論ナク皆之ヲ許シタリ

講義ハ毎月十四回藩士及諸生ヲ分テ聽聞セシム即各組毎月二次ニ當レリ以上舉クル所天保以來維新前ノ事トナス明治ノ維新ニ際シ學制從テ振興シ規模隨テ擴張シ大ニ士族卒ノ子弟ヲ獎勵シテ皆學ニ就カシメ年齡十二歲ヨリ三十歲迄ノ通學生ニハ一人ニ付年給現米壹石ヲ給シ寄宿生ニハ總テ現米二石ヲ給シ中ニ就テ其俊秀者ニハ玄米拾石乃至七石ノ學資年俸ヲ給シテ四方ニ遊學シ名師ニ就キ良友ト交リ其材ヲ成サシム而三年ニ一度國ニ歸リ學業進否ノ試験ヲ受ケシメ其優者ハ再ヒ遊學ヲ許スノ成規ナリシ

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ各自ノ意向ニ任セ家塾寺子屋ニテ脩學スルノミ然レバ家塾寺子屋ヨリ其子弟ノ清書ヲ藩學ニ出シ蒐集シテ之ヲ執政ニ致シ閱覽ニ供スル毎月一次以テ其業ヲ獎勵セシマアリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スル者他ノ檢束ヲ受クルコトナク何人タリモ自由ニ開業スルコトヲ得タリ

學校

校名 新町學問所 崇教館 藩學又中學トモ云フ

校舎所在地 新町學問所ト稱セシハ城北字新町ニ在リ崇教館ト稱スルニ至テ城内字柳町ニ在リ藩學トナリテハ字地藏

清水柳町ノ兩區ニ跨レリ

沿革要略 新町學問所ハ城北字新町ノ舊ト搦倉ト唱ヘシ所ニ在リシガ其創始ノ年月ハ記錄傳ハラス父老モ亦記憶スル者ナキヲ以テ今徵シテ之ヲ知ルニ由ナシト雖モ蓋寶曆ノ頃ニ在ルヘシ安永天明ニ至リテハ既ニ學問所タリシヲ徵スルノ記錄アリ而崇教館設立ハ其後寛政五年藩主松平光行時代ニ在リ抑此館ヲ設立スル所以ハ光行儒學ヲ尊崇シ學政ヲ擴張

學制

學事上ノ諸制度 當時學校設立ノ爲メ藩主ノ出セル布令諭達等邈乎トシテ今悉ク之ヲ考フヘカラス因テ搜索シテ得ル所ノ布令諭達ノ類ヲ記スルヲ左ノ如シ

藩主松平光悌告諭書

一元和年中從公儀被仰出候文を右武を左に致候儀政務之第一ト存候長臣は勿論家中之面々若輩は別て學問致出精候へは自然ト忠孝に叶ひ可申候長臣ハ不及申我等始家中之面々にも兼々心得罷在事に候得共學問不致候得は實に孝悌忠信之道も難辨明候故自然ト怠候様に相成學問之致方も日用之行ひ專一に致度候假令博識にても文武之道に不叶忠孝之行ひ欠候ては無學に劣り可申と存候返々も日用之行に力入申度事に候是治世に亂を忘れ候得は自然ト武備疎に相成軍學をも不懸心武器も打捨候様相成候得は武士の本意を取失ひ可申儀歎敷事に候家中若者は別て經學並軍學武學武藝隨分勵候様に致度候諸士徒士足輕に至る迄武藝は勿論家業有之者は其業を勵み其外朕方算術等迄も格別に求精致候者へは存寄も有之事に候尤も諸藝心懸候者にも忠孝之道を先に致し其餘力を以て出精致し候儀第一ト存候我等も是迄乍思懈候自今以後油斷なく可心懸存念候

天保十一年子十二月十一日惣教ヨリ達

一先達て被申聞候稽古人御賞美之儀左之通御詮議有之候戊午得御意候場をも尙々相心得出精世話致候様存候

大人 弓術 世話役以上○馬術 世話役以上○槍術 免許以上○劍術 一流にても免許以上○經學 四書濟以

上○軍學 一流にても免許以上

一戊年被仰出候旨に隨ひ右相嗜候者并一流たり共拔群手に入奇特之心掛有之者平生之心得行跡等御詮議之上御含可有之候

前髪之者

一心得宜敷出精流儀之掟師範之教を守り藝術一際様子宜敷者左之人數目當を以て人別撰可申聞候

一惣て御賞有之候者後に怠り心得違不行跡之義有之ては上にも御不本意下は猶更不調法成義故御賞之砌師範々々父兄よりも熟と教示可有之事

藩士及其子弟文武學業上進ノ者ハ別ニ間接ノ祿税等ヲ免除スル如キヲ無シト雖凡之ヲ獎勵スル爲メ或ハ知行ヲ増給シ

鑑綱目、文章軌範、八大家讀本、詩集類(兼テ生徒ノ力ニ應シテ詩文章ヲ作ラシム)○和學 童蒙入學門、古道訓蒙頌、古學二千年、皇典文彙、稽古要略、神德畧述頌、荷用大人啓、古語拾遺、古事記、日本紀、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄、萬葉集、古今集、詞の八衢(兼テ音義語格ヲ授ケ和歌文章ヲ作ラシム)○醫學 博物學、化學、解剖學、厚生學、病理學、藥劑學、治療學○和算 天元極致マテ○洋算 代數幾何マテ○兵學 七書、兵要錄、大要錄、經權提要、步操新式、野戰要務、步兵程式、士官必携、築城典型、三兵答古知幾

藩學ノ順序方法 漢學科ニ於テハ崇教館ト異ナルヲナシ和學科ハ素讀ス講讀音義語格ニ分チ兼テ生徒ノ力ニ從ヒ和歌和文ヲ作ラシム揭示アリ下ニ出ツ

醫學科ハ創始ノ初メ教則順序未タ整頓セス且久シカラスシテ分離ス其經歷等下ニ出ツ兵學科ハ專ラ西洋ノ制ニ從ヒ生兵訓練諸兵運用攻守法築城學等ヲ授ケ兼テ内外ノ諸兵書歷史ヲ博涉シ行軍布陣輜重戰畧ニ關スル利害得喪ヲ討究セシム然レモ實地練兵ハ御家流別表ニ詳載スニ於テスルヲ以テ彼ノ教場トハ互ニ連絡シテ相離ル可ラサルノ形ヲ爲セリ數學ハ和洋算法ヲ兼テ授ケ加減乘除ヨリ天元極致代數幾何ニ終ル

學科學規試驗法及諸則

初メ崇教館中ニ漢學筆道習禮弓術劍術外多ノ數科ヲ置ク其他數學槍術劍術數派アリ別表ニ詳ナリ兵馬砲銃游泳等ノ諸術アリト雖モ校內狹隘ニシテ悉ク其教場ヲ設クルヲ能ハス故ニ或ハ師範家邸地内ノ一區ヲ畫シテ其場ヲ設ケ或ハ馬砲游泳術ノ如キハ各便宜ノ地ニ就テ教場ヲ構ヘ之ヲ演習セシム其形私塾ニ似タリト雖モ皆藩ノ設立ニ係リ一切ノ費用亦悉ク藩ノ支給ヲ仰キ而諸生徒ノ賞與ハ崇教館ニ於テス故ニ概シテ之ヲ私塾ト看做スヲ得ス因テ今之ヲ本館附屬ノ者トナシ其調査ハ附錄別表ニ詳記セントス

藩學ニ於テハ和學漢學筆道醫學算術兵學槍術劍術無念柔術流本ノ九科ヲ校内ニ置キ砲術及練兵ノ場ヲ牙城跡ニ設ク後久シカラスシテ醫學ハ分離シテ別ニ病院ヲ建設ス而此他ノ諸流武技ハ皆之ヲ廢止セリ

文學ト武術ト程度ノ比例ハ四書ノ大義ニ通スル者ハ武術ノ允可以上ニ準擬セリ

學制頒布以前ニ在テハ生徒學習ノ期限ハ總テ確平タル制定ナシト雖モ概チ八歲以上ニシテ入學シ廿歲前後ニシテ退學スルヲ通常トス

崇教館ノ試驗法ニ於ケル例月試驗ハ毎月一次惣教掛用人學館目付及擔任ノ教師世話役列座ノ席ニ於テ生徒七八名助教之ヲ率ヰテ惣教ノ前ニ進ミ試驗ス又惣教不時ニ教場ニ臨ミ教師ノ授業生徒ノ勤惰ヲ觀察ス 定期大試驗ハ歲末ヲ以之

シ藩士及其子弟ヲシテ文武ノ道ニ向ヒ孝悌ノ義ニ厚カラシメント欲スルニ因ルト雖今當時ニ溯リ其詳細ノ情况ヲ探索シテ明記スルヲ能ハス且又藩學ノ事ハ維新後輒近ニ在リト雖廢藩異常轉覆ニ際シ學校ノ組織屢變更シ新舊職員交迭スル毎ニ校中ノ記錄日乘モ亦多ク散渙シテ職員ノ拜命俸祿ノ給額及ヒ布達諸規則類等詳記スルヲ得サル者少ナカラス之ヲ要スルニ蓋藩學ト改稱セシハ明治三年十月ナリト信ス此改正ヲ要スル所以ノ者ハ王政維新ノ隆運ニ遭逢シ茲ニ始メテ人材育英ノ急務タルヲ看破シ舊弊ヲ一洗シ規模ヲ擴張シ専ラ藩内ノ士族卒ヲ鼓舞シテ悉ク其子弟ヲ就學セシムルノ目的ニ出テ之ヲ藩政ノ主要ナル先務トセシニ由ル者ナリ而明治四年八月松本藩ヲ廢シ縣ヲ置ル、ヲ以テ藩學ノ名稱モ亦從テ縣學ト改稱セシカ未タ久シカラスシテ全十一月松本縣ト伊那高島高遠ノ諸縣合併シテ更ニ筑摩縣ヲ此地ニ置ル、ニ當リ縣學亦一時閉校シテ校舍書籍器械等一切全縣ニ引繼キ諸職員悉ク任ヲ解ケリ 崇教館藩學共ニ學派ハ程朱ヲ主トス故ニ折衷學ヲ爲ス者アリト雖學校ニ出ツレハ皆程朱ノ說ニ因テ教授セリト云 文武學士ノ氏名小傳ハ別冊ニ載ス

教則

崇教館教科ハ左ノ如シト雖或ハ之ヲ先後シ或ハ之ヲ取捨スルハ教師ノ權内ニ在リトス

和漢學 四書、小學、近思錄、五經、三禮、三傳、孝經、爾雅、本朝通記、國史略、皇朝史畧、日本外史、十八史略、史記、漢書、通鑑綱目、文章軌範、八大家讀本、唐宋詩集類○兵學 七書、兵要錄、大要錄、經權提要○筆道 和樣、漢樣○習禮 小笠原流

崇教館授業ノ順序方法ハ先ツ十三經ヲ授讀シ又聽講輪講ノ科アリ和漢史類等ニ至リテハ獨讀ヲ以テ兼テ學ハシム且生徒ノ力ニ從ヒ詩文章ヲ課ス兵學七書ハ儒者即教授助教ニテ之ヲ講說シ其他ノ三書ハ各専門家アリテ常ニ其邸ニテ教授セリ

筆道ハ各自ノ望ミニ任セ和樣漢樣ノ字體ヲ脩メシム

習禮ハ毎月三齊之ヲ教授シ又日々ノ進退起居ノ時ニ於テモ亦之ヲ習ハシム

授業時間ハ每日辰刻ヨリ未刻ニ至ルト雖凡時間課程ヲ設クル今日ノ如キ精密ナル區別ハアラサルナリ且又年內休暇日ハ一六ノ如キヲ云ノ日五節句祭日十二月廿一日ヨリ正月廿日迄土用休^{蟲干ト}此他臨時休猶多シ

藩學ノ教科用書ハ左ノ如シ

漢學 四書、小學、近思錄、五經、三禮、三傳、孝經、爾雅、皇朝史略、國史略、日本外史、大日本史、十八史略、史記、漢書、通

一館中に於て禮儀を重んじ動止端正を好み無用の物語等あるへからず萬端篤愼を宗として風儀貞順にあるへき事
書學條約

一書學稽古の事は成人の後公私の用を辨せんう爲に候得は書體正しきを宗としてひたすら出精あるへき事

一筆意は和漢兩樣式楷行草の諸體を擇はすといへども不便利ある流義を好んは益なかるへし此旨勘辨あるへき事

一臨本は銘々師範あるへし望によかせ持參すへき事

一清書は毎月六齋はかりの日つもりにて習熟のとき臨書あるへき事

一稽古中は用事に起といふとも一兩輩に過くへからざる事

一館中に於て禮義會釋習熟あるへし稽古の時は猶更なり無用の物語これを愼み風儀貞順にあるへき事

文化四年卯四月

文武學方御條目以下三ヶ條ハ軸幅ニ製シ
講釋ノ間ニ掲ケ置シナリ

一文武忠孝を勵み可正禮義事

一忠孝は人倫の大綱是を及さは親戚朋友の道も自可明文武は士業の本職學之則風俗從て可正此兩端を以可敬平生事

天保九年戌七月十一日被仰出

左ノ四ヶ條ハ講釋ノ間南方へ張出シ置レタリ

一文武之稽古是迄隨意に相成候處以來は弓馬槍劍經學軍學一通ハ必相嗜み其餘心次第尤實用第一に心掛候様被仰出候

一士たる者は文武の兩道を勵み治世は治世のなり亂世は亂世のなり己か當り前の命分を辨へ天を仰き人に對し耻へき事なき程に厚く心懸其身相應の用辨又ハ一家一門傍輩友達の交りにも其途を失はす他所遠國へ押出しての勤筋も有ものなれば猶更の事にて師に従ひ道を學ひ文武の稽古修行を積み治亂の勤に手を取らざる様に嗜み身を脩め行を愼み君をも親先祖をも耻かしむることなく安全に世を渡るは則教の徳也去れば其教をあかめたとすれ各へ文武の修行をは勤め有度御本意にて崇教館と名つけられたれハ御條目の趣心をとめ相守られ師範の教に従ひ同學の衆中相互に實意深く助合ひ合はれ畢竟か様かくてかなはぬといふ目當を立神妙に出精可有事

一此御館には初より武藝は射塲御立おかれたるのみなれども學校といへは必文武共に夫々の稽古所有て修行有事故何方にて諸流の稽古有ども此心得にて作法正しく出精あるへき事

ヲ行フ其法學庸濟四書濟詩書濟五經濟十三經濟ノ五等ニ分テ武技ハ各師範家ニ於テ年內ノ勤惰ト其技ノ進否トヲ通考シテ優劣ヲ定ムルノミ別ニ試驗法ヲ設ケス然レモ組頭物頭毎年一次或ハ二次各科ノ教場ニ臨ミ初學ノ生徒ヨリ允可ニ至ル者迄ノ技業ヲ演セシメテ之ヲ觀察セリ且又藩主在城ノ年ハ牙城ノ趾ニ試場ヲ假設シ武術ノ技ヲ親臨檢閲シテ諸生ノ其業ノ優劣ヲ察シ優等者ニハ或ハ品物ヲ賞賜セラル大抵秋冬ノ交ニ於テ之ヲ行フ俗之ヲ御前ト稱ス藩學ニテハ未タ試驗法ノ制アラス時々教授等稟議シテ之ヲ行ヘリ

崇教館ニテ優等ノ生徒ニ賞品授與ノ法ハ概テ歲末試驗ノ優劣ニ因リテ之ヲ定メ翌年正月十三日學校ニ於テ之ヲ行フ此時月番執政文武師範家悉ク列席ス授與ノ品等四アリ上ハ書籍次ハ下緒次ハ扇子次ハ小柄小刀トス而數年引續皆勤ノ者モ亦年數ニ因テ賞ヲ賜フ差アリ而賞ヲ受クルノ生徒ハ禮服用退テ各自ノ師家ヲ回禮セリ藩學ニ於テハ未タ賞品授與ノ制アラス

崇教館ニ於テハ生徒ノ齒德敏鈍ヲ衆父兄ニ示シ獎勵セシムル爲メニ名簿ヲ三列ニ掲ク其一ハ登學順一ハ年齒順一ハ學業順トス

日々生徒ノ受業終レハ年齒ノ順序ヲ以テ講堂ニ列シ教員ト相對シテ一禮セシメ畢テ行儀世話役名簿記ヲ舉ケテ各生ノ姓名ヲ呼ヒ出席ヲ簿札ニ記シ而席末ヨリ退校セシム

訓義ノ節ハ生徒學業ノ順序ヲ以數行ニ列座セシメ聽講畢レハ行儀世話役姓名ヲ呼ヒ簿札ニ出席ヲ記シ退座セシムル前條ノ如シ

登學順ハ別ニ名簿ニ掲ケ年數ノ多寡及ヒ學業ノ進否敏鈍ヲ示ス崇教館學則

句讀受業條約

一素讀は讀書の素功にして學問の基なれば第一に出精あるへく寒暑に勞を重ね漸にして幾書を誦讀するも終を善せずして業を廢せは何の益あらん畢竟聖謨明訓を會讀し公私百行の正學に依るへきを疾く辨へ永く懈るへうらさる事

一誦讀は多過を食らす習熟せんことを專思すへき事

一復讀は常につとめておろかにすへからず定日は猶更句讀の正誤を請ひ明白にして精愼を專とすへき事

一受業の間用事に起といふども一兩輩に過くへからざる事

一館中に於ては双方之弟子混同之事故講釋聽聞は勿論訓導教授迎も無差別互に被申談都合能教導可有之事
一一ヶ月に一度つゝは惣教出席復讀を試み清書一覽可致候間頃合可申聞候事

一行儀世話御中小性勤之者へ被仰付置候へ共届兼候儀は助教へ申出助教にて熟と申諭可有之其品に寄候て父兄に
申談又は惣教へ可申聞事

一稽古人四書濟五經濟幼年に至り候ては學庸濟詩書濟と申程に等を分次第いたし候も勵之可爲一助事

一御賞之儀は精不精業之熟不熟行儀心得之善惡實に中り候場第一之事故館中折々試之上篤と申談可申聞事
一稽古人精不精共外様子柄月々調置可然事

午十一月

右は是迄之仕來之上各心付之儀其用捨荒増取調及沙汰候得共教訓向に被爲御任置候事ゆへ細制活用之意味は尙加
精力稽古人様子好相勵御爲相成候様熟と可申談候

〔別段〕別紙之通り御主法申達候ても被行候と不被行候とは各取扱之善惡存込之厚薄申談之熟不熟氣然之和不和に寄
可申候間右之場篤と被致勘考此度は是非一廉風儀改り稽古人様子能相勸御爲相成候様存候吳々も和熟可申談其様子
柄次第にて御詮議可有之事に候

弘化三年丙午十一月廿日惣教より達

右學則ハ公儀被仰出御家御代々様思召之儀共且御詮義にて相定候筋に御座候尤經理之專要に候間熟と相心得吳々も
實學德行を第一と致し廬文に不馳其命分を相守畢竟非常何御用被仰付ても本意相達候様晝夜精心を可盡義と存候

弘化三年丙午十二月

講席之義は着到次第無延引隨座すべく同刻數人着席候は、長幼之序等相心得席次不都合に至らざる様可致候右之御
主意に候得共遮て碎儀に拘はり座位不整に於ても遜順にも叶間布く反て失敬之事に候

弘化四年丁未正月惣教より助教に

一此度文武嗜之儀分て被仰出候上は崇教館規定弘化三年申達候趣猶又相心得愈精勤可有之候右之内惣教月番出席之
儀一ヶ月一度ツ、の筈に相成居候處以來は月々六の日三度宛罷出復讀清書五六輩ツ、試可申且會讀出精之面々有
之候は、聽聞致し習禮等も一覽可致候間兼て其詞可致置候

嘉永五壬子年十二月九日達

一學問に心得ある事は亦登學の初より精々辨へらるへし博學多識とてひろく學ひ多く事を知りたるは益あることなれとも是を宗として篤學實行に力いらされはや、もすれば氣象高ふりいらさる見識を立驕傲と人におこり満心を生し人を侮り放蕩不行儀をも顧みず衆人の憎を受け法を破り上を犯す類もあることにて學問却て害となるなり兎角萬事今日の用に立所を尋ねもどめ古への善事善行をぬり手本として惡事邪念を慎みひたすら孝弟忠信實學德行を第一に心懸られ然るへき事

弘化三年丙午十一月達

一崇教館御取立御家中子供衆幼年より素讀手習訓儀等被仰付候は當用無差支第一忠孝の人倫之大綱文武は士業の本職たる譯を先相辨へ畢竟御奉公は勿論親戚朋友之交家事之取治に至迄道に叶ひ常非常武士道に不背候様にどの御趣意に候得い入學之初め年齢相應平話に説き子供心にも納得致右之意味先入と相成候様教導可有之事

一時刻は正五ッ時より九ッ時迄と相定右刻限之内素讀手習復讀無油斷出精兩學條約之旨等を相守り始終之禮儀體略有之間敷事但素讀は是迄通行に打混名札分に致し句讀師引受人數相定次席正敷教導可有之尤習熟專一之事故前日授候處未熟之者へい當日先を不相授と申程に嚴敷示置き教方緩急不同不相成候様被申合且數人打重り致混雜候ては聽正も届間敷一人にて三人位ッの繰合可然事

一助教は館中の教導に掛り候得は子供衆行儀心得方動靜の世話は勿論に候へ共精不精熟不熟之試學方の次第肝要故日々復讀聽聞訓導席へも折々罷出示談且教誨可有之事但定日復讀は句讀師專聽聞可有之事

一於講堂講釋之儀は是迄通三齋六齋位の日割にて可然事

一訓義尤大切にて館中風儀に掛り候間助教引受平日行義作法は勿論士分教育に手近ある書類又は的切ある古語等に本つき幼年之心にも感動いたし候様に説渡し一席毎に孝子忠臣を初賢良義勇廉直等の事跡談話有之度事

一手習之儀は手跡修行は勿論に候得共手本類も當用文通書翰等畢竟筆談用辨之爲に相成候様ある向可然事

一習禮は是迄通り日限相定稽古可有之事

一定刻之内訓導別間へ出座稽古人年齢様子柄見立講釋有之其席にて會讀質問獨讀等出精可有之候尤學方虛に馳せ所謂書生風に相流世俗と別様に成行人を眼下に見成候様なる失生候ては無學に劣り候間人倫日用を宗とし篤實の風不取失畢竟公務有益之學問第一に候條師弟共右之心得肝要之事

一年長々候者會讀輪講又兵要錄等望にて罷出候者有之候は、一定刻外にも開講有之可然候事

一始テ入學スルモノ其前學校ヘ告ケ當日束脩ノ禮ヲ行フヘシ

一學校中豫メ人材ヲ銓撰シ官員ノ欠ヲ補フ但知事特旨此限ニアラス

一兵隊官員銃手砲手ハ軍事局ニ於テ豫メ之ヲ銓撰ス但知事特旨此限ニアラス

一學費足ラサレハ衆議ヲ經給石ヲ削減スルアラシ

一書學算術當分之ヲ廢止ス久シカラシ
テ此科ヲ設ク

一學校演武場本月七日ヨリ開業ノ事

明治三年十月三日

左ノ規則實ハ藩學ノ時討議シテ成ル者ト雖許可ヲ得テ公然施行スル際廢藩トナリシヲ以テ之ヲ縣學規則ト稱ス其實ハ藩學ニ於テモ亦之ヲ用ヒタリシト云

松本縣學規

一學校白鹿洞揭示ヲ以テ則トス

一學校中修行スルモノ華族士族卒并長幼ヲ以順序ヲ立ツ但學校官員ハ此限ニアラス

一知事始諸官員御用間必學校ヘ出頭修行スヘキ事

一兵隊二十五歳以下ノ者御用間必學校ヘ出頭修行スヘキ事

一知事以下士族卒子弟ニ至ル迄八歳ヨリ十二三歳以上二十五歳迄必文武生徒タルヘシ但演武場ヘハ十八歳以上ノ者

出頭スヘキ事

一文武學生徒十二歳ヨリ十四歳迄縣廳學校演武場ノ給仕ヲ兼ヌ

一始テ入學スルモノ其前學校ヘ告ケ當日束脩ノ禮ヲ行フヘシ

一縣學ハ等級ニ拘ハラス讀書ノ任ニ勝ル者ヲ撰ヒ句讀掛リヲ命ス

一縣學上等生鄉學ヲ經巡スル者ヲ精撰シテ官員ノ欠ヲ補フ但現今其人ナケレハ下等生ヨリ以下ヲ精選シ之ニ充ルモ

亦已ムヲ得サルナリ知事特旨此限ニアラス

一兵隊官員銃手砲手ハ軍事局ニ於テ豫メ之ヲ銓撰スヘキ事但知事特旨此限ニアラス

一學費足ラサレハ衆議ヲ經給石ヲ削減スルアラシ

一縣學上等生ニ非ラサレハ自費ト雖遊學ヲ許サス(右之如ク確定スル所以ハ本縣已ニ學校ヲ開キ以遊學ノ基礎ヲ立

天保十四卯年九月

一素讀教授復讀聽聞座席之儀は別紙之通りにて可然事(別紙略之)

一句讀師教授之義は是迄之通打混にて可然乍去書物之次第引立方之義は其師存寄に可任尤師範にて大段之所は申談置可然事但多人數打重り候ては聽糺も届兼可申候間熟と届候場に申合有之度事

一復讀之義は條約にも有之事故日々之外にも三齋計定日立候方可然事

一講釋之義已前は訓導壹人にて六齋三齋ツ、も有之處此節は人數多に候へ共三齋ツ、位は有之可然事但右之外別間にて平話に會讀休又は講義にても稽古人之内様子柄年齡見計教導有之儀は二齋或は三齋位は有之可然事

一講釋は五時定刻之處後れ勝に相成候間以來は遅くも五ツ半時に相始四ツ時には終り候様相成可然尤聽聞人不罷出候共稽古人之内年立候面々出席有之候様沙汰有之候ても可然事

一門前掛札之儀は已前之通有之可然事

一稽古人御賞撰之義は師範々々申談有之可然事

○藩學規則

一學校白鹿洞揭示ヲ以テ則トス

一學校中修業スルモノ大參事以下長幼ヲ以順序ヲ立ツ但學校官員此限ニアラス

一知事始諸官員御用間必學校ニ出頭修業スヘキ事

一兵隊二十五歳以下ノ者御用間必學校ニ出頭修業スヘキ事

一知事以下士族卒子弟ニ至ル迄八歳ヨリ十二三歳以上二十五歳迄必文武生徒タルヘシ但シ十六歳以下砲術修業望次第十二歳ヨリ三十歳迄一名年ニ現米一石ノ學料ヲ給ス其人ニヨリ此限ニアラス 祿アルモノ之ヲ給セス 其年

ノ量入爲出ニ從ヒ異同アルヘシ

一文武學校十二歳ヨリ十四歳迄ノ生徒藩廳學校演武場ノ給仕ヲ兼ヌ

一生徒學校ニ入塾スルモノ一名年現米一石ノ學料ヲ増給ス但期限人員等ハ他日確定スヘシ

一他藩縣ヨリ生徒ニ入ルモノハ學料ノ半給ヲ與フ

一市在ハ別ニ小學校ヲ建ント欲ス其制度ノ如キハ他日確定セン

一素讀授業ハ生徒中ヨリ之ヲ出シ一名年金五兩典事現米二石ヲ増給ス但軍事局授業之ニ準ス

一銃手入寮ノ者ハ日々演武場へ操練トシテ罷出ル義許ス事但事故之アリ軍事局規律外字間延ヒタル節ハ司令官ノ印鑑ヲ受ケ歸寮ノ上舍長エ差出スヘキ事

一下宿ハ父母兄弟並ニ自身病氣ノ外ハ禁止ノ事但此他已ヲ得サル事故之アリ下宿ノ義ハ休暇外及三度他出同様タルヘシ尤一月ヲ過レハ一旦退寮致スヘキ事

一寮中酒ヲ禁ス若シ犯禁ノ者ハ即刻退寮申付クル事

一失火ノ節兵隊生ノ外ハ外出ヲ免サス失火ノ遠近ニ從ヒ舍長ノ指揮ヲ待テ進退致スヘキ事

一入寮生百人ヲ以テ限トナス

一給童相勤ムル者年々御賞三百疋ヲ賜ル事

一學生職務アル者不參百日以上ナレハ免職ノ事但不參中出頭半月ニ滿タサレハ前後ノ日數ヲ計リ百日以上ハ免職

一寄宿生徒連月下宿不相成事但歸寮日數三十日以上ハ此限ニアラス

皇學所揭示

第一立志目的

一明詔之聖旨を篤く奉体認達材成徳して異日國家の御大用に可相成日夜刻苦勉勵勿論の事

一近くは顯事を明にして修身齊家の要を先務とし遠くは幽事に涉りて其玄妙をも窮極致すヘキ事

一皇道を遵奉し赤心報國の志動かさるに至りては漢籍及諸蕃の學術にも力の及ふ限り該博通貫可致事

一神武の御國體を相辨へ平日の所行聊も怯弱之義有之まじき事

一内外本末の分假初の名稱といへども相誤り申すヘキ事

一奉對天朝盡忠正義の古人を師父の如く追慕し朝威の衰頹を憂苦したる近世の義ハを親友の如く思ひ名分を誤り大

義を失ひたる醜賊を讐敵の如く思ひなすヘキ事

一學術は高明正大を主とし所行は威儀作法正しかるヘキ事

一上古質素淳朴の風儀に従ひ凡て驕奢かましき儀一に禁止の事

第二勤學目的

一學則正しからされは學識立す階級嚴ならされは得業なしかたき事

一古典の素讀に専力を竭し語格の學を先務とすへし然しかから専門とは爲まじき事

ルニ足ラシム然ルニ未其地位ニ至ラスノ濫コ之ヲ許セハ夫ノ人ノ子ヲ賊ヲ恐ルナリ但遊學ヲ許ス者ニハ學料十石ヲ給ス

一洋學執心ノ者遊學ヲ願ヘハ檢査ノ上學料七石ヲ給ス

一洋學生文法書解讀濟ノ者學料十石ヲ給ス

一炊夫五人ヲ使役ス但一名三石ヲ給ス

一疊中ニ浴室ヲ設ケ生徒ヲノ洗浴セシム但五月六月七月ハ毎日其他ハ一月六度ト定ム

教則

一課程ハ生徒ノカニ應シテ相定ムヘキ事

一朝卯ノ刻ヨリ第十字ニ至ルマテ定課修行之事

一第十字ヨリ第四字ニ至ルマテ有職ノ生徒ハ其職業ニ服シ其他ハ定課修行之事

一第四字ヨリ納日ニ至ルマテ教官ニ乞テ課外ノ業修行ノ義苦カラサル事

一酉ノ刻ヨリ亥ノ刻ニ至ルマテ輪講ノ事

寮規

一平生恭謙退讓ヲ守リ經學講習ヲ專トシ其餘子史文藝ニモ涉ルハ勿論講習ノ外雜談ヲ禁止ス且黨類ヲ結ヒ喧嘩爭擾ノ舉止アル可ラサル事

一每朝夙興着袴互ニ拜禮シ二更ヨリ便宜ニ從ヒ休息スヘシ但發聲讀書ハ二更後禁止ノ事

一寮中ノ書籍ヲ借ル者ハ書名卷數短冊互相記シ書籍掛エ差出置鄭重ニ取扱フハ勿論暫時コテモ校外ヘ持出ス可カラズ若シ紛失ノ節ハ必類書相求メ返納致スヘキ事

一舍長ヲ以テ陳告ノ事件毎恪守致ス可キ事

一門限朝六ツ時ヨリ夜五ツ時ノ事但已ムヲ得サル事故ニテ父兄或ハ憑人ヨリ談判コレアリ條理相立節ハ之ヲ許ス若シ期限ヲ誤ル者ハ即刻限寮申付クル事

一他出ハ一ヶ月休日ノ外三度ヲ限リトスル事但右ノ外已ヲ得サル事故之レアリ條理相立ツ義ハ之ヲ許ス尤父兄憑人書面ヲ以舍長エ可申入事

一外出ノ節寮中組合ノ中壹人宛殘ルヘキ事

權令永山盛輝管下ノ區戶長及豪農巨商ヲ院ニ召集シ病院公立ノ法ヲ議セシム不日ニシテ基礎金壹萬貳千四百五拾六圓餘ヲ安筑ノ二郡ニ募集ス

病院諸規則 明治四年辛未十月

定

一病者ハ尊卑ノ別ナク一般病院ニ來リ治ヲ請ト雖殊ニ賤愚ノ民庶多キカ故ニ病理服藥飲食攝生等ニ至ル迄諄々説諭シ十分解意スルニ至ラシメ決シテ威權ケ間敷儀有之間敷事

一藥品配合ハ分厘ノ違ヒ性命ニモ關スル重事ナルヲ以テ尤謹慎注意可致事

一藥品ノ眞贗精粗仔細ニ點檢シ精選可致事

一内外ノ病者醫局并ニ診察掛ノ印書無之者ハ一切調合不可致事

一製藥ノ儀ハ厚ク注意精製ヲ要ス可キ事

〔療則〕丁日 診察(但第十時ヨリ第二時迄) 半日 廻診(但全斷) 調合 毎日(但全斷) 總テ急患ハ此限ニアテス

〔學課〕第一科、博物學(第七等) 第二科、化學(第六等) 第三科、解剖學(第五等) 此科ニ當テハ屢々獸類ヲ解剖セシ

メ人體解剖ノ片ハ執刀ヲ許ス 第四科、厚生學(第四等) 第五科、病理學(第三等) 第六科、藥劑學(第二等) 此科ヲ

學フニ當テハ藥局掛ヲ兼勤セシメ實物ヲ目撃シ製煉ヲ習ハシム 第七科、治療學(第一等) 此科ヲ學フニ當テハ病床

ニ臨テ方ヲ處シ當否ヲ教官ニ質シ且護長ヲ兼勤セシメ外科手術ヲ習ハシム假令此科ニ至ラサルモ時々病床ニ臨ミ教

官ノ診察ヲ傍觀シテ疑件ヲ質問スルコトハ隨意タルヘシ

右七科ノ學ヲ學ヒ得ハ教官問題ヲ出シテ學ノ成否ヲ試ミ病者ヲ診セシメ正シク成業セル者ヲ得業生ト稱シ退學ヲ許

ス業既ニ成レトモ歸ヲ欲セス猶留學センコトヲ願フ者ハ其學業ノ等級ニ應シ病院ノ欠官ニ補ス

凡ソ生徒ノ初メテ入學スルヤ右ノ學則ヲ閱セシメ既ニ何科ヲ經シヤヲ糾シ初メテ學ニ就ク者ニハ初級ノ第一科ヨリ

順序ニ授ケ既ニ何科ヲ經シト云者ニハ其科ノ事理ヲ試問シテ事理詳明ナルニ於テハ其以上ノ科ヲ授ク但シ未タ一科

ヲ經サルモ治療ニ從事センコトヲ願フ者ハ之ヲ員外ニ居ラシム

他ニ於テ成業セシ學士入學シテ得業ノ證ヲ受ンコトヲ請フ者ハ七科ノ問題ヲ出シテ試問シ病床ニ臨ンテ方ヲ處セシメ

成否ヲ試ミテ後得業ノ證ヲ授ク

〔患者年表〕明治四年十月ヨリ八百七拾貳人 今五年二千三百五拾人

一音義の科は他の四科に涉りて專要の科たる事

一文格の科は殊に古典科の階梯たる事

一古典の科は先古道提綱に據りて其大意を知り古事記祝詞式を以大典とし書記古語拾遺萬葉集を以中典とし續紀詔詞姓氏錄を以小典と心得おくへき事

一古典以上の學一階毎に講義質問返講の三事を勤めて次階に轉るへき事

一輪講附紙復問此を研究の三席といふ連月怠慢あるへからざる事

一語譯に泥みて大道を忘れたる類詞彙に耽りて風流を主とする類博覽を專として雜學に流るゝ類階級を亂して獨學に比しき類此を姑く四病と名つく必らず此等の類に落入ましく自ら常に心すへき事

松本公立病院

抑我病院創始ノ原タルヤ舊松本藩知事戸田光則 皇綱恢張百揆威舉ルノ時ニ際シ深ク朝旨ヲ遵奉シ庶政ヲ改革シ隨テ學政ヲ治メ醫學病院ヲ設ケ衆庶ノ健康ヲ保護セシメント欲ス而明治四年辛未一月別ニ舊全久院廢寺ヲ以テ病院トナシ學校定額ノ内現米七百石ヲ割テ之ニ充テ別ニ金千餘圓ヲ出シ狛建ノ諸費ニ給ス茲ニ於テ器械典籍什具等略々備ル而醫員桐原真翼(官給現米五十石)宮澤吉秀(同二十石)近藤正軌、堀内金聲(同各十五石)百瀬良、堀内玄堂、武野元良、角南令信、中村正胤(同各十二石)會計掛吉田幸門、三原政豐(同各七石五斗)拔擢シ之ヲシテ從事セシムルモ亦創草ニ屬スルヲ以テ規律未タ全ク立タハ更ニ文部省ニ乞ヒ醫官十等出仕小松維直ヲ聘シ其道ヲ教誨シ且患者ヲ診療ス一ニ東校ノ則ニ模倣ス同年十月揚土町士族ノ邸ヲ下付セラレ病院ヲ茲ニ移ス而負笈就學者及ヒ沈痾痼疾ノ治ヲ乞フ者亦麇集日ニ一日ヨリモ多ク院則略々定ル然ルニ新ニ筑摩縣ヲ置ル、ニ及テ病院モ亦隨テ官祿ヲ沒收セラル全五年四月醫員ノ官給現石ヲ金給トナス即チ小松維直、桐原真翼ハ月給各十三兩近藤正軌、宮原吉秀、澤邊正寛ハ各五兩堀内金聲ハ三兩三分百瀬良、武野元良、角南令信、中村正胤ハ各三兩二分會計掛吉田幸門、三原政豐ハ各二兩二分小林正親ハ二兩トス時ニ新縣創設ノ餘規則未タ立サルヲ以テ一時閉院スヘニノ命アリ是ニ於テ醫員相議シテ曰ク我醫道モ亦幸ニ此隆運ニ遭ヒ舊藩病院ヲ創置セラレ遙ニ教官ヲ招キ博ク醫員ヲ擢シ隨テ人民其療風ニ馴ル以テ開化ノ機稍徴スヘシ今ニシテ而逡巡スレハ則他日又步ヲ此域ニ進ムル疇昔ヨリ難シトス縱令私費ヲ以テ其用ニ供スルモ之ヲ閉鎖スルニ忍ヒスト乃チ衷情ヲ吐露シ屢縣廳ニ具申ス廳モ亦之ヲ可トシ一日以テ院ヲ閉ツルナシ是ニ於テ縣吏日ニ院ニ臨ミ且監シ且議シ終ニ其美ヲ成ス此時ニ際シ醫員協心一致最モ力ヲ院事ニ盡ス始テ各國公立病院法案ヲ具進ス同年九月

館		書學師		書學世話役	
句讀師	十人	三人	下	十人	定
茶番	四人	勤	四人	番	壹人
學					
授讀	典	佐授	典	事	事
權少屬	史生				

此時皇漢算醫四科ノ教員合セテ凡五拾餘名ナリシト云フ然レモ今其各職員ノ定數ヲ審知スルニ由ナシ故ニ姑ク之ヲ欠ク

生徒概數 崇教館 通學生百五十人 寄宿生藩費自費其無之○藩學 通學生三百人 藩費寄宿生六十餘人

東脩謝儀 崇教館藩學共束脩ハ扇子一對謝儀之レナシ

學校經費 崇教館ノ經費審ナラス如何トナレハ職員ノ俸祿ハ別ニ之ヲ給セス又校舍營繕書籍買入費等ハ皆藩廳ノ會計方

作事方ニ於テ之ヲ掌リシヲ以テナリ故ニ實際館内ニテ仕拂フ所ノ經費ハ筆墨紙茶炭等麗々十數圓ニ過キサリシト云フ

藩學ニ於テハ一歲ノ定額ヲ現米二千石ト定メ職員ノ俸給遊學寄宿通學生ノ資給及書籍器械營繕諸雜費ニ至ル迄皆其内

ヨリ仕拂ヒシカ出納ハ藩廳ニテ管掌セシニ因リ其詳細ハ之ヲ知ルコト能ハス而醫學分離スルニ當リ七百石ヲ割テ其定額

ニ充ルヲ以大ニ減却セリ

藩主臨校 崇教館ニテハ藩主諸有司ト毎月一次臨校シテ講義ヲ聽ケリ 藩學ノ時ニ在テハ藩主諸有司ト毎月數次政務ノ

餘暇ニ臨校シテ或ハ講義ヲ聽キ或ハ抽籤互ニ經史ヲ講讀討論セリ

祭儀 欠之

學校構造及ヒ建物圖面 崇教館ノ構造ハ木造平屋板葺敷地惣坪凡四百坪建物圖面左ノ如シ

藩學ノ構造モ亦崇教館ト異ナルヲナシ而野々山内匠ノ第邸ヲ舉テ崇教館ト併セ敷地坪數七反壹畝拾七步六厘ヲ有シ新

ニ寄宿舎一棟槍術劍術ノ場各一棟ヲ築造セシカ其構成ノ圖面一モ存セサルヲ以テ畧ス

因云安政年間藩主松平光則ノ時宇田町裏ニ於テ數町歩ノ地ヲト定シ儒員多湖安貞ヲ奥州會津ニ派遣シ該所學館ノ制ニ

倣ヒ廣大ナル文武館ヲ新築シテ武學ノ諸術モ亦皆茲ニ併セ移シ弓馬槍劍砲術游泳ノ場ニ至ル迄悉ク之ヲ設爲シ以學生

ニ便シ專ラ文武ノ道ヲ獎勵セント欲セシカ其費用莫大ニシテ未タ之ヲ辨達スルノ方法ヲ得ス加之ナラス當時天下漸ク多事國用支給セサルニ困ムノ際ナレハ事遂ニ成ラスシテ止ミタルハ實ニ遺憾ノコナリシト云フ

職名及俸給

職名役料ハ概テ左表ノ如シ然レモ役料扶持米額ハ明治維新前ニ在テハ成規ナク只因襲ノ家祿扶持米ヲ給スルノミ

崇 教 館				役	身分	祿	役	身分	祿
總教	學校掛	主事	學館目付	行儀世話役	下勤番	茶番	定番	下勤番	茶番
執政	用人	士	全	全	無格	無格	全	無格	全
六百石以下	四百石以下	五十石以上	全	十二石三扶持	六十石二扶持	四十石二扶持	三十石二扶持	六十石二扶持	四十石二扶持
教授	助教	訓導	書學師	書學世話役	句讀師	徒士	徒士	徒士	徒士
用人格	格士頭	納戸格	全	全	五十石以上	五十石以上	五十石以上	五十石以上	五十石以上
三百石以下	全	全	全	全	五十石以上	五十石以上	五十石以上	五十石以上	五十石以上
藩				學					
少參事	大屬	權大屬	少屬	權少屬	史生	等外	等外	等外	等外
八拾五石	六拾七石	五拾石	三拾三石	二拾六石	二拾石	二拾石	二拾石	二拾石	二拾石
教授	權教授	助教	權助教	授讀	佐授讀	典事	典事	典事	典事
五拾石	三拾三石	二拾六石	二拾石	拾五石	拾二石	八石	八石	八石	八石

職員概數

表中以上以下ト云フ者ハ最上最下ノ數ニ基因スル者ナリ藩學ニ於テハ別ニ俸給アリ而役員ハ藩廳ノ吏員ニテ兼務セリ尤始メハ總裁通判副通判判事等ヲ置キテ庶務ヲ掌ラシメシカ久カラスシテ之ヲ廢ス故ニ表中之ヲ載セス此時皇漢算醫四科教員ノ俸金毎月三百六拾餘圓ナリシト雖米價平均相場ニ因リテ差異アリシト云

崇 教				教員數	事務員數
總教	教授	壹人	學學校掛	二人	二人
助教	壹人	學館目付	三人	三人	三人
導	三人	主事	二人	二人	二人
訓導	四人	行儀世話役	六人	六人	六人
藩				教員數	事務員數
權助教	權教授	少參事	大屬	一	一
權助教	權教授	少參事	大屬	一	一
權助教	權教授	少參事	大屬	一	一
權助教	權教授	少參事	大屬	一	一

稽古等誠實ニ出精仕候テ一統人氣モ宜敷風俗モ宜敷御座候由

一赤水先生相山ハ寛文六年十一月十五日被召出御合方米百俵被下候テ光永様御部屋ヘ御奉公被仰付醫業ハ勿論御讀書

御相手モ御勤書成候由當座様御學問被遊候御様子ハ赤水先生文集ニモ少シハ出居候得其委細ノ義ハ不相傳候ナリ此時
分光永様杯ハ實用ノ御學問ニエ人君ノ御德御國役ノ義等被遊候ヲ御學問ト被思召候ヨシ今時ノ學問書物ヲ讀ミ候ハ書
生ノ學問ニテ人君大人ノ學問トハ不被思召候哉ニ御座候トナリ丁度明和安永ノ頃迄刀劍ヲ好ミ候者ハ刀術ヲ心掛折々
罪人ヲ様シ候テ切レ方ノ宜敷ヲ宜敷刀ト申候由今時ハ様シ杯ハ餘リ不承切レ味武用ノ義ニハサマテ心ヲ不寄出來ノ美
ハ敷ヲ宜敷刀ト申候今ハ何事モ昔トハ向ノ違ヒタルコナリ

右多湖氏書世々此跡其他ノ記錄ヨリ抄出

舊上田藩

學制

學事上ノ制度 文化八未年文武校ヲ設ク

士族卒ノ子弟教育方法 士族ハ必十歳ヨリ二十歳迄入學セシム卒ノ者ハ志次第又他國ヘ遊學ノ者ハ其時ノ評議ヲ以米三

口或ハ五日ヲ給ス

平民ノ子弟教育方法 藩立學校ヘ入ル事ヲ許サス但市仕醫師ノ子弟ハ志次第入學ヲ許ス平民ニハ別ニ教育法ノ設ナシ各

人適意ニ家塾若ハ寺子屋ニ入り讀書習字算術等ヲ學ブ

家塾寺子屋設置ノ制度 他ノ檢束ヲ受ル事ナク開設ス

學校

校名 明倫堂ト稱シ明治ノ初年ニ至ル

校舎所在地 小縣郡上田新參町

沿革要略 舊藩主初代忠晴寛永中朱學ニ志シ好テ王山講義ヲ讀ム谷時中門人莊田林庵ヲ聘シ尋テ三代忠周ノ時享保年中

伊藤東涯門人安原貞平ヲ招キ三十人口ヲ興ヘ側頭席トシ其子弟ヲ教導セシメ又藩人ヲシテ其家塾ニ學ハシム其子右文
父ノ業ヲ受同教授ス其門人桂右仲木村就等又各其家塾ニ於テ門人ヲ教ユ

一 崇教館設立ニ盡力セシ人物ノ氏名ハ一モ記録ニ見當ラス之ヲ古老ニ聞クニ該建物ハ初メ戸田氏家族ノ居住セシ別邸ニテ后ニ不用物トナルカ故ニ之ニ修繕ヲ加ヘ以テ蠻舎ニ充テシ者ニシテ更メテ學校川ニ新築セシニ非ス故ニ著シク學校設立ノ爲メ盡力セシ人物ナカリシナラント云フ

左ニ謄録スル所ハ往時ニ稽ヘ聊將來ノ因革ヲ徵スルノ考證ニ供スヘキ編史資料ノ一端ト看認メ集蒐セリ且記錄ニ從ヒ原文ノ儘抄出セルヲ以稱呼宜ヲ得サル者アリ然レモ敢テ改メテ文飾セス請フ諒察アラント云フ

一 松平丹波守光重様之時軍政之本ハ長沼外記宗敬ノ著ハス所武役教令ヲ以テ基礎ト定メ武藝モ名人達士ノ傳流ヲ取用セリ文學ニハ牧七郎左衛門山崎派ノ高弟ニシテ世間高名ノ人ナリ高幡半左衛門ト多湖赤水^二代^一ハ林門高弟中ノ人ナリシト云フ當時水戸黃門光國卿天下ノ文藝者十人ヲ撰ミテ招聘セラレシ時當藩中ヨリ三人ヲ出セリ其二人ハ大原氏ノ二子^{姓名}壹人ハ赤水ノ三男多湖源三郎二百石ヲ食メリ光重様朱學ヲ好ミ玉ヒシヲ以テ以上ノ人皆朱學ヲ脩ム當時諸家ニテ常藩文學及軍政ノ整頓セルヲ稱賛セリト云フ

一 光重様武術ノ聞ヘアル者ヲ招聘セラル其人々ハ寛永廿一申年關口流槍術ノ達士公保小兵衛正忠翌正保二酉年ニ砲術ノ達士長谷川三之允政定明曆二中年ニ射術ノ達士秋田藤太夫正次是等ノ士皆各二百石ヲ食メリ瀧田源太左衛門是モ寛永正保ノ頃ヨリ射術ニ高名ノ由

一 万治二亥年宇野茂兵衛正勝射術ヲ善クスルヲ以テ二男ニシテ新知ヲ賜フ同年井口太郎兵衛モ亦馬術ヲ以テ新知ヲ賜フ劍術ハ元和ノ頃ヨリ外多流ノ名人玉生勘兵衛之レアリテ各師範ヲナシ藩士ヘ文武ノ稽古ヲ獎勵セラレタルハ當時諸家ニ稀ナル所ナリシト云フ

一 松平丹波守光永様ノ時貞享元年甲子正月濃州加納長刀堀ニ諸士武藝ノ教場ヲ御普請被仰付其節野々山惣右衛門敏久總奉行野間又兵衛政之正木七兵衛勝林副之同年五月畢功

一 光永様ノ時藩中ヘノ御觸レニ今度公儀御制法ノ中ニモ忠孝ヲ勵ミ可申旨被仰出候此儀尤大切成故ナリ自今以後彌可相勤就中不孝之輩有之ハ急度可處罪科事

附夫婦兄弟親類ニ至ル迄睦敷スヘシ惣テ諸侍風儀正シク就中若輩彌諸事相愼ミ文道武藝精ヲ出シ可相勤日夜隙ニテ徒ニ日送り候得ハ愈惡念ヲ生シ行義止シカラス只稽古ノミニ日ヲ暮ス可ク候

一 光永様ノ時藩士跡式相續役人撰舉且忠孝文武ノ儀ハ御政務ノ專要ト奉存候忠義ノ厚薄行義ノ善惡等其様子柄ハ事實ヲ熟ト被爲得候テ跡式相續無相違或ハ減少シ役人撰舉進退被遊候間格別ニ御世話無之トモ忠孝ハ勿論親類ノ交リ又文武

夫○又曰、涵養要當以敬爲本、敬只是提起這心、莫教放散、恁地則心便自明也○又曰、敬之一字、乃聖學始終之要、未知者非敬無以知、已知者非敬以守○李願問明道曰、每常遇事、即能知操存之意、無事時如何、存養得熟、先生曰、古之人耳之於樂、目之於禮、左右起居盤盂几杖、有銘有戒、動息皆有所養、今皆廢此、獨有理義之養心耳、但存此涵養之意、久則自熟矣、敬以直內、是涵養之意

致知

大學曰、致知在格物、朱子補之曰、所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也○朱子曰、窮理者因其所已知、而及其所未知、因其所已達、而及其所未達、人之良知本所固有、然不能窮理者、只是足於已知已達、而不能窮其未知未達、故見得一截、不曾又見得一截、此其所以於理未精也、然仍須工夫日日增加、今日既格得一物、明日又格得一物、工夫更不任地做如左脚進得一步、右脚又進一步、右腳進得一步、左腳又進接續不止、自然貫通○又曰、如何一切知得、然理會得已多、萬一有一件差異處事來也、識得他破只是貫通、便不徹底、亦通將去、程子曰、格物非欲必窮盡天下之理、又非謂止窮、得一理便到、但積累多後自當脫然有悟處、方理會得如十事、已窮得八九、其二雖未窮、將來湊合都自見得○又曰、萬物皆有此理、理皆同出一原、但所居之位不同、則其理之用不一、如爲君須仁、爲臣須敬、爲子須孝、爲父須慈、物物各具此理、而物物各異其用、然莫非一理之流行者、又近而一身之中、遠而八荒之外、微而一草一木之衆、莫不各具此理、如掛數水相似這盞也、是這樣水那盞也、是這樣水各々滿足、不待求假於外、然打破放裏也、只是這箇水、此所以可推而無不通也、所謂格得多後自能貫通只爲是一理○或問觀物察己者、豈因見物而反求諸己乎、程子曰、不必然也、物我一理、纔明彼即曉此、此合內外之道也、語其大、天地之所以高厚、語其小、至一物之所以然、皆學者所宜致思也、曰然則先求之四端可乎、曰求之情性、固切於身、一草一木、亦皆有理、不可不察○朱子答陳齊仲書云、格物之論、伊川意雖謂眼前無非是物、然其格之也、亦須有緩急先後之序、如今爲學而不窮天理明人倫、講聖言通世、故乃兀然存心于一草一木器用之間、此是何學問、如此而望有所得、是炊沙而欲其成飯也、似未看破此處○程子曰、物必有理、皆所當窮、若天地之所以高深、鬼神之所以幽顯、是也、若曰天吾知其高而已矣、地吾知其深而已矣、鬼神吾知其幽且顯而已矣、則是已然之詞、又何理之所窮哉○又曰、必欲窮象之隱微、盡數之毫忽、乃尋流逐末術家之所尚、非儒者之所務也

力行

易傳曰、君子終日乾々夕惕若、子曰、君子進德脩業、忠信所以進德也、脩辭立其誠、所以居業也、知至至之可與幾也、知終終之、可與存義也、是故居上位而不驕、在下位而不憂、故乾々因其時而惕○子曰索隱行怪、後世有述焉、吾弗爲之矣、君

明倫堂建立ハ六代忠濟積年興學ノ志有テ學校建設ノ令ヲ出シ基礎ヲ立テ七代忠學其志ヲ紹キ終ニ文武兩校ヲ開設シ事ヲ朱學ヲ尊奉ス當時ノ惣司ハ林大學頭門人加藤彦太夫ノ所多年在府勤ナリシ故古賀精里門人山田司馬助講師ヲ以テ惣司ヲ攝シ專ラ學政ヲ擔任ス爾後數人交替相勤文久年間ニ至リ舊知事忠禮大ニ學則校規ヲ更正シ文武ノ業ヲ擴張セリ明治四年廢藩置縣ノ後本縣特ニ督學ヲ置キ文學校ハ依舊繼續セシム同五年學制御頒布ニ付同六年明詔ヲ奉シ小學校ヲ創立ス則テ現今松平學校是ナリ

教則 明倫堂學則別紙ノ如シ經傳ハ四書小學近思錄五經歷史ハ左國史漢綱目溫史及本朝六國史大日本史等ナリ

學科學規試驗法及諸則 和漢學習禮槍劍柔術但弓術炮術兵學算術者各自師家ニ就テ脩業ス後文久年間藩主忠禮文武校ヲ更正擴張以來演武場内ニ移シ洋學醫學筆道ヲ兼加教授ス十歲ヨリ二十歲迄ハ必文武五分々々ニス凡四書ノ大義ニ通スレハ武術ノ一免許ニ準ス試驗年々ニテ紙墨ノ類ヲ賞與シ隔年大試驗ニハ袴羽織書物類ニテ逸等ノ類ニハ出身金米ヲ給ス試驗ハ御吟味ト稱其法大凡三等ニ區別ス素讀辨辨書ニテ素讀ハ四書五經辨辨書ニテ素讀ハ四書五經辨辨書全上字義大意ヲ解釋書記シ尙制義ト稱シ章意ヲ活動シ古今ノ事跡ニ徵シ自己ノ意ヲ述シム 講釋毎月十二度會讀十二度詩文會二度ナリ

明倫堂學則

涵養 主敬以立其本

致知 窮理以致其知

力行 反躬以踐其實

朱子曰、涵養致知力行三者、便是以涵養做頭、致知次之、力行次之、不涵養則無主宰、涵養又須致知、既致知又須力行、若致知而不力行、與不知同、亦須一時並了、非謂今日涵養、明日致知、後日力行也○又曰、爲學次第、雖有先後、然一齊用做去、大學之書、雖以格物致知、爲用力之始、然非謂初不涵養踐履、而直從事於此也、又非謂初未格知、未至則意可以不誠心、可以不正身、可以不脩家、可以不齊也、但以爲必知之至、然後所以治己治人者、始有以盡其道耳、若曰必俟知至而後可行、則夫事親從兄、承上接下、乃人生之所不能一日廢者、豈可謂吾知未至而暫輟、以俟其至而後行哉

涵養

中庸曰、道也者不可須臾離也、可離非道也、是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞○朱子曰、所不睹不聞、不是閑耳、合眼時、只是萬事皆未萌芽、自家便先恁地戒慎恐懼、不睹不聞之時、便是喜怒哀樂未發處、常要提起此心、在這裏防於未然、所謂不見是圖也○又曰、戒慎恐懼是未發、然只做未發也、不得便是所以養其未發、只是聳然提起在這裏、或問恐懼是已、思否曰思、又別思是思索了、戒慎恐懼正是防閑、其未然、曰即是持敬否、曰亦是○或問未發時、當以義理涵養、朱子曰、未發之時著義理不得、纔知有義理、便是已發、當此時有義理之義、未有義理之條件、只一箇主宰嚴肅、便有涵養工

職名及俸祿

惣司物頭以上用人二百石前後若其人ヲ欠ク時ハ家老ニテ兼務ス

講師物頭席百五十石以上

學監獨禮凡百石以下知行又ハ扶持米等ニテ一定ナラス

句讀師平士百石以下扶持米同上

句讀師助

肝煎

上坐諸生中ヨリ

職員概數

惣司一人 講師一二人

學監二三人ニテ兼繁忙ノ節雇

句讀師十二三人

生徒概數

百人内外寄宿生十人内外但自費ナリ明治後ハ寄宿生百餘人

束脩謝儀

入學ノ節惣司講師ノ内へ入門スルヲ例トス其束脩ハ必藩札銀一匁(但銀六十匁錢六貫四百文ニテ六十四文ニ

當ル)別ニ師家ニ就學スル者ハ五倍或ハ十倍其力ニ應ス

學校經費

百石 薪炭書物料大部ノ書ハ別途買入賞與モ此外ナリ

藩主臨校

月ニ三度講釋ニ臨ム 藩主住居殿中ニ於テ夜分十二度ヨリ六度程學校掛ノ者或ハ侍臣ト經書歷史ヲ講習輪講

ス

藩主試業

凡年々一度御聽ト稱シ諸生ノ素讀講義ヲ試ム

祭儀

文政三長年聖廟ヲ立テ春秋兩度釋菜藩主祭主タリ已ヲ得サル事故アレハ家老又ハ惣司ヲシテ代ラシム諸生へ神酒

ヲ賜フ

學校構造及建物

地所二反餘

瓦葺二棟

茅葺二棟

舊高遠藩

學制

學事上之諸制度

藩主内藤賴直諭達文

藩士ノ面々文學立遣度前代ヨリノ志願ヲ繼キ今度三ノ丸ニ學問所ヲ設ケ中村中藏海野喜左衛

師範申付ル趣意ハ藩士ヲシテ孝悌忠信ノ道ヲ主トシ儒學ノ本意ヲ失ハス實學專一ニ心掛ル様ニトノ誠心ニ付何レモ

篤ト相辨ヘ格別ニ勉強致シ平常ノ進退モ禮儀ヲ正フスヘシ少年ノ輩ハ勿論年立候面々往々有用ノ人才ヲ成立シ度

存ル間當今ハ經學專務ニ講習シ其他ハ人々ノ才力ニ應シ諸子歴史等モ博ク相學ヒ詩賦文章迄モ研究有之度候也

獎勵法

學業上達及年内皆勤ノ者等へハ御褒美ト唱ヘ物品等ヲ賜リ或ハ學識特ニ熟スル者ハ拔擢シテ句讀助教等ヲ被

申付且格別拔群二男三男ノ者ハ召出サレ一家ニ取立ラル、等ナリ

士族卒ノ子弟教育方法

藩士ノ子弟年齡八歳ニ至レハ必ス藩學へ入學セシム且藩費若クハ私費ヲ以テ他國へ遊學セシメ

子遵道而行、半途而廢、吾弗能已矣、君子依乎中庸、遯世不見知而不悔、唯聖者能之○子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善則拳々服膺而弗失之矣、○子曰、道不遠人、人之爲道而遠人、不可以爲道、詩云、伐柯伐柯、其則不遠、執柯以伐柯、睨而視之、猶以爲遠、故君子以人治人、改而止、忠恕違道不遠、施諸已而不願、亦勿施於人、君子之道四、丘未能一焉、所求乎子、以事父未能也、所求乎臣以事君未能也、所求乎弟、以事兄未能也、所求乎朋友、先施之未能也、庸德之行、庸言之謹、有所不足、不敢不勉、有餘不敢盡、言顧行、行顧言、君子胡不慥慥爾○子思曰、君子素其位而行、不願其外、素富貴行乎富貴、素貧賤行乎貧賤、素夷狄行乎夷狄、素患難行患難、君子無入而不自得焉、在上位不凌下、在下位不援上、正己而不求於人則無怨、上不怨天、下不尤人、故君子居易以俟命、小人行險以徼幸、子曰、射有似乎君子、失正鵠反求諸其身

天保四年癸巳仲秋初吉

山田維則 撰

定

一 虛文を去り實行を務むべき事 學文とは人たるの道と學ふ所以にして詞章記誦の謂にあらす故に君父に忠孝を盡し親族和睦朋友に信義ある類は論するに及ばす平日の行狀篤實循謹を第一とし假にも輕薄の風あるへからざる事

一 學校中齒をたつとひ候事 學校中長幼の次第をみたるへからす幼者は長者を敬ひ長者は幼者をたすけ互に禮讓を重んじ聊も傲慢の風あるへからざる事

一 爭論堅無用之事 學校中互に堪忍を專とし無禮答等致問敷口論ケ間敷儀固く相眞へし萬一捨置難き儀あらは學監へ相達可申事

一 行儀正敷言を可慎事 學校中不行儀なる儀無之立居等に至迄心を用ひ靜にいたし世上之噂等無用之風說雜談堅禁止たるべき事

月日

定 (但武學校)

一 武藝稽古之儀は非常之備一己之嗜たるの間常々無油斷可相勵事

一 武藝は勝負を專と致事に候へ共禮讓を守り喧嘩口論を慎み行儀正敷相互に術を礪き私の遺恨を不挾他之批判すへからざる事

一 萬事師家の掟を守り私として勝負の諍論致へからざる事

月日

ニ盡力スルモノ其數常ニ多キニ居ル 生徒學習ノ期限ハ八歳ヲ入學ノ期トシ二十五歳ヲ退學ノ期トス但格別篤志ノ者ハ退學期限ニ依ラス 試驗ノ法ハ春秋二季ニ總裁學監及敎官立會生徒ニ講義素讀等ヲナサシメ或ハ席上揮毫ヲナサシメ其優劣ヲ批判ス又年一回御聽ト稱シ藩主臨校生徒各自ノ素讀若クハ講義ヲ試ムルアリ 始テ入學ヲ許可セラレタルキハ當日父兄其子弟ト同導シテ盛服着用師範家へ同禮スル慣行ノ式アリ 學規及生徒訓條及諸則

條々

文武忠孝ノ道懈ル可ラサル事 朋友ノ交ハ信義ヲ失フ可ラサル事 長者ヲ敬ハ幼者ヲイツクシムヘキ事 言語ヲ慎ミ行儀ヲ正フスヘキ事 政務ノ批評致問敷事 流言ヲ聞彼是評議致問敷事 師弟ノ間親愛ヲ主トスヘキ事 貴賤ヲ是非シ人物ヲ臧否致問敷事 實學專一ニ心掛ケヘキ事 課程ヲ定メ相互ニ勵ムヘキ事 互ニ流派ヲ爭フ間敷事 書生信實ニ切磋商可致事 敎授方ノ指揮ニ違背スヘカラサル事 御書籍疎畧ニ取扱フ間敷事 火ノ元別テ念入レヘキ事 手習卒示ニ臨寫スヘカラサル事 朕方ノ習禮平日忘ルヘカラサル事 席次混雜スヘカラサル事 最負偏頗ノ取扱スヘカラサル事 無益ノ雜話スヘカラサル事 右之條々相互ニ可確守者也 申閏三月

寄宿寮規則

校内ニ寄宿所ヲ設ケ子第十七八歳以上ニシテ學業稍熟スル者ハ望ニヨリ入舍ス其定數四十八餘食料外部テ藩費也

每朝浣漱ヲ謹テ聖廟ヲ拜ス可シ 書生親愛ヲ主トシ務テ日夜切磋琢磨ノ功ヲ積ヲ要ス 毎日卯牌ニ起キ亥牌ニ寢ニ就クヲ常トス三冬ノ如キハ斯期限ニアラス 校舎ノ出入ハ安リニスルヲ許サス其門テ出ル寮長ノ簿ニ其事由ヲ自書スヘシ 寮内ノ進退ハ寮長副寮長ノ指揮ニ任スヘシ其事ノ處シ難キニ至テハ師範ノ裁判ヲ受ルヲ要ス 嚴ニ丙丁ヲ警ムヘシ 官庫ノ書浪リニ散亂スルヲ戒ム 飲酒割烹ヲ禁ス 齒德ノ順序ヲ忽ニスルヲ勿レ是レ學ニ進ムノ基本ナリ 公事ヲ私議スルヲ勿レ務メテ政令ヲ遵奉スルヲ要ス 毎月十五日詩文會 議論スルモ長上ヲ凌キ罵詈スルヲ戒ム 務メテ至當ニ歸スルヲ要ス 日々四名ツ、遞番ニ居守シ不虞ニ備ヘンヲ旨トス 毎日早起輪講ヲ常トス 一六休暇ノ外家ニ就クキハ官ニ申報スヘシ 武術ノ場へ出ル期限ヲ遲緩スルヲ勿レ 每朝寮ヲ掃除シ清潔ヲ主トス安リニ僕丁ヲ使役スルヲ許サス 二七ノ講義及文武司監察等ノ會ヲ忽ニスヘカラス 文武司監察ノ會ハ毎月六回ツ、其自邸ニ罷出テ年長生徒十八位ツ、經書ハ學者ノ基礎タルヲ言ヲ待タス 務テ和漢古今ノ歴史ヲ涉獵スルヲ要ス餘暇ニ普ク西洋ノ書ニ及フヘシ畢竟今日ノ事体ニ通達セサレハ萬卷ヲ看破スルモ其益少シト知ルヘシ 每朝居守ノ四名ヲ殘シ其餘ハ悉ク講堂ニ出テ少年ヲ敎授スルヲ本務トス 惡衣惡食ヲ互ニ誹謗スルヲ勿レ菜根ヲ咬得ハ百事成スヘキノ基本ナ

タルコアリ又月並毎月二講義ノ制ヲ設ケ藩主親臨諸役人並ニ藩士一同出校生徒ト共ニ經書ノ講義ヲ聽聞ス師範役
 平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ適意ニ修學セシム藩學設立後ハ願ニ據リ該校ヘ入學ヲモ許可セリト雖モ志願多カ
 ラス

家塾寺子屋設立ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ人々ノ自由ニ任セ奉行郡宰里正等ノ檢束セシメナシ

學校

校名 進徳館 設立後名稱ノ變換ナシ

校舎所在地 舊城内三ノ丸高遠城郭内耕地設立以來移轉等ナシ

沿革要畧 萬延元年三月廿八日創立(學事隆興ノ原因及事實)天明年間藩士坂本天山ナル者文武ヲ兼脩單身海内ヲ周遊シ

名聲遠ク馳ス藩士星野葛山中村中松田永安等其門ニ出ツ圖藩文學興起ノ原因此等先覺者ノ薰陶ニ據ルモノナリ爾後

藩主内藤頼直ノ時代特ニ儒學ヲ尊崇シ藩學ヲ設立シ子弟ノ教育ヲ獎勵シタリヲ以テ一藩全体ノ學事ハ從前ニ比シテ擴

張セリ

學校設立ニ盡力セシヘ當時文武惣裁ヲ勤メシ岡野忠休兼テ藩政ニ泰務維新後同藩大參事勤務專ラ政務ニ從事ス師範役中村元起海野幸成兩氏トモ始終教育ニ從事尤中村元起ハ維新大

政官出仕セリ等ナリ

教則

教科用書 孝經、四書、五經及和漢ノ歴史文章、和學書日本紀古ノ類、英書英文典地ノ類、和洋算明治四年ヨリ教授ス

授業ノ方法 最初ハ各自ニ素讀ヲ教ヘ稍熟スルニ從テ輪講等ヲナサシメ或ハ意義ノ不審ナル處ハ各自ニ質問ヲナサシ

ム詩文等ハ課題ヲ與ヘテ互ニ批セシメ若クハ各自ニ作爲シテ添削ヲ乞ハシム

授業時間 幼年ノ分凡十五歲以下 午前八時ヨリ十時ニ至ル素讀 午前十時ヨリ十二時ニ至ル習字 午後一時ヨリ二時ニ至

ル素讀復習 午後二時ヨリ四時ニ至ル習字 但一六ノ日休業○中年ノ分凡十五歲以上 午前十時ヨリ十二時ニ至ル輪講

午後一時ヨリ四時ニ至ル會讀、英學、數學 但一六ノ日休業○師範役及教官講義二七ノ日午前十時ヨリ經書歴史

學科學規試驗法及諸則

學科 和學 漢學 洋學 算法 筆道 兵學 弓 馬 槍 劍 砲術 柔術

生徒ニハ大概文武兩道ヲ兼修セシム 文學ト武術ト程度ノ比例掲記スヘキ程ノコナキモ藩風自ラ尙武ニ傾キ子弟武邊

學制

學事上ノ諸制度 藩學設立以前ハ學事上ノ制度ニ於テ文書ノ徵スヘキ者ナク未タ其詳委ヲ悉ス能ハスト雖モ蓋シ一定ノ規律ヲ設ケス只時ニ文武ニ精勵スヘキ旨示諭ヲ加ルニ過サリシナラン享和三年藩學創立ノ時ニ至テ始テ藩士一般修學ノ方法施設ノ道ニ就ケリ其後明治二年別ニ國學校ヲ設置シ藩士ヲシテ和學ヲ修メシム今藩學設置ノ際藩廳ノ諭達ヲ左ニ記ス

文武ノ諸藝稽古ノ儀段々被仰出モ有之諸師範モ被仰出候上ハ如何分ニモ修行相成候筋ニ候得共尙又此度以厚御趣意稽古所被仰付候間彌以從來ノ被仰出ヲ相守リ御重情之御趣意忘却不仕様聊無油斷相勵出精可致旨被仰出候

一於藝道堪不堪有之儀モ稟受ノ自然無據義ニ候ヘモ文武ノ藝道ニ於テ一向學不申候テハ今日御奉公不全筋ニ候況此度以厚御趣意被仰出候義旁以師範有之向ハ孰レカ成業モ不致候テハ不叶義ニ候條成丈諸藝共相學其内執心ノ向ハ別テ致出精候様心掛可申候

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ子弟八歳ニ至レハ必藩學ニ入り文學筆道諸禮ヲ學ヒ十三歳ヨリ武藝ヲ兼修セシム又藩學經書講義ノ定日ニハ藩士一般出校聽聞ヲ許ス明治維新ノ後ニ至リ始テ卒ノ藩學ニ入ルヲ許ス

平民ノ子弟教育方法 別ニ規則ヲ設ケス各自ノ意向ニ任セ寺子屋ニテ修學セシノミ維新ノ後ニ至リ有志ノ者ハ藩學ニ入ルヲ許ス卒ニ同シ

家塾寺子屋設置ノ制度 藩政ノ檢束ナク各人隨意ニ之ヲ開設スルヲ得

學校

校名 初メ稽古所ト稱シ後長善館ト名ク

校舎所在地 信濃國諏訪郡高島城内二ノ丸(目今上諏訪村字島崎)

沿革要略 享和三年ノ創立ニ係ル初メハ寄宿生ヲ置キシカ其後故アリテ之ヲ廢ス(年代未詳)其間規則等ノ小變更アルモ

著キ降替ナク以テ維新ノ際ニ至リ更ニ規則ヲ改正シテ一層ノ振起ヲ謀レリ

教則 四書五經ノ素讀ヨリ經史子ノ解義ニ至ル又一月三次師範經ヲ講シ一般生徒ヲシテ之ヲ聽聞セシム其他授業ノ細則詩文等ニ至テハ一ニ師範ノ意見ニ任セ更ニ一定ノ法ナカリシカ維新ノ後規則ノ改正ニヨリ等級ヲ分チ科程ヲ定ムル左

リ 和習漢陋ニ陷ルヲ勿レ務メテ國体ヲ遵奉シ浮華虛飾ニ流ル、ヲ戒ムヘシ書生ノ弦佩ナリ

職名及俸祿 文武總裁壹人維新前後變更アラス 家祿ノ外役料等無之年末若干ノ賜金アリ座席執政職ト同等ナリ維新前後役料等變更ナシ○文武監察五人同上 同上大目付役ト同等○會計方貳人同上 同上座席不詳○師範役貳人維新後職名教官トナル 同上○師範

手傳四人同上大助教官トナル 但嫡子及二三男等ニシテ俸祿ナキモノハ別段年末ニ下賜金アリ○助教十五人同上中助教官トナル 同上○句讀二十人同上少助教官トナル 同上○定番貳人 同上○小使貳人但中間並役米ヲ賜フ

職員概數 總計凡五十二人維新前後區別ナシ

生徒概數 通學生徒凡五百人維新前後制頒布前 但寄宿生食料ノ外ハ都テ藩費ナリ

束脩謝儀 無之

學校經費 一週年凡金千兩ヲ以テ定額トシ尤職員ノ俸祿等ハ定額ノ内ニアラス

藩主臨校 在城ノ時ハ毎月二十七日ノ月並講義臨校セサルモアリ 若クハ年内兩三回臨時ニ臨校セラレタルコアリ

祭儀 聖廟並ニ顔子曾子子思孟子ノ像ヲ設置シ春秋中旬中丁ニ釋奠ヲ執行當日藩主臨校臨校セサルモアリ 並ニ諸役人藩士生徒等

盛服着用出頭其奠ニ列シ神酒拜戴ノ式アリ

學校構造及建物圖面(附錄ノ通り) 地坪千六百六十六坪 建坪百六十七坪

學校藏書 經書子集歷史雜書大凡六千六百三十餘部

洋學所規則教員二名生徒大凡四十人餘十五歲以上ニシテ志願ノ輩ヘ教授セリ

洋學ノ制正則變則ノ二類アリ正則ハ西洋人ニ就キ韻學ヨリ始ム變則ハ訓讀解意ヲ主トス今立ル所ノ學制ハ變則ノ制ナリ 生徒ハ校内ニ限ラス行儀ヲ正シ禮讓ヲ尙ヒ輕薄ノ風ヲ禁シ信義ヲ以テ交ハル可キ事 生徒十名或ハ十五名ヲ一組トシ時間ヲ定テ同時ニ一組ツ、教授スヘキ事 稽古時間ハ午前第九時ヨリ第十二時迄午後第一時ヨリ第四時迄トス 右時間ニ遲延或ハ欠席ノ者當日講習ヲ除クヘキ事但當日ノ課業同組ノ者ヨリ講習スヘキ事 毎月末讀書濟ノ處ヲ試験シ名刺ノ順序ヲ改正スヘシ 春秋二度大試業ヲナシ優劣ヲ判シ等級ヲ定ムヘキ事 怠惰過失等有之者ハ直ニ廢學セシムル事 三ヶ月中欠席二十度ニ至レハ廢學ノ事但公用病氣ハ此例ニアラス

辛未八月

洋學所

舊高島藩

一御中小姓以上嫡子庶子八歳ヨリ入學十三歳ヨリ武藝稽古十五六歳以上常詰其餘通稽古向々名面掛札有之分常稽古中日々出席可有之事但十二歳以前ニテモ武藝稽古致シ度者ハ勝手次第タルヘシ且幼年者同所ニ於テ手習致度者勝手次第ノ事

一文武之藝道ハ終身心掛相嗜可申本意ニ候況壯年之輩ハ猶更不絶心掛可有之儀ニ候條常稽古不罷出面々モ執心之向又ハ是迄未相學流義等此上心掛申度分不依誰出席稽古可有之候就中講釋會讀之節者御家老中始御役人中其外御家中隱居等不依誰罷出度者ハ可爲勝手次第候

一御番并御用向ハ從常詰可被相勤候常詰中ハ助番御免ニ候尤御人少ノ節ハ可被相勤候

一御中小姓末席以下小鷹匠以上當人并嫡子稽古仕度者ハ可願出席

一常詰五年通稽古五年致出精候者ハ常稽古御免ニ候但格段出精藝道拔群之者ハ其以前ニモ御免被仰出候事モ可有之候若又年數而已ニテ闕席多諸藝不堪之族ハ猶又常稽古被仰付儀モ可有之候但此度稽古所初發之儀ニ付年立致入徳候分稽古之年限追テ御沙汰及ハル可キ事

一常稽古御免ニ候共一向ニ打捨不申不絶心掛可被申候就中兼テ出精譬ヘハ輕キ免シ以上ニモ進候程ノ面々ニハ別テ不打捨折々出席イタシ後進ノ業ヲモ試ミ師家ノ助力ニモ相成始終ハ流義ヲモ相極候様心掛可被申候

一十三歳以上ニテ小柄カ又ハ虛弱等ニテ武藝ノ内斟酌ノ向有之者又ハ八歳以上ニテ同様ニ付入學見合候分其譯相記大目付中ヘ達置可被申候其分致帳着大目付中ヨリ可被差出候追テ稽古始候節ハ届可被申出候

一常詰中無據用事又ハ祝儀事志事等有之退宿外出等致度者用事之譯書付當番ノ師範ヘ相届退宿之上大目付中ヘ相届可申候若又當身ノ病氣又ハ兩親并家内病氣等ニテ看病致候ハ、師範ヘ相届退宿致被召出候面々ハ引込届書可被差出候未相勤面々ハ大目付中ヘ届可被申候

一常詰不致宅ヨリ出席稽古致候面々常稽古中闕席ノ者ハ當番ハ不及届其外ハ何ノ故障何ノ用事ト譯書付師範ヘ差出可被申候

一常詰中御廟參又ハ私ノ廟參等ハ師範ヘ相届稽古繰合罷越早速可被歸事

一同斷宿又ハ親類等ヘ相招度節ハ其向ヨリ師範ヘ相達稽古繰合指遣早速可罷歸事

一社參佛詣遠乘遠足遊獵在郷次宿又ハ音樂亂舞ノ申合等ノ類常詰通稽古共師範承届惣休日ノ外邂逅指出候儀制外ニ候併一旬ノ内惣休日之外十五六日ニ過ヘカラサル事

ノ如シ

等級 第一級 禮記、周禮、儀禮○第二級 詩、書、易、春秋○第三級 小學、大學、論語、孟子、中庸(第三級以上第一級

以下講義ヲ主トス第三級ニ登ル者ヲ撰テ助教トス第二級第一級ニ登ル者ヲ撰テ助講トス)○第四級 禮記、小學、左氏傳、史記○第五級 詩、書、易、春秋○初級 大學、論語、孟子、中庸(初級以上第四級以下句讀ヲ主トス)

日課 素讀毎日朝五ツ時ヨリ九ツ時迄、毎月三 講釋正講一ヶ月三日ツ、分科隔日但九ツ時ヨリ 會讀輪講正會一ヶ月三日ツ、分科隔日但九ツ時ヨリ 詩文會毎月一二次

學科學規試驗法及諸則 學科ハ漢學筆道(維新後ハ國學校ニテ授ク)習禮(維新後ハ廢ス)及ヒ兵學弓文入中之ヲ廢ス馬槍劍砲術柔術トス藩士ノ子弟年齡八歳ヨリ入學シ十二歳ニ至ル迄ハ文學筆道習禮ヲ專修シ(習禮ハ一月ニ三日)十三歳以上ハ(後ニ十五歳以上ニ改ム)文武兩道ヲ兼修セシム十八歳以上ニ至レハ武藝ノ内ニ就キ二三科ヲ專修セシメ三十歳ニ至リ退學ヲ許ス且年齡ニヨリ出席ノ程度ヲ定メ十五歳以上十九歳以下十一月廿七日トシ校内ニ寄宿修業セシメ其前後ハ都テ通學ニシテ出席程度ヲ遞減ス即チ十三歳以上ハ二十日十一歳以上ハ二十五歳以下ハ各十五日八歳以上ヲ十日二十九歳以下ヲ六日トス又毎年春秋ニ於テ藩宰以下吏員臨席シテ諸生ノ學力藝術ヲ試驗ス且時々其進歩ト勉勵ニヨリ書籍器具等ヲ賞與セシヲアリ又生徒入學スレハ禮服着用師範家ニ回禮スル習儀アリ

創立ノ時立ル所ノ定ト維新ノ際改ムル所ノ規則ヲ左ニ記ス其間ノ小沿革ハ文書ノ散佚ニ屬スル者多ク其詳ヲ悉ス能ハス

稽古所定(長善館創立ノ時定メタル規則)

一 常詰通稽古惣テ學生ノ名面向々ニ於テ掛札可有之事

一 常稽古春秋二候 正月十八日ヨリ六月晦日マテ但七月朔日ヨリ休(閏月ハ加稽古) 七月十八日ヨリ十二月廿日マテ但十二月廿一日ヨリ休(閏月ハ加稽古) 十日ニ一日宛惣休日

一 右之外常詰ノ學生ハ五日ニ一夕代ル々々歸宅勝手次第ノ事

一 師範日々罷出内一人宛泊番可有之事

一 惣休日師範一人并講堂詰ノ内二人宛明六時ヨリ相詰泊番可被相勤候

一 學頭助教ノ面々師範ノ指圖ヲ受ケ對學生聊無私可被相勤候事

一 素讀日々明六時ヨリ講堂へ出席可有之候講釋會讀ハ定日可有之候自餘ノ諸藝ハ向々ノ道場ニ於テ日々稽古可有之事

一酒并盤上其外一切之戲謔停止之事

一師範之面々諸事篤ト申合區々之儀無之様可被相心得候事

一掛之御用人中大目付中御賄中常稽古ノ間四五日ニ一度宛見廻可被申候

一御在城中諸稽古御覽可有之候其節之次第兼テ相調伺置可被申候

一御家老中稽古總見分之節ハ御中老中御用人中御役人中可罷出候

一常稽古中并休月共御徒目付毎夜四時前後内外見廻リ其段毎朝出仕之上月番御用人中へ可申出候

一休月ノ間ハ御徒目付朝一度夜中一度ツ、見廻リ可申候

一右之通相守可申候

享和三年二月

定(維新ノ後更定セシ所ニ係ル)

一學校造立之儀ハ士族卒平民三等ノ生徒ヲシテ盡ク其智識ヲ廣メ其才徳ヲ成サシメ天下國家ノ實用ニ供候趣意ニ候間修文講武ノ業實着ニ勉勵可致事

一文武學習ノ外日々ノ規則ハ人ヲシテ放逸ナラシメス孝悌禮順自然ニ風俗ヲ厚フスル基ニ候間日用彝倫ノ間施行實踐ノ事業ト相心得大小之諸用可成丈ハ生徒ニテ相辨シ殊ニ教師ノ諸用ヲ給仕スルコト相憚申間敷事

一文事之弊ハ柔弱ニ流レ武藝之弊ハ強暴ニ至候儀自然ノ勢ニ候藝術漸進候ニ就テハ尤心得可有之儀ニ候萬一弱冠之輩等心得違却テ己カ材能ニ誇リ實行ヲ務メス或ハ空文虛論ヲ好ミ戯玩淫褻ヲ事トシ或ハ放誕驕肆ニシテ威力人ヲ犯スノ類都テ官邊チ不畏師友チ蔑視シ言行常ニ戾リ風俗チ敗ル者アリテ若シ外ヨリ聞ユル時ハ掛官員教官一同之過失同社朋友一般ノ汚辱タルヘキ事

一交道各其分ヲ守リ遜讓ヲ務トシ相規諫スルヲアラハ速ニ過チ改メテ善ニ遷ルヘシ高聲爭論等深ク可加謹戒事

一支那學ヲナスモノ固ヨリ皇國ノ目的ヲ外ニスヘカラス修身治國ノ道ヲ講求スルコト勿論ニ候ヘハ博ク洋書ニモ

一兵學武術ヲ學フ者必操練ト火術トヲ習熟シテ軍法軍略ヲ了解スルヲ要トスヘキ事

一地方算術測量物產等有益ノ學術ハ平常心掛可申事

一掛リ官員教官ハ諸事平心虛懷ニ熟議シテ區々ノ儀無之様可心得事

一師範ノ面々同斷ノ譯ニテ外出ノ節ハ大目付中へ相届可被申候

一諸藝稽古出席并稽古ノ次第并闕席ハ何用事外出故障等ノ譯帳着致シ置從師範指出可被申候差出候帳面ノ末人々出席闕席度數相記可被申候

一休月之間稽古有之候ハ、出席帳記置可被指出候若又稽古所へ罷出度候ハ、達ノ上勝手次第ノ事

一總休日タリトモ稽古望ノ諸生有之候ハ、可爲勝手次第事

一師範之面々無據用事又ハ不快障等ニテ罷出候節ハ大目付中へ相届可被申候尤左様ノ節ハ學頭助教ノ者指出稽古可有之事

一炮術遠的賣馬ニ付罷出候節當番ノ師範へ往返共ニ相届可申候相濟候ハ、早速可罷歸事

一毎歲二八月於講堂聖像祭被仰付候事

一諸流ニテ崇敬ノ神位ハ別社御勸請有之候向々稽古始ノ節祭可被申候

一於稽古所師弟ノ禮節着座等不拘格式可爲如法候當時未門入無之候向共ニ一同師範ノ儀ニ候條諸事差圖受規矩ヲ相守專ニ出精致シ相互禮節ヲ正シ後進ノ手本共相成候様相勵可被申候事

一同寮罷在候面々ハ別テ厚ク相交長ヲ敬幼ヲ憐ミ眞ノ兄弟ノ如ク相親可申儀肝要ニ候他ノ寮ダリテ同様ノ筋ニ候條相互睦誼相交可被申候其外通稽古ノ面々モ必竟同社兄弟ノ儀ニ候得ハ一同相互ニ申合和順ヲ專トイタシ年少小柄初心等ノ者ヲ厚相恤相助ケ相成シ俱ニ文武ノ藝道相進ミ候様心掛聊以不睦之意地無之様急度相慎可被申候

一於藝道互ニ相勵候事勿論之儀ニ候得共ダトヘハ於仕合之場ハ相挑相惡ニ至リ候所退テハ聊隔意ヲ含ミ不申別テ厚ク相交可被申候數人集會之場ニ於テ尤肝要ノ儀ニ候條急度相慎可被申候

一學問武藝ニ限ラス地方數學町檢等モ昇平當然ノ要事ニ候其外ノ技藝モ益有之向ハ心掛可被申候

一雅樂ハ餘力ノ節心掛有之尤モニ候亂舞モ於嗜好ハ程能心掛有之度儀ニ候其外淫聲ノ鳴物吹物等文道ヲ妨ケ武篇ヲ撓風俗ヲ亂ノ類尤世上一般ノ儀強テ御禁制ノ筋ニハ無之トイヘトモ修行ノ間ハ別テ遠ケ可申儀ニ候事

一於稽古所手透ノ節音樂并諷物等ノ稽古可爲勝手次第事

一同斷亂舞ノ鳴物諷等制外ノ事

一喧嘩口論堅停止之事

一火之元別テ入念可申事

一 文武之道場其向生徒ノ名前掛札致置春秋考試ノ上順序相改候事但文學等外ノ生徒ハ可爲長幼之順事

一 惣生徒正席群參ノ節ハ諸藝助教一同年算席ノ順次ニ總生徒年算席ノ順ニ列シ候事但一場限集會之節ハ其場掛札ノ

順タルヘキ事

一 士族病氣并忌服故障等ニテ引込候節ハ掛リ官員ヘ届書差出候事

一 春秋兩度日ヲ刻シ諸官員臨場文武藝術相試候事

一 掛官員毎月勤惰取調歳末ニ至リ總テ褒貶有之事

一 用度方一人ツ、罷出泊番相勤候事

一 厨房使用之者兼門番兵卒一人小使ノ者一人ツ、毎日罷出泊番相勤候事

以上

生徒入學ノ規則

一 士族 八歳ヨリ素讀講釋聽聞手跡但手跡ハ國學校ニテ入學修業ノ事十歳ヨリ木馬十五歳ヨリ會讀輪講武藝十七歳

ヨリ兵學 右之通相定三十歳以上ハ志次第出席之事但八歳十五歳ノ期年ニ不至トモ入學致度者ハ届ノ上可爲勝手

且又稟賦虛弱ニシテ定ノ如ク入學難成者ハ父兄ヨリ豫メ掛リ官員并教官ヘ相届候事

一 卒 志次第文武入學可致事

一 平民 志次第文學入學可致事

右三等ノ生徒入學ノ節ハ左ノ通名簿相認メ學校ヘ差出入學ノ事

美濃紙

ハツ切位

名簿

何學何術

入門稽古

仕度候

何誰

何歳

一 士卒子弟ハ何誰倅或ハ弟幾男ト肩書致候事

一 平民ハ居住村町肩書致候事

職名及俸祿 長善館掛用人役壹員大目付役三員賄役五員師範每科各一員但事務員ハ皆事務ニ非ス本職管掌ノ内ニ學校事

一生徒ハ掛官員ノ指圖ヲ受ケ師弟ノ禮節可守事

一館中ニ於テ飲酒ヲ禁スル事

一火之元別テ入念可申事

一學校藏書及武藝ノ道具常ニ大切ニ取扱暫時他所へ持出申間敷事

右之條々堅相守可申事

規則

常稽古春秋二候 正月十八日ヨリ六月晦日迄但七月朔日ヨリ休閏月ハ加稽古 七月十八日ヨリ十二月廿日迄但十二

月廿一日ヨリ休閏月ハ加稽古

諸稽古日課 一六ノ日休暇

支那學 素讀毎日朝五時ヨリ九時迄毎月三ノ日朝六時半ヨリ夕七時迄復誦 講釋正讀一ヶ月三日ツ、分科隔日但九時ヨリ

素讀講釋質問聞書返講等○砲術一ヶ月六日ツ、(但兵隊練外)遠町打試大砲町打等郊外ノ稽古ハ此限ニアラス○劍術、槍

術 毎日朝五時ヨリ夕七時迄、分附一ヶ月一日ツ、朝六時ヨリ夕七時迄、塞稽古十一月初旬ヨリ十二月廿日迄ノ内各

場前後日數相定朝六時ヨリ夕七時迄演習○馬術附木馬一ヶ月六日ツ、○柔術一ヶ月六日ツ、

右之通相定候事

一掛官員教官毎朝六時半時出席ノ事但教官壹人ツ、輪直之事

一諸藝各助教世話人設置同時出席ノ事

一諸堂詰番二十六歳以上ノ士族ニテ毎日兩人ツ、輪直相勤候事

一同添番十一歳ヨリ十四歳迄ノ士族子弟ニテ毎日二人ツ、輪直相勤可申候右年算以上ニテモ諸稽古不致者ハ相加候

事

一右講堂詰番諸觸次等取扱稽古相濟候上取片付火元相改候事但添番之者講堂詰番ノ指圖ヲ受ケ萬事給仕致候事

一生徒毎朝六時半時迄出席之事

一出退其掛官員教官へ相届可申事

一毎日稽古朝五時ヨリ相始七時相濟候様心得候事但臨時夜學等致候節ハ教官ノ指圖ヲ受候事

一稽古相濟候ハ、各場生徒ノ内ニテ掃除番二人ツ、ニテ掃除イタシ火之元取締入念候事

讀ヲ主トス

學科學規試驗法及諸則 學科ハ和學ヲ主トシ幼童ニハ兼テ筆道ヲ授ク規則并定ヲ左ニ記ス

定

一 今般國學校造立相成候ニ付テハ士族ハ勿論卒平民ニ至ルマテ日夜勉勵致勤學達材成德シテ御國恩ヲ奉報候様相心得可申事

一 皇道ヲ尊奉シ孔教及外國ノ方策ニモ身力ノ及フ限り該博貫通可致事但内外本末ノ分相誤不申様心掛可申事

一 毎旦此館ニ入テ學問スル人 神皇及父母ノ大恩ヲ假初ニモ忘却セス近クハ人習テ綱常倫理ヲ明ニシ修身治國ノ要務ヲ精察シ遠クハ神習テ神聖ノ闡奧幽顯ノ玄妙ヲ考究可致事

一 神祠ノ禮祀春秋朔望無懈怠尊崇可致事

一 心術ヲ正クシ言語ヲ節ニシ虛文空論ヲ禁シ實効ヲ勵可申事

一 四大人ノ明示ヲ本宗トシ其他諸家ノ末書ヲモ博ク折衷シ一偏ニ相泥申間敷事

一 御政務ヲ誹議シ且財利酒食淫佚ノ陋談一切禁止ノ事

一 座次ハ尊卑ノ等級ニ從ヒ長幼ノ順序ヲ正シ恭敬ヲ主トシ高聲爭論等ハ勿論禁止ノ事

一 掛リ官員ヲ始メ教官ノ指圖相背申間敷事

一 學校ノ藏書大切ニ取扱校外ニ持出申間敷事

右ノ條々固ク可相守事

規則

一 八歳ヨリ十四歳迄素讀可致事但長善館ニテ漢籍素讀致候者ハ十一歳ヨリ出席ノ事

一 八歳ヨリ手跡脩行可致事

一 十五歳以上獨看寮ニテ讀書可致事

一 入學ノ規則總テ長善館ト一般ノ事

一 學業分科 神典、皇史、律、令、歌辭

一日課一六ノ日休暇 素讀講釋質問會讀輪講鈔錄詠歌作文等

一 素讀ハ六半時ヨリ九時迄獨看ハ六半時ヨリ七時迄ノ内講釋會讀輪講歌辭會等ハ九半時ヨリ七時迄ノ事

務ヲ包含スルノミ故ニ常祿ノ外別ニ俸ヲ給セス師範ハ常祿ノ外扶持米八苞ヲ給ス維新ノ後ニ至リ初テ文武總裁一員督學二人ヲ置テ專ラ學校事務ヲ管理セシメ師範ヲ改メ掌教ト稱シ用度方數員ヲ置キ會計事務ヲ掌ラシム俸祿ノ制ハ前ニ異ナルナシ

職員概數 教員凡十人事務員凡八人門衛一人

生徒概數 寄宿生凡三十五人通學生凡百七十八人共ニ定員ナシ其費金ハ藩ヨリ支出ス

束脩謝儀 入學ノ際師範家エ束脩ヲ納レ每年末謝儀ヲ爲スト雖モ學校ニ對シテハ束脩謝儀ナシ

學校經費 未詳

藩主臨校 藩主ノ學校ニ臨ミ生徒ノ講義ヲ聽キ武藝ノ試合ヲ覽ルヲ維新前ニ於テハ江戸ニ在ル日許多ナルヲ以テ其事甚タ稀ナリシモ維新後ハ概テ在城セシヲ以テ頻々之アリ

祭儀 講堂中ニ聖座ヲ設ケ先聖孔子(先師顔子曾子ヲ配享ス)ヲ祭ル毎歲春秋仲月仲丁ノ日ニ於テ文學師範祭主トナリ釋菜ヲ行フ藩宰以下之ニ蒞ム昨チ藩主ニ上リ又之ヲ藩宰以下與祭ノ者及伶人ニ頒チ諸生ニ至ルマテ酒饌ヲ賜フ

學校構造及建物圖面 木造平屋地坪凡二千三百坪建坪凡二百三十四坪圖面(別紙ニ掲ク)

○國學校

校名 國學校

校舍所在地 信濃國諏訪郡高島本町(目今上諏訪村ノ内宇本町)

沿革要略 明治二年ノ創設ニ係ル

教則

素讀書大略 皇典文彙、古事記、荷田氏創學校啓、祝詞式、皇朝史略、神代卷、續皇朝史略、萬葉集、大日本史等

獨看書大略 直昆靈、古道大意、玉釋、神皇正統記、讀史餘論、鬼神新論、馭戎慨言、皇朝史略等 古事記、神代卷、祝詞式

以下ノ神典 六國史、大日本史以下ノ國史 令式格律以下ノ記祿 萬葉集、古今集、土佐日記、伊勢物語以下ノ歌辭

四大人ヲ始先哲撰述ノ末書類其外博ク群書ニ涉リ可申事

等級 第一級 六國史、令、律、格式○第二級 日本記、大日本史○第三級 古事記、萬葉集、祝詞式、歷朝詔詞 第三級以上第一級以下講義ヲ主トス第三級ニ登ル者ヲ撰テ助教トス第二級以上ニ登ル者ヲ撰テ助講トス○第四級 日本

記、令○第五級 延喜式、祝詞、續日本紀詔詞○初級 古事記、古語拾遺、皇朝史畧、皇典文彙 初級以上第四級以下句

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ許否スルノ制度ナク士民ヲ問ハス其自由ニ任セリ

學校

校名 長道館 (明治四年飯山校ト改稱セリ)

校舎所在地 安政四年藩費ヲ以テ飯山藩内字廣小路ニ設置シ明治四年ニ城内ニ移轉セリ

沿革要略 文化年間^{以前詳ナラス}本多豐後守助賢ノ時代當器ノ者ヲシテ藩費ヲ以テ文學修業セシメ師範役ヲ命シ私宅ニ於テ士

民ノ子弟ヲ教育セシメ尋テ安政年間本多豐後守助實校舎ヲ城外ニ設ケ長道館ト稱シ教授役員ヲ置キ一層ノ獎勵ヲ加ヘ稍隆盛ニ赴キシニ戊辰ノ際兵燹ニ罹リ校舎烏有ニ属セ假ニ藩士ノ居宅ヲ以テ校舎トセリ明治四年ノ春更ニ城内ニ建設

シ飯山校ト改稱シ學監其他掛リ役ヲ置キ其等級ニ依リ祿ヲ給シ専ラ學事ニ從事セシメリ

教則 従前ハ師家ノ邸宅ニ就キ教授ヲ受ク安政年間初メテ校舎ヲ開キ毎朝六時ヨリ二時間讀書^{四書五經文選歴史}一ヶ月六日

ツ、午後ヨリ講義但寄宿或ハ執心ノ者ハ此限ニアラス明治四年校舎ヲ城内ニ移轉シ毎日午前六時ヨリ正午迄讀書算術

午後ヨリ講義習字トス書籍ハ四書五經歴史其他各自ノ望ミニ因ル

學科學規試驗法及諸則 從來學校ニ於テ授クルハ漢學ノミニシテ古學ナリ後折衷ヲ用ユ^{和學醫學禮習字及兵學弓馬劍砲術柔術}

^{ノ爲メ設置陸三十五間横三間}生徒ノ出席日數月々取調勤惰ヲ調査シ春秋兩度藩主自ラ讀書講義等ヲ檢シ優等ノ者ハ金員或

ハ酒肴料等ヲ賞與シ文ハ賞詞ヲナス不在ノ年ハ重役ヲ以テ之ニ代ラシム學術藝術等ノ比較ハ別ニ設ケナシト雖凡勉勵

ノ者ハ其器ニ應シ格席ヲ進メ或ハ役員ニ命ス入學年齡ノ定メナシト雖凡八歳前後トス若時期ヲ過ルモノハ其事由ヲ

具申スルヲ法トス入學ノ節ハ禮服着用掛員ヘ回禮ス但明治初年ヨリ之ヲ廢ス

職名及俸祿 重役ノ内三名掛リヲ命シ^{文武}教場ヲ回リ生徒ノ勤惰ヲ糺シ獎勵スルヲ旨トス別ニ職名俸祿等ノ區分ナク兼

務トス明治三年專務ヲ命シ之ヲ總教令トス^{少參事相當}正權ヲ置ク祿高現米三拾石ニ貳拾七石属吏祿高現米八石大少ノ教授ヲ置キ祿

高現米貳拾七石ニ貳拾六石助教ハ現米貳拾二石トス

職員概數 教員三名助教ハ門弟ノ内優等ノ者ヲシテ扱ハシム故ニ定員ナシ明治三年學事ヲ擴張シ大教授二名少教授二名

助教十三名事務員ハ總教令二名属吏二名門衛二名ナリ

生徒概數 士民ヲ論セス凡三百名前後ナリ内寄宿スルモノ十分ノ一ニ過キス明治三年ヨリ他管ト雖凡志願ノ者ハ悉ク入

校ヲ許可シ殆ント五百名ニ至ル内寄宿スル者百名餘

一 毎日ノ出退ハ掛リ官員教官ニ相届可申事但勤怠ハ都テ帳著有之月末ニ掛リ官員相改歲末ニ藩廳へ書出シ褒貶有之事

一 春秋二季日ヲ定メ諸官員出席學業相試候事

一 掛リ官員壹人ツ、毎日出席ノ事

一 教官一人助教一人手跡世話一人ツ、毎日輪直相勤候事

一 書籍番兼用度方一人ツ、罷出泊番相勤候事

一 厨房使用ノ者兼門番兵卒一人小使ノ者一人毎日罷出兵卒ハ泊番可致事

職名及俸祿 掌教一人俸祿ハ常祿ノ外扶持米八苞ヲ給ス其他事務員ハ長善館員之ヲ勤ム

職員概數 教員一人 門衛一人

生徒概數 通學生徒凡百人寄宿生ナシ

束脩謝儀、學校經費、藩主臨校 以上三項長善館ニ同シ

祭儀 春秋開校ノ日左ノ祭神ヲ祭り且毎月朔望之ヲ拜ス

祭神一社 健御名方神 八意思兼神 菅原神 四大人靈祠(羽倉、岡部、本居、平田)

學校構造及建物圖面 木造平家地坪凡九十坪建坪凡四拾八坪圖面別紙ノ通

舊飯山藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主時々諭達シテ學業ヲ勵シ春秋兩度素讀講義等ノ考試ヲ要シ上進ノ者ニハ酒肴料ヲ賞與シ尙優等ノ者ハ拔擢シテ俸祿ヲ給セリ

士族卒ノ子弟教育方法 藩内ノ學事ハ從來文學師範役ノ私宅ニ於テ教授シ士族卒ノ子弟ハ其門ニ就キ必ス修業スルヲ例トス優等ノ者ハ各自ノ望ニ任セ藩費ヲ以テ他國ニ遊學セシメリ尤維新ノ前後ハ藩主本多助實皇漢洋ノ三學ヲ獎勵シ他國ニ遊學セシメシ者居多講義ハ其會日ノ日ヲ定メ藩士ヲシテ生徒ト共ニ聽聞セシメタリ

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ家塾寺子屋ニテ修學シ或ハ有志ノ望ニ任セ藩士ノ子弟ト共ニ藩學ニ入ルヲ許シ共ニ獎勵ヲ加ヘリ

藩制ニ於テ文武師範家ニアラサレハ戸主ノ遊學ヲ許サス又藩費ヲ以テ他國ニ遊學セシムルヲナシ獨リ士族ノ子弟未タ勤仕セサル者私費ヲ以テ遊學ヲ請願スルトキハ上中下共其嫡子ニシテ已ニ勤仕スル者ト同額ノ年給ヲ與ヘ學費ヲ補助セリ後明治維新ニ至リ藩政ヲ改革シテ戸長ノ私費遊學ヲ許シ又藩費ヲ以テ遊學セシメタルコアリ又年代詳カナラスト雖モ毎月朔望儒官ヲシテ經書ヲ講義セシメ士族一同之レヲ聽聞セシム後學校創立以來ハ毎月一日教授役經書ヲ講シ士族一同之ヲ聽聞セシメ六ノ日助教經書ヲ講シ卒ヲシテ之ヲ聽聞セシム

家塾寺子屋設置ノ制度及平民子弟ノ教育方法 家塾寺子屋ノ開設及平民子弟ノ教育ニ於テハ檢束關涉シタルコナク各自ノ自由ニ任シタリ農民ノ子弟ニシテ藩立學校ニ入ランコトヲ乞フ者モ亦之レヲ許シタリ

學校

名稱及校舍所在地 寛政ノ初年文學所ヲ儒臣ノ邸内ニ設ケ之レヲ讀書場ト唱ヘリ後明治元年文武所ヲ一邸内即チ舊藩役所政廳ニアラス方今ノニ設ケ始メテ學校ト唱ヘシモ亦名稱ナシ

沿革要略 飯田藩文學所ノ創立年代詳ナラスト雖モ安永天明ノ際儒臣ヲ聘シテ士族ニ文學ヲ教授セシメタルコアリ後寛政ノ初年又儒者ヲ聘シテ其邸内ニ文學所ヲ設ケ閩藩士族ヲシテ學ハシム明治元年ニ至リ文武ヲ一邸内ニ纏メ始メテ學校ヲ創建シ明治五年廢藩トナリ學校モ亦廢學ニ屬ス

教則 學校創立以前ハ一定ノ階級ナク其教科書ノ如キモ亦定規ナシト雖モ凡三字經千字文孝經四書五經文選等ノ素讀ヲ了リ史類ノ稍易キモノヲ獨見シ其不審ヲ質シ又ハ輪講ヲナスヲ以テ其順序トナス後學校創建以後ハ階級ヲ五等^{其級名及}度^{其級名及}詳^{其級名及}ナ^{其級名及}ラ^{其級名及}ス^{其級名及}ニ分チタリシモ其教科用書及ヒ順序等ハ大同小異ナリ其授業ニ於ケル方法アルコナシ唯着到ノ序ヲ以テ教師ノ前^{其級名及}ニ至リ前日教ヲ受ケタル箇所ヲ溫習稍遺失ナキニ至リ生徒ノ力ニ依リ素讀ヲ授ク其學習時間ハ寛政ノ初年文學所創建以來午前卯刻ニ始メ午ニ至ルノ制規ナルモ常ニ卯ニ始メ巳ニ畢ルヲ例トス學校ニ遷リレヨリ午前九時ニ就業シ午後三時ニ畢ル

學科學規試驗法及諸則 飯田藩立學校ハ漢學劍槍ヲ合セテ一邸内ニ設ケ弓砲馬術ノ如キハ各別ニ其演習所ヲ設ケリ而シテ生徒ハ其望ム所ノ一科ヲ專修スルヲ許シ必ス文武兩道ヲ兼修スル等ノ成規ナク又文學武藝ノ程度ニ於テ比例スヘキナシト雖モ武藝ノ方都テ鄭重ノ扱ヲ爲セリ

生徒學習年限ナク入退學共隨意ニ任ス

東脩謝儀 定則ナシト雖^{凡代貳錢}凡入門ノ節^{酒壹升肴}師家へ送ル謝儀モ凡年分金貳朱位ナリ明治三年ヨリ之ヲ廢ス

學校經費 從前ハ食料薪炭油等總テ生徒ノ自辨ナリ師家ノ俸祿藩ノ之ヲ與ヘ家屋ノ修營モ藩費ナリ明治三年改正後モ教員事務等ノ俸給家屋ノ構造ハ勿論必用ノ書籍等ハ總テ藩費ヲ以テ支辨シ薪炭油等教員事務掛ハ藩費生徒ノ食料薪炭油等其時々相場ヲ以テ各自支辨ス右費等ノ額ハ今日ニ至リ調難シ

藩主臨校 藩主臨校セシ^{ナシ}春秋兩度學力ヲ驗スル^{ハ別ニ}席ヲ設ケ生徒ヨリ出席スルモノトス明治三年以後ハ時々臨校スル^{ナリ}アリ別ニ取扱ナシ

祭儀 之レナシ

學校構造及建物 從前ハ別ニ校舍ナシ安政度設クルト雖^{凡代貳錢}戊辰兵燹ニ罹リ烏有ニ屬シ或ハ別ニ構造スルモノニアラサルハ調査シ難シ

明治四年移轉ノ校々地坪凡貳千坪建物ハ藩主ノ舊住居ヲ用ユ凡三百坪圖面等ハ存スルモノナシ廢縣ノ際拂下ニナリ取毀テ地所ハ開墾畑地トナレハ大ニ變換シ調フルニ難シ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書ノ種類部數 出版翻刻等セシ^{ナシ}藏書類ハ廢縣ノ際長野縣へ殘ラス引渡ス(書目ハ別ニ掲ク)

舊飯田藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達ハ得テ考フヘキモノナシ唯獎勵法アリ則チ左ノ如シ

武藝ハ免許ニ至リ文學ハ儒官ノ鑑定ニヨリ左ノ賞ヲ與フ

藩主紋服 上士○同紋章上下 中士以下○増給 士族長男コシテ巳ニ勤仕スルモノ○別ニ一家ヲナシ永世祿ヲ與フ
士族二三男

武藝ノ階級ニ於テ目錄ニ昇リ文學前同斷 金三百疋 上中下士ノ差ナシ

文武ヲ勵ミタル者年末出席日數^{文武}ヲ合算シ左ノ賞ヲ與フ 銀十兩以下 上中下士ノ差ナシ

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ子弟ハ必ス文學ヲ修ムルノ制度^{卒ノ子弟ハ各自ノ意向ニ任ス}ナレハ皆七八歳ヨリ文學所ニ入學セリ然レ^凡其制全ク備ハラサルヲ以テ習字ノ如キハ各自ノ志望ニ任セ寺子屋ニ就キ之レヲ學ハシメリ

退息必有居□又□張而不弛文武不爲弛而不張文武不爲愼餘力可就業遊於警無他技凡學士及童子寓舍學者與不寓舍學者卯時而興卯半時來師舍謁師及直都講辰時聞講受學々々既畢已時聞板復讀課條輾轉無端得命就業午半而退息此餘臨時諸業諸寫書例皆如明倫館令就師舍爲業期黃昏乃畢禁齋于家官令餘業會讀夜業從所各欲子時爲限

一束脩之餘扶茶炭及油之費

一來師舍受學前各所習心讀之也禁喧嘩及浮說虛言誑幼童

一尊卑長幼正席待教若有疑則受學□復問師□□禁事

寛政七年□□□

職名及俸祿職員概數

明治維新前文學所 文武世話役一名 但レ行政官之レヲ兼ヌルヲ以テ別ニ俸祿ナシ○儒官一名 家祿ノ外俸給ナシ座席身分取扱等ニ於テ特待アルコナシ○助教未定 年末二百疋ノ慰勞金ヲ與フ若シ其人滞給或ハ兼務アル者ハ特別若干ノ増給アリ

學制頒布前 總裁一名 舊藩大參事之レヲ兼ヌ○督學一名 家祿ヲ合セテ七十石トス○學監一名 俸給督學ニ同シト雖モ常ニ少參事之ヲ兼ヌ○教授一名 家祿ノ外年俸五苞○助教五名 家祿ノ外年俸四苞○庶務二名 家祿ノ外年俸二苞

右其座席ノ如キハ別ニ成規ナシ

生徒概數 學校創立以前ハ常ニ五十名前後ナリシモ學校設置後ハ百五十名ニ至レリト雖モ寄宿生ナク又藩費ヲ以テ學資ヲ補助シタルコナシ

束脩謝儀 束脩ナシ學校創立以來ハ月謝二錢ヲ納メシム

學校經費 經費ハ一定ノ額ナク其要スヘキ物品等ハ皆舊藩會計課ニ於テ之ヲ支辨セリ唯學校創立前ハ年々書籍費トシテ壹兩貳分宛ヲ讀書場ヘ附與セラレタリ

藩主臨校 學校創立後ハ屢々臨校シテ講義ヲ聽聞セシコアリ

祭儀 聖廟ノ設ケアラサレハ祭儀等アルコナシ

學校構造及建物圖面 和風平家造ニシテ別紙繪圖面ノ通り

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 學校ニ於テ出版シタル書籍ナシ其藏書ノ種類部數左ノ如シ

春秋兩期ノ試験ハ學校設置前文武世話役目付役等出席シ學校創立後ハ總裁督學學監等出席シテ教授之レヲ試験ス訓條罰則等之レヲ知ルニ由ナシト雖モ寬政ノ初年文學所創建ノ際山口藩明倫館ノ記文ヲ扁額トナシ之レヲ其規則トナセリ其文左ノ如シ

學館功令

學校設達才成德上以爲國家之用下以使用有所矜式其如斯也則學問果有益於人歟抑亦芻狗也歟其有裨風教歟人將於我乎嘗焉夫讀書學文者將以明經通史長養才德待用於他日不則學雖博乎文雖富乎亦無復所貴矣昔者我徂徠先生年方四十始修古文辭蓋十年作辨道先生之於文也可見焉耳諸生游館下三年爲一限廩得千有餘日白駒之遷可立而竣朝夕孜孜務就功令猶且恐不及焉一日之中遊惰竟時俄失日半三年不下二三百日古者女功一月得四十五日加之以夜之半也勤惰之分有如是者鄙生以一日之長叨居諸生之先今依故祭酒倉君所創少增損定學規凡事無統領責無所歸每舍長者一人爲舍長進退作息皆聽命而舍長聽命都講々々聽命學長々々聽命先師之靈又立直日一人諸生輪次當直以董學務其制條具左鑒照勿違

功令

一卯時開板而興盥漱結束升堂溫讀五經三禮三傳國策三史諸子楚辭文選韓柳王李集唐詩諸選從心

一辰時開板下堂入厨會食々々畢入舍喫茶

一午時開板入厨會食々々畢入舍喫茶除會業外游息從心若欲出校辦事者告館長乃出館長不在則告都講及酉時必歸若以事留外廢夜業者先具事由請館長所許乃得出去

一酉時開板就業

一戌時開板入厨點心畢入舍就業

一亥時開板罷業就安若欲卒業者聽及子時不許□□

一直日生一名諸生輪次當直董業當日學務凡業席具設期會板報賓客應酬烟茶々々諸項皆在所管時々循視列舍警敕廢業一功令常業外各自別受私業一部臨時請業於館長錄上都講舍板子既已卒業更轉他書亦如之別具一冊逐次載錄每歲六月十二月比校業冊子多少以視殿最

一非有父母尊長招呼他有緊要事故不得輒出校門出則詢都講及直日生告學長而後出歸則面學長若都講直日生

(以下飯田讀書場追加)

右明倫館功令如斯矣今來於學舍者官士與學士相平未學校之設則難要令苟概令耳學記曰凡學先事士先志時教必有成業

學科學規試驗法及諸規則 漢學筆道算道等ナリ習禮及ヒ兵學弓馬槍劔砲術柔術等別ニ講塲ヲ設ク舊藩子弟ニハ必ス文武兩道ヲ兼修セシムル制規ナレモ文學ト武術ト程度ノ比例且生徒學習ノ期限及ヒ退學年限等ノ制規ナシ試驗ハ年內一度トシ藩主臨校之レヲ試ミ優等生徒ヘハ賞品(十五歲以上ノ者ヘハ酒吸物料トシテ銀五匁十五歲以下ノ者ヘハ鼻紙料トシテ銀三匁)ヲ與フ生徒入學ノ際ハ禮服着用出校スト雖モ別ニ師範家ヘハ回禮セス

職名及ヒ俸祿

維新前職名定員 督學一人 教授方三人 助教二人

學制頒布前職名定員 督學一人 典書一人 教授方二人 助教四人

維新前俸祿 各自俸祿ノ外役料扶持米等ハ別ニ支給ナシ

學制頒布前俸祿 各自俸祿ノ外左ノ月俸ヲ支給ス

金七圓五拾錢 督學月俸○金貳圓 典書月俸○金貳圓 教授方月俸○金壹圓 助教月俸

職員概數

維新前定員 督學一人 教授方三人 助教二人 小使一人

學制頒布前定員 督學一人 典書一人 教授方二人 助教四人 小使一人

生徒概數 維新前六拾人 學制頒布前七拾人 但維新前學制頒布前チ間ハス生徒ハ通學ノモノトシ(寄宿修學生ヲ許サ

ス)該費ハ總テ藩費ヲ以テ支辨ス

束脩謝儀 束脩謝儀共ニ受納セス

學校經費 學校器械諸雜費共一切舊藩會計局ニ於テ實費支辨シ別ニ豫算ヲ置カス

藩主臨校 三八ノ日講義聽聞及ヒ試驗當日ハ必ス臨校ス

祭典 聖廟ノ設置アラサレ共二八月ノ兩月ヲ以テ校内ヘ畫像ヲ展置シ神酒釋采ヲ備ヘ藩主ヲ始メ士族卒ニ至ル迄畫影ヲ

拜禮スルノ式ヲ施行ス

學校構造及建物圖面 校舍ハ別紙圖面ノ通り

舊小諸藩

學制

經書二十五部 史類四十二部 子類六部 詩文類十二部 律書八部 兵書八部 地理書三部 字書四部 雜書二十七部 通計百三十六部

舊龍岡藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達及ヒ學業上進ノ者ニハ加役米又ハ引米等ノ名義ヲ以テ徵課セシ間接ノ祿稅ヲ免除スルカ如キ獎勵法等更ニ記載スヘキ事項等ノアルナシ
士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ハ藩立學校ヘ必ス入校學修セシムルモノトシ別ニ藩費ヲ以テ他國ヘ遊學セシムル等ノ制ナシ然レモ私費ニテ最寄私塾ヘ通學等ハ各自ノ意向ニ任ス且講期日ニハ藩士ヲシテ生徒ト共ニ聽聞セシムルノ制規アリ

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ト雖モ藩立學校ヘ入學志願ノ者ハ之ヲ許可シ家塾寺子屋ニ於テ修學スルモ各自適意ニ任シ檢束セス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ何人ヲ論セス自由ニ開設スルヲ得敢テ奉行郡宰等ハ干涉セス

學校

校名 始メ修業館ト稱シ後尙友館ト改ム

校舍所在地 安政元年江戸麻布龍岡舊邸内ニ創設シ明治元年本縣佐久郡田野口村龍岡藩中ニ轉設ス但舊趾ニ係ル事項ハ總テ本文ノ制規ニ依ル

沿革要略 學校創立ハ安政年中藩主松平縫殿頭乘謨時代ニ於テハ且學校ヲ設立シ儒道ヲ振興シ子弟ヲシテ學ニ就カシムル等總テ同主ノ時代ニシテ同主ノ盡力ニ係ルモノトス

教則

教科用書 四書、五經、文選、老子、莊子、孝經、春秋左氏傳、史記、前後漢書、資治通鑑、綱鑑易知錄ノ類

授業方法順序 四書、五經、文選ノ素讀ヲ卒ヘ經書歴史ノ輪講並ニ意義ノ質問ニ移ル

授業時間 毎朝五ツ時ヨリ始メ八ツ時ニテ止

刻ヨリ已ノ刻ニ至ルマテ素讀ヲ授ケ二七ノ日未ノ刻ヨリ申ノ刻ニ至ル迄司成司業講義四九ノ日同時ヨリ誦師助誦師獨讀ノ生徒輪講ス

學科學規試驗法及諸則

和漢ノ書ヲ教授スト雖凡專ヲ漢籍ヲ授ク生徒學習ノ期限ハ七八歲ヨリ十五六歲ニ至ル迄ハ必ス就學セシム以上ハ各自ノ意ニ任セリ武術ノ如キハ校門ヲ異ニスト雖凡每朝卯ノ刻ヨリ槍劍ヲ學ヒ又巳ノ刻ヨリ兩度ツ、學ハシム馬術ハ別ニ其場アリテ隔日ニ之ヲ學ハシム其他弓砲柔術兵學ノ如キハ皆其師門ニ入學スル各自ノ意向ニ任スト雖凡藩主牧野遠江守康哉時代ニ至リテハ^{天保ノ末ヨリ嘉永ノ頃ニ至}特別武文ヲ獎勵シテ長沼流操練ヲ主張シ銃砲甲冑旌旗ヲ具備ス砲術ノ如キハ尤モ嚴ニ諭達ヲ布キ少壯ノ者ハ必ス入學セシメ文武兩道ヲ兼修セシム是學校振起ノ沿革ナリ

游泳ノ如キハ藩ノ干涉ナシト雖凡男兒八九歲ヨリ壯年ニ至ル迄炎暑ノ候城南千曲川ノ急流激湍ニ遊ヒ裸体ヲ煎沙熱石ニ晒シ面背ハ印度人ニ彷彿タリ之ヲ以テ武士ニ充ルヲ知レリ又年々七月ニ至リテハ藩内ニ土俵ヲ築キ每宵幼年ヨリ壯年ニ至ルノ士力ヲ角ヘ以テ偷安ノ弊ヲ防キ兼テ臂力ノ壯健ヲ要ス試驗法ノ如キハ毎月三ノ日ヲ以テ旬日教授セシ書ヲ吟味シ又不時ニ已ニ教授セシ書ヲ溫習セシメ遺失ヲ改メ優劣ヲ揭簡牘ヲ黜陟シテ獎勵ス後世康哉時代ニ至リテハ檢査法ヲ改革シ誦師助誦師生徒ニ至ル迄豫メカニ應シ左傳史記十八史畧四書五經若干卷ヲ約シ講義素讀ヲ試業ス家老用人臨席聽聞シ司成司業之ヲ改メ優劣ニ從ヒ前ニ同シ

文學ト武術ト程度ノ比例ハ顯然タラスト雖凡執政ノ見ニ因リ若干品ヲ賞與シ^{生絹一定程ノ品物}勉強上達ノ褒詞アリテ以テ獎勵シ隱然ト昇進ニ關スルヲ覺フ

文武トモ藩主康哉ヨリ牧野遠江守康民ノ時代ニ家臣ノ材藝ニ因リ漢學專門槍劍砲術專門修業ヲ命シ藩費ヲ以テ名家ニ入學セシムルヲ陸續之レアリ

醫師ハ其家ニ因リ少年ヨリ漢法醫學ヲ專修ス近年洋法ヲ學フ者アリ和洋算術筆道習禮等ニ至リテハ各自ノ意向ニ任ス

學校生徒訓條罰則ノ如キハ學則及會講規約教訓書等アリ別記ノ如シ
兒童入學ノ節ハ袴ヲ着シ明倫堂教員宅ヘ廻リ入學ヲ依賴シ又歲暮ニハ禮ニ廻ルヲ例トス
卒ノ武術ハ劍術ヲ學フト雖凡專ヲ弓銃柔術捕手棒三ツ道具ヲ學ハシム藩主其藝ヲ閱覽スル制アリ

學則

建官設學以教人太古邈矣吾不知之唐虞以來則有之矣何以知之書云契作司徒敬敷五教又云夔典樂教胄子是也其養門徒

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達諸書皆藩籍ト一廢既ニ散失今一モ存スルモノナシ 加役米又ハ引米等云々ノ獎勵法無之

士族ノ兒童學業勉勵ニテ每朝素讀二七ノ講義四九ノ輪講年中皆席ノ者ヘハ歲暮ニ書籍若干卷ヲ賞與ス假令ハ四書一又三
部程ノ物品

課ノ中一課皆席ノ者ヘハ筆墨紙等ノ中一品ヲ褒賞ス或ハ三課闕席有之ト雖凡中折紙一束ヲ給ス又書籍ハ兒童ノ望ニ任セ皆校書ヲ貸與シテ之ヲ讀シム又書風筆意ノ如キハ各自ノ望ミニ任セ課業時間ニ習字セシムト雖凡近世ニ至リテハ校中ニテ習字スルヲ廢ス

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ子弟ハ藩立學校ヘ必ス入學セシム學校出席ノ餘暇ヲ以テ家塾寺子屋ニテ修學スルヲハ各自ノ意向ニ任ス 學材アル者ニハ藩費ヲ以テ他國ヘ修業申付且私費ヲ以テ游學ヲ願フ者アレハ之ヲ許スヲアリ 卒ニ至リテハ各自ノ意向ニ任セ文學ノ儀ハ干與セスト雖凡寺子屋ニテ學フ者有之アリ二七ノ日講義アリ家老用人初總士族生徒ト共ニ聽聞セシムルノ制アリ事故ナクシテ上堂セサルヲ許サス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシノミナラス藩立學校ヘ入學志願ノ者アレハ之ヲ許スト雖凡農民ノ學事ニ從事スルヲ禁セシヲナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ハ何人タリトモ自由開設スルヲ得セシメ他ノ檢束ヲ受ルナシ

學校 附江戸藩邸内ノ學校

校名 明倫堂ト稱ス

校舍所在地 舊小諸藩内字耳取町

沿革要略 舊藩主牧野宮内少輔康長時代儒學ヲ尊崇スルニ意アリ家臣四名ノ請ヲ許可シ家臣高栗寬喬ヲシテ學制ヲ主任

セシム學事隆興擴張センヲ命ス 學校創立ノ年代及ヒ設立ニ盡力セシ人物ハ別紙明倫堂記事ニ詳ナルヲ以テ之ヲ錄

セス且四名ノ行事小傳ノ如キニ至テハ今舉クルヲ能ハス

高栗寬喬ハ性來篤實ニシテ言語少ク謙遜ヲ主トシ闊藩君子ノ風アルヲ稱ス給人ニ席位シ側用人明倫堂司成ヲ兼勤シ藩

主代々侍讀ヲ命セラレ牧野内膳正康明代ニ明倫堂生徒取立方宜ク上達ニ付賞詞ノ上卷上下一具ヲ給與ス文政
四年學派ノ如

キハ山本北山ノ門ニ學ヒ新古注ヲ折衷ス論語孟子ノ註釋アリ著作詩文ニ至テハ其存ルモノ甚タ少シ

數則 教科用書及ヒ授業ノ方法順序等ハ明倫堂讀書課業ニ詳カナルヲ以テ之ヲ畧ス其時間ノ如キハ毎日朔望五節旬藩
社祭日ヲ除ク辰ノ

當寬自行當恭寬者有容之謂也恭者不怠慢也盤水可捧而志難持六馬可調而氣難御古人云可不戒乎

一 成材待用士子之本務昔安定胡氏講學于蘇湖時設經義治事二齋教之故其出而簪仕往々取高第及爲政多適于世用若老于吏事者以視文章詞士曲學腐儒無補于治有害于世者相去奚啻什伯菑菑哉柳相會讀書學文者不可不先務基本也

一 雖幼童之功課豈翅誦習而已哉入而孝出而弟見尊長則興敬與讓處同輩則以謙以和毋矜氣毋情容毋疾言毋怒色待人行事忠信篤誠是皆童子之所當務也

一 論語曰以文會友以友輔仁記曰獨學而無友則孤陋而寡聞故朋友切磋實學問之一大要素也凡急難相救安居增樂者亦唯友爲然友生之益大矣哉則子弟之交友也不可不善擇善結者也

一 明經修行宗尙聖學講論悉符於踐履著述必本於躬行如爲邪說矯詞有害於治道者不得入會

一 凡爲人子爲人弟者不可不孝於父母而弟於長上也若夫不然者勿令入會

一 凡瀆亂人倫不矜名節及爲利奔競語言無實於誕不謹一切所爲有妨名教而欲會堂爲名高挾浮詞以取勝者亦不許入會

一 凡從前在會諸友或爲德不卒敗名喪檢內忝倫常外辱壇坫及在會不遵儀注於會後誇誕不經欺誑人士者不許復入

一 學貴下傲心宜戒中貴虛滿心宜戒功貴勤怠心宜戒接貴巽躁心宜戒養貴靜蕩心宜戒應貴直機心宜戒器貴宏礪心宜戒慾貴寡貪心宜戒用貴節侈心宜戒氣貴和忿心宜戒人貴同忌心宜戒識貴起習心宜戒能守此十二戒可以語學矣

明倫堂讀書課業

三字經蒙求孝經四子孔子家語大戴禮五經ヲ授ケサテ時ニ其中極メテ解シ易キ一二語ヲ擇テ分ニ隨テ俚語ヲ以テ解説シ其々自得セシム尤一日間一二次ニ過ス又其人ニヨリ間ニ其程ヲ觀唐詩正聲文章軌範等ヲモ讀シムヘシ五經皆畢ル比既ニ自ニカヲ得ハ日記故事十八史略元明史略明通記清三朝事畧貞觀政要蒙求ノ注等ヲ授ケ其々自ニ讀自ニ其大義ヲ解セシムヘシ獨看ノミナラス會讀輪講ナサシムヘシ更ニ其益有リ尤此時分我邦ノ王代一覽七武讀史餘論等ノ書ヲ看セシムヘシ右既ニ自讀ノ力ヲ得畧其義ヲ會得スル時ニ至ラハ文章軌範八大家ノ讀本唐詩正聲品彙亦先コレヲ熟讀シ乃至經史子集和漢ノ書力ノ及フマ、ニ講讀シ經國ノ道ヲ明ラムヘシ就中法律講武經濟ノ書ハ早ク讀スンハアルヘカラス勿論人各才ノ所長有リ其才アル人ハ經學歷史博覽詩文モ何レニテモ亦專ニモ學フヘシ要明倫經國ノ本意ヲ忘レズ有用無用ノ義ヲ辨ヘテ學フヘキヲ也委シキヲハ學則及規約ニモアリ書冊國讀助聲ノ煩ナルヲ用ユヘカラス詩書等ハ後藤點左傳ハ新刻本文選ナトモ讀ニハ山子訓點ニテ讀ムヘシ古ヘハ八歲ニシテ學ニ入ト雖トモ其人ニヨリ又其例モ有ルヲナレハ八歲以前ノ童子ナリトモ上學シテ讀書スルヲ尤可也マシテ八歲ニ滿ルヲヤマシテ十歲ニ及ヘルモ

而誨之者蓋自孔子始歟孔子以聖德遭季世閔邪道興學政發故論次詩書脩起禮樂以立王者之教也論語云子以四教文行忠信家語云孔子之設教也先之以詩書道之以孝弟夫孔子所傳者堯舜文武之道也已何以知之中庸云仲尼祖述堯舜憲章文武則不以其道而又傳何道堯舜文武之道者非他焉脩身齊家之事而已矣爲邦經國之政而已矣何以知之書記帝堯之德云允恭克讓克明俊德以親九族平章百姓協和萬邦詩稱文王之行云刑于寡妻至于兄弟以御于家邦吾以是知齊家經國之外別無其道也孟子嘗言天下之本在國國之本在家家之本在身又言道在爾事在易人人親其親長其長而天下平亦爲此也則孔子所誨弟子所學亦惟小者脩身齊家之事也大者爲邦經國之政也是亦非惟吾獨意度之也觀於論語且可見矣而此是教法非孔子始立之上自唐虞經夏涉殷下迄周世其所以教人之法蓋亦皆然矣何以知之孟子曰舜使契教以人倫又云學則三代共之皆所以明人倫也可知其教法則非始於孔子也且也是以后世世相承東及我日本之國國學家塾乘學政教道藝者莫不宗師孔子也今此明倫堂猶古之國學也苟志於道游於藝於堂上之士先當知孔子之道即堯舜文武之道也堯舜文武之道即脩身齊家之事也即爲邦經國之政也而後各自文莫博覽古今之書而可與適道也道者人之道也雖則前言往行載在於竹帛者如不允當於人情世態無實用於齊家經國者皆勿取焉抑君有君之道臣有臣之道臣仕於君者也乃其爲道只是爲君焉而已王者之事業則不敢論之也邦君之爲職亦代天工而治國牧民者也其道之要蓋有五慎好惡也尙節儉也正撫御也審賞罰也盡教養也其臣之職分雖大小不同乎畢竟皆供力乃候治國牧民之用者也書云學古入官夫幼時所學壯年所行也故士子之游於堂者夙知臣道之所歸兼知君道之所由而學亦可以弗畔夫上學諸子須先知道所以爲道又夙知臣道兼知君道而能讀有用之書能爲有用之學能爲有用之人是爲明倫堂學則

明倫堂會講規約 十二物

高栗寬喬撰

一講堂位次先貴後賤此貴々之義也非如鄉人無尊卑者一概叙坐以齒也如同輩宜叙齒豈惟堂中在他所交臂而坐路上比肩而行者亦須慎之

一當人讀時當人講時不可濫開口論辨也若夫欲問難者待講讀其一段訖然後問難之言貌亦唯當謹爾

一記曰玉不琢不成器人不學不知道夫學者所以求道也子曰文武之政布在方策易曰君子多識前言往行以畜其德又曰學以聚之問以辨之寬以居之仁以行之范堯夫曰知一字則行一字要須造次顛沛必於是諸葛孔明曰夫學須靜也才須學也非學無以廣才非靜無以成學惰慢則不能研精險躁則不能理性而亡論偷惰者固日退雖才高氣雄者又或求道求之不篤安能得知之猶且不得而何行之望哉則苟爲士者不可不篤其志以多讀書而躬行君子之道也

一書曰不矜細行終累大德此君子之常道也所謂大行不顧細謹是樊會一時之言非聖人之恒也凡自行與待人其道不同待人

成候かよく御座候左もかくして御手あらの御取扱などは被成間敷事に候それはあしく是はよからぬ事をと被仰候て御吞込あき方は御座有間敷候得とも萬に一つも御聞受あしき方様も若し御座候ハ、乍憚其次第御申聞せ可被下候勿論私杯も誠に行届ぬ事にて心得違の事も品々可有御座候へは如何と御召候事はちつとも不苦候間必無御遠慮直さま御申聞せ可被下候偏に奉願候事に御座候以上

右段々申上候事共能々御心得可被下候明倫堂へ御打寄御物學ひ被成候方様にても萬一や御上より御叱りにても御座候位の事杯御座候ては御當人は申に不及爰元の耻辱にも相成誠に御上へ奉對候て申譯も無之奉恐入候儀に御座候たとへ御上より御咎め無之程の事にてもつさらぬ事と人の存候様成事御座候ては是又當所の圭玷に御座候へいさ、かも左様の儀無之人倫の道にろむき候事は決して相成間敷事に御座候此趣どくと御承知被下候は、御承知被成候段御記し可被下候もしや此旨御不得心の方様も御座候は、其趣又御申聞せ可成下候且又御教授被下候方様は勿論其餘御年長せさせられ候方様には是又御承知被置尙又時々御申戒被成下何分御同心御戮力明倫の趣意不違候様に學政御取立被下候様仕度奉願候

文化二年乙丑正月十八日

高栗彈之丞再拜印

明倫堂御會學各位諸君

職名及ヒ俸祿

司成司業誦師助誦師等ニシテ定員ナク他ノ役職ヨリ之ヲ兼ヌル者ハ歲晚ニ少許ノ褒賞ヲ與フルヲ例トス

司成司業ハ金二分程誦師助誦師ハ小菊小杉酒肴料ヲ給スル差等アリ役米扶持米等ノ給與ナシト雖臣家臣ノ二三男ニ於テ學術ニ達スル者ハ貳拾石ヲ給シ中小性ニ席シ明倫堂司業ヲ命セシ例アリ其他往々此類アリ武術モ同例之レアリ學制頒布前ノ學規ハ渾テ左ニ別記ス

坐席ノ如キハ司成ハ給人以上司業ハ中小性以上ヲ以テ之ニ充ツ

職員概數

學校掛^{用人ニテ兼ヌ}教員^{職名前條ニ記ス}小使壹人ヲ置ク

生徒概數

通學生徒凡百名寄宿生無之

束脩謝儀

兒童入學ノ節少許ノ酒肴ヲ供スルノミ^{入學ノ兒童數名一同ニ謝儀ナシ}酒一樽鰯ヲ添フルノ類

學校經費

校費總テ藩費ヲ仰キ支出ハ司業ノ之ヲ主トル書籍ノ如キハ學校掛ヘ照會シ支給ス薪炭油ノ如キハ^{但シ某ヲ給セス}勘定

奉行ヘ斷リ之ヲ受取其他學田金穀ノ貯蓄賦課ノ方法一モ之レナシ

藩主臨校

藩主康哉臨校シテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞シ又生徒ヲ城中ニ召集シ其學業ヲ試ミ別ニ司成司業ヲ召シ講義セシ

ムルコアリ康民代ニ至リテハ勤テ二七ノ日講義會ニ臨校シテ聽聞ス且毎日演武場ニ臨ミ家臣ト共ニ槍劒弓馬砲術ヲ學

ノハ學ニ入ラスンハアルヘカラスサテ彼藝モ稽古シ此技モ修業致サネハナラス又其生質ニヨリ他ノ技業モ得手ナルモアリ其技ヲ專ラニ學フ人モアルヘケレモ十歳比ヨリ二十歳ニ及フ比マテハ又怠タラス是非トモ講義イタスヘシ文オアリ且學文ヲ主ニセント終身心掛シモノモアラハ是又其志ニ從フヘシ

教訓

不^レ受^レ苦中苦^ニ難^レ成^ニ人上人^ニ休^レ言責^ニ難事^ニ都是爲^ニ相親^ニ

會講規約をたに御守の下々へは外に申上候義は無之事に候へども御幼童の方様御心得易き様に俚俗の詞もて又左の趣申上候御承知可被下候

人の一家内にて尊卑の次第は則ち父と母と兄と弟と子にて候是へ父は義母は慈兄は友弟は恭子は孝ある様に教へ申を古へに五教と申候御幼童の方様へ申上候儀に候へは父の義母の慈は御令尊様御令堂様の御事に候へハ先づ差置申候御幼童の方様と申候ても御舍弟様は被成御座候方様も御座候事に候へは兄の教と申候より可申上候友とは兄弟中をよく致し候事に候中をよく致と申候内に兄様の事に候へは朋友の交のこゝく御舍弟様を善き方へ御道ひきおされよく御引立彼是と御世話可被成事勿論に候弟の恭と申は恭とはすなをにしてさからぬ事に候兄様に御またりひ被成候て御いさかひ被成間敷どの事に候子の孝と申候は孝とは子共のろの親々によくつかはるゝ事に候御両親様へいやあつらふりなど不被成候て御大切に御つかわれ被成候へどの事に候は一家の事とは申候へども親々様へ御つかはれ被成候通りに殿様へ御つかはれ被成候へは自ら殿様へ御つかはれ被成候道にも相かなひ申候兄様へ御いさかひあく御したかい被成候通りに年うへ上立候方へ御つかわれ被成候へハ是又自ら年上上立候方へ御つかわれ被成候道に相かき申候御舍弟様を御道ひき御引立被成候通りに年若き者又は目下の方を御引立御道ひき被成候へは又自ら以下下々の者をあはれみつうふ道にも相かなひ申候事に御座候御叔御つれ仲間の御附合の事又御大切の事に候すへて御口上の間違ぬ様になされかりそめにも人のめいわくにありいやる事をなさらず御手前の自まんとしてみそあける事なさらず手前勝手のおそい事をあさらぬ様に可被成事に候弓も見場も宜しく矢はしきもよく候ても矢一本射れはくるひ二本放ては引かへり反りあどいたし候ては役に立す馬も肥へ候てもつや美事に足もはやく候ても往來の人を踏み口取る人にくひ付致し候てはつかわれす候人もろのこゝくにて才能ありてはたらきよき者にても人柄あしく候てはよき事に用られす候此所よく御心得候ておとあしきよき人柄に御なり可被成候右の通り心付候ても思はず心得違にてあしきとも間々ある物に候へはもし左様の節は物和らかにそれはあしくはあしやなと仰られ御心付被

申付ルヲアリ又自費ニテ遊學ヲ願フ者アレハ之ヲ許スノ例アリ 藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルノ制アリ
卒ノ子弟ニハ今般校内ヘ支校ヲ設ケ必ス入學セシム

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ望ミニ任セ入學ヲ許可スト雖モ禁示スルヲナシ多ク家塾寺子屋ニテ學フノ習慣ナリ

校名 明倫學校ト稱ス

校舎所在地 舊小諸藩内宇大手町

沿革要略 舊藩主牧野康民時代ニ至リ 御主意ヲ奉体シ文武ヲ擴張センヲ希望シ明倫堂ヲ廢シ狹隘明治三年舊藩代ノ
城代邸地ヘ學校ヲ移轉シ更ニ文武ノ場ヲ開設ス學校設立ハ政事堂ノ評議ニ起リ二三臣ノ手ニ成ル學派ノ如キハ朱子學
ヲ主張ス

教則

〔讀書次序〕三字經孝經小學四書五經ヲ讀マシメ獨讀ノカヲ得ハ十八史畧元明史畧國史日本外史等ヲ丁寧反覆讀畢テ畧
大義ヲ了解シ會讀輪講セシムヘキ者ニ至テハ史記左傳前後漢書ヲ續マシメ其他力ノ及フマ、經學歷史經國法律ノ書各
其好ム所ニ隨テ講習セシムト雖モ學ノ所ノ有用無用ヲ辨別シテ切磋スヘキ事

〔教授講義〕二ノ日文官七ノ日兵士ヲ集メ經史世道人心ニ補ヒ有ル者ヲ取テ教頭助教講之○輪講 四九ノ日二七ノ夜
句讀師以下及ヒ書生中粗大義ニ通スル者ヲ集メ討論セシメ教頭助教之ヲ判ス○素讀 教頭二名毎朝第八時上堂教授中
校堂ヲ巡視シ教官ノ謬誤ヲ監督ス 助教二名同時上堂上中二等書生ヲ教授ス 句讀師二名同時上堂下等生及五經生ヲ
口授ス 同試補二名同時上堂四書生ヲ口授ス○復讀 教頭二名助教二名句讀師二名同試補二名十二時上堂中等以下溫
習セシムル事○文會 毎月二十五日夜題ヲ命シ文ヲ屬セシム教頭出校○詩會 毎月十日夜韻ヲ探詩ヲ賦セシム教頭出
校○夜會 二七及ヒ十日二十五日ヲ除クノ外入校ノ書生ヲシテ質問並復讀セシム教頭助教一名宛出校

學科學規試驗法及諸則

漢學ヲ專ラニ授ケ和洋學モ兼學セシム 校内ニ演武場ヲ設ケ武揚場ト稱シ少壯ヲシテ劍術ヲ學

ハシム 校内ニ支校ヲ設ケ育英舍ト稱シ卒ノ子弟ヲ入學セシム

兵學弓馬砲術柔術等ノ藝ニ至リテハ皆師ノ門ニ入學

ス但此頃尚ナ廢ス 生徒ニハ文武兩道ヲ兼修セシムト雖モ顯然タル程度ノ比例ナシ然リト雖モ教頭ハ大屬ニ位シ一小隊

ノ長ト列ヲ同シ助教ハ半隊長ト同ク權大屬ニ位スルノ比例アリ 各自ノ意向ニ任セ一科專修ノ爲メ他ヘ遊學スルヲ許

可スト雖モ藩内ニテハ必ス文武ヲ兼修セシム 春秋試驗法明倫堂ニ同シ 生徒賞與ノ法姑ク欠クト雖モ力ノ上達ニ應

フ操練ノ如キハ兩主自ラ中軍ノ主トナリ采鷹ヲ採テ三軍ヲ指揮ス

祭儀 明倫堂發會ノ日ヲ以^{正月十}八日 聖像ヲ掲ケ神酒ヲ供スルノミニテ祭典ノ式ハ姑ク欠ク

學校構造及ヒ建物圖面 地坪二百坪餘建物五十坪餘其圖面ニ至リテハ舉ルヲ能ハス今其校跡ヲ存スルノミニテ麥秀漸々
タリ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 高栗寛喬ノ時袁丁凡四訓ヲ活版ニ附ス今存ス書籍目次藏書種類ニ
至リテハ舉ルヲ能ハス

江戸藩邸學校 學校ノ設アリ藩士ニ命シ兒童ヲ教育スル制アリト雖モ私塾寺子屋ニ同シ今其學制ヲ舉ルヲ能ハス且兒童
十二三歳ニ至レハ名家ヘ入學スル者多シ

學事上ノ諸制度 藩主牧野遠江守康民時代明治三年左ノ諭達布令アリ

大政維新百度皆興ルノ秋ニ膺リ府藩縣各學校ヲ更張シ 皇基ヲ振起セシムルノ御主意ヲ奉体シ今般學校ヲ城代邸地ニ
占メ文武ノ兩道ヲ宣揚シ人材ヲ教育センヲ欲ス闔藩上堂ノ者更ニ此旨ヲ固守シ各義理ヲ研究シ廉耻ヲ明辨シ沿襲ノ
濫俗ヲ洗ヒ敦厚ノ風習ヲ成シ尊卑貴賤ノ分際ヲ亂ルヲナク其職其業ヲ勵ミ永ク敷キ行レテ廢弛セサラン事ヲ要スル也

月 日

爲政堂

覺

一童子八歳ニシテ入學ノ事但生質虛弱或ハ事故アル者ハ其旨父兄ヨリ學監ヘ相達スヘキ事

一書生十五歳以上願ノ上寄宿セシムル事但才學ノ巧拙執心ノ厚薄ニヨリ入寮セシムルヲ不在此限

一二七講義士族聽聞之事但二ノ日諸局役員七ノ日兵士ヲ集メ世道人心ニ補ヒ有ル書ヲ講シ之ヲ聽シム下等書生以上
兩日共聽聞ノヲ

一四九輪講義望ノ者輪講聽聞勝手次第ノ事

一數學筆學覺中ニテ修業被申付候間數學十五歳筆學十一歳ヨリ入學可致事但入學前其筋役員ヘ諸事問合可申事

月 日

爲政堂

加役米引米等ノ獎勵法無之

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ兒童八歳ヨリ必ス藩立學校ヘ入學セシム 材藝アル者ヲ撰ミ文學武術共藩費ヲ以テ修業

素讀、文典輪講○第三等之部　ペレース氏地學講讀、コルタンベル氏地理之輪講○第二等之部　タニール氏萬國史

講讀、ペレース氏理學之輪講○第一等之部　各國史質問、作文　右普通學卒業ノ後檢査ヲナシ而シテ專門學科ニ入

ラシム但二十歳以上ノ輩願ニ依テハ五等卒業シ文法ノ大意ヲ知り爾後直ニ各々志ス所ノ學科ヲ研究セシム

教授法　講義　三八ノ日一字ヨリ三字迄四九ノ日二字ヨリ三字迄○素讀　毎日八字ヨリ十字迄三字ヨリ五字迄

寄宿舍禁令　都テ支那學禁則ニ同シ

〔手跡教授方法〕　朝第十時ヨリ教授同試補出校士族童蒙生ヘ筆意ヲ授ク　午後第二時ヨリ同斷出校卒童蒙生ヘ同斷

〔算術教授方法〕但シ　午後第二時ヨリ教授同試補出校生徒ノ階級ニ應シ數理ヲ授ク

職名及俸祿　總括正七位助教、學監正八位、句讀師正九位、主簿從九位、各役料ヲ給スルヲ差等アリ

職員概數　總括一名少參事、教頭二名大屬助教四名少屬學監一名少屬教授以下定員ナシ小使一名但家族

生徒概數　通學生徒凡二百名寄宿生凡三十名寄宿生ハ飯米鹽醬薪炭油總テ藩費ヲ以テ給與ス

東脩謝儀　東脩謝儀共無之

學校經費　一周年ノ學費金三千圓餘ヲ給與ス但藩費ニテ他ヘ入學申付シ者ノ手當教員役料トモ

藩主臨校　藩主牧野康民二七ノ講義會ニ必ス臨校シテ生徒ト共ニ聽聞ス

祭儀　聖像幅ヲ掲ケ神酒饌餅ヲ供ヘ炷香祭文ヲ捧讀スルノ畧式アリ藩主臨校參事初諸士陪席ス

學校構造及ヒ建物圖面　平家木造城代邸ノ儘用之地坪七百坪餘建物二百坪餘圖面ノ如キハ今舉クルヲ能ハス

學校ニテ出板翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數　出板翻刻等ノ書籍一モナシ藏書目次廢藩ト共ニ散失舉ルヲ能ハス

舊岩村田藩

學制

學事上ノ諸制度　藩主ノ布令諭達及舊記ノ類悉皆廢藩ノ節散逸ニ付今古老ノ口碑ニ據ル而已

士族卒ノ子弟教育方法　士族卒ノ子弟ハ都テ同一ニ入學セシメ修業ヲ許可セシト雖モ藩費ヲ以テ游學セシメ亦私費ヲ以

テ游學セシ者無之且講義ハ藩士ヲシテ生徒ト共ニ聽聞セシムルノ制ナリ

平民ノ子弟教育方法　農民等ハ藩學校ヘ入學スルヲ敢テ禁止セサレ共皆家塾寺子屋ニテ脩業セシナリ

家塾寺子屋設置ノ制度　何人タリモ開設ハ自由タリ制ナシ

シ寄宿生ヲ許ス總テ
藩費 入學ノ節教員宅ヘ廻ルヲ廢ス
學校諸則

〔童蒙生ヘ示ス〕 童蒙生黌門ニ入り禮讓恭敬須臾モ怠ルヘカラサル事 書生上黌ノ時節ヲ失ハス參着スヘキ事 書生參堂ノ節遺失ナク各名牘ヲ掲ケ出席ヲ表スヘキ事 黌堂書生ノ位次ハ各階級アリ長幼ノ齒ヒ以テ列序シ等ヲ躐ユヘカラサル事 書生讀書中教師ノ命ヲ守リ怠惰ナク勉勵スヘキ事(學監)

〔節目〕 文武ハ兩輪ノ如シ偏廢スヘカラス學者必ス服膺切磋スヘキ事 童蒙八歳ニ至ル者ハ必ス入黌致スヘキ事但生質羸弱ニシテ黌ニ入カタキ者ハ其旨父兄ヨリ學監ヘ相達スヘキ事 書生十五歳以上願ノ上寄宿修業ヲ許ス事但才學ノ巧拙及執心ノ厚薄ニヨリ入寮セシムルヲ不在此限 書生十五歳ニ滿ルト雖モ獨看ノ力無之者ハ寄宿ヲ許サル事 十一歳ヨリ十五歳迄ハ必ス習字シ十五歳ニ至ラハ數學修業致スヘキ事

〔寄宿寮規則〕 舍長 書生ヲ統括シ及ヒ寮中庶務ヲ辦理スルヲ掌トル○寄宿生 舍長ノ旨ヲ受ケ二名宛輪番月算ヲ勘合スヘシ

禁令 寮中飲酒割烹嚴ニ禁スヘキ事 私事ヲ挾ミ漫ニ口論スヘカラサル事 資給ノ炭油濫用ヲ禁スヘキ事 寮中嚴ニ警火ノ事 一六放學ノ事但外出スト雖モ歸寮ニ更限ノ事

〔職制〕 教頭 經史ヲ講明シ人材ヲ陶冶シ兼テ校政ヲ知ル○助教 教頭ヲ補助ス職掌總テ上ニ同シ○句讀師 句讀ヲ授ルヲ主ル○同試補 職掌上ニ同シ○學監 教官及ヒ書生ノ勤惰ヲ監督シ兼テ校政ヲ主理スルヲ主ル○主簿 黌ノ庶務ヲ辦理シ兼テ書生ノ名簿及ヒ書籍ヲ管スルヲ主ル

〔育英舍職制〕 教授 教頭助教ノ指揮ヲ奉シ卒ノ子弟ヲ教育スルヲ主ル○同試補 教授ヲ補助ス職掌總テ上ニ同シ

○句讀師 句讀ヲ授クルヲ主ル

同教授方法 講義 八ノ日書生中粗大義ニ通スル者ヲ集メ經史中世道人心ニ補ヒ有ルモノヲ取テ教授同試補講之○素讀 本校ニ同シ○復讀 同上

〔育英舍小學生ヘ示ス〕 學問之道孝弟忠信禮義廉耻ヲ以テ本ト爲ス第一教師ヲ尊崇シ同輩ヘ對シ恭敬辭讓失ハサル様心得可申事 小學生讀書中教師ノ命ヲ奉シ懈怠ナク切磋スヘキ事

〔洋學教場規則〕

初等之部 會話篇素讀、發音、綴字、習字○第五等之部 ノエル氏文典素讀○第四等之部 コルタンベル氏地理之

ノ事ニ候士タル者學ハサレハ道ヲ知ラス道ヲ知ラサレハ庶人ニ劣レリ然レ巨多ノ技藝一時ニ學ヒ得サルヨリ因循ニ陷ルモアラシ故ニ爾今文ハ論語壹部ヲ讀ミ得サル者武ハ炮術操練ヲ爲サ、ル者ハ取調ノ上其身分ニ應シ減祿被仰付候義モ可有之候間此旨無洩御家中へ觸示可有之事但文ハ論語壹部ヲ修メ然レテ他科ニ及ヒ武ハ炮術ヲ學ヒ傍ラ劔槍ヲ學フ勿論ノ事ニ候

文久三年亥十月

右論達セシ後ハ論語ヲ會讀シ論語壹部ヲ讀ミ得サル者ハ詩文章ヲ事トスルヲ許サス武ハ炮術操練ヲナサシメ文武トモ事故無クシテ欠席スル者ハ罷責減祿セシメ權貴ト雖モ假サス故ニ一時文武共振興セリ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校へ必ス入學スルヲ例トス然レモ各自ノ志願ニ因テ家塾等ニテ脩學スルヲ許可セリ藩費ヲ以テ他國へ遊學セシメシコナシ私費遊學スルヲハ許可セリ藩士ト生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルヲ恒トス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ脩學セシムル而已ナラス藩立學校へ入學スルヲ許可スル旨一般ニ諭達セリ藩立學校へ入學スルモ農事ニ從事スルヲ禁止セシコナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルモノハ奉行郡宰里正等ノ許可ヲ受ケシメス何人タリモ自由ニ開設スルヲ得セシメタリ

學校

校名 初メ教諭舍ト稱シ後ニ立成館ト改稱セリ

校舎所在地 須坂町字中町

沿革要略 天明年間創立シ専ラ朱子學ヲ和解シ俗人ニ了解シ易キヲ旨トシ教諭舍ト稱ス然シテ農隙ノ際年中二回教官領内ヲ巡回シ衆民ニ聽聞セシメタリ其後文化年間東京龜田興ノ門人菊地行藏ナル者ヲ聘シ儒官トナシ始テ學校ノ牀裁ヲナシ從來ノ學風ヲ變シテ經史等ヲ授クルニ至リ立成館ト改稱ス爾後經書ハ古注ニ據リ傍ラ集註ニ及フ(學士ノ小傳等詳記スヘキナシ)

教則

教科用書 四經、五經、文選、孝經、漢書、左傳、史記、唐宋八家文、皇朝史略、政記、日本外史ノ類
授業ノ順序 初ニ論語ヲ授ケ順序教授スト雖モ論語ノ意義梗概ヲ了得セサル者ニハ歴史ヲ授クルヲ許サス

學校

校名 達道館

校舍所在地 岩村田町舊藩字上ノ城

沿革要略 學校ハ元治元甲子年設立以還藩主ハ永年ノ在府ニテ當所住居士卒ノ子弟僅ニ修學ス然ルニ維新爾後士族一般當ニ移住ス次テ藩士ハ過半關東及越後表ヘ出兵ノ事件ニ付學事等ハ暫ク中絶ス後藩治職制以來稍學事ノ方法整頓ノ際廢藩トナル

教則 教科ハ皇學漢學隔日授業ノ規則ニシテ日々朝五時ヨリ九ツ時迄教授ス且ツ月々六度ツ、生徒ニ講義ヲ聽聞セシメ

又生徒ニ輪講ヲ爲サシム等ナリ

學科學規試驗法及諸則 皇漢兩學弓馬劍槍砲術兵學等ノ各科ニテ生徒ニハ文武ノ兩道ヲ兼脩セシメ一科專脩ヲ許スヲ稀

ニシテ且生徒學習ノ期限等ノ則ナシ

職員及役米 督學一員少參事之ヲ兼ス 役米十一石〇皇國助教二員 漢學助教三員 役米五石五斗身分權少屬ニ准ス〇授讀生五

員 役米四石二斗〇使下一員 役金拾圓

生徒概數 藩主ヨリ諭達等モアリテ明治四五年ノ頃生徒概數九十名内外タリ外通學生寄宿ノ生ナシ

束脩謝儀 無之

學校經費 都テ藩費ニシテ藩士ニ賦課スルコナク金額増減等ハ不詳

藩主臨校 藩主會臨校アリテ生徒上達ノ者ニハ褒賞アリテ一般ノ生徒ヲ獎勵セシナリ

舊須坂藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ヨリ士タル者必ス學フヘキノ布令獎勵ノ諭達等屢々有リト雖其文章今ニ至リテ詳ナラス十三代領主內藏頭直虎ノ時ニ左ノ諭達アリ

御目付ヘ

文武兩道ハ一モ闕ク可ラサル事ハ從前ヨリ度々被仰出候趣モ有之候處近來往々遊惰ニ流レ候者有之哉ニ相聞以之外

江戸藩邸内ノ學校ヲ五教館ト名ク諸規則總テ前ニ同シト雖モ舊關宿藩儒官龜田梓ヲ聘シ毎月三回講義セシメ龜田梓死後其男龜田保ヲ聘スルヲ異ナリトスル而已

舊前橋藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主關藩士ヘ文武獎勵ノ布令諭達等歷代之ナキハナシ枚舉ニ暇アラヌ今創立及ヒ改革等ニ係リシ布令ナ左ニ掲ケ概況ヲ示ス

松平齊典ノ代博諭堂創立ノ節ノ布令

兼テ被仰聞置候講學所之儀假也御取建普請出來ニ付來月十二日ヨリ相始候依之一統罷出相學候様可被致候御場所柄之儀而々別テ禮讓厚相心掛猥リ成義無之様可被致候委細之儀ハ別張ノ通可被相心得候

(別帳)

一當時素讀ノ儀ハ不致候事

一講學所役々左ノ通被仰付候事 學監兩員 教授三員

一講釋輪講詩文會左ノ通可被罷出候事

一番外以上毎月講釋六度ノ事 大學 二ノ日五ツ時揃 小學 七ノ日五ツ時揃

一與力大役人已下末々迄毎月講釋三度ノ事 論語 三ノ日五ツ時揃

一輪講番外以上ヨリ與力大役人已下末々迄毎月三度ノ事但望ノ面々教授ヘ申込人數相極候ウヘ相始候事 孟子 三ノ日九ツ時揃

一會讀右同斷之事但同斷 左傳 七ノ日九ツ半時揃

一詩文會右同斷隔月五日五ツ半時ヨリ八ツ半時迄尤詩文會打手替之事但宿題之義ハ稽古相始候上溜席ヘ張札致候事 一休日左之通ニ有之候事 正月廿日前 四月十七日 十一月十七日 五節句 盆中 御在城年 亥猪 十二月十日後

一講釋輪講會讀詩文會之節學監壹人ツ、出席有之ニ付不依何事講學所内之儀ハ學監ヘ問合學事之儀ハ教授ヘ問合候様可被致事

一右同斷之節役方目付壹人ツ、罷出末々迄諸事見計可申事

時間 每日午前十時ヨリ十二時迄素讀午後二時ヨリ四時迄講義會讀詩文會等ヲナセリ

學科學規試驗法及ヒ諸則

學科學規 皇漢學ノミヲ教授シ生徒ニハ文武兩道ヲ兼修セシム志願ニ依リテハ一科ヲ專修スルヲ許可セリ 生徒學

習ノ期限ハ年齡七歳ニ至リ入學シ四書五經ノ素讀ヲ了ルヲ竣テ論語講義ヲ授ケ順次其力ニ應シテ歷史ヲ授ケ

試驗 春秋ニ藩主學校ニ臨ミ讀了セシ書中ノ義ヲ講セシメ優等ノ者ハ賞品ヲ授與ス其賞品一定ノ法ナシ

生徒訓條 學問ノ要博覽ニ在ラス和魂漢才ヲ磨成シ脩身齊家ヲ旨トスル事 言語動止ヲ慎ミ倨傲懶惰ノ風アル可カラ

サル事 討論切瑳ハ文義ヲ講明スルニ止リ妄リニ私論ヲ主張ス可ラサル事 校内ノ坐席ハ學問ノ優劣ニ據リ普通ノ

席順ヲ用ササル事 總テ校内ノ進退ハ教官ノ指揮ニ從フヘキ事

罰則 一定ノ法ナシ怠惰甚シキモノハ藩士ハ家祿ノ内ヲ減シ又ハ罷責ヲ加フ藩士ニ非ルモノハ罷責ニ止マル

入學許可ヲ得シ者 禮服着用師範家ヘ回禮スル等制規ナシ

職名及俸祿 維新前教授役料粗三拾俵^{五斗}座席身分取扱等目付役ニ準ス助教役料粗二拾俵^{五斗}座席身分徒士以上ノ取扱

維新後教授役料玄米拾三石四斗座席身分取扱大屬ニ準ス大助教役料玄米六石六斗少屬ニ準ス小助教役料玄米四石史生

ニ準ス

職員概數 維新前教授一名、助教三名、給仕二名 維新後教授一名、大助教一名、少助教四名、給仕二名

生徒概數 維新前通學生徒五拾名ニ上ラス維新後ハ七拾名乃至百名許寄宿等ノ設ケナシ

束脩謝儀 總テ無シ

學校經費 學費一定セス學事ノ張弛ニヨリ増減セリ學田等無之學費ヲ藩士ニ賦課スル類ナシ

藩主臨校 十三代内藏頭直虎ニ至リテ自ラ率先シテ臨校シ士族卒ニ至ルマテ君前ニ於テ講義聽聞シ或ハ書院ニ召集セシ

メ會讀輪講詩文會ヲナセリ

祭儀 春秋ニ聖像ヲ掲ケテ釋奠ヲ執行シ藩主臨校シ教官論語學而爲政鄉黨ノ篇ノ中二三章ヲ講讀シ藩主以下順次拜禮畢

テ神酒ヲ開クヲ例トス

學校構造及ヒ建物圖面 地坪六十八坪 建坪平家造三十八坪

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 學校ニテ出版翻刻セシ書籍無之藏書ハ部數不詳大半藩主自用ノモ

ノナ以テ生徒ニ貸與セリ

文政十年丁亥七月

爾後文政十二己丑正月ニ至リ素讀稽古相始メ助讀十二員副讀四員ヲ置句讀ヲ授ケ特ニ學監ヲ置クヲ停メ監察總掛リトシ學中ニ掌禮八員主事二員ヲ置教授ニ稟議シ庶事ヲ經理セシム後掌禮ヲ世話役ト改稱ス其後又助質問四員副質問四員ヲ置教授助教ヲ助ケ訓義ヲ生徒ニ授クルトナレリ

此際ノ布令簿記存セス今其詳ヲ知ルニ由ナシ概畧ヲ叙スル耳

松平直克ノ代學制改革ノ節ノ布令

此度講學所御變革ニ付席高始メ左之通被仰出候事

一講學所銘以來博諭堂ト御改相成候事

一助教席狙擊隊差圖役格百石以下勤中百石高被仰付候事但無息ニ候得ハ御擬作拾人扶持被下置候事

一助教并席御醫師次貳拾石高ニ被仰付候事

一助講席御番拔被仰付持高ニテ相勤候事但無息ニ候得ハ御擬行拾人扶持被下置候尤狙擊隊已上廣ク被仰付已下ニテモ人材御擢用被成候事

一助讀、但與力以上廣ク被仰付無息ニ候得ハ御雇可被仰付候事

一世話役御廢助講助讀之内ニテ世話役之場兼相勤候事

一副講、但應擊隊次席ニ被仰付候砲隊ニ候得ハ勤中遊擊隊へ御取立尤無息ニ候得者被召出候事

一副讀、但遊擊隊ヨリ砲隊ニ至ル無息ニ候得ハ被召出候事

一書記役、但遊擊隊並ヨリ砲隊並ニ至ル無息ニ候得ハ被召出候事

一書記手傳、但銃隊勤銃隊已下ニ候得ハ勤中銃隊並ニ取立候事

一教授之儀ハ退テ被仰付候事

此時國家多事教授上京中故暫其儘ニ置歸邑ノ後判事格百五拾石高トス

一助教始役々御會尺之儀ハ是迄ノ渡モノ丸渡相成候事

一此度書生寮被差置本書生拾人被仰付候事但月俸二人扶持ツ、被下置候尤外ニ塩噌トシテ三百疋ツ、被下置候事

一助讀ノ内ヨリ被仰付候得ハ御擬作之外ニ塩噌トシテ三百疋ツ、被下置候事

一書生寮寄宿致度望ノ向ハ教官願ニテ拾五人迄被仰付候事但壹人扶持ニ込候得ハ塩噌トシテ二百疋ツ、被下置候事

一右ニ付書生寮規則別帳之通被仰出候事

一此度學制御變革被仰出候ニ付テハ拾二歳ヨリ三拾歳迄博諭堂へ罷出相學候様可被致候尤病氣等ニテ當時難罷出向

一講學所稽古之儀四十歲以下十五歲以上二男三男ニ至ル迄一統罷出相學候様可被致事

一御役付并師範之面々或ハ家業有之輩ハ勝手次第罷出候様可被致事

一聽聞座席之儀ハ夫々張札致置候事

一溜席之儀ハ大方ハ相分候得共間狭ニ付向ニ寄他席打混候儀モ可有之事

一講學所へ稽古罷出候面々左ノ通願書相認學監へ可被差出候尤御認ノ儀ハ頭支配へ申達候ニ付左様可被相心得候事
但御役付ヲ始其外四十歲已上勝手次第罷出候面々迎モ右同斷之事

何之誰

美濃紙四ツ

切上包半紙

名前認

右講學所稽古罷出度奉願候以

上

年月日

一右御諾之上ハ教授ノ面々へ爲挨拶可罷越事但着服右ニ准シ候事

一與力大役人已下末々迄右同様願書役方目付へ可被差出尤諾ノ儀ハ頭支配へ申聞候ニ付左様可相心得事但願書名前
へ格式肩書可致事

一右諾ノ上ハ教授之向々へ爲挨拶可罷越事但着服右ニ准シ候事

一講學所稽古罷出候面々ノ内輪講會讀詩文會等ニモ罷出度候ハ、其段教授へ申込罷出候様可被致事

一講學所稽古始テ罷出候節ハ麻上下可爲着用平日ハ平服ニテ可被罷出事但新タノ書承リ候節ハ都テ初テノ日計繼肩
衣着用可被致尤輪講會讀迎モ同斷之事

一詩文會之儀モ初會日之儀ハ繼肩衣着用後シテ相加リ候共初テノ日ハ同斷之事

一席々へ出勤帳差出置候ニ付銘々名前可被相記事

一坊主人少ニ付諸事手廻リ兼可申候間一統勘辨可有之事

一事新タノ儀ニ付右々條之外相洩候儀ハ追々可申達候間左様可被相心得事

今般講學所御變革被仰出候通學問之儀ハ御代々様以深思召追々委細被仰出候通修己治人之道ヲ講究致候儀ニテ士タル者ノ家ニ居テ父兄ニ事ヘ子弟ヲ教官ニ臨其職ヲ盡シ事變ニ逢節義ヲ全クシ都テ治亂窮達ノ際ニ所置致候義ヲ包括スル大道ニ候得ハ才智有之者ハ猶更誰モ彼モ相學候上ハ其人丈ケノ識見相長シ事物ニ接シ義理至當ノ所置モ相立士タル者最大切要之事ニ候間一統無間斷相嗜士名不墮候様可被致候右ニ付教導方一際入念候様教官へ被仰聞置候ニ付別紙規則ノ趣堅相守出精可被致候自然御主意等閑ニ相心得相怠リ候者於有之ハ頭支配ハ勿論掛リ役々ヨリ督責ニ及ヒ猶不相用向ハ可被及御沙汰候此段可申聞旨被仰出候

明治元年戊辰十二月

藩知事松平直方ノ時文武學校設置セシ布令

文武學校之儀先般相達候通御規則被仰出候迄藩限り當分別表之通ニ被當置候條爲心得相達候事(別表ハ職制ノ條ニ出ス)

庚午十二月

政廳

(別紙)

學校之儀今般御告示之通 天朝御規則被仰出候迄ハ是迄之姿ニテ來正月ヨリ被差立候然ル所永々御差置相成候所

ヨリ是迄被差立置候御法モ流レ勝相成居候ニ付猶又左之通可被相心得候

一士族以上十二歳ヨリ三十歳迄ノ向ハ不殘博諭堂へ出勤可被相學事

一出勤之向ハ學官ヲ以テ教授ヘ願出入門可致事

一入門御定年ニ相成病身其外ニテ入門難相成向ハ其旨委細ニ相認メ其筋へ可被届出事

一幼年之者居宅之都合其外ニテ博諭堂迄難罷出相對頼ニテ宅稽古致候向ハ博諭堂へ入門之上其旨委細學校之掛へ可

被届出候事

一右ノ外委細ノ儀ハ學校掛へ可被承合事

一來春入門ノ向ハ正月十日迄ニ學官ヲ以入門可被願出候事

一來年入門御定年ニ相成候向ハ正月廿日迄ニ其筋へ可被届出事但病身其外ニテ入門難相成向ハ同日迄ニ可被届出事

右ノ趣相達候事

明治四年辛未二月知事直方筆算學合併設置ノ布令

ハ其旨筋へ御歎申出差圖可被受事

一御役相勤候面々ニテモ相成丈ケ心掛御用隙之節ハ罷出候様可被致候事

一拾貳歳ヨリ博喻堂へ罷出可相學儀ニ候得共中ニハ勝手ニ寄最寄ニテ稽古致候向ハ必シモ罷出候テモ雖方へ相頼
稽古候旨其筋へ届出候得ハ拾四歳迄ハ同所へ罷出候共不苦候事

一於御城ニ朔望經書講釋當時御疊置相成居候所此度御變革被仰出候ニ付テハ以前ノ通被差立御目見以上不殘日割ヲ
以聽聞被仰付候事但席ニ日割相立名前書來正月迄ニ頭支配ヨリ可被差出事

一博喻堂へ稽古新タニ罷出候節ハ是迄相願候儀ニ有之所以後教官へ申込承知之上挨拶罷越候上可被罷出候尤右之趣
其筋へ届出候様可被致事

一稽古之儀ハ日々朝六ツ半時ヨリ相始晝九ツ時限ニ候事但質問ノ儀ハ右刻限後相殘候分ハ教官ノ内ニテ一兩人相殘
リ稽古爲致候事

一稽古人溜ノ儀當時博喻堂御間狹ニ付席々ノ仕分ナクト圓メニ致候儀モ可有之候間左様可被相心得事

一此度學問ノ儀一統相學候様被仰付ニ付テハ頭支配ハ勿論頭取上ニ於テモ勸勵方厚心ヲ用ヒ候様可被致事

一講學所勤ノ面々は迄同所勤御頼ノ筋ハ表ヨリ相渡役名ノ儀ハ教授ヨリ申傳之儀ニ有之所以後表筋ヨリ被仰付候事

(別帳)書生寮規則

一本書生寄宿生共一月三日ツ、休日之事

一父兄ノ病氣或ハ無據用向有之者其趣意舍長へ願出候得ハ夫々故障之次第ニ寄暇日日限多少有之事

一無據用足シ或ハ書籍筆墨辨之爲メ他ニ出候儀ハ一時限可爲事

一都テ出入共舍長へ可届出事

一兩書生都テ寮中ノ儀ハ舍長ノ差圖ヲ請へシ大事ハ教授へ申出可受差圖事

一學業ヲ怠リ又ハ過失有之者ハ舍長及教授之異見ヲ受シメ次第ニ寄閉居或ハ退寮被仰付候儀モ可有之事

一兩書生三ケ年ヲ限リ其餘ハ本書生ハ改テ被命候事モ可有之寄宿生ハ銘々望ニ寄新タニ年限ヲ相立願出可申事

一其身病氣故障等有之致歸宅候節ハ五十日ヲ限可申其餘ニ至リ候得ハ退寮可致又候入寮致度向ハ新タニ可願出事

一中元前十三日ヨリ十六日迄歲暮廿日ヨリ正月七日迄休寮勝手次第之事

(別紙)

必ス解義ノ訓讀ヲ聽シム後正文ノ通ニ改ム又入學
セサル者ハ必ス其由ヲ頭支配ヘ届出シムルヲトス卒及下士等モ固ヨリ就學スルヲ本意トスレモ卑位微祿勢嚴督シ難ヲ以稍其法ヲ
寬ニセリ

師儒家塾ニ就學スルハ固ヨリ許可スト雖藩學ニハ必入ラサルヲ得ス然レモ眞ニ學ニ志ス者ハ家塾ニ就學スルヲ本旨
トセリ

生徒俊秀ノ者ニハ藩主特命ヲ以テ廣ク天下ノ良師ニ從學セシム學費ハ十口五口乃至二口ニ添ル又生徒ノ志願ニ依リ游學ヲ許
可セリ學費ハ二口ニ添ルニ金十圓業成ニ及テ教官又ハ他ノ職務ニ任セシム諸武技亦之ニ准ス其他諸士醫師等其技ヲ

毎月朔望及廿八日江戸邸ハ殿中ニ於テ師儒ニ命シ經ヲ講セシメ上士ヲシテ正服肩ヲ着ケ聽聞セシム時ニ藩主自ラ臨テ之
ヲ聽ケリ又藩學ニ於テ毎月三次定期例習學時間ノ外師儒ノ說經アリ闔藩ノ士卒ニ普ク之ヲ聽シム

平民ノ子弟教育ノ方法 平民ノ子弟ハ藩學ニ入ルヲ禁止スルノ制無シト雖モ勢士人ト伍シ難ヲ以テ就學ノ者絶テ無又官
ヨリ教導セシヲ無ク各自ノ意ニ任セ家塾篤志ノ者ハ藩儒ノ家塾ニ入學スル者アリト雖モ寺子屋等ニテ普通ノ科業即チ習字ヲ主ト

シ傍ラ庭訓往來實語教等ヲ授讀スルニ止リ學庸論孟ノ素讀ニ及フ者モ甚タ希トス蓋當時天下一般ノ習俗ナリ
家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等ヲ設置スルヲ別ニ制法ナク各自ノ自由ニ任セリ固ヨリ故障スル等ノ事ハナシ但藩

儒ニテ家塾ヲ開設スルハ自由タリト雖モ他藩ノ士人ヲ差置ニハ其者ノ姓名族籍等其筋ヘ届出ル者トス

學校

校名 博喻堂ト稱ス江戶邸學其他支邑トモ皆同稱ナリ

校舍所在地 上野國東群馬郡前橋舊城内ニシテ今曲輪町ト稱ス即騷橋小學校ノ所在地ナリ前橋城後轉ノ前ハ武州入間郡川越城西宮ノ下ニアリ

沿革要略 初文政十年丁亥藩主從四位少將松平齊典博喻堂ヲ武州川越ニ創立シ闔藩ノ士卒ヲシテ悉ク入學セシメ大ニ文教

ヲ振起シ義方ヲ知ラシム之ヲ嚆矢トス後齊典歿シ世子典則幼ニシテ封ヲ襲ヒ且目疾アルヲ以テ庶政皆老臣ニ出ツ是ニ

於テ文教武備靡々振ハス嘉永七年甲寅德川齊昭ノ第八子直候ヲ養子トシ致仕ス直候又齊典ノ志ヲ繼大ニ文教ヲ盛ニシ一

時駭々乎禮文ニ趨ケリ其後慶應年間少將直克ノ代ニ至リ前橋城ヲ再築シ即校舍ヲ城内ニ移轉シ其教導方法悉ク舊慣ニ

仍レリ明治元年戊辰十二月ニ至リ大ニ學制ヲ改革シ其規模ヲ大ニシ士大夫ヲシテ學問ノ有用タルヲ知シム四年辛未二月藩

知事直方又劍法筆算及洋學劍法洋學ハ馬場使監ナルヲ以テ當分覺外ニヲ合併シ少參事ヲ以テ悉ク之ヲ管理ス後學制頒布ニ依リ

廢ス（文政中藩學創立ノ前ハ士大夫篤志ノ者ハ儒臣ノ家塾ニ就學スルニ止リ藩士多クハ武ヲ尙ヒ文ヲ卑ミ自ラ赴々タ

今般算筆學所新規御取立博喻堂素讀稽古ト連續被命候諸稽古ノ儀ハ知事公御先代ヨリ厚御世話被成下候所近年用途御逼迫ノ故度々御疊置相成不心得時宜トハ乍申御不本意ノ事ニ候御一新已後ハ別テ不脩業ニテハ今日職務ノ御用ニモ難差立世態ト相成銘々奮發磨勵ノ時節ニ候得ハ一際厚御引立可相成御本意ノ所當年ノ儀ハ昨年ノ御窮迫ニ彌増候御時宜ニテ從前ノ仕來ヲ以申候得ハ又々御疊置相成候外無之處當節柄ノ義ハ容易ニ右様ノ義モ難相成其上此節柄筆算ノ義ハ銘々職務日用ノ儀ニテ不限誰彼ニ御用相勤候心掛ノ者ハ幼年ヨリ習學不致候半テハ不相成事共ニ候處從前ノ上ヘ筆算兩學新規被差立候ハ不一形御無理之事ニテ御入用何方多數相成當分御出途ノ御目的無之必至ト御差支ノ事ニ候就テハ稽古ノ儀ハ固ヨリ報國ノ基ニモ有之下々ニ取テハ專銘々子孫迄ノ身ノ爲ニモ候得ハ於一統モ難澁ノ中ナカラ御藩廳用度ノ難破爲及場モ致恐察下ヨリ與荷ヲ以足シ合上下相持ト申様成儀ニテ業相立候外被成方無之候依之士族卒共別紙割合ノ通與荷法被差立候事但追テ學校御規則被仰出候上ハ變則ノ儀モ可有之事

(別紙)稽古與荷定則

博喻堂、素讀所、兵學館、練兵場、新隊稽古場、算學所、筆學所、兵學館練兵場ハ管理外ト雖與荷法連帶スルヲ以テ此ニ記載ス

右士族與荷每家一ケ年ニ付米六升但稽古人出勤有無多少ニ不拘
右卒與荷每家一ケ年ニ付米一升但稽古人出勤無之家ハ差出ニ不及

右大略見込ヲ以相定候條業付ノ上増減可有之事

學業上進ノ者獎勵方法大略左之如シ 凡學業上進ノ者加役米引米等ノ徵課ヲ免除セシ制法ハナシ但其學業拔羣ニシテ

往々師儒ノ任ニ勝ユルノ望アル者ハ或ハ醫師ニシテ改メ儒家世業トナシ教授ニ登セ又ハ諸士ノ子弟ヲシテ費用ヲ給

シ天下ノ名儒ニ從學セシメ業成ニ及テ次三男等ハ別房ト爲シ十五口ノ餼ヲ與ヘ師儒トナシ或ハ更ニ游學セシメスシ

テ直チニ十五口餼ヲ與ヘ別房トシ又ハ五人口ノ餼ヲ與ヘ教官トナシ後別房トナシ更ニ拾五口ノ餼ヲ與フ等ノ事アリ

武技モ此ニ准ス 其他文武ノ藝術特別勵精ノ者ニハ藩主親ク面前ニ召シ懇篤賞美シ尙勵精セシメ上下時服等ヲ賜フヲ例トス

ノ賞ハ親ク賞美スルニ止リ再度ハ麻上下三度ハ絹上下四度ハ時服ヲ賜フヲ恒例トス文武並勳スト雖斯道ヲ重スル旨趣ニテ尤意注

キテ賞優セリ且勵精ノ者多クハ上中士ニアリ下士卒ニ至テハ自ラ少シ而卒ニ至テハ假令勵精者アルモ藩主親ク賞セシ其事ヲ頭支配ニ委ス

文武兼修ヲ以テ士ヲ造スノ旨趣ニテ門地ノ者ヲ以要職ニ充ルノ敝ヲ免ル、能ハスト雖モ大抵文學ニ於テハ小學四子

ノ大意ニ通シ武技一二流免許ニ至行實方正ノ者ニアラサレハ清要ノ職ニ登チ得ス之ヲ以テ專ラ獎勵ノ方略トナセリ
士族卒ノ子弟教育方法 凡士族ハ藩立學校ニハ八歳ヨリ三十歳迄ハ必ス入學セシメシナリ藩學創立ノ時ハ差向藩士ニ大義ヲ知ラシムルノ旨趣ニテ十五歳ヨリ四十歳迄

其大意師儒に命して撰み定めさせたる講學所學約讀書次第に見へたり必ず異説を唱へ正學を妨る事有へからず 右之條々固く守り可相學者也

〔條約〕 學所以明道也何謂道倫理是也世有外之爲學者是謂學之不正學之不正何由明道々々之不明何由正風俗以就人才耶吾川越藩之爲正學矣今公申命使專主程朱學不敢雜用異學則教者何敢獲不遵奉盛意哉 講堂扁朱子白鹿洞書院揭示所以爲學則也 凡學于此者必先敬受之 會業傳注必依次第中所載不得雜用異説 學業一聽師授不得躐等 講學以經書爲主歷史次之諸子非識見稍明之後不得妄讀詩賦文章好之則爲之不好則絕意而不爲亦不爲欠事 師弟授受當謹守禮法不可相好狎相放慢 貴賤長幼皆相接以禮讓不可相侵凌 師友間難之際宜虛心平氣以明其義不可躁妄求勝 學術不如約者師友相規戒至再三猶不悛者則退之不問貴賤與長幼

〔讀書次第〕 讀書固欲其博也然學者徒博之務則汎濫紛錯亦何所歸宿哉朱子曰讀書之法莫貴於循序而致精而致精之本則又在於居敬而持志故今略爲之次第俾初學之士盈乎此而進乎彼正路有所依循旁徑無由而入焉如夫居敬而持志則存乎學者自勉云

句讀書目 小學或先授以孝經白鹿洞書院揭 四書 五經五經已卒業之後或授近思錄或授左傳文選策求等 右幼學授讀之序法當如此也然文辭有險易資才

不同科故先授以四書而後授小學及註中所學先授或授之諸書其授與否則在乎教者之操縱矣 講解書目 小學本注○詩爲幼 四書章句集註○大 近思錄正文 詩經集傳 書經集傳 易經本義○或程傳 孝經刊誤 太極圖說 通書

西銘 白鹿洞書院揭示 文公家禮

右近思錄以上宜循環而口焉其詩經以下則或斷或續而可

輪講書目 講解書目已見于上 春秋胡傳 春秋左傳杜註○或參用 禮記集說 易學啓蒙 蒙求

會讀書目 講解書目此略之 春秋胡傳 三禮鄭注 儀禮經傳通解 大戴禮 春秋孔羊傳 家語 國語 史記 前漢書

後漢書 三國志 通鑑綱目或先讀十八史 唐鑑 貞觀政要 宋名臣言行錄 伊洛淵源錄 周程張朱之書 大學衍義

同補 文章軌範 右輪講會讀二目今特舉其梗概教者斟酌之而可矣

附錄書目 凡四部書典本朝國史律令格式家乘野史皆在所當讀也但其有本末輕重豈可不識所緩急邪是以其可急者已列

于本編其可緩者又附之于此然群籍浩瀚有不可勝載者故今得學其畧而已其餘學者觸類而長之可矣

經 十三經注疏○史 資治通鑑 十七史史漢要 宋史 遼史 金史 元史 明史宋史以下五史讀之固好而不讀亦可唯宋史列傳當一再過讀 諸編年史

摺而 諸別史同上 諸雜史同上 諸傳記同上 ○子 荀子 法言 說苑 文中子 管子 晏子 韓非子 呂氏春秋 老

ル武夫ヲ以テ誇尙スルコト一般ノ習俗ナリ又諸武技弓馬刀槍ノ類皆其師宅ニ道場ヲ置キ教督ノ事悉ク其師ニ委シ藩士自由ニ習業スルコトタリ天保年間齊典ノ代ニ至リ鬻舍ノ外別ニ演武場ヲ設置シ皆其中ニ包括セリ但馬埒放銃場ハ寛廣ノ地ヲ要スルヲ以此外ニアリ

封建ノ制武ヲ以テ基ヲ立ツ故ニ士大夫大抵武技ヲ講習スルヲ以テ自ラ足ルトシ昇平ノ久キ游惰放蕩尙武ノ風大ニ衰ト雖尙文學ヲ蔑視シ其道ヲ講究スル者ヲ卑ミ殆ト士林ニ齒セラレズ是天下一般ノ通弊ナリ本藩ノ如キ尤已甚トス然ルニ少將齊典資性恭儉コシテ大ニ有爲ノ志ヲ懷キ封ヲ襲フニ及ヒ文ヲ修メ武ヲ鍊リ風俗ヲ整理シ勤儉ヲ秉リ國事ヲ恤尤斯文ヲ興スヲ以テ急トナシ師儒ヲ他方ヨリ聘シ遂ニ博諭堂ヲ創立シ大ニ陋風ヲ一變シ一時駸々乎禮教ニ趨ク者皆齊典ノ致ス所トス其後直候直克力ヲ此事ニ盡セシハ皆遺志ヲ繼タルナリ(初齊典興文ヲ事トスルニ當リ老臣等ヲ始滿庭ノ有司甚喜ハス憲職ノ者之ヲ諫正スルニ至ル其鄙陋極ト謂可シ故ニ長野豊山ノ如キ一世ノ名儒ヲ聘シ大ニ斯文ヲ振起スルニ志有ト雖モ卒ニ俗論ノ爲ニ障礙セラレ其用ヲ終ヘスシテ國ヲ去シムルニ至ルハ惜哉然ト雖モ鬻舍ヲ創立シ游學ノ路ヲ廣クシ他ノ瓦師ニ就シメ時ニ自ラ鬻舍ニ臨ミ卒伍平生見ヲ許サル、者箔ヲ隔テ其講經ヲ聽キ以テ風勵スル類皆齊典ノ創ル所ナリ而豊山遇合ヲ得スシテ去ルト雖其學ヲ傳宿儒トナル者保岡嶺南德業ヲ以テ著ル者久永助三其他孝義ヲ以テ褒賞ヲ得ル者一時輩出スルニ至ル皆齊典ノ力ナリ)

教則 教導ノ大頭腦ハ朱子白鹿洞書院揭示ヲ以テ善ヲ盡ストス故ニ是ヲ講堂楫問ニ扁シ學ヲ爲スノ標準ヲ知シメ且藩主齊典ノ撰ミシ條目アリ簡ニシテ能其要ヲ得又儒臣石井文衷ニ命シ撰マシムル所ノ條約讀書次第等アリ左ニ錄シ大要ヲ示ス

〔齊典ノ條目〕 學問は人たるの道を知て是を身に行ひ己を修め人をも治むべき爲にてあれば德行は本なり文藝は末ありと思ふへし 人の行ふべき道其端多か中に忠孝を以て本とする事誰か是を知らんしかはあれど其眞實に知り眞實に行へるこそ貴ふへけれ其餘の百行みゑ然りかの徒に能く口に語れるは貴へきにあらすと思ふへし すへての人皆恥を知らざるへうらす況や士に於てをや是をしれば善き人と成て遂には聖賢の域にも至りなん是をしらざるは人面にして獸心あり心道理に暗く身禮義を行はす其才能も亦職務に應ずる堪ざるこそ恥へけれ家貧して衣食あとのあしきは決して恥へきにあらすとおもふへし 自他ともに恭敬を厚して貴賤長幼の禮法を正しくすへし假にも戯諱の言傲慢の行有へうらす 聖人といへども己をすてゝ人に従ひたまふといへりされは常人に於ては猶更のと成へし 必らず過失を改るに吝かにして師友の教誡に戻り我意を張る事有へからず 學術は孔孟程朱の正脉を崇ひ守るへし

其他方へ出シ良師ニ就學セシムルヲアリ或ハ各自ノ見込ヲ以テ他方へ出修業スルヲ願出スル者アリ此等ハ一科ヲ專修スル者トス又ハ其技ヲ以テ家業トシ諸士醫師儒者ノ類世々祿ヲ食ムモノアリ此等ハ固ヨリ一科ヲ專修スルモノタリ然レハ十六七歳迄ハ大抵諸藝ヲ兼修セリ但醫師ノ子弟ハ武藝ヲ修ムル者絶テナシ

生徒學習ノ期限ハ文學ハ八歳ニシテ入學シ齊魯ノ時ノ制ナリ後十二歳ト改ム又十四歳迄ハ三十歳迄年輪ヲ以テ期トシトスレハ廿四五歳ヲ過レハ勉強スル者稍少シ武藝ハ十三四歳ヨリ習業シ免許ニ至ルヲ卒業ノ程度トス本項國藩ノ習俗ヲ概叙スルノ爲メニ士卒ノ子弟八歳ニシテ入學シ十二歳乃至十五歳迄ニ四書五經及文選卒業ノ者ハ試験ノ上合格毎月一ニ葉ヲ試ミ忘字三ノ字ニ滿タサレハ合格トス者ハ其實トシ御鼻紙ト稱シ文選ハ金二百疋五經ハ金百疋ヲ賜ハレリ

生徒試験ノ法ハ素讀生ノミヲ試ムルモノトス一年ヲ二期ニ分七月十ニ分成童以下半年間休歇一期三度迄ノ休歇ハ寫恕スセサル者其既ニ讀レシ書現時四書ヲ習讀ノ者ハ四書ノ既ニ讀レシ書ヲ分テ試ム五經文選等モ之ニ同一冊毎ニ一葉乃至二葉ツ、試ミ遺忘三字ニ過サル者ハ御鼻紙ト稱シ金百疋ヲ賞與セリ一年休歇セサル者ハ二百疋三年ハ三百疋ヲ賜フ

素讀生四書五經等ヲ讀レシ時ハ其旨世話役ニ申出試験ヲ乞世話役之ヲ教授ニ通報シ教授助教ノ中ニテ試験シ忘字寡キモノハ前程へ進歩スルヲ許ス學中ノ諸則ハ布令中ニ聯絡スルヲ以制度ノ項ニ掲出ス故ニ此ニ略ス凡テ生徒ノ禮法ハ專ラ世話役ノ擔任スル處ナレハ少年輩不行儀ノ者ハ懇切ニ説諭ヲ加ヘ尙改メサル者ハ教授ニ稟議シ處分ヲ爲スモノトス

講堂正面ノ奥ニ聖廟ヲ設置シ齊典親ヲ文宣廟ノ三字ヲ大書セシ扁額ヲ掲ケ又堂中楣間ニ博喻堂壁寫宇ノ額アリ故ニ生徒ノ堂ニ入ルヤ必ス先該額ニ對シ一拜シ然後教官ニ就キ業ヲ受ル者トス堂中ハ學官ノ外ハ喫茶吹烟ヲ禁ス其他雜談等ハ勿論タリ生徒ノ中卒ハ帶劍堂ニ入ルヲ得テ詰所ハ大別シテ三トナシ上士中下士及卒各別席タリ移城前後生徒初テ入學ノ節ハ必禮服麻上ヲ着ケ師範家ヲ廻禮ス昇堂ノ時亦然リ其他素讀生ハ四書ヨリ五經ニ上リ五經ヨリ文選等ニ遷リ及訓義生ニ登ル節又肩衣ヲ着ルヲ例トス維新前後漸簡省ニ趨キ書籍ノ換リメ訓義生ニ移ル節等ハ平服トセリ

職名及俸祿

維新前 文武奉行一員 寄合執參番頭等ヲ勤ル家筋ノ者ヲ以テ之ニ任ス年寄或番頭次席トス持高ヲ以テ勤ル者トス○學監二員 番

士ヲ以テ之ニ任シ監察職ニ列ス持高百石ニ滿タサル者ハ在職中百石高トナス無息ナレハ拾口ノ餼ヲ給ス藩學創立ノ時該職ヲ設ク後掌禮ヲ置ニ及テ廢シ學中ノ大事ハ憲職ノ章程トス○教授無定員一員乃至三四員儒者ヲ以テ之ニ任ス席番拔トス番士上持高ヲ以テ勤ルモノトス該職ニ任スルノ節書籍料トシ金百圓年末毎ニ手當トシテ銀子若干枚實數今詳ニシ難シ大凡金五圓位賜フ無息ナレハ拾口ノ餼ヲ給ス上ニ同シ○助教無定員六員番士或ハ儒者ニテ之ニ任ス本席持高ニテ勤ルモノト

子 莊子 列子 墨子 淮南子○楚辭 文選賦與詩 漢魏六朝諸家之詩 唐詩品彙 唐詩正聲或三昧詩 李太白集

杜詩全集杜律宜 韓文 柳文 八大家文抄或十八大家文抄 文獻明辨 東萊博議 歐蘇手簡○國書 正史及律令格式

之外亦宜擇其可讀者而讀之今畧其目

右所載略示其方也已學者不必拘執蓋士大夫之學止于小學四子近思錄而足矣其有餘力則雖所不載之書亦宜博涉以廣知

見也然凡讀書貴得其要不能然則多讀徒得爲書籠焉耳教科用書授業順序ハ讀書次第ニ依據スト雖教官ノ見込ト學ヲ者ノ望トニヨリ必シモ

家文等ヲ以シ讀授ハ小學孟子ニ止リ論語學庸等ハ自ラ讀セシム或ハ疑義ヲ質サシメ史類ハ尋ク疑義ヲ實問セシム皇朝史略日本外史逸史列祖成結十八史綱鑑易知錄等ニ始リ左國史漢通史綱目等ニ及ヘリ

授業ノ時限ハ毎日素讀講義質問共朝六ツ半時舊時ヨリ九ツ時九ツ時ニ至ルト雖生徒出席多クシテ授業ノ迄トス授業ノ方法ハ生徒

升校ノ順次ニヨリ姓名牌四書ヲ素讀スル者ハ北牌ニ姓名ヲ墨書シ五經以上ハ朱書シ日牌ニ大小ヲ掌禮ヘ差出ス掌禮主事ヲシテ之ヲ一々

名簿ニ記載セシメ順次ヲ亂サス教授スル者トス而テ句讀生ハ前日授讀セシ處ヲ自ラ讀シメ忘字多キ者ハ再三溫習セシ

メ尙記シ得サル者ハ前程ヲ益授セサルコトス讀法ハ一ニ石井文衷ノ定本訓式ニ據テ授ク 經史子集トモ毎月三次ツ

日限ヲ定メ置三ノ日ハ九ツ半時ヨリ七ツ半時迄講義輪讀ヲ開ケリ 詩文會ハ毎月一次正午ヨリ開キ日沒ヲ限リトス

該會數々奥具若クハ酒肴ヲ賜フテ恒例トス抑本藩齊典ノ時士人ノ該會數々奥具若クハ酒肴ヲ賜フテ恒例トス抑本藩齊典ノ時士人ノ素讀溫習毎月二次アリ大略四書ハ二十葉集註五經ハ十葉白程度ト

學科學規試驗法及ヒ諸則

學科左ノ如シ 漢學 和學維新前ハ博喻堂中ニ於テ正史律令格式等ヲ讀シム維新後則ニ和學校設 刀術維新後諸流ヲ合併シ新流ト稱シ督學ノ管

於テ別ニ道場ヲ設 算學 筆學 洋學維新後設置シ督學ノ管理ヲ受ルト雖舊內務監ナ 右之外兵學館練兵場其他弓馬刀槍ノ諸藝ハ學

校ニ管理セスト雖モ教育ノ旨趣ハ文武兼修スルヲ標的トシ其間ニ輕重スル所ナキヲ以テ參考ノ爲編末ニ略記ス

文武ハ必兼修スルヲ以テ造士ノ本旨トナスト雖モ文學武技トノ比較ハ一定ノ制度ナシ大抵武技ハ刀槍弓銃柔術等ノ免

許ヲ以テ卒業ノ度トシ文學ハ教官中句讀師ノ任ニ勝ユル學力アル者ヲ以テ自ツト武技ノ免許位ノモノト見倣フニテア

リキ 前條之通文武兼修スルヲ以テ本旨トナスト雖身軀ノ強弱又ハ其人ノ能不能アルヲ以テ文學ハ小學ノ講義ヲモ全

ク聽了セス日本外史ヲモ全ク讀得シテ武技三四流ヲ兼修練スル者又ハ武技ハ僅々一二流ヲ少シク習業セシノミニテ

カヲ文事ニ專ニスル者等ハ必シモ備ルヲ求メス其人ノ得意ニ任セ置ケリ概スルニ武門ノ習俗文學ニ從事スルヲ忌ミ十

ニ八九ハ武技ニ趨ケリ而ルニ維新前ヨリ軍制漸ク洋式ニ變シ維新後更ニ局面一變シ亦刀槍等ノ技ヲ講究スル者幾希ニ

シテ靡然トシテ文事ニ趨ケリ 一科ヲ專修スルヲ許サスト雖少年ニシテ一技ニ秀テ前途ノ見込アル者ハ官ヨリ文武

傳舊主事手
傳ノ改稱無定員大凡舊
ヲ給ス手當ハ舊額ニ倍ス○坊主無定員大凡舊
給ス手當ナシ(戊辰十二月改革)

學政局大司事一員、列准三等月俸金廿五圓 後少參事ニ改ム○同少司事一員、列五等月俸金拾壹圓 後大屬ニ改ム○

同書記四員、列十一等月俸金二圓二方 後權少屬一員史生二員ト改ム○同下吏二員、列十二等月俸金貳圓○博喻堂教

授一員、列五等月俸金拾壹圓○同助教無定員大凡四 列六等月俸金七圓○同寮長二員、列七等月俸金五圓○同訓義師無

定員大凡五 列七等月俸金五圓○同句讀師無定員大凡十 列八等月俸金四圓○同少訓義師無定員大凡五 列十等月俸金三圓○

同少句讀師無定員大凡五 列十一等月俸金貳圓半○國學教師 列六等月俸金七圓○醫學教師 列六等月俸金七圓○洋學

教師 列六等月俸金七圓 職制ハ設ト雖教師其人ヲ關ニヨリ當分假ニ家難ノ如欲裁ニ ○筆學教師 列六等月俸金七圓○算學教師 列六等月俸金七圓

列六等月俸金七圓 筆算トモ職制ハ設クト雖當分假ニ立ニ由リ教師モ亦假ナルヲ以テ等給本 ○劍術主事一員、列五等月俸金拾壹圓○同

教授 列六等月俸金七圓○同助教一員、列七等月俸金五圓○同副助教無定員大凡四 列八等月俸金四圓○同助教補無定

員大凡三 列十等月俸金三圓○同下吏無定員大凡兩 列十二等月俸金二圓(己巳十月改革)

職員概數 學務吏員大凡廿四員五員_{內坊主} 教員大凡四十二員 門衛小使大凡三四人 右維新前ニ係ル維新後寄宿寮ニ

置筆算劍法等ヲ合併スルニ及テ吏員教員共廿一二員小使二三名ヲ増加ス時々増減アリ書一ナラス今大概ヲ記スルノミ

生徒概數 通學生大凡三百人餘_{內三分二ハ素養生} 右維新前ノ概數維新後江戸邸學ヲ合併シ且漸ク右文ノ化ニ逼キシヲ以テ生徒大

ニ増加シ一時六百餘ノ多キニ至レリ 寄宿生ハ俊秀ノ者拾名特選ニテ官ヨリ入寮ヲ命スル者トス_{此分又別ニ寄宿望}

ノ者ハ篤學ノ者拾五名ヲ撰ミ教授ノ願ニヨリ入寮ヲ許ス_{此分半官費} 右ノ外自費ヲ以テ入寮ヲ冀望スル者ハ隨意差許スト

ス

束脩謝儀 束脩ハ一切無之但入學ノ際校中平素備置處ノ白扇一對ヲ教師ニ奉呈シ禮ヲ行フヲ恒式トス

學校ノ經費 維新前ハ一ケ年ノ學費金四百圓_{費金當該等臨時ノ費用ハ此外ニアリ}ニ過サリシモ維新後ニ至リ大ニ増加シ正米五拾石_{寄宿生料}金額

ハ殆ント十倍ノ數ニ登ル其故ハ漸右文ノ化ニ向ヒ生徒モ益進ミ且物價モ大ニ騰貴スルヲ以テナリ而ルニ嘗テ一算ヲ藩

士ニ賦課セシヲナシ但維新ノ後筆算學ヲ合併創立スルニ及テ僅々士卒ニ賦課セシノミ其詳辛未二月藩知事ノ布令中ニ

見ス_{一平ノ學費米何千石金何千圓等一定ノ成規ナシ} 時ニ臨ミ實費ヲ支出スルヲトス且學田ノ制ナシ

藩主臨校 藩主臨校ハ齊典以來時トシテ之アリ多シハ平常稽古ノ模樣ヲ監察スル爲ナリ又輪議會讀詩文會等へ臨席シ祈

後藩軍銃陣ニ改ムルニ及テ廢ス○砲術 高嶋流 初荻野外記二流ト並立ス後專ラ本流ヲ用ユルコトナリ維新後軍制ヲ洋式ニ改兵政局ヲ置兵學館ヲ創メ大司事後少參事ヲ以テ總括シ教授以下職員悉ク備ラサル無シ博諭堂ト對立シ圖藩ノ士卒普ク習學スルコトナレリ○槍術 寶藏院流、一旨流○刀術 鐘捲外他流、安光流、常流、今井景流居、新流諸流ヲ合併シ華法ヲ去テ專ラトス維新ニ○柔術 起倒流○弓術 印西流、矢澤流○馬術 八條流、神道流○砲術 荻野流、外記流右ノ外呼囀游洞捕手又刀法ニ無創立スノ者專ラ習學スル所ニシテ以上右諸武技放銃場馬場ノ外ハ悉ク一構川越ニテトナシ其中ニ各自稽古場ヲ置習學スルコトス習業ハ毎日毎朝恒トテ雖年ノ豊凶又ハ用度ノ都合ニ時間ハ八ツ時舊時ニ始リ薄暮迄トス別ニ又寒稽古ト稱シ毎年三十日間祁寒ノ節曉七ツ時ヨリ朝五ツ時頃迄習業セリ諸師範共席番拔持高ヲ以テ勤ムル者トス歲末手當トシテ銀子若干枚實數詳ニ凡金三ヲ賜フ諸師範共創職ニアラサルヨリハ他職ヨリ兼務スルモ方位妨ナシトス然ル時ハ其職ノ本席トス(物頭使番ノ類)獎勵方ハ大抵文學ニ同シ上下時服但諸藝中ニ就テ稍權衡アリトス藩主武技閱覽ハ毎年一度ツ、殿前庭上ニ於テ之ヲ行ヘリ馬術砲術ハ其場ニ臨テ之ヲ閱ス時ニ物茶菓子高ヲ賜テ其勞ヲ慰スル又文學ニ同シ藩主江戸參勤ノ節ハ家老之ニ代レリ

舊高崎藩

學制

學事上ノ諸制度 和漢學弓馬槍劔銃炮ノ業家老以下士分一般老若ヲ問ハス役職ニ在ル者ハ餘力ヲ以テ常ニ怠ラス修業ニ從事シ惟リ卒族ハ馬術ヲ學フヲ許サス其他學科ヲ修ムル敢テ禁令ナシト雖ハ職トシテ銃術ハ必ス精鍊セシムヘキ等總テ遊戲ニ屬スル踏舞及唱歌學習ハ一切嚴禁タリ其一業篤志殊ニ優ナル者ハ長男次男ヲ問ハス時選ヲ以テ助教及ヒ教授役ニ任シ階級一定ノ制ナク職名引立及ヒ手他ノ職務ヲ免シ定祿ノ外壹人口ヨリ五人口位ニ至ル増給シ或ハ階級特殊昇進セシムルコトアリ年十二月ニ至リ各演武場及ヒ筆學漢學商家塾等ヨリ勉勵修業ノ者取調賞與伺書ヲ作り文武掛リ役用人以上藝掛リ維新后文武總裁及ヒ立會役ト云フヲ經テ藩廳ニ差出シ左ニ掲ル各種ノ褒賞ヲ施行ス 年齡十三年迄月番武藝掛宅ニ於テ蒸菓子壹袋短ヲ藩廳ヨリ賞與ス 年齡十四年以上官衙或ハ演武講堂ニ於テ煮込飯ヲ賜ル膳部飯計平但小頭格以下袴着用許シナキ者此席ニ列スルヲ得ス代價ヲ以テ別ニ給與ス 和漢學格別出精ノ者經本寺部或ハ貳部武藝同上ノ者竹刀或ハ竹刀革面篠金及小手文武格別出精ノ者銀壹兩關ト銀別段煮込飯煎煮込肴料金百疋貳百疋等ノ賞與例アリ但肴料ノ賞ハ藩廳御用召喚麻上下着出頭ノ上賜ル 助教以上教授役ノ者ハ肴料百疋貳百疋三百疋袴地壹反諸麻御紋付上下藩主ノ教等ノ賞與例アリ

寒暑雨ノ時ハ學生ヘ菓物等ヲ賜フテ慰勞セリ武場モ亦然リ毎年四月必十歳以上ノ學生學生中鄧位ニシテ法ニ於テ面見ヲ得サヲ殿中ニ召

シ親ク經史ノ講讀ヲ試ム其法教授ノ見込ヲ以テ豫シメ課程ヲ授ケ置之ヲ試ムル者トス後各自ノ意ニ任セ適宜ノ書ヲ讀シテ聽トス講義生ハ甲

乙丙ノ三科ヲ設ケ甲科ニ登ル者ハ金三百匹乙科ハ二百匹丙科ハ百五拾疋素讀生ハ甲乙二科トシ甲科ハ百匹乙科ハ五拾

匹ヲ賞與シ以テ勸獎セリ藩主四年江戸ニ參勤スルヲ以テ不在ノ時ハ家老代テ之ヲ行ヘリ江戸邸亦然以上皆齊典ノ創ムル處ノ制ナリ藩主生徒ノ説經ヲ聽ヤ必ス齒傳ヲ撤ス亦維齊典斯道ヲ敬スルノ一斑ヲ見ルヘシ

新後ニ至テハ藩知事一月數次親ラ校中ニ臨ミ生徒ト共ニ輪講或ハ會讀等ヲ爲セリ

祭儀 聖廟講堂ノ正面ニ在毎年正月十一日ヲ以テ釋奠ヲ執行ス當日藩主名代トシ奏者番禮服用着用鴈二羽ヲ献備スルヲ恒

式トス是日寅ノ刻ヲ以テ祭典ヲ行ヘリ其式ノ概畧ハ聖像朱子ノ肖像ヲ配享スノ前机上ニ香爐ヲ設ケ左右燭臺ヲ置教授以下學員禮

服整然堂側ニ羅列シ神酒ノ初献ハ教授之ヲ奉シ亞献終獻ハ助教及テ亞献終獻ハ執參之ヲ執行セリトス學員逐次奠物奠物ハ鷹干鯛魚等ナリ奉シ畢リ生徒一統ニ拜禮ヲ爲シメ然後教授齊典ノ撰スル所ノ條目前ニ出スヲ朗讀シ又白鹿洞書院揭示ノ講

義ヲ爲シ學問ノ旨趣人倫ノ大道ヲ知ラシメ其後生徒ヘ赤飯ヲ賜ヒ教授以下學員悉ク神酒ヲ賜ヒ宴ヲ開キ薄暮ニ至テ止

ム維新後ハ學務掛ノ執參ハ親ラ祭事ヲ行ヒ他ノ執參モ悉ク禮服ニテ拜禮セリ府藩縣ノ制設置ニ及テハ藩知事自臨テ拜

禮ヲ行ヒ講義ヲ聽ケリ釋奠ノ費用年ノ豐凶又ハ用度ノ都合ニ依リ差異アリト雖大凡卅圓ヨリ五十圓ニ至ルト云フ

學校構造及建物圖面 學堂敷地千三百六坪 全建屋四百壹坪 右前橋移城後ノ分川越ノ分ハ審カナラス圖面ハ爾後小學校トナシ構造局面大ニ變換シ今詳ニシ難キヲ以テ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書ノ種類部數 學校ニ於テ出版セシ書籍左之通 白鹿洞書院揭示 右ハ釋奠ノ節講

義ヲナスニヨリ普ク生徒ニ頒賜スル爲上木セリ 日本外史 右ハ武門ノ史乘武士ノ龜鑑トナスヘキト多ニヨリ職分ノ

本務ヲ知ラシメン爲齊典ノ意ヲ以テ江戸邸學ニ於テ出版セリ國藩士ヘ一部限リ廉價ヲ以テ拂下ルトス○藏書種類部數等書目之ナク今詳ニナ

シ難シ大抵經史子集普通ノ物ノミヲ奇書ト稱ス可キ程ノモノ無之和書モ亦國史律令其他日本外史校訂參考ニ供ス

ルモノニシテ珍奇ノモノ無シ洋籍譯書モ亦普通ノ物耳

右博喻堂ノ外江戸邸二ヶ所上屋敷及高輪陣屋其他支封地武州松山等ニ皆庠序ヲ置ト雖本校ノ分派ニシテ軀裁闕略制度完備セス且簿書類

之ナク今詳ニスルニ由ナキヲ以テ記載セス武場モ亦然リ

〔附載〕諸武技ハ學校ニ管理セスト雖文武一致ノ旨趣ヲ以テ士ヲ養成セシニ依リ今概略ヲ左ニ記載シ參考ニ供ス

兵學 北條流 該師範ハ軍制ニ係ルヲ以テ諸武技ニ比スレハ特ニ重シトス在職中席番拔二百石高トス持高百石ニ滿タ

サル者更ニ世祿百石トナス毎日五ツ時ヨリ九ツ時迄自宅ニ於テ講義輪講城制等ヲナセリ藩軍訓練ノ節ハ軍師ノ任タリ

右之通有之其詳細ニ至ツテハコレヲ識ルニ由ナク欠記ス

學校

校名 文武館故ト遊藝館ト云

校舍所在地 上野國群馬郡高崎城代官町今ノ高崎驛宮本町第四十番地公立高崎第二女兒小學校ノ地ナリ其假設ノ際ハ同

町今第二番地公立高崎第一小學校ノ地ニアリ其曩キ高崎城北郭ニアリ今ノ高崎驛柳川町東部新紺屋町西裏一圓舊趾之
レナリ

沿革要略 舊高崎藩主從五位大河内輝高時代寶曆年中文武學校ヲ齎立ス遊藝館ト號ス安永三年火災ニ罹リ閉ツ次テ天明

ノ大災ニ逢遇シ故ヘ多ク再造ニ暇アラサル久シ惟リ槍劍ノ講堂再興在ルアリ玆ニ同藩主從五位大河内輝聲時代ニ至ツ
テ文武ヲ擴張シ大ニ士氣ヲ振作スルノ志アリ先代ノ業ヲ繼キ慶應三年十月寺院ヲ以テ假リニ和漢學校ヲ開設シ同年文
武學校建築工ヲ竣ヘ明治元年一月ヲ以テ開業シコレヲ文武館ト號ス藩籍ノ子弟咸ク此中ニ入夙夜勦勵スト雖モ學習年
月淺ヲ以テ著キ成效ヲ見ス

教則

教科用書 漢籍ノ部 孝經集註 汪武曹大全 四書輯疏 毛詩鄭箋 詩經正解 古文尙書標註 書經集註 易經集註

禮記集註 易經傳義 周易本義 春秋左氏傳校本 易蒙引 左傳 春秋林註 史記評林 國語定本 後漢書評林

前漢書評林 資治通鑑綱目 資治通鑑 歷代綱鑑補 宋元通鑑 增唐宋八大家 元明史略 文章軌範續 文章軌範

○醫書之部 傷寒論 本草綱目○和書之部 國史略 日本外史 皇朝史略 續皇朝史略 續王代一覽 日本政記

大日本史

授業之方法順序其規則詳細之設ナク大畧左ノ如シ

和漢學ハ初メ孝經次キ四書五經ノ句讀ヲ授ケ次キ國史略皇朝史畧日本外史コレニ準シ了リテ該書講義ニ及フ次キ文選

句讀史記評林文章軌範八大家文格漢書資治通鑑等自讀質問亦ハ輪讀ヲ檢シ或ハ輪講ヲナサシムト雖モ各自ノ望ミト學

力トニ從ツテ教科書増減及授業ノ序次ヲ異ニス○槍術ハ鍊寶藏院流ニシテ初メ草ノ位_九ヨリ眞ノ位_六鍵合_{十一}了リテ丸

嘴_{十二}及三箇身ノ位長刀表_五裏_三次_三キ面具足附入身ニ及フ又同流ニ中村派ト稱フ鍊鑓術初メ表太刀合_三薙刀合_三鍵合

本_三五箇_五拾箇_十眞ノ位_{太刀合鍵合}次_本キ引入レ入身ニ及フ○劍術ハ小野派一刀流ニシテ組合_{五十}了リテ表劍三重小太刀合小

各種ノ賞與ヲ受クル者即日各自ノ支配及ヒ武藝掛以上年寄家老迄禮回リヲナスノ例規アリ 慶應二年軍政改革從來ノ甲州流ヲ廢シ西洋式ニ一變シ同三年文武ノ教育又沿革シ舊江戸藩邸及高崎和漢學校ニ施行スル規程固ト詳細ノ設ケナク今舊高崎藩學校大概ノ制度ヲ識ルノミ

士族卒ノ子弟教育方法 藩籍ノ子弟一般文武兼修スヘキ制規ニテ其學資ニ至ツテハ大概藩費ニ出ツルモノト謂フヘシ槍

劔講堂銃炮馬術游泳^{夏氣}各演習場ノ藩立アリ弓術和漢學筆學醫學ハ各自ノ意向ニ任セ藩許アル家塾ニ入學セシム慶應

三年藩主ニ於テ大ニ文武ノ校堂ヲ設立シ銃炮馬術游泳筆學ハ舊ニ因リ其他家塾ヲ廢シ文武學科悉ク一校内ニ設置シ藩

費ヲ以テ學資ニ充テ是レヨリ子弟咸ク此校ニ通學セシム其他役職アルモノ及平士且學生協議團結ヲナシ月六度或ハ十

二度自宅漢籍輪講ノ設ケアリ春秋兩期藩主或ハ家老亦ハ年寄ニ於テ代理當日番頭用人列席漢學醫學讀書講義聽聞諸藝

事見分アリ此聽聞見分ニ其業優等ノ者若干人別段ノ御好ミト稱ヘ再ヒ檢査ヲナス亦番頭武藝掛リ及用人臨時文武各講

習場ニ臨席ス總テ文武トモ其學業篤志殊勝ナル者本人ノ願ニ據リ或ハ藩主特見ヲ以テ江戸表^{今ノ東京}聖堂或ハ某家塾ニ入

學ヲ許ス諸國遊學ハコレヲ禁止スルモノナリト雖モ某入塾ノ上教師ニ隨行遊歷等ハ禁スル限ニアラス又女子ハ筆學家

塾ニ入り習字ヲナスアリ裁縫ハ自宅修業ニシテ稀レニ裁縫營業者ニ就キ業ヲ修ムルアリ藩廳女子ノ教訓ハ一切關セサ

ルモノト謂フヘシ

平民ノ子弟教育方法 各自ノ意向ニ任セ寺子屋ニ於テ和樣筆道ヲ學ヒ傍ラ讀書ノ業ヲ受クル者アルモ庭訓實語教其他學

庸論孟ノ句讀ニ止リ算術ハ名主組頭役勤終リノ隱居等ニ從學スルト其他多クハ自修ニアリ藩立學校ヘ敢テ入學差止ノ

令ナク且農商ノ者學事從事禁制ノ法令ナキモ平民ハ書算ノミ心得單ニ家業ニ從事スヘキ風俗ヲナスモノニテ概シテ之

ヲ論スレハいろは假名一二數字名頭國畫商賣往來百姓往來消息往來等習字ニ止ル其他ノ學科修ムル者鮮シ村落ニ至ツ

テハ女子ノ如キ自己ノ姓名書シ得ルモノ甚シ男子偶々擊劔修業スルアリ實ニ今ノ小學高等學科ヲ修ムル力ヲ有スルモ

ノ甚タ稀ナリト謂フヘシ

家塾寺子屋設置ノ制度 該藩人ニ於テハ總テ文武ノ家塾開業ハ藩廳ノ許可ヲ得ルモノニシテ其校主タル他ノ職務ヲ兼ル

者アリ或ハ專勤ナル者アリ而シテ筆學漢學弓術藩内ニ在ツテ開業スル者其生徒人員ニ應シ校舍ノ造營修繕ハ藩費ヨリ

支給シ又漢學ハ藩ヨリ書籍ヲ塾主ヘ貸附シ弓術ハ弓矢ヲ貸附シ塾主ノ權内ヲ以テ貧窶生徒ヘ貸與ス藩邸内ヲ出テ文武

開業スルモノ許可ヲ與フノミ一切藩費ノ補助ヲ得ル能ハス平民ニ至ツテハ何家塾ヲ問ハス一定ノ制規ナク自由ニ開設

ヲ許スモノト雖モ市街村落ニ至ツテ筆學ノ寺子屋家塾アルニ止ル

シ惟リ武術ニ至ツテハ皆傳免許ヲ得ルヲ以テ卒業ノ期トナス春秋兩度試験ヲ施行ス其試験ノ方法及賞品授與ノ法等詳細ノ規程コレナシ大概前段該藩學事上ノ諸制度及子弟教育方法ノ兩項中ニ掲記スル處ヲ以テ履行スルモノニ付此ニコレヲ略ス

規則

一此度學問所御造營被仰出候御趣意ハ第一御家中風儀正敷群才御教育被成行々御政務ニ御用立候儀ニ付面々難有相心得文武無懈怠致出精候儀ハ勿論先第一忠孝ヲ本トシ恭謙退讓ヲ守リ廉耻節義ヲ尚ヒ總テ實行ニ志シ聊モ輕薄浮華ノ習無之行々御國務ニ御用立厚思召ニ相叶候様銘々可被心懸事

一學校者禮義ノ所由出ニ候得者何レモ謹慎篤實ニ志シ假初ニモ傲慢放肆ノ振舞有之間敷事

一平日孝行ヲ本トシ兄弟睦シシ長幼共ニ可盡愛敬事附朝夕父母ノ安否ヲ訪ヒ出入共可告之事

一學問ハ諸藝ノ本ニ候間各々可致出精者勿論タリト雖モ讀書而已ニ耽リ候得ハ自然文弱ニ流レ質武ノ風無之様成行候間文武一致可致研究事

一學問所ニ於テ御政事向ハ勿論人物ノ評判並士不似合卑劣ノ咄等決テ有之間敷事

一禮讓者學者第一之事ニ候得者面々出席ノ節敷授助教ヘ一禮致シ次ニ一統ヘモ一禮致シ候上其席ニ就キ業ヲ始メ可申事附退席ノ節モ是亦敷授助教並一統ヘ一禮ノ上引取可申事

一出席ノ面々何レモ諸事相謹稽古筋ノ外無用ノ雜談有之間敷事

一有志之面々貴賤ニ拘ラス晝夜共勝手次第罷出可致修業事

一幼若ノ面々御屋敷内遊戲ノ節タリトモ不作法不行儀ノ振舞決テ有之間敷御役人ハ不及申諸師役及長者ノ申聞候儀是亦決テ違背致間敷事

一經義ハ朱註ヲ宗トシ古註兼テ可相用事

一素讀中茶烟草相用ヒ候義師役ノ外可爲無用事附休ノ節タリトモ十五歳以下ノ輩ハ烟草相用義是又無用タルヘシ事

申事

一講義輪講并素讀受業ノ節小用ノ外猥リニ立居致間敷事附無據用事有之候節ハ敷授助教ノ内ヘ其旨相斷用向相整可申事

一講書ノ節何レモ書物扣置物靜ニ得ト聽聞可致候若不合點ノ處有之候ハ、幾重ニモ無遠慮質問可致事附炎暑ノ節タリトモ講書中扇子ヲツカイ候義不相成候事

太刀トモ^十本初傳及引^十本同拂捨刀^五試合^{コレハ組合五十本ノ業ヲ終リ}○柔術ハ天神眞揚流ニシテ始メ手解居捕^{十二}ヨリ初段居捕立合^{二十}トモ中段居捕立合^{二十}試合^{二十}投捨捕立合^{二十}裸手立合^三上段居捕立合^{二十}トモ活法七箇等ニ及フ○薙刀術ハ^十鐵術^{廿五}棒術裏表^{十三}○弓術ハ初メ卷ハラ射ヲ以テ全体之支幹ヲ正シ次ニ小的大的芝射遠矢等ニ及フ○拔刀十試本一ヨリ十二ニ畢リ尙早拔キノ業ヲ授ク

右武術ハ都テ心理學之免許簡條多シ之レヲ畧ス

授業ノ時間大畧左ノ如シ

自明ケ六ツ時至朝五ツ時 但塞三十日ハ半時間ヲ繰上ケ	自朝五ツ時至夕七ツ時 但輪講溫讀等ハ夜九ツ時迄許ス	自朝五ツ時至晝四ツ時	自晝八ツ時至夕七ツ時 明治二年ヨリコレヲ廢止ス
槍	劍 術 和 漢 學 醫 學	柔術 鐵鑱術 薙刀 棒術 拔刀	弓 術
但二七ノ日自晝八ツ時至夕七ツ時 四九ノ日同斷		劍 術 槍 術	

左ノ筆學及ヒ武術修業時間ハ該校ニ係ルモノニ之レナキモ照合ノ爲メ此ニ掲ク且一時限兩三業ヲ修ムルヲアルモノハ筆學年齡十三年前后ニ止リ銃砲及馬術ハ十三年以上ヨリシ其他ハ一時間内ニ半時ヲ甲業ニ用ヒ殘ル半時ヲ乙業ニ用ユ或ハ其望ム處ノ兩三學科ノ業ヲ修ムルニ止ルヲ許スアリテ然ルナリ

自朝五ツ時至晝九ツ時 但暑中三十日間ハ明ケ六ツ時ヨリ至晝四ツ時	自朝五ツ時至晝四ツ時 但暑中ハ明ケ六ツ時ヨリ至五ツ時	自朝五ツ時至晝九ツ時	自晝八ツ時至夕七ツ時 夏季ノミ
筆 學	馬 術	銃 砲 術	游 泳

學科學規試驗法及諸則 該校内ニ於テ教授セシ學科ハ和漢醫學槍術劍術柔術薙刀術鐵鑱術棒術拔刀術弓術ナリ然シテ此校ニ入ルノ生徒ハ必ス文武兩道ヲ兼修セシムルヲ規則トナスト雖モ其文學ト武術ト程度比例ニ至ツテハ規程ノ設ケナク青年以上ニ至リ其文タル武タル一科二科特ニ篤志優等ノ者ハ望ム所ニ任セテコレヲ熟達セシム學習年限ノ制度ナ

維新改正以後

同助教補同	調役下	使部卒
同	士	
同	三	貳
同	名	名
同	同	壹年
無之	同	給人六圓口

職名	官	等	人	員	相當	祿	職	秩
文武督學	第二等官	壹	員	三百八拾石	八拾石			
文武立會役	准二等官	無	定	員	壹員九拾石	無	之	
醫學督學	第三等	壹	員	百八拾石	同	同	上	
文武教授	准三等	無	定	員	壹員八拾石 <small>但戶主ニ非ル者該職ナシ</small>	三拾石 <small>壹戶主ニ非ル者該職秩ノミ</small>	上	
醫學醫並	第四等	貳	員	同	六拾石	無	之	
文武教授並	同上	無	定	員	同 <small>但戶主ニ非ル者該職ナシ</small>	月給七十五錢 <small>戶主ニ非ル者貳拾五石</small>	上	
同助教	同上	同	同	同 <small>但同斷</small>	同	同	上	
同助教並	准四等	同	同	同 <small>但同斷</small>	五拾石	月給五拾錢 <small>戶主ニ非ル者貳拾五石</small>	上	
同助教補	第五等	同	同	同 <small>但同斷</small>	同	同	上	
同助教補差繼	准五等	同	同	同 <small>但同斷</small>	四拾石	同	上	

一素讀受業ハ貴賤長幼ニ拘ハラス出席到着順ヲ以テ相始候間其心得可罷在事附出入ノ節物靜ニ行儀相守リ履物等ニ至ル迄氣ヲ付間違無之様可致事

一座席ノ儀ハ格祿ノ高卑出席ノ前後ニ拘ハラス一統長幼ノ序ヲ以テ相定候間其旨相心得可申事附師役ノ面々ハ此限ニアラス

一幼年ノ輩ナリトモ袴以上ノ分ハ屹度袴着用出席可致事

一傳染致シ易キ病症ノ者ハ一切出席致ス間敷事

一御屋敷内外途中ニ於テモ高聲ニ詩ヲ吟候義不相成事

一上ヨリ御仕渡ノ戸障子行燈并疊ニ落書及疵付候義一切致ス間敷事

一書物并机等取扱候義是又學問ノ一端ニ候得ハ隨分氣ヲ付叮嚀ニ取扱可申事

一御書籍拜見致度者ハ教授ヘ相斷拜借帳ヘ自筆ニテ姓名書名卷數月日等委細相認拜借可致事附御書籍出納ハ一六或ハ二七相定置候間其節罷出拜借可致事

一日用ノ御書籍ハ教授局ヘ差出置候間拜借致シ度者ハ是亦前段同様拜借帳ヘ委曲相記シ拜借可致事
右之通相定置候間何レモ堅ク相守リ無怠惰出精可被致候

慶應三丁卯年

職名及俸祿

維新改正前

職名	官	等	人	員	相	當	祿	役	料
文武總裁役	年寄	格壹	員	百石以上					
同立會役	用人	格無	員	五十石以上					
同引立役	中士以上	同		一定ノ制ナレ					
典事	同	同						無之	
文武助教	下士以上	同						壹人口ヨリ貳人口ニ至ル	

者ヲ撰ミ其費一人口ノ外ヲ給シ藩主ヨリ命シテ他國へ遊學セシメタルモノアリ 齡五十歲以下ノ者ハ文武ノ内一藝ハ必ス脩業セシメ且月次講釋ノ節ハ藩士一般出席聽聞セシメタリ

右二項ノ事實參按ノ爲メ一藩教育上ニ關スル規制達書等左ニ輯録ス

家督跡式引高番代隱居等ノ件ニ付達(安政三年丙辰十二月)

一中小性以上ノ嫡子次三男八歲ノ正月ヨリ讀書手習禮節入門可爲致事但入門ノ旨大目付へ相届可申尤病氣等ニテ入門難相成候ハ、其段大目付へ可相達事

一無足人悻右同斷但徒目付へ相届徒目付ヨリ大目付へ可相達尤病氣等ニテモ右同斷

一中小性以上ノ嫡子次三男十三歲ニ相成候ハ、劍術炮術ヲ始メ退々入門可爲致事但届ノ儀ハ八歲ノ節ニ同シ尤當人其親ノ志次第十三歲ニ不相成候テモ諸藝入門勝手次第ノ事

一無足人悻右同斷但右同斷

一中小性以上ノ嫡子十六歲ニ相成候ハ十三歲ヨリ諸藝相學ヒ候内得手不得手ノ藝モ大方可相決ニ付成就可致一藝相撰ミ專業相願可申何ケ度モ御間届可被成下候趣ニ寄被仰付候事モ可有之且志厚キ者ハ十六歲以下ニテモ相願候儀勝手次第第九モ文學ハ素讀相卒候上可願事但江戸表ノ儀御屋敷内引立世話又ハ最寄ノ方へ遣シ爲相學十六歲ニ相成候ハ、他藩へ内弟子ハ勿論御在所へ遣シ專業相願候儀勝手次第河州羽州御陣屋詰ノ者モ同斷且志厚キ者ハ十六歲以下ニテモ相願候儀勝手次第第九モ文學ハ素讀相卒候上ノ事

一無足人悻右同斷但右同斷

一五十歲以下ノ面々ハ縱令日勤ノ役儀ニ候モ御用透ノ節其得手ノ藝無油斷相學可申尤同役同勤ニテモ助合可申候事一諸詰所ニ於テ御用透ノ節手習學問算術其外武術出來候場所所有之候ハ、少シノ隙ヲモ空シテ過シ不申篤ク心掛稽古可致事但江戸表ハ御殿續ノ稽古場ニ付稽古中御用向有之候節ハ着替ニ不及稽古ノ儘諸役所へ罷出候儀ハ勿論當役所へ罷出候儀不苦候事

一文武藝術ノ内 文學小學四書 山鹿流大星外 講義成就 兵學 流モ右ニ準ス 禮節小笠原流家禮免許 外流モ右ニ準ス 算術天元術 武藝劍術槍術炮術柔術 弓術馬術免許 但六藝ノ外トテ

モ心掛ニテ免許相濟候者ハ思召モ可有之事

右文武藝術ノ内一藝成就不致者ハ當辰ノ廿四歲ノ者ヨリ以下ハ家督跡式御定ノ通り可被下置候得共高ノ内一割引高被仰付身分慎方宜敷一藝成就致候上引方御免可被成下候萬一藝道未熟ノ上御用立候勤モ不致者三代打續キ候得ハ相

文武館調役 第七等三名 同拾七俵 月給五十錢

職員ノ概數 改正前教員廿六名事務員八名改正后教員廿貳名事務員十三名

生徒概數 通學生徒千餘名寄宿生貳十餘名

束脩謝儀 一切無之

學校經費 一周年ノ費現米貳拾五石爲金算三百圓器械修繕炭油筆紙墨諸雜費ニ充テ餘ハ一切藩公廨ヨリ支出ス其定額取

調不分明之レナク

藩主臨校 春秋兩度藩主或ハ代理家老及大參事出席督學立會役列席講義及ヒ素讀聽聞武術見分アリ前段該藩子弟教育ノ

項ニ掲ル處ニ大概同シ

祭儀 一月諸初ノ節聖像畫圖ヲ掲ケ鮮鯛及菓物若干清酒等ヲ供ヘ督學首メ事務官及教員生徒ニ至ル迄拜スルノ定例アル

ノミ

學校構造及建物 地坪七百坪餘建坪ノ數凡貳百八拾四坪餘和風平屋造

舊館林藩

學制

學事上ノ諸制度 弘化三年丁未三月秋元家修學館求道館ヲ興シ漢學ヲ以教授シ他ノ學術武藝ハ各師範家塾ニ就キ隨意ニ研

究セシメシカ安政三年丙辰十二月封ノ翌年奢修ヲ禁シテ文武兩道ヲ擴張シ翌四年丁巳六月大ニ學制ヲ改革シ造士書院ヲ開設シ

一藩ノ子弟ヲシテ文武兩道ヲ兼脩セシメ文武ノ内一藝免許以上ニ至ラサレハ家祿ノ幾分ヲ減シ一藝成業ノ上舊祿ニ復

ス等ノ制ヲ立テ又次三男ト雖モ拔群勉勵學術特ニ上達ノ者ニハ扶持米一口ヲ賜ヒテ益其業ヲ精究セシメダリ又一藝免

許ノ者ヘハ一段染メノ下緒二流免許ノ者ヘハ二段染メ三流以上免許ノ者ヘハ三段染メ下ケ緒ヲ賞賜スル等ノ法ヲ設ケ

一藩ノ子弟ヲ獎勵セリ

士族卒ノ子弟教育方法 藩士小頭格以上ノ子弟齡八歲ニ至レハ書院ニ出テ諸藝術ヲ脩メシム其以下ノ子弟ニ至リテハ各

師範家或ハ家塾ニ就キテ修業セシメ其俊秀ナル者ハ調査ノ上書院ニ入學スルヲ許セリ而シテ維新ノ後ニ至リテハ貴

賤ノ別ナク盡ク學館ニ於テ文武ノ學藝ヲ修業セシメタリ 私費遊學ハ勿論醫學ヲ始メ文武脩業ノ爲メ諸學生中當器ノ

一無足人ノ者ハ小身ノ事故諸藝相學候儀不行届事ニ可有之候得共文學炮術劔術柔術算術地方等專要ニ相勵ミ一藝成就シ御用立候様可致候勿論諸藝ニ達御用立候得ハ猶以ノ儀ニ付心掛次第ニテ御賞可被成下候事但代々無足人米給十八俵金給五兩二分ヨリハ御減無之御定ニ候得共右高ノ者ヨリ未熟五代打續候ハ、高減ニモ可被仰付候事

一小頭以下組部ノ儀ハ別テ小身ノコニ候得共炮術劔術柔術等致出精御用立候様可致諸藝上達且心掛宜敷者ハ御賞可被成下候事但組部炮術ノ儀ハ持前ノ業ニ付別テ出精可致事

一中小性以上嫡子共ノ儀文武藝術研究可致ハ專要ノ儀ニ付御代々様厚御世話被成下給人以上ノ嫡子ハ上達ノ者御撰被召出並中小性總領ノ儀モ右ニ準シ候處近頃年頃ニ相成候得ハ被召出並方ノ様ニ相心得追々柔弱ノ士風ニ可押移ト被遊御案事依之向後一藝成就又ハ二藝中傳目錄等ニ不至候テハ不被召出候間當人ハ勿論親々一類迄モ厚世話致シ出精可爲致候事但無足人以下トテモ悴共稽古事厚世話致シ上達可爲致候藝術ノ次第ニ寄可被召出且茶屋防主ニ呼出候義ハ十三歳以上ニ不相成者ハ不呼出候事

一足輕ノ儀ハ正徳三年濟川院様御代人柄並丈ケ五尺三寸ヲ定足輕軀相應ノ者能々逐吟味可召抱旨被仰出モ有之儀ニ付十六歳以上ニ相成一人立御奉公相勤リ不申分ハ召抱申間敷被仰出之

一文武藝術成就ノ者ヘハ向後以思召御印ノ下緒被下候段被仰出之

一養子ノ儀向後格別ノ以思召四十歳以上被仰付候事尤血統續合筋目相撰是迄被仰出候厚キ御趣意被守可成丈ケ御家内ヨリ縁組可致事

一隱居ノ儀向後六十歳以上不苦尤其人ニヨリ御差留被成候儀モ可有之事但六十歳以上ニ相成一騎立候勤向無覺束存候ハ、隱居願可差出ハ勿論ノ儀右ニ付年若ヨリ藝術ノ心掛宜敷永年重立候役向又ハ格別繁勤ノ場不調法筋無之全相勤候ハ、隱居又ハ悴扶持受度段相願々ノ通被仰付候節ハ三役ノ外給人以上二人扶持中小性一人扶持無足人三俵其以下組拔迄二俵ツ、可被下置候事

一小普請入相願候儀是迄種々被仰出モ有之候處今度隱居願六十歳以上不苦御定ニ相成候ニ付五十歳以上三ヶ年小普請入相願養生致シ全快ノ様子無之ハ御番代六十歳以上ノ者ハ隱居可相願並五十歳以下ノ者ハ五七年小普請ニ入養生致シ全快ノ見詰無之者御番代相願養生可致事但御番代相願候節ハ實子無之候得ハ御用立候者養子相願候ハ勿論ノ儀ニ候得共幼年ノ實子又ハ嫡孫等有之其者ヘ相續相願度モノハ兼々厚キ被仰出モ有之候事ニ付以御憐愍相續ノ者成長迄小普請入御用捨被成下尤幼少無勤同様ノ割ニテ引高被仰付候事

應ノ減知可被仰付候尤モ諸藝ニ達シ御用立候者ハ御賞可被成下候事但本文之御法新ニ被仰出候儀ニ付當辰ノ二十四歳ヨリ十五歳迄ノ者來已ヨリ三ヶ年ノ間家督跡式被下候節ハ引高御用捨被成下申年ニ至リ一術モ成就不致候ハ、御定ノ通引高被仰付候事

一 藝成就不致内繁勤ノ向々被仰付藝道研究ノ志深候トモ勤ノ爲ニ暇少成就ニ至リ兼候ハ、其勤功ノ次第ニ寄引高御戻シ可被下候且御用立候廉ヲ以未熟三代ノ内ニ御加ヘ被成間敷事

一 三代ノ内早死ニテ一藝成就不致御用立候勤モ不致者ハ自然ノ不幸ニ付御仁惠ノ思召可有之事

一 在番ノ内相果候者ノ悴ハ享保ノ度御定幼少減知ノ節思召モ有之候事故向後在番先ニテ相果候ハ、悴ヘハ一藝成就ノ節迄御引高ノ内爲修業料半高御寬被成下候尤不身持ノ者ヘハ勿論其儀無之並未熟三代打續候得ハ減知被仰付候筈ニ候得共一代在番先ニテ死去ノ者有之候ハ、思召可有之候事但幼少ニ候ハ、一廉ノ半高御寬被成下候

一 若年ノ節ヨリ不調法筋無之永年重立候役向又ハ格別繁勤ノ場ニ被召仕候者並同様に不調法筋無之文武ノ藝術ニ達シ格別御用立相果候悴ヘハ安永五年ノ御定モ有之候ニ付一術成就相濟候迄御引高ノ内爲修業料半高御寬被成下尤不身持ノ者ヘハ勿論其儀無之且幼少ニ候ハ、一廉ノ半高御寬被成下未熟三代打續候ハ、減知可被仰付筈ニ候得共右同斷ノ事

一 幼少ニテ家督跡式被下置無勤ノ者ハ是迄小普請金上納ノ振合ヲ以高ノ二割御引被成勤向被仰付候節並一藝成就ノ節兩度御戻被下候事

一 米給金給中小性以上ノ者御引高可被仰付處跡式ノ節高減ノ御定モ有之ニ付御用捨被成下候ノ間文武ノ藝相勵ミ一藝成就致シ御用立候様可仕尤諸藝上達ノ次第ニヨリ御賞可被成下萬一等閑ニ相心得候者ハ跡式御定ヨリ一段減可被仰付候事但代々給人米給ノ者ハ四十五俵同中小性ハ二十五俵同金給ハ七兩貳分高ヨリ御減可被成御定ニ候得共右高ヨリ未熟三代打續キ候ハ、高減ノ御扱被成候事

一 御馬役醫師ノ總領家督跡式被下候儀ハ寛政四六月中被仰出候通十六歳ニ相成職業不心掛者ハ三分二減知並幼少ノ者モ同様三分二減知右減ノ分稽古料トシテ被下置候御定ニ候得共向後十六歳ニ相成其業不心得者ハ三分二減心掛候テモ家督被下候節馬役ハ免許醫師ハ傷寒論金匱講義成就不致候得ハ高ノ内二分御預リ並幼少ノ者三分二減是迄御定ノ稽古料ハ其節ノ思召ニ可有之事但職家ノ者何藝ニ不寄其業ニ寄御擬作被下置候事ニ付縱令米給金給小身ノ者ニテモ其業未熟ニ候ハ、寛政四年御定ノ通三分二減四分二減ニテ被下置候事

人并三司師範出席有之候事但文學ノ方ハ年壹度課業有之三司師範耳出席ノ事

一右ニ付是迄二ノ丸於御殿御城代御番頭御用人役見分ノ儀ハ以來御廢ニ相成候事

一文學ノ儀ハ思召被爲在候ニ付二百石以上ノ者ハ別テ厚ク心掛可申旨被仰出之且中小性以上ノ面々廿四歲迄假令武藝專業相願卒業致シ候共其儘退學不相成乍去人々生質モ一樣ニ無之得手不得手モ有之文武兼備ト申スハ不容易事ニ付武藝專ラ研究致シ度相願候得ハ二百石以下ノ者ハ取調ノ上退學被仰付モ可有之候

一西洋砲術ノ儀ハ勿論公義ニ於テモ別段厚御世話被爲在候御時節ニ付御譜代家ニテハ猶更公義御政務ニ御倣不被爲遊候テハ御不本意ニモ被爲思召御家中ノ面々相學候様被遊度旨御沙汰有之候間若年ノ者ハ勿論追々入門ノ上出精可被致候事

一五十歳以下ノ面々日勤或ハ繁勤ノ者ニテモ御用透ノ節ハ文武可致出席兼テ被仰出候處是迄中ニハ格別繁勤ニモ無之又ハ爲差病氣ニモ無之文武稽古ハ勿論月次講釋ニモ絶テ不罷出者モ有之心得違ノ事ニ候向後月次講釋ノ外武術ノ内ニモ責テ一藝ヘハ急度可被罷出候且兼テ一藝致成就候ノ様被仰出モ有之候ニ付志候藝術專ラ修業致シ候儀勿論ノコニ候得共萬一流ニサヘ罷出候得ハ宜ト心得候テハ以ノ外ノ事ニ付壯年ノ者ハ餘力次第諸藝トモニ致研究候様心掛可爲專要候尤支配頭ノ面々右ノ趣厚相辨配下組下等出精致シ候様精々可被有之候事

一書院中齒德ヲ尊ヒ可申儀勿論ノ事ニ付文武稽古所ニ於テ位班ノ儀館中又ハ各場中其流儀ニ限リ此度被仰出候規則ノ通位班可相定尤無足人ハ差別可有之候且諸流一同之列座順并御上被爲入御前ヘ一統罷出候節ハ追テ被仰出候儀モ可有之候間先是迄ノ通可被相心得候事

一文武他所修業并專業願書向後師範三司承知ノ上頭支配ヘ可被致進達候充無勤ノ面々ハ是迄ノ振合通リ可被相心得候事

一御省略御年限中ニテ面々被下高モ相減候時節ニ付難澁之場ヨリ自然修業ノ志ヲモ達兼候者モ可有之哉ト被爲思召候ニ付乍聊書院中ノ入用御手元金ノ内ヨリモ御差加エ被下置候段被仰出候ニ付難有相心得出精可被致候事
右之通被仰出候間被得其意支配有之面々ハ支配下組下ヘモ不洩様可被申渡候事

年寄役ヨリ書院司成ヘ達書(安政四年丁巳六月)

文武教官導方并行狀等且諸生才能ノ様子藝術上達ハ勿論平日ノ行正シキ者等三司評議ノ上相撰毎年十二月限リ書出シ可被申事

一寛延元年化城院様御代無足人以下追々竈數相増往々ハ年來精勤致シ候者モ無餘儀御暇被下候ノ様可相成ト跡式減等ノ義被仰出有之候得共其後次第ニ相殖此姿ニテハ右御代被遊御案事候通ニテ此上御扶助並出精ノ者御賞被遊方モ無之様可相成哉ト被遊御心痛候ニ付以來不埒ノ筋有之家斷絶被仰付候分是迄御大赦ノ節家名御立被成下置又ハ歸參被仰付候得共濟川院様御代迄被召抱候家筋並拔群勤功有之候家ノ外ハ出奔致シ候者ノ跡同様向後ハ家名御立並歸參不被仰付段被仰出之但時抱ノ者中間部ニ至ル迄年來出精相勤候得ハ是迄ノ仕來リニテ御普代被仰付候得共以來ハ拔群ノ勤功有之者ノ外ハ容易ニ不被仰付段仰出之候ノ間支配頭ニテ相心得召仕可申事

右之通永久之御制度御定被仰出候ニ付文武ノ藝ニ相達忠孝ノ道相勤候様其身心掛ハ勿論子弟ヘモ相教可申段被仰出之尤文武稽古ノ御仕法並御手當方等ハ追テ被仰出候事

造士書院設置ノ際達書(安政四年丁巳六月)

去冬衣食住吉凶贈答諸事總テ御改正ニ相成候ハ畢竟異船渡來以後從公義モ被仰出候通武備品々厚御世話被爲在候折柄ニ付御家士ノ面々ニモ一統平常ノ事ニモ格外質素儉約相用武備ニカヲ盡シ可申様ニトノ尊慮被仰出候儀ニ付武學專務ノ時節ニハ候得共平常ハ勿論萬一ノ節トモ別テ御用ニ立可申儀ニ付文武一致ニ行ハレ候様被遊度文學ヲモ品々御世話被仰出候事ニ付御趣意ノ趣難有相心得御省畧中別テ艱難ノ中ニハ可有之候得共修業人ハ勿論父兄ニモ可成丈節儉相用稽古事精入文武ノ道習熟致シ候様心掛可被申候事

一文武稽古所一郭ヲ向後造士書院ト相唱可申學問所ハ舊ニ依テ求道館ト相唱童生素讀手習禮節ノ稽古所ヲ就外舍兵學所ヲ兵機堂武藝所ヲ總名演武場ト相唱可申様被仰出之

一兼テ御沙汰ニ相成居候文武御制度ノ法則書院奉行職ニ御渡ニ相成候間文武諸學生ノ面々求道館ニ罷出拜見可被致候

一御在城中文武御聽聞御覽ノ儀夏壹度は迄ノ通被仰出御滯府ノ節ハ年寄役中老役御名代被仰付御城代御番頭御用人役等出席是迄ノ通ニ候事但本文ノ節一藝ニモ罷出兼候ハ、以來四十歳以下ノ面々師範ハ勿論頭支配ヘモ相斷可被申候事

一小頭席以下ノ者爰許ニテ是迄職役ノ外御透見無之候處諸藝術ノ内免許濟ノ者ハ向後其業御透見被成下候段被仰出之

一春秋冬三季一度ツ、文武ノ試ミ被仰出之尤春ハ年寄役中老役御用人役並三司師範出席秋冬ハ年寄役中老役ノ内一

忠臣義士共相成祖先ノ名ヲモ顯シ候様義理ヲ以テ義理ノ心ヲ養ヒ士氣ヲ振ヒ起シ候様教導可被致候
右之通被仰出候間萬端申談諸學生教育方念入可被相勤候事

文武兩學生心得

此度文武諸藝術講習スル處ニ造士書院ト相唱候儀ハ人材御教育御仕立ノ御場所ト申儀ニテ文學ハ衆藝ノ本ニ付武藝所マテヲ合セテ書院號ニ被仰出候事ニ候文學ハ童生ヲ爲習候所ヲ就外舍ト唱ヒ成童以上ノ學ヲ處ヲ求道館中内舍上舍ト局ヲ分チテ習業セシム武學ハ兵學ヲ講スル處ヲ兵機堂ト名付ラレ刀槍炮弓等局ハ分レ凡テ演武場ト云其内炮術馬術ハ院外ニアレ是又書院ノ預リナリ院中ニ於テハ炮ハ素矯馬ハ木馬ヲ習フニ過キス此外凡テ諸武藝皆場中ニテ習フヘシ

一文武ハ一致ノ道ニシテ武ヲ學フ者モ文ヲ兼テ候得ハ武中ニ文カ付添フテ相行ハレ偏武ト相成申間敷文ヲ學フ者モ武ヲ心得候時ハ文中ニ武ヲ帶シテ相行ハレ候ニ付文弱ニ落入申ス間敷候凡士タル者倫理ヲ辨ヘ信讓ヲ重シ緩急事アル片ハ攻守ノ道ヨリ單騎ノ働マテ差支ナキ様心掛置社稷生民ノ衛タル是亦武ノ本意ナリ不然ハ假令群書ニ涉リ詩文ヲ工ミニストモ是ヲ資トシテ人ニ驕リ或ハ輕薄放蕩ナル類是文道ノ罪人ナリタトヒ韜略ヲ究メ武技ニ長スルトモ是ヲ資トシテ人ナ欺キ或ハ爭端ヲ開クノ類是亦武道ノ罪人ナリ是等ノ弊常々省察イタシ實意ノ修業專要タルヘク事

一文武トモ吳々モ一致味ニテ君父ニ事ヘ世ニ交リ候外ニ何モ無之筈ノコト今日ノ事ヲ離レ手遠キ所ニ求メ可申ニハ不及候ノ間唯々家ニ居テハ孝慈弟愛門ヲ出テハ朋友ニ睦マシク互ニ切磋主トシテ長ヲ敬シ幼ヲ愛シ偕又官ニ當リテハ君家ニ忠誠ヲ盡シ一廉御用ニ相立可申心得文武兩道ノ要務ニ有之候事

一求道ノ二字御筆ノ御額平日上ノ間ヘ被掲置候間上ノ被遊御座候同様ニ相心得可被申候事

一書院入學ノ輩ハ幼年ノ者モ一際行儀正敷相成候様有之度事ニ候縱令遊戲ノ節タリトモ非法ノ振舞有之間敷家ニ居テハ朝夕父母ノ安否ヲ訪ヒ稽古ニ出入致シ候節ハ屹度相告可申且年長スルニ隨ヒ公義ノ御法度御家ノ御系圖并御制度等人々不心得候テ不叶事ニ候習學ノ暇ニハ追々覺エ置候様可被心掛候事

一文武場中ハ勿論平生共溫恭寡默ニシテ苟且薄劣ノ所爲有之間敷事

一水ハ方圓ノ器ニ隨ヒ人ハ善惡ノ友ニ依ル事ニ候得ハ交遊ノ道別テ相慎可申事但文武諸藝ノ勤惰人品ノ高下モ皆交ル所ノ善惡ニヨル事多分可有之候

一 是迄引立ト被仰付置候處向後師範ト相唱候様被仰出之但本文之趣無足人以下ノ引立ヘハ書院大目付申渡候様通達可被致候

一 諸流稽古人藝術ノ上達且平日行狀正シキ者等毎年文武師範ノ者ヨリ門弟ノ内相撰封書ヲ以毎年十二月朔日限り各迄差出候様相達置候間揃次第其儘當役エ可被差出候事但本文ノ趣無足人以下ノ諸師範ヘハ書院大目付ヘ差出候様可申渡旨同所大目付ヘ通達可被致候

一 無足人ノ封書大目付受取候上各方ヘ差出候様是又通達可被致候

一 書院中ノ學費追テハ學田之御渡モ可有之候得共御新制ノ儀ニ付一歳ノ諸入費何程ト申ス儀巨細ニ難立候間當分ノ處ハ十分ノコニハ不被爲届候得共御暮ノ内御取除并御手許金ノ内ヨリモ御差加エ御渡被下候間諸稽古人御賞御手當又ハ渡物小破修覆等ニ至ル迄兼テ内調モ有之儀ニハ候得共尙口々大凡取調可被申聞候

書院中ニテ相唱候官名以來左之通 司成 造士書院奉行○司業 造士書院肝煎○司憲 造士書院大目付○提學儒者○助教 儒者助勤○訓導 讀書助頭取○正授讀 讀書助○佐授讀 讀書^{見習}身分無之者○師範 諸流引立○員長 諸流世話役○典籍 御書物方○小監 月持ノ徒目付○主事 肝煎下役○書記 帳付
右之通被得其意夫々ヘ相通シ又ハ可被相達候

三司心得

一 文武ノ學政ハ賢者能者ヲ仕立候儀ニ付別テ緊要ノ事ニ候間此度右學習所ヲ惣テ造士書院ト名付其内ノ政事ヲ三司ニ夫々職トスル處ヲ分テ被仰付候得共畢竟ハ學政ノ能ク整ヒ可申爲メニ候間三司共ニ能申合一和シテ相勤可被申候決シテ我司ル所計ヲ立テ他人ノ職掌ヲ不搦等ノ事無之相持ニテ手落無之行届候様大要ニ有之候

一 守成上文遭遇右武ト申ス古語有之候得ハ時ニ隨ヒ或ハ文ヲ上或ハ武ヲ右ニ立候ノ事時勢ノ當然ニ候去レ^レ譬ヘ武ヲ右ニスヘキ時勢ニ在テモ綱常倫理ハ厚ク不相辨候テ不叶事ニ付是非武ニ文ハ難離文武一致ニ有之度事ニ候依之文道ハ虛文ニ流レス武道ハ偏武ニ落入リ不申様引立被申候事可爲緊要候

一 學問ハ道ノ修業ニテ今日ニ活用スヘキ爲メノ義勿論ニ候處兎角技藝ノ様ニ視ナシ專門ノ外ハ關係無之事ニ心得候ハ大ナル誤リニ候如何様詩文等ヲ專ラニ作り故事ヲ博ク覺エ候計ノ者ハ一箇ノ藝人ニテ候仁義ヲ旨トシ五倫ヲ明ニシ身ヲ修ルヨリ家國ヲモ治候脩業ハ人々不學シテ不叶事ニ候條能々被相心得取違無之様引立方專要ノ事ニ候
一 士風ハ義理ニ強ク利勘ニ疎ク有之度事ニ候諸藝引立候ニ利ヲ以勸メ申問敷何卒君家ヘ累代御大恩ノ萬一ヲモ奉報

通鑑、資治通鑑綱目、以上三部ノ内壹部讀過 右準免許

山鹿流 中傳戰法傳 武教全書、孫子、吳子、但試業ノ節順々ニ書出シ試ヲ受ヘシ 右ノ課業相濟候上戰法傳免之

〔當日試ノ法〕 武教全書^{壹ヶ所} 城取紙圖^{居城一枚} 土圖壹面五拾騎人數積リ并小家割 右之通差出ヘシ

免許大星傳 武教全書、七書、但四時御試ノ節順々ニ書出シ試ヲ受ヘシ

〔當日試ノ法〕 武教全書^{壹ヶ所} 七書^{壹ヶ所} 外夷ト戰フノ策^{但漢文ニテモ和文ニテモ} 右之通差出スヘシ

劍術、鎗術、扱心流體術 右比較勝負試ミ類藝手合是迄御制度ノ通

起倒流、淺山流、一心流 中傳當日試ノ法 残り合三百五拾但初傳以上中傳迄相手○免許當日試ノ法 残り合五百但

初傳以上免許迄相手

西洋砲術 中傳 生兵教練、小隊教練右熟練ノ者 三斤、六斤、十二斤右野戰打方町積仰角増減右ノ業熟練ノ者中傳

免之

〔當日試ノ法〕 三斤煩實彈中打但町積ハ於其場三司望之 小隊教練號令、ケヘール、カラヘイン右取扱方一ト通試之

八匁銃百打(中八拾)右於角場試之

同免許 生兵教練、小隊教練右熟練 三斤、六斤、十二斤右實彈野戰打方町積仰角増減 大隊教練、號令熟練 十五

寸、二十寸、十八寸 廿四斤ヨリ三十六斤迄、臼砲忽微砲但町積リ仰角増減 右ノ業成就ノ上免許授之

〔當日試ノ法〕 三斤、六斤右兩煩ノ内實彈中リ打試之 十三寸臼砲右實彈中打町積ハ於其場所三司望之 小隊、大隊、

右教練號令試之但人數不足ノ節ハ算木ニテ試之 八匁銃百打(中九十五)右於角場試之

和流砲術 中傳 右流儀ニ寄候事ニテ豫定メカヌシ但業ノ次第ヲ追ヒ熟練ノ上免之

〔當日試ノ法〕 拾匁銃百打(中八拾) 右於角場試之 三斤三百目百三十目銃等ニテ實彈中リ打右於遠町場積等ハ三

司於其場望之

同免許 流儀ノ業ヲ追フ前ノ如シ

〔當日試ノ法〕 拾匁銃百打(中九十五) 右於角場試之 三斤六斤三百目煩等ノ内ニテ實彈中打右於遠町場積等ハ三

司於其場望之

弓術 中傳 尺二寸の千射(中矢七分) 大的千射(中矢八分) 指矢前肩樣(五千本) 右三ヶ條トモ追々致研究一條

成就ノ者掛弓不拘中傳相許可申事的前計ニテ指矢前稽古不致一方計ノ者ハ掛弓ニテ試ヲ受ヘシ但十五歲以上自身

一諸稽古ノ上ニテハ別テ長少ノ禮ヲ相愼長者ハ少者ヲ愛シ少者ハ長者ヲ敬シ可申尤少者タリトモ業ニ長シ候ハ、長者ヨリ愛敬ヲ盡シ少者ニ於テハ其身業ニ長シ候共長者ヘ對シ易慢ノ振舞決テ有之間敷事但稽古中勝タリ人ニホ
 コル間敷負タリトモ人ヲ恨ミ申ス間敷業ノ甲乙ヲ論候儀ハ師範ノ職ニ候得ハ傍人ヨリ妄ニ毀譽致シ申間敷候
 右被仰出之趣厚相心得文武出精可被致候事

家督跡式改正ノ廉達書(安政七年庚申十二月)

文武ノ内一藝成就ニ不至者ハ家督跡式ノ節御引高被仰付候趣去ル三年被仰出候處猶又御參考ノ上向後身分愼方宜キ者ハ縱令一藝成就ニ不至共兼テ被仰出候十藝ノ内中傳二流相濟候者ハ免許ニ準シ御引高御用捨被成下候段被仰出之
 二流中傳相濟候者被召出ノ處前條同斷御參考ノ上十藝ノ内一流中傳相濟其上身分愼方宜者ハ向後被召出候段是又被仰出之
 右ノ條々被仰出候間可被得其意候事

家督跡式ノ儀ニ付改正ノ廉達書(文久二年壬戌四月)

文武藝術ノ内一術成就不致者家督跡式御定ノ通可被下置候得共高ノ内一割引高被仰付身分愼方宜ク一藝成就候上引高御免可被成下段去辰年被仰出其後一昨申年十藝ノ内二流中傳相濟候者ハ免許ニ準シ御引高御用捨被成下候段被仰出候處向後身分愼方宜ク文武ノ道厚相心掛候者ハ縱令二流中傳ニ不及共御引高ノ義ハ以前ノ通御用捨被成下候事
 一萬一藝道未熟ノ上御用立候勤モ不致者三代打續候節ハ相應ノ減知可被仰付段去ル辰年被仰出候處深キ以思召向後以前ノ通減知御用捨被成下候事

一文武ノ内一流中傳相濟候者ハ可被召出段去ル申年被仰出候處向後文武ノ内長進且身分愼方宜敷者御撰ノ上可被召出候事

右之條々御參考ノ上猶此度厚以思召ヲ被仰出候間何レモ難有相心得文武ノ義虛文粗暴ニ不流樣誠實ニ心懸藝道無懈怠出精御奉公可被致精勤候事但支配有之面々ハ支配下ヘモ不洩樣可被相達候事

文武諸藝術程度比例改正達(文久元年辛酉九月)

文武ノ御制度去ル已年安政四年被仰出候處中傳免許ノ科目諸流ノ鈎合猶不同アリテ平均ヲ得サルヨリ品々御取調ノ上此度科目ノ御定左ノ通被仰出之

文學 小學、論語、孟子、全講義ノ者 右準中傳○大學、中庸、詩經、書經、全講義ノ者 左氏傳讀過 綱鑑易知錄、溫公

成條夫々流祖ヨリノ掟相守候儀ハ勿論且流儀ニヨリ中傳ニテハ師範代ヲモ相勤又ハ隨身ノモノ有之節引立相成候程ノ重キ儀ニ付傳書ノ意味解得候事相成ラサル若輩ノ者ニテハ假令科目ノ業出來候見込ニテモ心術技藝トモ粗其位ニ至リ候上相傳可致事

右之通被仰出候事

維新ノ後學館改正ノ達(明治二年四月)

今般藩政御一新ニ付テハ都テ朝廷ノ御政體ニ基キ文武兩道ノ義尙又一際御興隆人才教育ノ道被爲盡度思召ヨリ夫々懸リノ職務相任シ精々爲致候ニ付藩内何レモ教場ヘ罷出奮發脩業可致候申迄モ無之候得トモ偏文偏武ニ不流兩道一致ノ目的ヲ相立士氣ヲ振起シ四維不弛様可心懸候事但館中諸事巨細取極ノ廉追々少參事ヨリ爲申達候間兼テ心得アルヘキ事

一文學教官ノ向ニテ是迄家塾ニ於テ藩内ノ面々ヘ相對ヲ以テ授業致シ來候得トモ學館被建置候義ニ付内外ノ差別無之一統右教場ヘ罷出致修業候ハ、學風一途ニ歸シ館中興隆ノ場合ニモ立至リ可申依テハ向後教官勤役中家塾授業被禁候事但教官外ノ者中ニハ自己勝手ヲ以致授業候義ハ強テ差止候義ニハ無之候得トモ自家手狹ノ場合ヨリ寺院又ハ在町方ヘ借家致シ授業候義自然取締向ニ相拘リ不宜義ニ付堅ク被禁候事
一文武館總名向後文武藩學校ト可稱候事
右之通相達候事

藩學校ヲ以假ニ議院ニ充テ左ノ制ヲ設ク(明治二年庚午)

藩政維新ニ付テハ百撥公平至當ニ販センヲ欲シ我等并ニ參事夜ニ日ニ思ヒヲ焦シ慮ヲ苦ムルト雖モ固ヨリ所治境内戸數口算衆夥ナレハ事故モ亦從テ鮮カラス故ニ遺失ノ弊免ル、ト能ハス治及ノ功關クルヲ易シ今ヨリ後ハ文學校ヲ兼議事院ニ設ケ置キ古ノ敷奏言ヲ以スル或ハ献策建議等ノトニ倣ハント欲ス毎月二次ノ會ハ題ヲ設ケ出ス庶クハ二等官ヨリ以下ノ議員宜シク之ニ對フヘシ不時下問下議ノトハ一藩ニフレテ公議セシメント欲ス庶クハ別紙規則ノ通相心得聊カ諱憚スル所ナク心腹腎腸ヲ敷テ國家ヲ憂フルノ誠ヲ献納センヲ若シ徒ニ誹謗罵嘲ノトニ涉ラハ恐クハ唯益ナキノミニ非ス翻テ人心ヲ蠱惑スルノ害ヲ生セントス敢テ望ム所ニ非ス

明治三年月日

知事

議事會規則

傳書ノ取調モ出來候モノ、事〇免許 尺二寸の千射(中矢九分) 大的千射(中矢九分五厘) 指矢前肩様(壹萬本)
右三ヶ條ノ内一條成就ノ者免許相傳可申事尤指矢前肩様ノ儀ハ矢數多ニ付射掛射留トモ御定ノ掛弓ニテ試ヲ受
中頃替弓相用候儀ハ御用捨ノ事

高麗流、大坪流馬術 中傳 遠馬但一日六里往返拾貳里、遠乘致シ馬ノ息合試ミ尤日ノ長短ニテ違ヒモ有之事ニ付長
日ノ時ヲ度トス 右終テ後日馬場乘試之〇免許 遠馬但一日拾里往返貳拾里遠乘試之 右終テ後日於馬場試前ノ
如シ

調息馭術 中傳 十息見傷論聞書等相濟十五息ノ業前并聞書相濟度々乗出試一日七里往返十四里遠乘致シ人馬トモ
勞カレ無之体相見候者免之 右終テ後日於馬場駢乘試之〇免許 前書相心得候上貳十息ノ業前相濟一日拾三里往
返貳十六里遠乘致シ無差支人馬勞レ無之者免之 右終テ後日於馬場試前ノ如シ

算術 中傳 天元〇免許 點竄

西洋學 中傳 和蘭文典前後篇講義濟〇免許 究理書ノ内スユールブークナチュルキンテ、ハントブークナチュル
キユンテ講義濟

常慎流居合 中傳 一日ニ千五百本〇免許 一日ニ貳千本

慈玄流居合 中傳 韜打一日ニ百本〇免許 韜打一日ニ百五十本

强波流棒術 中傳 一日ニ千五百本〇免許 一日ニ貳千本

自神流棒術 中傳 一日ニ千本〇免許 一日ニ千五百本

醫學 眼科、外科、針治 右ノ内一術免許ノ者 金匱、傷寒論講義 右五ヶ條之内一條成就ノ者被召出貳條研究相濟
候者貳流中傳ニ準シ御引立御用捨ノ事 素問靈樞講義 醫療并高出來病人引受候者 右二條ノ内一條出來候者

免許ニ準シ御賞賜ノ事

前條科目此度補正被仰出候上ハ堅ク相守師匠タルモノハ以此教授シ諸生タル者ハ此ヲ以テ相學可申候事乍然此ノ科
目ヲ標のト致シ是ニテ相足り候ト申フニハ萬々無之候上ヨリ御立被遊候御法度ハ都テ中人以下ノモノ、爲ニ御立被
成候ニ付天稟相備候者ハ何ホトモ相昇可申様心カケ可被申候只々氣質不得手ニテ年來何ホト出精相勤候テモ立超ハ
六ヶ敷モノ勉強ノ科ニヨリテハ三司師役吟味ノ上尙御尊慮モ奉伺厚志ノ次第ヲ以免許中傳ノ科ニモ相昇セ可申事但
免許ノ義ハ人ノ師表トモ相成候義ニ付技藝ノ上ハ申スニ不及行儀正敷多人ノ教導出來候程ノ者ニ無之テハ相傳不相

ノ遊人トナリ爲スヘキ業ハ省モセス惡シキ事耳ニ身ヲ入困窮ノ餘リヨリ無量ノ刑科ヲ犯シ候ニ至リ夫々仕置申付ラレ候ハ畢竟教ナキヨリ致ス處不慙ノ事古語ノ教スシテ殺スト云モ如此事ヲ申ニテ候乍去古ヘノ鄉學校杯ト申スハ手輕ニ取立ラレヌモノニ候間追テハ何トカ上ヨリ御世話モ可被成下候得トモ差向候處里言ニモ寺子屋ト申事有之此度改テ御領中ノ社家寺院ヘ指南致スヘシ段相達候間何レモ年頃七八歳ニモ成候者ハ夫々相頼ミ讀書筆算ノ稽古怠ラス可爲致學文ノ道ハ實意ヲ本ト致シ候事聊文字ヲ識候迎猥ニ高遠ニ趨リ職業ニ怠リ候様成行候テハ却テ不宜事ニ候間其段厚ク心掛可申名主役人等ハ御趣意ノ段相辨ヘ何レモ深切ニ世話致シ遣シ候様可致心掛宜シキ者共ヘハ不時ノ御褒美モ可有之吳々モ相勵可申候事

社寺ヘハ本文ノ外左ノ通達セラル 別紙ノ通在町共御布告相成候間銘々最寄々々ニテ引受指南可致其段ヲ御奉公ト相心得深切ニ世話可致遣行届候者ヘハ臨時ノ御賞モ可有之候間何レモ精々相勵可被申候事

學校

校名 初メ求道館ト稱シ安政度造士書院ト改稱シ維新ノ後更ニ館林藩學校ト稱ス

校舎所在地 上野國邑樂郡館林舊城内大名小路

沿革要略 弘化四丁未年三月秋元家移封ノ翌年舊藩主從四位秋元志朝求道館ヲ設立シ漢學ヲ以教導シ其後安政四丁巳年六月大ニ學

制ヲ改革振張シ文武兩道ヲ一場ニ於テ兼修セシメ造士書院ト改稱ス維新後明治二年從五位秋元禮朝ニ至リ又支校ヲ設ケテ皇洋兩學

ヲ教導シ更ニ館林藩學校ト稱ス明治四辛未年七月廢藩置縣ノ際ニ至ル迄凡廿五ク年間授業相續ス同年十一月館林廢縣

ニ命ヲ以テ閉鎖ス 安政度ノ改革ノ如キ華奢ヲ禁シテ文武ノ道ヲ擴張シ一藩制度上ノ面目ヲ一新セリコレ素ヨリ藩主

ノ意ニ出ツルト雖モ當時執政岡谷瑗磨之介儒官田中金治兩士ノ力亦居多ナリトス

教則 用書ハ三字經、大學、中庸、論語、孟子、小學、易經、詩經、書經、禮記、左氏傳、史記、前後漢書、綱鑑易知錄、溫公通鑑、資

治通鑑綱目トス其他和漢歷史諸子百家ノ書ニ至リテハ一定ノ制ナシト雖モ亦會讀輪講等ノ用書ニ充ツ 皇學洋學及醫

學兵學等ノ用書ニ至リテハ今參按ニ供スヘキモノナシ

授業ノ順序方法ハ左ニ列記スル書目ノ次序ニヨリ素讀ヨリ始ム○三字經、大學、中庸、論語、小學、孟子、易經、書經、詩

經、禮記 右素讀ヲ以テ外舍生十五歲以下ノ業トス○春秋左氏傳、史記、無點漢書 右素讀内舍生十五歲以上ノ業トス其

左氏傳卒業ノ者ハ別試ヲ經テ講義ニ進マシム而シテ史記漢書ハ兼テ素讀質疑セシム○小學自給古篇至十外篇 論語除章 孟子同上

一 每月二會以朔日十六日爲期

一 每會出二題一則面課富國強兵等之事一則後課除弊獻美等之事

一 議事雖做對策之法亦不敢拘泥專以文義條暢事理明晰爲主

一 皇文漢文不限眞字行字但禁用洋字洋文

一 議事既成者呈之於會贊々々呈之於會正々々一閱之若有誤字誤文則還之使改正而後呈之於會宗々々與會長同一閱之而後獻之於大參事々々一閱之而後獻之於知事公

一 欲改誤字誤文者日昃暑移不暇淨書則雖紙片貼上換寫可也

一 臨操筆構思則生一任其身思之所安

一 每會以已而集以申而散若有疾病事故者必告其由於會贊々々告之於會宗

一 有下問下議之事而遠期則別刻日近期則遲期而發之

一 下問下議則一藩共之其欲對且有言者雖身賤官閑宜赴會之不會亦何爲咎

一 有其對其說者封事上之其他規則如前

古輔理雖唐虞三代之隆既有敷奏以言之事況其下乎至漢有對策對策之設歷代因之要之皆啓言路以來善謀嘉策也今設此議事會蓋亦其遺意耳宜各敷其心腹腎腸以議國家之弊詢成國家之主若或苟涉罵詈誶毀則恐反涉干無用之事矣庶照規則以勿愆

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ各自ノ意向ニ任セ家塾寺子屋等ニ於テ脩業セシメ藩立學校ヘ入學スルヲ許サス而シテ農民等ノ學事ニ從事スルヲ禁止スル等ノ制ナク反テ神官僧侶里正等ニ諭シテ人民教育ノ義方ヲ示シ其獎勵宜キヲ得タル者ニハ臨時賞與セシモノアリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルモノハ他ノ檢束ヲ受クルヲナク何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得セシメタリ右二項ニヨリ左ニ論達ノ文ヲ掲ケテ參考ニ供ス

在町へ達書(明治二年己巳五月)

凡人タルモノ教ナクシテ其性善ト雖嗜欲ノ爲メニ掩ハレ惡キ道ニ入ハ必然ノ事ニ候王公貴人ノ如キハ師保ノ掟モ夫々有之事ニテ自ラ直キ道ニモ入易キ事ニ候得共末々小前ノ者共ニ至リ候テハ教ル人ニ乏シキ耳ナラス東西ヲ辨ル頃ヨリ夫々ノ手業ヲモナシ覺ヘ不申候テハ日々ノ取續キモ成兼ル處ヨリ學フヘキ事ヲモ不學果ハ心得違ヨリ無能無藝

一 外舍生ハ求道館脇就外舍ニ於テ朝五ツ時ヨリ四ツ時迄八歳ヨリ十四歳ノ者讀書ノ所トナシ四ツ時ヨリ八ツ時マテ手習所トナシ尤モ求道館ヘ泊リノ書記早朝中間ニ命シテ舍内ヲ洒掃サセ追々童生出席ノ上前夜寓直ノ訓導見廻リ中小性ノ子弟ヲ東無足人ノ子弟ヲ西ト坐ヲ別チ組合ヲ設ケ伍長ヲ立テ教ル者ノ出ルヲ待間前日ノ業ヲ復習セシメ雜話戲謔ヲ禁シ其上教官出テ授業相始メ各生長ヲシテ其傍ニ坐セシメ一兩次授タル餘ヲ承テ業ヲ手傳ハスヘシ但禮節ハ八ツ時ヨリ始ムヘシ

一 内舍上舍ノ二舍ハ求道館中ニ於テ其間ヲ分ツヘシ外舍生ノ退々年長シテ十五歳ニ成リタル者ト又始テ入學シタル十五歳以下タリトモ學業進ミ衆ニ秀タル者ハ三司并提學助教ノ商議ニテ内舍ニ昇ラシムヘシ

一 内舍ノ授業朝五ツ時ヨリ始ムヘシ各生長チシテ其傍ニ坐セシメ業ヲ手傳ハスヘシ

一 内舍ニハ訓導正佐授讀交々壹人夜中寓直スヘシ但翌朝外舍見廻リノ義前條ニ出ス

一 外舍ヨリ内舍ニ昇ル時束脩ニ及ス但昇堂ノ禮ヲナシ條約ヲ讀ミ聞スルハ入門ノ者ニ異ナラス

一 十五歳以上ニシテ内舍ニ入學スル者外舍ニ殊ナラス但入學束脩ノ禮ヲ行ハ童生ト違ヒ必麻上下ヲ着用スヘシ

一 上舍ノ授業ハ朝五ツ時ヨリ始ムヘシ此業ハ聽講質問ノ科ナリ尤提學一講助教一講訓導一講ト分ツヘシ提學ハ提學寮助教ハ助教寮訓導ハ上舍皆其所ニ於テスヘシ又各其講書ヲ異ニシ聽講授業ノ者モ兼テ分屬ヲ定ムヘシ且小學四書ニテハ難易ノ章ヲ分テ易ヲ先ニシ難ヲ後ニシ必次叙等差ヲ猥ニ踰ル事ヲ許スヘカラス

一 難章ハ論語ノ一貫克己復禮孟子ノ浩然ノ氣盡心杯ノ如キモノ皆總テ提學助教ニ講セシメ其外ノ平易ノ章ヲ訓導ノ持トスヘシ難章ハ鈔錄シ置キ別ニ一書トナシテ定メ置クヘシ

一 内舍上舍ノ學生稽古ノ節役席ニ不拘齒德順タルヘシ然レトモ各局ノ内無足人以下ハ可有差別事

一 講讀課業ノ次第新ニ其定メアル妄ニ踰等教ヲ乞フ者アリトモ許容スヘカラス四書小學ノ講義成就ヲ以武技ノ免許ニ準擬スルヲ故文學習業ノ者講義成就ニ年久シク掛リ居ルヲハ不得止ヲナレハ大概中人ノ資性ニ就キ其期ヲ定ル論語ハ何日位ニ卒業スヘシ孟子ハ何日位學庸小學ハ何日位ト兼テ日數ノ期限ヲナシ尤一書ノ内ニテモ初學ノ者ハ先平易ノ章計ニテ日數ヲ定メ其業一ト通り卒業シタル後又難章ニ何日ト定メ其日數ニテ成就シタルハ中式トシテ試業ノ節賞賜アルヘシ

一 授業ハ素讀ノミニ非ラス講義ノ科ニテモ一日ハ聽キ一日ハ復講シ但質問ニテ濟モノハ疑シキ儀計ヲ聞テ退クヘシ其内講說ニナレサル者ハ自分復講シテ是ヲ質スヘシ

小學 內篇自立教
至千敬身

大學、論孟ノ難章、中庸 右順次日課ヲ以テ講授ス○史記 本紀列傳
內 左氏傳一二卷 右自講ヲ卒ヘ且

無點ノ書ヲ講讀スルヲ得ル者試驗ヲ經テ上舍ニ昇ラシム 內舍生ハ未タ素讀科ニ在ルモ輪講ノ席ニ列セシメ講義ニ入

ルノ生徒ハ四書小學ノ外別ニ一課ヲ設ケ歴史諸子逐次講習セシム 訓導授讀等ノ輩ハ亦別課ヲ設ケ五經及ヒ濂洛關閩

ノ書逐次會讀ヲ以テ研習セシム 時限ハ素讀質問講義共毎日朝五ツ時ヨリ四ツ時マテトス而シテ質問及講義ハ九ツ時ニ

モ及フアルヘシ 毎月一六ノ日ヲ以テ講釋日トシ 一般藩士ヲシテ
聽聞セシム 當日生徒受業休暇トス 毎月二八ノ日生徒授業後ヨリ別

課輪講トシ又毎月二十九日ヲ以テ素讀生復讀トス

學科學期試驗法及諸則

學科 漢學 維新ノ後
之ヲ設ク 和學 維新ノ後
之ヲ設ク 洋學 維新ノ後
之ヲ設ク 醫學 算法 習禮 筆道 兵學 弓術 槍術 砲術 馬術 劍術 柔術

生徒ハ文武ヲ兼修セシムルノ主意ナレモ二百石以下ノ者ノ子弟ハ其者ノ生質ニヨリ武藝專門願ノ上許可スル者アリ

文學武術程度比例 安政年度
士書院ノ制 文學 小學四書
講義成就 兵學 山鹿流大星但外
流モ右ニ準ス 禮節 小笠原流家禮免許
但外流モ右ニ準ス 算術 天元術 右武藝 劍術槍術砲術
柔術弓術馬術 ノ免許

ニ準ス

文久元年辛酉九月左之通り改正ス 文學 小學論語孟子
全講義ノ者 右武藝ノ中傳ニ比ス 文學 大學中庸詩經書經全講義左氏傳讀過綱鑑易知
錄溫公通鑑資治通鑑綱目ノ三部中一部讀過

右武藝ノ免許ニ比ス

學期試驗法及諸則ノ如キ其時代ニヨリ多少ノ變交アリ且其書散逸シテ今悉ク之ヲ輯集スル能ハス依テ左ニ造士書院ノ

諸則其他二三ノ規則ヲ輯錄ス

求道館規則

一男子甫テ八歳ニ成求道館ヘ入學并手習禮節入門ノ刻其父兄讀書ハ提學ヘ書學禮節ハ師範ノ方ヘ申入最モ名札ニ年

ヲモ認加ヒ持參致シ何日ニ入學致サセ度由ヲ申述ヘ提學師範ヨリハ三司ヘ通シ司憲ヨリ少監ヘ沙汰シ小監ヨリ書

記ノ當番ヘ沙汰シ名簿ニ姓名年齢并入學ノ月日ヲ載ヘシ是ハ八歳以上十四歳以下ノ外舍生也內舍生ニ出ル者連モ

申入又ハ申通ル式異ル事ナシ但十四歳以下ノ童生ハ入學ノ日麻上下ノ處袴ニテモ不苦最モ父兄タルモノ一人差添

先求道館ニ行キ定ノ銀子ヲ束脩トシテ持參致シ先ツ提學ノ前ニ出賴ノ口上申述夫ヨリ助教訓導正佐授讀生長ヘモ

相賴ミ惣書生ヘモ一揖シテ館ヲ退クヘシ其明日ヨリ外舍ニ出テ業ヲ受ヘシ手習禮節モ是ニ準シ夫々師範并員長求

道館ヘ罷出入學ノ禮ヲ受是亦翌日ヨリ業ヲ受ヘシ尤モ入學ノ日心得トスヘキ條約ヲ館中ニ於テ讀書ハ訓導手習禮

節ハ師範員長ノ内是ヲ讀聞スヘシ外舍生入學ノ日ハ外舍當番ノ訓導壹人館中ニ出テ進退周旋ヲ扶クヘシ

學ノ試可有之候縱令幾日ノ專業タリトモ一句一試ト相定可申候

一專業ニハ成ヘク素讀相濟候ハ、可被仰付候間多分壹人立書見モ相成且又專業ノ者會讀對讀等日々相課シ可申候提學助教ノ教ヲ受候トハ一日兩度ニ止ルヘク候夫々トテモ閑忙ニ可隨候尤素讀科中ノモノ通ヒ專業ノ儀勝手次第ノ事但出入トモ小監ヘ相斷可申其外心得方ハ寄宿專業ニ可準事

一毎朝内舎ニ出正佐授讀ノ内ヘ手傳可致候

一專業中武藝モ相學度輩ハ司成承リ届ノ上出席不苦候事

一下宿ハ月六度尤下宿ノ節宅ニ一宿致シ翌朝五ツ時前歸房可有之候出入共ニ小監ヘ相届帳面ニ其段相記可申候事但六度ノ外他行ノ日無之候尤忌掛リノ親類等ニ急病人抔有之其外面顯致シタル無據要用ハ司憲ヘ申達司憲承リ届ノ上罷出テ可申候

一寄宿房ヘ他ノ者相尋テ無據用ノ者ハ館中ニ罷出面會ニ及可申且飲酒ノ義堅ク禁止ノ事

一格別出精ノ者ハ卒業ノ上御賞賜可有之候

右ノ通堅ク可相守者也

演武場規則

一武學入門致度輩ハ其者ノ父兄ノ内師範宅ヘ罷越申入師範承知ノ上入門ノ者廊上下着用父兄ノ内同道ニテ入門ノ禮ヲ行ヒ師弟ノ誓約ヲ結ヒ其流儀々々ノ作法可執行事

一入場ノ者禮讓ヲ崇ヒ妄言雜話ヲ戒メ師ヲ尊ヒ友ヲ親ムヘシ師タルモノハ別テ言行ヲ慎ミ子弟ヲ唱卒スヘシ

一教場ニ於テ坐順ノ儀ハ師範隔席員長隔席次ニ高傳ノ面々上坐ニ傳ノ末坐タルヘシ但同等ノ内無足人ハ可有差別事

一諸流員長當番壹人ツ、早出致シ萬端厚ク世話致スヘキハ勿論諸稽古人先ツ求道館ヘ罷出小監ヨリ名札ヲ受取其教場ニ入候ハ、當番ノ員長ヘ差出稽古相濟候ハ、員長ヨリ名札ノ裏ニ其趣キ相認渡シ夫ヨリ他場ヘ可移總テ相濟候上ハ右名札ハ小監ヘ差出ヘキ事

一諸場稽古ノ輩相互ニ出入ノ節ハ不作法ノ儀無之樣心掛ヘク候然モ稽古場ハ貴賤人交ニ候得ハ坐席ノ論聊カノ詞尤メ無之樣互ニ勘辨致シ無事ニ附合可申總テ高弟ヨリ申述候事違背ナク稽古ニ付テノ作法堅ク相守可申事

一藝能取調ノ儀向後家祿ニモ係リ不輕事ニ付自今上達ノ者有之候ハ、他流手合相成候流義ハ他ノ高弟ト手合致サセ

一復習ハ月末ニ一度ツ、其月授讀ヲ受タル處ヲ復習サスヘシ三司ノ内壹人ツ、出席アルヘシ

一講讀ハ日課會讀ハ月六次詩文ハ各一次其外ハ午後私ノ會讀對讀三人マテ申合セテ讀ムヲ對讀ト云三人以上ヲ會讀ト稱ヘシ經書或ハ左國或ハ歷史或ハ國史或ハ詩文各隨意ニ脩習アルヘシ或ハ相會或ハ獨看是亦隨意ナルヘシ但學舍ニ坐スルヲ二時以上ノ者ハ別ノ名簿ニ何日坐スル幾時ト錄シ又自分ノ起止簿ニモ講書ノ名并ニ坐ノ長短詳ニ記シ置ヘシ不時ニ三司ノ試ミアルヘシ

一孫吳以下ノ兵書ハ別ニ兵學教官アレハ文學官ノ主トシテ講說スル所ニアラス然ル就テ業ヲ乞フモノアラハ儒行ノ餘力ヲ得テ授クヘシ多ハ退院ノ後家塾ニ於テスヘシ

一詩文課題ハ提學助教ノ内ヨリ是ヲ命ジ出スヘシ私意ヲ以安ニ難題ヲ課スヘカラス但心得書ニモ有之如ク空詩浮文ニ流レヌ様心掛餘力ヲ以テ學フヘシ

一四書小學ノ講義モ已ニ成就但シ講義成就ハ古今ノ衆說ヲ極メ千古ノ疑ハシキ義ヲ正シ如何ナル宿儒ノ詰問ニモ差支ナキヲ云フニアラスト通リ其義ヲ解シ得タル上口說ニモ可ナリ取回シ出來候程ノ者ノ事ナリ五經ニモ及ヒ歷史ニモ涉リ詩文モ可ナリ添削ナシニ人ニモ示サル、モノ勤學ノ力モ最早粗タリシヲナレハ追々時務ノヲニ心掛ル爲ニ館中ニ於テ經濟向ノ書研究講求スルヲ乞フ者ハ其旨ヲ許スヘシ尤試業ノ節時務策ノ試アルヘシ但前條ノ業殘テス成就ノ上ニアラサレハ事務ニ渡ルヘカラストニハアラス四書小學ノ科已ニ卒業ノ後ハ經濟書ノ研究モ不苦尤是ヲ歷事生ト稱シ二百石以上ノ士此心掛尤モ大要ナリ

一御書物拜見ヲ乞フ者ハ成ルヘク丈ケ館中ニ於テスヘシ尤其旨提學ヘ斷ルヘシ若シ館中ヘ出テ兼ル者ハ奉行ヘ書付差出シ奉行押印ノ上提學ヘ達シテ典籍ヨリ受取ルヘシ

一小頭格以下ニテモ家塾ニ就テ學ヒ其志厚ク脩業長進ノ者ハ提學ヨリ三司ヘ達シ三司評議ノ上求道館ニ入ルヲ許スヘシ是ヲ附學生ト云ヒ内舍生ノ末後ニ置ヘシ

右之通規則被仰出候間堅ク相守リ誠實可被致脩行候事

文學專業

一文學專業ハ官ヨリ可被仰付候願候者モ相叶可申候被仰付候者ハ支度米並炭油薪被下置候願候者ハ支度米被下無之事

一專業被仰付候ハ、專業中習業可致書名相届可申候願候モノモ同斷ノ事

毎日ノ業分明ニ起止簿ニ相記シ置キ前日ノ分翌朝ニ及當番ノ小監ヘ差出シ小監ニテ相調別帳ニ寫シ取置キ三司提

科ヲ得ス 春秋左氏傳、史記、無點前後漢書 以上內舍生十五以上ノ業トス此中左氏傳卒業ノ者ハ提學ヨリ申立別試ヲ經テ講義ニ進ム史記一部ハ講義ニ進ムトモ必兼業トシテ素讀スヘシ無點漢書ハ必シモ盡ク讀ス大抵二三卷モ讀取リ粗句讀ヲ了セハ可ナリ

講義 小學 從經古篇 至千外篇 論語 除難章 孟子 同 小學 從內篇至千 立教敬身 大學、論孟 難章 中庸

右日課ヲ以追々講授スヘシ

史記 本紀 列傳

內舍ニ昇ル者

右日課ヲ以追々講授スヘシ

史記 本紀 列傳

內舍ニ昇ル者

右日課ヲ以追々講授スヘシ

史記 本紀 列傳

內舍ニ昇ル者

右日課ヲ以追々講授スヘシ

素讀科中ニテモ輪講ノ時必ス坐ニ列スヘシ 學生四書小學ノ外別ニ一課ヲ設ケ歷史諸子等追々ニ講習スヘシ 訓導

正授讀ハ是又別ニ一課ヲ設ケ五經及濂洛關閩ノ書追々會讀ヲ以研習スヘシ

素讀質問日課 右毎日朝五ツ時ヨリ四ツ時迄質問日課ハ九ツ時ニモ及フヘシ○講釋 右毎月一六日朝當日授業休○

輪講 右毎月三八朝授業後ヨリ始ル 詩文會諸生別段ニ課業 右日限追々定ムヘシ○復讀 右毎月二十九日朝當日

授業休

試業ノ制

一公試毎年四月下旬差合アル時ハ五月上旬何レニモ炎暑ニ及ハサルヘシ私試ハ春三月秋八月冬十一月ヲ以テス公試ハ君親ク被遊御覽候ニ付公試ト名ク私試ハ重職及ヒ三司師役試ル事故是ヲ私試ト名ク

一試書ハ素讀三字經四書小學五經左氏傳史記前後漢書無點何レモ抽讀其多少長短ハ其材品ニ從テ試ム

一外舍童生十二歲ノ四月迄ニ三字經小學四書ノ素讀卒業シ公試ノ時一字モ遺忘無之モノヲ中式トス甲ノ上ナリ但三字經大學環僅十字二十字ヲ試ル者ハ甲乙科外ニ置ヘシ小學論孟等ニ進ミ六七十字以上ヲモ試ムルモノニテ一字忘

ル、者ヲ甲ノ中トス二字忘ル者ヲ甲ノ下トス三字以上ハ第二上ル事ヲ得ス一字モ忘レサルトモ讀方ノ分明ナラス

平日上學ノ日數少キ者はヲ乙ノ科トスヘシ尤十二歲ノ四月迄ニ易書詩禮ノ内一冊以上授リタル者ハ俊秀トス公試

ノ節衆童ノ右ニ出シテ試ムヘキナリ

一外舍生十四歲ノ秋試ノ時迄ニ易詩書禮ノ素讀卒業シ秋冬二試猶亦翌春ノ私試ニモ一字ノ忘失ナキモノヲ中式トス

甲ノ上也但四經ニテハ一齋點本ニシテ壹枚半以上試ムヘシ一二字忘ル、者ヲ甲ノ中トス然レモ考ヘテ讀過スルモ

ノハ一字モ忘レストモ甲ノ下タルヘシ一二字忘レタルカ又ハ度々誤リテ傍ヨリ答ラレ漸ク改テ讀終ルハ乙科トス

尤十四歲ノ秋迄ニ四經卒業シタル上猶亦左傳一二冊モ業ヲ受ケ秋冬二試ニモ左傳科ニ上ルモノヲ亦俊秀トス內舍

生ニ先テ試ムヘシ

類藝ノ師途吟味候上傳授相許ヘシ候尤右手合ノ節三司共ニ出席ノ事但他藩ヨリ中傳免許等受候節ハ類藝ノ高弟ト手合致サセ試候上可相届候

一同門及類藝ノ者相互ニ誹謗致ス間敷候若シ過失有之候ハ、實意ヲ以規諫可致候若シ其儀ナシ他人ニ向ヒ嘲笑致シ候ハ、弓矢ノ禮義ニ背キ未練タルヘキ事

一他方ヨリ文武藝人手合トシテ罷越候節ハ師範員長ハ諸生ニ先立手合可致儀ハ勿論并諸生ノ者モ御用ノ外急度罷出ヘシ候若シ無據用向等ニテ罷出兼候節ハ書院大目付師範等ヘモ可相斷候事但老輩又ハ病氣差合等ニテ手合致サス師範員長等モ其段大目付ヘ相斷候儀勿論ノ事ニ候且幼年初心ノ諸生ハ手合ニ不及乍然望ノ者ハ師範ノ心次第手合不苦候事

右ノ通規則被仰出候間堅ク相守誠實ニ可被致脩業候事

武藝專業

武藝專業被仰付候者ノ外ニ願候者モ相叶可申候何レモ初傳以上ノ者ニテ可被仰付候事但被仰付候者ヘハ支度米並炭油薪被下置願候者ヘハ支度米被下ハ無之事

一專業中毎日ノ業誰タト手合幾度ト申テ委細帳面ニ記置キ毎朝當番ノ小監ヘ差出小監ニテ相調別帳ニ寫ヲ取り十日目々々々ニ司憲ヘ差出三司師範ノ試可有之候

一專業中文學モ相學ヒ度輩ハ司成承届ノ上出席不苦候事

一下宿ハ月六度尤下宿ノ節ハ宅ニ一宿不苦翌朝五ツ時前歸寮可有之候出入トモコ小監ヘ相届帳面ニ其段相記可申候事但六度ノ外他行不相成尤忌掛リノ親類等ニ急病人抔有之其外面顯致シタル要用ハ司憲ヘ達司憲承届候ノ上罷出可申事

一專業所ヘ一類朋友抔相尋罷越候儀一切禁シ無據用ノ者ハ求道館ニ罷出面會ニ及ヒ可申候且飲酒ノ儀堅ク禁止ノ事一格別出精ノ者ハ卒業ノ上御賞賜可有之候

右ノ通堅ク可相守者也

受業ノ次第

素讀 三字經、大學、中庸、論語、小學、孟子、易經、書經、詩經、禮記 以上外舍生十五以下ノ業トス右卒業ノ者ハ幼少コテモ内舍ニ昇ス十五以上ハ未タ卒業ニ不至トモ内舍ニ昇ス但十五以上五經卒業不致者公試ノ時假令失誤無之トモ登

一内舍生十五歳以上ノモノ童生トモ異ナレハ假令試ハ四書ノ内タリトモ童生同前ニ字數ヲ短少ニスヘカラス左傳以上ニ之レナクテハ假令ヘ忘レモ誤リモ之レナクトモ第二上ルヲ得ス

一内舍生ハ都テ十五歳以上ノ者ナレハ其時課業トシテ讀掛リタル迄ノ書ノ中ニモ抽讀セシムヘシ兼テ今度ノ試日ニハ此書ニテ是ヨリ是迄ノ中ヲ試ムヘキノ間差出スヘシト達置生徒ノ隨意ニ讀シムヘカラス但其才器ニヨリテハ二試ニモ三試ニモ及フヘシ又ハ半迄モ讀至リタルニ餘リ誤失多クハ半ニシテ止ムヘシ

一講義ノ試ハ訓詁失ナク言簡ニシテ旨明カナル者甲ノ上ナリ中間言語跌キアリテモ大義ニ能ク貫キタル者甲ノ下タルヘシ訓詁一二失アリテモ大義ニ於テ害ナキ者乙科タルヘシ

一公試一場甲科ニ上リシチ一分ト定メ輕賞アルヘシ三年打續テ甲科ナレハ積テ三分トナシ五年續ケハ五分七年續ケハ七分ナリ偕テ又私試三場打續上第ナレハ公試一場ノ一分ニ相當リ可申候公私ノ二試ニテ積テ五分ニ至レハ御賞賜可有之一日ノ工風タリトモ勉強致シ相進ミ候丈ケハ御取扱モ相進ミ可申尤モ秋冬春ノ試相濟候後ヨリ公試迄ニ相授リシ素讀講義トモ相加ヘテ公試ノ節御聽聞被下置候事

八月試公試ノ後ナリ八月迄ノ業試可申候事 十一月試八月試ノ後ヨリ十一月迄ノ業試可申候事 二月試前年十一月試ノ後ヨリ三月迄ノ業試可申候事 四五月ノ内公試前年公試后ヨリ今年公試マテ授リシ業不殘合セテ御試可有之

一公試ノ節臨席ノ官御定メノ如ク私試ノ内ニモ春試ニハ御用人ヲ加フルヲ是亦御定ノ如シ

一凡試業日限司成稟承シ司憲ヨリ觸出シ可申大抵二旬前ニ沙汰アルヘシ

一面附ハ訓導正佐授讀ニテ取調書記ニ筆セシメ三日前迄ニ各官ヘ差出スヘシ

一凡試業ノ節諸生進讀順上舍生内舍生ト次第ヲ立同舍ハ長幼ヲ以序トスト雖無足人以下ハ可有差別

一凡試業當日疾病事故アリテ不參ノ者ハ後チ十四日ノ間ニ必補試アルヘシ決シテ流ニ不相成公試私試トモ三司師役ニテ補試有ルヘシ

素讀試業ノ次第

三字經全部 初年秋試 大學半部 初年冬試 大學半部 二年春試 中庸十五卷迄 二年夏迄 右四次ノ業合シテ公試右卒業ニ不至者ハ章ヲ截シテ公試、後皆倣之○中庸二十二卷迄 二年秋試 中庸終迄 二年冬試 論語一ノ卷 三年春試 論語二ノ卷 三年夏迄 右四次合シテ公試○論語三ノ卷 三年秋試 論語四ノ卷 三年冬試 小學外篇一ノ卷 四年春試 小學外篇末卷 四年夏迄 右四次合シテ公試○孟子一ノ卷 四年秋試 孟子二ノ卷 四年冬試 孟子三ノ卷 五年春試 孟子四ノ卷 五年夏迄 右四次合シテ公試○易經上ノ卷

規則置于教官之左右

一藩子弟年及八歲則必入于學式父兄先告之於局之少參事然後請期於教官及期父兄携以上館拜聖像行束脩之禮服必用正禮畢遂投各教官之所以拜謝若有疾病事故而不能入學者父爲告其由於少參事又前日不學而今日欲學者雖已長大無妨於入學式如前 教官授句讀宜限某書幾行某書幾項令能者俯而止不能者企而及焉必勿從學生之貪或惰爲增減授解課程亦宜然 句讀生到案頭則宜先令其溫前日讀過之處以驗其生熟若生則更溫習之到熟而止不必授今日之生處 句讀生在館中若有不肯誦讀或戲或噪而妨旁人者則宜令其終日留讀而不還 教官授句讀大抵宜限十人多此則暑移教讀不能周到若學生多而教官不足則可請以增員 句讀之序以三字經或蒙求標題爲始次孝經次四書次五經次十八史略左氏傳此外爲自讀科 自讀書目次序教官宜指點之 自讀已畢則入受解科受解畢則入自解科自解書目次序教官宜亦指點之 館中留學及寄學宜許自讀以上之生 學生業進才優者教官宜錄姓名以請少參事大屬之試 遊學修業之選教官宜建言之 自願遊學者從入自解科略通史記西漢書者聽之 每歲自正月十五日開校至十二月十五日閉校 每月以一六爲放課日 每月三次教授講經書一藩有志者不論老少許拜聽 每月六次令學生受解以上輪講經或史教授助教及三授業臨之 館庫書籍出入少屬掌之雖教授不容妄出入之 館中諸務少參事管轄之大屬佐之少屬掌之 教授有疾病事故而不上館則講席廢之若夫學生輪講雖教授不上館而助教臨之則不廢也

專業規則

有命留寮講究學者爲專業員限二十人自留寮者爲專業生不限幾人留寮以六個月爲限々滿則甲去乙入 留寮從自讀科以上許之朝夕歸爲勉業生不限數又月 寮中雖已不分貴賤賤者不容以年長不敬於貴人貴人亦不容以威寵陵於賤者必以禮讓 朝卯起收被褥衣帶著袴相向作拜而後就業夜及亥脫袴相向作拜而就被褥如三食亦須必相向作禮 每月以一六爲放課日其餘不許妄出寮勉業生不居此限 不許過他寮爲談又不許爲談引外人 莫作爭鬪喧嘩非長者之爲莫作兒戲俗談妨旁人之業 凡雖在此規則外者宜斟酌勿以取外人之笑

職名及俸祿

造士書院職員 司成二人用人ニテ兼勤 司業二人全上 司憲二人全上 典籍三人各持 主事二人全上 小監二人徒士口付兼勤 書記三人各持 以上事務員 提學一人獨禮 文學助教一人各持 全訓導五人全上 文學正授讀五人全上 全佐授讀五人全上 禮節筆道算術師範各一人或二人全上 全員長各一人或二人全上 醫學教諭貳人全上 全員長貳人全上 以上文學教官 兵學師範一人各持 全員長一人全上 劍術鎗術炮術弓術馬術柔術師範各每流一人或二人全上 全員長各每流一人或二人全上

書

院

肝煎
司業

兵機堂

兵學師範

員長

中傳

修業生

修業生

司憲付
徒目付

小監

司成付
書記

目付
司憲

演武場

刀術全

全

全

全

槍術全

全

全

全

炮術全

全

全

全

弓術全

全

全

全

馬術全

全

全

全

柔術全

全

全

全

炮場馬場外ニ有レテ管轄ナ同ス院中ニテハ素矯木馬ノミヲ習フ此他居合等ノ業モ亦場中ニ於ス

醫學所

教諭

員長

脩業生

姑ク兵機堂ニ於テス

司憲付
全

司業付
全

以下明治二年改正藩學校ノ制ニ係ル

學館規則揭于館之相問

一崇齒習禮儀

凡學生於館中長幼爲序雖勿論已仕者自有其等級在如其未仕者宜依本分以序長幼

凡學生每朝以五鼓

入館各先脫刀拜謁於教官而後即坐々必端整勿作參差勿作敖惰勿作喧嘩勿戲而妨旁人至其進講業則宜以入館之先後爲次先到案前作拜虛心以受益勿挾貴勿挾長勿挾故業畢則作拜挾刀而退反坐三四溫而後散

一敬業不躡等

凡學生受句讀自三字經或蒙求標題始次孝經次四書次五經次十八史畧而止左氏傳 凡學生句讀已畢則

入自讀或受解科自讀書須從教官之指點受解書目歷史以十八史畧爲始劉向說苑次之左氏傳次之四書以孟子爲始論語次之學庸次之 凡學生受解已畢則入自解科自解書目須亦請教官指點 凡學生自讀之書音訓有所疑則必進質之於教

官自解之書義理有所疑亦然

一切瑳琢磨相勵

凡學生受解一座同聽自五六人至十人業已畢則同退爲討論溫繹必至於無所疑而後止若有所疑則必進

質之不措

凡學生業進力足者相會爲輪講一月六次或十二次以十八史畧爲始左氏傳次之

一離經論志

凡學生有餘力則學詩或文或擬射策對策以習熟國家事務之義

ハ提學ノ令ニ隨フヘシモシ借覽ヲ乞フ者ハ其人ヨリ司成ノ押印ヲ受ケ提學ヘ達シ提學ヨリ令ヲ受テ然ル後借與スヘシ
小監ハ諸名簿取調ノ主役也毎月々末ニハ出席ノ多少習業ノ勤惰ヲ改メ書上ヲ司憲ニ差出スヘシ進退賞罰ニモ關係ス
ルヲナレハ容易ナラサルヲ心得ヘシ公試私試等ノ節モ司憲ノ令ヲ受テ名簿ヲ改ムヘシ且院中費用ノ出納ヲモ監スヘ
シ主事ハ司業ノ下役也金錢ノ出入渡物ノ買入總テ算勘ヲ勤メ院中用度帳元方拂方優雜ナラサル様明白ニスヘシ司
成附ノ書記ハ司成ノ命ヲ受ケテ日記ヲ付ケ其外惣テ書寫ノヲ勤メ文武諸學生ノ名ヲ簿ニ記シ館中ノ使令洒掃ヲモ勤
ムヘシ但三司ノ書記二人ツ、分付スレハ合テ六人申合日々二人ツ、相詰可申且館中定番ヲ兼夜中一人ツ、泊リ致シ訓
導授讀ノ使令ヲ受ク可シ司業附ノ書記ハ主事ノ差圖ヲ受テ諸帳面ヲモ認メ時トノハ算勘ノヲニモアツカルヘシ其外
常番並定番ヲモ兼ルヲ二書記ニ同シ司憲附ノ書記名簿ヲ記注スルヲ主役トスヘシ但三司ノ書記合テ六人ノ内常番ニ
テ文武諸學生ノ出席ヲ帳ニ記スヘシ但シ館中ニ學生名札ヲ懸置キ學生ノ出席ノ時はヲ遞與シ稽古終リテ學生持來ル時
諸場師範ノ記號ヲ視テ是ヲ簿ニ移寫スルナリ定番ヲ兼ルヲ前ニ同シ○文學教官 提學ハ求道館中ノ學頭也此度學政一
新シタル故授業ノ次第其外ノフトモヲモ助教訓導ト能謀リ而授讀以下ノ諸士ニモ新ニ所頒ノ學規ヲ能ク守ラシメ日々
ノ課業歲時公私ノ試業凡ニ經業ハ朱子ノ註ニ據ラシメ歴史ハ三史ヲ入門ノ業トシ夫ヨリ逐々博涉ニ及ハシムヘシ詩文
ハ子弟ノ各所好ニ從テ教ユヘシ但經業上進ノ後古今折衷ヲ學ント乞フ者必シモ拒ミ禁スヘカラス異端邪說老莊佛氏ノ
學ナト一切痛ク禁絶シ正學ノ統ヲ亂ルヘカラス其書生ヲ倡導提獎スルニ至テハ鞭扑鼓舞ト兩ヲ之ヲ用テ偏廢スヘカラ
ス但文庫ノ書都テ其ノ管守タルヘシ助教ハ提學ノ手傳也總テ提學ノ職司ニ同シ訓導ハ助教ノ又手傳也書生ニ經業
ヲ授ルニモ平易ノ章ヲ講シキカシメ難章ハ提學助教コレヲ講授スヘシ正授讀ハ經史トモニ句讀訓點ナキモノヲモ讀
授クヘシ書生幾人ト定メ分持テ教ユヘシ佐授讀ハ正授讀ノ手傳也句讀ヲ授クルヲ正授讀ニ問テスヘシ但訓導正佐授
讀ノ三官書院中ノ占リトシテ一人ツ、寓直スヘシ次日教官未タ至ラサル間外舍ヲ巡リ早晨ニ入りタル童生ヲ督シテ恭
謹肅靜ナラシムヘシ生長ハ書生ノ組頭也授讀ヲモ助ケ書生ノ行義ヲモ世話イタスヘシ禮節書學算術トモニ師範ハ
師匠役也師ハ人ノ模範ナリト有之各其持前ノ業親切ニ可教ハ勿論ノヲ諸藝凡ニ貴賤高下ノ無差別夫々ニ大小ノ人材コ
シラヘ立ツヘキ爲造士書院ノ名ヲ賜リタル所以ヲ厚ク相辨ヘ人々ノ手本タル様ニ相勵シテ勤ムヘシ禮書算ノ員長ハ
世話役也師範ノ命ヲ受ケ教授ノヲ總テ助之世話イタスヘシ○武學教官 兵學師範ハ軍事ノ師役也兵ハ人ノ死生國ノ存
亡ニモアツカル所且大將ノ器ヲモ教ヘ導クヘキ職ナレハ重キ師役ト心得持前ノ流義ハ申スマテモナク和漢古今ノ兵書
又ハ西洋海陸ノ操練ヲモ徧ク涉獵シ其ノ内實用ニ備フヘキモノハ演ヘ釋テ其義ヲ分明ニシ同門ニモ追々相傳フヘシ

(以上武學教官) 右維新前ノ職制ニシテ定員役料等ニ至リテハ確知シ難シ當時現員ノ概ヲ記ス役料ノ如キニ至リ

テハ今參考ニ供スヘキモノナシ當時其職ニ在リシモノ、說ニヨレハ諸師範一員長半圓位ナリト云フ 訓導以下文武教官筆道師範并槍劒炮ノ師範員長ハ日勤其他ノ師範員長ハ隔日出勤教授セリ

藩學校職員 少參事一人、職俸三十五石、三等官 權少參事一人、三十石、四等官 大屬一人、五人口、五等官 少屬二人、三人口、六等官 筆生二人、十五圓、七等官 使部二人、五圓、八等官(右事務官) 文學教授^{漢皇}二人、職俸三人口、四

等官 炮術教授^{以下醫學教授迄}各二人或ハ二人職俸官等全上 劍術教授、全上 馬術教授、職俸一人半口、官等全上 醫學教授、全上 洋學教授一人、全上 文武助教^{人員不詳}以下全シ職俸二人口、五等官 馬術助教、職俸十二金、五等官 醫學助教、全上 文武大

授業、全上 馬術大授業、職俸七金、官等全上 文武中授業、職俸八金、六等官 馬術中授業、職俸五金、六等官 文武少授業、職俸六金、七等官(右教官) 右維新後明治三年制定スル所ノ職員トス

左ニ掲クル所ノ官職志ハ造士書院ノ制ニ係ル又維新^{明治}后^{二年}官等表ヲ附シテ參考ニ供ス

官職志 司成ハ書院中ノ總奉行職也此度學制一新ノ旨ヲ奉シ書院中文武諸學盛ニ行ハル様ニスヘシ凡所以立教ト所以

設官分職ト能々相辨ヘ邪說異端ヲ屏ケ具文虛飾ヲ去リ文武諸學生強志力行善德廣業ノヲ知ラセ舊習ヲ化シ風儀ヲ正

クシ且其材品ノ高下資質ノ所宜隨テコレヲ導各其大小ノ器ヲ成サシメ相集メテ國家ノ用ヲ大成スルヲ要トスヘシ自ラ

業ハ授ケス^凡其身文武ノ師匠ト成リタル心得ニテ諸學生ヲ我カ子ノ如クニ思ヒ日夜教育誘掖ノヲ心力ヲ盡シ總テ院

中ノ事務ヲ管轄スヘシ 司業ハ書院中ノ肝煎職也此度學制一新シテ設官分職各其掌ル所ヲ異ニスルモ畢竟ハ道藝術業

ヲ奮興シ人材教育スルカ爲ナレハ司成ニ續キテ文武諸學生ヲシテ夫々ノ藝術ヲ勉勵セシメ怠惰セサルヤウ志氣ヲ鼓舞

振起シ各其ノ材器ヲ成就セシムルヲ要トス且文武諸場ノ脩理賞品資給ニ至ルマテ總テ費用出納ノ取締ヲ司ル諸學生脩

業差支サルヤウニスヘシ 司憲ハ書院中ノ大目付也此度學政一新シテ改制ニナリタル文武學術ノ規則ヲ提督シテ肅正

ナラシメ諸學生能ク引立テ各々其業ニ習熟シ各其材ヲ達スル様ニスヘシ大祿高官ノ子弟ハ幼少ヨリ人ニ驕リ衆人モ畏

憚ル^多シ兎角堪忍シテ通フス故規則ヲ壞亂スルハ主トシテ此子弟ニ由ル^{ナレハ}繩糾彈劾ノ^ニ當テハ少モ假借ス

ヘカラス其外ノ諸學生ハ勿論タトヘ文武ノ教官タリ^凡規則ヲ執守ラサル^ヲアラハ糾劾スヘシ考課ノ^ハ別テ心ヲ用ヘ

シ進退賞刑^コ於テモシ衡ヲ失ヒ平ヲ得サル^ヲアレハ但勸懲ヲ爲サルノミナラス却テ恨ヲ引出シ衰廢ノ由トナル^ヲモア

ルヘシ考察查照ヲ忽ニスヘカラス 右司成司業司憲是ヲ書院中ノ三司ト唱フ文武ノ教官ト心ヲ合セ教育スル^ヲ一和シ

テ熟議スルヲ專要ノ趣意トス 典籍ハ書籍ヲ司ル吏ナリ出納ヲ慎ミ壞裂點汚ヲ戒ムヘシモシ館中ニテ看書ヲ乞フモノ

士卒等級	器械幹事	同資事	士族	同從事	卒族	卒族	使部
家令	家扶	家從	卒族	卒族	卒族	卒族	使部
內家職制							

職員概數

造士書院^{維新前} 事務員拾六人 文學教員廿八人 武術教員三十一人 門衛小使三人 計七拾八人
藩學校^{維新後} 事務員九人 文學教員^{皇漢洋學並醫學}三十六人 武術教員三十人 門衛小使三人 計七拾八人

生徒概數

維新前(即安政四五年ノ頃) 文學生凡二百人 武術出席生凡百人 計三百人內寄宿專業生二十人通學生二百八拾人
維新後(即明治三年ノ頃) 漢學生凡二百四拾人內^{素讀生二百人} 皇學生凡二拾人 洋學生凡五十人 武術出席生凡百人
計四百拾人內寄宿專業生凡五拾人 通學生凡三百六十人 寄宿生ハ定員ナシト雖モ齎費ヲ以テ命スルモノ概テ二十
名其他自費生トス又武學生ニ至テハ一藩ノ子弟皆該校ニ出其教ヲ受クル等ナレモ本文ニ掲クルモノハ現在出席ノ概
數ヲ示スモノナリ

東脩謝儀 東脩ハ入門ノ際謝儀ハ歲末ニ於テ各ノ祿高ニ隨ヒ嫡子二三男ノ區別ヲ立左ノ銀子ヲ納ム 祿高五百石以上嫡
子 銀壹兩、次三男銀二匁〇全貳百石以上嫡子 銀三匁、次三男銀壹匁五分〇祿高百石廿人扶持以上嫡子 銀二匁、次
三男銀壹匁〇全九十石以下給人中小性嫡子 銀壹匁、次三男銀五匁〇全無足人以下嫡子 銀五匁、次三男銀三分
學校經費 學校經費ハ維新後^{明治二年ノ豫算}ニ於テ歲費一千圓內五百圓ハ文學入用三百圓ハ武學入用貳百圓ハ醫學入用トス外ニ
職俸アレモ其額分明ナラス又維新前ノ經費ニ至テハ今參按ニ供スルモノナク其概略タモ記スルニ由ナシ
藩主臨校 文武諸藝術四季試業ノ內每年夏季試業ノ際藩主親ク臨監其業優進ノ者へ褒賞ヲ賜フ各差等アリ若シ在府等ノ
節ハ執政代テ臨監スコレヲ公試ト名ク又春秋祭儀ヲ行フ時亦藩主臨校聖像并ニ武神ヲ拜ス

祭儀 春二月秋八月上丁ノ日ヲ以テ釋奠ノ式ヲ行フ

學校構造及建物圖面 學館敷地千百三十九步 建坪三百三十二步 但別紙畧圖ヲ附ス(別ニ掲ク)

學校ニテ出版翻刻セシ書類目次及藏書ノ種類部數 學校ニテ出版翻刻セシ書類無之藏書部數ハ漢籍貳百貳十部卷數四千
四百六十六本內經書ノ部七十部(千四百八十八本) 歷史ノ部六十二部(千七百九十本) 諸子書類二十四部(二百五本)

右江戸藩邸學校ハ規模狹小教場二三ニ分立完全ナル學館ノ體面ヲ有セス且殆ト廿年前廢絶セシモノナルヲ以テ事實ノ參按ニ資スヘキモノナク其調査事項ノ如キ完圓ナル能ハス今一二ノ私記口碑ニヨリ概略ヲ記載シテ參考ニ供スルノミ

舊沼田藩

學制

學事上之諸制度

藩主諭達書

生民之道立於仁與義仁義固人性之所有而由教以益明也在昔三代而下及漢唐宋明雖時有汚隆治有升降而莫不設庠序習六藝人道所以一日不離于仁義也我朝 王化之盛設學舉士世々不絕國史所紀律令所載其法粲然施及遠方下野州足利鄉學所存可以觀矣古八歲而入小學十五而入大學者蓋慎蒙養於始而要成德於終其循々之序如此其至也人而無學者數華倫反五常其所以異於禽獸者幾希不可不思也今茲家大人自京兆尹而入輔 大政以是移封賜上野州沼田城先是在京師凡九年常使家人從名儒受業西京之儒有宅尙齋藤蘭嶠卓犖于衆者故開風興起者人々銳志畢精孜孜弗懈此蓋吾公激厲獎勵之力也今也野州之地素號窮僻經籍既乏師承亦難縉紳之士什無一二惜乎志學之士茫然曠日家大人憐之而不忍群士之廢業於是發憤出令壬戌十二月使有司以九經三史通鑑及韜略管韓孫吳等諸書輸之沼田起學舍與衆習之鄰邦尙有鄉學幸斯道不廢也斯道一棄則吏而不恤臣而不忠蓋惟吏之不恤者下民被害臣之不忠者辱及祖先可不懼乎苟上下一志于學日々諷誦既索聖賢之書則庶乎免夫不恤不忠之罪以望教化萬一之效焉士之勤學進業兵謀師律又不可以不講矣武也者其有政之常典而吾邦立國之大綱也如夫控弦馳馬習劒演鎗即皆至理所寓是以文武不可一日缺造次顛沛必於是二塗則居常緩急處之莫不可者人無賢愚就學而日習之積月歷年暗移潛滋而不覺自進達材成德以爲國家羽翼千城之用亦在其中焉如吾沼田人沐公之教諭指引之澤勿謂窮鄉無師古人有言在則人亡則書今日父子之恩由書而厚矣君臣之義由書而明矣至若武夫之技邊地實易爲力獨思學問之道師友不多則立志之士往々困於無助然不知人々脩身求之於書亦不難矣故余切望衆人讀書之種無絕焉如彼誦數百卷之書以賦文作詩夸人耳目世態所好而棄實驚虛豈不惜哉志于學者顯斯道而不惑他岐自灑掃應對以入于君子之域始終完備所謂實學之良士古先哲王建學之本旨蓋在乎此也嗟嗟家人衆士見此記者勿怠勿慢謹奉吾大人德意故記之如此

寬保癸亥秋九月

朝散大夫豫州刺史源賴熙君續識

詩文集類三十六部(五百十四本) 訓話ノ部十六部(四百貳本) 雜部十二部(六十七本) 圖類三

右之外皇學ヲ始メ洋學兵學其他諸藝術ニ關スル書籍有之シカ今其書目存在セサルヲ以テ種類部數等詳カナラス

江戸藩邸學校

校名 求道館、就外舍分館 演武場

校舎所在地 求道館演武場共吳服橋内藩邸内ニアリ分館就外舍ハ濱町邸内ニ設ク

沿革要略 安政四年丁巳六月本藩學制改革ノ後創設ス爾後沿革略本藩學校ニ準ス維新前ニ至テ閉鎖ス

教則 教科用書及授業ノ順序等總テ本藩造士書院ノ制ニ據ル授業日割左ニ掲記ス

求道館毎月日課自辰至午素讀質問二ノ日月次講釋三役三司始メ在府十ノ日會讀二七ノ日自辰至中兵學五十ノ日午後醫學トス○就外舍ハ

日々自辰至午素讀及習字一六ノ日習禮四九並一六ノ日自辰至中算術トス○演武場ニ於テハ一六ノ日朝或ハ弓術自辰至午劍術自辰至中槍術及

柔術二七ノ日自辰至午槍術及柔術自辰至中炮術西洋三八ノ日自辰至午槍術四九ノ日自辰至中劍術五十ノ日自辰至午劍術自辰至中柔術二七ノ日自辰至中馬術外場

ニ於テス

學科學規試驗法及諸則 學科學規等ヲ始メ總テ本藩造士書院ノ規制ニヨル

職名及俸祿 三司以下職員俸祿總テ本藩書院ノ制ニ同シクシテ但定員ナシ維新後ニ至テハ既ニ學館ト共ニ職員亦皆コレ

ヲ廢セリ

職員概數 司成司業司憲各壹人以下ノ職員ニ至リテハ時々變換其數分明ナラス

生徒概數 生徒ハ文學生ノ寄宿スルモノナク武衛生ノ内多少有之シモ其數分明ナラス通學生ニ至リテモ今參考スヘキモ

ノナク其數詳ナラス

束脩謝儀 本藩造士書院ノ制ニ依ル

學校經費 經費金額詳カナラス

藩主臨校 試驗并祭儀ノ節藩主臨席スルヲ本藩學校ニ同シ在府ノ時ニ非レハ家老代リテ臨校スルヲ以定例トス

祭儀 春秋聖像及武神ヲ祭ルヲ本藩學校ニ同シ

學校構造及建物圖面 校舎ハ尋常ノ家屋ヲ用井演武場ハ別ニ建造セシモノト雖モ固ヨリ規模狭小ナリ敷地建物坪數圖面

分明ナラス

學校ニテ出版翻刻セシ書籍ナシ藏書ハ多少有之シモ其種類部數等詳カナラス

に心掛自然今日言行に發し候様致し度況して國家に事起り候時は大節を失はす臣となりては忠に死し子となりては孝に死すると申聖經の確言を守るべきあり扱其忠孝と申さは誰も心得居候事に候得とも義理に暗く候得は其筋違ひ候事を忠孝と存候事も有之候君父の爲に抛命候は士たる者の大節に候得共死して不得其理後に識者の議を受候様なり候ては遺憾の事には有之間敷哉されは學問の上にて窮理致し候得は生死の場合自然天理に合候様可相成候かくありてこそ若し事あらは爲君父抛命萬代不朽の名と遺し彼從容就死と申地位も被得可申候然は是は事變の節の事に候得とも萬事一理にて聖人の道を承る益其精を研究致し日用の際實踐の工夫あるへし扱學問と申せば一藝の様に心得候ては甚不宜候人事萬端學問の上にて其義理を得る事に候間此處厚く相心得可申且漢土の風のみ好み中間敷さりながら我國の制度を守り武道を押立修業致し今日に活用致し候様可有之あり

右等之儀各心得居候事に可有之候得共勤學の輩におゐて微益にも相成候と存し且國家に有用の人才追々出來候様致し度十分の一を書取相示し申候何れも出精致し各上達あらん事を望むなり(此論達年月不知)

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校へ入學セシムレモ各自ノ意向ニ任セ家塾寺子屋ニテ修學スルコトモ得タリ 他國ニ遊學スル如キハ藩醫ノ子ハ必ス自費ヲ以テ遊學セシメ儒員ノ子ハ學資若干ヲ與ヘ遊學セシメシコトモ有リタリ 藩士ヲシテ講義聽聞セシムルコトハ毎月三度城中ノ書院ニ於テ儒員講義ヲ務メ詰合ノ諸役人始メ藩士ノ聽聞セシム尤藩士在邑中ハ必ス臨席ス學校再興後ハ學校ニ移ス

平民ノ子弟教育ノ方法 藩主知事ヲ命セラレテヨリ平民ノ子弟モ士族ト共ニ學校ニ入學スルコトヲ許ス 家塾寺子屋設置ノ制度 他ノ檢束ヲ受ルナク何人タリモ自由ニ開設スルヲ得タリ學制御頒布ノ後廢之

學校

校名 沼田學舍

校舎所在地 舊沼田城内今廿五學區沼田小學校是也

沿革要畧 寛保年間土岐家六代ノ主頼熙創立後年代不知中絶天保年間同家十四代頼寧ニ至リ再興明治四年舊群馬縣へ引

渡無幾廢セラル

教則 再興以後ノ教科書ハ普通ノ漢籍ヲ用ヒ授業順序ハ佐藤一齋某藩ノタメ林家ノ口授ニ依テ記スル初學課業次第ニ倣ヒ時間ハ朝五ツ時ヨリ夕七ツ時迄ナリ但初學課業次第ハ別冊ヲ添

○
學校は人倫を明らかにし風俗を正ふするの主意にして人材を教育する其事務なり就ては人たる者幼より素讀致し禮儀進退等能習ひ讀書會讀の切磋日用躬行の處より和漢の治亂盛衰の際非常難處の事に至るまで能々講究致し厚く心掛可申經義におゐては容易に自己の見を立へからず専ら程朱の説を相守可申候

一學問所に於て倨傲妄談等一切有之間敷謙遜辭讓を第一に心掛へし學業研究に於ては貴賤を論せず下へ近く上へも親しく決て不遜の事有之間敷候

一學問の儀本意を知り候は緊要の事にて聖人の道を尊敬致し候とても只漢土の事のみに趨るへからず我國の事御當家の事御先祖代々の事等厚く相辨へ心得違さく謹慎篤行可有之事に候

一所可讀の書は聖經を主として潛心講究十分に智力を罄し其餘歴史諸子の類に至るまで國家の用に立へきもの何れも誦讀致し實備の工夫厚く心掛簡要に候詩文和歌とても學問の資益一助とも相成へければ詩文に疎く候ては偏固の弊と生ずる事も可有之乍去文人詩人の風流の美を事とし質實素朴の風を失ひ中間敷義氣を盛にし武夫たるの心を體し能々務本の心掛あるへし

一致學問候とても官途の事を知らされは實用をあしかたかく候然るに學問致し候と兎角唐土の風を好み我國に生れなから本朝の風に違ひ學問未熟にして猥に論説を成し自己の偏見僻識をもつて高遠に趨り理屈のみ口に唱へ行は不繼してはしいまゝに誇り或は政事を誹謗し學者の所業にあるまじきに至る族も有之候依之無學の輩より學問は不致には劣り候様唱へられ候者も有之に至ては實に歎惜に不堪事と存候

一年若の輩學問拔群出精致し候ても武術一道を不辨候様にては不可然文武の道を修業候者各其才の所長に隨ふといへども詰りの處武藝を専らに致し候者も文をかね學問を専らに致し候者も武を兼されは國家有用の器とはなりかたし武はうりにては疎暴の弊を生し文はかりにては柔弱に流れ候義もあるへし文も武の手強き義理より出てころ堅き根より生候花香にて右の花香ある實をまき候より出候根と申循環の理合に候右の堅き根と成り候か學問の基本と被考申候しかれば文武本一道猶車の両輪の終に一車に歸する如くにて文武兼備候はねはすら／＼とは働さず不申事と存候扱右道理に候得とも彼も是もと兼て致し候ては勢ひ其奥に至り難く候問文なり武なり拔群に出精致し候者は各其所長を専らに成就候様心掛可申候しかしなから前文に述候道理を不失様修業可致候

一學問は文武忠孝の道にて寸時も不可離の理にて勤學の工夫第一の事に候然ながら唯書籍上の空談と不相成様眞實

無キニ至ル該藩主同年間幕府學問所奉行タリ時人該校設立ニ盡力セシハ同藩士岸謙右衛門川崎魯助ヲ最トス魯助ハ魯齋ト號シ儒之レヲシテ藩主儒學ヲ尊崇セシ結果ナリト云フ
員ニシテ物頭格タリ各藩主旗下ヲ始トシテ門下多ク又諸名家ノ交際廣ク初メ佐藤一齋ニ學ヒ孝經參釋ヲ著シ幸ニノ先帝之睿覽ヲ辱フシ御賞トシテ物ヲ賜リ古來儒員ニ希ナル光榮ナリト云フ後大學中教授ヲ務ム謙右衛門ハ皜皜ト號シ儒員ニシテ初メ長野豊山ニ學ヒ後佐藤一齋ニ學ヒ藤森弘庵等ト友タリ頗ル方正ノ士ニシテ名ヲ求メス因テ著書詩文等多シト雖モ秘シテ傳ヘス後用人トナリ俗務ニ軼掌ス 教則其他ニ至リテハ皜皜等歿スルヲ以テ今之レヲ知ルニ由ナシ

舊安中藩

學制

學事上ノ諸制度 年寄役以下諸士卒族ニ至ル迄在職非役ヲ分タス老若ノ別ナク平常文武ノ道ヲ研習セシム文學科ハ日々師範役及句讀師助教等造士館演習場ノ名ナリヘ出頭素讀或ハ講義ヲ教授シ又武術ハ弓馬槍劍銃炮等各毎月六度宛演習場ニ於テ試合射的等稽古セシメ且春秋兩期ハ藩主又ハ年寄役ニ於テ代理當日ハ物頭役及大小監察役列席諸藝事ノ見分アリ尤其業篤志ノ者若干人御好ミト稱ヘ更ニ檢査ヲナシ優等ノ者ヘハ藩主手許ヨリ肴料銀壹朱又ハ同五匁ヲ賜ヒ畢テ出席人一同ヘハ藩費ヲ以テ赤飯ヲ賜フ且毎年十二月ニ至リ各師範役ヨリ修業勉勵ノ者名前取調監察局ヘ差出シ同局ニ於テ夫々賞與ノ資格ヲ定メ伺書ヲ作り藩廳ヘ上申各種ノ褒賞ヲ施行スル左ノ如シ 師範役ヘハ肴料金二百疋又ハ藩主ノ紋附麻上下肩衣等賞與ノ例モアリ 句讀師助教等ヘハ肴料金百疋或ハ格別出精篤志ノ者ヘハ格祿昇加ノ事モアリ 少年ノ子弟文學科ノミ出精ノ者ヘハ半紙壹束又ハ二束ツ且文武ノ諸藝勉強ノ者ヘハ肴料銀三匁五匁拾匁又ハ金百疋ヲ賞與セリ 右者藩廳ニ於テ文武掛リ諸職員列席月番年寄役ニテ相達シ該賞與ヲ受ル者ハ即日爲回禮諸職員及師範役ノ自宅ヘ名刺ヲ以回勤ス但小頭以下ノ卒族ハ支配役ノ者藩廳ノ命ヲ請ケ賞品ヲ授與ス

每歲新年ハ文武ノ諸藝一月二日ヨリ一周間ノ内ニ日割ヲ定メ置師範役及子弟共麻上下着用造士館ヘ出頭稽古始メノ式ヲ執行ス又年末ハ十二月廿五日迄コテ終業ス

士族卒ノ子弟教育方法 藩籍ノ子弟ハ一般文武ノ藝術師範役ニ就テ教授ヲ受ルモノトス尤和學醫學筆道等ハ藩立ノ設ケナキニヨリ各自ノ意向ニ任セ家塾等ヘ入學修業セシム又藝術篤志ノ者且優等ナル者ハ本人願ニ據リ或ハ藩主ノ特見ヲ以テ嫡子二三男ヲ問ハス藩費修行扶持二人口或ハ三口ヲ以テ江戸表今ノ東京聖堂又ハ某家塾ニ入學ヲ許ス且諸國遊學ハ別ニ禁止ナシ或ハ私費ヲ以遊學修行ヲ許可セシ事アリ女子ノ教訓ハ藩廳ニテ關セス各自ノ意ニ任セ筆道ノ家塾ニ入り習字等ヲ爲スノミ

學科學規試驗法及ヒ諸則 學校ニテハ漢學ヲ教授シ弓馬槍劍砲術柔術等ハ夫々師範稽古場有之學校ニ關係ナシ藩士ニハ文武兩道ヲ脩ムル様精々世話アレハ勢ヒ武術ニ從事スルモノ多ク文學ニ志スモノ稀ナリキ因テ文武ノ程度比例等ハナシ生徒學習ノ期限ハ大概十歳前後ニシテ學校ニ入り十五歳以上隠仕ノ子弟ハ番外ニシテ專ラ文武ヲ修行セシムレハ科業ハ各自ノ意向ニ任セタリ學習モ別ニ期限ヲナサハリシ試驗法ハ從前毎月朔望ニ十歳以上十七歳ニ至ル迄ノ者清書ヲ重役ノ者城中ノ書院ニ出席シテ試之藩主在邑中ハ自身臨之優等ノ者ハ墨紙等ヲ賞與セリ又藩士ノ講義ヲ聽聞シ優劣ニ從テ書物料ヲ賜フ差アリ學校再興後モ大抵如前但入學許可ヲ得ルモノハ禮服着用師範家ヲ回禮セリ職名及ヒ俸祿 御維新前ハ從來用人ノ中壹人學校掛リアリ其他教授助教句讀同補校掌小使ヲ置キ各自ノ持高番外ニテ勤メ別ニ役料等ハ無之且座席身分ハ各自ノ持席取扱替リナシ 御維新以後學校掛リヲ廢シ學校監事監察ヲ置キ其外故ノ如クニシテ且祿制改マリ年給九石ヨリ壹石三斗マテチ家祿ノ外ニ賜フ

職員概數 御維新前ハ學校掛リ壹人教授壹人助教三人句讀六人同補四人校掌貳人小使二人都合拾九人 御維新以後學校掛リヲ廢シ學校監事監察ヲ置キ餘ハ前ノ如クニシテ總員貳拾人

生徒概數 御維新前後共概略八九拾人

束脩謝儀 御維新前後共無之但御維新前ハ二季藩主ヨリ教授助教等へ銀子ヲ賜フ

學校經費 御維新前ノ計畫難相成明治二年ヨリ同三年之交ニ於テ 如左 金千貳拾三兩 壹ケ年全額

藩主臨校 藩知事講義ノ都度必ス臨校聽聞セリ

祭儀 無之

學校構造及ヒ建物圖面 當時建坪百貳坪敷地貳百八拾七坪舊熊谷縣ヨリ沼田小學校へ御下渡之後構造大ニ變換當時之現狀ヲ圖畫スルヲ得ス

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ類部數 學校ニテ出版翻刻書無之藏書ハ普通經書史類藩主ヨリ寄附ノ分モ有之處廢校ニ付群馬縣へ上納セリ

江戸邸内學校

校名 敬修堂

校舍所在地

江戸見坂邸内 目今東京芝區葺手町廿五番地

沿革要略

天保年間土岐家十四代從五位顯寧設立十五代賴之ニ至リ文久年代ヨリ慶應年間擴張敬修堂ト號シ 圖藩ノ子弟就學セサルモノ

リ難ニ入ルヲ序トス○弓術 日置流竹林壽徳ノ二派アリ初メ卷ハラ射ナリテ
 演習 ○槍術 大島流ニシテ直槍ヲ用ヒ初難刀鎗直槍合等ノ形ヲ授ケ次ニ一丈二尺柄ノ直槍ニテ突身ヲ教ヘ且丸槍ト唱ヘ面具足ヲ着ケ小直槍ヲ以テ入身
 スモイタシ夫ヨリ眞ノ位六ヶ條縫合十一ヶ條ヲ授ク上達ノ者ニハ丸槍十二ヶ條ヲ許ス○劍術 荒木流ニシテ初メハ打込形等ヲ授ケ其ヨリ試合勝負ノ科
 身ヲイタシ夫ヨリ眞ノ位六ヶ條縫合十一ヶ條ヲ授ク上達ノ者ニハ丸槍十二ヶ條ヲ許ス○劍術 荒木流ニシテ初メハ打込形等ヲ授ケ其ヨリ試合勝負ノ科
 砲術 武術流ニシテ砲臺射付玉日三匁以上百匁位ノ小銃ヲ以テ射的ヲナシ且火矢烟火等ノ技ヲ教ヘ○柔術 眞ノ神道流ニシテ初段ハ居捕立合捕繩棒等ヲ教
 ト唱ヘ活法接骨 ○游泳 夏季ニ至リ近傍ノ川流ニテテ子第ニ水
 等ノ手術ヲ授ク○游泳 夏季ニ至リ近傍ノ川流ニテテ子第ニ水
 授業ノ時間大畧左ノ如シ 右武術ハ口傳免許等簡條多シ依テ概略ヲ記スルノミ

自朝五ツ時至夕七ツ時	自朝五ツ時至晝九ツ時	自朝五ツ時至晝四ツ時	自晝八ツ時至夕七ツ時
但五日十九日殿中講義	但暑寒三十日ハ自明ケ	但暑中ハ自明ケ六ツ時	
二七ノ日講義	六ツ時至朝五ツ時	至朝五ツ時	
漢學	槍 劍 術	馬 術	弓術 砲術 柔術 游泳

學科學規試驗法及ヒ諸則 學科ハ漢籍詩文等又弓馬槍劍砲術柔術游泳等ノ武術ヲモ教授シ諸士卒族ノ子弟學習年限ハ八
 ニシテ入學シ十五 句讀解讀ノ二科ヲ了ルノ後尙篤志ノ者ハ二十オ 輪講科ヲ強勉セシメ凡テ十歲以上ハ武術ヲモ兼修セシム
 オニシテ退學ス 且春秋試驗ノ法及生徒賞品授與ノ方法等ハ前書藩內學事上諸制度中ニ掲ケタル如クニシテ其他生徒訓條罰則等ハ別紙
 ニ記載ス又生徒入學許可ヲ得シ者ハ父兄同伴ニテ師範家ヘ回禮ス
 職名及俸祿

維新前 文武掛リ役一人 物頭役ニテ兼學監三人 大監察役ニテ兼勸役料米 事務員二人 卒族役米 教授三人 役料米五十石以上 句讀師五人 役料米五十石以上 助教二人 役料米九十石以上 其外武藝師範役一藝ニ付二人又ハ一人ノ專門者アリ
 學制頒布前 少參事一人 役料米一百石 大屬一人 役料米十石 史生二人 役料米九十石 書記二人 役料米八十石 使部二人 役料米四十石 授二人 役料米五十石以上 助教二人 役料米拾一石以上 得業生五人 役料米拾石以上 右座席等ハ前記載ノ通り
 職員概數 教員事務員等學校ニ奉務セシ人員都テ十六人(維新前) 少參事以下教授使部等人員總テ十八人(學制頒布前)
 生徒ノ概數 通學生徒ノ數 男二百人 餘 寄宿生徒 無之 校舍ノ費用ハ藩廳ヨリ支出ス
 束脩謝儀 校舍ニ於テハ入學等ノ謝儀ナシ
 學校經費 一周年ノ學費金百廿五圓 是ハ書籍並武藝道具具藥等部テ生徒及諸種古人エ下ケ渡シノ物品料 白米三石 是ハ春秋兩度試驗ノ簡文武掛リ役始メ諸

平民ノ子弟教育方法 村落ノ子弟ハ家塾或ハ寺子屋ニ於テ筆道ヲ學ヒ傍ヲ讀書ノ業ヲ受ルモ其課書庭訓實語教位ニシテ學習ノ年數至ツテ少ク故ニ普通假字交リ文ヲモ讀ミ得サル者多シ又藩立學校ヘ入學禁制ノ法令モナク偶々男子ハ登校學術擊劍修業スル者アリト雖モ女子ノ如キハ單ニ家業ニ從事スルノミ風習ニテ自己ノ姓名ヲ書シ得ル者尤尠ク實ニ學制御頒布後ノ今日ニ比スレハ教育ノ度霄壤ノ懸隔アリ

家塾寺子屋設置ノ制度 藩内ニ於テ家塾寺子屋ヲ開設スルハ總テ藩廳ノ許可ヲ得ルモノニシテ該塾主タル專勤ナル者アリ或ハ他ノ職務ヲ兼勤スル者アリ而シテ塾舎ノ造營修繕等ノ金額半ハ藩費ヨリ支給シ又書籍ヲモ塾主ヘ貸附シ之ヲ貧窶ノ生徒ヘハ貸與スル者トス又嘉永年間藩主板倉勝明甘雨亭號ス甘雨亭トノ時代藩費ヲ以テ一ノ鄉學校ヲ村落ニ設立シ校長ハ藩主ノ儒官助教ハ平民ノ内學術熟練ノ者ヲ派出セシメ經書ヲ講シ詩文ヲ賦シ以テ鄉黨ノ子弟ヲ教導ス然レモ幾程モナク甘雨主逝去シ終ニ其結果ヲ不見可惜ノ至ナリ且村落ニテ筆學算法等ノ寺子屋ヲ開設スルハ平民ノ自由ニ任ス者ナリ

學校

江戸藩邸ニモ造士館ト稱ヘ遊習場アリト雖モ隔地ノ事故諸件判然セス因テ調査スルコトヲ得ス

校名 造士館ト稱フ

校舎所在地 安中舊城地内

沿革要略 文化ノ度藩主板倉勝尙緯山號ス

文武場ヲ創立シ造士館ト稱シ教官ヲ擧ケ藩士ヲ教導セシム天保度ニ至リ嗣子勝

明甘雨亭號ス

英邁ニシテ才文武ヲ兼テ首トシ太山山田ノ兩教師ヲ聘シ文學ヲ掌ラシメ一層學事ヲ擴張シ又武術モ貴賤少長

ノ差別ナク修鍊セシム殊ニ砲術ハ藩士ヲシテ夙ニ秋帆高島師ニ隨身西洋ノ火技ヲ訓習熟達セシメ且舊幕府ノ許可ヲ得

テ年寄役以下諸士卒族等ニ武ノ具ヲ授ヒ干戈ヲ携ヘ城郭内ニ於テ陣法ノ成規ヲ訓練シ居常治ニ亂ヲ忘レサルノ意ヲ示

ス時ニ文武ノ兩道並ヒ張り大ニ士風ヲ振起セリ安政ノ初年勝明逝去且太山山田ノ兩士モ相踵テ没シ一時良師ヲ缺クヲ

以テ文運不振ノ徵ヲ表セリ又明治ノ初ニ至リ造士館ヲ分轄シ假ニ文學校ヲ設ケ主務官ヲシテ之ヲ掌ラシム是ヲ以テ法

制大ニ具備シ學事從テ興起セリ

教則

文武科目 句讀科 孝經、小學、四書、五經、文選 解讀科 四書、五經、十八史略、蒙求、綱鑑易知錄、資治通鑑、大日本

史、本朝通鑑、國史略、逸史、唐詩選、聯珠詩格 輪講科 左傳、國語、史記、前後漢書、戰國策、綱鑑補、文章軌範、八大家

文格、日本外史、日本政記 右三科トシ初メ句讀ヲ授ケ其レヨリ次ヲ逐テ解讀輪講ノ科ニ移ル等疎ヨリ密ニ入り易ヨ

文學校告示

王政一新奎運大張藩校鄉庠所到相望可謂盛矣今也我藩有此校堂之設焉則奉 天朝鑄陶文武之士意也發雖螻蟻竊要藩政輿旨自今以往滌蕩舊習授官任職固不取於門閥何況取於畔援則必拔擢於此校之俊秀達言治行齊者也斯矣夫士之所榮者莫大乎身居顯官而功業蓋世矣然而其所以得之者捨文學其何以歟故廣川薰仲舒對策漢武之表曰養士莫大乎大學大學者賢士之所關也教化之本原也又曰事在強勉而已矣強勉學問則聞見博而智益明強勉行道則德日起而大有功嗚嗟闔藩之士幸得遭際文明開化之聖世豈可不慷慨憤勵不失教遵之機研精文武以答藩政之渥哉雖然登此校堂者主文不主武乃學則揭示如左

一登此校堂從事吟唔者當以慎徽五典爲最第一準的親義別序信五者一有闕焉罰之無赦

一不忠不孝者雖一武固禁容之

一正容儀慎坐作進退周旋要有禮讓

一雖長幼有序貴賤不可躐等至講學業以不耻下問爲賢德許多生徒從登校先後臚列名刺不誤其順序可以受教授

一臨受教授先向机前恭敬肅拜勿失尊師之禮

一既上校籍生徒除休業日外一日不可怠惰若有疾病事故不能來則折簡史生可致其意

一受素讀者以四書五經爲限讀了五經而不讀得左國史漢者當幾回復讀五經敢無有教他書熟讀得五經全部者當自素讀左

國史漢質問其疑文難字

一卒左國史漢之業則常解讀十八史略蒙求等書質問其疑義梗意

一解讀左國史漢等書得則可波及經義勉強漢學餘暇旁可讀及國史略皇朝史畧等國籍

一生徒每來復可禮拜直當校司每月講義六舉雖始自未牌生徒宜從午半牌輻湊每月輪講六回詩會二次生員無疾病事故不

登校者可抵罰錢若干

一春秋考試素讀則以四書五經左傳國語四部爲定限如不能通讀此各書一全部者不使蒞試場講義則不限經史可任各自適宜

一學業既成言行相正者當自教官校司奏之政廳使行其褒賞

明治三年庚午十一月

文學教授源長發謹撰

右ハ板倉勝殷文學校へ掲シ校則ナリ

藩士ニ賦課スル等ノ類ナク學事ノ張弛ニヨリテハ學費等ノ差異アレ共サシテ増減ナシ

藩主臨校 春秋兩度ノ試験ハ藩主臨校藩主在府ノ節又毎月兩度教官殿中へ出頭年寄役着座藩主在城ノ節ハ出座經書ヲ講義シ大小監察

役臨席諸役員及ヒ學校生徒ヲシテ聴聞セシム

祭儀 別ニ聖廟ノ設ケナシ釋奠等ノ禮儀ナシト雖凡例年開業ノ節ハ聖像壹軸ヲ掲ケ生徒ヲシテ禮拜セシム

學校構造及ヒ建物圖面 地坪建物等別紙畧圖ノ通(別ニ掲ク)

學校ニテ出版翻刻等ノ書籍 孝經壹部四書壹部藩費ヲ以テ造士館ニテ出版シ生徒ニ貸與シ素讀セシム又緯山吟草壹冊緯山ノ詩集白雲山人トモ號ス水雲問答壹冊藩主白雲山人ト墨水漁翁林快烈先生トノ問答書要語ノ書ナリ元陵御記二冊續元上皇山莊御記翻刻ナリ甘雨亭叢書六集部四十八冊藩主甘雨亭ノ編集ニシテ後史及鴻儒ノ隨筆逸事記傳等遊中禪寺記嘉永年間甘雨亭主日光山ノ登ノ書ナリ中禪寺ニ遊フノ筆記ナリ右五種ハ藩主板倉氏ノ藏版ナリ

造士館告示

此館ハ禮樂射御書數六藝ヲ學ヒ君臣父子夫婦兄弟朋友ノ五倫ヲ明ニシ士ヲ造ノ場也禮ハ冠婚喪祭賓軍嘉ノ儀式各其制ニ從ヒ我身ノ分ヲ知テ行フヲ善トス樂ハ雅正ノ音ヲ聞テ心ヲ正シ淫逸殺伐ノ聲ヲ聞ヘカラス射御ハ士タルモノ第一ノ藝ナレハ善師ヲ求テ其術ヲ研究スヘシ槍劍火砲ノ類是ニ效フ書數ハ日用闕ヘカサルモノ尤學サルヘカラス抑文藝ヨシト雖武術ナクハ士トイフヘカラス武術ヨシト雖節義ノ心ナキハ論スルニ足ラス要スルニ文武ノ全材ヲ以尊トス君ニ仕テ忠親ニ事テ孝父子ノ親夫婦ノ別兄弟ノ序朋友ノ信一日モ忘ヘカラス不孝不忠ノ人ハ入事ヲ許サス六經ハ聖人ノ遺言ニシテ修身ノ法治國ノ術ヲ說倭漢歷代ノ史籍ハ治亂興亡ノ跡ヲ載皆後世ノ教戒タレハ學テ其義ヲ精シ大道ノ要ヲ知リ才器成就シ經濟鍛鍊シテ國家ノ用ニ備ルヲ上トス 夫學ハ文武共ニ勤ニ成テ怠ニ敗ル勤ノ一字肺腑ニ銘シテ忘ルヘカラス師ハイフニ及ス一步モ其道ニ先達ナルモノヲ尋ルヲ上トス長幼尊卑ニ拘ルヘカラス下問ヲ耻ルハ聖賢ノ意ニ有ス總テ館中ノ人羣々トシテ篤學勤行者アラハ師タルモノ長官ニ達スヘシ

文化五年戊辰春三月

右ハ板倉勝尙造士館設立ノ節上段ノ間ヘ掲ケ置シ杉板ノ扁額ナリ今ニ存在ス

白鹿洞書院揭示

本文ハ略之

嘉永六癸丑初夏前伊豫守入道羽林伊達藤原宗紀書

右ハ板倉勝明造士館ヘ掲シ額面ナリ今猶存置ス

限りあり扱又平日心掛身代すりさらざる様に致へし貧窮にては物毎差支多く學問武藝も思ふ様にからず忠孝も不任心事もあれは常に費をはふき諸事儉約にして學問武藝精出せは自から人欲も忘れ諸事簡易になり面々身代も相應に取廻し其上德藝兼備の士となるへし是忠孝の至りにて此上あるへからず御先祖様御條目にも有之候得は猶更右御條目之趣得と承知仕常々可相嗜候因て其學問武藝を勵候手段藝事奉行并頭取の者へ申付候間無油斷下に述る通り可心掛候若怠る輩は面々の不覺悟たるへき事

一學問に邪正の別あり聖賢の事を味ひて義理の當然を求め古今の變を察して得失の機を試み面々身に立かへりて其實を踐むへし是學の正なり記誦にはせ博雜を以高ふり花靡を以俗を閑まし身にかへりて求る事なく義理の吟味届かざる者あり是學の邪なり學正しければ心正しからざるなし學邪あれば心邪ならざるあし是又御條目に所謂只經學念書に精出し異學雜書堅く用ひましき旨面々審に察して可慎守事

一武藝の義は前に述る通隨分致出精武士たる名目を汚し申問敷事なり不案内にて人の誹りを受けるは君父を辱しめ不善不孝の至りあり又一藝を頼みて奉公と怠り人を慢り自ら高ふり候者も有之ものなりかくの如きものは飢をまねく者なるへし面々たしなみ可申事

右之趣能々可相心得者也

學校

但江戸藩邸内學校
ノ制度モ之ニ同シ

校名 學習堂

校舎所在地 伊勢崎藩内字西小路ニアリ今猶舊模ヲ存ス

沿革要畧 學校創立ハ安永四年乙未ノ歲當時ノ教師卹士宗章號一齋爾後天明年間ニ至リ藩主酒井駿河守儒學ヲ尊崇セシ

ヲ以其臣關重嶺磯田邦光等力メテ學事ヲ振興セルヲ以一時大ニ隆盛ヲ致ス學派ハ子思ヲ主トス著書ハ兵學直路貳冊

教則 教科用書ハ小學内外四書五經近思錄左氏傳國語十八史略史記漢書ノ類ニシテ異書雜書ヲ嚴禁ス授業時間自朝六ツ半
至七ツ半時生徒ノ座次ハ出席順ヲ以コレヲ定メ敢テ學力ノ淺深又ハ格式ノ高下等ヲ以テセス且授業方法ノ如キハ每朝授

讀一六ノ日復讀二七ノ日學頭講義三八ノ日休業五十ノ日生徒ノ講義別ニ二七ノ日ハ夜會ヲ開キ生徒ヲシテ習禮講義等

ヲ研究セシム

學科學規試驗法及ヒ諸則

舊伊勢崎藩

學制

學事上ノ諸制度 學校經費其他有般ノ事務ハ學頭コレヲ擔任シ事ヲ堂奉行ニ談シ奉行ヨリ家老ニ稟請シ諸事總テ家老ノ指揮ヲ受クルモノトス且學業上進ノ者ニハ毎年十二月廿四日ニ至リ金銀或ハ書物等ヲ附與シ及ヒ學業勉勵ノ小童ニハ出席ノ度數ニ依リ半紙三百枚乃至五百枚又ハ筆墨等ヲ附與スルヲ差アリ

士族卒ノ子弟教育方法 男子生レテ八九歳ナレハ藩主ノ嫡士及ヒ士族卒ノ子弟ニ至ルマテ必ス皆學校ニ入レテコレヲ教ヘシム且習字算術ノ如キハ各自ノ隨意ニ任セ藩士中職務ノ餘暇ヲ以テ篤志教授家ニ就テ學ハシム且藩費ヲ以他國へ遊學セシメ又ハ私費遊學ヲ許可セシヲナシ唯藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルノ制アリテ毎年正月二日ヲ以テ始トシ月ニ三回毎次二七ノ日ヲ以テ定メトス

平民ノ子弟教育方法 領内小學校ノ設立ハ文化年中ニ係ルモノ六ヶ所曰ク五惇堂曰嚮義堂曰遜新堂曰正誼堂曰會輔堂是ナリ而シテ兒童教育順序ノ如キハ春正月ヨリ夏四月農桑繁忙ノ際ニ至テ休業シ秋九月ヨリ始メ歳末ニ至テ一時休業スルモノトス且開業中ハ藩學校ノ教長毎月二回乃至三回巡校シ學校所在近傍ノ老少ヲ集メ孝悌仁義ノ道ヲ講シコレヲ聽聞セシム

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ志望者ノ自由ニ任ス

○安永六年丁酉十一月十九日老公學習堂に臨み諸士に訓戒し玉ふ時に重巖に仰せて其按を記さしむる事左のことし

一總て士たる者は同人の中にて諸民の上に立事なれば下民同様の心得にては上に立候詮なき事あり扱農工商は賤きものなれども各其術を得て幼穉のものまでも相應には其職を勤む然に四民の首たる士は士の道藝を得る者多からず如此なれば農工商に劣りたるのみならず祿を貪る者ならずや所謂士の職分は諸民を總ての任なれば人各其所を得せしめ孝悌の道をしらせ其業を安んじ干戈を動さざる様に治る事なり如此の功業は己れ凡民にては出来難く義理を身に明らかにして道德あるにあらすして行届さるものなり其義理を明らかにして道德あるは聖賢の道によらずしては成就し難し扱賈士の中人に依りて法を犯す者あれば止事を得ず武にて威して惡を懲すに非ずしては不叶事ゆへに武と忘るゝは是亂の始なれば慎思ふへき事なり取わけ面々武士と號し帶刀の身にて不心掛あるは沙汰の

付侍座シテ執政ヨリ其實與スル所以ヲ陳シテ之ヲ授與ス其實品畧左ニ 第一等金壹兩以下 第二等金貳分以下 第三等金貳分以下
下或ハ筆墨ノ類 斯ノ如ク品ヲ以テ賞與スルハ其前年中出席十分又者不得止事故ニテ出校日數略減少スルモ一廉ノ上進アル者ニ限ル

士族卒ノ子弟教育法 本項ノ方法タルヤ藩立學校ニ必ス入學スル限ニ非ス父兄ノ意向ニ任セ藩内寺子屋等ヲ修學スルヲ得然レモ藩立校ヘ入學セシモノハ一切藩費ヲ以シ貧困ノ者ノ子弟ニシテ書籍購求シ難キ者ヘハ學校備附品ヲ貸與ス又寺子屋ハ謝儀ヲ始メ都テ一切ノ學費悉ク自辨ナリ

生徒ノ内藩費ヲ以テ他ヘ遊學セルコヲ情願スル者ヘハ詮議ノ上許可スルト雖モ其筋ニ於テ學業試驗ノ上充分ノ目途相立候モノニ非レハ猥ニ之ヲ許サス其他敎授長敎授方及ヒ生徒ノ内重立タルモノヲシテ毎月三ノ日藩廳ニ於テ經書ヲ講義シ悉ク藩士ヲシテ聽聞セシムルノ制アリ當日ハ藩士公務ニ關セサル者ハ普ク出席シ其着到届ケヲ始メ一切ノ事務調査ノ取扱ハ大目付役負擔ス

平民ノ子弟教育方法 藩立校ヘ藩士平民モ素ヨリ入學スルヲ許ス然レモ平民ノ子弟拔群ノ有志輩ニ非サレハ之ヲ情願セス其所以ハ當地方杯維新以降學校ノ設有テ平民ト雖モ別ナク入學スルノ制ニ至ル昔時ハ其設ナク農工商ノ三民中ニハ醫師神職等ノ外ハ拔群ノ有志者ニ非レハ入校スルノ志願者ナク又之ヲ督責セス只職業ヲ專ラ注意スルコヲ示セリ故ニ平民ノ子弟ニシテ入學スルモノ僅少ニテ士族ノ子弟最多シ又平民ニ至ツテハ其邸内ノ寺院或ハ村吏等ノ自宅ヘ農圃通學致サセル風習アリ

家塾寺子屋設置ノ制度 此家塾寺子屋開設スルニ當テ許可ヲ受ルニ夫々ノ順序アリ藩中ニテ藩士ノ内ニ之ヲ創設セント欲スルニハ創立願書ヲ本人支配頭或ハ其組頭ヘ差出シ大目付役ノ實檢ヲ遂ケ而テ後家老職ノ許可ヲ得又村民之ヲ設ケントスルニハ其組合連印名主ノ承印ヲ受ケ大庄屋ノ手ヲ經テ之ヲ地方役所ヘ進達スルニ至テ代官役實檢シテ郡奉行ノ許可ヲ得テ開設スルモノトス

學校

校名 小幡學校

校舍所在地 小幡藩中久保町

沿革要略 抑舊小幡校ハ昔時寛政三亥年ノ創立ニシテ藩主松平玄蕃頭儒學ヲ尊崇シ當時藩士等隨意ニ寺子屋ニ習學スル

學科ハ漢學習禮ノ二科ニシテ兵學弓馬槍劍砲術柔術等ヲ修業スルハ別ニ稽古場ヲ設ケ十五歲以上ノ子弟ヲシテ之ヲ學ハシム且生徒學習ノ期限ノ如キハ一定ノ成規ナシト雖其學力試驗ノ如キハ毎年十月藩主在邑ノ砌リ日ヲ期シテ學堂ニ臨ミ生徒ノ讀書講義等ヲ聽聞シ其學進步ノ如何ヲ試ム若シ藩主在邑ナキトキハ家老奉行等コレニ代ル武術試驗モ之ニ同シ又生徒ハ文武兩道ヲ兼修スルモ其一科ヲ專修スルモ敢テ妨ケナキモノ、如シ且文學ト武術トノ程度ヲ比例スルノ制ナシ尤武術ハ各科中其一科免許以上ニ至ルトキハ中小姓格ニ昇進スルモノ、如クナレハ一定ノ制規アルニアラサルナリ生徒罰則ハ譴責留置灸罰ノ三種ニシテ其犯由ノ輕重ニ依リ學校職員コレヲ處分ス又生徒入學ノ節ハ勿論其他毎月三次即朔日十五禮服着用師範家ヘ回禮スルノ成規アリ

職名及俸祿但職員身分等ハ孰レモ日見以上堂奉行、學頭、頭取、肝煎ナリ學制御頒布前ニ至リ改メテ教長助教授讀ト稱ス且俸祿等ハ銘々從來ノ因襲ニシテ別ニ新規ノ制定ナシ

職員概數但學制御頒布ノ職員數モ亦之ニ同シ教長壹名、助教貳名、授讀六名、以上九名ノ外校僕門衛等無之

生徒概數 每日出席生徒平均三拾五名ニシテ寄宿生拾餘名該食費及學校諸費ハ悉皆藩費ヲ以テ支辨スルモノトス

束脩謝儀 無之

學校經費 壹周年ノ用度從來維新後ヨリ學制御頒布ニ至ルマテ槽割木八百束障子紙八百枚トシ其他ノ費用ハ時々藩費ノ内ヨリ支出シ別ニ金穀ヲ以學資ニ充ツルノ定制ナシ

藩主臨校 在邑中四九ノ日二七ノ日臨校シテ學生ノ講義ヲ聽聞ス

祭儀 釋奠釋菜等ノ禮典ナシト雖モ毎年冬至ノ日學校職員及出席生徒一同ヘ赤飯ヲ附與スルノ例規アリ

學校構造及建物圖面(別ニ掲ク)

學校出版書物 小學壹部、李退溪書抄壹部、但十冊藏版

舊小幡藩

學制

學事上ノ諸制度 舊藩學事ノ制タルヤ藩主令シテ學業上進ノ者ニハ俸給ヲ壹人口増加シ一ヶ月五斗米又二三男或ハ長男ト雖

モ十七歲未滿ニシテ未タ藩務ニ預ラス父兄ノ厄介中ノモノニハ特ニ賞典ノ法有テ書籍又ハ金ヲ以賞與スルノ例アリ且七歲以上十歲未滿通常賞トシテ毎年正月十一日四時麻上下ノ諸代足輕外ノモ子弟袴羽織着廳中ヘ呼出シテ執政ノモノ出席學校總監并教授長大目

テ講義聽聞スルヲ稀ナリ在藩ノ節ハ必ラス素讀講義ヲ第一トシテ武藝ヲ悉ク一覽シテ上達ノ者ニハ祿高加増又ハ賞品ヲ授與スルヲアリ

祭儀 此舉タルヤ聖廟ノ設ケナシト雖モ毎年正月十一日ハ執政ヲ始メ學校總監其他ノモノ昇校シテ兼テ學校ニ聖像ノ一幅ヲ掲ケ神酒其他ノ供物ヲ獻備シテ執政ヨリ生徒ニ至ルマテ各禮服ヲ着シ席次ヲ正シテ拜禮ス終テ教授長經書ヲ講義セリ

學校ニテ出版ノ書籍無之藏書漢籍四十九部

學校構造及ヒ建物圖面（別ニ掲グ）

舊七日市藩

學制

學事上ノ諸制度

成器館ハ天保十三年藩主前田氏其家老職保坂庄兵衛大里半右衛門ヲノ創立ナシタル館ニシテ藩士ヲシテ文武兩道ヲ

導キ強藩タラシメント欲スルノ主義ナリ其勤怠ヲ大小目付ニテ視察シ家老職之レカ監督ヲナス藩士ノ者學業昇進ノ者ハ撰拔採用増祿又ハ新知等ヲ給與ナスヲアリ既ニ安政度ニ組足輕浦部齊ナル者學業勉強ナルニ付諸士ノ列ニ加ヘ給祿加増アリテ側勤並教授方ヲ兼タリ其他加増昇進ノ者モ若干アリ

士族ノ子弟教育ノ方法

藩士ノ子弟ハ必ス入學ナサシムルノ制規ナリ然レモ又各自意向ニ任セ家塾等ヘ入學スルヲモ許

セリ生徒ノ者優等アレハ藩費ヲ以テ東京ニ遊學ナサシム尤三年ヲ限リトス願書ヲ差出スモアリ又ハ主人指名ニテ市付ルモアリ私費遊學モ亦同様ナリ或ハ年ニ百日或ハ五十日ト限リ諸國遊歷ヲナスモ許可セリ私費ニ限ル其藩主ハ勿論藩士老若ニ限ラス生徒ト共ニ一六日ニ

ハ必ス講義ヲ聽聞セシム但シ藩主幼年等ニテ修業中ニハ平素生徒ト同席勉勵ス

平民ノ子弟教育ノ方法

平民ノ子弟教育ハ其村寺院住職亦名主等ニテ側ラ寺子屋ヲナス者アリ村民概ソ子弟ヲ其者ニ入

學習字算術等ヲ授業セシム明治一年藩主前田氏ヨリ令ヲ下シ七日市藩學校成器館平民子弟ノ入學ヲ許スト雖僅ニ三四名ノ入校アリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾又ハ寺子屋ヲ開設ナスニモ別ニ郡奉行等ノ許可ヲ得ス何人タリモ自由ニ開設ナサシムルナリ

ノミニシテ文學自然ニ衰微スルヲ患ヒ更ニ藩中及ヒ平民ノ子弟ヲシテ儒道ヲ擴張センヲ求ルノ意ヨリ此舉ヲ新設セリ之ニ加フルニ教示ノ方法ヲ設ケ藩士ノ子弟ヲシテ悉ク就學セシムルノ制度ヲ立タリ爾後其意ヲ戴シ經テ終ニ明治五年土地人民ヲシテ新置群馬縣ヘ引繼ノ際ニ至ル迄維持保存セリ

教則 教科用書 孝經、論語、詩經、書經、禮記、中庸、孟子、左傳、文選、此外漢籍ヲ用ユ○授業時間毎日朝六ツ時ヨリ五ツ半時迄素讀口授 四ツ時ヨリ五ツ時迄講義

學科學規試驗法及諸則

漢學、筆道、習禮、兵學、弓、馬、槍、劍、炮術、柔術、文武又ハ武道ノ内其一科ヲ專習スルヲ許可セリ生徒習學ノ期限ハ一定セスト雖凡畧七歲ニシテ就學シ十五歲ニシテ卒業ノ年齡トス每年秋期一回ツ、文武共ニ試驗セリ其方法文武總監及ヒ教授長教授方臨場シテ試驗セリ試驗無滯相濟候上ハ師範家及ヒ掛リ役人ノ自宅ヲ回禮ス且入學ノ際許可ヲ得シモノハ禮服着用シテ師範家其他係リ役宅ヲ回禮ス

職名及俸給 學校總監壹人 教授長壹人 教授役三人

此世話役ト稱スルハ武藝ナレハ日錄免許以上ノ者ノ内ヨリ藩廳ニチイテ拔擢シテ之ヲ命ス

右ノ輩ヘハ都テ毎月俸給壹人口ツ、役扶持ト唱ヘ増給ス尤無祿ノ士族之ニ適當スルハ此限ニ非ス特ニ金員ヲ以テ給與スルコアリ且學校總監教授長ハ給人席以上上士 教授方世話役ハ中小性以上中士 席ニ相當ス

維新前ト學制頒布前ト比スレハ學制頒布前ニ至リ退々衰微ノ景況ニ至ル且各俸給本祿ノ區別左ニ

維新前 給人席 五十石ヨリ七十石マテ外ニ毎月一人人口ツ、○中小姓席 廿石外ニ毎月一人人口ツ、○無祿適當ノ者 每月三圓

學制頒布前 上士 十三石外ニ月給金三圓ツ、○中士 十三石外ニ金二圓ツ、○無祿適當ノ者 每月五圓 其他役員ノ名稱ニ至リテハ異動無之

職員概數 學校總監壹人 教授長壹人 教授方三人 世話役三人但教授方世話役ハ時トシテ増減アリ

生徒概數 生徒略四拾名前後時トシテ増減アリ何レモ藩中居住ノ者ナレハ自宅ヨリ通學ス 束脩謝儀 無之

學校經費 一周年ノ學費概金三百兩以内トス全ク藩費ニシテ學田等ノ設ケナシ

藩主臨校 藩主臨校シテ素讀講義ヲ聽聞スルノ制アリ然ルニ文化度以降藩主代々若年寄寺社奉行及奏者番等ヲ勤務シテ概シ江戶屋敷ニ滞在スルヲ有リテ久シク藩地ニ住スルヲ稀ナリ江戶邸ニテハ主從トモ勤仕多忙ナレハ隨テ主人臨校シ

至リテハ藩士一般聽聞ニ出席大小目付臨席之ヲ檢査ス藩士出席七八十名ニ及ヘリ
束脩謝儀 一切無之

學校經費 一周年成器館雜費三百五十兩教授等手當米六十俵(一俵三斗五升八)家祿アル士ニハ別ニ祿ヲ給セス文科へ半減ト見積リ金百七十五兩米三十俵トナル尤年々増減アリト雖モ慶應明治間ノ概畧ナリ

藩主臨校 春秋兩度家老用人大小目付ヲ引隨シ臨校生徒ノ學術ヲ審查見分ナスナリ

祭儀 毎年正月十四日ヲ以テ業初トナシ其日聖像并摩利支天ノ像ヲ祭り神酒肴ヲ捧ケ一般禮服ニテ其禮典ノ式ヲ行フ

學校ニテ出版翻刻セシ書目 無之

學校構造及ヒ建物圖(別ニ掲ク)

舊喜連川藩

學制

學事上ノ諸制度 (規定) 頗風ヲ興シ士庶淳風ニ向ヒ 皇代ノ學課ニ本ツキ時世ノ適宜ヲ得ルヲ主トス

藩主ノ布令諭達等ハ書類悉皆焼失ニ付不詳又加役米引米等ノ名義ヲ以テ間接ノ祿稅ヲ免除セシ等ノコトナシ

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟八才以上必ス藩立學校ニ入學セシムルト雖モ藩費ヲ以テ他國ニ留學ヲ命セシモノ

ナシ又藩主ハ臨時臨校シテ講義ヲ聽聞セシコトアリ

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋或ハ藩立學校ヘ入學スルコト各自ノ意ニ任ス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ハ何人タリモ自由ニ開設スルコトヲ得

學校

校名 文學校初翰林館ト稱シ後廣運館ト改ム其名稱變更年月不詳武學校ハ演武場ト稱ス

校舍所在地 字倉ヶ崎下屋敷内ニ設立シ弘化三年七月九日同字舊名竹内ニ移轉セリ

沿革要略 舊喜連川藩慶長以來境内ノ校制未タ立タス時ノ僧徒或ハ醫師ニシテ文學アル者ヲ以テ侍讀ノ任ヲ提掌セシメ學

校ノ稱アリト雖モ教育方法全備ニ至ラス弘化中藩主左馬頭熙氏始メテ儒學ヲ尊崇シ學術誘導ノ路ヲ開ケリ

教科用書 孝經大學中庸論語毛詩尙書左氏傳文選國史略十八史略蒙求史記漢書通鑑六國史ノ類時間ハ午前八時ヨ

學校

校名 成器館 文武館ニテ文武ノ各
派藝術ノ分科アリ

校舍所在地 上野國甘樂郡七日市

沿革要畧 藩主前田利谿天保十三年創立シ藩士并子弟ノ文武藝術ヲ修業ナサシメ藩士ヲ養成ナスノ館ニテ安政年間火災

ニ罹リ同年新築ニテ明治五年廢藩ノセツ廢絶セリ儒官ハ嘉永年間宗像三策安政年間ニハ原田德三郎慶應ヨリ明治ニ至
リテハ鵜殿直記佐々木博等ヲ聘シ外ニ教授方五名助教五名ヲ置テ藩士ヲ教育ナサシム

教則 經書 歷史 作文 書籍ハ孝經大學中庸論語孟子詩經書經禮記易經春秋左氏傳十八史畧史記前漢書文選唐宋八大

家文集 授業時間ハ毎日六ツ半時ヨリ四ツ時迄素讀トス毎日晝後八ツ時ヨリ輪講質問一六日五ツ時ヨリ講義三八日作
文トス

學科學規試驗法及ヒ諸則 兵學 山鹿流慶應年間ヨ
リ練兵洋式ニナル 弓術 日置流
竹林流 馬術 大坪
本流 劍術 念流無念流一刀流荒
木流等ノ四派アリ 砲術 武衛流ナリ慶應年
間ヨリ洋式ニナル 各其流派

ニヨリ規則等區々ナリ 學科ハ漢學ニテ入學ハ八歲トス 願書ヲ文武總裁ヘ
出シ許可ヲ得タリ 退學ハ定期ナシ 願書ヲ出ス 入校等ハ武道文道兼修業セシメ試驗ハ其法ナ

シト雖年々兩度春秋見分ト號シ藩家老用人大小目付列坐校掛員出席素讀講義作文等ニテ其學力及才智ヲ視察シテ賞品ヲ

授與シ又ハ知行等加増又ハ二三男ニ至リテハ別家召出サル、トモアルヘシ規則左ニ 式日祭日休業 入學ヲ乞ハ願書
ヲ出シ寄宿ヲ乞フ者ハ証人ヲ相立其者ヨリ入費金敷上納ノ事 入塾ノ上ハ教師ノ命ヲ奉シ廣ク前言往行ヲ識ルシ其德

ヲ蓄フルコソ學問ノ要旨ニシテ悻悻勵精國家有用ノ人タルヲ要ス若シ心得違ヒ懶怠ニ日ヲ送り品行不正ノ輩有之ニ於
テハ大小目付ノ審査ニヨリ總裁職ヨリ退校申付候事 長幼ノ順序ヲ正シ互ニ謙讓ヲ旨トシ和氣平心ヲ以テ忠告慰勵シ

面從後言ノ風無之樣致サルヘキ事 入塾生月費ハ食料ノミ時價實費ヲ収ムヘシ 職名及ヒ俸祿 文武總裁職 家老儒官一員
藩士ノ内其任ニ當ル者ナキトハ屋入亦
外藩ノ士ト雖モ出入扶持ヲ以テ聘ス 教授方五員 專勤アリ助教五員
兼勤アリ 校長一員 俗事ハ勿論文寄
科一切ヲ主ル

宿長一員 生徒ノ寄宿ノ
者ヨリ勤ム 右職員俸祿ハ家祿ヲ以テ務ム 左小祿ノ者ハ足シ高
チナスコアルヘシ 部屋住無祿ノ者ハ職務中米一口ニ金五兩ヨリ十兩

迄 其人ニヨリ
適官ニ給ス 嘉永年間ヨリ明治年間ニ至ルマテ改正ナシ 職員概數 總裁職一員校長一員副校長一員儒官一員教授方五員助教五員小使二員合計十七員

生徒概數 寄宿通學ノ生徒定數ナシ明治一年ノ景況ハ寄宿入塾ナシタシ者僅ニ十七名通學二十餘名ナリト雖一六講義ニ

武ノ學業ヲ隆興セシムルニアラサレハ得ヘカラス然レ藩圖狹少加フルニ封内窮貧俄ニ學校建築ノ工事ヲ起シ得ス因テ銳意封内ノ荒土數百石ノ地ヲ開拓シ學田ニ備フヘキノ計畫成ルト雖レ急ニ施行スルヲ得ス如此ニシテ年月ヲ送ルニ忍ヒス漸次行フヘキノ決シ弘化三年新ニ學校ヲ設置ス然ルニ不幸ニ凶年ニ遭逢シ或ハ武備訓練ノ事急ニシテ曩ニ計畫セシ荒土開拓ノ着手ニ追アラヌ依テ納戸金ノ内ヨリ年々學校ノ實費額ヲ支出セリ

藩主臨校 藩主ノ臨校壹ケ年概チ一二度ニシテ親シク生徒ノ講義ヲ聽聞シ或ハ武技ヲ觀ル祭儀 釋奠ヲ執行セシト雖レ器具書類等悉皆燒失不詳

學校構造及ヒ建物圖面 文武館構内同所東向地坪八百十坪餘圖面別紙ノ通り

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書ノ種類 出版翻刻書無之藏書數百部有ト雖レ是又悉皆燒失シ今部數タモ學クルニ由ナシ

舊宇都宮藩

學制

學事上ノ諸制度 藩ノ布令諭達等ニ係ルモノハ屢々回録ノ災ニ罹リ今尙舊規ヲ搜ルニ由ナシ且加役米引米等ノ名義ヲ以テ間接ニ祿稅ヲ免除セシ等ノコナシ

士族卒ノ子弟教育法 藩主ノ學校ヘ入學ヲ督促シ然レモ各自ノ所好ニ由リ他ノ私塾等ニ通學スルハ敢テ禁スル所ニ非ス他國ノ遊學生ハ修道館ニ於テ文學或ハ武術ノ課程ヲ了リタルモノ願ニ依リ舊江戸又ハ他國ヘ遊學ヲ許可ス之ヲ許可セシモノニハ食米及扶持方一人分ヲ給セラル殊ニ文武ノ業ニ達セシモノハ藩主ヨリ他國修業ヲ命セシコアリ又藩主在城ノ節ハ一月一回又ハ二回學館ニ臨ミ學生ノ技術ヲ觀覽ス

平民ノ子弟教育法 平民ノ子弟ハ多クハ家塾寺子屋ニ於テ各自修學ヲナシ藩吏亦督責獎勵ヲ加ヘス然レ藩立校ヘ入學ヲ願ヒ出ルモノアレハ之ヲ許可ス故ニ農商共ニ學事ニ從事スルコトヲ禁止セシ等ノコナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 私塾寺子屋ヲ開設スルハ各人ノ適宜ニ任シ郡宰里正等ニ於テ之レカ檢束ヲナセシコナシ

潔身館 是ハ修道館附屬ノ學館ニシテ南樓北樓ト區別シ南樓ハ專ラ文學ヲ教授シ北樓ハ數學習字トヲ授ケ教官二名ヲ置キ各南北ヲ擔當セシム其設立年代ハ蓋シ文化年代ニアリテ文政年代回録ノ災ニ罹リ再ヒ建ツルコトナシ獨リ修道館ノミ存セリ

リ午後二時ニ至ル

學科學規試驗法及ヒ諸則 初メ僧家方技ノ人ニ從事シテ恭敬退讓ノ節見ハレス之レニ依テ教育ノ資料備ラスト雖ヒ嚴師友ノ規ヲ示シ時俗ノ頹風ヲ振フニ急ニシテ藩ノ子弟ニ教ユ先ツ其大者ヲ立其餘節ヲ待事ノミ多シ抑習業ノ科一蒙ノ名ニ依ラス王代ノ遺風ヲ仰ク故ニ養老令ノ制ニ本ツキ古義ヲ講ス 編者曰此文解シ難キ處アレ暫ク原文ノ儘チ存ス

學規

專要習讀和漢之古書通國体 經傳依古註研究 生徒句讀卒業之後經藝之外各從性之所好講習要無陷偏固得活用 講習之業在挽回王代之古雅故和儒著書堀河萱園益軒之書爲得益特多 正長幼之序戒莫見他之風儀批議之 習詩文者師古体不事浮華強飾要事實

武學校

習禮 小等原流○兵學 越後流○弓 尾州派、竹林流○馬 大坪本流○鎗 一指流、鏡智流、寶藏院流○劍 示玄流、唯心一刀流○砲術 武術流、榊原流○柔術 堤寶山流、柳生流 右時間ノ定則ナシ概チ各科二時ヲ要セリ

校則

八歳以上ノ男子入校 毎月六之日休暇 生徒無故三月怠者解退 雖親交之宴ト晝不ト夜 親眷不睦者不許在留 毎年一月五日開校十二月廿五日休業○試験 毎月廿八日參政一人臨校試験 毎年十月十五十六兩日會ニ生徒殿中ニ於テ藩主之ヲ親試ス但優等者ニ書籍先皮柄皮鐐及刀劍ノ類ヲ賞與ス 生徒ハ必ス文學兩道ヲ兼修セシム

職名及ヒ俸祿 文學校 學監、教頭、助教、司事、句讀師員 俸祿制有ト雖ヒ記錄燒失ニ付不詳○武學校 幹事、教師、助教 俸祿制前同上

職員概數 文學校 學監一人 教頭一人 助教一人 司事一人 句讀師員二人○武學校 幹事一人 教師七人 助教五人

生徒概數 文武學事盛ナリシ年ハ百名以上ニ至リ衰時ト雖ヒ四五十名ニ下ラス

束脩謝儀 束脩ハ各自ノ隨意トス故ニ多クハ無月謝ナリ

學校經費 舊藩主左馬頭熙氏襲秩ノ日ヨリ文武興隆ノ志深ク特ニ累世 天恩ノ厚ニ報セントス其之ヲ達セントスルハ文

ル勿レ喧嘩スル勿レ戯嬉ヲ爲ス勿レ席次入館ノ順序ヲ以テスヘシ每ニ虚心以テ己ノ益ヲ受クヘシ勿挾賢勿挾長勿挾故業畢レハ則拜ヲナシ刀ヲ挾ミテ而シテ退ク

職名俸録 文武引立方二名 是ハ文武各管掌アリ一人ハ文道ヲ管シ一人ハ武道ヲ管ス○教授 學生ヲ簡練シ捷劣ヲ精撰シ文義ヲ教解シ疑義ヲ辨析シ學政ヲ提督シ學派ヲ正決シ黜陟賞罰正邪及ヒ館中ノ庶務ヲ總判ス○助教 職掌同前○訓讀師 第二第三生徒ノ句讀ヲ授ケ及其勝劣ヲ監シ其勤惰ヲ督ス
以上諸職員ノ俸給ハ家格ノ高下ヲ以テ之ヲ別ツ故ニ定俸ナシ

職員概數 教授 一等二等^{以家格高下別之}○助教 一等二等○訓讀師 一等二等三等^{以業優劣別之} 復讀係兼掌三等生徒之復讀及校中

ノ雜務○雜事係^{斷全}

生徒概數 未詳

束脩謝儀 無之

學校經費 敢テ豫算ナシ一ケ年ノ費額ニ依リテ支出セリ然レモ之ヲ各年平均スレハ左ノ如シ

金百兩 書籍費○金七拾兩 職員俸給○金二百四十兩 生徒寄宿料及薪炭油ノ代○金九十八兩 諸道具買入其他修覆等ノ分○金六百兩 生徒遊學費

藩主臨校 期月ヲ定メスト雖モ一年一回或ハ二回臨校シテ生徒ノ學業ヲ試ム

祭儀 古ヨリ聖廟等ノ設ケナシ故ニ釋菜釋奠ヲ行ヒシヲナシ

學校構造 別圖ノ如シ

遊學 助教訓讀師二員半年ヲ限リ四方ニ遊學シ汎ク天下ノ名士ニ接シ其異聞ヲ采收シ以テ己ガ學識ヲ暢達ス

文庫 教授之ヲ管轄シ助教其出入ヲ監察ス此例一冊ノ簿冊ヲ製シ書ヲ請フモノハ必自ラ其書名及名証月支ヲ署シ其書ヲ納ムレハ自ラ簿面ヲ消セシム要スルニ其讀了ノ遲速ヲ監シ且其散佚ヲ糾ス

外來遊學生 遊學外來アレハ則之ヲ學館ニ邀ヘ大率經義ヲ摘撰シ以講義ヲ請フ或ハ詩作文ヲ賦ス各其所長ニ從フ

舊壬生藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達或ハ加役米又ハ引米等ノ制定ナク獎勵法ノ設ケナシト雖モ齡十六七歳ニ至リ文武上進

學校

校名 修道館

學校所在地 下野國河内郡宇都宮町

沿革要項 從前藩士ノ内各私塾ヲ開キ藩中ノ子弟ヲ教授シ來リ候處文化年中戸田日向守忠延新タニ學校ヲ設ケ支那學ヲ以テ藩内ノ少年ヲ教導ス明治四年廢藩置縣ノ際ニ至ルマテ凡ソ六十年間授業相續キ明治四年十一月十三日宇都宮新置縣ヘ引渡シ鎮校ス其教授ヲ掌リシ人物ノ氏名等ハ詳カナラスト雖モ學跡ハ朱子學ヲ教授シ此間殊ニ著名ノ著作等アルナシ

教則 第一等 大學、中庸、論語、孟子、易經、書經、詩經、三禮義疏、春秋左氏傳、餘力ヲ以テ公平穀梁二傳ニ及フ 右生徒輪講ノ課目トス 大

日本史、資治通鑑、通鑑綱目、日本外史、日本政記、史記、兩漢書、大學衍義補、國史纂論、貞觀政要、綱鑑易知錄、陸宣公奏義、八大家文、文章軌範 右會讀ノ課目トス其他餘力ヲ以テ諸大家集諸子百家皆熟讀互ニ討論シテ疑義ヲ質シ且先師ニ就キテ質之○第二等 易書詩禮春秋、左氏傳、小學、近思錄、國史畧、十八史畧、元明史畧、蒙求 右能ク熟讀互ニ相會讀シテ以テ文義ヲ解ク又共試シテ而第一等ニ入ル○第三等 孝經、大學、中庸、論語、孟子 右句讀了リ數々考試ヲ加ヘ第二等ニ入ル

學科學規試驗法及諸則

漢學 朱子學 數學 和算

試驗ハ通常試驗親臨ノ二種トス通常試驗ハ學生學業ノ熟スルニ當リ之ヲ行フ豫メ期日ヲ定メス其方法ハ助教一員訓讀師二員之ヲ掌リ覆讀溫習ナサシム親臨ハ藩主親ヲ臨ミ學生ヲシテ講讀ヲナサシメ優秀ノ者ニハ賞詞又ハ賞品ヲ賜フ劔術 眞心流、直眞影流、高直流○柔術 船海微塵流○弓術 日置流、大藏流○馬術 大坪流○砲術 自得流、荻野流 但生徒賞罰黜陟ハ概チ監督ノ權ニ屬スルヲ以テ殊ニ規定ヲ立テス是ヲ以テ今其規則ヲ識リ難シ

學館規則

齒ヲ崇ヒ禮儀ヲ習フ

凡學生館中ニ於テ長幼ノ序ヲ爲スハ勿論ト雖モ已ニ仕者ハ自ラ其等級アリ其未タ仕ヘサルモノハ宜ク本分ニ依リテ長幼ヲ序スヘシ凡學生毎朝五鼓ヲ以テ入館各先脫刀教官ニ拜謁シテ而後坐ニ即ク必端正ニシテ參差ヲ爲ス勿レ敖情ナ

回禮ノ儀ハ各自ノ適宜トス

教科用書 小學 四書 五經 近思錄 孔子家語 貞觀政要 唐宋八大家 左傳 國史略 日本外史 本邦六國史

史記 前後漢書 資治通鑑 元明史畧 明朝紀事本末等

校則

一學問ハ忠孝仁義身ヲ修メ家ヲ齊ヘ人ノ人タル道ヲ學フ事ニテ學術ヲ統テ藝術ト對勢ス故ニ武藝ニ達スルモ道ヲ知ラサレハ暴亂ニ陷リヤスク文事ニ長スルモ道ヲ得サレハ浮虛ニ流ルヘシ共ニ成德達材ノ主意ニアラス是業ノ譯能々心得各其身ノ爲ニ修業致シ文弱ニ流レス武暴ニ陷ラサル様文武出精素ヨリ國家ノ御大用ニ相立候様可致事

一尊卑上下ノ分ヲ厚ク相守恭敬辭讓ヲ主トシ高聲爭論致間敷事

一萬事古質朴ノ風儀ニ倣ヒ驕奢カマシキ儀一切致ス間敷事

一酒食ハ申ニ及ハス浮習ノ雜話可爲無用事

卒トス

職名及ヒ俸給 教頭助教句讀師文庫掛トナシ教頭現米四十石トシ助教師已下ハ定制ナシ句讀師已上ヲ士族トシ文庫掛ハ

職員概數 教頭一名助教師已下ハ若干名ヲ置キ定員ナシ總員纔ニ六七名ナリ

生徒概數 百二三十名前後ニシテ多クハ通學生トス寄宿生徒ノ如キハ無定員ニシテ自費ヲ以テ各自ノ意ニ任ス

束脩謝儀 ナシ

學校經費 書籍器械其他薪炭油等ノ類皆實費ヲ以テ下付スルカ故ニ敢テ經費ヲ要セス

藩主臨校 一定ノ成規ナキモ年ニ一回或ハ二回藩主臨校シテ各生徒ノ學力ニ應シ一葉亦ハ二葉素讀及講義聽聞シテ其優劣ニ應シ賞與セシマアリ

祭儀 ナシ

學校構造及ヒ建物圖面 地坪三反餘ニシテ建坪ハ別紙畧圖ノ如シ

學校出版及藏書 出版セシ書ナシ及藏書ノ種類等今詳カナラス

舊烏山藩

學制

セシモノハ扶持米等ヲ下付シ二三男ニ於テハ別家ヲ成サシムルヲ以テ自ラ獎勵ノ道アリト云フヘシ其他觀察スルノ事項ハ之レナシ

士族卒ノ子弟教育法 必シモ藩學校ニ入學セシムルノ法ナク各自ノ意ニ任セシモノニシテ家塾等ニ修學セシムルモ妨ケナシト雖モ藩費ヲ以テ他國へ遊學等命セシ制ナク私費ハ亦各自ノ意ニ任ス

平民ノ子弟教育方法 各自ノ意ニ任セシヨリ家塾等ニ入り修業セシモノアリ亦藩立學校ニ入學スルヲ敢テ禁セシトナシ然レモ多クハ豪農豪商ノ子弟ニシテ其他ハ稀ニ入學セルモノアリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等ヲ設置スル許可ヲ受ケシムル制ナシ亦何人タリト雖モ自由ニ開設スルヲ得タリ

學校

校名 學習館

校舍所在地 下野國都賀郡壬生城内

沿革 正徳二年江州水口ヨリ封ヲ壬生ニ移サレ同三年正月藩主從五位下伊賀守島居忠英ノ設立開校スル所ニシテ皇國學

支那學ヲ以テ教導シ明治四年七月廢藩置縣ノ際ニ至ル迄凡百五十九年間授業相續有之此間多少ノ盛衰アリト雖モ著シ

キ變動ナキヲ以テ贅セス明治四年七月廿日壬生藩廢セララルヲ以テ壬生縣へ引繼キ其後同年十一月ヨリ廢縣ノ故ヲ以

テ閉鎖ス

學科 學科ヲ區別スル左ノ如シ

漢學 朱子學派 習字 適宜多クハ 御家流ナリ 以上學習館中ニ於テ學習ス 兵學 長沼流ニ關 式ヲ合ス 馬術 大坪本流 鎗術 一旨流 劍術 聖徳太子流 砲

術 蘭式 柔術 大雲流 以上ハ演武場及其他ハ練兵所等ニ於テ大概午前八時ヨリ正午迄トス

教則 素讀 毎日 午前七時ヨリ 午後六時ヨリ 正午マテトス 初メ三字經或ハ孝經ヨリ四書五經ニ至ル五經ニ至テハ獨學シ來リ其疑難ヲ質問ス○輪講

毎月十二回 午後六時ヨリ 同十時ニ至ル 初メ小學論語孟子等ヨリ歴史ニ至ル○講義 毎月三回 教師自ラ之ヲ爲シ諸生及藩士ニ聽

聞セシム 論語或ハ歴史ニヨル○習字 習字ハ平假名ヨリ行草混体ノ國名等ヨリ消息往來等ニ及フ而シテ毎月六回淨書ヲ

ナサシム○算術 八算見一相場割等ノ順次ニ從フ○其他作文ハ習文錄武將感狀記論語孟子等復文シ詩ハ詩語碎金幼學

詩韻古詩韻範等ヲ以テ毎月六會トス習字ノ如キハ父兄ノ意ニ任セ師ヲ選ヒ學ハシメ毎清書ヲ差出サセ勉怠能否ヲ鑑査

シ歲末ニ至リ文學ト同シク賞罰ヲ行フ其賞品ノ如キハ定制ナシ其他劍鎗術ノ如キハ各先輩人ニ付テ之ヲ習フ入學ノ節

校則 凡士族卒ノ子弟年七八歳ニ及ハ、學校ニ入り専ラ讀書怠ル可ラス十歳ヨリ以下他ノ技藝ニ入ヲ許サス若シ天資俊

秀ニシテ學業衆ニ超ル者此例ニ非ス

凡學士ノ講經必ス威儀ヲ正フスヘシ先一人文一段ヲ誦シ後其義ヲ解明ス疑ヒ有ラハ之ヲ討論シ隱スヲ勿レ插嘴剿說
雷同スルヲ禁ス

凡藩内士族卒定日必ス學校ニ入り専ラ文事ヲ研究スヘシ公事疾病喪祭ヲ除クノ外ハ私謝スルヲ得ス故無フシテ三
回以上名簿ニ上ラサル者ハ之ヲ督責ス毎年春秋二期中學士ノ精不精ヲ點檢シ之ヲ官ニ聞シ賞罰黜陟ノ典ヲ行フヘシ
凡生徒ノ學校ニ在リ出入往來進退言語必ス禮讓ヲ失ス可ラス少者長者ニ後ル、禮也席ニ就ク猥雜ニシテ順序ヲ紊ル
ヘカラス年長少ヲ以テ班ツヘシ貴賤ヲ以テ等ヲ爭フヲ勿レ

凡生徒私黨ヲ立テ學派ノ是非善惡ヲ論スヘカラス政務ノ得失官員ノ邪正ヲ私議ス可ラス好テ人ノ惡ヲ訐ク可ラス己
カ長ヲ誇ル可ラス財利飲食戲玩鄙俚淫褻等無用ノ陋談一切之ヲ禁止ス平心虛懷互ニ相規諫シ總テ高聲喧譟深ク謹戒
ヲ加フヘシ

凡士族卒十五歳以上青年ノ者一月之内六回上校讀書必ス怠ル可ラス故無クシテ欠課スル者ハ前條ニ照ラシテ之ヲ督
責ス

年號月日

學校

職名及俸祿并職員概數 督學一員 年給金三十圓○助教四員 同金十八圓○書師二員 同金十二圓○算術一員 同上

生徒概數 凡百名前後ニアリ

束脩謝儀 収入セス

學校經費 書籍器據薪炭油等都テ現品ヲ以テ受取り筆墨紙ノ如キハ皆生徒ノ自費ナルカ故ニ別ニ經費ノ目ナシ

藩主臨校及祭儀 一定ノ成規ナシ

學校構造及建物圖面 別紙略圖ノ如シ

舊黑羽藩

學制

學事上ノ諸制度 都テ教育上ニ付テ藩主ヨリ布令諭達等皆一時ノ限ニ外ナラフ或ハ口達等ニシテ學業上進ノ者ハ加役

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達等ニ關スル文書類ハ既ニ散佚シテ以テ探索スルニ由ナシト雖モ今故老ノ口碑ニ因レハ加役米又ハ引米等ノ名義ヲ以テ教育上ニ獎勵ノ道ヲ設ケシヲナシ亦諭達等ノ如キモ多クハ藩主ノ口達ニ出ツ只藩士中先進ノ輩ヲシテ後進ノ徒ヲ薰陶スルニアリ

士族卒ノ子弟教育法 昔日士族卒ノ子弟教育スルノ方法ナシト雖モ之カ熟練ナルモノヲシテ師範者ト爲シ其任ノ適宜之ヲ教授スルニアリ教科課程ノ如キ亦然リ藩費ヲ以テ他國へ留學等許可セシ制度ナシト雖モ自費遊學スル者亦各自ノ意ニ任ス今日ヨリシテ之ヲ視レハ自由教育ト云ハサルヲ得ス

平民ノ子弟教育方法 藩立學校へ入學スルヲ禁セシ制ナシト雖モ農工商ノ子弟ニシテ士族ノ子弟ト伍ヲ同フスルヲ厭ヒ入學セシモノナシ藩主モ亦措テ問ハス然レモ寺子屋家塾等ニ就キ修業スル者頗ル夥ク其學ヲ處極メテ卑近ノ者トス家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等開設スル敢テ奉行郡宰里正等ノ許可ヲ受クルニ非ス自由ニ開設スルヲ得ルト雖モ僅カ習字句讀ニ止リ學科授業法等ノ設ケナシ只各自ノ意ニ出ツ

學校

校名 學問所ト號ス

學校所在地 那須郡烏山町城内字堂平

沿革要略 享保十一年九月烏山藩主佐渡守從五位大久保常奉之ヲ烏山城廓内字堂平ノ地ニ設立シ支那學ヲ以テ教導シ藩世々相承其間盛衰アリト雖モ廢絶ニ至ラス以テ御維新ノ際ニ會シ烏山藩舊知事從五位大久保忠順之ヲ更張シ明治二年己巳十一月三日教官數員ヲ置キ猶漸次増員シテ隆盛ニ至ランヲ庶幾ス同四年辛未七月廢藩置縣ニ至ル迄百四十六年間授業相續シ辛未ノ秋ヨリ翌壬申ノ夏ニ至リ舊烏山縣ノ事務新縣へ引繼ニヨリ閉鎖ス

教則

日本紀 續日本紀 日本後紀 續日本後紀 文獻實錄 文德實錄 三代實錄 國史略 日本外史 大日本史 小學近思錄 孝經 四書 五經 周禮 儀禮 爾雅 春秋左氏傳 國語 史記 前漢書 後漢書 戰國策 三國志 資治通鑑 西洋譯書 右爲入門之學

講經標目 小學 近思錄 孝經 四書 五經 春秋左氏傳 右爲上堂之學

講經定日 三八自一字至四字 書科 每日自八字至四字 算術 五十自一字至三字但算術ハ十五歲以上ノ生徒可學事 每月一六休暇之事

和漢學 算學 習字

春秋試験ノ法生徒賞品授與ノ法及生徒訓條ノ如キ當時ノ書類散佚今搜索ニ由ナク詳記スル能ハスト雖モ入學許可セシ
時禮服着用師範家ヘ同禮スル等ノ事ハ各自ノ隨意タルヘシ

職名及俸給 一等教官ヨリ七等教官ニ至ル其俸額ハ別ニ給セス定祿ノミ支給スルヲ以テ教官ニ付テノ俸給ノ如キハ確定
ナシ

職員概數 二等教官一員 三等教官一員 四等教官一員 五等教官二員 六等教官三員 七等教官四員
生徒概數 寄宿生ハ平均二十名前後ニアリ通學生七八十名ヲ度トス皆自費ニシテ藩費ヲ支給スル制ナシ

束脩謝儀 束脩及ヒ謝儀共ニナシ

學校經費 藩主賞典祿中ヨリ現米若干ヲ以テ學資トシ其支出ハ皆實費額トス

藩主臨校 一定ノ制ナシ

祭典 一定シタル祭典ナシ

學校構造及建物圖面 構造ハ日本風ニシテ二階屋ナリ凡坪數五十坪トス略圖ノ如シ

舊茂木藩

學制

學事上ノ諸制度

校則揭示

一 凡諸生初メテ學館ニ入ラントセハ其前日ヲ以テ教官助教及ヒ幹事ニ請ヒ其承諾ヲ得テ入館ヲ許ス但學業ヲ卒ヘ退
館スルモ之ニ準ス

一 初メテ入館スルモノハ必禮服ヲ著スヘシ

一 凡諸生日々午牌ヲ以テ集リ未申ノ間ヲ以テ散ス

一 登館ノ者ハ專ラ學業ヲ精勵シ放逸懈怠ナル勿レ

一 凡諸生館中相會スル片ハ須ク慎謹ヲ要シ輕忽威儀ヲ害スル等ノ所爲ヲナス勿レ

一 凡讀書ノ法音調ヲ詳ニシ句讀ヲ明ニシ詳明周到ヲ要シ苟モ葉數ヲ限リ疎漏ニ渉ル等ノコアル勿レ

米及引米等ノ制定ヲ設ケタルヲナク間接ノ祿稅ヲ免除スル如キ亦之ヲシト雖凡超衆勉勵シ優等熟練シタルノ證アル者ハ増祿スルヲアリシニ付キ自ラ獎勵ノ一端トナリシ上ノ好ム所下之ヨリ甚タシキハナシト藩主尤學事ニ意ヲヨス下亦勉勵者少ナシトセス

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ニ入學セシムルノ方法設ケナシト雖凡家塾ニ入ルヲ自ラ嫌ヒ皆藩立學校ニ入り自費ヲ以テ他國へ遊學ハ禁セシヲナキモ亦藩費ヲ以テ留學等命セシ例ナシ概シテ云へハ學事ニ干與セサリシト云フモ不可ナカラン藩主ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムル法亦ナシト雖凡藩主少ナクモ一ケ月中臨校シテ之ヲ監視スルヲ大凡六會ニ下ラス

平民ノ子弟教育方法 農民等ヲシテ學事ニ從事スルヲ禁止或ハ藩立學校ニ入學スルヲ禁止セサリシト雖凡自ラ藩立學校ニ入ルヲ厭ヒ入學ヲ乞シモノナシ農商工ノ如キニ至リテハ教育ヲ受ケサルト云フモ可ナリ或ハ家塾ニ入ルト雖凡只習字ノ一科ヲ學フヲ以テ皆満足ノ點ニ達スルモノ、如シ家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルニ檢束ノ法ナシ何人タリトモ自由ニ任セタリ

學校

校名 何陋館後改名作新館

學校所在地 那須郡黑羽向町城内

沿革要畧 文政三年藩主大關増業ノ設立スル所ニシテ皇漢學及鎗劔弓砲等ノ諸術ヲ教授ス武藝兵學等ヲ教授スルヲ練武園ト稱シ戸高曲甫等六名ヲシテ師範家トナシ其等級ヲ六等ニ區分シ一等ヲ年俸百圓トシ六等ヲ全三拾圓トス各差アリ然ルニ五六年間ヲ經テ廢絶ス自來教育ノ道絶エタルニ非リシモ今舊記類ノ散佚廢滅シテ窺知スルニ由ナシ後安政四年五月亦藩主大關増式ノ設立ニ係ル學舍ノ構造狹隘ナルニ因リ全四年二月大關増勤官地壹反三步ヲ借り受ケ學舍敷地トシ私金若干ヲ抛ツテ更ニ新築シ加之賞典祿ノ内現米百五拾石ヲ以テ永ク學資トナス作新館是ナリ全年七月廢藩後閉鎖ス

教則 教科用書ノ如キ確定ナキヲ以テ今其一ニナ掲ク 孝經、四書、五經、國史畧、十八史畧、前後漢書、其他歷史等

素讀 午前九時ヨリ正

講義 一ケ月

輪講 午後

習字 午前九時ヨリ午後三時マテ

以上終テ午後三時ヲ退校ノ時限トス

學科學規試驗法及諸則

兼テ詩文ノ奥義ヲ究メ諸子百家ノ文書ヲ研究ス之ヲ上級トス

學科學期試驗法及諸則 漢學 朱子學○劍道 眞影流 文武ハ必スシモ兼修セシメス各人ノ所好ニ隨フ故ニ文武程度ノ比例ヲ設クルヲナシ生徒學修ノ期ハ文學ハ八歳ヨリ始リ武藝ハ十五歳ヨリ始ム其考試ノ期ハ春秋二季ニ概テ藩主臨席シ優秀ノモノニハ賞品ヲ授與ス又初メテ入學セシモノハ父兄親戚之ヲ伴ヒ禮服ヲ着シ師範家及ヒ職員ノ宅ヲ回禮ス但賞品ヲ下賜セラレシキモ之ニ同シ

職名及俸給 學校奉行 是ハ目代役奉行役ヨリ兼勤シ家格ニヨリテ位次アリ故ニ定俸ナシ○教頭 役扶持二人分○助教

役料金三兩三分○雜事係 役料金三分

職員概數 學校奉行一員 教頭二員 助教三員 雜事係一員

生徒概數 不詳

束脩謝儀 無之

學校經費 一ヶ年定額ナシ只實費ノ額ニ從フ且學田等ノ名義ヲ以テ附屬セシモノナシ

藩主臨校 春秋考試ノ節ハ大概臨校ス或ハ臨時臨席シテ講義ヲ聽聞シ賞品ヲ授與セシヲアリ

祭儀 古ヨリ聖廟祭場ノ設ケナク釋奠釋菜ヲ執行セシヲナシ

學校構造及ヒ建物圖面 地坪九十坪 建坪四十坪 校舍ハ既ニ廢朽ニ屬シ今遺存セサルヲ以テ位置圖面ヲ得ルニ由ナシ

舊佐野藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主布告諭達ニ係ル文書ハ既ニ散佚廢滅シテ現今ニ存スルモノナキヲ以テ九牛ノ一毛ヲモ窺知スルニ由ナシ然レモ故老ノ口碑ニ因レハ藩主加役米引米等ノ名義ヲ以テ學事ヲ獎勵セシヲ聽カス只藩中文武ノ藝能ニ達スルモノヲシテ藩中後進ノ徒ヲ薰陶セシメ別ニ職名等ヲ立テス元治元年甲子十一月ニ至リ舊藩主從五位堀田正頌初メテ文武ノ學館ヲ創設シ之ヲ觀光館ト號シ藩中士族ノ子弟ヲ教導セシム明治四年辛未七月廢藩置縣ノ際舊佐野縣ヘ交付シテ授業相續ス是年十一月該縣廢セラレ遂ニ朽木縣ノ管スル所トナリ尙校舍ヲ假リテ私費之ヲ保續シ明年三月ニ至リテ費用支ヘス遂ニ全ク之ヲ鎖スト云フ蓋シ年ヲ歷ルヲ七年ナリ舊縣ノ申牒ニ云フ當校ノ設立ハ舊藩々政改革ノ際ニ係リ百事多端元ト假構ニシテ未タ規則ノ確定ナシト

一凡誦讀ノ間疑義アルキハ謹ミテ之ヲ高弟ニ質シ或ハ同朋切磋シ勉メテ反復叮嚀ナルヲ要ス

一凡諸生誠意ヲ以テ要トナシ聖賢ノ遺訓ヲ奉シ他日國家ヲ益スルノ道ヲ志スヘシ

士族卒ノ子弟教育法 藩中士族ノ子弟ハ各自ノ意向ニ任セ私塾家庭等ニ於テ修學ヲナサシメ敢テ藩學校ニ入ルヲ要セス
又藩費私費ヲ以テ他國へ留學ヲ命シタル等ノヲアルナシ藩主ハ大略二七ノ日ヲ以テ藩校ニ臨ミ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞
セシヲ往々之レアリ平民ノ子弟ハ私塾寺子屋ニ於テ各自修學ヲナスハ隨意タリト雖モ藩立校ニ入ルヲ許サス
家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ設廢スルハ各人ノ意向ニ任シ郡宰里正等ニ於テハ之レニ干與セシヲナシ

學校

校名 弘道館ト稱ス

校舍所在地 茂木馬場通

沿革要略 學校創立ハ寛政六甲寅年正月舊藩主細川長門守興德ノ代ニ於テ儒學ヲ崇尊シ學校ヲ起シ藩中ノ子弟ヲ教導セ
シム且演武場ヲ開キ士人ノ義氣ヲ養成スルヲ謀レリ是ヨリ先キ藩中文武ニ志スモノハ藩士中熟達ノ者ニ就キ各自修
業ヲナシ敢テ藩主ノ干涉ヲ受クルヲナキヲ以テ文武共ニ隆興ノ勢ヲ視ルニ至ラサリシカ藩主開校ノ舉アリシヨリ藩中
ノ士人皆藝文ノ崇ムヘキヲ悟リ日ヲ襲テ歲ヲ趁フテ漸次拔群ノ徒ヲ輩出スルニ至レリ明治初年廢藩置縣ノ命降ルニ會
ヒ校ヲ鎮シ新置縣ニ引渡セリ以上舊規ニ關ル文書ハ概チ散亂廢佚シテ搜索スルニ由ナシ

教則 階級ヲ別チテ七級トス 古ノ教ハ必ス正業アリ退息必居アリ今進學ノ次序ヲ以テ正業ヲ掲クルヲ左ノ如シ

外級 凡ソ藩ノ子弟八歳ニシテ必學ニ入り先ツ四書句讀ヲ習ヒ四聲ノ別ヲ知ラシム四書了リテ五經句讀ヲ習フ之ヲ外
級トス是ヨリ考試ヲ經テ初級ニ入ル○初級 五經句讀了リテ後春秋左氏傳及ヒ反切韻書ニ移リ十八史畧國史畧等ノ解
讀ヲナス之ヲ初級トス是ヨリ考試ヲ經テ第二級ニ入ル但第二級ニ入ルモノハ自讀ノ餘暇ヲ以テ後進ノ句讀ヲ授ク○第
三級 國語文選等ノ句讀ヲ習ヒ兼テ古事記萬葉集等ノ解讀ニ移ル之ヲ第三級トス 自讀ノ餘暇ヲ以テ後進ノ句讀ヲ授
クル前級ニ同シ○第四級 文章軌範四書解讀ヲナシ兼テ詩文ヲ作ラシム之ヲ第四級トス後進ヲ誘掖スル前級ノ如シ○
第五級 三禮、春秋三傳、戰國策、史記、漢書、荀子、韓子外傳、老子、莊子、列子、晏子、管子、韓非子、呂覽、淮南子、賈誼新
書、說苑新序、鬼谷子、揚子法言、蔡邕獨斷、文中子、貞觀政要、唐宋八大家文、韓柳歐蘇全集、日本記等ヲ解讀シ兼テ難義
ヲ質ス之ヲ第五級トス自修ノ餘暇ヲ以テ初級ノ學生ヲ教授シ且難義ヲ解ス○第六級 五經解讀其他和漢ノ正史ニ涉リ

リトセリ

教則 素讀 毎日起業午前六時 終業午前九時 初メ三字經ヨリ入り孝經ヲ歷漸々四書五經ニ至ル迄ハ毎日句讀ヲ受ケ爾後春秋左氏傳國

語史記漢書等自ラ讀過シテ疑難ノ字句ヲ質問ス是ヲ素讀ノ畢リトス○質問 毎日起業午前九時 終業午前十一時 諸生ノ意ニ任セテ獨

見シ來ル所ノ疑義ヲ審明ス○輪講 毎月十二回起業午後二時 終業午後五時 輪講ハ類別一ナラス初メ朱子小學蒙求ノ類ヲ初歩トナシ

進テ四書ニ至ルアリ又五經其他和漢ノ歴史類ニ及者アリテ常ニ兩三ノ種類ヲ存セリ○講述 毎月六回起業午前十時 終業正午十二時

教授自ラ講明シテ諸生及ヒ有志輩ニ聽聞セシム其書目ノ如キハ一定セス經傳諸子百家ノ書ニ採ル 以上漢學○讀方

隔日起業午後二時 終業午後五時○綴字 毎月十二回 同上○會話 毎月六回 同上 以上洋學但文典ヨリ漸々近易ノ書冊ヲ學ヘリト謂フト

雖凡今之ヲ詳ニセス○算術 隔日起業午後三時 終業午後五時 八算見一相場割利息算求積級數術等ヨリ開平開立法等ニ至ル普通ノ順序

ヲ逐フテ學ハシム○習字 毎日起業午前八時 終業午後三時 平假名片假名ヨリ行草交休ノ國名盡名頭等ヨリ往來物即消息往來庭訓往

來ノ類ニ及フ但女子ニハ平假名交リノ文休ヲ授ク而ノ毎月六回ノ淨書ヲ爲サシム○習禮 毎月六回起業午後二時 終業全四時 起居

進退折方結方婚禮式等ヲ順次ニ學ハシム

試驗法 試驗ヲ區別ノ試驗親試ノ二ト爲シ隔年春秋二季ノ内ニ於テ月割ヲ以テ之ヲ施行ス

試驗 藩吏一役一員宛學校臨監シ試驗ハ教授之ヲ掌リ點檢ハ助教之ヲ掌ル

親試 藩主親シシ殿上ニ於テ試ム藩吏陪席シ教員ノ試驗ヲ掌ルヲ試驗ノ時ノ如シ

試驗科目 試驗親試トモ已ニ學了セシ書籍及ヒ技術ニ就キ之ヲ試ム而ノ親試ノ時衆ニ擢ル者アレハ時ニ或ハ藩主ノ好

ミアリテ特ニ試ミヲ受ル者アリ

職名及職俸 監督ハ文武諸術ヲ總括シテ職員及ヒ諸生徒ヲ監視ス會計係ハ觀光館中ノ費用出納ヲ掌リ演武場ニハ與テサ

ルナリ

監督 職俸年給米十苞○教授 全十苞○助教 全五苞○授讀 全二苞○會計係 全二苞○生長 無給 該職員ハ總テ

本務アル者ノ兼任スル所ニシテ監督及ヒ教授ハ有司席以上ノ者助教以下會計係ハ上中下士ノ中ヨリ擧ケ生長ハ諸生ノ中

ヨリ採ル

職員概數 監督壹員 教授壹員 助教二員 授讀三員 會計係壹員 生長無定員

生徒概數 滿六年以上八十名許内男五十名許 女三十名許

但女子ハ習字習禮ノ二學科ヲ修ムル而已ニシテ讀書算術ノ如キハ總テ家庭

ノ薰陶ニ放任セリ

士族卒ノ子弟教育法 往昔藩中士族ノ子弟ヲ教育スルノ法ヲ設クルヲナシ文武俱ニ藩中熟達ノ徒ヲシテ之レカ師範トナラシメ教則課程等ハ師範者適宜ノ制ヲ設ケ郡吏里正等ノ點閱ヲ歷ルヲナシ元治元年藩主觀光館ノ設立アリシヨリ藩中壯丁ノ子弟ハ學ニ入ルヲ命ス當時洋學本邦ニ行ハレシヨリ藩主優秀ノモノニ江戸留學ヲ命シタルモノ十許人アリ其手當ノ如キハ食米及俸米二人口ヲ與フ其他自費ヲ以テ他國へ遊學ヲ乞フモノアレハ之レヲ許シ敢テ檢束ヲ加ヘシヲナシ

平民子弟教育法 平民ノ子弟ハ皆市村ノ村學究ニ就キ僅カニ習字句讀ヲ習フノミニシテ舊慣ノ然ラヨムル所士族ハ自ラ平民ト伍スルヲ厭ヒ平民ノ子弟モ亦藩校ニ入り習學スルヲ好マス故ニ藩主敢テ藩校ニ入ルヲ禁セサレモ自ラ入學ヲ乞フモノナク適々之アルモ醫師又ハ豪商ノ子弟二三ニ過キスト云フ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ設置スルキハ元藩吏ノ許可ヲ得ルノ制ヲ設ケタレモ輒近ニ逆ヒ之レカ設置ヲ願ヒ出ツルモノ稀ニシテ藩吏モ亦之ヲ默許セリ故ニ往昔ノ制ハ自ラ廢棄ノ姿ニ至レリト云フ

學校

校名 二所アリ其文學ヲ修ムル所ヲ觀光館擇善堂ト稱シ其武技ヲ習フ所ヲ演武場ト號ス

學校所在地 安蘇郡植野村舊佐野藩廓内ニ在リ

沿革要略 明治二年己巳正月八日藩制改革ノ際ニ方リ文武諸藝術ヲ擴張スルノ目的ヲ以テ大ニ之カ釐正ヲ加ヘ下條ノ如ク更定セリト雖モ其以前ニ係ルモノハ廢藩置縣ノ變遷ニ會ヒ文書散佚シテ之ヲ徵ス可キ無ク當時ノ主任者モ亦喪亡分離シテ更ニ憑據ノ證ス可キ無シ蓋シ天保年間舊仙臺藩ノ學士大槻平次ナル者ニ囑託シ學事ヲ管理セシメ而ノ藩士ヲ養成シ其學識優等ナル者ヲ拔萃シテ教員ニ充ツ

學科 學科ヲ區別スル左ノ如シ

漢學 朱子學派 ○洋學 荷蘭學 ○算術 最上流 ○習字 山本流 ○習禮 小笠原流 以上五科觀光館中ニ於テ學習ス ○

兵學 日新流 初メ越後流ナル者アリ文久年間ニ至リ蘭式ニ倣ヒ ○弓術 日置流 ○馬術 高麗八條流 ○槍術 寶藏院流 ○劍術 新

陰流、直眞影流 ○砲術 日新流 ○柔術 起倒流 ○泳術 俗ニ御船手流ト唱ヘ其流名ヲ知ル者今存セス蓋シ舊幕府御船手頭向井將監ノ門ニ出ルナリ 以上八科泳術ヲ除クノ外演

武場其他練兵場射的場等ニ於テ之ヲ學修シ其泳術ノ如キハ夏時ニ方リテ近傍秋山川渡良瀬川筋ニ於テ修業ス而シテ水量及ヒ寒暖等ノ差違ヲ斟酌スルヲ以テ一定ノ時日ナシト雖モ大率二ヶ月間炎暑ノ候ニ於テ日々午後ヨリ日没ヲ限

學校構造及建物坪數 別紙圖面ノ如シ

學校藏書ノ種類部數 素讀本 三字經、孝經、四書、五經、朱子小學、蒙求、春秋左氏傳、國語、史記、前後漢書等貸與品トシ

テ各二十部許其內小學四書五經ノ類ハ各五六十部ツ、備具ス 經傳史類其他諸註釋書類ニ至リテハ其書籍簿ヲ現存セ
サレハ書名ヲ掲載スルヲ能ハス其部數ハ學校ノ藏書ニ屬スルモノ無慮二百部許ナリ然シテ常ニ藩主ノ內庫中ヨリ流用
シテ諸書ヲ閱覽スルヲ得シナリ

出版翻刻 出版翻刻セシ書籍等ハ一切之レナシ

學校經費 校中一切ノ諸費即チ書籍器具ノ買入ヨリ職員ノ職俸校舍ノ營繕諸賞與及ヒ筆墨紙薪炭諸雜費ニ至ルマテ年々

増減アリト雖モ觀光館中ノ費額一ケ年二百圓以下百圓以上ナリ右觀光館擇善堂中漢學部ニ係ルノ紀事トス其他洋學算
術習字習禮ノ四科モノニ前文ノ諸則ニ準據シテ之ヲ施行ス但其教員及職俸生徒數ノ差等アルヲ左ニ列ス

洋學 教授一員職俸年給米五苞 助教二員全三苞 授讀三員全二苞 生長無定員 無給 生徒概數二十名許

算術 教授一員職俸年給米五苞 助教一員全三苞 世話役無定員 無給 諸術ノ世話役ハ定額ノ俸給ナク年末ニ至リ酒

料ヲ下賜ス 生徒概數三十名許

習字 教授一員職俸年給米五苞 助教一員全三苞 世話役無定員 教授ノ見込ヲ以テ生徒中ヨリ七八名ヲ拔擢シテ命

ス故ニ無給ナリ且其中二三名ハ女子ヨリ學ク 生徒概數八十名許男五十名許 女三十名許

習禮 教授一員職俸年給米五苞 助教一員全三苞 話世役二員職俸算術世話役ニ全シ 生徒概數三十名許男二十名許 女十名許

右洋學以下目錄免許等階級アリト雖モ其區分詳カナラス

兵學 教授一員文久年間以後砲術教授ヨリ兼務 助教以下同斷 生徒概數二十名許 每月六回午后二時ヨリ五時マテ小隊以上大隊ニ至

ルノ騎操ヨリ同指令等ヲ學習セシム

馬術 教授一員職俸年給米五苞 助教一員全三苞 世話役二員無給 生徒概數三十名許 每月十二回午前六時起業同

九時終業

劍術 教授二員職俸年給米五苞 助教二員全三苞 世話役八名無給 生徒概數百五拾名許內卒族ハ九十名許 每月一日十五日廿

八日ヲ除クノ外毎日午前六時就業同十一時終業

砲術 教授一員職俸年給米五苞 助教四員全三苞 世話役十名無給 生徒概數二百名許內卒族百名許 每月隔日午前七時就

業正午十二時終業而シテ砲術ト稱スル部内ニ於テ大砲小銃練兵射の等ノ區分アリ

諸雜則

〔開校〕正月廿日午前九時職員諸生其他藩士一同禮服著用登壇教授白鹿洞書院揭示ヲ講明ス畢テ藩士一同退場シ職員ニ酒肴ヲ下賜ス

〔閉校〕十二月廿五日閉場ノ式ナシ

〔堂上掟書〕今其全文ヲ存セス

〔年中休日〕毎月一日十五日廿五日 二月初午 五節句 七月盂蘭盆祭^{十三日ヨリ十六日マテ} 十二月廿六日ヨリ翌年一月十九日迄

〔入學〕滿六年ニ至ルノ子女ハ年初開校ノ時ニ當リ禮服ヲ着用セシメ父兄之ヲ携ヘテ監督ヘ入學ノ旨ヲ届ケ教授以下諸職員ノ私宅ヘ同伴シテ訓導ノ義ヲ倚賴ス而シテ教授助教ヘハ束脩トシテ扇子壹對及金十錢許ヲ贈ル但定額ナシ

〔退學〕在學ハ定年ナシ半途ニ退學センコトヲ乞フモノハ理由ヲ監督ニ申出其許可ヲ得テ后職員一同ヘ之ヲ告知シ全ク退學シ得ルト雖モ其理由トスル所果シテ止ムヲ得サルコトニ非レハ則監督ニ於テ之ヲ認可セス

〔謝儀〕七月十五日十二月廿八日ノ二季ニ於テ教授ノ自宅ヘ之ヲ贈ル但上士以上ノ子弟ハ金壹錢五厘中士ハ同壹錢下士ハ全五厘ヲ定額トス

〔祭儀〕陰曆二月八月上ノ丁日ヲ以テ文宣王ヲ釋奠ス供物清酒及肴五種祭典畢リテ職員ニ酒肴ヲ下賜ス
〔夜學〕冬季ノ候輪講及ヒ講述等ヲ點燈ヨリ十時頃マテ爲サシメ以テ他ノ藝術ト時日ノ抵觸スルヲ防ク

〔藩主臨校〕釋奠ノ節其他講述ノ節月々二三回

〔賞罰〕試業親試畢リタル后職員一同ニ酒肴料生徒一同ヘハ酒料ヲ下賜ス但幼年輩ニハ半紙二帖宛ヲ與フ 毎月盡日職員及ヒ全生徒ノ出席數ヲ調査シ出席表ヲ製シ教授ヲ經テ監督ヘ出ス又年末ニ至リ全年ノ出席數ヲ調査シテ出席表ヲ製シ之ヲ監督ニ出ス毎月末ノ如シ而シテ一年欠席セサル者アレハ翌春開校ニ及ヒテ酒肴料及ヒ半紙ヲ賞與スルコト試業ノ畢リノ如シ 十五年未滿ニシテ學科目中ノ順序ヲ經テ三字經ヨリ春秋左氏傳マテノ素讀ヲ過了ル者アルハ教授ノ申請ニ由リ臨時試驗場ヲ校中ニ設ケ監督之ヲ試驗シ誤失ナキ時ハ褒賞トシテ書籍ヲ與フ 學科目ニ掲クル所ノ漢書迄ノ素讀ヲ畢リ朱子小學蒙求全部ノ講義ヲ爲シ得ルニ至レハ教授ヨリノ申請ニ由リ監督及要路ノ藩吏數名臨場シテ素讀講義ノ試驗ヲ爲シ誤失ナキハ白銀壹枚ヲ褒賞トシテ與フ是ヲ初條濟試業ト云フ罰則ハ正條ナシト雖モ屢々欠席スル者或ハ怠惰ニシテ勤勉セサル者等ハ時々訓戒ヲ加ヘ或ハ罰讀ト稱ヘテ數冊ノ溫習ヲ爲サシム又成童以上ニシテ不品行ナル者職員ノ訓戒ヲ用ヒサル時ハ監督ヘ申請シテ詭責ヲ受ケシム

校名 時習館

校舎所在地 下野國那須郡大田原

沿革要略 嘉永三年二月舊藩主從五位出雲守大田原廣清ノ創立ニシテ皇漢ノ學ヲ以テ闡藩ノ子弟ヲ教導シ後戊辰ノ役ニ際シ校舎兵燹ニ罹リ記簿書籍ヲ合セテ盡ク烏有ニ歸ス故ニ其詳細ヲ悉スル能ハスト云フ始メ嘉永年度ニ至テ藩士金枝健ナルモノ安積良齋ノ門ニ入り後藩ニ歸テ生徒ヲ養フ是レ學校ノ体裁ヲ爲スノ嚆矢トス教官ノ自宅ヲ以テ假校舎トシ時習館ノ名ヲ付ス明治二年舊藩主從五位飛騨守大田原勝清之ヲ再興シ其業ヲ繼ク同四年七月廢藩置縣ノ際舊大田原縣ノ所管トナリ此年十一月該縣廢セラル乃舊宇都宮縣管轄ニ歸ス尋テ之ヲ閉ツ前後合セテ凡ソ年ヲ歷ル二十二年授業繼續ス

教則

日本記 續日本記 日本後記 續日本後記 文獻實錄 文德實錄 三代實錄 國史略 日本外史 大日本史 小學近思錄 孝經 四書 五經 周禮 儀禮 爾雅 春秋左氏傳 國語 史記 前漢書 後漢書 戰國策 三國志 資治通鑑 西洋譯書 右爲入門之學

每日午前七時ヨリ正午十二時マテヲ授業ノ時間トス 午前七時ヨリ 午前十時マテ 素讀 午前十時ヨリ 午後一時 輪講 三ノ日午後一時 詩文會 二七ノ日休業

學科學規試驗法及諸規則 規則類ノ如キハ閉校ノ際誤テ紛亂シ分明ナラス

職名及ヒ俸給 一等教授年給定祿ノ外現米三石六斗二等教授同貳石七斗(以上ヲ教授トス)三等給助教同一石八斗四等給助教九斗(以上ヲ助教トス)

職員概數 一等教授一員、二等教授二員、三等給助教三員、四等給助教一員トス

生徒概數 七拾五人 皆通學生徒ニシテ藩費ヲ要セス自費ヲ以テ充ツ

束脩謝儀 束脩ハ自費ヲ以テ酒肴ヲ教官ニ送ル謝儀ハ年始及五節句毎ニ生徒一人金壹錢ツ、中元歳暮ハ生徒一人金二錢ヲ目的トシ以テ教員ニ藩ノ積立金ヲ以テ生徒ノ人員ニ應シ下附スルヲ例トス

學校經費 教官ノ請求ニ依リ藩費ヲ以テ下付スト雖氏實費額ニ依ル

藩主臨校 藩主臨校ハ成サスト雖氏年一回生徒ヲ藩廳ニ召集シ素讀講義ヲ聽聞シ優劣ニヨリ若干ノ賞與ヲ與フ其實品ハ

概テ生徒一人ニ付半紙百枚ヲ度トス

泳術 學科中ニ記載スルカ如シ

弓術、鎗術、柔術 此三科ハ文久年間ヨリ漸次廢弛シテ終ニ職員生徒共ニ存在セサルニ至ル

以上ノ學科ハ演武場内外ニ於テ之ヲ修習シ殊ニ劍術砲術ノ如キハ春秋或ハ寒暑ノ候日稽古ト稱シテ一ヶ月間連續修業スルヲアリ

諸武術ノ試験法賞罰等大約觀光館ノ諸則ニ準據ス

諸武術ニ於テ目錄ノ許可ヲ得ルモノハ白銀壹枚免許ヲ得シ者ハ同三枚ノ賞典ナリ

諸武術ノ經費ハ世話役若クハ助教ヨリ其都度會計局ノ吏員ヘ請求スル者ニシテ今之カ費額ヲ知ルヲ能ハス

幼年輩ノ諸武術ヲ學ハシムル者ハ大率十歳ヲ超ヘテ入學セリ

舊大田原藩

學制

學事上ノ諸制度 戊辰ノ役ニ際シ校舎兵燹ニ罹リシヨリ書籍盡ク烏有ニ歸スルヲ以テ悉スル能ハスト雖昨今故老ノ口碑ヲ以テ其概畧ヲ記ス抑モ往時ハ學校ノ設ケアラサリシニヨリ藩士等ノ意ニ任セ敢テ干渉セサリキ然ルニ嘉永年度始テ學校ノ名稱ヲ付スト雖昨教官ノ自宅ニ於テセシヲ以テ其体裁ノ如キ極メテ卑近ノモノトシ加役米又ハ引米等ノ名義ヲ以テ獎勵スル如キ制ナク其他觀察ニ供スルノ件ナシ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ニ必シモ入學ヲ成サシメ及藩費ヲ以テ他國ニ遊學セシムルノ制ナシト雖昨遊學ヲ禁セシヲナク各自ノ意ニ任セシモノナリ

平民子弟ノ教育方法 抑モ昔時ハ士民ノ間ニ於テ區別チ立ツル甚キハ當時一般ノ弊風ニシテ農工商ト伍ヲ同フスルヲ厭ヒシヨリ敢テ藩立學校ニ入學ヲ禁セシニ非サルモ入學セルモノナク家塾寺子屋等ニ入り纔カニ修業セシニ止リ其習業多クハ習字一科ノミニシテ自ラ記名シ年月日等記載スルニ至レハ亦足レリトスルモ藩主敢テコレヲ干渉セサリキ

家塾寺子屋設置ノ制度 藩主ニ於テ檢束セサリシニヨリ何人ナ問ハス家塾寺子屋等ヲ開設スルヲ得ザリ然レ昨其開設スル所ノ家塾等皆其教則并ニ授業法ノ如キ素ヨリ方法アルニ非ス只各自ノ適宜授業セルニ止ルノミ

學校

候仰キ願ハ私儀暫時在所へ罷越學校再興、ミカド夫々基礎ヲ相立テ其難決事件ハ仰上裁速ニ成功ヲ奏シ皇道化育ノ萬一ヲ奉裨補度奉存候依之在所、右眼被下置候様仕度此段奉願候以上

辰十一月十八日
事御中

藤原忠行

通設仰付候事

此後用度司ヨリ公用人(關口彦作)呼出シノ上左ノ品物ヲ下賜セラル

紫縮緬菊御章ノ幕一張 白麻ノ幕二張 右御下ケ相成候事

此品今猶存シ釋典釋菜ノ節之ヲ用ウ

藩主戸田忠行ノ足利ニ歸ルヤ學科ヲ起シ教官ヲ命シ舊學校内ニ講堂ヲ置キ之レニ名ヲ命シテ求道館ト云フ藩中ノ子弟ニ入學ヲ命ス

士族卒ノ子弟教育法 足利學校ノ遺跡藩主へ御委任ノ命降ルヤ藩主乞暇封土ニ還リ學則ヲ興シ教官ヲ命シ藩中士卒ノ子弟ヲシテ入學セシム加之寄宿舍ヲ設ケ生徒中稍年長ノ徒ヲ驅リ一ケ月手當金一圓五十錢ヲ給シ在學ヲサシム時ニ歐州ノ學術本邦ニ行ハル、ニ會ヒ舊江戸ニ留學ヲ命シタルモノ數人アリ又漢學ヲ脩ムルニ志シアルモノハ志願ニ依リ自費又ハ藩費ヲ以テ他國遊學ヲ許可セシモノモ數人アリ又藩主ハ屢學校館ニ入臨シ講義ヲ聽聞シ或ハ諸般ノ指揮ヲナセリ

平民ノ子弟教育法 藩主戸田氏ノ郷土ニ還リ舊跡ヲ再興スルニ當リテヤ專ラ舊ト隆文ノ制ニ復セント欲シ苟モ學問ニ志スモノハ士族平民ヲ論セス皆藩立校ニ入學ヲ許セリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ設置スルノ制度ヲ設ケス只各人ノ意向ニ任ス
附言以上記載スル所ハ足利藩主戸田忠行ノ舊蹟ヲ回復シ藩學校ノ名稱ヲ附セシ時ヨリ以降ノ事ニシテ是ヨリ先舊蹟ニ係ル記事沿革ハ其說區々ニシテ殆ント信ヲ措クニ足ラサルモノ多シ然レモ本縣足利郡小俣村佳川上廣樹著ス所ノ足利學校遺跡考ト題スル一書アリ此說採ルヘキモノ多シ宜ク御參考アラントヲ

學校

校名 足利學校ト稱ス明治元年藩主戸田忠行命ヲ承ケテ再興スルニ當リ求道館ト稱ス

祭儀 一月十九日ヲ發會ト稱シ十二月十五日ヲ納會ト稱シ聖像ノ圖ヲ教場ニ掲ケ神酒ヲ備ヘ教官生徒等相會シ祭ルヲ例トス

學校構造及建物圖面 教官ノ自宅ヲ以テ學舍ニ充ツ

舊足利藩

學制

學事上ノ諸制度 足利學校ハ參議小野篁臣子ヲ訓導セシ遺蹟ノ由保平以降遂ニ浮屠ノ菴ト爲リ文明中上杉憲實鎌倉圓覺寺ノ僧快元ヲ招シ民庶ヲ訓導セシメ慶長年間九世ノ僧閑室將軍德川家康ニ顧問ヲ辱フシ百石ノ朱章ヲ賜リ相傳ヘテ浮屠氏ノ有ト成ル明治元戊辰ノ年舊領主從五位戶田忠行參議ノ忠誠ニシテ其遺蹟廬無寂滅ノ徒ニ歸シ事業ノ廢絶セルヲ憂フルノ建言ニ因リ同人ヘ御委任ニ相成リ更ニ校則ヲ掲ケテ求道館ト稱シ士民ヲ訓導ス其建言ノ文ニ曰ク

臣忠行豐嗽百拜謹而再願仕候弊邑中ニ有之候參議篁卿學校ノ遺蹟天運失序衰龍沉潛保平ノ乱以降浮屠ノ所有ト罷成德川氏ニ至リ僧閑室ニ勸學料トシテ地ヲ賜ヒ候モ如今怠惰ノ資費ニ給スルノミ更ニ世教ニ無益古賢之遺志絶無ニ及ヒ候段歎ケハ敷存候鄙怯ヨリ粗忽ニ上書懇願候處尙亦三思愚考仕候ニ方今文運日ニ盛ニ月ニ開ケ候 聖代ニ相遇シ管見ノ處學ノ趨向ニヨリ偏黨按排ヲ以テ事ト可致ニ無之要スルニ神聖經倫ノ大道ハ勿論儒道海外ノ學術ニ至ル迄汎ク講究セシメ 皇風ヲ宣化シ政体ヲ讚耀シ 帝道御裨益ノ國學校再建仕度奉存候乍然右舊跡一冊ノ古籍タモ只今存罷在候ハ僧徒ノ子弟相承維持ノ功ニヨリ候得ハ縱ヒ願ノ通被仰付候迎僧徒ノ黜陟臣素ヨリ恣ニ可仕了見更ニ無之相俱ニ勉學 朝憲御裨益ノ道誘勵精致候決心ニ罷在候聊至仁ノ 聖旨悖戾ノ處置可仕素志無御坐候間不肖忠行過分ノ至願ニ候得共格外無比ノ恩典ヲ以テ御委任ノ程奉懇願候誠惶誠恐頓首稽首

辰七月

臣藤原忠行

願之通承届候

右願濟ニ付早速足利表ヘ申遣シ夫々手配仕度候得共長門守直接ニ指揮不致候テハ不都合ノ儀モ有之猶又左ノ願書ヲ差出セリ

私儀先般足利學校御委任被仰付候處折柄兵革ノ事ニ執掌仕居リ引續キ今度出府罷在再興ノ儀ハ殆ント打捨置キ何トモ不本意至極ニ奉存候方今與羽ノ兇賊モ御平定ノ上ハ正是與民休息ノ秋上下霽倫ノ學ニ從事仕候様第一至急ト奉存

學則

一月々三次講義四書 五經輪講月ニ三次史輪講三次歷 詩文會席上三次宿題一次但詩文會ハ茶菓ヲ給ス

學則講說朱子ニ基ク然漢魏以來明清諸儒ノ論說ヲ涉獵シ宋儒ノ忠臣タルモ佞臣タラサルヲ要ス

父子有親 君臣有義 夫婦有別 長幼有序 朋友有信

右五教之目堯舜使契爲司徒敬敷教即是也學者學此而已而其所以學之序亦有五焉其別如左

博學之 審問之 謹思之 明辨之 篤行之

右爲學之序學問思辨四者所以窮理也若夫篤行之事則自修身以至于處事接物各有要其別如左

言忠信行篤敬 懲忿窒慾遷善改過 右修身之要

正其義不謀其利 明其道不計其功 右處事之要

己所不欲勿施於人 行者不得反求諸己 右接物之要

此朱子公白鹿洞書院揭示スル所ニシテ學者當奉遵者也

舍中左ノ約東ヲ掲ク

約東七章

一 凡學者切瑳忠告ヲ重スヘキ事

一 塾生總テ舍長ノ命令ニ從フヘキ事但教ニ悖ルモノハ事ノ輕重ニ因テ罰之

一 正課ハ朝第八字ヨリ四字迄ヲ限ト爲ス夜ハ第八字ヨリ發聲禁止ノ事

一 放課ノ中外泊三字ヲ許ス平日ノ外出ハ三字間ヲ度トス

一 病ヲ謝シテ日課ヲ欠ク者ハ當日外出ヲ許サ、ル事

一 塾中催歌酒賭嚴禁ノ事

一 坐臥飲食等凡テ清潔ヲ要スヘキ事

右揭示候事

辛未七月

舍長

醫學令條

夫醫道ハ人命ニ關係スルヲ大ニシテ診察裁斷藥品配劑妄投スヘキニ非ス西哲此カ爲ニ人身ノ理ヲ究メ疾病ノ原因

校舍所在地 足利郡足利町

沿革要略

淳和天皇ノ天長九年小野篁創立スル所ト云フ此事正史ニ所見ナシ然レモ野相公識書ノ所タルコト世人ノ知ル所ナリ文明年中上杉憲實關東ヲ管セシ鎌倉ノ僧快元ヲ舉ケテ博士トシ生徒ヲ教授セシム是ヲ中興第一世トス天正十九年徳川氏庠僧一名三要又閑室ト云フ寵シ顧問ニ供ヘ學田百石ヲ附ス是ヲ第九世トナス夫ヨリ僧家綿々相續キシカ學政漸ク廢シ徒ニ浮屠ノ庵トナレリ然ルニ

今上天皇ノ明治元年大政維新庶績咸熙ル於是乎足利藩主戸田忠行學校ノ荒廢ニ屬スルヲ歎キ其事體ヲ上言シコレヲ

再興センコトヲ乞ヒ即チ委任ノ命ヲ蒙レリ依テ藩士ヲ舉ケテ教官ト爲シ生徒ヲ養ヒ專ラ支那學ヲ講習セシム同五年マデ五ケ年間授業相續セシニ同年廢藩ノ命アリ依テ栃木縣ヘ引繼キ其後閉校セリ然ルニ今度一般學制ヲ改正セラル、ニヨリ此地ニ小學舍ヲ新築シ舊ニ依テ足利學校ト稱ス是ヨリ先キ學校再興先後ニ於テ特ニ盡力セシ人物ノ氏名行事ハ詳カナラスト雖モ同校彫刻書籍ノ目左ノ如シ

植物學今井潜佐藤保之校正 三本(足利學校藏版慶應二年九月免許)○饅堂遺稿今井潜佐藤保之校正 二本(足利學校藏版明治四年四月

免許)但舊藩主戸田忠行彫刻費ヲ納ム

教則 詳カナラス

學科學規試驗法及ヒ諸則 皇漢學 本朝ノ古典ヲ研究シ泗洙ノ遺訓ヲ服膺シ人倫ノ大道ヲ修ム○筆學 手跡ヲ稽古ス○

洋學 西洋諸蕃ノ原書ヲ講究ス○兵學 銃隊砲技ヲ練リ差當リ陸軍ニ關係スルコトヲ講究ス○弓術 大坪流○醫學 以上列記スル學科ハ必シモ兼修スルヲ要セス

皇漢學々則

一入校受業ノ者禮服ニテ扇子一對束脩ノ事

一入校寄宿願ハ知音ノ者諸書加印差出スヘキ事但月俸ヲ納メシム

一凡生徒ハ復讀ヲ試ミ四時ニ等級ヲ定ムル事

一同拔群ノ者ヲ擇ミ寄宿ヲ命スル事但大畧拾人ヲ限トシ月俸ヲ給ス

一學職ハ入札公選授業畢テ後寄宿生輪講ノ事

一學職寄宿ノ者ニハ油費ヲ給ス

一外出ハ月々六次門限ハ夜六時ヲ期トス

一平常一社ヲ視ルコト伯仲ノ如クシ敢テ下問ヲ耻ナス互ニ相裨益シテ眞智眼ヲ發耀スヘシ
一議論講説ハ書籍ニ於テ決スヘシ書ニ數種アリテ議論數端トナラハ新説ヲ是トスヘシ新説兩頭タラハ經驗ニ從フヘシ
シ經驗未熟ハ總テ疑案トナシ他日大學東校ニ質問ノ上決スヘキ事

辛未八月

試驗ハ概テ春秋二季之ヲ行ヒ藩主臨視シテ親ク聽講ス生徒優秀ノモノニハ賞金百疋ヲ賜フヲ例トス
職名及俸祿

教授一人 金七十八兩^{定祿九石五斗} 但一ヶ月金六兩二分ツ、助教以下ノ俸給ハ詳カナラス

右ハ戸田藩主舊跡御委任ヲ承ケ求道館設置以來ノ規定ニシテ維新前後ヲ以テ區別ヲ立テス且ツ教官等身分取扱ヒ方ハ皆家格ヲ以テシ殊ニ取扱ヒ方ヲ設ケシヲナシ

職員概數 左ニ掲クル職名ハ求道館文學ニ屬スルモノ、ミ蓋シ武道ノ如キハ殊ニ教官等ノ職制ヲ立テス藩中熟練ノ士ヲ撰ヒ武藝ノ師範ヲ委嘱セシニ過キス

教員一員 有用ノ實學ヲ講明シ人オヲ教育シ風俗ヲ正シ國ノ綱紀ヲ維持スルヲ掌ル○助教二員^{是ハ司客ヲ兼務ス} 教官ヲ輔翼シ士風ヲ鼓舞ス○句讀師四員^{是ハ司客司籍司器ヲ兼務ス} 學生ニ句讀ヲ授ク○主簿二員 學生ノ出入ヲ筆記シ來客ノ通謁ヲ司ル○司客

一員 遊學生及ヒ聖廟拜禮等ノ來賓ニ交際スルヲ司ル但來賓ノ儀ハ不可忽事ニ付別ニ取扱ノ規則ヲ立ツル事○司籍一員 庫中ノ古典ヲ守護シ狼籍ニ至ラサシム○司器一員 祭器及寮中諸器物ヲ點檢シ紛擾ナラサシム

生徒概數 六十五人^{内十二人部諸典籍兼務} 内入塾十八人通學四十七人 外ニ他國留學生二人

束脩謝儀 無之

學校經費

金六百二拾兩但筆墨紙薪炭并寄宿生徒手當等ノ諸費

金百五拾六兩内金六拾兩^{但一ヶ月金五兩宛} 元足利縣士族小林恒堂金九拾六兩^{但一ヶ月金八兩宛} 全西村貞 右足利縣公廩費ノ内ヲ以テ遣拂

藩主臨校 藩主ハ春秋試驗ニハ必ス臨校シテ生徒ノ試驗ヲ監視ス又臨時臨校シテ講義ヲ聽聞セシヲモアリシ
祭儀 新年開校及ヒ冬至ノ日舊跡孔聖ノ廟ニ釋菜ヲ行フ

舊吹上藩

ヲ極メ強壯甘和清涼揮發解凝ノ藥精ヲ以テ人患ヲ救フ其術日ニ新ニメ其經驗ノ實踐ヲ書シテ以テ規則トナシ後學ヲ惠シテ以テ後世ヲ救フ其意萬物同體ニ本キ物我ノ私情ヲ棄ルヲ吾先王ノ道ニ異ナラス苟モ醫タルモノ其訓ヲ奉スルニ暇アラサルヘシ若シ醫トシテ西哲經驗ノ規則ヲ諳セスシテ妄意ニ藥劑ヲ配合シ其中セサル必セリ假令萬一瘥治スルモ所謂ル僥倖ニシテ其功ニ非ス朝廷赤子ヲ以テ蒼生ヲ見醫道ニ於テ最モ意ヲ用ウ府藩縣ニ勅シ醫術ヲ開導シ人命ヲ保護スヘキヲ教示ス然レモ舊弊未除庸醫凡手愚民ヲ欺罔シ餬口ヲ旨トシ其療法藥劑ハ人ノ知ラサルヲ以テ幸トスル族モ有之ヤニ聞エ以外ノ事ニ候依之醫學所ヲ開キ醫道ヲ興起シ人命ヲ誤ラサル様ノ御趣意ニ候得共一昨年以來凶歲相續キ營繕ノ御行届無之ニ付當分學校構内ノ一舍ヲ醫學所ト定メ月ニ課程ヲ立テ置キ例日ニ藩醫集會シ支配頭臨席ニテ市中在ニ至ルマテ醫業ノ族ハ醫學所ニ會シ其約束ヲ守リ人命ヲ保愛スヘシ蓋シ聞ク西周之盛ナル上士ヲシテ醫タラシム今儒官ニ命シ諸醫ヲ管轄セシムルハ聖主民命ヲ重スルノ意ヲ奉シ倫ヲ厚フシ化ヲ廣メ愚民ヲ欺罔スルヲ防クノミナラス文字上ノ議論ヲ質シ難處ノ事ヲ斷セシメンカ爲ニシテ敢テ賤役小技ヲ以テ諸醫ヲ待サレハナリ

一集會日月ニ三次講生日解割日種痘日但不意ノ集會ハ此例ニ非ス

一集會ノ譯 妄意ニ手ヲ下シ人命ヲ輕スルハ其罪大ナリ今未經験ノ疾及危篤ノ疾アラシムル一醫此理ヲ知ルモ衆醫未達ナレハ人命之レカ爲ニ損ス衆醫治ヲ能クシテ一醫未達ナレハ人命亦損ス故ニ諸醫集會シ互ニ相議シ切磋忠告ヲ旨トシ朝廷ノ意ヲ體シテ人命ヲ重セハ庶幾ハ罪戾ニ免レン乎

一解體ノ醫術ニ於ル甚急ナリ一瘡ヲ潰スモ人身ノ要器臟腑ノ在ルトコロ動靜經絡ノ運ル所ニ疎ナレハ人命ヲ害スルニ至ル肌維皮膜ノ會骨骸節筋ノ來因ヲ審ニセサレハ藥力ノ及フトコロ疾病ノ宅スルトコロヲ知ル能ハスコレ解體ノ急ナル所以ナリ

一種痘ノ譯 人命ヲ忽諸ニ損スルハ痘瘡ヲ然リトナス故ニ西醫牛痘ノ種ヲ以テ天痘ヲ誘導ス我朝此術ヲ傳フト雖モ庸醫眞義ノ別ヲ知ラス故ニ天行ニ遇ヘハ再患スルニ至ル今種痘ヲ行フテ後患勿ラシム

正月

約束三章

一造物主四海ヲ見ル一家ノ如ク億兆ヲ見ル一赤子ノ如シ人主タルモノ此意ヲ體シ痒痛憂苦蒼生ト相通ス於是乎醫官ヲ置ケリ故ニ苟モ醫タル者亦此意ヲ體シ疾病窮患ノ者ヲ見ル一其子弟ノ疾病ノ如ク意ヲ用ヰル深切ナルヘシ

且文武不爲二須ク兼テ學テ文弱武斷ノ弊ヲ可救ハ勿論國典漢籍固ヨリ一體ニ付並通シテ固陋偏僻之見ヲ不可生ト雖凡
内外本末ノ分精粗深淺之辨ハ學者ノ先ツ着眼可致所ニ候凡斯館ニ出入スル者此旨相心得趣意相叶候様出精修行可相勵
者也

一 每朝辨色後就業申ノ半刻卒業之事但毎月一六ノ日歳首三日中元前二日歳末五日休業
一 日々校中ノ洒掃及器物之出納等生徒更番ヲ以テ可爲主宰事
一 生徒毎朝出頭候者立關ニ請合調役へ名前札差出卒業之節同所ヨリ札請取退引之事但疾病或ハ難去事故有之節ハ格
別自儘ニ不可廢課業事

一 校中席次ノ儀ハ長幼ヲ以テ可序事

一 出入ノ節教官ノ者へ必禮儀可有之且諸事其指揮違背致間敷事但同學中禮讓ヲ重シ相互ニ誼讀切磋可致事
一 知事及ヒ長官出校之節ハ不敬無之様禮讓可致候尤學業上ノ儀ハ聊無忌憚討論可有之事
一 同學并他人ノ誹謗世上ノ雜說酒色遊技等ノ談話一切嚴禁之事

一 文武教員ノ者出頭候ハ、名前札墨書ノ方ヲ表シ退引之節同朱書ノ方へ掛替可申事
一 毎月生徒ノ勤惰ヲ覈シ隨テ賞罰可有之且入校生無故歸刻延引ノ節ハ答メ可申付事

一 每歲春秋兩度知事并長官列坐學業檢査ノ上褒貶可有之事

一 生徒ヲ二等ニ分テ上等ノ質問ハ教官聽之下等ハ少助教聽之

一 他藩ノ士來訪ノ節ハ調役接遇致シ文武共討論試業可有之事但來訪之士業ノ生熟ニ隨ヒ取扱向斟酌可致事
右之條々堅相守可申者也

辛未四月

學聚館

職名及俸祿并人員 教授一員 教授佐一員 少助教一員 教授ハ壹ケ年給米五石教授佐ハ同三石少助教同貳石トス
生徒概數 凡百名餘ニシテ通學生ハ些々六七名ニ不過

束脩謝儀 無之

學校經費 一ケ年豫算金三拾圓ヲ以テ筆墨紙其他ノ雜費ニ充テ米拾石ヲ以テ教官ノ俸給ニ充ツ
藩主臨校及祭儀 一定ノ制ナシ

學校構造及建物圖面 缺ク

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達等今舊記ノ散佚セルニ付其詳細ヲ悉スル能ハスト雖モ古老ノ口碑ニヨレハ學業上進ノ者ヲシテ寄宿生ト名稱シ其手當トシテ一ヶ月一人半口ヨリ多カラサル現米ヲ給ス亦詩會等ノ節生徒一同ヘ筆墨紙料トシテ金若干ヲ給與セリコレ當校ノ獎勵法ト云フヘシ

士族卒ノ子弟教育法 藩士ハ必ス藩立學校ヘ入學セシムルノ法ニシテ亦嚴ニ督促シ不就學ナカラシメ一ヶ月六會一藩士及生徒等ヲシテ講義ヲ聞カシメ官吏ト雖モ退廳後必ス出校セシムルノ法ナリ且藩費ヲ以テ留學ヲ命セシモノ二人アリト雖モ一定ノ法ト云フニハ非サルナリ

平民ノ子弟教育法 平民ヲシテ藩立學校ヘ入學ヲ禁セシメナキモ纔カニ入學スル者一兩名ニ過キス其他家塾寺子屋ニ付キ修業セシト雖モ僅々指ヲ屈スルニ過キス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等開設ハ敢テ許否ヲ受ケシムルノ法ナク又何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得タリト雖モ多クハ習字科ニ止マレリ

學校

校名 學聚館

校舍所在地 下野國都賀郡吹上村

沿革要略 明治二年十月舊藩主從五位有馬氏弘ノ創立スル處ニシテ一藩ノ子弟ニ朱子學ヲ教授ス明治四年廢藩置縣ノ際

舊吹上縣ノ所管トナリ尋テ亦明治五年二月栃木縣ノ所管トナリ全年五月閉鎖ス

教則 小學 孝經 四書 五經 春秋左氏傳 國語 史記 前漢書 後漢書 十八史略 蒙求 戰國策 古事記 日本記 續日本記 三代實錄 文獻實錄等

學科學規試驗法及諸則

學館引立之趣意者一藩ノ風化ヲ興シ人材教育進步專要之儀ニ付各厚可體認候學術者朱子白鹿洞書院揭示之目ヲ準的トシ第一倫理ヲ明ニシ躬行ヲ勵ミ修身處事接物ニ至ル迄夫々其道ヲ盡シ經史並諸史襍著不限何書古人ノ嘉言懿行ヲ以テ悉ク今日己之事ニ引當假初ニモ記誦詞華之習而已ニ不陷忠行信義禮讓之道不闕學問事業一途ニ出候樣實實心懸肝要之

白川學校

校名 修道館

校舎所在地 舊陸奥國白河郡白川會津町貳番丁

沿革要略 學校創立文政八年藩主飛騨守正篤自ラ臨テ開校諭示ス數年ニシテ學業大ニ興ル 天保十一年藩主能登守正備特ニ校内ニ夜學ヲ開キ自ラ臨席シテ生徒ヲ勵シ學業隆盛ノ域ニヲモムク慶應元年豐後守正外國ニ就キ大ニ儒學ヲ尊崇シ一藩ニ布告シ本人子弟共必ス就學セシメ躬親ラ儒官并ニ藩士ト貞觀政要等諸書ヲ講究シ學事彬々トシテ又盛ナリ

教則

教科用書ヲ二等ニ分チ四書五經小學近思錄等ヲ以テ下等トシ左國史漢ヨリ諸子史傳ヲ上等トシ下等書類ヲ索讀スルモノハ句讀師之ヲ教授シ上等書類ヲ講究スルモノハ儒官之ヲ教授ス
讀書授業時間ハ半日ニシテ午後ヲ以テ武術講習ノ時間トナセシモ學事ノ隆盛ナルニ隨ヒ終日授業シ一六ノ日ヲ以テ休業トシ四九ノ日ノ午後ヲ以テ經義講釋ノ日トス

校內揭示

行儀規

- 一學問所ハ本教之地に候得ハ孝悌を本とし稽古人之言行在町風俗之儀表たるべき事勿論に候篤實退讓申迄も無之禮義を專に相嗜かりそめにも滑稽驕傲妄誕虛華のならひ相愼可申候
- 一公儀御制法并時々御觸之儀大切に相守可申候
- 一公儀御政事ハ不及申諸國之政事なりとも妄に評論不可致候
- 一學問講究之外無益之雜談致問敷就中淫放猥褻之話并飲食甚將基尤停止之事
- 一交友之間信義を第一とし長幼前後輩之ついでを不失侮慢嘲戲無之様可致候平日學問事にて辨論反復に及候ども虚心順理ヲ以無禮雜言かたく致問敷候

文政八乙酉年五月

定

- 一學校掛之役々當番非番を相定無懈怠相勤可申候

舊白川藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ命ヲ受ケ家老ヨリ諭達

一此度文武稽古所御開被成候付ては御家中子供拾歳にも相成候得は讀書致稽古士たるの道を辨へ又年齢の力量に應し諸武藝稽古致し非常に備はり可申大身小身共氣隨に生長不致御奉公人に成り候ても弱年より日々文武會集の親みを以無疎意同役之申談も相届大身は政道の本意をすへ長頭と成候ても其筋々を以取扱小身は役前相守我意に不寡上下一とよどひに睦敷交り候得は實に上之御手足とも相成候儀は面々相辨へ罷在候事には候得とも此度被仰出候趣厚相心得本人は勿論子供の儀は親々何分心掛執業いたすべく候

一右御開ニ付テハ御前講ハ格別月次之講釋ハ於同所有之候

爾後文武勉勵方度々諭達アリト雖モ今全文ヲ得ルニ由シナシ

學校及文武家塾へ監察ヨリ出席帳簿ヲ渡置必自筆ヲ以記名シ月末ニ之ヲ取集メ家老見閱ノ上藩主ニ達ス

藩主在國ナルトキハ必ス一藩ノ戸主子弟中ニ就キ文武學術上達ノ者ヲ精撰シ夫々恩賞ヲ賜ヒ或ハ近侍或ハ目付或ハ頭奉行等ニ登用シテ之カ獎勵ヲ謀ル

慶應三年藩主封土ヲ棚倉ニ移ス該地校舍ノ設ナキヲ以テ學制小弛ス同四年戰地トナリ全ク廢壞ス

明治二年九月再ヒ藩學ノ制ヲ興ス同四年之ヲ廢ス

士族卒ノ子弟教育方法 藩主其一藩士人ヲシテ必ス藩立學校ニ入學セシム若入學スルヲ得サル事情アルトキハ儒官ヨリ

其旨ヲ稟請シ儒官宅ニ於テ修業スルヲ許可ス

文武師範家及ヒ醫家ノ嗣子ノミ藩費ヲ以テ他國へ遊學スルヲ許可ス後明治三年人才ヲ選ヒ藩費ヲ以テ遊學セシムル

ノ制ニ改メ復タ家門ヲ問フコナシ

毎月三ノ日家老ヨリ以下一般藩士ニ至ルマテ出校シ生徒ト共ニ儒官ノ講義ヲ聽聞ス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋等ニテ修學スルヲ旨トス然ト雖モ本人ノ執心ニ因テハ定書之通入學スルヲ許可ス

家塾寺子屋設置方法 家塾寺子屋ヲ設ルニ奉行ノ許可或ハ他ノ檢束ヲ受ルコナク何人ナリトモ自由ニ開クヲ得

武術師範家 世祿三百五拾石ヨリ拾人扶持ノ間ヲ給ス

職員概略 儒官五名句讀師拾二名奉行一名監察三名學校番三名同下役五名門衛一名外ニ武術師範二拾二名生徒概數 通學生概略三百名武術專修生ノ概數ハ得テ考フヘカラス

束脩謝儀 一切無之只每年末ニ白紙二帖ヲ納メ謝意ヲ表セシム

學校經費 學田アリ一旦藩倉ニ收入シテ會計官ヨリ時々學校ニ給ス其數考フヘカラス

藩主臨校 春秋試驗ノ節藩主在國ナル時ハ必ス臨場シテ講義素讀ヲ聽聞ス武藝ノ儀ハ在國中日割ノ目ヲ立觀覽シテ必ス一順ヲ終フ

祭儀 每年正月十五日聖像ノ軸ヲ掛ケ家老中老用人番頭城番頭大目付其餘學校職員ヨリ生徒ニ至ルマテ禮服ヲ着シ釋奠ノ禮ヲ行ヒ終リテ儒官大學ノ三綱領ヲ講ス一統ヘ赤飯ヲ頒賜ス

學校構造及ヒ建物圖面 (缺ク)

棚倉學校

校名 修道館

校舍所在地 磐城國白川郡棚倉丸之内其後代官町ニ移轉ス

沿革 明治二年九月丸之内ニ假設シ更ニ武科ヲ分離シ專ラ文學ヲ修ム同三年正月代官町ヘ移轉ス此際ニ方ツテ文運大ニ

開ケ學事隆盛三尺ノ童ト雖モ書ヲ讀マサル者ナキニ至ル且分校ヲ川上村塙村寺山村菊多郡窪田町上落野町五所ニ設置シ藩士ノ郡村ニ在ル者ヲ教授セシメ兼テ平民ノ子弟ヲ教育ス

教則 教科用書校中諸規則ハ白川學校ト異ナルヲナシ授業時間ハ午前八時ヨリ十二時マテ讀書一時ヨリ三時マテ日ヲ別

ツテ教官ノ講義生徒ノ輪講時間トス一六ノ日休業但シ休日ノ外夜學ヲ開設ス

學科學規試驗法 校內教授ノ學科ハ和漢學ノミ後算術ヲ加フ試驗ハ毎月一回施行シ以テ優劣ヲ判ス其法ハ論孟ノ內一篇ヲ揭示シ其篇內ヲ講セシムルヲ上等トス左國史漢等ヲ素讀シ其意熟字等ヲ解カシムルヲ中等トス四書五經ノ素讀ヲ下等トス例外試驗ハ賦詩作文對策アリ然レモ他ノ檢束ヲ受ケス自由ニ學習スルヲ以テ等級ヲ分ツヲナシ又賞與ヲ四等ニ別チ幼年輩ヲ勸ルヲ以テ主トシ左ノ如ク區別ス

一等五經全部 冊毎ニ半葉ツ、讀マシメ失忘アラサルモノヘ褒賞トシテ藩廳ニ於テ四書壹部ヲ賜フ(但生年十歲マテ)

一日之出に開門いたし日暮に闔門可致候

一火之用心第一に候間萬一出火の節ハ掛之役々は不及申稽古に罷出候者も早々走付防火可致候

一三之日講釋之節一役一人充可致出席候其餘たりども聽聞致度者は御目見以上以下并部屋住厄介にても勝手次第に候

一講釋は正月三日開講致し極月十三日終講可致候讀書之儀ハ正月十五日に相始毎月一六の日并五節句暑寒入晒書中を休日に相除候外稽古日相定極月廿日切に稽古仕舞可申候

一句讀師日講之者四書小近之類三之日外日々相講可申候聽聞致度ものは稽古人之外たりとも勝手次第二候

一平日讀書之者朝五時より罷出正九時退散可致候尤讀書會業之品に寄り終日修業之儀勝手次第に候但夜分は一切無用に候

一四九之日會講之節句讀師并稽古人正八時より罷出可申候尤儒者一人可致出席候

一御書物大切に拜見爲致晒書等入念可申候

一稽古に罷出度者は儒者へ可申候在町之者たりども執心之者は願之上修業相許可申候

一他所者學館拜見又ハ修業相願候は、時宜ニ取計可爲伺之上候

右之條々失念不可有之候如件

酉五月

學科學規試驗法諸則 校內設置ノ教授課目ハ和漢兵學槍術劍術弓術柔術等ニシテ生徒ハ必ス文武兩道ヲ兼修セシム 經

書ノ素讀及ヒ史類ヲ讀ミ得ルモノハ武藝ノ目錄以上ニ比ス 經義ニ通シ前ニ舉クル所ノ上等書類ヲ講究シ得ル

モノハ武藝ノ免許以上ニ比ス 學校設立以來二八兩月ニ生徒ノ學等ヲ試驗ス其法ハ經義ヲ講シ或ハ辨書ニ認ムルモノ

ヲ上等トシ素讀ノミスルモノヲ下等トシ始メテ試驗ヲ受ケ及第シタルモノハ賞トシテ藩主近侍ニ手寫セシメタル孝經

一部ヲ與フ慶應元年其賞ヲ五等ニ分チ金壹朱ヨリ一分二朱ノ間ヲ與フ 槍術劍術柔術ハ毎月三ノ日毎ニ諸流ノ内一流

ツ、一場ニ集メ學校奉行之ヲ點檢シ同十八日毎ニ月藩家老臨場觀察ス 弓馬ハ毎年二八兩月ノ十八日ニ家老中老學校

奉行用人監察等其場ニ就テ點檢ス砲術モ前ノ役々臨時ニ之ヲ點檢ス

職名及俸祿 學校奉行 家老中老ノ中ニテ兼勤俸給ナシ○學校監察 大目付ニテ兼勤俸給ナシ○儒官 世祿二百石ヨリ

十五人扶持ノ間ヲ給ス○句讀師 俸給ナシ年末ニ其勤惰ヲ調査シ賞金ヲ與フ○學校番及下役 扶持米若干ヲ給與ス○

往來の障りに相成道を讓候心得無之類も不相止哉粗相聞頗輕輩卑劣の所爲にて専ら士道可相嗜諸生の上には決して有之間敷義と甚御歎ケ敷思召候多分は幼少のものゝ致處に可有之候得とも幼年のものは何事も長者のする所を習候得は長者身を以て先立教へ導き不心得のものゝは深切に異見を加へ聊たりとも御前御教化の御助に相成候様可心掛義に候間年長の者別て言行を慎み遜讓を本とし朋友互に善を責士風を相勵し退々被仰付候文武御引立の御主意厚く相守不敬不禮は勿論人の前にて難言難行事はたとひ死とも致間敷と堅く慎み人の不見不聞處にて致候惡事は同し惡事にてても惡義に候間夜分の立振廻等別て心を附慎獨尤の事に候條平生能々心掛年少の手本に相成候様可致候惣て生涯無藝は士たるものゝ可耻義且六百年來恩波に浴して家名相續致居あから士の職業一つも不全ては何を以て舊來の御恩可奉報と申條深願の役頭々々は勿論諸師範方并諸稽古場引受等身を以先立諸生を勵し篤實廉恥の風に進候様専ら世話いたし兼て御教化行届候様可致奉對上第一の御奉公且銘々身に取て有益實に肝要の事に候夫とも不心得のものは全く御教化を妨候ものに付前段の廉々見聞次第其向々へ可申出様可致改て被仰付候

右の通被仰付候講所并諸師範家にて觀板致置諸生共へ時々教導可致候

士族子弟教育方法 城下士族ノ子弟ハ藩立學校へ入學セシム土着士族ノ如キハ各自ノ意向ニ任セ藩學或ハ家塾等ニテ修

學セシム學業進步將來有用ノ材トナル可キ者ハ藩費ヲ給シ他國へ遊學セシメ或ハ私費遊學ヲ許ス講説ノ定日ニハ藩士ヲメ隨意ニ聽聞セシム

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ就學セシムルノミ藩立學校へ入學スルヲ許サス後鄉學ヲ設クルニ至リテハ士族平民ヲ論セス一般ニ入學セシム讀書初ニハ必ス白鹿洞揭示ヲ授ケ右畢テ四書歷史ヲ授ク

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ他ノ檢束ヲ受クルナク自由ニ開設スルヲ得

學校

校名 育英館

校舎所在地

磐城國宇多郡中村古陸奥國ト曰フ明治維新分テ五國トナレシ宇多郡ハ磐城國ニ屬ス

沿革要略

文政五年創立藩主相馬益胤長門守治國ノ急務ハ學校ヲ興シ人才ヲ育スルニ在ルヲ察シ海東驥衛ヲ舉テ儒官ト爲

シ文教ヲ擴張セリ士族小野田唐宗百金ヲ獻シ學館造營ノ資ニ充ツ小野田氏通稱ハ六右衛門總義郡大堀村ノ人獻金ノ事

ハ文政四年八月ニ在リ藩主之ヲ賞シ城下士族ニ準ス

○二等四書壹部 前ニ同斷賞品蒙求一部(但生年九歳マテ)○三等學庸論語 前ニ同斷賞品延紙十帖學校ニ於テ賜フ
(但生年八歳マテ)○四等學庸 前ニ同斷賞品半紙五帖(但生年七歳マテ)

右試験ヲ執行スルキハ分校ノ教官ヲシテ各其生徒ヲ率非本校ニ至テ共ニ試験ヲ受ケシム最遠隔ニシテ本校ニ到ル能ハ
サル者ハ此試験規則ニ法リ各其地ニ就テ試験セシム

職名及ヒ俸祿 督學 常祿ノ外月給七圓○教授 同五圓○助教 同四圓○與教 同三圓○守校 同三圓○校掌 同二圓
半○助教心得 月給不詳○與教心得 同上

職員 督學壹名教授二名助教壹名與教六名守校壹名校掌壹名門衛壹名外校助教心得二名同與教心得三名
生徒概數 寄宿生大概二十名通學二百名餘分校生徒百五十名

束脩謝儀 一切無之

學校經費 舊費一ケ年大約金千五百九十五圓

藩主臨校 藩知事時々臨校シテ教務ヲ視ル

祭儀 略白川ト同シ但役名異ナルノミ

學校構造及ヒ建物圖面 (缺ク)

舊中村藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主屢諭達シテ子弟ヲ就學セシメ藩立學校ニ臨ミ生徒ノ業ヲ試ミ勉勵秀逸ノ者ヲ賞シ其封内ヲ巡行ス

ルヤ村落子弟ノ業ヲ試ミ優等者ヲ獎勵ス明治三年鄉學ヲ封内七所ニ開設ス曰廣業館字多郡字多曰某館行方郡曰繼善館行方
鄉曰某館行方郡曰明理館標葉郡北曰某館字多行方兩郡曰某館標葉郡南

論達書

文武修行之儀從御先代様迨々厚御世話被遊候は第一壯年之節遊惰にして日月を送り一度修行の時を失候得は年長し
て後悔致候ても無詮儀殊に武不心得のものは自然士氣衰弱に至如何の行跡成行候依之諸士の風儀慣方專要に候講所
并諸稽古場を罷出候ては師範其外引受等々敬禮を盡し篤實に可相學事勿論に候然處近頃度々御察度有之候得其不敬
不禮を致し中には騒敷加難の言廻り又は諸稽古場行戻りの節互に相戯れ惡口雜言に及び甚敷は礫打合擲合喧嘩致し

教科用書 孝經、小學、四書、五經、春秋左氏傳 始メハ素讀ヲ授ケ琅々口ニ上ルニ及テ漸次講義ヲ授ク○十八史略、皇

朝史略、日本外史、國史略、史記、漢書、國語、大日本史、歷史綱鑑補ノ類 獨看疑義ヲ質問セシム○文章軌範、唐宋八大

家文ノ類 右熟讀文氣ヲ長セシム○經史課業ノ餘間時ニ詩文ヲ作ラシム

授業時間ハ早曉ニ始リ凡二三時ニシテ退席朝食ニ就ク食後再出席午後四時退席

學科學規試驗法及諸則

筆算弓馬槍劍砲術柔術等各研究セント欲スルモノハ其師家ニ就テ學ハシム少壯ノ者ニハ務メテ文武兩道ヲ兼修セシム
ルヲ以テ修學時間ノ如キモ抵觸セサルヲ旨トシ武藝ハ大抵午後四五時ヨリ始ム然レモ文武各専門ノ徒ハ此限ニ非ス終
日其一業ニ從事スルヲ得

育英館ハ專ラ漢學及ヒ本朝ノ歷史ヲ講習セシムル者ニシテ藩侯學ヲ視ル毎月三次又講義ヲ聽ク講釋五ノ日ヲ用ユ歲ノ十一月親ヲ
講延ニ臨ミ諸生ノ學業ヲ試ミ優等ノ者ニハ書籍或ハ紙ヲ賞賜ス月末小試驗ノ如キハ教官之ヲ執行ス

育英館學規

夫學宮之教、綱常彝倫之所由本焉、風俗教化之所由生焉、而國家久安長治之術、亦出於斯、凡茲民者、其可不盡心乎、余
已續累世之緒、位白官之上、夙夜惕厲、先烈、情庶政而不愜吏民之望之懼、於是勵心殫慮、博議國家久安長治之策、莫急
於立學而教育人才也、乃命有司督工鳩材、按圖起學宮、擇敦行惇實、勉學不惰者、而教育人才焉、凡入斯學者、宜体余勤
勵圖治之意、夙興夜寐、講究經史、博學之、密問之、慎思之、明辨之、篤行之、以求日新之益、修孝弟忠順之行、慎揖讓進退
之節、以備異日入官居職之資焉、若夫橫議政事之得失、猥論長上之淑慝、以犯出位之罪、或挾爭心、而爲長傲遂非之資、
或游戯廢業、偷惰度日、以阻向學之心焉、斯數者害國憲、傷士風、而盡政教之原、執事者宜嚴加督責、而正其罪矣、若植其
本、清其源、則風俗教化之治行、而綱常彝倫之法立、而今日學校之設爲不虛矣、因述學規一篇、揭之學宮、蒞事者、其協心
戮力、遵行余勉勵圖治之意焉、

文政丁亥五月日

醫學校初メ育英館ノ旁ラニ設ク蓋シ弘化中ヨリ始マルト云フ後醫人中田玄珉ノ宅地内ニ移ス
奧和志曰醫學所五間半文久元年辛酉春自公造立干中田玄珉第醫生集會修學

文政八年藩主臨學始メテ養老ノ禮ヲ舉ク是ヨリ其後學校ノ重典トナリ時々之ヲ行フ或ハ五六年ニ一次其間疎數定リナ
シ其日藩主親ラ老人ヲ迎ヘ自ラ酒饌ヲ執リ之ヲ饗ス宴酣ニシテ書生等雅樂ヲ奏シ老人ヲ樂マシム或ハ伶人ニセシムル

一諸生入學、必有紹介、最戒輕過、初進門、當執贊、不必論物之大小、唯在乎存古意而已、其上學之日、諸生舊者居左、新者居右、都講一人、取規條坐其右首、介者率新來者、坐定、因陳其鄉里及父母之名、倘無父母、唯說其所業之事、仕者稱其國、遂使之聞學問之道、在乎習一字、便約其所讀之書、期以旬內幾日、都講取規條、高聲讀一遍、總拜、拜畢、介者率新來者而去、

一平日授書、晝六鼓半至九鼓、爲念書之徒、相會之期、八鼓至六鼓、爲旬內幾日之約、夜六鼓至四鼓、爲書間有事者會集之期、其佗仕者在邸中、有門限乏往來者、不必在此限、

一童子讀書、必須華本、如無華本者、用此方刊本無國字附註、

一先進之士、當以次教後生、童子讀書、授者與之共讀三遍、然後童子獨讀、隨其才性、或五遍、或十遍、至二十三十、以習熟爲期、最初艸々看過讀畢正字、正畢圈發句讀、或取一段中事易曉者、說與之、既畢、童子拜其人、退讀又一遍、然後放學、

一會讀一部書、必有首之者、首者在上、其餘各以至之先後爲次、首者讀之、檢發句讀、其正誤字、終段或節、然後首者問其所疑、其餘俟首者問畢、各相問難、最禁兩人私語、攙起剿說之類、

一會業之前一日、細看其當讀之所、義理未安、貼黃俟明日發問、會讀既終、退又細看、大抵一部書、未盡會讀了、常俱坐右、自首至尾、朝夕誦習、以俟會業之日、學問不必師友之謂也、

一童子寫做、臨古法帖、或就目今書家學之、當用心楷行、艸書或亂其體、年少時勿設作之、

一每月出文及詩題、三句內各一詩、則不拘諸體、但期成之、文則取國史中可紀者譯之、不必論古今、但欲無倒置耳、

一講甚害於學、以其取備一時也、然初學大闊訓話、茫然無所得、故問或一講之、亦未如見之日思之心、而自得之、因令諸生輪講一部經書、人各二章、蓋欲驗其讀書精粗、用心淺深也、

一輪講之日、一人當講席、其餘聽之、舊者居左、新者居右、童子別坐、亦各以長幼爲次、不得相踰越相混雜、最禁笑語私說、傷講者意、一人講畢、揖讓在次者、如此皆終、總拜、然後放學、

一凡非請業而會集、則命童子誦詩書字而罷、不可言及他事、言人富貴、便是羨其富貴、言人貧賤、便是笑其貧賤、惟是一片俗心腸、有此閑言語、若夫論飲食、評女色、及戲場烟花博奕之話、尤爲下流、俱當絕口不談、但使童子輩、耳聞古人事業、目見動作之儀、羣居終日、言不及義、先進之率子弟、當最戒之、

毎日稽古ノ義ハ出席順序ヲ以テ一人別ニ授業セシム但シ學業拔群ノモノハ特別ヲ以テ出席次第授業スヘシ
四書五經讀終リシ者又ハ年齡十五歲以上ノモノハ毎月三回會讀課へ出席輪講セシメ又ハ意義ヲ質問セシム
士族卒ノ子弟教授方法 藩士小從人嫡子以上必ス藩立學校へ入學セシメシト雖モ又各自ノ意向ニ任セ家塾ニテ修學セル
コト許可セリ又學術優等ノモノハ官費ヲ以テ他へ遊學セシメ或ハ自費遊學ヲモ許可セリ

毎月九ノ日夕八ツ時ヨリ會讀ト稱へ子弟輪講疑義難問學長之ヲ決ス但シ子弟年齡十六歲ヨリ十九歲ニ至ルノ制規

平民ノ子弟教育方法 徒士ノ子弟及ヒ平民ハ藩立學校へ入學スルヲ許サス但シ平民ト雖モ執心ノモノハ學長へ請願ノ上

夜學及ヒ毎日授業終リテ後授業シ或ハ學長ノ書室ニ於テ授業ヲ爲スハ妨ケナシトス
家塾寺子屋設置ノ制度 何人ヲ論セス各自ノ意向ニ任セ之ヲ檢束スルコトナシ

學校

校名 總名ヲ講所ト稱シ授業ノ所ヲ明德堂ト稱ス

校舍所在地 南町

沿革要略 天明年間藩主秋田倩季校堂ヲ城門外ノ西南ニ建テ名ケテ講所ト曰ヒ自ラ題シテ明德堂ト曰フ寛政年間藩主秋

田謠季之ヲ其南ニ遷シ建ツ天保年間燒失秋田憲季更ニ復之ヲ全地ニ建ツ

藩主秋田倩季江戸聖堂ノ書生松澤某島居幸左衛門ヲ聘シ一藩ノ師トス次テ門弟山地順祐平賀英助相共ニ一藩ノ子弟ヲ

教ユ江戸參勤ノキハ丹羽雲記ヲ招キ經書ノ講義ヲ聞ク經書ハ朱氏新註ヲ用ウ天保年間ニ至リ藩士大關貞之進始メテ朱氏古註ヲ用非經書ヲ講ス文化年間村瀬主稅ヲ二本松ヨ

リ聘シ一藩ノ師トス倩季薨シテ而後學事稍衰へ後世又此時ノ如ク盛ナラス

教則

教課用書 四書、五經、近思錄、漢土歴史及諸禮式 天保年間ニ至リ本邦歴史ヲ交ユ

教授ノ方法 四書五經讀終リ學業ノ進歩ニ從ヒ講義ヲ授ク○習字 習字ハ隨意ニ任スト雖モ時間ハ總テ朝五ツヨリ夕

七ツ時迄トス○詩文會 晝後ハ一六二七三八等ノ日ヲ定メ詩文會或ハ歴史ノ講義ヲ爲スト雖モ學長及ヒ句讀師ノ協

議ニ任シ一定セス

學科學規及ヒ試驗方諸則

ヲモアリ乃乞言交語群老交モ古今政事風俗等ノ得失沿革ヲ語ル各歡ヲ盡シテ罷ム婦人ノ老ハ酒饌ヲ家ニ賜フ凡ソ八十以上ノ老ニハ眞綿等ヲ加賜ス初メ群老席ニツクニ齒ヲ以テ序ツ家老用人ヲ勤メタルモノハ六十以上群老ハ七十以上ヲ以テ限リトス是ニヨリテ衆皆觀感興起スル所アリ教化大ニ行ハル

天保五年藩主令シテ曰ク昔シ先王ノ世野ニ耕サルノ民ナク室ニ蠶セサルノ女ナシ身藉田ヲ耕シテ以テ案盛ニ供シ夫人蠶桑シテ以テ祭服ヲ作ル農ヲ勤メ本ヲ務ムル所以ナリ今其風ヲ追ヒ民ヲ力ヲ田畝ニ用キ其生養ヲ遂ケシメント欲ス是ニ於テ儒官海東驥衡ニ命シ其禮ヲ撰修セシム驥衡命ヲ奉シ遠ク三代ノ遺典ニ因リ近ク之ヲ當今ニ潤色シ縷々明切其書ヲ献ス藩主乃チ本城ノ北庭ニ於テ藉田ノ儀式ヲ行フ爾后問歲之ヲ行フ君夫人自ラ織テ宗廟ノ帷帳ヲ作ル

職名及俸祿

大引受一人

儒者一人

助教二人

學監二人

以上役料未詳

引受三人

年給合力ト稱之金壹兩

五經傳五人

同上金貳分

四書傳拾人

同上

金壹分

帳付拾貳人

年給未詳

勘定方一人

會所出仕者兼務

職員概數

教員凡二拾餘人事務員凡拾三人

藩ノ官吏ハ事務ノ餘間昇校シテ聽講又授業ス

生徒概數

寄宿生凡二拾名通學生凡三百名

寄宿所ハ希賢塾ト稱ス炭油火鉢等校費其他ハ自費

東脩 入學ノ時東脩錢百文

正月五日發會ノ時神饌料錢百文 正月五日開校時自白鹿洞揭示ヲ讀シ孔子ノ肖像ヲ掲ケ酒饌ヲ供ス

學校經費 一周年ノ學費ヲ高百石ト定ム

藩主臨校 藩主在國ノ時ハ毎月三次午後臨校聽講又毎月三次午前生徒ニ教授ス歲ノ十一月親ク臨テ諸生ノ講讀及ヒ詩文ヲ試ム

學校構造及建物圖面 (略之)

學校ニテ出版セシ書籍及藏書

金峨先生霞城講義一冊、白鹿洞書院揭示一冊、五常訓一冊(以上出版書籍)

孔子影像一

軸 藏書數千卷アリタレモ悉ク舊磐前縣ヘ納付ス其種類部數今得テ詳ニシ難シ

舊三春藩

學制

學事上ノ諸制度

藩内ノ男兒年齡八歲ヨリ必ス入學セシム但シ小從以上格式アルモノニ限ル

藩内ノ男兒年齡八歲ヨリ必ス入學セシム但シ小從以上格式アルモノニ限ル

學事上ノ諸制度 本藩學事上ノ制度明治維新前ニ方テハ一般領地内ニ係ル布令規律ナシ僅ニ藩士ニ對シ教育ヲ勸ムルノ
諭達シタルモノアリシト雖モ今觀スルニ由ナシ故ニ維新后ニ係ルモノヲ茲ニ舉ク然レモ亦僅ニ私記口碑ニ就テ舉ルニ
過キサレハ固ヨリ欠遺ナキヲ保セス其布令モ亦一般ニ關スルモノト否トアリ混シテ左ニ列記ス

明治二年十月四日藩知事卒族ニ令シテ曰ク文武諸稽古ノ儀廻テ御規則被仰出候迄ハ先從前之通相心得可申事○全年
十一月廿四日中學校ヲ開設シ士族卒族ニ令シテ曰明廿五日四ツ時假學問所開設ニ付士族卒族之向勝手次第出席可被
致候事○全年十二月四日一般ノ布令ニ曰此度從 朝廷被仰出候儀御趣意ニ基キ藩政改革被仰出候上ハ左ノ件々屹度
相守可申候(中略) 文武ノ藝業ヲ勵精シ有用ノ人材トナルヘキ事 人材ヲ學クルニハ門地ハ勿論舊家新家ノ差別
不可論事(以下略)○全日士卒ニ令シテ曰老幼病身等ニテ總テ 朝務難相成候者ハ軍費爲御備祿制之内左之通獻納可
致候事(中略) 右之通りニ候得共是迄忠勤致候者并拾四歲以下ニテモ八九歲ヨリ藝業出精致候者ハ軍費米上納不
被仰付候事○全五日在町^{即士卒外}ノ者ヘ令シテ曰此度學校御開ニ付御高札ニモ有之候通人倫ヲ明ニスルノ御趣意ニ付
無遠慮罷出講義聽聞可致候且又其業ニ寄リ候テハ御引立ニモ相成候儀ニ付職業之餘暇心懸候様可致候事(本文高札
ノ明文不詳)○全日又神職共ヘ令シテ曰此度學校御開ニ付神職ノ者勝手次第罷出講義聽聞可致候將又和學之儀ハ御
一新之折柄猶更大切ニ付追々修業申付候得共是迄及聞見候者モ有之候ハ、無遠慮罷出講義可致候就テハ御支配所内
ニ不拘因縁ヲ以テ他所ヨリ招來候共不苦候間罷出候合モ有之候ハ、其旨先達可伺出候事○全月十三日又士卒ヘ布令
ニ曰文武之儀ハ 朝廷奉仕ノ要務ニテ今般更ニ御引立ノ事有之文學ノ儀ハ於知事様モ一際御精勵之思召ニ付御藩士
卒族ニ至迄年齡ニ不拘出席勉強可致有之候就テ者其父兄ヨリモ厚申諭又老年ノ者ハ其身出席不致候共一族縁者ニ至
迄少年ノ者ヘ能々申諭勉業致候様可被相諭候事

以上舉クルモノ、外尙明治三四年ノ間ニ係ル布令アリト雖モ僅ニ記憶ニ存スルノミ其書類ナキヲ以テ明文ヲ掲グルニ
由ナシ以上舉クルモノハ重ニ制度ニ關スル布令ニシテ學校ニ關スル布令諭達ハ右本項ニ從テ之ヲ掲クヘシ又以上舉ク
ル布令ハ都テ藩知事ノ令ニ係ルト雖モ常路ノ官吏受ケテ之ヲ發布ス故ニ藩知事ニ對シ尙尊稱ヲ用フ

士族卒ノ子弟教育方法 明治改革以前ハ藩學校ニ入學セシムルノ諭達アリシモ強テ迫ラス各自ノ意向ニ任シテ修學セシ
ム又志願ノ者ハ其學力ニ依リ月二人扶持ヲ給シテ他國ニ遊學ヲ許セリ私費遊學モ許可セリト雖モ實際許可ヲ得テ遊學
シタルモノナシ又藩士ハ藩學校ニ出テ講義ヲ聽聞スルヲ要スルノ制ナカリシ又卒ノ如キハ藩校ニ入學ヲ許サ、リ然
レモ明治改革以後ハ之ヲ一變シ已ニ前項記載ノ如ク屢布令シテ士族卒ノ教育法ヲ制定ス

學科 漢學、筆學、習禮、兵學、弓術、鎗術、柔術

學規 文武兩道ヲ兼修セシムト雖^モ一科專修ヲ許ス

修學ノ規 八歳ニ至リ入學シ十五歳ニ至リ退學ス若シ十五歳ニ至ルモ四書五經讀ミ終ラサルモノハ何歳ニ至ルモ退學

ヲ許サス

試驗法 毎月二日讀ミ終リタル書籍一卷毎ニ二三ヶ所ヲ撰ミ復讀セシム

生徒賞品授與ノ法 十五歳迄ニ四書五經讀ミ終リ及ヒ毎月復讀誤無滯モノハ書籍料ヲ賞與シ又年中無欠席ノ者モ亦

賞品ヲ與フ

回禮 入學セシ子弟師範家ヘ回禮スルノ制規ナキモ學館係ノ師家及係家ヘ當日翌日ノ中ニハ必ス回禮ス

職名及俸祿 習業掛一名 學長一名 句讀師定數ナシ 世話係定數ナシ 以上文學○師範家一名 肝煎定數ナシ 以上

武術○俸祿 家祿アルヲ以テ別ニ給セス○座席身分取扱 藩制ニ家席アルヲ以テ別ニ設ケス 以上職名以下維新前ニ

係ル

藩學校職 文武教授助教藝監使丁

門衛ナ
兼ヌ

共、定員ナシ月給詳カナラス

右ハ廢藩ト共ニ廢絶ス明治五年ノ秋ニ至リ士族一統ヨリ家祿二十分ノ一ヲ寄附シ養才義塾ヲ設置シ從前ノ校
舎ヲ用ウ經書和漢歷

史ノ素讀講義ヲ授ケ併セテ筆學算學ヲ授ク明治六年ニ至リ學制頒布依テ小學ニ改ム

束脩 扇子

生徒概數 通學生大凡三百名寄宿生自費三拾名但シ定數ナシ

學校經費 現米百石年代未詳明治維新後藩學校ニ於テモ定數ナシ學校係ノ請求ニヨリ時々之ヲ下附ス

藩主臨校 藩主在邑ノヒハ毎年春秋兩度講所ニ臨ミ子弟ノ素讀講義ヲ聽キ又弓馬鎗劔柔砲ノ業ヲ試ミ優等ノモノヘ各賞

品ヲ與フ但シ武術ハ子弟ノミニ非ス五拾歳未滿ノモノハ出席スルモノトス

祭儀 聖廟ノ設ナシト雖^モ毎年正月十二日讀ミ初メト稱シ藩主自ヲ臨ミテ釋典ノ禮ヲ行フ生徒ニ一章或ハ一句ツ、ヲ讀

マシメ終レハ藩主先ツ聖像ヲ拜シ奠酒ヲ嘗ム次ニ重職次ニ役員次ニ教員學校係等生徒ニ至ル迄次手ヲ以テ奠酒ヲ嘗ム

舊平藩

學制

授業ノ時間 毎日朝五ツ時ヨリ晝ノ七ツ時マテトシ朝ヨリ晝後八ツ時マテ漢學ハツ時ヨリ七ツマテ習字トシ武學ハ七ツ後ヨリ始ムルヲ例トスレモ稍年長ノ者ハ習字ヲ欠キ又晝後ヨリ武衛ニ移ルモノアリ散テ一定セズ

學科 漢學、筆道、兵學、劍術、槍術

學規 各學科必ス兼修セシムルノ制ナシ都テ各自ノ意ニ任スト雖モ概シテ初メ文武兩道ヲ兼修シ後四書ノ講義ヲ了ヘスシテ武道ニ偏スルモノ多シ 學修年間ノ定限ナシ大抵八歲位ニテ入り二拾歲位マテ在學スト雖モ精神者ニ至テハ此後モ尙在學スルモノアリ

試驗法 試驗ハ每年春秋兩度トシ講義ノ力アルモノハ否ヲサルモノハ素讀トシ春秋間ニ於テ主トシテ學修シタル書籍ニ就キ一ケ所ヲ試ム其素讀又ハ講義スル所ハ監察之ヲ撰ム但此試驗ハ維新前ハ城中ニ於テ施行ス維新後ハ藩主臨校監察役監督シ其優劣ヲ調査ス 外ニ月並試驗アリ其月學習シタル書籍ニ就キ毎月末之ヲ施行ス但圖書五經素讀中ノ生徒ニ限ル故ニ一ケ所位ヲ通讀セシムルノミ但施政堂タリシ中ハ月六回トス

諸則 每年春秋兩度ニ於テ學力優等ノ者ヲ撰ミ磐城紙貳束以內等差ヲ設ケテ賞與ス最下等ハ五帖トス 盆暮兩度ニハ勉勵者ヲ撰ミ金五百疋以內百疋以上等差ヲ設ケテ之ヲ賞與ス

休日 一日十五日廿五日及節句盆暮正月トシ正月ハ二十日マテ暮ハ十二月廿日ヨリトス但祭日モ亦休業ス

訓條罰則等ナシ但少年子弟ニシテ不良ノ所爲アリシハ殘讀ト稱シ暫時拘留シテ讀書セシム

初メテ入學シタルモノハ師範家ヲ回禮スルヲ例トス

職名及俸祿 維新前 儒者役年俸金貳拾兩盆暮兩度ニ給ス 助教頭取俸給不詳 助教俸給ナシ○維新後 學監月俸金四兩 大教授俸給不詳、以下同シ助教 句讀授 大少舍長 寮長 但右各職皆定員ナシ

職員概數 維新前 儒者役一人助教頭一人助教五人校僕一人○維新後 學監一人大教授一人助教二人句讀授五人 大舍長^{不詳}少舍長^{不詳}寮長^{不詳}校僕一人

生徒概數 維新前 百人許內寄宿生七人許皆自費トス但都テ定員ナシ○維新後 貳百人許但定員及寄宿生ナシ

束脩謝儀 更ニナシ

學校經費 更ニ不詳

藩主臨校 每年春秋兩度試驗ノ時及正月開校ノ日トス外ニ維新前ハ月數回^{其日及度數不詳}教師ヲ城中ニ召シ五經ヲ講セシム此月

平民ノ子弟教育方法 前後其方法タルヘキモノナシ各自適宜家塾寺子屋等ニテ修學セシメタリ然レモ亦敢テ必ス修學ヲ要スルノ令ナシ明治二年改革ニ干テ始メテ藩校ニ入テ講義ヲ聞キ尙各自家業ノ餘暇ニモ心掛クヘキ旨ヲ令ス其文前ニ出ツ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋設置ニ就テノ制令ナシ故ニ何人ヲ問ハス各自勝手ニ之ヲ開設スルヲ得タリ曾テ他ノ檢束ヲ受クルコナシ

學校

校名 佑賢堂但元施政堂ト稱ス明治二年此稱ニ改ム

校舍所在地 磐前郡平町舊磐城平郭内八幡小路

沿革要畧 寶曆年間ノ創立ニシテ當時ノ藩主安藤對馬守信成大ニ儒學ヲ尊崇シ本校ヲ設ケテ藩士ノ子弟ヲ教育ス藩士伊藤修助教頭タリ同氏ハ徂徠ノ學派ニシテ漢學詩學ニ達シ詩集ヲ編輯シタルコアリ其書目本校ノ學科ハ初メ漢學ノ一科ニシテ安政年間ニ至リ更ニ武學ヲ加フ文久初年ニ方リ砲術ヲ改メ洋法英式ヲ以テ練兵ノ法ヲ立テ后又佛式ニ改ム明治元年校名及職員名稱ヲ改メ更ニ俸給ヲ定ム明治四年廢藩ニ依テ廢校ス

教則

教科用書 四書、五經、左傳、史記、後漢書、國語、小學、通鑑、廿一史 此他各自ノ望ニ依リ和漢雜書ヲ用フ

授業ノ方法 漢學ハ句讀ヲ授ケ兼テ自讀ヲ學習セシム素讀稍熟スルヲ待テ講義ヲ授ケ兼テ又講義ニ着手セシム句讀ヲ以テ自讀ヲ學ハシメ講義ヲ聞キ又ハ質疑シ以テ講義ノカヲ養成ス句讀ハ日々教師各生一人ツ、之ヲ授ケ自讀モ亦日々各生一人ツ、教師ノ前ニ於テ通讀セシメ其誤ヲ訂ス音訓又ハ解釋ノ質疑モ此時ニ於テナサシム講義ハ生徒ヲ一席ニ列シ之ヲ授ケ且質疑セシム生徒ノ講義モ亦席ニ會ヒテ之ヲナサシメ互ニ質疑或ハ討論等ヲナサシメ教師其正否ヲ教誨ス又便宜互ニ相會シ講義スルヲ許セリ 習字ハ手本ニ依リ自ラ學習セシメ毎月六回清書ヲナサシメ其是非ヲ評點ス手本ハ清書毎ニ之ヲ與ヘ且讀方ヲ授ク 武學ハ略ス

授業ノ順序 漢字ハ四書五經ノ句讀ヲ授ケテ以後ハ各自便宜ノ書籍ヲ自讀セシム四書五經ノ素讀了レハ小學孝經論孟等ノ順ヲ以テ講義ヲ授ケ已ニ論孟ノ講授ニ移レハ漸次又孝經小學等ヨリ講義ヲ始メシム其他ノ講義ハ各生ノ適宜ニ任ス 習字ハいろはニ始マリ次ニ五十音ヲ習ハシメ以後ハ書牘文又唐詩選ノ類各生ノ望ニ依テ授ク書体モ亦然リ

學科學規試驗法及諸則

學科 經書 史學 詩學 文學

學級課程左ノ如シ 一等左國史漢書ヲ讀講シ兼テ詩文ヲ作ル 二等四書日本外史ヲ讀講シ兼テ詩文ヲ作ル 三等小學十八史略元明史畧國史略ヲ讀講シ兼テ詩文ヲ作ル

學規 入校ノ生徒ハ先ツ三等ニ入リ漸次進テ一等ニ了ル 入校ノ生徒ハ漢文ヲ獨見シ稍字句ヲ解スルモノトス 一學級學習ノ年限ナシ故ニ又在學年限ニ定ナシ大抵十四五歲ニテ入學セリ但明治四年廢校ニ付授業年間三ヶ年ニ過キス故ニ在學年數ノ實例ヲ舉ルニ由ナシ休日ハ一六ノ日トス其他益暮及正月トス但暮ハ廿五日ヨリ正月ハ十六日マテナリシヤ

試驗法 試驗ハ每年春秋二季トシ其學級ニ學修シタル書籍ニ就テ一葉乃至二葉ヲ講セシム 試驗講義ノ箇所ハ大監察之ヲ撰定ス 試驗ノ日ハ知事并大少參事監察屬官臨席ス

諸則 試驗ニテ學力優等ノ者ニハ金員又ハ筆墨等ヲ賞與ス但其額ハ不詳 試驗ノ賞與ヲ受ケタルハ各師範家ヲ廻禮ス

明治二年十二月六日在町ノモノニ令シテ曰ク 此度學校御開ニ付兼テ御高札ニモ有之候通人倫ヲ明ニスルノ御趣意ニ付無遠慮罷出講義聽聞可致候且又其業ニ依リテハ御引立ニモ相成候儀ニ付職業ノ餘暇心懸候樣可致候事 此度學校御開ニ付神職之者勝手次第罷出講義聽聞可致將又和學ノ儀者御一新ノ折柄猶更大切ニ付追々脩行申付候得共是迄及聞見候者モ有之候ハ、無遠慮罷出講義可致候就テハ御支配所内ニ不拘因縁ヲ以テ他所ヨリ相招來候共 不苦候間罷出候輩モ有之候ハ、其旨先達可伺出候事

全年十二月四日令シテ曰ク 文武ノ儀者朝廷奉仕ノ要務ニテ今般更ニ御引立ノ事ニ有之文學ノ儀ハ知事樣ニ於テモ一際御勵精ノ思食ニ付御藩士卒族ニ至ル迄年齡ニ不拘出席勉強可有之候就テハ其父兄ヨリモ厚申諭又老年ノ者ハ其身出席不致候共一類縁者ニ至ルマテ少年ノ者ヘモ能々申諭勉業致候樣可被相諭候事但卒業ノ向多年御勝手御不如意ヨリ御手モ不被爲屈自然四書五經等ノ讀書迄ニテ打捨候儀ニ付當今確ト御差支ノ儀モ有之候間其頭支配ヨリ厚諭未タ年若ノ者ハ讀書習字共出精致候樣可被相諭候事

明治二年十二月十九日知事ノ令ニ曰ク 學校ヘ入學ノ輩ハ禮服着用ニテ罷出可申事但教授ハ勿論局長以下官員ヘ可爲廻勤事尤幼年ノ者ハ父兄或ハ親族之内可爲同道事 年始暑寒教授以下ヘ廻勤可致事 途中諸師役々ヘ逢候節ハ

ハ一役ニ付登人ツ、必ス出席セシム但後年ニ至リテハ生徒ハ勿論士卒平民ニ至ルマテ聽聞ヲ許ス
祭儀 毎年正月開校日ノ外別ニ祭儀ナシ開校日ノ釋奠式左ノ如シ

就坐

帳簾着盥洗 卷簾并點燭

句讀授

香案ノ前ニテ解劍伏拜シ机上ノ白著ヲ取り燭ヲ剔リ香案ノ前ニ伏拜劍ヲ帶ヒ退

シ

焚香者盥洗

句讀授

香案ノ前ニテ解劍伏拜シテ焚香シテ退シ

迎神者盥洗

香案ノ前ニテ解劍伏拜シテ机上ノ迎文詞ヲ取り讀ミ了リテ又机上ニ置キ伏拜劍ヲ帶ヒ退シ

諸官一同出坐

○

校名 中學校

校舍所在地 磐前郡平町字田町

萬磐城平藩郭内

沿革要略 明治二年十一月舊藩立學校佐賢堂ヲ本校トシ學科並ニ學規職員名稱俸給ヲ更定シ且四民ノ入校ヲ許ス明治四

年廢藩ニ就テ廢校ス

教則

教科用書 小學 四書 十八史畧 元明史略 國史畧 日本外史 左傳 國語 史記 漢書

授業方法 經書歷史ハ前記ノ書籍ヲ素讀及講義スルモノトス素讀ハ皆自讀セシ疑義ハ毎日質問セシム講義ハ教師ヨリ

左傳ヲ講授シ其他ハ自ラ解釋セシメ毎月數回講義會ヲ開キ輪流講義セシメ其正否ヲ糾ス詩文ハ時々宿題ヲ與ヘ之ヲ

作ラシメ添削ヲ以テ文法句法ヲ教フルノミ

授業ノ順序 先ツ小學ニ始マリ十八史畧元明史畧國史畧了テ四書日本外史左傳等ノ順ヲ以テ素讀及講義ヲ學習セシム

詩文モ入學ノ初ヨリ之ヲ作ラシム

授業ノ時間 毎日朝五ツ時ヨリ夕七ツ時迄トシ午前ハ素讀ノ質疑午後ハ講義及詩文ノ時間トス午後ノ日課大略左ノ如

シ

二七ノ日史書類講義 三八ノ日教師ノ左傳講授 四九ノ日經書類講義 五十ノ日詩文 但十五日ハ舊泉及湯長谷藩

トノ左傳講義會トシ午前四ツ時ヨリ薄暮マテトス

家塾寺子屋設置ノ制度 何人ヨリモ隨意適宜ニ開設スルヲ得奉行郡宰里正等ノ許可ヲ得ルヲナシ

學校

校名 汲深館

校舍所在地 磐城國菊多郡泉村

沿革要略 嘉永五年九月創立ス當時ノ藩主本多越中守文武ノ學ヲ貴フ故ニ本館ヲ開設シ藩士ノ子弟ヲシテ修學セシム藩士衣笠潛藏命ヲ奉シ本館設立ノ事務ニ從ヒ大ニ盡力ス明治三年學則ヲ定メ職員名稱及俸祿ヲ改メ且經費支辨ノ法ヲ設ク此年生徒藩知事ノ聽許ヲ得テ舊湯長谷及平ノ二藩ト毎月一回左傳ノ輪講ヲ始ム明治四年十一月廢藩ニ依テ廢館ス

教則

教科用書 四書、五經、史記、春秋左氏傳、資治通鑑、綱鑑易知錄、國語、武門要鑑抄

授業ノ方法 漢學ハ初メ句讀ヲ授ケ專ラ素讀ニ熟セシメ兼テ自讀ヲ始メシム漸ク熟スルヲ待テ講義ヲ授ケ又講義セシム講義ハ之ヲ聞キ其是非ヲ訂ス又講義ハ論孟及左傳等トス句讀ハ日々一葉乃至二葉ヲ授ケ兼テ前日授クル所ヲ溫習セシム已ニ自讀シ得ル者ハ日々數葉ヲ通讀セシメ其是非ヲ正ス 筆道ニハ別ニ授業ノ方法ナシ豫テ手本ヲ與ヘ自ラ學習セシメ時々教師手ヲ取テ運筆ノ法ヲ授クルノミ毎月數回清書ヲナサシメ其良否ヲ正ス 算術モ同様別ニ授業法ナシ初メヨリ算盤ニ依テ其術ヲ授ク 武學ハ之ヲ畧ス以下皆然リ

授業ノ順序 漢學ハ四書ニ始マリ五經左傳史記通鑑易知錄國語等ノ順ヲ逐テ之ヲ學修シ句讀ヲ授クルハ大概四書ノ半ハ止リ以後ハ自讀セシム素讀漸ク熟スレハ教師論孟ノ講義ヲ授ケ後復ク孟子ヲ講セシメ了テ左傳ノ講義ヲナサシム 筆道ハ假名ヲ始トシ漸次書牘文ニ進マシム行書ヲ先ニシ草書ヲ後ニス 算術ハ八算見一ヨリ定位相場割等ノ順ヲ以テ進ム

授業ノ時間 每日朝五ツヨリ夕七ツマテトシ午前ハ讀書午後ハ溫習并筆道又ハ習禮トス算術ハ夜學薄暮ヨリ五ツ頃マテトシ短夜ノ節ハ夕七ツヨリ薄暮マテトス

學科學規試驗法及諸則

學科 漢學算術筆道習禮兵學槍劍砲術

學規 本館ノ生徒ハ文武兩道ヲ學習セシム故ニ兩道程度ノ比例等アルナシ生徒學習ノ期限ニ定度ナシ大概七八歲ニシ

勿論諸士ニ逢候テモ格式相當手厚禮儀可致事 惣テ師範ハ勿論社中不恭之儀無之様可致候事

職名及俸

學頭 元掌教ト稱シ年俸金五兩明治二年十一月九日

學監 俸給不詳

教授 年俸金八兩

大助教 年俸金七兩

小學監 俸給不詳

小助教

年俸六兩

助教試補 全五兩

習字助教 全六兩 但皆定員ナシ

職員概數

學頭兼教授壹人

學監三人 内 壹人ハ文學教授兼一人ハ劍術教授兼壹人ハ槍術教授兼

大助教壹人

小學監四人

小助教七人

助教試補五人

習字助教二人

正議二人 是ハ生徒ノ取締ヲナスモ

此外不詳

生徒概數

寄宿生四拾名 但定員ナシ

一ヶ月壹人ニ付賄薪炭油等ノ費トシテ金壹兩ヲ給ス

通學生三拾名 但定員ナシ

束脩謝儀

更ニナシ

學校經費

不詳

藩主臨校

春秋試驗ノ時臨校ス

祭儀

佑賢堂ニ全シ故ニ畧ス

學校構造及建物圖面

通常平屋ノ木造トス建物圖面并地坪不詳

學校ニテ出版翻刻セシ書類目次及藏書ノ種類部數

出版翻刻ノ書籍ナシ藏書ノ種類部數不詳

舊泉藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主ノ布令諭達其他獎勵ニ係ル方法等更ニ學事上ノ制度ナシ依テ藩主ノ學事上ニ就テノ行蹟一二ヲ左

ニ掲ク

天保八年藩主本多越中守忠德館内大廣間ニ於テ藩士ノ幼年子弟ヲ集メ經書ノ素讀及習字ヲ教授セシメ日々自ラ之ニ臨

ミ出精ノ者へ筆墨紙或ハ草子ヲ賜リ同年十月ヨリ毎月六回表書院ニ於テ儒者小松精紀ニ經書ヲ講セシメ自ラ臨席且家

老用人諸役人ニ出席聽聞セシム嘉永五年九月文武ノ學館ヲ創立シ汲深館ト名ケ藩士ノ子弟ヲシテ入學セシム

士族卒ノ子弟教育法 藩學校へ必ス入學セシム但藩學校設置以前ハ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學セシム 藩費ヲ以

テ他國ニ遊學セシムルヲアリ又私費遊學モ許可セシカ事實許可ヲ得テ遊學シタルモノナシ

平民ノ子弟教育法 修學スルト否トハ各自ノ意ニ任ス故ニ平民ノ子弟ハ家塾寺子屋ニテ便宜修學ス又其出願ニ依リ藩學

校ニ入學ヲ許セリ

授二人助教六人舍長四人校僕一人都合十五人

生徒概數 明治三年前 通學生五六十人○明治三年後 通學生百人餘 但明治三年前後共寄宿生ナシ又生徒ニ定員ナシ
學資ハ皆自費トス

束脩謝儀 更ニナシ

學校經費 明治三年前ハ定メナシ唯尋常藩費ノ内ニテ支辨ス故ニ其實費モ不詳 明治三年後ハ一ケ年現米貳百貳拾七石
五斗ヲ以テ經費定額トス但藩高現石二十分ノ一ナリ 右ノ狀況ニ付學田等ナシ又藩士ニ賦課シタル等ナシ且學事ノ弛
張ニヨリ費額ノ増減等ヲ徴スルニ由ナシ

藩主臨校 時々臨校武藝ヲ見分シ其他春秋兩度臨席學頭ヲシテ文學科ヲ試験セシメ優等生ニ賞與スルヲ例トス
祭儀 春秋兩度陰曆彼岸ノ中藩主臨館文宣王ヲ祭ル一藩ノ士庶拜禮ス

學校構造及建物圖面 通常平屋ノ木造ニシテ文學所ハ疊ヲ敷キ武術所ハ板敷トス其地坪建坪圖而別紙ノ通
學校ニテ出版翻刻セシ書籍目錄及藏書ノ種類部數 出版翻刻ノ書籍ナシ 藏書ノ種類部數不詳

以上各項ノ調査ハ更ニ據ルヘキ書類ナシ依テ悉ク古老ノ記憶ニ徴シ勉テ其實ヲ取調ルモノナリ

舊湯長谷藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達等學事上ノ制度タルヘキモノナシ天保十四年藩主内藤因幡守藤原政民文武ノ學館ヲ設
ケ致道館ト名ケ令シテ藩士ノ子弟ニ入學セシム

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ハ必ス藩學校ニ於テ教育スルヲ例トスト雖モ亦敢テ家塾等ニテ修學スルヲ禁セス
藩費ヲ以テ他國ニ遊學セシメタルヲナシ私費遊學モ許セシカ許可ヲ得テ遊學シタルモノナカラン藩士ハ勝手ニ出館講
義ヲ聽聞スルヲ許シタルノミ敢テ聽聞セシムルノ制ナシ

平民ノ子弟教育方法 修學スルト否トハ各自ノ意向ニ任ス故ニ平民ノ子弟ハ家塾寺子屋ニテ修學シタルノミ又平民ノ子
弟ハ藩學校ニ入ルヲ許サス然レモ明治二年改革後ハ之ヲ許可セリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等ハ他ノ檢束ヲ受クルヲナク何人ニテモ勝手ニ之ヲ開設スルヲ得タリシ

テ入り二十四五歳マテ在學スルヲ例トス 漢學筆道習禮ハ入學ノ初メヨリ學習セシメ後武學ニ就カシメ十二三歳ニ至テ算術ニ入ラシム

試驗法 各科試驗ノ定法ナシ唯漢學科ニ春秋ノ試驗アリ先ツ其法ハ生徒ノ力ニ應シ素讀及講義トス素讀ハ豫テ學習シタル書籍中ノ壹部ニ就テ一ヶ所二三葉ヲ通讀セシメ講義ハ論孟等其全部ニ就テ一ヶ所ヲ試ム

諸則 春秋試驗ニ於テ優等ノモノヲ撰ミ金貨及書籍等ヲ賞與ス其幼年ノ生徒ニハ筆墨紙等ヲ與フ

毎年末ニ於テ其年中百日以上出席ノ者ハ數等ノ等差ヲ立テ木綿代トシテ金貨若干ヲ賜フテ其出精ヲ獎勵ス但此賜金ハ木綿一反乃至三反ニ當ル金額トス

生徒入學ノ時ハ通常羽織袴ニテ父兄ノ中同道出館シ后師範家ヲ回禮ス生徒入學ノ定期ナシ正月稽古始ニ入學スルモノ多シ

休日ハ五節句盆暮等ナリ但稽古始ノ定日及歲暮ノ休業日數不詳

明治三年更定ノ學則左ノ如シ

學則

一學之要在明人倫學之方在知國體知國跡明人倫而后資西土教忠孝爲本文武爲用學之與事不殊其效事

一國俗之所以厚平義者何以稟天之純氣也 皇統連綿所以冠宇宙者蓋以之也然其氣無以養之則饑須學以擴 神州固有

之正氣事

一藩內之士庶夙夜匪懈從事斯學出入此館修德行講道藝可以報神州無窮之恩事

右三章學者可眷々服膺焉矣

明治三庚午夏五月

從五位守泉藩知事藤原朝臣忠伸

職名及俸祿 創立ヨリ維新後明治三年マテ變更ナシ依テ同年前後ヲ分テ之ヲ左ニ擧ク

明治三年前 職名、學頭頭取助教世話役定員ナシ○俸祿、學頭 不詳 頭取 金一ヶ月一ヶ月 助教 金一ヶ月一ヶ月 世話役 不詳 ○職務、學頭助教ハ漢

學兵學^{武術ニ}ヲ掌リ頭取ハ武術世話役ハ筆道算法習禮ヲ教授ス

明治三年後 職名、總裁^{參事}督學^{兼之}教授助教舍長定員ナシ○俸祿、總裁^{別ニ俸}給^{ナシ}督學^{月五石}助教^{月三石}舍長^{月六斗}○職

務、督學以下皆文學ニ從事ス但武術ハ此時ヨリ漸ク衰ヘ別ニ職務ヲ改メス姑ク舊ニ依ル

職員概數 明治三年前 學頭一人頭取三人助教五人世話役三人校僕一人都合十三人○明治三年後 總裁一人督學一人教

ナシ 生徒學習年限ニ期定ナシ九歲十歲頃ヨリ十五六歲マテトス但此年間ハ重ニ文學ニアリ武術ハ尙數年間修業ス
明治二年改革前ハ即四書五經ヲ了レハ以後ハ大抵武術ヲ專修ス

試驗法 試驗ハ毎年春秋二期之ヲ行フ其法ハ御好ト極メトノ二種ニ分チ其力ニ應シ素讀又ハ講義ヲナシシム御好トハ
該期中學習シタル内一種ノ書籍假令ハ論語又ハ孟子十八史略等ノ全部ニ就キ監督者ニ於テ其場所ヲ撰ミ之ヲ講義セ
シム極メトハ該期中ニ學習シタル書籍中ニ就キ豫テ或ル一ヶ所ヲ定メ熟讀セシメ置キ之ヲ素讀セシム但明治二年改
正前ノ法亦是ニ同シ只年一回施行シタル所ノ異ナルノミ

諸則 試驗ハ教師之ヲ行ヒ郡奉行監督ス但明治二年後ハ監督之ヲ監督ス 試驗ニテ學力優等ナル者ニハ等差ヲ設ケ筆
墨紙等ヲ賞與ス 每年末ニ至リ其年中百席以上出校ノ生徒ヲ調ヘ其出席日數ニ應シ等差ヲ設ケ金壹朱又ハ筆墨紙等
ヲ賞與ス 生徒入學ノ節ハ父兄ノ内同道羽織袴着用ニテ出館世話方ニ申込ミ後各師家ヲ回禮ス又試驗ニテ賞與ヲ受
ケタルモ同シク師家ヲ回禮ス生徒入學ハ大抵稽古始トス 稽古始メニ儀式アリ祭儀ノ部ニ記載ス 休日ハ年末二
十日ヨリ翌正月十五日マテ及五節旬祭日盆三日トス但正月稽古始ハ二日ニ之ヲ行フ

職名及俸祿 本項ハ維新前後ヲ分チ調査スヘキ條項ナレバ明治二年マテ維新前ニ同シク此年ノ改正ニ異ナリタルヲ以テ
此年前後ヲ區分左ニ掲ク

明治二年改正前 職名、素讀世話方定員ナシ○俸祿、身分取扱等ナシ但年二回慰勞トシテ銀三兩貳兩壹兩位ヲ盆暮ニ與
フノ例アリ○職務、生徒教養及諸事ヲ調理ス但經費ニ關スル事ハ都テ之ヲ藩會計役ニ讓ル

明治二年改正後 職名、監督教頭大小助教皆定員ナシ○俸給、監督少參事之ヲ兼ヌ故教頭拾圓大助教不詳小助教三圓但身分取
扱等ナシ○職務、監督ハ本館ノ事ヲ總理シ教頭ハ教育ヲ掌リ大小助教ハ之ヲ助ケ兼テ雜務ヲ調理ス但經費ニ係ル事
ハ藩會計役ニ讓リ之ニ關セス

職員概數 本項モ前項ニ全シ故ニ明治二年ヲ以テ之ヲ分チ左ニ掲ク

明治二年改正前 世話方三人○明治二年改正後 監督一人教頭一人大助教一人小助教二人校僕一人
生徒概數 本項モ前項ニ全シ故ニ明治二年前後ヲ分チ之ヲ左ニ掲ク

明治二年改正前 定員ナシ現在二十人皆通學生ニシテ學資ハ都テ自辨トス○明治二年改正後 定員ナシ現在寄宿生拾
五人通學生二十人許通學生ハ皆自費ヲ學資トシ寄宿生ニハ毎月一人ニ五拾錢ツ、給ス其不足ハ自辨スルモノトス
束脩謝儀 更ニナシ

學校

校名 致道館

校舍所在地 磐前郡下湯長谷村舊湯長谷藩郭内字廣小路

沿革要略 天保十四年之ヲ創立ス藩士右色某創立ノ事ニ盡ス當時ノ藩主内藤因幡守藤原政民文武ノ學ニ篤ク本館ニ於テ自ラ居合術ノ教師タリ而ノ明治二年七月改革シテ大ニ文學ヲ擴張セリ藩士三好五郎命ヲ受ケ力ヲ其事ニ盡セリ此改革前ハ概シテ武ニ偏シ改革後ハ敢テ武ヲ廢サ、リシモ自然文ニ偏セリ明治三年舊泉及平ノ二藩學校ト申合官許ヲ得テ毎月一回左傳ノ輪講會ヲ開ク明治四年藩ト共ニ廢館ス

教則

教科用書 四書五經十八史畧蒙求春秋左氏傳莊子文選小學劉向說苑國史畧百人一首但明治二年改革前ハ大概四書五經

ニ止マレリ

授業ノ方法 四書ノ句讀ヲ授ケ素讀ニ慣レシメ五經以後ハ自讀セシムルモノトス又五經ノ素讀稍了ル比ヨリ孟子小學蒙求等ノ講義ヲ授ケ漸次生徒ヲシテ孟子十八史畧左傳等ノ講義ヲナサシメ其是非ヲ更正ス句讀ハ日々授クルノ前ニ於テ前日讀ミタルヲ復サシメ其自讀者ハ適宜數葉ヲ通讀セシメ其誤ヲ訂シ語句ノ解釋ヲ示ス武學ハ姑ク之ヲ畧ス以下皆然リ但明治二年改革前ハ四書五經ノ句讀ヲ授ケ素讀稍熟スレハ孟子ノ講義ヲ授クル等ニ止マレリ故ニ授業ノ順序モ此外ニナシ

授業ノ順序 先ツ四書ニ始マリ五經ニ入ルノ順アリト雖モ以後順序正シカラス其終リノ如キハ定例ナシ四書五經ノ素讀了レハ生徒ノ力ニ應シ孟子小學等ノ講義ヲ授ケ兼テ生徒ニ孟子十八史畧等ノ講義ヲ始メシム了テ左傳ニ入ルヲ例トス

授業ノ時間 朝五ツ時ヨリ夕七ツマテトシ初メ復讀ヲ聽キ句讀ヲ授ケ又自讀ヲ聽キ了テ講義ノ時間トス午後ハ各自適宜勤學ノ時間トス但明治二年改革前ハ素讀ハ朝飯前トシ講義ハ其后四ツ頃マテ其他ハ概シテ武術ニ用フ

學科學規試驗法及諸則

學科 漢學和學劍槍砲術柔術居合術

學規 文武兩道必ス兼修セシムルノ制ナシ各自ノ適意ニ任セ一方ヲ專修セシメ或ハ雙方ヲ兼修セシム文武兩道ノ程度

學校

校名 日新館 甫メ稽古堂ト稱シ元錄三年四月町講所ト改稱シ天明八年二月ニ至リ當時ノ名ニ改ム
校舍所在地 寛文ノ始メ若松後ノ分町ニ在リ延寶六年本一ノ丁ニ移シ元錄元年十二月北郭門外甲賀町口ニ移シ天明八年
二月郭内退手前大町通ニ移ス

沿革要略 寛永二十年肥後守正之封ニ會津ニ就クヤ始テ文教ヲ布ク此ニ於テ當時ノ碩儒山崎敬義ヲ聘シテ師トシ專ラ程
朱ノ學ヲ崇信シ又吉川惟足ヲ延テト部家宗傳ノ神道ヲ學テ奧秘ヲ得タリ是ヲ以テ士庶靡然トシテ學ニ向フ寛文ノ始メ
儒臣横田三友僧如默ヲ舉ケテ師トナス隨テ老臣田中正玄ヲ始メトシテ士庶ノ別ナク入學ス延寶六年筑前守正經遺志ヲ
繼テ講所ヲ改造シ元錄年中肥後守正容屢學料ヲ給シ享和年中ニ至リテ
三千餘名ニ至ル又山崎敬義嘗テ贈ル所ノ孔聖ノ像ヲ講所ニ安置シ聖
廟ヲ造ル天明八年二月肥後守松平容頌大ニ土工ヲ起シ蠻舎ヲ改作シ老臣田中玄宰ヲシテ之ヲ掌ラシメ是ニ至テ文武ノ
教師數十名ヲ命シ尋テ六科糾則之令ヲ下シ常ニ諸生ニ示シテ勸戒ヲ加フレヒ猶孝悌忠信ノ風ヲ厚カラシメンカ爲メ享
和三年家臣ニ命シ朱文公ノ小學ニ倣ヒ日新館童子訓ヲ著シ之ヲ諸臣ノ子弟ニ頒ツ是ヨリ前荻生徂徠一家ノ學ヲ唱ヘシ
ヨリ天下風ヲナシ往々之ニ歸スルモノアリ容頌之ヲ憂ヒ肥後ノ處士古屋十次郎ヲ延テ自ラ之ヲ師トシ又藩士安部井辨
之助高津平藏牧原只次郎松本來藏等ヲ撰拔シテ學資ヲ給シ江戸昌平館ニ入リテ古賀彌助及林大學頭ニ就テ學ヲ受ケシ
ム後各其業ヲ成シ一藩復ヒ程朱ノ學ニ純ナリ武技ニ至リテハ實藏院流槍術師範志賀與三兵衛其子小太郎ニ命シ門生ヲ
率テ天下ニ遊學セシメ大ニ其技術開進シテ小太郎ノ名聲一時ニ轟キ長門侯肥前侯各其藩士ヲシテ就テ學ハシムルニ
至ル爾後各藩士來リ學フ者枚舉スヘカラス

教則 朝五ツ半時ヨリ四ツ時迄讀書四ツ時ヨリ九ツ時迄習字九ツ時ヨリ九ツ半時迄休息九ツ半時ヨリ八ツ半時迄武術稽古
ヲナスト雖幼少ニ至リテハ讀書習字ヲ學フ武藝ハ朝五ツ半時ニ始リ八ツ半時ニ終ル故ニ九ツ半時ヨリ後テ幼少ノ外ニ
三ハ各自隨意ニ任ス教科用書ニ至リテハ各學科ニ於テ示ス

學科學規試驗法及諸則

和學 二條家詠歌ノミヲ主トス○皇學 每日午後會

初等講讀書 令義解 律疏義 三代格 延喜式○乙等全 六國史○甲等全 文章、歌
得業生

學校經費 更ニ不詳

藩主臨校 毎年一回乃至二回試験ノ節臨席其試験ヲ監視スルヲ例トシ必ス臨館セリ但維新前ハ在邑在府ノ年アリ故ニ隔年一回在邑ノキ臨館ス

祭儀 毎年正月二日ヲ稽古始トシ

實際開業ハ同月十六日トス

孔子ヲ祭ル當日ハ孔子ノ畫像ヲ床頭ニ掲ケ神饌ヲ供フ藩主臨席諸役人并ニ

藩士禮服着用ニテ出館

藩士ハ悉ク出校セサリシ

生徒亦然リ一統誥切リタル上ニテ小助教神前ニ進ミ迎神詞ヲ讀ミ次ニ大助教全シク

前テ祝詞ヲ朗讀シ了テ藩主ヲ首トシ諸役人藩士順次一名ツ、脱劍拜禮シ神酒ヲ賜リ後生徒一同拜禮了テ小助教送神詞ヲ讀ミ上ケ神饌ヲ撤ス

學校構造及建物圖面 通常ノ木造平屋ニシテ明治二年前後ニ依リ改正アリ故ニ建物圖面別紙ニ葉ヲ添フ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書ノ種類部數 出板翻刻ノ書籍ナシ藏書ノ種類部數左ノ如シ(別ニ掲ク)

舊會津藩

學制

學事上ノ諸制度 日新館取調ニ屬ス

一藩舉テ藩校ニ十歲入ラサル可カラサルノ制度ニシテ學業上進シ數年無欠席ノ者ニハ賞賜シ且ツ家督相續節定ノ格ニ

至ラサレハ小普請料ヲ徵收スル一般皆然リ加フルニ(知行五十石以上然レハ幾十石ト雖モ知行ノ名ヲ附サ、ルモノア

リ)ヲ除クノ外ハ相續ノ際扶持ヲ減ス然レハ講釋所生ニ昇リ武術數藝ノ免許ヲ得ル者ハ小普請料ヲ免恕スルノミナラ

ス扶持高ヲ減スルヲナシ故大ニ名譽トスル所ニシテ若シ此ニ至ラサレハ一般自己ノ耻辱トスルノ風習アリ

士族卒ノ子弟教育方法 士族ハ必ス藩立學校ニ入學セシメ文武ノ藝ヲ修メシム其他教師ヲ自宅ニ聘シ晝夜勤學シ定メノ

年齡 四等十二歲ニ等十
四歲一十六歲

ニ至ラスシテ必及第センコトヲ勉メ莫ハ何歳ニシテ何等ヲ及第ト互ニ競争ノ心アリテ自ラ教師ノ宅ヲ

訪フハ勿論ナリ文武ノ藝ニ秀テタルモノハ藩費ヲ給シ他國

多ク江戸
今東京

ニ出テ諸名家ニ就テ和漢洋ノ學ヲ修メシメシヲ以テ

私費遊學ヲ許スハ論ヲ待タス卒以下ハ各自ノ意向ニ任セ強テ修學ヲ禁スルノ制ナシ

平民ノ子弟教育方法 藩立校ニ入ルヲ禁スレハ家塾寺子屋ニテ修業スルハ敢テ禁スルコトナク學業進歩スルモノハ市中ハ

町奉行在ハ郡奉行手元ニ於テ日新館同様ノ試學ヲ執行シ及第ノ者ニ賞與スルコト藩士ト同等ナリ

家塾寺子屋設置ノ制度 誰人ヲ論セス開設シ敢テ檢束ヲ受クル等ノ事ナシ

下等 試學 經史各一枚計詩絕句一首文章復文一章ヲ試ミ讀法三失ヲ恕シ講義二分ノ一ヲ恕シ詩ハ韻ハ勿論平仄ノ誤リヲ許サス文章布字ノ誤ニケヲ恕シ合格ノ者ハ中等ニ進ム中等試學モ亦同シ○中等 試學 經史各一枚計詩律一首文章一題○上等

大學生ニシテ弓馬槍刀ノ免許ヲ得ル者ニハ眞綿三把右ノ外兵學出師ニ至ル者ハ眞綿五把ヲ賞與ス又什長ニテ勤功アルモノ或ハ文武ノ學ニ拙テ出精ノ者ニハ禮式方ニ於テ酒饌ヲ賜フ

洋學○醫學 (漢洋法)○算法○筆道 東尊圓流、瀧本流、唐樣

毎日四ツ時ヨリ九ツ時迄トス

在學十二歳ヨリ十八歳迄トス然レモ定ノ格ニ至ラサルモノハ退學ヲ許サス大學校ニ 講釋所生 昇ル者ハ等級年齡ニ拘ラス

勝手ヲ許ス等級四等三等三等優等二等二等優等 諸士定ノ格

一等等上 右春秋試學法等各一ナラス十四歳以下ニシテ一等ニ至ル者ハ學校奉行更ニ試ム其法消息文、堅書、楷畧

合格之者ハ賞スルニ硯一面ヲ以テス其次序讀書賞ニ異ナラス

每月會日 清書六會 夕會三會 席書一會 二等優等以上二流ツ、禮式方ニ會シ大字等ヲ淨書シ學校奉行目附臨席

ス

禮式 小笠原流 諸士定ノ格三等 一塾生毎月二會 十二歳ヨリ入門定ノ格ニ至ル者ハ退學ヲ許ス等級諸禮初等ヨリ順次

九等ニ至ル

兵學 長沼流兵學 館中唯リ學校奉行ニ屬隸セス 軍事奉行一人 役附五六人

教科用書 兵要錄、練心膽ノ篇ヲ返講ス(三百石以下定ノ格)十三篇ヲ返講ス(三百石以上定ノ格)○出師戰格 築城

法、山神流、土圖

弓術 日置流、道雪派、豐秀流 等位 初傳或初心、許、印可 遠矢ト稱シ西郊追回ハシ或河沼郡大野原練場ニ於テ

年々弓力ヲ試ム

馬術 官廐本二ノ丁南側東ハ大町通ヨリ一丁程下ヨリ西桂林寺町通ニ達スル地ニ在リ隔二日ニ官馬數十疋ヲ牽出シ

テ學習セシム 大坪古流、大坪新流 等位 初心、書傳、許○木馬所 日新館中ニ在リ各流毎月四會○櫻ケ馬場北

追手前本一ノ丁ニ在リ 家中ノ諸士手馬乘責場師範役附ヲ設ク○打毬 春秋時ヲ以テ行フ

槍術 大內流 二間柄直槍或万字 等位 初心、一番仕合、陰、許、印可○寶藏院流 九尺柄十文字槍入身又二間柄管

漢學 十歳ヨリ入門長男ハ二十五歳迄然レモ文武定ノ格ニ至ラサル者ハ退校ヲ許サス二男以下ハ二十一歳迄トス若シ

讀書々學定メノ格ニ至ラス武藝弓馬槍刀砲術中一術ノ免許ヲ得サル者ハ退校ヲ許サス又讀書々學定メノ格ニ至リ且ツ弓馬槍刀ノ免許ヲ得ル者ハ年齡ニ拘ハラス勝手ヲ許ス長男ニシテ奉職ノ者モ子弟ニ異ナルヲナシ

等級四等ヨリ一
等ニ至ル 四等（始メテ學ニ就クモノ） 教科用書 孝經、四書、小學、五經 右一冊ツ、本文ヲ讀ミ了ル毎ニ各

教員一二枚ヲ試ミ大概ヲ讀得ル者ハ次冊ニ進ム順次終ルキハ等ヲ進ム十二歳以下ニシテ進等スル者ハ學校奉行詰所

ニ召シ目附之ヲ監シ儒者之カ業ヲ試ル左ノ如シ 孝經、小學各一ヶ所四書、五經内三ヶ所 右各一枚計リヲ讀マシメ

二失以下ヲ恕シ合格之者ハ執政中ニ聞達ス後父兄同道ニテ政廳ニ召シ執政藩主ノ意ヲ傳テ賞スルニ四書集註一部ヲ

以テス〇三等（三百石以内定ノ格） 教科用書 四書朱註共、 小學本文、 春秋左氏傳本文、 每年春秋仲日ヲ以テ以下各書一枚

計リヲ讀マシメ三失以下ヲ恕シテ及第セシム素讀所勤之ヲ掌リ儒者目附等之ニ臨ム〇二等（三百石以上長子定ノ格）

教科用書 四書朱註共、 小學朱註共、 十八史略、蒙求本文、 右各一枚計リヲ讀マシメ其内四五行ヲ講義セシメ素讀ハ三

失以下ヲ恕シ講義ハ三分一ヲ恕シ合格之者ハ及第セシム十四歳以下ノ者ハ更ニ四等ニ等シク試ミテ及第合格ノ者ハ

小學近思錄各一部ヲ賞賜ス〇一等 教科用書 四書、禮記、近思錄、二程治教錄、史記、漢書、後漢書ヲ講讀ス 内試學

（時刻春ハ一小時一時半以下全シ） 四書ノ内一個所禮記近思錄二程治教錄ノ内一ヶ所史記前後漢書ノ内一ヶ所何レモ唐

本ニテ各一枚計リヲ讀マシメ五失以下ヲ恕シ講義ハ經書一ヶ所ヲ恕シ歴史ハ失ヲ許サス合格ノ者ハ更ニ本試ヲ行フ

本試學 試場大學校上ノ間素讀所勤同道ニテ儒者更ニ試ルモノ内試學ニ異ナラス此両試ヲ遂ル者ハ大學校ニ進ム

十六歳以下ノ者本試ノ節學校奉行日附試場ニ臨ミ合格ノ者ハ四等ニ全シク詩經集註易經本義各一部ヲ賞賜ス

毎月諸會日 儒者講釋一會 二程治教錄小學〇質問一會 儒者塾ニ臨ム一等生經史ノ義ヲ質ス〇童子訓日一會 二日

授讀廿二日素讀所勤メ之ヲ講シ聽聞セシム〇輪講一會 禮式方ヲ會場トシ二塾ノ一等生ヲ集メ各經義ヲ講セシメ儒

者之ヲ正ス〇復シ會 六々ノ日夕會復讀セシム

至善堂大學校又講
釋所ト稱ス 此堂ニ昇ル者ハ武藝弓馬槍刀ノ中二術ノ修業ヲ望ニ任セ其他ハ勝手ヲ許ス而後若シ道德上不行跡ノ

ルモノハ直チニ塾ニ擯ケラル然レモ歲月中悔悟著キ者ハ試學ヲ經スシテ再昇セシム内本試共無失秀業ノ者ハ擢昇ス

在學年齡ハ塾生ニ異ナラス唯他藝ノ免許有無ノ係リナシ列席ハ年齡順タリト雖在勤奉職ノ者ハ拘ハラス上席獨禮以

下ハ拘ハラス下席トス儒者席上進退ノ節ハ在席首座ノ者送迎ス等位ハ下等中等上等ノ別アリ

儒者講釋二會（四書） 輪講一會（四書） 詩作一會午後 文章一會午後

居合拔刀術 林崎流、無樂流、變喰流 等位 初心、陰、仲位、老功、戸入、許、印可 道場ハ館外ニ在リ毎月會日ヲ定メ

午前槍刀場ニ出テ稽古ス

薙刀 靜流、穴澤流

右武藝ニ長シ免許ヲ與フルルハ學校奉行目附臨壇ス十七歳以下ニシテ免許ヲ得ル者ニハ賞アリ藝術ニ由リテ賞品一ナラスト雖モ鎧槍穗等ノ類ヲ以テス

始メテ入門スルルハ禮服著用什長同道ニテ學校奉行ヲ始メ副役儒者師範ノ宅ヲ回禮シ武藝ニ至リテハ平服ニテ自ラ師範ノ宅ニ至リ禮ヲ述フルノミ然レモ入門ノ際師範ノ面前ニ於テ親ラ氏名ヲ簿冊ニ記載シ血判シ二心ナキヲ誓フ之ヲ誓文ト稱ス

雅樂 毎月會日ヲ設ケ大學校ニテ音樂ヲ調奏ス

散樂 毎年春暖ノ候館中廣原芝生ニ舞臺ヲ設ケ謠曲ヲナシ衆生ヲシテ偕樂セシム

職名及ヒ俸祿 司成學校奉行一人 右五百石以上敷居内ト稱シ藩主同座ノ取扱副役ト稱ス二人 右三百石以上諸役所奉行

ト同席ノ取扱司成ト稱ス監察目附ト稱ス二人 外ニ文武ニ長シタル長子中雇勤アリ 右身分取扱副ニ全シ學科役人ト稱ス七八人

右ハ士分以下ノ取扱ナレモ歩卒ヨリハ擧ケス附人ト稱シ歩卒中ヨリ擧ク普請方四五人 士分以下ノ取扱使走者ト稱ス七八人小厮ト稱シ農

民ヨリ擧ケ夫役ヲ免ス夫丸ト稱ス五人右全斷十八計

職員概數 司業儒者或ハ見習ト稱ス三四人 右ハ講釋所生ニ教授ス素續所勤ト稱ス八人補助勤ト稱ス八人 塾生教授ヲ掌

ル〇仕長五十人餘〇師範一人〇締方三人 習字教授ヲ掌ル外ニ仕長十八〇師範五人 締方五人 右神道皇學禮式天文算數ヲ分擔教授ス〇師範一人或ハ補勤アリ 締方二人外ニ專修行役附ヲ兼ヌ 右武學寮ニ在勤ス

生徒概數 文武諸士總テ大略千人ニ降ラス皆通學生ニシテ間々他邦ヨリ來リテ館内寄宿舍ニ在リ自炊シテ文武ノ業ヲ修ム是レ皆自費ニシテ藩費ヲ給スルヲナシ

束脩謝儀 毎年正月十五日大學生及四塾生悉ク禮服ニテ上校大成殿堂中ニ列坐北面シ學校奉行室前ニ進ミ南面シテ賀辭ヲ述ヘ終リ儒者起テ同所ニ坐シ朱文公ノ白鹿洞書院揭示ヲ講ス諸武學寮ニテハ午後ヨリ神酒ヲ供シ先師ヲ拜シ流格表

ヲ遣ヒ會始ノ式ヲ終ル而シテ十二月十五日會始ト全シク大成殿ニ列坐學校奉行出テ、告ルニ藩主ヨリ師範ニ束脩料ヲ賜ハルカ故ニ謝儀ヲ述ヘキヲ以テス次ニ諸師範室前ニ列スルル生徒一同年中ノ恩ヲ謝ス束脩料等差一ナラス此ニ至テ會納ノ式全ク畢ル

直槍突身 等位 初心、仕掛、目錄、許、印可○一旨流 二間柄管直槍一文字十文字又薙刀入身 等位 初心、仲位、老功、許、印可

劍術 二尺三寸刀
以下諸流同

一刀流 等位 切紙、外物、目錄、印行、手形○真天流 等位 初心、一番仕合、陰、許、印可○太子流

等位 初心、仲位、老功、許、印可○安光流 等位 初心、仲位、老功、許、印可○精武流 等位 初心、寄合、切紙

下、切紙、目錄、印可 野仕合每年春氣暖和ノ候ヲ以テ城西材木町西郊鴨河原ニ假小屋ヲ建幕ヲ打チ槍刀ノ諸流

出テ、芝生ノ曠原ニ仕合ヲナシ四民ノ縦覽ヲ許ス看者群ヲナス又大仕合寄仕合等アリ大仕合ハ一流中凡ソ百數

十人ヲ東西二手ニ分チ各赤白符等ヲ以テ分表シ呐喊相進ミ縦横入亂レカヲ盡シテ奮撃格闘ス寄仕合ハ初心ノ幼

生數十人ヲ列テ一方四五人ニテ寄亂撃セシム此兩仕合共ニ金鼓角ヲ鳴ラシテ合圖ヲ整齊シ進退度アリ動止亂レ

ス頗ル奇觀ナリ此日衆相露坐シテ酒ヲ酌ミ終日歡呼痛飲ヲ常トス 掛リ仕合槍刀ノ藝等位ヲ進ムル前ニ方テ甲

乙生ヲシテ數日或ハ數十日間試撃セシム時ニ甲乙相仇視シテ激烈奮撃平素稽古ノ類ニアラス 數遣ト稱シ生徒

ノ望ニ隨テ一晝夜或ハ終日連日等大稽古數遣ヲナサシム

炮術

夢想流、自由齋流、荻野流、永田流 右火繩銃十匁玉以下 種子ヶ島流、智徹流、稻留流 右火繩銃小玉ヨリ五

十匁百匁三百匁ニ至ルマテヲ抱打ス 高島流 右西洋法管打 右各流等 初心、許、印可トス

許試打ハ八寸角ニ二三匁玉ハ九分十匁玉ハ八分以上ノ中リヲ合格トス 銃鑊丁打 城ノ巽位御山山麓ニ打付場

アリ毎年春秋諸流出テ、二丁五反或ハ五丁ノ距離ニ角的ヲ狙撃ス又船打アリ猪苗代湖ニ船ヲ泛ヘテ發射シ兼テ

櫓手ヲ習ハシム

柔術

精武流、水野新當流、神妙流、荒木當流 右何レモ等位左ノ如シ 初心、仲位、老功、許、印可

游泳

向井流 暑氣ノ候郊外ノ深淵ヲ探テ人馬游泳ヲナス

神道

ト部家 毎日午前會 教科用書 中臣稜、神代卷 參考書 古事記、舊事記

等位(聽聞者) 講習免許 二書ヲ返講シ大要ヲ得ルモノヲ昇進ス 講談免許 二書ノ義較密ニ至ルヒ進メテ傳

事書ヲ許ス 一事傳 二事傳 三事傳 四重奧秘○仰德會 毎月十八日酒饌ヲ供シ歌ヲ上リテ見禰山土津神社

ヲ遙拜ス○竟宴式 毎年暮春神格殿中ニ天神地祇ニ酒饌ヲ供シ神事ヲ執行シ祝歌ヲ奏ス此日學校奉行目附此ニ

臨ム式竟テ神供ヲ徹ス後宴開

垂加派神道 大同小異 毎月四九ノ日會日

文武師範居宅 二ヶ所アリ一ハ東門ヨリ南表長屋ナリ東西三間南北三十七間一ハ武學寮ニ續キ東塾ノ東南ニ在リ東西十四間南北三間

武學寮 三ヶ所ニ在一ハ南門ノ東ヨリ文武師範ノ長屋ニ續ク東西十六間南北三間一刀流真天流ノ劔術寮ナリ一ハ南門ノ西ヨリ武講ノ西南ヲ經リ射弓亭ノ前ニ至ル梁間三間半棟間八十四間大内流一言流寶藏院流ノ槍術安光流太子流ノ劔術山神流築城法學科役所普請方ナリ一ハ射弓亭ノ南ニ在リ東西十間南北三間精武流ノ劔術及ヒ本馬ヲ習フ所ナリ一流毎ニ隔障シテ相通スルヲ許サス

射弓亭 北門ノ西ニ在リ東西二十七間南北二間半道雪流日置流豐秀流ノ羽拔ヲ肄フ所トス各十二間ノ的場アリテ每一流場ヲ異ニス

砲術場 觀象臺ノ南ニアリ南北梁間三間東西棟間十間八流ニテ會日ヲ分ツ十五間ノ角場アリ

洋學所 砲術場ノ南ニ在リ東西梁間三間南北棟間八間ナリ

武講 西塾ノ西ニ在リ東西九間南北四間軍事奉行ノ司ル所常ニ會日ヲ定メ士大將及物頭等武役ノ者ヲ始メ子弟共ニ兵書ヲ講習スル所ナリ

泮水 大學ノ前ヨリ泮宮ノ南ヲ廻リ西塾醫學寮ノ前ニ至ル廣二間長一丁二間左右ノ涯ハ本郡笹山村ヨリ産スル材木石ナリ石橋三ヶ所一ハ戟門ノ北ニテ泮西南ノ橋ナリ一ハ東塾ノ西ニ在リ一ハ西塾ノ東ニ在リ共ニ泮水ニ架ス長三間幅

三間泮宮西南ノ橋ヨリ左右ニ分レ堂途アリテ東西二階ノ下ニ至ル各長二十間幅一間半敷石ナリ

渡殿 泮宮ノ東西ニ在リ東ハ長三間半餘幅壹間大學ニ通ス西長三間幅壹間禮式ニ通ス共ニ勾欄アリ

觀象臺 境內西北隅ニ在基趾方十二間餘臺上方五間半高三間半天文稽古ノ爲メニ設

池 武講ノ西ヨリ北ニ線レリ周圍八十五間樋ヲ地中ニ伏セ泮水ヲ引テ此ニ湛フ水馬及水練ノ業ヲ習ハシムル所ナリ

學校ニテ出版書籍及藏書 藏書ハ和漢洋ノ書總テ大凡三千部其內和漢ノ書籍最モ多ク一モ備ハラサルモノナシ出版ノ書

目左ニ掲ク

孝經刊誤、四書集註、小學、四書輯疏、近思錄無點本、近思錄輯疏、二程治教錄、三子傳心錄、玉山講義附錄、保養篇、童子訓、

本朝二十四孝、和漢年代歌

○

校名 南學館 元錄年中友善社ト稱ス 北學館 元錄年中青藍社ト稱ス

學校經費 藩主ヨリ寄附スル所ノ米凡ソ五千石ヲ以テ一周年ノ經費ニ充テ別ニ藩士ニ賦課スル等ノナシ

藩主臨校 時ヲ以テ文武寮ニ臨ミ或ハ城内ニ召シ諸藝ヲ演技セシム講釋所生ハ抽籤ヲ以テ進講ス又老職大學校ニ臨ミ經義ヲ講シ詩文ヲ作り理論ヲ題シテ對策セシム總テ忌諱ヲ憚ラス時事ヲ切論セシム武學寮ニ臨ミテハ他流仕合等ヲナサシム

祭儀 毎年春秋仲月上丁ノ日ヲ以テ釋奠ス此日老職藩主ノ代拜ヲナシ司成以下順次禮拜諸生ハ勝手ニ參拜セシム祭式畢テ酒饌ヲ徹シ膳ヲ割テ開宴ス

學校構造及建物圖面 城西々追手ノ前ニ在リ東西二丁南北一丁ニシテ南方ヲ正面トス

正面向門 東西二間壹尺南北壹間四尺餘額ニ過化存神ノ四字ヲ題ス阿部主計頭正精ノ筆ナリ此門ヲ入テ戟門メテ幅二間長サ七間皆敷石ナリ西ニ番所ヲ設ケ東ニ腰掛ケアリ外構西南北ニ堀ヲ廻ラス東ハ長屋ナリ

戟門 東西七間半南北三間額ニ金聲玉振ノ四字ヲ題ス白川少將定信ノ筆ナリ左方ニ大鼓ヲ置キ時間ヲ報ス又左右ニ廊アリ東西ノ塾ニ接ス此門ヨリ石橋マテ幅二間長三間敷石ナリ

東門 東方大町通ニ出ル所ナリ額アリ日新館ト題ス堀田豊前守正毅ノ筆ナリ北方ニ番所アリ門ノ南ハ文武師ノ居宅ナリ

北門 北方米代一ノ丁ニ出ル門ナリ此ノ外ニ三ノ門アレバ常ニ鎖シテ往來ヲ禁ス

泮宮 高五丈八尺東西九間二尺壹寸南北八間二尺四寸南面ニテ前ニ東西二階アリ後ニ側階アリ皆五級段ナリ室堂戸牖ノ制皆唐十三代ノ典故ニ倣フ南面中央ニ額ヲ掲ケ大成殿ト題ス水戸中納言治保卿ノ筆ナリ室ノ奥ニ孔聖ノ像ヲ安シ顔子ノ像ヲ配祀ス

東塾 戟門ヲ入テ右ニ在リ東ヨリ北ニ折回シ大學ノ前ニ至ル梁間二間半棟間三十八間半内ノ方ニ庇アリテ二階造リナリ戟門ノ東ヲ三禮塾トシ其北ヲ毛詩塾トス二階ハ習字寮ナリ北端ヲ居學寮トシ居寮ノ生徒ニハ簾廬ヲ與フ

西塾 戟門ノ西ニ在リ北ニ繚リテ又東ニ折レ泮宮ノ西渡殿ニ接ス梁間二間半棟間五十二間半二階造ニテ内ノ方ニ庇ヲ設ケ戟門ノ西ヲ尙書塾其東ヲ二經塾トス二階ハ書學寮トス東廻折スル處ハ禮式及算數天文學ヲ習フ所トス此二階ハト部家垂加派ノ神道及皇學ヲ學フ所トス

大學校 泮宮ノ東ニ在リ東西十二間南北四間半又西端ヨリ北ニ繚レル所ヲ司成司業監察等ノ詰所トス
文庫 大學ノ北ニ在リ東西四間南北二間

マ
テ
○輪講會 七ノ日午後元ノ八ツ時ヨリ 諸衆一同出席ス

武藝所日割 林崎流劔術 一日十日廿三日朝元ノ五ツ時ヨリ夕七ツ時マテ以下皆全シ ○影流居合 二日十一日廿四日○伊東流槍術 三日十二

日廿五日○一刀流劔術 四日十三日廿六日○小野派一刀流劔術 五日十四日廿七日○寶藏院流鎗術 六日十五日廿

八日○揚心流柔術、長刀 七日十六日廿九日 右各師範一人毎二日割ノ通生徒ヲ引率シ出席修業セシム出席役員ハ番

頭一人用人一人大目付一人

射の場日割 一ノ日三日五日七ノ日九ノ日朝元ノ五ツ時ヨリ夕七ツ時マテ 右弓術師範五名アリ一人毎二日ヲ異ニス各々生徒ヲ引

率シ出席修業セシム出席役員ハ番頭一人大目付一人

御城講釋 論孟 九ノ日朝四ツ時ヨリ九ツ時マテ 時ノ儒者輪番ニ之ヲ勤ム

右ハ藩主臨場アリテ聽聞シ又聽聞ヲ許ス者ハ城詰ノ役員一同而シテ未タ出席セサルモノ十五歳ヨ

リ二十歳マテ必ス出席聽聞セシム

以上各科出席ス可キ者ニシテ無斷欠席スルモノハ進退ヲ伺フノ成規ナリ其他敬學館武藝所等ニ文武ハ車ノ兩輪ノ如ク

ナレハ勵マサル可カラサルノ主意ヲ長文ニテ壁書シ置ケルヲ實際目撃シタル事アルモ戊辰ノ兵燹ノ爲メ烏有ニ屬スレ

ハ今茲ニ揚クル能ハス

士族卒ノ子弟教育方法 藩立各師範宅地内ニ在ル學校へハ藩士ノ子弟ハ必ス入學セシムルモノトス只卒ノ子弟ニ至リテ

ハ入學ヲ止ムルニ非ルモ就學スル者少ナリ先ツ卒ノ如キハ砲術ヲ以テ奉公スル者多ケレハ能ク砲術ヲ修業ス又藩士二

三男ニシテ師範家ノ儒者ニ就カス近隣ノ識者ニ隨ヒ修業スル者アルモ之ニ關セス 藩費ヲ以テ他國へ遊學スルヲ聽カ

ス私費ニテ遊學セント欲スルモノハ願ニ依テ許可ス

平民ノ子弟教育方法 寺子屋等ニテ修業スルノミ藩立宅地内ニ在ル各儒家ノ學校へ入學スルヲ敢テ拒ムニ非ルモ學問ハ

固ヨリ士分以上ノモノトシ修業スル者僅々タリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ設置スルニハ何レヨリモ許可ヲ受ケス何人タリモ勝手ニ開設スルヲ得舊藩内ニハ

家塾ヲ開キタルモノナシ寺子屋ハ先ツ藩ノ右筆其他書ヲ能クスルモノ町ノ撿斷村ノ名主等ナリ

學校

校名 敬學館 武藝所 射的場 手習所 外ニ藩立學校二十一校文學七校兵學一校 武術十三校 アルモ別ニ校名ヲ下サス只タ師範家ノ苗

右者獨禮士分 以下ノ子弟ノ學ヲ所ナリ然レモ步卒ハ入門ヲ許サス

校舍所在地 南學館ハ城南花畑町ニ在リ北學館ハ郭門外甲賀町口ニ在リ

劔術 眞天流南學館内ニ在リ 太子流北學館内ニ在リ

槍術 寶藏院流南北兩館内ニ在リ

右兩館共ニ日新館ニ隸シ修業法及武術等位等總テ日新館ニ異ナラス唯馬術稽古ヲ許サルノミ

舊二本松藩

學制

學事上ノ諸制度 舊藩主丹羽左京大夫長次布達ニ藩士ニシテ文武ノ兩道ヲ研究セサルモノハ相續人ト雖モ出番セシメサルノ制規アリ又假令相續人ニ非ルモ文武兩道ノ内何藝ニ限ラス一科ヲ上達スルニ於テハ特ニ拔擢シテ馬廻リニ召出シ三口米ヲ給與シ又非常ニ勉強スルモノハ一科ノ與義ヲ究ムル能ハサルモ賞譽ヲ授與シテ益々其藝術ヲ獎勵ス

藩立學校ハ他ノ藩々ト異ナリ各自師範家ノ宅地内ニ設置ス建物ハ悉皆藩費書籍器械ハ生徒ノ自費文化年中ニ至リ別ニ敬學館ヲ設ク其地内ニ武藝所手習所射的場ヲ置ケリ悉皆藩費本校ハ各自師範家ノ宅地内ニ設置スル處ノ學校生徒十分以上出席修業スル所ナリ校本

ハ今ノ試驗 敬學館ハ各儒家ノ生徒日割アリテ出場ス或ハ又日割アリテ衆生一同ニ出場スルヲアリ武藝所射的場ハ一ケ月三度ツ、師範一人毎ニ日ヲ異ニス尤モ武術ハ流義アリテ他見ヲ憚ルヲ以テ文學ト違ヒ日ヲ異ニセサルヲ得ス手習所ハ

月ニ三日ノ休業其他ハ毎日出席スルモノトス是ハ藩士ノ嫡子十歳ヨリ十二歳マテ三年ヲ學期トスニ三男ハ願ニ因テ許可ス學期若ニ同シ敬學館武藝所射的場ハ生徒出席日割并出席役員左ノ如シ

敬學館日割 復讀 一ノ日三ノ日四ノ日六ノ日八ノ日元ノ朝五ツ時ヨリ各師範壹人毎ニ日ヲ異ニス出役ハ世話役一人〇

講釋論孟 二七ノ日元ノ朝四ツ時ヨリ各儒家輪番ニ之ヲ勤ム該席へ出席スルモノ二ノ日ニハ二十歳以上三十歳マテ出番

セシモノ七ノ日ニハ十五歳以上ノ嫡子ニシテ出番前ノ者出席役員ハ家老一人郡代用人ノ内一人大目付一人世話役二人ナリ〇終日 十ノ日元ノ朝五ツ時ヨリ各儒家教授スル所ノ生徒一同ニ出席復習セシム出席役員ハ儒家一同世話役一同

同時宜ニ依リ家老番頭大目付出席スルヲアリ〇左傳輪講會 四九ノ日午後元ノ八時ヨリ各儒家教授スル所ノ生徒一同

ニ集會ス甲辯シ乙論ス其盛ナルハ本會ヲ以テ第一トナス出席役員ハ右ニ全シ〇詩文會 六ノ日午後元ノ八ツ時ヨリ

出席生徒右同斷役員出席モ亦右ニ全シ〇醫學會 三ノ日午後元ノ八時ヨリ藩醫一同出席ス〇針醫會 五ノ日午後元ノ八ツ時ヨリ

漢學、醫學、兵學 右學科ハ各師家ノ生徒定日アリテ敬學館へ出ルモノトス但日割ハ前ニ出スヲ以テ茲ニ揭ケス○筆道
右學科ハ手習所ニ出テ修業スルモノトス本校へ生徒始テ出ルヤ必ス手習冊紙六冊一冊ニ付大奉ニ筆墨ヲ添ヘテ下與セラル又一ヶ月六度ノ清書アリ其清書毎度延紙ヲ與フ校ノ餘計ヲ添テ與フ本校設立以來藩士ニ無筆ナシト云フ○弓術 右
學科ハ各師範生徒ヲ引率シ一ヶ月三度定日アリテ必ラス射的場ニ出テ修業スルモノトス但日割ハ前ニ出スヲ以テ茲ニ
揭ケス○馬術 右學科ハ舊郭内ノ中ニ馬場アリテ修業セシム但馬ハ藩費ニテ飼置キ貸馬ト唱へ藩士一同ヘ日ヲ定メテ
貸與スルモノトス右日割ハ一ヶ月一人五度位ニ當ルモノナリ尤モ日割ハ豫定シアルモ晴雨ノ都合ニ依リ伸フルコアリ
○鎗術、劔術、柔術 右學科ハ各師範生徒ヲ引率シ一ヶ月三度定日アリテ武藝所ニ出テ修業セシム但日割ハ前ニ出スヲ
以テ茲ニ揭ケス○砲術 右學科ハ人家稠密ノ場ヲ憚ルヲ以テ角打等ノ修業ハ師範家ノ裏山ニ設置シ修業スルモノトス
文學ト武術トノ程度ノ比例ハ文學ハ四書五經ヲ終リテ略義理ニ通スルヲ以テ武術ノ目錄免許以上ニ當ルモノトス藩
士相續人ニシテハ是非兩道ヲ兼修セサルヲ得ス左ナケレハ出番スル能ハサルノ制度アリ二男三男等ニ至リテハ一科ヲ
專修スル者多シ尤モ藩主ニ於テ一科ヲ專修スルコヲ藩士ヘ許可スルニハアラサルモ一科ヲ專修シ奧義ヲ究ムル者ハ馬
廻リニ召出シ直ニ三口米ヲ給與セラル、制度モ亦アレハナリ
又生徒學習ノ期限入學ノ年齡定期ナキモノ、如シト雖凡大概讀書ハ七八歲武術ハ十歲ヨリ二十歲メテヲ學習ノ期限ト
ス

〔春秋ノ試験〕 敬學館漢學試験ハ春秋兩度ナリ受験生ハ四書五經ヲ終リ略大義ニ通スルモノ、ミ出場セリ科目ハ講
義四書五經
左傳詩文紀事和解等ナリ優等ノ生徒ヘハ夫々賞與アリテ物品文房具下與セラル但元ハ試驗中賄モ出セシ由ナルカ
後チ之ヲ止ムト云フ 弓馬ノ試ミト唱へ是又春秋兩度アリ郊外竹ノ内ト稱スル場所是ハ舊藩主ノ別荘ニテ馬場アリ射的ニ於テ舊藩ノ番頭八組アリシカ一組ツ、定日アリテ試ムルモノトス此時出席ノ役員ハ左ノ如シ家老番頭郡代用人大目付
弓馬ノ師範

右ノ外別ニ弓砲ノ見分ト唱へ是又春秋兩度アリ弓術ハ城下射的場ニ於テ番頭組子一番組ヨリハ番組マテ射的ヲ見分セリ矢數ハ四本
ヲ以テ限リトス一組ツ、順次ニ之ヲ試ム砲術ハ郭内ニ角場アリテ士分ハ番頭卒ハ物頭ニテ見分ス小銃ハ四發大砲ハ二
發限リトス但出席役員ハ大目付ニ於テ立合モノトス
以上弓砲ノ見分組分ケノ節出勤前ノ者ハ父兄ノ組頭ニ就テ出場ス

〔兵學ノ試業〕 右訓練ヲ試業セシ場所ハ則郊外竹ノ内ナリ元ハ山鹿流ヲ修業セシカ安政年間ヨリ一藩洋式ニ改革セリ

字或ハ流儀ノ名假令ハ小野派ノ一刀流ノ類ヲ以テ名稱トナス

校舍所在地 敬學館武藝所射の場ハ元ノ城下今ノ二本松町字霞ニ在リ他ノ二十一校モ皆元ノ郭内ニ在リ

沿革要略 抑モ學校創立ノ年代ハ元祿年中丹羽左京大夫長次文武ヲ尊崇シ始テ儒者古宮山休庵ヲ聘シ士族一同ニ講釋ヲ

聽聞セシム若シ其布令ニ違背スル者ハ之ヲ罰ニ處スト其後追々師範ヲ招待シ寛延年中左京大夫高寛代ニ至リ一層文學

ヲ振起セント時ニ元江戸ニテ名高キ儒家岩井田舍人昨非ト號スヲ聘シ專ハラ藩士ニ學事ヲ獎勵セシム茲ニ至テ士族一同始

メテ學事ノ何物タルヲ知得スト云フ其子左京大夫高庸父ノ遺志ヲ繼ギ倍文武ヲ勵マサント城内ニ於テ講釋ヲ開會スル

ヲ命シタリ而又藝苑嘉善ト題セル一冊ヲ調製シ文武ノ内何藝ニ限ラス一科ヲ上達シ已ニ奧義ヲ究メタルモノハ其姓

名ヲ自記セシメ寸時モ座右ヲ放サス若シ他出セントスル片ハ自カラ之ヲ懷ロニスト實ニ其藝ヲ重シ士族ヲ獎勵スルノ

篤キ至レル哉其後代ニ此法アリ又文化十四年ニ至リ左京大夫長富祖先ノ遺志ヲ繼ギ大ニ奮テ敬學館武藝所射の場手習

所ノ四校ヲ城下ニ設置ス乃チ各師範宅地内ニアル藩立學校ニテ修業スル所ノ生徒ヲ出タシテ修業セシムル所ナリ而シテ其設立ノ爲メ頗ル盡力セシ者ハ時ノ家老丹羽備中郡

代廣瀬七郎右衛門島友岡ノ三名ナリ其時江戸ヨリ四名ノ儒者ヲ一時ニ聘用ス江戸諸儒者ヲ除ク外都合七名ナリ其中著名ノ儒者ハ堀江惺齋

服部宜ナリ此兩名モ頗ル奮發ニテ士族ノ風儀ヲ一變シ淳朴ニ導ク等ノ功其功蹟大ナリト云フ本校設立以來文武ノ兩道

日ヲ追テ盛大ニ至ル戊辰戰爭以前左京大夫長國マテ連綿盛ンニ行ハル

教則 教科用書ハ各儒家ノ見込アリテ少シク差異アルモ大概三字經ヨリ孝經ヲ授ケ孝經ヨリ四書五經ヲ熟讀セシム夫レ

ヨリ左傳孔子家語或ハ荀子韓非子ノ類順ヲ追テ解讀セシム然ル後ハ生徒ノ意向ニ任セ八大家文章歴史綱鑑補資治道鑑

ノ類獨讀研究セシム時アリテハ或ハ講義ヲナサシメ又詩文章紀事和解等ヲモ折々作ラシム 授業法ハ固ヨリ教師一人

ノミナレハ生徒ノ内上等ノ者ヲ撰ミ生徒ノ多寡ニ應シ四五名乃至八九名助教ヲ命シ俸給素讀ヲ教授セシム朝ノ始業ハ

大概元ノ六ツ時ヨリ五ツ時過ニ終ルモノトス 授業手續キハ生徒誥順ニ先ツ助教ノ前ニ出テ前日習ヒシ所ヲ復習シ了

リテ又新ニ教ヲ受ク朗讀シ得ルニ至リテ教師ノ前ニ出テ一讀スルノミ助教ハ生徒ヲ教授シ而ノ後教師ノ教ヘテ受クル

モノトス助教ハ解讀質問等ヲ作ス教師モ亦時宜ニ依リ意義ヲ問フコトアリ 又一ヶ月四度或ハ三度復習ノ日ヲ定メ置キタリ元ノ朝五ツ時ヨリ四ツ時マテ 其他終日トテ朝ヨリ夕

マテ修業スルヲ大概一ヶ月三度アリ此日ハ晨ニ習ヒシ所ヲ溫習ス尤此時間中ニ別ニ又詩文會等ノ定日アリテ殆ント休暇ナキ様ニ

日割ヲナシタリ 又夜會ト唱ヘ一ヶ月四度或ハ八度日沒ヨリ元ノ夜四ツ時マテ教師ノ講釋論語孟子中庸ノ類アリテ生徒ニ聽聞セ

シム生徒モ亦申合セ夜會ノ日ヲ定メ輪講會等ヲ設ケ教師ノ出場ヲ乞テ勉強ス

學科學規試驗法及諸則

江戸邸内學校

文學校 漢學

武學校 一刀流
小野派

學校所在地 文學校ハ舊藩主中屋敷霞ヶ關ニ假校ヲ設ク時宜ニ依上屋敷永田町邸内ニ假校ヲ設クルヲアリ是レ教師ノ住居ニ依リテ其住家ヲ假校トナス故ニ位置定マラス 武學校ハ永田町上屋敷内ニ設置ス 右ノ外射的場馬場角打場等ノ設ケアルモ別ニ校舍ナシ但射的場馬場ハ永田町上屋敷内ニアリ角打場ハ下屋敷長者丸ニ設ク

沿革要略 抑モ江戸藩邸ニ師範ヲ置キ邸内ノ子弟ニ文武ヲ修業セシメシハ寶曆年中丹羽左京大夫高庸ナリ又殿中ニ於テ一ヶ月三度論語孟子ノ講釋ヲ命シ諸役員并子弟ヲシテ聽聞セシム其後慶應年間マテ代々此ノ法アリ

教則 教科用書ハ三字經ヨリ孝經ヲ授ケ孝經ヨリ四書五經ヲ熟讀セシメ夫レヨリ左傳孔子家語荀子韓非子等順次解讀セシム然シテ後ハ生徒ノ望ニ任セ唐宋八大家文章歷史綱鑑補ノ類隨意ニ研究セシム 授業法ハ生徒ノ多寡ニ應シ生徒ノ内上等ノ者ヲ撰ミ一名乃至二名助教ヲ命ス俸給而シテ生徒ニ素讀ヲ教ヘシム朝ノ始業ハ大概元ノ朝六ツ時ナリ而五ツ時ニ終ルモノトス 授業手續キハ生徒誥順ニ助教ノ前ニ出テ昨朝習ヒシ所ヲ復習シ了リテ又新タニ教ヲ受ク朗讀シ得ルニ及ンテ教師ノ前ニテ一讀スルノミ助教ハ生徒ニ授業セシ後チ教師ノ前ニ出テ教ヲ受クルモノトス 又一ヶ月五度終日ト唱ヘ日ヲ定メテ溫習セシム其時間中ニ輪講又ハ詩文等ノ題ヲ出シテ之ヲ作ラシム 又一ヶ月三度教師ノ講釋書内アリテ衆生ニ聽聞セシム而シテ豫テ教授シ置ケル所ヲ撰ミ衆生ノ内ヨリ拔擢シ講義ヲナサシムル等ノ事アリ

學科學規試驗法及諸規則

漢學、劍術 右學科ハ二本松ニアル所ノ學校ト異ナリ別ニ春秋ノ試驗ナシ是レ固ヨリ江戸定誥ノ子弟ノミニテ生徒モ

至テ僅少ナレハナリ已ニ筆道ノ如キハ其地有名ノ先生ニ從ヒ修業スルモノ多シ故ニ該校ノ設ケナシト云フ

職名及ヒ俸祿 學校奉行用人ヨリ
分擔ス 師範三人 此役扶持ハ一人ニ付大約四口米ナリ此米高拾四石四斗ナリ

職員概數 前ノ人員ニ同シ別ニ職員ナシ

生徒概數 二十五人皆通學生ナリ

束脩謝儀 金額ノ定メナシト雖モ必ス之ヲ行フモノトス

學校經費 米十四石四斗 金百圓

但前ノ五條ハ維新後ハ廢止ニ付計査ヲ要セス

學校構造及建物圖面 別紙ニ記載ス

業ノ手續ハ弓砲ノ試ミノ如シ 鎗術、劍術、柔術 右ノ三科ハ別ニ春秋ノ試験ナシト雖モ年一度ハ必ス城内ニ於テ藩主自ラ命シテ生徒ヲ試験ス拔群ノモノヘハ夫々ノ賞譽ヲ與ヘタリ

敬學館并手習所ヘ年中無欠席ノ生徒ヘハ必ス翌年正月十一日ヲ以テ賞譽アリ金百疋以上ノ物品ニケ年三ケ年無欠席ナレハ文房具ノ類上等ノ物品ヲ與フ尤復讀終日輪講會并習字ノ如キ一科毎ニ賞譽アリ依テ一人ニテ三科或ハ四科ノ賞譽ヲ受クルモノアリ

生徒初テ師家ヘ入學スル時ハ必ス禮服ヲ用ユ其學校往來ニハ袴ヲ著クルモノトス

職名及ヒ俸祿

維新前 總裁家老ニテ分擔ス 奉行二人 郡代ニテ分擔ス 教授廿六人 助教定員ナシ 此役料ハ知行或ハ扶持米ナリ米高ハ凡七百九十二石

六斗餘(但教授助教ニテ)

維新後學制頒布前 文學主宰一人 小參事ニテ分擔ス 督學一人 監學一人 教授三人 助教四人 助教補四人 此俸米給料米六

石ト金四百三十二圓(但文學主宰ヲ除クノ外)

職員概數 維新前四十九人 學制頒布前拾五人

生徒概數 維新前六百五十人 通學生ノミ寄宿ナシ 學制頒布前二百六十人 右同斷

束脩謝儀 微少ト雖モ必ス之ヲ行フモノトス

學校經費

維新前 米七百九十二石六斗餘 職員知行或ハ扶持米 金三百五十圓 諸雜費

學制頒布前 米六石 教員俸米 金六百八十圓 給料并諸雜費

藩主臨校 藩主ノ臨校ハ定期ナシ然レモ年兩度或ハ三度前以テ日ヲ期シテ臨校ノ旨達ノ有ルコアリ又不時ニ臨校アリテ

自カラ本ヲ撰ミテ輪講ヲ命シ或ハ詩文ノ題ヲ與ヘテ作ラシムル等ノ事アリ尤優等生ヘハ賞與シテ衆生ヲ獎勵スルコアリ

リ

祭儀 聖廟ノ設ケナケレハ隨テ釋奠等ヲ行ヒシコナシト雖常ニ敬學館ノ床頭ニ聖像ノ大幅ヲ掲ケ尊崇セリ

學校構造及ヒ建物圖面 別紙ニ記載ス

學校ニテ出版翻刻セシ書籍及ヒ藏書ノ種類部數 學校ニテ出版翻刻セシ書籍ナシ而ノ學校所藏ノ書類數多有リシカ戊辰

ノ兵燹ニ罹リ悉皆燒失セリ故ニ舊記書類ノ存スルナケレハ今茲ニ掲クル能ハス

學校經費 學費ハ總テ藩費ヲ以テ之レニ充ツ

藩主臨校 藩主時ニ臨校アリテ素讀講義等ヲ聽聞セリ

祭儀 毎年二月校堂ニ孔聖ノ畫像ヲ飾リ吏員教授生徒并ニ一揖拜觀ス

學校構造及建物圖面 構造平屋ニシテ建坪八拾坪

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數

論語徵 詩韻便覽 俗字訓蒙 發字便蒙解 此他翻刻書類之レアリト雖凡明治四年失火之際悉皆烏有ニ歸シ目下藏スル書籍之レナシ

舊仙臺藩

學制

學事上ノ諸制度

安永九年六月藩内ニ令シテ曰ク近年別テ學問ノ志薄ク相聞得養賢堂出席ノ者モ漸々相減候人々不學難成事ニテ父兄長上ニ事フルノ道ヲ不知シテ終身安ンシ候儀ハ怠惰ノ至不届ニ候爾來急度相改學問出精候様可仕候若年寄始御近習向詰所以上ノ輩并輕キ諸役人迄御用ノ餘力有之節ハ出席講釋ヲモ承リ書會等仕人タルノ道ヲ得候様可仕候此度芝多駿河儀持來ノ書籍獻納學寮等建立指上御書籍モ被相出置候間拜見仕御用立候様仕度志ノ者ハ於學寮ニ熟誦可仕候學頭ノ者被相立教訓ノ節別テ被仰舍候間其心得右學頭ノ得指圖候様可仕委曲學頭ヘ可承合候以上トアリ又學業上進ノ者ニテモ奨勵ノタメ祿稅ヲ免除スルヲナシ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校家塾共ニ各自ノ意向ニ任セテ修學セシム最學業上進ノ者ハ藩費ヲ以テ他國ニ遊學セシム又側役或ハ無役ノ藩士ヨリ藩費ヲ以テ遊學セシムルヲアリ私費遊學ヲ願出ル者モ又之ヲ許可ス故ニ藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルヲ時々アリ

平民ノ子弟教育方法 藩立學校ニ入學スルヲ得ス家塾寺子屋ニテ修學セシム
家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ハ何人タリ共自由ニ開設スルヲ許ス

學校

舊守山藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ諭達數之レアリ江戶邸内ニ學校ヲ設ケ一藩士ノ子弟ヲシテ就學セシメ春秋兩期學務吏員臨席生徒ノ試驗ヲナシ學業優等ノ者ハ年尾ニ至リ出席度數學業上進等比較セシメ金五拾錢以內ヲ賞與シ或ハ拔群上達者ハハ格式又ハ祿米ヲ賜ヒ一藩士ノ子弟ヲシテ學業獎勵ノ法ヲ設ク

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ニ必ス入學セシメ各自意向ニ任スルヲ禁セリ

平民ノ子弟教育方法 藩立學校ニ入學スルヲ許可セリ然リト雖モ家塾寺子屋ニ於テ修學スル者最モ多シ

家塾寺子屋設置ノ制度 何人ヲ問ハス學術優等ノ者ハ家塾ヲ設ケ官吏ノ檢束ヲ受クルナク隨意ニ放任セリ

學校

校名 養老館ト唱フ

校舎所在地 字厩前ト唱其他舊跡ニ係ル事項ナシ

沿革要略 舊藩主松平賴寬儒教ヲ尊崇シ寶曆年間學事擴張ノ爲メ邸内ニ學校ヲ設ケ一藩子弟ヲシテ就學セシム松平賴融能ク其志ヲ繼キ明和年間儒士戸崎允明ヲ登用シ學事百般ノ事ヲ總轄セシム是レヨリ文教大ニ開ケ爾來依然トシ其舊轍ヲ履ム明治五年學制頒布ノ日閉校ス

教則 教科用書ハ經史ヲ以テシ授業方法順序等ノ成規ナシ

學科學規試驗法及諸則

和漢學ヲ教授シ武術ハ各自ノ意向ニ放任殊ニ武場ノ設ナシ文武程度ノ比例方法生徒學習ノ期限等ナク各自ノ勉強ニ任セ春秋二回試驗ヲ要シ豫テ學習セシ書ニ就キ素讀或ハ講義セシメ其優劣ヲ判シ年尾ニ至リ優等者ハ賞ヲ與フ

職名及俸祿 教授二名祿高現米拾七石以下拾一石以上ヲ給與シ上中士等ノ内ヨリ之レニ任ス助教主簿等ノ補助員アリテ

士卒ヲ論セス學術優等者ヲ以テ之ニ任シ四人口或ハ二人口ノ扶持米ヲ支給シ定員ナク生徒ノ多寡ニ應シ増減アリ

生徒數 生徒數略平均百人前後ナリ特ニ寄宿生等ノ設ケナシ

束脩謝儀 無之

資ノ子ヲ立ツ之ヲ齊義トス又儒教ヲ奉シ文政二年聖廟ヲ設置ス齊義晚年宗家ヲ繼キ施政永カラスシテ卒シ族伊達長門ノ男ヲ以テ嗣トナス之ヲ齊邦ト稱ス齊邦性明良政ヲ施ス寛厚ナリ士民大ニ悅服ス齊邦卒シ子無シ初メ齊邦養父齊義ノ子ヲ養ヒ世子トシ夙ニ藩政ヲ讓ラントスルノ意アリ於是世子立ツ之ヲ慶邦トス最モ儒教ヲ尊崇シ安政ノ初メ川内ニ小學校ヲ設ケ學規教則皆ナ養賢堂ニ擬シ仙臺西部ノ子弟ヲ教授ス又養賢堂構内ニ日講所ヲ設ケ偏ク庶民ニ講讀ヲ授ケシム養賢堂ハ仙臺府ノ中央ニシテ土地高燥府中ヲ四望スルニ足ル故ニ鐘樓ヲ起シ出火ノ警報ニ備フルト云民治ハ磐井郡東山ノ人ニ學術才能アリ最經濟ニ達ス文化三年舉ラレテ儒臣ニ列シ朱子學ヲ唱ヘ河洛淵源大學五脈解等ノ書ヲ著述ス故ニ一藩多クハ朱子學ニ從フ初メ文化年間養賢堂ヲ造營セシヨリ五十餘年嘉永安政ニ至テ文事其隆盛ヲ極ム

教則

教科用書 小學、四書、五經、近思錄、文選、左氏傳、周禮、儀禮

午前六時ヨリ八時迄素讀 午前十時ヨリ午後二時迄講釋、會讀 詩會二度(正五九月)文會二度(三七月)書會一度(六月)右何レモ十八日○習字 唐流、和流 百石以下ノ者筆紙墨藩ヨリ給ス 午前十時ヨリ午後二時迄授業、土用塞ノ稽

古ハ午前八時ヨリ午後四時迄○算術 中西流(半年ハ調日半年ハ半日)○習禮 小笠原流(半年ハ半日半年ハ調日)○劍術 新陰流二家(二六九ノ日)一刀流一家(一四五ノ日)○鎗術 種田流(三七十ノ日)○兵學 長沼流、信玄流○魯學○

蘭學○歌學 以上授業時間午前十時ヨリ午後二時迄、土用塞ノ稽古ハ午前八時ヨリ午後四時迄

學科學規試驗法及諸則 養賢堂ニ於テ教授セシ科目ハ漢學歌學魯學蘭學算術筆道習禮及ヒ兵學劍鎗術ナリ生徒ニハ必文武兩道ヲ兼修セシム又側役或ハ無役ノ藩士ヨリ學問日稽古人書法日稽古人及ヒ兵學弓馬劍鎗等ノ日稽古人申附其一科ヲ專修セシムルヲアリ文學ト武術ト程度ノ比例ハ概チ四書五經ノ大義ニ通スルモノハ武術ノ免許以上ニ超ルモノト公認ス又生徒學習ノ期限ハ八歳ヨリ入學シ退學ノ定期ナシ筆道ハ十一歳ヨリ入校シ學習十年ニシテ退校セシム外諸科ハ入退ノ定期ナシト雖モ概チ學習十年許ニシテ退校ス是學校家塾一般ノ風習ナリ生徒訓條罰則定規ナシト雖モ怠惰等ノ所爲アルキハ父兄親族等ヲ召喚シ說諭ヲ加フル等ナリ且生徒入學ノ許可ヲ得シ者ハ禮服著用師範家ニ回禮スルナリ試驗ノ法生徒賞品授與ノ法ハ毎年十一月二日ヨリ同十五日迄各科試驗合點ノ者ヲ賞與ス

試驗 賞品 試驗 賞品

試驗

賞品

試驗

賞品

試驗

賞品

小學 四書 素

讀 小學 一部

壹 騎 前 酒 吸 物

校名 初メ學問所ト稱シ後チ養賢堂ト改ム

校舍所在地 元文元年創立ノ際仙臺區北三番丁細横丁西南角ニ置ク後チ寶曆十年十一月同區北一番丁勾當臺通東南角ニ移ル現今ノ縣廳是ナリ

沿革要略 慶長七年藩祖中納言伊達政宗仙臺府城ヲ創建シ政令ヲ修シ士民ヲ撫綏ス然レモ偃戈未タ日アラス將士偏武ニシテ文事少シ元和七年谷傳左衛門ヲ擧テ儒臣トナシ嫡孫光宗ノ侍讀タラシム傳左衛門元富岡氏ト稱シ逝水子ト號ス越後頸城郡ノ人ナリ人ト成リ豪氣直言ニシテ劍術ヲ能クス頗ル精熟ニ至ル是仙臺藩ニ於テ儒者ヲ擧ルノ始ナリ政宗ノ子忠宗又大島良設内藤以貫石森正榮横山榮伯等ノ儒士ヲ擧ク其設ハ洛陽ノ人ナリ業ヲ熊谷立設ノ門ニ受ク忠宗卒テ洛ニ歸リ居ヲ黒谷ニ移シ屢六ヶ山人ノ門ヲ扣キ討論敲推ス故ニ詩學益進ム山人之ヲ半隱ト稱ス牧民忠告鈔ヲ作ル以貫ハ長州ノ人ナリ博聞強記詩文及ヒ鑿劍ヲ能クス石經大學諺解ヲ作ル書法ヲ好ミ朱子ノ筆跡ヲ學フ國人皆以テ能書トナス正榮榮伯皆仙臺ノ人ナリ正榮幼ニ聰敏能ク文字ヲ記ス長シテ群書ニ通シ屢諸生ノ爲ニ講説ス榮伯初卑賤ナリ少フシテ讀書ヲ好ミ長シテ博ク諸家ノ書ニ通シ雄辨強記ナリ忠宗此數輩ヲ擧テ儒教ヲ布ント欲スルモ戰國ノ餘習未タ除カス士民德義ヲ重ンスルモノ少シ天和二年政宗四世ノ孫綱村ノ時ニ至リ遊佐次郎左衛門佐藤文右衛門等ヲ擧テ儒臣トナス次郎左衛門木齋ト號ス初メ大島良設ヲ師トシ後來川操軒ニ師事ス又神道ヲ山崎垂加ニ學ヒ皆熟達ス人倫箴ヲ著ス文右衛門幼ニ聰敏能ク文字ヲ記ス林春齋ヲ師トシ勤苦怠ラス學業頗ル熟達セリ擧テ儒臣トナス綱村儒佛ヲ混用シ月咩ヲ師トシテ禪法ヲ學ヒ之ヲ信敬スル益甚シ遂ニ元祿十年鐵牛ヲ請テ開山ト爲シ寺ヲ城南茂ヶ崎ニ建立シ大年寺ト號ス是時ニ當テ閩國鐵牛ヲ詣拜セサル者ナク儒士ト雖モ殆ト免レサルニ至ル故ニ木齋等ノ數輩ヲ擧ケ儒教ヲ興サント欲スルモ學事遂ニ不振ナリ綱村子ナシ族伊達肥前ノ子ヲ養フテ嗣トナシ吉村ト稱ス舊藩主五世ナリ吉村繼立ニ及テ元文元年學問所ヲ創立シ葦幸七郎ヲ以テ學頭用掛リトナス吉村固リ儒學ヲ尊崇シ奢ヲ戒メ儉ヲ尚ヒ專ラ領内ノ士民ヲ教育ス幸七郎東山ト號シ洽聞富才ナリ吉村卑賤ヨリ擢ンテ、儒臣ト爲ス於是東山學校ヲ興サントスルノ議ヲ獻ス吉村其議ヲ納レテ學校ヲ興シ大ニ國政ヲ修ス領内ノ士民彬彬化ニ嚮ヒ忠孝節義及ヒ碩學鴻儒輩出ス以テ伊達氏中興ノ政ト稱ス吉村退老シテ子宗村嗣ク宗村忠良善ク政ヲ施ス然レモ治世永カラスシテ卒ス士民之ヲ惜ム吉村宗村ノ二代ヨリ教化漸ク布及シ士民概テ學問ノ貴重スヘキヲ知ル爾後隆替遷延シテ舊藩主十世齊宗ニ至テ文化年間大槻民治ヲ擧テ學頭トナシ委スルニ學事ノ興隆ヲ以テス民治奮勵盡力更ニ養賢堂ヲ築キ文武ノ諸術ヲ教授スルノ一大學校トナシ支校ヲ府ノ四方ニ置キ大ニ學事ノ普及ヲ計ラントス然レモ資力足ラヌ且齊宗卒スルニ會シ終ニ支校ヲ設クルニ至ラス齊宗子ナシ族田村村

○同留附壹名 同貳兩 ○同統取留附三名 同貳兩
學制頒布前養賢堂ノ名稱ヲ廢シ知學局トナル

職名俸祿 三等官教正壹名 年給金百五拾圓 ○四等官副教一名 同百圓 ○同監教一名 同百圓 ○教師貳名 同八拾圓
○補師九名 同六拾圓 ○曹長五名 同四拾圓 ○生頭五名 同貳拾五

以上學制頒布前ノ職員ナリ養賢堂ノ節ハ前項職員ノ外ニ凡下コテ門衛十三人給仕五人直抱四人掃除人十五人養賢堂藏
守壹人アリ

職員概數 教員ハ學頭ヨリ諸生主立用辨迄百三拾四五名ナリ事務員ハ締役以下藏守迄七拾三四名ナリ合計貳百八十九名ナ
リ學制頒布前ハ教員貳拾五六名ナリ事務ハ藩ノ直行トナル

生徒概數 寄宿生徒定員ナシ然レモ通常貳拾五六名ニ過キス役付ノ者ハ藩費ナリ無役ノ者ハ自費貳人扶持ヲ納ル通學生
徒概略八九百名ナリ維新後學制頒布前ハ寄宿生徒拾名餘通學生徒三百餘名ナリ

束脩謝儀 無シ

學校經費 養賢堂ノ學費ハ文政ノ初メ荒田壹万貳千石ヲ附シテ永世ノ經費トス然レモ全地熟田ニ至ラサルノ間ハ每年金
ヲ以テ其不足ノ額ヲ補フ大概年々金六七百兩ナリ故ニ學費ヲ藩士ニ賦課スルヲナシ維新以來ハ直チニ藩費ヲ以テ之ヲ
支辨ス

藩主臨校 毎月十三日ハ藩主臨校シテ試業ヲナスノ制規ナリ然レモ政務繁劇ナルハ國相ヲ代理臨校セシム
祭儀 天明六年六月聖像ヲ設置ス文政二年聖廟ヲ創立シ春秋ノ二季釋菜アリ其禮典ノ概略ハ別紙ニ記載ス

學校構造及ヒ建物圖面 別冊講堂小誌ニアリ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 翻刻セシ書籍ハ四書五經韻府一隅等僅々ナリ藏書ノ部數ハ別紙ニ
記載ス

右ノ外學校ノ記事序文ノ類詳確ノ事實取調フヘキノ處舊仙臺藩ノ如キハ戊辰騷擾ノ後公私ノ記錄等散亂紛蕩シ古老舊
吏等又多クハ死亡洩隱シ調査其實ヲ得難ク偶一二ノ口碑ニ據リ僅ニ以テ每項ノ顛末ヲ補填スルモノナリ

舊仙臺江戸藩邸内ニ學寮アリ此寮タルヤ邸内堀舎ノ一部ニシテ代々ノ舊藩主在府ノ節儒士一名ヲ一年ツ、在番セシメ
經史等ノ諮問ニ供ス故ニ其儒士公務閑ナル時ハ邸内ニ限リ有志ノ子弟ニ講讀ヲ授ケシナリ固ヨリ狹隘微小ニシテ學校
學館ト稱スルニ足ラス文化年間順造館ト號ス

五	經	同	近思錄一部	兵	學	握機傳金壹分
小學四書五經	同	四書一部	左氏傳一部	劍術	新陰流	傳授真綿三把
小學四書講究	史記一部	劍術	史記一部	劍術	新陰流	傳授真綿三把
五	經	同	史記一部	劍術	新陰流	傳授真綿三把
七	經	同	史記一部	劍術	新陰流	傳授真綿三把
習	字	楷草書	硯 <small>但上中下アリ</small> 一面	劍術	一刀流	傳授真綿三把
算	術	天元術	銀子一枚	劍術	一刀流	傳授真綿三把
習	禮	關流傳授	真綿三把	劍術	一刀流	傳授真綿三把

魯學蘭學歌學ハ試験ナシ
職名及ヒ俸祿

養賢堂學頭壹名 役料貳百五拾石高(番頭格以上)○同添役貳名 役料九拾石高(詰所以上)○同目附二名 役料同上
(詰所以上)○同指南統取二名 役料同上(詰所以上)○同指南役六名 百石以下ノ者小者料壹人 扶持金壹兩(詰所以下)○同指南見習
壹名 同上(詰所以下) 指南役及見習年給金五兩各科指南役及見習ハ年給金四兩小者料 同斷○同諸生扱貳拾壹名 年給
金三兩三分各科諸生扱ハ金三兩貳分○同諸生扱並三名 年給金貳兩○同諸生主立拾四名 同貳兩○同諸生主立並七名
同壹兩○同諸生主立用辨三名 同壹兩
事務員 養賢堂締役三名 年給金四兩○同書記役四名 同三兩○同座敷番五名 同貳兩貳分○同相續方吟味役壹名
同五兩○同入料方役人本締貳名 同五兩○同横目三名 同五兩○同役人拾壹名 同三兩○同學頭物書貳名 同三兩

レ獎勵ノ法タリ而シテ藩主歴代學事ノ制度諸規則等舊記ニ詳細ヲ缺キ文化以前ノ事ハ今日ニ至リ考ヘ知ルヘカラス文化以後ト雖モ多クハ口達セシ習慣ナルヲ以テ學事ノ制度モ亦從テ詳細ノ成文ナシ然リト雖モ古老ノ傳フル所ト獎勵法ノ實際ニ行ハルトヲ以テ之ヲ推スニ寛文元祿ヨリ作人館設立ノ日ニ至ルマテ大抵變ルコト無キニ似タリ或ハ曰フ天文年中三戸城祝融氏ノ災ニ罹リシヨリ盛岡城モ亦寛永寛文兩度ノ焼失江戸藩邸數度ノ類焼ヲ經テ舊記多ク散佚セリト果シテ然ルヤ否ヤ

士族卒ノ子弟教育法 士族卒ノ子弟ハ必ス文武兩道ヲ學ハシムルノ藩制タリ而シテ其藩學ニ入ルモ家塾ニ學フモ各自ノ意向ニ任セ取テ干涉スルコトナシ作人館設立以後ニ至リテハ士族ノ子弟ハ必ス作人館ニ入學セサル可カラサルノ布令アルヲ以テ私塾ニ學フ者甚タ少シ藩士ニシテ他國ニ遊學ヲ願フ者アレハ其平生ノ志行ヲ察視シ而シテ後之ヲ許ス又寛文年中ヨリ士族子弟ノ俊才ニシテ後來大成ヲ期ス可キ者アレハ文武及ヒ醫學ニ限リ藩費ヲ以テ江戸大坂長崎等ニ遊學スルヲ命シ各其業ヲ修メシム作人館設立以後ハ教員ノ上申ヲ經ルニアラサレハ許サス

盛岡諸士ニ布令シ毎月三回午後八ツ時ヨリ作人館ニ來リ生徒ト共ニ四書或ハ五經ノ講義ヲ聽聞セシム教授或ハ助教之ヲ講ス

平民子弟ノ教育法 平民子弟ノ教育ニ於ル一切干與スル所ナシ藩立學校ニ入ルモ亦禁スル所ニアラス然モ當時士民分界ノ制度甚タ嚴ニシテ常ニ士族ト相交通スルヲ得サルノ勢アリ故ニ平民子弟自ラ畏懼ノ情アリ敢テ藩立學校ニ入ル者ナク家塾又ハ寺子屋ニ就キテ讀書算術等普通ノ學ヲ爲セリ享保年中嚴ニ封内ノ人民ニ布令シ武術ヲ學フヲ禁ス近年ニ至リ平民ニシテ武術上達祿ヲ賜ヒ教官ニ列スル者往々之アリ未タ其禁ヲ解クノ年月ヲ搜索シ得ス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ノ設置ハ藩政ノ干與セサル所故ニ郡宰里正等ノ檢束ヲ受ルコトナシ何人タリモ隨意ニ開設スルヲ得而シテ其教師タル者往々世襲ノ家アリ故ニ村民ノ子弟其師家ヲ尊敬スルノ風習アリ

學校

校名 明義堂アリ作人館アリ作人館中修文所昭武所醫學所ノ三校ヲ置ク作人館ハ其總稱ナリ明義堂以前ハ皆稽古所ト唱ヘ名稱ヲ付セス

校舍所在地 新丸稽古所ハ居城接續ノ地ニシテ通學ノ子弟不便ナルヲ以テ元文五年志家村八幡社境外ノ用屋敷ニ移轉ス明和三年仁王村三戸町ニ一校ヲ建築シテ此ニ移ス天保十三年信濃守利濟始メテ校名ヲ付シ明義堂ト云フ嘉永三年ニ至

舊盛岡藩

學制

學事上ノ諸制度 享保二十年大膳大夫利視大ニ國政ヲ改革シ封内十郡ヲ二十五ニ部分シ二十五代官所ヲ置キ各其部内ヲ管理セシム(花卷遠野ヲ除ク)花卷ニ城代アリ城代ヲシテ管理セシメ遠野ハ家臣南部彌六郎ノ采地^{壹万三千タルヲ以テ彌六郎ノ管理ニ任ス此時ニ當リ文武ノ二道或ハ怠惰ニ流ル、ノ憂ヒアルヲ以テ令ヲ封内ニ布キ士族卒ヲシテ一層勉勵怠ル勿ラシメ代官ヲ以テ其責ニ任ス故ニ各代官所近傍ニ校場ヲ設立シ土着ノ士^{給人ト云}卒族ヲシテ通學怠ル勿ラシム其教師ハ土着ノ士ヲ以テ之ニ充ツ時々代官親シク校ニ臨ミ其勤惰ヲ監査ス又年々盛岡ヨリ目付役ヲ派遣巡廻セシメ其修業ヲ試驗シ優等ノ者ヲ褒賞セシム是ニ因テ文武ノ業大ニ振起シ封内食祿ノ者孜孜勉強怠ル者無シト云フ其後世ヲ經年ヲ積ミ漸ク衰弛ニ趣キ從テ校場モ亦破壞シ僅ニ其形跡ヲ存スルアリ存セサル者アルニ至ル美濃守利剛又大ニ文學ヲ擴張セント欲シ文久二年明義堂近傍ノ地ヲ合併シ一校ヲ建設シ明義堂ヲ廢シテ作人館ト改稱シ盛岡士族ニ布令シ其子弟ヲシテ必ス來リ學ハシム又二十五代官ヲ盛岡ニ召シ各其部内ニ一校ヲ新設或ハ修繕シ享保年間ノ舊ニ復シ一層文武ヲ勉勵セシム可キヲ命ス各代官命ヲ受ケ歸リ其部内ニ令シ急ニ工事ニ就シム花卷ニ起奮場アリ遠野ニ信成堂アリ此二校ハ從前ヨリ存在シ來リ土着ノ士猶其教師タリ福岡三戸五戸花輪毛馬内等ノ學校先ツ落成スルヲ以テ作人館ヨリ教員文ハ助教及ヒ訓導武ハ一ノ座二ノ座ヲ派出シ三ヶ月或ハ五ヶ月ヲ以テ交代セシム其教員滯校中ノ食費及ヒ往來ノ旅費等都テ藩費タリ助教ハ上下三人訓導ハ二人其教則等ハ皆作人館ノ制規ニ從フ土着士ノ子弟ニシテ勉強倦マス才學日ニ進ミ品行正シキ者アレハ派出教員之ヲ上申シ作人館ノ入寮ヲ命ス是ヲ藩費生トナス自費ヲ以テ入寮セント欲スル者アレハ其學業品行ヲ檢査シテ之ヲ許ス城下諸士ノ子弟ハ固ヨリ作人館ノ試驗ヲ經テ教授助教ノ上申ニアラサレハ入寮スルヲ許サス而シテ其最モ優等ナル者ハ命シテ藩費生トナス自費生ノ如キハ其事情ニ因リ或ハ必ス試驗ヲ要セサル者モ亦之アリ藩主ノ臨校春秋試業定例ノ外年ニ一度或ハ隔年大試驗(御上覽ト唱フ)アレハ重役一門用人目付其他文武係リノ者皆隨從其優等ナル者ヲ賞シテ賞品ヲ與フ(文ハ書籍武ハ稽古道具ノ類)其最モ拔群ナル者ハ擢ンテ、世子公子ノ近習小性トナシ教員トナシ小吏トナス凡ソ學藝上進教授助教ノ職ニ任スル者アレハ士族平民ヲ論セス皆祿ヲ給賜ス而シテ士族ノ當主ハ奉職ノ日直チニ其祿ヲ增加スルアリ或ハ十年精勤ノ後增加スルアリ二三男及ヒ平民ノ如キハ新タニ祿ヲ給シテ家ヲ起サシム之ヲ文武出身ノ者ト云フ其在職中軍事征役ハ勿論城内ノ當番宿直等ヲ免除シ其座席ヲ進ムル等皆是}

ハ城門ニ近接シ通學子弟ノ不便ナルヲ以テ志家村八幡社前ノ用屋敷ニ移シ一層文武ヲ研究セシム經義及ヒ兵書ノ講釋弓砲馬術槍劔長刀柔術等ノ當時行ハル、武藝二十二流アリテ各其日ヲ定メ時ヲ分チ講習研究セシメ藩主モ亦時々臨校其勤惰ヲ檢査ス此ニ於テ文武又更ニ振興セリ明和八年大膳大夫利雄八幡社前ノ稽古所ヲ三戸町ニ移セリ而シテ當時ノ士風專ラ武術ヲ勉メ讀書ノ士ヲ蔑視スル者多シ文化二年大膳大夫利敬下田三藏ヲ江戶ヨリ召シ新タニ祿ヲ給シ藩學教授トナシ期日ヲ定メ本丸及ヒ稽古所ニ於テ經書ヲ講セシム聽者常ニ滿ツト云フ門生數人アリ文政中學職ニ在ル者多シ信濃守利濟ニ至リ天保十三年始メテ三戸町稽古所ニ校名ヲ付シテ明義堂ト稱ス是レ學校ニ名稱アルノ始メナリ幕府ノ老中間部下総守詮勝ニ托シテ明義堂ノ三大字ヲ書シ之ヲ堂上ニ掲ク而シテ中島三右衛門ニ教授ヲ命ス藤井又藏ヲ助教トナス是ニ因テ文化以來一藩ノ學事衰弛ニ至ラス文久二年美濃守利剛新タニ一學校ヲ建築シ明義堂ヲ廢シ作人館ト改稱ス是ヨリ先キ江幡五郎伊藤三平山崎謙藏ヲ江戶ヨリ召シ皆新タニ祿ヲ給シ儒臣トナス江幡五郎ニ命シ學軌ヲ作リ文武不岐和漢一致ノ旨趣ヲ一藩士族ニ明示ス館中ニ修文所アリ昭武所アリ醫學所ヲ置ク寄宿舍アリ生徒二百人ヲ養成ス藩費生アリ自費生アリ學田三千石ヲ付シ其校費ニ充ツ(學田ノ村名金穀ノ概數等ハ別ニ之ヲ錄ス)此時ニ當リ該藩文武ノ隆盛寛文元祿以來未ダ曾テ有ラサル所ナリ維新ノ始メ藩主利恭若年ナルヲ以テ作人館ニ寄宿シ生徒ト共ニ文武ヲ講習ス明治三年版籍奉還學校モ亦盛岡縣ニ屬セリ

教科用書

和漢學 四書、五經、老子、莊子、荀子、韓非子、左傳、國語、戰國策、史記、漢書、蒙求、十八史畧、溫公通鑑、國史略、日本政記、日本外史、神皇正統記、大日本史、古事記、萬葉集、令義解、六國史

洋學

英吉利西文典、大文典、中地理書、大地理書、物理書、萬國史

醫學

素問、靈樞、傷寒論、金匱、溫疫論、十四經、醫範提綱、內科新說、西醫略論

授業順序

每朝六ツ時ヨリ幼童子弟ニ四書五經左傳史記等ノ素讀ヲ授ケ五ツ半時ニ終ル句讀師之ヲ掌ル又日々四ツ時ヨリ通學ノ子弟ニシテ四書五經ノ素讀ヲ卒リタル者ヘ蒙求十八史畧等ノ講義ヲ授ケ九ツ時終ル訓導師及ヒ句讀師之ヲ掌ル又午後八ツ時ヨリ七ツ半時マテ教授或ハ助教四書五經古事記萬葉集素問傷寒論醫範提綱ヲ講義シ又句讀師ノ輪講アリ教授助教之カ會頭タリ而シテ各期日ヲ定メ月六回ナルモノアリ三回ナルモノアリ夜ハ四ツ時ヲ限リテ寄宿生ノ輪講アリ寮長及ヒ宿直ノ助教之ヲ掌ル其外月三回ノ詩文會アリ宿題及ヒ席上題ヲ付シ教授助教之ヲ添削ス

學科學規試驗法及諸則

學科

和學、漢學、漢洋醫學、珠算、筆算、兵學、弓術、馬術、劔槍術、柔術

右學科ハ生徒ヲシテ悉ク學ハシムルコアラス讀書及ヒ槍劍術ノ如キハ必ス兼修セシムルノ制規タリ爾餘ノ學科ハ各自

リ文武ノ業稍擴張シ明義堂ニ出校ノ子弟日ニ多キヲ以テ三ツ割村下小路ニ藥園ト稱スル用屋敷アルヲ以テ之ヲ支校トナシ文學ヲ講習セシム文久二年三戸町明義堂比隣ノ地ヲ併セ作人館ヲ建築シテ文武共ニ同館中ニ學ハシム

江戸藩邸別ニ校舎ヲ設ケス藩士ノ子弟ハ邸外ニ通學セリ文政四年三月江戸愛宕下ニ住居セシ浪人儒者二十八扶持ヲ給與シ出入儒者トナシ藩士及ヒ定府ノ子弟等通學セリ藩邸ヘモ來リ月ニ三回ノ講義アリ天保年中幕府ノ儒官佐藤一齋ヲ聘シ毎月三ノ日周易ノ講義ヲ聽ク藩主及ヒ近習ノ者ノミナリ是ヲ與講釋又側講釋ト云フ石川日向守ノ儒臣泉澤牧太ハ元來該藩士櫻庭兵助ノ家臣タリシヲ以テ出入儒者トナシ月三回藩邸ヘ來リ經書ヲ講ス藩士一同之ヲ聽聞ス之ヲ表講釋ト云フ

沿革要略 藩祖ノ始封建久二年ヨリ寛永年中ニ至ルマテ凡ソ四百三十餘年ノ久シキ藩ノ舊記ヲ搜索スルニ文武教育ニ關スルノ事項ヲ記載スルモノヲ見ス藩士ノ私記古老ノ口碑ニ傳フル者モ亦アルナシ藩祖光行ヨリ二十八代山城守重直寛永十一年三戸城ヨリ盛岡ニ移リ同十三年盛岡城ノ北内丸内御新九ト稱スル地ニ文武場ヲ新築シ藩士ノ子弟ヲシテ通學講習セシム藩主及ヒ諸公子モ亦臨校スルヲ以テ御稽古所ト唱フ其校名ヲ付セスト雖モ之ヲ藩立學校ノ始メトス寛文ヨリ元祿年間藩主大膳大夫重信信濃守行信ノ二世儒臣十餘人アリ下村奚疑帷子何有本多與一郎山口靜六等ニ祿各三百石ツハ給與ス二百石百五十石ノ者モ亦多シ是ヲ藩主儒學ヲ尊崇スルノ始メトス然ト雖モ新九校場ノ廣狹學事ノ制度教則等ヲ記載スルモノ無シ重信曾テ和歌及ヒ狂歌ヲ善クス徳川氏五代將軍綱吉之ヲ愛シ時々陪食ヲ命シ呼フニ南部老爺ヲ以テス元祿五年重信年七十七ニシテ致仕シ行信五十一ニシテ其後ヲ嗣ク元祿六年二月廿二日重信年七十八嗣子行信孫實信ト同シク將軍綱吉ノ講席ニ陪シ中庸天命ノ章ヲ講スルヲ聽ク同シク八年三月行信其子實信ト同シク又綱吉周易乾ノ卦ヲ講スルヲ聽ク此等ノ事ヲ以テ之ヲ推考スルニ當時該藩文學ノ隆盛ナル以テ知ル可キナリ行信少ヨリ才藝アリ殊ニ砲術ニ精シ晩年ニ至リ專ラ經學ヲ好ミ常ニ侍臣ニ語リテ曰ク經學ニ非サレハ國家ヲ治ム可カラス汝等宜シク勉強スヘシト其子隼人正實信モ亦學ヲ好ミ篤實謹行江戸麻布ノ潜邸ニ在ルヲ以テ世人之ヲ麻布ノ賢君ト稱ス元祿十三年父ニ先ツテ卒ス年ヲ享ル二十五歳一藩ノ士民慨歎哀惜スルノミナラス世人モ亦之ヲ惜メリト云フ元祿十五年行信死ス後故アリ同十六年盡ク儒臣ヲ免黜シ其他讀書ニ名アル者數十人一時ニ刑ニ處シ沒收減祿禁錮塾居等一門及ヒ重臣モ亦免カレ得ス是所謂朋黨論ナルヘシト雖モ當時ノ士民之ヲ儒者論ト稱スト云フ實ニ是レ該藩學事ノ一大災厄ト云フ可キナリ然リト雖モ亦文學隆ンニシテ學士ノ多ク士氣ノ振フモ亦ト知スヘキ也是ヨリ後文學武術漸ク將ニ衰廢セントス享保二年大膳大夫利視大ニ文武ヲ擴張セント欲シ封内士族卒ニ布令シ文武ノ勉強怠ル者アル無カラシム元文五年内丸學校

維新後 督務 權督務 補務 署長 主牒 教授 大助教 少助教 寮長 長上生 大得業生 少得業生 門衛 廨
養

生徒概數 七百人内通學生五百人 藩費寄宿生百人 自費寄宿生百人

東脩謝儀 一切之レ無シ

學校經費 寬永年間新丸内へ文武場ヲ設置セシ以來ハ蓋シ年々學費ノ支出無カル可カラス且ツ學事ノ盛衰アルハ其免カ
レサル所ニシテ其費用モ亦隨テ増減ナキ能ハサルヘシト雖モ舊記存セサルヲ以テ其實實ヲ知ルニ由ナシ明和八年三月
町へ稻古場ヲ移セシ以來其事實或ハ知ヲ得ルト雖モ其規模至テ小ナレハ一終年ノ費用僅カニ金貳百兩ヲ上下スルコ
キス天保十三年前同場ヲ改修シテ稍々文武ノ業ヲ擴張セシヨリ費用漸ク増加シテ年々五百兩餘ヲ支出セリ而シテ該費
用ニ於ケル別ニ賦課徵收ノ法ヲ用サス悉皆藩庫ヨリ之ヲ給ス

文久二年藩主利剛大ニ學校ヲ建築シ作人館ヲ開キヨリ文武共ニ隆盛ニ赴キ費用年々増額シテ一終年ノ支出スル所始
ト貳千兩ノ多キニ至ル之ニ依テ慶應二年南岩手郡ノ内上野御明神西根西安庭鑿石六ヶ村ノ地三千石ヲ學田トナシ其
收入ノ金穀ヲ以テ校中ノ費用悉皆之ヲ支辨セリ然レモ學田出ス所金貳百八十兩米貳千四百六十俵(三斗七升入)内藩費
生扶持米六百俵ヲ引去リ殘リ千八百六十俵ヲ時相場(壹俵ニ付金二分)ヲ以テ金一換ユレハ千三百九十五兩ニ前ノ金額
ヲ合セテ千六百七十五兩ニ過キス而シテ藩費生雜費自費生補助費賞典營繕費書籍筆墨紙武術稽古道具醫學器械鍋釜
膳糧薪炭等ノ買入代合セテ千五百六十八兩ニシテ其餘ス所僅々百七兩ナリ故ニ文武教員役料ノ如キハ尙ホ藩庫ヨリ支
給セリ

藩主臨校 藩主ハ毎月一六ノ日ヲ以テ武術ヲ學ヒ講義ヲ聽キ春秋兩度ノ試業ニハ親シク其場ニ臨ミテ之ヲ試ム是レ從來
ノ定例ナリ美濃守利剛毎月三回教授助教ニ命シ城中中ノ丸ニ於テ經義ヲ講セシメ大小吏員ト共ニ聽聞セリ朝五ツ半時
ヨリ四ツ半時ニ至ル又助教ニ命シ城中松ノ間ニ於テ每朝世子公子ニ素讀及ヒ講義ヲ授ケシム五ツ時ヨリ四ツ時ニ至ル
維新後藩主利恭尙若年ナルヲ以テ作人館ニ寄宿シ朝夕生徒ト共ニ文武ノ學ヲ勉ム爾後城中ノ素讀講義一併ニ之ヲ廢止
ス

祭儀 作人館構内ニ神廟ヲ設立シ大已貴命文宣王ヲ合祭ス一月十五日朝五ツ半時ヲ以テ釋菜ノ式ヲ執行シ神酒饒餽鴨二
羽鯉二頭ヲ神前ニ供ス藩主及ヒ學令學監文武係ノ目付役會計奉行諸役方一統文武教官一統正服拜禮在寮書生一統拜禮
終リ藩主歸城ノ後一統ニ酒肴餅ヲ賜フ別ニ在寮生一統ニ餅ヲ賜フ此日文武ノ發會ヲ兼ルヲ以テ年々頗ル盛會日暮ニ至

一親並之族長柄奉行已下是又勝手次第若年之分右同様

一文武之諸道故有之一藝へ計り入學之儀モ願ニ寄り可仰付候

一御目見以上ニテモ諸藝格別之分其師ヨリ申立ニ寄可被仰付候

一入學之族在府ハ一統通學在宅ハ學寮住居被仰付候

寛政七年八月ノ布令

先達テ以御書付被仰出候學校御取立之儀莫大之御造營惣御成就之處ハ兩三年後ニモ可有之候得其要用之處ハ來三月頃迄出來候間御家中弘前住在宅共御目見以上ノ子弟一統入學被仰付候

一嫡子ニテモ壯年之族ハ入學勝手次第被仰付候

一在宅ノ族學寮住居ノ分親並ノ外一人扶持御貸シ可仰付候其他賄方鹽味噌薪炭迄被下置候

同八年四月ノ布令

舊年七月被仰出候通學校御取建之儀莫大之御造營總御成就ノ處ハ願テ來月上旬迄出來之様子ニ付御下向後早速入學被仰付候儀之舊年被仰出候通御目見已上ノ子弟入學願ノ儀當月中夫々申出候様被仰付候

同年五月ノ布令

先達テ御觸被仰付候在宅ノ二男三男學寮總出來無之内在府ノ親類寄宿并在宅所ヨリ通稽古相成薩族計入學被仰付候ニ付二男三男入學之志有之族願書出兼候赴モ相間得候間總學寮ハ追々御取建被仰付候得共學寮荒増出來候ニ付此節ヨリ二男三男ノ分モ學寮住居被仰付候間志ノ族入學願差出候様被仰付候(布令中在宅ノ別ハ當時士族過半ハ村落ニ住居セル故城下住ノ者ト村住ノ者ト別ヤ斯クハ云フナリ)

文化五年學校移轉ノ布令

近年打續御物入増ノ處昨年松前御用ニテ臨時莫大ノ費用今度御家格ニモ不被爲拘御省畧被仰出隨テ當分三之九ノ學問所出來候ニ付來八月學校ヨリ引移同十日ヨリ同所教授相始メ講釋ノ儀ハ同十二日ヨリ相始メ候様被仰付候

文化七年正月ノ布令

學風ノ儀前々宋學御用ニ御代々被遊御尊宗候儀ニ付學問所學風モ前々ノ通宋學ニ相改候様被仰付候殊ニ近年松前御用ニテ莫大ノ御入用ニ付格別御省畧被仰付諸事御見合ノ御場合ニ候得共學問ノ儀ハ畢竟厚キ思召ニテ御立被置御家中子弟專ラ教導被仰付候間一統難有奉存候年齡十五歲親並嫡子ノ分者何レ入學致候様二男三男共可成入學爲致候様

ツテ罷ム只發會ノミニシテ納會ノ式ナシ蓋シ其費用ヲ省クモノナラン歟

學校構造及建物圖面 學校地坪建坪ノ概數ハ別紙圖面ノ如シ

學校藏書種類及部數 漢籍及和書洋書類數十種アリ

學校ニ於テ翻刻セシ書籍目次 天保年中四書五經ノ素讀本一齋ヲ翻刻シ年少生徒ノ賞品ニ充ツ慶應三年藩主利剛儒臣江

幡五郎ニ命シ神聖一揆文武一致忠孝無二ノ旨ヲ以テ學軌一篇ヲ撰ハシメ一藩ノ諸士ニ明示ス

舊弘前藩

學制

學事上ノ諸制度

寛政六年十月學校建設ニ付藩廳ノ布令

夫學校ハ禮儀ヲ講シ人道ヲ明ニスル基ニシテ孝悌忠信ノ教是ヨリ出候得ハ貴賤トナク皆學校ニ入り教ヲ受ル事古之道ニ候是迄御家中諸士厚ク學術ニ志ス者モ學校ノ設無之故其業ヲ遂兼且子弟モ文武ノ學術存念通致兼候ハント既ニ御先代様ノ思召被爲繼學校御取建之儀被仰付御家中之子弟一統盛ニ文武之道相嗜候様御教導可被爲成旨被仰付候且明春ヨリ造營被仰付候間諸士一統右之心得ニテ子弟ヘ能々申含メ今ヨリ銘々學術精勤之志相志後日入學之力ニ相成候様猶入學之規式并其外委曲之儀ハ追々可被仰出候也

同年十一月ノ布令

先達テ被仰出候學校御取建之儀莫大之御造營ニ候得其要用之處ハ來三月頃迄ニ出來候間御目見以上之子弟一統入學被仰付候也

一祿二百石 長柄奉行以上ノ嫡子十歳ヨリ入學致候様

一同百五十石 四奉行以上ノ嫡子十歳ヨリ入學致候様

一二男三男一統十歳以上不拘年齡致入學候様

一十歳ニテ入學ノ族十五歳ニ至リ候者ハ一統兵學兼學候様

一親並之族大寄合ヨリ長柄奉行以上ノ面々文武ノ諸藝爲修業學校ヘ罷出候儀ハ勝手次第伺之上被仰付候尤若年之族

ハ入學願候様

校舍所在地 寛政年間弘前城大手前^{今ノ白銀町}ニ設置シ文化五年十月城内三ノ郭へ移シ維新後ハ別ニ校舍ナシ

沿革要畧 舊弘前藩ニテ始メテ學校ヲ設置セシハ寛政八年夏ニシテ其以前迄ハ只藩儒ヲシテ毎月五回乃至七回四書又ハ

兵書ノ講義ヲ聽聞セシメシノミナリシカ津輕寧親^{九世}ノ時ニ當リ其支族津輕永孚ナル者始メテ學校創設ノコヲ建議セ

シニ因リ藩儒山崎圖書ヲシテ往年遊歷目撃スル所ノ諸國ノ學制ヲ開申セシメ又其門人葛西善太ヲ林家ニ遣リテ學校建

築ノ事ヲ諮問セシメ寛政七年春工事ニ着手シ翌八年夏ニ至リテ落成ニ於是校名ヲ稽古館ト稱シ學官ヲ命ニ士族目見以

下ノ子弟ヲ入學セシメ其六月開校式ヲ行ヒ寛政九年二月學校ニ於テ藩主親ヲ先師先聖ニ釋奠シ同年三月養老禮ヲ行フ

爾來文化三年ニ至ルマテ毎年一回釋奠ス同五年藩費節減ノ爲メ學校ヲ三ノ郭へ移シ縮蹙セテ武道諸藝ハ專門師範家ニ

テ教授シ學校ハ文學ノミノ教授トナシ學校職員ノ如キモ是迄諸役一列ナリシカ是ヨリ筆格兼役トナル^{舊校舎ハ弘前寺町報恩寺ニ歸ハリ稱爲ノ如}

キモ全ク文化七年葛西善太ノ建議ニ因リ從來ノ古學ヲ廢シテ更ニ朱子學ヲ用ユ尤モ是ヨリ科業書等ハ變更スト雖モ授業

ノ方法時間學規試驗法其他都テノ大休ハ明治初年迄概テ改革以前ノ制則ヲ斟酌襲用セリ降リテ安政初年西來航シ天

下一般海外諸國ノ事情ヲ講究スルニ及ヒ藩主承順^{十一世}生徒ヲ出シ蘭學ヲ江戸ニ學ハシメ其六年稽古館ニ蘭學堂ヲ置キ士

族及ヒ在町醫ノ子弟ノ入學ヲ許ス是ヨリ先^{嘉永}年間町醫佐々木元俊ナル者江戸杉田精圭ノ門ニ入リテ蘭學ヲ修業セシカ

天下ノ形勢迫々變遷スルニ及ヒテヨリ年々藩主ヨリ學資ヲ給與シタリシカ此ニ至リテ二人扶持ニテ新製召抱ノ上藩士

ニ例シ歸國シテ藩學校蘭學ノ教授ヲ掌ラシム慶應二年寄宿生ヲ校內ニ置キ學力操行俊良ノ子弟ヲ擢ヒ藩費ヲ以テ漢學

ヲ修業セシメ同時ニ又生徒十名ヲ江戸ニ遣シ英學及砲術ヲ學ハシム明治三年二月弘前藥王院ニ寄宿寮ヲ置キ和漢洋砲

學公費生同自費生ヲ募リテ入學セシム^{此際學校内ニアル寄宿生ハ自ラ廢セラル}明治四年四月春藩主承昭^{十二世}彌學事ヲ擴張セントシ人ヲ靜岡ニ

遣シテ中村正直ヲ聘スレニ病ヲ以テ辭セリ仍テ該藩漢學三等教授宮崎立充英學三等教授島田德太郎并ニ東京福澤學

學一等教授永島貞次郎同三等教授吉川泰二郎四人ヲ招キ同年正月藥王院寄宿寮ヲ弘前最勝院^{但弘前宮宿寮}ニ移シ^{ハ漢英學ナリ}修業セシム而又

寄宿寮ヲ青森蓮心寺ニ置キ藩學校生徒中ヨリ俊秀ノ子弟ヲ擢拔シ藩費ヲ以テ右兩所ニ於テ^{但弘前宮宿寮}修業セシム而又

此時三ノ郭學校モ漸ク頽破ニ及フヲ以テ藩學校ハ之ヲ重臣ノ宅ニ移シ同年八月五日弘前青森共藩費ヲ引揚ケ寄宿生ヲ

廢シテ一同通學ヲ命ス同月廿七日從來ノ小學及ヒ會讀生并ニ弘前青森兩學寮ヲ廢シ永島吉川ノ二氏ヲ解雇ス舊藩學校

此ニ至リテ全ク絶ユ其後舊藩主ヨリ年々若干ノ費用ヲ給與シ漢英學校ヲ設置セシメリト雖沿革記スヘキナキヲ以テ略

教則

之

猶又十六歲已上ノ親並嫡子二男三男其有志ノ面々ニハ入學致候様被仰付候其外長年ノ族ハ勤仕ノ暇學問所講釋又ハ會讀ヘ罷出候様被仰付候

明治四年正月二日藩主ノ告諭

今般文明開化ノ時ニ際シ益學事ヲ啓發セン爲メ雪天遠路教師ヲ相迎ヘ於弘前青森寄宿寮取開只管教師ヘ汝輩ヲ囑托依頼スル上ハ汝輩他郷ヘ勤學ノ心得ニテ聊不顧家事教師ノ教戒ヲ違背スル勿レ且教師在留ノ期限モ有之事故愈分陰ヲ愛惜シ夙夜燈窓一層奮勵精學致スヘシ因テ此旨取テ告諭スル所也

學業上進ノ者ヲ獎勵スルニツヒテハ別段方法ノ設ナシ只俊秀ノ者ハ之ヲ召出セシナリ乃チ寛政以來文武ヲ以テ家ヲ興セシ者甚タ多ク而就中生徒ニシテ藩ヨリ口俸ヲ賜リシハ天保年間中村善之進ナル者素讀生ニテ學業秀タルヲ以テ二人俸ヲ賜レリ如此ハ前後例ナキナリ而文學ハ大抵五六兩四人扶持ニテ中扨從隊武藝ハ五六兩三人扶持位ニテ徒士ニ召出セリ又學校典句武藝添師役ハ二人口俸ヲ賜リ二三男ニテモ勤メシナリ其他書院番士表書院番士中扨從隊ノ家格ヲ以テ組入役入スルハ武道ハ其藝ヲ見分ノ上ニテ之ヲ命シ文學ハ學校典句典筆タレハ輒チ之ヲ命セリ但舊弘前藩制金一兩ト云フハ藩錢八十目ニシテ金一兩ノ所ヘ米四斗入五俵一斗三升三合餘ナレハ五兩ハ二十六俵二斗二升六合餘六兩ハ三十二俵ナリ

士族卒ノ子弟教育方法 士族目見以上ノ子弟ハ必ス藩學校ニ入學セシムルノ制ナリト雖卒族則目見以下ノ子弟ハ學業後秀ニシテ其師ヨリ願出ルニ非レハ之ヲ許サス故ニ大抵家塾等ニ就テ修學セリ 藩費ヲ以テ他國ニ就學セシムルヲハ寛政已來維新ノ際迄常ニ之レアレモ學官及典句或ハ生徒ノ中ヨリ其學力俊秀ノ者ヲ撰ンテ命セシ故望ミテ得ヘキヲニアラサリシナリ尤私費遊學ヲ願フ者ハ之ヲ許セリ 藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルノ制ハ寛政以來文武共毎月六回トス即文學ハ二ノ日ニシテ論語或ハ書經兵學ハ七ノ日ニシテ孫子吳子或ハ武經全書等ノ講釋ナリ

平民ノ子弟教育方法 平民ハ藩立學校ニ入學スルヲ能ハサリシナレモ私費ヲ以テ他國ニ遊學シ或ハ家塾寺子屋等ニテ修學スルハ勝手ニ任セリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋等ノ開設ハ各自ノ自由ニ任セ敢テ檢束セサルナリ

學校

校名 稽古館ト稱シ寛政創立ノ時ヨリ明治初年迄始終變スルヲナシ

ノ間ハ朝讀ト云フヲアリ卯ノ刻昇堂シテ辰ノ刻マテ句讀教授ノ時トス辰ノ刻退下ノ式ハ組釐序ヲ以テ交承順環シテ先後スルナリ

會讀書 朱子小學、史記、漢書、左氏傳、詩經、書經、禮記、周禮、易經、明律

右ノ内小學會ハ初學ノ生徒ナル故教師逐一其義理字義ヲ詳解口授スルモノトス 史記漢書ノ會ハ專ラ讀法ヲ習ハスモノ故生徒更番十枚或ハ二十枚ヲ讀ミ疑難ヲ問ヒ大意ヲ質問スルモノトス左傳以上ニ至リテハ生徒互ニ趣意ヲ述ヘ抗議論難シテ決ヲ教師ニ取ルナリ 會讀生ハ奇偶ノ別アリ隔日ノ昇堂ナリ但シ己レヨリ下級ヘ兼會ヲ請フ者ハ之ヲ聽メ會業時間ハ毎日巳ノ刻ヨリ午ノ刻マテ一時間トス

毎月詩文會各一度アリ小司以下譯學士貳數典句ニ至ルマテ出席スルナリ若シ會讀生ノ内其業ニ精シキ者ハ請ニ依リ列席ヲ聽ス又毎月經書ノ講釋論語或ハ書經三回アリ七ノ日ナリ此時會讀生ハ諸士ト共ニ聽聞ヲ許ス其他毎月三次典句ノ輪講アリ小司及ヒ學士貳數各一名ツ、出席其時會讀生ニ聽聞ヲ許ス

明治四年春津輕承昭學事ヲ更革シ新ニ定メタル漢學寮生徒ノ等級及學科目

三等學生課業 十八史畧、元明史畧、國史畧、左氏傳、國語、史記、蒙求、朱子小學 右書目ノ内一部ハ每朝十枚ヲ限リ教師ノ面前ニ於テ素讀ノ上難解ノ處ハ質問可致事 孔子家語、世說、言行錄、貞觀政要 右四部ノ書序ヲ以テ一月六回會讀舍長月內ニテ會讀可致事 尙餘暇アレハ三体詩唐詩選錦繡段聯珠詩格古文眞寶等ノ入口ニ贈炙セル詩ヲ暗誦可致事

二等生徒課業 漢書、後漢書、溫史、宋元通鑑、通語、逸史、日本外史、大日本史 右ノ書目獨見並質問等ハ三等生徒同例ナリ 朱子小學、四書、左氏傳、五經 右書目ノ内一月六回輪講 尙餘暇アレハ諸家詩文集熟讀可致事

一等生徒課業 看書ハ二等生徒ニ同シ但質問ノミ可致事 一月六回四書五經ノ内輪講

萬國公法、地理全誌、瀛環志略、英國史、六合叢談 右書目ノ内六國會讀可致事 毎月六回詩題差出一等ヨリ三等生徒マテ欠作不可有之事 毎月三回文題差出一等生徒欠作不可有之事但二等ニテモ作文致度者ハ可爲勝手事 右揭示ノ書卒業致候者ハ銘々存寄次第ノ書研究可致事

安政六年ノ蘭學科明治四年弘前青森學寮洋學科不明ニ付欠之但洋學科ハ定リナク只教師ノ見込ニ任セクリト云フ 學科學規試驗及諸則 學科ハ寬政開設ヨリ文化五年マテ文武兩道具備ノ學制ニシテ皇漢學筆道算法醫學習禮兵學雅學及ヒ射御劍槍ノ諸科トス而シテ之ヲ專修スルト兼學スルハ各生徒ノ意ニ任スルト雖モ當時尙武ノ俗ナルヲ以テ大抵之ヲ

教科用書

素讀本

孝經、論語、詩經、書經、禮記、文選

會讀本

史記、漢書、詩經、書經、左傳、國語、禮記、儀禮、周易、周禮、明律

典句敎授規各堂別有典句者倣之
(德政十一年定)

一 典句生員毎日清晨坐志學堂之北廂授兩堂生徒之句讀各分班而敎授者其班之典句有事故不昇堂則各班之典句分而敎之皆從其昇堂名簿之次勿得攙越

一 凡典句須明句讀審字音若有不審則質之學士勿潦草不用意重小生之誤其授句讀所音清朗徐々讀過勿得疾聲急遽授句讀之多寡隨生徒之敏鈍自十字二十字至四五十十字雖質伶俐者不過四百字許誦讀反復必使之上口通熟而止若質魯容易不得功勿加呵責必諄々敎之

一 凡授句讀必使誦昨日所授所授無失而授新書若遺忘不熟責之習讀不得授新書

一 生徒朝夕復誦典句二人輪番覽視正其紕繆督其不熟

一 凡坐堂務要禮貌端嚴威儀整肅若生徒習業不勤行事失闕者察舉以告典句監其小事即時繩之若狠戾亂學反憲者典句監呈稟聽處分

文化七年以後ノ學科大概如左

素讀本 論語、孟子、詩經、書經、禮記、易經、春秋

右素讀了リタル者ハ會讀ニ繰上ルナリ此時ハ小學論語等ノ註文ヲ讀マシメテ其力ヲ試ム而此試讀ハ年七月十二月ノ二季ト定メリ敎ニ其前ニ素讀了リタル者ハ定季マテノ間文章軌範唐詩選文選等本人ノ望ニ任セテ敎授スルヲナリ素讀敎授ノ時間ハ日々辰ノ刻ヨリ巳ノ刻マテ典句一統出席各屬生ニ句讀ヲ授ク典句ハ概シテ十名或ハ十二名生徒ノ多少ニ依リ増減アリ典句一名ニ付屬生二十四五名以上三十名ニ至ル一組毎ニ五六人ノ伍長ヲ立テ學庸論孟ノ句讀ヲ授ケ且懈怠ヲ糾セシム巳ノ刻ヨリ午ノ刻マテ習字ノ時間トス典業一統習字ヲ敎ニ而習字時間ノ伍長ハ素讀ノ伍長ト異ナリ其業事ト行狀トヲ撰ンテ立ツルナリ典筆ハ五名或ハ六七名大抵典句ノ屬生兩組ヲ一人ニテ統ルナリ午ノ刻ヲ報スレハ生徒ニ退下ヲ命ス其式朝ニ昇堂ノ順ヲ以テ名札ヲ板ニ掛ル敎ニ之ヲ四五分シテ典筆其姓名ヲ呼出セハ伍長ハ互ニ揖讓シテ長幼ノ次ヲ正シ生徒ノ上ニ座定ル典筆一體ムレハ生徒一統拜シテ退下ス午後ヨリ未ノ刻ニ至ル猶習字ノ時間タリト雖モ生徒各其宅ニ歸リ喫飯シテ復昇堂スル故半時間ハ休息トス但午刻以後ハ當直典句一人止リテ締ヲナシ其餘ハ退下スルナリ未ノ刻ヨリ申ノ刻マテ素讀復習ノ時間トス是亦當直典句一人出席ナリ申ノ刻ヲ報スレハ退下ヲ命ス其式午後退下ノ時ノ如シ但午後刻堂ノ名札ノ順ヲ以テス而春三月ノ末ヨリ秋九月初ニ至ルマテ長日

考課記 寛政十一年定

一試句讀者乱抽其卒業之書使讀之音訓不錯句讀分明爲上音訓雖不錯粗有疑滯爲中多謬忘者爲下而嚴飭溫讀之
一試經義者試日十日前抄出其會業書中之章目數十條揭之各堂以示諸生別書其章目以爲籤至試日教官坐列使諸生當堂
掣籤講解其所得之章試各二章隨其講解或加難問以見益對文義不誤講解快活爲上文義粗通解不快活爲中文義繆謬朦
朧爲下

一凡試詳記其等第以備歲晚通考其考課雖累入上等一歲坐堂不及一百八十日者尙不得入賞格

一試期一歲四次四月七月學士試之十月小司試之十一月總司臨試

一各堂置坐堂勘合簿每日依式填記限月之二日上前月之簿歲晚通算查勤惰行賞黜

一書學生每月上寫倣一幅大率每幅四行々々五字真草行從所學於本班先生處呈字佳者加圈々々多者爲最逐月之以備通考

各堂生員考課凡例 明治三年定

生徒兼學素讀書學者以兩堂坐堂滿限通考中上已上爲兩業勤勉精進是爲上等其一業勤勉兩業精進及兩業勤勉一業精進
共爲第二其唯兩業勤勉及唯兩業精進共爲第三其習一業者以坐堂滿限通考中上已上爲一業勤勉精進爲第四其唯一業勤
勉或一業精進共爲下等 通計坐堂之法一年中除休日而今年有潤句讀坐堂三百九十三度習字坐堂二百十六度共恕句讀
二十度習字十一度充疾病事故之日以三百七十三度爲句讀滿限以二百五度爲習字滿限共生徒滿限者勤勉入賞其句讀伍
長者及精進者減十九度爲定限伍長而精進者又減十八度爲定限其習字伍長及精進者減二十度伍長而精進者又減十度爲
定限 皇漢會讀生度數以奇偶立而今歲奇日百十六度偶日百十五度共恕十二度充事故之日奇日百四度偶日百三度爲坐
堂定限試通考中上已上者爲精進滿限者以勤勉入賞句讀生通考之法下々爲一上々爲九設令數次之試皆上々則爲上數次
之試通考中上已上者恕二十度以精進入賞其欠一次者以所闕爲下加三次之數以通考之其欠二次不取數次皆欠雖坐堂滿
限者除賞格坐賞不及限者不入賞 兼紀傳學數學洋學者多以書學之暇兼學故二百十六度爲坐堂定限內恕六十度以百五
十六度爲勤勉其精進者又減十六度以百四度爲定限入賞 生徒勤勉精進例雖有可賞然其人有過載其姓名左集愆錄則
除賞格

右凡例ヲ前ニ舉ケ次ニ各科生徒ノ姓名ヲ記シ頭ニ試驗ノ考課右傍ニ度數賞格ノアルハ朱書シテ揭示スルヲ概畧左ノ
如シ

兼學セサルモノナシ乃チ學規ニ載スルカ如ク兵學ヲ學ハントスル者ハ十五歲聽之專門兵學ヲ修メントスル者ハ其意ニ任ス射御劍槍等ノ術ハ十七歲已上ニ到リテ之ヲ許セリ必シモ之ヲ兼修スルヲ要セス文化六年以來ハ文道一方ノ學制ニシテ即チ和學漢學數學書學諸禮等ノ各科ニシテ文武其場ヲ異ニセリ後チ安政六年蘭學科ヲ設ケ明治三年英學科ヲ設ケリ文武ノ程度ハ流儀ニヨリテ同カラサレモ四書ノ大義ニ通スルモノハ概テ武術ノ目錄位ニ該レリ生徒學習ノ期限ハ十歲以上三十歲マテニシテ乃チ史漢四書三禮周易明律等ノ科程ヲ卒ヘテ退學スルノ法ナリト雖モ吾人ノ望ニ從ヒ其内外ニテモ之ヲ許セリ 試驗ハ年中春夏秋冬ノ四季トス春三月夏六月ノ兩度ハ學士ノ試驗ナリ秋九月ハ小司冬十一月ハ總司ノ試驗ナリ春夏ノ試驗ハ學士正面ニ在リ左傍ニ貳教一人出席右傍ニ司監ノ出席アルノミ秋冬小司總司ノ試驗ニハ正面小司總司南面ニ坐シ左傍學士右傍ニ貳教左右ノ兩邊ニ各堂學士貳教等出席セリ 會讀試驗詩經以上ハ筆解ニシテ他ハ講釋ナリ凡ソ試驗ハ十五日以前ヨリ其日割ヲ塗板ニ書シテ揭示ス而會讀ノ試驗ハ詩經ニテモ左傳ニテモ凡テ讀終リタル本數ノ中ヨリ十條ヲ選ヒ之ヲ紙ニ書シテ揭示シ置キ生徒豫テ其餘ヲヲ解スルヲ習ハシメ耶日ニ會テ次第ニ依リ試驗ヲ受クルナリ一會ノ中ハ長幼ヲ以テ先後ヲ序スルヲ學校ノ例ナリ試驗ノ席ニハ一ヨリ十迄ノ籤ヲ筒ニ納レ置キ生徒ヲシテ各二本ヲ探ラシメ三五ナレハ三五二八ナレハ二八ノ條ヲ口解筆解スルナリ十本ヲ拔キ了レハ復タ納レ其ノ生徒ニ探ラシムルヲ前ノ如シ 素讀ハ各讀了レハ書籍ヲ各自携ヘ出テ試驗ヲ受クルモノニシテ例ヘハ四書ヲ讀畢レル者ハ大學ノ中一ヶ所四五行ヲ讀シメ中庸モ同斷ナリ論孟ノ如キハ或ハ二ヶ所モ讀マシムルヲアリ禮記以上マテ讀ミ或ハ文章軌範文選マテモ讀畢レル者ハ論語或ハ詩經以上ヨリ讀マシムルナリ試驗ノ考課ニ九等アリ上々上中上下中上中々中下下上下下下下ナリ右ノ内中上以上ヲ以テ秀逸トス書學數學和學等皆此例ナリ 賞典ハ會讀素讀及各堂科業通考以上ヲ以テ俊秀生トナス年末ニ賞與アリ業事ニ俊秀ナラサルモ日々欠席ナシ昇堂滿數ナルヲ勤勉トス亦賞與アリ而賞與ヲ舉クルニハ每年十二月廿三日ヲ以テ定日トス其前日司監ヨリ呼出ノ同章ヲ達スルナリ即日生徒禮服昇堂シテ司監席ニ出テ着到ヲ告ク其日ノ式講堂ニ於テ先ツ學官一統典句典筆會計方書記立關番ニ至ルマテ總司ニ謁見式アリ其ヨリ會讀素讀生謁見式アリ右濟テ后賞典ヲ行フ賞ノ上等ヨリ下等ニ至ル五等タリ其順序ヲ以テ三人立五人立トナシ小司達書ヲ讀ミ目錄ヲ與ヘ會計方ヨリ其物品ヲ受取ルナリ賞與品ハ筆紙墨ノ類ニテ其賞格ノ高下ニヨリ多寡ノ差アルナリ賞與ヲ賜リシ生徒ハ必ス名刺ヲ以テ惣司小司學士ノ毎戸及各其屬頭ヘ禮服回禮スルナリ賞與ニ與ルヘキモノト雖罰則ニ罹ル者ハ之ヲ除ケ委細考課凡例ニ出ツ

一學校中雅樂器之外散樂等之遊藝器翫ヒ候儀堅ク禁止仕候様但雅樂器ト雖休日之外弟子ノ分者七時前不許之
一交リ朋友之間信義ヲ相守リ長幼之次第ヲ相正シ侮慢等之儀無之様相互ニ相正シ候様若學政ニ背キ無禮爭論之儀御
坐候ハ、其趣目付ヘ可申出事若又不申出猥ニ及口論候ハ、退學被仰付候事

一學寮ニ罷有候節モ常ニ袴ヲ着候様

一病氣等有之節者同寮之内ヨリ慇懃ニ致附添醫藥等之儀モ目付役ヘ申達差支無之様取扱看病仕候様

一沐浴之儀一月六度宛食堂之傍ヘ設ケ置終日之間學中稽古之面々代リ勝手次第沐浴仕候様尤髮月代トモ相定候トモ
手合兼候節可成丈相互ニ髮月代致候様或ハ自身ニ髮結習シ候様

一學校中ニテ飲酒之儀一統禁止仕候様詩文會并其外出會ノ節モ右同斷

弘前漢英學寄宿寮規則

明治四年正月定
青森學寮モ準之

成業ハ規ヲ守ルニアリ今般文明之域ヘ御進被爲遊度御趣意ニテ千百里外ヨリ諸先生御請被爲遊許多之御費用ヲ不被
爲顧客宿寮御取立被申付候段實ニ稀曠之御盛典各自銘肝刻骨致ヘシ附テハ分陰ヲ愛惜シ精業專一之事々ニ候深ク愛
護之御趣意ヲ奉シ左之通規則御立之條朝夕揭示ニ對シ聊所愧ナキ様可相心得者也
一心ハ直ナランヲ要シ行ハ方ナルヲ要ス日々吾身ヲ三省シ粗暴ノ舉動風儀ニ拘候儀アルヘカラサル事

一寄宿中禁之事

一學課三等ト相定長進之生ハ進級懈怠之生者落級可申付事

一日課業別紙ヲ以テ相定候條懈怠有之間敷事但疾病事故之外不許欠席欠席之族ハ其旨舍ヘ可相違事

一生徒長幼ヲ以席次スヘキ事

一舍長ヲ立各寮ヲ令統監之條諸事指揮ニ背間敷事

一舍長席ニ點名簿並鑑札備置候間出入刻限點名簿ヘ相記之上鑑札受取歸寮之上ニテ返納可致事

一門限七時半ニ限ル事

一生徒猥ニ他寮ニ行ヲ許サス

一總テ生徒ヨリ申立ル事件ハ先舍長ニ依託シ舍長ヨリ管轄スル處ヘ差出ヘシ

一疾病並ニ緊要事件ニテ下宿三十日ニ至ル者ハ退寮可申付事但忌服ハ此限ニアラス

右觸犯之生有之者小ハ獸座賤役ヨリ大ハ禁足退寮可申付者也

會記

偶日何會

奇日何會

會頭某氏某屬生

生員

中上	中	坐度百何度 某氏某
中上	中上下	
中上	中上	坐度百何度 某氏某
中上	中上	

素讀

典句某氏某

生員

中上	中上	中
中上	中	
中上	中	伍長某氏某 某氏某
中上	中	

訓誨 寛政十一年定

聖人之道人而不學之無以立內事父母治家外事君治邦非學之不能是故公建學以教欲使人々之子弟各知其道成其德凡人而不可不學先王孔子之道者即天命也凡入學者念人而不可不學先王孔子之道者即天命也自今以往夙夜莫怠強學以奉天命對揚公之大德

入學訓誨 全上

人之所以爲人者何也爲學以明道也所謂道者始於事父母終於事君修身齊家治平國天下之事乃孝論六經之爲教也今也建家將使國子弟皆由斯教以成其德是公之所深仁榮愛於子弟也凡入學者仰体高意思人之所以爲人者夙夜無怠強學成器以對揚大德

行儀規 全上

一稽古之弟子每朝六時前ヨリ起キ盥ラヒ漱キ自身櫛リ銘々學寮致掃除夫ヨリ各學堂へ罷出其業ニ取懸リ可申事 但病氣等ニテ定刻ニ罷出不申候輩ハ其赴目付役へ相斷可申事

一三時之食事食堂之雲板相圖トシ食堂ニ相集リ年之長幼次第不亂何儀學業并格式之尊卑ニ不拘何レ長者上坐致飯臺

ニ就候様尤禮儀ヲ相愼ミ飯臺等ノ器物相汚シ不申候様

一稽古之面々參會之節學問切磋之外雜談等堅ク禁之猥褻淫鄙之談并基將基等之雜戲并俳諧等モ堅ク禁止仕候様

國家有依賴亦無非乃功欽哉諸位

寬政十一年己未正月

稽古館總司奉行

國師職掌 國師之職掌淨宮之法統學官以治建國之學政令國之子弟養之以道成其才德焉都下自十歲以及三十都外自十五歲以及三十皆入學乃教之德行道藝一曰三德二曰三行三曰六經四曰兵法五曰三道六曰六藝七曰六儀三德一曰至德以爲道本二曰敏德以爲行本三曰孝德以知逆惡三行一曰孝行以親父母二曰友行以尊賢良三曰順行以事師長六經一曰詩二曰書三曰禮四曰樂五曰易六曰春秋兵法一曰戰法二曰陣法三曰天官四曰軍禮五曰城築六曰軍器三道一曰紀傳二曰天文三曰法律六藝一曰五禮二曰六樂三曰五射四曰五馭五曰六書六曰九數六儀一曰祭祀之容二曰賓客之容三曰喪紀之容四曰朝廷之容五曰軍旅之容六曰興馬之容皆頒之學士專業掌之使各教其學生以考其德行道藝其不帥教者告于公公命鄉大夫士皆入于學督之不變公親視學不變屏之鄉里 凡春秋二分之上丁有故則用帥學官釋奠于先聖先師必還養老 月三日乃屬學官讀學法其每月視學臨時屢臻 正歲令于學官曰各共爾職修乃事以聽公命其或不恭則國有常刑 凡春秋二分帥學官屬學生考其德行道藝其有不帥教而怠慢者朴之三年大比考其德行道藝以飲酒之禮禮賓之其明師典成學士貳敎獻賢能之書于公公拜受之登于府國史貳之其釋奠先聖先師與公視學皆師其屬行禮以十有四科辨子弟之賢能一曰德行二曰言語三曰政事四曰文學五曰兵學六曰法律七曰和學八曰天文九曰書十曰數十一曰容儀十二曰射十三曰馭十四曰武藝 若國有大事則屬學官議事 歲終則聽學官之治以考其修否察其勤怠錄之而告公誅賞之計一歲之費用以達于政府三歲則大考學官之治告公而廢置

典成職掌 典成之職掌贊國師而行國學之敎法治其政令量學生之才而授其業凡諸生十歲必入學敎之孝論詩書之句讀與書數幼儀之業察其學術敎之九經三道和學兵學武藝等之學九經一曰詩二曰書三曰儀禮四曰周禮五曰禮記六曰易七曰春秋八曰論語九曰孝經以六德六行考其德行六德一曰知二曰仁三曰聖四曰義五曰忠六曰和六行一曰孝二曰友三曰睦四曰嫺五曰姪六曰恤 凡諸生不至小成者禁涉諸子百家讀宋儒註解之書其有不勤業不慎行怠惰者皆告于國師而戒之 若學官有過惡督其過而正其德焉其不悛者告于國師 日以己牌更入學堂聽學政至午牌退若有事則二人俱入聽事 凡春秋釋奠及學中禮事贊國師而行之 凡四時之孟月上旬屬學官而考學生之道藝 凡諸生有請暇者十日以內聽之十日以外詔于國師其告病與病起皆聽之若貳敎以上告病者詔于國師 凡學官有關則論其才德以告于國師 凡學中之費用四時聽其出納歲終則告國師 歲終則考其敎官訓道功業之多少而爲之殿最

兵學典成之職掌 典成之掌武敎者掌贊國師而行學中兵法武藝之敎法治其政令量學生之才而授其業凡學生十五歲以上

生徒ノ過差アル者之ヲ罰スルニ種々ノ法アリト雖モ所謂教刑ニシテ之ヲ羞辱シ之ヲ惕勵セシムルノミ其法謹慎撻撻昇堂差留退學等アリ謹慎ハ罪ノ最モ輕キモノヲ處スルノ刑ニシテ何日間謹慎ヲ命シ伍長ナレハ伍長ヲ取放ノ類ナリ撻撻ハ鯨鱸ニテ作リタル三尺許ノ鞭ヲ以テ其腰元ヲ打ツナリ罪ノ輕重ニヨリテ三遍五遍ヨリ十遍十五遍マテモアルナリ其ヨリ重キハ昇堂差留及ヒ退學ノ刑ニシテ何レモ學校ヨリ放逐スルヲナレハ昇堂差留ハ其過差大ニシテ校舍ニ容レ難キノ罪ナレハ時日ヲ經悔悟悛心ノ明証アレハ猶恕スヘキモノヲ處スルノ刑ナリ退學ハ竊盜等ノ破廉耻ヲ犯シ學生ト齒シ難キモノ又ハ頑惡化シ難キ者ヲ罰スルノ法ニシテ再ヒ赦免ナキモノトス右何レモ典句典筆ニテ詰問其罪狀ヲ詳カニシテ上司ニ申達シテ裁判ヲ仰クナリ罪ノ輕重ニ依リ小司或ハ總司ニ達スレハ兩司審議シテ處分ヲ申付ルナリ其法學士一人其罪狀書ヲ懷中シ司監案内シテ素讀堂典句ノ間ニ正座典句典筆左右ニ座シ撻撻ヲ机上ニ置テ俟ツナリ尤モ生徒一同業事ヲ罷メ其後傍ニ詰シメ一統ニ示シテ學士其罪狀處刑ヲ申渡セハ撻撻ノ刑ナレハ典句或ハ典筆鞭ヲ執テ之ヲ打ツナリ會讀生ハ年長ノモノ故撻撻ノ刑ナシ教訓再三ニ及ヒ聽サル者ハ昇堂差留ノ刑アルノミ右何レモ處刑畢レハ直ニ司監ヨリ其罪狀及處刑ノ次第ヲ書面ヲ以テ其父兄ニ通スルノ定メナリ

學官法

一學校禮義之府德教之源凡教官敬德修行以身誘掖以造後進九德挺出庶績因凝無不在而之則母得不敢怠
一國家官人疇不中其選雖然訓導之司顯業是爲職彌精覈以待叩撞是爾分所當勗母得不從容以盡其聲
一凡事之棄廢在官之不和功之無奏無不由勤之不敏況教官造士之職教化之廢興人才之汙隆實之繫焉須胥和同心以思弘教化

一司糾監察糾繩之職須正奉成法毋得避貴私於昵其在史正嚴史法無敢爲隱忌
一凡學官猶以道義常胥訓誨保惠以敬修其職無敢荒怠自安

以上條令學官咸欽承以奏功其或不恭國有常法

寬政八年丙辰秋八月

申飭學官令

學校禮義之府德教之源在其諸官無非風化之所關係焉况堂師於後進猶領之在衣要之在裳表而攝之其爲任也亦重矣乃行誼之不檢德業之不勉何以望之生徒乎其於司糾也糾非舉違務在興立學憲其相共同心合力躬率以效其職事則俊髦由是出

聽之五日以外詔于典成其告病者亦如之 兵學貳教以下教官有闕則論其才德以告于典成 歲終則考兵學生出入之名簿而察其勤怠 兵學貳教掌贊兵學學士而教授學生其明六道士略將略而綜涉七書兵書皆如學士 日以已牌更升兵學堂堂正兵學生之業若兵學學士有故廢則代之 凡春秋二分之釋奠養老承旨各執其事 每月下旬與兵書典句試兵學生之句讀及士略將略之業 凡兵學生有勤怠者則論其殿最而告于兵學學士

數學學士貳教職掌 數學學士之職掌明九章歸除之術而教授子弟九章一曰方田二曰粟布三曰衰分四曰小廣五曰商功六曰均輸七曰盈朒八曰方程九曰鈎股凡子弟十五歲以上升算學堂而修算術其始學算者教之九令合數使其暗誦而後歸除術察其研究教之以平立諸乘方天元演段等之術 日以已牌與貳教更入算學堂堂正學生之算術其課業之日與貳教教授學生 每月中旬與數學貳教屬諸生而試算術爲之殿最 國師典成試學生之算術則臨之 若數學貳教有闕則論其官才而告于典成 歲終則考學生之勤怠論其俊秀以告于典成 數學貳教掌贊數學學士教子弟審九章歸除平立天元點竄演段等之諸術正學生之算術 日以已牌更升算學堂視學生之算術戒其怠惰 算術課業之日二人俱入而正學生之算術 每月上旬試學生之算術 國師歲試算術典成春秋試算術則贊數學學士執事

天文曆學士貳教職掌 天文曆學士之職掌明授時曆經議天經或問曆算全書西洋曆等之書以測器觀察天文而推測曆法教授學生凡子弟學天文曆之業者教之以授時曆之法推測氣朔日躔月離其卒業則次之以貞享曆之法而後論其學才爲貳教者授甲戌法之傳 司天臺居常安土圭以定國土之出地且掌測分至晷影交食時刻分秒多寡日月宿次而校訂今曆能知精微 課業之日與貳教升天學堂屬學生而教授時曆經議天經或問曆算全書等之業 每年以甲戌法預推測來歲曆以獻于朝 每月朔書其日之干支與其月之氣候上于朝若有日月星辰之變風雲妖祥之異則與貳教共登司天臺占候之以告于國師 凡天學生有俊秀者則告于典成而褒賞之其怠惰不動者亦告于典成而罰之 貳教有闕則論其才德以告于典成 天文曆貳教掌贊天文曆學士而教授學生其明授時曆經議天經或問曆算全書等之書而觀察天文推測曆法皆如學士 日以已牌更升天學堂堂正學生之業 每年以甲戌法推測來歲曆贊學士執其事 凡天學生論其勤怠而告于學士

學規 寬政十一年定

- 一生徒每日升堂自記名於簿以齒就席各肄其業及值月典成升堂至格物堂同一謁典成
- 一生徒每日辰牌前升堂習誦午牌退食未牌前齊至申牌皆罷飯
- 一每月三日惣司升堂各官以次序立行拜謁畢東西分列對坐各堂生徒赴堂行拜謁
- 一分生徒爲六堂一曰養生堂居年十四歲以下者授孝論詩書之句讀二曰志學堂居年十五歲以上者授禮記文選之句讀其雖

入曜武堂教之七書兵法之句讀與六道士略將等之業察其學術授之陣法戰法大星之傳七書一日孫子二日吳子三日司馬法四曰尉繚子五日三略六曰六韜七日太宗問對六道一日戰法二曰陣法三日天官四曰軍禮五日城築六曰軍器 若學官有過惡者督其過而正其德焉其不悛者告國師 日以己牌更入學堂聽學政至午牌退 凡春秋釋奠及學中禮事贊國師而行之 每月上旬與兵學學士貳教試兵學生之藝術 凡兵學生有請暇者十日以內聽之十日以外詔于國師其告病與病起聽之若貳教以上告病者詔于國師 凡兵學官武藝官有闕則論其才德以告于國師 凡曜武堂之費用四時聽其出納歲終則告國師 歲終則考其教官訓導功業之多少而爲之殿最

經學學士貳教職掌 學士之職掌通經義明訓詁各精藝其所修之經而教養子弟其教養之法道而弗牽強而弗抑開而弗達待其憤悱而後啓發之凡幼者聽不使問其卒孝論詩書之句讀者使讀九部之經傳 凡學士掌博覽古今之經籍備顧問 直日講者以己牌升善誘堂坐講筵其講于各堂者亦各以其限制進退其直于學堂者朝一人夕一人更入而聽學政夜則宿直于學堂 凡教授正業毛詩鄭玄箋尙書孔安國傳三禮鄭玄註周易王弼韓康伯註左氏傳杜預註公羊傳何休註穀梁傳范甯註論語太宰純古訓孝經孔安國傳國語韋昭註各分經專業修之唯孝經論語學士皆兼通 凡教授子弟循其資性而養之寬者使栗柔者使立愿者使恭亂者使敬擾者使毅直者使溫簡者使廉剛者使塞強者使義勇者使無亂知者使無蕩敏者使固信者使無賊以成其才 以六經成弟子之才德一曰詩以教溫柔淳厚二曰書以教疏通知遠三曰禮以教恭儉莊敬四曰樂以教廣博易良五曰易以教潔靜精微六曰春秋以教屬辭比事 凡春秋二分之釋奠養老承國師之旨各執其事 每月中旬與貳教典句試學生之業察其修否戒其怠惰 凡子弟有故而升堂者與請暇者五日以內聽之五日以外詔于典成其告病者亦如之貳教以下學官有闕則論其才德以告于典成 凡國中有圖書之遺逸賢良之隱滯則承旨而徵求焉其有籌策之可施於時著述之可行於世者則論其才學而詔于國師 月終則考學生出入之名簿而察其勤怠 貳教掌贊學士而教授子弟其通經義明訓詁研究經籍皆如學士 凡春秋二分之釋奠養老承旨各執其事 日直學堂者亦如學士唯日二人以辰牌升堂其一人坐博習堂其一人坐入德堂以視諸生之句讀若學士有故廢講則代之 每月下旬與典句試諸生之句讀 凡諸生有勤怠者則論其殿最而告學士

兵學學士貳教職掌 兵學學士之職掌明六道士略將略兼通七書兵書而教授子弟凡兵學生其卒士略將略之業者教之陣法傳其能通城築之業者教之曲尺傳與戰法是爲小成能明戰法之業而通六道之術者授之大星傳是爲大成 直日講者以己牌升曜武堂坐講筵其直于善誘堂之講者與日直于弘道室者亦如之夜則一人與學士更宿直于弘道室 凡春秋二分之釋奠養老各執其事 每月中旬與兵學貳教試學生之業察其修否戒其怠惰 凡兵學生有故而升堂者與請暇者五日以內

昇堂スレハ必先ツ學官一統講堂ニ於テ總司へ謁見式アリ此時二本入ノ扇子箱ヲ用テ束脩トナス尤是ハ只式ヲ備フル迄ニテ父兄ノ給祿ヨリ差引トナレリ右終リテ總司以下學官一統素讀典句堂ノ間ニ出テ總司正北面シ學官各左右ニ臚列シ會讀素讀ノ生徒南面坐定ルキ總司先ツ朱子ノ白鹿洞揭示ノ文ヲ机上ニ朗讀シ畢レハ經學士一人進ンテ正北面シ見臺ニ向ヒ論孟或ハ孝經ノ類一章ヲ講釋シ畢リテ各退坐ス生徒既ニ退校スレハ學官及典句典筆等ハ復講堂ニ出テ學官令或ハ演說口達書等ヲ讀ムヲ聽キ熨斗ヲ受ケテ退校スルナリ

入學式大抵寛政中學校創立ノ制ニ沿フテ變革アルナシ目見以上士族ノ入學ヲ許スノミニシテ平民ハ勿論目見以下卒族ノ子弟ハ之ヲ許サス但藩主ニ目見ヲ得ル社家醫家ノ子弟ハ之ヲ許ス

士族ノ子弟入學ヲ願フ者ハ必其父兄ノ本官本職ヲ長官へ願書ヲ上申シ許可ヲ得レハ禮服ヲ着ケ時ノ執政參政大監察及己レノ長官へ廻禮シ其上ニテ入學スルナリ入學ノ當人モ禮服シテ父兄若クハ親屬所親ノ案内者ニ從ヒ學校ニ出テ先司監へ入學ノ趣ヲ告ケ夫ヨリ典句典筆ニ告ケテ退キ夫ヨリ總司小司經學書學ノ學士及ヒ屬頭典句典筆ノ宅ニ廻禮ス

例ナリ

職名及俸祿 學校總司一人 學官名國師 用人次席祿額三百石 右以下ノハ此職ニ任スレハ得料ニテ賙フ以下普準之 學校小司三人 學官名典成 長柄奉行次席祿額

百五十石 經學々頭六人 學官名學士 兵學々頭五人 全上 紀傳學頭二人 全上 天文歷學頭一人 全上 諸禮學頭一人 全上 法律學

頭一人 全上 徒士頭次席祿額百石 書學々頭一人 學官名學士 數學々頭一人 全上 武藝師役十餘人 書院番頭次席祿額百

石 學校目付四人 學官名司監 經學添學頭五人 學官名二教 兵學添學頭九人 全上 紀傳添學頭一人 全上 天文曆添學頭一人 全上

上 諸禮添學頭一人 全上 法律添學頭一人 全上 表書院番頭次席祿額五十石 學校書物頭一人 城代嫡子次席祿額四十石

書學添學頭一人 學官名武教 數學添學頭四人 全上 武藝添師役十人 馬回士次席祿額四十石 學校勘定役 學校賄方頭

不過五六 勘定小頭次席祿額三十石 學校物書人 不過五六 留守支配次席祿額三十石 右ハ寛政中學校創立ノ時定ムル所ノ

職名ニシテ當時藩制官名ノ數ニ列セリ文化改革後ハ官名ハ學校ニ存在スレハ官制一列ノ數ニ入ラス例へハ何ノ格ニテ

學校小司何ノ格ニテ學校學士ヲ命スル類ナリ

文化年中學校移轉以來學官職員制左ノ如シ

總司一人 書院大番頭格迄勤之 小司 無定員但大抵不過四人 諸足輕頭ヨリ表書院組頭格迄勤之 司監 定員ナシ但大抵不過七人 使番ヨリ表書

院格迄勤之 勘定方五人 中小姓格ヨリ目見以下留守居支配格迄勤之 玄關番五人前ニ同シ 取次之者六人 目見以

下留守居支配ヨリ長柄之者迄勤之 小使十二人 持槍中間ヨリ掃除小人迄勤之 經學々士四人、和學々士二人、書學々

歲未滿限能卒四部經之業者亦聽居於此三日博習堂使讀史漢四日審問堂授詩書左傳國語五曰廣業堂授禮記儀禮周易六曰成器堂授周禮及法律諸書皆以次進歷々不得躐等

一書學爲小生之急務兩堂生徒自己牌至午牌皆集養正堂而學之數學者十五歲以上聽隨其意學之

一生徒欲兼學兵家之言者十五歲以上聽之其欲專治之者亦隨其意射御劍槍等之術十七歲以上聽學之

一詩文會每月二次生徒學文辭者務待席勿得意情自廢

一凡生徒每名給出恭入敬牌一面入則至司糾廳領牌致諸其堂之監若典句班長出則至司糾還之進退肅整不許喧嘩失禮

一校生申牌後出外問親戚友生至夜而還者不必禁之不許因遊蕩宿於外其在學房不得引外人醉飲止宿

一生徒學雅樂者申牌後會習其休暇日午牌以後不禁爲之若夫散樂諷謠一切不許在學中爲之

一食堂會食務要禮儀肅整日三飯之外不許擅入厨房飲食及送膳於房若疾病不能行履者許使煩夫送房不在禁限

一生徒衣服務要遵儉素不得競華麗移淳朴

一生徒有事故請暇自其堂教官以達小司俟批准

一學校之教禮義爲先孝悌忠信爲本也凡在學者務明斯義隆師親友養成忠厚之心以爲他日之用若乃輕薄浮窳敗風化之類相與鳴鼓而攻之可也

一生徒不在本堂而勤業往來別堂閑談妨業者雖間加禁尙有不已自今已往有非其堂之生徒而來閑談者其堂者教官并班長連督責之勿使妨人之業

右欽遵勿違若不恭則學有常憲

素讀生徒毎日昇堂スレハ先ツ當直典句ニ謁シ名札ヲ板ニ掛ケ次ニ其屬頭典句ニ謁シ夫ヨリ同組各生ニ挨拶シテ席ニ就クナリ業ヲ受クルカ或ハ事アリテ起ツキハ必ス當直伍長ニ告ケ兩便ニ立ツキハ亦必ス之ヲ告ケ禁忌惰ノ札ヲ受ケテ之クナリ疾病事故アリテ不升堂ノ片ハ必ス書面ヲ以テ其故ヲ典句典筆及ヒ兩堂伍長ニ達スルナリ

生徒名簿へ出欠ヲ記スルヲ素讀ハ朝辰ノ刻生徒出揃ノ頃司監臨席シテ晝ハ巳ノ刻夕ハ未ノ刻共ニ三次ナリ會讀各料生出欠ハ其科業時間中司監臨席シテ之ヲ記ス

休暇ハ一六ノ日及五節句トス年末ハ十二月二十一日ヨリ翌年正月二十日迄卅日ノ間暑中ハ定ル休暇ナシ故ニ其月ノ暑度ヲ考ヘテ晝後休暇ヲ命スルナリ

年頭開校ハ毎年正月十七日ヲ以テ定日トス上學官ヨリ下生徒ニ至ルマテ一同禮服ヲ着ケ年頭登城式ノ如シ當日殘ラス

學校構造及建物圖面 學校ハ南向キニテ總体内縁外縁アリ正面ニ階アリ内ノ座鋪ハ五間四面格物堂ト云フ此兩間ハ講堂ナリ其ヨリ奥ハ上段ニテ徳元堂ト云フ是藩主學ニ臨ム時ノ坐位ナリ其左右ニ東房西房アリ次ノ間也講堂ハ釋奠養老及學中總テ禮式ノ間ニシテ講釋ノ日藩士ヲシテ生徒ト共ニ此ニ於テ講義ヲ聽聞セシムル間ナリ右堂ノ左右東西ニ長キ棟アリ西ハ四間ニ八間半養正堂ト云フ十四歳以下ノ生徒素讀習字ノ所ナリ東ヲ志學堂ト云フ同四間ニ八間半ニシテ十五歳以下素讀習字ノ場ナリ兩堂共ニ二間ニ四間ノ典句典筆教授ノ間アリ其背一間ニ四間ノ押入アリ素讀卒業ニシテ會讀ニ進メハ博習堂審問堂廣業堂成器堂アリ其學業ニ隨テ段々ニ操上ルナリ史記漢書左傳國語詩經書經禮記周禮儀禮易經等易キヨリ難キニ進ム習業ノ循序アリテ各其會讀ニ從テ學フナリ數學和學兵學等アリ生徒各其堂ニ就キ學士貳教及ヒ典句ニ從ヒ學フ者トス其外事務席總司小司學校目付物書會計方取次ノ者ノ詰所アリ右ノ外弓馬刀槍稽古ノ場各區別ハ甲號繪圖面ニ詳ナリ 文化年中學校ヲ三之郭ヘ移セシ已來文學一途ニ皈セシヲ以テ其校舍ハ規模ヲ縮メヌリ堂制ハ乙號繪圖ニ詳ナリ

明治四年頃ハ青森ハ寺院弘前ハ重臣ノ宅ヲ以テ學校ニ代用ス故ニ別ニ記スルコトナシ

學校ニテ出版翻刻之書類 素讀生讀本孝經四書五經唐詩選等寛政九年稽古館創立以來漸々彫刻板本出來文政ノ初年ニ至リ一モ欠ルナク完全シ學校彫刻方ニテ印刷シテ廉價ニ拂下ケリ又學校ニテ畧曆ヲ推測シテ上梓スルコト寛政中學校創立ノキヨリ維新ノ日ニ至ルマテ年々ノ例ナリ尤之ヲ學官及生徒ニ頒與スルモ賣却セシニハ非ルナリ學校藏書之數ハ概テ一萬部餘アリ今其目錄散逸シテ取調難ト雖大抵一名ニシテ數十部アルモノハ通計三十部ニ下ラスト云フ而其藏書ハ手形ヲ入レ司監ヨリ借用スルコトヲ得タリ尤損傷スルモ別ニ賠償等ノコトナシ 祭器樂器數學記等ハ完全スト云ヘリ

江戸藩邸學校 江戸藩邸學校ハ舊記ノ徵スヘキモノナクシテ其詳細ナルコトハ今得テ考フヘカラス只舊記中寛政八年弘前稽古館設立ノ際江戸邸ニモ學校ヲ設クトアリ而又文化年中ニ至リ右學校ヲ廢シ素讀教授四人ヲ命ストアリ又安政年中ニ至リ江戸上屋鋪南長屋ヘ學問所再興司讀二人同補三人ヲ置クトアルノミ

舊江戸藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ諭達布令其他學制詳ナラス

士二人、蘭學々士一人、數學々士二人、使番格ヨリ表書院番格迄勤之 經學貳教、和學貳教、書學貳教、蘭學貳教、數學貳教以上員數學士ニ準ス 書院番ヨリ作事吟味役格迄勤之 經學會頭補四人 書院番ヨリ目見已上役迄勤之 經學典句十二人、和學典句四人、書學典句十人、數學典句四人、蘭學典句二人前ニ同シ

子弟其技ニ當ル者二人扶持差遣雇入諸役員席祿無定額本勤有之者其本勤之役祿ニテ相勤本勤無之者ハ其格式ニ準照シテ席祿ヲ差遣候事

學校役制 總司 屬官 小司○總司附屬 司監、學士○小司附屬 貳教、會頭補、典句、典筆、典數、蘭學典句、勘定方、玄關番、小使

生徒概數

寄宿生通學生三百人 右ハ寛政七年學校創立ノ際生徒ノ員數ナレテ記錄ニ三百人ト有之ノミニシテ明細ヲ徵スヘキナキヲ以テ暫ク其記スル所ヲ舉ケ

漢學寄宿生 藩費十人 通學生(不詳) 右ハ慶應二年

寄宿生九十人 內藩費漢學生二十人全洋學生二十人全砲學生十人自費砲學生四十人 右ハ明治三年藥王院寄宿寮生徒

寄宿生九十人餘 內^寄寄宿藩費洋學生三十人 ^前弘同漢英學生六十人餘 右ハ明治四年青森蓮心寺弘前敬應書院寄宿生

員數ナレテ弘前ハ英漢合テ青森ノ倍ト記錄アルノミニシテ明細取調難シ

藩立學校生徒員數詳ナラサレテ文化以后常ニ五六百名ニ過キスト云ヘリ

束脩謝儀 正月十七日開校總司へ謁見式ノ節二本入ノ扇子ヲ以テ束脩トス尤是ハ只其式目ヲ備フル迄ニシテ右代料ハ父兄給祿ノ内ヨリ差引モノトス

學校經費 寛政ノ頃ハ經費定額三千石ノ現數ナリト雖モ其實一万石ニ及ヘリト言傳フ但本校學官俸額ハ此費ヨリ出サ、

ルノ定メニシテ此費ヨリ給スルハ諸雇ノミナリト云ヘリ尤文化五年以后ノ給費支出法モ同様ナリト雖只文化以后ハ經費減縮シテ三百石ノ現數ニシテ外ニ年々米金ノ補助ヲ併セテ五百石餘ナリ

明治四年十月頃ノ經費ハ金五千兩米八百

俵ニシテ諸役員ノ月給學校一切ノ入費共此内ヨリ支辨スルヲトナレリ

藩主臨校 藩主學校ニ臨ムヲ定例アルニ非ス大抵在藩ノ年一兩度ハ臨マル、ナリ其時ハ或ハ學官ニ講釋ヲ命シ或ハ各科

ノ生徒ヲ試ミ賞與等ノ事アレテ別ニ常準アルニ非ルナリ

祭儀 釋奠儀養老式ハ別ニ之ヲ掲ク

毛二十四銅ハ位島目ニシテ差出スコナリ維新後ハ束脩謝儀ナシ
今ノ二厘四毛

學校經費 維新前不詳維新後ハ概數一ケ年四百八拾兩外ニ米二十八石八斗薪炭油ノ補助アリ尤藩士ヘ賦課等ノコナシ

藩主臨校 ナシ

祭儀 聖廟ノ設釋奠執行等ノコナシ

學校構造及建物 別紙繪圖ノ通

學校ニテ出版翻刻セシ書籍及藏書目 出版書籍ナシ藏書目不詳

舊黒石藩

學制

學事上ノ諸制度 學事上進ノ者ニハ年尾ニ至リ多少金員ヲ與ヘ特別ノ者ニハ祿ヲ加増スルコアリ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ヘ必入學セシム然レモ授業時間ノ短縮ナルヲ以テ定時間ノ外各自ノ意向ニ任家塾等ニ

修學セシム 藩費ヲ以テ東京ニ遊學セシメ但シ藩費及人又ハ私費ヲ以テ宗藩弘前ノ稽古館ニ就學スルヲ許ス 毎月六回

執參政ノ宅ニ於テ藩士及生徒ノ上級儒員ノ講義ヲ聽聞セシム其書目ハ重モニ四書五經ノ内ヲ以テス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシノミ藩立學校ヘ入學セシ者ナシ併取テ入學ヲ禁セシニハアラサルナリ

農民ノ學問ニ從事スルヲ禁セシコナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルハ何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得

學校

校名 經學教授所

校舍所在地 黒石市ノ町

沿革要略 藩祖津輕十郎左衛門明暦年中ノ人ハ黒石ニ儒葬セシヲ以テ其儒學ヲ尊崇セシハ推シテ知ルヘシト雖モ舊記ノ據ルナ

キヲ以テ掲クルニ由ナシ七世從五位下津輕甲斐守親足ノ時代即チ文政年中學事稍擴張ニ赴キ續テ近世津輕承叙ノ代ニ

至リ漸次盛隆ヲ著ス

學校創立ハ年代未タ詳ナラス其藩立學校ノ名稱アリシハ蓋シ天保年中ニアランカ

士族卒ノ子弟教育方法 藩立學校ニ入學スルト否トハ各自ノ隨意ニ任セ又藩費ヲ以テ他國ニ遊學ヲ命スルモハ毎月金七兩宛ヲ給スル例ニシテ自費遊學志願ノ者ハ皆之ヲ許セリ

平民ノ子弟教育方法 平民ツリテ學問スルハ苦カラス而藩立ニ入學スルコト亦隨意ナリシ

學校

校名 創立以來學校トノミ唱ヘ尤武藝ノ方ハ稽古所ト稱シタリ

校舎所在地 校舎ハ舊城内今ノ八幡町ニ設置セリ

沿革要畧 舊八戸藩學校ハ文政年間南部信真時代ニ創立セリ其詳ナルコトハ今得テ考フ可ラサレモ登時羽州秋田ヨリ儒者古學菊池大叔ヲ聘シ藩士齋藤金彌室岡元ト與ニ教授ヲ掌ラシメタリト云フ其後慶應元年頃英學科ヲ置キ明治四年廢藩置

縣ノ際學校廢絶ス 學事盡力者及學士等ノ小傳行事詳ナラス

教則 教科書 和學ハ古事記、舊事記、萬葉集、漢學ハ四書、五經、易知錄、資治通鑑、八大家、文章軌範、十三經、二十一史、

小學内外篇、兵學ハ七書、武經門宗、武門要鑑抄、洋學ハ詳ナラス

授業ハ都テ素讀ヨリ漸次講義ニ及ホシ又時々詩文作ヲナサシムルナリ

授業ノ時間ハ素讀ハ朝六ツ時ヨリ始メ同四時ニ終リ講義ハ毎月一六二七五十等學科ニヨリテ全カラズ

學科學規試驗法及諸則 學科ハ和漢洋學兵學習禮等ニシテ一科專修ト二科以上兼修スルトハ生徒ノ勝手ナリ文武二道モ同斷文武

ノ程度ハ精密ニ比較シ難キモ大凡四書ノ大義ニ通スルモノハ武藝ノ目錄位ニ該當スト云ヘリ其他試驗及賞與罰則等ナシ學習年限亦一定ノ規ナシ只九、十歳ヨリ廿四歳マテ習學スル風習ナリ又入學ノ時ハ必ス禮服ヲ着スルコトナレモ師範

家ニテ誓約スル故別段回禮ヲナサズ

職名俸祿 維新前ハ學校職員ニ名稱ナシ維新後ハ學督大學監小學監事務掛教授學校守等ノ職名アリ而皆准格兼役ニ付役

料トシテ年二兩ヨリ十二兩迄ヲ給シ維新前ハ概テ年五兩位ノ役料ナリト云フ

職員概數 維新前ハ學校守一人小使二人教員一科ニ一名宛維新後ハ學督一人大學監一人小學監二人事務掛兼ス教員每級級數ヲ三等ニ

分一人小使二人アリ

生徒概數 維新前不詳維新後寄宿生廿名通學生五十名程アリ尤寄宿生ハ悉皆藩費ナリ

束脩謝儀 束脩ハ身分ニ應シテ五十疋乃至十疋位一疋ハ今ノ壹錢ニ當ル謝儀ハ五月十二月ノ二季ニ三十二銅乃至二十四銅位三十二銅ハ今ノ三厘ニ

分ハ家塾其ノ一分ヲ削リ武禮ノ時各其席ノ末ニ坐セシム二三男ハ設令給仕セシムルトモ勤料不賜事トアレハ爲メニ大ニ學事振起ノ基ヒヲナセルカ如シ

平民ノ子弟教育方法 通常家塾寺子屋ニテ適宜修學セシムルヲ以テ例トナセ凡志願ノ者ハ藩立學校ヘ入學スルヲ許セシモアリテ家塾寺子屋ニ從事スルヲ禁止セシ等ノ制令有ル事ナシ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルモ他ノ檢束ヲ受クルナク何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得タリ

學校

校名 徽典館

校舍所在地 舊福山城外郭內

沿革要畧 徽典館ハ文政五年ノ創立ニシテ當時ノ藩主松前章廣藩儒杉村傳五郎朱子學者平沼蕩平ノ二人ヲ登庸シテ學制ヲ掌ラシム此ノ二人カヲ合セテ子弟ヲ教育シ諄々倦マズ爾來日ヲ追テ藩學ノ盛ナリシ所以ノモノハ主トシテ此ノ二人ノ力ニ由レリ因ニ云フ文化八年ノ頃一時幕府ノ直轄タリシ日ニ當テ倡教館ナル學館ヲ建設シテ子弟ヲ教導セシカ顧フニ此ノ徽典館ナルモノハ直ニ倡教館ヲ引續キシモノナラン乎今詳カナラス天保十年朱子學者山田三郎ヲ民間ヨリ拔擢シテ督學ニ任ス其後故アツテ職ヲ免シ安政ノ度藩儒關左守ヲ以テ之ニ代フ降テ明治元年十一月五日徽典館兵燹ニ罹リ書籍文書ニ至ル迄悉ク灰燼ニ歸スルヲ以テ舊記ノ文獻ヲ徵スルニ足ルモノ一モ存スルヲナシ

教則 明治以前詳カナラス同以後ハ別紙學制ニアリ

學科學規試驗法及諸則 專ラ漢學習字ヲ教授ス其他詳カナラス

職名及俸祿 督學教授方句讀師助教等ニシテ秩祿ニ定規ナシト雖凡督學教授方ハ大凡百石ヨリ百五十石迄ヲ例トシ中書院ノ名義ヲ以テ上士相當ノ身分取扱ヲナセリ

職員概數 大凡十餘人

生徒概數 凡五百人餘內寄宿生徒十五人餘アリテ食料薪炭油共自費ヲ以テ支辨スルヲ例トナセ凡藩主ヨリ入學ヲ命スル者ニ限り藩費ヲ給スルヲモアリタリ

束脩謝儀 束脩謝儀共ニナシ

學校經費 詳カナラス

學校ニ關係アル著名ナル學士氏名 上田與五郎、長崎勘介、畑井多仲
 教則 教科用書ハ十三經、二十一史 每朝二時間教授
 學科學規試驗法及諸則

學科ハ經學、歷史 本校ニ於テ武術ヲ教授セス 學習ノ期限ナシ大抵年齡七八歲ヨリ入學シ其學科終ルト否トヲ問ハ
 ス十六七歳ニ至リ退學ス或ハ二十五六歳迄學習スルモノ亦之レアリ 春秋ノ試験ハ執政若クハ參政ノ宅ニ生徒ヲ召集
 シ素讀或ハ講義ヲ試験シ其優劣ニ依リ適宜其賞品ヲ授與ス

入學許可ヲ得シ者ハ師範家ヘ回禮スルモ必スシモ禮服ヲ着シルヲ要セス
 職名及俸給 督學一人 教授二人 助教四人 史生三人

職員概數 教員六人 事務員四人

生徒概數 通學生徒凡百人寄宿生ナシ

束脩謝儀 各自應分ノ束脩アリ

學校經費 一周年ノ學費米二百石ヲ以テ充之

藩主臨校 藩主臨校ナシ藩主在邑ノキハ一回生徒ヲ藩廳ニ召集シ一人毎ニ試験シ生徒ニ賞品ヲ與ヘ教員ニ酒肴ヲ賜フ
 祭儀 ナシ

學校構造及建物圖面 人家ヲ借テ之ニ充ツ故ニ圖面等別ニ記載セス

舊館藩

學制

學事上ノ諸制度 別紙ニアリ其他詳カナラス

士族卒ノ子弟教育方法 明治以前ニ在テハ士族卒ノ子弟ヲシテ藩立學校ヘ入學セシムルハ各自ノ意向ニ任セ家塾寺子屋

ニテ修學スルモ亦適宜ナリシカ勤仕ノ者ト雖壯年ノ者ハ餘暇ヲ以テ出校勤學イタスヘキ旨屢々諭達アリシヲ以テミ
 レハ當時藩主ノ用意如何ヲ知ルニ足ラン加之學業上達ノ者アルハ藩費ヲ以テ江戸聖堂ニ遊學セシメ又ハ宇內周遊名
 義ヲ以テ日本全國ノ漫遊ヲ命セシ例モアレハ學事獎勵上許多ノ功力ヲ有セシヲナラン降テ文武局ノ開設以來別紙學制
 ニ掲クルカ如ク士族卒ノ子弟ニシテ十八歳ニ至リ文ハ二等ノ科ニ盈タス劔ハ初傳ノ許ヲ得ルヲ能ハサルモノハ當主ノ

各其席ノ末ニ坐セシム二三男ハ設令給仕セシムルトモ勸料不賜事

文ハ三等ノ科ニ盈チ武ハ初傳ノ許ヲ取ルモノ二三男ト雖凡破格登庸スル事

武ハ三等ノ科ニ盈チ文ハ二等ノ科ニ至ルモノ前例ニ效フ事

市街村落ノ民ト雖凡有志受業ノ時ハ尙此例ニ隨フ事

右之條相達候

已七月朔日

舊米澤藩

學制

學事上ノ諸制度

米澤藩ハ上杉謙信^{第一}代

兵馬ヲ以テ武威ヲ關東ニ輝カセシ餘風ヲ繼續シテ武ヲ以テ藩風ト定メタルカ故ニ景勝^{第二}代定勝^{第三}代

ノ時ニハ文學ヲ獎勵セシヲナシ景勝ノ時慶長八年十月條書ヲ以テ諸士ニ布令セシ條中ニ

一奉公ノ透ニハ武藝之嗜武具馬具鐵砲道具之拵世慮之拵萬事ニ付不可有油斷(前後節略)定勝以後家督相續ノ後必ス

條書ヲ以テ一藩ノ制規ヲ布令スルヲ例トセリ而シテ定勝綱勝^{第四}代^{第五}代時ハ景勝ノ條書ヲ敷衍スルモノニシテ武道ノ

獎勵ヲ專旨ト爲セリ文學弓馬ヲ並稱シテ藩士ニ布令セシハ綱憲^{第五}代延寶七年ノ條書ヲ始トス

一家中之輩知行扶持等近年爲減少故拂所帶之經營忘武士之法式兵具等猥不可沽却當家代々以武名勵奉公之間彌可抽

忠勤餘力之節者文學弓馬之法式可心掛之事(前後節略) 延寶七年十月八日

吉憲^{第六}代寶永三年ノ條書ハ綱憲ノ條書ヲ潤色セシモノトス

一家中ノ輩忘武士之法式兵器等猥不可沽却尤勵武名可抽忠孝餘力之節ハ文學弓馬之修練專可嗜之家宅妻財之美麗ヲ

好ミ無益ノ費令貧窮輩有之者可爲曲事事(前後節略) 寶永三年六月十九日

宗憲^{第七}代宗房^{第八}代重定^{第九}代皆吉憲ノ條書ヲ祖述シテ藩士ニ布令セシト見ヘタリ重定ノ時延享四年八月家老ヨリ重定ノ旨

趣ヲ奉シテ諸隊長ニ告諭セシヲアリ

一文學相心懸候輩稀々ニハ有之候得共近年是亦段々怠リ鞠等打寄相慰候方ニ相聞候依之諸士之儀ハ右體之慰有之程之餘隙之輩者前條之心懸可有モノト被思召候表立申渡ニハ無之候頭々右之心得ヲ以寄々致沙汰候ハ、自然ト御家

藩主臨校 春秋兩度藩主自ラ臨校アリテ定期ノ試業ヲ行ヒ且ツ臨時ニ臨校シテ生徒ノ學業ヲ試ミ優等ノ者アル片ハ格式ヲ昇進セシメ或ハ賞品ヲ賜ル等臨機賞典ノ舉アリ

祭儀 毎年正月開校ノ日ヲ以テ聖像ヲ講堂ニ祭り上ミ藩主ヨリ下生徒ニ至ル迄順次拜禮シテ退ク

學校構造及建物圖面 別紙ニアリ

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書ノ種類部數 孝經ノ木製活板一組アリ藏書ノ種類部數詳カナラス

學制寫

第一等(素讀生)寄合席ノ子弟ヨリ下足輕ノ子弟ニ至ル迄九歲ヨリ十二歲ノ冬十一月ニ至ル 白鹿洞揭示(諸誦)人ノ人タル道盡ク揭示ニアリ

實ニ万學ノ淵源ニシテ下ニ列スル所ノ書盡ク流派ヲ此ヨリ發ス 小學、四書、詩書、舊事記年齡十三以上ニ至ルモノ

素讀ノ科不終モノハ猶ホ此等ニ屬ス

第二等(復講生)〔毎朝順番ヲ立テ一等生ヘ素讀ヲ教ヘ終テ各業ニ就ク〕寄合席ヨリ下足輕ノ子弟ニ至ル迄十三歲ヨリ十五歲ノ冬十一月ニ至ル 小學、孟

子、上等ノ人ヨリ講ヲ聽キ即日午後其聽ク所ヲ輪講ス 古事記、日本外史、十八史略、國史略(獨見)年齡十六歲以上ニ

至ルモノ復講ノ科不終モノ猶ホ此等ニ屬ス

第三等(講義生)〔毎朝順番ヲ立テ二等ノモノ〕寄合席ヨリ下足輕ノ子弟ニ至ルマテ十六歲ヨリ十八歲ノ冬十一月ニ至ル 大學、論

語、上等ノ人ニ不審ヲキ、午後會日ヲ定メテ義理ヲ講習ス 會頭ハ助教ヨリ勤ム 二等ノモノ午後復講ノ時ハ三等

生ヨリ會頭ヲ勤ム 日本記、溫史、大日本史(獨見)年齡十九歲ヨリ二十一歲ニ至ルモノ三等ノ科ニ盈タサルモノハ猶

此等ニ屬ス

十三歲ニシテ初メテ劍道ヲ學ハシム 十三歲ヨリ十五歲ノ十二月ニ至リ初傳ヲ受クルモノヲ一等トス 十六歲ヨリ

十八歲十一月ニ至リ目錄ヲ受ルモノヲ二等トス 十九歲ヨリ二十一歲ノ十一月ニ至リ免狀ヲ受クルモノヲ三等トス

十四歲ニシテ初メテ操練ヲ學ハシム 生兵六ヶ月入精ノ上小隊人員ニ階進ノ者ヲ一等トス 小隊六ヶ月ニシテ大

隊人員ニ進入スル者ヲ二等トス 大隊六ヶ月ニシテ撤兵聯隊ノ人員ニ階進スルモノヲ三等トス但十歲ヨリ十五歲樂

手ニ有志ノ者ハ之ヲ學ハシム

局中順席ノ儀ハ各業ノ成否ニ仍テ定ム敢テ爵祿ニカ、ハラサル事

十八歲ニ至リ文ハ二等ノ科ニ盈タス劔ハ初傳ノ許ヲ得ルヲ能ハサルモノハ當主ノ分ハ家祿其ノ一分ヲ削リ式禮ノ時

士族卒ノ子弟教育方法 本藩從來士族卒ノ子弟藩立學校へ必ス入學スルノ制ヲ設クルヲ無シ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學スルヲモ自由タリト雖モ治憲已後學事ヲ獎勵シ一藩ノ人心文學ニ向ヘルヲ以テ士族タル者儒學ニ從事セサルナク儒學ニ從事スルモノ藩立學校ニ通學セサルナシ卒ノ子弟ニ至テハ薄祿ニシテ資力ニ乏シキヲ以テ學業ニ從事スルモノ百中ノ一ニ過キスト雖モ亦多ク藩立學校ニ通學セリ

安永五年學校ヲ再興シ藩士俊秀ノ者二十名ヲ撰拔シ三ヶ年定詰勤學ヲ命ス之ヲ稱シテ諸生ト云フ飲食炭油等藩費ヲ以テ之ヲ給ス謹慎勉勵ニシテ成學ノ目途アル者滿期ニ際シ一年或ハ二三年延期滯學ヲ命スルヲアリ或ハ退館ノ後再勤學再々勤學ヲ命スルヲアリ

藩士ノ中自費ヲ以テ定詰勤學ヲ情願スル者ハ其人ヲ撰テ入學セシム諸生ノ塾ニ寄寓ス之ヲ名ケテ寄塾生ト云フ文化十四年ヨリ門閥組侍ノ子弟一兩名ヲ撰テ寄塾生ヲ命スルヲ恒トス飲食炭油藩費ヲ以テ支給スルヲ諸生ニ異ナラス之ヲ稱シテ賄寄塾ト云フ文政十二年以降門閥ニアラスト雖モ秀才ノ者ヲ以テ賄寄塾ト爲スヲアリ總監提學儒者家ノ嫡子モ亦之ヲ命ス

中古以前寄塾生在學期限ヲ定メス長短其情願ニ任カス寛政十年八月在學期ヲ滿三年トス文化十年寄塾生ヲ廢シ同十五年正月之ヲ復ス此時ヨリ滿一ヶ年ト定ム而シテ勉勵者ハ諸生伍長ノ具狀ヲ以テ學職ノ者ヨリ一ヶ年勤學志願勝手タルヘキ旨ヲ告達ス其者再願スレハ政府乃チ之ヲ允可ス

學校日課會業詩會ハ諸生寄塾生ニアラスト雖モ藩士ヨリ出席センヲ學校ニ乞フ者アレハ出席シテ勉學セシムル都テ定詰生ニ異ナルヲナシ

學校再興以前ハ藩費ヲ以テ他國ニ遊學セシムルノ事ナシ再興ノ後俊秀ノ者江戸ニ勤學セシムルノ制ヲ設ク多ク學校定詰ヨリ之ヲ撰拔ス始ハ細井平洲カ門ニ限リ後ニハ古賀氏ノ門ニ限レリ精里侗庵謹堂ノ時ニ至リ綿々絶セス本藩ノ學職ニ昇ル者必ス此中ヨリ出ツ年期ハ三年ヲ定限トス滿期後一二ヶ年ノ留學ヲ命スルヲアリ又再勤學再々勤學ヲ命スルヲアリ或ハ一ヶ年二ヶ年ヲ以テ期限トナシタルヲアリ是等ハ皆臨機ノ沙汰トス而シテ皆一ヶ年金拾貳兩ヲ給ス別ニ師家謝禮金トシテ盆中金壹兩貳分歲暮壹兩貳分ヲ給スルヲ常法トス

藩士ノ自費遊學ヲ出願スル者ハ之ヲ許ス師家ハ其者ノ旨意ニ任カセ敢テ牽制セス藩士上府ノ年ニ限リ金壹兩ヲ賜テ其勉勵ヲ賞スルヲ例トス

治憲曾テ藩士神保甲作ニ命シテ諸國ヲ遊歷セシム其衣食ノ定秩ヲ分テ遊學ノ資ト爲ス甲作京師長崎諸國ヲ遊歷シ數年

中之輩心懸モ可然方可有之モノト御内々御沙汰之趣各へ心得申談置候事(八月)

治憲^{第十代}ニ至テ大ニ儒學ヲ尊崇シ藩士ヲ獎勵シテ學事ニ從事セシム安永五年家老ヨリ江戸邸ニ在役セシ藩士ニ達タル書アリ

文武修行之事兼々被仰出候得者何モ怠ルマシキ事ニ候へ共公務ニ無隙又ハ家事之苦世話ニ心ナラス進ミカタキ事モ可有之候去ナカラ此表詰合之義ハ御用之外爲差用所モ有之間敷候へハ何卒兩道之出精致候様ニトノ御内慮ニ候
一 一六ノ日細井先生御招於鉄仙之間孟子之講釋被聞候間其節右拜聽被仰付候

一片山代次郎へ於御物見講釋被仰付候間勝手次第出席聽聞可有之候尤素讀會讀等之發端有之様ニト被思召候
一大御門脇御長屋之内武藝所補理被仰付候間於此所稽古可有之候仍之流儀相極候面々名前相記早々御小姓頭迄可差出候且流儀々々稽古道具之御用意ヲ以御借渡可有之候ニ付是亦同様可被申出候

右之通御内意ニ付申達候以上(五月廿日)

治廣^{第十代}ノ時寛政元年興讓館勤學生撰舉ノヲ諸隊長ニ令スル左ノ如シ

今度別紙之通學館諸生交代之節以來諸組頭へモ書上可被仰付旨被仰出候尤組離之面々は迄之通相應之人物於有之者入館可被仰付候間一統書上之節可被存其旨候(三月)

興讓館學生是迄ハ片山紀兵衛書上而已ヲ以被仰付候處自今改テ諸組頭々へモ被仰付候學問之事者文字ヲ知故事ヲ覺候爲ノミニ無之才德ヲ磨キ人之人タル道ヲ學ヒ得候タメニテ候文字ヲ知文ヲ能書トモ學問ノ本意ヲ失ヒ候テハ徒ナル事ニ候假令當時文學ニ不取懸候共行跡オトナシク正敷モノ此上學問ヲ勵ミ末々御用ニモ可相立人柄兼テ心ヲ付其時々可被書上候(三月)

興讓館學生退館之後定詰勤學之効ヲ以テ家内親睦朋友之交モ格別ニ相見候モノ有之ニオイテハ是亦支配頭組頭追々可被申聞候事(三月)

片山紀兵衛ハ當時興讓館提學ナリ天明七年累年ノ飢饉ヲ以テ提學一人ヲ減シ興讓館定詰勤學生ヲ減省ス人心競ハス學事退歩ノ勢アルヲ以テ此命ヲ發セシナリ本年七月提學及ヒ學生定員ヲ故ニ復ス此時諸隊長ニ撰舉ヲ命セスシテ官ヨリ直ニ學生ヲ命シタリ此後諸隊長ハ其隊下ノ人物ヲ豫テ政府或ハ提學ニ薦舉シ政府ニ於テハ提學ニノミ撰舉ヲ命スルヲ恒例トス

學業上進ノ者ニ加役米又ハ引米等ノ名義ヲ以テ徵課セシ間接ノ祿稅ヲ免除スルカ如キ獎勵法ノ類ハ設置セシナシ

學校

校名 本藩學校ハ創設ノ際名稱ナシ單ニ學校ト稱ス安永五年再興以來稱シテ興讓館ト云フ學制領布ニ至ルマテ名稱ニ變更ナシ

校舍所在地 校舍ハ米澤主水町ニ在リ始ハ細工町ニ在リシカ元治元年四月類焼ノ災ニ罹リシ時今ノ地ニ轉セリ此地ニハ已ニ演武校ノ設アルヲ以テ士族ノ子弟ニ文武ヲ兼學スルノ便ヲ與フルカ爲メナリ

沿革要畧 藩主景勝^{第二}ノ時禪林寺僧九山ヲ以テ世子定勝ノ師トス定勝^{第三}ノ時寛永十三年始テ儒職ヲ置キ佐野玄譽齋清

順ヲ以テ之ニ任ス清順ハ修驗ニシテ明鏡院ト云フ蓄髮シテ今ノ名ニ改ム綱勝^{第四}ノ時慶安三年近江ノ人北島瑞伯ヲ聘

シ儒醫ノ職ニ兼任ス然此數名皆世子ヲ教導スルニ止リ學校ノ設ナシ是ヨリ後ハ多ク儒醫ヲ兼スルヲ恒トス綱憲^{第五}

ノ時ニ至リ矢尾板三印ト云フ者儒醫ノ職ニ在リシニ聖堂ヲ其邸地ニ創造シテ私ニ春秋ノ釋奠ヲ行ヘリ^{三印カ邸ハ細代}此時

ニ方リ將軍綱吉儒學ヲ尊崇シ江戸神田ニ聖堂ヲ造營シ釋奠ノ儀ヲ行フ是ニ於テ諸藩聖堂ヲ設立スル者多シ元祿十年十

月綱憲三印カ私立聖堂ヲ改造シ聖堂ノ側ニ新ニ學校ヲ建築シテ之ヲ三印ニ附ス本藩學校ノ始メナリ三印ニ繼テ儒職ニ

昇ル者ヲ片山元信ト云フ乃チ聖堂及ヒ學校ヲ元信ニ附ス是ヨリ後ハ元信ノ子孫相繼テ學職ニ居ルヲ以テ學校自ラ片山

氏ノ住宅ト爲レリ初メ綱憲學校ヲ創設スト雖モ學事振ハス藩力モ亦年ヲ追テ疲弊セシヲ以テ重定^{第九}ノ時ニ至テ衰頽

ヲ極メタリ治憲^{第十}繼テ立ニ及テ大ニ之ヲ憂ヒ安永五年二月學校ヲ興復シ名ケテ興讓館ト云フ片山氏ヲ鄰邸ニ移シテ

學校ノ地域ヲ大ニシ新ニ塾舎ヲ造營ス四月提學二名ヲ置キ片山紀兵衛神保容助ヲ以テ之ニ充ツ始テ俊秀ノ藩士二十人

ヲ選ミ興讓館定詰勤學ヲ命ス諸生ト云フ日通生ノ訓導ヲ兼ヌ二十員各其拔生徒ヲ定メ講堂ニ於テ朝餐前童生ニ句讀ヲ

授ク朝餐後ハ講堂ニ會シテ日課會業ヲ勤メ提學ノ教導ヲ受ク又自費ヲ以テ定詰勤學ヲ出願スル者アレハ其人ヲ選テ諸

生ノ塾ニ寄寓セシム寄塾生ト云フ炭油食料等當時ノ實價ニ拘ハラス廉價ノ定法ヲ立テ之ヲ收入ス五月細井甚三郎ヲ江

戸ヨリ招請シテ學事ヲ諮問ス甚三郎姓ハ紀氏名德民平洲ト號ス尾張ノ人ナリ治憲嘗テ之ヲ聘シ學ヲ受ク此年米澤ニ來

ルニ及テ治憲弟子ノ禮ヲ執リ提學及ヒ吏員ヲシテ國境ニ迎ヘシメ藩士皆禮服ヲ着シテ平洲カ安着ヲ賀ス之ヲ禮スル極

メテ厚シ平洲四九ノ日興讓館ニ於テ講義ヲ爲ス治憲令シテ學生及ヒ藩士ニ聽聞セシム治憲又時ニ講筵ヲ殿中ニ設ク公

族及ヒ支候モ亦平洲ヲ其殿中ニ請テ講義セシム此時ニ當リ侍頭^{七手}隊長^{三馬廻}宰配頭^{三馬廻}ノ輩爭テ兩提學ヲ其家ニ延キ隊下ノ士

ヲシテ講義ヲ聽聞セシム家老ヲ始メ門閥ノ士大夫相習テ提學ノ講義ヲ其家ニ設クルヲ榮譽ト爲ス講義風ヲ爲シ足輕以

ヲ經テ販藩セリ而シテ得ル所アルヲ見ス故ヲ以テ此後ハ遊歷生ヲ命スルヲナシ

講義ハ毎月二七ノ日提學督學總監助教講堂ニ於テ交番ニ之ヲ爲ス諸生寄塾生ハ御成坐敷二ノ間ニ坐シテ聽聞ス上段ノ間ハ藩士
臨校ノ坐ト定メ

常ニ之ヲ藩士并ニ通學生ハ講堂及ヒ講堂次ノ間以下ニ於テ聽聞ス藩士ハ必ス聽聞セシムルノ制アルニアラス組頭番頭等
閉鎖セリ

其組下番下ヲ勸誘スルヲアリ再興ノ際三馬廻宰配頭三十人頭等講義聽聞ヲ學校ヘ申入扇子箱二本一箱ツ、ヲ提學ニ呈

致ス御成坐敷二ノ間ニ於テ聽聞ス中古以後扇子箱ヲ呈致スルノ事アルヲ見ス又外人ハ悉ク講堂ニ於テ聽聞ス

安永五年九月細井平洲來藩滯留中四九ノ日講堂ニ於テ講義ス開講ノ初日聽聞人麻上下ヲ着ス其後正月八日ヲ以テ毎年

開講ノ日ト定メ聽聞人禮服ヲ着スルヲ例トス

外來藩士一ケ年講義聽聞無欠ノ者ハ開講ノ日酒ヲ賜テ之ヲ賞ス無欠年數繼續スル者更ニ之ヲ賞ス年數多少ヲ以テ物ヲ

賜フモ亦差アリ

聽聞人ノ調査ハ再興ノ際帳簿ヲ備ヘ置キテ聽聞人ヲシテ姓名ヲ自記セシム後ニハ鎗掛ノ間ヘ札申ヲ備ヘ各自姓名ヲ紙

札ニ記シテ之ヲ札申ニ刺插セシム學校當直生其紙札ヲ検査シ外來藩士ノ姓名及ヒ通學生人員ノ總數ヲ日記ニ記錄ス

友于堂通學生ハ登堂スル者必ス聽聞セサルヲ得ス朝素讀生ハ必ス聽聞スルヲ要セス然ト雖モ朝素讀生友于堂生登堂無

欠出精ノ者モ亦開講ノ日講義ヲ聽聞セシメ酒ヲ賜テ之ヲ賞シ登堂無欠年數繼續スル者物ヲ賜フモ亦外來藩士講義聽聞

年數繼續ヲ賞スルノ例ニ異ナラス

農商僧侶修驗ノ輩友于堂ニ登堂スル者講義聽聞藩士ノ子弟ト同シ登堂セサル者ト雖モ勝手ニ聽聞スルヲ得然モ友于

堂生ニアラスシテ毎ニ出席聽聞セシ者終古一兩名ニ過キス

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ハ別ニ教育ノ方法ヲ設ケス家塾寺子屋ニテ修學スル者多シ藩立學校ヘ入學スルヲハ許

可セルト雖モ學校ニ通學スル者ハ實ニ千中ノ一ニ過キス司農官更ハ農民ノ學業ニ從事スルヲ以テ農務ヲ怠ルノ基ト爲

シ之ヲ厭忌セルヲ以テ其子弟習字ヲ專ラトス稀ニ算術ヲ學フ者アリ儒學ニ至テハ殆ント跡ヲ絶テリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルモノハ他ノ檢束ヲ受クルヲナク何人タリモ自由ニ開設スルヲ得家塾寺

子屋ノ學徒ハ官ヨリ之ニ關涉スルヲナシ但祐筆役筆頭ヨリ米澤城下習字師範ノ者ニ令シテ其門弟子族平民ヲ論セス春

秋二回清書ヲ出サシメ甲乙ヲ判シ甲ナル者數名ヲ撰ミ乙以下ノ清書ヲ當撰ノ者ニ配與シテ習字ヲ獎勵ス之ヲ稱シテ御

前清書ト云フ藩主ノ覽ニ供スルノ謂ナリ村落ノ家塾寺子屋ハ御前清書等ノ事ナシ

十一年去年ヨリ試業取立ニ出精セシヲ以テ督學ニ綿三把主事ニ金千疋ヲ賜テ之ヲ賞ス是ヨリ先キ諸生ノ塾舎東西兩棟アリ是ニ於テ東塾ヲ廢シテ東塾ノ諸生ヲ盡ク西塾ニ合ス此時ニ當リテ諸生二十員寄塾生三十一員ニ至レリ同十月讀長ヲ減シテ一員トナシ助生十二人更ニ命シテ助讀トナシ友于堂ニ通勤シ讀長ヲ補助シテ生徒ヲ教授セシム又上坐生十人ヲ置キ讀長助讀ノ佐ト爲ス同十二年始テ助教ヲ置キ提學ヲ補助セシム學校定詰タリ享和三年五月辨志敬業教授ノ三局ヲ友于堂博習局ノ北ニ建築ス東西四間南北十四間強ナリ從來ノ助讀ヲ廢シ更ニ助讀八員ヲ置キ學校定詰ト爲シ別ニ三塾ヲ三局ノ南ニ設ケ之ニ居ラシム讀長ハ元ノ如シ而シテ塾ヲ博習局ノ北ニ建テ之ニ居ラシム又助教ノ學校定詰ヲ改テ通勤ト爲ス十一月執政執事興讓館ニ入テ諸生寄塾生及ヒ通學生ノ業ヲ試ム秀逸生三十餘人ヲ撰ム五日ヲ越ヘテ治廣興讓館ニ臨ミ諸生寄塾生及ヒ秀逸生ヲ試験ス畢テ樽酒ヲ賜フ別ニ酒脯ヲ進業生ニ賜フ各々差アリ是ニ於テ學事又隆盛ノ運ニ赴ケリ此後諸生寄塾生及ヒ通學生ノ試験ニハ執政執事必ス之ニ臨席ス藩主モ亦臨ムヲアリ文化三年好生堂ヲ學校域中ニ再建シ金錢ノ事一切學校主財ノ吏ヲシテ兼務セシム初メ平賀源内ト云者^{舊名佐藤平三郎}江戶ニ在テ本草ヲ曉通シ能ク藥性ヲ諳セリ^{或ハ讀破邊ノ人ナリト云フ}白川侯之ヲ招キ藥園ヲ闢テ醫生ヲシテ本草ヲ習ヒ藥性ノ事ヲ學ハシム本藩家老莅戸善政此事ヲ聞テ治憲ニ建議シ寬政四年平賀源内ヲ聘シ醫生ヲシテ本草ノ學ヲ講習セシム明年新ニ好生堂ヲ屋代町ニ建テ藥園ヲ開キ藥草ヲ植ヘ生徒ヲ置テ栽培ノ方製造ノ法ヲ習熟セシメ且醫生數十人ヲシテ肄業セシム其書ハ大抵本草、陸機艸木疏、天工開物等ナリ居ルヲ二年源内江戶ニ皈リ好生堂暫ク廢シテ國產役場ト爲レリ是ニ於テ好生堂ヲ再興シテ飯田幽淵ヲ以テ總裁ト爲シ翌四年四月開業ノ式アリ醫生ヲシテ業ニ就キ醫書ヲ講習セシム同九年治廣致仕シ齊定^{第十二代}繼ク猶ホ治憲ノ意ヲ承遵シテ政務ヲ行フ同十年幕府紅葉山靈屋修繕ヲ本藩ニ命ス本藩四民ニ課シテ金ヲ出サシム因テ大ニ節儉ヲ行フ此時寄塾生ヲ廢シ友于堂ヲ閉鎖シ讀長助讀上坐生ヲ罷メ好生堂ヲ廢シ開講ニ酒ヲ賜フヲ停ム學事又衰頹ノ勢ヲ爲セリ同十三年凡ソ諸官司紅葉山ノ役ヲ以テ廢セシ者盡ク舊ニ復ス四月片山長左衛門一興ヲ以テ興讓館總監ト爲ス曰ク館中一跡ノ事安永五年再興ノ初ニ復スト而シテ獨リ友于堂ノミ復セス遂ニ友于堂ヲ毀チ博習一局ヲ存シテ友于堂ト爲ス蓋シ從來ノ友于堂盛大ニシテ潛力ニ過キ維持ノ法ヲ得サルトスルナリ此後十五六歲成童以上ニシテ師長ノ句讀ヲ受ケス自ラ書ヲ讀ミ義ヲ講スルヲ得ル者ヲシテ友于堂ニ入テ學ハシメ讀長ヲ置カス助讀三員ヲ置キ諸生二十人ノ中ヨリ之ヲ兼示シム三助讀日ヲ分テ友于堂ニ出勤シ生徒ノ業ヲ督課シ上席生五人ヲ置テ之ヲ佐ケシム同十四年九月特旨ヲ以テ廣居出雲^門島津喜七郎^{江戶派者左京卿子}ニ寄塾生ヲ命ス官費ヲ以テ之ニ支給ス是ヨリ門閥十三家ニ限リ一兩名官費ヲ以テ寄塾ヲ命スルヲ例トス同十五年正月寄塾生ヲ復シ八人ノ出願ヲ允^メ是ヨリ寄塾生ノ定員ヲ十八ト爲ス文政二年香坂登提

下工商ノ輩或ハ一隊或ハ一町連署シ平洲ノ講義ヲ聽聞セシヲ請願ス是ニ於テ國中駭々トシテ學事ヲ尊崇シ農兒商童唐詩選ヲ吟詠シテ街巷ヲ行歩スルニ至レリ十二月提學ノ學校定詰ヲ改メテ通勤ト爲ス官府定詰勤學生ヲ待スル甚タ厚シ三時ノ飯モ極テ注意シ詩會ニハ必ス宴ヲ賜フ諸生舉テ詩會ノ宴ヲ辭シ且菜料ヲ減センヲ提學ニ建議ス同七年政府令達左ノ如シ

何モ深切之中出ニ候ヘ共根元野菜ハ人々口腹ヲ養ヒ候タメニ候ヘハ甚惡敷候テハ各之不爲ニ候ヘハ是迄之通此末モ被成下且又詩會御酒モ是迄之通此末モ可被成下御趣意ニ候ヘ共左候テハ深切之意不相建ニ付以來月ニ一度ツ、被成下候事(安永七五月廿七日)

天明五年二月治憲致仕シ治廣^{第十}繼ク而シテ政務ノ事多ク治憲ノ意ヲ遵奉セリ同七年累年饑饉財用給セサルヲ以テ提學神保容助ヲ罷メ^{片山紀兵衛一}諸生八員ヲ減シテ十二人ト爲ス學事退歩ノ色アリ此年十二月寄塾生當直ノ日ハ終日及ヒ藩主臨校ノ前後三日間官費ノ賄ヲ賜ランヲ乞フ之ヲ許ス寛政元年七月舊提學神保容助ヲ復職セシメ諸生モ亦二十員ト爲ス令達左ノ如シ

片山紀兵衛、神保容助

神保容助御大儉ニ付去々年御儒者職御省略ニ相成居候處此度格別ノ君慮ヲ以復職被仰付御加増二十石被成下勤方元々之通且諸生員數モ是迄御減省之處近來文學相衰其上人才爲御養御建立之學館ニ候ヘハ當御時節ト申ナカラ前々之通諸生二十人ニ被仰付候間精撰ニテ可被書上候事(七月八日)

此年寄塾生炭油食料定法價直ヲ廢シ實價ヲ以テ之ヲ收入ス自費生月ヲ追テ減ス同三年三月定法價直ノ收入ニ復ス又寄塾生藩主臨校ノ前後官費賄ヲ賜フヲ止ム當直ノ日ハ是迄ノ如シ九月學校長屋ヲ修理シテ日通生徒ノ請席ト爲ス同七年初メ學校中ニ友于堂ヲ建テ博習局ヲ開キ通學生徒ヲ教授ス助生十二員ヲ置ク助生ノ中筆道掛アリ讀書掛アリ讀書及ヒ習字ノ教場トス然レモ生徒ハ友于堂ニ入リ或ハ極主ノ塾ニ通學スルモ自由タリ是ニ於テ友于堂ノ体裁ヲ改正シ讀長三員ヲ置キ友于堂ノ總裁ト爲ス諸生ヲ以テ之ヲ兼シム又將命二員ヲ置テ讀長ノ使令ニ供セリ同八年八月提學神保容助督學ニ任ス同九年諸生寄塾生ノ塾舍ヲ増建ス同十年六月二十四日ヨリ四日間督學講堂ニ於テ諸生寄塾生助生及ヒ通學生ノ業ヲ試ム主事典籍三讀長列坐ス諸生寄塾生及ヒ助生ハ詩書論孟大學國語ヲ解釋ス家老及ヒ侍頭宰配頭臨席ス試業ノ末日家老ヨリ主事典籍三讀長ニ酒ヲ賜フテ之ヲ勞ラフ侍頭宰配頭參飲ス督學モ亦酒ヲ諸生ニ賜フ此時ニ至テ生徒徒試業ノ規格畧々備ハル七月友于堂南北序新ニ成ル塾中來學生二十五歳以上ノ者盡ク之ヲ遷ス友于堂規律戒條ヲ改定ス同

風ハ是ト違ヒ詩文ハ度外ニ致シ經史トイヘトモ大体サヘ領解セハ足レリ何ソ章句之學ヲ爲ン哉ト申所存胷中ニ確乎相居候テ只腹之内丈夫ニ候ヘハ是則國學ナリ實學ナリト相心得候故勉強ハ名而已ニシテ三年之星霜ヲ沐飯出入ニ費後悔不仕他日仕官シテ始テ壯年之節學問不仕ヲ悔歎仕候責テ在館中計モ都下書生氣取ヲ以勉強不仕候テハ何以真之學問成就國家有用之才ニ相成可申哉誠之甚敷事ニ御坐候雖然多年之積弊我々共曉諭仕候テモ中々信服不仕候然上ハ無據逆傍觀可仕様無之候ニ付學之一字ヲ以督責シ兎角不在館ニテハ學問之念失候ニ付成丈在館爲仕度候其内ニハ退屈ニ存保養休息茶話等ニ消光仕候輩モ有之候半午去毎日々々左様懶惰ニ打過可申様無之候ニ付遂ニハ一枚モ多ク讀書一字モ多ク習書一文一詩モ相考申念生申儀ニ付以來ハ出入之儀納涼共ニ何事モ合テ月ニ六度ニ相限申度候左候而沐歸出入ニテ年々百四十四日放散諸御暇大數二十日其外病氣不參三十日位之見込合テ百九十四日ニ相成申候得者ケ様ニ打詰候テモ半年餘ハ在宅ニ御坐候半年餘在宅シテ何ソ出入之酷ヲ怨可申是ヲ勤兼候テハ病身ニ非スハ怠慢生ト申者何ソ學問興起ヲ望可申哉古賀先生塾法ハ月ニ十度之他行幕門限ニ誰一人迷惑ヲ唱候者無之候是ニ比較仕候得ハ猶以寛ニ御坐候依之諸生中是等篤ト勤考三年ノ流光ヲ惜ミ性分之學問仕他日後悔不仕様開悟爲仕度候ニ付此議相發申候但此事生徒ヲ責候儀ニ付我々共モ以來精勤講談者暑中ナリ共休申間敷詩會へ成丈出席塾へ參候生ハ懇篤ニ待遇シ質問生ニハ倦色相顯不申反覆辨論仕了解ニ爲被至可申候我々共先年遊學中振士氣策勵廉耻策等之御題賜候テ御先代様ヨリ是處ニ深々思召被爲在候ト奉伺候得共其後四十年經候テモ其効驗見請不申候得ハ學風モ同様此度興起之志相立候共中々容易ニ一新仕申間敷候間此上ハ君大夫深ク御配慮時々我々御提撕其趣意ヲ一統へ嚴達シ永讀無間斷様可相心得旨被仰含候ハ、何トカ其功驗ヲ得可申哉ト奉存候學問興起之策先年長尾大夫へ被召寄中老六老會集ニ及評議候後何之御沙汰モ無之内此度猶又被仰聞候ニ付先年存寄書差上シ趣意刪補仕差上申候此外可申上様無之候ニ付老生之常談ト思召不被下候ハ、至幸不過之候右是非得失宜御勘考奉仰御指揮候依之一統ヨリ差出候書付四冊其儘一同差上申候以上

慶應二年九月

淺間甚兵衛、窪田源右衛門

當館一新之存慮御尋ニ付左ニ申上候

一當館弊風之義ハ一統ヨリ申出候處ニ盡セル事ニテ兎角勉強之苦ニ不堪我身ヲ惜ミ怠懈ニ打過候ヨリ此弊風ニ成來候儀由來スル所遠トハ申條必竟ハ我々之誘導不宜故へ萬機不行立弊風モ矯兼存慮御尋ニモ相成候儀ト不堪恐懼慚愧之至奉存候依之同後ハ乍恐元廟御再興之御趣意ヲ遵奉シ各々學問之己カ爲ニシテ人ノタメナラサルヲ辨へ博約

學ヲ命セラル是ヨリ先キ本藩古學並ニ物徂徠ノ學ヲ旨トス登學職ニ昇ルニ及テ始テ程朱ノ學ヲ唱フ登曾テ藩費ヲ以テ古賀精里ノ門ニ勤學シ程朱ノ學ヲ傳フルヲ以テナリ是ヨリ藩士儒秀ナル者ヲ選テ古賀氏ノ門ニ入學セシメ業成ルノ後學職ニ居ラシムルヲ例ト爲スヲ以テ藩内一般程朱ノ學ヲ講習シ更ニ他ノ學ヲ修ムル者ナシ同九年友于堂ヲ新築ス舊友于堂破損スルヲ以テナリ此年始テ友于堂上席生ニ命シテ仲秋看月ノ宴ニ出席セシム同十二年門閥十三家ニ限ラヌ人才ヲ精選シ官費寄塾ヲ命スヘキ旨ヲ令ス天保九年六月寄塾生ヲ廢ス累年凶荒大儉ノ令ヲ發スルヲ以テナリ同十一年十二月大儉ノ令ヲ弛ム是ニ於テ寄塾生故ニ復ス官費寄塾門閥ヲ論セサルヲ令セシ年ニ好生堂モ亦學校域中ニ新築ス是ヨリ先キ巨室芋川縫殿斷絶セシヲアリ文政七年本藩醫家出願シテ其故宅ヲ官ヨリ借り之ヲ修理シテ好生堂ヲ興復ス主水町ナリ是ニ至テ學校域中ニ移シ復タ之ヲ開業シ數名ノ役付醫員ヲ置キ醫業子弟ヲ教育シ治術研究ニ至ルマテ此校ニ於テ之ヲ傳習ス或ハ衆醫相會シ問題ヲ以テ治術ノ巧拙ヲ試ミ又各自治療スル患者ノ現況ヲ衆議ニ附シ治方ノ良否ヲ討論ス是ニ於テ國中醫ヲ以テ業トスル者此堂ノ會業ニ就カサレハ醫ヲ以テ稱スルヲ得サラシム故ヲ以テ醫業歲ニ隆興シ學術俱ニ進ミ藥性ヲ諳シ病理ヲ明ニセサル者ナク又和蘭ノ學盛ニ行ハル他藩ノ醫生來リ學フ者多シ學校モ亦初時ノ盛大ニ及ハスト雖モ執政執事吏胥ノ輩ニ至ル迄多ク學校諸生ノ中ヨリ撰拔スルヲ以テ藩士學ニ就カサル者ナク靡然トシテ儒學ヲ尊崇ス元治元年四月學校類焼ノ災ニ罹レリ是ニ於テ主水町講武所ノ地内ニ聖堂及學校好生堂ヲ新築ス校名及ヒ規律体裁皆舊ノ如シ綱憲學校ヲ細工町ニ創建セシヨリ百六十八年ニシテ主水町ニ移轉セリ學校再興以降文連年ヲ追テ隆盛ニ赴キシヨリ文華ノ弊質直ノ風漸ク變シテ浮薄驕飾ノ俗ト爲リ因循細謹ノ者世ニ稱セラル、ニ至レリ興讓館學生モ亦平洲所謂其身ノ分ヲ忘ル、ハ學問ノ害タリ詩文ノ巧拙ハ國政ノ利害ニ關ラサルノ意ヲ口實トシテ偷安風ヲ爲シテ學事ヲ勤メス謹愿緘默專ラ周旋文飾ヲ事トス慶應二年幕府置賜郡ノ内屋代郷三萬石餘ヲ本藩ニ加封ス八月家老竹勝美作學校掛學校ニ來リ此慶事アル時ニ際シ學風モ亦一新シ學校再興ノ始ニ復センヲ議シ諸生ヲシテ一新興起ノ策ヲ上ラシム

總監提學及ヒ兩役塾、伍長、諸生、寄塾生、各ニ連署ヲ以テ建議スル所アリ總監提學及ヒ兩役塾ノ建議ヲ左ニ錄ス

學問興起之策諸生中ヨリ申出候條件迂回之事ハ有之候得共是等之事件ニ不外儀ニ存候ケ樣興起之勢相見得候ヘハ我々共激賞勸勉實踐爲致可申候但是迄因循怠惰ニ流來候弊風今日挽回仕候事中々我々口舌ニテ一新興起永久相保候事無覺束候依之一統申出之外嚴猛ヲ以取締不申候テハ相改申間敷ト存候一休學校ハ學ノ一字ヲ大切ニ相心得候得ハ人々眞實希賢之心ヲ以學問仕候事は則興起ニ御坐候我々共先年都下へ遊學之節四方學生之所行察見仕候ニ經史詩文并ニ勉強人ニ不若ヲ耻日夜奮勵仕候而他念相見得不申候時々ハ遊步醉飽ニ及候モ平生勉強之鬱ヲ散候爲ニ候御國之學

ヲ講堂ニ召シ家老竹股美作令達ス

此度思召被爲在別紙條々被仰出候間御趣意ヲ深ク体任猶以誘導ニ心ヲ用ヒ館中一際興起有之様改テ被仰出候事

(別紙左ノ通)

一當勤子弟之無差別其人其學力末々頼母教者へハ御賄寄塾被仰付御沙汰ニ候事

一寄塾三人御附益之御沙汰ニ候事

一諸生寄塾生共ニ諸警衛御免或ハ麻布御駕籠脇ヲモ不被仰付御沙汰ニ候事但選ヲ以被仰付候警衛ハ格別之事

十一月特旨ヲ以テ賄寄塾二ヶ年詰一員ヲ命シ寄塾生三員ヲ増加ス總監提學モ亦規律十三條ヲ設テ生徒ヲ勉勵セシム明治戊辰ノ乱ニ至リ藩内騷擾專ラ兵革ニ從事ス是ニ於テ一時生徒ヲ解散シ學校ヲ以テ兵隊ノ屯所ト爲ス既ニシテ境外ヨリ陸續負傷者ヲ送致スルヲ以テ遂ニ負傷者ノ病院ト爲ス幾クモ無シテ奥羽諸藩悔悟シテ罪ヲ謝シ四海乃チ靜寧ニ歸ス同二年正月大ニ學校ヲ補理シ文教ヲ再興ス提學ヲ置キ諸生兼教員二十員ヲ命シ自費寄塾生ヲ允ス戊辰前ニ異ナルヲナシ同三年十一月習字算術二科ノ教員ヲ命ス中古以來專ラ讀書ヲ教授ス是ニ至リ讀書算術習字ノ三科ト爲シ七八歲以上ノ童兒ニ悉ク三科ヲ並授ス四年外國語學校ヲ學校域内ニ創設シ英語學教師三名ヲ東京ヨリ雇入レ學校生徒十三歲以上ニシテ篤志俊秀ノ者語學ニ從事セシメ一名毎ニ一ヶ年十圓ノ手當金ヲ給ス二月十八日開業ス知事上杉茂憲^{第十代}之ニ臨ミ教師ヲ饗應ス七月藩ヲ廢シ米澤縣ヲ置カレ知事茂憲本官ヲ免セラレ管内ノ政務舊大參事以下之ヲ施行ス九月學校ノ体裁ヲ改革シ四民一途人才教育ノ制度ヲ立テ學體ヲ分テ皇學洋學醫學醫學數學ノ五科トシ洋學ヲ除クノ外毎科教授三等ヲ置キ之ヲ教導セシム皇學ヲ以テ之ヲ言ヘハ學課ヲ分テ三ト爲シ一等教員ハ粗々文意ヲ解シ賦詩作文ヲ學フノ生徒ヲ管理シ二等教員ハ十四五歲以上ニシテ國史略十八史略史記等ヲ自誦スル者ヲ教授シ三等教員ハ四書六經ノ句讀ヲ幼童ニ教授スルノ類ノ如シ且皇學洋學ニハ定詰勤學生ヲ命シ官費ヲ以テ之ヲ支給ス又小松村小國町宮内村宮村荒砥村ニ郷校ヲ設ケ各々教授助教授ヲ置キ官費ヲ以テ郷校ヲ補助シ教員ノ給料ヲ支給ス關縣翕然トシテ學ニ向ヒ生徒日ニ多キヲ加フ本校ノ如キハ盡ク生徒ヲ容ル、一能ハス皇學筆學ノ下等生徒ヲ元鑿劔所及ヒ舊縣廳^{二郭御殿ト唱}ニ分移シ十月九日ニ至リ又之ヲ分テ舊本城^{傳所}ニ移スニ至レリ此年秋文部省ニ出願シテ英人達刺斯氏ヲ雇入レ語學教師トス縣廳達刺斯氏及ヒ語學教師ヲ遇スル甚タ厚ク又生徒ニ手當金ヲ給スルヲ以テ五科ノ中洋學殊ニ隆盛ニ赴ケリ十一月米澤縣ヲ廢シ置賜縣ヲ置カル高崎五六本縣參事ニ任ス同五年四月本田親雄五六ニ代テ本縣參事タリ而シテ未タ赴任セサルナリ五月洋學規則ヲ改正シ生徒ニ支給スル手當金ヲ廢シ事務員ヲ改任シ其俸給ヲ減ス此月親雄入縣ス七月五科ノ教員及ヒ皇

兼爲シ陶分禹寸是日不足ト申處ヲ心得勉強致シ候テ難有君慮ニ奉副候様爲致候ハ大切奉存候何ヲ申モ其責我々ニ有之候ハ勿論ニ付自ラ踏行ヒ衆ニ先立ツハ根本ニテ然後鼓舞作興シ斷然ト衰弊挽回仕候ニ止リ候ト熟評決慮仕候」右之基本相立候ハ、萬機自ラ舉ルハ勿論ニ候得共ケ條モ大切ニ付左ニ申上候

一大抵人情上ノ好ム所へ趣クハ必然ニ付好ム所不令シテ行ハルトモ有之候爾來多難切迫之折柄武道御引立御異遇被遊候儀ハ御尤之御儀ト奉存候ソレニ付當館之儀ハ聖堂御造營始諸御普請諸申立迄御儉約ニ相成御時節柄ニハ候得共次ニ相成候姿ヨリ諸局諸有司當館之事ト申セハ度外ニ心得何事ニヨラス日延後廻シニ仕諸事萬端鹿略ニ相成心外之事トモ有之申候固ヨリ上之思召ハ昔ニ異候儀無之候得共前文ノ通中ニ立ツ諸役人之不心得ヨリ何トナク上ノ御禮意モ薄ク相見ヘ當館ノ人心アシク相成候條残念至極ニ奉存候何卒此際諸局ヘ當館之儀ハ別段ニ相心得候様深々御聲掛被成下其上ニ御禮意別段之處御示被下度ハ至願ニ奉存候一二申セハ一統ノ存寄ニモ相見ヘ候通乍恐君公御成始支候御入等度々有之御引立被成下時勢柄御繁政之折恐入候得共時折ニ御掛^{學校掛ノ家}御入來ニテ當館之容子御見察被下課業ヲ始時勢之御難問又ハ此度ノ如ク存慮御尋等有之深ク當館ヘ御向ヒ被下候ハ、諸有司ノ如キハ言フニ不及事ニ有之當館詰合不令ニ靡然ト興起可仕ト奉存候此義ハ大切ノ處ニテ實ニ懇願ニ奉存候

一諸生寄塾共ニ警衛之義非常之精選ハ格別他平生組推等之御差登セハ伍長存寄之通實ニ大弊ニ相成不盛之基ト相成候ヘハ御差支モ無御坐候ハ、何卒相除キ候様頭々ヘ御達被成下候ハ、難有奉存候

一御再興以來近年ニ至テハ關國學ニ向ヒ修業仕度懇願有志之面々數多有之候處員數ニ限アリ相滯先ヲ爭ヒ渴望之内志ヲ遂兼子其内ニハ可惜人才モ空敷相成輩不少歎敷存罷在中候時勢柄人才御養ヒ被遊候ハ急務且ツ御益封ニ付テ一新之廉ニ候得ハ寄塾生最五人モ御附益被下度此條ハ平諸生中ヨリ申出尤ニ奉存候間御酌取被成下度奉願候

一當館ヘ是非差出度學力之人モ有之候處望ミ不申者モ有之又貧ニテ望兼候人モ有之去レハトテ年若ニテ直ニ諸生被仰付カタキ者又ハ末々江戸勤學被仰付可然人物此等之輩御賄寄塾被仰付度奉歎願候

右ノ條ハ徒ニ外ニ目ヲ付ケ内ヲ次ニ仕候儀ニハ決テ無之候此度各々存慮書認メ差出候上ハ斷然ト興起仕候ト申モノニテ此上終ヲ保チ候様仕候ハ我々ノ大切ト存候ヘハ日ニ新ニ月ニ盛ト末張ニ仕候様深ク評判致候夫ニ付テモ前顯ノケ條ハ何卒爲御叶被成下度不顧御時節奉歎願候恐々

慶應二年八月

鐵絲左衛門、千坂與市

十月十四日藩主齊憲聖堂ヲ拜禮ス乃チ學校ニ臨ム家老江戸家老中老侍列ス是ニ於テ總監淺間甚兵衛提學窪田源右衛門

扱フ者アリ或ハ數十名ヲ扱フ者アリ皆講堂ニ出テ句讀ヲ授ク其句讀ヲ授クルヤ毎日扱生登堂前後ノ順ヲ以テ或ハ同書ヲ讀ム者數名ヲ合セテ一同ニ之ヲ授クルアリ或ハ一名毎ニ之ヲ授クルアリ定則アルニアラス時間ハ朝餐ヲ以テ限トス
○四書五經ヲ素讀ノ通例トス稀ニ孝經小學楚辭文選文章軌範古文眞寶等ヲ讀ム者アリ
朝餐後ハ諸生寄塾生講堂ニ出テ課業ヲ爲ス總監提學助教之ヲ誘導ス抽籤ヲ以テ當讀三名ヲ定ム一讀或ハ二葉或ハ三葉
課業ノ書ニ依テ適宜ニ之ヲ定ム○課業書大抵前漢書後漢書易知錄ノ類トス

三八四九ノ日會讀ヲ爲ス四九ハ講議シ三八ハ素讀ス皆抽籤ヲ以テ當讀二名ヲ定ム總監提學助教之ニ臨ム會讀ノ日ハ課業ノ書常例ノ半讀トス○會讀ノ書大抵講義ハ論語孟子素讀ハ荀子管子七書群書治要貞觀政要ノ類トス
課業會讀畢レハ時間ニ拘ラス退席ス午飯ニ至レハ課業會讀畢ラスト雖モ亦退席ス

八ノ日詩會ヲ爲ス八ツ時ヨリ始ム晚飯ニ至テ止ム總監提學助教之ニ臨ミ且之ヲ添刪ス

友于堂生ハ五ツ時ヨリ友于堂ニ登堂ス退堂ハ四月ヨリ八月迄未刻九月ヨリ三月迄未半刻トス課業ハ四ツ時ヨリ始メ午飯ニ至テ止ム課業前後ハ勉學質問ノ時間トス課業ヲ二席ニ別ツ二十歲以下ヲ下等ト爲シ二十一歲以上ヲ上等ト爲ス二十一歲ニ至ラスト雖モ進業ノ者ハ讀長特ニ上等ヲ命ス輒近ニ及テ三席ニ別ツ十七歲以下ヲ下等ト爲シ十八歲ヨリ二十歲迄ヲ中等トナシ二十一歲以上ヲ上等ト爲ス進業ノ者特命ヲ以テ中等上等ニ入ル故ノ如シ三等皆一月六回會讀ヲ爲ス會讀ハ三等日ヲ異ニス且上等ハ講義シ中下等ハ素讀ス課業及ヒ會讀三等皆當讀三名ツトス抽籤及ヒ會讀ノ日ハ課業書半讀等一ニ本堂ノ例ニ同シ課業會讀共ニ讀長助讀一席ニ一名ツ、出席シテ之ヲ教導ス○課業書大抵上中等等歷史綱鑑補易知錄下等史記ノ類トス 會讀書上等論語孟子中等國語左傳史記下等左傳ノ類トス
毎月八ノ日午後詩文會ヲ爲ス三等共ニ出席ス讀長助讀之ニ臨ミ且之ヲ添刪ス

春秋二回論語ノ一篇ヲ輪講ス當讀數名抽籤ヲ以テ之ヲ定ム當日午後之ヲ始ム總監提學助教讀長助讀等之ニ臨ム

毎月二七ノ日課業前總監提學助教綠廻シニ一名ツ、講堂ニ於テ講義シ諸生寄塾生日通生ヲシテ聽聞セシム其書大抵四書五經トス朱晦庵ノ新注本藩ニ行ハレサルノ際ハ孝經荀子孔子家語左傳等ノ書ヲモ講義ス

毎月十ノ日五ノ日ト爲セシムアリ禮節家出勸講堂ニ於テ禮式ヲ教導ス諸生寄塾生友于堂生皆之ヲ學習ス此日本堂ハ課業ヲ半讀ニシ

テ課業畢レハ其席ニ於テ之ヲ始ム友于堂三等共ニ課業中ト雖モ自由ニ本堂ニ出テ之ヲ學習スルヲ得

諸生其試驗前ハ一月前後通學生ノ句讀ヲ休業シテ專ラ自己ノ業ヲ修ム通學生ノ試驗前ハ二ケ月前後自己ノ業ヲ休業シテ終日通學生ヲ教導ス

學洋學定詰勤學生ヲ廢シ更ニ之ヲ命シ改正スル所アリ八月文部省新規則ヲ頒布ス十月同省第三十五號ヲ布達ス左ノ如シ

舊藩縣以來引續外國教師雇入醫學語學等中學ノ類相開今日マテ生徒教育致居候者不少此等之學校ハ舊藩縣適宜ヲ以取設候義ニ付一方ニシテ數員之教師雇入或ハ一縣ニシテ巨萬之金ヲ費シ其不平不同申迄モ無之然ルニ今般教育ノ法方ヲ確定シ生徒ノ成業ヲシテ務テ遠大ニ期セラルヘキ御趣意ニヨリ學制御發行ニ相成候ニ付テハ教育上ニ於テ万事萬般一般ニ歸シ學校ノ規模教科ノ順序等ハ不及申隨テ諸入費支給之道ニ於テモ成丈全國ニ均一平分シ彼ニ厚ク是ニ薄キノ類無之様不致候テハ不相成候處右從前ノ諸學校其儘差置候テハ偏重弊難止教育廣普ノ御趣意不相貫旁不得止ノ次第ニ付前書學校ノ儀一旦悉ク可相廢止候然ルニ當今庶民之子弟正シク小學ノ順序ヲ踏ムニ非サレバ算筆作文之稽古相運ヒ居年齡十五歲以上ニモ及今ヨリ中學修業不致候テハ不相成者ノ爲メ中學設立ノ儀是又今日之急務ニ候處御國內ニ於テ未タ中學ノ教師無之中學之教科未タ施シ難ク候ニ付先以大八學區本部ニ於テ其區中人民ノ爲メ外國教師ニテ教授スル中學各一ヶ所可相興候此中學ニ入り他日成業之者ハ或ハ大學ニ入レ或ハ真中學教師ニ相成様可致候依テハ從前外國教師備入置候學校有之府縣ニ於テハ左ノ處分可相心得候事

舊藩縣以來其適宜ヲ以外國教師備入有之諸學校之儀今般悉皆相廢止候事

一右外國教師條約期限中給料之儀ハ當省ヨリ可相渡候事

一右條約期限中地方之見込ヲ以保護之道相立或ハ人民私財ヲ以テ學費相下引續教育爲致候儀ハ不苦尤學科敎則等ハ

委細可伺出候事

一醫學校ヲ病院ニ引直シ治療之方法教師ニ質問授業候義ハ不苦候事

八大區本部ハ外國教師ニテ敎授スル中學校一ヶ所設立致候ニ付テハ右學校ノ規則入學之期限等ハ迥テ一般可相達

候事但東京大坂長崎之三所ハ從前其設有之候間新立不致候事

壬申十月十七日

文部省

同月廿五日本縣ニ於テ學校ヲ廢止ス

敎則 敎科用書及ヒ授業ノ方法順序時間等諸生寄塾生及素讀生友于堂生各々其區別ニ從テ異同アリ又師長ノ講義禮節家ノ禮式ノ如キ區別ニ拘ハラス同一ニ之ヲ敎導スルアリ

素讀生ハ諸生二十員ニテ其扱ヲ定メ毎朝之ヲ敎授ス扱主ハ諸生二十員ノ中生徒ノ望ム所ニ從フ故ニ一人ニシテ數名ヲ

試驗ハ寛政十年六月廿四日ヨリ四日間督學講堂ニ於テ定詰生及ヒ館外通學生ヲ試驗ス主事典籍三讀長侍セリ家老及ヒ侍頭宰配頭臨席定詰生ハ詩書論孟大學國語ヲ解釋ス同十一年三月督學友于堂通學生ノ業ヲ試ム家老以下臨席セス八月二日ヨリ四日間試業家老以下臨席セス十二月友于堂試業同十二年四月十三日友于堂試業六月十一日ヨリ四日間試業家老以下臨席十一月晦日十二月朔日友于堂試業同十三年友于堂習書試業督學助讀之ヲ試ム十月廿一日ヨリ四日間試業家以老下臨席享和二年十一月二日ヨリ五日間試業家老以下臨席同十六日十七日藩主親シク試業ニ臨ム同四年十一月三日ヨリ五日間通學生試業家老以下臨席同廿七日廿八日定詰生試業家老以下臨席此後毎年七八月ノ間友于堂小試ヲ行ヒ十一月試業ヲ爲ス六月友于堂習書試業ヲ行フヲ例トス友于堂小試ハ文化十一年ヨリ之ヲ廢ス

凡ソ友于堂小試業ニハ家老以下臨席セス習書試業ハ講堂ニ於テ之ヲ行ヒタルコアリト雖モ家老以下臨席セシコナシ中古以前ハ定詰生通學生一時ニ之ヲ試驗ス中古以來兩生ヲ區別シテ二回ニ之ヲ試驗スルコト享和四年ノ例ノ如シ但通學生ト定詰生ノ前後ハ時ニ從テ同シカラス文政年間ヨリ通學生ヲ十一月ト爲シ定詰生ヲ翌年二月ト爲ス

定詰生ノ試驗ニハ家老以下必ラス臨席ス藩主モ多ク之ニ臨ム通學生ノ試驗ニモ藩主或ハ家老以下之ニ臨ムコアリ藩主之ニ臨ムヲ御前試業ト云フ通學生總員ノ試驗ニ臨ム時ハ臨試ノ前ニ於テ學職ノ者先ツ之ヲ試驗ス内試ト云フ而シテ御前試業ヲ本試ト云フ總員ヲ臨試セス内試ノ中ニ就テ秀逸進業出精孝悌篤志等ノ者ヲ選テ臨試スルコアリ之ヲ秀逸試業ト云フ秀逸以下物ヲ賜テ之ヲ賞ス藩主臨試セス家老以下ノミ臨試スル時ハ家老試驗ノ前ニ於テ學職ノ者之ヲ試驗ス之ヲ稱シテ内試ト云ヒ家老試業ヲ本試ト云フ家老亦總員ヲ試驗セス内試ノ中ニ於テ秀逸以下ヲ選テ試驗スルコアリ之ヲ秀逸試業ト云フ凶歉或ハ他ノ事故ヲ以テ大儉ノ令ヲ發スレハ藩主及ヒ家老臨席スルコトナシ學校教官ノミ之ヲ試驗ス此時ニ當テハ教官試驗ノ中ニ就テ秀逸以下ヲ撰拔シ別ニ秀逸試業ヲ須ヒス直チニ物ヲ賜テ之ヲ賞ス定詰生ハ御前試業家老試業共ニ内試ヲ須ヒス又秀逸等ノ撰及ヒ賞賜ナシ

諸生寄塾生ノ試驗ハ講義ニ限レリ大抵四書五經ノ内適宜ニ之ヲ講ス通學生徒ハ大抵左ノ如シ 素讀生 學庸一年、論語一年、孟子一年、詩書一年、易春秋一年、禮記一年但學力ノ優劣ニヨリテ論孟ヲ一ケ年ニ試驗スルアリ論語半部ヲ試驗スルアリ學庸五經モ亦然リ 自讀生 左傳一年、史記一年、前漢書一年、歷史綱鑑補一年（輒近ハ一年半部ツハトス） 講義生 左傳以上四書五經卷數ヲ定メス其他ノ書類ト雖モ乞フ者アレハ之ヲ試ム大抵左傳ノ試驗ヲ受クルコト二三年ニシテ四書ヲ講ス四書ハ孟子ヨリ論語ニ及ヒ學庸ニ及ヒ而後五經ニ及フ五經ハ詩經ヲ多シトス書經之ニ亞ク易ハ稀ニ之ヲ講スル者アリ春

中古以前ハ規條變革創設廢止一ナラス中古以降ハ概略此ノ如シ然レ規則條例確定スルニアラス習慣ヲ以テ規條ト爲スモノアリ是ヲ以テ時ニ多少ノ異同ナキニアラス今之ヲ縷舉セサルナリ筆學ノ如キハ中興ノ際之ヲ設ケ中古之ヲ廢ス職名俸給ノ項ニ略記セリ明治四年學校革制ノ後ハ教科用書及授業ノ方法順序時間モ舊時ト同シカラス學校革制ノ部ニ詳ナリ

學科學規試驗法及諸則

本藩學校ハ専ラ漢學ヲ爲スヲ旨トス友于堂通學ノ生徒ニハ享和文化ノ際筆道ヲ兼學セシム後ニ之ヲ廢ス習禮ハ毎月三次禮式掛出勤ス始ハ友于堂ニ於テ教導シ通學生之ヲ學習ス中古ヨリ講堂ニ於テ定詰生通學生皆之ヲ學習ス兵學弓馬槍劍砲術柔術ニ至リテハ別ニ演武校アリ學校ニハ並設セス游泳ハ本藩曾テ教科ヲ設ケサルナリ藩士文武兩道ヲ兼修スルハ其自由ニ任セ且文學武術程度ノ比例等ナシ武術ハ一藩貴賤ヲ問ハス必ス之ヲ學ハシム文學ニ至テハ徒士壯卒微祿ノ輩ハ學習スルノ暇ナキ者多シ官之ヲ不問ニ置ケリ士分ニ至テハ相競テ文學ニ從事ス

入學退學年齡ノ定期ヲ設クルヲナシ
定詰諸生ハ俊秀ノ者ヲ選テ官ヨリ之ヲ命ス二十歳以上三十歳以下ノ者多シ滿三年ヲ以テ期トス其才ニヨリ再勤學ヲ命シ再々勤學ヲ命スルヲアリ

定詰寄塾生ハ志願者ヨリ選擇シテ之ヲ許ス學校再興ノ際ハ定期ナシ寛政十年八月在學期三年ト定ム文化五年正月改テ滿一ケ年トス勉勵者ハ伍長其旨ヲ提學ニ申薦ス提學勉勵者ニ命シテ再願セシムレハ官之ヲ允シテ又一ケ年ヲ勤學セシム退學スル者期至テ退學ヲ提學ニ請ヒ提學之ヲ許セハ其隊長官長ニ請フヲ例トス輒近ニ至リテハ別ニ隊長官長ニ請ハス提學ノ允許ヲ受クレハ滿期退館ノ旨ヲ官ニ届クルノミニシテ退館ス

通學生ハ大抵十歳前後コシテ入學シ孝經四書五經ノ句讀ヲ受ク十二三歳ヨリ十六七歳ニ至ル際獨自ニ左傳史記前漢書歷史綱鑑補等ヲ讀ム然レモ定規アルニアラス左傳ノ前ニ文選或ハ文章軌範ヲ讀ミ左傳ノ後ニ國語ヲ讀ミ又ハ史漢歷史ノ華版資治通鑑易知錄等ヲ讀ム者アリ皆稀ニ見ル所ナリ十七八歳ヨリ左傳以上ヲ講義シ廿四五歳ニシテ退學スルヲ恒トス

句讀ヲ受クル者朝餐前ニ於テス故ニ之ヲ朝索讀生ト云フ左傳以上ヲ獨誦スル十五歳以上ノ者朝餐後友于堂ニ昇テ講習ス故ニ之ヲ友于堂生ト云フ然レモ寛政享和ノ際ハ句讀ヲ受クル童生モ朝餐後友于堂ニ昇リテ讀書習字ヲ講習スルヲ以テ句讀自讀ヲ區別セス皆友于堂ニ於テ之ヲ試驗ス

前後ニ過キス

賞賜ハ秀逸生ニ樽酒三升孝悌進業以下杯酒ヲ賜ヒ重キハ吸物ヲ加フ初メテ試験ヲ受クル者ハ官之ヲ賞セス學校ヨリ小津輕二束或ハ扇子二本ヲ賜フ輒近ハ孝悌進業以下皆樽酒三升ヲ賜フ

中古ハ試験ノ末日學校ニ於テ之ヲ賜フ家老之ヲ達ス近例ハ數日ヲ越テ更ニ政府ニ召シ之ヲ達ス初メテ試験ヲ受クル者ハ督學或ハ總監提學學校ニ於テ之ヲ達ス

秀逸ノ人員古今ノ差異左ニ實例ノ一二ヲ錄ス文化四年十二月三日試業濟ノ賞左ノ如シ 樽酒三升六拾七人、賜酒吸物肴二種八拾三人、賜酒肴二種百四人 同五年十一月十四日左ノ如シ 樽酒三升七拾四人、賜酒吸物肴二種六拾三人、賜酒肴二種百拾七人 追年大儉財用ヲ節スルヲ以テ秀逸以下ノ人員ヲ縮省ス 同十五年十一月廿九日 樽酒三升秀逸生七人 文政六年十一月廿二日 樽酒三升同拾四人

通學生徒ノ試験了レハ督學以下諸生并ニ寄塾生ニ酒ヲ賜リ之ヲ勞ロフ諸生以上ニハ吸物ヲ加フ凡ソ酒ヲ賜フニハ肴二種ヲ例爲スナリ

黒漆板二枚ヲ友于堂ニ掲テ長五尺幅一尺二寸友于堂試業甲乙ノ第ヲ記シ生徒ノ熟不熟ヲ表ス 筆學試業ハ官ヨリ料紙ヲ給ス甲科數名ヲ選ミ乙以下ノ清書ヲ甲科ノ者ニ配與ス又甲科ノ者ニ酒ヲ賜テ之ヲ賞セシヲアリ

定詰勤學并ニ滿期退學ヲ命スルトキハ政府或ハ家老ノ宅ニ召シ家老自ラ之ヲ命ス學生平服ニテ命ヲ受ケ禮服ヲ着シ學校ニ詣リ聖堂ヲ拜禮シ督學或ハ總監提學家老定詰并ニ退學ヲ命シタル者及ヒ其隊頭ヲ廻禮ス

好生堂教員及ヒ生徒ハ官ヨリ之ヲ命スルニアラス醫家互ニ勉勵シテ修業スルヲ以テ束脩回禮等ノヲナシ每年秋季ニ試業ヲ爲ス專ラ讀書講義ヲ以テ之ヲ試驗ス其法興讓館ノ試業ヲ以テ模範ト爲ス

安永五年學校再興ノ時定詰諸生二十名ヲ命セラレタル内侍組七名門閥九十六家ヲ以テ一組トナセルナリ大小姓組一名侍組ト馬廻トノ中間ニ位セル一隊ナリ三馬廻八名馬廻組五十騎組與板組ナリ三扶持方四名猪苗代組、組外組、組付組ト云フ徒士ナリナリ定詰諸生ハ貴賤ヲ論セス齒列シ互ニ平等ノ禮ヲ爲ス手明以下ハ齒列セス定詰勤學ヲモ命セラル、ヲナシ

此後諸生中必ス此ノ四手ノ者ヲ欠クヲナシ人員ハ必スシモ此時ノ如キヲ要セサルナリ

文化十三年家老大石左膳學校用掛ヲ命セラル左膳學校ヲ取扱ヘキ要旨ヲ治憲ニ問フ治憲曰ク學校ヲ再興スルノ際平洲先生ト熟議シ館中ノ紀律モ先生ノ意ヲ以テ之ヲ定メタリ然レハ將來モ先生ノ學風教導ノ趣旨ヲ失ハサランヲ要トス

秋禮記ニ至リテハ多ク之ヲ講セサルナリ

生徒大抵論孟ヲ講シ盡サスシテ退學ス勵精シテ倦マス文學ヲ以テ身ヲ立ントスル者十中ノ一二ニ過キス輒近ノ習慣ヲ然
リトス

詩文ヲ試ムルハ當日試験ノ初ニ於テ詩文ノ題ヲ下付ス生徒別席ニ退キ製作ス諸生ノ年長之ヲ監視ス當日試験ノ終ニ於
テ之ヲ呈ス詩文ハ生徒ニ盡ク之ヲ課スルニアラス詩文ノ試験ヲ乞フ者ニ限リ之ヲ試ム

試験席ハ講堂ノ中央ニ設ク講堂正面ニ督學或ハ總監家老並坐ス教員ハ督學ノ右ニ列シ外員ハ家老ノ左ニ列ス外員ハ
家老三名江戶家老一名中老二名近習頭一名仲ノ間年寄一名侍頭四名宰配頭三名教員ハ督學或ハ總監提學助教讀長都講典

籍助讀藩主世子庶公子臨試ノ時ハ御成坐敷ニ坐ス御成坐敷ハ講堂ノ上ニアリ

藩主ノ臨試學校ニ於スルコアリ城中式臺ニ於テスルコアリ時ノ便宜ニ從フナリ其儀式ハ藩主臨校ノ項ニ詳ナリ

試験ノ席ハ定詰生ハ貴賤ヲ問ハス同席タリ佩脇刀ヲ試験席ニテ脱ス通學生ハ侍組ヨリ三扶持方迄同席タリ而シテ三馬

廻以上脇刀ヲ試験席ニテ脱ス三扶持方ハ講堂ノ域外ニ脱ス三扶持方ノ以下ハ館中齒列セス因テ之ヲ不齒生ト云フ不齒

生ノ中手明列以上試験ヲ講堂ノ域際ヨリ一疊目ノ頭トス手明列ノ以下訴文列迄半疊目トス而シテ皆脇刀ヲ域際ニ脱ス

足輕以下試験席ヲ域際トス而シテ脇刀ヲ詰席ニ脱ス

不齒生秀逸ノ選ニ入ルト雖モ藩主ノ臨試ニ出席スルヲ得ス訴文列以上ニシテ進業勉勵ノ者ハ特ニ出席ヲ許スコアリ陪

臣及ヒ町醫師僧侶修驗ノ類ハ藩主ノ臨試ニ出席スルヲ許サス家老以下別ニ之ヲ臨試ス

他邦生徒ハ末日別ニ之ヲ試験ス席ハ講堂ノ域際ニ設ク而シテ内試ニ止リ家老以下臨試セス

試験生ハ學校當直ノ者試験立帳ニ就テ一名ツ、之ヲ呼試験席ニ就シム

通學生徒ノ試験ハ素讀生ハ其章ヲ指シテ之ヲ讀シメ講議生ハ其章ヲ讀ミ且之ヲ講義セシム素讀ハ都講專ラ之ヲ指命シ

講義ハ豫メ讀長典籍助讀ト相議シ一名毎ニ試験スヘキ篇章ヲ定メテ而シテ都講之ヲ指命ス生徒ノ多寡ニ依テ五六日ヨ

リ八九日ヲ以テ之ヲ終フ

定詰生ノ試験ハ年齢ヲ以テ先後ヲナシ通學生ハ扱主ノ席次ヲ以テ一ト扱限リ之ヲ試ム甲扱了レハ乙扱之ニ次ク而シテ

扱中生徒ハ試験書籍ヲ以テ先後ヲ爲ス五經ヲ先ニシ四書ヲ後ニス歴史ハ世代ヲ以テ順次ヲ爲シ同書中ハ年齢ヲ以テ先

後ヲ定ム不齒市村他邦ノ生徒モ亦扱主ノ座席ヲ以テ順次ヲ爲ス

秀逸生ハ文化年間六七十人ヲ選ム財用ヲ節スルカ故ニ年ヲ追テ減省ス輒近ハ秀逸十四五人孝悌出精等ヲ合セテ三十人

事ヲスルナト申事ニハ有之間敷候餘所ノ風ヲ致シ候テ御國ノ人情ニアラス事ハスルナト申事ニ可有御坐候孝弟忠信仁義禮讓ハ何國ニテモ人ノ悦フ道ニ御坐候但シ富貴ナル家ニテハ被下物取扱ヒモユタカニ御坐候貧乏ナル國ニテハ至テ少ク御坐候是モ一樣ニナラス事ト被存候併シ學問ヲ致シ理義明カニ相成候得ハ多少厚薄ハ左ノミ怨ミツラミモ無之一統ニ取扱ヒノ能キハ難有奉存候事ソレカ學問ヲ致シ理義ヲ辨ヘ申候人ノ所得ニ御坐候此處ヲ辨ヘ候様ニ教ヘ可申事師長ノ第一ト奉存候有教無類ト被仰候カト奉存候

一師長ト申候ヘハトテ我計是非々々善キ事ハ不相成候聖人萬世ノ師トイヘトモ得不被成様ニ相見得申候但シ人ヲ教ユルモノハ人ト共々ニ善事ヲ致度人ト共々ニ惡事ハ不致様ニト心得申候テ教ヘ申度事ト被存候發明モノモ愚鈍ナルモノモ御家中ノ人ニ御坐候ヘハ發明ハ發明丈ケニオシヘ御用ニ立テ愚鈍ハ愚鈍丈ケニ教ヘ戒テ刑辟ヲ受スヨウニト申事カト奉存候

一人情ハ同ヲ悦ヒ不同ヲニクミ候事無據事ニ御坐候得共其所ヲ勉強シテ同異ノ論無之様ニト申事衆人ノ師長ノ役ニ御坐候我好ム所ヲ膝ニ加ヘ我惡ム所ヲ淵ニオトシイル、様致スハ道德ヲ教ル人ノ任ニハ無之候善ヲ賞シ惡ヲ退ケ給フコトハ人君ト大夫ノ職ニ御坐候其人君大夫不都合ノ事有之候ハ、諷諫シテ何分不都合ノ無之様ニト忠ヲ盡シ申ハ儒臣ノ職分ニ御坐候

一時ニ治乱アリ所施ニ宜所アリ先第一心得可申事ニ御座候亂世ト申ハ人ノ尊卑ニモヨラス續キ柄ノ親疎ニモヨラス今日戰ニ勝チ我國ヲ強クスル人ヲアケ用ユル事ニ御座候治世ト申ハ人々ノ尊卑分限ヒシト定リアリテ我國カ惡ヒトテ人ノ國ヘモ行レストテモカクテモ主君ノ下知ニ隨ヒ不申候テハ一日モ立チ不申候分限ヲ越候事モ主君ノ御眼力次第ニテ下ニ屬シ居候テモ可恨事ハ不相成候扱大夫ハ大夫ニナリ士ハ士ニテ御奉公ヲ仕ルヨリ外ハ無之候大夫ニ舉用仕給ヘハ大夫ノ所作ヲ致シ士ニ被成候テ御用被成候ヘハ士ニテ生涯オトナシク相勤メ心底一杯ニ忠實ヲ盡シ可申事學問ヲ致シ候人ノ安樂ナル所ニ御座候是ヲ辨別ナク時ヲ恨ミ上ヲソシル人ハ不良ノ人ニ御座候其不良ノ人ノ澤山ニナラスヨウニ教ヘ導テ遣シ可申事師ノ職分ニ御座候

一學館學生ノ業ハ四書五經ヲ素讀シテ文字訓點正敷ヨミ覺ヘサセ次第ニ講釋ヲ承リソロソロ義理ヲ辨ヘ知リテチト宛モ身行ヲ習慣爲致候テ其内奇特ノ者ヲ御褒メ可被遊事ニ御座候詩文ヲ習ハセ申事ハ心情ヲノヘ辭義ヲシヲラシク作り覺ヘ無風雅殺風景ニナラス其功ニヨリ古今之治亂興廢人情ノ厚薄ヲモ辨ヘシルヘキ遊散ニ御座候上手ハ秀才下手ハ不才ノ差別迄ニテサノミ國政之利害ニハ與リ不申候但シ辭ト申モノハ申様ニテ人心ヲ感シ候事妙ナルモ

ヘシト乃チ曾テ平洲カ治憲ニ答ヘタル所ノ書ヲ出シテ之ヲ授ケテ曰ク此書ヲ以テ學校ニ附シ總監役塾ノ者此意ヲ以テ諸生ヲ教導シ諸生モ亦能ク此意ヲ服膺シテ勤學スヘシト左膳之ヲ學校ニ附ス家老菰戸以徳其子ノ爲メニ學要辨ヲ撰ム治憲之ヲ見テ平洲ノ旨趣ニ合スル者ト爲シ又自ラ加筆スル所アリ亦學校ニ送附セリ學校ニ於テ平洲ノ書ヲ謄寫シ諸生初メテ入館スレハ學要辨トヲ合セテ必ス之ヲ熟讀セシム此ノ二書ハ則チ本藩學校ノ要旨タリ依テ二書ヲ左ニ録ス

(平洲ノ書)

以別紙申上候老衰之儀手筆相違ナキ字形モ不正文言モ前後仕リ重複多ク條之次第モ相調ヒ不申不敬之至恐入候改書仕候而可奉入御覽答ニ御座候得共精神弱ク罷成幾度モ相認直シ申候儀甚以難儀ニ罷在候得者隨意ニ筆記仕候マテニテ差上申候事何分ニモ奉蒙御恩恕度奉存候

一御國ニテ學問所ヲ御造立被遊候御本意ハ御先祖様ヨリノ風俗ヲ失ヒ不申萬人安堵仕候様ニ被遊度ト申處極意ニテ人ヲ利口發明ニ被遊ト申處ニテハ無御座候元來米澤之舊風質實篤行ニテ諸家ニ勝リ候事多ク御座候乍併太平二百年之恩化次第ニ奢靡逸樂ニ移リ候處ヲ御氣之毒ニ被思召候故ニ學問ト申事ヲ第一ニ御引立被遊候事ニ御座候學問ヲ不仕候テハ人々我見我意ノミニツノリ候テ上之御仁徳ト申所ヲ思ヒメクラシ申事無之故ニ其オモヒメクラシ候心持ノ生シ候様ニト被思召候故ニ御座候左候得ハ米澤之學風ハ先第一人情ノ質實ニ相成浮行虛飾ノ無之様ニ被遊度御儀ト奉存候但シ學問ヲ致候ト申日ニハ四書五經ヲヨミ習ヒ夫ヨリ其義理ヲソロソロ辨ヘ候テ少シ宛ニテモ身ニ行ヒ慣ヒ申事ニ御座候但シ書物ヲヨミ習ヒ候得ハ自然ト昔シ昔シノ事モ相知レ人ノ知ラヌ道理モソロソロ合點參リ善惡邪正モ辨別仕候様ニ相成候得者凡人ニハ勝レ知慮モ開キ口モキカレ人ニモ見コナシ不被申様相成候事勿論ニ御座候但シ此處ヨリ不覺自滿之心モ生シ我ヲ高フリ候事ニモ移リ申候事は又自然之病氣ニ御座候仍之善良之師長ヲ御立テ其人之言行ヲ見マテ聞マテ候様ニ被思召候テ師役ヲ御立テ被遊候事ニ御座候左候得ハ先ッ師ト相成候人此處ヲ能心得可申事第一ニ御坐候扱人ヲ教ヘ候テモ百人カ百人一様ニ不參モノ人心ハ各々別ナル事ハ不及申上候孔夫子三千ノ弟子七十人之親炙弟子達モ人々心慮モ別段所行モ殊異ニテ盡ク一統ニハ相見不申候乍併聖人ノ徳化ニテイツレモ善良君子ニ被相成大ハ大小ハ小ソレソレニ世界之用ニ立ッ人計ト相見申候聖人之御徳ニテモ御一様ニ教ヘ立テラレ候事ハ不相成モノカト被存候併シ人カ善良ニ相成候處ハ一同ニ御坐候

一師長ノ人ヲ教ヘ候事ハ他國ハトモアレカクモアレ米澤ノ御爲メニナル様ニト申處肝要ト奉存候他家他國ノマテヲスルナト御定メ被置候事ハ御先祖ノ深キ思召ト奉存候但シ他國之風ヲ學フナト被仰置候得者トテヨソ國ノ善

ストモ不孝モノ、出ヌヨウニ心得候テ二年三年宛教化致度事ニ御座候

一盛衰ハ物ノ常ニ御座候盛ナレハトテ百年モ二百年モ一樣ニテハ立ヌ事古今歴然ニ御座候併シ取扱方ニテ十年カ廿年五拾年カ百年マテハ持コタユルモノト相見ヘ申候取扱ヒアシケレハ火ノモユル様ニ候得共ヒツシヨリト水ヲカケル様ニ相成候君子不窮之業ヲハシメ候時ハ先ツ衰ヘタル時ハ如何様ニ可相成但シヒツシヨリトハキヘタ様ト申處ヲ最初ニ考ヘ申度事ニ御座候勝テモ長追ヲセス甲ノ緒ヲシメ候事古ヨリ名人ノ所作ニ御座候乍恐君上御仁明ニ被爲在其御德化次第ニ行届キ御封内之人民孝弟力田ノ民モ次第ニ多ク扱御學館モ次第ニ繁昌仕學問出精ノ人モ多ク相成事可申上様モナキ目出度御儀ニ奉存候併シツラツラ相考見申候ヘハ最早只今ノ御政治此上モ無之御十分ノ御儀ト奉存候何卒世々子孫ノ御上迄モカク有之度事ニ奉存候御學問所セマク相成候ハ、入ヲ分テ講日ヲ分テ如何様共人カ納リ候様ニ被遊度候澤山ナル時モ一杯不足ナル時モ一杯ニ相成候様仕度候徹邦ニテ明倫堂ヲ造立仕候節隨分手廣ク致經營候ヘトモ初テ講ヲ開候日ハ一統麻上下ニテ罷出候ニ付一向手セマニテ納リカテ無據老中之指圖ニテ堂ノ前後ニ敷物ヲ爲致候テ尊卑ヲ分チ貴人ハ堂上賤者ハ堂下ニ居並ヒ申候テ講ヲ終リ申候老臣執政喜悅ニヌヘス急ニ又々堂ヲ作り足シ可申評議ニ御坐候其時愚老申談候ハ辱事ニ御坐候得共始終ハケ様ニハ無之事必定ニ御坐候間先暫増作ハ御止メ可被下候貴賤ノ席ヲ定メ講日ヲ分チ上分ハ一月六度中分ハ四度下分ハ二度ト相定申度候扱講日出席ハ朝五時ヲ以テ定トシ五時ニハ學館ノ門ヲ鎖シタトヘ大臣有司ニテモ門ヨリ歸リ候様ニ被成可被下候左候ヘハ七八百人千人位ハ納リ可申候行々衰ヘ候テモ玄關ノ敷台ヘ子供ノ集リ手マリヲツカヌヨフニ御定メ被下度ト申違候得ハ尤ナル事トテ止ミ申候仍テイツ迄モ堂ニ一杯ハ有之候近年督學モ三代目人々ノ存慮モ有之信敬モ薄ク相成候得共規則ハ私ノ定テ置候通ニテ相應ニ人モ出候テ學問所ハ依然ニ御坐候二度ハ釋菜モ急度有之上ノ名代ハ爵位ノ老臣大紋ニテ相勤メ申候先ツケ様ナルモノニ御坐候學館セマク候トテ作り増シ作り増候テハ限りモ無之事ニ可有御坐候

一御學問所ヲ御立テ被遊候本意ハ米澤ノ人俗質實ヲ失ヒ不申浮虛ニナラヌヨウニト申所肝要ニ御坐候大夫ハ大夫ノ道ヲ守リ士ハ士ノ職ヲ守リ上下貴賤一同ニ米澤ヨリヨキ國ハ無之ト存候様ニ致度候他所他國ヘノ吹聴ハ不埒ノ政務ナク不埒ノ罪民ナキ様ニト聞ヘ候ハ、無上之御義ト奉存候百石ハ百石之入用千石ハ千石ノ入用大キク申セハ國土ハ十萬石ハ十萬石十五萬石ハ十五萬石其上ノ事ハ不致事扱ナラヌ事ニ御坐候浮虛ノ無之様實行ノ多キ様ニト教ヘ立テ申度候其所ハ師長之教ヘ方學生之學ヒカタニ有之候退々學生輩ノ詩文モ出精故ニ澤山ニ傳見仕候先日禮司

ノニ御坐候へハ善良之心ヲ長シ申様ニ心得申度事ニ御坐候狂言妄語當坐ノ遊戲ト心得申候へハ利益ハ少ク損害ハ多キ事ニ御坐候損害ト申ハ驕傲自負ノ心ヲ長シ詩ヲ作り文ヲ書得ヌ人ハ人ニテモ無之様ニ見下シ候テ夫ヨリハ人ノ詩文ヲホメツシリ候事カ面白ク相成候時ハ人ノ徳ヲ損シ不計害ヲ生シ申事古今澤山ニ有之候詩文ハ心ニ思フ所不申シテハイラレヌ人情ニ候エハ其思フ所不好候エハ申出ス言葉モ傲慢不敬多キモノニ御坐候左候得ハ上手モヨシ下手モアシカラス必竟心ノ存スル所眞情ヲ取失ヒ不申様ニト申處カ作者ノ本意ニ御坐候エハ先々經書ヲ深切ニヨミ一句一言ニテモ心ニ會得致候事ヲ言ニ云ヒ身ニ行ヒ候様ニ致度事ニ御坐候今日治世ノ分限ヲ忘レ直ニムカシムカシノ人ノヨフニナリタク存シ候ハ萬端ニ害ヲ生シ申候書ヲ讀申時ハ人ノ世ニ立チ死スル迄無難ニ渡リ可申本文ハ紙一枚ニ幾所モ記シ有之候ソレヲ全ク身ニ行ヒ言ニ出シ候ハ賢人君子ニ候得共左様ニハナラレサル事ニ候ハ一ツニツ宛モ致シ習ヒ言覺ヘ候テ君子ノ中間ニ入り申度事ニ御坐候入テハ孝出テハ弟トヨミ覺ヘ申候ヘハ不及迄モ是ヲ心懸可申事言忠信行篤敬ト有之候ヘハ不及迄モ是ヲ守リ可申事ソレヲ不負所學トハ申候書物ニテハ朝夕ヨミ候得共一向ニ言行ハ其所讀トハ違ヒ申候テハ盡ク學フ所ニ負ケル人ニテ不良人ニ御坐候此道理ヲ能ク辨ヘ可申事書生之業辨ヘサセ申度カ師長ノ職分ニ御坐候

一身ニ分限ノ有之事ヲ辨ヘサセ不申候ヘハ人々ノ人欲ニテ人ヨリハ尊クナリ人ヨリハ富有ニナリ度モノニテイツカ分限ヲ忘レ候ヨリ不法不埒モ出來リ學問ノ害夥敷終ニハ身ヲ失ヒ生ヲ亡シ候人モ有之事ニ御坐候所謂論語讀ノ論語シラスニナラヌヨウニ學度教ヘ度事ニ御坐候扱師長ト申者ハ先ツ人ニ信セラレ愛セラレヌシテハ不參事ニ候人ニ信愛セラレ候ヘハ悅服シテ畏敬ノ心モ生シ申事自然ニ御坐候人ヲ悅服爲致候事ハ第一言語容貌ヲ慎ミ可申事ニ候溫柔敦厚ハ詩ノヲシヘナリト有之候詩ヲ作り申人ハ此處ヲ能心得可申事ニ御坐候此場ヨリ詩ニ入候ヘハ其人物モイツトナク温和ニナルヘキ事ニ御坐候詩ヲ學フモ文ヲ作ルモ君子ノ所作ニ御坐候君子ハイカナル人ヲ云フ小人ハ如何ナル人ヲ云フト申處ヲ辨ヘ申度事ニ御坐候人ノヨクナル様ニアシクナラヌ様ニト古聖賢名言ヲ申殘置レ候テ其理義ヲサヘ辨ヘ知り候ヘハ乍不及其通リニ不致シテハナラヌ事ニ御座候其理義ヲ辨ヘシル事ハ書物ヲヨミ師ノ教ニ隨ヒ候ヨリ出來候事ニテ御座候ソレモ出來ヌハ書物ヲヨマス師ノ教ニ不隨ヨリ生シタル不肖小人ニ御座候君子ノ多クナル様ニ不肖小人ノスクナクナル様ニト申君上ノ御願望ヨリ大勢人ヲ集メ候テトモスレニスリアケミカキ上度夫故學問所ヲ御取立テ被遊タル事ニ御座候左候ヘハ學問所ヲ預リ申役ハ重役モ下役モ扱々重キ職分ニ御座候ト申處ヲ心底ニ寸時モ忘レ申間敷ハ師長ノツトメニ御座候忠臣ハ出テ不申トモ不忠者ノ出ヌヨウニ孝子ハ出

履行ヘキノ爲ナルハ君子タリ徒ニ道ヲ説人ニ知ラレンカ爲ナルハ小人タルト見ユルナリ又古ノ學方ニ思トイフ科アリ孔夫子ハ學而不思則罔ト宣ヒ子夏ハ博學而篤志切問而近思ト云レ中庸ニ博學之審問之慎思之明辨之篤行之トアリ然レハ徒ニ學問セルノミニテ思辨セザレハ此道ヲ心ニ得身ニ行ヒ得ヌナリ此道ヲ行得サレハ小人ノ名ヲ免レカキナリ然ニ末世後學ノ流弊ハ此古ノ爲己ト思トノ學要ヲ失ヒタルト聞ユルナリ今天下ノ薦紳先生オノオノ學流ノ見識モ同カルマシク一概ノ論ヲハ及カタキナカラ我藩ノ學宗トイフヘキハ昔年兩老公ノ師侍シ給フ平洲太室二先生ト今日君公ノ師尊シ給フ精里先生ナリ此三先生ノ學流ヲ論スレハ精里先生ノ教ニ學ノ至要一言ニシテ可盡ハ爲己ト爲人トヲ辨スルニ在ト語ラル、ヨシ左レハ或學生ニ贈ラル、文ニ爲學之要莫先於爲人爲己之辨苟於此焉不用心則雖日講誦聖賢之言日步趨聖賢之行徒足以長虛誕譏傲慢矯僞之私與己之身心毫無干涉即使窮年卒歲乾々用力亦何益之有云々ノ數言モ見ヘタリ平洲先生ハ書ヲ讀ル、コトニ机ニ隱リ梁ヲ仰テ何力案思ラル、休ニ見ヘラレシヲ或門人異ミテ先生ハ讀書問ニ他ノ何事ヲ案セラルヤト問ヘハ否他事ヲ案スルニハアラス學思相待ハ古ノ學方ナリ予カ書ヲ讀ムハ每篇毎章ヲ熟讀翫味シテ其篇章ノ義ヲ思ヒ其義專ラ王侯ノ職務ニ的スル篇ナレハ我其職ニ居カコトキ心ニ成リテ其篇義ヲ以テ治平ノ政務ニ推當テ思フナリ又專ラ士庶ノ職務ニ的スル章ナレハ又其職ニ居カコトキ心ニ成テ修齊ノ德行ニ推當テ思フナリ斯ノコトク學ムテ思ヒ思フテ學ハ其樂モ深ク益モ多ナリト語ラレシヨシ太室先生ノ言ニ學問トイフナレハ學且問ヘキハ勿論ナリ其上ニ思トイフ無レハ此道ヲ會得シカタキナリ今ノ學者彼問コトヲ耻此思コトヲ知ラヌアリ不問不思シテ學ノ成ヘキヤト語ラレシヨシ左レハ其著サレシ讀書會意トイフ書ニ仁齋曰古人所思多於所學今人所學多於所思至當之語也ト論シ置レタリ斯ノコトク此三先生ノ見識ハ爲己ト思トヲ學要トセラル、ト見ヘタリ扱又此學思ノ偏ナルヘカラスハ勿論ニテ孔夫子ノ御言ニ吾嘗終日不食終夜不寢以思無益不如學矣ト宣ヒ又思而不學則殆矣トモ宣ヒシナレハ不學シテ徒ニ思フトモ何ノ益ナク假令思ヒ思ヒテ斯ノコトク行ハ此道ニ違ハヌト實意誠ニ疑サルモ彼六言六蔽ノ仁ト思ノ愚ニ陷リ知ト思フノ蕩ニ陷ルカ如ク道ニ背行ヲ過リテ大ハ國ヲ危クシ小ハ身ヲ殆フスルニモ至ナリ然ラハ先々何ノ論ニモ及ス強學博覽ヲ學業ノ本トスルナリ左レトモ此學要ヲ失ヘハタトヘ何レノ博學宏識ト成タルモ徒ニ人ノ爲ニ所學ノ道ヲ說マテニ己カ身ニ其道ヲ履行ヒ得スシテハ小人ノ名ヲ免レカキナリ扱今ノ好學ト稱スルハ此人ノ學ニ志セルハ何ノ爲ニテ其志行ノ君子タルヤ小人タルヤヲ不問シテ強學不厭モノヲ好學ト稱スルナリ古ハ不然イカナレハ季康子問弟子孰爲好學孔子對曰有顏回者好學不幸短命死矣今也亡未聞好學者ト宣ヒシ孔門十哲四箇ノ科ニ文學ハ子游子夏德行ハ顏淵閔子騫トアリ然ラハ此好學ノ問ニハ文學ノ科ナル子游子夏ヲ

カ参リ悦ヒ申候ニ付教方宜敷故カク迄詩人出來候事手柄至極之段稱美遣シ申候其後参リ候テ詩文澤山ニ持参仕リ是ヲ肥府時習館ヘ遣シ夫々ノ評ヲモ請ヒ可申由申聞候ニ付可然トハ申候得共イカニモ可然トモ不存候ニ付又々参リ候時止メ申候テ先暫熊本ヘ遣候事ハ見合可然趣申聞候得ハ成程ト致承知罷歸候良工ハ人ニ示スニ環ヲ以テヒスト覺ヘ申候至極上手感心ニタヘヌ程ニテモ非論ハ多キモノニ御坐候イマタ作り習ヒノ詩文大邦君子ヘモ示シ申度ト申ハ最早浮塵ナル心ヨリ起リ申候此浮慮心情ノ長セヌヨウニ致度候先内輪ニテ得ト熟シ候而之上ト申心カ實心實情ニ御坐候ト愚意ニハ存候ヨリ右之通禮司ヘハ申聞候

一大邦御政事ノ助ケト申ハ人々實行ヲ志シ虚飾ヲ耻候様ニ教ヘ申度候報上ノ心ハ實行ヨリ出テ競進ノ心ハ虚飾ヨリ生申候人々分限ヲ辨ヘ今日ヲ安シ申候事學問之所得ニ御坐候御學問所頭取ノ人物ハ君上ノ御眼力ニ有之事大夫之取扱ニ有之事三人ニテモ五人ニテモ御入用程御舉用被遊候テ相濟可申黜陟進退時宜ニ御隨ヒ被遊度候唯々人々分限ヲ守リ候様ニト申處肝要之義ト奉存候登坂生三年在塾頭取ヲ爲致置候處實義篤心可看破事聊モ無之候始終調子ノ替ヲヌ生得ニ御坐候外々モケ様ニ御坐候ハ、學政ハ先御間モ合ヒ可申カト奉存候人々溫柔敦厚ニ相成一同ニ相親愛相恭敬シテ異論異風ノ起ラヌ様ニ心得可申事師長之極意ニ御坐候ト奉存候以上
初ニ申上候通老衰ニテ何是ゾトグト仕リ手筆ハカナヤラカタカナヤラ埒モ無御座候書損モ多ク扱々不敬之至極實以奉恐入候朝夕ハカリカタキ老衰之義心程ニハ申取リモ相叶不申サリトハ慚愧ナル事ニ御座候其所ハ千万蒙御恩恕一ツニテモ御取用ニ相成候事ハ御汲量被遊被下置候様ニ仕度奉存候筆ニ隨ヒ候得ハイカ程申上候テモ盡キ不申候得共先大略之處ヲ書記シ奉入御覽候大夫君子ヘ篤ト御評議被下度奉願候以上

四月廿八日

紀徳民稽首再拜

餐霞館御近侍下執事

學要辨

學業ハ先王ノ道ヲ學ノ業ニシテ其所學ノ道ハ修身齊家治國平天下ノ術ナリ此同シ業ニ志シ同シ道ヲ學ノ學者ハ同ク此道ヲ得テ同ク君子ト稱セラルヘキナルニ孔夫子ノ子夏ヲ誠給ヒテ女爲君子儒無爲小人儒ト宣ヒシナリ扱此同志同學ノ儒ニテ彼ハ君子タリ是ハ小人タリ其名ノチカフヘキハ何ノ故ソトイフニ素ヨリ其所學ノ道ハ同シトイヘトモ彼ト是ト其志ノ所爲ノチカフ故ト見ユルナリ何ヲ以テ其故ヲ見ナレハ子曰古之學者爲己今之學者爲人ノ章程氏ノ註ニ君子儒爲己小人儒爲人ト釋シテアリ此章註ヲ以テ彼子夏ヲ誠給フノ本文ニ照シ見レハ其志ノ專ラ所學ノ道ヲ己ニ

倫ノ道ヲ學サルヘカラサルハ勿論ニテ若此三綱五常ノ倫理ノ道ヲ廢セハ家國民人一日モ治安ナルヲ得ンヤ左レハ建國君民敎學爲先トアリテ國ヲ治民ヲ安スルノ道ハ此文學ノ敎ヨリ先ナルハナキナリ然トイヘトモ他ノ藝術事業モ盛ノ極ハ必弊風ノ來リテ衰ノ基ト成モアレハ此學業モ極盛ノ弊ヨリ衰ニ至マシキニモアラスノ恐アルナリ今我藩ニオケル國學ノ師長タル者多クハ彼ノ三先生ノ蒙篤ヨリ出其學流ヲ挹ミ學士ヲ誘掖敎育スルナレハ今日此學弊ノ恐レナシトイヘトモ此稍ク盛ノ初ニシテ彼極盛ノ衰ヲ鑑戒スヘキナリ其可鑑者ハ則爲人ニスルノ學弊ニ止ヘキナリ學者オノオノ同シ業ニ志シ同道ヲ學トイヘトモ其志ノ所爲ノチカヒ君子小人ノ判ト成ナリ苟君子ノ道ヲ學ンテ小人ノ名ヲ免スハ學業ノ成レルニアラス不學ハ猶已シ學テ成ラス德ヲ損シ行フ過ハ耻彌深罪尤大ナリ學者自ラ其志ノ所爲ヲ戒サルヘケンヤ嗚乎寔ニ可不戒乎

文化十年癸酉秋九月

荏戸以德撰

安永五年四月十九日學館定詰勤學貳拾人ヲ命ス此時ノ令達左ノ如シ

覺

學館ヘ詰切罷在候内ハ月並ノ出仕當番鐵砲務出火ノ節御城詰並火元詰共ニ御免被仰付候尤此外變ニ臨ミ候儀ハ可爲格別事

一直勤ノ者年始御目見定例之通可致登城候尤御留守年ノ年始モ右ニ準シ可相心得候但シ無給ニテ御目見ノ例モ日並次第本文ノ通ニ候

一正月七月御廟參並御法事ノ節モ是迄ノ通り御燒香可相勤候

一江戸御上下ノ節御見立御迎勤是迄ノ通可相勤候

一御發駕御着城等ノ御歡是迄ノ通可相勤候

一片山紀兵衛神保容助ヘ可致師範旨被仰合候間萬端右兩人ヘ可相伺候將又諸作法ノ儀モ右兩人可申達候間無怠慢可相心得候

一定詰ノ内千坂與市ヘ學頭被仰付西堀源藏ヘ書籍方役付被仰付候

一館中席順ノ儀ハ組並ニ拘ナク年長ヲ以テ席ヲ可相定候但シ講釋等一通ニ出席ノ者ハ組並次第着坐ノ儀勿論ニ候

一定詰ノ内月ニ六度ツ、晝夜御暇被成下候間紀兵衛容助始メ役付ノ者ヘ相届可罷出候且又武藝稽古ノ儀モ右六度ノ日並ニハ勝手次第可相心得候但シ六度ノ外タリトモ不致外出難相叶事モ候ハ、其譯本文ノ例ヘ相伺ヒ可罷出候

稱シ給フヘキニ左ハアラス德行ノ科ナル顔子ヲ好學ト答給フナリ其他七十子ノ徒斐然成章ノ諸子孰カ此文學ヲ嗜ミ好マサランヤ然ニ特ニ此顔子ヲノミ好學ト稱シ給フハ聖人ノ道ヲ信セラル、ノ篤他ノ諸子ノ所及ニアラス信セラル、ノ篤ヨリ好ル、ニ至リテ終ニ此道ノ蘊奧ヲ會得セラレ後世亞聖ト稱スルホトノ道德ニ至ラレシ故ニ好學ノ稱ヲ免シ給フナルヘシ然ハ聖門ノ好學ハカノ文學ヲ嗜ル記聞章句ノ學ヲ稱スルニアラス修身成德ノ教ナル事見ルヘキナリ然ニ後世末學ノ流弊ハ此文學ヲ嗜モノ多クハ記聞ノ學ト成リ行其弊風ノ至ハ此學業ヲ他ノ技藝ノコトク心得テ學力ノ優劣ヲ競フ事技藝ノ勝負ヲ爭カ如キアリ扱彼技藝ハ素ヨリ修身ノ藝ニアラサレハ其藝能ノ勝レテ人ノ成シ得ヌ術ニ至ラハタトヒ身行ノ修ラス小人ノ名ヲ免レス、モ藝ノ成就セル藝人トイフヘキナリ此學業ハ然ラスモト是修身ノ業ナレハ其學力ノ勝レテ人ノ知ラヌ事ヲ知リタリトモ身行ノ修リ君子ノ德ヲ備サレハ學ノ成就セル學者トハイヒ難カルヘキナリ扱又タトヒ學業ノ成就トハイヒカタキモ此道ノ大體ヲ學タルノ益ハ勿論ナカラ此學弊ノ極ハ人ノ子ヲ賤スルニモ至ナリ抑此學ハ終身ノ業ニテ幼童ノ四書五經ヲ素讀復習スルヨリ歲月ノ精研ニ經傳子史百家ノ載籍ニ涉獵シ頗博覽ヲ究テ修齊治平ノ道ヲ心得身ニ行ヘキノ業ナレハ學ヲ躡等トアリテ幼童ノ成長ニ隨ヒ其年齡ノ次ヲ以所學習ノ等差ヲ躡ヘス稍ク學習ヒ稍ク成立スレハ德ヲ成シオヲ達シ學業ノ成就ニモ至ナリ然ニカノ博學宏識ヲノミ専務トスルノ學風ナル時ハ幼年初學ヨリ學識ノ勝ル、ヲ期的シ性稟ノ文才アルハ其業ニ銳進シ少シク文字ヲ知章句モ分レハイマタ四書五經ノ素讀モ卒ヘサルニ先々史漢ナトニ涉リテ幼心ヨリ先入ノ主ト成モノカノ歷代希世ノ英傑其志行ノ高ク度量ノ大ナル一身ノ細勤ヲ愼ス一世ノ大勳ヲ立シナト景慕欽仰スルヨリオノツカラ氣象モ高尚ニ成リ行テ専ラ童輩ノ學習フヘキ灑掃應對事父兄敬長者ノ教ヲ學ス剩他ノ不學文盲ノ長者ヲ輕侮シ稍ク成長スルニ隨ヒ學力才氣モ長スレハ愈力ヲ負ミ才ニ驕リ驕負ノ至ハ父兄ノ教師長ノ誠モ扞格不勝ニ至リ終ニ孝弟ノ德ヲ損モアリ或屑々章句ニ惱ミ道義ニ罔ク文辭詞章ヲ事トシ風流雅致ニ流レ高遠ノ志ヲ騁テ切近ノ功ヲ失ヒ其極飄逸放蕩ノ行蹟ト成リ年月ノ苦學已ニ德ヲ得ノ益モ無ク世ニ道ヲ行フノ助トモ成ラヌアリ柴野栗山先生ノ口實ナリトテ倉成翁ノ談ニ或一侯國ノ先君學問ヲ好レケレハ國靡然學ニ嚮ヒ文教ノ化頗治國ト稱セシカ稍ク盛ナルニ從ヒ學者オノオノ其所學ノ道ヲ行ヒ志ヲ達セントスレトモ人ニ知ラレス世ニ用ラレサレハ快々失意人ヲ恨ミ世ヲ非トスルノ心ヨリ政体ヲ信セス教令ヲ守ラス終ニ政教モ行レサルニ至リ國体民心モ靜穩ナラサルニ至レリ于今此藩ハ此學弊ニ懲リテ學者ヲ嫌ヒ文學モ衰ヘタルナリト常談アリシ唐ノ初政宋ノ創業ナト文化ノ治體隆興セシナレトモ末世ニ至リ民心惑亂シ國体搖動シ衰弊セルモ同シク學弊ノ所致モ有ヤト見ユルナリ然レハ此學弊ノ極ハ國体ヲ害スルニモ至ナリ扱人トシテ人

一年始御規式中相定日並誥人ノ儀ハ如何相心得可申哉(付札)年始ハ十一日迄可被相誥候
一上覽鐵袍并ニ上覽馬揃共ニ誥人ノ儀ハ如何相心得可申哉ノ事(付札)不及相誥候
右ノ通御差圖可被下候以上

四月廿日

千坂與市外六名

右ノ如ク付札ヲ以テ指令アリタル末重テ左ノ通り伺出

御伺ノ覺

先達我々學館誥切被仰付候ニ付寒暑伺御機嫌ノ儀如何相心得可申哉ノ旨御伺仕候所不及其段由御差圖御坐候依之猶又
御伺仕候ハ江戸表屋形様奉始御方々様へハ以書札申上來候得ハ勿論右ノ通り相心得可申儀ト存候新御殿南御殿へモ右
ニ相準シ以書札申上候儀ニモ可有御坐哉旁御差圖可被下候以上

六月二日

千坂與市、色部典膳

(付札)屋形様へノ寒暑伺御機嫌於此表御免ノ事ニ候間江戸表へモ以書札不及被申上候新御殿始メ江戸米澤御方々様
へモ右同斷

安永五年四月廿八日都講達

一讀書生ノ儀ハ出入御玄關口相扣候事

一講堂ニテ書物教者煙草無用

一讀書生假ヒ一人二人タリトモ講堂ニテ教授可有之候都テ塾ニ於テ教候儀無用

一御鍵掛ノ間へ帳面出置讀書生ノ分朝々名前相記ス様可有之候

一朔望廿八日ノ内朔日ハ八時迄肩衣着用十五日廿八日ノ儀ハ不及其儀事

一當直ノ儀ハ朔望廿八日共ニ八時迄肩衣着用有之筈

一學生ノ内父母ノ喪有之時ハ同塾ノ内右死者へ縁邊有之カ又ハ懇意ノ儀ヲ以テ葬場へ被罷出度方ハ葬場迄成共又ハ
人留迄成共勝手次第可被相出候左モ無之方ハ被相届ニ不及候但シ一同ニモ不及事ニ候間追々右ノ通り可被心得候
右之通被仰渡候事

細井平洲在留中片山神保兩提學平洲ノ意ヲ承ケテ興讓館戒令ヲ制定ス安永六年二月十日興讓館ニ令達シテ永規トナス
一卯ノ刻當直椰子ヲ打起シ畢テ柝ヲ撃チ塾々相廻リ塾生ノ字ヲ呼フヘシ其節同時ニ起揃盥漱髪ヲ歛メ塾ヲ洒掃シ

一萬一無據子細ヲ以テ被仰付ノ年期定詰難相成儀出來候ハ、其旨願可申立候事
 定詰勤學生ノ内門閤侍組七名ヨリ左ノ通伺出ル所付札ヲ以テ指令セリ

今度我々學館定詰被仰付候ニ付詰中勤方ノ儀被仰渡承知仕候右御書立ノ内難相決儀其外御書立ニ無御座分我々切一
 存ニ難相決儀共ニ御伺仕候

一月並ノ出仕御免被成下候由被仰付候五節句ノ儀ハ如何相心得可申哉之事(付札)五節句ノ儀モ不及出仕候

一足輕鐵砲爲打候並如何相心得可申哉之事(付札)鐵砲場へ主人々々不罷出鐵砲足輕計差出爲打可被申候

一出火ノ節御城詰並ニ火元詰共ニ御免被仰付候由此段ハ火元詰ノ面々ハ火元へ家來計リモ差出申儀ニモ御座候哉但
 其段ニモ相及申間敷哉ノ事(付札)火元へ家來計リ可被差出候

一年始ノ儀御目見定例ノ通り可致登城旨被仰渡候其外三日ノ晚十一日隨テ御留守年七日十一日ノ儀ハ如何相心得可
 申哉ノ事但シ十五日ノ儀ハ月次ニ相準申様存候間勿論出仕無御坐儀ト存候(付札)三日ノ晚十一日登城可有之候御
 留守年七日十一日モ出仕可有之候但十五日ハ不及出仕

一歲暮登城之儀如何相心得可申哉之事(付札)歲暮登城可有之候

一大晦日晚ノ儀右同斷(付札)右同斷

一御在國御留守年共ニ正月七日新御殿へ被召出候儀如何相心得可申哉之事(付札)年始御目見ノ事ニ候間七日新御殿
 へ可被相詰候

一江戸御上下ノ節御送迎是迄ノ通り相務可申由被仰渡候右ノ節町内殘番ノ儀如何相心得可申哉(付札)我家々ヲ守リ
 候事ニ候得共御役儀ニ依リ町内殘番無之列モ有之候條右ニ準シ町内殘番ニ不及候

一上覽馬勤馬摘務之儀其並方如何相心得可申哉(付札)鐵砲ニ準シ御免可被仰付事ニ候得共御家中ノ馬モ不足其上重
 キ軍役ノ儀ニ候間上覽馬并ニ馬揃ノ時モ可被相務候

一血忌々中ノ節ハ宅へ相退キ可申哉ノ事(付札)父母ノ忌ニハ定式ノ日數宿所へ相退キ退善ヲ可被相盡候此外ノ親類
 半減ノ日數相立チ候ハ、忌御免ニ候間學問所へ可被罷出候血忌ハ三日ノ間在宅有之四日目ヨリ出席可然候

一面々私家法養ノ節ハ當日計相退キ申儀如何可仕哉(付札)前日ヨリ相退キ翌日迄在宅法養執行佛詣等有之候上當日
 ノ晚ヨリ學問所へ可被罷出候

一寒暑伺御機嫌ノ儀如何可仕哉ノ事(付札)不及此儀候

一 申出指揮ニ從テ出執手間取無之様可致藥用モ右同斷タルヘシ
一 三御飯其外總テ柳聲響候ハ、仕懸ノ業何レノ儀有之共速ニ可有出席候其節爐ノ元心ヲ付ケ戸障子猥ノ儀有之間敷事

一 五節氷室ハ朝素讀休之

一 五節氷室ハ朔朝ヨリ八時迄麻上下着用平月ノ湖繼肩衣同斷於講堂師長ヘ一同ニ禮詞申述執中モ互ニ一禮可有之事但十五日廿八日無其儀(平月ノ朔以下中古ヨリ改正左ノ如シ 於講堂師長ヘ一同禮詞申述其席ニテ互ニ一禮可有之事 平月ノ朔ハ右繼肩衣八時迄着用禮詞無之事 但書ハ本文ノ通りナリ)

一 詩會ノ節滿坐不相濟内講堂猥ニ引取ルヘカラス退席ノ限ハ時節ニ依ルヘシ但シ詩出作ノ生ハ伺ノ上引取候儀可隨指揮

一 塾中ニテ酒相用候儀禁之乍然藥用酒用候儀ハ夜分休ノ節獨盃ニ限ルヘシ集飲ハ堅禁之此外雖藥用休ノ刻以前不許之其外於講堂會飲ノ儀ハ塾生家督婚儀名跡組替等ノ生ハ祝ノ酒相催候儀ハ格別其外ハ禁之乍然別段ノ子細有之ハ臨時伺ノ上可隨指揮事此外於講堂以下中古ヨリ删除ス

一 素讀教授講堂ニ限リ候若シ病氣ニテ難相叶生ハ仲ケ間ヘ可相頼候夫共ニ不快ニテ長髪ニハ候得共於塾教授ハ相成程ノ生ハ其譯伺ノ上指揮ニ依ルヘシ但シ日通ノ童生ハ塾ニテ教授可爲格別事

一 塾中相互ニ高聲ニ相喚呼スヘカラス

一 塾中雖嚴寒ノ節火燒禁之

一 親ノ立身或ハ公務ニテ遠境ヘ發足ノ節ハ沐浴ノ外三日歸宅用捨尤モ公務ノ外ハ當日計ノ用捨歸塾ハ可爲當日中此外公務ニテ旅懸務有之共隣國等ハ右同斷タルヘシ

一 塾生家督ノ節ハ沐浴ノ外三日歸宅許之婚儀ノ節ハ當日ヨリ後三日用捨同様共ニ四日目ノ朝五時可有歸塾

一 塾生家督婚儀名跡組替ノ生ハ諸生繼肩衣ニテ右塾ヘ祝詞ニ罷越祝儀物相送候事祝儀物相送ノ五字中古ヨリ删除ス

一 不同居ノ祖父親伯父兄弟或ハ師範等立身御加増冠婚ノ節一通リノ祝詞ニ罷越ス儀不苦事(中古此條ニ左ノ但書ヲ加フ 但シ近例不同居ト雖トモ家元ノ親立身御加増ノ節一晝夜ノ御服許之)

一 右ノ外他所ヘ罷越候節別ニ罷越候儀ハ公務私用共ニ一寸ノ出入ハ用捨右ノ外懇意成間ハ公務ニ限ルヘシ右ノ外以下中古ヨリ删除ス

梧案ヲ清メ講堂へ座次ヲ以テ着坐素讀懇ロニ可有教授事

一塾生中塾々へ會集晝夜共ニ何等ノ儀ニ限ラス塾主共三人寄合候ニ可限三人打寄ト雖モ無益ノ雜話ニ時ヲ移スヘカ
 ラス若シ用事ヲ以テ四人以上打寄候ハ、講堂へ打寄ルヘシ尤モ一塾二三人ニ滿候上右塾主カ亦打寄居候生へ無據
 用事有之生ハ右生ヲ呼立塾外ニテ可申談尤モ都講典籍塾ハ可爲格別事但シ館外ノ客右三人ノ内タルヘシ尤モ同塾
 ノ生罷在候塾ハ右生共四人用捨且ツ日通ノ童生ハ員外タルヘシ此外重立病生取扱不得止節ハ可爲格別事

一夜分ハ四季共ニ四時仕舞當直四半時中古ヨリ九時ハ時ト改メ相廻候間右以前ニ伏揃無失念致爐蓋古ヨリ刪去蓋三字中燈モ鎖シ置候ヲ當直
 見届候様可相心得尤モ都講典籍ハ不時ノ用事有之節ハ夜限ノ後ニ至候儀可爲格別事但シ都講典籍塾ハ定燈此外病
 生ハ容体ニ依リ終夜燈用捨ノ儀伺ノ上指揮ニ依ルヘシ指揮ノ上燈差置候ハ、當直へ可申達事

一夜分四時仕舞ノ梆聲ヲ發シ候ハ、讀書ノ聲禁之且ツ塾々ノ往來堅ク禁制四時前ヨリ寄令罷在候生モ梆聲響キ候上
 ハ早速退散館外ノ來客モ可爲同斷乍然自然無止用事有之生ハ其段當直へ相届候テ右塾へ罷越用向相濟候上又々當
 直へ可相届尤モ都講典籍以用事相招キ候儀ハ可爲格別然リト雖トモ不相招ニ罷越候儀差掛リ候用事ノ外ハ禁之此
 外病生取扱等ノ節ハ伺ノ上指揮ニ依ルヘシ指揮ノ上取扱ノ儀ニ候ハ、當直へ可申達事

一館中ノ門限夜分九時但シ門限後ノ往來堅禁之尤モ沐浴ノ生明朝可有歸塾所勝手ヲ以テ其夜歸塾ノ生其外別段ノ儀
 ニテ出塾ノ生モ九時迄ニ可限事

一沐浴月ニ晝夜六度ツ、明六時出塾翌明六時可有歸塾候雖然歸塾朝五時迄ハ用捨若シ五時過キ候ハ、定メテ疾病事
 故有之可相滯候間遲滯ノ譯早速當直へ以書面可申達且又無據用事ニテ打續キ沐浴ノ生ハ相定刻限ニ一通歸塾夫々
 へ相届候上又々可有出塾尤モ格別ノ子細ヲ以テ沐浴ニ無之出塾右用向相濟可有歸塾所無其儀直ニ沐浴不相成候間
 一通歸塾相届候上可有沐浴事但シ出塾明六時ヨリノ定ト雖トモ業ヲ卒へ候爲メ勝手ヲ以テ明時後何時ヨリ成共出
 塾不苦歸塾ハ定ノ刻ニ限ルヘシ且ツ又都講典籍ハ沐浴ノ外ニモ館中諸用事ニ付外出ノ事可爲限之外候

一館中急火ノ備有之儀ニ付沐浴ノ生ハ相互ニ申合其手貳人ニ一人ツ、ハ可有在塾事(其手以下中古ヨリ改正左ノ如
 シ 五組ニテ十人ツ、ハ可有在塾事 但シ六人組合三人五人組合二人殘リノ事)

一都講不在塾ノ節ハ典籍可相攝都講典籍共ニ不在塾ノ節ハ年長坐次ノ生塾中猥無之様可相量事但都講典籍不在塾ノ
 節當直宿元急變申來出塾候ハ、右跡當直ノ儀ハ是亦年長座次ヨリ可申達事

一書籍ノ用事ト雖トモ不差縣儀ハ相成丈ケ仲ケ間繰合不時ニ外出無之様可相心得若シ不得止手支筋有之ハ其譯委細

一日記ノ内入用無之分モ被相記又ハ一條ノ儀モ別段ニ筆立有之類隨テ委ク可相記分モ被略候事モ相見ヘ候多端ノ儀自是一々ニ可及差圖様無之候間仲ケ間評判被相盡詳客ノ次第書法急度被相立右ノ趣退テ可被相伺候但シ無用ノ儀ニ筆數多ク相成儀モ候テハ無詮事ニ候間右之條相達候

一日記ヘ被相記候諸生ノ儀字モ被相認名モ被相記候簡様ノ混雜無之様可被相心得候此段不心得ノ衆中ヘ申達候一先達申達候面々不時ノ出館或ハ相定ムル日並ノ内出館共ニ其跡御賄頂戴無之分ハ其度數共ニ其人々被相調當直ヘ可被差出候事ニ付口上一通ノ届ニテハ當直混雜ノ役場自然取紛レ主財ヘモ不申達候時ハ主財方取量之迷惑ニ及候間以來ハ自然取紛口上計ニテ届有之族モ候ハ、右ノ段爲調候テ請取右ヲ直ニ主財ヘ無遲滯可被相渡候一當直役場ヘ相渡リ候蠟燭ノ義ハ當直ノ任ニ付テ館中歩行ノ節手燭ニ燈シ亦ハ何ソ事故有之節屯ノ間ヘ相用候事ニ候及暮日簿等被相記候義ハ油火可被相用事ニ候用方無盡期候テハ如何ニ付心ヲ可被相用候事

申ノ五月七日

都講

細井平洲在留中片山神保両提學平洲ノ意ヲ承ケテ興讓館當直勤方ヲ制定ス安永六年二月十日興讓館ニ令達シテ永規トナス

興讓館當直勤方

一當直ハ卯ノ刻ヨリ相諸當直所諸帳而箱入ニシテ請取渡有之明日卯ノ刻迄當直所詰切詰所猥ニ明申間敷事一卯ノ刻梆子ヲ打起否柝ヲ擊塾々相廻每塾戸外ヨリ塾生ノ字ヲ呼ヒ返答ヲ承可罷通事但シ返答有之候テモ時刻相後不起者有之者定メテ病氣可有之間其節右塾ヘ罷越病体相尋隣塾生ヘ取扱可申達事

一梧案ヲ正シ日簿ヲ奉シ記錄ノ儀ハ月ノ大小終日ノ陰晴雨雪日月ノ食地震等都テ天變地妖火事其外館外ノ出入塾生ヘ召仕來或書簡ノ往來諸生ノ不參此外不時ノ儀無殘沐歸出入刻限欠業帳共ニ鹿略無之様尤モ重キ記錄ノ義ニ候間亂雜筆誤無之様入念可相記尤モ右帳共日暮ニ日暮中古ヨリ夜五半時ト改ム至候テ都講ヘ差出入一覽日記ハ差圖ノ上可相認都

講他出ノ節ハ典籍タルヘシ附欠業帳ハ沐歸病氣親戚ノ病氣等ニテ不參ノ類モ皆以テ欠業ニ可相記候此外公務血忌々中等ノ儀モ同様相認其譯肩書ニ可被相記候尤モ不時ノ儀ハ可隨指揮此外以下中古ヨリ删除ス

一館中塾生共ニ猥ノ儀ハ相制隨テ講堂其外共ニ不見苦様時々洒掃御番人ヘ可申付當直所ハ別テ取亂候体無之清淨ニ可有之尤モ理髮削髮禁之

一賓客ヲ當直所椽際迄送候事式日ニ限可申事式日ト雖モ平日受業往來ノ方ハ不及送候併シ高家衆大夫中ハ業ノ爲ニ

一親類ノ病氣其外無據間師範等看病ハ可有出塾打續テ看病又ハ通々ニ看病モ其子細ニ依時ニ臨ミ指揮スヘシ
一右ノ外不幸ノ節喪ヲ吊シ葬場ヘ罷出候儀隨テ不斷法事ノ節共ニ焼香ニ罷越儀不苦候乍然法會ノ席ヘ列手間取候儀
ハ不許之焼香一通又ハ佛詣迄ハ用捨此外重キ祥月ノ佛詣一寸ノ儀ハ可有出塾事

一塾生ノ内同居ノ親族同居之親族中古ヨリ父母ト改ム病死ノ節ハ葬場ヘ罷出尤モ不遅成様喪ヲ吊スヘシ乍然塾生館中ハ同様ニ候得共
門ヲ出テ候テハ階級有之候間葬場ヘ不罷出方ハ召仕差出葬送ノ助力可有之事

一塾生宿元生死病難或ハ出火ノ節宿所ノ方ニ相見候ハ、早速可有出塾急段ノ儀ニ候間役筋ヘ届ノ儀便利次第一ヶ所
ヘ届ケ可有出塾事

一塾生ヘ以用事家來召仕罷越候ハ、夫陳ニ相扣下男若クハ以御番人當直ヘ申出當直右ノ段塾生ヘ申達候上右生罷出
用事可承若シ於塾相達候用事ニ候ハ、塾生右ノ者同道塾ヘ罷越用向相濟ミ戻リノ節モ夫陳迄附添可罷出事但シ家
來塾ヘ罷通り候分ハ右塾生當直ヘ可斷

一會業ハ不及申業ノ間ト雖トモ不參ノ生又ハ右休ニテ夜限以前ニ休ミ候節等ハ當直ヘ無遅滞可相届候直ニ届不相成
節ハ外ノ生ヲ以テ可相届且又病生ハ隣塾若不在塾ノ節ハ向塾ノ生可有取扱事但シ不參ノ生快氣ノ上夫々ヘ直ニ可
相届事

一忌血忌御免ニテ出勤ノ生ハ御免ノ日朝五時歸塾繼肩衣ニテ夫々ヘ夫々ヘ中古ヨリ先生ト改ム御禮申上隨テ總塾中可相廻當日ノ忌
遠慮等ニテ退候生モ翌朝五時歸塾尤モ肩衣ニ及ハス御禮等無之事

一講堂ヘ諸業ニ付火鉢持出候義十月朔日ヨリ二月晦日迄タルヘシ乍然其歳ノ寒暖ニ依テ猶指揮アルヘシ
一外出ノ生塾ヘ錠掛罷出鑰ハ當直ヘ可相渡石跡ニテ書籍其外不得止用事ニテ右塾ヘ罷越度生ハ當直同道ニテ塾ヲ開
キ當直目合ヲ請用事相達右錠當直可掛事

一病生自然不得止病体ニテ醫師ヘモ相詢ヘ温泉入浴不致不相叶程ノ義ハ相成間敷ニモ無之候其節ハ一先子細申出指
揮ノ上以願書可申出事

一開業欠席ノ分沐浴病氣ト雖トモ皆以テ欠席ニ記月々官府ヘ書上之尤至歳抄欠席ノ多少甲乙ノ科ヲ立テ候事此外公
務忌中ハ科數ノ外タルヘシ

一日通ノ童生讀書生不參日相改月々月々中古ヨリ歳末ト改ム書出可有之事

當直心得安永五年達

ヨリ可被
ト改ム 併シ平常ノ沐歸ニテ出塾ノ跡ニ其日ノ當直故有之番詰ニ相成次直ニテ右跡直可相勤順ノ所沐歸ノ跡無據ニ付其日ハ右沐歸ノ生ノ次生相勤退テ其分可相勤事

一塾生ノ中宿元急變ノ儀ニテ急出塾ノ節ハ右生出塾ノ上塾見届可申事

一幕時ヨリ塾ノ通上下へ燈爲立之九時中古ヨリ八時ト改ム廻ノ節相鎖可申事

一師長退去ノ節ハ御玄關鏡板迄送可申事

一諸事伺ノ儀ハ都議不在塾ノ節ハ可爲典籍與籍モ同様ノ節ハ年長座次へ可遂評判事

一夜分九時當直夫々往來ノ口可相バ候尤モ急變ニ付テハ其後タリトモ内外ノ往來可爲格別諸生故有之出塾ノ生或ハ沐飯ノ生勝手道ヲ以テ夜中罷歸候ハ、九時ニ限候其刻歸塾ノ生有之ハ右ノ生休候上塾見届可申事

一塾生ノ宿元ヨリ召使罷越候節ハ夫陳ニ相扣御番人下男ノ内ヲ以テ右ノ段當直へ可申出間無遲滯右塾生へ可申達若シ事故有之ハ御番人歟不居合節ハ下男ヲ以テ塾生へ可通達尤モ塾へ通候分ハ日記へ可記事

一館中故有之諸生中何モ役附務候程ノ節當直モ加直有之ハ右加直外ノ役附ト同様ニ相準シ退テノ本直ハ順段ノ通可相勤尤モ其日ノ本直一人ハ可爲格別事

一出家沙門若ハ庶人ト雖トモ受業ニ來候面々ハ登堂平等タルヘシ

一當直勤方近例 享和三年正月

一當直勤方閱見之儀先例酉刻都講塾へ持參候處近例戌半典籍塾へ持參アラタメヲ受候事此時助教登坂孫助都講ヲ兼務セルヲ以テ典籍ノ閱見ヲ受ルナリ恒例ト爲スニハ但其節諸業欠席帳致持參候尤近來蠟燭渡不足ニ付手燈持參延引

一賓客送之儀先例式日入來之分當直所緣際迄送候處近例其儀無之尤他邦者入來之節ハ其客ニ寄り送迎格別ニ候但高家衆侍頭大夫中當直所次板椽迄業ノタメ入來トイヘトモ相送候之處近例高家衆爲業日々出入之衆ハ不相送片山郡奉行ハ鏡板迄送候事

一當館事故有之役付相務候程之節當直モ加直有之右加直モ右役付同様之振合ヲ以退テノ本直ハ先例不相除候處近例本直相除其日之當直同様之段臨時相許候事

一當直故障有之繰替之儀勝手次第之先例之處前日繰替届相濟候共猶又其生故障出來繰替ヲ届又々是モ障出來幾度モ繰替取替之儀不苦事ニ候或ハ其日ニ至卯刻後諸生出入届無之内是亦繰替幾回ニテモ勝手之事近來ハ其日ニ成朝五時迄攝或其後業過迄攝其上取替等有之様々繰合之儀間違之基ニテ此段ハ不宜候前日ヨリ其朝諸生出入届無之前ハ

入來タリト雖トモ平日共ニ板椽迄送ヘシ但シ式日ト有之日ハ十五日廿八日モ同斷タルヘシ

一來客ノ節煙草盆等御番人ヘ可申付事

一柳子ヲ響セ候義時々無間違可戒衆生事

一夜限ノ柳聲四時ニ發シ四半時中古ヨリ九時ト改ム柁ヲ擊テ師長都講典籍塾始毎塾見届其節塾中總仕舞致爐蓋中古ヨリ致爐蓋三字刪除ス燈迄

鎮候上ニ候得共入念火ノ元相改此外講堂向夫陳同斷其後九時中古ヨリ八時ト改ム又々右同様相廻可見届事但シ都講典籍役儀

ニ付用懸ニテ夜間ニ相仕廻兼候節ハ其段可申達用事相濟休候節ハ右ノ條可相届候間休候上塾々可見届且又右兩役

塾當直所夫陳ノ燈ハ通宵燈置候事

一會業ニテ塾生登堂ノ時ハ塾々空虛ニ至候間時々會席ヲ立候テ師長ノ舍ヲ始塾々無殘時々相廻可申事

一會業ノ節臨席ノ先生時刻到來ヲ申出柳聲ヲ發シ書臺ヲ清備之衆生就座ノ上臨席宜旨可申出事

一會業ノ節臨席ノ先生ヘ賓客有之ハ其段右人ヘ申達爲相扣可申候尤モ急段ノ用事ヲ以テ入來候方ハ臨其時指揮アル

ヘシ

一賓客來候テ先生ヘ相見ヲ請候時ハ右ノ旨申達候上可應師長ノ指揮尤モ文學ノ事ニ付候テ來候時先生他出ノ時ハ都

講典籍ノ中ヘ可申出事

一當直ノ生ヘ宿元ヨリ死生病難ノ類申來或ハ出火ノ節宿元ノ方ニ相見候節ハ役筋ヘ届ノ儀便利次第一ヶ所ヘ相届馳

付可申候次直ノ儀ハ翌日當直ニ當候ハ、可相務事但シ都講典籍他出ノ節ハ年長上座ヘ可相届

一夜分露燭ヲ不可用不心得ノ生モ見當候ハ、可禁之事

一五節氷室八朔平月ノ朔共ニ平月ノ朔共ニノ六字中古ヨリ刪除ス於講堂諸生中先生ヘ禮詞申述候間先生ヘ刻限ヲ申出柳聲ヲ發シ講堂ヘ衆

生就座ノ上當直先生ヘ案内可致候事

一當直ハ五節氷室八朔ハ暮時迄上下着用平月ノ朔望廿八日ハ八時迄繼肩衣タルヘシ

一失火ノ節失火中古ヨリ近火ト改ム火消立町一組馳付可申間組頭ノ名前聞届遠火ニ候ハ、鎮候迄遠火以下八字中古ヨリ刪除ス御玄關前ニ詰居候様

可有差圖候甚タ遠火ニ候ハ、見合可有之事但シ御玄關ヘ籠挑灯御番人ヘ申付可差出事

一會業ノ節ハ不及申業ノ間ト雖トモ不參ノ生ハ當直ヘ無遲滯届可有之間業ノ節ハ會席就坐ノ上罷出都講典籍ヘ可相

届候業ノ間ハ右兩役ノ塾ヘ罷出可申達事

一一己ノ病氣ハ不及申親戚其外無據間ニテ看病有之程ノ義コテ出塾ノ生ハ其日當直ニ候共相除其分不及追勤候不及中古

一近來主財勤方御馳爾來ハ兩人詰ニ無之隔日ニ罷出朝出勤等モ其日ニヨリ學館用ヲ以役所等へ直々罷出候事モ有之
出勤相後候上ハ御番人或ハ夫陳之者御飯除之儀當直迄可相伺候其節ハ能々御飯除人頭相改可被申付候
一夜限後之加直相當翌日モ當直ニ候者前夜加直ハ四五人モ跡へ繰合相勤候事

一講堂ニテ月朔禮詞之儀五節ニ當リ候朔ハ近例延引之事

一御番人勤方之儀者御立關番ニテ御立關へ來候ヲ取次或ハ先生役藝之語使テ相勤候講堂爾下塾々之上下朝々掃除當
直所熾火等之小遣其外雜用ニ相使候儀ハ誠之賴勤ニテ本職ニ無之候此段ハ役筋ヨリ被仰達置候事ニ候得ハ本職ニ
無之分ハ當直申付候ニモ心ヲ用辭ヲ下シ可被申付候氣向ヲ犯候テモ不宜候間能々御心得可有之候但諸生中諸使等
ニ差出候儀ハ尙以猥ニ不相成候間此段モ御心得可有之候事

當直頭心得

一御上下之節當直卯之刻ヨリ兩人勤之事但辰ノ刻御發駕御延引ニ相成候節右刻ヨリ次直引取夜直相務一日之分ニ相
成候事

一御吉事ニ付御悅務有之節當直共ニ八人殘之事(但天保十五年四月中御差圖)

一試業中冬至ニ相當候節寅之半刻御備ニ付丑之刻ヨリ當直交代之事(但天保十五年十一月中御差圖)

一三月十五日淺間先生へ盡事ニ付二切ニシ罷越候事但當直之生ハ朝ヨリ七ツ時迄相務右刻ヨリ十六日當直之生續テ
相勤候事

一正月八日開講ニ付御酒被成下候節當直三人勤之事但御大儉ニテ御酒無之節ハ一人勤之事

一君上御成之節三人勤之事

一支候御方々様トイヘトモ前同斷

一試業之節當直兩人勤之事但試業濟御酒故アリテ後日ニ被成下候其夜限五ツ半之事

一總テ望月至日之宴被成下候節一人ニテ難相勤候節ハ兩人ニテ相勤次直ハ八ツ時ヨリ差出候事但至日之宴被成下候
節夜限無之事

一節分御祭事之節兩人務之事

一次直有之候節ハ其夜夜直ニ不相及候事但二人次直アラハ一人ハ翌日之夜直可相務候事

一當直之生五節句氷室八朔者朝ヨリ酉之刻迄上下着用平月之朔望廿八日ハ八ツ時迄續肩衣可爲着用事

繰替幾回ニテモ不苦其後ニ至テハ爾來不相成候乍去前日無據沐歸之分ハ其期迄攝直可相話候但入浴等不得止事ハ攝直相許半時ニモ相成候分決テ不相成候勿論急變之儀ハ臨時二人モ三人モ繰替無據候

一直勤之生勤方ニ付出館之分豫相知候勤方ニ候共其日相除候時刻迄ハ相勤或ハ其日勤方隙明ノ上何時成共受續相勤候先例之處近例當館多勢ニ付出入都テ當直勤方煩雜ニ相成一日之内代モ相立候テハ先キノ事モ無覺東間違之基其上務方ニテ相除候分ハ大概直勤ニ限候得ハ其分相除候テハ無給生ハイツモ廻リ合近ク片寄タル事ニテ當館之一跡ニ不組合候ニ付近例豫相知レ候分ハ前後ニ繰替相務一日之内代無之様ニ成丈可致候但自分生ハ根元諸生並當直相勤度段親之上ハ是亦同様之事

一諸勤或ハ御暇等ニテ罷出候テモ前後ハ繰替相務候得ハ自己之病氣又ハ看病等ニテ不參之生二順不參以上ハ償ニ不及候處近例幾度ニテモ追テ其分相償候事但償當直ハ齒順ニ不相構歸館翌日可相勤尤障有之繰替勝手之事

一近來諸公子御勤學御相手被仰付置或ハ御郊行御供ニ被召連候儀モ有之前日其段被仰出翌五時迄ニ相詰候得ハ前夜五時ヨリ引取可申候所前日當直ノ節ハ引取刻限迄相勤次直ヘ其日之諸事出入ノケ條迄懇ニ申送り可相退候尤追テ此分返番ニ及間敷候但急變之ケ條ニ組合此段ニ候追テ返番ニテハ先日引取候時刻ヨリ可相勤候得ハ則一日兩人ニ相成候付本文之通ニテ宜候此外是ニ准シ當直勤懸之内一時前ニ引取可申勤方出來之分ハ追テ返番ニ不相及都テ一日之内當直繰替ヲ厭候ニ付此段ニ候

一失火之節何方ニ不限火消方一組相詰先例ニ候所當館近火之外近來不相詰候近例

一夜中ハ當直子刻迄罷在候先例ニ付同刻迄諸生歸館相成候近例丑刻迄當直罷在候得共門限ハ子刻ニ限候事

一夜限後子刻迄兩度塾々其外夫々相廻候場所相定居候近例子丑之雨刻一時ヲ隔相廻候事右ニ付一人ニテ不相成亥刻ヨリ加直一人相加リ毎夜相勤但本直加直共ニ深更迄罷在候ニ付翌日疲レヲ休メ候タメ講堂出席之妨無之様繰合暫之内休臥勝手之近例

一當直勤之内門外出入之儀暫之内タリトモ不相許勿論書藥両用共ニ不相成候事但能々不得止事ハ窺之上指揮次第之事

一三御飯除札主財罷出相改候上猶又諸塾先生之塾迄不在塾之生ヲ相考御賄除無落様可相心得候事

一三時之御飯ニ向一寸之出入之分前後繰合罷出候先例ニ候得共御飯差出時ニ向ヒ罷出候生ハタトヘ役塾不心付相許候共差留置御飯後出入或ハ罷出候共早々歸館之様引合可致候事

一當直取替之儀公用病氣者格別私用ニテ取替候儀堅不相成候處近來極々不得止無據譯ニテ取替度節ハ其段當直頭へ書付ヲ以窺出差圖ニ相隨ヒ候事但當直頭不在塾之節ハ次年長へ相伺可申事且取替相濟分ハ當人不參ニ候モ不苦候事

一有故當直一人ニテ難相勤加直差出候節未之刻迄相掛リ候者一日之直ニ可致事

一次直八ツ時迄相勤暮迄相勤候上公用ニテ引取候者夜直爲相勤一日之分ニ可致事

一右同斷八ツ時ヨリ相務候節私用ニテ引取候者限後迄相勤候共夜直爲相勤一日之分ニ可致事

一新生當直一順見遁之上直ニ相當候節ハ公用之外取替直者不相成古法ニ候事

一雖再館初當直之節者終日可爲繼肩衣尤無是非障之節取替相勤候儀不苦古法ニ候事

一年長者當直一度爲相勤以後者見遁候古法ニ候事但初入館之生ニ候者一順見遁シ二順目ニテ爲相勤可申候且加直ハ始終見遁候事

一御連枝様方御學業御相手被仰付候者當直不相除候事(但文化十年中相定候事)

一家塾ヨリ本員被仰付候者入館無之共當直可相勤事(但放散中寄塾ヨリ本員被仰付候節ハ放散後ヨリ本員之順ヲ以可相勤旨文化三年中何差圖)

一年內放散中當直割者常之順ヲ以廿一日ヨリ七日迄先ツ本直ヲ割次ニ次直ヲ割次ニ八日之本直ヲ割夫ヨリ段々順ヲ以餘計相割候事但公用之分ハ前後ニ取替相割可申且本直之者前夜之加直ヨリ相勤候ニ付キ遅テ加直一順相除候事且張出當直割之外帳面ニテ都講へ三通差出候事

一新入館之生者初一順見遁之例ニ候處總テ放散中ニ相當候節ハ初順見遁不申放散後平日之當直ニ相當候節一順見遁可申事(但文政八年中差圖)

一償直之儀者三順以上者三順相償其餘ハ不及償候事

一永不參ニテ償直三度有之放散前難償節者放散割出シ申放散後爲償可申事

一助讀之餘計ニ當リ不參之節相勤候生者血忌中同様當直一順相除可申事

一放散中本直万一不參之者モ有之候者餘計ニテ相塞右塞候者之當前ニ相勤可申候若放散中不相當候者追テ返直可有之候事但忌中餘計相務候者ハ當直一順相除可申事

一盈放散當直者未相勤古參之者ヨリ割出可申候尤餘計モ同斷但本員次直ニ相割寄塾本直ニ相立候古例ニ候夜直ハ平

一五節句八朔於講堂諸生中先生へ禮詞申述候ニ付先生へ刻限申出柳聲ヲ發シ講堂へ衆生就坐之上當直御案内可致候事

一若替御暇何事ニ不依當直之外五人相殘當直共ニ六人タルヘキ事

一釋菜前日ハ當直三人之處右三人之外五人相殘當直之多寡ニ不拘候事

一諸御手傳松探祭器燒之類ヲ始詩會漁獵陪從共ニ當直跡四人相殘當直共ニ五人可相殘事但宅休息御暇被成下候節ハ爲警衛右四人之跡筆順ニ三人歸館都合八人タルヘキ事附夜直明日之當直者數ニ不相成候事

一御普請事ニ付材木運送或ハ谷地河原御手傳等二日ニモ三日ニモ割合罷出候事有之其時之臨機次第若一統罷出候節ハ殘數尤前同斷宅休息之節警衛數モ同斷

一近郊砂脊負類又ハ芝採之節當直跡一人殘リ當直共ニ二人殘之事但宅休息之節警衛數前同斷

一晝夜放散御暇被成下候節當直跡一人相殘可申候尤加直順ヲ以相殘可申事

一學館御構内御手傳事ニ付宅休息之節同斷但爲警衛歸館之生ハ翌日申半刻ヨリ休息御暇許之前日御手傳仕舞歸宅歸館之刻限ニ不相拘候事

一同館生之内不幸ニテ會葬ニ罷出ニ節ハ當前之直ヨリ次三人殘之事

一公私御暇ニテ罷出候節當直ニ相當候トモ次直之者へ相送り罷出追テ償可申分左之通 御歡喜、御會讀、始末伍會、組頭替リ重判、湯治御暇、歸省御暇、法事御暇、年賀御暇、婚禮御暇、麻布御會讀、麻布御送迎 右之通總テ一晝夜御暇罷出候程之分ハ右ニ可準事但鬱散讀書初虫干御暇ハ相除可申尤取替罷出候儀不苦事

一忌中血忌之生直償ニ不相及候事(但忌明血忌明之日當直ニ相當候共償ニ不及旨天保二年八月中御差圖)

一血忌御免之日當直ニ相當前後不相勤者有之候トモ日割ヲ以テ相數見通可申事

一當直之日ニ當リ公用ニテ無是非他出不致不相叶筋ニ候者其段役塾へ伺之上可罷出然上者順ヲ以次當前之生へ當直頭可申達之未ノ刻前候者一日之直ニ不相成候未ノ刻過ニ候者其夜之加直相務候テ一日之直ニ可致候次直有之候節者夜直ニ不相及候間後日可相勤候事

一受續テ當直相勤候者尤一日之當直ニ相成候事

一當直ニ相當候日出火宿所之方ニ相見候カ又ハ病氣等無據私用ヲ以相引候節暮時迄相勤候ハ、夜直爲務一日之直ニ可致事但次直幾人有之候トモ殘數ニ不相成候事

一始末新入伍會ニテ未之刻ヨリ罷出候者夜中五ツ時迄歸館可致候事但用談不相濟ノ趣ノ書面二度モ到來ニ候者明朝歸館ニテモ不苦候事

一不時伍會常之頭用者二時可限事

一申出公用之分者豫口演ニテ明朝歸館不苦候事但口演無之五ツ時迄用事不相濟候者其段書面ヲ以可相屆候事

一總テ公用御暇ニテ罷出候者有之候者定數之外私用之出入不相成候事但私之頼合ヲ以縁合罷出候者可爲勝手事

一有故御酒被成下候ニ付當直ヘモ被成下候者翌日晝御飯之節窺ノ上頂戴可仕候若殘酒有之候節者夕御飯之節モ不若候事但三日之内一日ニ可相限事

一重判之節大小姓以下之組並御暇三時ニ限リ候事(但弘化二年二月中相極リ候事)

一着替御暇之儀一日ニ相限候ニ付御入前日殘ニ相向候生ハ御入前々日罷出可申事(但同年三月中支俟御入之節ヨリ右同斷)

一正月十四日越年御暇一統ヘ被成下候ニ付當直共ニ六人殘之事右六人翌日御暇被成下候事但御暇十四日ニ相限候ニ付右六人之外十五日越年ニテ十五日ニ御暇頂戴致度生ハ都講ヘ相伺可受差圖事

一寄塾御差留之節淺間先生ヘ御禮勤公用ニ相定候事

一寄塾助教塾ヘ轉塾之節同斷

一御法事之節警衛殘無給生ノ内宿元法要有之外ニ右代相塞キ申無給生無之節ハ江戸御上下之節之御例ニ相隨ヒ當勤無給何レモ無間欠樣可致事(但弘化元年十一月十一日享德院樣御法事之節草間庄藏曾祖母法事ニ付當直頭ヨリ窺出候處都テ江戸御上下之節之御例ニ可相隨旨御差圖有之候事宿元法事ハ御法事相濟候後ニ候得ハ能縁合候得ハ間欠ニ不相成候事)

一御上下之節警衛殘十人右之内當勤生ヨリモ相殘候節ハ御發駕御着城後ハ六人殘ニシテ御悅相勤候事但無給生七人ニテ當勤ヨリ三人相殘候節當勤一之殘リ生次直相勤候節御發駕御着城後隙明引取候得トモ御悅勤ハ當勤殘リ末之生ヲ一ニテ末ヨリ兩人罷出候事

一新入館生初心ニ付初一順見遁古例之所若初順見遁之折忌中血忌ニ相成候者其順見遁之數ニ不相成忌明之上ニ一順見遁候方ニ弘化二年六月木滑伊總入館之上見遁順ニ候所血忌ニ相成候節相定候事

一新入館生次直相勤候者其順見遁ニ不入次順見遁候事但次直兩度相勤候者三順目見遁之事

直之順ヲ以相勤候事

一 盆放散不參之生者翌年之放散へ割出可申候尤餘計ニテ相塞キ候者ハ割出不申候事但夜直不參ニテ餘計ノ者相塞キ候者夜直帳へ代務ニ不相記當前ニテ相勤候様相記可申且不參之者放散中歸館ニ候トモ放散後夜直償可申事

一 當直順ヲ以相送右送ヲ受候人誰トカ取替置候ニ付其人へ送吳候様申斷姿モ有之候處差支之節有之候間以後順ニ候者其人送ヲ受取替置候人へ引合可申候若取替置候人不在塾ニ候者當人可相勤候事

一 當直之日ヲ不承知ニテ繼洙歸致候節ハ相互之儀ニ付其次之生ニ相送可申事

一 當直次へ相送候儀五半ニ可相限事但五ッ半時過送相濟候節歸館之生ハ翌々日之償ニ相成候事

一 賓客送之儀兩先生者鏡板迄助教者板椽迄高家衆奉行中侍頭者同斷中老御小姓頭者當直所内鴨居際迄右者式日ニ不限平日之往來共可相送日々受業之タメ往來ニ候節ハ送ニ不相及候事(但宰配頭ハ送ニ不相及候シカシ三手我手々々ノ頭ヲ送候儀可爲勝手旨天保三年中御差圖)

一 兼助讀之儀者此迄之通總テ不時之節トイヘトモ放散當直爲相勤候事(右者文政十年中御差圖)

一 初テ入館之日當直ニ相當候共其分償ニ不相及候事

一 御法事或ハ御發駕御着城之節殘員定數之外不快ニテ相殘候生者當直并塾長へ可相届候事但殘員餘計ニ候共御歸殿迄出入沐歸不相成事

一 祭器燒之節服掛ノ生ハ祭器方神厨トイヘトモ當直順當ニ候者可相勤候事

一 明日當直并次直之生前日之夜直候者夜直之分ハ不相勤追テ償可申事但仲間申合之事

一 扱生試業之日ニ相當之者前同斷

一 放散之日館用或ハ當直ニ相當候生追テ放散御暇ニテ罷出候節欠業ニ調來候處館務ニテ無據相殘候儀ニ付右放散ニ限リ欠業ニ相記申間敷候事(但文政十三年中御差圖)

一 助教文章會者格別ニ付常之出入ニ不差支様相心得納涼殘定數迄相減シ罷出可申定數相減候節ハ伺之上タルヘシ尤納涼殘之外減不相成候事但常之出入ハ右會ノタメ定數ヲ相減候儀不相成且又御門限前歸館可仕事夕賄罷出候ニ付右之通

一 淺間先生へ御招之節前同斷

一 淺間先生御會讀相濟次第但戌刻ニモ相至候節ハ其譯申遣ヘキ事

一安政四年中書用四度七日之沐歸等ハ其人之不調法ニテ當直之不調法ニ不相成段相定候事

一安政六年正中組頭連判一時懸出相濟迄之御暇ニテ限後歸之方相定候事

一同年三月晦日石丸周助丸山又四郎入館有之四月中鬱散御暇被成下可然哉之旨伺候處三月四月勝手次第被成下ニ付兩人ハ被成下旨都講引合相定候事

一岡田陽太郎四月七日入館有之鬱散御暇被成下候事

一文久三年四月十八日詩會日組頭會讀生差出候節塾長當直不調法申出候事

御暇諸例

公務御暇之例 江戸御上下御送迎前日七ツ時ヨリ御悅勤相濟迄御暇之事 組合寄合於末御暇其外家督初テ又ハ新入等

有之節許之尤相濟次第歸館之事但右之外不時之寄合ハ臨時指揮之事内證扱等之打寄ハ兩三度モ沐歸ニテ罷出不得止事ニ候ハ、伺之上指揮之事 組頭役馬見届并宗門請狀同重判或ハ組對面之節許之 御用登城之生御請勤ヨリ直々上

意相濟迄御暇之事 父子御用之節右同斷 公務之分一時ス、罷出候處朝五ツ時出勤之生ハ明時五時之無差別前夜五時ヨリ御暇許之但五時迄ニ出勤之生ハ沐歸納涼ヨリ直々相務候段前日届ニテ不苦候事 江戸上下之生五日休息之事 組頭用鳥渡之出入許之 但組頭呼懸トカ何ソ願出願濟トカ其外自身不罷出候テ不相成分口演ニテ窺之上許之

吉事御暇之例 親之兄弟立身江戸上下自分之家督婚禮之生ハ三日御暇許之但表立候旅懸ケ勤同斷公務之外ハ時宜ニ依一晝夜御暇許之 右之分不同居ハ一晝夜御暇許之 館中居懸ヨリ諸生被仰付候節一晝夜之御暇許之 旅立見立伯叔

從弟師匠迄鳥渡之暇許之 同居之子供兄弟緣定願濟出入初婚禮前髮取一晝夜御暇許之 拜領物開之節御暇重キ拜領物之節計一晝夜御暇許之但口演ニテ窺之上許之 同居之祖父母父母ニ限り年賀之御暇一晝夜許之

疾病災害之例 親類之病氣其外養家之母他ニ嫁候者又ハ甥之無忌服之類無通問師匠等之看病口演窺之上子細ニ依リ許之宿許病難或ハ失火之節出塾許之尤夜限後ニ至リ急難之筋有之者當直ヘ計リ相斷可罷出候事附居宅燒失之節伺之上

十五日御暇許之 失火之節牌寺或ハ親類之方ニ候ハ、誰々方角ニ當候ト口演之上許之 萬一御城内出火之節ハ火元勤之列御城詰許之 藥用書用鳥渡之御暇許之但書用月三度ニ限可申事且書藥用ヨリ公務ヘ繼候ハ不苦 親類病氣見

廻伯叔父母迄許之 遠類トイヘトモ同居之生ハ看病見廻許之但右之譯口演ニテ窺之上許之 同塾病氣之見廻御暇許之

喪祭之例 附忌遠慮之類

舅姑從弟師匠迄法用之節燒香墓參許之然トイヘトモ法席ヘ列候儀ハ不許之此外兩親之忌日ハ不幸

一天保十二年正月九日節分御祭事清道者筆頭佐伯新右衛門當直ニ相當候所節分ハ重キ御祭事ニ付當直ハ次へ相送清道者筆頭ヲ相勤候様伺之上御差圖之事但五節句ハ朔氷室其他不時之御拜禮等重キ御備雖有之節當直ニ候ハ、當直ヲ相勤清道者筆頭役ヲハ次之人攝役之事

一節分御祭事之節清道者筆頭相勤當直次之人へ相送候トモ後日當直償ニ不相及候事(右ハ佐伯以來相定候事)

一放散御暇中當直ニ相當候日不參ニテ當直不相勤候ト雖放散中ハ格別ニ付不參ノ數ニ不相成候事(右ハ大井田小吉當直頭之節相定候事)

一兼助讀中當直跡殘之儀是迄不分明之所今度以格別之御沙汰不相殘方被仰出候事但無給之者公務之分相殘候事は迄之通

一明日陪從ニ付當直跡四人可相殘所先生御思慮懸之儀有之爲諸締助讀一人相殘候ニ付明日之上當直跡一人相減三人殘之旨被仰出候事(右兩條弘化三年四月三日斧川へ祭器燒陪從之節被仰出候事)

一弘化三年九月廿日淺間先生內室不幸ニ付廿日廿一日兩日當直トモニ八人殘ニ相減一統爲御悔罷越候事

一告疾之儀者放散以前ヨリ不參ニ候共放散者格別之義ニ付放散中者不參ニ不相成先例ニ候事

一嘉永二年十一月十五日新登堂先生生謁見之節多人數ニ付當直一人ニテ難相勤段申出候所多人數ニ付特例ヲ以次直差出候様御差圖有之候事但夜直相勤一日之直ニ致候事

一嘉永三年三月十五日淺間先生加増五拾石御拜領ニ付一類或ハ舊寄塾仕候生伺之上六人殘ニテ御悅御手傳トシテ參上仕候事但組頭呼懸トイヘトモ右之生へ差支相成候節ハ塾長ヨリ右組頭へ番人ヲ以問合明日ニテモ不苦用事ニ候ハ、相延被吳候様可申遣トノ御差圖有之候事

一嘉永七年三月中典籍本間孫四郎引合左之通二三之手被仰付置候面々於武藝所調練有之節出入差支候ハ、沐歸生トイヘトモ相押調練へ差出可申旨先生御評判之上相定候故相心得可申旨引合之事

一詩會日ニ當リ組頭會讀不相許候事

一嘉永七年五月中窪田宮藏諸生附益三ヶ年詰被仰付候へ共總テ殘生是迄之通可相心得旨引合之事

一安政四年正月八日友于堂上中等入御達之節ヨリ加直一人差出候様達有之相勤候事

一組頭へ用談ハ不時寄合呼懸トモニ月三度ニ限候段申合候事

一家督致初テノ組合寄合ハ朝ヨリ多用万一ニテ翌朝歸館ニ相成候事

暇鐵右膳伺之節相濟 弟妻病死ニ付葬式之節埋葬迄御暇長尾國藏伺之上相濟 江戸御上下之節侍頭火元一番之儀ハ格別之譯ヲ以館中殘不相請出勤可致旨文政九年三月齋藤内膳出勤之節ヨリ碓ト御下知有之 江戸御上下御法事之節無給者不足拾人ニ不滿候時ハ當勤ヨリ相殘拾人ニテ相守候事ニ相定ル 同居之父ヘ御用差紙到來致シ候ハ、即刻ヨリ翌日上意下リ候迄御暇隨テ御役成後都合四日御暇被相許段文政十一年三月被仰出候事 同居之兄弟御用差紙到來致候ハ、即刻ヨリ上意相濟迄御暇町田八之亟伺之節被成下 不同居父兄弟ハ御用之朝ヨリ上意相濟迄御暇被成下右同人伺之節相濟候事 同居之伯母病死之節宿元無人ニテ葬具之世話行届兼候間相當之御暇被成下度旨伺出候處臨時之御暇一晝夜黒川主税伺之節相濟 江戸表ヘ御使者相勤候生ハ登前勝手次第々々御暇被相許尤支度相形付迄日限無之事 塾生急江戸登之節見立御暇尾形彌二郎伺出之節被相許 舅於江戸病死留守宅無人ニ付見繼御暇大熊左内伺出之節一晝夜許之 姉甥病死ニ付葬式之節無人ニテ彼是世話行届兼旨新津右近伺出之節朝ヨリ埋葬迄許之 牌寺遠方當院普門院或
八千眼寺ノ類燒香墓參巳之刻ヨリ相濟迄許之尤最初伺之上 武藝師範之者上覽前日稽古相立申所相手致候者無之門弟扱方行届兼旨伺出候節七日御暇被成下段廣居大八伺出之節許之 調練生御暇ハ向前之者計被成下方嘉永四年侍組之面々伺出之節淺間先生御呼出ニテ御下知

友于堂戒令

- 一 洒掃應對事長惠幼明友切磋之道意マシキ事
 - 一 讀書受業無疎意相勵ミ學問スル本意ヲ忘ルマシキ事
 - 一 助讀ハ一堂之總教ニ候間恭敬ヲ盡シ諭言ヲ受規矩ニ不洩様相心得可申事
- 右之條々堅可相守者也(安政三年三月提學)

定

- 一朝五時登堂仕舞マテ學業相勵妄ニ退出致マシキ事
- 一 登堂候者助讀ヘ出席之者謁之下堂同斷之事
- 一 在學中位置ヲ亂ルヘカラス机案ヲ正シ衣帶ヲ整ヒ長ヲ敬シ幼ヲ導キ言語周旋ニ至ル迄戒令之旨ヲ守リ研精勤學學問スル本意ヲ失フヘカラスル事附往來之路次トイヘトモ不作法ノ儀有ヘカラス
- 一 當直勤方律令ノ如クスヘシ
- 一 月六度休日許之

以後三年之内ハ毎月ノ墓參許之右之外兄弟祖父母并父母三年後ハ祥日計リ許之但祖父母ハ周年之間毎月之墓參許之
實家父母祖父母兄弟分家祖父母法用之節當日之御暇許之尤即夜歸館之事 同館之内父母之喪會葬御暇許之但當直
跡三人殘不同居之實方同斷 本家正統之法用當日之御暇許之尤即夜歸館 末家正統之法用燒香墓參御暇千坂琢磨伺
之節ヨリ許之 血忌御免三日目ニ申達四日目之朝ヨリ歸館之事但寄塾生御免無之處近來本員同斷 流産五日之遠慮
之處翌日御免三日目ヨリ歸館離別之妻ハ血忌無之 七歳未滿ノ子三日遠慮兄弟當日遠慮右日數之外葬送ノ節一晝夜
御暇許之 不同居忌掛之生早世ノ節ハ當日ノ忌遠慮翌朝歸館之事 家ヨリ出ルカ又ハ養家ノ母他ヘ嫁シ候モノ又甥
之無服忌者之類無遁間ニテ服忌無之トモ葬送之節當日之御暇許之尤即夜歸館之事但同居或ハ繼祖母等ハ一晝夜之御
暇許之舅姑從弟師匠之葬送ハ朝ヨリ埋葬迄之御暇計許之本家ハ同埋葬迄末家ハ會葬一通之御暇許之 家之法用前日
ヨリ御暇當日之晚歸館之事但前段取越法用相濟候ハ、追テノ正忌日ニハ燒香墓參迄之御暇百ケ日法用之節者當日御
暇尤即夜歸館之事不同居之骨肉分身之父母祖父母兄弟迄燒香墓參御暇 實家之法用他家相續之者申請私宅ニ於テ執
行之節前日ヨリ御暇許之他家相續之生同居之節同斷但未引越前養家モ同斷 居宅引越之節三日御暇許之 釋奠試業
相濟翌日一晝夜之御暇并春一度鬱散之御暇許之 居宅遠方ニテ平生ノ沐歸ヲ以難相成生ハ春秋二度之御暇申出次第
臨時之指揮タルヘキ事但遠方之生沐歸等歸館之刻限延ヒ臨時許之 諸藝師範之生并師範家之子武藝所稽古日御暇窺
之上月ニ兩度許之 鉄砲師範之生正月中出入窺之上許之但飯田勇天保九年伺之節ヨリ三日之御暇被成下但家柄之生
遠丁等之節臨時御暇伺之上當日許之 病身ニテ温泉入浴御暇臨時伺之上指揮但格別之重症ニ無之テハ不許之
附錄 江戸御上下之節寄塾生町内殘番不相勤段間金太郎伺之節ヨリ本員同様 三月十三日大乘寺參詣御暇廿糟數右
衛門伺之節ヨリ許之但三月廿日御廟參相勤度生有之候ハ、本文同斷之事 侍組寄塾生火元一番本員同様御免之儀新
津右近伺之節相濟 正月十二日御廟參豫參之外ハ昨日沐歸ヨリ直々御暇不相成候事但御法事之節ハ御在國御在府之
無差別前夜五ツ時ヨリ御暇尤沐歸ヨリ相續候事 執事試業之節三扶持方館中本員寄塾共ニ脇差三手同様寛政十一年
小島熊藏伺之節相濟 本田彌七郎留守居呼取之節三日御暇 相浦善左衛門宅普請ニ付十日御暇 武藝師範之者門弟
組頭見届之節御暇許之 竹股登宮他家死跡相續願濟前ニ候得共無餘儀筋有之ニ付引移之例ヲ以三日御暇 町内用番
之儀寄塾生トイヘトモ宿衛之外ハ本員同様諸勤御免ニ候ヘハ不相勤方文政三年笹生塾彌伺之節御下知有之 武藝師
範之者親病身トカ嫡子幼少トカニテ師範難相成者伺之上御長屋二度宅稽古四度都合六度之御暇文政六年柿崎主殿伺
之節相濟但武藝所二度ハ朝ヨリ御暇七ツ時後歸館宅四度ハ館中業後ヨリ暮時迄歸館可致事 妻之兄病死ニ付會葬御

一講談并日課會業等之時刻ニ相至候者一堂へ爲知之聲柝闇等之世話可有之事

一晝御飯之節爲知之聲柝飯湯等之手當可有之事

一仕舞之定限ニ相至候者聲柝第一火之元懇ニ取鎮堂中ハ勿論板椽塵出口迄之洒掃机案火鉢鬺字書等之取片付ニ至迄聊無疎忽可相勤事

一順番ヲ以立合候常直頭者其日之諸締候間諸事之差圖無違背可被相受候事

一當直頭割出置候日並猥之不參堅禁之公務忌中等者豫當直頭へ可被相屈事

一當直無屈書不參三度ニ相及候者名籍可相除事

右之條々堅可相守者也(安政三年二月)

當直頭中合箇條

一朝五時無遲滯可相詰五半時迄不相詰候者早速次直ヨリ可相補若次直共ニ不相詰候者加直相立可申尤加直ハ順番ヲ以可相勤事

一相詰候ヨリ仕廻迄當直頭へ御渡之机一脚受取猥ニ席ヲ通レ間敷火鉢爐火等之手當無油斷見量可申付事

一次直トイヘトモ公務忌中等可被相屈若無屈不參六度ニ相及候者退役可致事

一三等課業之節闇相廻候上早速取收出席帳并ニ筆硯等平直之分決テ手ヲ觸サセ間敷事

一講談之節名札相認候譯ヲ以筆硯相用生有之候者嚴敷可相制事

一公務忌中等ニテ屈書有之候者小札ニシテ其譯姓名上へ張置可申事但百千射并武藝所稽古又ハ組頭會讀鐵砲手前之類屈書不相成相對ヲ以縁替可申事

一仕舞ニ相成候者洒掃相濟迄見届可引取事

追加規則

追加規則

一近來登堂生至テ遲成且業相濟否連立一同下堂イタシ候風儀ニ相成其日通之本意ヲ失ヒ候ニ付以後戒律ニ準シ朝五

時ヨリ無遲滯登堂仕舞ニ相成候迄懇ニ學業相勵可被申不得止早下堂イタシ候節ハ其旨我々之内へ相斷可被申候

一課業之下讀懇ニ相盡シ且銘々業本屹ト持參業ニ臨ミ決テ隱默之体無之互ニ討論疑問等盛ニ致サレヘキ事但下讀ニ

カキラス讀書疎略等無之字說等之不審紙懇切ニ質問致サレ聊名聞不形儀之体無之日通受業ノ本意ニ相叶候様可被

心懸候事

一冠婚喪祭日始重立候事故ハ申出次第暇相許候事

一諸事助讀へ窺出可申事

一本堂へ無用之往來禁之

一書案ニ對シ無用之雜話禁之總テ質素可爲第一事

一仕廻後勝手道ヲ以相殘者ハ當直頭へ其旨相届猶又本堂直所へモ名々相届可申事

一書籍筆硯机案萬之器物無猥雜始末致スヘキ事

一無斷長不參仕間敷事

右之條々可相守若犯法之族モ有之ニ於テハ可爲放堂者也(安政三年三月都講)

當直頭勤方

一當直頭ハ順番ヲ以日々一人宛朝五時ヨリ仕舞迄出勤平直へ立合諸事懇切見届可申事

一當直頭割方之儀ハ三十人三番ニ相定候間本直之順番日並之通相務次直兩人相副可申事但次直割方ハ朔日本直之者へ十一日廿一日當直之者次直ニ可有之其他可準之事

一當直之日公務忌中等之節其譯可被相届右加直ハ次直之者可補之事但病氣私用等ハ勝手道ヲ以賴合候儀許之

一平直ハ隔月一度宛相定候間豫日並割出可申隨テ新登堂生有之節ハ其日ノ當直取計割入可申事

一日々登堂之生ハ出席帳へ點ヲ附畢テ御渡之箱へ可納置事但日課已前私用ヲ以下堂之者出席帳へ點ヲ附候ニ不相及候事

一仕舞ニ相成候者火之元ヲ始トシテ机案火鉢等之取仕抹洒掃迄之差圖無疎略様念ヲ入可相勤事

一割出候當直公務忌中等ニテ届書差出候者順番ヲ以加番可被申達候其節故障申出候者相對ヲ以賴合代人可爲差立事

一當直無届不參三度相及又ハ無届五十日續不參於有之者退役可致平直者其趣助讀へ申出名籍可被相除候事

一當直頭ハ一堂之兄長少者之規範候間別テ心ヲ用會集雜談諍論都テ猥之儀有之節者屹ト相制可申事

右之條々堅可相守者也(安政三年三月)

當直勤方

一當直者當直頭割出之順番ヲ以隔月一度宛辰之刻ヨリ無遲滯可被相詰事

一助讀之火鉢并當直所之爐火無油斷手當可有之事

一仕舞之儀漸々怠慢晝否之仕舞ニ相成不本意之至ニ付此度改テ舊律之通四月ヨリ八月迄未刻仕舞九月ヨリ三月迄未半刻仕舞ニ相復候間爾後當直者無申迄一統辨當持參右仕舞迄猥ニ退堂致間敷事但無止儀有之者其段相届可引取事

備火戒約

助讀

都講 右ハ總司之任ニ候方切近火ニ候者早速裝束シ弓挑灯明シ刀薙履持當直所へ相詰臨機之指揮可致候火勢ヲ考自分拜借之官本塾ニ有之候分御上段へ可差出候此儀者兼テ寄塾之生へ申合置候事 萬一大急變ニ候者薙履着刀ヲ帶シ兼テ備置水桶持出防火之働可先衆不相叶段ニ至候者職司之用書ヲ取仕廻并拜借官本御上段へ運出シ其外萬事變ニ應シ差配尤ニ候事○典籍 右ハ方切近火ニ候者裝束シ刀薙履持弓挑灯燈シ文庫之鍵懷中シ當直所へ相詰火勢ヲ計リ職司之用書ヲ仕廻塾々拜借之官本并私本共ニ御上段御二之間へ運出シ御文庫中へ相納候様致差圖其餘ハ都講ニ準シ萬心遣イタシ候事但役塾不在塾之節ハ署次ヲ以攝之○當直夜直二人之外當直頭ヲ加へ三八勤者當直頭不在塾之節ハ次第之年長攝之 右出火之時ハ方體ヲ見定遠火ニ候者急柳ヲ爲響候迄ニ候者方切近火ニ候者塾中友于堂急祈ヲ擊火事々々ト高音ニ呼起シ夫ヨリ使令ヲ助ケ講堂上下當直所へ高燭ヲ張兼テ設置候場所々々へ懸燭致シ御玄關へ籠挑灯ヲ左右へ懸ケ内通戸障子ハツシ畢テ各代ル々々裝束シ弓挑灯明シ御玄關鏡板へ下リ外々ヨリ馳付之者へ挨拶シ町火防相詰候者着到帳へ名ヲ記シ表門内へ可爲扣別テ火猛勢ニ候者用書諸帳面時計箱入ニテ取仕舞并自分拜借之官本組合へ相任御上段へ爲差出へシ縱令類焼ニ及候迄モ直所不可引散非常之監察肝要ニ候尤館長之指揮ニ應候事但當直者塾中之事ニ難及候ニ付隣塾生右拜借官本自分書籍迄モ世話可致候事 大急變ニ候者其火之起候場所見届塾々へ失火之變警柝シテ大喝數聲無殘打起シ候上薙履ヲ着刀ヲ帶防火之働ニ預ヘカラス講堂以下戸障子ヲ明ハツシ爰彼所へ便宜次第燭ヲトモシ往來働之自由ヲ得セシメ成丈直所ヲ不引取非常ヲ戒ヘシ但火事裝束ヲ着シ候事ハ成丈ニ可仕候事○聖堂并御上段講堂へ 一番組五番組(階上) 沐浴歸之儀者每組二人三人殘ニシテ五組ニテ十二人殘即夜歸リタリ其此外不許之 右方切失火當直嚴柳響シ候者各身輕ニ裝束シ弓挑灯明シ薙履持講堂東側ニ列シ猥ニ不可動別テ近火ニテ館長差圖ニ候者刀ヲ帶シ薙履席上ニテ踏挑灯帶各拜借之官本塾ヨリ持出シ御二之間へ置之夫ヨリ聖堂内外之扉東椽雨戸ヲハツシ聖像ヲ始請取之御諸道具運出シ御文庫中へ相納其餘塾中自他之無差別書籍之分成丈取出シ同所へ入畢テ總牀之戸障子疊諸雜器迄力ニ任セ取出シ東土手邊へ置之組々一隊ニナリ警衛之他事ニ預ヘカラス館長ノ指揮ヲ待ヘシ 大急變有之者薙履ヲ踏刀帶候迄ニテ面々備置水桶ヲ提粉骨之防火可爲肝要方便極リ候上面々拜借之官本御上段へ運出シ偏ニ聖賢三像先聖殿之御額御文庫中

一會讀之節席ヲ逃レ又ハ故障申唱下堂致候風習甚不本意之儀ニ付以後下讀兼テ懇ニ被致其席猥ニ退被申間敷候事
 一平生上席生之教諭ヲ重シ中下等日課攝之候節ハ尤恭敬ヲ盡シ輕慢之休有之間敷事但當直頭ハ一堂之兄長ニ有之候
 間其扱下之者ハ無申迄專恭敬ヲ相盡シ可被申事

一猥ニ本堂へ往來空塾へ立入雜談致候儀前々重ク禁候處近來不心得族モ有之由ニ付以後本堂へ往來相成丈慎ニ無止
 節ハ本堂當直へ其用向相斷罷通可被申事

一仕舞後猥ニ爐邊へ群居イタシ雜談不作行之体堅可被相愼事

一扱師匠無之テ登堂致居候儀決テ不相成候事

一講談之節名札不差出且無本ニテ侍講致候儀甚不形儀之体不本意之至ニ付以後屹ト名札講本持參眞實拜聽之樣可被
 相心得候事但拜聽ニ罷出候節ハ當直頭ヨリ順席ヲ以罷出候樣可被相心得候事

一習禮者重キ儀ニ付業中トイヘトモ稽古不苦程之事ニ候處近來甚相怠リ候ニ付爾後三等共屹度稽古可被致事
 一今度改テ堂規諸戒令一冊ニテ當直所へ相渡候間懇ニ熟誦服膺致サレ屹ト忘却有之間敷事

右之條々改テ申達候若輕慢之心底ヲ以於不相用者早速扱師匠へ相斷友于堂之名籍可相除者也(文久元五月助讀)
 年中休日 十二月廿一日ヨリ正月十五日迄 釋奠前四日後一日 三月三日 御發駕御着城 四月八日 五月五日六日

六月朔日 七月七日同十二日ヨリ十六日迄 三番見 八月朔日 秋社 九月三日四日九日 十一月朔日 冬至

晝仕舞 正月十六日ヨリ廿日迄 釋奠五日前 二月初午、初卯、十五日 御發駕前一日御着城前一日 四月十五日 五
 月十九日 六月九日、十五日、十七日 七月十七日ヨリ廿日迄 八月十五日 立猪

未刻仕舞四月朔日ヨリ八月晦日迄 未半刻仕舞九月朔日ヨリ三月晦日迄

文久二年正月五日曾根敬一郎友于堂讀長被仰付候ニ付心得左之通

一直長業相始闔相濟候上讀長塾へ直參致案内歸之節友于堂入口板椽迄相送可申事但業前出席教授之節ハ格別之事

一讀長出席之節ハ火鉢机等可被差出候

一改テ十能火鉢火箸炭斗湯罐等相渡候間懇ニ取仕抹可有之候

一直長詰刻遲滯讀長之案内ヲ欠候者右塾へ就申譯可有之若無届不參之者ハ我等迄不調法書可被差出候

一當直日ニハ常例五時登堂之樣前々引合候所近來猶又遲成候ニ付自後屹ト無遲滯右刻相詰課業ハ正四時相始可申事

一當直之者ハ登堂否火爐邊ニ罷在火鉢机等之手當イタシ直長待受可申事

土手便宜ノ場所へ置其中之老人共守之壯年之者共ハ屋根登リ防火之方思ヒ々々ニ可働候事○下男 右者方切近火ニ候者先備置所之水ザル繩ムシロ火筋便宜之場所へサシ出置主財差圖次第米穀并夫陳諸道具運出シ西菜園場へ固メ年寄之者守之壯者ハ火消懸走リノ働致へシ都テ主財之下知ニ應スヘキ事 大急變ニ候者先火消之働骨切ニイタシ不相叶上ハ米穀ヲ第一トシ其外諸品成丈ニ運出シ向寄之場所ニテ可守之事

右之通貮度可相守偏ニ平常之覺悟第一ニ候先年相定候備火帖退年用捨之ケ條モ有之候ニ付此度改テ増減イタシ定置者也(文化八年四月督學)

追加 急火之備ハ本ヨリ急變之事ニ候得者一定ノ方ナシトイヘトモ其主持スル所ナケレハ失錯之事ニ付本文之所主持彌堅可相守事ニ候臨機之變ハ譬へハ火ノ手弱クハ消口ヲ急ニシ火ノ手急ナラハ収藏ヲ專ニシ他ノ救多クハ外ハ他ノ手ニ委シ内事ヲ堅固ニシテ他ノ救ニ勢ヲカケ働無手支様ニイタシ候類豫筆紙ニ難盡事ニ候且沿革一定ナラス今ニ不合事有之トイヘ共本文之旨ニ達シ候時ハ又格別ノ違ヒモ無之事ニ候依之達テノ別儀ハ附紙イタシ小異ハ暫ク舊慣ニ任セ置候尤新ニ別ナル儀左ニ相記シ候

一是迄御文庫不堅固ニ付テ急火之節ハ却テ御書籍取出候配之所此度新ニ御文庫御造營ニ候へハ急變之節ハ御藏内上下へ燭ヲ張官本并ニ重立候什器不殘取入可申候右始末悉ク相濟候者典籍或ハ攝務之者御藏内へ人不封様相改戸前ニ鑰シ窓共ニ塗封可致候事尤臨機之儀ハ館長之旨ニ可應事ニ候但自分書籍モ互ニ自他之無差別御藏内へ被入候様可致事

一近來階上勢聖堂向階下ハ御書籍取始末ト簡ニ定置候處片寄殊ニ階上ハ不便利ニ付御本之始末不行届儀モ難計候ニ付下之三番組聖堂向上之四番組御本之方ト相定候各隊有餘不足モ時ニ取可有之候間互ニ補候儀ハ勿論ニ候一舊來防火之具御備有之候處追々破損且ハ遺失ノ儀モ有之事ニ付猶又取繕ヒ置所左之通

階子 一脚友于堂廊下北之方 一脚御文庫北之方 一脚講堂西之方 一脚二階塾東之方 一脚夫陳西之方 一脚友于堂南之方 一脚友于堂西之方 一脚友于堂東之方 一脚好生堂北之方

水籠筵繩之類 水籠二十七 御玄關○同三十五 食堂椽○筵 食堂夫陳通之上○繩拾本、杭付拾本 夫陳○飛水筒

役場○粘土 御藏廊下之下○鈎、繩付八本 役場

蠟燭ハ役場戸棚之内ニ有之候間急變ニ至ラハ戸棚打放シ差出シ夫々手支無之様可心得事

備火戒約附錄

へ安置シ奉リ其他之御道具ハ成丈ニ可仕然後猥ニ動搖禁之 右請取之事 聖賢三像、先聖殿額但厨子儘出ス 祭器、
 興讓館額但長持儘出ス 看板、求放心額、學則、役塾中用書、聖堂内雜物但簞笥儘出ス○書籍 二番組、三番組、四番組
 (階下)右組合沐歸線合等前文之通 右方切近火ニ候者身輕ニ裝束シ弓挑灯明シ刀薙履持參講堂西側へ列坐猥ニ動搖
 スヘカラス火勢ニヨリ館長差圖候者薙履席上ニ蹈刀ヲ帶シ面々拜借ノ官本塾々ヨリ取出シ直々御文庫へ入尤内外塾
 ヨリ差出候御上段御二之間之官本無殘是亦御文庫中へ藏ム畢テ聖堂以下戸障子疊之類迄手當次第方ニ任セ土手西之
 方へ運出シ其餘ハ都テ館長差圖ニ可應事 大急變ニ候者挑灯明シ薙履踏刀ヲ帶シ候迄ニテ備置所之水桶ヲ持成丈之
 動ヲシ不相叶時ニ至リ面々拜借之書籍持出シ御文庫へ入ル其餘ノ働者成丈ニ致候事 右請取之事 總拜借之官本并
 諸雜具迄○讀長 右者方切近火ニ候者裝束シ弓挑灯燈シ刀薙履ヲ持博習局へ相詰臨機之指揮可致事 大急變ニ至リ
 候者挑灯明シ薙履着刀帶シ候迄ニテ備置所ノ水桶持火所ニ趣衆ニ超ヘ働クヘシ不相叶變ニ至リ友于堂御渡之官本自
 分拜借之官本取仕舞御上段へ出シ置其外臨時之心遣勿論ニ候事 右三役塾沐歸一人ハ在館候様申合無止節ハ即夜歸
 リタルヘシ不在塾之節ハ署次ヲ以攝之○助讀 右者方切出火ニ候者弓挑灯明シ刀薙履ヲ持博習局へ相詰將命ヲ助讀
 長之差圖次第御渡之官本用書取出シ猥ニ動搖スヘカラス讀長之指揮ヲ守リ餘力次第堂中之諸雜具戸障子疊等迄運出
 シ土手東之方ニ置之 大急變ニ候者早速三局へ高燭ヲ明シ内通り戸障子外シ夫ヨリ御渡之官本用書ヲ御上段へ差出
 候事○將命 右者方切近火ニ候者三局へ高燭明シ内通り戸障子ヲハツシ兼テ備置候薙履繩水ザルノ類向寄ノ場所へ差出
 シ置彌延燒ニモ可及程ニ候者辨志局東北隅之格子ヲウチ拔往來自由相成様可働其外讀長之指揮ニ可從事 大急變ノ
 事有之者第一ニ右格子ヲ打拔ヘシ次ニ友于堂御渡之書籍并額御上段へ運出シ其外何成トモ成丈ノ働可致候事○掌
 事、主財 右者方切近火ニ候者兼テ備置候薙履繩水ザルノ類下男へ申付火筋之向寄へ差出シ夫ヨリ役場用書諸帳面ヲ
 運出シ御上段へ置之且下男へ下知シ米穀諸雜具迄爲運出菜園場へ置之鎮火ノ上ハ粥爲炊候事 大急變之節者下男ニ
 先立防火之働粉骨ヲ盡シ不相叶節ニ至リ用書簞笥儘御上段へ差出候覺悟可有之事但當時夜泊御免中ニ付此分使令相
 勤候間兼テ能々爲心得候事○番人 右者方切近火ニ候者刀薙履ヲソナヘ御玄關開キ講堂ヨリ當直所迄高燭ヲ明シ御
 玄關左右へ籠挑灯ヲ掛内通り障子ハツシ諸道具繰運之自由有之様可働事 大急變ニ至リ候テハ火消ノ働ニ不預高燭
 行燈勝手ノ場所々々へ明シ内外之戸障子ヲ明開キ往來無差支様第一ニ候其外當直之差圖ニ應シ可働事但當時主財夜
 泊御免中ニ付右手代相勤候間此分ハ當直手傳ニ相成候依テ主財勤向兼テ能心得可罷在候雖然火筋之緩急ニヨリ先本
 職之分相勤候儀成丈候事○馳付之番人 右者方切近火馳付次第當直之差圖ニ順ヒ塾々之衣類諸雜具迄成丈ニ運出シ

以上

先達ヲ夫々ヨリ學問奮發興起可仕存寄書申出候續右條件之通法ヲ以取締經日之久流傳ニ不陷樣仕度此旨可及嚴達ト
存候此段御伺申上候以上

慶應二年十一月

淺間甚兵衛、窪田源右衛門

〔附札〕指令 都テ伺出之通可被相心得候事

年中行事

正月元日 當直早朝入浴聖堂内外屏取開洒掃鏡餅燭燭燭備之中屏之内へ四靈ノ幕三日迄并講堂へ八日迄張續

聖前 燭貳本、簀、陶壹對 兩廡 燭壹本、簀、陶壹對(但シ前日取運候事當日令條極月ノ部ニ見ユ) 爲拜禮入來ノ

賓客案内神酒頂戴當直量(但シ近來神酒頂戴今日切)

同三日 御日柄前
ハ二日 就拜禮各四ツ時迄到着入浴但シ熨斗目着用ノ列着之 役塾へ屈旁爲禮詞一統入來 何モ詰揃候得ハ

聖堂拜禮梆聲爲響ニ行立平常之通但シ於聖前神酒頂戴ナシ先生盛事ノ節神酒相用服懸ノ生へハ別酒差出ス(近例

聖前神酒頂戴) 右拜禮畢テ直ニ講堂へ列坐當直先生案内此節鹽鯉貳尺載臺番人持出各帶劔ノ儘少ク進ミ新曆ノ慶

賀謁之 直ニ三方 土器
比布 一臺役塾進ミ盃事演舌ノ上本席へ三方持來次席へ順ニ相廻末坐ヨリ返盃 主財へハ先生塾

ニテ右殘酒ヲ以テ盃事 番人不殘上下着用相詰先生ヨリ自分酒被遣候事モ有之 但シ此兩條役塾揃ナシ 隨テ近

年御大儉中ニ付盃事ナシ於聖前神酒頂戴而已禮詞計御祝儀物ハ例ノ通先生退座直ニ助教へ慶賀申述相互祝シ候事

書御飯頂戴各退散 今日迄聖堂取開當直上下着用來賓高家衆ヨリ侍頭迄板椽其外直所敷居際ニテ送之 今夕方

屏内ノ幕徹之(但シ文久三年御改革以後上下着用今日切四日ヨリ平服七日當直上下着之) 今日番人一統へ於直所

上ノ間歲暮遣ス都講達役場立合候事

同七日 聖堂御備佳節之通放散中ニ付拜禮當直計禮詞無之(但シ往古ハ八半時揃聖堂拜禮御鏡餅頂戴有之候所近例

延引鏡餅ハ先生へ相廻ス)

同八日 五時前各歸館朝御飯ヨリ頂戴(但シ御大儉前ハ各上下着用) 講堂ノ幕清道者徹候事 無欠出精生名籍講

堂東南ノ角ヲ頭ト致シ張出之但シ調方張出役塾量 開講例刻尤モ上下着用 友于堂上中等入生相詰居候ニ付拜

聽但シ上下着用致候者ハ上下平服ノ者ハ平服ニテ拜聽致候事 桑畑御備錢金藏預手形へ差引書相副今日披見致シ

候事(但天保十二年中ヨリ主財ハ申達) 御大儉以前ハ開講ノ御酒被成下無欠出精ノ生拜領物御酒頂戴夫々規式手

防火之具新ニ備置候ニ付キ常ニ不用之品ニ候ヘハ歲月ヲ歷候内ニハ腐朽又ハ紛失等ニモ至リ候ヘハ毎月其日ヲ定置候テ役塾之内一人伍長之内一人主財番人下男ヲ伴候テ改置可申事(文化八年四月)

懸燭ノケ所左之通 御文庫前一 聖堂前一 講堂正面柱一 當直所一 食堂一 階上二 階下二

慶應二年八月家老竹股美作來校學風一新興起ノ事ヲ議シ學校ニ諭シテ其所見ヲ建議セシム十月藩主齊憲臨校総監提學以下相議シ館中申合セ數條ヲ定メ政府ノ指揮ヲ得十一月五日直所ニ於テ兩役塾列坐伍長ヘ達ス

此度御成之上難有思召ヲ以我々役塾迄被召出館中引立方被仰舍從テ竹大夫御達ヲ以三ヶ條被仰付學風更張一新仕候様被仰達候ニ付館中心得方申合條件

一講談之儀暑中トイヘ共延引無之事

一寄塾生之儀近年ニケ年定例之如ク仕來候ニ付以後ハ本ニ復シ一年切ニテ退館可爲仕候事

寄塾生在館一周年ヲ以テ定期トシ各別勉強者ハ伍長取成ヲ以テ又一ヶ年在館チ允スノ常例タリ當時始息ノ風行レテ勉強不勉強ヲ論セス皆勉強ノ取成ヲ爲シニケ年在館定例ノ如クナリタレハ今ヨリ改メテ眞ノ勉強者ニアラサレハ一ヶ年限リニ退館セシムルナリ

一從弟法事焼香墓參御暇以來頂戴不仕事

一四九之會讀出入沐浴差留候事雖然公用并宿元法事等ハ各別ニ候事但業後無止儀ハ各別我々留坐之節ハ成丈差扣可申事

一諸業中館用之外塾用不相成候事

一詩會日出入差留候事但公用筋沐浴歸外家法事等ハ各別總テ無止儀塾長ヘ口演ニテ相窺可申事

一表立候公用之外續出入不相成候事但館用ハ各別

一塾中打寄候儀館律通三人以外集會申間敷事但無止打寄候節ハ三塾ニ限り可申役塾ハ格別館用ハ別段ニ付其節ハ塾長ヘ相届許之上ニ可仕候事

一獨杯之儀律通小集トイヘトモ不相成候事但役塾ニオ非テ試業割付等各別太儀仕候節ハ各別之事

一業半讀ヨリ被成下候出入ハ以後業後ヨリ可罷出事

一諸出入書用ハ三度藥用モ六度ニ限り候事但頭用組頭會讀等は迄之通

一納涼之儀其本難有思召ヲ以被成下候處九十日位ト日積有之様近來之弊風ニ相成候得ハ以來ハ其年之時候ニ依リ難堪極暑ニ相成候上三十日位ニ限り難有思召ヲ不忘様可仕候事

一平常ハ無申迄納涼之節トイヘ共役塾伍長之内ニテ一人相殘諸締方可相心得候事

御備順 聖前簀 兩廡簀 聖前陶 兩廡陶 聖前燭 兩廡燭 香爐 頂戴簀
拜禮之節柳聲、禮詞之節同(明治二年十二月禮詞之節柳聲無之方治定)

各入浴相濟聖堂拜禮神酒頂戴畢テ直々於講堂禮詞先生退後互之禮詞述之但先生拜禮不相濟候得者壹陶殘置堂内之儀總テ替者量微饌之上蠟燭神酒祭酒へ相廻ス神酒被成下節晝御飯中頂戴 佳節ニ付諸業休 八時過御酒被成下詩會有之候所御大儉ニ付無之 御發駕前講談御成取量別帳ニ有之 支侯御入之節取量別帳ニ有之 當月來月之内鬱散御暇被成下候段御飯中又ハ達事之次手ニ一統へ申達之 御發駕被仰出候得者廻文左之通

上包折懸 表へ廻文 都講

猶々無滯順達留ヨリ可被相返候以上

來ル何日 御發駕御着城被仰出候間勤方御心得左ニ申達候

前日卯之刻ヨリ 御發駕御着城當日迄當直二人ニテ被相勤前日夜限後ヨリ加直共ニ三人ニテ火之元不虞被相戒通

宵半時ヲ隔析ヲ打可被相廻候主財下僕召連學館構内致巡警候間其時々無油斷相廻候様差圖可有之候但御見送御出迎之列者兩日共ニ當直可被相除候

御見送御出迎勤之列者前日七ツ時ヨリ罷出御發駕御着城御歎相濟次第歸館可有之候

御見送御出迎勤無之生者前日沐浴歸之分即日申之刻迄歸館翌日御發駕御着城相濟候迄沐浴歸延引但不得止沐浴歸之生者其

譯被相伺可被任指揮候

右之通無間違可被相心得候且不在塾之生へ者隣塾同塾ヨリ可被相達候以上

月日

都講

但殘生之儀無給之者拾人ニ不滿節ハ當勤ヨリ相殘候事 火ノ元膏番ニ當リ候生者不相殘方ニ御濟口有之候事

若殿様御發駕之節同斷 御發駕御着城之日諸業休 前夜當直へ夜中御酒被成下役場留ニ有之(但此一條御大儉中ニ付無之) 御發駕御着城御悅先生へ申上候儀古來無之

四月 當月松探御手傳一統罷出候事但當直以下五人殘朝素讀延引沐浴ヨリ直々罷出候儀勝手次第文政十一年中伺之上春一度松探之節御酒被成下候方ニ相濟尤御酒御飯共ニ役場量臨時宅休息 殘生當直者一統相濟候翌日松探御手

傳即日歸館

數有之候得共近例無之ニ付略之 御文庫開典籍主財取量之但三方土器摺引取肴ニテ盃事(右一條御大儉中ニ付無之)

同十四日 越年御暇未ノ刻ヨリ亥迄一統へ被成下尤モ當直跡五人當直共ニ六人相殘可申事右殘ノ生へハ翌十五日御暇被成下候事但十五日越年ノ生十四日殘ノ生ト取替十五日ニ出候儀勝手次第ノ方六人以上ノ節ハ口演伺ノ上許之

同十六日 諸業始尤モ平服但文久三年ヨリ朝素讀同斷

朔望廿八日 文久二年御改革以後平服

二月 二日頃ヨリ講談始尤モ前廉張出但近來二月試業ニ相成候ニ付試業後ヨリ始ル事モ有之 當月五日ヨリ爲習禮

當館へ出勤可被致旨大河原へ廣前申越置候事 當月下旬諸生試業清書方申立童生試業ノ節同斷 右試業伺九月上

旬童生試業伺ノ節一同伺濟ノ上相違候處御改革以後館中切ノ試業ニ相成候ニ付正月中旬頃柳聲發於直所來二月下旬本員試業被仰出候旨申達之尤モ先生へ沙汰ノ上取量之 右同斷ニ付詩會會讀廿日前ヨリ延引日課十四日前ヨリ

同斷限後發聲御免モ十四日前ヨリ朝素讀十日前ヨリ延引但試業濟御酒被成下候所御大儉中ニ付無之 仲春仲

秋釋奠別帳有之 同斷ニ付廿五六日以前祭酒ヨリ期日伺之 右伺案文左ノ通

覺

御例之通來二月中來八月 聖堂釋奠被仰出候者丁日何日ニ相當申候御差支モ無御座候ハ、中丁何日御執行被仰出

可申哉御日並御下知被成下度奉伺候以上

月日

祭主姓名

但中丁御差支日ニ相當候時者何日ニ相當申候御差支日ニ付御繰替御執行被仰出可申哉ト相認

廿七八之比本員試業御大儉後館中切トイヘトモ詰人一統送之廉ニ付一大夫出勤ニテモ送之両先生同斷 當月中初

御手傳之節御酒被成下(但御大儉中ニ付無之) 炭渡當月限ニ候得共時候ニヨリ來月半比迄相渡候様主財ヨリ可爲

申出候事

三月三日 順浴之清道者早朝入浴聖堂洒掃祭器方贊者繼テ入浴夫々取運 神酒貳升燭四挺前日之當直役方ヨリ請取

夫々可被相渡候事

聖前 燭貳本、簀、陶壹對 兩廡 燭壹本ツ、簀壹ツ、陶壹ツ、但諸品清道者堂上椽迄持參贊者於堂內請取之此

節都講御二之間ニ扣居徹饌同斷

放散中當直割先生へ差出

八月朔日 聖堂拜禮禮詞其外惣テ七夕之通

同十五日 看月ニ付御酒被成下尤前廣先生ヨリ御申立有之候事但貳斗御酒相廻其外惣テ役場量委曲役場留ニ有之

(御大儉中ニ付此條無之) 當直八時ヨリ次直一人相加兩人勤之事 番人加添相詰候事但最初役場へ可申達事 文

政九年中ヨリ友于堂上席生御宴へ出席之事但助讀ヨリ可申達事 天保十五年冬至賜宴節ヨリ格別之譯ヲ以先生嫡

子中隨テ片山御儒者嫡子家柄之筋ヲ以看月冬至共ニ被召出候事但席之儀寄塾生次之事

當月中松採御手傳之御暇ヲ以十人位ッ、三日ニ割合一晝夜之御暇ニテ一統罷出候事

九月九日 聖堂拜禮禮詞八朔之通

當月始比御手傳終之節御酒被成下候事但役塾ヨリ役方へ可申付事(此條御大儉中ニ付無之)

當月上旬試業伺先生姓名役塾取量官府へ差出尤先生へ沙汰之上之事右伺文案左之通

例年試業被仰出候時節ニ相至候間御伺申上候御下知被成下度存候以上
月日 先生

但御大儉中大夫試業無之方ニ相成此條無之先生ヨリ御口演而已ニテ相濟次第役塾於直所柳聲發一統へ申達候事

十三夜看月ニ付近來御酒被成下候ニ付豫役方へ可申達事(御大儉中ニ付此條無之)

十月 清書方役場へ申付官府へ申立可爲致事 清書方被仰付候面々爲吹聴罷出候ニ付何日ヨリ出勤可致旨可申達候

但近例御大儉中ニテ本試業無御座十一月上旬館中切之試業ニ付當月廿五六之比出勤ト申達隨テ兩先生分二通助教

讀長分一通ッ、中折紙橫折帳都講分大津輕紙豎帳典籍一通三助讀へ一通大津輕紙橫折帳當直線出帳大津輕紙橫折

無片書試業前日迄ニ出來候様可申達候尤下帳取調相渡候事 内試業十日前位迄一統ヨリ面付取上可申事但近例當

月十五日比迄ニ差出候様ト一統へ御飯中申達之

初テ堂ニ登リ候生先生謁見ハ近來一度試業ニ相成當月廿五日定日ト相定尤面附先生へモ差出候事但前廣御飯中

一統へ引合候事

十一月 上旬試業 御上分一通 若殿様一通 三大夫ヨリ中老迄一通ッ、侍頭へ二通宰配頭へ一通御仲之間年寄へ

一通御在國ニハ御小姓頭へ一通先生助教讀長へ一通ッ、右何モ中折紙橫折帳 都講分大津輕紙豎帳典籍一通三助

五月五日 聖堂拜禮禮詞總テ上已之通 御着城御日限被仰出候節廻文并諸事御發駕之節之通

六月朔日 聖堂へ氷雪御備拜禮禮詞端午之通但御留守年者登城無之ニ付無禮詞拜禮計 御備之雪役場ヨリ請取神厨司祭器方取量器物和羹土器但聖前兩廡壹ツ、徹饌之雪祭器方別器ニ移於講堂一統頂戴 神酒燭無之右ニ付八ツ時御酒頂戴無之

土用入十日位以前ヨリ納涼御暇被成下之但其年之氣候ニヨルヘシ大抵八月十五六之比迄日數九十日位尤其節申達右ニ付當直所張出左之通

〔納涼中當直心得〕申之刻ヨリ亥之刻迄納涼御暇被相許候定例門限有之事ニ候間歸館遲引スヘカラス尤階上階下ニテ七人殘可申事但當直者右之外タルヘシ 右殘之生者不虞之備ニ候得者病症或者一家之急難等格別書藥用暫時之御暇トイヘテ不許之右之外格別之譯有之ハ伺之上指揮ヲ受ヘシ但申之刻後ヨリ沐浴イタシ度生豫當直ヘ引合置ヘシ時計遲速無之樣可致候事 夕御飯除無間違樣イタシ尤晝御飯否取調主財ヘ可申付事但御飯自然ト刻限進ミ候間時々無油斷夫陳ヘ申付晝御飯午半夕御飯申半過可爲差出候事

土用伺都講先生宅へ總代相勤ム(此條御大檢中ニ付無之) 暑中講談休尤年之氣候ニ依テ遲速可有之 極暑ニ相成候得ハ午半ヨリ納涼被相許其後暑減候得者申刻ニ復ス但年之氣候ニ依リ已半ヨリ納涼被相許其節ハ夜限戌半刻ニ相成近例牛馬勞レ候御觸出候ヲキツカケナリ

七月七日 聖堂拜禮禮詞總テ端午之通

盆中心得廻文左之通 猶々廻文無遲滯順達留ヨリ可被相返候以上

當盆中來ル十二日ヨリ同十六日迄放散其翌朝先定之通可被致歸館候但館中詰合生勝手次第不苦出入共ニ當直所へ達火之元等念比ニ心ヲ用見届之上錠ヲ懸可被相退候

右五日之内當直二人餘計壹人夜中加直共ニ官務ニ無差支様當直頭割合貳通先生兩人ノ節三通十一日晚迄ニ可被差出候

當直勤方總テ如前々被相心得得若急火之節ハ聖像并配侍之像第一ニ奉移急火備之旨ニ準臨時之宜ニ隨可被及指揮候但方切之筋ニ候ハ、放散之生早速到着可有之候

日記者直々本書へ被相調且館中詰合御飯頂戴之列可被相記候但日記十七日量之役塾歸館之上披見ニ可被差出候右之通無疎意可被相心得候不在塾之生へハ同塾隣塾ヨリ可被相達候以上

月日

都講

童生無欠出精夫々年數續ニ付御賞之品數御坐候得共御大儉中ニ付一通之無欠出精年數續ヘハ御賞不被成下候ニ付略之

朝素讀無欠出精之目安廻文當直所ヘ差出 右案文左之通

目安之覺

一何日

無欠生

一何日

出精生

右者去年十二月ヨリ當年九月迄

一何日

一何日

同 同

右者當正月ヨリ同迄

右之通ニ御坐候以上

年號月日

猶々廻文無滯順達留ヨリ可被相返候

朝素讀無欠出精目安別紙之通ニ候間相叶候分御取調來月五日迄無間違御書出可被成候

一助讀中ヘ申達候友于堂日通無欠出精共ニ如前々御取調前同斷御書出可被成候以上

月日

都講

右無欠出精日數之法助讀塾ニテ委曲審密ニ及評判可割出候事但講談出席帳者都講取調可申事

十二月 寒入之伺爲總代都講繼肩衣ニテ先生ヘ相勤候事(此條御大儉中ニ付無之)

節分御祭事廻文左之通

來ル何日來年節分之節ハ
來正月何日 節分御祭事ニ付都テ前々之通可被相心得候散中ノ節ハ朝四
時歸館之旨書入

役割左之通

一齋者

誰苗字 字

一贊者

同 同

兼神厨司

同 同

近來本試業無御坐候ニ付御上御分若殿様掛之大夫分右三通先生ヨリ掛之大夫へ被差出候事 秀逸試業被仰出候ハ、柳聲爲響一統へ相達夫ヨリ役方へ猶又清書方へ出勤致候様可爲申越候事 試業帳讀合試業前々日伍長相頼於御二之間イタシ候事但伍長差支有之節ハ平生之方迄頼候事モ有之 本試業日次被仰出候ハ、十四五日前ヨリ内試相始候事但内試業相濟候日七ツ仕廻先生ヨリ一統へ御酒被成下候事(此但書御大儉中ニ付無之) 本試相始候前日童生晝仕廻講堂以上洒掃御手傳畢テ作事屋ヨリ來リ夫々爲補理候事 上聞試業御成別帳ニ有之 試業御始前於御二之間先生助教讀長兩役塾被召出御意被成下御濟之上猶又於講堂被召出御懇之御意被成下此節先生一切、助教一切、兩役塾一切、兼助讀一切、諸生中一切 本試業之節初日大夫ヨリ酒肴被爲持詰人之列へ先生塾ニテ被啓候事 中之日比役場量ニテ大夫中へ酒爲出候事但兩度共ニ助讀ヨリ年長迄御塾へ出坐之様可申達事(右兩條近例無之) 試業濟之日諸生中迄御吸物御酒寄塾生中へ御壺御酒被成下候事 御達ハ兩役塾一同三助讀一同諸生中一同寄塾生中一同之事 此節兩役塾講堂東側へ列坐頂戴相濟候上都講摠代爲御禮掛之大夫へ相勤候事(御大儉中ニ付右數條無之) 至日聖堂獻備拜禮都テ佳節之通八ッ迄上下年々試業中ニ相當候故御宴ハ追賜候事(御大儉中ニ付御宴不賜候事) 文政十三年十一月中至日試業之日ニ當候ニ付曉七ツ時起揃入浴明前獻備正明時拜禮之方ニ致候事 天保十五年十一月十三日是又試業ニ相當候ニ付當直八ッ迄相勤八ツ時ヨリ翌日之當直へ引渡御備拜禮曉七ツ半時相濟候事但試業詰人之列拜禮相濟平服當直同斷 追テ至日之宴賜候日會讀休業日課計但無限ニ付限之柳聲不相立候事(此條モ御大儉ニ付無之) 上席生出席之儀望月同様但御酒申立之儀望月同様ニ付豫役場へ可申達事 至日之宴賜候翌日諸業休且昨日之當直へ御酒被成下候古例之事 當月十五日迄ニ假役等相勤致太儀候者隨テ友于堂上席生并三十日以上假役暮御賞御取成面附役場ヲ以役所へ差出候事 右案文左之通

覺

何々何日ヨリ何日迄

何之誰

相勤申候 右ハ何々何日ヨリ何日迄相務申候ト認候書法モ有之

右之通暮之御賞被成下度此段申立候以上

十一月十五日

都講姓名

宛所ナシ

一正月元日聖堂御備前々之通可被相心得候

一同三日朝飯否登校聖堂拜禮并先生へ禮詞如先例可被相心得候

一放散中相殘勤學可爲勝手候尤御賄平日之通被成下候但殘生塾中會讀トイヘトモ定限之外不許之尤火之元嚴重可被相心得候

一祭器方四靈之幕二張神酒之陶樽聖前兩廡分共ニ差出廿九日晦日當直へ前段引合可有之候

一三日迄堂直上下着用可有之候

一七日聖堂御備等前々之通可被相心得候

一八日五ツ時迄歸館朝御飯ヨリ頂戴可被致候且又開講ニ付聽聞之節上下着用可被致候

一十六日ヨリ諸業始

一父母年賀一晝夜御暇被成下

(右一條近例廻文へ不相認御暇不被成下候處文久四年猶又御沙汰御治定之上舊文ニ相復シ御暇被成下候事但同居父母ニ限リ實家父母年賀へハ不被成下候事)

右之通被相心得不在塾之生へハ同塾隣塾ヨリ可被相達候以上

月日

都講

猶々廻文無滯順達留ヨリ可被相返候以上

歳暮之祝儀物割合歳暮前退館ノ牛割合ニ入候古例入館前ノ者トイヘトモ正月三日ノ禮詞へ列候事但入館之謁見ハ追テ入塾ノ節認之

同廿日 日課平日之通 放散中當直割當直所へ張出當直頭量 同斷令條同所へ張出之

令條

一放散中諸事心ヲ付ヘキ事

一萬一急火之節聖像并配侍之二像厨箆儘取出其外變ニ應シ可働事

一放散中夜限後四半時九時兩度廻勤可被致在塾生有之ハ寐定候ヲ急度見届可申候夜限犯候儀別テ嚴禁ニ候間堅可被相制候事

一塾中定數之外會集會讀トイヘトモ決テ不可許事

一祝詞

兼祭器方

一清道者

一監司

右之通可被相心得候尤忌病服懸リ等之生ハ早速覺書ヲ以被相届縁上可被相務候且又不在塾之生ハ同塾隣塾ヨリ可被申達候以上

月日

都講

入館前之生者不相勤古例 規式帳古物相用名前計張替六通内一通祭酒分計新規 放散中ナレハ四ツ時詰 八ツ時御始大卓置所釋奠之通 告文近例舊製相用 主財ハ風呂御賄其外注文之品前々之通相心得候様申達之 主財拜禮勝手次第 御香爐之火蓄贅者登堂之節持參香合豫備置候事 當直八ツ時ヨリ次直一人加之尤一統上下着用 於講堂御酒頂戴之節徹饌之鮮魚鹽引頂戴但近例當直上之間或ハ下御塾ニテ頂戴 御引足御酒被成下候儀佳節之通(御大儉ニ付御引足無之)

攤名、暮時 聖堂御上段ハ典籍御二之間以上塾々當直食堂以上主財(御大儉ニ付此條無之)

十八日詩會納ニ付御酒被成下之(御大儉ニ付此條無之)

歲暮年始廻文左之通

歲暮御心得左ニ申達候

一拜借之館本不殘可被相納候塾中借合之書籍相互返却可被致候此旨扱中ヘモ屹ト可被御申達候

一放散中當直割前々之通當直頭御取量別ニ二通廿日晚迄可被差出候但先生兩人之節ハ三通ト申達候事

一廿一日卯之刻ヨリ勝手次第可被致放散候

一放散中出火方切ニ當候ハ、早速到着可被致候

一先生始下僕迄歲暮之祝儀前々之通主財ハ相賴廿八日爲換代出勤取量可申候但來正月三日先生ヘ之祝儀是又前々

之通主財ハ可相賴候

一廿五日聖堂ヘ御備之饅餅節分掛之神厨方朝五半時出勤前々之通御取量可有之候但諸品之儀ハ主財ハ可被引合候尤服掛之生不及出勤候

内御手傳○諸業 一統陪從之節○朝素讀 春試業放散翌日○會讀 至日○朝素讀 三歲駒三番見之節、勸進角力三日目○講談 正月中并暑中試業中、諸業延引無之トモ童生休業之節○詩會講談詩吟 普請鳴物御停止中○諸業 諸放散之節、近郊御手傳之節、節分御祭事

童生試業秀逸之部

素讀生

學庸共全 讀違ニテ開返シ一ッ許シ(一ッ字ニテ再返ニテモ一度ノ例)

八歲正○論語全同

九歲正○孟子全同

十歲正○詩書共全同

但書經ハ微子迄ニ

テ許之 十一歲正○禮記全同

十二歲正○左傳全ニッ許

十三歲正○同ニッ許

十四歲弱○史記全ニッ許

十四歲正○

同ニッ許 十五歲弱○同華本全

一ッ許 十六歲弱○前漢書全ニッ許

十五歲正○同ニッ許

十六歲弱○同華本全

十

七歲弱○通鑑七十五冊以上(右ハ辨釋ニ準シ年齡讀違等ニ不拘臨時之評判タルヘシ七十五冊以下ハ年輩之少長ニヨリ史記漢書ニ準シ取捨スヘシ和版華版同斷)○綱鑑補十冊メ迄ニッ許

八歲弱○同十一冊メヨリニッ許

十七歲正○同ニッ許

十八歲弱○同華本全

十八歲正○同全

十九歲弱○

易知錄 綱鑑補ニ準ス○同明鑑共

綱鑑補華本ニ準ス

辨釋生

中庸

全年單ノ少長ヲ論セ

○論語 二冊○孟子 一冊

但初冊ハ半冊ニ當ル

○易經 乾坤、繫辭、上傳○書經

臨時之評判○詩經

國風、大雅、小雅○禮記

臨時之評判○小學 全○左傳 三冊以上

但初冊釋之生少敷用捨可有之

右之通ニ候ヘトモ素讀生ハ讀法之熟不熟ニヨリ一ッ許ニッ許之法ニ不拘辨釋生一句一句之辭ニ不拘一体之大意貫徹

候ヲ主ト致シ第不第專ラ撰學者之權度第一ニ候就中助讀愆謬ヲ糾シ甲乙ヲ記シ權衡不準專要タルヘキ事(右ハ舊來

之定法ヲ潤色シテ元治元年十一月決定セリ)

面附清書法 不齒生新手法明迄半字下ケ 臺下ケ一疊目頭○新手法明以下訴文組迄一字下ケ 臺下ケ半疊目○足輕一字

下ケ 臺 敷居 但三扶持方脇指御敷居際ニテ脫ス不齒生足輕迄扣居候處ニテ脫ス○不齒生秀逸之撰ニ預リ候ト

イヘトモ御前へ不被召出雖然格別之進業出精之モノ先生御執成ニテ訴文以上被召出之例○分領家來町醫坊主山伏

之類ハ不被召出古例ナリ別ニ大夫試業へ被召出○片書御上方一字上ケ支候同斷○面附之順ハ書籍之順同書ハ年順

ニ調フルナリタトヘハ書經之部ニ候ハ、泰誓ヨリ差出候トイヘ共初メヨリ微子迄ト詩經差出候モノ、上ヘ調フヘ

シ外倣之○篇名冊數五經ハ何篇ヨリ何篇迄ト二行ニ記シ四書ハ一冊メ二冊メ迄二三ノ冊二冊メヨリト冊數一行ニ

一廿九日^{晦日}沐浴後聖堂洒掃畢御鏡之餅并霄陶燭臺備之中扉之内へ四靈之幕張之講堂へ八日迄張續之事但幕ハ豫祭器方ヨリ請取置可申但御鏡之餅正月七日當直之生相徹可被申事

一三日迄聖堂開候ニ付内外扉朝夕開闔油斷有之間敷事

一年始入來之賓客平士トイヘトモ三日迄於當直所送之

一御賄頂戴之生日記へ可記事

右之條々堅可相守者也

十二月

都講

來ル正月八日開講ニ付御酒被成下童生へ廻文等始手形御座候得共御大儉中ニテ其儀無御坐候ニ付古帳ニ讓略之同廿八日都講上下着用出勤左之通

上中折紙三十帖 本員ヨリ先生へ但兩先生之節ハ十五帖ツ、○上小津輕紙六束

寄塾生ヨリ

先生へ但兩先生之節ハ

三束ツ、右イツレモ上包水引結ノシ載臺番人ニ爲持先生へ摠代勤之(明治三年改定鰻二連先生へ都講ヨリ日通生迄但兩先生ノ時ハ一連ツ、)○三種一荷 一統ヨリ 主財兩人へ 右代ニテ一人へ一貫文ツ、○假役へハ近來南鏡一

片(右近例達無之一通塾ニテ引合置候事明治三年改定此二條延引)○小津輕紙一束ツ、包ノシ 一統ヨリ 番人へ近例代

之事モ有之其節ハ一人前八拾文ツ、遣シ候事モ有之候ヘトモ猶又評判之上一人へ百六拾文ツ、ト相定候事 右ハ

來正月三日番人一統相揃候ニ付於直所上之間都講申達此時主財立會(明治三年改定番人ハ私用ニテ不遣故此條延

引)○青銅壹貫五百文

一統ヨリ

下男三人へ

右ハ主財取量候様申渡之(明治三年改定下男ハ萬事私用ニテ遣候ニ付三

貫文遣ス但日通生迄)○塩引貳尺

一統ヨリ

先生へ右ハ正月三年頭之御祝儀但兩先生之節ハ一尺ツ、(明治三年改

定屬子貳雙但兩先生ノ時ハ壹雙ツ、)

同晦日 八ッ時當直聖堂洒掃元日ノ部ニ見七ッ時ヨリ上下着用

年中休業

諸業 從十二月廿一日至正月十五日、釋奠前五日、本員試業前但其年ニヨリテ遲速長短有之、三月三日、御着城、御發

駕○朝素讀 四月八日○諸業 五月五日六日、六月朔日、七月七日、從七月十二日至同十六日○朝素讀 七月十七日

○諸業 八月朔日○朝素讀 秋社、九月三日四日馬揃之日○諸業 九月九日、至日翌日○朝素讀 三十目以上ノ銃砲

試術之日、御成御入之日○諸業 仕懸普請御停止中尤默讀、御法事前日未ノ刻ヨリ當日相濟迄默讀○日課半讀 御構

中謹慎一賄(但付落シ當直計同斷)○學校詩會日ニ組頭會讀御暇生ヲ差出タル者 右ハ塾長當直前同斷○塾長ニテ人
減ヲ先生ヘ沙汰不致一己切ニテ差圖セシ者 右ハ塾中謹慎三賄○塾長ニテ不調法ニナルマシキ儀ヲ不案内ニテ差出
タル不調法書ヲ不氣付受取不調法ニ取量タル者 右ハ塾中謹慎一賄○當直ニテ歸館無之生ヲ歸館ト記シ御改ヲ受タ
ル者 右ハ三日目朝御免○當直ニテ沐浴出入殘員調違ヲ以テ人減ヲ爲シタル者 當直ニテ刻限差圖違ヲ爲シタル者
八鐘ニテ七鐘ニシテ
出入チ差出ノ類 右ハ申出ノ刻限ニ不拘塾中三賄○當直ニテ沐浴七日書用四度調違ヲ爲シタル者 右ハ塾中謹慎二賄
(此條不調法ニ不相成方近年治定)○當直ニテ不參届ヲ受取リ失念致シ刻限後レニ差出シタル者 當直ニテ御改刻限
取違遲速ニ及ヒタル者 當直ニテ限梆聲遲速ニ及ヒタル者 當直ニテ明梆聲遲速ニ及ヒタル者 當直ニテ梆聲ヲ安
發セシ者 右ハ塾中謹慎一賄○當直ニテ先生ヘ罷越御門限ヲ闕タル者有之ヲ不詮議ノ者 右ハ即刻御免(此條先生
宅ハ館内ノ心得ニテ御門限無之方文久四年治定)○當直ニテ日鐘ヘ寫置ヘキ諸書物ヲ紛失セシ者 右ハ即刻御免○
當直ニテ兩日續ヲ一日沐浴ト問違跡直ヘ送リタル者 當直ニテ限後ノ廻勤ヲ刻限取違常刻前ニ濟セシ者 右ハ塾中
謹慎三賄○當直ニテ殘數十分有之節人頭調違ヲ以テ人減ノ伺爲差出御沙汰ヲ濟シタル者 當直ニテ夜限進メマシキ
事件ニ心得違ニテ進メタル者 右ハ塾中謹慎一賄

附錄

一文久二年芹澤熊之助ヨリ過日當直ノ處淺間虎之助宅保養ニテ罷出候ヲ問違ヲ以テ御帳并ニ送書ヘ宅休息御暇ト記
載セシ趣不調法申出タル節御帳書損ノ例ヲ以テ塾中謹慎一賄

一童生試業前諸生ノ分不調法先生格別ノ思召ヲ以テ一等相減シ塾中謹慎二賄ハ一賄一賄ハ即刻御免ノ方寄塾モ試業
始レハ夫是レ世話有之ニ付減等諸生同斷ノ方文久三年治定

一文久四年諸生竹股兵部江戸表御使者勤相濟正月十三日下着ノ處夜中遅ク成タルニ付不案内ニテ翌朝歸館セシ節塾
中謹慎一賄

一同年正月十四日橋本主稅塾長ニテ右同人昨晩下着今日ヨリ五日休足ノ届致シタルヲ不氣付許可シタル節塾中謹慎
一賄

一慶應三年片山先生ヘ友于堂生謁見ノ時下等生ヘ不齒生混淆致シタルニ付翌日三助讀不調法申出タル節塾中謹慎一
賄

一明治三年諸生庄田享吉典籍ヲ命セラル諸生勤中當直勤メタル時ノ不調法典籍拜命後ニ申出タル處典籍拜命改テ入

記シ冊ノ半分差出候生五經同斷篇名二行ニ記シ左傳二冊差出候生何々ノ冊ト一行ニ記ス三冊以上ハ何ノ冊ヨリ何冊メ迄ト二行ニ記ス○書籍調順 楚辭文選文章軌範古文真寶 右ハ素讀トス 左傳國語史記漢書晉書通鑑十八史略易知錄八大家 右ハ自讀トス

罰則 學校定詰生ノ罰法ハ塾中謹慎ニ止レリ罪ノ輕重ニヨリテ謹慎ニ長短アリ塾中謹慎ノ者食堂ニ出テ衆ト共ニ食ス

ヘカヲス番人食ヲ塾中ニ送致シテ之ヲ食セシム故ニ謹慎ノ長短ヲ計查スルニ塾中食スル所ノ賄數ヲ以テス

謹慎ヲ命シ且之ヲ免ルルス皆犯人ヲ直所ニ呼出シ都講之ヲ達ス重キ者伍長同伴トス罰ヲ免サルレハ繼肩衣ニテ總裁或ハ并ニ都講ヘ回禮ス提學總

格外ノ罪狀アレハ政府ニ訴ヘ藩律ヲ以テ之ヲ罰ス

通學生徒ハ其罰ヲ臨時ニ議定ス輕キ者自宇謹慎重キ者放逐トス格外ノ罪狀アレハ藩律ヲ以テ之ヲ罰スル定詰生ニ異ナルヲナシ

七日沐歸ノ者 四度書籍用ノ者 右ハ申出ノ日時刻ノ遲速ニ不拘三日目朝御免伍長同伴○不參差繕并ニ當直差繕ヲ

爲シタル者 右ハ申出ノ日時刻ニ不拘三日目朝御免伍長同伴但差繕ノ事ニヨリ輕重ノ斟酌アリ○不參屈書

遲引ノ者 沐歸出入御屈失念ノ者 右ハ塾中謹慎一賄○不參中他行セシ者 出入ニテ他行ヲ達セシ者 右ハ塾中謹

慎一賄但他行振ニヨリ輕重アリ○刻限後レ歸館セシ者 沐歸出入塾長ヘ計届當直ヘ失念ノ者 沐歸出入當直ヘ計届

塾長ヘ失念ノ者 右ハ謹慎一賄○先生ヘノ出入當直ヘ屈ヲ失念ノ者 明榔聲前歸館セシ者 右ハ即刻御免○先生ヘ

罷越御門限ヲ闕タル者(此條文久四年先生宅ハ館内ノ心得ニテ御門限無之方治定) 右ハ即刻御免○當番ヲ繰違罷出

タル者 當直送リ失念朝五ツ半時ニ至ル者 出入沐歸都テ御屈ヲ違ヒタル者 四時御用ヲ五時ニ見違前夜戌刻ヨリ

罷出タル者 重判ノ日ヲ心得違重判無之日ニ罷出タル者 右ハ塾中謹慎一賄○再從弟ヲ從弟ト心得違忌中屈書差出

タル者 服懸ノ日數ヲ調違服中ニ聖堂ヲ拜禮セシ者 右ハ塾中謹慎三賄○當人不調法有之御呵被仰付其旨親族ヨリ

御屈可致ヲ不氣付當人ヨリ屈書差出タル者 右ハ塾中謹慎一賄○塾長ニテ業并ニ御改ヘ差障刻限ヨリ出入ヲ許シタル類

塾長ニテ沐歸出入ヨリ續間敷出入ヘ續ケヘキ差圖ヲ爲シタル者 右ハ時刻ノ遲速ニ不拘塾中謹慎一賄○塾長

ニテ先生ヘ沙汰ノ上可差出入ヲ一已切ニテ取量タル者 右ハ即刻御免○塾長ニテ兩日續沐歸窺書ヲ受取置翌日不

案内ニテ差繕ノ不參屈書受取タル者 塾長ニテ組頭用ヲ以テ御門限歸ノ屈或ハ告疾ノ屈等無之ヲ不氣付翌朝歸館ノ

屈ヲ受ケ詮議不致其夜御改ヲモ濟セシ者 右ハ塾中謹慎三賄○御帳調違書損ノ儘御改ヲ濟セシ者 右ハ塾長當直塾

外タリトモ入學差許候事

一皇學句讀三席ニ相分チ教師出坐之事但入學ノ者分配ノ儀ハ其席人數ノ多少ニ因テ臨時編入候事

一皇洋筆數四學共ニ其學業ニ因リ等級相立候事

一皇學洋學ハ三季小試十一月大試筆學ハ毎月清書隔月綴文試八月大試數學ハ毎月小試十二月大試ノ事但試業當日ハ其科休業

一上中等ハ臨時ニ相議シ皇典雜史類輪讀經書輪講歷史會業等可相立候事

一上等毎月兩度文會之事但宿題ヲ設ケ皇國普通ノ文支那文詩歌隨意タルヘシ

一皇洋筆數學ノ生徒一ケ年中無届欠席六十日ニ及フ者ハ除名致候事但病氣届差出候トモ三ヶ月ニ滿ルトキハ猶又可届出事

一病氣又ハ事故アリテ不參三日以上ニ及候節ハ其旨其教師ニ可相届事

一諸生徒課業終リ候節ハ番人其席ヲ掃除ノ筈ニ付當直ノ者居殘リ夫々指揮ニ及フヘキ事

一諸學課業終候後生徒勝手ノ居殘リ相禁候事

一辨當ノ節ハ吞湯可差出事但席々代ル々々繰入前後ヲ不可爭候

一正月十二日より開業十二月廿六日より休業ノ事

一皇學講談ノ儀毎月二ノ日一統三ノ日上等四ノ日中等五ノ日下等各午後第一時ノ事但總頭ハ講堂ニ於テ生徒一統侍講スヘシ總頭欠席ノ節ハ一等教授攝之并教授ハ各其席ニ於テ其等生徒聽聞ノ事

一皇學下等筆學同席ニテ教授致候事

一生徒貧窮或ハ事故アリテ時々不參或ハ登校時間遲成候者豫メ其旨學校掛ヘ届置ヘキ事但右等ノ者ヲ變則生ト定ム

一學資金ノ儀一ケ年正則生金壹分變則生貳朱可相納事但三月九月二季ヲ期トス

一書籍銘々持參之事但無據者別段願出候ヘハ事實取調ノ上拜借差許候然リトイヘトモ洋書并翻譯書ハ適宜ノ税可相納候

一書籍拜借之儀士族ハ番頭平民ハ其肝煎撿斷ヨリ切紙ヲ以可願出候

雛形左之通

館式相濟タルニ付前過ハ取消ノ方治定

學校革制大旨 今般學校從前ノ軀裁ヲ改メ四民一途人材教育之制度相立候間孰レモ其規條ヲ守リ勉勵可致事但學牀ヲ分テ五科トス皇學洋學醫學筆學數學是ナリ筆學ハ日用不可欠ノ術醫ハ健康ヲ保全スルノ業三科各其道ヲ究精セサルヘカラス皇國普通ノ字ヲ以書スルモノヲ學フヲ皇學トス國學支那學歐譯洋書等ナリ尤政教事實ヲ主トシ和漢洋ヲ論スルヲナシ洋字ヲ以テ書スルモノヲ學フヲ洋學トス皇學洋學文字各異ナリトイヘトモ其理ハ則一也其好ム所ニ從ヒ門派ヲ標シ私黨ヲ樹ツルヲナシ互ニ相親ミ天地ノ公道ニ基キ宇内ノ所長ヲ探テ己カ知識ヲ長シ大ニ皇國ノ用ヲ爲スヲ期スヘシ

明治四年九月

縣廳

規條 醫學規條別ニ掲之

一親規入學ノ者ハ學校掛ヘ願出可受指揮事但入學ノ後改名或ハ移住等有之候ハ、其段急度届出可申事

縦形左之通

切紙	科業	士族何番平民族或社寺
		誰子弟或誰一類
	何	某
	何歲	
支干	住所	何村
月日		

一入學生年齡并修業年數等定限無之事

一學生總テ物靜ニ行儀正敷スヘシ進退揖讓ノ禮不可忽候事但多言暴行或ハ怠惰ニテ學生ノ妨ニ相成候輩ハ其父兄親族ニ申談候向モ可有之或ハ其事柄ニヨリ退學申渡候儀モ可有之候事

一皇洋筆數ノ生徒各當直ヲ定當日ノ事ヲ幹セシム尤直長一人ツ、殘居リ指揮可致事

一皇學筆學數學入門定日無之事

一洋學入門日左之通 正月十五日四月十五日七月十七日十月十五日

但本文之通相定置クトイヘトモ從來他所ニテ修業致候者入學ノ節試業ノ上相當ノ等級ヘ組込可申ニ付本文定日ノ

一下等ハ四ノ日午後第一字ヨリ其教師小學等ノ書或ハ皇朝忠孝事跡ノ類ヲ講談シテ父母長上ニ事フル道ヲ知ラシムヘシ

一中等ハ三ノ日上等ハ二ノ日右同刻ヨリ其教師經書或ハ地理風俗山川道程并物產人口ノ多寡天文地球ノ概略等ヲ講談ス尤本縣ヲ先トシテ弘ク皇國ニ及ヒ漢洋外國ヲ後ニシ内ヨリ外ニ及フノ順叙ヲ誤ルヘカラス

一忌病等ニテ不參ノ節ハ學校掛ヘ可届出事
右之通相心得教導不可怠候猶便宜ヲ以テ改正モ可有之候也

明治四年九月

縣廳

定詰生心得

一生徒各靜肅謹慎專ラ學業ヲ勉勵スヘシ雜話爭論堅ク禁之

一規則ヲ遵守シ都テ舍長ノ指揮ニ可從事

一行儀ヲ正シ輕薄ノ風ヲ戒シメ互ニ信義ヲ以テ可交事

一皇學洋學午前第九字ヨリ第十二字ニ至リ午後第一字ヨリ第三字ニ至ル迄ヲ正課ノ時トス但午前第六字ヨリ第八字迄午後第三字ヨリ第十字迄ヲ餘課ノ時トス

一兩學共ニ午後第四字後二時間散步逍遙差許候事但校外逍遙ノ節ハ其旨舍長ニ相届兩學ニテ當直共ニ六人殘番相立可罷出候

一兩學共ニ午前第六字起揃食堂ニ可相列事

一午前第六字ヨリ午後第十字迄袴着用威儀ヲ正フスヘキ事

一兩學共ニ午後第十字後ハ放課ノ時タリ音讀禁之

一正課ノ時刻ヲ期シ教師ニ就テ受業質問スヘシ但時間ノ儀ハ聲柝相示候事

一兩學共ニ筆數學執心ノ者ハ餘課ノ時ヲ以テ相學フヘシ

一出入ハ姓名札可相用事但出校ノ節ハ札ヲ舍長ヨリ受取り當直ニ託シ歸校ノ上舍長ニ相納ムヘシ

一歸校ノ時間遲延ノ者ハ相當ノ罰有之候事

一洋學定詰生ハ毎日午後第一字後教授場ニ出席教授ヲ輔助スヘシ但當時教授員不足ニ付本文ノ通尤歲末相當ノ給資有之

長五寸

切紙

何書

誰分

士族何番頭

肝煎

幅三寸

檢斷

支干
月日

何某印

一拜借本諸官員并定詰生ハ直願不苦候但五冊以下廿日十冊以下四十日十冊以上トイヘトモ六十日ヲ限トス猶卒業不致者ハ期日相納重テ可願出候若シ期日不相納者ハ已來拜借不相叶候事
右規條可遵守之猶便宜ニ因リ改正モ可有之候也

明治四年九月

縣廳

皇學教師心得

一詔ニ曰博士助教ハ惟學業而已ニアラス兼テ德行ヲ取レト教師ハ所謂博士助教ノ類ナリ專ラ躬行ヲ以生徒ヲ率ユヘシ德儀聞ユルアリ清慎著顯シ公平可稱訓導法アルハ教師ノ最トス官ニ居テ怠ラス教導方アルヲ上トス教導倦マス生徒業ニ充ツルヲ中トス其職ヲ勤メス教導欠クルヲアルヲ下トス是御令條之意也体認奉戴怠ルヲナク生徒ヲシテ材ヲ達シ德ヲ成シ他日大ニ皇國ノ用ニ供スルヲ期シ夙夜學業ヲ勉勵セシムヘシ

一米澤近來ノ學斃力ヲ講習ニ專ニセス高ク性理ヲ談シ國家ノ事体實際ニ疎ナリ今般新ニ設クル所ノ學校ハ心術性理ノ辨ヲ事トセス弘ク宇内ノ書ヲ涉獵シ有用ノ材ヲ成スヲ要ス

一試業ハ三等共ニ私本ヲ用ヒス官本ヲ以テ相試可申事

一試業專ラ讀書講義ノ巧拙ヲ試ムル而已ナラス務テ人心ヲ活動シ進歩ノ地ニ至ラシムルヲ主トス但其法譬ヘハ小兒ヲ試ムルニ題ヲ出シテ米澤四方ノ國々ハ何々杯ヲ書カシム次ニ縣高幾許町數如何日本ノ州名如何等ヲ以テシ中等上等ニ至テハ或ハ未讀ノ書ヲ授ケ或ハ題ヲ設ケテ對策セシメ又ハ海外ノ事情形勢等ヲ論セシメ以テ其才不才ヲ試ミ甲乙ヲ判シ其科ニ當ル者ハ讀書講義ノ甲科共ニ賞賜ヲ與フヘシ

一各區ニ設クル所ノ支校モ体裁本校ニ異ナラス

能クセサル者ハ猶此ノ等ニアリテ句讀ヲ受ヘシ

一中等ハ年齡ニ拘ハラス獨誦ヲ能スル者此等ニ入ル

一皇典國書支那書翻譯書ヲ涉獵シ天文地理政刑文章考究セサルナシ二等教授誘導之

一中等生徒上下二席トシ甲乙ヲ以テ分課ス但此等午後第一字ヨリ第三字迄毎日一席ツ、數學ヲ稽古スヘシ開平法以上ハ勝手タリ

一上等ハ中等ヨリ俊秀ノ者ヲ撰ラミテ此等ニ進メ一等教授誘導之但筆數學ハ餘課ノ時ヲ以相學ヒ候儀勝手次第ノ事
一上中等正課ノ書ハ其教授臨時相議シ定之事

一各區ニ設クル所ノ支校休載本校ニ異ナラストイヘトモ教授三等不相充節ハ出張ノ教授三等ヲ兼テ誘導之但區學支校ノ地所タリトモ本校ニ入ヲ願フ者許之

一本校下等課業ハ三席ニ分チ生徒ヲ平等ニ分配シ教官并手傳一試ツ、三席循環シテ教授ス大抵教官一員ニ付生徒三十人ツ、扱ハシム每席教官姓名簿ヲ以テ生徒ノ登否ヲ點檢ノ事但三字經孝經小學一席四書一席五經一席タリ
一下等復習ハ日々午後一席ツ、席次ヲ以順繰ニ相勉勵セシム

一定刻遲延ノ者ハ業ヲ授ケス

一三季ニ小試甲乙ノ科ヲ分テ揭示シ十一月大試優等ノ者賞賜有之事

一筆數兼學ノ者皇學大試前六十日間筆數學欠席許之

一書籍銘々持參之事但無據者別段願出候ヘハ事實取調ノ上拜借差許ヘシ然トイヘトモ洋書翻譯書ハ適宜ノ稅納之

一書籍拜借又ハ御拂下ヲ願フ者ハ學校掛ヘ可申出事

一拜借ノ書籍校中ノ器械取扱不愼ヨリ破損ニ及ヒ候節ハ其大小ニ因リ罰金申付候事

一生徒怠惰不作行教官ノ命ヲ用ヒサル者ハ相當ノ罰有之事

一休業左之通 毎月一六ノ日 正月元日ヨリ十一日迄 三月三日十一日 五月五日 夏日土用中 七月七日 七月

十三日ヨリ十六日迄 九月九日廿二日 十二月廿六日ヨリ除日迄

右之通規條可遵守之猶便宜ヲ以テ改正モ可有之候也

明治四年九月

洋學規條

縣廳

一而學共ニ定詰生ハ毎年十一月大試相濟候ヘハ一統解之更ニ甲科ヲ撰ラミテ定詰セシムル事

一自費定詰生同斷但總自費ノ徒ハ此ノ例ニアラス

一書籍拜借又ハ御拂下ヲ願フ者ハ學校掛ヘ可申出事但定詰生ハ拜借本税金無之トイヘトモ破損セハ繕完シ紛失セハ償納セシメ或ハ適宜ノ金ヲ収ム

一疾病事故アリテ一ケ年六十日欠席ノ者ハ退校ノ事但忌中血忌ハ此ノ例ニアラス

一怠惰或ハ過失有之等ハ直ニ除名セシムル事

一校中酒菓禁之吟詩詠歌同斷但文會ノ節ハ吟詩詠歌許之

一病氣ノ節ハ醫診ヲ乞ヒ病症ニ因テ退養差許候事但一二等親病氣ノ節家証ヲ以テ願出候ヘハ看病差許候事

一外人ト應接致候節ハ其旨舍長ニ届ケ應接所ニ於テ面談スヘシ但病氣ノ節ハ此例ニアラス

一居所都テ清潔ヲ心掛ヘシ

一餘課中聚講會讀相催候儀可爲勝手事但塾中不許之一切講堂ニ於テスヘシ

一教授席ハ課業後番人掃除ノ筈ニ付定詰生二人ヲ一組トシ一日ツ、更番居殘夫々指揮致スヘシ

一當直ノ儀二人ツ、一晝夜持切第壹火之元ヲ戒メ都テ不締無之樣嚴重可相勤事但兩學ヨリ一人ツ、出勤ノ方

一休業左之通 皇學生一六ノ日一晝夜 洋學生^{土曜日午後第四字ヨリ日曜日夜十字迄} 正月元日ヨリ十一日迄 三月三日十一日 五月五日

日 夏日土用中 七月七日 七月十三日ヨリ十六日迄 九月九日廿二日 十二月廿六日ヨリ除日迄 此外ノ休日

ハ臨時揭示スヘシ

一而學一統休暇ノ節ハ當直跡而學ニテ二人可相殘事但殘生ハ翌日一晝夜償暇差許候事

右之通相心得勤學不可怠候猶便宜ヲ以テ改正モ可有之候也

明治四年九月

縣廳

皇學規條

一本校生徒上中上三等ニ分チ業ノ生熟ヲ以等級ヲ相立教授致候事

一三等午前第九字ヨリ第十二時ニ至リ午後第一時ヨリ第三字ニ至ル迄ヲ正課ノ時トス

一皇學并筆數學稽古ノ順叙各教授ノ指揮ニ任スヘキ事

一下等ハ生徒七八歳ヨリ入學セシム三字經孝經小學四書五經逐次讀之三等教授誘導之但五經皆讀トイヘトモ獨誦ヲ

一素讀生徒ヲ級外ト致候事

一解剖生理學卒業ノ生徒ハ人跡解剖實驗差許候事

一上等ノ生徒ハ醫案治則ヲ勉メ手術綑帶等ヲ研究シ診病實驗ヲ要トスヘシ

一課業午前第九字ヨリ相始メ午後第三字ニ至ルヲ限トス

一疾病事故アリテ課業欠席スル者會頭ヘ届出ヘシ月末欠席ノ次第ヲ及糺シ評議ノ上相當處置ノ事

一輪講ハ黑白點ヲ以テ優劣ヲ判シ月末ニ總計シ以テ同等中ノ進退ヲ定ムヘシ但遅刻出席ノ者ハ罰點ヲ加フ

一春秋兩度試業甲乙ノ科ヲ分チ優等ノ者ニ賞賜ス

一毎科卒業優等ノ者ハ左ノ免狀ヲ與ヘ候事

證

氏名

右醫學得業候者也

支干
 月日

醫學校印

一廳下醫業ノ者術ノ新古異同ヲ論セス毎月一度會集セシメ學術檢査スヘキ事

一怠惰過失アル者ハ相當ノ罰ニ處スヘシ事實ニ因リ其旨申出退學セシムヘキ事但退學セシムル上ハ終身醫業差留ム

ヘシ他管内ノ者ハ其師家ヨリ放還ス

一書籍拜借又ハ御拂下ヲ願フ者ハ學校掛ヘ可申出事

一拜借ノ書籍校中ノ器械取扱不愼ヨリ破損ニ及ヒ候節ハ其大小ニ因リ罰金申付候事但其書籍ニヨリ拜借ノ節適宜ノ

稅取立候儀モ可有之也

一午前第九字ヨリ第十二字ニ至リ午後第一字ヨリ第三字ニ至ル迄ヲ課業ノ時間トス

一教師登校生徒ノ登否取調ノ上授業候儀皇學ニ同シ

一定詰生午後第一字ヨリ出席教授候事

一書籍銘々持參皇學ニ同シ但書皇學ニ同シ

一拜借ノ書籍校中ノ器械取扱不愼ヨリ破損ニ及ヒ候者罰金皇學ニ同シ

一怠惰過失ノ者罰皇學ニ同シ

一生徒階級ハ當分五科ニ分チ七科ヲ甲科トシ最下ヲ初科ト定メ候事

一三季小試甲乙ヲ分チ揭示シ十一月大試優等ノ者賞賜有之事

一休業左之通 土曜日午後第四字ヨリ日曜日夜十字迄 正月元日ヨリ十一日迄 三月三日十一日 五月五日 夏日

土用中 七月七日 七月十三日ヨリ十六日迄 九月九日廿二日 十二月廿六日ヨリ除日迄

右規條可遵守之猶便宜ニ因リ改正モ可有之候也

明治四年九月

縣廳

醫學揭示

醫ハ司命ノ業仁ノ術ニシテ其任甚重シ學術精覈ナルニアラサレハ生命ヲ保全シ健康ヲ回復スルヲ難シ其學タル遠クハ天地萬有ノ妙理ヲ究メ近クハ人身百体ノ靈ヲ明ニシ其健康活動ノ理疾病變化ノ源及ヒ百般藥石ノ性効ヲ研窮會得而後之ヲ病体ニ實驗シ始テ醫タルヘシ豈ニ容易ニ學ヒ得ヘケンヤ今般政綱維新ノ際醫亦缺ヘカラサルノ一科タルヲ以テ更ニ制度ヲ改定ス學フ者宜ク黽勉從事舊弊ヲ一掃シ學術ヲ大成シ以テ醫ノ名實ニ背カサルヲ要ス

規條

一年齡定則ナシト雖凡大凡筆算讀書普通ノ學科ヲ訖ル者入學差許候事

一學科ノ次序ヲ踏ミ其要領ヲ得テ卒業大成スルヲ以テ目的トスヘシ

一等級科目左之通

下	等	輪	講	博	物	學	化	學
中	等	輪	講	解	剖	學	生	理
							學	病
								理
								學

一 午前第九字ヨリ第十二字ニ至リ午後第一字ヨリ第三字ニ至ル迄ヲ課業ノ時間トス

一 生徒諸科稽古ノ順叙筆學ニ同シ

一 生徒ノ登否ヲ點檢シテ教授スルヲ筆學ニ同シ

一 生徒ヲ上中下三等トス毎月二日三日兩日試業ノ上等級ヲ進退スヘシ但本文ノ日ハ休業

一 取扱不慎ヨリ校中ノ器械ヲ破損スル者罰金數學ニ同シ

一 怠惰不行作ノ者罰筆學ニ同シ

一 毎月小試甲乙ノ科ヲ分テ揭示シ十二月大試優等ノ者ニ賞賜ス

一 皇學筆學兼學ノ者數學大試前十日間皇筆學欠席勝手タルヘシ

一 休業左之通 毎月一六ノ日 正月元日ヨリ十一日迄 三月三日十一日 五月五日 夏日土用中 七月七日 七月

十三日ヨリ十六日迄 九月九日廿二日 十二月廿六日ヨリ除日迄

右規條可遵守之猶便宜ニ因テ改正モ可有之候也

明治四九月

縣廳

職名及ヒ俸給

儒者職 景勝ノ時禪林寺住僧九山ヲ以テ世子定勝ノ師トス定勝ノ時寛永十三年始テ佐野玄譽齋清順ヲ以テ儒者職ニ任
ス清順ハ修驗ニシテ明鏡院ト云フ此時還俗シテ當職ニ任シタルナリ俸給ハ未タ審カナラス綱勝ノ時慶安三年病死ス
此年近江ノ人北島瑞伯ヲ聘シテ儒醫ノ職ニ任ス祿百石ト拾人扶持ヲ合賜ス後ニ祿ヲ加賜シテ五百石トス寛文四年辞
シテ去ル綱憲ノ時同九年藩士矢尾板三印伯章ヲ近侍ト爲シ儒醫ノ職ヲ兼テシム祿七十石ヲ賜フ延寶七年三十石ヲ加
賜ス同十六年百石加賜ス吉憲ノ時寶永二年病死ス此年浪士片山元儒一源ヲ江戸ヨリ召シテ儒者職ニ任ス祿二百石ヲ
賜ヒ班ヲ中ノ間詰ト爲シ學校ヲ管司セシム享保八年病死ス子紀兵衛一眞繼テ儒者職ニ任ス祿七十石ヲ賜フ延享五年
記録ヲ兼テ寶曆十年病死ス子紀兵衛一積繼テ祿秩及ヒ本官兼務共ニ一眞ノ時ノ如シ治憲ノ時明和四年重定ノ側醫藥
科立澤ヲ以テ儒者職ヲ兼テシム此時ニ至リ始テ儒者職二人ヲ置ケリ同八年立澤カ儒者職ヲ罷ム安永五年片山一積神
保忠綱興讓館提學ト爲レリ

安永五年學校再興以前ハ儒者職アリト雖モ學校奉行學監等アルヲ聞カス再興以降ハ左ノ如シ
奉行 當職ノ内一人學校掛ヲ命セラル○中老 當職ノ内一人前ニ同シ○仲ノ間年寄 當職ノ内一人前ニ同シ○勘定

一休業左之通 毎月一六ノ日 正月元日ヨリ十一日迄 三月三日十一日 五月五日 夏日土用中 七月七日 七月十三日ヨリ十六日迄 九月九日廿二日 十二月廿六日ヨリ除日迄
右規條可遵守之猶便宜ニ因リ改正モ可有之候也

明治四九月

縣廳

筆學規條

- 一習字ハ華樣ニ限ル事但私塾ハ諸流勝手タルヘシ
- 一午前第九字ヨリ第十二字ニ至リ午後第一字ヨリ第三字ニ至迄ヲ課業ノ時間トス
- 一生徒諸科稽古ノ順叙皇學ニ同シ
- 一生徒出席簿兼テ姓名ヲ記置教師其日ノ登日ヲ記テ後ニ教授スヘシ
- 一清書三八ヲ定日トス
- 一課業稍熟スル者公用私用ノ文案ヲ授置一月ニ兩度ツ、諸書セシメ其習熟ノ者或ハ年輩長スル者ハ隔月一度新ニ題ヲ設ケ文章ヲ作ラシメ何レモ甲乙ノ科ヲ分テ揭示シ八月大試優等ノ者ニ賞賜ス但書法ノ巧拙ハ強チニ論スヘカラス
- 一生徒徒手本ヲ請ヒ私宅ニ於テ習字致度旨願出者ハ差許候事但三八ノ日清書持參及ヒ公私文案隔月試等日々出席之者ト同様タルヘシ
- 一歷朝帝號世界國盡府縣名御布告文類或ハ公私普通常用ノ文字ヨリ始テ學ハシムヘシ
- 一取扱不慎ヨリ校中ノ器械ヲ破損スル者罰金皇學ニ同シ
- 一怠惰不行作ノ者罰皇學ニ同シ
- 一皇學數學兼學ノ者筆學大試前十日間皇數學共ニ欠席勝手タルヘシ
- 一休業左之通 毎月一六ノ日 正月元日ヨリ十一日迄 三月三日十一日 五月五日 夏日土用中 七月七日 七月十三日ヨリ十六日迄 九月九日廿二日 十二月廿六日ヨリ除日迄

右規條可遵守之猶便宜ニ因リ改正モ可有之候也

明治四九月

縣廳

數學規條

允サス

讀長三員 寛政七年三月始テ此職ヲ置ク諸生二十人ノ列ニアリテ講堂ノ會業等ヲ勤ムルヲ諸生ニ異ナラス而シテ兼テ友于堂ノ總裁タリ通學自讀生ヲ教授ス年ニ擬金貳兩ヲ給ス始ハ督長ト云フ後ニ讀長ト改ム典籍ノ次席タリ同年七月議定ス讀長ハ友于堂ノ總裁ニシテ劇務タリ講堂ノ會業ヲ欠クト雖凡以後之ヲ許シテ欠業簿ニ記載スヘカラスト同十一年十月助生十二人更ニ命シテ助讀ト爲シ讀長ヲ減シテ一員トス同十二年壬四月典籍山田兵三郎讀長ニ轉ス是ニ於テ讀長ヲ典籍ノ上座トス十月兵三郎嚶鳴館細井平洲ノ塾ナリ一ケ年勤學ヲ命セラル此後ハ本職ヲ欠ク享和三年正月湯野川文三郎此職ヲ命セラレ神保甲作登坂登相繼テ此職ニ在リ文化七年登助教ニ任シテ而シテ讀長ヲ兼務ス文政二年七月登提學ニ任ス此後讀長ヲ欠ク文久二年正月曾根敬一郎讀長ニ任ス仲ノ間詰タリ助教ノ下ニ列ス藏米五十五石ヲ賜ヒ元知ト合セテ百石タリ塾ヲ友于堂ノ側ニ建テ、之ニ居ラシム明治元年百挺銃卒隊長ニ轉ス同三年七月月中川英右此職ニ任ス同年十月之ヲ罷ム

助生十二員 助生十二員友于堂ニ通勤シ通學生徒ニ讀書習字ヲ教授ス十二員ノ中一日二員ツ、常番ヲ定ム常番ノ者ニ晩飯ヲ賜フ試業前數日ハ常番ニアラスト雖凡三時ノ飯ヲ賜フアリ助生ノ中別ニ手習掛ヲ命ス手習掛ハ一六ノ日必ラス出勤ヲ故ニ亦常番ニ拘ハラス飯ヲ賜フ皆給料ヲ給セス歲末ニ吸物酒ヲ賜フテ之レヲ勞ラフ政府役所ニ於テ年中政府太僕候ニ付於テ學校御吸物御酒被成下旨ヲ達ス本藩ノ御吸物酒ヲ重シトス吸物友ヒ著ニ種ヲ添ヘテ酒ヲ賜フナリ藩主ノ藥所役處ヨリ現物ヲ送致ス時アリテ助生上座ト命セラル、者アリ助生上座ニハ三時ノ飯ヲ賜フヲ恒トス寛政七年三月始テ友于堂讀長三員ヲ置キ友于堂ノ總裁ト爲ス助生之ニ附屬ス同十年七月助生年期滿三年ト定ム講堂ニ於テ將學之ヲ令ス同十一年十月讀長ヲ減シテ一員トス助生十二員更ニ命シテ助讀トス日勤自分辨當ニシテ晩飯ヲ當番二人ニ賜フヲ助生ノ時ノ如シ席次ハ諸生ノ次寄塾生ノ上タリ歲末ニ金百疋ヲ賜フテ之ヲ勞ラフ享和三年學校改革ニ際シ之ヲ廢ス

助讀八員 享和三年五月友于堂ヲ改革シ從前ノ助教十二員ヲ廢シ更ニ助讀八員ヲ置キ讀長ヲ補助シテ友于堂通學生ヲ教授セシム學校滿三年定詰トス一ケ年金壹兩貳分ヲ給ス諸生ノ上座トス文化十年大儉ヲ行フヲ以テ此職ヲ停ム同十三年十二月重テ友于堂ヲ改正シ助讀三員ヲ置キ諸生ヲ以テ之ヲ兼務セシム席次ハ諸生ト齒列ス同十四年十二月諸生兼助讀ヲ以テ年長ノ上座ト爲ス讀長欠職ノ時ハ助讀恒ニ友于堂ノ總裁タリ

上座生十員 寛政十一年十月友于堂改革ノ際上座生十員ヲ置ク督學之ヲ命ス友于堂ニ通勤シ讀長助讀ヲ補助シ通學生徒ヲ教授ス五人ヲ以テ常番トス上座生學校定詰自費勤學ヲ出願スレハ之ヲ允ス大抵十人ノ中五人ハ定詰ニシテ

頭 當職ノ内一人前ニ同シ○役所役 當職ノ内一人前ニ同シ

右役職ノ者學校ヘ日勤スルニアラス生徒ノ試験或ハ學校ノ事件ハ主トシテ之ヲ僉議スルナリ

教官ハ左ノ如シ

督學 本官ハ常ニ之ヲ置カス學德優等或ハ教務ニ功勞アル者ヲ以テ之ニ任ス學校ノ總裁タリ學校ニ通勤ス班ハ大目
附ノ上ニ叙ス祿ハ定額ナシ

總監 本官モ督學ニ同シ班ハ大目附ノ下ニ叙ス祿二百五十石嫡子迄襲目ヲ着用ス

提學 本官一人或ハ二人ヲ置ク督學或ハ總監ニ在スル者ナキ時ハ學校ノ總裁タリ班ハ町奉行ノ下ニ叙ス祿ハ百二十
五石ヲ給ス學校總裁タル時ハ二百石ヲ給ス始ハ學校定詰タリ後ニ改テ通勤トナス

儒者家 天保六年六月片山紀兵衛一貞子孫永々儒者家ニ命セラル世祿百石助教上席ト爲ス毎月講堂ニ於テ提學助教
ト繰廻シニ講義ス飯ヲ賜フヲ助教ニ同シ成業ノ後多ク提學助教ニ任ス

助教 寛政十二年五月登坂孫助次芳助教都講兼務ヲ命セラレ同十九日入館ス之ヲ助教ノ始トス其職ハ提學ヲ補助シ
テ諸生寄塾ヲ訓導スルヲ司ル孫助部屋住ニシテ無給ナルヲ以テ年ニ擬金五兩ヲ給ス享和三年五月學校改革ノ際都
講兼務ヲ除キ中ノ間詰ニ列ス擬金ヲ増シテ七圓トス學校定詰ヲ改テ通勤トス文化四年父ニ繼ク父左次右衛門充元
勘定頭タルヲ以テ孫助遺祿六拾石ヲ襲ク別ニ藏米四十石ヲ給シ合セテ百石ト爲ス而シテ年給ノ金ヲ停ム同七年致
仕ス香坂登昌直之ニ代テ助教タリ友于堂讀長ヲ兼務ス班ハ孫助ノ時ノ如ク祿モ亦藏米ヲ以テ元祿ニ加ヘテ百石ト
ス文政二年提學ニ任ス此後當職欠ケタリ天保元年壬三月芦川良助正道此職ニ任ス班祿共ニ昌直ノ時ノ如クニシテ
兼務ナシ正道ヨリ後ニ任スル者皆正道ノ如シ而シテ二人或ハ一人ヲ置クアリ

都講一員 滿三年定詰ニシテ館中ノ事務ヲ總司ス役名ヲ學頭ト稱ス而シテ學校ニ於テハ都講ト云フ一ケ年金貳兩ヲ
給ス諸生二十員ノ中ニシテ通學生徒ノ訓導ヲ兼ヌ所謂舍長ナリ中古以降學頭ノ稱ヲ稱セス單ニ都講ト云フ

典籍一員 滿三年定詰ニシテ館庫ノ書籍ヲ監守シ書籍ノ出納ヲ司ル役名ヲ書籍方ト稱ス學校中ニ於テハ典籍ト云フ
一ケ年金貳兩ヲ給ス諸生二十員ノ中ニシテ生徒ノ訓導ヲ兼ヌ都講不在ナレハ其職ヲ攝ス後ニ改メテ都講ト隔月ニ
事務ヲ司ル所謂副舍長ナリ館中都講典籍ヲ稱シテ兩役塾ト云フ中古以降書籍方ノ稱ヲ稱セスシテ單ニ典籍ト云フ
諸生十八員 滿三年定詰ニシテ勤學生タリ而シテ通學生徒ノ訓導ヲ兼ヌ一ケ年金一兩ヲ給ス凡ソ學校ニ通學スル者
本堂素讀生友于堂自讀生ヲ論セス諸生二十員都講典籍も訓導ノ中ニアリ中ノ扱ト爲リ其扱生姓名簿ニ記載セサレハ登堂スルヲ

ハ校中ノ俗事ヲ管掌シ兼テ主財ノ職務ヲ監視ス釋菜及ヒ試業其他諸生ノ學業ニ關係ノ品ヲ政府ヘ申立ル時ハ掌事ノ名ヲ以テ主財役場ノ事件館ノ内外諸普請等ハ主財ト津署シテ申立ルヲ例トス館中ノ事務ヲ主財ニ達スル主事ノ如シ掌事交替ノ時主財役場ノ紙蠟等先役後役引繼ノ式ヲ爲ス開講ノ酒主財ハ槍懸ノ間ニテ之ヲ賜ヒ掌事ハ諸生ノ飲酒畢テ後講堂ニ於テ之ヲ賜フ釋奠ノ膳肉主財ニ賜ハラス掌事ニ之ヲ賜フ主財役場ニ宿泊スルヲアレハ掌事主財三番ニシテ之ヲ勤ム都講之ヲ掌事主財ニ達ス掌事ニ筆墨代一ケ年錢四百文ヲ給ス給料ノ有無未審滿期ニシテ交替スル時樽酒三升ヲ賜テ之ヲ賞ス文政年中掌事ヲ廢ス

主財二員 安永五年學校再興ノ際本役ヲ設ケ校中薪炭米噌油燭紙筆以下金穀ニ關スル一般ノ事務ヲ司ラシム三扶持方ノ士ヲ以テ之ニ充ツ手常米膏石ニ玄米五俵ヲ給ス一俵ハ四斗六升ナリ同六年四月毎夜一人役場ニ宿泊セシム寛政元年格式ヲ昇セテ組外定役ト爲シ元扶持ニ加恩シテ一人扶持ニ四石ト定ム例ヘハ元扶持一人扶持二石五斗ノ者此役ヲ命セラルレハ一石五斗加増ト云ヒ扶持人ニ石數ナ加フルチ加恩ト云フ同三年七月政府役所ニ於テ是迄一ケ年手常米五俵ノ内三月二俵七月一俵九月二俵三度ニ下賜セラレタルヲ今日ヨリ役料米ニ改メ以來一ケ年四俵三月貳俵九月貳俵下賜スヘキ旨ヲ達ス此年官府宥恕合ヲ發シ諸局ノ勤務ヲ弛メ事務ノ緩ナル者隔日ニ出勤スルヲ允スニ於テ主財ヨリ番人ニ役場下役ヲ兼帶セシメ下役ト緑廻シニシテ役場宿泊ヲ四番ニセンコトヲ乞フ當時番人二員ナリ主財ト合セテ四入トス一夜一人ツ、宿泊スルナリ八月下役兼帶ハ之ヲ許サス番人ト緑廻シニ四番ニ宿泊スルコトヲ許ス中古主財ノ宿泊ヲ廢シ又役料米ヲ五俵ト爲ス後又主財ニノミ一人ツ、宿泊セシム本役モ歳末吸物酒ヲ賜フテ終年ノ精勤ヲ勞ラフヲ例トス明治四年改革ノ際ニ至リテ之ヲ廢ス

將命二員 寛政七年友于堂讀長三員ヲ置キ友于堂ノ總裁ト爲シ將命二員ヲ設ケテ讀長ノ使令ニ供ス將學其塾ニ於テ之ヲ命ス友于堂ヘ通勤ス試業前數日ハ三時ノ飯ヲ賜フ將命賤役ナリト雖モ將命ヨリ寄塾ヲ出願スレハ多ク允可ヲ得ルヲ以テ生徒此役ヲ命セラルハヲ耻トセス或ハ大將命ト命スルコトアリ將命ノ上席トス同十一年十月讀長ヲ減シテ一員トス將命モ亦一員ヲ減ス此月將命高梨磯彌當番休ノ日自費ヲ以テ學校ニ於テ勤學センコトヲ乞フ之ヲ允ス三次ノ飯ヲ給スル寄塾生ノ如シ歳末其費料ヲ収ム試業前ニ至レハ増將命一員ヲ命スルヲ恒トス文政年中將命ヲ廢ス立書役 臨時ニ五六人ヲ命ス試業臨席ノ役員ニ配賦スヘキ帳即チ生徒ノ姓名身分及ヒ試験ヲ受クヘキ書目ヲ調査記錄セシム出勤中午飯ヲ賜フ歳末ニ至リ吸物酒ヲ賜テ之ヲ勞ラフ

番人 安政五年學校再興ノ際會所番組ヨリ三人ヲ命シテ學校番人トス館内ノ使令ニ供シ門衛ヲ兼務ス後ニ減シテ二人トス一夜一人番所ニ宿泊セシム寛政年中會所番組十五六人ヲ分ケテ學校番人ト定メ一晝夜一人繰廻シニ出勤セ

餘暇ヲ以テ其身ノ勤學ヲ爲ス助讀欠官或ハ不參ノ間ハ上座生假役ヲ命シ上座生ヲ以テ之ヲ攝セシム攝役ニ午飯ヲ賜フ同十二年千四月十五日上座生當番五人ハ本日以降午飯ヲ賜フ試業前數日ハ上座生十人ハ朝午二飯ヲ賜フ纂務ニ際スレハ十人外ニ加人ヲ命スルヲアリ享和三年五月友于堂改革ノ際上座生ニ一ケ年擬金貳分ツ、ヲ給ス文政年中上座生ヲ廢ス

上座生五員 文政年中上座生五員ヲ置ク政府ニ於テ家老之ヲ命ス友于堂ニ通勤ス勤務スルヲ上座生ノ如シ擬金ヲ給セズ賄ヲ賜ハラス歲末ニ樽酒五升ヲ賜テ之ヲ勞ラフ

習書掛 習書掛初メハ督學或ハ提學之ヲ命ス文化八年ヨリ家老之ヲ命ス諸生ヨリ兼務スル者アリ館外ヨリ命セラル、アリ一六ノ日友于堂ニ出勤シテ通學生徒ニ習字ヲ教導ス歲末樽酒三升鹽鰯一尺ヲ賜テ之ヲ勞ラフ館外ヨリ出勤ノ者ハ出勤ノ日午飯ヲ賜フ文政十年友于堂ヲ閉鎖ス是ニ於テ習書掛ヲ停ム同十一年正月一六ノ日興讓館講堂ニ出勤セシム午飯ヲ賜フ友于堂ノ時ノ如シ中古以降習書掛ヲ廢ス

仕付方 寛政十一年十一月禮節家大河原善右衛門ニ友于堂仕付方ヲ命シ生徒ニ進退周旋飲食拜謁進獻等ノ禮節ヲ教導セシム一ケ月三度出勤ス出勤毎ニ午飯并ニ酒ヲ賜フ翌十二年ヨリ一周年出勤ノ始末ノミ酒ヲ賜ヒ出勤毎ニ午飯ヲ賜フ後ニ之ヲ興讓館講堂ニ移シ定詰生通學生ヲ論セス皆之ヲ學習ス歲末ニ吸物酒ヲ賜フテ之ヲ勞ラフ子孫相繼テ之ヲ勤務ス

事務員ハ左ノ如シ

主事一員 寛政九年五月此職ヲ置キ服部吉彌ヲ以テ之ニ充ツ三ケ年ヲ以テ期限ト爲ス學校定詰タリ十一月都講登坂孫助嚶鳴館勤學ヲ命セラル此後都講欠役タリ主事學業及ヒ金穀等内外一切ノ事ヲ管司ス典籍ノ上席タリ生徒ノ試験ニハ典籍讀長ト共ニ講堂ニ列ス主財管掌スル所ノ事件官府ヘ伺願スルヲ皆主事ノ名ヲ以テス而シテ館中之事務主事之ヲ主財ニ達ス給料未審都講ノ職務ヲ兼行スレハ年ニ金貳兩ヲ賜フコト都講ノ如クナルヘシ然レ未タ明文ヲ見ザルナリ同十二年五月滿期ニシテ退館ス此日登坂孫助助教兼都講ヲ命セラレ登坂又右衛門掌事ヲ命セラレ主事ハ欠役タリ

掌事一員 寛政十二年五月此職ヲ置キ登坂又右衛門ヲ以テ之ニ充ツ定期三年ニシテ學校ニ通勤ス新ニ掌事詰所ヲ修理ス毎ニ三馬廻ノ士ヨリ之ヲ命ス丸山茂兵衛林元右衛門相繼テ此職ヲ命セラル主事管司スル所ノ中學業ノ事件ハ都講之ヲ勤メ其他ノ事務ハ掌事ノ職掌ト爲スカ如シ然レモ掌事ハ役塾ト主財トノ間ニ在ルヲ以テ登坂又右衛門丸山茂兵衛勤務セシ時職務ノ分界明カナラス林元右衛門掌事ト爲ルニ及テ横車ト云フ書ヲ著シテ之ヲ正セリ其職務

宮内郷校 三等教授次助勤四員 年給四俵ツ、○上席生一員 年給金六圓○用掛二員 年給金三圓
小國郷校 三等教授助勤一員 年給八俵○三等教授次助勤三員 年給四俵ツ、○三等教授次助勤兼用掛一員 次助勤
年給四俵用掛年給三圓

小松郷校 三等教授助勤一員 年給八俵○三等教授次助勤三員 年給四俵○用掛二員 年給三圓

宮郷校 三等教授次助勤四員 年給四俵○上席生二員 年給金三圓ツ、○用掛二員 年給金三圓ツ、

事務員 權少參事准席一員 年給七拾俵○大屬一員 年給四十五俵○權少屬一員 年給貳拾五俵○史生二員 年給拾

俵○權少屬加人二員 年給七俵○少屬^{醫學校掛}一員 年給貳拾五俵○權少屬^{醫學校掛}一員 年給貳拾俵

學校ノ改革毎月之ヲ爲スモノ、如シ明治四年六月及ヒ八月小改正アリ九月又大改革ヲ行フ本校郷校共ニ教員及ヒ事

務員人員ノ増減等級俸給ノ昇降月トシテ異動アラサルハナシ皇學總頭ヲ以テ之ヲ云ヘハ明治四年八月以前年給四拾

五俵タリ八月廿一日ヨリ三校五俵ニ改ム十月十八日七拾俵ト爲ス事務員ノ如キ四年六月ハ權大屬二員少屬一員ヲ加

フ既ニシテ又之ヲ他ニ轉ス五年四月權大屬一員權少屬二員史生二員權少屬加人一員ヲ置テ其他ハ之ヲ罷ムルノ類煩

雜ニシテ一々之ヲ記スル能ハス前文ハ明治五年正月二月ノ調査ヲ以テ概畧ヲ記スルノミ

職員概數

教員三拾一人、總監一員提學一員助教二員讀長一員諸生二拾員上席生五員仕付方一員輓近ノ例大抵然リトス但都講與
籍助讀等諸生ヨリ兼務スルヲ以テ別ニ之ヲ計算セサルナリ

事務員二人、主計二員輓近ノ例然リトス

門衛一人、一隊中ヨリ一晝夜一員ツ、出勤ス事故アル時ハ加番トシテ出勤數名ニ及フ

教員ヨリ門衛ニ至ルマテ古今沿革増減一ナラフ職名及ヒ俸給ノ項ニ詳ナリ爰ニ輓近ノ概數ヲ記スルナリ

醫學教員十七人、訓導四員助生五員掛役八員

明治四年改革 教員百二人内二員事務ヲ兼ヌ○事務員十五人 教員事務員先後増減アリ爰ニ明治五年正月二月ノ概數

ヲ記スルナリ

生徒概數

寄宿生三十人内諸生二十人寄塾生十人 諸生ハ藩費ヲ以テ之ヲ給ス寄塾生ハ時ニ一兩名藩費ヲ以テ之ヲ給スルヲアリ

ト雖凡自費ヲ以テ勤學スルヲ恒トス 寄宿生ノ内諸生ハ二十員古今一定セリ寄塾生ハ増減一ナラス學校再興ノ際五七

シム別ニ給料ヲ附セス萬延文久ノ際會所番人少ニシテ會所及學校ニケ所ノ勤務難澁ナルヲ以テ外張番組ヲ以テ之ニ換フ外張番組モ亦ニケ所ノ勤務難澁ナルヲ以テ文久二年十二月三十槍組ヲ以テ番人ト爲ス

好生堂 總裁一員 文化三年好生堂再興ノ際飯田齒澗此職ニ任々後之ヲ置カス 訓導四員、助生五員、醫按掛二員、

俗醫掛二員 醫家ニアラスシテ醫業ヲ爲ス者ノ取締ヲ爲シ之ヲ好生堂ニ召シ試験セシムルヲ職司トナス 鍼灸掛一員、產婆掛二員

好生堂ノ教員ハ皆本藩醫家之ヲ勤ム俸給ナシ歲末ニ政府ヨリ酒ヲ賜テ之ヲ賞ス

明治四年七月藩ヲ廢シ米澤縣ヲ置カレ知事上杉茂憲免セラル舊大參事以下政務ヲ施行ス九月學校ノ體裁ヲ改革シ四民一途人才教育ノ制度ヲ立テ學體ヲ分テ皇學洋學醫學筆學數學ノ五科トス本校及ヒ五鄉校ヲ設ケ教員及ヒ事務員ヲ置ク左ノ如シ

皇學 總頭兼教授一員 權少參事准席年給七拾俵〇一等教授一員 權大屬准席年給三拾五俵〇二等教授二員 少屬准席年給貳拾五俵〇二等副教授三員 少屬末席年給貳拾俵〇三等教授二員 權少屬末席年給拾俵〇三等教授列二員 前ニ同シ〇三等教授助勤二十七員 年給八俵(當時一俵^{四斗}五升代金貳兩貳朱トス教員事務員ノ給月割ヲ以テ每月金ニテ之ヲ給ス明治五年六月ヨリ學校ノ伺ヲ以テ現米ヲ給與セリ筆數醫學鄉校皆同シ)〇舍長一員 年給七圓〇副舍長一員 年給五圓

洋學 外國教師一員 英人タラス氏 月給貳百五十圓〇語學教師三員 一員月給百四十圓〇三等教授助勤一員 年給八俵

〇舍長一員 年給七圓〇副舍長一員 年給五圓

筆學 二等教授一員 少屬准席年給二拾五俵〇三等教授助勤九員 年給八俵〇明治四年十一月ヨリ教授及ヒ助勤へ一員ニ付一ヶ月筆學料錢壹貫文ヲ給ス

數學 二等教授一員 少屬准席年給貳拾五俵〇三等教授一員 權少屬末席年給拾俵〇三等教授助勤七員 年給八俵

醫學 一等教授一員 權大屬准席年給三拾五俵〇二等教授二員 少屬准席年給貳拾五俵〇二等副教授二員 少屬末席年給貳拾俵〇三等教授二員 權少屬末席年給拾俵〇三等教授助勤二員 年給八俵〇鍼灸掛二員 年給五俵〇產論掛

二員 年給五俵ツ、

荒砥鄉校 細校ノ用掛ハ事務員ナリ 三等教授次助勤兼用掛一員 次助勤年給四俵用掛同金三圓〇三等次助勤一員 年給四俵〇上席

生五員 年給金三圓ツ、

學校經費 本藩學校ノ經費ハ金穀ヲ以テ定額ヲ立タルニアラス又學田學地ヲ附與セシニアラス聖堂校舍ハ皆藩費ヲ以テ築造シ家屋ノ壞頽窓席ノ破損ニ至ルマテ官府其節ニ命シテ之ヲ修補セシム米噲薪炭油燭紙筆ノ類日用飲食一切ノ具皆現品ヲ以テ之ヲ下附シ書籍書函ヲ始メ館中需用ノ器臨時政府へ申請シテ購求ヲ乞ヒ草取り雪除キヲ始メ都テ人夫ノ入用モ臨時ニ作事屋役場ノ人夫郡割役場定價屋渡ノ人夫ヲ乞テ之ヲ使役ス督學神保容助ハ三百七十五石タリ總監ハ貳百五十石提學ハ百貳拾五石ヨリ貳百石ニ至リ助教ハ百石タリト雖モ皆其定祿ヲ増加スルモノニシテ學校ノ金穀ヨリ之ヲ支給スルニアラス一ケ年手當金都講典籍ハ貳圓諸生ハ壹圓ナリ主事讀長ヲ置タル時ハ蓋シ都典ト同一手當タリ後ニ讀長ヲ助教同秩ト爲セリ掌事ハ筆墨代一ケ年四百文ニシテ無手當ナルヘシ三ケ年滿期ニ至リ酒三升ヲ賜テ之ヲ賞ス助讀ヲ置タル時ハ年ニ壹兩貳分ツ、ヲ給ス員數増減アレハ隨テ給金ニ増減ヲ生ス上坐生ヲ置キタル時ハ一ケ年ニ貳分ツ、ヲ給ス上席生ヲ置タル時ハ無給ニシテ年末酒三升ヲ賜テ之ヲ勞フ主財ハ兩人アリ始ハ玄米五俵^{四斗五升}後ハ四俵ツ、ト定ム定秩一人扶持ニ四石ニ充タサル者此役ニ任スレハ増加シテ一人扶持ニ四石ト爲ス友于堂習書掛ハ一ケ年勤務ノ賞トシテ酒三升鹽鮒一尺ツ、ヲ賜フ仕付方ハ月ニ三度ノ出勤ニシテ初年ニハ每度午餉并ニ茶酒ヲ賜フ後ニハ平生午餉ト茶ノミニシテ年ノ初末ニ酒ヲ賜フ釋菜試業本支公ノ臨校等ニ須要ノ器物ヨリ飲食酒肴ニ至ルマテ皆其筋ヨリ現品ヲ送致ス諸生寄塾生ノ詩會ハ初ハ每會酒ヲ賜フ後ニハ年ノ初末ノミニ之ヲ賜フ年始開講ニハ初ハ定詰生并ニ日通生一統ヘ酒ヲ賜フ後ニ日通生ハ出精ノ者ノミニ之ヲ賜フ總監提學以下ノ教官及ヒ事務司ニ至ルマテ精勤ノ者ハ臨時金或ハ物ヲ賜テ之ヲ賞ス諸生寄塾生日通生ト雖モ亦然リ日通生試驗了レハ諸生寄塾生ニ宴ヲ賜テ之ヲ勞フ草取り松採リ隱書等學校ノコヲ助クルコアレハ兩生共臨時慰勞ノ酒ヲ賜フ八月十五夜及ヒ冬至ノ日ハ兩生ニ宴ヲ賜フヲ恒トス諸遊學ノ士モ或ハ酒宴ヲ賜フコアリ或ハ茶菓ニ止ルアリ或ハ旅店宿泊中宿泊料ヲ賜フコアリ其藩其人ニヨリテ同カラス凡ソ役料手當ノ類大抵政府ノ措置ニシテ賞賜慰勞其他賜與ニ屬スル金穀物品皆其局ヨリ送致ス學校中ノ金穀ニ關係スルモノニアラス定詰生ニ賜フ賄料モ凶荒或ハ大儉等ニテ節減ヲ爲スコアリ之ニ加フルコ古今諸生寄塾生ヲ増減スルコアリ童生通學生モ時ニ隨テ多寡ヲ生シ物價ノ高低モ亦歲月ヲ追テ變ス故ニ學校經費モ年毎ニ多少ノ差アルヲ免レス舊藩ノ時ハ諸局諸司ヲ綜括シテ年々學事ニ屬スル金穀ノ概額ヲ成算セシモノアルヘシト雖モ廢藩ノ今日ニ至リテハ帳簿散逸シテ之ヲ詳悉スルコ能ハス僅ニ敗紙殘冊ノ中ヨリ數件ヲ左ニ拾輯シテ本校經費ノ要領ヲ摸想スルノ料ニ供ス

寛政二年三月先年屋代安右衛門相澤半兵衛相動候節御入料書定渡リ御用紙蠟燭共差出候様ニ付左ノ通

屋代相澤取量候平均 貳束五帖 上中折 壹束 並中折 壹帖 上筋引 貳帖 流返シ 拾三束 大津輕 三百挺

名ヨリ十名前後ニ至ル寛政五年五月寄宿生總數四十二名七月諸生二十名寄塾生二十名同十一年五十餘名アリ同十三年三十六名アリ爰ニ輓近ノ概數ヲ記スルナリ

明治二年學校再興ノ際從前ノ如ク諸生二十名寄塾生十名トス

通學生 千餘名 安永再興ノ際三四百名ニ過キス漸々増加シ八九百名乃至千餘名

明治四年九月大改革ノ後諸生二十員官費ヲ以テ之ヲ置ク寄塾生ハ之ヲ置カス 通學生三千五百餘名

四民一途ノ教育ヲ立テ且五郷校ヲ設クルヲ以テ生徒頓ニ増加ス

東脩謝儀 諸生寄熟生通學生ヲ問ハス入學ノ時扇子一箱ヲ束脩ト爲シ麻上下ニテ先生ニ謁見ス提學以上二人アレハ一人

毎ニ一箱ヲ呈ス且通學生ハ盡ク諸生ノ扱トナラサルヲ得ス諸生ノ内通學生各自望ム所ノ人ニ依頼ス初メテ之ニ謁スル

ヤ繼肩衣ヲ着ス大抵扇子一箱ヲ贈ルヲ例トス

謝儀ハ諸生二十員ヨリ歳末ノ祝儀トシテ二先生ヘ袴地二反安永五年或ハ白木綿二反慶政二年二反二代或ハ縞木綿二反同三代
貳貫貳百六十文貳貫貳百七十文寺ニ懸シテ之ヲ是

十五或ハ目録同五年兩先生或ハ上中折貳拾帖同十一年〇代三三拾帖享和二年〇代豐三拾五帖同四年〇代傳
文同三年三百足ツ、或ハ二拾貳帖寶曆貳年六百元貳貳帖寶曆七年七十元時ニ應シテ之ヲ呈

贈ス但文化十一年日記ニ例年三拾五帖ノ處當年ハ大儉ニ付減シテ貳拾五帖ト爲スト記セリ享和ノ間讀長一名助讀入

名ヲ置キ本生二十九名ニ至ルト雖厄祝儀ハ例年ノ格ニ據リテ別ニ増ス所ナシ

寄塾生上座生ヨリ二先生へ小津輕拾束 寛政十一年〇拾束代壹貫六百
或ハ拾貳束 享和二年〇拾束代壹貫三百八拾文
或ハ拾三束 百三拾文人員貳拾八人ヨリ

時ニ應シテ増減アリト雖モ大抵此ノ如シ
寛政二年〇四尺代九百六十文諸生二千名寄塾
或ハ二尺寛政三年〇又文化十二年〇

年頭ノ祝儀ハ諸生寄塾生上席生ヨリ二先生へ塩鯉四尺寛政二年〇四尺代九百六十文諸生二十名寄塾生八名ヨリ之ヲ贈ル同五年モ亦四尺ヲ贈レリ或ハ二尺寛政三年〇四尺代九百六十文諸生二十名寄塾生八名ヨリ之ヲ贈ル記ニ諸生二十九名寄塾生十

七名上坐生十名ヨ二尺ヲ呈贈ス中古以降ハ貳尺ヲ以テ定式ト爲ス
之ヲ贈ル代價七百八十支

通學生徒ハ別ニ二先生ニ謝儀ヲ爲サス其扱主ヘハ各自多少ノ謝儀ヲ爲ス定例アルニアラス

督學總監提學ノ内致仕セル者アレハ老先生ト稱ス老先生ヘ諸生寄塾生ヨリ樽酒五升ヲ贈リ歲末ヲ祝シ鰻二連ヲ贈リ年

頭ヲ賀ス

歲末年頭諸生以下物品ヲ敎官ニ贈ルヲ祝儀ト云ト雖凡其實ハ謝儀ナリ

明治五年ヨリ改定左ノ如シ

歳末ノ祝儀 先生へ錫貳連、都講ヨリ日通生マテ但両先生ノ時ハ一連ツ、

年頭ノ祝儀 先生へ扇子貳双、都講ヨリ日通生マテ但兩先生ノ時ハ一双ツ、

拾四時ニテ如上

右平均 壹目八分八厘 寛政二年一時ニ付如上

右之通ニ御坐候尤過不及無之定法相立可申様無御坐候且同九年迄五ヶ年平平均壹時ニ付割合御書渡左ノ通

一貳目六厘四毛三六 一時ニ付如上

右之通ニ御坐候以上(寛政三八月廿四日)

御役所

吉田作彌、綿貫忠左衛門

寛政五年六月分御賄御入料御試調ニ付中勘書上候様御達ニ付左ノ通

覺

一三千百二十賄 御賄數

一九貫八百九拾八文 御野案代、一賄ニ付三文壹分七厘貳毛四

一三拾壹貫三百九拾目 味噌、一賄ニ付拾目六毛餘

一四石九斗三升七合 白米、一賄ニ付壹合五夕八才二三

一六貫七拾目 水油

右之通中勘書上申候(七月八日主財兩人)

學館薪五ヶ年分平均之覺

一五拾貳尋五分 寛政六年正月ヨリ十二月迄燒方如上但御賄高三万五千六百五拾七賄割壹賄ニ付壹毛四チン七二

三六一ニ當ル

一六拾貳尋五分 同七年分右同斷三万八千百三拾貳賄ニ割壹賄ニ付壹毛六チン三九〇四三餘

一五拾六尋五分 同八年分右同斷四万八千三百七拾賄ニ割壹賄ニ付壹毛四チン六七八五一九餘

一七拾壹尋 同九年分右同斷四万八千三百七拾賄ニ割壹賄ニ付壹毛四チン六七八五壹九餘

一六拾壹尋五分 同十年分右同斷四万六千七百七拾賄ニ割壹賄ニ付壹毛三チン壹六七壹九壹餘

一三四尋 五ヶ年分燒方如上右御賄貳拾壹万貳百七拾六賄ニ割壹賄ニ付壹毛四チン四五五七三六三餘ニ當ル

右之通五ヶ年平均書上申候以上(寛政十一五月十日主財兩人)

(壹尋ハ長サ貳尺八九寸ノ丸木ヲ幅五尺高六尺ニ積タルヲ云フ)

蠟燭 右ハ先生御分〇貳束五帖 中折 貳束五帖 漣返シ 六束 大津輕 六拾挺 蠟燭 右ハ御役場分

寛政二年三月本年賄料其外諸入料左ノ通御金藏へ差出ス

一一ヶ月分貳拾貫百四十八文

當年三月中人頭 二人先生 二十人諸生 八人自分入料生 二人御役方 三人番人 三人下男 〆三拾八人

寛政二年十月主財役場伺書

賄之儀先年ハ一ヶ年貳万少シ餘ニ候處當年ハ諸生和附益最早貳万五千位取量候

學館御賄御野菜代割左ノ通

一八拾八貫六百七拾九文 寛政二年正月ヨリ同九月迄御野菜買入代如上

御賄數左ノ通

一壹万九千九百三拾六賄 寛政二年正月ヨリ同九月迄御賄數如上

右御野菜買入代高御賄數高ニ割左ノ通

一四文四分四厘八毛餘 一ト御賄ニ付如上

寛政元年九月九日ヨリ同十二月迄御算用仕上候寫

一貳拾九貫三百貳拾五文 御野菜買入代如上

一四文三分七厘一毛餘 御野菜買入代御賄數六千六百八拾九賄ニ割リ壹賄分當リ如上

寛政元年九月ヨリ同二年八月迄一ヶ年見合テ割合左ノ通

一百拾八貫文 寛政元年分御野菜買入代貳拾九貫三百二十五文同二年分八拾八貫六百七拾九文両口合如上

一貳万六千六百貳拾五賄 寛政元年分御賄高六千六百八拾九賄同二年分壹万九千九百三拾六賄取合如上

右御賄數ニ割左ノ通

一四文四分三厘貳毛餘 平均一賄如上

右之通ニ御坐候以上(寛政二十一月綿貫忠左衛門、堀幾助)

學校寛政二年分水油入用高取調左之通

覺

一五拾九貫貳百拾文 寛政二年分水油總入高但學館中諸生三時燈分又ハ有朋又一時燈所々出入差引三万四千四百九

覺

一九拾俵位 嘉永六年十月ヨリ同七年九月迄 右ハ學館諸生飯米中勘書上申候以上(嘉永六十一月柳澤利兵衛、渡部角左衛門)(此時寄塾生ヲ廢ス一俵ハ玄米四斗五升)

學館用紙

覺

一大津輕六折拾六枚 上中折三帖拾六枚 右ハ釋奠分先例之通

一大津輕一束 中中折五帖 漉返シ三帖 右ハ試業分新例 帳立卷立數通相調候ニ付

右之通御渡被下度候以上(寛政十一七月)

覺

一上中折 壹帖 中中折 五帖

右之通試業ハ被爲成候ニ付御渡被下度候以上(寛政十一八月八日)

此外通常ノ用紙ハ寛政二年三月書上ニ詳ナリ上文ニ記載セリ

諸生手當金受取定例及變例

學校定詰諸生定法御手當金受取申事

一金貳拾貳兩 諸生二十人御手當金但干坂與市西堀源藏二兩ツ、殘十八人一兩ツ、如上

右之通受取申處實正也(安永七年六月)

神保容助、片山紀兵衛

御金藏

覺

學館定詰諸生中ハ御擬之儀此度改テ初入之者ハ壹兩翌年ヨリ半減之御擬ニ被仰付候然ル處初入之者ニ季渡ニテハ何分繰合照敷候間初入之者ハ二季分一同御渡被成下度奉存候以上(寛政三年七月五日)

神保容助、片山紀兵衛

御役所

當年ハ御金不足ニ付此度先ツ四半減渡被仰付左ノ通

覺

學館主財へ

右ハ學館薪壹賄ニ付壹毛四チン餘或ハ壹毛三チン餘ニ相當段申出候處自今壹賄ニ付壹毛貳チンニテ御間合候様可被
相量候事但壹賄ニ付壹毛貳チンノ内餘リ候ハ、可被成下候尤薪ニテ被成下候テハ如何ニ付薪代ニテ可被成下候間可
被書出候

一八チン 四月ヨリ九月迄夏但千貳百五拾賄壹尋ニ當ル

一壹毛六チン 十月ヨリ三月迄冬但六百貳拾五賄壹尋ニ當ル

右之通可被相心得候事(寛政十一六月廿三日)

寛政十二年分學館定法諸品諸役場ヨリ受取申分書上之覺

一七拾八石八斗三合 御賄四万七千四百拾一賄分御入高如上但壹賄ニ付テ白米壹合六夕六才二二四八餘ニ當ル但
年並ニヨリ過不及御坐候 玄米ニ直シ八拾六石六升壹合五才 右ハ鍛冶町御藏ヨリ受取申候

一四九拾九貫八百七拾目 味噌右同斷拾目五分四厘三毛三三三餘ニ當ル但年々過不及御坐候 右ハ御臺所ヨリ請
取申候

一七拾五尋六分 薪右同斷壹毛四チン八九一〇五九餘ニ當ル外不時燒分三尋但御代拂壹貫四百五拾文直但年々過不
及御坐候 右ハ西木場ヨリ受取申候

一百貳拾壹貫三百拾七目 水油六万六千九拾九時御入高如上但一時ニ付壹文目八分三厘五毛三八三二餘ニ當ル但同
斷 右ハ御臺所ヨリ受取申候

一三千八百七拾九貫七目 燒炭入方其年並之寒暖ニヨリ定法ハ無御坐候 右ハ炭御藏ヨリ受取申候
一三束 定法紙 並中折 三束 同 漉返シ 八束 同 大津輕 右ハ紙御藏ヨリ受取申候

一百九拾挺 蠟燭定法山二八文目掛 百四拾四挺 同五文目掛 右ハ蠟御藏ヨリ受取申候

一八俵 糠 御菜園畑分其外下敷共ニ年々受取申候 右ハ御郡割所ヨリ受取申候

一貳把 下々苧 御代拂ニテ年々受取申候 右ハ青苧御藏ヨリ受取申候

一四拾四人 郡割所人足但諸生御手傳掃除無之時ハ入方多分御坐候テ相定不申候 右ハ郡割所ヨリ受取申候
右之外臨時ニ申立請取申諸品ハ書上不申候以上(享和元八月晦日長澤幾四郎、渡部角左衛門)

米三斗 小豆六升 大粟三拾 榛五合但榛無之年ハ榧相備申候 梨子三十但無之年ハ串柿相用申候 稗五合 粟五合 大串貝十五 氷コン十五 肌好芋五位 右三行和羹ニ相用候品 生肴八、外餘計五 右ハ八九寸位之鯛鱸ノ類ニテ但時節ニヨリ無之節ハ鹽肴相用 鴨カ鳴カノ内一 神酒三升 沈香三兩目 昆布貳把 鰯百枚 蠟燭拾文目掛拾挺 同五文目掛拾挺 中折四帖 大津輕一束 杉原三拾枚 筋引一帖 水引三把 酒八十盃 大ザル一 中ザル一 大柄杓一 小柄杓二 五升桶一 シギ二把 磨キ箸十膳 箸二把 吳麻八合 筵二枚 杓子一本 木綿手拭一筋、右手洗手拭 布三尺、右ハ聖堂并祭器ノ雜巾ニ相用 鰻節三本 草履三足 鹽鮭一尺 右釋菜ニ付年々取揃候品ニ御座候代付之儀ハ年並ニヨリ過不及御坐候間難相記候得共取配申處ハ五貫文餘ノ取備ニ候儀ニ御座候

右之通御坐候以上(三月廿六日)

此後藩主釋菜ヲ執行スト雖此例ニ據レリ米澤從前鯉魚ナシ藩主治憲始テ鯉魚ヲ養シヨリ藩内ニ蕃殖ス因テ近世ハ生肴ハ常ニ鯉魚ヲ用フ聖堂獻備ノ品ハ神厨所アリ神厨司之ヲ調理スルヲ以テ諸局ヨリ皆現品ヲ給ス諸局又便宜ヲ以テ主財役場ニテ諸品ヲ購求セシメ代價ヲ以テ給付スルヲアリ

寛政三年二月聖堂御用ニ付御日小屋ヨリ受取申事

四十四挺 白拾文目掛蠟燭〇九挺 白二拾目掛蠟燭〇三拾挺 山二八文目掛蠟燭〇四兩目 沈香〇五把 金銀水

引〇三合 稗〇三合 粟〇五合 榛〇十五 炭團

寛政十年分聖堂御備蠟燭并十一年二月釋菜御備分請受左ノ通

二拾二挺 聖堂御備蠟燭白拾文目掛正月元日七月七日三月三日ハ三度分釋菜分拾挺取合如上〇四挺 白拾文目掛

釋菜分下同シ 〇三拾挺 山二八文目掛〇壹兩目 沈香〇三把 白紺水引〇三合 稗〇五合 榛〇三合 粟

文化二年八月釋菜ニ付 一兩目 沈香〇四挺 白二拾目掛蠟燭〇拾挺 拾文目掛〇三拾挺 山二八文目掛〇三把

白紺水引〇四尺 上布 右ハ御日小屋ヨリ受取〇燭 小豆 鰯 昆布 氷コン 肌好芋 少コン 右ハ御臺所ヨ

リ受取

文化三年二月釋菜ニ付御臺所ヨリ左ノ通相送ル

昆布一把半 肌好芋 氷コン十枚 申貝八御臺所ヨリ御備ノ鮮鯛鱸市中無之由申出ニ付御品替申遣ス

壹羽 雁但鮮魚ノ替 十尾 鮮但五寸以上申刺ハ不相成候 若シ無之候ハ、小鴨十但小鴨モ無之候ハ、ツレ鴨ニテモ

一三兩壹分貳朱 廣居滿吉松木次郎作壹分ツ、外十八人内初入ニ付市川文左衛門外四人ハ壹分ツ、残り十三人ハ貳朱ッ、ニテ如上

覺

一六百元 右ハ學館友于堂是迄筆墨代御渡無御坐候處以來當直所並御渡被下度旨申立之通相濟候事(寛政十一年六月)

寛政十二年正月友于堂分御渡

一五拾挺 山二八文目蠟燭

覺

登坂孫助、本田彌七郎、湯野川文三郎、安田但馬

右ハ友于堂年々御渡之蠟燭五十挺之定法之處一昨年改革以來彼是繁多相成其上年々試業之節不時入方不少候ニ付以來改テ五拾挺増一ケ年百挺ッ、御渡被成下度由伺之通相濟候間如前々可被相量候以上(文化二年九月)

御役所

蠟御藏

友于堂習書試業入料

覺

船本藤右衛門、渡部角左衛門

右ハ友于堂習書試業ニ付差出候上中折六帖代七百貳拾文其外諸入料引足シ拾七貫三百四拾三文不時御入料ニ取量候儀伺之通相濟候事(文化八年四月御役所)

聖堂釋菜及佳節ノ献備 釋菜ノ日上坐生將命寔供勤務ノ友于堂生普請方御幕役等ニ三時ノ賄ヲ賜フ釋菜了テ督學ヨリ番人迄赤飯及酒ヲ賜フ本日賄ヲ賜フ者ニモ亦之ヲ賜フ即日或ハ翌日諸生寄塾生ニ膳肉ヲ賜フ

安永五年學校再興ノ際儒者片山紀兵衛ニ命シテ是迄自分入料ヲ以テ釋菜執行セシ入料ヲ書出サシム左ニ録ス

自分入料ヲ以テ釋菜執行入用高付

七器五組 土器拾三釋菜ニ付テ入用御坐候處損シ候テ十位ニ相成候得者申立相渡四五位年々取替申事ニ候 赤飯

一鳥目五百文ツ、

學館下男 四人

右ハ新塾御取開大勢ニ相成何彼心遣相増其上畑物之手入致シ太儀ニ付右之通被成下(文化四十二月)
覺

八町左登馬

右ハ夫陣下男給錢是迄一ヶ年給錢定法八貫六百文ニテ召抱候處近年一統給錢引揚右直段ニテ可相抱樣無之ニ付以來給錢四貫文増拾貳貫六百文被成下度旨申立之處四人ハ四人ナカラ上人ヲ揃候ニモ相及間敷依之一人ニ付貳貫文増被成下候間拾貫六百文ニテ間ニ合候樣被仰付候事(文化五十二月)

他藩遊歷生 遊歷生ノ手當異同アリ重キ例一二ヲ左ニ掲ク
寛政二年七月十八日上野人高山彦九郎來館酒飯ヲ賜フ諸生一統會宴明日神保片山阿提學同人ヲ輪王寺ニ招テ之ヲ饗ス自分進物ノ唱ヲ以テ拾一ツヲ贈ル此品ハ日小屋役場ヨリ受取レリ

文化九年五月紀州儒者川合新五郎米澤城下止宿督學問訊ノ儀モアリ逗留中旅籠料三百疋ヲ賜フ
同年十一月肥後生來ル旅籠料貳分貳朱五百三拾六文ヲ賜フ

通學生賞賜

文化二年十月晦日御賞 御樽三升ツ、 拔群生三十九人 格別進業生二十人 〆五十九人〇御酒被成下御吸物御肴二種 進

業生二十二人〇同 御肴二種 出精生五十人〇同 同 手習試業清書被成下分六人

同三年拔群生御樽五升鰯二連ツ、ト爲シ格別進業生御樽三升ツ、トス其他ハ昨年ノ如シ

諸生及ヒ通學生ノ試業中臨席ノ吏員ニ賄ヲ賜ヒ且試業日慰勞酒ヲ賜フ一二其例ヲ舉ク文化二年十月廿三日明半時御供揃屋形樣若殿樣五時過御入試業被爲開幕半時御歸殿

右ニ付御賄左ノ通

御家老二人 御中老一人 御小姓頭一人 御傳役一人 御本城御先番御小姓御醫者御茶道共六人 三之丸御先番御小姓御醫者共三人 御仲之間茶道御普請方共六人 定詰生三十六人 上坐生十人 將命二人 御役場下男迄十二人 〆八十人 右之外御小姓頭 御仲間年寄 三之丸御用人 兩御手明二人 兩御小者二人 御泊一人 御膳部下遣共三人 警固二人 〆十三人 合九十三人

朝午兩度差出ス試業中同斷試業夜ニ至レハ夕飯ヲ賜フ(中古以後臨試ノ吏員自分辨當ト爲ス供奉ノ輩ハ從前ノ如

前々ノ通督學諸生中主財御番人迄御赤飯御肴二種ニテ御酒被成下御酒赤飯ハ御臺所仕出シ同所役人出勤之ヲ取量
フ

文政四年聖堂分請取申事

三拾六挺 蠟燭十文目掛但元日七種上已端午七夕重陽冬至節分除夜ベ九度〇六百五拾目 樟腦〇四挺 蠟燭白貳
拾目掛〇拾挺 同拾文目掛〇三拾挺 山二八文目〇三把 白紺水引〇一兩目 沈香〇一ツ 五德〇一ツ 陶〇二
本 杓子〇一ツ 十能〇一挺 庖丁〇一ツ 片口〇八尺 木棉根緒〇十 鐵土器〇壹丈七尺 上布〇壹丈 中布
〇一丈 下布

文化二年八月釋菜ニ付御賄差出候面々左ノ通

朝 先生諸生四十九人御役場三人御普請方二人御番人八人外上座生將命下男共總計七十二人内外上座生朝不參〇

午右之外ニ外上座生四人御幕役才領共四人御仲之間茶道御掃除共四人御臺所四人警固三人取合八十七人〇夜

朝ト同斷 輒近友子堂生無欠出精進業ノ者ニ命シテ諸生ト共ニ聖堂ニ奠
供セシム大抵十人前後トス此生モ亦三時ヲ賄及赤飯酒ヲ賜フ

寛政二年三月釋奠翌日膳肉御啓神酒殘ヘ御臺所ヨリ引足酒壹斗相廻ル

寛政五年八月釋奠翌日膳肉頂戴膳吸物ニシテ出ス御臺所ヨリ四十八盃相廻ル

正月元日神酒燈明鏡餅ヲ供ス 正月七日七三月三日七已五月五日端七月七日七九月九日重八月朔日及冬至除夜ニ神酒燈

明ヲ供ス三月三日餅ヲ加ヘ五月五日笹卷ヲ加ヘ六月朔日ハ氷雪ノミヲ供ス

寛政十一年五月五日ヨリ餅笹卷等ヲ廢シ佳節ニハ都テ燈明神酒ノミヲ供スル事ト爲ス正月元日六月朔日ハ従前ノ通

ナリ節分ハ佳節ノ献供ヘ鹽鰯ヲ加ヘテ犧献ト爲ス

寛政三年五月五日神酒前々五升ツ、ノ處此度ノ儀ハ貳升御廻相成候ニ付殘酒頂戴無之前々ノ通笹卷計一ツ、先生諸

生ヘ分配ス

寶政五年三月三日聖堂餅御備ニ付白米三升神酒三升白拾文目蠟燭四挺御臺所ヨリ請取 五箇朔日等ノ神酒後
年二升ツ、ト定ム

文化二年十二月廿七日神酒六升御臺所ヨリ廻ス但除夜元旦七種分 此比ハ已ニ貳升
ツ、ト爲セリ

下男ノ給料 下男四人給錢一ヶ年定法八貫六百文ツ、ナリ文化五年ヨリ一人ニ付貳貫文増トス又毎年十二月手當トシ

テ錢五百文ツ、ヲ與フ文政十三年ヨリ好生堂小遣ヲ兼スルヲ以テ一ヶ年玄米一俵ツ、ヲ加賜ス

覺

付手折所ニテ三畝位御渡被下度由申立之通主水町御屋敷畑之内三畝位御渡相濟候間蠶桑方へ引合受取可申事(文
化三十月)

〔轡例〕寛政三年正月伺

先達テ御藏元御究迫ニ付御役場向御賄ヲ初メ萬御入料相減取計可申旨被仰付候ニ付別紙中勘積ヲ以テ申上候早速
御下知被成下度候以上

正月

綿貫忠左衛門、堀幾助

御賄中勘積リ

朝夕

漬物類ニシテ
代三文兩度分

夜

干物カ
平大根カ
豆腐カ代三文 但一品盛

二度分七文懸ニシテ一日分如上

御賄肴ノ儀ハ五節句三朔日ヲ入レテ月ニ六度ツ、

一千子
鹽引ノ類壹度分六文位ニシテ 右代一日平均ニシテ七文九分

風呂ハ月ニ三度ツ、(寛政二年十月六日居風呂以來一六被仰付旨都講之ヲ達ス是ニ於テ半減トス)

寛政三年三月達

覺

學館御役方

此度料紙御渡方之儀是迄定法御渡之内三ヶ一減ニ相成候間役場諸書物ヲ始公邊へ差出候書物ニ至マテ相成丈ヶ細
字ニ致シ尤行間逼ク相認右御渡通ヲ以急度問ヲ合可申候

是迄杉原筋引ヨリ段々御渡之定法有之處向後ハ段ヲ下ヶ譬ハ筋引用候處へ上中折上中折用候處へ並中折用候様此
度御渡方相定候間右之通相心得不足等不相立様可被相心得候事(寛政三三月十二日)

文化十二年二月達

是迄年々御渡之紙蠟燭之中三ヶ年八ヶ一引御渡之筈依之右ヲ以間ヲ合候様可心得候事

天保十一年十二月達

御大儉中紙蠟燭五ヶ一減之處八ヶ一御渡之方相成候事(或ハ三ヶ年間三分一ヲ減シ又五ヶ一八ヶ一大儉ノ輕重ヲ
以テ等差ヲ立ルヲ常トス)

寛政三年十一月伺

シ)

十月晦日試業濟ニ付御歸殿後御酒被成下

御家老二 御中老 侍頭四人 御小姓頭一人 御傳役 督學 宰配頭三人 諸生 掌事 上座生 將命 主財

御普請方 御仲之間茶道 加用五人

御臺所役場ヨリ役人三名出勤之ヲ取量フ

學館附屬桑畑 文化四年中成田村修驗行藏院及佐々木義藏發議ヲ以テ官ノ許可ヲ得有志數名協力寺泉村官林ヲ開拓シ桑田五町七反歩ヲ得タリ此產出金ヲ以テ學校ノ入料ニ備フ但熟地ヨリ二十ヶ年ノ後ハ地方ヲ官ニ返附スルモノトス同五年主財船本藤右衛門桑田ノ地ニ引越勤ヲ命セラル同九年ヨリ寺泉村成田村農民八名ニ委任シテ桑葉代價ノ内半額ヲ與ヘテ取扱ハセクリ同十年當年ヨリ末貳拾年間運上一ヶ年三拾貫文ト定ム同十一年桑田ヲ調査シ熟地四町貳反七畝二十三歩更ニ寺泉村農民四名ニ委任シテ此後十九年間一ヶ年運上四拾貫文ト定ム天保十四年九月已ニ二十ヶ年ニ至レルヲ以テ地方ヲ官ニ返付スヘキノ期ナリ然レモ桑田熟地ニ至ラサルヲ以テ此度無年限ニシテ御渡下サレ度旨村方ヨリ出願ス官之ヲ許可ス然モ此末七ヶ年限熟地ニ至ラサレハ地方ヲ官ニ收ムヘキ旨ヲ命ス且運上錢八ヶ年休ニシテ九ヶ年目ヨリ上納センコトヲ出願ス官之ヲ許サス六ヶ年目ヨリ貳拾貫文ツ、納付セシム又是迄不納ノ分三百貫文七年半年賦ニシテ四拾貫文ツ、ノ徵收ヲ乞フ官之ヲ許可セリ弘化元年ヨリ運上錢三年休弘化四年ヨリ一ヶ年拾三貫文ツ、納付シ明治二年迄年々之ヲ納ム

學館御用錢 御用錢ハ蓋シ有志者數名金若干ヲ學校ニ納付シテ校費ヲ補助セシモノナリ學校此金ヲ勘定方ニ所謂御金藏依托シテ年五分ノ利ヲ附ス年々五拾貫文ヲ得テ校費及ヒ書籍購求ノ資トス

嘉永以降御用錢トシテ學校ニテ勘定方ヨリ受取ルコト多シ年々多寡同カラスト雖モ安政文久ノ間ハ七月二百貫文十一月五拾貫文十二月二百八十貫文ヲ以テ例ト爲スモノ、如シ野菜等ノ費用ニ充ツ蓋シ數年ナラスシテ子母ヲ合テ消費セリ

學校附屬菜園

覺

林元右衛門、船本藤右衛門、渡部角左衛門

右ハ學校境內之畑計ニテハ元來菜園物不足之處此度御文庫御建替ニ付地形土右畑ヨリ穿取候得者尙以相迫リ候ニ

燒炭

覺

右者興讓館御渡之炭十月朔日より翌年二月中迄定例之處當年試業十月と句被仰出諸生中自未明深更迄出精候へハ此間朝夕之冷氣難堪迷惑之由申立候ニ付試業格別之儀ヲ以テ當時ヨリ御渡被成下方相濟候間如前々可被相量候以上(文化二九月)

登坂孫助、本田彌七郎、湯野川文三郎、安田但馬

御役所

炭御藏

覺

柳澤利兵衛、渡部角左衛門

右ハ學館燒炭御渡高二千九百六十四貫百三拾目之内堅炭分百六拾八貫目引殘二千七百九十六貫百三拾目十月ヨリ翌二月迄五ヶ月割一ヶ月分五百五十九貫二百二十六文目壬正月分御渡被成下度由申立候處三步二百七十二貫八百目御渡之筈ニ相濟候間如前々可被相渡候以上(文政五壬正月廿七日)

御役所

炭御藏

覺

柳澤利兵衛、渡部角左衛門

右ハ學館燒炭文化十一年ヨリ文政二年迄御人少以來六ヶ年平均ニテ二千九百六十四貫百三十目分代御試查被仰付當年迄三ヶ年取量候處炭直段引上候ニ付御任高之内取合拾貳貫八百九十六文拂過相成申候御用錢拂ニ被成下度由申立之通隨テ當十月ヨリ三ヶ年以前之通正炭ニテ御渡被成下度由申立候處右平均貫目直納正炭ニテ御渡末三ヶ年御試查被仰付候尤過ニ行廻候分ハ返納不足相成候ハ、引足ヲモ可被成下候間誠情相盡御無益無之様可取量候事(文政六七月)

寄塾生ノ入料

覺

覺

一壹東六帖三十二枚上中折 六帖三十二枚中折 三十二枚筋引 壹帖十二枚漣返シ 八東二十七枚大津輕
右ハ寛政三年分御濟口可被下候以上

寛政三十一年一月廿七日

片山紀兵衛、神保容助

(是ハ二ヶ一減ナリ)

一壹東六帖三十二枚並中折但定法之内
三ヶ一減

同上漣返シ但同斷

四東大津輕

寛政三十一年一月廿七日

學館御役場

文化十一年用紙受取

文化十一年分學館御用紙請取之事

一三東五帖 並中折定法四東之内八ヶ一五帖引ニテ如上

一一東六帖二枚 上中折定法一東八帖十六枚之内八ヶ一貳帖十四枚引ニテ如上

一二四東四十四枚 大津輕定法二十七東百三十六枚八ヶ一三東九十二枚引ニテ如上

一一帖三十六枚 漣返シ定法二帖之内八ヶ一拾貳枚引ニテ如上

右之通受取申處相違無御坐候以上(是ハ學校入用ノ分ナリ)

掌事某

紙御藏

覺

一二東六帖十二枚 並中折定法三東之内八ヶ一引ニテ如上

同 漣返シ前同斷

七東 大津輕定法八東之内

八ヶ一引ニテ如上(是ハ主財役場入用ノ分ナリ)

一一東三拾二枚 並中折 三東百四拾六枚大津輕

二帖 漣返シ(是ハ試業ニ付入用ノ分ナリ)

右之通受取申處相違無御坐候以上(文化十一年十二月)

船本藤右衛門、渡部角左衛門

紙御藏

蠟燭ヲ受取モ皆此例ニ異ナラス

學館

右ハ定法渡之水油一ケ年分五拾八貫目之處御省略ニ付以來二分引之御渡相濟候事(七月廿五日)

好生堂 好生堂モ須要ノ器物其屬司ヨリ授付スルヲ學校ニ異ナラス吏員ハ學館主財之ヲ兼ヌ別ニ給料ヲ附セス小遣モ亦學館下男之ヲ兼務ス文化四年筆墨代ハ一ケ年六百元ト定ム同五年用紙ハ並中折壹東大津輕壹東ト定ム燒炭定法ナシト雖モ每年貳拾六七貫目ヨリ八九貫目ト爲ス

教員給料ナシ歲末酒ヲ賜テ之ヲ勞フ其數大抵十七名トス

明治戊辰ノ亂ニ際シ學校ヲ中止ス二年正月學校ヲ再興ス都テ從前ノ例ニ據レリ好生堂モ亦然リ三年十一月習字算術ノ教員ヲ命ス四年外國語學校ヲ設ケ語學教師三名ヲ東京ヨリ聘シ二月開業ス語學子弟ニ手當金拾圓ツ、ヲ給ス九月大ニ學校ヲ改正シ學體ヲ分テ五科トス醫科其一ニ居リ好生堂自ラ廢ス又五鄉校ヲ設ケ鄉村ノ子弟ニ教フ此秋英人達刺斯氏ヲ聘シテ教師トス此時ニ當リ縣廳謂フ維新ノ際文學ニアラサレハ身ヲ立國ニ報ユル所ナシト是ヲ以テ大ニ學務ヲ率勵シ諸局百司ヲ廢シタル剩餘ノ物品或ハ地所建物山林原野ニ至ル迄之ヲ人民ニ拂下タル分悉ク之ヲ學校ニ附與シ文部省モ亦達刺斯氏ノ給料三ケ年間三千圓ツ、ヲ下賜セラレシヲ以テ學校一時ニ擴張シ一ケ年教員ノ給料壹万五六拾圓事務司ノ給料五百圓前後^{教員及ヒ事務司ノ給料支米ヲ以テ支給セシアリ今當時ノ米價チロテ之ヲ算セリ}其他雜費書籍購求費四千圓且舊藩士二人校費ヲ以テ東京ニ遊學セシムルニ至レリ其後縣廳ノ制度確立シ官金ヲ以テ學校ニ支給スルヲ能ハサルヲ以テ五年五月學校ヲ改正シ米澤廳下ニ四小校ヲ設ケ童生ヲ教授セシム東提學校西提學校松岬學校花溪學校ト云フ每校ニ本校ヨリ金三百圓ツ、ヲ送附シ資金ト爲シ其餘ハ町村協議費及ヒ月謝金等ヲ以テ之ヲ維持セシム五鄉校モ亦然リ而シテ達刺斯氏ノ住宅ト本校ノ講堂及ヒ教官ノ塾ヲ存シテ洋學ノ教授場トシ又友于堂ヲ存シテ中年以上ノ者ニ漢學ヲ教授セシム因テ事務員ヲ改任シ其俸給ヲ減シ洋學規則ヲ改正シ語學生徒ニ支給スル手當金ヲ止メ皇洋定詰生ヲ廢シ本校不用ノ屋舎ヲ破毀ス此月縣令本田親雄赴任ス七月又五科ノ教授ヲ廢シ更ニ之ヲ命シ釐革スル所アリ十月文部省ノ命ヲ奉シテ本校ヲ廢ス

藩主臨校 學校中與ノ際藩主數々臨校シテ講義ヲ聽聞ス蓋シ衆庶ヲ率勵セント欲スルナリ後來ニ至リテハ一ケ年ニ兩三回臨校アリト雖モ定規アルニアラス江戸へ發駕スルニ先タツ一二ケ月ノ中江戸ヨリ歸藩スル後一二ケ月ノ中ニハ必ス臨校シテ聖堂ニ拜禮シ講義ヲ聽聞ス世子及ヒ支侯モ亦然リ庶公子ノ如キハ數々入校シテ講義ヲ聽聞シ且諸生寄塾生或ハ友于堂生ノ課業ニ臨ムヲアリ

試業ハ諸生寄塾生及ヒ日通生朝素讀生共ニ必ス之ニ臨ム江戸在府ノ時ハ家老以下ノ臨席ニ止リ或ハ世子庶公子若クハ

片山紀兵衛、神保容助

右ハ學館生舊ニ御復被成候處自分入料生之儀諸品時相場ヲ以御取立相成多分之引違ニ相成自然ト自分生相絶候様ニ相成因之以前之通入料定法直段ヲ以御取立被成下度由伺之通相濟候事但寛政元年ヨリ本文之通ニ候事(寛政三

三月十七日御役所)

學館主財文久初年自分入料生賄代ヲ勘定方へ納メタル記アリ元年ニハ七月十二月三拾五貫文ツ、ヲ納ム同二年ハ七月四拾貫文十二日ニ拾貫文ヲ納ム此時寒熟生十人ナレハ蓋シ一人一ケ年ノ入費七貫文ヲ以テ定法直段ト爲スナリ

寛政三年三月達

覺

諸生中

一御酒之儀以來正月八日十二月廿日兩度之外被成下間敷候尤釋菜之儀ハ格別之事候但間講之節是迄日通生總体ニ被成下來候處明春ヨリ入精之者ニ計項戴被仰付筈

一學館搦之内々暮等隙ニ何モ申合掃除致候儀面々之保養旁御頼可被遊候事

一諸生交代之節書上之儀以來學頭書籍方ニテ氣付之生格封ニテ両提學手元へ可被差出候則印府ノ儘ニテ差上候筈

ニ候事

一講堂以下窓障子御手傳反古紙塾々ハ自分反古相用候儀何モへ御頼被仰付候事

一炭油之儀是迄ハ遣放ニ候處以來積リ渡ニ相濟候間宜役方へ引合不自由無之様定法ヲ以受取可被相用候事

一御賄之儀ハ以來朝粥夜食ハ香物計ニテ可被成下候事

右之通痛入被思召候得共此御時節之儀何モ宜敷談合館中一統心得ヲ以テ長ク廢失無之様被仰出候尙又御評判之上取量方之内追々被仰付ケ條モ可有之候間何モ其旨ヲ可被存候事

同年五月四日先生達

先達テ朝粥被仰付取量申處五月節句之儀ハ何レ朝カユニテ可然哉相伺候處天明四年中モ右之通ニ候處其節朔日十五日廿八日五節句三朔日ハ朝粥延引ニ致候乍去此度之儀ハ別段ニ候間五節句三朔日計朝御飯取計可申事

寛政三年水油濟口

覺

所役場ヨリ之ヲ送致ス

藩主退校ノ節柳聲ヲ起シ及ヒ之ヲ送ルヲ來校ノ時ノ如シ但藩主來ル方ヲ以テ首ト爲スヲ以テ送迎列席ノ順ヲ異ニス
家老退校ノ節督學以下助教讀長迄鎗掛下都講典籍ハ板樣當直ハ當直所ニ於テ之ヲ送ル 夜輓ハ戌ノ半刻トス 講
義ヲ聽聞スル時ハ藩主御成席ニ坐ス御成席ト講堂ノ間中襖戸之ヲ闔ツ 講義ヲ始ムルハ當直柳聲ヲ起ス 家老中老
以下吏員御成席ノ域外即チ講堂ニ坐ス講堂ノ中御成席ヨリ三四疊ヲ隔テ都講典籍諸生以下友于堂生館外聽聞生ニ至
ルマテ並列シテ坐ス是ニ於テ當直講義者ヲ導テ中襖戸外ニ至ル講義者ハ常ニ督學ヨリ助教迄一月六回繰廻シニ之ヲ
勤ムルヲ以テ藩主入校ノ日モ此日講義スヘキ順次ニ當ル者之ヲ講義ス講義者繼肩衣ヲ着スルヲ平日ノ講義ノ時ノ如
シ講義者中襖戸外ニ着坐スレハ近習起テ襖戸ヲ開ク滿堂皆俯伏ス近習頭命ヲ講義者ニ傳ヘテ藩主ノ席ニ入ラシム講
義者藩主ノ席ニ入レハ又見臺ヲ許スノ命ヲ傳フ講義者藩主ニ對シテ講義ス藩主柳下テ聽聞ス 講義了レハ講義者
御成席ヲ退ク是ニ於テ近習起テ襖戸ヲ闔ツ滿堂ノ聽聞生末坐ヨリ順次退去ス

藩主臨時ニ臨校スルヲアレハ家老江戶家老中老近習頭及ヒ中之間年寄ノ内一兩人侍列スルヲ恒トス 藩主臨校スレ
ハ歸城ノ後督學以下諸生寄塾生ヘ酒ヲ賜フモ亦恒例ト爲スカ如シ 講義聽聞了テ諸生寄塾生ノ日課ニ臨ミ或ハ詩文
ノ宿題ヲ賜フヲアリ日課ニ臨ム時ハ諸生寄塾生食堂ニ於テ紙闔ヲ以テ本日ノ當讀ヲ定メ日課ノ柳聲ヲ期トシ講堂ノ
左右ニ列席ス是ニ於テ御成席ノ中襖戸ヲ開キ日課ヲ始ム日課了レハ襖戸闔テ而シテ列席ノ諸生以下退去ス講義ノ時
ニ異ナルヲナシ

世子ノ臨校藩主ノ式ニ異ナルヲナシ但酒ヲ賜フヲ支侯ノ例ノ如シ 支侯モ亦一ケ年兩三回臨校シテ講義ヲ聽聞シ或
ハ諸生寄塾生ノ日課及ヒ會讀ニ臨ミ且詩文ノ宿題ヲ賜フヲアリ 支侯ノ臨校御成門ヨリ入レハ御成席ニ坐セス二ノ
間ニ坐ス用ハ小姓ノ輩講堂疊椽ニ侍ス試業講義日課會讀ハ支侯講堂ニ出ツ其他ハ大抵藩主臨校ノ禮ノ如シ支侯亦歸
殿後酒ヲ督學以下諸生寄塾生ニ賜フ或ハ支侯其宴ニ臨ムヲアリ或ハ督學以下助教等ヘ樽酒ヲ賜ヒ諸生以下ヘモ酒ヲ
賜フヲアリ或ハ督學以下助教等ヘノミ樽酒ヲ賜ヒ督學ヨリ宴ヲ設テ其酒ヲ諸生寄塾生ニ賜フヲアリ 藩主ノ庶公子
及ヒ支侯ノ公子臨校ノ式大抵皆支侯ノ如シ 藩主及ヒ世子試業講義聽聞共ニ文臺ヲ用フ庶公子及ヒ支侯試業講義聽
聞ハ漆板ヲ用フ但日課會讀ニ臨ム時ノミ文臺ヲ用フ 藩主及ヒ世子支侯臨校スレハ退校ノ後督學或ハ總監提學牙城
或ハ支侯ノ邸ニ詣リ異條ナク歸城或ハ歸邸セシヲ賀ス

學校構造及ヒ建物圖面 學校再興以來學事ヲ改革スルヲ數回沿革要畧ノ項ニ詳ナリ此改革毎ニ學校モ亦多少改造シテ規

支侯臨席スルヲアリ或ハ秀逸ノ者ヲ撰拔シテ特ニ之ニ臨ムヲアリ且臨校シテ臨試スルヲアリ或ハ牙城ニ召シテ臨試スルヲアリ皆時ノ宜ニ從フナリ試驗法ノ項ニ詳ナリ今其事實概狀ヲ左ニ叙ス

學校當直臨校ノ日ニハ二人ヲ加ヘテ三人トス使令モ亦二人ヲ加ヘテ三人トス 諸生以下卯ノ刻起揃順次入浴ス 朝飯卯ノ半刻 早朝下僕ニ命シテ御成門及ヒ玄關ヲ掃除セシム 御成席上段以下當直ノ者使令士ヲ指揮シテ洒掃セシム 鎗掛下板椽鏡板友于堂入口廊下板椽下僕ヲ指揮シテ洒掃セシム 講堂椽通ノ杉戸講堂及ヒ當直所ノ戸障子之ヲ開ク 御成席上段ト二之間中襖戸二間共ニ之ヲ開ク二之間ト講堂ノ間中襖戸一間之ヲ闔ツ

床 掛物、立花、置鬘斗(三方載) 刀掛之ヲ毛氈ノ上ニ置ク 文臺之ヲ備フ 煙草盆之ヲ備フ 家老江戸家老中老近習頭仲之間年寄側役來校スレハ提學塾へ案内ス 先番近習來校スレハ御成席二之間へ案内ス

供列ノ者詰所 大小姓、中之間詰 内三番塾○先立、手明、小遣 寄宿舎階子際○小道具 鏡板○中之間茶道、膳部 椰子之間○掃除坊主、泊役名 椰子之間○小者 使令士番所 右ハ席札ヲ貼出シ番士ヲ以テ案内セシム 供列ノ者食堂南椽ヨリ入ル椽下ニ於テ洗足ス

本日ハ學校通融門ノ往來之ヲ禁シ單ニ友于堂通融門ヨリ往來セシム 友于堂通融門ト御成門トノ間ニ幔ヲ引キ之ヲ玄關ニ達シ藩主ノ通融ト他人往來ノ途ヲ劃ス 聖堂中門及ヒ文庫ノ側ニ幔ヲ張り御成席庭外ニモ亦之ヲ張ル外人ノ戲視ヲ防クナリ 五ツ時前番士一人牙城ニ伺候セシメ藩主ノ供揃ヲ學校ニ報告セシム 供揃ノ報告ヲ得レハ當直之ヲ督學以下諸生寄塾生へ報知ス 遠見トシテ附ケ人ヲ學校ヨリ一二町先キへ遣ス下僕ニ命シテ之ヲ勤メシム 藩主ノ鹵簿ヲ見レハ附ケ人馳テ之ヲ報知ス當直又之ヲ督學以下ニ通知ス 主財下僕ヲ率テ御成門ニ扣居リ附ケ人ノ報知ヲ得レハ下僕ニ命シテ門扉ヲ開シム 先遣ノ者玄關前ニ來リ藩主御成ト呼ハレハ當直柳聲ヲ起シ館中ニ通知ス 督學以下助教迄玄關鏡板ニ出テ之ヲ迎フ都講典籍以下諸生寄塾生鎗掛下ニ列シ之ヲ迎フ當直ハ當直所ニ在リ主財ハ御成門内ニ於テ之ヲ迎フ 中古以前ハ督學以下送迎ノ者皆麻上下ヲ着ス文化七年十一月試業へ世子臨校ノ時ヨリ伺ノ上ニ平服ト定ム但鹵簿正儀ヲ用フル時ハ麻上下ヲ着ス 家老以下吏員講堂疊椽ニ於テ之ヲ迎フ 鹵簿ノ鎗ハ主財之ヲ受ケ鎗掛ニ掛ケ長柄傘以下ハ番士之ヲ受ク薙刀ハ茶道御成席ニ之ヲ入ル近習ノ輩ハ二之間ニ侍ス

試業ヲ始ムルキ柳聲ヲ起ス 家老以下吏員督學以下教員講堂左右ニ列坐ス 受験人諸生寄塾生通學生ヲ論セス侍組三手扶持方ヲ問ハス皆刀ヲ佩テ席ニ昇ルヲ禁ス但高家ノ者ノミ試驗席ニ於テ佩刀ヲ脱ス諸生寄塾生ハ其身分ヲ以テ試驗席ヲ異ニセス通學生ハ身分ヲ以テ其席ヲ異ニスルヲ總テ試驗法ノ項ニ記スルカ如シ 藩主ノ飲食茶菓皆牙城臺

可大者致大成可小者致小成各盡其材候樣教育肝要候都テ孝悌忠信ニテ藝能有之者國家之寶候條不違御趣意樣助教輩エモ申達可及訓導事

一少年輩肄業之次第肝要ニ候得者諸生之學力時々助教輩與及評議會業等相極教育之序不亂樣可致事

一不達詩文之業者章句之學ニテ難明經義等云也和人轉倒之讀候得者其弊最甚由詩文之法モ不一樣故學之天性得手不得手有之由得與遂評議性質所近致成就候樣可及訓導事

一諸生之學經書之類者細密ニテ百家之類者大略候得者寡見疎略之弊自然鮮與云也其天性ニ依リ長短出候者格別教授之偏ヨリ敝不出樣時々諸生之學間助教輩相尋可及評議事

一若助教輩各所好ヲ以一概之教諭有之諸生之業ニ差障可申ト存候儀有之節者祭酒司業遂評議一再申論不相用候者總奉行祭酒ヘ可申聞事

一諸生之中東漢以下之書讀申度ト相望輩有之節得與衆評之上相許可申事

一學校中詩文之作追テ御用之儀モ可有之間他邦エ示候テモ可宜哉ト遂評議候分者逐々爲書留冊ニ致置可申事

右之條々御趣意之大畧可達置旨被仰出候(文化二年丑二月)

學監

一學校中不法之輩有之候者同役評議之上惣奉行ヘ可申聞候總テ學校中御締道不宜儀有之勝手目付役ヨリ申出候者是亦可爲同樣事

一學校エ罷出候諸士之内格別御用ニ可相立哉ト見受候人物有之節者副奉行祭酒遂相談同存候ハ、封書御近習頭取迄差出可達尊聽事

右之條々可申達旨被仰出候(文化二年丑二月)

助教、典學兼助教

一今度學校被仰出候御趣意之儀ハ祭酒司業申達候條寄々奉承知万端祭酒司業エ遂相談相勤可申事

一不論諸生之長短訓導悖天性候時者其敝甚敷由詩文之業者勿論諸會讀等之儀祭酒司業エ遂相談會業相始可申事

一御給人以下好學之者學校勝手通ニ罷出度旨相望候者評議之上相許可申候若秀才拔群者有之候者祭酒司業エ申聞可及訓導事

一典學之輩御書物之儀司書エ立會相勤可申候取扱之儀委曲司書エ申達候條寄々承堅相守可申事

模ヲ變更セシメアリ元治元年ニ至リ細工町學校焼亡シテ主水町ニ新築ス舊校ト大同小異ナリ試驗法藩主臨校祭儀等ノ項細工町學校ニ於テ舊來行ヘル所ノ者ニ就テ叙セルアリ此圖面建坪ハ主水町學校輓近ノ概略ヲ記スルナリ

平屋作り萱葺○建坪 聖堂板椽共九坪外ニ階三坪 學校三百四十八坪 好生堂二十九坪五合 文庫板椽共ニ十七坪五合 小屋十九坪二合五 先生役家三十八坪五合○地坪九千九百四十五坪五合 宅地ハ本五千五百四十九坪一合ニシテ宅地ノ東北二面ハ米澤城第三郭ノ堤及ヒ溝タリ城郭廢毀地所拂下ノ際學校ニテ買受ケタルヲ以テ此草地四千三百九十六坪四合ヲ合セテ學校ノ地坪トナリタルナリ○圖面ハ別ニ之ヲ記ス

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ藏書ノ種類部數 學校ニテ出版翻刻セシ書籍ナシ藏書ノ種類部數ハ左ノ如シ

經部百五十六部 史部七十部 子部二百六十九部 集部墨帖共百九十部 和部二百四十九部 洋書六百十部 翻譯書二百九十四部 醫部七十二部 釋部二十六部

家塾寺子屋取調要領 家塾寺子屋ハ人民ノ自由ニ任セ寺院或ハ修驗等ニテ教授セリ村落邊隅微々タル業ニテ庭訓農業諸往來今川腰越諸狀ヲ教フルニ過キス習字モ亦各自ノ得ル所ヲ以テ草字ヲ兒童ニ習ハシムルノミ授業ノ順序學習年限等ノ規程アルニアラス米澤及ヒ繁華ノ市村家塾ノ如キ者ナキニアラスト雖モ或ハ習書或ハ儒書ノ素讀或ハ數術少數ノ子弟ヲ教授スルニ止マリ寺子屋ニ均シキ者ニシテ記載スルニ足ルモノナシ舊幕領地内モ亦然リ

舊莊內藩

學制

學事上ノ諸制度

藩主達ノ條々

祭酒、司業

一今度以思召學校被仰付候者諸士之輩孝悌者勿論文武之業相勸國家之御用ニ相立候人物退々出候様被遊度御趣意之事

一當時文武之官不相分如古代ニ候得者文武兼備勿論之事ニ候得共天性得手不得手有之者ニ候其人所長致成就候様常ニ遂評議可及訓導事

一明經術正其身通古今達人情知時務如斯人物者誠國家之大寶候得共兼備之大儒者容易ニ不出者之由時々遂評議天性

銀二枚ヲ賜ハリ猶又修學セシム九年ヲ三考トス是ヲ學就ルト云フ是ニ於テ直取嫡子ハ銀三枚ヲ賜ハリ各其器ニ隨テ官ニ任用セラル

政教一致ノ趣意ヲ以テ藩主在府中ハ學校エ二日置ノ會日相立家老并諸役人相會シ政務ヲ理ス

毎月八日ヲ以テ會日ト定メ副奉行并祭酒司業其他役員皆會シ學事ヲ議ス畢レハ則詩書等ヲ講讀シ經書ノ訓點ヲ訂正ス士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ子弟入學望ノ者ハ各自ノ意ニ任セ入學ヲ許ス卒ノ子弟好學ノ者勝手通ニ罷出讀書致度旨相望ム者ハ評議之上之ヲ許ス若秀才拔群之者ハ祭酒司業エ申述訓導スルモノトス 學校エ入學不致藩士ニテモ望ノ者ハ生徒ト共ニ講義聽聞ハ勿論會業等エモ出ツルヲ許ス 他邦エ游學ヲ乞フ者ハ評議ノ上藩費ヲ以テ遊學スルヲ許ス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ專ラ筆道ヲ修學セシノミ藩立學校エ入學スルヲ許サス又農民等學事ニ從事スルヲ禁止セス村落ハ多ク寺院ニ於テ筆道ヲ習フ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スル者ハ他ノ檢束ヲ受クルヲナク何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得

學校

校名 致道館ト稱ス

校舍所在地 初鶴岡御持筒町ニ設立ス今ノ寶町後二ノ曲輪馬場町十日町口ニ移轉ス

沿革要畧 學校ヲ御持筒町エ創立スルハ文化元年酒井左衛門尉忠徳ノ時代ナリ馬場町エ移轉ハ文化九年酒井左衛門尉忠

器ノ時代ナリ

學校設立ニ盡力セシ者舊藩士白井重行ト言フ字子德東月ト號ス彌太夫ト稱ス少シテ英敏學ヲ好ム舊藩士加賀山衛士電猛字秀相桃李ト號スニ從

學ス衛士曾テ言フ藩ノ學此人ニ依テ興ルヘシト深ク徂徠ノ學ヲ慕ヒ江戶ニ遊學ス是時ニ當リ親ク業ヲ徂徠ノ門ニ受ク

ル者皆歿ス僅ニ春臺觀海ノ門人在ルノミ皆交ヲ納レ博ク護園ノ遺訓ヲ求ム歸テ郡代ノ職ヲ命セラル藩主忠徳儒學ヲ尊

崇シ時々彌太夫ヲ召シテ經義ヲ講論セシム曾テ風俗ノ鄙陋ヲ憂一日之ヲ彌太夫ニ詢ル答フルニ事倉卒ニハ行ハル可カ

ラス迂遠ニ似タリト雖風俗ヲ移易スルハ學校ノ教ニ如ク者無シ且善ナル者長スレハ惡ナル者自ラ消スルノ意ヲ以テ

ス藩主深ク之ヲ嘉納ス竟ニ學校ヲ創立シ彌太夫ヲ以テ祭酒トナシ專ラ教育ヲ司ラシム尋テ中老ニ擢テラレ加判ノ列ニ

加ハリ學校惣奉行ヲ兼テシメ祭酒元ノ如シ凡國ノ大事必ス彌太夫ニ諮詢ス既ニ顯職ニ在テ公務多端ナリト雖時ニ机ニ

一以別紙被仰出候學校中諸法度若相犯候輩有之候者典學之輩一再心付不相用候者學監エ可申聞事

一學校中取締方之儀典學之輩萬事用心可申候尤勝手向御地盤之儀崩ニ不至様勝手役人共へ時々遂差圖可致節儉事

一總テ臨時入用之儀者祭酒司業エ申聞取計可申事

學校令條

一於學校樂器之外鳴物制禁之事

一碁將碁之類下々ニ至迄制禁之事

一平生會飲酒制禁之事但格別之譯有之節者祭酒司業可及沙汰事尤藥物同様相用候輩夜中獨飲酒不苦事

一講堂中烟草制禁之事但格別之譯有之節者祭酒司業可及沙汰事

一學業之儀雖及論說至爭論休間敷事

一學校拜見相願候者有之節猥ニ不可許事

一學校エ罷出候輩雖爲少年不行儀有之間敷事

一學校中席順以年齡相定不可亂事但學校御役人ハ格別之事

右之條々堅可相守者也(二月)

學校御役人

一御家中之子弟二三男詩文章之業モ出來候ハ、一段之儀ニ被思召候得共是ハ其才性ニモ寄可申哉第一ハ行跡ヲ慎ミ

武道ヲ勵ミ人倫ヲ正シ篤實ヲ專ニシ自然ト淳朴之古風ニ復シ治乱共ニ御用立候儀ニ教育致候様被遊度御趣意之事

(文化九年申四月)

幼年之生徒朝句讀ヲ受ル者一ケ年皆席三八ノ日ヲスレハ紅白扇子青三本ヲ賜ヒ之ヲ獎勵ス句讀并筆道ヲ習フ者一ケ年皆席

スレハ休業日前褒賞トシテ詩經正文禮記正文ノ類一部三ケ年ノ者エハ左氏傳戰國策ノ類一部ヲ賜フ外舍生格別出精ノ者

エハ日々晝賄ヲ賜フ拔羣勉強秀才ノ者ハ進メテ試舍生トス勤學一兩年彌學業上進ノ者ハ是ヲ舍生ニ揚ケ晝夜修學セシ

ム舍生エ由渡サ直取ハ五節句朔望ノ登城並城中交番江戸遠近登ヲ免セラレ嫡子ハ五節句朔望ノ登城並鷹野列卒ヲ免セラ

ル

舍生ハ三年ヲ一考ト爲シ學業特達ノ者ハ銀一枚ヲ賜ハリテ是ヲ獎勵シ猶又修學ヲ命ス六年ヲ二考トス學業上達スレハ

更ニ又試舍生申付ル二年期月モ同様ナリ三年期月ニ至リ學業尙上達セサル者試舍生ヲ免ス但一舍ニ一人ヲ置ク
試舍生ハ明六ツ半時罷出七ツ半時可致歸宅候舍中罷在候節之業ハ本舍生同様タルヘシ候尤舍生同様留宿致度存候面
々者可爲勝手次第事

一舍生ハ一切ノ公務ヲ免シ晝夜文武ノ業相勵ミ國家之用ニ相立候人物養生スル處ニシテ藩ニ於テ尤鄭重ニ教育スルモ
ノナリ

一武藝ハ師範者各自ノ宅ニ道場之レ有ト雖モ學校ニモ日限アリテ師範者昇校シテ之ヲ教ユ尤舍生ハ其主ニシテ校中ノ
諸生ハ勿論ノ者ト雖モ皆來習ス

一舍長一人舍長立會一人ヲ置ク助教中才德アル者ヲ撰テ之ニ充ツ

舍生ニ達シ書左之通 明ケ六ツ時ノ板木打候者即刻起候テ夫々支度致シ夫々ノ業或ハ武藝或ハ會讀等可任其好事 明
ケ六ツ半時并九ツ半時ノ板木ニテ不殘相集可致食事候畢テ各其舍ニ罷歸夫々ノ業可勤事 七ツ時ヨリ後ハ明六ツ半
時前同様可相心得事 暮六ツ時之板木ニテ會食致シ畢テ夫々ノ業可相勤事 夜四時ノ板木ニテ一統事業ヲ相止可致
休息候若仕懸候事有之候テ卒業致度候節ハ九ツ時迄聽之九ツ過八ツ時ニ至リ候事ハ不聽之増テ曉ニ至候事ハ決テ不
聽之 舍生日々ノ業自身大抵記置可申事 折々兩舍長出席舍生不殘相會事業講習可致事 毎月六度宛親子兄弟爲對
面可致歸宅候勿論私宅ニ泊候モ又罷出候共可爲勝手次第候六度之外若不叶用事有之節ハ格別其餘安ニ不聽出入事但
不叶用事ニテ致他出候節ハ勿論定式之出入タリ共舍長ニ相斷可申事附家内或ハ近親類等大病人有之節ハ致看病者不
足カ或ハ無心許存候テ爲看病附居候儀非制限事

舍長ヘ達シ條 起居刻限等可爲舍生同様事 舍生之業日々見聞致折々廻視ヲモ致シ猶又勸勉ヲ加エ可申事 附舍生日
々之業記置可申事 折々舍生ヲ相會シ事業ヲ講習シ精不精等能々糾置可申事 兩舍長申合片時モ闕席無之樣可相心
得事 舍生ニ被仰出候條々堅心得居可申事

教科書 經書 易、書經、詩經、春秋、禮記、周禮、儀禮、論語、歷史、諸子、老子、管子、晏子、莊子、列子、孟子、荀子、韓非子、
呂子、淮南子之類 詩文兵書等各自其長スル所ヲ以テ學フ

學科學規試驗法及ヒ諸則

一皇學、漢學、兵學、弓、馬、槍、劍、柔術

一文武兩道ヲ兼習セシムト雖モ文學ト武術ト程度ノ比例之レアルニアラス但武術ノ流儀種々別アリ各自ノ好ニ任ス

據テ經史ヲ繙閱シ餘裕アルカ如シト云フ文化八年故アリテ職ヲ免ス凡職ニ在リテ善政美跡盡ク枚舉ニ遑アラヌ著ス所周易解及ヒ詩文集アリ 其後舊藩士犬塚男内秀實字武仲東海ト號ス白井彌平重勝字任卿西郭ト號ス菅宗藏基字孝伯五老ト號ス坂尾六郎清風字稗卿觀水ト號ス相續テ起リ專ラ教育ヲ司ル經書等ノ註解及ヒ詩文ノ遺稿アリ舊藩積學ノ者皆其門ニ出テ相續テ教育ヲ司トル御維新學制頒布ニ因リ廢校ニ至ル

教則

一句讀所ハ幼年子弟ヲ教育スル所ナリ朝五ツ時ヨリ經書ノ句讀素讀ヲ授ケ畢テ暫時遊息ス四ツ時ヨリ習字九ツ時ヨリ食事且遊息ス九ツ半時ヨリ復習八ツ時退校ス各舍毎ニ句讀師一人ツ、臨席シテ素讀ヲ授ケ其順序ハ孝經論語詩經書經禮記大學中庸易皆一定ノ訓點アリ生徒ノ席順ハ書籍卒業ノ多少ヲ以テ之ヲ定ム正月四月七月十月四度尤句讀所ニ西ノ間中間東ノ間北ノ間ノ大教場四舍アリ其中北ノ間皆素讀卒業生ニシテ史記漢書ノ類ヲ習讀ス其内學業上達ノ者句讀師評議ノ上祭酒司業ニ申出祭酒司業學監評議ノ上副奉行ニ經伺ノ上之ヲ終日詰ニ進ム

一終日詰生修業時間ハ朝五ツ時ヨリ昇校シ七ツ時退校ス讀書詩文ノ作各自ノ意ニ任ス尤道藝ノ中ニ優息シ自然材德ヲ養生スルヲ趣旨トスルヲ以テ細密ノ規則ヲ設テ之ヲ檢束セス 教科書ハ左傳、國語、戰國策、史記、西漢書、唐詩選、唐詩正聲、唐詩品彙ノ類詩文ハ毎月若干首ヲ課ス專ラ會讀詩文ヲ以テ教育ス生徒各自ニ帳簿ヲ製シ日々ノ出入並ニ事業ヲ詳記シ月末ニ至リ詩文ノ作ト共ニ之ヲ其掛リ職員ニ出ス翌月朔日司業學監具ニ之ヲ檢閱ス之ヲ業改ト稱ス四時ノ孟月朔日ニハ副奉行登校シテ檢閱ス終日詰掛ハ二人或ハ三人ヲ置ク助教ヨリ之ヲ兼專ラ生徒ノ授業出入等ヲ司ル終日詰生ノ内學業上達ノ者ハ之ヲ外舍ニ進ム其手續順序ハ句讀所ヨリ終日詰ヘ進ムルカ如シ

一外舍生修業時間總テ終日詰ニ同シ但一舍ニ二人ヲ置ク晝夜勉強セントスル者ハ自費ヲ以テ止宿スルヲ聽ルス外舍長助教ヨリ之ヲ兼兩人或ハ三人ヲ置ク職務終日詰掛ニ同シ教科書左氏傳、國語、戰國策、史記、西漢書、老子、管子、晏子、莊子、孟子、荀子、韓

非子、淮南子等諸子ノ書文選、四家集、唐詩品彙、唐詩正聲、唐詩選、明七才子詩集、絕句解ノ類、詩經、書經等經書ノ類、會讀ヲ以テ之ヲ授ク一体ノ教育古文辭ヲ修シ要六經ヲ解スルニ在ルヲ以テ少年輩ニハ先ツ西漢以上ノ書左國史漢諸子ノ類ヲ循環無端習讀セシメ東漢以下ノ書ヲ讀ムヲ許サス詩文ノ業モ漢魏六朝唐明ノ詩文ヲ專ラ誦讀セシム 外舍生ノ内學業拔羣上達之者格別勉強出精之者人品篤實之者詩文之業格別上達之者右四ヶ條若クハ數條ニ適應スル者ハ外舍長ヨリ祭酒ニ申出祭酒司業學監評議ノ上副奉行惣奉行ヲ經由シ落生ニ達シ試舍生被申付

一試舍生 試舍生ハ申付ルノ試ミ生ニ付一年ヲ以テ期トス期月ニ至リ學業上達スル者ハ舍生申付學業未上達セサル者

一舍生試舍生不殘晝夜一人宛齡順ニ相勤舍中之常事承候事尤直日札舍外エ可懸置事但重立候儀者舍長立合ニテ書記候事

一朝舍御構内視廻リ不猥樣掃除番エ可申付尤月朔業改者勿論會讀之日モ爲念入候事

一諸向ヨリ御藏書并御武器等拜借之輩有之時ハ可承置事

一炭油諸品取寄セ候時見届印可致事

一賄札每度改可遣事但其日之出入糺置相違無之樣可致事尤翌日不出斷豫メ有之時者後之直日エ可申送事

一火災非常之節者當直エ立添舍内之諸事取計候事

一夜中中番泊リ之者出候節火之元改候樣可申付事

助教會數之定

助教本役三六采 同當分六采半 兼司業學監或ハ助教ヨリ兼ル者但舍生外舍生會業之外六采 助教ニテ典學舍長外

舍長終日詰掛ヲ兼ヌル者六采 句讀師ニテ助教ヲ兼ヌル者三采 舍生ニテ助教ヲ兼ヌル者六采半但助教當分ハ六

采

一校外ノ職員ヨリ助教ヲ兼ヌル者ハ事務ノ繁閑ニ因リ不拘定式之會數事

一會業新ニ立候節會業掛エ相斷可申事

一句讀師ヨリ諸生ノ會業申入有之候ハ、句讀所諸生素讀本卒業ノ者必
ス助教ノ會讀エ出候定ナリ助教會數不足ノ者エ會業相始候樣可申談事

一奇書之會業相始候節ハ其會頭ヨリ司業エ相談可致事

一初テ會業エ出候節ハ上下着用之事但外ニ會業エ出候事有之者肩衣ニテ不苦事

一正月會初上下着用之事但二月ヨリ出候ハ、肩衣ニテ不苦事

一社人町村醫會業エ出不苦事

一會業エ出席之小姓組小姓格手廻迄其内ニテ齡席相立候事士分ト給人トノ間ニ小姓組小姓格手廻等ノ
者アリ是皆士分ニ屬スト雖モ自ラ等級アリ

一學校中諸生ヲ五種ニ分ツ句讀所生終日詰生外舍生試舍生舍生

一舊藩立學校ハ士分以上ノ子弟ヲ教育スル處トス給人以下入學
スルヲ得ス

職名及俸祿

一生徒學習ノ期限十歳ヨリ入學ヲ許スト雖モ退學ノ期ヲ立ス

一春秋試験法ヲ設ケス毎月朔日司業學監昇校シテ舍生以下諸生ノ事業ヲ驗閱ス此日舍長外舍長終日詰掛句讀師各自其扱ノ帳簿詩文等ヲ指出ス

一正月十一日ヲ講初トス惣奉行副奉行始學職一同並ニ諸生不殘上下着用昇校ス前一ケ年ノ諸調帳簿等ヲ差出ス此日學務格別精勤之者エハ夫々褒賜アリ諸生拔群出精勉強進達ノ者亦賞セラル

一四月七月十月ノ三孟月ハ副奉行司業學監昇校シテ前三ケ月ノ事業ヲ檢閱ス且諸生ノ黜陟ヲ行フ

一生徒訓條罰則ヲ設ケス但罰スヘキ者アレハ臨時評議ノ上之ヲ處置ス退校及ヒ十日或ハ五日間登校ヲ禁スル等各差アリ

一許可ヲ得テ初テ入學スルモノ上下着用スルノミニシテ師範家エ回禮等ノ事ナシ但舍生申付ラレ候節直取嫡子ハ平服ニテ總奉行副奉行エ回禮二三男弟ハ父兄同前其身ハ副奉行エノミ罷出ツルモノトス

一締ノ爲典學句讀所舍生各一名宛其向ニ於テ輪番當直相勤ム勝手目附一人中番二人夜中輪番止宿掃除番二人晝夜詰切一門限ハ明六ツ時ニ開キ夕七ツ半時ニ閉ツ潜リ戸ノミ開置キ夜五ツ時潜リ戸ヲモ閉ツ門鍵ハ勝手目付典學當番エ納ム其出入有之節ハ典學エ申聞セ開閉スルモノトス夜四時ヨリハ一切出入ヲ許サス但己ムヲ得サル事故ニテ夜四時後出入ヲナサントスル者ハ典學ヨリ其趣書面ヲ以テ副奉行及ヒ學監ヘ斷ル

當直定

一舍長立合初メ舍生不殘晝夜一人宛齡順ニ相勤舍外諸事承リ並舍内御締等相糺候事尤當直札可懸置事但直日與一趣相當候時者不拘年齡前後當直之方先ツ相勤翌日可爲直日事

一直取嫡子當直之日恐悅等諸主ノ祝事回勤日チ云フ有之節者舍詰番屈書指出申候事但次三男詰合候節ハ番繰替致廻勤候事

一火災非常之節ハ居殘舍可相守事但居宅並親類等近火之折ハ賴合セ番更別段之事

一夜五ツ時過出入有之節翌朝典學詰番迄一通リ可斷事尙更四ツ時後ニ及候時ハ翌朝當直罷出候テ可斷事

一孟月業改之節番之者一人居殘候事

一幕時迄當夜之斷リ典學詰番エ札可遣事

一夜四ツ時後舍内火ノ元見廻候テ可休息事

直日定

藩主臨校 學校ハ文武兼修ヲ旨トスルヲ以テ構内ニ槍劍等ノ道場二棟及弓矢場馬埒等ヲ設ケ諸流ノ武藝ヲ練習セシム藩主在封ノ節ハ必ス臨校シテ諸士文武ノ業ヲ閱覽ス砲術ハ危險ナルヲ以テ校中ニ該演習場ノミ設ケス依テ舍生ト雖但藩主在府中ハ家老中老登校シテ文武ノ業ヲ檢閱ス藩主ノ在否ニ關セズ騎將ノ姓頭毎月十八日武藝諸流ノ稽古ニ宛輪次ニ内見ス文化三年藩主酒井左衛門尉忠器會讀之爲毎月日ヲ定メ參校アリ右會讀畢レハ直ニ武藝場ニ至リ武技ヲ習フヲ以テ常トス 文化四年學校養老堂ニ於テ初テ養老ノ禮ヲ行フ藩士七十歳以上之者皆饗ニ預ル學校職員ヲノ饗ヲ執ラシム舊記散亂シテ其式禮詳ナラス天保元年射術振興之爲學校地内ヘ下地ト唱フ折掛三間堂ニ御フチ新築シ同年十月藩士田邊龜次郎ニ於テ大矢數ヲ射ル者射初ノ式ヲ行フ其子富次郎弘化二年四月日矢數ヲ射ル藩主之ヲ臨覽ス 經書并ニ兵書講釋ノ節藩主時々臨聽ス

祭儀 春二月秋八月兩度釋菜ノ典ヲ舉行ス春ハ中丁ノ日ヲ用非事故アル時ハ上丁ヲ用フ秋ハ上丁ノ日ヲ用非事故アル時ハ中丁ヲ用フ

學校構造及建物坪數 繪圖而別ニアリ

學校地坪數二千八百六拾八坪三合二勺 同下地坪數千六百五拾五坪

學校ニテ出版セシ書籍 孝經正文 論語正文 詩經正文 書經正文 大學正文 中庸同 葬禮略 周易解

藏書種類部數 經ノ部百十五部 史ノ部六十四部 集部八十七部 類書部十七部 字書部三十部 子部五十部 叢類部

七部 雜部七十三部 兵書部三十八部 有職部三十一部 和史部六十八部 萬國部十三部 隨筆部廿四部 軍書部廿

七部 地理部五部 和歌部十二部 圖類三十二部

家塾寺子屋 學科用書等定ナシ專ラ筆道ヲ教フ故ニ手習所ト稱シ各自ノ意ニ任セ僅ニ商賣往來庭訓ノ類及經史ノ素讀句

讀ヲ授クルノミ且ツ藩ニ於テ一切檢束干預セス授業ノ順序學習年限束脩謝儀等總テ一定ナラス

江戸邸内 江戸邸内ニ學校ノ設ケナシ定府士族ノ中學力アル者ヲ以テ邸内ノ子弟ヲ訓導セシムルノミ

右舊學校舊記散亂シ今之ヲ收集スト雖モ盡ク之ヲ得ルヲ能ハサル者アリ其正確ナルモノ大畧ヲ記ス大抵舊藩學校ノ制規タル其詳密ナラス專ラ諸生ノ才德ヲ陶冶シ禮義廉耻ヲ教ユルヲ主トシ法則ヲ以テ之ヲ檢束セス且法ニ任セスシテ人ニ任スルノ本旨タリ若シ法ニ隱レテ陰匿ヲ爲ス者ノ如キハ當時ニアリテ人之レト齒セサルノ情况ナリ

舊新莊藩

學制

維新前		學制頒布前		維新前		學制頒布前	
總奉行	家老若クハ 中老ノ内	一名	大參事若クハ 權參事	句讀師	士分以上他官ヨ リ兼ヌルヲ得	九名	士族
副奉行	騎將若クハ 小姓頭ノ内	一名	少參事	司書	同前	二名	同前
祭酒	小姓頭以上其人物ナキハハ欠 ク釋菜ノ節司業ヘ代理ヲ命ス	一名	闕	勝手目付	徒以上	二名	同前
司業	行列以上他官ヨ リ兼ヌルヲ得	二名若クハ三名 無定員	士族	勘定役	組外	一名	同前
學監	行列以上他官ヨ リ兼ヌルヲ得	同前	給仕	徒以下足 輕組外等	四名	同前	同前
助教	士分以上他官ヨ リ兼ヌルヲ得	十四五名 無定員	中番	中間	五名	同前	同前
典學	同前	五名	同前	掃除番	平民	五名	平民

但御維新前ト學制頒布前ト両様ノ計査

右掃除番ヲ除クノ外皆常祿有ル者ヲ以テ之ニ充ツ別ニ役料扶持米等給與スルノ例ナシ但勤功アル者役料加増等ノ賞アリ

一司業小知ノ者助教典學句讀師司書等ハ爲手當年々白銀二枚ヨリ四枚ヲ給ス常祿ニ依テ
等差ヲナス

一勝手目付勘定役中番爲手當年々金壹兩ヨリ三兩貳步ヲ給ス職務ニ依
テ差アリ掃除番ハ年々米六俵ト金壹兩ヲ給ス右士分ト申ス
ハ藩ニ於テ知
分ノ中平士ト行列以上ノ別アリ三百石以上ノ者ヲ行列以上トス役席ニ於テモ奉行或ハ頭取等ノ一局ノ先ニ立ツ者ハ皆行列以上ニシテ夫々ノ區別アリ

職員概數 五十名餘但御維新前ト學制頒布前ト異ナルヲナシ
生徒概數 三百五十人位 無定數
内二十人位止宿生舍生試舍生十三人位
外舍生ノ内六七人位同三百三十人位通學生外舍生四十人餘終日諸生三十
人餘句讀所生二百五十人位但御維新

前ト學制頒布前ト異ナルヲナシ

束脩謝儀 幼年ノ者初テ入學スル者扇子ヲ以テ句讀師エ束脩ノ禮ヲ行フノミ外謝禮等ノ事ナシ

學校經費 一周年ノ學費米千俵四斗八升入ヲ以テ一切ノ費途ニ充ツ若餘剩アレハ之ヲ藩府ニ納ム

校舍所在地 天明中始メテ學校ヲ郭門外ニ營ム後文化年中燒失藩士戸澤大記屋敷内ニ設ク天保年中復燒失二ノ丸ニ遷ル
後安政五年城市中央ノ地ヲトシ大手門外ニ營ム後戊辰ノ兵燹ニ罹リシカ事平テ後復此地ニ營セリ

沿革要略 天明中藩主正誡始テ學校ヲ北郭門外ニ營ミ戸澤泰元ヲシテ幹トシ楠玄怡ニ命シ講師タラシム後正親ノ時ニ至

リ重臣漸ク飽暖ニ安シシ浮華安逸ヲ常トスルノ風ニ陷ルヲ憂ヘ國ノ重臣タルモノ取譯學ナカルヘカラスト重臣ニ令シ

テ嚴ニ學問ヲ勵マシム因テ世話役教授ト云フ役ヲ設ケ重臣嫡子及俊秀ノ生徒ヲシテ之ニ充テ重臣嫡子ヲシテ自然學問

ヲ勵マサルヲ得サラシム又執政北條良懿ニ命シ生徒ノ俊秀ナルモノヲ撰ヒ三浦貞寛ナルモノヲ卑賤ヨリ擧ケ翼師ノ門

ニ學ハシム學成リ新ニ祿ヲ給シ講師タラシメ且ツ大目付ノ職ヲ兼テシム尋テ正胤ノ時ニ至リ愈學事ニ心ヲ用井參府前

歸城後ニハ詩文題ヲ出シ或ハ生徒ヲ城中ニ召シ講義致サセ優等ノ者ヘ褒賞ヲ賜リ又教頭世話役迄慰勞賞賜等アリテ學

業ヲ勵マシムルヲ以テ此二主ノ代ニ於テハ學事最モ擴張セリ後安政五年藩主正實城市中央ノ地ヲトシ學校ヲ外大手門

外ニ營ミ寄宿生ヲ置キ費用ヲ給シ拔萃ノ徒ニ至テハ平民ト雖モ之ヲ許シ愈盛大ノ基礎ヲ建テシカ戊辰ノ兵燹ニ罹リ一

刺鳥有ニ屬セリ事平テ後復此地ニ營セシム然レモ舊時ノ如ク盛ナルニ至ラス

教則 別ニ一定ノ教則ナク用書ハ四書五經漢史ノ類ヲ以テシテ某日ハ某教頭某書ノ講議某日ハ某書ノ輪講會某日ハ詩文

會ト各相定メ總テ午後四時ヨリ始メ日暮ニ至テ終ル唯詩文會ノミ午後二時ヨリ始マルモノトス午前ニ於テハ寄宿生適

宜時間ヲ定メ輪講又ハ會讀等ヲナスト雖モ通學ノ壯年者ニ於テハ武藝場ニ入り武術ヲ學ヒ幼年者ハ家塾寺子屋ニ入り

素讀筆道ヲ學フヲ以テ常トス

學科學規試驗法及諸則 本校ニ於テハ漢學ノ一科ヲ專修セシム其四書ノ大意ニ通スルヲ以テ武術免許以上ニ當ルモノト

ナス生徒學習期限及生徒訓條罰則等ノ設ケナシ但入學許可ヲ得シキハ師範家ヘ回禮スルノ規アルノミ試驗ハ春秋二期

トナシ添頭用人臨席アリテ意義ニ通スルモノニ講義ヲ爲サシメ通セサルモノニハ素讀ヲ爲サシム賞品授與ノ如キハ數

年間中稀レニアルコアルノミ

職名及俸祿 學校係一名添頭ニ名或ハテ之ヲ兼教頭三名 世話役定員ナシ帳附二名總テ役料扶持米身分取扱等ノ件ナシ但嫡子次三男ニ

シテ教頭トナルモノハ費人口賄扶持手當金壹兩ヨリ三兩迄ノ間ヲ給ス維新後モ別ニ異ナルナシ

職員概數 教員拾人乃至拾五人事務委員貳人門衛壹人

生徒概數 通學生徒百人内外寄宿生徒定員ナシ其費用ハ總テ藩費ヲ以テス

束脩謝儀 別ニ束脩謝儀ヲ受ケス

學事上ノ諸制度 本藩學校ハ戊辰ノ兵燹ニ罹リ藏書諸記類悉皆烏有ニ屬シ藩主ノ布令諭達等ヲ調査スルニ由ナシト雖モ古老ノ口碑ニ傳ハル所ニ因レハ多クハ布令等ヲ發スルコトナク意ノアル所ハ學校係及頭等ニ傳ヘテ之カ執行注意等ヲ爲サシムルト云フ 藩主在城ノ年ハ正月十六日事始ト稱シ教師ヲ城中ニ召シ講義イタサセ藩主式服ニテ之ヲ聽キ講終リ客禮ヲ以テ之ヲ享シ眞綿ノ賜アリ 學校ヲ監督セシメンカ爲メ番頭中ニ命シ毎月六回講席ニ臨マシメ且ツ月番用人ヲシテ時々學校ニ臨ミ生徒ノ精不精ヲ察セシム 本藩ハ遠國ニアリテ書籍ニ乏シキヲ以テ每年金百兩ヲ學校ニ下附シ望ミノ者ヘ書名并ニ名面書出サセ學校ニ取纏メ東京ヨリ調渡シ代料ハ無利足年賦ヲ以テ取立テタリ故ニ大ニ書籍購求ノ便ヲ得タリ 學業上進ノ者ヲ獎勵スル一定ノ規アルニ非スト雖モ拔萃ノ者ハ次男三男ヲ問ハス賄扶持或ハ手當金ヲ賜リ或ハ役等申付ル事アリ本藩ニ於テ士ノ初メテ家督相續トナル無役ニシテ職掌ナシ其儻役ニ就カスシテ死スルハ祿三分一ヲ減スルノ成規ナルカ學業俊秀ニシテ世話役ニ擢擢セラル、モノハ役ニ就クモノト同シク其祿ヲ減スルヲナキヲ以テ士氣ヲシテ自ラ學問ニ傾向セシム

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ヲ教育スル必ス藩立學校ヘ入學セシメシニ非ス家塾寺子屋等ニテ修學スル總テ各自ノ意向ニ任セリ然レモ卒ノ子弟ニ至テハ寺子屋ニ於テ手跡ヲ學フノ外藩立學校家塾等ニテ修學スルモノ殆ント稀ナリ而シテ藩立學校ト家塾トニアルヲ問ハス學業優等ノ者ハ或ハ撰拔シテ他國ニ遊學セシメ又學業ノ優否ニ拘ハラズ遊學ヲ志願スルモノハ學資ノ幾分ヲ補助シテ之ヲ許可セリ藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聽聞セシムルノ制アラスト雖モ上士ノ者ハ公務ノ餘成ルヘク講義ヲ聽聞スヘキ旨常ニ内命アリタリ

平民ノ子弟教育方法 平民ノ子弟ト雖モ敢テ藩立學校ヘ入學スルヲ許可セサルニ非ス然レモ入學スルモノ極メテ稀レニ多クハ寺子屋ニ於テ手跡ヲ習フニ止ルノミ而シテ農民ニ至テハ豪農ノ子弟ニ非ルヨリハ寺子屋ニ於テ修學スルモノモ亦稀ナリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ハ何人タリトモ他ノ檢束ヲ受クルナク自由ニ開設スルヲ得然ルニ其家塾寺子屋ナルモノ全ク秩序ノ整ヒシモノニ非ス家塾ハ學校教頭及世話役等公務ノ餘有志子弟ニ素讀講義ヲ授クルニ止リ寺子屋ハ手本ヲ授ケ筆道ヲ學ハシムルニ止マルノミ

學校

江戸藩邸内ニハ
學校ノ建立ナシ

校名 明倫堂

沿革要略 本館即チ經誼館ノ創立ハ享和二年水野和泉守忠元ノ時代ニアリ之ヨリ先家臣吉松大助ニ命シ家塾ヲ開キ藩内ノ子弟ヲ教育セシム忠元藩校ノ起サ、ルヘカヲサルヲ覺リ一日文武偏廢ス可ヲサルノ令ヲ布キ遂ニ老臣水野三郎右衛門元彭ニ命シ學館ヲ起シ經誼館ト名ケ儒者小田切慵助ヲ聘シテ藩士ヲシテ人倫ノ道ヲ學ハシム是ニ於テカ文道始メテ駿々タリ天保十年水野越前守忠邦封ヲ遠州濱松ニ移サル、ヤ精ヲ文武ノ両道ニ勵シ家臣拜郷縫殿并吉松某ニ命シ大ニ學制ヲ改革シ兵學士野庸齊儒者并部万三郎井口丹助野村深藏小野澤澤藏等ヲ聘セルヲ以テ文武ノ道日々進ミ各藩仰テ泰斗トナスニ至ル然レモ封ヲ山形ニ移サル、ニ至リテハ亦天保年度ノ如キ盛ヲ見ス唯儒臣及ヒ教授役等ヲシテ子弟ヲ教育セシメタルノミ

教則 四書ヨリ五經ニ入ルヲ法トス然レモ經書ヲ卒ヘタルモノニハ國史ヲ讀マシメ後漢土ノ史籍ニ入ラシム 素讀時間辰ヨリ午迄 復習時間未ヨリ申迄 夜學時間酉ヨリ午迄但夜學ハ部類ヲ分ツ左ノ如シ 一六ノ日詩學 二七五ノ日輪講 三八ノ日文學 四九ノ日辨書

學科學期試驗法及規則 學科ハ專ラ漢學ヲ修メシメ兼テ國史算法兵學鎗砲柔術游泳等ノ道ヲ學ハシム然レモ其修學ノ法ハ一定ノ規律ヲ設ケス且試驗等ノ法ナキヲ以テ文武程度ノ比例學習ノ期限ナシ唯十一歳ニシテ四書五經ヲ卒業セルモノニハ試驗ノ上物品ヲ賞賜ス

休日 毎月朔日十五日及ヒ五節句 土用三十日 歳末十五日ヨリ歳始二十日迄

職名 教頭 教授 世話役 助教 肝煎 主事 財用 但職員ニハ別ニ給料若クハ扶持米等ヲ與ヘス年末ニ至リ賞與スルヲ法トス

職員概數 教頭壹名 教授三名 世話役三名 助教拾名 肝煎拾名 主事一名 財用三名

生徒概數 通學生三百八拾名乃至四百名

束脩謝儀 束脩及謝儀ハ一定ノ制ヲ設ケス各自ノ意ニ任セタリ

學校經費 學校經費ハ總テ藩費トス其唐津ニアルニ當リテハ一ケ年大凡金三十拾兩其濱松ニ移ルニ及ヒテハ學事稍旺盛ニ趣キタルヲ以テ其經費モ亦隨ヒテ多ク一ケ年大凡金百兩其山形ニ移ルニ及ヒテハ荏苒ニ衰頽セルヲ以テ一ケ年大凡金五拾兩ヲ費セリ

藩主臨校 每年數回藩主臨校シテ親シク教頭ノ講義ヲ聽キ又ハ生徒ヲシテ辨書或ハ輪講セシメ以テ之ヲ考試セリ
祭儀 聖廟ノ設ケナシト雖モ冬至ノ日校堂ニ於テ釋菜ノ式ヲ執行ス

學校經費 別ニ經費ノ額ヲ定メス學校ニ於テ要スル所ノ費用ハ總テ之ヲ給ス然レモ教員事務員等ニハ役料扶持米等ヲ給
 セス唯寄宿生ノ賄扶持及營繕費消耗費ニ止ルヲ以テ其費甚タ多カラス而ノ其費ハ藩士ニ賦課スル等ノ事ナシ
 藩主臨校 藩主臨校シテ講義聽聞生徒ノ試業ヲ爲セシメ非スト雖モ毎月三回藩主親シク臨ミ役人列座ノ上生徒ヲ城中ニ
 召シ輪講會ヲ開ケリ此會ノ爲メ大ニ競争ノ念ヲ生セシメタリト云フ
 祭儀 聖廟ノ設置アラサレモ年始ニ聖影ヲ學校ノ床上ニ掲ケ釋菜ノ畧式ヲ行ヒ常番用人ニ命ジ拜セシム
 藏書ノ種類 五拾種 五拾部

舊山形藩

學制

學事上ノ諸制度 本藩ハ轉封數回藩校回祿ノ災ニ罹ル事亦數回ナルヲ以テ書類散逸加之明治維新ノ始メ封ヲ江州朝日山
 ニ移サレ書類ノ僅ニ存スルモノモ皆此ニ移セルヲ以テ今日ニ至リテハ記錄ノ存スルモノナシ故ニ其詳細ヲ見ルニ由ナ
 シ古老ノ口碑記臆ニ存スルモノヲ左ニ記ス
 士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ハ年齡九歲ニ至レハ必ス一般ニ入學セシムルヲ法トス學業優等ノモノアレハ幾分
 ノ藩費又ハ扶持米ヲ給シテ遊學セシメ以テ之ヲ獎勵セリ 毎月廿日中士以上ノモノヲ講堂ニ集メ經書ノ講義ヲ聞カシ
 ム
 平民子弟教育方法 家塾寺子屋等毎町村必ス一個ヲ設立セシメ以テ平民子弟ヲ教養セシム故ニ藩立學校ヘハ平民ノ入學
 ヲ許サス
 家塾寺子屋設置ノ方法 家塾寺子屋ノ設置ハ其設立者ノ自由ニ任セ敢テ上ヨリ之ヲ制セス
 遊學人取扱規則 遊學人ノ來ルアレハ教員及ヒ生徒ヲシテ之ヲ取扱ハシム尤モ旅宿ニ止宿スル間ハ幾日ヲ經ルモ其費用
 ヲ支辨セリ

學校

校名 立誠堂 舊稱經誼館
 學校所在地 香澄町字七日町口

近國ノ區別ヲ立テ且人員ヲ限リテ學費ヲ給セリ而シテ其區別人員之詳細ハ文書散逸シタルヲ以テ今之ヲ記スル能ハス
藩ヨリ故ヲニ命シテ遊學セシメタルモノハ一門執政家ノ嫡子ノミナリ而シテ此時ハ必學費ヲ給スルヲ以テ例トス
毎月十三日ヲ以テ藩士ニ經書ノ講義ヲ聞カシム但徒士以下ハ各自ノ隨意ニ任ス

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋等ニテ適意ニ修學セシメ藩廳曾テ關與セス尤志アリテ藩立學校ヘ入學及ヒ入塾セント
請フ者アレハ必ス之ヲ許ス

家塾寺子屋設置ノ制度 何國ノ何人カ何處ニ開設スルモ藩廳ハ聊カ之ニ關涉セス

遊歷人取扱規則 遊歷人來核ノ節ハ監察教員及ヒ俊秀ノ生徒列座ノ上遊歷人ヲシテ經書等ノ講義ヲナサシメ了テ酒肴ヲ
饗シ文詩ノ應酬ヲナスヲ以テ例トス 遊歷人ノ止宿料ハ三日間藩廳ヨリ之ヲ支辨ス尤モ旅店ハ豫テ一定シアリテ之ヲ
文武宿ト稱ス

學校

校名 明新館 天保年度以前ハ天輔館ト稱ス

校舍在所在地 上ノ山城外郭内字仲町今ハ鶴脛町ト云○越後國三島郡七日市村陳屋構内 慶應二年金子與三郎ナル者ノ經
畫ニ依リ建ル所ニシテ明新支館ト稱シ本館ノ規則ニ依ルト雖モ封内農民ノ子弟ヲ教育スルヲ目的トスルヲ以テ罰例ノ
如キハ較々寬假シ傍演武場ヲ建テ詰合士卒ノ外生徒ヲシテ學事ノ餘暇擊劍柔術等ヲ學ハシム蓋シ健康ヲ維持セシムル
ノ意ナリ慶應明治ノ交大ニ盛ニシテ他封ノ士民入學寄宿スル者數十人ニ至レリ然レ文武ノ教員三名或ハ四名ニ過キス
其他ハ詰合ノ郡政吏ヲシテ之ヲ兼テシメ其構造モ狹隘ナルヲ以テ別ニ錄セス但シ都テ束脩ヲ行ハシメス他封ノ士民ハ
油代多少ヲ納メシメ封民ト區別スル等本館ノ規則ニ異ナル所也

沿革要畧 天輔館創立ハ文化六巳年ニシテ舊藩主松平山城守源信行治世ノ時ニ在リ蓋シ其以前ハ所謂寺子屋或ハ手習師
匠ノ自宅ニ於テ業ヲ受ケ學校ノ設ケアラザリシナリ信行儒學ヲ尊ヒ常ニ文學ノ振ハサルヲ嘆キ家臣增戸武兵衛ナルモ
ノヲシテ其師武田孫兵衛氏ヲ聘セシメ學校ヲ創建ス之ヲ天輔館ト云フ氏ハ出羽國置賜郡高畑村ノ郷士ニシテ島海先生
ト號シ經書ヲ釋クニ古注ヲ主トシ傍ラ仁齋徂徠等ノ說ヲ雜用スルヲ以テ本校亦其風ニ倣フ續テ文政ノ際ニ服郡豐山先
生ヲ聘ス先生ハ米澤藩士ニシテ紀平洲先生ノ門人ナルカ故ニ島海ト同シク古注ヲ用ヒタリシカ天保ノ間ニ穴澤九齋神
保蘭室共ニ米澤藩士ナリ等ヲ聘スルニ至リ學風一變シテ朱子學トナリ館名ヲ明新ト改ム是林祭酒大學頭ノ命スル所ナリト云フ本

禮典供物 神酒 洗米 鮮魚 餠餅 教頭等禮拜生徒一同參拜神酒ヲ賜フ
藏書種類部數 國書 漢籍大凡五百餘部 右廢藩ノ際悉皆山形縣へ差出ス
學校構造及建物圖面 缺ク

舊上ノ山藩

學制

學事上ノ諸制度

文政午歲諭達書之寫

文武之儀ハ殿様ニモ當時專ラ御稽古被遊候儀ニ付四十歳以下其外役附之向モ御用間合ニハ急度出席可被致候且公儀ヲ始メ諸國共專ラ文武ノ御世話有之候砌ニ付格別際立上達ノ者ニハ思召モ可被爲在事ニ付家事世話敷中ヲモ繰合致稽古天晴御用ニモ相成リ候様被心掛候儀忠節之至リニ候依之役筋折々見廻リモ可被仰出候間無油斷出精可致候右載テ文政午歲ノ記錄中ニ在リ其以前學事上ニ關スル文書類ハ散亂シテ傳ラス今得テ詳細ヲ考フ可ラス降テ天保弘化ヲ經テ慶應ニ至ル迄凡ソ四十年間布令諭達等勘カラスト雖モ是亦文書散亂シテ全文ヲ掲クルヲ得ス維新后藩政改革ノ際左ノ達ヲ爲タルヲアリ

一校內營繕修復等總テ藩廳ノ伺ヲ經テ可被取掛事

一生徒入校退校及ヒ入塾退塾一々可被届出事

一財用方月々明細帳ヲ製シ盆暮兩度ニ藩廳へ可被差出事

一成丈冗費ヲ出サ、ル様注意可被致事

右之件々

上ノ山藩廳

學業ノ優等ヲ以テ拔擢セラル、者少カラスト雖モ右等獎勵ニ付テ確タル制度ヲ置キタルコトナシ
士族卒ノ子弟教育法 士卒ノ待遇ヲ分テ三等ト爲ス第一士分以上此中一門及執政ヲ別ニスレ第二徒士以下第三足輕ナリ士卒ノ子弟ハ必ス入學セサルヲ得サルノ制度ナリシト雖モ足輕以下ハ薄祿ナルヲ以偶々入學セサルモノアルモ強テ督責セサルヲ以テ習慣トス

他國遊學ノ義安政度以前ハ有志ノ徒私費ヲ以テ願出ルモノアレハ之ヲ許可セシノミナリシカ安政ノ末年ヨリ江戸或ハ

一月三日讀初及ヒ冬至ニハ生徒一同ニ餅菓子ヲ與フルヲ例式トナス但讀初ニハ禮服用冬至ハ平服ナリ
休日 月々朔日十五日及ヒ五節句 歲末二十五日ヨリ歲始十六日迄其他ハ臨時休業

罰則 行爲ノ情狀ニ依リ罰スルニ退校謹慎其他ノ名稱アリト雖モ退校ヲ除クノ外其時々都講助讀ニ於テ其等差ヲ議定
シ助教ノ決ヲ取り教員列席監察立會試驗場ニ於テ都講之ヲ達ス特リ退校ハ政廳ノ命ヲ承ク然レモ罰例ニ於テ規律ノ
設置ナシ

職名 助教 參政ノ内一名之ヲ兼ヌ古ハ月番參政ニテ負擔シタリシヲ中古人名ヲ定メテ御用掛リト稱セシカ安政万延ノ

頃本官名ヲ付ス蓋シ該官ハ試驗等事アルキノ外平常學校ニ詰メス學務ニ付都講ヨリ申立ルヲアレハ之ヲ政廳ニ議シテ
許否又ハ命令スルノ職ナリ 都講 諸學會ノ會頭トナリ經史ノ質義ヲ受ケ其他校内一切ノ事務ヲ管理ス 助讀、主事

共ニ教員ナリ家格ニヨリテ職名ヲ異ニスルノミ都講以下職名ハ皆執政大夫ノ命スル所ナリ 諸生頭 諸生ノ年長ニ
シテ學業進達ノモノニ命シ諸生ノ取締ヲナサシム但シ都講ノ申立ニヨリ助教ヨリ監察ニ達シ之ヲ命セシム

助讀主事ノ中ヲ分ツテ左ノ職ヲ命ス 會幹二人 諸學會ノ幹事トナルモノナリ 財用方二人 校中一切ノ會計ヲ掌ル

典籍二人 文庫内ノ書籍出入ヲ掌ル 主簿二人 校中ノ帳簿ヲ整フ 以上ノ職名ハ都講ノ申立ニヨリ助教之ヲ命ス

役料ハ各家ノ俸祿アルヲ以テ別ニ之ヲ與ヘス唯年末ニハ慰勞トシテ賞品ヲ與ヘ或ハ諸官吏宴ヲ賜ハル等ノ事アル時
其席ニ列スルヲ得シノミ 外ニ監察一名 月番監察ノ内之ヲ兼ヌ但助教出勤ノ時ヲ除外參校セス

職員概數 助教一名 都講二名 助讀^{四名或ハ五名} 主事^{四名或ハ五名} 定番一名 小使一名

生徒概數 寄宿生十八名或ハ三十二名但藩廳ヨリ炭油菜代ヲ給シ餘ハ自費ナリ 通學生八十二名或ハ九十七名 總生百
名或ハ百二十九名

束脩 白扇一對 清酒一升或ハ二升 鰯一折 右ノ内一品或ハ二三品有志者ノ適意ニ任ス入學者ヲ扱フヘキ順番ノ教員
之ヲ受納ス

謝儀 生徒一同ヨリ歲末ニ至リ大奉ト唱フル紙十帖并ニ讀初ニ酒三升ヲ贈ルヲ例トス僧侶平民等ノ入學スルモノハ別ニ

適宜ノ謝儀ヲナス

學校經費 文政度拾三兩 天保度拾七兩 嘉永度廿四兩 安政度三拾六兩 慶應度四拾兩 總テ藩廳ヨリ之ヲ支辨シ毫

モ藩士ニ賦課セス

藩主臨校 釋菜或ハ試驗^{年一度試驗講義日ニハ}藩主必ス臨校セリ

藩ノ士五十嵐于拙ナルモノ増戸武兵衛ノ門弟ニシテ學校創立ノ際ヨリ天保弘化ニ至ルマテ永ク學校ニ從事シ學制改良ノ事ニ盡力セリ其后金子與三郎ナルモノ廣ク天下ノ文人學士ト交際シ學制改革ノ事ニ盡力シタルヲ以テ諸生ノ事業大ニ進ム安政度又米澤藩士山田政苗氏ヲ聘シ世子ヲシテ其門人タラシメ山田氏ノ來校スル毎ニ世子自ラ國境ニ送迎シタル等皆金子氏ノ經畫ニ出ツル所ナリ

教則 四書五經左傳史記漢書等ヲ教科書トス其他生徒ノ望ニ任ス幼年ノ中孝經ヲ習ハントスルモノ多ク又四書五經ヲ了リタル生徒儘々文選ヲ讀マントスルモノアリ是武田島海翁學風ノ遺レル故ナラン 授業ノ方法ハ教員ノ數ニ隨ヒ生徒ヲ數組ニ分チ教員一名生徒一組ヲ引受ケ教授ス而シテ教員疾病事故宿明等ニシテ出勤セサルキハ其引受ノ分ヲ諸生頭引受ケ之ヲ教授ス授業ノ順序ハ四書五經順次素讀ヲ教ヘ五經ノ半ニ至ル比ヒ會讀輪講ノ列ニ加ハリテ經書ノ意義ヲ講セシメ歷史ノ如キハ只之ヲ獎勵スルノミニテ別ニ教法ナカリシ

素讀時間 午前八時 午前二時 正午十二時 終ル會讀輪講詩文會一六三八等教員合議シ適宜之ヲ定メ時刻ハ午十二時ニ始メ申午四時ニ終ル 每年冬十月ヨリ春二月ニ至ルマテ夜學ヲ開キテ既ニ習フ所ノ書ヲ復習セシム其時間酉六時ヨリ亥十時ニシテ終ル但シ幼年生ハ戌ニ退去シ中年生ハ戌ヨリ亥ニ至ルマテ居殘リテ素讀及講義等ヲ習フヲ例トス

學科學規試驗法及ヒ諸則 本館ハ專ラ漢學ヲ教授ス維新后國學ヲモ教授セントテ其教員ヲ置キタルコトアルモ僅ニ歌道ヲ修メシモノ數名アリシノミナリ習禮及ヒ弓馬槍劍砲術柔術等ノ稽古所ヲ本校邸内ニ建設シアリシト雖モ各々師範方世話人等ヲ命セラレ其掛リヲ異ニスルヲ以テ學校之ニ關與セス故ニ文學ト武術ト程度ノ比例ヲ立タルヲナシ生徒學習ノ期限 凡ソ子弟八九歳ニシテ入學シ十七歳ニ至リ退學スルヲ例トシ嫡子ニシテ俊秀ナルモノハ諸生頭トナリ又教員トナリ二男以下ハ諸生頭ニ止マル

試驗法 毎月十二日四書五經左傳史記漢書等ノ素讀ノミヲ試驗シ甲乙丙丁ノ等格ヲ付ス 春秋二季四書五經素讀ヲ了リタルモノニ對シ四書全部五經全部ノ試驗ヲ爲シ合格ノモノニハ四書ニハ半紙一東五經ニハ小學近思錄或ハ詩作本等ノ内一部ツ、ヲ賞品トシテ授與ス但幼年ニシテ四書全部ノ試驗ヲ受クルニ至ラサルモノ毎月ノ試驗甲科四度ニ至ルキハ鼻紙一東ヲ賞品トス 毎年四五月ノ比執政參政監察等列座ノ上試驗スルコトアリ之ヲ御見分ト稱ス藩主在城ノ片ハ藩主自ラ臨ム之ヲ御覽ト稱ス此試驗ハ素讀及ヒ辨釋等各自ノ力ニ應シ試驗ヲ受クルヲ許セトモ別ニ等格ヲ付シ賞品ヲ與ヘタルコトナシ但毎月ノ試驗ニハ助教監察臨場ス

禮式 試驗合格賞與拜受等ノ節ハ平服着用助教ノ家ニ參禮セシメ又都講及ヒ其扱教員ノ家ニ廻禮スルヲ例トス 毎年

被思召候猶追々思召ノ旨モ可被仰出候間無懈怠出席致候様可申含被仰出候以上

大小姓御小姓エ

此度於學館講日被建置候義別段被仰渡候通ニ候大小姓御小姓ノ義ハ年若勝ノ者ニテ御目通ニモ被召使候事故猶更學問武藝可相屬事ニ候間無懈怠出席致候様ニ申含ヘク被仰出候以上

寛政五年癸丑八月廿日御條目

文武忠孝ヲ可相屬事兼テ被仰渡ト雖モ其道ニ達スル事全ク聖賢ノ教ニ依ラスシテハ其儀ヲ難得候仍之學問ノ義ハ御先代様ヨリ御取立被成置候事故今般御代々ノ御遺旨ニ基キ猶學問ノ力無之候テハ時務ニ達兼候義モ可有之因テハ人才教育ノ爲ト存シ學館建立シ教導ノ役ニ申付候間向後何レモ出精致シ身ヲ脩メオヲ養ヒ政ヲ賛クルノ義專要心掛候様冀フモノナリ

執達

今般格別ノ以思召御學館人才御教育被成置候重キ思召形ノ義ハ以御條目被仰出候通ニ候處依之從御先代様モ兼テ被仰渡候通文武忠孝ノ道第一ニ心掛殊更其子弟教導ノ義ハ兼日ヨリ相生候事ニ候間常ニ無益ノ事ニ不相耽文武ノ道ヲ相屬此度被仰出候御旨趣能々可被相心得候因テ御取立ノ次第別紙簡條ヲ以被仰渡候間可被存其趣候依テ執達如件

(別紙)

一來々卯年以來ハ十六歲以上ニテ大御番大小姓御小姓御番入願ハ於御學館大學中庸論語素讀相濟候趣并劍術弓槍諸門第ニテ稽古致候赴且七拾石以上ノモノハ誰門弟ニテ馬術稽古致シ候段御番入願エ別紙相添可指出候尤右限ノ外タリ其文武ノ道相屬候儀ハ勿論ノ事ニ候今明年御番入願ハ右別紙申立候ニ不相及候但勝手ニテ向寄ノ師ヨリ素讀受候者ハ御番入願不申立以前右素讀ノ書御學館エ罷出試ヲ得其旨可申上候

一引渡回坐并諸士ノ十六歲以下ニテ御小姓御奉公仕候者共來々卯春十六歲ニ相成候ハ、前條ノ通素讀相濟并武術稽古ノ段共御學館エ御届可申上候尤其節試可被仰付候

一御學館向寄ニテ勝手ノ者同處ヘ罷出素讀可致候來九月二日ヨリ相始候間肩衣着用可罷出候其後段々罷出候者モ始ニ肩衣着可致候刻限ノ義ハ五ツ時ヨリ四ツ時迄出席帳被差出候無遲滯可罷出候尤遠方ノ者タリトモ勝手ノ者ハ可罷出候

一祭酒文學助教ノ講日ハ追テ被相定可被仰渡候右講日ニハ引渡回坐ハ不申及定役日勤ノ者タリモ同役繰合ヲ以テ出

祭儀 二月中丁八月丁聖廟ニ於テ釋菜ノ式ヲ執行ス

禮典 供物 神酒二瓶 洗米一臺 鮮魚雙尾 大饅餅一重 當日辰ノ刻午前八時 藩主並ニ執政參政教員生徒一同禮服着

用出席ノ上順次聖像前ニ參拜シ神酒ヲ賜フ

學校構造及ヒ建物圖面 凡ッ地坪間口十八間 奥行三十間 凡ッ建坪間口十三間 奥行二十四間

藏書 經書、史類、和書、歌集、兵書、子類集部、字書、韻書、雜書 概テ三百餘部 右廢藩ノ際悉皆文部省へ御引上ニ付山形

縣へ書目相添へ差出之

右者先般御達之旨ニ基キ前記之通取調進達仕候書類散亂致シ甚タ明瞭ナラス記錄有之分ノミ概略取調仕候以上

明治十六年八月三十日

華族從五位松平信安

舊秋田藩

學制

學事上ノ諸制度

寛政四年壬子七月八日町觸

御家中一統學問武藝可相勵義ハ勿論ノ事ニ候得共猶又格別御取立可被成置思召ニテ學校被建置御發駕前御講釋初被仰付猶追々思召モ可被仰出候右ニ付自今同所ニ於テ中山文右衛門へ講釋可被仰付候間引渡回坐并諸士在々給人徒並ノ者ニ至ルマテ可致出席候畢竟御家中ノ爲厚キ思召ヲ以被仰出候義ニ候間此旨ヲ奉存重役又ハ繁務ノ者タリトモ相成丈ケ出席可致候

一於同處武藝内見ノ義モ被仰付候間武藝會日ヲ可被立置候故御用係役人マテ可被申出候

一當廿八日大學開講被仰付候間其節廡上下着用四ッ時以前出席可有之候猶月々講日左之通被相定候間同刻可被致出

席候 七日 十七日 廿七日

右之通御家中一統へ被仰渡候

右ニ付引渡回坐并大小姓御小姓へ被仰渡左之通

引渡回坐エ

此度學館講日被建置候義ハ一統へ被仰渡候通ニ候各ノ義ハ重職ニモ被召使候輩ノ事故學問武藝等ハ殊更可相勵事ニ

一大御番ノ面々在々へ御暇ノ義ハ當番へ相掛リ候へハ不被濟候得共學問並武藝ノ師匠致候者ハ御番へ掛リ候御暇タ
リ共先年被相濟候義モ有之候間以來師役ノ者門弟取立ノ爲申立候ハ、願ニ依被爲濟候故此旨相心得ラレ可ク候
一大御番ノ面々在々へ御暇ハ當番へ相掛候節ハ從來不被爲濟候得共武藝ノ儀ニ付享保十四年酉十一月中佐竹石見方
へ澁江五郎左衛門御番組黒澤助十郎日數四十日ノ御暇被爲相濟候儀ハ各ニモ被指心得候通ニ候仍テ此末學問并武
藝師匠ノ者ハ門弟取立ノ爲在々へ御暇ノ義御番へ掛リ候共被爲相濟候故此度以町觸被仰渡候間以來三ヶ月九十日
迄ハ御暇被下候事

一各組下給人學問并武藝師匠ノ者門弟取立ノ爲御城下へ出府致候義當番へ相掛候義ハ是迄不被爲濟候由ニ候得共以
來ハ三ヶ月九十日數マテハ可被爲相濟候故願出候ハ、代番ナシ拜領可被付候御城下大番ノ面々モ武藝師匠ノ者ハ
享保十四年酉十月中當番へ相掛リ候御暇被爲相濟候故此度猶被仰渡以來九十日迄ノ御暇ハ被爲相濟候間此旨可相
心得候

寛政七乙卯正月左ニ被仰渡候

在々給人貳拾歳ニ相成候節新御扶持願申立候者は迄ノ通ノ願書ニ大學中庸論語素讀御試并武藝入門仕罷在候段書載
致シ御用處へ可差出候

九月中高橋十兵衛才足ニテ罷出候處祭酒文學助教監事相揃伊兵衛庄治兩人共教在々書院教授へ祭酒演說此度御祭事拜
見被仰付御目見被仰付候義ハ畢竟御學政御取行ニ付在々教授へモ御威權御縱不被下候テハ郷校學生相振申間敷旁被
思召御目見被仰付候間益遜讓ノ旨ヲ相守郷學取立可申候猶罷歸ノ上此旨委曲同役共へモ申諭可被相勤候

一同年在々教授エ被仰渡候ハ當八月十一日御祭事ニ付勝手ノ者出府可致ノ旨先頃以町送申遣候所今日格別被仰渡候
ハ御祭事ニ付同役ノ内繰合一人宛出府可被致候尤御傳馬被貸下候一人勤ニテ指代リ候者無之處ハ出府不相及候猶
隔年出府ノ事ニ被仰渡候得共相混候故出府ノ上可被仰渡候

享和元辛酉七月

醫術ハ人命ニ係リ至テ重キ事故職外ノ者苟且ニ醫術ヲ施候事堅ク相禁候併シ民間醫ニ乏シキ所以前ヨリ僧俗共醫術
ヲ學ヒ是迄療治ヲ致シ來候ハ、其所ニ於テ多ク治驗モ有之モノハ其所ニテ精々吟味ノ上其支配エ申出其旨醫學館ニ
可申出候尤去年中被仰渡候通新ニ醫業ヲ致候者ハ於醫學館御吟味ノ上其業許可成シ置カレ候間右ノ趣心得違無之樣
支配所村々へ可被申渡候

席可致候休日ニハ猶以相成丈何モ出席可致候若相役病氣ニテ繰合出席難相成義有之候カ又ハ難去次第モ有之候ハ、其節不參御届不相及候

一御講日ノ外諸書會讀等モ日ヲ被相定候故罷出度モノハ御學館ニ可被相伺候

一御學館ニ日々罷出勤學相願候モノ人物御吟味ノ上二十人ニ被相定一ケ年一人筆墨紙料トシテ銀三十目宛可被下置候但在々ハ十人ニ相定一人ニ月々一人御扶持可被下置候

一右勤學願ノ面々ノ素讀ヲ授候ニ相成候人物同所役人吟味ノ上可被仰付候尤年限三ケ年ニ相限可被仰付候但右年限中無據譯柄有之學長迄願申出候ハ、御吟味ノ上勤學可被指許候

一御學館武藝所ニ於テ會日被相定手元會所矢場有之モノモ會日ニハ出席可被仰付候右會日ハ武藝頭取ヲ以テ可被仰渡候猶會日ノ毎度出席帳指出言上ニ相及候故左様可被相心得候但其師ニ寄會所矢場等無之モノハ申出候上會日餘計可被仰付候故此旨相心得可申出候

一御醫者出仕願申出候者來々卯年ヨリ儒書大學中庸論語醫書ハ十四經大成論格知餘論原病式運氣論迴集卒草序例素讀相濟候趣御届御學館ニ申上同所役人試ヲ得テ別紙ヲ以テ願書ニ相添可差出候

一御醫者勤學出國ノ願申上候者ハ御學館ニ申上素問靈樞難經傷寒論素讀同所試ヲ得候上是又別紙指添願書可差出候一右件々ノ儀ニ付難心得儀モ有之候ハ、御學館ニ可相伺候右之趣一町並支配有之面々ハ其方ニモ可被申渡候

寛政六甲寅十一月二日

御醫者上京勤學ノ儀自分ヨリ願申立候者以來ハ江戸一人京都一人ニ被相定其年數三ケ年迄ハ年々御暇被下是迄ノ通リ御扶持御合力共可被下置其餘ハ御暇不被下置候且三ケ年ノ外増御暇被下間敷候乍去右年限相濟候テモ暫ノ月數等ニテ業ヲ終兼候等ノ分柄有之候ハ、其次第委曲書載ヲ以テ増御暇申上候者ハ御吟味ノ上被下置候儀モ可有之候右年限終候上病氣等ニテ滯留致候者御合力等不被下置御扶持ハ二ケ月マテ被下置其餘ハ不被下候

自分物入ニテ勤學御暇願申立候者は又三ケ年迄ハ御暇被下増御暇ノ義ハ前條ノ通タルヘシ候醫術兼テ格別相勵出精致シ手内不如意等ノ爲兩表勤學及自力兼候者其次第ニ寄り出群ノ間得有之者ハ御吟味ノ上被定置候人數ノ外ニモ御暇被下置候儀モ可有之候

右ノ趣可被相心得候尤總テ勤學御暇ノ者於御學館御試被成置候儀ハ去年中被仰渡候通ニ候間是又可被相心得候事

同年閏十一月

シテ出精可致筭ノ義ニ付勤學被仰付候

文政九戊戌正月廿六日町觸左ニ

一三日 古事記 一十三日 廿三日 源氏物語

右之通毎月於御學館御讀書間已ノ刻ヨリ大友直江講釋致候間御家中並社家トモ勝手次第罷出可被致聽聞候且當月廿八日於同所和學發會有之候間是又同刻勝手次第可被致出席候

文政十二己丑九月廿九日學館ノ面々へ申渡左ニ

學問ノ義ハ治國安民ノ根元ニテ風化ノ依テ生スル處ニ候故御先代格別ノ思召ヲ以テ學館御造營夫々被成御取立候モ畢竟國家有用ノ人才被成御教育度厚キ御趣意ニ候處近年學問ノ風大ニ衰ヘ專ラ句ヲ摘ミ章ヲ尋リ異論ヲ好ミ奇說ヲ尙ヒ治亂興亡ノ何モノタルヲ辨ヘス候故少シク世務ニ涉レハ茫トシテ風ヲ捕カ如ク大言空論ヲ以テ豪傑トヨヒ局束拗執ヲ以テ方正ト心得候徒モ間々有之様相聞得是皆風ヲ傷リ俗ヲ害スルノ根元ニテ右様ノ學風增長致候テハ却テ治道ノ妨ト相成ル事ニ候是併ナカラ世道陵夷ノ然ラシムル所ニテアナカチ學者ノ罪ニモ有之間敷候條自今教導並學問ノ筋トモ格別ニ相改メ追々有用ノ人才輩出致候義專務タルヘク候此旨館中一同エ厚ク可申聞候也

今日厚キ思召ノ旨委曲以御書付被仰出候通御學館ノ儀ハ專ラ御風化ノ係ル所ニシテ至重ノ御場處ニ候處書生ノ徒字句ノ間ニノミ相泥ミ經濟有用ノ筋ヘ心ヲ用井不申候テハ折角人才御教育被成置候厚キ思召ニ不相叶容易ナラサル事ニ候間右様ノ舊染一洗被致候ハ此節ノ專務ニ可有之候且詰役等ハ不及申勤學其外ニ至ル迄惣シテ御學館ヘ罷出度相願候モノハ平日ノ行狀等篤ト吟味ノ上夫々被申付タトヒ願候共漫リニ游息爲致候義ハ可爲無用事

一書生ノ徒譬ヘハ四書六經ヲ讀候ニモ古註ナリ新註ナリ各其好ム所ニ依テ相學ヒ一部ノ書研究致候義ハ格別未タ新古注釋ノ文義ヲモ解シ得スシテ雜駁ニ諸家ノ說ヲ取捨致シ剩妄ニ銘々ノ異見ヲ生候義ハ如何敷事ニ候學風ノ敗レ候ハ職トシテ是等ニ寄ル事ニ候條自今右体ノナラハシ無之様可被致事

一只今迄在々ヨリ被召出數年教授ニテモ相勤候ヘハ例ニ依テ御城下引越被仰付來候得共御草創ノ砌トモ相違候義ニ付自今格別ノ譯無之候ヘハ容易御城下引越被仰付間敷被仰出候事

右ノ通被仰渡候上猶モ御趣意ニ相應セサル輩於有之ハ夫々御沙汰ノ品モ可有之候條可被存其旨候

天保七丙申六月廿九日

此度格外ノ御沙汰ヲ以テ御學館ニ限り御人詰不被成置候段被仰出候

文化元甲子十月中學長ヨリ諸生へ申渡左ニ

一此度年寄衆ヨリ教授ノ面々へ被仰含候旨教授ヨリ申傳致候通以來猶以相愼實學第一ニ可被心掛候事

一總テ學上ノ事一統教授指圖可相守事

一七經ノ教授へ相屬候生徒師弟同様ノ心得ニ可被存候事

文化三丙寅三月二日被仰渡左ニ

此度十郎兵衛殿黒澤文内介川東馬兩人御呼出ニテ被仰渡候ハ疋田齋執政殿御學館係同様ニ被仰付候因テ此末御用手透ニハ諸會ニ被成御出席候猶近來多人數出精致候様ニ相聞得候此末迎モ一統格別ニ出精可被致被仰渡候

文化八辛未四月

郷校役々被仰付候儀ニ付鹽屋右膳并河内へ被仰渡候事

六月弓馬刀槍ノ業專ラ心懸其暇ニ軍法其外トモ可學吟味ノ上上覽被仰付候事

文政五壬子五月廿一日

武藝方御學館へ御取纏ニ付以來同處總裁へ内見等ノ義被仰渡追テ武藝御取立ノ趣猶御家中へモ可被仰渡但是迄ノ武藝頭取隙明ニ被仰渡候

同年六月五日

文武御取立ノ義ハ前以度々被仰出モ有之殊ニ御先代様格別ノ思召ヲ以テ御學館被遊御造營候義ハ畢竟兩道共同所へ御取纏可被遊御取立篤キ御趣意ニ付今般武藝方御學館へ被成御引纏取立方等ノ義ハ追々同所ヨリ相達候筈不遠御入部ノ上文武ノ諸藝格別ニ可被遊御取立御含ノ旨モ被爲有候間被得其意向後猶以可被致出精候

又

此度思召ノ旨有之武藝方御學館ニ被成御取纏候ニ付武藝頭取被相止向後内見等ノ儀惣シテ御學館頭取へ被仰付候依之以來取立方等ノ義ニ付追々同所ヨリ相達候旨モ可有之候畢竟文武共御學館へ御引纏此末猶以格別ニ可被成御取立篤キ御趣意ニ候條被得其意一同無怠致出精候様可被申合候事(右ハ武藝惣師範ニ)

右ノ趣門弟中へ不洩様可被相達候

文政七甲申四月

御小姓ノ義ハ代々其家筋モ有之御昵近ノ勤ト申追々清要ノ地ニモ被召使候面々故行狀ノ心掛ハ不申及文武ノ藝道別

改ルモトス同年六月十七日老中ヨリ學館長へ申渡

今般學問御取立方格別被相改專ヲ篤實ヲ旨トシ德ヲ脩メオヲ達シ末々御用ニ相立候様御仕向被成置候ニ付引渡回座ヲ始諸士二三男ニ至ルマテ勤學被仰付日々御學館へ可被出旨明十八日以御條目嚴重被仰渡候御取調ニ候間各右御趣意厚ク相心得專御用ニ相立候様教導可致學則學式被相渡候間教授以下詰役へモ重ク被申渡御取立向勉勵可有之候學館御更張御條目並ニ學則等左ニ

今般天朝御政ノ旨ヲ奉承シ舊弊一新シテ簡易ニ基キ職制令改革候上ハ我等藩屏ノ職掌相立候モ全ク家中共一同勉勵ノ所由ニ候條此旨厚ク相心得各其職ヲ不怠文ヲ勵武ヲ勉メ專ラ廉耻ノ風ヲ振起シ一際改革ノ基礎確定致候様所希候委曲ハ政体ヲ以可申達モノ也

學問ノ儀ハ御先代厚キ思召ヲ以御取立人材御教育被成置候所近來學風凌夷人材モ自然乏敷相成殊更重職ニモ可相任面々學問不致候テハ難達時務此姿ニテハ御先代ノ重キ御遺志ヲ奉紹述候本旨モ不相立實ニ恐懼此事ニ候依之今般學政嚴ニ令改革候條家中ノ面々引渡回座ヲ始諸士ニ至ル迄日々學館へ出席學問研究專ラ孝悌忠信ノ道ヲ修メ節義廉耻ノ風ヲ勵ミ追々重キ御用ニ相立候様可心懸所希候委曲者執政共可及執達者也

(執達)

今般以御條目被仰出候通御先代様厚キ思召ヲ以テ學問御取立專ラ人材御教育追々御用ニ相立候者輩出致候様被遊度御趣意ノ旨ハ度々被仰出一同相心得候通ニ候所近來學風相衰へ學者徒ニ文字章句ノ瑣細ニ泥ミ聖賢ノ教何タル事ヲ不辨候者モ儘有之別テ昨年戰爭後ニモ候へハ人氣一体粗豪而已ニ涉リ其道ニ進兼候者モ可有之哉ト深ク被遊御苦勞今般格別ノ思召ヲ以舊弊御一洗學政御更張一際學風相振候様被遊度其向へ御取立筋嚴重被仰渡御家中ノ面々引渡回座ヲ始諸士二三男ニ至ルマテ勤學被仰付候間日々御學館へ出席學問研究專ラ文武忠孝ノ道ヲ修メ節義廉耻ノ風ヲ勵殊更追々重職ヲモ可被仰付而々治國安民ノ道皆兼日ニ有之事故常ニ無益ノ事ニ不耽道ニ志シ藝ニ遊ヒ此度被仰出候御旨趣能々可被相心得候古人モ武ハ文ヲ以被行候ト申確言モ有之學問ハ別シテ常節ノ急務ニ候間何レモ右厚キ思召ヲ奉休認學問出精重キ御用ニモ相立候様心掛專要ノ事ニ候委曲ハ別紙覺書ヲ以被仰渡候尙學則ハ明德館へ揭示致候間可被存其旨候依テ執達如件

(覺書)

引渡回座二三男ニ至ル迄十五歲以上三十歲以下日々御學館へ罷出看書可致卅歲以上十五歲以下タリ共罷出度族ハ是

同年七月二日被仰渡左ニ

近年來御財用向非常ノ義ニ被爲至候ニ付格別重キ御改革被仰出諸向無殘御人詰被成置候得共御學館ノ義ハ聖賢ノ道ヲ明ニシ人倫ノ道ヲ修候重キ御場所ニテ是非御教道不被成置候テハ不相成候ニ付格別ノ御沙汰ヲ以御人詰不被成置尙諸向御備等モ夫々御酌上ケ被成置候へ共御學田ノ義ハ是迄ノ通ノ姿ニテ學問御取立ノ義ハ格段重ク被仰渡候筋モ有之候扱又御取立ノ義ハ前以被仰渡候通ニテ猶又被仰渡候迄モ無之候へ近來士風相衰候ニ付文武ノ道ヲ厚ク相勵可申旨先達御條目ヲ以重ク被仰出候義モ有之格段ニ出精博治致候義ハ勿論ノ事ニ候へ共第一孝弟忠順ノ道ヲ不脩候テハ人倫ノ道ヲ不相辨假令數万卷ノ書ヲ看破致候テモ畢竟虛文浮華ノミニ相走リ身ヲ修御用ニ相立候筋ニ無之厚キ思召ニ相戻リ候間銘々ニモ篤ト勘辨致シ猶又此度御人詰ヲモ被成サル格段ノ御旨趣ヲ奉存候テ此迄ニ相定候舊規御箇條ヲ急度相守リ出精ノ義ハ勿論聊苛察カマシキ舉動無之往々御用ニモ相立候様可被心懸候

弘化四丁未十一月中御學館ニテ專門御試被仰付候

一大經三年 中經二年 小經一年半 二月八月年々御試被成置右年限不濟候テモ一經研究致シ候ハ、他經研究不苦候銘々出精無怠瑣細ノ論ニ不拘退々御用ニ相立候様ニ心掛學候ハ專一ノ事學館長列席ニテ被仰渡候

一專門御試策問當日前四日目ニ指出當日前日詰役ヨリ對策指出候上等比上等ノ御賞被下置候

元治甲子八月時勢ノ變遷ヲ察シ藩兵一新セント欲シテ砲術館新築ノ命ヲ下ス

慶應乙丑二月砲術頭取一人ヲ置ク 是秋砲術館落成ス開館ニ際シ教授準教授詰役同並調役勤學ヲ置キ各々擔任ヲ定メ大砲歩兵ノ二科ニ分テ嚮道セシム是ヨリ前キ開設セル大砲製造所火藥製鍊所ヲ合併シテ砲館ノ屬科トナス 小銃製作及ヒ職人取立ハ遠西砲術創草ノ際ヨリ自費ヲ以テ教育シ來ル者アルカ故ニ舊藩召抱職人ノ身上ノミ砲術館ニ屬ス 弓術大筒小筒石火矢等ノ舊諸流ヲ廢シ遠西砲術ヲ以テ士族卒ノ表藝ト定メ大砲歩兵ノ兩隊ニ編入ス砲術總裁一人同見習二人砲術頭取見習二人ヲ置ク

明治元戊辰十月砲術館ヲ改メテ軍務局ト稱號シ總裁ヲ廢シテ砲術ヲ兵學校ト改稱シ大砲製造所火藥製鍊所及古來ヨリ兵具方ト稱セル武器及ヒ閑厩方等悉ク軍務局ノ屬課トス後又改テ司兵局ト號シ權大參事之ヲ總括シテ司兵少參事權少參事大屬權少屬史生ヲ置キ兵學校ハ教授準教授直館進直館史生ヲ置キ兵器方ニハ大屬權少屬史生ヲ置キ閑厩方ニハ大屬權少屬史生ヲ置ク而シテ砲術役方諸職人ハ悉ク司兵局ニ屬ス

明治己巳二月兵制ヲ英式ニ改革セリ曩キニ開館ノ時ニ於テ西曆一千八百六十二年ノ蘭式ヲ採テ兵制トナスニ付今之ヲ

ス利害ヲ以テ志ヲ變セス難易ヲ以テ心ヲ移サス力行勇進シテ善ニ遷リ過ヲ改ムルヲ務ムヘシ
一學成リ道立テ德己レニ備ハリ然ル後之ヲ施シテ教ト爲ス片ハ以テ天下ノ人才ヲ育スルニ足り之ヲ用ヅテ政ヲ爲ス
片ハ以テ國家ノ隆治ヲ開クニ足ル是故ニ學者敢テ自ラ棄テ自ラ盡ラヌ宜シ自ラ重シ自ラ勉メ以テ遠大ノ業ヲ期
スヘシ是國家學ヲ建ルノ盛意ヲ奉シ先皇教ヲ垂ルノ聖心ニ體スル所以ナリ

(學式)

一此度御條目ヲ以テ被仰出候御趣意能々奉體認達才成德ノ上御國家ノ御大用ニ相成候様日夜刻苦勉勵可致候事
一尊卑長幼ノ序ヲ守リ坐次ハ勿論議論難詰ノ間ト雖モ容貌辭氣ヲ和ラゲ恭讓ノ道ヲ不可欠事
一長官ハ勿論總テ教官ヲ敬シ指圖ヲ堅ク守リ何事モ背キ申問敷候事但長官ノ言タリ共其事理ニ不合儀ハ聊無憚可申
出事

一御政事ノ私議ハ勿論學話ノ外雜話一切禁止ノ事

一教授ノ指圖ニ從ヒ本課ノ書懈怠ナク出精可致卒業ノ上ハ又其指圖ニ依テ他ノ書ニ可移事

一御書物大切ニ取扱開闔ノ間モ心付ケ可申教官ノ外拜借ノ書籍館外へ持出申問敷春秋試生ハ品ニ依御免被成置候轉
借ハ堅ク禁止ノ事

一月々聖廟ノ洒掃教授以下出席不可怠事

一各局堅ク飲酒ヲ被禁置候事

一長官以下日々已ノ上刻ヨリ午ノ中刻マテ各局へ出席可致事

一日々謁シ教官以下生徒ニ至ルマデ日各局順次ヲ以テ怠申間敷事

一教授以下學監掌計ハ日々出勤ノ上館長局へ謁見直館筆生ハ謁見ノ上簿籍へ姓名相記可申事

一學館長ノ内一人宛午後七局へ出席諸生取立勿論午前ノ義ハ無懈怠出席可致候事

一諸生取立係リノ教授ハ勿論當番教授日々午後七局へ出席可致其外タリモ可成丈ケ出席可致事

布令論達ノ外諸家ノ私記ヨリ採録スル所左ノ如シ

寛政元己酉年七月八日上根小屋御馬屋跡へ御學館被建立候ニ付信太內藏介宇留野源兵衛渡部善右衛門屋敷被召上候
九月十五日御學館棟上御儒者村瀬栲亭祭文ヲ讀ミ供物ヲ備フ上梁文ハ栲亭ノ作ニシテ吉田藤右衛門夢鶴ノ執筆ナリ
天樹公ニ至リ京師儒者村瀬嘉右衛門之熙號栲亭ヲ召抱へ江戸儒者山本喜六號北山信有ヲモ秋田へ下シ學館ヲ創立シ文武ヲ

又可爲勝手役係ノ面々ハ御用間罷出看書可致候但出席帳拵置日々勤惰相記シ翌月初御上へ奉入御覽候事

一諸士十五歳以上三十歳以下三御番ハ勿論二三男マテ日々御學館へ罷出看書可致候三十歳以上十五歳以下タリ共罷出度者ハ可爲勝手一役並近進諸役ノ面々ハ御用間可成丈ケ罷出看書可致候但出席帳拵置日々勤惰相記シ翌月始執政へ差出候事

一引渡同坐諸士ニ至ルマテ専ラ學業ニ從事爲致候ニ付廿五歳マテ役儀ニ不被召使候夫共達學成才ノ者ハ年齢ニ不拘御吟味ノ上御拔擢可被成置候

一是迄御學館へ罷出候者父祖ヨリ願書指出御吟味ノ上被仰付候へ共此度ヨリ町内ニテ取纏日々罷出候面々年齢相認役係ノモノハ役名肩書ニ致御學館へ可被指出候

一月々學士文學御講日ハ一同可相成丈ケ聽聞可罷出役係ノ面々ニモ同役申合繰合可成丈ケ罷出可申事但以來五ツ時ヨリ被相始候事

一陪臣歩行以下足輕輩百姓町人ニ至ルマテ學問ニ篤ク志有之者ハ願ニ依テ其支配ニ於テ吟味ノ上御城下回リハ師家ニ就キ講學致シ遠在ハ向寄書院ニ於テ御取立被成置愈學業成就致候見詰有之趣其師又ハ書院ヨリ申出候へハ御學館ニ於テ御取立可被成置候

(學則)

一道ハ天ニ原キ性ニ根サシ須臾モ離ルヘカラサル者ニシテ万世ニ通シテ行ハレサル所ナク萬國ニ達シテ至ラサル所ナシ然レモ文字ニアラサレハ之ヲ載セテ遠キニ致スコト能ハス聖教ニアラサレハ之ヲ明ニシテ行ニ施スコト能ハス上世 神聖漢土ノ文字ヲ用非孔子ノ教ニ則リ以テ人倫ヲ明ニシ皇化ヲ行フ學者當ニ大訓ニ遵奉シテ正學ヲ講明シ邪說ニ流レスシテ以テ才德ヲ成就スヘシ是國家學ヲ建テ教ヲ設クル所以ナリ

一入學ノ徒確ク其志ヲ立テ先聖ノ道ヲ學ヒ前哲ノ業ヲ希ヒ日ニ就リ月ニ將ミ以テ日新ノ功ヲ致スヘシ
一學ヲ處經書ヲ以テ本トシ博ク歴史ニ涉リ旁ク子集ニ及フト雖モ着眼スル處ハ倫理ヲ明ニシ綱常ヲ立ルニ歸シ體究スル處ハ忠孝ヲ勉メ節義ヲ勵ムニ本クヘシ

一公明正大ヲ主トシ固我ノ見ヲ執ラス疑事ハ師長ニ質問シ朋友ト講論シ平心易氣義理ノ至當ヲ求ムヘシ必門戸ヲ張リ學派ヲ爭ヒ私黨ヲ樹ルコト勿レ

一恭敬遜讓ヲ重ンスト雖モ巧言令色ニ流レヌ剛毅木訥ヲ尙フト雖モ傲慢粗暴ニ入ラス人ノ美ヲ掩ハス人ノ惡ヲ訐カ

リ相始候筈ニ御坐候讀書ハ當二日ヨリ於同處被仰付候

山本氏喜六名信秋田ニ被罷下候儀ハ一昨年齋殿在番中掛合ニモ及尙去年中但馬殿下リ以前ニモ被掛合候次第有之右コ

付テハ當春ヨリ拙者モ一度ナラス掛合候并十郎兵衛殿出府ノ節於秋田同職中申會ノ趣ハ猶又同職ニテモ出府ノ上被

申談候事ニ御坐候處被罷下候儀ハ於手許些ト差支ノ趣モ有之是マテ延引被致候所今年ノ儀ハ是非々々不被罷下候テ

ハ一休ノ振合ニモ相掛リ候故逗留ノ長短ノ儀ハ兎モ角モ孰レト通りハ被罷下候儀仕度旨打重申談候處當六日嫡子

久米治ヲ以御膳番共迄御歸國後無程罷下候儀ニト申儀段々拙者共掛合候趣モ有之ニ付右ノ御請モ被申上候并併當月

中出足ト申儀ハ指支ノ趣モ有之ニ付來月節旬前後ニハ出足モ被致度由被申上候仍テハ當九日秋田ヘモ右ノ趣申達候

今日右等ノ趣モ旁揆抄ニ及申候今日御講口ニ付山本氏被參候ニ付對面ノ上夫々及揆抄候事

山本喜六殿北山先生ニテモ當三日江戶表出足被致昨夕此表ヘ着被致候仍テハ先頃在番中此表ニ申達候通直々學校ヘ住居

被致候且昨夕着ノ趣ハ御用番ヨリ申傳候ニ付則安否尋ノ使ハ指遣候

山本氏ニテモ一昨夕着ニ付今夕同職中相揃見舞申候則對面ニ有之候下畧

山本氏ニテモ御學館御用モ漸ク相濟候ニ付明日發足被致候右ニ付一昨廿六日搦田ヘ被爲出於同處御料理被下候テ御

盃等被遣候上御羽織被下候由猶今日御内々ヨリ銀子干甘鯛被下段小早人申聞候尙此度爲旅用其向ヨリ金子被指遣候

御學館御取立被成置候御主意今日御家中一統ヘ被仰出候ニ付引渡廻坐ヲ始一役并町役ノ面々迄モ先例ノ通及催促候

九ツ半頃御坐ノ間上段ヘ御廣間形ノ御出坐引渡御相手番無役引渡之面々南方御處居内ヘ列居御坐邊ノ御相手番ヲ始

寺社奉行大番頭無役御坐邊并御用處一方ヨリ一役夫ヨリ町役ノ面々迄御法度書ノ間迄相詰候且拙者共ハ北方上段下

ヘ列居御用入ヲ始御側ノ面々ハ陰ノ間御視戶外シ同所ヘ相詰候御出坐之上御條目并執達御副役豐田宇左衛門拙者ヘ

持參致候夫ヨリ着坐ノ席ヲ少シ進今般御學館御取立被成置候ニ付御條目ヲ以被仰知候段孰レモヘ申述候上御右筆筆

頭當時假筆頭ナリ飯田長藏呼候テ御條目同人ニ相渡於同所讀上候右畢テ孰モ段々御丁寧被仰出難有奉存候旨拙者御取合申上

候夫ヨリ御添役杉山善兵衛呼出シ執達相渡東方御柱際ニテ讀上候右畢テ屋形様ハ陰ノ間ヘ被爲入候夫ヨリ引渡御坐

邊衆ヘ相渡候御條目執達并覺書取纏宇左衛門持參致候故先例之通引渡御坐邊ノ衆組下持ノ面々拙者直々呼出候テ相

渡候右畢テ引取候事

今日ハ文學金字平治講日ニ付屋形様御學館ヘ被爲入候段被仰出候仍テ八ツ時御城ヨリ御學館ヘ出席八ツ半時御上下
ニテ被爲入暫アリテ御熨斗献之畢テ御手親宇平治ヘ被下夫ヨリ孝經一章講シ畢テ御退去

專ラニ御取立諸士十六歳ニノ學庸論表讀ヲ試ム釋奠養老ヲ行フ醫學館養壽局トヲ開キ在々郷校ヲ立又御本方奉行ヲ止メ御勘定奉行ヲシテ御勝手方ヲ總シメ御財用奉行ヲ立御勘定奉行ニ並テ諸向ヲ計シム猶新ニ御評定奉行ヲ立御政事ヲ掌ラシム

寛政二庚戌年御學館落成ニ付三月十一日ヲ以見分濟トナル

寛政四子子年學校御取立ニ付屋形樣御發駕以前講釋始被仰付候儀ハ御心得ノ通ニ候處猶追々御仕法被立置可申候ヘトモ一ト先於同處中山文右衛門へ講釋被仰付當廿八日大學開講有之候儀ニ申會候

一學校勤番ハ在々給人並ニ角館本御家中ノ内ヨリハ人宛六十日交代ニ被仰付候旨御伺ノ上申渡候

一右御用係御評定奉行山方太郎右衛門井口亘諸橋彌八御副役豐田宇左衛門小田内又左衛門申渡候

一武藝頭取へ此末於同處内見致候樣ニ申渡是又一ヶ年一順次ニ候へハ一流兩度宛内見致候樣ニ申渡

一御學館御講釋先月廿八日開講

寛政五癸丑年八月廿六日先聖ノ神位御直筆ニ御認直チニ御學館へ御遷ニ相成右附添祭酒中山文右衛門

八月廿七日下午丁ニ付於御學館始テ御釋奠御執行孔子ノ神主屋形樣御自筆御安置御神殿ハ御學館ノ内正面ニ出來初獻ハ屋形樣御自身ニ被獻亞終獻ハ祭酒文學相勤其外御式品々有之候處何レモ御手都合宜ク濟申候御祭器無殘此表ニテ出來致候所何レモ宜ク出來致候祭肉ニ相成候鳥此節御献上ノ外ハ納リモ無之候處御祭日ニ指掛リ鶴納リ候故直ニ御祭日御用被成置御都合宜ク旁奉恐覺候

同日養老御執行可被成置御仰出候ニ付御祭儀相濟候即刻國老小野寺主水眞崎兵庫以下庶老六十七人罷出於御目通御酒御吸物御肴被下置御手親御肴被下猶御教諭ノ次第祭酒ヲ以被仰渡尙御目錄國老金子貳百疋庶老へ同百疋宛是又於御目通被下置候八十以上ノ者へハ鳩ノ杖被下堂上杖御免被成置直ニ右鳩杖當人共ニ被下置候此節老人共へ子孫ノ者附添罷出御教諭ノ趣拜聽致候右老人共格合近進並以上年齡七十以上ノ御吟味御坐候病氣ニテ罷出候者ハ御目錄斗リ被下置候へハ多分ハ罷出候病氣ノ者ハ僅三四人ニ御坐候

婦人年齡七十五以上ノ者へ被下物有之於御目通御教諭ノ次第ハ子孫ノ内へ被仰渡候將監祖母へ干肴一折リ御目錄三百疋圖書老母へ干肴一折御目錄二百疋箭田野清治祖母荒川惣十郎祖母へ二百疋其外婦人共へハ金子百疋宛被下置候右人數六拾壹人ナリ

九月祭酒中山文右衛門是迄ノ通論語講釋文學金字平治孝經助教小野岡織負孟子講釋右講釋ハ當十七日祭酒ノ講日ヨ

文政七甲申年三月諸先生ヨリ勤學ニ至ルマテ御賜宴有之右ハ寛政五年祭典八月學長ヨリ教授成田茂吉へ被仰舍此末年々春秋兩度御酒御肴可被下ノ旨年寄衆ヨリ被仰渡候

士族卒ノ子弟教育方法 門地大臣及士族ノ嫡子タル者四書ノ素讀ヲ歴サレハ出テ、仕ルヲ許サス故ニ出仕願ヲ申立ル節ハ必ス素讀試驗濟ノ證ヲ付ス 總テ大臣士族ノ子弟ハ必ス藩學校ニ入テ脩業スヘキノ義ハ毎々諭達ヲ以テ之ヲ誘導勸奨スルアリト雖モ法則ヲ以テ束縛スルアルナシ或ハ其師ノ家塾ニ於テ修業スル各自ノ隨意ニ任ス 武藝ノ内刀槍弓術ハ士族ノ尤練修スヘキ業ナルヲ以テ出仕願ノ節ハ必其師家ノ證書ヲ徴シテ之ヲ添フ百五十石以上ノ者ハ馬術ヲ加ルモノトス 卒族ハ入學修業セシムルノ方法ナシ若シ特ニ願出ル者アル時ハ寄宿舍ニ入レテ其修業ヲ許ス 儒學醫學トモ京師江戶ニ留學セシムルヲ願ヒ出ル者アレハ若干ノ學資ヲ給ス其費額詳ナラス 儒學ノ留學ハ文政ノ初度ヨリ之ヲ止ム 平民ノ子弟教育方法 平民ノ學ニ從事スルヲ禁スルアルナシト雖モ藩政ニ於テ之ニ干與シテ就學セシムルナク家塾寺子屋ニ入ルハ各自ノ隨意タラシムルノミ

家塾寺子屋設置ノ制度 何人ヲ問ハス自由ニ家塾寺子屋ヲ開設スルヲ得奉行郡宰等ノ許可ヲ受クルナシ

學校

校名 寛政中學館開設稱呼シテ明道館ト云フ文化八年辛未十二月ヨリ明德館ト改稱セリ

校舍所在地 秋田郡今ノ南秋田郡久保田町今ノ秋田町ノ内東根小屋町今ノ六十四番六十五番地ニシテ秋田師範學校中學校ノ所在地是レ也ニ在リ 寛政元年己酉七月中東根小

屋町藩主ノ厩ヲ引拂ヒ學館ヲ創立セルニ付近傍信太某宇留野某渡部某ノ屋敷地ヲ買上タリ其後天保中祝融ノ災ニ罹ルト雖モ猶此地ニ再築シ移轉ノコトナシ明治元年戊辰ノ夏羽羽鎮撫使秋田ニ來ルニ依リ學館ヲ以テ其旅館ト爲シ而シテ

之ニ代ウルニ會所舊藩中刑法民政ノ事ヲ執ル處ナリヲ以テ同年十月ニ至リ學館ヲ以テ評定所ニ充テ用處トナシ之ヲ明達館ト稱號セルヲ以テ同二年正月ニ至リ學授ノ隣地ニアル小場某宅ヲ借入レ學校ヲ假設シ之ニ移ル同年六月中評定所ヲ城中ニ復スルヲ以テ學校モ亦タ舊地ニ復ス

沿革要畧 寛政元年己酉五月藩主入部儒學崇尚ノ命アルヲ以テ京師ノ鴻儒村瀨嘉右衛門名ハ元熙號梧亭ヲ秋田ニ招聘シ尋テ學校建築九月ヲ以テ上棟セリ同二年庚戌工事落成三月ヲ以テ見分濟トナレリ同五年癸丑七月ニ至リ館名ヲ附シ祭酒以下係

官ヲ命ス而シテ其教フル所專ラ倫理ヲ明ニシ廉耻ヲ勵スヲ以テ目的トス其設立ニ盡力セルハ執政疋田齋號柳祭酒中山

文右衛門號善文學金字平治等ノ數人ナリトス文化年間ニ至リ藩主佐竹義和躬行專ラ士人ヲ獎勵スルヲ以テ苟モ士籍ニ

今日助教小野岡織負初講釋有之聽聞ハ二百人位ナリ

小野岡織負初講ハ屋形様不被爲入候ニ付今日御上下ニテ被爲出候執政御側方學館役ニハ上下着用其餘ハ平服ニテ出候

寛政七乙卯年

一在々書院教授以來御學館勤番支配ノ役支配ニ被仰付候仍テハ御學館方御用有之節ハ直ニ御學館方ヨリ當人共ヘ申達并ニ及催促候出席爲致候儀モ可有之候間此旨可被相心得候猶當人ヘ此段被申渡候以上

寛政十二庚申年三月中五經并周禮儀禮大中小ノ七經ヲ分チ一經ツ、取立被仰付候

享和三癸亥年閏正月中秋御賜宴ノ節泊番ノ者泊ヲ引罷出候

弓術惣流系譜御吟味相成候

文化二乙丑年閏八月十一日御目附ノ名號ヲ付セラレ御學館支配ニ無之執政直支配ト被仰渡候

文化六己巳年七月廿三日助教那珂長左衛門畑源助系井伊兵衛鈴木主馬山縣辨之助北澤隆藏登城於靈泉台詩作被仰付御題世治文事興火矢内見ノ節賞言申渡順席ノ件 右ハ昨十三日火矢内見ノ節惣師範ヘ賞言申渡ノ節御役列可相詰旨願取申渡候就テハ根元火矢上覽内見の前トモ惣流出方ノ儀前々相難候處享和三亥年中惣流系譜御吟味被成置文化二丑年流義新古ヲ以順列被相定候上ハ右順列之通可相詰儀ニ取受候ニ付其段願取ヘ爲掛合候處右順列之儀ハ射候砌ノ儀ニテ賞言申渡ノ節順列ノ通可相詰被仰渡モ無之事故御役列相詰候儀ト願取ニ於テハ被取受候段申聞ニ御坐候私共取受ハ全ク出方順列被定置候事故賞言申渡ノ節迎モ惣流一同ニ罷出候儀ハ御役ニ相關リ候事ニハ有之間敷此儀爲懸合相及申候ヘモ願取申聞候迎モ相分候儀ニモ無之事故御伺可申上段申談候處於願取モ御伺可申上旨挨拶御坐候依之御伺申上候間就レモ御指揮被成下度候右ノ趣及伺候處賞言ノ砌一同ニ呼出相列候儀射前ニハ格別ノ事故役列次第罷出候様御用番岡本又太郎申渡根本忠藏^{弓術師範}

文化八辛未年九月朔日御學館頭取始テ被立置候ニ付梅津藤十郎忠至^{局住}御相手番格ヲ以於御坐間被仰付候

七月五日郷校ヲ始メ惣テ係役申渡候節組下組頭ヲ以テ申渡候事

九月晦日教授以下ノ役々御暇願取振御學館方ヘ被仰渡候事

十月三日御學館寄宿勤學願組下給人ヘ被仰渡候

十二月三日御學館是マテ明道館ト唱候處以來明德館ト可奉稱ノ旨被仰出候

午後或ハ休暇ハ生徒ノ出席各自ノ隨意ニ任ス長夜ノ節ハ夜學ヲ願出ル者アレハ其人物ヲ檢シ數ヲ限テ之ヲ許可ス此修業ノ時間ハ暮六ツ時ヨリ夜四ツ時マテヲ以テ限リトス午後休暇夜間ニ在テモ授業教授一名授業諸役兩三人宛出席シテ生徒ノ質疑ニ應シ且ツ出欠簿ヲ點檢ス

學科學規試驗法及ヒ諸則 學科ハ漢學ニシテ諸家折衷ノ學トシ箒ヲ詩作文章ヲ學ハシム其他醫學館アリテ漢法術ヲ修メ和學局アリテ專ラ皇朝ノ學ヲ修メ算法方禮法方アリテ各其科業ヲ研究セシム又タ武藝所有リ藩內諸武術ノ事ヲ掌リ專ラ其技藝ニ精ナラシム醫學館ヲ名稱シテ養壽局ト云ヒ藩內醫家內外科ヲ始メ其他諸科產婆灸鍼等ノコニ至ルマテ一切之ヲ管理ス

舊來ノ醫家子弟ニシテ醫學館ニ出席シ各其科學ヲ修メントスル者アレハ之ヲ許ス士族ノ二三男或ハ農商家ノ子弟ハ其事故理由ヲ檢察シ不得止譯柄アルカ又ハ廢疾不具等ニ係ル者ニ限り特ニ之ヲ許ス

各郡村ノ遠隔ノ地ニ在ル者ハ願ニ依リ館中ニ寄宿セシム

其修ル所ノ業ハ專ラ漢方ニシテ洋法ノ術ニ涉ラス傷寒論素問靈樞經金匱十四經產論外科正宗產論等內外科金瘡眼科產科等各其專門家ノ書ヲ修メシメ試驗ヲ經ルノ後猶其治驗ヲ考查シ試驗ノコトハ符驗ヲ付與ス下條ニ記ス

每年兩度醫學頭ノ講釋アリ藩內醫事ニ關スルモノ出席シテ聽講ス內科醫按會アリ產科外科針科本草科等ノ諸會アリ各其科ノ會頭ヨリ醫接ヲ出シ生徒ヲシテ處方セシメ會頭ヨリ詰問疑難シテ其明辨ヲ求ム日々ノ修業ハ醫學館ノ廣間ニ於テス藩主ノ醫家子弟其他町醫在醫在醫トハ郡村ニ居住スル者ヲ云トモ混交シテ相切瑳シ日々會頭一二名ツ、出席シテ質問ヲ受ク學館長

教授之ヲ管理スルモノトス

和學局ハ本館諸役ノ内三名ノ專門家ヲ命シ專ラ生徒ヲ教養スルモノトス而シテ毎月古事記萬葉等ノ講釋アリ教授ニ係リ官アリ學館長モ亦タ之ニ臨ム和歌ノ會アリ時々歌稿ヲ製シテ其優劣ノ評點ヲ求ム

算法方ハ校中ニ一局ヲ置キ其技ニ練達ナル教師ヲ聘シテ一ヶ月三回ノ會日ヲ設ケ生徒ヲ教フ日々ノ授業ナシ教授ニ係員アリテ之ヲ管ス

禮法方モ亦ク一局ヲ置キ禮ニ明カナル者ヲ聘シ月々二三ノ會日ヲ設ケ其法ヲ講習スルモノトス

武藝所ハ本館敷地内ニ一大土塲アリ刀槍居合柔術弓術軍學等ヲ演習スル所トナス藩中諸武藝ノ流派アル者ヲ一ヶ月毎日ノ午前午後ニ配付シテ各其流義ノ會日ヲ定メ置キ其當日ノ流義ノ師自家ノ門弟ヲ率非出席シテ其技ヲ演ス技術畢ルヲ見テ學監出テ、其名簿ヲ監査スルモノトス武藝擔理ノ教授アリテ各ソノ名簿ヲ以テ一ヶ年ノ勤惰巧拙ヲ調査シテ賞

アル者ニ在テハ唔呶ノ聞ヲ聲カサルナク斯文ノ隆盛ナル是時ヲ最ナリトシ文政天保之ニ亞ク 春秋ニ於テ釋奠ノ禮ヲ興シ隔年秋期ニ於テ養老ノ宴ヲ開クニ詳ナリ 學館内ニ演武場ヲ置キ又醫學館ヲ設ケ和學科及算法局ヲ立テ禮式ノ科ヲ置ク其授業ノ方法ハ下條ニ概見セリ 釋奠儀養老儀 學校設立ニ盡力セシ人物氏名行事又該校ニ關係アル著名ナル學士ノ氏名小傳ハ別項ニ付ス

教則 其設立ノ始ニ於テハ詳記スルモノ無キヲ以テ之ヲ考フルニ由ナシト雖モ之ヲ要スルニ四書孝經等ヲ以テ修身ノ課業トナシ博ク十三經ニ涉ランコトヲ要セリ而シテ章句ノ讀法ヲ練達セシムルニ史記、漢書、左傳、國語等及荀、韓、老、莊、

戰國策等ニ及フ歴史ヲ經見セシムルニハ綱鑑補、通鑑等ヲ以セリ

學校内ニ於テ讀書ノ室ヲ分テ二トス一ヲ七局ト唱 或ハ西學ト呼 十六七歲以上ノ男子ニシテ稍經史ノ大義ニ通曉スル者ノ義理

研究スル所トナス其一ヲ東學ト稱シ 或ハ讀書ト云フ 十五六歲以下ニシテ未タ義理講習ノ地ニ達セサル者ノ修業スル所トス而

シテ西學ヲ小別シテ七局トナシ一局毎ニ教授同並一名或ハ二名ヲ其局頭トシ諸役同並ノ三十名及書記ノ十二名ヲ各局ニ分屬セシメ其他勤學贊學モ亦之ニ附屬セリ而シテ諸役同並ヲシテ各其局專門一家ノ經書ヲ研究セシム乃チ詩經家、

書經家、禮記家、易家、儀禮家、春秋家、周禮家、是レナリ 以上七局 其經書卷帙ノ多寡ニ從ヒ其習業大中小ノ年期ヲ與ヘ滿期

ニ至テ試驗ヲナス之ヲ專門試驗ト云フ書記以下勤學ハ此法ニ依ラス各自好ム所ノ書 漢以上ノ書ニ限ル 就テ試驗ス之ヲ春秋試驗ト云フ 或ハ學業試驗トモ云フ 贊學以下試驗ナシ 專門試驗及春秋試驗ノ方ニ法ハ試驗ノ條ニ詳ナリ

毎月三ケ度三學長 祭酒文學助教 講義アリ此時ニ於テハ獨リ校中ノ員ノミナラス藩中士族官ノ有無ヲ問ハス皆昇校シテ聽講ス

ヘキモノトス

毎月兩度議論會アリ其書ハ論孟或ハ左國等ニシテ一定セス教授ヨリ一人同並ヨリ一人本日ノ會頭トナリ諸役同並ヨリ五人ヲ擇テ問前トナシ輪次之ヲ勤ム會頭初メニ其書ノ大意ヲ講シ講畢テ後問前ヨリ議論ヲ挑ム論辨竭キサルハ學館長ノ判決ヲ取り義理明晰ニ至リテ止ム

毎月文會詩會各一次文ハ記事簡牘或ハ序論記傳等ノ二三題ヲ課シ 或ハ宿題或ハ即題 終日間ニ之ヲ作ラシメ薄暮ニ至リ學館長以下列席シテ教授係員之ヲ誦讀シテ其巧拙ヲ檢ス詩會亦之ニ同シ又詩文トモ時アリ館中諸員ニ課題ヲ與ヘ稿トナシ學館長

ニ於テ之ヲ批評シ其甲乙ヲ定メ優等者ニハ時ノ賞與ヲ付ス

日々晝四ツ時ヨリ午後八ツ時ニ至ル修業ノ時間トナシ學館長以下生徒ノ昇降皆之ヲ以テ期トス西學ニ於テ學館長出張ノ間アリ日々學館長ノ内一名宛出席シ其局頭教授ハ各其局々ニ出テ書生ニ授業ス若シ局頭ニ於テ理解ニ難スルアレハ學館長ニ質疑ス

驗トモ執政ノ臨坐スルヲアリ専門試業ヲ分テ上等比上等ニハ金子五百疋中等ハ同三百疋ヲ年末ニ賞與ス而シテ慰勞ノ宴ヲ與フ此ノ専門試験ハ寛政文化以來連續施行セルト雖モ其後廢絶シ弘化丁未ニ至テ復タ之ヲ興ス

醫學ノ試験ハ定期ナシ從來醫家ノ子弟及士族二三男農商家ニシテ事由アリ醫師ヲラントスル志願者ノ願出テニ依リ醫學頭及其科擔當ノ會頭出場醫按ヲ出シ之ニ處方セシメ其他一書ノ要處數條ヲ撰擇シ詰問シテ明辨セシム醫學頭醫學會頭ノ外學館長教授學監亦タ臨試ス

試驗濟ナリト雖モ猶施治ヲ許サス而三年ヲシテ實地ニ修業セシメ其施術ノ効蹟アレハ師家ノ證書ヲ徵シテ符驗ヲ交付シ施治ヲ許ス而後在醫^{郡村ニ}町^{市街ニ}醫^{ルモ}等ニハ脇指一刀ヲ帶ハシメ羽織ヲ着クルヲ許ス其試驗ノ書目左ノ如シ

本科治療試驗 學庸論、傷寒論、難經、醫按三條^{難經處方答辨}○同出國試驗^{治療試驗ヲ得ルノ後出國シテ研究セントスル者ハ}素問、金匱○

外科治療試驗 傷寒論、外科正宗、學庸論、醫按三條^{同上}○同出國試驗 素問、難經○^{治療試驗ヲ得ルノ後出國シテ研究セントスル者ハ}眼科治療試驗 學庸論、小兒直

譯、傷寒論、醫按三條^{同上}○同出國試驗 素問、金匱○眼科治療試驗 學庸論、傷寒論、眼科全書、醫按三條^{同上}○同出國試驗 素問、難經○針科治療試驗 學庸論、傷寒論、十四經、要穴十ヶ處○同出國試驗 素問、靈樞、以上官醫ノ試験ニ

カ、ル

本科治療試驗 傷寒論、十四經、醫按三條○同出國試驗 素問、難經○外科治療試驗 外科正宗、難經、醫按一條○同

出國試驗 傷寒論、十四經○^{眼科治療試驗}小兒直譯、傷寒論、醫按一條○同出國試驗 素問、難經○眼科治療試驗

眼科全書、難經、醫按一條○同出國試驗 傷寒論、十四經○針科治療試驗 十四經、難經、要穴十ヶ處○同出國試驗

素問、傷寒論○產科 產論、傷寒論、手術^{十技}○盲人針科 十四經諸誦、要穴十ヶ處○金瘡科 外科正宗、難經醫按一條

以上町在醫ノ試験ニカ、ル

城下ニアル儒學ノ家塾ニシテ其塾師ノ學力資格又ハ其授業法等ノ良否ヲ度リ適當ノ者ト視認スルニハ手當トシテ銀百目ツ、ヲ給ス

寄宿局ハ各郡士族ノ子弟ニシテ本館ニ通學ノ便ナラサル者ヲ置クモノトス儒學ノ室ヲ南舎ト云ヒ生徒ヲ稱シテ在勤學ト云醫學ノ室ヲ北舎ト云フ

生徒學習ノ年齡期限ノアルナシ各自進退ノ都合ニ任スルモノトス

各郡士族ノ居住スル地ニ各一校ヲ官設シ教授以下ノ役員ヲ命シ本館ヨリ分高シテ經費ノ需用ニ供シ以テ其地ノ士族ヲ敦養ス此ヲ郷校ト云フ雄勝郡湯澤院內平鹿郡横手角間川仙北郡角館刈和野秋田郡大館十二所山本郡檜山能代ノ十箇所

ヲ年末ニ行フ

年々秋期ニ於テ武藝内見アリ

武藝方總處出場シテ春秋ニ於テ上覽ナルモノアリケ擬シテ上覽ト云

内見ハ豫メ刀槍以下各家ノ

諸流ニ達シテ其流義出場ノ期日ヲ定メ置キ其當日ニ於テ師範タル者其門弟ヲ率非演武場ニ出テ名簿ヲ製シテ呼出シ兩

々相闘ハシメ一々其技術ノ巧拙ヲ覽ル係ノ教授書記其庶務ヲ執ル弓術モ亦タ此場中ノ射埒ニ於テス其遠射ト砲術トヲ

試ムルニハ必ス郊外ニ於テスルモノトス上覽ハ城中ノ演武所ニ於テ刀槍以下ノ諸藝ヲ閱ス弓術遠射砲銃ハ必ス郊外ニ

於スル内見ト同シ技術畢レハ必ス酒肴ヲ以テ其勞ヲ慰シ或ハ金ヲ與ヘテ賞ヲ行フ

各流ノ師範タル者其年歴ノ功績ヲ勘査シテ十年毎ニ銀子ヲ與ヘテ之ヲ賞ス

各流ノ土塲射埒アル者ハ修覆料トシテ年々必ス銀百目ツ、ヲ與フ

上覽内見ニ共スヘキ武術ノ流派ニ係ル其名稱ト數トハ之ヲ左ニ記ス

新天流槍術 四流 無邊流槍術 四流 柳生流刀術 二流 天流刀術 三流 直心影流刀術 二流 巨川流刀術 加極流槍術 無殘

流刀槍術 戸田一刀流刀 一風流 小野派一刀流刀 一派流 武藏丸二刀流 實藏院十文字槍 當流刀術 柏木流甲冑

太刀打流二流 長刀一旨流 林崎流居合 林崎夢想流居合 日ノ下流柔術 止心流柔術 神傳流擊劍 日置流弓術 十四

流 吉田大藏流弓術 一流 信玄流軍學 謙信流軍學 楠流軍學

本館漢學ノ科ニ素讀試驗アリ學業試驗アリ專門試驗アリ素讀試驗ハ寛政五年中別紙達ヲ遵奉シ引渡回坐門地大臣以下諸

士ニ至ル迄凡ソ士籍ニアル者拾六歳ニシテ出仕願ヲ申立ルニ先チ學府論語ノ素讀ヲ熟讀スルト否ヲサルトヲ試ムルヲ

云フ若シ其讀方ニ誤謬等アル者ハ再試セシム試場臨席ハ學館長ノ内一名教授一名學監一名ニシテ教授之ヲ試ム苟モ此

ノ試験ヲ經サレハ出仕スルヲ許サス

學業試験ハ書記以下勤學在勤學ノ日々在校シテ修業スル書籍漢以上ノ書ニシテ一期五册ヲ下ラスノ義理章句文義ヲ解釋セシム一期六ヶ月毎

ニ必ス之ヲ行フ或ハ春秋試業トモ云フ其成績ヲ驗案シテ甲乙ヲ三等ニ分チ上等等下等トナシ下等ヲ以テ落第トナス

甚シキ未熟ナル者アレハ再試セシム上等等中等ニハ歳末ニ於テ慰勞ノ宴筵ニ與カラシメ上等ニハ別ニ賞金若干ヲ與フ

專門試験ハ詰役同並ニ限ルモノニシテ七經專門ノ書ヲ修メシメ各其學期ヲ與ヘ業ヲ分テ大中小ノ三等トナシ大業ハ禮

記春秋ニシテ三年トシ中業ハ儀禮周禮易ニシテ二年小業ハ詩經書經ニシテ一年半トス各其卒業ノ期ニ於テ試験ス期ニ

先ツ三日其局頭教授ヨリ策問ヲ付シ當日ニ於テ生員ヲシテ一經ノ要旨ヲ對策セシム其他一經中疑義ニ係ルモノヲ擇

ミ三條ノ詰問ヲナシテ之ニ對シム試官ハ惣テ其局頭ニシテ臨試官學館長以下教授學監詰役ナリトス專門試験春秋試

ニ附屬シ其使役ニ供スル者二三名アリ 金穀ヲ預ルノ豪商三四名アリ之ヲ藏元ト云フ

生徒概數 勤學通學 四十人位 在勤學寄宿生 五十人位 贊學通學生 百人位 東學生同 五十人位○醫學館 勤學通學 拾人位

贊學生同 三拾人位 寄宿生三拾人位○和學方 學生拾五人位○禮法方 學生七人位○算法方 學生七人位 儒學ノ寄

宿舍ニハ拾八人ヲ限リ一人ニ付一口米ト野菜代味噌代若干ヲ給シ醫學寄宿舍ニハ拾二人ヲ限リ右同額ヲ給ス隨時増減アリ

束脩謝儀 入校シテ學ヲ勤ムルモノハ一ケ年中惣テ束脩謝金等ノアルナシ

學校經費

一米二百二十拾石段別詳ナラス 學田高及分高并藏出高等 一金千五百五拾三圓九拾三錢二厘 合高千百三拾壹石七升貳

合ニ當ル米金

一金五百拾八圓五十錢三厘 右高ニ附帶セル小役銀代 一金貳百八十壹圓貳拾五錢 醫學館分高三百石ノ米代

一金九拾六圓拾八錢八厘 右高ニ附帶セル小役銀代 一金六圓三拾三錢九厘 軍學方定額

一金貳百七拾圓 武藝方 一金百三拾圓 和學方

合計米貳百貳拾石 金貳千八百五拾六圓壹錢貳厘

外ニ 一高五百九石八斗貳升三合段別不詳 出米 一金千百拾六圓壹錢六厘 小役銀ノ代

以上ノ米金ヲ以テ本館并諸學校ノ經費ヲ支出セリ

右ハ慶應三年丁卯ノ調ニ依ル其學費ノ増減ニ係ルモノハ之ヲ詳ニスルニ由ナシ

藩主臨校 毎年正月三學長開講之節ハ藩主父子禮服ヲ着シ必ス臨場シテ其講義ヲ聽ク其他各月ノ講日ト雖凡臨校スル多

シ此時ニ在テハ執政及惣奉行一役諸官員皆出校スルモノトス其外臨時出校シテ詩文ヲ作ラシメ席書等ヲナサシムルア

リ優等ノ者ニハ時ノ賞品ヲ與フ

祭儀 明德館中ニ聖廟ノ設置アリ 毎年一年ハ春祭二月丁日 一年ハ秋祭八月丁日釋奠ヲ執行ス秋祭ニハ是日ヲ以テ祭畢ルノ後必ス養老ノ典禮ヲ行

江戸藩邸學校

校名 設立年月詳ナラス以來日知館ト稱ス

校舎所在地 江戸下谷三味線堀舊秋田藩主邸内ニ在リ

沿革、教則、學科學規試驗法及諸則 右詳ナラス

是ナリ而シテ本館ヨリ年々教授ヲ各郷校ニ派遣ス之ヲ提學ト云フ三年或ハ五年ニ一度學長ヲノ巡察セシム之ヲ督學ト云フ以テ各郷學事ノ進否ヲ檢按ス十ヶ所郷校施設ノ方ハ各校ノ條ニ見ユ

職名及俸祿

明德館 總裁相手番格其人ナキハ欠ク

俸祿千五百石

外ニ手當トシテ一ヶ年銀三枚以下同シ

○祭酒惣奉行上席其人ナキ時ハ缺ク

俸祿百五十石○文學

俸祿百五十石○

助教

俸祿百五十石祭酒ヨリ助教ニ至ル之ヲ學長ト稱ス○諸役支配或ハ監事ト云

俸祿百五十石

以上四官奉行格ト

ナス其俸祿ハ其人ノ家祿ノ百五十石以下ニ係ル者ニハ其官祿ニ充タサルノ不足ヲ償ヒ給スルニ止ル者トス若シ家祿

ノ百五十石以上ナル者ニハ給セス凡ソ官祿ハ時ノ定ムル米價ニ因テ金給トナス○諸役支配見習或ハ監事見習ト云フ

石外ニ手當トシテ一ヶ年銀一枚半以上ノ二官ヲ館長ト云フ之ヲ副役格トス奉行格ニ下ルコト等祭酒ヨリ以下此ニ至ルマテ之ヲ一役ト云フ○教

授 役料高三十石以下手當ナシ此ヲ一役並ト云ヒ副役格ニ下ルコト又一等○教授並或ハ準教授ト云フ役料高二十石○目附或ハ學監ト呼フ

(執政ト學長トニ兩屬ス)役料高十五石○學田請拂役或ハ掌計ト云役料高十石○諸役 役料高十石○請拂役助力 右作事

役賄方兼務 役料銀差等アリ○諸役並 役料銀百目○書記 手當銀三十目 以上教授並ニ至ルマテ定役ニシテ之ヲ

近進諸役ト稱ス一役ニ下ルコト幾等ナリトス 右俸祿ハ惣テ藩ノ庫中ヨリ支給シ役料高役料銀ハ學館經費中ヨリ支給

スルモノトス○勤學 筆墨紙料銀三十目○在勤學 贊學

醫學館 醫學頭藩主側醫ノ格

役料高三十石○醫學頭見習 役料高二十石○會頭 手當銀百目

但藩醫ノ子弟或ハ町在醫ニシテ會頭タルモノハ二人口米ヲ給ス○會頭見習 役料銀百目○勤學 筆墨紙料銀三十目

武藝所 武藝總裁相手番格

俸祿千五百石○教授、書記 本館ノ教授書記ヲシテ其庶務ヲ掌ラシム

和學方 頭取(定役ニアラス)手當銀百目○頭取見習(定役ニアラス)手當五十目

禮法方法方 本館ノ職員ヲシテ之ヲ掌管セシムルニ止ル

職員概數 明德館 總裁一名(其人ナキ時ハ缺ク) 祭酒一名(其人ナキ時ハ缺ク) 文學一名 助教一名 諸役支配一名

諸役支配見習一名(或ハ二名) 教授六名 教授並六名 目附四名 受拂役二名 受拂役助力無定員 諸役十五名

詰役並十八名 書記十二名 勤學無數 在勤學無數○醫學館 醫學頭三名 醫學頭見習二名(隨時増減アリ) 會頭五

名(同上) 會頭見習五名(同上) 勤學無數○武藝所 總裁一名

外ニ門衛ハ表裏門ニ足輕各二人ツ、交番晝夜詰切トス諸官員ノ使令ニ供給シテ諸俗用ヲ擔任スル者七八名アリ

之ヲ小役人ト云フ 外役ノ馳驅ニ供シ薪炭等ノ事ヲ司ル者七八名アリ之ヲ卯時ト云フ 金穀出納ノ事ニ關シテ受拂役

時ニ増減アリ

平民ノ子弟教育方法 元來所謂定府ニテ封土無之處維新後始テ宗藩ヨリ封土ヲ分轄セリ故ニ平民子弟教育方法ノ詮議ニ及ヒ難ク舊慣ニ依リ寺子屋若クハ家塾ニ就キ修學自由ニ任セリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スル者ハ舊慣ニ依リ何人タリモ自由ニ開設セシム且藩内士族卒家塾寺子屋等相開キ教授スル者ハ其届出ヲ聞置クノミニテ別ニ檢束セス他藩他國ノ子弟寄宿遊學ノ者有之節ハ塾師ヨリ其郷貫族籍姓名寄宿期限等ヲ具シ入塾セシムルノ可否ヲ藩主ヘ伺出藩主聞濟ノ上其子弟ヲ入塾セシム且寄宿延期又ハ退塾モ同様届出シム

學校

校名 勅典館ト稱ス立學後變換セス

校舎所在地 養祖父義純ノ時淺草元鳥越今新福井町ト稱ス邸中ニ一館ヲ設ク後濱町矢ノ倉邸中ニ移ス既ニシテ鳥越邸ニ復シ又下谷池ノ端邸中ニ分館ヲ設ク戊辰年東歸後羽後國川邊郡椿臺ヘ藩城ヲ經營スルニ際シ文學武術ハ養才ノ急務タルヲ以テ先ツ文武館ノ土木ニ着手シ規模荷完ニ及ヘリ既ニシテ同國雄勝郡岩崎ヘ移轉セリ

沿革要略 學校創立年代不詳 學事隆興ノ原因及事實ハ養祖父以前ノ事文獻微スルニ足ラサレモ養祖父義純大ニ名教ヲ

重シ儒學ヲ尊ヒ關宿藩ノ儒臣龜田三藏名長梓字木王ヲ聘シ專ラ學業ヲ修ム繼嗣義核其志ヲ繼キ田中藩ノ儒臣芳野立藏名世叔果金陵ト號スヲ聘シ其學ヲ修メ且學制ヲ擴張シ立藏門人原田德三郎名紀字立夫號不詳ナル者ヲ召抱ヘ專ラ藩内士卒ノ教育ヲ掌ラシム既

ニシテ又同門人渡長三郎名政與字子禮東嶺ト號スヲ召抱ヘ德三郎ト共ニ學政ヲ掌ラシム其後德三郎藩ヲ去リ告歸セルヲ以テ長三郎

ヲシテ專ラ之ヲ掌ラシム且藩主ノ侍讀ニ任ス養父義謹ノ時ニ至テ長三郎士風ヲ興スハ學政ヲ振フニ在リト屢ハ建議辨

論セリ其男楫雄亦志ヲ同シ周旋スル所有リ故ヲ以テ稍々學制ヲ更革シ子弟爭テ業ニ就ケリ然レモ當時往々學生文弱ニ

流ル、ノ俗論アリ而ルニ戊辰東歸ニ際シ奧羽鎮撫總督府ヨリ庄内口出兵ノ命ヲ蒙リ藩兵出張毎戰官軍先鋒ノ令ヲ奉シ

寡能ク衆ニ當リ曾テ兵氣ヲ鈍セス就中藩學教員若クハ數年來養成ノ書生ハ尊王ノ大義ヲ重シ死生ヲ顧ミス勇進奮闘セ

リ而シテ武術ニ長セル者ハ或ハ怯懦ノ動止無キニ非ス是ニ於テ復文弱ニ流ル、ノ俗論ヲ口スル者無キニ至レリ既ニシ

テ養父義謹死去義理家督尋テ藩知事ノ命ヲ拜シ藩治改革ニ屬セリ因テ長三郎ノ二子及書生中ヨリ參事大少屬等ニ拔擢

シ藩治ニ軌掌セシメ或ハ文武二政ノ事ヲ兼掌セシム是ニ於テ規模頗具シ子弟駸々文ニ進ミ武ヲ勵ミ士風益興起セント

ス而シテ廢合縣ニ至テ止ム

舊岩崎藩學制、學校

職名及俸祿 助教、教授、詰役、書設、勤學 右俸祿詳ナラス

職員概數 助教一名 教授二名 詰役三名 書記二名 勤學

生徒概數 生徒百五十名位

束脩謝儀、學校經費 詳ナラス

藩主臨校 藩主在江戸ノ年ハ正月助教開講ノ時禮服ニテ出校シ必ス聽講スルモノトス其他臨時ノ出席アリ

祭儀 聖廟ノ設ナシ隨テ釋奠ノ禮アルナシ隔年必ス養老ノ禮ヲ行フ式明德館ニ同シ

學校構造及ヒ建物圖面 詳ナラス

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書ノ種類部數 皆詳ナラス

舊岩崎藩

學制

舊藩ノ儀ハ戊辰年東歸ノ節記錄諸什物等東海廻漕ノ處或ハ函館洋中ニ於テ難破ニ屬シ或ハ仙臺石卷港ニ於テ掠奪ニ罹リ悉皆烏有ニ屬セリ戊辰後僅々ノ簿冊ハ廢合縣ノ際秋田縣ヘ引渡候ニ付學校舊記類一切存在セス因テ舊藩士ノ口碑或ハ義理ノ記憶ヲ錄スル如左

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達類一切存セス藩ニ於テ加役米引米祿稅免除等ノ事無之獎勵法ハ下項ニ記ス

士族卒ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟八歳以上ハ必ス藩學ニ入ル制度ナリ八歳以上ニテ入學セス又武藝ニ從事セサル者

ハ文武取締ノ者其父兄ニ督責ヲ加フ尤モ藩内ニ於テ文武共修業ノ餘暇ヲ以テ他ノ師家ニ就キ尙勉強ノ儀ハ各自ノ意向

ニ任セシ由 從來藩費ヲ以テ他ヘ遊學セシメシ事無之養祖父義純ノ繼嗣義核後宗家ヲ繼キ義純ト稱スノ時ニ至リ士族中遊學出願ノ

者アリ之ヲ許可セシ由且舊藩ニ於テ士族ノ嫡子十五歳ニ及ヘハ出仕セシメ高二十石ヲ給シ藩士ニ列シ其家格又ハ人物

ニヨリ番士扈從士小姓等ニ召遣ヘリ其後或ハ事故有之出仕ヲ差留ル者ハ給與ノ祿ヲモ取上ル制度ニ有之然ルニ遊學志

願ノ者ハ出仕中ニ同ク其祿ヲ給與セリ養父義誼ノ時ニ至リ更ニ學資ヲ貸與シ本人學業成達ノ上ハ之ヲ賜與セリ又歲時

若干金ヲ學資補助トシテ支給セリ其後武藝出願ノ者モ前例ニ準シテ許可シ祿及ヒ補助金ヲ支給セリ

從來藩主ハ文學武術共居宅中ニ區別ヲ設ケ修業セリ義理東歸ノ後ハ舊慣ヲ廢止シ日々文武館ニ入り士卒ト同ク修業セリ

職名及俸祿 文武監督(維新前文武取締ト稱ス) 教師(維新後此職ヲ設ク) 教授 訓導 監督ハ文武ニ關スル藩政ヲ可

否シ士族卒ノ勤惰ヲ監督シ諸經費ノ出納ヲ監視ス維新以前參政番頭ノ内ヲ以テ之ヲ充ツ藩治改革後少參事ヲ以テ之ヲ

兼掌セシム 教官俸祿定額ナシ原田德三郎教授タリシ時大監察格ヲ與ヘ高六拾石ヲ給ス渡長三郎教授タリシ時參政格

ヲ與ヘ高百石ヲ給シ維新後少參事ニ列セリ藩治改革ノ際少參事ヲ免シ教師ノ職名ヲ附シ少參事格ヲ與フ 教授以下ノ

教員ハ學藝優等名望有ル者ヲ撰ミ之ニ充ツ而シテ可成他ノ職務ニ關涉セシメス然レモ武術ニハ勉テ從事セシム當時藩

制ノ文武偏廢スヘカラサルヲ以テナリ且助教其外ハ定祿及學業優等ノ賞與祿アルヲ以テ別ニ役料扶持米等ヲ給セルコ

トナシ 總テ教育身分取扱ハ文武ト順序ヲナシ武人ヲ文士ノ次ニ班ス 職員概數 文武監督一員 教師一員 教授一員 助教四五員 一定セス 訓導五六員 一定セス 仕丁五六員 一定セス

生徒概數 生徒八九十名日々午前通學午後武藝ニ從事セシム東歸後二十餘名ノ寄宿生アリ三四十名ヲ寄宿セシムル目的ナリ 經費ハ一切藩費

ヲ以テ之ニ充ツ但寄宿生筆墨紙ハ自費トス 寄宿生賄大略 朝飯、汁、香ノ物 午飯、一菜、香ノ物 晚飯、香ノ物 助

教一名輪流校内ニ宿直シ雜務ヲ經理ス 使丁數名焚炊掃除等ノ雜役ヲ執ラシム 束脩謝儀 藩内ノ子弟入學ノ時ハ白扇一對ヲ束脩トナシ教師ニ呈シ師弟ノ誼ヲ約ス且子弟自ラ教師ノ名簿ヘ入學年月日

姓名ヲ書ス幼ニシテ自ラ書スル能ハサル者ハ父兄ニ代書セシム 子弟謝儀一切無之 子弟入學ノ時ハ時服麻上下ヲ着

用スルヲ例トス 學校經費 東歸前十餘年間ハ諸經費一ケ年凡六七百圓ノ由東歸後ハ凡三四千圓ノ額ニ上リシ由不詳

藩主臨校 春秋兩季藩主臨校自ラ文學武術ヲ試閱シ文學上達ノ者ヘハ相應ノ書籍ヲ賞與シ武術上達ノ者ヘハ武具料若干

金ヲ賞與ス且優等ノ者ヘハ藩主紋章ノ麻上下ヲ賞與ス學業ノ上等科ヲ終ヘ武藝ノ皆傳ヲ許サル、者ハ祿若干ヲ加増ス

二三男ハ步行士或ハ番士ニ取立テ新知祿ヲ與フ尤モ一定ノ成規アルニ非ス舊例古格ヲ照シ執政參政評議ノ上藩主ノ意

見ヲ以テ之ヲ決セシ由且右賞與ヲ受タル子弟及其父兄ハ達文ノ要領ヲ掲ケタル名票ヲ携ヘ師範者及諸有司番頭組等ヘ

廻禮セシメシ由 文武共試閱ノ當日子弟ヘ茶菓及行廚ヲ與フ講書試業ニ應スル者ハ其講書中茶道坊ヲシテ之ニ茶ヲ與

ヘシム 文武共試閱ノ席ハ子弟ノ父兄ヲシテ傍聽參觀セシム 學業ノ試閱ハ子弟科業中ノ書ヲ携ヘ藩主ノ前ニ至リ一

拜シテ凡ニ對ス此時藩主又ハ教師指示シテ講讀セシム尤モ藩主指示ノ日ハ教師指示セス教師指示ノ日ハ藩主指示セス

武術ノ試閱ハ豫メ對ヲ定メ雌雄ヲ決セシム其對ヲ定ムル前項ニ準ス但切ニ他ヲシテ豫定ノ對者ヲ前知セシメス

祭儀 春秋兩度釋奠ヲ行フ藩主自ラ祭主トナリ教師祭文ヲ讀ム亦舊記ヲ存セス其詳ヲ得ルニ由ナシ 釋奠ノ日養老ノ典

教則

教科用書

句讀 孝經、四書、五經、國史略、十八史略、元明史略、文章軌範 講授^{初等}

孝經、小學、說苑、新序、蒙求、國史

略、十八史略、元明史略 同

中等(史記以下講授セス實疑或ハ論議ニ付ス)

孟子、論語、左氏傳、史記、漢書、國語、文章軌範、資治通鑑、宋元通鑑、明

紀事本末、同上^{唐宋八家文以下同上}餘科

大學、中庸、詩經、書經、易經、唐宋八家文、大學演義補、唐鑑、貞觀政要、宋名臣言行錄、大

日本史、二十一史

餘科

子類、和漢兵籍、反譯西洋兵籍 教科外有用ノ書籍ハ書生ノ研窮自由ニ任ス 普通有用ノ書

籍ハ校中ニ備置キ子弟ノ隨意借讀スルヲ許ス

右毎日午前七時頃ヨリ教師教授子弟ノ質問ニ應シ助教訓導句讀ヲ授ケ九時頃ニ至ル同時ヨリ教師教授助教子弟ヲ類別

シテ科中ノ諸書ヲ講授シ正午ニ至テ止ム毎月十二次午後輪講及會讀ヲ開ク一次詩文會ヲ開キ宿題及席上課題ノ作ヲナ

サシム右詩文會ハ訓導以上若クハ有志輩ノ參會自由ニ任シ敢テ檢束セス 養父義誼ノ時ニ至リ貞觀政要唐鑑言行錄等

ノ輪講ヲ開キ執政以下諸有司ヲシテ必出席シテ之ヲ聞キ以テ藩治ヲ資ケシム

學科學規試驗法及諸則

學規一篇立學以來用之亦烏有ニ歸セリ

士族卒修學立志ノ目的ハ和漢ト順序ヲナサシム講學ノ次第ハ名教ニ關スル漢籍即チ孝經四書等ヲ先トナシ綱常ノ重ス

ヘキヲ知ラシメ次クニ和漢ノ歷史ヲ以テシ治亂興亡ノ跡ヲ知ラシメ間マ子類ヲ以テシ其間見ラ廣メシム 東歸ノ後藩

學教科中ヘ算法筆道ヲ加ヘ少年子弟句讀ノ餘科ヲ以テ從學セシム

武術ヲ講スル別ニ一館アリ維揚館ト稱ス東歸後ハ一區域中ニ文武各館ヲ置キ相連絡セシメ子弟ヲシテ日ニ其間ニ從事

セシム 劍術 直眞影流 槍術 一指流 柔術 起倒流 弓術 日置流 馬術 大坪本流 炮術 茨野流 各師範者ヲ置キ士卒ヲ教授セシム後弓槍二術ヲ

廢シ專ラ劍柔二術ヲ講セシメ舊炮術ヲ廢シ英式練兵ヲ講セシム 大小ノ講武器械ヲ備置キ子弟ノ借用スルヲ許ス且竹

刀及屬具彈丸硝藥ノ類ヲ給ス 士卒ノ子弟ハ必ス文武兩道ヲ兼修スヘキ藩制ナレバ專門篤志ノ子弟ニ至テハ一科專修

ヲ許シ之ヲ檢束セス

生徒學習ノ期限ナシ但子弟八歲以上ハ必ス入學シ且漸次武藝ヲ講セシメ二十歲以下ハ必ス文武二道ニ從事セシム篤志

者及未熟者ハ二十歲以上ト雖モ從事セシム 藩主ノ春秋試業アルヲ以テ教官別ニ試檢ヲ行ハス但勸惰ヲ點檢シテ惰者

ヲ督責スルノミ

校中區々ノ訓條ヲ設ケス日ニ講授スル所文武忠孝禮義廉耻ニ在ルヲ以テナリ且罰則ヲ設ケス教誨ニ從ハサル者ハ父兄

ニ命シテ之ヲ督責セシム

試驗法 毎月朔日役員立會ノ上是迄學ヒ得シ書籍ヲ試驗シ卒業生以上ハ詩文ヲモ試験ス學業ノ進否ニ依リ進級或ハ坐席ヲ進退スルモノトス

職名及俸祿 惣管俸祿定祿ノ外拾人扶持教授ハ定祿ノ外七人扶持監督教授ニ全シ助教ハ五人扶持章句師ハ三人扶持事務員ハ一人扶持

職員概數 惣管壹名 教授四名 監督壹名 助教貳名 章句師八名 事務員貳名

生徒概數 百四五拾名 但寄宿生無之

束脩謝儀 之ヲ徵セス

學校經費 職員俸祿ヲ除クノ外諸費ヲ一ケ年金貳百圓トス

藩主臨校 毎年一月十一日學校開キノ節藩主臨校教官一人經書ヲ講釋ス式終テ年中出精勉強ノ者へ賞品ヲ賜フ

祭儀 毎年一月十一日釋典畧式執行藩主拜禮終テ職員諸生徒順次拜禮

學校構造及建物圖面 地坪六反壹畝拾步五勺 建坪百貳拾五坪

舊本莊藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ヨリ學業獎勵ノ布令諭達ニ係ルモノ有ト雖モ明治戊辰ノ兵燹ニ罹リ舊記一モ存スルナシ 學業上進ノ者中小姓格ハ給人格ニ昇級徒士格ハ中小姓格ニ昇級又ハ常祿米ヲ加増スルヲアリ加役米又ハ引米等ノ名義ヲ以テ徵課セシ祿税免除スルノ類ナシ

士族卒ノ子弟教育方法 士族ノ子弟ハ必ス入學セシムルノ制アリト雖モ或ハ各自意向ニ任セ家塾ニ於テ修學スルモ敢テ拒マズ卒ノ子弟ハ入學ヲ許サハルモ維新後大ニ學制ヲ變革シ士族卒平民ヲ不問志願者ハ之ヲ許ス 追テ成業ノ見込アルモノハ藩費ヲ以テ三都^{江戸、京、大阪}へ遊學セシムルノ制アリ又私費ヲ以テ他邦ニ遊學志願ヲ許可ス故ニ遊學生^{藩費生}常ニ他邦ニ在ルモノ數名 藩士ハ文義生^{字義文意ヲ講究スルモノ}ト共ニ講義ヲ聽聞スルノ制アリ其制一ケ月九ケ度トス

平民ノ子弟教育方法 維新前ハ藩學校へ入學スルヲ許サズ各自ノ意向ニ任セ家塾寺子屋ニ修學セシムルノミ 家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルモ藩主ニ於テ一切關係ナシ何人ナリモ自由ニ開設スルヲ得セシム

ヲ學ケ藩中六十歳以上ノ老ヲ校中ニ致シ宴ヲ開キ酒肴ヲ與ヘ藩主自ラ酒ヲ注ス終テ各眞綿一包六十歳以上七十歳八十歳各差アリヲ與フ婦女ノ老ヘハ其子孫ヲ致シ眞綿及酒肴料若干ヲ與フ當日老者ノ子若クハ孫老者ヲ扶ケテ校ニ登リ開宴中老者ノ後ニ坐セシム退校ノ時又扶ケ歸ラシム是老ヲ敬シ齒ヲ重スルノ義ヲ知ラシメ名教ヲ扶持スルノ意ナリ

學校構造及建物圖面 文武館新築圖面故紙匣中ヨリ發見ニ付末尾ニ掲ク

藏書過半東歸ノ際烏有ニ屬シ小半存在ノ分ハ廢合縣ノ際秋田縣ヘ引渡シ書目モ現存セス

前各項逐記ノ外御參考ニ供スヘキモノ無之 右之通御座候也

明治十六年八月 東京府華族 從五位佐竹義理

舊松嶺藩

學制

學事上ノ諸制度 記載スヘキモノナシ

士族卒ノ子弟教育方法 各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修學スルヲ許可セリ

平民ノ子弟教育方法 家塾寺子屋ニテ修學セシノミニテ藩立學校ヘ入學スルヲ許可セリ 農民等學事ニ從事スルヲ

禁止セス

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スルモノ奉行等ノ許可ヲ受ケス何人タリト雖モ自由ニ開設スルヲ得タリ

學校

校名 初メ一貫堂ト號シ後里仁館ト改ム

校舎所在地 松嶺町字内町

沿革要略 明治二年十一月創立セシト雖モ當時校舎無之ヲ以テ齋藤彌右衛門ナルモノ、別莊ヲ借受ケ假ニ校舎ニ充ツ明

治四年八月新築落成以來漸次隆盛ニ赴ケリ小學校設置後廢止

教則 生徒級數下曹、中曹、上曹、卒業生、會讀生ノ五等ニ區別ス教科用書下曹ハ孝經、中庸、大學、中曹ハ論語、詩經、上曹

ハ書經、禮記ニテ各素讀ヲ教ヘ卒業生ハ左國史漢家語、四家雋、會讀生ハ資治通鑑、諸子並ニ經解書類トス授業方法順序時間等ハ教員ノ適宜トス

句讀生ノ定期試験ハ藩主代理大目付役ノ者臨校各生徒卒業書數十卷ノ内抽籤ヲ以テ箇所ヲ撰定シテ素讀セシメ失點ナ
キヲ優等生トシ之レニ賞與スルニ半紙ヲ以テセリ

職名及俸祿并職員概數 修身館ト稱セシ時職名及ヒ俸祿并職員概數左ノ如シ

學監一名 俸給金千疋○都講一名 俸祿廩米拾五俵^{三斗六升八}○文學一名 俸祿廩米拾俵^同○教授二名 俸祿廩米七俵^同○

準教授一名 俸祿廩米五俵^同○督責二名 俸給金五百疋○伍甲七名 俸給金三百疋○浣讀會頭二名

總教館ト改稱セシ以來ノ職名俸祿并職員概數左ノ如シ

總督一名 俸給金貳千疋○幹事一名 俸給金千疋○督學一名 俸祿廩米拾五俵^{三斗六升八}○教授五名 俸祿廩米七俵^同○助

教五名 俸祿廩米五俵^同○籍司二名 俸給金五百疋○句讀師拾名 俸給金三百疋但出頭ハ藩廳會計ヨリ兼務ナルヲ以

テ定給ナシ

生徒概數 修身館ト稱セシキハ五拾名位ニシテ總教館ト改稱後ハ其數増加シテ百名位トナレリ

束脩謝儀 束脩謝儀ノ制ナシ

學校經費 學費ハ藩廳費途ニシテ區分ナキヲ以テ現今ニ至リ取調ノ途ナシ但一周年ノ學費定額或ハ學田或ハ藩士賦課等

ノ類ナシ故ニ諸職員俸給ト雖^モ每年尾ニ至リ藩廳ヨリ支給ス

藩主臨校 藩主ハ一ヶ月九度^{二ノ月六ノ日}臨校生徒ト俱ニ講義聽聞スルノ制アリ 文義生徒試験ハ每年秋季藩廳ニ於テ藩

主之ニ臨ム維新後ハ總教館ヘ臨校セリ

祭儀 聖廟ノ設ケナキヲ以テ釋奠ノ禮ナシ校中上段ノ床間ニ聖像ノ一軸ヲ掲ケ毎年二月丁日ヲ以テ神酒洗米ヲ供シ諸職

員禮服(繼上下)ニテ拜禮シ之ヲ以テ釋奠ニ充ツ

學校構造及ヒ建物圖面 地坪舊城地中ニアルヲ以テ地坪ナシ 建坪四十五坪五合 圖面ハ別記ニ付ス

學校ニテ翻刻セシ書目及ヒ藏書ノ種類部數 翻刻出版ノ書籍ナシ藏書ハ戊辰ノ兵燹ニ罹リ其目次ヲ見ルニ由ナシ

右ノ外舊記錄明治戊辰ノ兵燹ニ罹リ一モ存スルナキヲ以テ編史ノ資料又ハ參考ニ供スヘキ件ナシ

舊龜田藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達等戊辰ノ兵燹ニ罹リ今之ヲ追錄シ難シ且學事上進者身分取扱獎勵法等モ亦記スヘキナ

學校

校名 天明年中ヨリ修身館ト名稱シ維新後總教館ト改稱セリ

校舎所在地 本莊舊城三丸ニアリ后ナ本莊町ノ内櫻小路ニ移轉シ明治元年戊辰ノ秋兵燹ニ罹レリ維新後總教館ト更稱シテ東町八幡寺ヲ以テ借家假校トス明治四年七月廢藩ニ際シ廢校セリ

沿革要畧 天明年中舊藩主六郷大和守藤原政速儒學ヲ尊崇シ居城三丸へ藩學校ヲ創立シ自筆ヲ以テ修身館ト額面シ舊藩士故笹原珍平ヲシテ專ラ學業ニ從事セシメ藩士子弟ヲシテ漢籍ヲ研磨セシメ益々斯文ヲ擴張ナラシメタリ舊記録ハ戊辰ノ兵燹ニ罹リ一モ存スルナキヲ以テ唯古老ノ口碑ニ資レルノミ其設立ノ時ヨ方リ尤モ盡力セシモノハ故笹原珍平ニシテ之ニ關係シタルハ故遠田良七故皆川宗海故池田文吉故遠田俊之助菅原揆一等ノ數人ナリ

教則 教科用書ハ漢籍中難易ヲ以テ順次ヲ定ムルト雖モ四書五經ヨリ漸次歴史詩文章ニ及フヲ恒例トス 授業方法ハ生徒各自ノ意向ニ任セ句讀文義トモ皆一人別ニ教授スルモノトス 授業時間ハ午前五ツ時始業正午十二時終業一日二時講義ヲ聽聞セシムルハ午後八ツ時ヨリ全七ツ時ニ至ル一時間トス但一ヶ月九度ニノ日六ノ日ヲ制トス

學科學期試驗法及ヒ諸則

修身館ハ單ニ修身學漢籍ノミ教授スルモノトス維新ニ至リ惣教館ト改稱セシヨリ學制モ亦大ニ變革シ皇學漢學兵學算術珠算筆道和樣ノ五科ヲ教授スルモ各生徒ノ志望ニ任セ一二科若クハ數科ヲ合併修學スルモ各自ノ意向ニ任セリ但漢籍ハ句讀ヲ卒ヘテ後文義ニ及ボス

生徒入退學共年齡ヲ問ハス各自ノ意向ニ任スルヲ以テ五歲或ハ六歲七歲ニシテ入學スルアリ十五歲前後ニシテ退學スルアリ又二十歲以上ト雖モ退學セサルアリ

試驗ノ方法ハ句讀生ハ一ヶ月二度八月十八日 浣讀輪讀スルセシメ浣讀會頭之レカ失訓點ヲ檢査シテ揭示シ後來ヲ戒シム文義生モ又一ヶ月三度九月十九日 廿九日教授役督責會頭臨席シテ輪講セシメ失訓ヲ責メ誤解ヲ督シ毎月末ニ至リ日々出席數ト失訓點等ヲ酌量シテ席次ヲ定ム月次試驗是ナリ

每年秋九月藩主文義生ヲ膝下ニ呼ヒ重役列坐各生徒壹人別ニ其卒業書十卷ノ内三四卷五六ヶ所抽籤ヲ以テ箇所ヲ撰定シテ講義セシメ文意ニ於テ失點ナキヲ優等生ト定メ之レニ賞與スルニ摺物ヲ以テス摺物ハ殷大師比千ト蝦斗文字ノ石摺ナリ其實ナ得シモノハ現世保存尊敬セリ之レハ素ト水戶藩學校ヨリ寫シ來レリト聞ケリ 是定期試驗ナリ

リ始メ四書五經ニ止ル傍ヲ唐詩自讀ハ素讀畢テ后蒙求劉向新序小學及史漢ノ類ニシテ教官ノ講義ヲ聽聞セシム輪講ハ多

ク學頭ヲ會頭ト定メ教授以下ノモノ相會シテ各自輪番ヲ以テ左國及四書等ノ書ヲ講述シ后質義討論ノ末會長ノ意見ヲ

聽クヲ常トス從前ハ自讀生ノ授講ハ毎月六度ト定メ或ハ授業時間ニ於テ之ヲ開キ或ハ教官ノ自宅ニ於テ開クヲアリト

雖モ輪講ハ必ス時間外ニ於テ開キタルモノナリ且授業時間ハ毎日辰後ニ入り未ニ至テ退クハ從來ノ成規ト爲スト雖モ

維新後ハ之ヲ更正シテ午前九時ニ入り午後三時ニ至テ退クトナセリ

學科學規試驗法及諸則 從來學校ニ於テ授業セシモノハ儒學醫學及ヒ筆道ノミナリシカ維新後ハ和洋學慶應三年丙寅三月

大手前エ校舎再築ノ際更ニ校内ニ演武場ヲ設ケ弓槍劍術拳法ヲ習ハシム馬術劍術ハ別午前ハ學問ニ從事シ午後ハ武藝ヲ

演習シ必ラス文武兩道ヲ兼修スルノ定規ヲ立テ連月重役之ヲ檢閱シテ落主ニ上聞ス試驗ハ毎年八月ノ交ヲ以テ始

ム藩主之ニ臨ミ或ハ重役之ニ代リテ試驗ス畢テ賞品ヲ與フヲ以テ恒例トス從來校内ニ揭示シタルモノハ左ノ貳章

長善館規條天明年間ノ記載ニア、ル

一辰後而入未而退出入周旋勿亂尊卑之禮可愼長幼之序可戒喧嘩

一有疾病事故者可告都講都講告當直當直領簿書錄其名

一童輩入學館每日先可學書當學書向机端立勿妄言勿妄笑勿振筆硯書冊勿屢遷坐

一學書畢而後可授句讀授句讀莫躐己之記性貪多也已受業官退自熟讀反覆數十遍書生之業須要暗記最戒遺忘會業刻約

布在定例

一有疑事可質問先輩若故事奇僻諸君共可知或疑事可解各自畜思胸中當省他書可搜索

一人或以一日之長羞聞道于後世有其志不果其志爲風俗所痼古人有謂其聞也亦先乎吾吾從而師之記曰時過然後學則勤

苦難成

一凡先輩誘掖後進會業相切磋講習討論博涉群籍專修經藝日開其智月進其行積以歲年而後渙然氷釋怡然理順其至諸君

之力也文字汗牛可不勉哉若夫怠惰踴弛自棄而不勤無有所成矣秀俊異等篤學而不怠者必告不師教者亦如此

天明六年丙午春正月

長善館立約

都講

一吾藩文武之業每歲以秋冬之交官考試之如長善館則公特造館中以講聞若夫述職在東則使執政及參政檢閱之好學之至

可謂盛舉矣雖然初學之士貪多務得動欲挾泰山以踰北海講學之道頗似無等級乃相議斟酌舊例以立階級如左

舊藩學事ノ狀況ハ學校取調要項中ニ記入スルヲ以テ重複ニ渉ルニ過キサレハ之ヲ略ス

士族卒ノ子弟教育法 藩立學校ニ入學スルハ各自ノ意向ニ任セ敢テ檢束スル等ノコトナシト雖モ古來ノ慣習ニ因リ士族以上ハ自然入學スルモノト爲ス士族以下ハ寺子屋ノ修業ニ止ルモノトス平士以上ノ子弟ト雖モ概テ先ツ各其師家ニ入リ習字及四書等ノ素讀ヲ卒ヘ然ル後入校シ教則ニ掲クル程度ニ從テ學修セシム維新以降子弟ノ教育一日モ忽諸ニ附スヘカラサルヲ以テ從來ノ習慣ヲ破リ四民ヲ問ハス普ク入學ヲ許ス且生徒中後來成業ノ目的アルモノヲ拔擢シ藩費ヲ以テ他國ニ遊學セシムト雖モ醫生ヲ除クノ外ハ維新前ニ在テ此事ナシ

平民ノ子弟教育方法 龜田市街平民ノ子弟ハ寺子屋ニ入り村落ハ里正又ハ寺院等ニ就キ農商普通ノ學ヲ修メ稍有有力ノモノハ四書五經等ニ及フト雖モ徒ニ素讀ニ止テ義解ニ至ルモノ殆ント稀ナリ

家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ヲ開設スル者奉行郡宰等ノ檢束ヲ受クルナク何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得

學校

校名 舊時ヨリ長善館ト稱ス館内ニ醫學所ヲ設ケ上池館ト稱ス以後變更ナシ

校舎所在地 初メ舊藩主陣屋内ニ開設ス後生徒増加セシヲ以テ文政七年甲申七月龜田町ニ新築セリ降テ天保九年戊戌四月焼失同町中字鶴岡ニ移ル嘉永五年壬子四月再ヒ火災ニ罹リ陣屋裏門ノ北隅ニ新築ス元治元年甲子四月三ヒ火災ニ罹リ城ノ大手先キニ新築ス即チ今ノ龜田小學校是ナリ

沿革要畧 舊藩主岩城氏龜田移封ヨリ以來殆ント百年間學事景況ハ其詳細ヲ得ルニ由ナシト雖モ蓋學校ノ設立ナキハ古

老ノ口碑ニ明ナリ降テ享保年間藩主隆韶(初清隆ト稱ス)幼ヨリ學ヲ好ミ在府ノ時ハ稻葉迂齋ニ從テ學ヒ又江戸ノ儒者山宮維深ヲ招聘シテ侍講トナシ經義ヲ講シ史傳ヲ釋キシヨリ始テ文學ニ傾向スルノ端緒ヲ得タリ當時ハ陣屋中ニ一字ヲ設ケテ御祠堂ト稱セリ蓋先聖先師ヲ奉祀スルノ義ニ取レリト云フ是學校ヲ興スノ濫觴トス其後隆韶ノ代天明六年丙

午正月更ニ學館ヲ設立セルニ因リ大内久太夫鵜沼助四郎行事小傳等記載スヘキモノナシ以テ學頭ト爲ス長善館規條此時ニ成ル爾來因襲ノ久シキ幾分ノ沿革アリト雖モ記スルニ足ルモノナシ終ニ維新ノ際ニ當リ普ク四民ノ子弟ヲ驅テ學ニ就カシメ一時學風勃興稍隆盛ニ至リシカ廢藩置縣後校ヲ閉チ徒ニ有志輩ノ講學ニ歸スルノミ

教則 凡教科ヲ分テ四トナス曰ク習字曰ク素讀曰ク自讀曰ク輪講是ナリ習字ハ各自ノ望ニ任セテ習ハシム素讀ハ孝經ヨ

春心帖

夫れ徳川家天下に功ありて東都を御したまふてより以來山谷盜竊の險平き蒼海夷狄の灘安し西海より東山より南海より北陸より服せずといふ事あり億兆の民東照宮の威武を稱し奉る就中爵土を世々に嗣ぎ江府各々國邸を敷き分國皆城壘を守る諸侯不來賓哉東都歷世たまふ事八世紀事三百有奇時勢備はれりといふへし藩國も略々准へて然り余々岩城の家封を龜田に移してより四世孝公威公惠公を歴たり孝威玆に壽福有て民を治る事久し一惠公短折したまひ衆子先立て殤して無嗣に遇へり余元名村良實は仙臺侯の至親伊達氏の家に生といえども元來伊達正統與岩城累世爲外親故にや他姓を以て奉惠公之後享保三年戊戌十二月九東都命ありて村良襲龜田侯即日龜田の邸に移り更藤原村良曰平清隆襲爵拜謝の禮あり于時清隆十有二歲正月に朝賀する而已享保六年辛丑秋九月朔望初て朝參す同冬十二月十八日叙從五位下任但馬守同九年春二月十八日更任河内守同秋九月十五日東都遣清隆初令就國冬十月龜田に入る國事自視于時十有八歲也清隆以幼冲爵を嗣ぎ短智にして學ふ事なし何以加國民哉但倚舊記徇公令附于人情自是前先祖考の世冗費の事なしといえども東都遠近の役に補せられ國家吉凶に備へ或は舊土有蝗の類數多度清隆亦然殊近世天下の衣食冠皆の費稍々品節を越へ遊覽嬉戲の奢り竊に制度を壞る當此時東都公溫良恭儉にして民を撫したまふ既に衣食冠皆禮儀の過たる物禁止せらるしうりといえども士民奢華に狎て久しければ朝に禁止を忘れ夕に錦繡魚肉を欲する流俗の舊染不得止者歟清隆徒身列國主宰の貴を思はす淫佚を事として酒色に沈醉し非禮の觀聽を以て萬戸の上に臨み所以不歸民心也此故に諸侯國貧く通禮を欠事多しと雖ども内美姬に華飾して歌舞せしめ外禮義を粗略して盛服を厭ふ遊佚度なく大邦は小國を誘き小邦亦大國に敵する者あり清隆子男の國に驕奢せり深く祖先を辱しめ貽すとなふして却て士民を苦しむ事久し不知所爲職分頃日臣庶に儼まされ漸く經義に學んで習はむ事を思ふ先儒の曰道に至るを近より思ふとかや此言好日々に思ひ時々工夫して先學に問ひ己れに克つて治方を聞へし清隆生質淫聲を嫌飽食を恐るゝと庶臣の所知也其餘の端藏人欲の有るところ異なる事なし本朝の諸禮弓馬劍鎗書數の術人の得を視ては躬齊しからんことを思へとも皆不果襲爵より十又八年國損する事多し學はさるの病爰に著はれ境内有年の時に處して民心を安んずる事不能庫府贏餘有事なし老臣以下旦夕心を勞して不顧私室内外の臣庶俸祿を半に減し妻子寒凍を蹈に至らしめ農工商業を失ひ斑白の者道路に悲しむ何爲諸子をして悲傷せしめ父母是を樂しむの理あらんや清隆夙夜に士民の家を思はさる事なし賑に物なく治に知短を以て歎する而已蓋年月の理極まれは亦生國家貧窮ありといえども祖先の神在倚舊典新民事日あるへし今より後余與庶臣勉て禮義を補脩し奢華を禁止せむ近侍の臣先察して謹哉于時享保二十年乙卯冬十二

一凡受句讀者始于孝經而四書而五經是初學入門之業天下之通義也

一凡蒙求小學新序文選左國史漢等書苟不誤國讀而後可以及諸子百家

一凡四書五經其他不施國讀者任手試之誦讀如流則雖海舶齋來之書夫何難之有

一凡諸君所執書勿論經史雖諸子百家博涉雄辨任意講之縱使聽者前席忘倦然非進修之方也講經之道要在發揮聖言使人

人竦聽而退實踐焉是諸君之所宜留意也

一教官歷公命者除疾病事故外一月中大概期十五席則教官十員一日一人挾策誘掖後進則一月中循環殆無虛日矣是亦可

以免素餐之責

元治二年乙丑三月

都講

職名及俸祿并職員概數 學頭一名 俸祿三人口米年俸 ○副學頭二名 俸祿二人口米同上 ○教授十名隨時增減 俸祿ナシ以下

同シ○準教授十名全上 ○司書無定員○書記同 教授以下一ケ年ノ勤惰ニ依リ歲末ニ賞與アリ 門番一人アリ校守之ヲ

兼ヌ貳人口米ヲ給ス

明治維新後左ニ改革セリ 學正一名 年俸拾石正米以下同 ○副學正二名 年俸七石○教授十名 年俸三石○準教授貳拾名

年俸貳石○司書拾五名 歲末ニ至リ金貳百正宛ヲ給ス

生徒概數 寄宿舍ノ設ケナシ 通學生百五拾人位○維新後 通學生貳百八拾人位

束脩謝儀 歲末ニ至リ生徒一人ニ付錢貳百文ヲ學頭ニ呈シタレモ維新後ハ之ヲ廢ス

學校經費 正米拾七石七斗 金六拾八兩○維新後改革 正米九拾四石 金六拾五兩 右ハ學事張弛ニヨリ増減アリ

藩主臨校 在邑ノ年ハ毎ニ八九月ノ交ヲ以テ臨校スルヲ恒例トス準教授以上ハ講義其以下ハ素讀ヲ以テ試験ヲナス在府

ノ年ハ重役之ニ代テ試験スルヲ藩主在邑ノ時ノ如シ

祭儀 聖廟ノ設ナク釋奠釋菜ノ禮ナシ唯春秋二季二月八月上丁ノ日ニ於テ聖像ヲ掲ケ神酒ト重テ餅ヲ供ヘ校中一同禮拜

スルノミ

學校構造及建物圖面 圖面地坪建坪等別紙ニ附ス

學校ニテ出版翻刻セシ書籍及ヒ藏書ノ種類部數 出版翻刻セシ書籍ナシ藏書ノ部數貳百三拾九部アリシモ數度ノ火災ニ

テ燒亡シ現在ノ分數部ニ過キス

右ノ外春心帖ナルモノアリ左ニ附ス

辰後ハ私費遊學ヲ許可シタルハ勿論藩費ヲ以テ他國へ遊學セシメタルコアリ講義ハ藩士ノ意向ニ任セ生徒ト共ニ聽聞セシメタルモ其制度等ナシ

平民ノ子弟教育方法 士族卒ノ子弟ト異ナルナシ而シテ藩費ヲ以テ遊學セシムルナシ
家塾寺子屋設置ノ制度 家塾寺子屋ハ他ノ檢束ヲ受クルナク何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得
右ノ外關藩學事上ノ事項ニシテ編史ノ資料及ヒ參考ニ供スヘキモノ無之候也

學校

校名 始ハ日新堂ト稱ス明治元年中矢島藩學校トナル廢藩ノキ閉校シ明治五年中開設シ單ニ學校ト唱フ

校舎所在地 陣屋大手前廐長屋中ニ設ク戊辰ノ兵燹ニ罹リシヨリ明治二年ニ至ルマテ新庄村佐藤甚四郎家屋ヲ借上ケ明治三年ヨリ四年迄城内村曹洞宗祥雲寺ヲ以テ之ニ充ツ

沿革要畧 日新堂創設ハ安政年間ニシテ^{年月詳ナラフ}舊藩主生駒親道學事ノ振ハサルヲ憂ヘ藩士中漢學ヲ能クスル者ヲ舉ケ職員トシ毎月六回又ハ十二回家塾寺子屋ニ於テ學ヒ得ル處ヲ復讀セシメ誤謬等アレハ之ヲ正シ優劣ヲ調査シ名札ヲ黜陟シ席次ヲ定ム筆道ハ月一回席書ト唱ヘ揮筆セシメ甲乙ヲ判別シ順次學堂ニ貼付セリ此試業ヲ稱シテ當時之ヲ御改メト唱フ戊辰兵燹後矢島藩學校タリシキ士民ノ別ナク入學ヲ許シ讀書筆道ヲ教授シ優劣ヲ判別スル等舊例ニヨレリ明治三年ヨリ算法ヲモ兼テ學ハシム明治五年六月ヨリ九月迄學校ノ名稱トナリ子弟ヲ教授セシト雖モ幾許モナク廢セラレタル故諸制度等見ルヘキナシ學士佐藤治兵衛ハ寛政年間ノ人ニシテ人ト爲リ謹愼方正學ヲ好ム地方人士ノ學ニ向フコヲ知ルハ皆同氏ノ力ナリト云フヘシ晚年ニ及テ致仕シ廬ヲ當郡新庄村地内彌勒母山ニ構ヘ幽居セリ事蹟ハ碑文ニ詳カナリ故ニ贅セス又學士今井光隆ハ日新堂開設ノ比ノ人ニシテ性學ヲ好ミ品行端正ナリ頗ル漢籍ニ通シ(折衷學)專ラ學事ヲ負擔シ日新堂ノ教頭トナリ後矢島藩學校ノ教授トナレリ^{官ハ矢島藩大屬ニシテ學校理也}公暇ニハ自宅ニテ子弟ヲ教育シ授業最懇切ナリ晚年ニ及フモ心ヲ學事ニ委テ子弟ヲ教育スルコヲ以テ勤メトス實ニ當地方人士ノ少ク漢籍ヲ讀ムヲ得ルハ同氏ノ薰陶ニヨラサルハナシ享年六十八ニシテ卒ス時ニ明治十年八月一日ナリ

教則 教科用書ハ四書五經文選左國史漢等ニシテ一定セス授業法ハ素讀輪講講義トシ時間ハ日新堂タリシ時ハ朝五ツ時ヨリ四ツ時過迄素讀ヲ卒ヘ午後八ツ時ヨリ七ツ時迄輪講或ハ講義セリ藩學校ト改稱セシヨリ午前五ツ時ヨリ正午マテ讀書八ツ時迄筆道七ツ時迄算法輪講講義トス

月四日龜田侯從五位下守河內守平朝臣岩城清隆識

書春心帖後

龜田侯有文武之長材而資質純粹不瀟灑色不好貨利六藝之屬無習而不通講論經義亹々而不倦近最用心于政法述其志於治之旨而作文以示侍臣名曰春心帖春心者何耶春在天爲元在人爲仁四德之元猶五常之仁偏言則一事專言則包四者仁者天下之公善之本也政事之源出於此則一國之庶事無不包涵偏覆實先王所以治民之意也國貧則思富之既富則思教之古之道也今之當職者或不知斯道思富之則專出於爲利之說既富之則不知所以教之徒富榮而已何補之有今我侯省躬反己而傷臣民之窮思富國家而后申之以孝弟之教然不富則教不可施故此帖先以禁奢華而富國爲主實至誠惻怛之意與天下之元普及於物者殆相類爲老臣及百執事者能體盛德而左補右彌克成大功則邦治之成不數年而爲四方之則亦可期矣若或爲老臣及百執事者讀此帖而不知斯意徒爲空言而面譽之退而束之高閣視以爲尋常詩歌之類無實輔弼之意則亦我侯之罪人也自近臣至遠臣自老臣至小吏皆不可不以仰體焉于時享保乙卯冬十有二月龜田侍講東武後學山宮維深頓首拜書

春心帖跋

鵠沼國懋

春心帖一卷僅數丁吉田伯珥得之於古紙中持示余且屬序乃披覽直正公以和文書政治之大意所以令庶臣也而有山宮維深之跋文鳴公明德且有雪樓先生之文小臣愚陋復何言敢辭伯珥不可曰公之令德存口碑者子亦聞且不佞所以得之者何不舉一二對曰然不得止則書其後臣國懋嘗聞老人之語前朝公幼聰敏淵清好學師事山宮仲淵學于細井廣澤善書公十有八歲就封則慨然傷習俗之無禮思庠序之教於是建祠堂論祖宗祭之以禮分官職序爵位率勵有司講學設教身自爲士卒之先子育之風化大行殆致恭莊之俗云惜哉天不假年公三十八歲而薨而其善政法度今猶多賴之焉者此卷雖僅數丁亦足以觀公之明德矣豈不可珍且此書疑是公之手書臣家藏公之和歌一首其艸字適勁頗相似可以爲左券初名清隆後改隆部眞正浮圖論也臣謹按論法愍民惠禮曰文公實有之侯臣請上追謚曰文

舊矢島藩

學制

學事上ノ諸制度 藩主ノ布令諭達及學業上進ノ者ニハ加役米又ハ引米ノ名義ヲ以テ徵課セシ間接ノ祿稅ヲ免除スルカ如キ獎勵法等其他學事ノ狀況ヲ觀察スルニ足ルヘキ舊記散逸シ追考スル所ナシト雖モ恐クハ此等ノ制ナカラン士族卒ノ子弟教育方法 戊辰前ハ各自ノ意向ニ任セ藩立學校若クハ家塾寺子屋等ニテ修學セシメ私費遊學ヲ許可セリ戊

明治二十三年七月二十一日出版

文部省總務局

(不發賣)

學科學規試驗法及諸則

漢學醫學算法筆道ヲ教授ス武術ハ別ニ練武場アリテ修業セリ文學武術ト程度ノ比例等ナシ入學

退學ノ年限ナシ試驗ハ春秋兩度生徒ノ習讀スル書籍每冊三四葉ツ、讀マシメ失少ナキ者ニ賞與ス^{牛紙}又年末生徒ノ出

席數ヲ點檢シ出欠ノ多寡ニ依リ金員^{皆席ノ者}及半紙筆等ヲ賞與セリ又藩費遊學ヲ乞フモノアル時ハ四書每冊二三問^{一問三四}

葉ヲ講義セシメ意義ノ通スルモノハ許可セリ諸則ハ舊記ナキヲ以テ詳ナラス入學許可ヲ得ル者禮服着用師範家ヘ回禮

スル等ナシ

職名及俸祿

戊辰前日新堂タリシ時 教頭一人 手當詳ナラス 助教一人 手當詳ナラス 世話役定員ナシ 手當一ケ年米半俵

戊辰後矢島藩學校ト改稱セシ時 教授一人 手當詳ナラス 助教一人 手當同上 世話役定員ナシ 手當同上

庚午閏十月ヨリ廢藩迄 讀書教授一人 助教一人 役給一ケ年七石 句讀三人 役給一ケ年五石五斗 準句讀定員ナ

シ役給一ケ年五石〇書學助教一人 役給一ケ年七石 試補一人 役給一ケ年五石五斗〇數學助教一人 役給一ケ

年七石 試補一人 役給一ケ年五石五斗〇醫學助教一人 役給一ケ年四石 試補定員ナシ 役給一ケ年三石 但教

授ハ大屬ニヘ官祿十六石七斗五升ヲ受ク依テ役給ヲ與ヘス

生徒概數 日新堂 通學百人寄宿生ナシ〇戊辰後廢藩迄矢島藩學校 寄宿生藩費二十人 通學生百五十人

束脩謝儀 無之

學校經費 悉皆藩費ヲ以テ支辨ス其費額詳ナラス

藩主臨校 毎月二三回臨校シテ講義ヲ聽聞ス又生徒ノ試業ヲ爲ス^キハ必ス臨校セリ又遊學ヲ乞フモノ、試業ニハ重役ヲ

率テ臨校セリ

祭儀 聖廟ノ設ナシ每年冬至日新堂ノ床間ニ聖像^{舊藩主祖先生駒雅樂守親正カ豐太閤ノ命ニ依リ征韓}ヲ安置シ神酒神饌等ヲ供シ藩主

始メ職員生徒ニ至ルマテ拜禮畢リ供物ヲ衆ニ頒ツ廢藩後之ヲ廢止ス

學校構造及建物圖面 藩主ノ陣屋或ハ人家等借上ケ設クル故圖面等別ニ調整スヘキモノナシ

學校ニテ出版翻刻セシ書日及藏書ノ種類部數 出版翻刻セシ書類ナシ書籍ノ所藏スルモノ悉皆戊辰兵燹ニ罹リ取調ルニ

由ナシ

右ノ外學校ニ關スル舊記學校ノ紀事享文ノ類ニシテ編史ノ資料又ハ參考ニ供スヘキモノ等無之候也

COLUMBIA UNIVERSITY LIBRARIES

This book is due on the date indicated below, or at the expiration of a definite period after the date of borrowing, as provided by the library rules or by special arrangement with the Librarian in charge.

DATE BORROWED	DATE DUE	DATE BORROWED	DATE DUE
APR 12 1985	MAY 10 1985		
C28 (467) 50M			

COLUMBIA UNIVERSITY LIBRARIES



0056482647



Prentis
Annex 2

JUL 1 1 1986

DUE DATE

DEC 01 1997

FEB 16 1998

OCT 03 2000

FEB 15 2005

Printed
in USA

